THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋季大附録號

第三十九年　第十號　第四百三十七號

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋季大附錄號

第三十九年 第十號 第四百三十[illegible]號


コレハ實ツ立派な目藥だ!!
眼病良藥
直治水
CHOKUJISUI
理想的の
眼病良藥
直治水
學術の進步に伴ひ、精密なる研究と、數多の實驗から、絕對の保證ありと信認せられたる直治水は、今や智識階級から盛んに賞用せらるゝ、新時代の貴重なる眼科新藥である。
主効
トラホーム　やに目　雪目
はやり目　うみ目　ちゞ目
かすみ目　めくさ　星目
價　新式點眼器付　二十錢　三十錢　五十錢
●全國各藥店に取次販賣せり
本舗　大阪　東京　丹平商會藥房

編輯及飜譯者（ＡＢＣ順）

有島生馬（伊太利）
東北大學教授 青木正兒（支那）
東京高師教授 福原麟太郎（英國）
井上勇（佛蘭西）
慶應大學教授 村松正俊（希臘羅馬）
深見尚行（露西亞）
拓殖大學教授 宮原民平（支那）
外語學校教授 永田寬定（西班牙）
中島清（獨逸）
陸軍大學講師 岡野馨（佛蘭西）
慶應大學教授 小山內薰（英國）
法政大學教授 關口存勇（獨逸）
東女高師教授 竹友藻風（英國）
外語學校教授 時田清（佛蘭西）
外語學校教授 除村吉太郎（露西亞）
陸軍大學教授 米川正夫（露西亞）

——全十八卷の要目——

卷	國	内容
第一	希臘(1)	エヂポス王外六篇
第二	希臘(2)	エレクトラ外九篇
第三	羅馬	アンドリア外九篇
第四	伊太利、西班牙、丁抹	人生は夢外八篇
第五	英國(1)	オセロ外六篇
第六	英國(2)	絶望外四篇
第七	佛蘭西(1)	似而非才女外七篇
第八	佛蘭西(2)	ル・シイド外六篇
第九	佛蘭西(3)	ザイール外六篇
第十	獨逸(1)	[illegible]外五篇
十一	獨逸(2)	ワレンシユタイン外四篇
十二	獨逸(3)	海の波戀の波外五篇
十三	獨逸(4)	ユージット外四篇
十四	獨逸(5)	ニーベルンゲン外二篇
十五	露西亞	ボリスゴドノフ外四篇
十六	支那	琵琶記外五篇
十七	樂劇	ワグネル全集上
十八	樂劇	ワグネル全集下

略規

體裁……形體—四六新型。表紙—最上布製。裝幀—金文字、高雅。印刷—鮮明正確。紙質—最上等。製本—機械綴堅牢

會期……期間—十八ケ月—大正十三年十一月ヨリ向フ十八ケ月間。配本—每月一回—每卷ノ紙數平均七百頁以上トナル。

會費……申込金參圓八拾錢＝每月拂—參圓八十錢＝一時拂—六拾五圓四十錢＝申込金ハ最終會費ニ宛ツ＝送料市内六錢、地方十八錢

▼内容見本無料進呈＝申込締切九月卅日限▲

申込所

東京市京橋第一相互館
電話青山四一三五番
振替東京六七九五七番

近代社




クラブ
ハミガキ
CLUB
DENTAL CREAM
一日の氣分を爽にする朝と食后のクラブ齒磨
クラブ煉齒磨
家庭用にはクラブ粉齒磨
旅行用にはクラブ煉齒磨
食后用にはクラブ水齒磨



山莊淸秋圖

小杉未醒筆

大正十三年

中央公論

九月一日發行

秋季大附錄號

第卅九年　第十號

第四百三十九號

昨今の世相

この夏或る円鑑の前を通つたとき、「危険思想撲滅大演説會」といふビラを見ると辯士の名の中に面識ある某といふがあるのに好奇心をそゝられて、夜わざ／＼傍聴に出掛けて見た。此男は二三年前突飛な社會運動に浮身をやつし私共がその過激を戒めたこともあるのに、何事ぞ、此夜の演壇に於ては生れ乍らの帝國主義者でもあるかの様な顔をして熱心に専制主義や帝國主義を謳歌して居る。時勢の變に無節操なる態度は十日後判を通じて久濶を存べると、此男打つて變つてしきりに恐縮して居る。そこに話はいろ／＼あるが、結局彼の語くにし與へた説明は斯うだ。あの時は労働問題で非常に有壮しましたが當節は思想善導で國家に盡して居ります。これ分は御に立派だが、流石面上に不安の色が蔽まれなかつた。

蟻の甘きに集るが如く、社會運動家や思想善導家にも甘きを追ふて或は東し或は西する者が少くはない。必しも誠一商様を一にする者のみとは云はぬ。衣食の為に良心の安する所に安住になめ、變な國家存在に不昇をなにー日あかせる所の何多いではないか。而して断ふ者共に思想善導を託して時代の先達たるの任務を辞うしみとあへて爲す國民の又た意外にいかにも驚く。

やらせる者もあるが、やらせる者もやらせる者だ。要するに彼等の行動には本當の熱がない、ある様に見えるのはただ入られたる者の使する隙に過ぎぬ。本當の熱は飽まで内からのみ出る。而して内には熱情の火を燃すべきはれない。間違つても何でもいゝ、そこで我々は天下を救ふといふ信念あつてこそ、始めて運動にも人を動かするのり大衆には、信念なくして只のにハイハイとハイを取扱ふが如き卑蹊なのになすると外ならぬ。

我々に、だから、昨今の反動的傾向を憂ふるに足らぬと高を括るのではない。何事も信念に根ざしたる不断の運動

のが[illegible]。

思想善導の運動を皆わるいと云ふのではない、之を標榜する者にも隨分下らぬものゝあることを指摘して置きたいのである。そして私共が若し少しく注意して彼等の云ふ所を聞けば、[illegible]を辨ずることはすぐに出來ると思ふのである。

そんなら左うした下らない運動はすぐ淘汰されて社會の表面から影を潜むべきだのに、事實は然らず、案外世間に跋扈して居るのは如何いふ譯か。之も考へて見れば不思議な現象である。

斤量が足りないと知れても三越に顧客、絶へぬ如く、良い品物が必しも直に社會の歡迎する所とはならない。反省することに慣れぬ國民は、兎角廣告と宣傳に誤られ易い。日常生活の問題にして猶且然り、況や高遠なる社會公共の問題に於てをや。

我々日本人は妙な所に實によく昂奮する國民である。三越の斤量不足を摘發した東京市の技手が市會議員の運動の結果で辭職を餘儀なくされたと聞いたら、何を差措いても事實の眞相を調べて大に糺彈の運動を起すべきだのに、今なほ閑として聲なしといふ有樣ではないか。而も普選問題だの國際問題だのといふと無類の昂奮を示す。昂奮をわるいと云ふのではない。顏の上の腫物には名醫を煩すが、肺病や胃病には割合に騷がないと云つた樣な偏頗を、聊か心外に思ふのである。

* * * * *

尤も之を以て我々國民性の先天的缺陷に歸するのは必しも正當ではない。之もあらう。併し乍ら我が同胞の時々照尺を間違つて盲動するのは、主としては無知の結果だと思ふ。詳しく云へば、凡ゆる問題に付て凡ゆる方面の主張を與り聞き以て健全な識見を構成するの準備的機會が與へられぬからだと思ふ。更に具體的にいへば、政府自らが言論

の自由を十分徹底的に保障せざるのみならず、民間の反動的勢力に對しては往々偏頗的に寛大なるの結果だと思ふのである。之がどれ丈我國の政治上の立場を傷けて居るか又どれ丈社會的進步を妨げて居るか分らない。

今北京では日露交渉が再開されて居る。之が何度目になるか。之れ程繰り返し〱やつても目鼻の附かないのに國民は既に諦めをつけて居る様だ。新聞では我政府の態度は當初から一貫して公明正大を極めて居るのに、彼は徹頭徹尾權謀術數を弄するものゝ様に傳へられて居るが、果して然るや否やを疑ふ人は疑て居る。政府には政府として相當の行掛りもあらう。我々國民は帝國將來の發展の爲露國を親密なる隣邦として特に好き交誼の間に結ばれんことを欲し又之を必要として居る。從て過去の經緯はどうでもいゝ、將來の親善關係が大切だと考へて居る。此の見地からすればさう交渉の停頓する筈もなからうと思ふが、事實さうでないので不可解に堪へぬ。斯んな場合に若し日露交渉の內容が今までの如く秘密的な形のものでなく有りの儘の折衝が公表されたなら之に對して國民の正當な立場の表明も出來て大に好都合ならうと思はるゝ、けれ共ちつとも出來ないのだから、交渉の前途に關して我々は國民として我が政府の立場を後援していゝのか悪いのか分らないといふ始末になる。人或は曰ふ、日本人としては日本政府の立場を後援せぬとは怪しからぬと。政府は悪い事はせぬから安心して居れといふのは、官僚專制時代の常套手段だ。立憲政下に在ては、是非を判知することなくして國民の個々に重大な態度を決することは許されぬ。運動を商賣にする人々が對露國民大會なるものを開いて、ふれたとき、何時もくすぐツたい感をするのは此の爲である。現代の外交に國民の意思を示すの有效なる途は何處にもない。さりとて事柄の性質に於て、假令政府の所爲がまづかつたとしても有效無效と一所に協同するに當局の爲には困る所である。而も殊に超然的態度を執ることが若し對手國の地位を有利にすることもあるに、彼の益する所果して幾何ばかりぞ。是れ皆事實の眞相を國民の耳目に蔽ふの結果ではないか。何を目論むことに從つたか、斯んな類は外にも頗る多い。夫でも秘密主義から來る弊害はまだいゝ。言論自由の直接の非立憲上の言論取締の弊害に至ては眞に堪へ難きものがある。何時の世でも役人が一時の利便を謀るに違いないが日本の進步を犠牲にして平然たるには困つたものである。

[illegible]にして[illegible]すく[illegible]に[illegible]一國民の[illegible]に[illegible]するに[illegible]
[illegible]にある。是於[illegible]思想[illegible]ありといふと、議會の[illegible]は[illegible]。[illegible]要[illegible]とも
することが出來ない。

私共は本誌上に之れ迄幾度となく政黨の地盤政策を攻撃したことがある。選擧民の良心を味方とすべく常時善事を施うてその清き一票を獲るに努むべきを、逆に利權の提供に依て選擧民の良心を豫め買收するのだから堪らない。國民各自の良心の活躍に依て社會の道德的進步を期すべき筈の選擧が、丸で所期の目標と正反對に社會を逆進せしむるからである。この憎むべき地盤政策と同じ流儀が、思想善導を標榜する運動にも昨今盛に用ひられつゝあるのではないかの疑あるを、世人多く氣附いて居るだらうか。

曰く何々會、曰く何々會、民風を作興し勤儉敦厚の美風を旺にするを目的とすと。焉んぞ知らん、是れ一部頑迷者流の思想を豫め無批判に容認せしめんとするの目的に濫用さるゝものなることを。詳しく云へば、將來の思想戰に對し頑迷思想の精神的動員に便せんが爲の所謂地盤政策に外ならぬものが尠くないのである。尤も皆が皆までさうだといふのではない、又此種の濫用は反動的保守傾向の側に限るといふのでもない。が、たゞ思想善導の目的を眞に徹底せんと欲せば、飽くまで相手方の向上發展を唯一の眼目とすべく、毫末も之を特殊目的の手段たらしめてはならないと信ずるのである。

何々會と稱するものゝ中、如何なる意味に於ても何者の手段でもないと自負し得るもの果して幾らあるだらうか。

* * * * *

發企者の隱密なる目論見に拘らず世の中は結局正しい目標を指して進んで行く。イザとなつて親の心子知らずと云つても遲い。飼犬に手を咬まれぬ爲には、先覺を以て任ずる者、亦少しく時勢の子の心理狀態に通ずる所なくしては叶ふまい。

中央公論



第卅九年　第十號
秋季大附錄號
第四百三十九號

或る公的規範學としての政治學及び社會學の可能と價値に對する原則的及び時代的考察

杉森孝次郎

一　現代思想の代表的二特徴

現代思想の代表的二特徴と見らるべきものがある。その一は個人價値意識であり、もう一とつは社會價値意識だ。いはゆ

ら個人主義も[illegible]

たそれの種々な形において[illegible]社會の存在を或る程度に[illegible]する

個人價値意識の起原に これのいくらかの程度に於いては、[illegible]社會價値意識の歴

の起原も、同様に、これのいくらかの程度に於いては、社會[illegible]諸人間社會[illegible]起原と共に近い過去にあつた。しかしながら、個人價値意識の歴史上最も顯著なる發達の起原は近く十八世紀にあつた。そして、社會價値意識の歴史上最も顯著なる發達の起原は更に近く十九世紀にあつた。

二　個人價値意識の起原及び發達に關する或る注意

十八世紀のヨーロッパの、及び或る程度に於いてアメリカもの、思想界を特徴づけたいはゆる啓蒙は、個人價値意識の史上最顯著的——たとひ最完備的ではなかつたとしても——發現であつた。フランス革命はそれの行動上に於ける最大な發現であり、カントの人格説はそれの純學理上に於ける一現象であつた。

いはゆる人權思想はフランス革命の最も直接な、そして有力な心理的原因としての最大衝動であつた。そしてそれが個人價値意識の或るかたちに他ならないことは極めて顯明だ。實に、人の本質的權利、各人に固有の權利、人として生きる權利といふ思想は、フランス革命に於いてそれの最初の成形と表現を試みた。この思想が充分に反省的な思想でないことは著明だが、なほ且つそれが個人價値意識の發達史上に於ける一大ミューテーションであつたことは更に遙かに著明だ。

カントの人格説は、これまた充分なる理由には多少缺けたものであつたが、なほ且つ學説史上最も明確に意識された

最初の人格主上目的說であるがゆゑに、個人價値意識の著大なる一新成熟であつたことは自明だ。

個人價値意識は、それの十八世紀に於ける新現的發達以來、十九世紀を通し、今日に及ぶあひだ、間斷なき發達を續けた。ミルの思想、ニーチェの思想、これらは、その各の間に相異なる幾多の特質を有すると同時に、十九世紀に於ける個人價値意識の發達を指標する思想的無數現象中の比較的に著現的な或るものだ。實力と純化に於いて多少遙かに有限的であつた猶倫理學上の絶近に於ける個向的及び集生的斷說、例へば自己實現說、人格完成說、人格價値說主上說の如きものも、成長しつつある個人價値意識の不樹に淘汰される或る生命物であつた。

いはゆる政府主義の新形式、それの第一的特質を個人價値の或るかたちにはかならないとして有することも、それの多少の集合的特質と共に注意される。また國の場合に於いて。維新そのものが第一に個人價値意識の制度的確立を意味した。それは、それを意味するものとしての性格に於いて。日本としては、遙かに同意義の諸術傷を後援する人間的のものでもあつたし。發達した形式のものでもあつた。各人に對する教育の機會の公開。各人の能力を具體條件とした職業及び官位選擇の自由。各人の生命、財産。具體的合理に對する社會組織的保護。これらはこれを例證する無數的に多い現象中の或るものだ。

國家主義の積極的及び防衛的形式を取り輸入された自由主義は、新日本と共に生まれた個人價値意識の最も大才的な。したがつて最も強い的な部分であつた。

自由主義の發生は、十八世紀末の佛の人權思想に似た思想をそれの直接の衝動ともし、それの社會的。環境的。背景的に於て萌芽した敷衍點ともしたものであつたことは。したがつて新日本に於ける個人價値意識の發現なる社會心理的及び社會

[illegible]

論じ、[illegible]なほ且つ[illegible]自我[illegible]

明治の末期に文藝を中心として國民思想の上に革命的[illegible]を示した[illegible]自然主義運動は、それの本質に於いては、個人價値意識の再生に先きだつ或る氣運であつた。それは、純眞なる個人價値意識に初めて[illegible]興味を覺える時代にも行した現象的懷疑、不安、否定であつた。すべての傳統的、習俗的、外在權威的文化、思想、及び生活は、純眞なる個人價値意識の胎動を先づ感覺した青年者の眼には、根の枯れた枝葉花果よりも無生命に見えた。それらのものは全然無用であるがゆゑに多少邪魔なものとほか想はれなかつた。個人價値意識の眞清水を細くとも深く泉源づける興味、したがつて純乎として純に主觀的、内省的、自己沈潜的興味が、かくして必然的に自然主義の一特色を形成した。自然主義文藝の特質は、現實描寫に存するよりも僞はらざる自已の告白にあつた。自然主義運動も、それの制限は知識の缺乏に於いて顯著だつたが、したがつてそれは早く行きづまり、淺く腐爛し、生活を組織的に感化することが出來なかつたが、なほ且つ、それが、最近代の日本に於ける個人價値意識が更に外達せんとして先づ必要的に内潜したかたちをそれの本質形としたものであつたことは確實だ。

三　社會價意識の起原及び發達に關する或る注意

便宜的には時あつてか適當に運命とも呼ばれべき根本的傾向の存在が人と人との關係の世界に於いて殊に顯著だ。かくして、例へば十九世紀初頭に於いてなされた佛の國民主義の、國民主義未成形の獨、露及びなほその他の多少の國土及び民族への侵略的方法は、目的通りの結果としての一時的勝利を佛にもたらしたと共に、目的にそむいた結果として

の国民主義形成を導いてそれらの被侵略国に流入した。そして他は、同じ世紀内の多少の将来に於いて近。隣邦の国民主義からの侵略を経験させられた。しかし、大観すれば、かくの如くにして各部の、したがって全部の進化が次第にそした結局、首肯される。

社会進化のこの関係または法則に対する興味からお察しても、「産業革命」よりも合法的、順序的な事件は、単一なる事件としては、古来嘗つてなかったと推断される。「産業革命」は人をして始めて物質を発見せしめた。概括的にいふならば、それは人類をして一個の新たな発端に於いて、全く一変した形式を発生した又は改造された内容と両者とに於いて、生命資本を両解せしめ今日の隆盛をせしめた。

旧制度の下にあった工業に於いては、工場に於いて仕事であり、従業者の関係に於いて各々の雇主と、雇主は人であった。この制度下に於いては、時間の組織的工業も不可能であったが、雇主側の利益の利己的要求も容易に、被雇人側の利益の組織的な要求で他ならも、これと同様に不可能であった。雇主の被雇者に対する見方は人対人であり、機械的の従もその制度下に於いては自然に制限され、被雇者が雇主に対する冷静なる批判と権力関係の意識とその事情下に於いては決して生じなかった。ただにこれが発生しても、それの発達は不能であり、それの成功は稀であった。たとへこれありとするも雇用、被雇用の関係を多少の自由契約によって現に形成してゐる以上、そして今日のやうによ方に行はれ見るへは両者ともに他になってゐる以上、被雇者側の心事について見ると、かれらは雇主に対する憎悪的情のみを利己に行ふことは出来なかった。また事実、雇用者側からも不本意ながら、ただし、本質的に被雇用者をこの範囲へ適則的にしを…だ。この時代に於いては、被雇者は雇主の意志によって被雇者となってゐるといふ関係にあったと同時

に、服從者もまた被支配者の意志によつて支配者となつてゐるといふ關係もあり得たのであつた。そしてこれがまた、いかなる[illegible]でも、それが純粹に支配者側の意志のみによつて維持された場合には[illegible]、この場合にもなつて[illegible]いて——しばしば殆ど不然的程度に於いて——被支配者側の意志によつて維持されたといふ事實を、これを[illegible]るのに見るだけの識力があり、その事實の意味を理解するだけの考察力がある人にとつては、すこしも不思議な現象ではない。

ついでながらに注意するが、自發的に、好んで精神的及び身體的奴隷者となつてゐる人の種類と數とが、現代に於いてもなんといふ巨額を示すことか。それは政治組織に關する方面に於いても、またその他の殆ど全種的方面に於いても。

産革は雇主の利益の組織的の保護及び擴張を比較的に想ひかけなくもでなしに機會づけたと共に、それにつづいて、及びその後はまたそれと同時に、被雇者の利益の組織的保護及び伸暢を、すくなくとも産革後まもない當時の雇主側から考へたならば全く想ひかけなくも、大膽に機會づけた。

産革と共に生産の方法は機械と變はり、場所は工場、鑛山、鐵道、港灣及び河海と變つた。そして生産者は科學者と技術家と下級經營者とを多少の程度に於いて比較的に所屬不分明な中間者として、殘餘の大部分は組織された雇主階級と組織された被雇者階級とに自然に分裂した。

その組織された雇主階級は重役及び株主を中心として廣く有産階級一般に實質的及び感情的勢力圏を形成してこれの發達に集中し、その組織された被雇者階級は勞働者を中心として多少廣く無産階級一般にそれの勢力圏を堅め且つ擴げる方法と傾向と成績とを示した。

組織された被傭者階級と組織されたる雇傭者階級とは、往昔の個人的接觸、協力の關係をもはや持たなくなつた。各の雇傭者は昔日のやうに相見ない、而して雇傭者は相互に同じ雇傭者階級の他人に限られ、各の被傭者が接觸する相手は同じ被傭者階級の他人に限られて來た。そして、被傭者階級は人口に於いて遙かに雇傭者階級を凌駕するといふ事實にも多少助けられて、被傭者階級の組織は、被傭者階級自身の側から考へて、極めて有望なものとしてかれらにとつて發見され、時と共に、組織と共に、その發達と共に、いよ／＼、確實に知られ且つ信ぜられて來た。勞働者群が緊密に、そして大規模に相組めば、その弱點、くはしくは世界の勢力關係は革命的變化を與へられる殆ど數學的な、物理學的な必然があるといふ打算及び確信がかれらの範圍の内外に不拔の根柢を張つて來た。

他面に於いて、人權思想、人格思想、廣く個人主義的思想は、十八世紀以來、宗教、法律、道徳を含んだ疑問のない一面の原則論としては、各人みな人たるが故に人でないなどとはなに人もいへることの出來ない、よしいへても公にすることの出來ない社會心理及び社會情緒としてすでに形成されてゐる。殊に政治組織方面に於いては、デモクラシーがこゝに制度及び傾向として公認されてゐる。

かくの如き事情下に勞働者階級が、單なる原子的人格としての生存を續けずに、組織的人格としての活動に移り進むことは、同時に、人格と團體との間たる必然的關係が必然化することを意味する。勞働者階級に、かくして、階級內的に相結むことの利益と必要と興味と、そして社會連帶的及び人格連帶的意識を與へ、次第に明白に、切實に意識化し、實行化して來た。

勞働の社會化が普遍的事實となり始めたのは、あるいちじるしい程度までは、かくして、勞働者の組織的自覺行動とまさに大衆の同伴を有する現象であつた。同盟罷業が大規模に可能にされ、實行されて、茲に始めて勞働者は勞働の制作

[illegible]もしたら、同盟罷業は、それの[illegible]に於いて、[illegible]
對全の組織的行動の發達と共にいよいよ明かになつた。[illegible]勞働は、それ[illegible]といふ意味に於い
て勞働者自身にとつて有用であり、必要であり、すなはち有價値であることは既知から明白であつたが、これが生産と
可能にするといふ意味に於いて、あるひは、それなしでは生産が可能にされないといふ意味に於いて、資本家にとつて
も必要なもの、また消費階級全部にとつても必要なものであるといふ關係は、同盟罷業の發達をまつて、始めて資本家
自身と重役及び株主に代表される一般有産階級との兩者に注意されることとなつた。

一とつのものの存在の價値は、その價値が對地的性質のものである限り、そのものを無しにして見て、いかなる結果がその他のものによつて、つひに意識されるべくその他のもの自身の利益の世界に生起するかを知ることを方法として知られる。罷業は、それが行はれた限りに於いて、その社會から勞働を無くして見ること、見せることだ。

勞働組合の發達は、勞働者をして、生産が關する限り、完全にそれの自治者たる希望を持たしめる。經濟的生産が要する人的方法は勞働、技術、科學、組織及び資本の綜合態によつて代表される。勞働組合の發達は、技術、科學、組織、及び資本を自給する可能と確信とを勞働者に與へる。そして勞働をばかれらはすでに現實として自給しつゝある。

資本家組合がどんなに發達しても、それが純然たる資本家組合である限り、それは、生産の完全なる自治者たりうる確信を、勞働者組合との比較に於いては、形成しえない性質を固有してゐる。資本家組合は、それ自身の一特質として生産が要する、必要とする綜合的方法のうちの勞働的要素以外の諸要素をば自給しうると多少合理的に確信しえても、勞働的要素を自給する確信はそれには必らずしも立たない。現在のいはゆる資本家氣質は、みづから勤勞することをば絶對に忌避する性質のものだからだ。

すべての勞働者が勞働組合員となつた狀態を假定すれば、そして勞働組合が生產の絕對自給をそれの意志及び現實としてゐる狀態を假定すれば、生產者としての資本家、あるひは資本家としての生產者は、その暁には、成り立たない觀念だ。

生產には、それが社會內の現象である限り、必らずどれほどかの、またなんらかの社會價がある。近代的產業發達以前の社會に於いても、この原則を裏書きする事實は多少あつた。

しかしながら、生產が原子的でなく組織的となるに及んで、すなはち個人單位的、家族單位的、小團體單位的、一地方單位的でなく、比較的に全一的な社會單位的となるに及んで、勞働組合の發達によつてそれの中止、間斷、停休が組合の意志のまに／＼實驗されることによつて、生產の社會價は最も明確に意識された。

各人が專らあるひは大體に於いて自產物を消費して生きた時代に於いては、たとひその各人間に經濟的社會以外の社會は成り立つてゐても、かれらは生產の社會價を知る機會をば勿論持たない。そこには、實に、社會價ある生產がないからだ。

科學、技術、工藝、交通手段の發達は、しかるに、生產自身だけをすら、勞働、技術、科學、組織、資本に五分業化した。それはまた經濟生活を生產、消費、及び生產の延長としての分配に三分業化した。經濟的消費の目的物は主として人力をまじへたものであり、そしてその生產的人力は五種以上の分業にさへ發達し、加ふるに生產と消費との間に大規模の社會的分野が判然たる、大區域を形成して發達するに及んでは、生產に必要な、大方法としての勞働の隨時的罷業が、その社會全體をして、勞働がいかに、またいかなる社會價を有するかを知らしめるにあづかつていかに確實にして甚大なる力であるかは容易に想察され、推斷される。

經濟的生活は、人にとつて最も基礎的な位置に屬する。藝術や、[illegible]や、[illegible]や、[illegible]や、結婚は、人にとつて價値あるものではあるが、これらのものは、[illegible]達成するために有用的及び必要的に有價なものであり、經濟は、これらのものにとつて[illegible]、人生もしくは文化を[illegible]いやしくも可能にするためにすら必要的に有價なものであつた。

經濟は、最も選擇的には、食によつて代表される。食はないでは、人は殆ど一日も生きることが出來ない。藝術や、政治や、科學や、哲學や、道德や、宗教や、教育や、結婚は、それらのすべてを缺いても、いはんやこれらのうちのどの一つたりともを缺いても、人は必らずしもかれの一代の自然壽を全うしえないこととはいへない。

經濟は人生もしくは文化にとつて基礎的必要件であり、文化に於ける經濟以外の内容は人生もしくは文化にとつて完成的有用件及び必要件であるのだ。

勞働者の組織的自衛行動は、十九世紀中葉以來の近代人をして、かれら自身の經濟生活に直接に關係したかたちに於いて、勞働の社會價を、かれら自身の部分的思想や感情や趣味がこれを好むと好まざるとにかかはらず、基礎的自然力の不可抗さに於いて理解せしめ且つ實感せしめた。

近代人は、かれら自身の經濟生活方面に於いて、そして勞働者の組織的自衛行動としての罷業に刺戟されて、この罷業の結果がかれら自身の經濟生活の不成立を殘酷なほど必然的に且つ確實に證據立てることを繰り返へし經驗すると共に、經驗させられると共に、勞働の對非勞働者的價値としての社會價を今更の如くに見なほし初めたのだ。かれらの多くは、この現實的生活の最も基礎的な論理をば、勿論、驚喜の胸を躍らすことは出來ず、驚悲の胸を躍らしつゝ、したがつて出來るだけ非認しながら肯定し來たつた。十九世紀後半以來の多くの產業發達國に於ける產業立法的現象、なか

んづく勞働に關する立法的現象が、企畫的及び決定的各種形を通じて、いかなる心理的原因の結果としての現象であつたかを見るならば、これは明白にして幽邃な一貫的、成長的事實だ。戰時中の英國が産んだ「ホイットリ報告」でさへもが、いなそれの如きは、これの最近に於ける絶好の一標本だ。

勿論、勞働の社會價値は、多くの非勞働者によつては、感想の胸を躍らして非常的に肯定されて來たが、勞働者自身によつては、これと反比例に、感激の胸を躍らして現實的及び狂信的にさへ肯定されて來た。

社會價値は、社會に於けるすべての被消費的關係を有する生産に固有の或る性質だが、したがつてそれは藝術的生産にも、學問的生産にも、教育的生産にも、政治的生産にも、本質的には多少必らず附帶され、內具されて見いだされる或る性質だが、これらの人生もしくは文化に對する完成的意義を第一に有するかたちの生産は、往古に於いてもすでに著大なる成績を擧げ示したがゆゑに、これの社會價値も早く公認された。孔子、孟子の時代と雅典、プレトー、アリストートルの時代と社會は、これを例示する或るものだ。

勞働の社會價値は、しかるに、勞働そのものが、これの近代的發達形式に於いては、文字通りに、しかもミ、テーシン的に近代的發達であるがゆゑに、この以前に於いては公認される原因と事情を缺いた。現代の勞働者自身及び比較的に深刻なる知識または理解または興味をかれらの生活に對して有する勞働者自身以外の人々が、勞働の社會價値に對して經濟的生産の社會價値の各部をさへも好んで想像し、あるいは單純に社會價値そのものをさへも好んで想像する傾向をも少いちじるしく示すことは、理の當然ではないが然しい自然だとは見られる。

現代人の生活をいやしくも可能にするためにすら必要な基礎的條件としての經濟的生産の、しかもそのうちの最も單純、明確、卑近な勞働的生産の內容を充分に知ることは、しかしながら、すべての前に、實に、社會價値ある生産の社

會を一層完全にするために於いて生存するための經濟的生産をしてゆく

或るかたちの生存以外に、これをほかにしては、社會價値あるものはないが、次にまたないが、これは、如何の社會價値に對する充分なる組織に機會づけられて、常識、興味、制度、慣習、個人的思想及び行動の各方面に、これの或る新たなる發達と實現と確立とを與へられる可能性がある。

この可能に充分なる保護を與へる努力が同時に他面に於いて、また餘りに遠からぬ將來に於いて拂はれることを條件として考へるならば、現代に於いて、勞働及び經濟的生産の社會價値に對して多少不合理的な集中的注意が向けられ、費やされつつあることは、それがその條件が意味する通りに一部的、一時的現象である限り、必らずしも根本深的な悲觀、周章、慷慨をば値ひしない。

人生もしくは文化の基礎要件としての經濟的生産の社會價、しかも、その經濟的生産のうちの最も基礎要件的な部位を形成する勞働の社會價に現代が、先づ理解及び實感のかたちに於いて、徹底することは、たしかに社會價全體の基底に現代思想が徹到することであつて、充分に有意義な表現としての文明の再建は、現代に於いて、是非とも、すなはち不可避的に、この方法を取る必要があると考斷される。現代が最も有意義に、すなはち進化的再生の方法として「自然に歸る」必要を持つてゐるとするならば、それは勞働の社會價に徹底的知識及び想像を持つことであらねばならん。

形式に於いて最もあるひは比較的に單純な社會價を時あつてか注意の集點に呼びだすことは、形式に於いて最もあるひは比較的に複雜な社會價を反省するための一要件でもあるのだ。

一とつの譬喩を造るならば、個人に於ける習性が餘りに肥厚する頃には、かれは自然に死んで未經驗の新人が生まれ、さうすることによつて文化の進化的保存が可能にされる如くに、社會に於ける完成業的社會價が偶像化する折り々

々に、社會に於ける具體的社會人が唯、自己を主張することは、人生もしくは文化をしてとこしへに変化せしめるための、要件でもあるのだ。

労苦は、したがつて労働者の組織的自衛行動は、これの或る限られたる側面から見れば偶然の発生であつたが、今日としては、古來の比較的に完成的な社會價が、殊に近代に及んで、すなはち、學藝復興この方、驚くべき大規模に於いて再生し來たつた學問、藝術、政治、教育等が、經濟的生活から離れて、抽象的にそれら自身の世界を保持し、或くては、極端時のアピンス人式の非生産的生活を永く續けうるかの如くに見做して、生活全體、文化全體の上にただ中に在るの繼造物に似た本質的不自然状態を出現した危機に際して、近代人に潜在した本能的理性が、自己保存、生存の必要を調和に逸脱したかの如くに、經濟の手をみづから動かしたかたちにそれは明せたして成つてゐる。

本質的社會人は經濟的生活に限らない、またそれによつて代表される理由もない、そして經濟的生活に労働を完全に、すなはち唯一的に必要な方法とはしない、しかし、本質的の労働は、それの各自體を通して、それ自身としての全分に於いて、經濟的生活の如くに、また經濟的生活に於ける労働の如くに、意識に於いて、論理に於いて、一點の獨斷も、機械化も、強制もないものでなければならん。

太陽が月と他の總ての、星體を有するが如くに、労働は現代に於いて社會層の總ての、要素を有する。標準時計がありうる如くに、標準社會層がありうる。そしてそれは労働だ。社會層の全内容は労働以上だ、しかし、労働を除いた社會層は、現代に於いては、あたかも時計が完全に労働を無用にしないあひだ、組織的、體系的關係に於いてつひに不可能だ。

社會層に對する組織的、體系的、統一的要素。現代の中心には最も必要とする。しかし此の點にはただ注意をして

なるものの一だ

四　個人價値論の定義

一人がかれ自身にとつて有する價値があるならば、それは個人價だ。そしてこの意味の個人價よりも實在的なものはない。すべての價値は、畢竟するにここにそれの最初のかたちを成し、またそれの最後のかたちをなす。

各の人は先づ生きたく思ふ。かれ自身の生存がかれに對する一とつの基礎的價値を形成する。形式的または外觀的に死を選ぶ人でさへもが、すなはち自殺する人でさへもが、實質的または内容的にはかれ自身の生存の或るかたちを選ぶのだ。生きかたの一種が自殺であるのだ。

人は生存することによつて實在だ。人のすべての欲望は文字通りに人のだ。人にとつてのすべての價値は、人の欲望を滿足させる性質にほかならない。根本的には、人は或る欲望にほかならない。その欲望が滿足させられた狀態が、それが未成完であるあひだ理想または目的としての價値をかれに於いて形成し、それの完成が理想または目的の實現としての價値をかれに於いて形成する。人はすべて、そして常に、快樂を追うて生きるといはば、もしも快樂といふことばを身體的幸福に限定して理解するならば、たしかに事實でない。しかしながら、人はすべて、そして常に、幸福を求めて生きるといはば、もしも幸福といふことばを精神的快樂及び身體的幸福の兩者を自由に意味しうるものとして理解するならば、たしかに事實だ。しかも、快樂といひ、幸福といふ、要するに欲望の滿足の或る種類または形態にほかならない。

人はかれ自身の生存を欲する。人が發達するにしたがつて、かれによつて欲せられるかれ自身の生存が單なる生物學的なものではなくなる。それはいよ／＼心理學的なものとなる。道德的生存、藝術的生存、知識的生存等によつて特徴

づけられる樣式の生存が、かれが欲するかれ自身の生存としていちぐ〳〵複雜に分化して行く。けれども、それがどんなに複雜に分化して行かうとも、それは決してかれが欲するかれ自身の生存以外のものとはならない。人にとつての價値、人が經驗しうる限りの價値は、人の欲望と共に終始する、そして人の欲望は人の生存と共に終始する　しかも同一人のだ。

個人價値意識は必らず同時に個人價値だが、個人價値は必らずしも同時に個人價値意識ではない。反省され、自覺され、要するに認識された個人價値が個人價値意識だからだ。個人價値が單に在るだけでなしに、特に認識的注意の對象とされて、ここに始めて個人價値意識が成り立つ。かくして、個人價値意識の歷史は個人價値の歷史よりも新しい。

人として生存欲なきものなく、また一般的生存欲と共にそれから分化した特殊的生存欲なきものはない。しかしながら、その一般的及び特殊的生存欲の多少完全に、すなはち多少不完全に組織された統化的、成長的一全體として一の自己を充分に客觀視する活動は、知性と經驗の或る發達と進步とあいまつて始めて可能にされる。

人の一般的及び特殊的生存欲が人自身によつて客觀認識される活動が或る程度に進めば、人の對自的價値が一とつの概念として構成される。歷史上、十八世紀に及んでこれが、この概念構成が飛躍的發達のかたちに於いてなされた。空想的な、且つ抽象的な個人主義、人格主義、本質主義はこの事態の或る側面であつた。

五　社會價値意識の定義

一　[illegible]するに當つては、各人の對自價値から獨立したかれの對他的價値が
[illegible]生存上一の[illegible]としてのみか、一つの人自身にとつて一の價値たらしめることに、一とつの基礎

[illegible]を意味するか、またはそれは欲望を意味する。意志に於ける目的が[illegible]、それに實質と内容とにおいて、その意志の主體たる人によつて、かれ自身にとつて或る有價なものだと判斷されたにきまつてゐる。さうでないならば、その意志がそもそも發生しやうがないからだ。

しかしながら、一人の生存とその生存の特殊の現實形としての行爲は、その一人自身にとつての價値以外に、或る人にとつての價値をも有しうる。それがそれを有する場合に、その限りに於いて、その一人の生存または行爲には社會價がある。例へば子の生存は母に對して或る社會價を持ち、母の行爲は子に對して或る社會價を持つ。

いはゆる利己主義的行爲は社會價をば缺いても個人價だけをばすくなくとも意志に於いて確實に有する行爲だ。いはゆる利他主義的行爲はそれの直反對だ。十九世紀に發達した自由競走放任主義の經濟組織は前者の一例であり、いはゆる社會主義はそれに對する制限の必要を意識する限りに於いて後者の一例だ。

六　政治組織及び社會組織の原則的要件としての個人價意識と社會價意識とに對する或る奉仕的保護

政治組織及び社會組織が、一とつの組織的全體としての資格に於いて、單純にもしくは純粹に權力的支配、被支配、戰爭的征服、被征服、經濟的搾取、被搾取の關係以外のものでなかつたことは事實としても古來一度もなかつたが、傾向としては古來いよ〳〵さうでなくなつた。

封建的專制制から近代的立憲制へ、それがまた漸次に關係當體的全社會民の自發的意志の直接延長としての委任統治

制へ、政治に於ける權力または治者の性質が、移り變はつた、及び現にも移り變はりつゝある、近代及び現代の事實と傾向とは、最も手近くこの判斷を裏書きする。

そしてこれはすこしも不思議な現象ではない。それは、政治は　先づ政治だけに限つて考察する――それの本質に於いて一とつの人事であると同時に公事だからだ。本質に於いて一とつの人事であると同時に公事である政治に於いては、またそれに對しては、個人價值意識と社會價值意識とは、つひに相關聯した一双の決定力として自己を主張する必然がある

個人價值意識と社會價值意識とは、個人及び社會の存在と共に存在し、個人及び社會の發達と共に發達する或る基礎的事實だ。この基礎的事實を全然無視しては、あるひはこの基礎的事實に對して極小限的傾向の、すなはち常に可能的極小限の不注意と、極大限的傾向の、すなはち常に可能的極大限の注意とを拂ふことを方法的條件としないでは、本質に於いて一とつの人的公事である政治はつひに成功しやうがない。それは、徹底的に考察すれば、始まりやうも、進行しやうもすらないのだ。

政治がそれの結果に於いて、またそれの結果に於いてと關聯してそれの方法に於いて、一とつの社會に於ける或る私事ではなく、或る公事であることは自明的に明著だ。それは、治者といふ概念は被治者といふ概念から全然離れては成り立たないものだといふ事實及び論理に注意して見てもわかる。政治は、すくなくともそれの結果に於いては、治者の事であると同時に被治者の事でもあるのだ。政治が、すくなくともそれの結果に於いて、治者だけの事ではなく、同時に被治者の事でもある限りに於いて、それはすでにその限りに於いての公事であることをば、なに人も否定することが出來ない。

[illegible]に、[illegible]に存することもまた[illegible]

かへるならば[illegible]においてのみ、[illegible]に、具體的に、[illegible]

させることは、理論としても多少必然的因縁であり、傾向としては大部分に必然的に傾かして行くと

一とつの社會の全成員の利害を結果に於いて一切實に、眞明に決定する必然性ある政治を、また方法に於いてこれを示す

る必然性ある政治を、その社會内の一部人が、歴史的事實としては、及び原則的不可避性としては、多少顯著な程度に

於いての少數者が、自己の利害のみを意識して、あるひは殘餘大多數者の害と自己の利との關係を知識的全一として意識して、行なひうる可能には見え透いた限度がある。

かくの如くにして、善政、惡政の概念は、古來、各の時代と社會とに於いて、その時代に於ける、またその社會に於ける被治者及び治者の兩階級を含めた全社會員の水準的聰明と代表的、卓越的聰明とに相應したかたちに於いて、常に或る著大なる社會的勢力として、その社會によつてあるひは形勢され、あるひは傳統的に保存された。

或る批判的見地から考察して、壓制對屈從、支配對被支配、搾取對被搾取、利用對被利用、治對被治の關係を、純片務的形式に於いて、すなはち一方は專ら決定し、他方はひとへに決定されるといふかたちに於いて、古來の政治が多少顯著に示すことは事實だ。現代の最も進んだ社會の政治を見ても、この關係は多少明視される。

しかしながら、かくの如き政治組織が結論的意義に於いて要するに安全に、平和に保持されてゐるあひだ、それは決して最も現實的に、すなはち被治者及び治者の意識的現實として、純粹たる權力的決定、被決定の關係を意味するものではない。

或る淺い、かたよつた見地から考察すれば前記のやうに觀える關係も、深い、全い見地から考察すれば、前の見地か

しては支配者と觀えるものも、同じ見地からして被支配者と觀えるものによつて多少必らず支配されてゐる。支配・被支配の代はりに、前に列記したやうな同意異語的表現のどの一とつを當てはめて考へて見ても同樣の判斷が同樣に妥當に成り立つ。

或る點に進んだ聰明の見地から批判的に考察して純粹なる權力的支配・被支配の關係を構成してゐる確定的・したがつて安定的政治組織があるとしても、それは、客觀的・科學的事實としては、その被支配者の聰明がさほど進んでゐないために、かれら身分の保存及び意志としての意味に於いては多少反對の關係を構成してゐるものであることを割引して考へる必要を示す、それだけの不純粹的要素の存在によつて代表される、非考察的餘地のある現象だ。

ついでながらに注意するが、現代の多くの國家は資本主義的政治組織の代表的單位だ、それは國民の大多數者としての無産階級にとつては全然無用にして多少有害だ、立法も、行政も、したがつて例へば司法も、警察も、國民中の有産特權階級のみを保護するものだ。大多數者には保護されべき財産もないではないか、といふやうな考へが多少現存するやうだが、これなどは、右に注意したもの以上に非科學的な考察だ。現にいかなる細民者でも、盗賊を恐れ、戸締を嚴にすることを怠らない事實をなんと見るか。また例へば道路、衛生等に對する國家の行爲をなんと見るか。

いはゆる權力的支配、被支配の關係には、それが組織的・全體としての政治の原則と觀える場合には、實質には、いつでもあの、被支配者と觀えるものの個人的意志が、支配者と見えるものの意志及び行動をそれがある通りに決定し、被支配者と觀えるものの自分のありかたをもまたそれが實質在る故に決定するといふ關係が現象的及び根據的に作用してゐるのだ。

いはゆる權力的被支配階級が、自由的に權力的支配階級だと意識すれば、その瞬間に於いて、その政治組織は、革命

に依る[illegible]にしいだしたのだ。これはすべての[illegible]、[illegible]にかの[illegible]始めたのだ。一とつの政治組織の支持者のに一とつの政治組織といふ[illegible]ほどに[illegible]あるあひだ、それが純粹に、單純に、絶對的に權力的支配、被支配の關係を本當の意味とするものであるといふことは、繰り返へして注意するが、誤解もしくは空想としてのほかには不可能だ。

一とつの社會内の少數者でさへもだが、確實に大多數者であるものが、その社會の政治組織が、原則的及び現象的に、純粹の權力的支配、被支配の關係を構成してゐることを發見することは、あるひは、發見したと信ずることは、その大多數者自身の個人價値意識と社會價値意識とを通ほして、かれらの生存に本能的不可測深の不安を與へる必然がある。かれらがその不安を感じないあひだ、したがつてあらゆる努力を個人價値意識的及び社會價値意識的自己保存のために拂ふ狀態に移らないあひだ、すなはち革命的意志及び行動に移らないあひだ、かれらは眞實にはそれを發見したと信じてはゐないのだ。

しかしながら、それほど徹底的に存在してゐるかれら自身の最直接の環境的世界の關係がすこしも、すなはちそれほど徹底的にかれら自身によつて知覺されず、意識されずに、歷史的及び現代的事實が明示するやうな久しい期間にわたつて濟むといふことは、從來の人性が具備した程度の聰明を確實に條件として考へてさへも、ありえない。

歷史上、實に、革命は瞬間にも比すべき期間を通則的に充たし、政治組織の安定と平和とは永久にも比すべき期間を常則的に充たした。

現實論的な、また科學的な立場からこの問題を考察する方法としては、時代と社會を比較的に最も考察者自身に近い範圍に選擇して檢察することから始めることが、しかも考察者自身の經驗を反省することから始めるとが至當だ。かくし

て私としては先づ私自身の直接の政治組織的環境を考察して見なくてはならんが、さうして見て、私は、私自身が純粋に權力的被支配者であるといふ事實をば、またその反對に、純粋に權力的支配者であるといふ事實をも、發見することが出來ない。

一人たりとも例外を持つことは、すでに純粋權力論の不可能を意味する現象だが、私自身の場合は、唯一の例外ではなく、通則的事實の一例であることが續いて發見され、判斷される。

各人の生活關係――勿論各人の生活環境を完全に含めての――に於ける非存在が、階級的、職業的形式に於ける生活關係に於いてのみ存在を形成するといふ可能は、すくなくともこの問題の場合に於いてはない。

ついでながらに注意するが、「多くの個人の集合から成る、社會群が、これらのすべての個人の存在の總和を離れて、別に、個獨立の存在を持つて居るといふ事實」「その社會群の意志は、これを構成する諸員の意志の總和とは異なつた、全然別個のものであるといふ事實」（大山郁夫氏著「政治の社會的基礎」）などは決してない、事實自身は、いつでも、精確に、完全に、その正反對を證據立て、然證する。

現代の政治組織を見るに、これは多少不完全だが、その多少不完全だといふ判斷の成り立つ理由は、個人價値意識及び社會價値意識といふことばを嚴密に解すればその理由の全部的に、これを狭義に解してもこれの代表的一部的に、現代の政治組織が、現代人の個人價値意識と社會價値意識とに對する政治組織としての全體的要求を多少不完全に實現してゐるといふにある。

勞働者の社會價値意識及び個人價値意識、國民中の被支配階級としての組織的人口の個人價値意識及び社會價値意識、結[illegible]つされ、國際的社會に於ける民族文化的、無組織的及び組織的勢力の個人價値意識及び社會價値意識、これらは、現代の

政治組織に[illegible]
個人[illegible]社會的意識に對する[illegible]に於ける[illegible]的意義で、いかに[illegible]にとつて[illegible]の如くに、原則的要件であるかについては、ここでは別に述べない。政治組織を、それが有意義に用ひるだけ廣い外延と多い内包とを與へられたかたちに於いて理解すれば、それは社會組織と同一のものであるし、これを有意義にもつと制限したかたちに於いて理解しても、それは社會組織に於ける最も代表的な位置を形成するものであるがゆゑに、上述は、社會組織の場合に對して、すくなくとも代表的選擇的考察としての意義を持つ。

七　政治學及び社會學に於ける結論的性質としての或る公的規範事實

理由の意識を充分に具備したかたちに於いて判斷を構成することが學の責任だ。判斷は意識的生活の一特質だ。そして人はかれの意識的生活によつて代表される。單一なる意識的生活が知的及び情意的二特徴を顯著に示す程度に發達してゐる人の場合にあつては、判斷に於けるいはば心理的分業關係がそれと同義異語的な事實として發達してゐる。知的判斷と情意的判斷との分業的協働がそこには發達してゐるのだ。

知は比較的に對象意識であり、情意は比較的に目的意識だ。かくして、知的判斷の特質は寫實的であり、情意的判斷の特質は創造的だ。前者は存在意識的判斷として顯著であり、後者は價値意識的判斷として顯著だ。

しかしながら、知性の全體的特質は、單なる存在意識的判斷によつては代表されない。それは理由の意識としての一層根本的な、したがつて一層統全的な特質を持つ。

理由の意識としての知性は、それの全作用としては、存在意識的判断になかつても作用するが、價値意識的判断になかつても作用する。それが存在意識的判断になかつて作用するかたちは、普通の意味に於いての原因の存在に對する豫想的、本能的確信の形成と、その存在を確知する活動だ。それが價値意識的判断になかつて作用するかたちは、普通の意味に於いての目的の存在に對する豫想的、本能的確信の形成と、その存在を確知する活動だ。

理由の意識としての知性の發達は、人性の發達に於ける內容的一要件だ。そしてこの理由の意識は、すべての存在意識的判断を可能的完全な因果關係のかたちに於いて關系づけ、組織づけ、統一する。これは、同樣に、すべての價値意識的判断をば、可能的完全な目的關係のかたちに於いて關系づけ、組織づけ、統一する。さうすることが、直接には、理由の意識に內在する本能だといへるが、間接には、そして一層徹底的には、人性に於ける根本的傾向が、かくの如き理由の意識をそれの本質的、必要として發達させ、保存するのだといへる。

人性の一つの根本傾向の兩側によつて、因果關系の世界と、目的關系の世界とが、それぞれに、獨立した組織的、本質として形成される。

しかしながら、人性に於ける根本的傾向の兩面は、そのふたつの世界をふたつの世界として持ち通すことは出來ない。ここに於いてか、嚴密なる意味に於いての理想が生まれる。あるいは人性が、それ自身の必要によつて嚴密なる意味に於いての理想を構成する。

嚴密なる意味に於いての理想は、實現の可能に對する知識を具備した目的意識だ。

かくして嚴密なる意味に於いての理想は、對象意識を完全に條件とした目的意識だ。これは方法の知識を具備した目的なるものは、客觀的存在の狀態が終極的になりうる、あるいは、變化しうることの可能性の認識の可能性に對する意

[illegible]

この經濟的活動を、それ自身の内的關係にしたがつて一目的體系として考へうるかたちにおいて[illegible]としてこの客觀世界を、またそれ自身の内的關係にしたがつて因果體系として考へるかたちに於いて現實的に經驗していることが、そしてこの兩活動を單一なる目的に統一された一機能として行なふことが、それの可能と價値とが肯定されるかたちの規範學だ。

學は理由の意識と共に成り立つ。その理由の意識が直接に或る存在意識的判斷に關するものである場合には、或る記述學が成り立ち、それが直接に或る價値意識的判斷に關するものである場合には或る規範學が成り立つ。

記述學の全體系が成り立つ可能がある限りに於いて記述哲學が成り立つ。いはゆる自然哲學はそれの一形であつた。現代に於いては、しかしながら記述學は、それの科別的發達によつて代表される。規範學の全體系が成り立つ可能がある限りに於いて、規範哲學が成り立つ。いはゆる價値哲學は多少これを意味する。規範學の部分的體系が成り立つ可能がある限りに於いて、科別的規範學が成り立つ。

政治學及び社會學は、或る科別的記述學として發達する可能が選擇的に注意される理由があるが、一層根本的にそして代表的に、それらは、或る科別的規範學として發達する可能が選擇的に注意される理由がある。

知ることと自身が或る價値を構成するが、或る行なひを行なふために知ることが、知ることの價値體系に於いて支配的部位を構成する。病因を知ることは、それ自身の價値によつてよりも、療方を知ることの價値によつて代表される。

政治生活不安　社會生活不安は常に多少、時あつてか絶大苦悶的に、存在する。これを解除することの價値を知ること、及びその方法を知ることとは、それ自身、學的意志の或る直接の内容たりうる。

價値意識的判斷を完成するための方法として存在意識的判斷を完成する關係の方が　存在意識的判斷を完成したための結果として價値意識的判斷が完成される關係よりも、人性に於いて情意性が知性よりも根本的、支配的であるがゆゑに、根本的　支配的だ。

規範學を完成するための方法として記述學を完成する關係の方が、記述學を完成した結果として規範學が完成される關係よりも、それゆゑに、根本的　支配的だ。

政治學及び社會學は、自然科學と共通に、目的と方法を人の或るかたちとして持つと同時に、自然科學と不共通に對象をも人の或るかたちとして持つがゆゑに、しかるに人の根本的、支配的性質は知的性質と情意的性質との比較に於いては情意的性質であるがゆゑに、政治學及び社會學の場合にあつては、上述の法則は、自然科學の場合にあつてと比して　本能的發達の必然と反省的發達の必要とを、層の高度に於いて持つ。

東洋諸民族の覺醒

法學博士　米田實

一

予は嚢に最近勃發の排日問題を說くに當り、歩を進めて東洋諸民族の覺醒に言及した。然も單に數語を費したのみであつて、其全斑を紹介するの餘裕なきを遺憾に思つたのである。言ふまでもなく此問題は最近世界の政治的社會的現象としても、頗る重大なものであり、我國に取つても至深の趣味を喚起する事柄であるから、以下少しく之が紹介を試みやうと思ふ。尤も斯の如く形勢の發展し來れるに就ては、予は毫も之を不思議とするものではない。彼の世界の大戰爭は五ケ年の久しきに亘つて人を殺すこと九百萬、費したる軍費四千五百億圓に上り、振古未曾有の大事件であつたと共に、其影響の及べる所亦決して尠少ではなかつた。それは世界の人類に對して民族自決主義を致え、力弱き民族も力強き民族と同じく、自己の運命を決定する權利ありと云ふ思想を鼓吹したことであつた。此事は英國首相ロイド・チョーヂ氏の言にも現はるれば、米國大統領ウイルソン氏の言にも現れた。就中ウイルソン氏が唱道した十四原則と云ふものは、獨立の民族でありながら、獨立的政治的生活を作つて居らない各民族には電氣の如く響いたものであつた。其結果歐羅巴では講和會議と共に漸々新しき獨立國の實現を見た、即ち現在面積十四萬方哩人口二千七百萬を數ふる波蘭の如き、其他舊墺地利領土に屬して長く苦境に立てるボヘミヤのチエック人及び、洪牙利のスロヴアキア人は合體して、面積五萬四千方哩、人口一千三百萬のチエックスロヴアキア國を作り出した。又人爲的に長年間引離されて居た南スラヴ民族の三分流、即ちセルビア人、クロワート人、スロベニア人は互に合併して、面積九萬方哩人口一千百萬のセルブ、クロワート、スロベーヌ獨立國を作つた。其他芬蘭の獨立するあり、ラトウイ

ア、エストニア、リボニアも亦独立するに至つた。

欧羅巴に於て斯の如き現象を示し来れる以上、いかでそれが欧羅巴以外の諸民族に影響する所なくして止むことが出来やう。元来自由の熱少なしと云はれたる東洋諸民族も、輓近教育の普及と西洋思想の伝播により、戦争前既に自由を夢み出し、漸く覚醒するの準備がなされつゝあつた。そこに四年間各自己の立場を美しく正しく見せやうとする交戦国諸政治家が、宣伝的に民族自由論を鼓吹し、自己等のみが民族自由主義の味方であるかの如く吹聴し、時としては之を本として異民族に、自己等の戦争目的に反対的活動を煽動せしめやうとさへ企てたのであつた。為めに彼等も亦戦争に刺戟せられ、従来自己等の地位が不公正不正当なりしことを、然も往々過酷の犠牲となれることを自覚し、益に向上せんと建するに至つたのである。形勢此の如くなる以上、戦後に於て、吾人をして所謂東洋諸民族の覚醒を叫ばしむる迄の激変しきたれるのも何等怪むに足らない所である。然らば所謂東洋民族は如何に進んで居るか、東洋各民族は如何なる程度に進み在て居るか、予は茲に先づ東洋の土耳其から始めて埃及、阿富汗斯坦、波斯、印度等に及び、少しくこを検して見やうと思ふ。

二

東洋民族の覚醒。予は先づ之を大正九年(一九二〇年)よりアンゴラに地歩を作つたムスタツハ・ケマル・パシヤを中心とする土耳其国民党政府並に、之を繞れる各種政治団体の外交的内政的活動に於て発見しない訳には行かない。而して同時に最近の土耳其の歴史を観る時、昨年七月二十四日のローザンヌ講和条約に現はれたる土耳其外交の成功、並に之を茲に齎らしめたる土耳其人の奮闘と、且之に伴ふて現はれたる土耳其魂の復活を否認しない訳には行かない。蓋し大正七年末土耳其が戦敗の末聯合国に屈服し次で大正九年(一九二〇年)八月十日巴里郊外なるセーヴルで締結せられた講和条約に於て、苛酷なる講和条約を課せられたるは、實に惨憺たるものであつた。然るに世も知る如くケマルパシヤは之に屈服せず、猛然立ち兵力を以て希臘軍を撃破し、昨年八九月の頃は亜細亜土耳其に於ても欧羅巴土耳其に於ても、敵の勢力を一掃し、敢然として聯合諸国に譲歩を要求した姿は、實に欽仰を値ゐするに余りがあつた。所が其結果はどうであつたか。同年十一月よりローザンヌ講和会議を開くに至つて、数回行悩みの末、遂に昨年七月に入り絶大の成績を収めて、土耳其の危機を救ふたのである。即ち其成功の第

一八七七年の露土戰爭に[illegible]

[illegible]

大た歐洲人の要港スミルナを[illegible]に與へ、[illegible]
に東スレシア一帶をも希臘に[illegible]し、[illegible]の大陸
を[illegible]する時は、殆ど土國首都コンスタンチノープルに[illegible]の達
する所までも、其領土を[illegible]めたのであつた。所がローザンヌ條
約に於てはスミルナの希臘領有は全然撤回され、又東スレシア
一帶も依然として土耳其に恢復されるに至り、土耳其は大戰爭
前の國境即ちマリツア河を境とすることゝなり此方面とは殆ど
領土を失はさる狀態を呈した。希臘土耳其間の爭點たりしカラ
カチの如き希臘が土耳其に對する賠償支拂の義務を承認し、右
賠償支拂の代りとしてカラカチオを土耳其に還付することゝし
た位であつた。而してセーブル條約に於ては土耳其領土は十七
萬方哩人口八百萬を唱へられたものが、今や大いに增加し面積
二十一萬方哩人口約一千萬を數へ、所謂土耳其人多數を占むる
其鄕土たる地域は、悉く之を維持することを得たのであつた。
次に土耳其は獨逸、墺地利、勃牙利等が戰敗國として課せられ
さるを得なかつた所謂賠償金を支拂はずに濟んだのである。即
ち形式に於ては土耳其が獨逸墺地利の中央銀行に預託せる五百
萬土磅、土耳其が英國に注文せる軍艦の手付金五百萬英磅聯合

[illegible]

せる[illegible]
法權[illegible]に[illegible]み、[illegible]
（一九一四年[illegible]土耳其政府は[illegible]
因に通告したほどで[illegible]に拘はず、聯合國の承認し
さはセーブル條約の聯合國は悉く、土耳其に治外法權を[illegible]
ることになり、[illegible]ものであつたのである。然る
に之もローザンヌ條約に於ては形勢一變治外法權は遂に撤廢さ
れ、完全に所期の目的を達したのである。即ち土耳其は、唯向
ふ五ケ年間だけ土耳其に關係少く、然も力强からぬ小國より顧
問を招聘するだけの義務を負ふに止まつたのである。斯く外交
的に成功を收めたのは要するに土耳其人が依然として覺醒し、
國家の爲め至深の努力を爲せる結果たるや言ふまでもない。併
し乍ら忘れてならないのは、土耳其人の覺醒てふ見地から見る
と、斯くの如き戰爭の勝利、ローザンヌ會議の成功は微細なる
ものたるに過ぎない、吾人は寧ろ、驚くべき土耳其人の覺醒が
土耳其の內政に現はれて居る點を指摘したい。[illegible]ので
ある。

然らは內政に現はれた土耳其人覺醒の徵候とは何か、と言ふ

に、第一土耳其に於て極めて徹底的な民主政治を布いたことである、何となれば、アンゴラに於て打ち建てられた土耳其現在の政治組織は、人民の代表者たる議會に最高權を集め、然かも其程度は世界民主國の多くが行つて居るよりも以上のものとなつてゐるのである。例へば米國等は議會以外に大統領があり、彼は議會の支配を受けないのみならず、内閣大臣の任命の如きも議會に關係なく自から任命選定するの權限を有して居るが、土耳其のは反對に大統領を選擧するものも議會であれば、内閣諸大臣を選ぶものも議會である、議會は最高權を有して居るのである。この國は議會が作つた法律を無効とする高等法院を有するものもあるが、土耳其にはさういふものは無い。次に多くの國家は二院制度を有し。特權階級若くは之に準ずるものによつて作られた第二院即ち上院を有して居るのであるが土耳其は一院制で全然第二院を有して居ない。尤も本年初頭にも議會制度改正憲法改正の議が起り、三月中旬より下旬にかけ種々熱烈なる論議のあつたのであるが、其結果成立した新憲法に於ても矢張り議會の權力を重んずるの制度に變る所なく、同時に人權の大擴張を見るに至つたのである。一部の者の中には議會の萬能に對して解散權を大統領に與へんとする論者あり、又議會が議決の拒否權をも大統領に附與せんと主張したものもあつたが、此計畫は失敗し、議會の解散の權利も新たに選擧を命ずるの權利も、議會自身に存することゝなり、大統領も亦從前通り議院内から其議員中より選擧し、任期も議會と同一と云ふことに規定された。そして大統領は否認權を有するけれども、それはやはり米國流の輕い意味のものであり、大統領が否認しても議會が多數を以つて法律を再決する場合には、否認權の効力はないのである。又選擧權も十八歳を超えた土耳其人には何人にも之を附與することゝなり、三十歳以上のものは總て被選擧權を有することになつて居る。尤も目下の所斯の如き民主的憲法制定されたとは云へ、其運用に至つては未だ完全とは云はれない。何となれば土耳其の國民は政治的訓練未だ十分ならず、然も現大統領たるムスタツハケマルパシヤは國家の一大功勞者として、國内勢威の向上たり殆ど獨裁政治に於ける第一人者たるの姿にあるが爲である。併しながら之は一時的現象に過ぎない、永遠の制度として極めて民主的なる憲法制度を確立せることは、如何に土耳其人が新時代の精神に觸られつゝあるの證據でなくて何であらう。

議會の制度に於て斯の如き態度を執つた土耳其の政治家達は他の方面に於ても、着々改革を行つた。其中主なるものを述ぶれば、本年三月土耳其前皇室オスマン家に對して居た數十名

[illegible]ある。何となれば土耳其に[illegible]に在るもの七千萬、[illegible]島にあるもの[illegible]萬、支那に在るもの一千[illegible]萬、波斯九百萬、[illegible]斯坦五百萬、緬甸暹羅亞一千五百萬人であつて、此中波斯に在るシア派以外は土耳其の教主を認めて居たのであるから、此教主を一掃したことに就ては、回々教社會に於ける土耳其自身の宗教的權威に關する損害尠からざる觀あるが、然も之を忍んで廢止を斷行せる所以のものは、彼が政治社會の大改革を行はんとする主張の、犠牲になつたものと云つて宜い。何となれば土耳其人は一昨年帝制を廢止し、共和制を採用したのであるが、然も從來長く政治と宗教を混合せる政教一致の土耳其に於て統一を見ず、多數無智の土耳其人には却つて教主制の存續が禍を爲し、政治社會の改革を阻害する原因となつて居た。而も積年の弊害堆重し來つて、今や荒療治を施すより外、弊害芟除の道なきことを知悉せるムスタッハケマルパシャの政府は、遂に一朝にして之を廢し、以て國政發達を期することにしたのである。其結果として先づ土耳其人發達の根本的障礙物であつた、迷信と腐敗とに充てる回々教下の教育を改善すること丶なつた。所謂僧侶教育者し[illegible]人[illegible]伊蘭伊太利米國等の[illegible]道を主とする宗派の教育主義を棄てさせ、[illegible]佛國其他より獨立せしめて、最近の教育のみを行はしめ、[illegible]としては學校以外別に禮拜堂を設けてこれを行はしむることに改めたのである。之に對し伊太利系小學校は案外速かに土耳其の主張に服從したけれども、佛蘭西系學校は容易に之に從はず、爲めに存在に於ける佛蘭西系學校二十六校中にアナトリヤに於ける同じく二十五校は閉鎖の運命にさへ逢着したのである。米國系宗教學校中にも大分閉鎖されたものもあつたが、之は土耳其の新制度に合致する條件に於て再開せしめる道びになつた。更に從來の土耳其の教育は不完全であつた。これが總ての進歩を阻害せるに觀て、宗教の迷信的方面又は世界の進歩と合致せざる方面に對し、思ひ切つた斧鉞を加へたことは、今まで不完全なる病弊に狃れた土耳其の状態に鑑み、已むを得ない果斷の措置であると云ふべきであらう。

是等が土耳其覺醒の重大な現象であるが、其他の點に於ても

秘密の現象が現れて居る。即ちアンゴラ議會では今や多妻主義を排するの方針を執り來つたことで、之にはハリデエジアハノム女史を中心として約四百の婦人達が、本年一月多妻主義廢止を要求する主張を爲したことも、刺戟になつたには相違ない。又土耳其では極端に婦人の活動を制限し、殆ど之を幽閉同様に取扱つた、從つて婦人の思想を進步せず、子女の教育上に悪影響を及ぼしつゝある事實を看取し、今や婦人の教育を勸め婦人に自由を與ふることゝなつたのも、下らぬ話ではあるが、從來街頭の電車其他にも幕を張つて男女間の席を區別せるが如き在慣を廢し、[illegible]して婦[illegible]ことを許すやうになつて來た。此政府[illegible]出し[illegible]し、或は婦[illegible]抑制[illegible]せるが如き、[illegible]を一掃せんとする[illegible]努力の[illegible]と見て差支ないと思ふ。今や政治に於ても宗教に於ても教育に於ても、社會現象に於ても[illegible]として[illegible]土耳其は、[illegible]時代の[illegible]、[illegible]し、政治、[illegible]、各方面に於い[illegible]り出さんとする努力、之れが[illegible]、[illegible]見られて、[illegible]人は[illegible]ること[illegible]

三

然らば轉じて往年土耳其の領土であり、今や土耳其と共に有力な回々教國たる[illegible]の[illegible]、面積[illegible]四百八十一平方[illegible]を有するナイル河畔の埃及は如何。[illegible]の發展を示しつゝあり、[illegible]なる[illegible]と、[illegible]月の新憲法發布に現はれ、[illegible]首相ザグルル・パシヤの成功[illegible]に、[illegible]内閣の[illegible]に見ることを得るのである。[illegible]埃及は[illegible]スエール[illegible]の[illegible]なる[illegible]の結果、[illegible]あつた[illegible]に[illegible]に[illegible]け、埃及に[illegible]を行ふこととなり、[illegible]一八[illegible]に[illegible]した。一八八[illegible]にはならなかつた爲め、[illegible]ん、埃及も英國の[illegible]下に[illegible]れたのであつた。[illegible]國として[illegible]するに[illegible]らなかつた。[illegible]一九[illegible]に[illegible]し、土耳其が[illegible]に傾くと[illegible]に方針を一變し、埃及を英國の保[illegible]とすることを[illegible]したのである。しかも[illegible]としては世界大戰勃發と共に、埃及王アッバス・ヘルミ二世[illegible]つて

[illegible]の[illegible]、[illegible]的なる態度を執つたことも甚だ怪むには足らない。又た彼そ[illegible]同制度は一部埃及人には、[illegible]上の必要として起つたと云ふやうに說明もされて居たのであるが、其當時[illegible]決した[illegible]國王フーセインは之を以て、單に戰時的手段として行はれたと云ふが如きことは、該聲明書中には明かにして居ないのである。同國王は一九一七年逝去し、フアッド一世之に代つて元首となつたが、フアッド一世の時代になつても、未だ英國の保護國策は繼續された。其間の事情は種々あるとしても、要するに世界大戰は埃及をして其獨立を失はしめ、全然英國の保護國に歸せしめたと云つても差支ない。

然るに埃及の覺醒は世界大戰の略終了する頃より著しく現はれて來たのである。それは云ふまでもなく英國保護國制廢止及び獨立國たる地位を恢復せんとする運動であつた。該運動は一九一八年末より一九年の春に於て擡頭し、獨立を主張する國民黨は先づ埃及王に對して、完全なる獨立恢復の請願書を提出し、更に講和會議開かるゝや、彼等は同會議に對しても大なる運動を試みた。之に對し英國は國民黨の名流若干を國外に放逐し、壓迫政策を行ふと、埃及國內は鼎の沸くが如き紛亂の狀を呈

[illegible]ロイド・ジョージ[illegible]はミルナー卿[illegible]に至り、[illegible]に[illegible]するに[illegible]ンビー[illegible]軍は大いに埃及[illegible]あい、一九二[illegible]其英國政府の安全、外國人利益の保護、スーダン問題[illegible]等に關する保留を爲して、埃及保護制の廢止を聲明するに至つた。而して之に伴ひ昨年四月制定されたものは、彼の有名な埃及新憲法に外ならぬのである。吾人は此埃及新憲法を讀む時に、是亦埃及人の覺醒振を或程度に於て反映せることを首肯されると同時に、其內容が頗る民主的なることも否定し能はざる次第である。先づ憲法第一條に於て埃及は自由獨立の主權國なることを聲明し、而して其政體は立憲帝政とし毫も英國の保護制を殘せるが如き規定は發見されない。のみならず同憲法が民主的であると云ふ點は、國王は成程下院を解散する權利を有し、又議會に休會を命ずる權限をも有して居るが、然も其休會は一ケ月以上に及ぶべからざること同一の會期に於て二回以上休會せしむる場合には、議會兩院の同意なくしては之を行ふ能はざることに定められてゐる。尙臨時議會召集權は國王に在るけれど

も、若し兩院の中何れか一院の多數者たることを要求せし時は、必ずしも名目上たけれはならぬことに定めてある。次に國王の否認權を規定するに當つても、普通の帝制の例と異り、其否認權を絕對的とせず、一旦國王の否認したものでも、議會が分[illegible]三以上の多數を以て再議決する時は、國王の裁可を俟たずして法律となると規定である。一院の[illegible]を見ても[illegible]特權[illegible]の有[illegible]とせずして、同時に國[illegible]の調和をなしあるも[illegible]、[illegible]兩面を示して居る點で、たゞ大に興味ある規定である。日本の上院等に比較して[illegible]ことは[illegible]法は[illegible]埃及の政府[illegible]の[illegible]大[illegible]なが[illegible]ないが、國内[illegible]に對[illegible]の力に[illegible]ものにあらず、[illegible]は英國と交[illegible]の[illegible]政治家の[illegible]なりとして非難するものもあるが[illegible]は[illegible]く[illegible]たりと[illegible]ばない。[illegible]分あることは[illegible]要するに[illegible]民及人[illegible]に[illegible]して國家の[illegible]に於て其[illegible]統一比較的[illegible]に[illegible]、國内に[illegible]の如何[illegible]る[illegible]と[illegible]用ゐると思ふ。[illegible]中[illegible]埃及人[illegible]呼ばしたる原因[illegible]は、今や國[illegible]して埃及政[illegible]にあたしむるに[illegible]上[illegible]ならぬ。其[illegible]の[illegible]と[illegible]ない

を失ひ國に反抗し所謂埃及[illegible]を[illegible]せるサッド・ボゲル・バシャ其人一である。少しく後の人物と[illegible]上[illegible]に見える。ボゲル・バシャは本年六十四歳、其生活は殆ど埃及[illegible]の[illegible]めに在職[illegible]したもので宜い。[illegible]て[illegible]を[illegible]けたので、外國の智識に富み[illegible]い其[illegible]學を經驗し、又法律を學[illegible]とて[illegible]たので[illegible]ハ・バシャ[illegible]國民黨系に屬し、當時英國より來つて埃及の政[illegible]たクロマー卿に仕へ、ついに信用[illegible]た。[illegible]を得[illegible]の地位よりも[illegible]大臣になつた。[illegible]中に加はらない[illegible]を[illegible]クロマー卿は非常に彼を信用し、自から埃及[illegible]に[illegible]て[illegible]以て彼の人格の高きを賞し、サッド・バシャは[illegible]賞[illegible]る。彼は由來[illegible]る。[illegible]彼の將來の見込[illegible]た。而して彼は[illegible]相位を占めた。[illegible]する際、[illegible]一人[illegible]中は許容して發せず。[illegible]志を得るで。[illegible]

[illegible]すべきことを述べたのである。一九一八年十一月十一日[illegible]休戰[illegible]其二日後即ち十一月十三日に至り[illegible]の埃及代表たるサー・レヂーナルド・ウインゲートに會見し、英及の保護國制度廢止と完全なる獨立を承認せんことを求めた。ウインゲートは懇篤なる態度を以て之に接したけれども、併し彼は「英國政府の埃及に對する將來の意嚮を知らず」と云つて逃げた。そこでザグルル・パシヤは「統監自から英國政府の意見を知らずと云ふならば我自から英國に赴き本國政府と談判すべし」とて英國行の許可を願出したが其希望は拒絶せられて了つた。次で彼は長文の意見書を巴里の講和會議に送り、埃及の進歩せる狀態を說き、英國が埃及承認を聲明せる古き歷史をも引用して、講和會議が埃及に獨立を與へんことを求めたのである。而して一方彼は國內に於て飽くまで獨立熱を鼓吹したので、彼及び同志三名は一度英國官憲に捕へられてモルタ島に流された。次でアレンビー總督の英國より埃及に歸任するありて、英國の對埃政策は多少變更を見、一度モルタ島に幽閉せられた彼は放免せられた。彼は間もなく巴里に赴き埃國獨立のために寢食を忘れ東奔西走した。併し講和會議に於ける彼の努力は一向酬ひられず、具體的効果を見ずして終つたけれども、彼は埃及に歸來後依然として獨立運動を繼續した爲め、又復一九二一年十二月二十三日[illegible]アデン[illegible]流されて了つたのである。[illegible]して、埃及に於ける獨立運動は[illegible]て埃及人により埃及[illegible]ことが問題となつたので、昨年五月彼は遂に[illegible]されて[illegible]日埃及に歸つたが、國民堂々として[illegible]はなかつた。英國より見れば彼の如き[illegible]て、政治を執らしめ其政界に活躍せしむることを欲せざるは寧ろ自然でなければならぬが、それにも拘らず之を放逐しなければならなかつたのは、如何に埃及に於ける獨立派の勢力が旺盛英本國を壓迫し來つたかを知るに足るものがある。而して埃及に於ては本年一月新憲法の下に於ける新議會選擧行はれたが、該總選擧の結果は殆ど彼及び彼の味方の全勝であつたと云つても過言ではなかつた。先づ一月十四日施行せられたる第一回選擧に就て見るに、彼ザグルル・パシヤの純獨立派は百五十一を得たるに對し、比較的軟派と見られる自由[illegible]派は十九名を得、其外に無所屬四五名を數へたに過ぎなかつた。更に第二回の選擧に當り、三十九區に於て行はれた結果も亦ザグルルの大勝と見るべきもので、即ちザグルル派百七十六名、[illegible]相派の立

（一）

政府出選二十一名、獨立國民黨二名、無所屬十五名と云ふ新議會が出來たのである。殊に注目を惹いたのは獨立黨成ではあるがザグルルに反對し軟派と見られたる前大藏大臣シドキー・パシャは落選し、又當時總理大臣たりしイブラヒム・エヒヤ・パシャも落選の悲運に遭遇した事である。其他反對派領袖として重きを成すに足るものは、殆ど當選[illegible]にさる有樣であつた。

斯くの如き選擧形勢に鑑み、一月十七日總理大臣エヒヤ・パシャは辭職し、一月二十八日ザグルル・パシャは遂に埃及首相兼内務大臣として、國政處理の局に立つに至つた。而して新任内閣は彼は如何なる態度を採つてゐるかと云ふに、強硬に埃及の獨立を主張し、完全なる其實現に努力して居る。埃及には前に云つた如く、昨年四月[illegible]憲法も成立して居る。但しながら英國との關係を如何に決定すべきかは、將來兩國間の問題として殘されて居る。其の問題とは何であるか、

第一、英國は埃及に通商を有し、同國を經て濠洲印度等と聯絡を保てる關係上、其の交通の安全は英國の政策として最も重きを置かなければならぬ。從つて同運河の保護のため軍隊駐屯の必要を感ずること

第二、英國は埃及國内に於ける外國人保護に關しても自から責任を有することを宣言して居る。

第三、面積百萬方哩、人口五百八十萬を數ふるスーダンは、一八九九年一月協約の結果、英埃兩國の共同行政の下に置かれて居る。埃及が英國を離るゝとすると、此スーダンを埃及領に編入するか否かが亦一問題である。

少しく具體的に云ふと、埃及獨立黨は英國の主張する蘇士運河保護のための軍隊駐屯權に就ては、或程度までの讓歩をなすけれども、然も英國が唱ふる如き廣大なる範圍に於て軍隊を駐屯せしむることには同意して居らぬ。又た外人保護の權利を英國が主張せんとするに對しては、埃及獨立黨は斷じて同意することは出來ない。又スーダン問題に就ては英國は兩國共同行政の立場を取り、一八九八年に於けるスーダン戰役に英國が寄與した功勞を根據として、[illegible]主張するに對し、埃及側はスーダンは古來埃及に屬し、埃及の[illegible]たりしものが[illegible]するに際し、[illegible]したとは云へ、當然埃及國の一部を構成すべきものであると主張して居る。此交渉がいかに解決するか、今日迄に[illegible]難いが、何れも[illegible]を有するザグルル・パシャが、一度埃及首相として[illegible]及び、其[illegible]兩國の[illegible]ることを[illegible]に於て、[illegible]に於て現はした

う[illegible]
無[illegible]し得らるゝのである。之を考ふる時に於て吾々はやはり埃
及人の覺醒が十分に現はれ來たることを、否定する事は出來[illegible]
ない。亦も斯くの如く覺醒し來れる埃及人の姿は、他の[illegible]面に
於ても多少窺現はれて居る。即ち其一は教育である其二は婦人
の解放運動であり、又た氏族制改革運動であるが、之に就て今
述ぶる餘裕なきを遺憾に思ふ。併し最近傳へらるゝ所によれば
ザグルル・パシャは七月十二日政情不穩の狂熱的青年（二十
才）の誤解に依る襲擊を受けて負傷し、一時死生の間を彷徨し
なければならなかつたと云ふ。同國國民黨の爲めには誠に悲
しむべきことではあるが、這は決して同國輿論の變轉を意味す
るものでもなければ、國民黑潮の變化せる爲めでもないことを
思へば、吾々は之を以て同國人の覺醒に對し暗影を投げるもの
と見ることは出來ないのである。

四

以上述べた所は近東に於ける東洋人覺醒の現象であるが、然
らば翻つて中東々洋人の覺醒狀態は如何と云ふに、吾々は或程
度に於て之を波斯阿富汗斯坦に發見するが、然も更に東して印
度に入るに及び一層進んだ程度に於て、其覺醒狀態を發見する

[illegible]る。
[illegible]
のさは如何であるか。[illegible]
[illegible]一九一九年の[illegible]たことに[illegible]
て、其存在の一端を認めた。又[illegible]
一政黨に[illegible]政改革政策に於て、其[illegible]現はれて達
見するのである。顧みると波斯は一九〇七年の英露協約によつ
て其北部は露西亞の勢力範圍となり、中部は中立地帶とされ、
南部は英國の勢力範圍に屬したのであつた。其後一九一六年英
露協約締結の結果波斯の獨立は、殆ど損ぜられんとする有樣で
あつたが、幸ひ露西亞に於て革命起り、其帝國主義は崩壞せら
れ北部波斯は一旦自由の機運に接することが出來たけれども、
一九一九年八月英國は波斯を威壓して、其秩序を維持し其發展
を期する目的の下に、波斯の政治に參加する權利を有すること
になつた。是れ一部では英國が波斯を保護國化せんとする道で
はあるまいかと評せられた事件である。所が波斯人は此條約に
屈服することなく、議會は一九二一年に至るも右英波條約の批
准を爲さず、議員は之が批准を爲さゞるを得ぬ形勢あるを見
るや、議場に臨まず、缺席を繼續する有樣となり、議會の成立
の結果波斯王は遂に右英波條約を否認して了つた。爾來英國は

波斯の新形勢に鑑み、危險なる狀態となるの虞に備へて、遂に本年三月波國政府はブシールに於ける僅々千數百名たりしトル人に減ずるの疑問を決する位となつた。斯くして波國は波斯に對する政治的勢力扶植の途を全然放棄し始めた。[illegible]に於ける[illegible]の問題の出現したと云ふ影響もあるが、又他方に於ては波斯人の國民的自覺に根據を有することも疑ひがない。

次に波斯に於て重視すべき現象は、目下同國政府の中心人物ともいふべきリサ汗の活動である。リサ汗は元騎兵の隊長大佐から立つたもので、最近三ケ年間に於て勢力を扶植し政治的權力を有し、漸く政界の中心人物となるに至つた。彼は長い間波斯コサツクの[illegible]の司令官なりしが、[illegible]波斯の政治を支配[illegible]て居た。本年全國[illegible]の政權と共に其實力を[illegible]と爲し、之を統制して政治を執つて居るのであるが、彼は極めて民主的政治家であつて、一部からは共和派であるとさへ云はれて居るのである。但波斯に於ては[illegible]派の勢力相當に强く、政治の民衆化に就てはまだ十分に行はれて居ないのみならず、一步進めて共和政體を同國に布くと云ふが如きことになつた場合、果して其國民が合致するや否やは、今後に於ける人の疑議を存さしめるところあり、從つて[illegible]に與へられたる彼の[illegible]に對する[illegible]は定めなく云ふているが、然も彼が政府中[illegible]

を固め、又[illegible]の[illegible]を守備したことによつて國内の秩序を維持し、[illegible]の發展に資しつゝあるが如きは、彼が[illegible]政府の[illegible]せられたることを證明するものである。又た從來波斯の財政は常に國内統一せず、地方には豪族割據して中央政府への納稅を拒みたるがの[illegible]たのであるが、然るに彼は[illegible]大いに[illegible]を[illegible]し、[illegible]に對し租稅を納付せしむるに努力し、多少之によりて[illegible]を示して居ることで、是は波斯の發展に取り重要なる一事實なければならぬ。リサ汗の政治は其一種の[illegible]たる政治的[illegible]に於ける國權の擁護を目的として、東洋民族中[illegible]なる[illegible]の一つの現はれと見て宜からう。

然らば一面[illegible]十[illegible]方哩人口六百萬を領する回教國[illegible]如何[illegible]民族の[illegible]を見て居るかと云へば、[illegible]に於てもやはり人民を主として目覺めつゝあるのである。其一現象は一九一九年頃にアフガニスタン[illegible]と[illegible]して[illegible]の保全を[illegible]した[illegible]ること、[illegible]結び、[illegible]日本に[illegible]非公式[illegible]を[illegible]の[illegible]を求められる一事に[illegible]しても、其人心の如何に[illegible]きつゝあるかを[illegible]することが出來る。一九一九年[illegible]に從來[illegible]を受けた時た[illegible]に反對し、[illegible]の[illegible]を[illegible]り、内地に[illegible]人[illegible]等の如き[illegible]物に[illegible]するの[illegible]なきを得ないが、然も久しきに亘る一八七[illegible]年の[illegible]日[illegible]に[illegible]一八八八

[illegible]
[illegible]に於て[illegible]
〇七年英露協約に於て[illegible]國の阿富汗斯坦[illegible]更に[illegible]するに當り、同國は爲めに獨立狀態を失つて居たのを想ふと以上の騷ぎも、是等に對する不滿と不服を恢復せんとする熱心なる愛國心の發露たるや疑ふべからざる所である。而して其結果一九二一年英國阿富汗斯坦間の條約成立し、遂に彼が英國の保護を脫して完全なる獨立國となつたのは既に人の知る所である。所が近頃更に進んで伊太利獨逸等と關係を結び、伊獨人を招聘して、阿富汗斯坦の首府カブール及びダルナマン間に輕便鐵道を敷設せんとし、從來未開發の同國を漸次開發せんと努力しつゝあることは、新獨立國民の前途に取つて喜ぶべき現象と云はなければならない。併し吾々は此兩國の覺醒狀態よりも更に一層重きを置かねばならぬものは、何としても印度に於ける著しき覺醒の事實であつて、吾人は如何にしても之を指摘せずには居られないのである。

五

印度は面積百八萬方哩人口三億二千萬を算し、亞細亞大陸內の一大陸と云つても宜い程、大なる英國支配地域である。其中[illegible]

併し此中の所謂印度[illegible]に[illegible]マイ[illegible]の如き幾分覺醒の徵候を現はし[illegible]に覺醒の點から觀て重きを置かなければならないのは、やはり英國直轄の百九萬方哩の領土である。然らば此印度に於ける覺醒は如何にして起つたかと言ふと、顯著なる程度に於て現はれて來たのは、世界大戰以來で即ち同戰爭の影響を受けた結果であると斷ずることが出來る。

尤も印度人に國民的自覺の出來なかつたことは、其人口餘りに多く其居住する土地熱帶にして、天然の壓倒力非常に強きため、人間が天然を支配するよりも、天然によつて支配せらるゝこと烈しく、自暴自棄的となり易き土地柄であるからである。たとへは一年間蛇のため食殺される人間の數さへ二萬人以上を算する印度に於て其他自然の壓迫が強い印度に於て、其國民が他の住民に比して、積極的自發的活動力乏しきは多少理由あることである。

又一方印度人口中には四十餘種の國語と百四十五箇の地方語が存在するのみならず、二千五百と云ふ驚くべき多數の階級を

有し、其の宗教と言語とは[illegible]を事とした歴史あるなど、自然内部の統一を缺ける原因であつたらうと思ふ。偏一面の理由としてはこゝには回教のセンター教徒に對し、七千萬の回々教徒が居り、センター、マホメット両派が常に相反目せるとも、彼等が共同自治を作る上に於ける大なる障害物であつたに相違ない。それでも人數は極めて少數ながら一八八四年頃よりは、そろ／＼と政治的運動を開始しかけ、一八八五年十二月には印度各地代表者の大會が開かれ、七十二名の參加者を見て、所謂今日の印度民族運動の嚆矢をなして居た。所が該會議は翌一八八六年にも繼續開會され參加者は四百名の大きに達した。時の[illegible]一方には[illegible]の[illegible]者にして風に許可を担し、保護の[illegible]をなし[illegible]ガンガダール・チラクの如きが大いに活動に盡瘁し、國民の為めに努めたのであつた。其後一八九四年印度[illegible]印度人が[illegible]、[illegible]に[illegible]國人の[illegible]するが如き方面、即ち英國アングロインデアンより[illegible]る輸入綿布に[illegible]より[illegible]分の[illegible]に引下げ、印度内に作らせる木綿製品には内國稅として[illegible]分五厘の稅を課するなど、英本國の染工業を保護するが如き政策を採つたので、一部の非難の、印度民族の間に[illegible]ならざる利害を與へた事があつた。其後日[illegible]起るや、同じく印度人の思想を刺戟し、殊に日本が一度露國

與に勝つや、東洋人としての印度人の自覺心を[illegible]國民全し、一九〇五年即ち三十八年頃より印度人の民族運動は[illegible]硬化し來つたのであつた。之と共に當時印度總督たりしカーゾン卿が人為的に行政區劃を定め、ベンガル州を二分したるは[illegible]を喚し、大いに同州民の激昂を買ふなど、[illegible]に油を注げる形勢を誘致した。[illegible]回教徒は之がため[illegible]印度人の政権[illegible]を要求する[illegible]く なり[illegible]。一九〇八年印度事務大臣モーレー卿[illegible]現はれた。モーレー・ミントー卿の改革なるものゝ[illegible]に於ける立法參政院を擴張し、[illegible]より[illegible]以て[illegible]代表者を[illegible]つた。其に地方參政院に於ては官吏[illegible]しめるとか、[illegible]向に努めて來た。併しながら立法[illegible]の[illegible]な有せず、決議権を有つて居なかつた。[illegible]であり、リコンメンデーション[illegible]なるもので、[illegible]めて不[illegible]のものであるが、[illegible]改革を[illegible]せしめたことは一は英國自由黨[illegible]印度に[illegible]る、一面には印度に於ける民族[illegible]なかつた。但し之に印度人の[illegible]運動が[illegible]つたのは[illegible]の世良に[illegible]と見て差い と思ふ。蓋し世界大戰勃發すると印度[illegible]は、[illegible]國の為めに協

[illegible]
[illegible]せられた[illegible]
[illegible]あると信じた[illegible]ないことが[illegible]
し[illegible]巴人[illegible]や[illegible]人[illegible]以上[illegible]にもすれば僅き[illegible]する
に[illegible]興味はない。

第二、世界大戰に於ても[illegible]主義、民族自由と云ふが如きことが、聯合國政治家により[illegible]に鼓吹せられ、又印度人等に對しても將來自由を與へるが如き約束が度々行はれた。彼等は全く自由自主の觀念に捉はれ戰終るや夫々印度に歸り、盛んに民族自決を唱道した其影響の少くなかつたと云ふことは、何人も想像する所であらう。殊に印度に於ける印度人に對しても屢自由主義弱小民族の保護說等傳へられたのであつて爲めに戰爭中に於ては既に每年開かるゝ印度國民黨大會にも之が反映して居り一九一六年のルクノウに於ける印度國民黨會議では、印度の自治を要求する決議が行はれたのであつた。而して玆に注意すべきことは從來事每に行はれたヒンヅー回々兩敎徒間の爭議も影を潜め、共々に協力一致して此要求を決議せることであつた。斯く新機運の擡頭と共に英國政府にても、漸く考慮しない譯には行かなくなつた。是が爲め比較的自由主義を唱道して居た印度事務大臣モンテギュー氏は一九一七年十一月態々印度に

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]一九二[illegible]年[illegible]
りては印度政[illegible]の行政[illegible]に於ける、印度人[illegible]加し、又從來の立法參議院の代りに立法[illegible]兩院を以て之に當て、立法[illegible]院は成るべく人民[illegible]に依る議員を多數とし、以て民論を反映せしむることにした。併しながら、其決議に至つてはやはり他國の立法機關と異り、依然として從前の如く單に意見を具陳するものたるに止まり、所謂リコンメンデーションたるに過ぎないものであつた。又た一般印度官吏の任用制を改め今後は上級の官吏に於て先づ其三割三分までは印度人を以て之に充つることゝし、然も年々印度人數を一分半宛增加せしむることに定めた。次に所謂地方政治に就ては政治項目を二分し、第一は保留項目とし、第二を移任項目とし、保留項目中には、土地收入、裁判、警察等の項目を含み、之を人民より選ばれたる議員多數の存在するを得せしむることとしたけれども、移任項目としては、地方行政上民衆敎育衞生醫療等を數へ、此等は、地方立法參事會の人民選出議員中より大臣を選定して之に委し、又た地方[illegible]

る階段に與へらるるに至つた。而して此政治改革は從來の制度に比すれば、正しく一步を進めたには相違なく、印度人の政權要求に對する政府側の回答として行つたものに相違ないけれども、然もそれには到底新しき思想に捉はれたる印度人を滿足せしむるには至らなかつた。そこで兩派印度志士は中央たると地方たるとを問はず、完全なる立法權を印度議會に與へんことを希望し、且議會を以て常に意見具申に過ぎざらしむる制度に反對し、又總督に於て否決し得べき項目の極めて少なかつたることに不滿を表し、此際に於ける立法權の擴張を當局に陳情して居たのである。今日の見地より見るに、尚ほ印度議會が如何に消極的な態度を執つて居るかを見んとすれば、一昨年のデリーに於ける印度立法會議の議事に見るも明かである。同議會に於ける議事は第一に東阿弗利加に於ける印度人の居住權を確認して政府に迫り、次ぎに英國印度政府が言論出版取締を緩和することに對し要求を容れしめ、又た英帝國會議に於ける印度代表に選議に於て要求すべきものなることを決し、又印度の行政官職に於て特に印度人を採用せんことを望み、是等に對して陸軍命令になき事を要し、且さしめんことを希望するのである。而して其多くは昨年十一月より十二月に行はれた總選擧に於て其以後に於て、大に論議せられ居ることを看過せられてはならないのである。

何となれば現在の印度立法議會は昨年十一月總選擧の結果として、多數の自治派議員を選出した姿である。即ち目下印度立法議會の議員數は百四十五名であつて、中四十名は政府任命の議員であり、百五名は人民の選擧に依る議員である。然も選擧議員四十五名は極端なる自治派にして、穩健派と稱する十八名も亦熱心なる自治派である。此兩派は本年一月會議開會前に提携することを約し、兩派六十餘名中心となり立法府に努力して居る。本年一月に於ける同議會の開會するや、第一番に議員ランガチヤリアールは、外交軍事等を要求すると云ふ如きものは當分之を除外するも、印度の內政に關し中央政府を監督すと云ふが如き問題に關聯しても、印度立法議會をして完全なる任務をらしむべきものであるとの決議案を提出した。而して其後他の修正出で修正された自治派中の極端派の一人と見らるゝモチラル・ネール氏の修正案が出た。其案の內容は、印度政府は現在の印度政治組織を改革し、完全なる責任政府を印度に確立する爲め、圓卓會議を召集すべしと云ふ要求案であつた。之は云ふまでもなく現在の印度政治組織を不當とし、印度人に印度統治の權限を完全に得せしめんとする印度人の輿論の代表的の發言であつた。而して此修正案は印度立法議會內に於て實に反對四十八に對し賛成七十六票の多數を以て通過したのである。換言すれば

[illegible]

[illegible]もはそ[illegible]に[illegible]の[illegible]は[illegible]みにふさ[illegible]

行に[illegible]とになつてゐる。即ち[illegible]に於ける[illegible]する[illegible]に、[illegible]一九一八年のベンゴール法令等[illegible]の[illegible]法律を不當とする決議案を通過し、且つ[illegible]大赦[illegible]を要求する決議をも通過したのである。以上は中央議會のことであるが、地方議會就中ベンゴール州議會の如きは自治派領袖ダス氏及其味方が同議會選擧に於て勝利を得るや、ベンゴール州知事リットン卿はダス氏に對し、ベンゴール州總理として政務に當らんことを求めた所、ダス氏は斷然之を拒絕せるのみならず、其後當にベンゴール政府に對し事毎に衝突し、本年四月に入るやベンゴール內閣大臣の給料支出を悉く拒絕し、爲にベンゴール州諸大臣は無給で働かなければならぬ有樣となつた。然も印度政府側と議會との衝突は之れのみに止まらず、爲に在印度二千の英國官吏は政務の執行に於て、非常なる困難を繼續しつゝある有樣である。吾人は印度議員等の此行動を以て必ずしも是なりとは斷言しないが、唯斯の如き態度を執りつゝあるものも、要するに印度人の自治權を完全に獲得せんとする目的にあることを忘れてはならない。

然るに印度人の覺醒狀態は獨り議會のみでない、議會以外に

[illegible]

[illegible]ガンヂー[illegible]心人物で[illegible]法律を研究した[illegible]居たが、[illegible]する以外に[illegible]く[illegible]居る。所[illegible]年の[illegible]後印度に[illegible]り、[illegible]居たが、其中途南阿弗利加に印度人[illegible]の[illegible]事件があり、彼れ南阿に渡航し[illegible]事件は[illegible]かに落着したが、然も南阿弗利加に於ける印度人迫害の狀態を見て[illegible]く能はず、南阿に滯留しそこで彼等を指導して南阿政府と對抗し、南阿政府が印度移民の指紋を取り、其他種々なる迫害を實行するや、之に對し南阿印度人をして受動的抵抗運動を開始せしめた。其運動は相當に成功し彼の名聲は印度本國にも高くなつたのである。其後[illegible]來後印度に於て盛に非協力運動を爲して、[illegible]印度政府とも協力しないことに依つて[illegible]に當て、居るのである。即ち力に依る壓迫に對して[illegible]力に依る[illegible]力を以つて抵抗しやうとは彼が呼號して居る所である。彼の非協力運動が最も盛んになつたのは一九二一年即ち一昨年頃であつて、ヒンズー人と云はずマホメット教徒と云はず、彼の下に走

るの有様であつた。彼の取つた非協力運動の形式には同盟罷業もあれば、或は英國の製造する衣類の使用に反對運動を起し、或は英國商人を困惑せしむる爲め英人の商業に打撃を與へ、又警察陸軍等に加はる印度人に對して、英國に對する信從忠誠の念を失はしむることに盡力した。其他彼は印度人をして所謂政府と一切協力せしめざることにより、政府をして其過を改めしめ印度人自からの政治を實現せしむる捷徑と爲さんと企圖して居るのである。

尤も彼の味方は必ずしも彼が指導する範圍に行動を限ることを肯はず、時として警察官殺害を爲すこと等もあつた。就中一九二二年二月チャウリーチャウラに於て、二十餘名の警察官虐殺事件があつた後、政府は之が責任をガンデー氏に及ぼし、ガンデー監禁の策に出づることゝなり、遂に同年三月彼は裁判の結果六年の禁錮に處せられたのであつた。併し入獄中と雖も彼の味方の活動は形式こそ變れ、決して絶滅はしなかつたのである。所が彼は本年二月刑期未だ三分ノ一に達せざるのみであるが、許されて出獄し再び印度の自治運動の中心人物たらんとしつゝある有様である。今後彼の活動が如何に發展するか不明であり、又彼と頗る近く、然かもこれと異り議會に入つて居るダス氏其他の自治派との關係が如何に行くかは、尚今後の問題である。尤も吾々は彼等の内容が多少異ふに拘らず又彼等の間に多少程度の相違あるに拘らず、其根底に於て彼等の運動は、民族としての覺醒を表徴するものであつて、それが今後印度の政治及び英國の政治に大なる影響を生ぜんとする傾向あることは、殆ど疑ひなき所である。

六

以上は印度の大體に就て述べたのであるが、今吾々が此項目を論ずるに際し一言を加へんと欲する所は、印度に於ける民族的覺醒の機運を助長した原因の一に、彼の移民問題が存することである。何故ならば印度人が帝國臣民たるに拘らず、英國領土の在る處に於て迫害を被り、最近に於ては英國中央政府の直轄とも見るべき東阿弗利加即ちケニヤ植民地に於ても、印度人迫害の起らんとせることが、大いに彼等を刺戟した事實は之を如何にしても忘れてはならぬ。然のみならず又帝國領土たる加奈陀に於ては印度人は直航汽船を以て印度より直航するにあらざれば、入國は出來ないと云ふ法律によつて入國を許されない爲め、目下在加奈陀印度人數は大減少を見、僅かに一千二百人しか居ない有様である。又濠洲にては歐洲語五十語を讀み得るものに限り入國許可を與ふとの教育資格を規定してゐる。然も此法律を

[illegible]人に[illegible]して、[illegible]せし得ずと思はるゝが如き困難たる試驗のみの、[illegible]を試驗に科して落第せしめて居る。爲めに在留印度人は二千人足らずの現狀である。所が最も甚しきは南阿弗利加であつて、曾て南阿弗利加にては印度人に對して指紋を取ると云ふが如き法律を通過して罪人扱ひを爲せるのみならず、今日にては南阿聯邦に於てナタル州に在住する印度人は、其聯邦の一なるツランスバール若くはオレンジ州に移住するの自由を禁止せられて居る。又新入國民に對しては非常なる難關を設ける等の爲めナタルの印度人は逐日減少の姿である。殊に甚しいのは最近ケンヤ植民地に於ける問題で、ケンヤ即ち東阿弗利加は夙に印度人の移住せる所で其數は白人の九千名に對し二萬二千を數へて居る土地なるにも拘らず――戰爭中印度人は英國軍隊に加はり盛んに奮闘しケンヤに赴いて死傷せるもの亦多數なりしに拘らず、ケンヤに於ける上等の土地は白人にのみ占有せしめて、印度人には劣等地域の外之を購買若くは所有することを許容せぬ有樣である。斯の如く自己が臣民たる關係の英帝國領土に於てさへ種々の侮蔑と差別的待遇を受くることが、印度人に一大刺戟を與へ、それが民族向上の運動を激成するに大關係あつたことは、吾々の忘れてならない點であると思ふ。

七

以上は不十分ではあるが[illegible]、[illegible]も政治的方面に現はれた[illegible]である。[illegible]波斯、阿富汗斯坦、[illegible]く之を[illegible]き、英國と深き關係を有する此等[illegible]如何たる關係を英國と作るべきか、所謂自治派が進まんとする道筋が、果して最も賢明であるか　其呼號する政策が大局から見て最善のものであるかどうかは第二義的に思考しなければならぬ問題であると思ふ。蓋し埃及人と印度人の現在の狀態が、果して完全なる獨立國として内憂外患に堪え得るかどうか、無論多少の疑問なきを得ないのである。併しながら其末節枝葉は兎も角も、戰後吾等の東洋諸民族を通じて行はれて居る自覺、それが順序正しい方法によつて居るかどうかを別とするも、國民的統一を圖り、國民的向上を期して、政治的に社會的に然かも精神的にも覺醒し、對等の地位に立たんとする熱望に燃えつゝあることは、將に吾々の看取しなければならぬ點である。而して此事實こそはやはり同じ黄色人種たる亞細亞人の吾々に取つて興味ある問題として殘るものではあるまいか。勿論吾々は今日に於ても又た遠き將來に於ても、黄白人衝突と云ふが如き慘憺たる人種軋轢を希望

する譯ではないが、少くとも有色人種たる亞細亞人種が大いに自己の地位を高め、其の國民的人格をして現在の[illegible]一層せしむることは極めて必要なる事柄である。此點に就て吾々黄色人種は或程度に於て互に共助し合ふことが必要ではあるまいか。斯く考へ來ると、吾々日本人が、從來白人に對して排斥處

讓之に從り、他の有色人種に對して[illegible]みざるが如き[illegible]ことは許されない[illegible]。今人種問題の勃興せる秋に當つて、吾々亞細亞人の自覺せる先進たる日本民族は、其等の人種問題のために同じ亞[illegible]の[illegible]人に對して、大いに之を喚起するの[illegible]あらねばならぬと思ふ。

食料問題と營養の觀念

井上正賀

一

吾々の日々に攝取するところの食物は必ずしも、悉く、生活的[illegible]發現のために、有効に消化せられるやうに考へると、それは大なる間違である。吾々が攝取する食物の少くとも、この約一割以上は、[illegible]の消化[illegible]を通過して大便に混じて排泄せられるのである。今、假りに一人一ヶ月の食費を十圓と見積れば、一ヶ年百廿圓となる。之れを同胞七千萬人として計算すれば實に一ヶ年八十四億圓となり、この一割は十六億八千萬圓となる、此巨額の食料はもし、[illegible]の[illegible]を有して、健全なる消化を遂げ、少しも[illegible]のないやうにすれば、有効に用ゐられるのであるが、[illegible]、[illegible]ただに、無益に消化せられるのみである。この[illegible]も、[illegible]の際に非合理的な不消化物を食して、一方胃を弱からしむると同時に他方に於いては、[illegible]作用を阻害するのである。即ち、その損失は二重になる。而して、[illegible]代の[illegible]に、[illegible]に[illegible]商せらるゝ[illegible]に[illegible]のは[illegible]であるから、[illegible]はこれ以上に見積らなければならぬことを忘れてはならない。[illegible]

二

抑々、胃腸病の原因は先天の缺陷ではなく、種々なる事情が綜合して起るのであるけれども、その事情の中で、最も有力なるものは食物の關係でなくてはならぬ、何しろ、胃腸の本職が食物の消化吸收にある以上は、その食物の選擇、分量、攝取の時期等の關係に依つてその影響を蒙むることは云ふまでもないことである、されば、國民が合理的の營養の觀念を有して、保健的に、若くは經濟的に有効に日々の食物を攝取することは一方胃腸を健全にして、食慾を全ふし、而して、仕事の能率を擧ぐると同時に經濟上、大なる無駄をはぶき國力增進に寄與すること決して少くないと云はねばならぬ、多くの人々は、我邦には年々數十萬の人口が、增殖する、食糧が不足する、物價が騰貴する、海外に國民の排泄口を見出さねばならぬとて、頻りとアセつて居るけれども、そう、むやみに、他國の領土に押し寄せらるゝものでもなし、また、天は決して食なきところに人を生まぬと云ふ眞理もあることだし、吾等は深く內に顧みるところがあつて、農產物の增殖、地力の增進、未開地の整理を爲すと同時に國民一般に合理的の營養の觀念を養ひ、以つて餘

三

ところで、此の營養と云ふことは、中々六ヶ敷い問題で、現に國立研究所もあつて、專門の學者がそれに當つて、研究の結果を時々發表されては居るが、營養の學理は理論や實驗の事實とはその趣きを異にし、學理を事實にすべきものではなく研究所の研究發表せるところのもの悉く本當とは行かない、現に學者でさえ、大いに意見を異にする點もある、其の他の學者の意見とて必ずしも一定して居ないし又現在ではヴイタミン說の出現などに依つて營養に關する學說、日に益じ月に進む有様である、何しろ、營養のことは他の學術とは異なり、各人の同様に有する身體に直接に影響するものであるから、誤まれる學說は直ちに目前に現はれるので、幾ら千萬の理論があつても、それを說明する人それ自身が不健全のやうでは、以つて、その說を信賴することは出來ない、從つて門外漢はその去就に迷ふのは當然であるが、然し、各人にはそれ相當の常識と判斷力があるから、それに依つて、自から合理的の營養に關する智識を得て、自身に應用せねばならぬのである

四

適當なる營養を攝取すると云ふことは、勿論、單に美食をすると云ふ意味ではない。所謂、從來粗食と稱せらるゝものゝ中にも、有効なる營養分を多量に含むものもある。されど、元來營養と云ふことは、人體を本位として論ずべきもので、たとへ、人々の營養の價値は同一に語られてあるとは云へ、年齡、體質、體格、健康、習慣、職業、男女の別、嗜好、氣候、思想等に依つて自から、食物の種類を異にせねばならず、甲の人に適當な營養も、必ずしも乙の人に適當なるものと云ふことは出來ない關係がある。されば各人各様にその適する營養があるべきものであるから、本當を云ふと極めて複雜なる問題となる。例へば、現代では牛乳は一般の人々に營養價値が多いと云ふので、多く人々に用ゐられて居るけれども、これは大人に就いて云へば間違つて居つて、牛乳の最も適するのは自然の營養から云ふと小兒であつて大人の營養ではない。況んや大人には必ずしも適當な食品とされてはない。人間の中でも牛乳のみで生育し得るけれども、大人には不用の成分があるし、また、成分の足らぬものがあるから、牛乳のみにては健康を保てないのである。

之れは一例に過ぎないが、すべての食品にはかゝる關係がある。されば、吾等は出來る丈け種々なる食品の成分や性質を研究して、各人の體質に適するやうに長短相補ふやうに種々調和して食せねばならぬのである。その調和宜しきところに健全が宿り、營養が伴ない、經濟が伴なふのである。即ちお互が有効に、而して經濟的に營養品を撰ぶと云ふことは、成分の長短を相補ふて可、不足なからしむることである。それには、米なり、麥なり、粟なり、牛肉なりの植物や成分若くは作用の食料を究むるの必要がある。

五

近來、ヴイタミン説の唱えらるゝに至り、從來の營養觀念が殆んど一變せるかの觀がある。これは、營養上に一新紀元を劃すべき價値のある事柄ではあるが、また、これに關しては種々の問題も多く、恐らく、ヴイタミン以外の營養素の研究も發見せらるゝ時期も遠からぬ。ヴイタミン説の流行になるに至つて、これが、生食の爲めに始めて注意せられ、されば生食と云ふことが頻りに問題にせらるゝに至つたのは、大いに注目すべきことである。生食は病菌や寄生蟲を恐るゝ點から、未だ多くの人々の忌避するところであるけれども、生食に依つて、ヴイタミンを攝取する

ことをければ、[illegible]生命を[illegible]る事生ずるの負担なからしめ、食品の[illegible]を増大し、消化を助長にし種々なる作用なる辞のあるのは争ふべからざる事實である。生食と云ふても、必ずしも生米をがり〳〵と噛むと云ふ道でなく、只、成る可く魚肉を刺身や、酢漬にして食するとか、漬物とか、キャベージ、果物、西瓜、胡瓜もみ、トマトーなどの生食を高唱する意味である。ビフテキなどは西洋人の喰ふのは八分通りは生食である、生食は今更、特に述べるほどの新しきことではなくとも、従來、あまりに黴菌や寄生蟲を恐れ過ぎた結果、寧ろ生食を否定して、多くの食品の營養價値を減ぜしめ、或は不消化にならしめたことは所謂る誤まれる學說の結果と見做すべきものである。

六

抑も靈妙なる人體の營養のことは、極めて、複雑なる種々の關係に依つて定むべきものである以上は、徒らに試驗管や、分析室や、猿や、モルモットや、鼠や、鶏などの試驗のみにて解決すべきものでなく、また、達觀的にも觀察せねばならぬ、太古吾等の祖先は決して研究に依つて食物を定めたのではない。只本能的に米や、魚や、種々なる野菜や、海藻や、果物を食することを知つたのであるまい[illegible]を[illegible]に[illegible]ないと云ふのは、現に化學の指示する、蛋白質、[illegible]、脂肪、ヴイタミン、礦物質、カロリーのみを[illegible]に之れが答を考として、山海に産する千差萬別なる自分の嗜好に適するものを巧みに調和して食することが必要だと云ふ意味である。例へば、現代人は永き習慣から、あまりに米食に重きを置き過ぎる、吾等は一粒の米を食せなくとも、玉蜀黍や、麥や、馬鈴薯や、甘藷などをその代用としても生命に別條はない、却つて、米飯の過食が人々の胃腸病の主なる原因をなして居る位である。

大體に於いて胃腸病それ自身が、不調和の食物から來るので、吾等がもし、穀類や、野菜や、肉類や、果物や、海藻や、魚類を人々の體質に應じて適宜調和して食して居れば、自から消化力も健全になり、少しの無駄がなく、活潑なる體力を得て、充分に活動が出來て、國家經濟に寄與することも大なるものとなるのである。すべての食品は或る程度迄はその成分が互に代用される樣に出來て居る。露西亞の兵隊が獨逸の國境に侵入して、折柄路傍に實れる林檎の實を食して十數日の生命を保ち、而して體力旺盛であつたと云ふ有名な話がある、林檎のみにても尙

かゝる作用を持つてゐるのである。

七

すべての食品にはただ不明にして、然かも、人體に有効なる種々の成分があるのだから、人々は決して同一の食品を食せなくとも、その手近にして、安價に得らるゝ食品に滿足して居ても決して體力の衰へることはないのである。されば、かゝる觀念が國民の中に彌漫して隨時隨所に實行せらるれば自から食料問題は解決せらるゝのである。彼の先年、米價暴騰の際に大豆粕や、雜穀が高唱せられたのは、必然的の良きことであつて、吾等は常にかゝる點に注意する必要がある。かゝる雜食はこの調理法宜しきを得れば却つて胃腸を健全にし、徒らに便所に不消化分を放棄するの無駄をなくするのである。

これから、我等人は料理法に於いて、極めて無駄が多い、この一例を擧ぐれば、小魚や、鶏の骨や、すべて魚類の腸を放棄するのであるが之れ等は何れのものよりも却つて種々なる有効なる成分を含み、カルシユームを含み、ヴイタミンを含み、ホルモンを含み貴重なる食品である、されば之れ等は適當に料理して食すべきである、單に東京市中のみについて見ても毎日、其他の魚貝で放棄する食品として有効なる骨や腸などの量は夥だしいものである、これを全國に見渡れば如何、北京の話は殊に居ると云ふが、これは、支那人は我邦人よりも、寧ろ本能的によく、食物の營養價値を知つて、ムヤミに人間の食物とするに足る部分を放棄しないからである。豚の如きは爪や、毛を除くの外は全部支那人は食用に供する、上海などの市中を歩くと頗度我國でカマボコを造る時のやうに庖刀でコツ／＼豚の骨を碎いて居る、これは步骨の肉と混じ、餃子などの餡に用ゆるのである。

支那料理の進歩して居るとの評のあるのはこれは一面から見れば天然の食物の利用法が進んで居ると云ふ意味である、無駄な支那で珍味とされて居るのに人々が顧みないところであるがそれは支那人が如何に自然物を食品として無駄をなさないかを示すものである。

由來、我邦は天産多く、あまりにゼイタクであつて、充分に以つて食するに足るものを放棄する傾向のあるのは大いに顧みて此の利用法を研究すべきであるが、かゝる事は少數のものでなく一般の人々がかゝる事に着眼して研究し、無駄のない樣にすれば、必ずや以つて年々増加する人口位の食糧問題など自から解決せらるゝと思ふ。

八

これ、[illegible]に於いて、イワシ、ニシン、クヂラ其他の魚介類にして人類の食糧として好適なものを惜氣もなく、肥料に供して居る。[illegible]肥料も必要であらう。されど、人間の食料となるべきものをわざ〳〵肥料にしなくとも、肥料の原料は他に澤山ある。肥料の問題と云ひ、食糧の問題と云ひ、我邦人は無駄な事ばかりして居る。もつと、內觀的に毎日自分の行ふて居ることについて研究し、注意すれば、人口增殖問題など決して患ふに足らぬ、元來から云ふと、我邦ほど天惠の多い國はない、成るほど、鐵や石炭は少ないであらう。然かし、多趣多樣なる氣候と、水漫々たる海が四方にある。アノ、果しなき、水天髣髴たる太平洋の水は多樣なる魚族と海藻を包藏して居る。先年から水產業は大いに高唱されて居るが、たとえ、陸のものは盡きることはあつても、海のものは盡くることがない、海は橫に魚族を包容すると同時に立體的に縱にも包藏して居る。吾等の陸に於ける糞尿、動植物の遺體の分解物若くは土地の礦物質は常に雨水の爲めに海中に洗ひ流されて、海藻の養分となり、海藻は魚族の食物となり、以つて無限にその繁殖を司どつて居る。多くの人々は我邦の現狀は[illegible]つて居るので、[illegible]る。されば、國民が[illegible]研究することを怠らないならば食糧問題など容易に解決が付くのである。

今次に營養上から見たる我邦重要食品につき[illegible]を下して、讀者の參考に供することにする。

九

一、米、　米は我邦で主食物とされて居るが營養上から見て、人々の考ふるほど効のあるものではない、況んや、白米は蛋白質も、脂肪、ヴイタミン等を含むこと少なく、吾等は米を食せなくとも他の代用食品に依つて却つて立派に健康が維持されて行くのであるが、習慣の力は今更ら如何ともすることが出來ぬ。○玄米は白米より營養價値の大なることは今や公知の事實であるけれども、習慣と嗜好上、之れ又如何ともすることが出來ぬ狀態である。我邦に胃腸患者の多いのは他の食品に比して多量に白米を食し過ぎるに依ると云ふことは爭ふべからざる事實である。されば、成る可く米食の代りに馬鈴薯、甘藷麥其他

の雑穀を混合する習慣を一般に付けるやうにすることは、経済からも、體質改造からも極めて大切なことである。大體に於いて欧米人は一粒の米も食せない、別段彼等の真似をする必要はないが、又米食にのみに偏する必要もなし、偏食は片食であり、雑食であつて、身體を健全に保つ所以でない。米に偏して過食するが爲めに身體を害するだけ養分が無駄に消費さるゝ弊は決して少なからざるものがある。

二、小麦と大麦　パンを小麦で造ることは何人も知つて居るが小麦は米とは、大いに養分を異にし、[illegible]でも、蛋白質、ヴイタミン脂肪等に富み、また、その消化も割合に宜しく、[illegible]、ウドン、小麦粉などは携帯に便利であるので、[illegible]である。大麦は[illegible]を多く[illegible]ので、[illegible]に良いと云ふことも[illegible]、[illegible]でも、その[illegible]は[illegible]の[illegible]を[illegible]、[illegible]に良好な結果を来たしのである、[illegible]麦飯を[illegible]のである、もし[illegible]内人に[illegible]のみを與ふれば[illegible]人は[illegible]する[illegible]もない、もし[illegible]内人に麦飯を與ふるのは[illegible]たからであるが、[illegible]は麦飯であるかせに[illegible]、[illegible]人[illegible]を[illegible]て居るのである。その何故であるかは主として麦の有する營養の性状と、その含める繊維や蛋白質が良好な結果を来たすものらしい、麦飯大いに奨励すべしである。

三、粟、稗、玉蜀黍、　これ等は、所謂雑穀と称すべきもので、人々は何んだか米よりも劣等視して居るがそれは間違である。その好野の粟餅が如何に東京人士に喜ばれるかは人々の知るところである。筆者の子供時代には玉蜀黍で育つたものだがその味は未だに忘れられぬ。

粟や稗や玉蜀黍などは何れも特殊の性状と養分を含み米と相待つて混合することは何れの方面から見ても極めて良いことである。

特に玉蜀黍は脂肪に富み、[illegible]に於てはこれを用ゐるのである。米[illegible]の農家[illegible]は大いに玉蜀黍の食用を奨励したことがある。それは、[illegible]食するのに[illegible]のかゝらぬものではないと云ふことであつた。[illegible]取つて来て、そのまゝ[illegible]て、[illegible]を付けて食ふと實に旨いのである。そして[illegible]は燃料になり、紙や縄の原料となり、かたがた米の代りに全國民が玉蜀黍を補充で常食とするとせばその利益大であらう。

四、豆と麩、　豆と麩は何れも、蛋白質、脂肪、ヴイータミン、

[illegible]ニユーム[illegible]のであつた、[illegible]一般人々[illegible]せず、[illegible]豚、鶏の飼料に供して居るのであるがこれは國民經濟上甚だしき損失である。

されば、吾々の食料として如何にせば適するかと云ふことが大分世人の注意を惹いて來たのであるから、恐らく、その利用の途の開ける時機も來るであらう、筆者にこれにつき一つの考案はあるが他日發表することにする。之れが解決したゞけでも、優に數十萬の人口の食料問題は解決さるゝのである。糠や麩には多分に纖維を含み、此物は消化し難いものだから食料の價値少なきものゝやうに、從來の學者は説明して居るが、それは間違で、之れ等の不消化纖維は適當に胃腸壁を刺激して消化液の分泌を促がし食物の消化を助け、胃腸を强健ならしむる作用がある、之れ等の利用につき識者の一考を促がす、貴重なる成分と性狀を有する糠や麩を家畜の飼料に使用せずとも、家畜には自から他に良好な飼料がある、

五、大豆、小豆其他の豆類　大豆が蛋白質や脂肪やヴイタミンに富めることは人々の知れるところで從つて、味噌、醬油を始め種々なる食品の原料に用ゐ、特に豆腐として消費さるゝ分量も少なからざるものである。

[illegible]して、[illegible]の時に、[illegible]に供すべきである、又小豆[illegible]は[illegible]分を含んで居る、研究の結果に依ると[illegible]ヴイタミンは大部分豆腐粕中に殘り豆腐には[illegible]ヴイタミンは含有して居ないのである、すべて我邦人は昔から[illegible]の觀念に乏しく、却つて人體に有効なる成分を含有する穀類や豆類の皮部、胚芽等を棄てゝ顧みぬ習慣がある、之は極めて、不經濟な而して愚かなことである、之れ等は適當の料理法に依り嗜好に適するやうにして用ふるやうにせばドレ丈けの利益があるか分らない。

小豆や、インギン、豌豆、蠶豆等何れも完全たる營養素を含み、極めて經濟的な良好な食品であるし、その栽培も極めて容易であるから現今より一層盛んに食用に供する風習を造りたいものである、而してこれ等の豆類は成る可く皮と共に食する習慣を養ひたいものである、

六、馬鈴薯其他の芋類、すべて芋類は多量の澱粉を含み穀類の代用に供すべきもので、馬鈴薯でも甘藷でも米、麥よりも寧ろ種々なる有効成分を含むのである、米國人などは一般から云ふと馬鈴薯を日々の食用に供すること極めて多く、恐らく、パン

を用ふる量よりも少なからぬ位である、従つて、その料理法の如きも數十種に上つて居る、甘藷は古くから九州、四國等では農民が常食に用ゐて居るので彼等はこれに依つて米食人よりも強く、健全で長命である、一般に鹿兒島縣人の體格の良好なのは甘藷を常食とするからだとさへ唱へられて居る位である、甘藷は、支那では不老長生の靈草と稱せられて居る何首烏に植物學上類似の點があり一種不明の有效成分を含めると考へられて居る、

七、野菜類、　大根、胡蘿蔔（人參）を始めキャベージ、茄子、胡瓜等その種類は數百種に上り従つて、その性状、成分が各々異なつて居るのであるが何れも穀類や、豆類や、肉類とは自から性質を異にし、以て食物の消化を助け、身體に必要なる鹽類物質を供給し、血液を清淨にし、血球に活力を増し、他の食品の如く一日も欠く可からざるものである、而して此野菜類はその纖維の木質化して食ふことの出來ない部分は更に別、柔らかなる部分は全部有効な作用を有するので、従來の如くムヤミに多くの部分を廢棄せぬやうにしなければならぬ、乃はち、その皮部なども、根の少し堅いやうな部でも、何でも細かに刻みて成る可く用ゆるやうにするがよい、昔時の飢饉時には、松の下皮や、木の葉や藁さへも食したと云ふことである、吾等の胃は習慣さへ付くれば尚ほ牛馬の食する植物でさへも消化することが出來るのだから、柔かい野菜など殆んど棄つべき所はないのである、却つて、普通に棄てゝ居る部分にヴイタミン其他の有効成分が多いのである。

八、海草類、　四面海を環らせる我國には昆布を始めとし海草類は實に多種多様で世界稀に見る豊富さを示して居る、[illegible]野菜とは異なり、栽培する必要もなく、その殆ど部分は自然に海より流れ來たり、只採集するの勞を煩せばそれでよい、海草は一般に沃度に富み、沃度は身體に極めて有效な作用を有し、現に沃度劑なるものもあり、血球の機能を旺盛にし、[illegible]を盛んにし、抵抗力を増す作用がある、昔から海草は[illegible]に効あると稱せられ、關西地方では關東地方より[illegible]常食とする風習んで從つて大坂地方の人[illegible]せらるゝとさへ唱へられて居る、ヒジキ、アラメ、ワカメ、モズリ、オゴ、淺草海苔等何れも相當ヴイタミン其他の有効成分を含み、たとえ、それ等が不消化の如く見えても、その實これを適當に用ひれば決して胃腸を害するものではなく、却つて大いに有用に供して効が多い。

九、果實類、　我國には未だ果實類をゼイタク品と考ふる人のあるのは遺憾である、果實類は概して、血液を清淨にし、血球

[illegible]を排すりあるを、[illegible]る果物の類の有効の作用は他のものに依つては代用は出來ない、果實を生活上の必需品と考ふるやうにならなくては我が人の營養觀念は誠に心細いものと云はねばならない、而して梨や林檎の如きものは皮も心も共に食するのがよい、種の中にたる部に極めて有効な成分がある、梅や桃の種の堅いのはマサカ食するわけに行かぬが歯で噛めるものならば食するがよい、支那人が常に西瓜の種を食するのは決して物好きで食するのではない、彼等は本能的に種の中に有効成分が含まることを知つて居るからである、されば葡萄の如きものでも皮も種も食するのがよい。

十、獸肉類　今より二、三十年前、その當時の煙草王たる岩谷松平氏は日本國民の體質改造の爲めに肉食を奬勵する目的で大いに養豚業を起した、而かし、肉食では體質改造などは出來るものでなく、失敗に終つた、肉食は適宜にこれを用ひれば元より有効だけれども人々の考ふる程効力のあるものではない、牛や馬は菜食のみでアノ大きな肉體を造るのである、元來筋肉は菜食のみにて堅實に造られ得るのである、決して肉食を價値のないものとは云はないが、一時我邦の人々に依つて肉食が唱導された[illegible]のだと云ふこと[illegible]ない、肉食さ[illegible]には悪い[illegible]知るのである。

而して、臓物の[illegible]成分を含むから大いにその食用法を奬勵すべきである、肉類の中でも鶏肉は最も營養價値多く[illegible]偉大の價格を有するから[illegible]の昔から本能的に鶏肉を用ひて居る、而して之れも臓物もよい。

十一、魚類、　世界中で魚族の種類や分量の多いのは我邦は實に其第一位である、吾等はこの無限の資源を控えて居るから、之れを巧みに利用しさへすれば人口増殖など何等の心配はない、魚族はその成分性狀若くは人體に對する生理作用から云ふても誠に絶好の食糧品であつて、吾等は益々その利用法を研究せねばならない、乃はち、その骨も肉も臓物も何も食用に供する工夫をすれば一方身體の改造に資し他方經濟上に益するところが極めて大である、之れを捕獲する方法が幾分進步したとて理論上も事實上も決して之れを捕え盡すことは出來ない、すべて物質は循環するから、陸上に引上げたる成分は常に又海に

酵ること尚ほ水の循環するが如くであるから心配はいらぬ。

十二、砂糖、　砂糖は體溫を發生するし、嗜好に適するから贅澤品のやうに思ふて、之れが消費量年々巨額に上り誠に國家經濟上重大な關係があるが、身體の生理上から云へば左程に價値のあるものではない、我邦人は、寧ろ、之れを使用し過ぎる傾がある、之れが爲めに、胃腸を害し、營養を空しく消費する傾もある、砂糖こそ用ひなくてもよいものである、寧ろ多くの食品の天然の美味を解する傾がある、酒は大古からあつたけれど砂糖を多量に用ひ出したのは近代のことである、之れは大いにこの弊を節減する必要がある。

十三、酒類、　之れについては大いに論ずべきことが多々、今茲に述べることは出來ないが、只營養上から見て適宜に用ゆれば種々の點から云ふて生理上頗る大なる價値のあるものたることを斷言するに止め置く。

十

以上は營養上必要食品について概略を批評したのであるが、要するに國民の各自が合理的の營養法を心得て日常の食品を取捨選擇して其の宜しきを得れば其の國家を益することは殆んど想像以外であらうと思ふ、而して、人間は之を一つの肥料製造機とも見做すことの出來るので一人の人間は日々體內より排泄する尿や大便の利用が一層よく研究せられ巧みにその大部分を肥料に供することが出來れば優に以つてその口を養ふに足るだけの肥料分を有するのである、悲しい哉糞尿の利用が未だ完成せられずその肥料分の大部分は徒らに空費せらるゝのであるから、將來一方口に入れる營養分が合理的になり他方に於いて體內より排泄せらるゝ肥養分の利用が精巧になれば幾ら人口が增殖してもその食糧問題は自から解決が付くのである、要は一層之れ等に關する學理上の研究が完成せらるゝことが必要と云はねばならぬ、徒らに悲觀するよりも此方面に向ふても大いに研究すべきである、空中窒素の利用、人造肥料の製造等の研究も必要ならんが、之れと同時に最も手近かなる糞尿の研究また見逃すべからざることである。

歐洲經濟の安定と露獨兩國

法學博士　堀江歸一

一、歐洲經濟の不安、不安の影響と其原因、露獨兩國の經濟的混亂、聯合諸國の對獨經濟政策、露國革命と經濟的結果、二、露國の對外債務聯合、露國の負ふ對外債務、露國復興に關する聯合國の計畫、ゼノア會議と露國、列國の主張と露國の反對、ハーグ會議、其他目的、信用並に債務に關する諸原則、三、露國と北米合衆國、國務卿の意見、クーリッヂ大統領の教書、一九二三年に於ける兩國の交涉、四、露國戰前の國債舊借、外國に於ける信用杜絕の危險、開戰以後の狀況、露國をして債務に當らしめるの道、五、獨逸償金支拂の狀況、償金輕減運動、償金問題と合衆國、二個の委員會、六、マッケンナ委員會の報告、ダウズ委員會報告の眼目、外債募集の勸誘、獨逸外債募集と合衆國の地位、七、ダウズ委員會と債權に對する保證、特種收入の規定、鐵道管理官の制度、償金支拂保管制度、新發行銀行の支配權、總務局の組織、宛然たる保護國の態果して獨逸人の忍び得る所か。

一

歐洲諸國の經濟社會が戰後數年を經過する今日に至つて、尙ほ其安定を得ず、依然として混亂、窮乏、不安の境遇に彷徨しつゝある爲め、其影響は北米合衆國にも及び、物資生產國たり、物資輸出國たる合衆國に打擊を與へること少なからざる趣きを示して居る。歐洲諸國の經濟的疲弊を訴へつゝある直接の原因の數年に亘る歐洲戰爭、之に伴ふ經濟上の損傷に基くことは論を俟たざる所であるが、其疲弊の跡の今に至つて、更まらざるのみならず、寧ろ次第に甚だしきを加へるは何故であるか。現に英國の如き最近兩三年間經濟社會は順境に向つたと稱される。如何にも輸入超過が或る程度に抑制されたり、海外幷に殖民地に對する投資が復活して、年々一億數千萬磅に上つたりする諸點は英國の經濟恢復を示す證左とするを得るが如くであるが、尙ほ一方に金利步合が依然として高いことや、金の輸出の自由が認められるに至らず、對米爲替の狀況亦戰前の程度

に恢復するを得さることとの諸點は經濟社會に存する暗影の大なるものであつて、不安の空氣は容易に消散するに至らない。經濟的恢復の道程に就いたと稱される英國であつて、尚ほ且つ然りとすれば、他の諸國に於ける恢復の如何に捗々しからさるものであるかは、之を知るに難しとしないであらう。而して斯く歐洲の經濟的恢復の遲々たる原因の一ッは戰爭兩國の經濟的混亂に存する、即ち露西亞は外國との經濟上の聯絡を制限されて、殆ど孤立無援の地位に困苦しつゝある一方に、獨逸がヴェルサイユ條約并に其後の協定に據つて、定められた賠償金の支拂を強要されて、通貨に、信用に、産業に、貿易に甚く打擊を蒙り、其れを攪亂して、以つて內國經濟上の振興を妨ぐるを得ないことに存するのは、何人も疑を挾む所はない所であらう。露西亞と云ひ、獨逸と云ひ、戰前に於て、國際經濟上に占めて居つた地位の重大なるものであつたことは、深く說明するを要しない。後者が物資の輸出國として、殊に歐洲に於ける輸出國として、前者が食料并に原料品の輸出國として、世界に此切なき地位に在り、一方に輸出すれば、他の一方に其輸出額と略相等しき數量の物を輸入國に就て、購入して、輸出と輸入と兩者の方面に亘つて、諸外國と經濟上の關係を結ぶことが、甚だ多かりしのみならず、此兩國の輸出入の行はれるに依つて、他國の雇傭を保護の供へる勞力を必要とし、之に對する料金亦他國に支拂はれたとすれば、此點に於て、他國の經濟を活躍せしめる所以と爲つたことも亦爭う可からさる所であつた

然るに歐洲戰爭は兩國の經濟に大なる破滅を來し、今や殆ど兩國をして自立再起の力なきに至らしめた。而して他の諸國は當初から兩國に對して、如何なる經濟上の政策を取つたかと云へば、獨逸に對しては、殊更に壓迫を加へることを主眼とし、露西亞に對しては、其赴く所に任することを常事とし、他に何ものをも試みなかつたのである。即ち先づ講和條約に於ける賠償金條項を勵行することに依つて、獨逸を出來る限り、窮地に陷らしめ、從來賠償金支拂の爲めに、殊に巳まなかつた獨逸産業上の競爭力を減殺するいたずらに各國の經濟上の利益を一致した共同的動作の原則であつて、此原則を行ふ爲めに、獨逸の國土に、國民の生活に如何なる悲慘事を生じても、之に對しては毫も意に介せさるの態度を執つたのであつた。

露西亞は曾に露國革命の國内不安の前、一年一個月餘の間は、聯合た聯合國の一員であり、聯合國は露西亞の所有する金なり。其産出する原料品なりの供給を受けて、各自の足らさる所を補うことに依つて、多大の便利を收めた。現に英國銀行の如き、一時露國から金貨の交付を受けて、其正貨準備を豐富に

し、一方に於ては其代償として露國の[illegible]する[illegible]を[illegible]つて對外[illegible]をしめた[illegible]するのである。然るに千九百十七年十一月露西亞の革命成就し、過激派のクーデターに依つて、從來國際間に承認された政府の倒壞するや、之に代つて起つた不秩序の國は全然世界から孤立せざるを得ざる狀態と爲つた。即ち此革命の結果として、組織された露國ソヴヰエット政府は他の諸國に行はれる文明的生活を支配するものとは全然異なつた基礎を以つて、政治上社會上並に經濟上の關係を律し、之を露國に行ふのみならず、廣く他の諸國にも擴充しようとするものであつて、共產主義的信條の下に、露西亞帝國並に地方政府の債務を廢棄すると共に、商工業銀行業其他の私有財產を沒收して、之を國有に移したのである。而して此廢棄並に沒收の政策は證券其他の形態に於て、財產を所有する露國民に適用されたのみならず、外國人にも等しく適用された。斯の如くして露西亞の共產主義的制度は同國だけの關係に就て云へば私人の契約に基く經濟組織を根絕し、從來文明國間に於ける國際信用並に商業上の交通の據つて維持された基礎を撼搖した次第であるから露國をして世界の他の諸國から孤立するに至らしめたとも亦已を得ざる所としなければならない。即ち諸國の露西亞に對して爲す所は、露西亞を承認せず、又通商を開始せざる[illegible]ならない。[illegible]しても、[illegible]には、露西亞に對しては、[illegible]態度が取られるとしたならば、斯る[illegible]の復興に大なる障碍を加へることは論を俟たない。露西亞政府が先づ外國に負ふ債務を廢棄し、外國人の財產を沒收したことが非であるか、諸外國が露西亞の行はんとする政治上の主義を排斥し、國際的關係から露西亞を排除して、以つて一種の報復を加へようとするのが誤りであるか、之に對する判斷は姑く之を留保し、兎に角露西亞が自ら孤立の地位に居り、又諸外國が露西亞をして斯る地位に居らしめることが國際經濟上に大なる障害と爲りつゝある一事は何人も首肯するに難しとせざる所である。

二

露西亞を斯る地位に置くことを以つて、啻に露西亞の爲のみならず、聯合諸國全體の爲めに不利であつて宜しく此狀勢を一變し、寧ろ進んで露西亞を國際經濟の圈内に導き來り、聯合諸國は債權國として、露西亞に有する既得の權利を擁護すると共に露國と通商上の關係を結び此の關係の結ばれることに依つて露國自身の經濟をも振興せしめなければならないと云ふ考へは次

第に世間の一部に廻り來つた。而して此の種の考へを實現する爲に、聯合諸國と波蘭との間に存する經濟財政上の諸問題を解決し新なる基礎の上に、兩者の關係を確定しようとする計畫は從來多くの機會に於て、試みられたのである。今此問題に關して、波蘭と債權諸國との間に行はれた交渉の經過を見れば何故に兩者の間に於ける協定が解決せらる可くして、解決されなかつたか、之を解決するには如何なる方針を以つて臨む可きものであるかの一斑が了解されるに至るであらう。問題は既に千九百十八年一月二十一日を以つて、波蘭政府の發布した外國債務廢棄に關する命令に始まる。即本令は十條の規定より成り、先づその第一條に於て「波蘭の土地所有者並に有價者の組織した商社に依つて發行された公債であつて、特に公表された目錄中に掲げられたものは千九百十七年十一月一日以後之を廢棄し、其の公債の十一月分利札亦支拂はれざるものとする」とし第二條に於ては同一の方法に依り、上記政府が種々の公債に對する附付金に與へた保證も亦之を無效のものとするとし、第三條に於て「然し之の外國債券は條件に、又何等の留保も附けなく、廢棄されるとし」叫第四條以下に於て、或る種類の債務に限つて、之を有效とする除外例を認めるに止めた。即ち同國の利害關係に於て保存されたものは、内國債一萬ルーブル以下の金額で而者の國民の所有に係るもの、國立貯蓄銀行に於ける貯蓄預金並に利子協同組合の所有に係る公債であつて、本令發布以前から所有することの證明されるもの等は何れも之を有效とし、更に定める所に依り、ソヴヰエット政府の債務に引換へることゝした。國家が其國民に負ふ債務を棄却することは、國家の權力を以つて、固より行うを得る所であつて、聯合諸國の間に於ても、戰後財政を整理する一助として、公債を廢棄することの可否は識者の念頭にたつたであらうし、英佛伊の諸國に於て、主張された資本徴集金制度の如きものも、小規模に而も大局に於て、公債棄却案を潤色した跡の拂う可からざるものありと認められる。然しながら外國債に對して、國家の一方的の棄却を行ひ得るか否かは、一個の問題であつて、之を行つたならば、必ず國際上に困難なる交渉を惹起せざるを得ない。波蘭政府が今回の處分に關連して、諸外國に負うに至つた債務は一國別にすれば、

英國	五、三七五百萬金ルーブル
佛蘭西	一、四九二
合衆國	五五三
日本	二四七
伊太利	一四

[illegible]七、六八一

[illegible]十八億[illegible]ルーブル[illegible]に所有せられて居るかは、[illegible]を、其一[illegible]は外國を債權者とし、[illegible]所有に係ると稱せられる。此外に民間の諸會社や、地方團體の外國に負う債務も二十數億ルーブルの多きに上るやに稱されるが、是れは公債廢棄令の外に在るものであるから、姑く措くとして、兎に角露國の戰前並に戰時に於て、外國に負うた百十五億三千一百萬ルーブルの債務が一片の法令に依つて、空しく廢棄され、一葉の廢紙と異ならざるものに化したとすれば、國際間の信用は全然地に委するのであつて、國際間の信用を確立し、以つて歐洲經濟の復興を謀らうとする見地から云つて、斯の如きは、何としても默過するを得べからざる所である。或は露西亞は之に依つて、共産主義の原則を國際貸借上の關係に應用したものとして、痛快を感ずるかも知れない。遠き將來の利害は兎に角、目前に於て殺到する債務の負擔を輕減するを得たとして、喜ぶかとも考へられる。然し是等は何れも短見者流の見解であり、又道理に基かざる發作的感情であつて、露西亞が世界の經濟組織に對する連鎖を絶つたことは、露西亞自身に取つて、大なる苦痛を惹起す所以と爲つた。露西亞の經濟を正常[illegible]

[illegible]できるか、[illegible]礎のみに基いたのではなく、[illegible]ことになつて[illegible]露國に有する債權を保全すると共に、[illegible]自國として[illegible]界を復興せしめ、露西亞の利益と共に、自國の利益[illegible]らうとする計畫の認められることは、疑う可からざる[illegible]る。

先づ第一に露西亞に對する國際的計畫は千九百二十二年一月のカンヌ會議に於て、一の問題となり、左の如き六項の決議が成立した。

第一、各國は他國内の經濟並に其政治の根本原則に關し、他に之を掣肘する權利を主張するを得ない、各國は自ら其欲する制度を採擇す可きものである。

第二、尤も一國を援助する爲め、外國の資本を利用するには、先づ外國投資者は其財産及び權利を尊重され、且つ其企業利得の確保されるを必要とする。

第三、右資本の利用は外國の投資を希望する國民又は政府に於て、左記の條件を任意に承認しない限り、實現されざるものとする。

（四）船舶其他公の財貨の締結し、又保管した債権並に将来の負担を否認し、財産差押又は押留の為め、外国の損害に対して、生ぜしめた損害の原状恢復又は之に対する賠償の義務を承認すること

（一一）商事取引其他の契約の公平なる履行を強制し、確保する為め、公正なる司法制度を確立すること、

第四、為替相場に関し、適当なる手段を講じ、一般に商品に対して、充分の保障を与へ可き財政上並に行政制度に関する條件を整備しなければならないこと、

第五、各国は他国の政治上の組織及び秩序を破壊するが如き、宣伝を為さゞる約定を為すこと、

第六、各国は其隣接国に対して、一切の侵略を為さゞる此旨の約定を為すこと、

即ち右の決議は会議が露国の露国に負ふ一般の債務並に其他の義務に対して、如何なる方針を取らんとするかを明にしたものであつて、若し露国政府が此等諸問題、経済の復興に必要なる條件を確保する為めに、其正式承認を他国に與へられたならば、露国は必ず上述の條件を受諾する限り、其承認を與へないと云ふ意を示したものに外ならない。斯く一月六日カンヌに於き、総会議の代表者と露国政府の代表者との間に、前者の後者に対する六ヶ條件に就て、其両者の意見が一致をみたものは、即ち千九百二十二年四月十日から同年五月中旬に至るゼノア会議であつて、同会議は其目的の表示中に於て、其序論に於て、今日露西亜の経済を復興するには、関係諸国に於て、相当の援助を与へなければならないとし、其援助の方法として、英、佛、伊、日の諸国に於て、或は直接に露国の経済を復興する為めに、或は各自の国の諸商人をして為さしめる為めに、現に與へられ、又は将来に與へられ可き一切の援助を前提として、露国と各国との間に於ける関係の正常ならざる可き問題に就て承認し、其内の第一項に於て、露国政府又は地方官庁が嘗てソヴエット政府の露国に承継し、又は保証した一切の公債権に債務の承認すること、他の国の市場なる財産に付同の権利の恢復に関する為め、其債権者に露国に於ける旧外国人の財産に関しては、即時に何等の要求を為さざるものとすることを規定し、第二項に於て、露国に於ける外国の経済的活動を再興し、又外国人をして露国に於ける財産をして、其商業を便ならしめる為めに、露西亜ソヴエット政府をして、其行政に関して、其義務に関する条件を認定した後に、各者に於て損害を回復する任に当らしめることを約束した

[illegible]
債權國と見なさるる[illegible]
提として左の如き意見を述べて居る。

「若し露政府の債務に私人の要求を承認することが新政府の信用を復活する爲めに、外國資本の協同を得るに必要であると云ふ主張は多數の外國資本家が債務問題の解決を待たずして、露西亞に協同的助力を與へた事實と矛盾するものである。故に露西亞に資本が流入し來るや否やを決するものは、債務問題の解決に非ずして、寧ろ露國政府が將來に臨んで、與へる保證若しくは外國に依つて、此政府に與へられる法律上の承認の結果として、露國の國際間に於ける地位に疑問を加へることに繋るものである。」

即ち債務廢棄の問題に就て、露國は飽くまでも頑强の態度を持するのみならず、聯合諸國の干涉并に封鎖に依つて、露國に加へられた損害に對して、賠償を求めるの意見を發表し、徐々聯合諸國と露國との間に、踰越す可からざる溝渠の存することを示したのである。

次いで對露問題に關して、聯合諸國の間に協議の行はれたのは、千九百二十二年の海牙會議であつて、同會議の報告書は私有財産に關するもの、公債に關するもの、信用に關するものゝ

[illegible]
[illegible]
第一、[illegible]の返還に關して、交渉し來る場合には、政府は之に應じて、政府の承認するに與へる條件を示すが、如何なる場合に於ても、之れを以つて其の原所有者とソウヰエツト政府との間に行はれる私人的約定の問題とするに止めること、又財産の原所有者に對する返還以外に、與へられる賠償は固より嚴に制限されたものであり、且つ露國政府は今日賠償金交付の責任を認める能はざることが露骨に主張された。委員會は之に對して「露國が此の會議に出席した諸國の信用を博し、又其協力を得るに足る形勢を作り出すに至ることに」の希望を述べて、結論に代へ、第二の債務問題に就ては、委員會は

「若しも露國政府にして信用を復興する單一の手段を盡すことを怠つたならば、他國政府の好むと好まざるとに拘はらず、或る時に於て、世界の信用に訴へる道なきに至るであらう。此の問題に對する吾人の要求は契約に於ける外國人普通の利害を擁護するの一事であつて、而して此の契約の條項たる、

國際間の決定に依つて、保障されたものである。一國政府の背負ふ政治上の變動に依つて、左右されるものではないと云ふ事實を示すのは、獨り各國の爲めに止まらず、他の各國の爲にも必要であり、又之に依つて投資に對する保護に使用に並で、該國の平和點に該國を導く所以と爲る、是等、條件が債務の大なる利得の爲めに、斯き條件に依つてなされることは各人の容易にする所である。

と關聯して、第二の信用問題に關しては、左の實際的根本の原則として、

第一、債務國政府は該國債權國の政府から、直接に何等の信用も得る地位に居らざること

第二、該國は既に私人資本を方途として、該國の復興に十分なる程に至ること

第三、政府の資本に關し、即ち保護される私人資本の信用される法から、更に資本は之を共に、其等以外の代りとを得ること示さないこと

第四、該國は今後資本の移動を促し、以つて該國の發展に寄與し得るに必要なる條件が存するの必要を認めること　の四點に歸する。

三

從來合衆國は該國の經濟的復興問題に對しては、常に超然たる地位を固守し、ゼノア會議にも、海牙會議にも、其代表者を列席せしめなる希望を斥けて、自國代表者の會議を回避したのであつた。其結果たる、歐洲の會議に於て、屢々引用されんとした米國の一般的標準的用論に直面するの危險を避けようとする一方に、前大統領ウヰルソンの對外的政策以來、合衆國の該國問題に干與することを不利であるとする國論の喚起された結果と見る可きであらう。斯る態度を持續することは、結果して合衆國の爲めに損つて、得策であるかどうかは問題として、今更其の何時までも此超然的態度を固守し得るや否やは一個の疑問であつて、殊に對獨問題に就ては米國に於ける下院や、政府の關係に於いて、合衆國としては、其實際的關係を持つことを得なかつたのである。今後國の該國に對して、如何なる對策を持し、又如何なる方針に出るやを明にしたものは、千九百二十二年七月同國々務卿ヒユーズ氏が會合の席上に於いて述べた所である。同氏は先づ、合衆國は該國に關する所の總く米國人の興想とする自由政治の精神に反することを指摘し、米國は歐國の自由なる政治的發展の保存に就ても、經濟的生活を支持し、此

[illegible]
[illegible]
於て、採用された革命的計畫に承認を與へたり、或國の自由なる狀態に於て生活する權利の恢復を妨げたりする意圖に用ゐるを得ないとし、進んで露國承認の問題に入り「承認は國交に對する誘引を意味する。隨つて承認には新政府に於て國交の義務に服する約束を與へることが必要の條件となるのであつて、而して其義務の内には、他國の領土内に於て、合法的に業務を行ふ一國人民の身體並に財産に對して、完全なる保護を加へること、他國は一國の領土に於て、其國に有害なる宣傳を行はざることが含まれる」と云つて、露國從來の態度を非難した。續いてクーリッヂ大統領が千九百二十三年十二月議會に與へた教書中にも、合衆國政府は國際的義務の神聖を承認することを拒否する統治團體と關係するを好まざる趣きを力說した。

之に對して同年十二月ソヴヰヱット政府の外交事務擔當者は合衆國政府に書面を送り、內國の案件に對する外國の非干涉を原則として、大統領教書に示された諸問題を協議することを提議したが、合衆國は之に對してソヴヰヱット政府にして合衆國民の爲めに、違に没收された財産を返還し、有效なる賠償を爲し、合衆國に對する露國の債務を廢棄した法令を廢止して、其

[illegible]
るに至つた[illegible]

四

諸外國と露國との間に行はれた從來の交渉が以上の如き[illegible]を經て、失敗に失敗を重ねたものであるとすれば、結局其端は露國の舊債務廢棄に關する主張と聯合國の舊債請求に關する主張と相容るゝ能はざるの一事に存するものと認めざるを得ない。

而して今、純乎たる經濟上の見地から云へば、露國の國際貸借は戰前戰時の債務を承認することに依つて、著しく不利の狀態と爲り、殆ど破產に近き窮境を招くに至ることは、顯著なる事實であつて、露國が帝政時代の債務を廢棄するに熱心であり此一事を除いて、他に經濟難なしとするが如き態度に出るのも或は共産主義の主張を全うする見地に基く所あるやにも認めらるが、同時に經濟上の便宜論に立脚して居るものゝ少なからざることが覗はれる。元來露國の國際貸借は戰前から有利なるものではなかつた。貿易外の關係に於て、外國に對する支拂額は

各種手數料　二六　百萬ルーブル

旅行者、在外公館費

國債利子	一八〇
市債利子	二二
政府保證債務利子	三九
事業上の放資利子收益	一〇五
合計	四四〇

の多きに上れるに對し、輸出貿易額は

一九〇九年	五二二 百萬ルーブル
一九一〇	三六五
一九一一	四二九
一九一二	三四七
一九一三	一四六
五個年平均	三六一・八

であつて、輸出超過を以つてしては、貿易關係外の債務を決済するに足らなかつた。然も年々若干の正貨が輸入され、正貨準備の増加が見られたのは、一に政府が機會の要す可きものある毎に、外國債を募集した結果に過ぎなかつた。隨つて斯く外國債増加し、外國に對する利子拂額増加して、益々國際貸借の自國に不利と爲る形勢の歴然たる事實を目前に見て、一方に外國に於ける信用の維持に依つて、外國債の募集、不如意と爲つたならば、此時こそ正に國際貸借の破綻を通して、内國經濟に破綻を惹起すと云ふことは識者の一般に指摘する所と爲つたのである。而して此問題が未だ解決されざる内に、歐洲戰爭と爲り、露西亞は其聯合國の一員たる故を以つて、外國債の募集に便宜を收め、旣に掲げた如く七十六億八千萬ルーブルの債務を加へること、爲り、其利拂に要する金額だけ正に國際貸借の狀況を不利のものたらしめたのであるが、一方に輸出入貿易は如何なる方嚮に動いたかと云へば、(單位百萬ルーブル)

年	輸出	輸入	入超
一九一四	九五六	一、〇九八	一四二
一九一五	四〇二	一、一三九	七三七
一九一六	四七六	一、七七七	一、三〇一

と云ふ數字に依つて、示されるが如く、年々非常の逆勢に陥り、開戰前に於ける輸出超過の勢の如き、全然之を拂うに至つた。而してソヴヰエット政府の下に於て、露國の内外に於ける金貨準備は次第に消失することゝ爲つた。即ち金貨準備中の約一億二千萬ルーブルはブレスト、リトウスク條約に依つて、獨逸に輸送されたのを手始めとし、一部分は西比利亞に於けるコルチャック政府に依つて、軍需品購入の爲めに外國に現送され殘る金貨もソヴヰエット政府に依つて、或は外國に於ける共産主義運動を援助する爲めに、或は千九百二十一年以後露西亞が或

[illegible]すべき事に、[illegible]されたとすれば、[illegible]
[illegible]に就て、今日世界に臨んで居ることは、之を[illegible]することにしとしない。此際に露西亜が債務承認の問題に接するとすれば、其經濟的實力に顧みて、之を拒否せざる可からざることは、露西亜として事情已むを得ざる所であり、露西亜に債權を有する諸國が何處までも債權を有效のものと主張するときには、露西亜は債務支拂の自働的に行はれ得るだけの經濟的援助を極めて輕易なる條件の下に、債權諸國から受けることの要求を試みて、之に對抗するであらうし、又此援助を與へる決心の債權諸國側に付かざる限り、債權回收の要求若しくは債權有效の宣言は幾度び債權諸國側に依つて、試みられた所で、何等の效果を奏さざることは、既往に比較して、異なるもののなかる可き道理である。

五

聯合諸國の對露債權問題に就て、私の論述した所は或る程度まで諸國の對獨賠償金問題にも適用するを得るのである。

獨逸がヴエルサイユ條約を始め、幾多の協約に依つて、聯合諸國に支拂ふこと、爲つて居る賠償金の義務や、其金額に就て

[illegible]
[illegible]
了したと云ふに、[illegible]までに[illegible]

(單位百萬金馬克)

金貨を以つてしたもの	一、八一七、五
物資を以つてしたもの	三、五五六
割讓地の國有財産を以つてしたもの	二、五五四
合計	七、九二七、五

に上るのであつて此外に聯合國占領軍の地方經費として、紙幣や勤勞の形態に於て、獨逸人の負つた負擔を金馬克に換算すれば、十六億乃至二十億馬克の多きに上ると稱される。更に千九百二十三年中に行はれた支拂額を右の金額に加算すれば、軍隊駐屯の經費に關する負擔は姑く別として、合計八十四億二千一百三十九萬九千馬克の多きに上つたのである。敗殘の獨逸が斯の如き巨額の支拂に當ることは固より容易の業ではない。正貨を以つて、支拂を行ふときは、其正貨を調達する爲めに、多額の紙幣を發行することを必要とし、其發行は通貨の價値を低落せしめ、爲替相場を不利ならしめ、斯くて經濟社會の混亂を大ならしめざれば已まない。更に物資や、割讓地の國有財産を以つて償金の支拂に充てれば、其れだけ獨逸の生産力を傷け、經濟復

国の力を回復せしめるに在る。内にも国家財政を維持するに足る適当なる財源を有せず。外に貿易外の収入と為る可き対外債権を擁せざる今日の独逸が右の如き支払を行つたことは。世界各国の驚嘆する所であるが。其れだけ支払の衝に当る独逸が経済上に於て。犠牲とする所の大なることは。命を[illegible]さるる状態であり。今日の儘を以つて進んだならば。結局独逸の経済生活は根本的に破壊され。単に賠償金取立の権利を有する各国が[illegible]の権利を擁するに過ぎざることゝ為るのみならず。斯く独逸の経済生活破壊し。其の財力の窮乏して居る以上は。其の各国[illegible]の経済の安定を妨げる一の暗礁たらざれば已まざるに至る。斯くて賠償金を軽減し。之を独逸の支払ひ得る限度に止めて。独逸の復興し。欧洲の経済界の安定する方策を促進したいと云ふ議論は次第に国際間に起り。千九百二十二年一月のカンヌ会議以来常に聯合各国の議題に上り。サー・ジョン・ブラッドハリー案。ボナー・ロー案の如き。有力なる解決案も提出されたのであつた。常に仏国の反対に依つて行はれず。遂に賠償金支払に対する保障を要求するの理由の下に。聯合各国軍隊のルール占領となつて。国際間の平和の脅かされることゝ為なしむるに至つた。斯くして千九百二十三年中は[illegible]賠償金の支払を殆んど停止[illegible]し。千九百二十[illegible]年七月から。千九百二十[illegible]年七月に至るまで。二回に分つて。国際市場に於て発行する公債を以つて。其支払を行うと云ふ提案も。公平なる国際裁判に依つて。賠償金の全額並に支払の方法を決定しようと云ふ独逸側[illegible]の提案も共に聯合各国側の拒否する所と為り。賠償金問題の前途は常に暗澹たることを免かれなかつた。

唯此際一道の光明を放つと見られたのは、従来賠償金問題に対し、欧洲経済の復興に対して、超然たる態度を持した米国が欧洲安定の一日も早く行はる可き必要を認めて、此問題に交渉を[illegible]するに至つたことである。即ち千九百二十二年十二月国務長官ヒューズ氏は[illegible]の下に、独逸の支払能力を査定する国際[illegible]を設くることを提議し、米国のボールドウィン[illegible]問題を[illegible]し、[illegible]八、[illegible]下に[illegible]たが、従来賠償金問題に就て、[illegible]国と英国の[illegible]解決を[illegible]めんと云ふことに就て、全く[illegible]ならず[illegible]両国も[illegible]国際[illegible]に[illegible]して、経済[illegible]に[illegible]する[illegible]、[illegible]専門家の[illegible]あつて、代表者の[illegible]に[illegible]ることと、[illegible]に依つて、同委員会の下に[illegible]ることと、[illegible]れ、[illegible]年[illegible]日[illegible]の[illegible]に[illegible]ることに[illegible]、[illegible]問題の[illegible]されることの[illegible]を[illegible]した時[illegible]千九百二十[illegible]

[illegible]會を[illegible]は獨逸の[illegible]を[illegible]定する委員會であつて、合衆國の[illegible]ウズ將軍が其委員長である所から、ダウズ委員會の名を以つて、知られて居り、他の一は獨逸の在外國財産を研究する委員會であつて、英國のマッケンナ氏の其委員長であるところから、マッケンナ委員會と呼ばれて居るものである。兩委員會共に本年四月報告書を發表し、殊にダウズ委員會報告は本年七月開催された倫敦會議の基礎にたてられた故を以つて、特に世間の注目を惹くもの大なるに至つたのである。

六

マッケンナ委員會の報告書は開戰當時幷に戰役に於て、獨逸の外國に有する財産の增減を調査することに力を注いだものであつて、千九百十四年に於ける在外財産を二百八十億金馬克に上るとし、一方に戰爭中對外支拂の決濟に供した高を百五十二億金馬克とし、此外に戰爭中、聯合諸國に依つて、差押、沒收等の處分に會つた高を百六十一億金馬克とし、是等二項の合計額に對して、在外財産の全部を支拂にたてゝ、尙ほ其足らざる部分は、戰時中內國に回收されるを得なかつた對外放資に對す[illegible]會に於て、[illegible]存する高に[illegible]るに過ぎざることを發表した。然るに[illegible]て、斯る在外財産を利用することの殆ど望まれざるは、[illegible]さるの次第である。

ダウズ委員會の報告は從來世間に發表された償金支拂問題に關する諸提案に比較すれば、其具體的であることを以つて、一の特色とする。然しながら之を實行するに就ては、聯合諸國側なり、合衆國なりに於て、大に獨逸の爲めに、資金融通の形を以つて、援助を與へると共に、獨逸に於て、諸外國の行はんとする財政監督に服從すると云ふ二條件の備はるものがなければならない。ダウズ委員會は償金支拂の行はれる源泉として、

(A) 普通の豫算に依るもの、

(B) 鐵道債券幷に運輸稅に依るもの、

(C) 產業債券に依るもの、

の三種を擧げたが、右の內鐵道債券並に產業債券は何れも外國市場に賣却しようとするものであつて、此外に鐵道株式の賣却幷に外債の募集も亦豫定されて居る。蓋しダウズ委員會の計畫を以つてすれば、從來の國有鐵道は之を株式會社の所有に移

し合社の普通株式百二十億金馬克は獨逸政府をして所有せしむるが、此外に發行される優先株式二十億金馬克の内、五億金馬克は之を外國に賣却し、尚ほ會社の社債券百十億金馬克も逐次外國に賣却することを期する。又一方に企業債券と稱されるものは、國内に於ける重なる産業を政府の力に依つて統一し、斯くて組織された財團の發行する證券であつて、此證券は賠償委員會の任命する受託者に交付され、受託者の手を經て、外國に賣却されることと爲つて居る。試みに各財源を通じて、償金の支拂に供される金額の年度別を擧げれば左の如くである。

（單位百萬金馬克）

	一九一五年	一九一六年	一九一七年	一九一八年	一九一九年
鐵道債券	二〇〇	五九九	五九〇	六六〇	六六〇
[illegible]輸税	—	—	二九〇	二九〇	二九〇
國庫債券	—	一二九	一五〇	三〇〇	三〇〇
鐵道株式	—	九〇〇	—	—	—
外國債	八〇〇	—	—	—	—
[illegible]引出	—	—	一二〇	九〇〇	[illegible]
合計	一〇〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

右の内外國債八億金馬克は新に通貨安定の目的を以つて、設立さるべき發券銀行の準備金と爲り、從つて償金支拂の基礎に充てられるものであつて、ダウェス案自體の除外とす可き所であり、此外に鐵道債券、産業債券、鐵道株式の如き、何れも外國に於て發行される證券であるとすれば、僅々五年間に於て、外國の[illegible]總額に依存する部分は[illegible]金馬克の多きに及び、年と共に更に増加する[illegible]、[illegible]き、通貨制度亦復興して、償金支拂の遣り繰りが付く[illegible]には、一に國債、[illegible]に依つて、[illegible]であるとしなければならない。[illegible]何れを[illegible]て、自國の經濟的復興に何等の損傷を及ぼさずして、[illegible]の代わりに[illegible]金[illegible]に[illegible]であらうか。ダウェス案自身に於ては外債を[illegible]場合に、[illegible]の[illegible]を[illegible]し。例へば鐵道債券に於ては、初年度の利子二分、第二年度の利子四分、外に[illegible]下[illegible]百萬金馬克、第三年度以後の利子五分を以つて利限とし、産業債券に於ては、初年度は何等、第二年度[illegible]分五厘、第三年度以後五分を以つて、利限とする以上は、歐洲金融市場に於ける[illegible]を以つてし、又[illegible]の信用程度から打算して、決して高き利率を以つて、[illegible]きものではない。此利率を以つて、右の如き債券を外國市場に發行して[illegible]なければ、[illegible]に於ては[illegible]行[illegible]し[illegible]得るか[illegible]たいが、[illegible]の

[illegible]の諸國に於て、外國に投資する[illegible]に生ずることは[illegible]論であるか。英國の如き、對外投資は行はれるに至つた國であつても、尚ほ自國の殖民地外に諸外國に對する一年の投資高は上記の如く僅に一億數千萬磅に過ぎないとすれば、其一部を割いて、獨逸の爲めに、低利の資金融通を爲すに堪へるかどうかに、一個の疑問としなければならない

唯從來の國際會議と今回又は今後開催さる可き會議との間に存する重大なる相違として見る可きは、今回以後の會議に於て、償金の分配併に受領に就て、何等の關係を有せざる北米合衆國の參加する一事である。從來合衆國が獨逸賠償金問題に參加することを回避したのは、會議の案件として、歐洲諸國に依つて對米債務廢棄論の提唱されることを恐れたものと見るが出來る。合衆國の國情は斯る議論を容れる餘地を存せざることと、今や歐洲諸國の理解する所と爲り、此點に就ては、合衆國をして意を安んずるを得せしめるが如くであり、合衆國が其獨逸に對して、償金の形態に於て、債權を有せざるに拘はらず、決然歐洲の會議に參加するに至つたのは、要するに對米債務廢棄論に脅かされる恐怖の存せざる一方に、經濟社會を何時までも不安の狀態に置くことの許されざる問題であることを認[illegible]

[illegible]衆國にあり、[illegible]に發行されたるに因つて、[illegible]に於ける市價の關係から云つて、合衆國市場に流入せさるを得ざるであらうし、又當初から合衆國に於て、多く引受けられるとすれば、結局今後幾年の間を通じて、獨逸の財政を左右する權力は一の合衆國に依つて、掌握されるに至るであらう。米獨兩國財政上の關係は兩國經濟上の連鎖を密接ならしめざれば已まないであらう。斯る狀勢の必然たる場合に、歐洲諸國は安如としてダウズ委員會案の實行を認めるであらうか。一個の疑問たらざるを得ない。

ダウズ委員會案に於て、一の注目を要するは、發行銀行設立の計畫である。此銀行は私立であるが、五十年間の長期に亘つて、特許を有し、拂込資本金四億金馬克を擁し、其四分の一は帝國銀行の財産を代表するが、他の四分の三は獨逸側に外國に於て廣く其應募者を求める計畫であり、其管理經營は次項に說明する如くであつて、多くの程度まで、外國代表者の干與を許す。割引貸付の如き、銀行の行ふ普通の業務に對しても、ダウズ委員會案に於て、種々の計畫が採用されて居るが、就中重要

觀す可きものは、
第一、政府信用貸は期限三個月以內、金額一億金馬克以下に限ること、
第二、政府に對する當座貸越勘定は之を爲すを許されざること、
第三、郵便[illegible]に對する信用も亦或る一の時期に於て一億金馬克を超へるを許されざること、
第四、銀行は資金支拂の準備を一億として、改定するも、一時の割引高は二十億金馬克を以つて、限度とすること、
第五、銀行は其特許年限內を通じて、銀行券發行の獨占權を持つ可く、從來帝國銀行の發行に係る銀行券は新銀行に於て、定められた規定の下に、回收消却すること、
第六、新銀行の發行する銀行券は無制限法貨の資格を有し、發行額に對して、其三分の一に相當する金額を兌換準備として保有すること
の諸箇が擧げられる。從來財政の破綻が銀行を經由して、信用の濫發を起した弊害の大なることに鑑みて、之を防ぐことに如何なる注意が拂はれたか、其一斑は以上の各項を通じて、之を窺ふを得るのである。帝國內上下の有志は何れも支拂の窮局に立ち至つて、今日に[illegible]を生ずるとの實を示す可きものの數年間に於て、新く種々の保證を約束された銀行を以つてして能く國家財政のために、[illegible]の爲めに、中央銀行たる職能を盡すに遺漏なきを得るや否やの一事であつて、或はダウズ委員會の爲さんとする所は一方の極端から、他方の極端に陷るものに非ざるかの疑惑を生ぜざるを得ないのである。

七

ダウズ委員會は彼のヴェルサイユ條約の如く、徒に獨逸を壓迫し、其國民的存立を脅かしようとする意思を有せるものではない。獨逸に對して、出來得る限りの經濟的援助を與へ、財政をして一日も早く自立せしむる能力を十分に有せしめることに努めて、種々の工風を凝した點は充分に認められる。即ち彼等は[illegible]つて、他の諸國に比くして、寛大的態度に出で、其經濟的特質を有すると稱した所以であるが、一方にダウズ委員會は獨逸に巨額の償債を負はするに足る計畫を立てたと同時に、他の一方に此償債を保たするに當て、[illegible]の所に、遺漏をなさなかつたことは、吾人の注目に値する所である。賠償の如き、現在に於て、又恐らく將來に於て、經濟的狀態の安定せざる間に向つて、償債の或る部分には、假令以て其償債から生ずる收入が[illegible]出して、償債の國際を保たならしめるを得るとしても、其れは

[illegible]することは代償者として、當然の問題であると云へる[illegible]委員會の立案亦此着眼點より來つたものと考へられるが、委員會は如何なる保證を獲得しようと試みたか。其保證を類別すれば、左の如き項目と爲る。

第一、ダウズ委員會案が一般會計に於ける歳入剩餘を償金支拂の財源に供せしめることは、前論の如くであるが、此剩餘を確實に生ぜしめる爲め、海關稅、酒精、煙草、麥酒、砂糖諸稅を以つて、五個の被監督收入(Five Controlled Revenues)とし總監督官并に副監督官を賠償委員會から任命し、一個の收入を一人の副監督官の支配下に置き、各自の手元に拂込まれた收入は之を總監督官の支配に移し、總監督官をして、直に償金支拂の用に充てしめる。而して租稅の收入が償金支拂の用を充すに足らずと考へられる場合には、總監督官は自己の義務として、收入增加の計畫を爲す可く、政府に於て稅法の改正を企つるときは、其以前に協議に與る權利を有し、帳簿文書を査閲する自由を有する。

第二、國有鐵道改造の結果として、組織される鐵道會社の經營は十八名の理事、之を擔當し、其内の四名は債券所有者に[illegible]る[illegible]の支拂を停止し、又必要と認むる場合に、賃率の引上を命ずる權利を有する。

第三、ダウズ委員會案の下に、償金決濟の爲めに行はれる支拂金は總て保管委員會に向つて爲されるのであつて、同委員會は六名の委員より成り、賠償委員會の代表者を委員長とし、他の五名は同委員會に於て、米、佛、英、伊、白國の代表者中から任命する。委員會は其受領する資金を以つて、現物を以つてする償金の支拂に用ひ、或は償金回收法の命ずる使途に充て、更に殘餘の生じた場合には、外國爲替市場に於て、獨逸通貨の安定を傷けざる限度に於て、外國貨幣に引換へること、

第四、新に設立される發行銀行は金融上并に財政上に於て、重要の機關であることは、論を俟たないが、其經營并に管理は如何なる制度の下に、置かれて居るであらうか。營業局の外に總務局(General Board)と稱する一の機關があり、七名の獨逸人并に英、佛、伊、白、米、蘭、瑞の諸國を代表す

るし名の外国人を以って、其委員とし、信権国の利害を保護する為めに偉大なる権利を持つ。殊に委員長は銀行日常の業務を監督し、銀行をして銀行券の発行并に準備金の維持に就て、法規に違はざらしめる注意を施すことと

斯の如く為れば、独逸の財政并に金融は殆ど其重要なる部分を通じて、総て外国の監督干渉に屈せしめられるものであって、或は独逸が聯合諸国に巨額の債務を負ひ、其決済の不定である場合には、止むを得ざる所であるとするかも知れぬ、現にダウズの委員会の報告に於ては、是等を以って聯合諸国の必要とする保障を得るに就て、最小限度の干渉であるとしたが、果して能く独逸人の忍び得る所であるかどうか。之を忍ぶとしても一時の窮状に迫られて、必ならずも服従するに止まる。他日に至って、如何なる異変を生ずることなきやは、今日に於て、推測の限りでないのである。ダウズ委員会案が如何に巧妙に作成されて居り、又独逸に財政的援助を与へて、然る後に償金を徴収しようとする點に於て、特色を発揮して居るとしても、根本問題はヴェルサイユ條約以下幾多の協定に依って、定められた償金の金額には、何等の手を触れず、其儘にして徴収を了しようとする點に存する。其金額にして独逸の支払能力を超過せざることとなるならば格別、其以上に、其経済の独逸に加へて、了

帖の結果を齎すに、疑を容れざる所である。而して一旦決定した償金額は前へ遡って少なくも一定不変のものとすることにした。仏蘭西の要求であり、ダウズ委員会案亦此不動の要求を念頭に置き、之に契約されつゝ、作成されたものであるとすれば、其弱點の此所に存することを、少なくも何人も疑はないのである。

現內閣が未だ手を觸れざる二つの問題

――貴院改革と農村振興

貴院改革と農村振興

石川半山

貴族院は明治二十三年に設けられてから、暫らくの間は、殆んど有れども無きが如き機關で有つた、唯政府案に賛成するのみで、議員は全く議事に不熱心であつた、華族議員の多くは低能で、議案が分らず、勅選の多くは、元老院の廢止と共に、其の議官が流れ込んだので、平生は缺席して、歳費だけ受取りに來る者が多かつた、然るに歳月は、貴族院を變化した、華族の代が變つて、若い人が出て來た、同じ低能でも、先代よりは多少の學問をして居るので、屁理屈を並べることを知つて居る、それに物價騰貴で、華族の生活難が與ふて來た爲めに、先代の頃は、上品で鷹揚であつた者が、悪るくコスクなつて、金と名譽の爲めに其の貴族院議員の特權を賣る様になつた、原敬氏は西園寺內閣と山本內閣の兩度、內務大臣に任じて居たが、常に貴族院に憎くまれて、少からず苦しめられた、それ故大正七年、自ら原內閣を組織するに當て、先づ貴族院を如何に操縦すべきかを考へ、研究會から大木伯を抜て、閣僚の一に加へ、更らに貴族院有力者の懷柔策を試みた、第一は日本銀行を初め特殊銀行や政府の御用會社の重役に周旋した、第二は內務、農商務其他各省の嘱託と云ふことにして、給料を與へた、第三にいよいよ止むを得ざる時は、現ナマで買收した、昔日も或る貴族院の有力者に、議員買收の價格を問ふて見たら、一票二十圓と

答へた、首相と一諍を致することとなり、下閣になるのだ、是れ原内閣以来、貴族院操縦の結果此に至つたのである、貴族議員が此の如く腐敗した所へ、歴代の内閣が、其の内閣に奉仕したる小役人を、勅選として投げ込んだので、勅選の存在も、非常に悪化して来た、殊に当時の法制局長や内閣書記官長や、次官や知事の古手を、ドシ／＼投げ込んだから、貴族院は而論の如くになつた、而して低能なる貴族議員が、名利に誘惑され、甚だの良くない勅選と結託して、度々要事に相容れ、利権を自得するに汲々とする様になり、其の傾向は加藤友三郎内閣時代に一進し、清浦内閣に至て、絶頂に達した、是れ貴族院改革の声の大に天下に高まつた原因である。

改正の具體案

改正するに就いて如何なる貴族院改正案を作つても、左の十ケ條に用ひ来るかも分らないが、左の七つの條項は、確かに問題となるべき者だ

第一　公侯爵議員の廃止　公侯の人は、全部議席に在つて居る、然るに世襲公侯爵は不熱心で、内閣と会議出席しても、相当出席した事が有るが、近来多く出席しない、徳川公と近衛公とで、未だ全く、議場に着いたことがなかつた、其の他公侯は殆ど欠席だ、大名華族で、公侯爵の出席者は至て少ない、政治に熱心にして其の與へられたる特権を放棄して居る事実に鑑み、無意味で、議席を與へることは、之を改める必要が有る

第二　伯子男爵の互選を廃止とす　貴族院議員の選挙には、選挙団体と云ふ名が有り、これで候補者を定めて、選挙するから、伯子た、大隈侯が伯爵の時代に、決して一議員に選ばれなかつた、故伯爵で前島伯の如き巨人も、貴族院へ選出されなかつた、之れは彼等の団の一種の関を以て、此等の巨人を除外にしたからである、これは単記制に改め、更らに選挙投票を修正すべし

第三　華族議員の数を減少　現在伯子男爵の数は、百六十五人で定員と仕て居る、これは多きに有る、其の半数に減少しなければならぬ

第四　多額納税議員の廃止　全然多額議員の選挙権と被選挙権まで居るのだから、特に之を貴族院に入れる必要がない、併し現今同は此の制度を作つた人に有るが、後年には此の事のなりしことを悔られ、貴族院へ多額納税者の代表を加へたのは失策で有つた、と言はれたことが有る、これは勅選議員すべき者を多額納税議員の中の島川勝太郎氏が、貴族院の改革を論じて、多額納税議員の廃止すべきを痛論されて居るのは、注意すべきことだ、

[illegible]

[illegible]

其の[illegible]有らう

第六　勅選の存在　勅選は[illegible]人物に限つて居たのが[illegible]、近頃の如く、歴代の内閣が、其の使用した小役人を持ち込む樣では、素質が低下せざるを得ない、各大學の代表的人物は勿論其他廣く民間の各種團體の代表を選む樣にしたい、新聞記者の如きも、其の代表と認むべき人物を勅選に加へるが宜しい

第七　勅選の年限　勅選議員を終身にしたのは怪しからぬことだ、年限は衆議院と同じく四年とするが良い、貴族院議員全體も四年に改める必要が有る佛國の大統領と同じく七年とは餘りに長過ぎる

來年の選擧に間に合ふ樣

貴族院の特權内閣を倒したる行懸りから言へば、現内閣は直ちに貴族院の改正に着手すべきであるが、成るべく貴族院と調和して、國務を圓滑に處理したいと云ふ色氣が有るので、恐らくは思ひ切つたことは行ひ得ないで有らう、六月二十五日に開いた憲政會大會の宣言にも、若し夫れ貴族院の改善に至ては、[illegible]

[illegible]

[illegible]に[illegible]

[illegible]に[illegible]て、[illegible]

其の選擧[illegible]有る、此の[illegible]議員に於て、[illegible]行うて置けば、それが直ちに來年の選擧の間に合うて、貴族院は一時に面目を改めることとなり、醜惡なる研究會も存在を消し一錢二十圓組の階級議員は、其の數を減少するで有らうが、若し此の機會に根本的改革を行ふことが出來なければ、貴族院の改革が、又延びて、それが國政の上に、悪るい影響を來すに違ひない、僕等は此の際、大に貴族院改革の輿論を喚起して、是非共來年の選擧に間に合ふ樣、改革案を實行させたいと思うて居る

農村振興

農村振興の聲は高いが、さて其の實行は、なか〳〵困難なことだ、全體現今の政黨は多く農民黨で有る、選擧法が直接國稅を納むる者に限て居るので、選擧民の多數は、農民で有る、議會開設の頃は、營業稅が未だ國稅でない上に、直接國稅十五圓

因たり[illegible]有つたので、[illegible]農民の大多数は農民を作つた。從つて從來は、[illegible]、[illegible]を押し立て、之れに依て政界を押し切つた。今日と雖も、多数の代議士は、農民の投票に依て選出されて居るから、農村振興論には盛なる反響が[illegible]て、政界に共鳴されて居るのだ。特に米價の安い時は、其の聲が猛烈に高い

農村疲弊の現状

農村が疲弊して居るから、振興策を講じなければならぬとは、今日農村の要求で有る。此の農村疲弊の事實如何は、先づ第一に大正[illegible]年と大正十[illegible]年の比較で、米麥の耕作段別が[illegible]減少した、第二に自作農が、前年[illegible]減少して居る、第三に小作農の貧困が増した。大正四年度に十四億圓の借金が、大正十[illegible]年度には、[illegible]十六億圓となつて居る。第四に田畑の價格が下落した、第五に田園を去つて都市に走る者が多くなつた、其他[illegible]の事實が、今日農村疲弊の事實を物語つて居る。

米價の下落

なるは其の原因は何かと云ふに、一に米價の下落に在る。小作爭議も一原因に相違ないが、これも米價が高くなつて、收穫さへ多くなれば、爭議は自然に止むのだ、米麥の價格が[illegible]なるが故に、作つても引き合はないので、種々爭議を生ずるのだ。ここに農民及び政黨の代表者は、米價引上げに付て、極力運動して居るが、さて政府[illegible]は、米價引上げ[illegible]た時は、消費者の側から、生活難の聲が高くなる、此の問題はなかなかデリケートで有る、生産者と消費者の利害が、全く相反して居るので、米が高くなれば、一般消費者が苦しみ、人心險惡になり、政府に向て米價の調節を迫り、政府は困惑して、外米の輸入を許して、人心の緩和に務めなければならず、米價が安ければ、忽ち農民疲弊、農村經濟の聲が高くなる、米價は上がつても下がつても、苦情は免かれないのだ、其故に、米の價格は、大分有力なる方面に迫つて居る、[illegible]を行ふの外は有るまいと見て居るが、現今の所に、[illegible]問題のためだ。

建議案の項目

農村の振興の方法として、第四十九議會に提出された項目は、第一[illegible]、第二[illegible]、第三[illegible]業法の改正、第四自作農の新たな創設、第五[illegible]

[illegible]經營を表ふとした所て、米價の問題は、[illegible]問題[illegible]た。米價の安い時に、輸入關税をかけたり、政府で大に買ひ上げたりして、米價を釣り上げると、社會的に騷動が起る、米價が低下すると、どうしても農民の苦痛は免かれない、昔は一般に豊年滿作を喜んだが、現今の農民は、自分の田畑ばかりが豊作で、外は凶作となつて、米價騰貴せんことを望んで居る、如何に自分の田畑が豊作でも、價額が今日の如く安ければ、生産費が高くかゝるので、一石に付て六圓も七圓も損をする計算になる、されば單に豊作ばかりでは有りがたくはないのだ。

救濟策如何

農村救濟策も色々有る、第一に清浦内閣は補助貨幣改鑄益金一億二千萬圓の利息年額六百萬圓を自作農創定及義務教育延長の補助費に充てる案を立てた、これは未だ行はれないが、一案に違ひない、第二は副業奬勵で有る、農商務省の調査に依れば、農家の副業は、養蠶を筆頭にして、三百餘種も有る、之を盛にすれば、農村は其の疲弊を免かれることが出來る、第三は農事の改良で有る、米國から機械を購入して來て、何でも機械で大農[illegible]械で收穫するのを實見に往かれる所であつた、[illegible]メントの郊外に於て、米作地を見た時、機械で刈り入れる所を見た、蒔くのも草を刈るのも、刈り入れるも、何も彼も機械でやれば、人は少くて間に合ふ、第四には肥料の問題だ、今の農村疲弊の原因の重もな者は、肥料が高いからだ、高い肥料を使用して、田畑を荒廢せしむることは、實に恐るべきことだ、昔は人糞や木葉で、十分に間に合ふて居た者を、一時の收穫の多いことを望むが爲めに、高い外國の肥料を用ひて、僅かに四五年で土地を役に立たない者にして居る、肥料亡國論も既に起つて居る、農民が此の點に注意したならば、其の經濟の上に、少からぬ影響を見るで有らう、其の外農村救濟策は、いくらも有る様だ、農務省設立とか、米輸入關税引上とか、地租を地方税に委讓するとか、種々の意見も有るが、農務省が出來て、農務大臣や次官や、立派な役人と、宏壯な建築の官廳が出來ても、それで直ちに農村振興が出來るとは思はれない、地租を地方税に委讓しても、財産税とか何とか、外の名義の税で取られゝば、

農民の手から出る食品は同じ事だ、外國米の輸入に税を課して、米價を引上げれば社會問題が起る、政府は一方ばかり見てやつても、決して良い結果を來すものではないから、農村振興策もいよ／＼之を實施することになると、なか／＼困難なことだ。

農業は一大投機

日本では農本論が盛で有る、市街地の人に此の説が多い、農民自身は、自らハア百姓だ、人間の食ふ物を作つてやるお百姓様だぞ、と威張つて居り 農業は最も正直な職業となつて居るが 僕は米國に往て カリフォルニア州あたりの米國の農業家が 農業は一大投機で有る、と言つて居るのを聞いた 彼等の説に依れば、農業は全くスペキュレーションで、これほどリスクの多いものは無い 第一に風害、第二に水害、第三に旱魃、第四に害蟲 此等の危害を免かれた處で、收穫が多いか少いか分らぬ、種を蒔いた時から、いよ／＼之を取り入れる迄の心配は 大變なもので有る、而して收穫した後に 市場の相場如何を見なければならぬ 其のスペキュレーションが非常で有る [illegible]高い時に賣らなかつて、[illegible]安い、[illegible]高い、[illegible]人[illegible]高い 日本の農業全般めく、作つた米を三年も自分の倉庫に貯藏して、相當と見る價格は 彼等には無い、僕は南加州地方を旅行した際、西瓜やカンタロープが畑にゴロ／＼腐つて居り、其の儘腐敗して居るのを見た 何故かと問ふたら、高い時に賣りそこなつた、採收費な位はないから、其儘にして居るのだと言つた、ジヤガ薯の豐作の年に、相場を高めるために、其の大部分を採らずに腐敗せしめたことも有るさうだ、日本の農業も、追々こんな風になつて往くことは有るまいが、一方に農商務省や農學博士連が日本の農産物を増加すべき方策を研究して居るけれど 生産過剩の結果は 餘り價格低落を免かれない されば現代の農民が、生産の多きを望みつゝ價格の昂騰を望むのは、隨分六ケしいことだ、日本などは豐年飢作で、世界が悉く大凶作で、一般食料の騰貴を望むと云ふことにしても、決して正しい希望ではない これをおへて見ると 日本の食糧政策研究の結局は、米の需要者たらなければならぬかと思ふ、[illegible]の需要、[illegible]の需要に、種々の非難も有るが、其の結果を見ると、今に於て、之を根本に移す丈にはならぬ 結論何か煞りで有る、やはり政府事業にした方が良いかと思はれたい

原則意識から見なほされべき二問題

杉森孝次郎

貴族院問題と農村問題とは、二つながら、或る適切に、國民の原則意識が、國民の政治生活方面に於いていかなる在りかたをしてゐるかを、その二問題が政治問題としての性質を有する限りに於いては、先づ、そして結論的に示す。

原則意識の不完全または缺乏に原因する現象を、その不完全または缺乏を意識することなしに充分に意識することは出來ない。一とつの現象を充分に意識せずに、その現象が意味する改革の必要や改善の必要を意識することは出來ないし、したがつてその方法を意識することも出來ない。

貴族院問題は、それよりも深い、廣い、全體的な政治組織問題の一小部分的特徴として意識されないあひだ、その改認を得ないあひだ、解決されやうはない。しかるにこの改認は、最近の貴族院改革論の奥にすらも、あまりに準備されてゐなさ過ぎるやうに察せられる。

いかなる專制的、あるひは時代錯誤的、あるひは不合理的組織や制度でも、結局、その國民の意志に添はない原因を有するものだといふ一般的法則を、最近の貴族院改革論を見るにつけても想起させられる。從來の微温と非常識の障碍をほかにして、制度改善の見込は立たない。かくの如き先覺者が日本にいまだ有るのか無いのかすらもかなり疑はしい。それが高名大官者のなかに無いことだけはいやしくも疑はれる餘地すらないやうだ。

政治はそもそも必要か、必要だとするならばその政治はなにか。この一問を、現在の貴族院問題に關係させて考へて見ることもかなりに有意義だ。政治は、したがつて政治組織も、目的をそれ自身には有せず、それが直接に關係する社會民の全體の本質的利益及び幸福を組織的に保護するかたちに於いてそれに奉仕するほかに存在權を持たない。この公理をわが現在の貴族院制と一層根本的な、及び全體的な政治組織とは、どれほど完全に裏書きするか。公侯爵の男子が滿二十五歳に達すれば是非とも

貴族院議員にたいし、またはたらきかけると云ふ事が、この問題の場合に於いては、文備不指摘する表面的一部的小現象だ。

農村問題も、國際製作品市場に於ける優良品を多種にまた多量に生産するかための工業的能力に日本が成ること、及び、原料を支那及び極東ロシヤに出來るだけ直接に、自由に、そして完全に商議的に持つこと、こいつたつの必要を知り、したがつてその方法を盡くしたり發明したりするでなくては、ついに解決されない問題だと診断される

貴族院問題が政治の內包的關係のかなり根本的な改正を必要とする性質のものであるが如くに、農村問題は政治の外延的關係のかなり根本的な改正を必要とする性質のものだ。そして、その內包的關係の改正は、その外延的關係の改正を實現するためにも、最も必要的に先きだつ一件だ。

貴族院問題に關しても、殊にまた農村問題に關しては、やらんよりはやつたがどれほどか有益だといふ性質の解決策はすでにかなりに發表されてゐる。一層根本的な解決方法には、國民の注意が餘りに不釣合に、そして餘りに不充分にいまなほ拂はれてゐることを、私は、わが國民の原則意識に於ける本質的でないまでも、また本質的とはどうしても信じたくないが、習慣的無能及び制限の或る證據だとも考へる。そしてここにまた國民の必らずしも意識されない最深、したがつて最大の問題があると考へる

貴院改革と農村問題

文學博士　三宅雪嶺

□

問[illegible]、[illegible]。

[illegible]からなまじいにただかういふ、內閣更迭が權力作係を主にし、主義政綱を[illegible]にした例が多いのを[illegible]とするけれど、權力作係とこ[illegible]

ふつても、[illegible]

[illegible]よ、[illegible]あるかは別とし、單純なる權力爭奪でないだけの事を示すに足る。日本で爭ふ者が在朝在野相あせらずに、權力を求めんとなつて、勝ちたる者が位に於ける形に見えるのは、是つとも好いと云へぬ。これでも源平の爭ひとか、德川毛利の爭ひとかと違ふのは、或る方面で希望を申出だし、これが多少輿論の形をなし、新たに旗を建てる者が之を活用する所にある。爭奪者自ら爭奪に餘念なく、國家社會を如何にすべきか、分つたやうで分つて居らず、世間にいろいろ議論あるうち、旗幟にするに都合好いのを採らうとする。餘り分らなくては、それを取る事が出來ず、麗々しく旗を揭げるのは、それだけの識力ある者と見做すべきであつても、本來自ら考へ出したのでなく、他から借りて來たのを否定する譯に行かぬ。自由民權論でも權力爭奪に利用されて居つた。板垣氏は比較的純粹であつたと言はば言へ、比較的と云ふだけの事、土佐の自由黨は隨分如何がはしいのが居つた。後に種々の事情で內閣が更迭したが、或る事情の爲めであつて之れぞと云ふ主義政綱の明白なのがなく、あれば小さな事に過ぎない。今政黨の主義政綱が似たり寄つたりであつて、[illegible]綱に關して唯々諾々オフポーチユニストと同じになるのが物足らず思はずに居れぬ。

□

憲政會總裁が大命を拜し、與黨と共に內閣を組織するや、特權內閣に代ふるに政黨內閣を以つてするといふだけで足るかに心得、實際政務に何の變化あるかに重きを置いて居らぬと見られる。政務と事務とを區別したのが何程國政に影響するか。實業同志會で天引き三億圓を唱へるに對し、實際天引など出來るものでないと云ふ所、官僚の口吻そのまゝである。綱紀肅正、行政財政の整理など必要は必要とし、何の內閣でも唱へもし、着手もした所である。普選案を大きい通常議會に提出するに決定したところ、何とか旗幟にしたものが、役立つのであつて、嘘から出た誠、牛に牽れて善光寺と云はれる所である。それほどの事がなければ、內閣更迭が餘りに無意義になつてしまふ。世

間に種々の議論が出で、政黨と貴族院に適當なものを取らうとするのは、何かに政界の混亂を來すのであつて、若し今一層力を用ひるならば更によい。

〔三〕

何分にも本來權力以外に無一物、有りさうなのは閥族であつて、思ひ切つて力を用ひず、都合惡ければ頼みて他を云はうとする。貴族院改革が早晩起るべき問題であつて、特別に起らなんだのは、實を以て云へば陸海軍人、聯して云へば内閣勢力の習俗よりし、遙かに明治維新の出來上つた閥族、成る程とする程でない。貴族院は初から問題であり、英國の如く何年の歷史あるは格別、新に作り出來した貴族院に無理のないのがない。子細にと云はうか、不自然と云はうか、どへて見れば、何る不細工の名に値するか。衆議院は、國民が選擧するので、事實が簡單、尚其他如何はしい點あるとして、割合に少く、内閣は、政界でも、常に泄まつけ、比例代表なるものもしても居る。貴族院は調停取調べる目が自分で組み、富の一員あるかないか等、擧め分らず。責任者何處でも貴族院にはし〔〕たと同時[illegible]の[illegible]英國の上[illegible]と云へば[illegible]て、[illegible]一[illegible]に改め立て。今[illegible]

かせて居らぬ。我貴族院は歐大陸を參考にした所多く、中にも獨に擬つたが、その獨逸も大改革を餘儀なくされた。伊國が似て居ると云へやう、或は日本よりも弊害が多いと云へやう。勅選議員に滑稽なのがあるが、併し勢力を振ふことが出來ず、振はうとすれば却つて危險を招くの恐れがある。共和國の上院は我貴族院の參考とするに難く、ここに日本の貴族院は日本特別のもの、他を例に引くのが間違つて居ると明言し、何を標準とするか分らなくなつて居る。今のままでよいでないか。缺點を上げれば何にでもある、少しの缺點を見出して、改革を叫ばゞは國政の安定を失ふことになると論ずる。

これで貴族院は平氣の平左、衆議院を以て[illegible]して居るが、[illegible]し時また結果、清浦内閣を作り、貴族院總動員して議外の途に打たれただ其度に研究會は益々裡に動くを示す所なきである。貴族院議員中從來のままで内部の發展に任ぜんと言ひ出たのもあり、公侯爵を伯子男と異にし、而も議員を定める法[illegible]の一届り、之れも選擧にすべしとか、伯子男も連記を否して單記にすべしとか、多額納税議員を廢すべしとか、常々と唱へ立てられてた[illegible]多額[illegible]

に一[illegible]
かかる事は貴族院[illegible]されたにたらず、[illegible]と
の疑あるのがあり、之を新に取つて反對されては、[illegible]
難になると恐れる。

□

加藤内閣を擁護する護憲三派は初め貴族院改革に力瘤を入れたけれど、幹部員が大臣になつたり、副大臣の氣持になつたり、官僚の有難味を知つては何時しか官僚氣分になり、貴族院と爭ふよりも、さういふ野暮を云はず、難しい問題は時期の到來を待つに若くはないとて、世間に申譯けだけに貴族院問題を吹聽し、そのうちそのうちで過ごさうとする姿になつてゐる。

加藤内閣が貴族院改革を望むのは、所謂比丘尼に玉と云ふ所であつて、望む方で間違つて居ると云へぬでないが、それならば貴族院改革は到底望み難いかと云へば、さうでなく、幾何か之を問題とするうち、自づと改革の實の擧がることは過去の例に徴して察し得られる。日本では甚だしい衝突が少いけれど、抵抗し得ると見える限り抵抗し、何時までも抵抗する。人にも云ひ、自らも信ずるが、いよいよ勢が不可と知れば抵抗を思ひ止り、綺麗さつぱり、明け渡すを辭しない。幕府の終末もさうで[illegible]

よ[illegible]とあつては、ハタバタと改革を[illegible]、そこでいくらか支那の戰ひにも似てゐる。[illegible]戰で[illegible]し、[illegible]にさつて、いよいよ決戰といふ場合、あつけなく片がついてしまふ。萬一貴族院が何處までも改革に反對したならば、政は非常運を促す利益あらうが、或る部分で多少の犧牲を拂ふ覺悟せねばならぬ。貴族院の要部に居る人々はその邊に目があいて居らう。それはそれとし、護憲三派中貴族院改革を熱望する者があるけれど、加藤内閣で之を後廻しにするであらう。

□

ところで農村問題となれば、護憲三派で一致すると云へず、政友會で實際の必要もあり、世間に對する申譯もあり、憲政會で默然に花を持さねばならぬと云ふ所もあらう、政友會が何程本氣になるかが見物となつて居る。何故に政友會が農村に重きを置き、他は之を輕んずるか、政黨員分布の關係もあるけれど、日本の國土に於ける農村の位置について明白に判斷し得ない所が與つて居る。農村問題は國内に人口が增加し、之に對し

農村の過剰人口を排除せねばならぬと云ふのが主か、農業に従事する人口が労力に比して收入少く、何等かこれを救済せねばならぬと云ふのが主か。之れが畢竟同一に帰するが[illegible]しくなる。農産物は約三十年間に四千萬石より六千萬石に上り、次第に増加するとも減ずると云はれぬ。国内のみで自給自足するわけには行かぬけれど、人口と云ふ点から[illegible]限り、食料に事かかないと見ればならぬ。農民が労力の割合に收入少いとて、農産物の価を高めねばならぬとあつては、事の宜しきを得るやは疑はしい。事によると今の農業では農村に人が多すぎるところがある。農具肥料[illegible]を改良すれば、人を減じて収穫を増し得るが、これでは現に農業を以つて立つて居るもので生活に苦しむのが多いと云ふのは、他に商工の就職口がない為めであつて、就職口さへあれば、農民が工夫になる事、心配のない次第である

[illegible]

日本では[illegible]に住居する者が[illegible]割、農村に住居する者が[illegible]割、[illegible]く之れを反対にして[illegible]ないのは、[illegible]より[illegible]だけの有様が[illegible]れば、農村から人が移りたり、都[illegible]、[illegible]人[illegible]の割合に収入[illegible]のことで、農村を現在のままにし、それで収入を多くさせやうとするのは、出来ない相談でないか。地租を軽減し、いくら農業を多くする事が仮りに[illegible]とし、其の[illegible]を増[illegible]の見込を得ないでないか。農業に必要なだけの人口を残し、剰つた部分を他に移すの方法を講ずるの必要であつて、それは出来ぬとあらばしかたなく、其の出来る見込みがあれば、その方に[illegible]を拓くべきでないか。都市に事業を多くし、農村の人を[illegible]き、更に満韓及び[illegible]に移住の便宜を開き、[illegible]ば、[illegible]に[illegible]ける方が好い。[illegible]に[illegible]功[illegible]があるが、内[illegible]に、いつまで[illegible]の[illegible]めれば、[illegible]を移すに足る。日本に人が多いとて、決して[illegible]のではなく、[illegible]の如く移住しては、却つて[illegible]ぬ位のものである。それで農産物が減ずるとあつては、大[illegible]へねばならぬが、二十年で[illegible]になつた[illegible]を見れば、その[illegible]を[illegible]用としてよからう。[illegible]の時に[illegible]が困[illegible]て居るので、これを出来るだけ[illegible]をつけるとし、[illegible]のところ[illegible]り前の[illegible]をつける外ない。即ち[illegible]に必要なる人が[illegible]に[illegible]り、他は他に移り、[illegible]む[illegible]である。[illegible]今よりも[illegible]地を[illegible]し、そこに人を[illegible]すとよい[illegible]よりよい。[illegible]し今のままに[illegible]き、さう[illegible]人を[illegible]とするのは、[illegible]の[illegible]を[illegible]村に移すことにならぬか。[illegible]及[illegible]その他に[illegible]

[illegible]

[illegible]

す、農民黨の騷ぎの起らぬこと、尙ほ[illegible]の起らぬ[illegible]

マンモンの善處

室伏高信

×　×

この內閣から眞面目に農村救濟を期待する田舍者ありや？彼等は尙ほイヴンの馬鹿以上に善良さをつゞけて行こうとするのであるか？

私は、尙ほ日本の人口の半ば以上を占めてゐる日本の農民たちに見てもらひたい一枚の畫がある。ワッツのマンモンがこれであるのだ。

日本の口さがない新聞記者は、加藤高明を金佛だといつてゐるが、マンモンこそ加藤高明そのまゝである。容貌から、態度から、その一切が加藤高明である。黑くして大きな顏、太き眉、中廣の鼻、驢馬の耳、厚き唇、加藤高明は正しく日本のマンモンであるのだ。

マンモンは黃金の冠、黃金の着物を身につけ、膝に金袋を置き、頭蓋骨をもつて飾れる、王座のうへに腰掛け、傲然として男を足下に踩み、女から綠の衣を脫がせてゐるのだ。

イヴンの馬鹿よりも善良な日本の農民たちよ。神のものは神に返し、三菱のものは三菱に返せ。汝等の「綠の衣」は既に剝ぎとられてゐるではないか。

勿論加藤內閣に至つて始めてさうだといふのではない。政治家はみな都會政治家である。大なれ小なれ、政治家とはみな等しくマンモンであり、若しくはマンモンの執行機關、或はその

拘下専制であるのだ。[illegible]内閣に至つてしかし倒されりである。

世界を通じてこの内閣第一の首相またはこの如き一国の首相となつたといふ例はない。このことは自節政治の最高潮を意味するばかりではない。また真に階級闘争の挑戦であるからである。

[illegible]断行といふことが必要だとしたら、[illegible]に遂行すべきことは、かくのごときマンモン党の首領ならびに最高の地位からおとしめることである。また若しこの人にして一片の良心があるならば、自ら辞職して、かくのごとき一国首相の地位からは辞退すべきである。然るに彼これをなさず、多くの大小政治家の[illegible]、マンモンに阿附し、黄金の前に膝を屈して、ひたすらにその寵を失ふを恐れる。マンモニズムは今日に至つてまことに恐るべき問題なのだ。

マンモニズムの時代は[illegible]の時代である。世界の歴史は明らかにこれを示してゐるではないか。マンモニズム行はれて四民[illegible]、四民[illegible]にしてマンモニズム起るのか[illegible]きることは、四民の[illegible]、[illegible]これではないか。マンモン内閣に[illegible]すれば、[illegible]、拝物主義を肯定するがごときものになるのだ。

マンモン時代は、一面には貴族の時代の去つたことを意味する。旧維貴族の時代から下町町人の時代に入つたことを意味する。こゝに貴族院改革は当然でもあり、また甚だ可能でもあるかに見える。

この当然でもあり、可能でもあるがごとくに見ゆる貴族院改革が、この内閣の成立以来、却つて甚だ不当然でもあり、また不可能でもあるかのやうに見えてきた。貴族院改革は、この内閣からは日一日と遠ざけられ、却つて貴族院自身の手に改革の[illegible]高まつて行きつゝあるかのごとくに見えてゐる。

さここに、貴族院改革は、これを断行せんとすれば[illegible]決定の時である。私は貴族院の側に於ていふのではない。欧州において貴族院改革を行ふことはしかく容易ではない。その国の歴史がさうさせてゐるばかりではない。欧州民の間に、ナポレオンの町人貴族的政府が[illegible]。町人的[illegible]、[illegible]もないのである。[illegible]貴族は貴族を[illegible]にさうしてゐるのではない。町人の[illegible]が[illegible]。[illegible]へ[illegible]。

[illegible]

[illegible]ことである。英國では[illegible]百年前に、[illegible]し。従つてこれ[illegible]には、政治的にも下院の下風に立たざるをえなかつたのであるが、一般國民の貴族的愛好、その保守的國民性が、貴族院の地位を今日まで維持してきたのだ。

日本においても、貴族がその經濟的權力を喪失したのは五六十年以前のことである。貴族の政治的專制もまた既に一時代前に破られた筈なのである。

しかも日本國民は英國民ではない。日本國民の間には、英國人のそれのごとき貴族的愛好は存在しない。彼には王室はあるであらう。貴族はしかし存在しない。少くとも貴族院の政治的權力を支持せんとする保守主義が日本の一般國民の間に存在してゐないのは、英國流の保守黨が日本に存在せず、また存在し能はざりしことによつても明らかである。日本の一般國民の間には、英國民のそれのやうに、貴族的カルチュアが存在してゐないのだ。日本國民は何時にても貴族院廢止に贊成するであらう。彼の求むるところは貴族院改革ではない。貴族院廢止であるのだ。若し內閣に立つ政治家が貴族院と衝突して、貴族院廢止の問題を提げて國民に臨んだとしたら、その政治家は判ると

[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]愛好な[illegible]、日本の貴族[illegible]持してきたのであるか。最近にも、[illegible]清浦奎吾と、三代の內閣は主として貴族院內閣である。清浦內閣に至つては、研究會と稱する大名華族、そして多くは貧乏華族の一團——原敬はそれ等の貧乏華族を特種銀行の總裁重役にすることによつてよく操縱した——によつて恣いままに政權が私議された。[illegible]一實にして世の中に出したなら各省の參事官にも足らぬほどの人たちが集まつて恣いままに政權が私議されたのだ。貴族なるがゆえである。たゞ貴族なるがゆえに大臣となり、宰相となるのだ。これを時代錯誤だと犬養毅がいひ、高橋是清がいふ。犬養高橋の徒が、それ自身立派なアナクロニズムである。そのアナクロニストさへ、何ほ[illegible]れてそれを時代錯誤だといふ。しかく時代は逆行してきたのだ。貴族の權勢は最近に至つて數十年前の昔に盛り返したのだ。

何人がこの貴族の權力を築いたのか。貴族自體であるか。參事官級の貴族、特種銀行の重役となることによつて僅にその貧困を救ふことのできる程度の華族たちが、自らの力によつ

が今日の權力を築いたのであるか。

貴族院の參事官級をして今日の權力あらしめた最大の恩人は政友會である。政友會は多年權勢の地位にあり、貴族院を操縱しつゝまた貴族院の要求するところとなつたのだ。政友會が多年權勢の地位にある間に貴族院は今日の地位を築きあげたのだ。あらゆる政黨の濁れたるものの間にあつて政友會は最も濁れたるものであつたのだ。

政治は常に濁流である。政治は常に少數專制である。政友會の時代において就中しかりであつた。政治とは國民とともに語ることではない。元老の門を叩き、少數貴族と待合に談じ、收賄し、利權をふりまき、不正の金によつて黨の內外を動かすことであるのだ。この點において政友會は實によく政治の核心を把握してゐたのだ。原敬はこの意味において大政治家であり同時に彼はこの意味において罪惡者であり、其々の政治家は實に惡人であつたのだ。

政友會には大政治家あり、富者があり、策士があつてゐる間に、しかし貴族は結婚り、國民は永遠に政治の圏外に置かれづいてきた。こゝに政友會の腐敗があり、高橋是清は斷固として政治的改革を企てた。彼はこゝに突然に貴族階級の專制に反抗しようとした。目的は舊き內閣にあるのではない。貴族院にあ

る。」一月十六日政友會の總會すべき日に高橋是清がかくのごとき聲明書を發したのは、寧ろ事態當然の成行であつたのだ。

次いで三派の提携となり、二十日には「特權勢力の專橫を阻止すること」を申合せた。加藤高明ですら二十一日の大會で、「官僚主義、階級專制の主義を排し、國民的自治の主義を確立する」とまで宣言した。その聲は高ほ國民の間に渡つてゐる。その聲とともに選擧に大勝し、その聲によつて宰相となつた。宰相となつてからの加藤高明は、しかしマンモンとしての彼の特色を一層に發揮した。マンモンはたゞの町人ではない。彼は打たるゝも蹴らるゝも、貨金のためにはあらゆるものを忍ぶであらう。ゾムバルトのいふごとくに、

Die Gier nach Gold und Geld. —— こゝにブルジョアの第一精神がある。こゝに女婿的精神があるのだ。Geldgier はしかし限りなき欲望である。Geldgier が滿たされつゝある時は更に他の新らたなる貨慾につゞくのである。Machtgier がこれなのである。

こゝにマンモンはたゞの町人ではない。町人であるとともに王である。手に黃金の袋をもち、頭には黃金の王冠を戴かれば[illegible]求めである。またこゝに町人精神は貴族的精神となり、そし

[illegible]

彼は彼自身貴族である。貴族から平民たらんことを[illegible]は、今は平民から貴族へを夢みてゐるのであらう。内閣総理の椅りをもつことのできない凡ての人は、かくして富に、権力に、虚飾に誇りを求めて行くの外はないのだ。

英國人は保守的であると私はいふた。加藤高明は英國通だといはれてゐる。レエト・ヴ井クトリア時代の英國通である。保守主義の英國はヴ井クトリヤからマクドウナルドまで移つてきた。議席を上院に置くものは、保守黨の間にあつてさへも、首領となることのできないまでの慣例は既に久しく行はれてゐるのだ。加藤高明は、一方に憲政擁護運動なるものの陣頭に立ちながら、彼自身貴族であり、席を貴族院に連ねてゐる。多年政界を毒してきた政友會二代の首領原敬、高橋是清よりも時代後れである。彼にして若し三菱の女婿でなかつたなら、彼は遠く時代の外に投げ出されてゐたに違いないのである。この時代後れの一貴族を擁ひきたつて貴族院改革を行ばんとす、彼自身を自殺せしめることではないか。

この一貴族院はムイシキン公爵ではないのだ。傲慢なるマンモンである。マンモニズムの崇拝者にしか過ぎない憲政會の大小

[illegible]

貴族院[illegible]政友會[illegible]たのだ。[illegible]だ。改革させることは[illegible]にとつては[illegible]することとなつたのだ。

× ×

私は、加藤高明が貴族院の問題に全然手をつけないであらうといふのではない。彼はその欲せざる手を動かすであらう。過去十数年の政治的公生活の間にあつて、ただ待つて一度と雖も何等の政治的識見をも示すことのできなかつた彼は、権力の地位にはありながら、女の身體から、絲の衣を脱がせながらも、一歩々々、時代の後を、後れ走せに歩むのほかはないのであらう。

普通選擧の問題がこれである。普通選擧に断乎として反對した彼、そして若し普通選擧のために憲政會の多数が一致するなら、その總裁の地位を辭するとまでいふたと傳へられてゐる彼が、今日では普通選擧の即時断行を唱へ――即時断行を實行にしないか――るまでとなつたのに見ても、このマンモニは、貴

族院問題についても、また何等かの行動を余儀なくせられるに違いない。

この改革はしかし憲法の問題には触れることをしない。――彼が貴族院で弁明したところである。憲法の問題に触れることなくして貴族院を改革することは可能であるか。

憲法問題に触れずとは、貴族院を廃止しない意味であることは勿論、貴族院の権限にも触れないことである。貴族院の権限に触れることなくして貴族院を改革することに何の意味があるか。

少数特権階級の専横を廃するとは、たゞ甲の貴族、乙の貴族の専横を排せんとするのではあるまい。特権階級専横の一切、少くとも門閥政治の一切を排斥せんとすることであらう。若し果して然らば、甲をもつて乙に代へ、乙をもつて丙に代へたにしても、そこに何の効果もないであらう。貴族院令、若しくは一部規約の改正とはかくのごとき無意味な行動である。それは貴族仲間の約束である。貴族仲間の遊戯である。ゴルフの規約がゴルフクラブの定めるところに任すべきであるごとくに、貴族院内のことは宜しく天下全体の貴族たちがその暇つぶしの仕事に向つべきである。

その所得、その会得。其々の所論をもつて院に貴族院の改革を叫んでゐる。この種の貴族院改革は、憲政の神に於けるまでもない。東京倶楽部の安楽椅子で既に久しく論ぜられてきたのだ。わが貴族院には今や多くの「新人」がある。彼等がつひに質問演説をなすや、その美しい夫人が三大夫と倶に人と共に傍聴席にある。新人は恐らく壇上に立たざるべからず、壇上に立つも立たざるも、貴族院の改革は論ぜざるべからず。これ彼等にとつては最もよき消遣である。これ新人たるの練成法である。新聞が賑やかに書き立て、平民はたゞ傍観すれば足る。

青木信光であると近衛の公爵であると、われ〳〵下賤の平民にとつては等しく雲上の人である。人は斃るべき時に斃るべきである。「思ふ様遊べ！」とラブレーキイの言葉ではないか。華族の時代は今後何年あるであらう？世界の表面から華族なるものの消え去るのは今後何年であらう？われたちは寧ろ同情の目をもつて彼等のうすれ行く後ろ姿を見る。

或るものは貴族院令の改正だけにとつても、而も貴族院における華族の按分比例を少くし、或は更に民選の分子をこれに加へることができるといふかも知れない。民選議員をもつて上院を組織するの例は米国にある。それはしかし米国が一つの聯邦なるがゆゑである。米国上院は各国邦の代表者である。日本において、いふごとき聯邦であるか。[illegible]

[illegible]なら、[illegible]か、貴族院はこゝに全く無用であるのではないか。これが貴族院改革論ではない。當然たる貴族院廢止論であるのだ。

或は勅選議員の年齢を制限することは一つの進歩だといふものもあらう。勅選議員なるものは、しかしその勅選となる瞬間から既に老衰してゐるではないか。勅選とは老衰の役人、學者、軍人、政治家、または富豪の隱居所ではないか。まことに老衰なく、勅選なしであるのだ。

× ×

國民の求めるところは貴族院内部の異動ではない。貴族院の廢止である。最も保守的なる國民と雖も貴族院の權限を制限することを求めるであらう。こゝにそしてこゝにのみ、加藤高明の所謂「階級專制主義の排斥」があるではないか。

第一憲政擁護運動は美事に國民を欺くことに終つた。第二憲政擁護運動も、着々として、尾崎行雄の所謂「猿芝居」の正體を暴露しつゝある。貴族院改革問題に至つて猿芝居の上乘なるものである。

加藤高明はその筆頭となつた。身貴族であり、日本一の富豪の女婿である彼が、その貴族であり、女婿であるの故をもつて

[illegible]しのである。この人に[illegible]排すると稱して官僚主義を極度に發揮し、[illegible]政治を[illegible]することく叫んで彼自ら最大の貴族政治家、最高の「階級專制主義」である。これ僞善である。加藤高明の僞善である。マンモスの僞善である。そして國民は「惡所」である。平民の「惡所」である。

貴族院改正問題

法學博士　吉野作造

昨今世上の論議に上つて居る貴族院改正問題の諸説を通覽するに、改正の要求せらるゝ方面は主として次の二點に在る樣に思ふ。曰く權限の縮少。曰く組織の變更。

×　×　×　×　×

權限の縮少を主張する者は、漠然と上院は本來下院と對等の權力を有すべきものではないと云ふ。殊に下院にも普選の實施せられんとする今日、上院が法律上同等の地位に在るを利用して動もすれば下院を掣肘するのは民主政治の本旨に反すると云ふのである。權限縮少の可否は姑く別論として、其所論として云ふ所の右の説明は大變な問題だ。

下院の組織に普選も行はれ〔illegible〕選擧が常に官僚と政黨幹部との手中に左右されて居てそこに何等國民良心のはたらきの認められざる以上、上院が下院の思ふ通りに動かぬからと云ふ何〔illegible〕の不都合なきは云ふまでもない。下院が選擧[illegible]に普選を採用するとして、且官民共に從來の弊竇に懲り之からは公明正大に選擧に臨むの決心やゝ信ずべきものありとして、其處より生るゝ下院の行動に一段と道徳的權威を増すべき見込は略ぼ確實だと云ひ得んも、併し之は上下兩院の對立關係に於て一方の道義的權威が若干増すといふ丈の話で、從て原則として上院は下院の決定を格別に尊重すべしといふ政治的慣例を發生せしむるはいゝが、法律上の制度として上院を永久に下院に屈從せしむるは決して上院設置の本來の精神ではない。寧ろ一歩進めて下院を無用とするのなら理窟は徹底する。苟くも之を存置する以上は、萬一の場合に下院に對抗して國民に反省を促すの機會を與へ以て國家の針路を萬一の邪路より救ひ出さしめんといふ趣旨に基き、制度上はどうしても下院と絶對に同等なものとして置かなければならない。是は近代憲政の常則の樣なもので、[illegible]上に[illegible]。[illegible]の上に於て了つては[illegible]といふ[illegible]上院[illegible]のない。[illegible]ないゝ故に

して戴きた[illegible]ろまいと云ふのはいゝが、[illegible]取り上げて[illegible]といふに至ては、角をためんとして却て牛を殺すの嫌がある。是等には上院を存置するとしての話だ。別の論據から之が廢止を主張するのなら私にまた自ら別の意見がある。

上院の存置を前提として論ずれば、私は權限の縮少は必要でない否正當でないと考へる。勿論此點に關しても現制度の上に多少の整理修正をする餘地はあらう。併して大體上上下兩院は對等たるべしとの原則は動かしてはならぬと信ずるものである。そんなら上院は從來通り我儘を働いてもいゝのかといふに決してさうではない。上院は原則として下院の決定に讓るべきであるが、之は制度上の規定としてゞなく、政治運用上の慣行として止めて置きたいと思ふのである。尤も下院さへしツかりして居れば、斯んな原則は矢釜しく云はずとも自ら立つものなのである。上院の組織に此種の運行を妨ぐる底の缺陷あることは後にも說くが、兎に角、今まで當然の原則が立つべくして立たなかつたのは、一つは下院政治家の發奮が足らなかつた結果でもある。

私の結論に對して英國の例は如何と抗辯する人があるかも知れない。成る程英國は一九一一年の議會法で制度上上院の權限

[illegible]（[illegible]議理はある[illegible]だが、實際之に[illegible]々淡々其人に移りたく、時々に新陳代謝を[illegible]固定的[illegible]と謂ていゝ。だから政府乃至下院に取つては理想的制度と[illegible]し難きものなので、そこで制度上から權限を縮少でもしないと、疏通の方途がないのである。我が國の上院は半ば英國の上院に倣つたのだが、併し勅選議員も澤山あつて英國の如く固定して居ないから、必しも英國の如き變例を採用する必要がないのである。但し現制の樣に有爵議員が過半數を占め、それが又政黨的結束をなして昨今の樣に跋扈するとなると、固定的形態を爲す點、一寸英國の上院に類するものある所から、實は權限縮少なんどいふ問題も起つたのであらう。若し上院の組織にして到底然るべき變革を加へ難き事情ありとせば、權限縮少も已むを得まい。併し最近の世論の通り、有爵議員の數を半數以下とし且其の互選規則も變へやうといふ事になれば、權限縮少は實は左までに必要でない。約言すれば、英國に在て權限縮少で達した同じ目的を、我國に在ては組織變更で達しやうといふ次第なのである。從て吾人は、若し組織變更に成功を見ることあらん

界、自然の順序は遂に逆から少して權限縮少の要求に進むべきを豫指せなくてはならぬ。而して權限縮少はどこまでも道だ。政黨開放の大筋は組織變更を知道として進むべきものである。

×　×　×　×　×

上院組織の問題に付ては色々種々の改革意見が行はれて居るが、大別すると次の二種類になる。

第一は消極的に上院の固定的形態を打開せんことを目指すものである。今日の上院は國內最高の智識を集め其良識を自由に發揮して下院の決定に十二分の批判を加へしめんとのた度から多く離れて居る。或る特殊の勢力が大勢を左右し、下らぬ見識が權勢を極めて居るのだ。之を打開しなくては上院のみが困るのではない國民全體が迷惑する。斯う云ふ根本目標から唱へらるゝ改革要求の第一位に在るものに（一）數の減少といふことがある。即ち有爵議員をして勅選議員より多からしめなくてはならぬといふのがそれだ。其上勅選議員其ものの固定しないやうに更に種々の改正を加へられねばならぬが、之にしても猶不十分の憾あるといふべき一方では、此の趣旨を一層徹底せしむる爲に（二）公侯爵世襲の廢止と（三）伯子男互選制度の改正

の問題がある。前者は何等議員數を少くするといふ目的にも添うが、公侯爵だけに多大の特權を與へるべからずとの純理論の方からも強く主張される。後者に於ては各爵別々か或は一所に選ましたるかの問題もあるが、實際上重大の關係あるは從來の連記々名制を存するか否かの點であらう。華族の名譽より云へば記名式で差支ないが實際論としては無記名式を可とするに一點の異議ある筈なく、又純粹なる單記がいゝか將た限記を宜しくは制限連記がいゝかは尚攻究の餘地ありとして、連記非難の現制の不可なることだけは、利己的偏執者に非ざる限り是亦何人も異議のない所であらう。

第二は積極的に上院に新らしい分子を入れんことを目的とするものである。新陳代謝は何時にも必要だ。上院以上の批評員に洩るゝ道理はない。さて此見地から唱へらるゝ要求に、一勅選議員制度の改正がある。現在の但一は有爵議員と同樣に固定するの惧れあるのみならず、近來其任命が内閣分贓的になつた所から所謂な要求も起るのだ。固定に陷るを防ぐ爲に。任期を附せよとか停年を設けよとかの説がある。色々理由は附けられるものはあるが、何とか改められねばならぬことだけは疑を容れぬ。猶任命者に對しては何等條件を設けよとの說があるが、此法實行が出來まい。之の點は容易く實行出來る故なら、之れなくとも差支ない答

[illegible]區[illegible]ればならぬ[illegible]選ではないと思ふ、[illegible]議員を職能[illegible]に就て見る[illegible]の唱へらるゝを喜ぶには躊躇する、[illegible]制度論としては存在せねば反對もしない。あつてもなくても結果に大した變りはないと思ふからである。次に(二)民選分子を入れよとの要求がある。從來の多額納稅議員が苟も民選たるの實質を具へざるは言ふまでもない、之が廢止はどの點から觀ても異議のない所として、さて之に代るべき新たに何物を採用すべきかが問題である。理想論として農工商を通じ夫々雇主側と被傭者側とから代表者を擧げるとか、教育、宗教、船員、殖民地等を代表する者を採るとか、下院が地域代表主義なるに對して上院に職能代表主義を加味せしむるなどは、頗る合理的の改革だと思ふ、況んや上院の半數は既に華族といふ特殊團體の代表たるに於てをや。之に異議を唱ふる者は、目の先ばかりを見る所謂實務家か、爲にする所ある者か、否らずんば精密なる思索を厭ふ一知半解の横着者かであつて、今日我國でも識者間には此點の論は自ら定つて居ると思ふ。併し何時の世にも理想論の實現を見るは相當の年數が掛るもので、急激な變更を兎角好まぬ我國目下の狀況としては、矢張り過渡的の改革として各府縣を一選擧區とし人口に[illegible]屆に[illegible]と同じ様な地域代表主義で行くのだったら、寧ろ下院をして兼ねせしめた方が簡便かも知れない。併し孰れにしても民選分子を入れたいと云ふ要求は結構だ。只だ茲に於て上院に重きを爲す底の人才が擧げらるゝ様仕組まれねでは駄目だ。從來の多額議員の様な沐猴にして冠するものは眞平御免である。

× × × × ×

上院改革の問題は實は以上に盡くるのではない。其外に院議員も下院同樣に政府と關係ある特殊會社、銀行等に就職するを禁すべしとの說の如き、當然明白寧ろ今まで之を放任して置いたのが變だといふべき程のものである。又華族にも下院議員被選擧權を認むべしとの說の如きも理の當然であらう。憲法制定當時の如く、民間勢力に不當の畏怖を感じ之に對する防波堤として貴族院を設けし時代に在ては、會社の監査役が取締役を掣肘するの必要ありしならんも、今は然らす、上下兩院は彼此相牽制するを非ぬ可らざると同樣に、華族は人民と截然別天地を劃するの必要

と云ふべくまつたく共協力すべき性質のものとなつたから。華族と雖も特權の撤廢あらば下院の議席に就くに何の不都合もない筈である。實際問題としては斯く改めてもしたる所論はなからうが。併し理論上は與へるのが本當だ。某貴族院議員曰く、貴族にも下院の被選擧權を認めて自由に政界活躍の途を作てやれば。強て選擧規則を改めて少數代表の策を講ずる必要はあるまいと。之は勳勞に對して相當の報酬を與へ以て優に食へる樣にしてやれば。己れの借りた金は彼に返濟する必要はないといふ議論である。貴族と軍閥輩のいふ論をよるものではない。

其外細い點をあぐれば未だ種々ある。併し主たる論點は何といつても權限と組織の問題だ。此點が整理されれば主たる要求は皆滿たされたことになる。依て私も專ら此二點に議論を集中したのである。

× × × ×

理論上の改正論は姑く別として。更に貴族院改革論が一般に起る要因で起つたかを考へて見る。世人はよく下院も改造に改まつたから上院もいつまで舊態依然たる事には行くまいと云ふ。之も一面はある。併し上院の改革を要求する聲は單に茲からのみ起つたのではない。下院に普選が行はれ從て其面目が一新して來たとしたら。或は却て上院はどうでもいゝといふ事になりはしないかとさへ考へらるゝ。何となれば下院の改革加れば上院は自ら其の當然の勢域に引き退るべきを以てゞある。故に貴院改革論の起つたのは下院のだらしなさに乘じて不當に權限を逞ふしたといふ所に存すると謂はなければならぬ。從て實際政界の問題としては。改革論の順序乃至範圍は此點から引き上げらるゝものと見なければならぬ。而かも斯樣の條件の權限改正後には理論上問題を嚴しくするが必要だと言つていふ相當の改を遂くしたら後者に至て言ふ樣になつたとすれば。順序としてはかうならなければならぬのと同樣である。斯ういふ見地から貴族院を見ると。昨今の情勢はほとして一、政黨間結托に依て一部の集團が大勢を支配すること、二、其の勢力を利用して下院を不當に制肘することに歸する。そこで一段その權限に手を觸れようとの議論も出るのであるが。之を理論上正當に正すとすれば。貴族院の改革は次の順序に依て一歩々々其の階段を踏んで行くのが一番適當ではないかと考へる。

(一) 有爵議員の選擧規則の改正に依て上院に於ける從來の橫暴の弊根を除くこと　此論點の理論上の地位に拘泥して不滿と做し。以て非難の主力を他にそらさんとするものもあるが。世人

[illegible]實に於てはならね、たゞ一國だ[illegible]く、之は日本の政界に取て實に一大福音たるを失はない。

（二）有爵議員數を減ずること。（一）が改まれば（二）は自然左して苦にならぬ。併し或は再び繰り返さるゝこと[illegible]き（二）の情弊を結局不可能ならしむる爲に、（二）も亦絶對に必要であると考へる。

（三）民選分子を入るること。理に於て、（三）が一番大事で（二）之に次ぎ（一）は所謂末節に相違ないが、實際の活用からいへば其の順序は丸で顛倒していゝ。否顛倒しなくてはウソだ。此點に深く國民の注目せられんことを希望する。

猶ほ貴院改正には制度上二つの大なる制限あることを知らねばならぬ。一は攝政在任中憲法改正は許されず、從て憲法の改正を要する底の改正案は將來に期せねばならぬことで、他は貴族院令の改正に亙るものは貴族院そのものの議決を經ざれば出來ぬことである。貴族院令の改正増補は同院の議決を經ねばならぬといふを推擴して、總て貴族院に關する事は其の同意を要するの趣意だと一概にいふのは何等根據なき妄論である。但し貴族院令の改正を法律の形式を以て下院から提案し得るや否やは學問上問題であらう。之は勅令事項と法律事項との範圍に關する學說の異同に依て解釋の岐るゝ所だが、從來の慣例に依れば[illegible]從て下院[illegible]

貴族院令に基いて發せられたる規則例へば伯子男爵議員の互選規則の如き、貴族院の議決を經なくして普通の勅令同様に改正し得るや否やに就ては、有力なる憲法學者の間に兩様の說を唱ふる者あるを見るも、併し例外的規定は出來る丈嚴格に解釋すべきは本則で、貴族院の同意を要するは貴族院令その者のみと限るのが正論だと信ずる。政治上の得失からいへば無論だが、法理上の說明としても、互選規則の改正に至るまで、貴族院の同意を得べきものとする筋合ではない。

× × × × ×

以上論ずる所を以て明なるが如く、現下の政治問題として觀ると、貴院改革の要求は謂はゞ貴院の大半を左右する大勢力の專橫に對する國民の挑戰である。加之順序として先づ互選規則の改正に力を注ぐとすると、それはまた自ら第二第三の勢力に對しても挑戰することになる。そは例へば研究會の專橫に對抗せんとて公正會が生れたとする。公正會は研究會に抵抗すべき勢力を作る爲に實は彼と全く同じい方法に出で、所謂選擧母體の

結束に浮身をやつしたり、選擧母體の結束をつくる爲に如何に惡辣なる手段が弄されゝ如何に怨恨憎惡の因子を諸方に蒔いたかは世人の既に熟知する所であらう。夫をも押し切つて進んだのは與黨幹部の連中に今に見ろと云ふ肚があるからではないか。而して今に見ろと高を括り得る所以は、一にも二にも連記制の御蔭に外ならない。然るに若し連記が單記にでも改まらうものなら、釣橋の上で刃物を振りかざして天下を睥睨してゐたお山の大將が、綱を切られて河の中に眞逆樣に落さるゝ樣なものだ。故に今まで威張り散らして得た連中に取つては、實に容易ならぬ面目上の大問題なのである。是れ本問題に就ては流石の研公二派も遂に相連繫して猛烈に反對する所以である。氣の弱いものが、せめて來年の選擧だけは舊規則で行きたいと、一時の榮華に戀々たる所以も亦實に茲にある。彼等が何と言ひくるめやうとも、國家全般の幸福の爲にはどうしても此點に一大英斷を施さなくてはならぬ。而して是亦實は華族社會の本當の開發にもなるのである。

× × × × ×

世間にはまた政府并に與黨三派に貴院改革の其誠意がないとて責むる聲も聞える。其誠意が本當にないのなら大に責むるの値あるが、併し此問題たる元來決してそんな六かしい事柄ではないのである、假に考へたとて相當の案がないわけはない。事實の推定として私は政府にも三派にも其誠意がないとはどうしても信じられない

尤も其誠意の有無そのものと、之を有ると發表するか否かの問題とは全く別だ。私共は有るものはあると明言して公示し、民意を後援として之でヒタ押しに押す樣の男性的政治を翼望するのだけれども、日本の政界は不幸にしてまだ斯んな處まで進んで居ない。昨今は民間の後援も中々力弱い。併し傳統的勢力の惰性的威壓もまだ馬鹿には出來ぬ。迂ッかりすると何處から突き何んな所で揚足を取らるゝか分らない。加之反對の對手は元來何を考へて居るのか分らない。理窟で押せぬ我儘者が多いのだから、民間政客も之を相手に巧く世間を渡らうといふには、豫め明確の政綱を揭げて置かぬ方が便利だ。是れ從來の政黨が極めて漠然たる政綱をかゝぐる一方に於て、根本的決定は一に總裁專制に一任し、以て臨機應變の妙に處するを得しめて居る所以である。單にそれ計りではない。貴院改革の當局を少しく拘束の態度を强めると、朝議を紊亂するなどゝ妙な所で陷穽に追ひ込まるゝ虞なしとせぬ。現に研究會の某氏の如きは、貴院の徹底的改革は國家組織の根本と相交渉するなどゝ威かして、

改革の設[illegible]を擬[illegible]するも、政府共に輿論が凡ての公示を避けるのは、當今の政情の下に於ては已むを得ないと見てやらねばなるまい。敢て揶きれもせぬ擁護の勞を取る積りはないが、其の能くせざるを資むるに至いて[illegible]よて若し夫れ[illegible]「[illegible]」の[illegible]とし、時を追うて徹底的革正を述くる[illegible]固より永く吾人の寛容を恃み得るものではない。

上院改革と農村振興

法學博士　堀江歸一

一

加藤内閣組閣以來今日に至るまで、全然手を觸れない問題は澤山あるが、其内でも今後如何に解決するか、方針の一端すら示すことを回避して居る二個の重大問題がある。其一は貴族院改革であつて　他の一は農村振興である。

貴族院改革問題に對しては、特別議會に於ける首相の施政方針演說中、之に善處すると云ふ言葉があつたが、是れでは何の方針も示したものと云へない。思ふに　政府の貴族院改革に關する方針は白紙であるやに見受けられる。少なくとも之を白紙の如くにして、下手な改革沙汰に依つて、貴族院の反政府熱を刺戟することを恐れるのであつて、此點に於ては、政府は貴族院と輿論との板挾みに陥つた觀なきを得ない。

然しながら政府としては何時までも斯る愚圖愚圖の態度を持續し得べきものではない。貴族院に對する國民の反感、續いて同院の改革論は貴族院が加藤内閣を援助し、又清浦内閣を擁立した關係から生じたようであるが、是れは表面の事であつて、更に深き原因がある。何故に近年此種の問題が世間に起つたか

と云へば、第一は貴族院の組成分子に對する民衆の不満足と第二は不完全なる組織の下に在る貴族院に大なる政治的權力を擁せしめるの不合理であるとする感情とに基くものに外ならない。貴族院を組織する重なる分子は成年に達した公侯爵、伯子男爵の各階級に於ける互選に依る當選者、勅選された者、多額納税者の代表者であつて、斯る徒をして貴族院を組織せしめる所以は貴族院をして有爵者有産者の利害を代表し無産者なり、無爵者なりの代表者を以つて組織される衆議院に相對して、國政に參與せしめる趣意に基くものであるかも知れないが、我國の貴族院に於て、衆議院は決して無産者の代表場に非ずして、卻つて有産者の代表場である、制限選擧の今日に於て然るが如く、普通選擧の行はれる將來に於ても亦然るものあるべしとする一方に、華族であつても、其當主として現に爵位を有する者に非ざる限り、衆議院に議席を有するを得る自由の開かれて居る場合に、華族と云ふ階級のみを特別扱にして、貴族院を組織する重要なる分子とするのは、餘りに有産者階級なり、特權階級なりに大なる便宜を與へたものと云はなければならないのみならず、公侯爵は規定の年齢に達すれば、單に華族の當主たるの故を以つて、伯子男爵の間に於ては、同爵間の選擧に依つて、貴族院の一員たるを得せしめるが如き、政治上に何等の訓練もなき、識見もなき紈袴子弟をして政界に跋扈せしめる所以であつて、天下に此位不公正なる、又不備なる事はないのである。原敬が貴族院操縦の爲めに、研究會を懷柔する手段を取り、陋來兎々と稱せられる徒が上院に蟠居して國政を我物顏に左右する端を開いたさうであるが、實は斯の如き形勢を生ずるに至つたのは、制度其ものゝ然らしめる所であつて華族と云ふ階級に單に其華族たるの故を以つて政權に參與せしめるのが間違の根本であり政治を階級的鬪爭に陷せしめる發端であると云はなければならない。

華族の代表者以外に貴族院を組織する者は多額納税者の代表者と勅選議員との二者である。各府縣の多額納税者間に於て、一名の代表者を選擧せしめる、多額納税者は其府縣に於て、多額の納税をする以上は、自ら富者であるに相違なく、斯くて多額納税者を貴族院議員に任命することは、貴族院をして有産的分子を參入しめる所以と稱るとするのに、一場の道理に適つた如くに思はれるが、富者其人が從來の如く其所有する財産の大部分を擧げて、會社に投用し、會社をして自己に代つて、納税せしめる方法を取るに至れば、多額納税者と富者とは全然別物と爲る。現に東京府の多額納税者十五名の内には、岩崎の主人もなければ、三井の主人もなく、一方に東京府の納税者中にも、

大[illegible]中に[illegible]の[illegible]であ[illegible]、更に大[illegible]に於ける納税者の[illegible]位に居る者の納税額が三萬七百八十六圓であるのに對して、沖縄縣の最低納税額が二百五十三圓であると云ふが如き[illegible]を重ねるものであつて、多額納税者の代表者を貴族院に列せしめることは、如何なる點から見ても、意味を成さない。若し其れ勅選議員に至つては、國家に功勞あり、又學識ある者の內から、選敍される規定であつて、帝國議會開會の當初に於ては、如何にも斯人なれば選敍に値すると認められるだけの人物が勅選されたやうであつたが、爾來年を重ねるに隨ひ、其選敍は濫妄と爲り、時の內閣に於て政務官の地位に就き、內閣更迭後、衣食の道を失ふ虞れある者が第一に勅選議員の候補者と爲り、時の政府に對して政治上の運動費を貢納した者亦續いて第二の候補者と爲り、元老大官に手蔓を求めて、運動を試みる者漸て第三の候補者と爲るが如き有樣であり、斯る情實に依つて、選敍された者が公侯爵議員と同じく、終身議員の職に居るが如き有樣であつては、貴族院に新鮮の氣風を注入することも亦困難であると考へられる。

故に私をして忌憚なく立言せしめれば、從來の如き組織の貴族院に改革を施すは無益の沙汰であつて、宜しく廢止す可きも[illegible]

[illegible]した[illegible]の下に、[illegible]を[illegible]せしめると共に、貴族院（[illegible]貴族院と云ふ[illegible]は之を改める）は各國各種の職業の代表者[illegible]、[illegible]合、醫師會、勞働組合、其他既設又は新設の各種職業團體の代表者をして之を組織せしめ、茲に始めて一院の知識經驗能力の足らざる所を他の一院に依つて、補はしめる效果を生ずる道理であり、貴族と云ふ特殊階級をして國民の大部分を占める所謂平民に對抗せしめるが如き虞れなきを得る所以である。此根本的改革を爲さず、貴族に政權を與へる從來の趣意を存續して、貴族院制度に多少の改正を試みた所で、改革の名を僭稱するの甚だしきものである。而して右の如き根本的改革の施された上院であれば、其權限の如き、特に衆議院に比較して、之を縮小する必要はあるまいと思はれる。

二

農村問題は如何にして之を解決す可きものであるか。農村問題の要訣は農村に居住し、農業に依つて、衣食する者の生活を安定し、彼等をして其業を樂ましめることに外ならない。此目

的を達するには、小作調停法を制定し、運用した所で、何等の川を盡さない如くに、農務省を新設し、農務行政の獨立を企てたとしても、一の效果を奏するものではない。農村の振興を謀るには、第一に變動殆と常なき米價をして今少し適當のものたらしむること、第二に一般物價と米價との間に均衡を保たしめ、前者の騰貴する場合に、後者をして獨り低落するが如き傾きのなからしめること、第三に農業勞働者の供給を豐富ならしめる爲め、農村の生活を愉快ならしめるは勿論農業勞働者の賃銀を上進せしめ、又斯く上進する賃銀を支拂ふに堪へて、農業者をして之に堪へしめること、第四に農業の調節を調劑する爲め、肥料の供給、購買組合の設立、金融上の便宜等に就て、國家的に公共團體の援助を與けることの施設を必要とする。外國米の輸入に對する關税の賦課や米穀法の運用の如き此類の當初に於ては、或は内地の農業者を保護することなり、或は内國に於ける米價の適當を維持するとかいふが如き目的を有するものと解されたが、實際の結果に徴すれば、所期に反する所大ならざるを得ない。

斯くて世間の一部に於ては、結局米穀の國家專賣にまで進まなければ、米價の適當、農業の保護を期することを得ないといふ議論を唱へるようであるが、私は專賣といふが如き極端なる手段は徒らに有害なし、此の如き所に達する爲に、尚ほ爲す可き方策の多々あることを信ずる。而して之を行うには、宜しく國家全體の利害に着眼す可きであつて、單に地方選擧民の歡心を繋ぐ爲めに、爲す可きものではない。加藤内閣は如何なる農村振興策を講ぜんとするものであるか。高橋農相の談話に於て發表した空漠たる意見の如きものを以つてしては、國民は唯呆れる外なき次第である。加藤内閣にも公正なる見地に於て適當なる農村振興策を樹立する人はあらう。速に計畫する所を示して、輿論を徴す可きである。

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も

一度「カロット」を口にすれば斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十五日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一箱を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる誠意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上げてお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は巻煙草をお吸ひになりましたが社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました刻煙草巻煙草等吸へないですねー、驚いたと御話いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に衆社員の方が續々立ちになつて「カロット」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の大要を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見人も巻煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適挿閑餅・蔘の特質を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用を凡てを少體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する悪き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他一步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット金貳圓 大凡百日分

パイプ 同 新流行ベークライト 五拾錢
同 象牙製サック入 壹圓五拾錢
パイプは三種の内希望の品御用命願升

	内地	臺、朝、樺
送料	十八錢	十九錢
引換送料	三十錢	五十五錢

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては郵書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一
榮川堂
振替東京五二九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地
代理店 天下堂



御殿女中の研究

鳶魚



一

御殿女中と云へば、直ぐに極彩色の施された妖艶な異性を想望する、何よりも彼等の奇麗であるのを、押繪や錦繪を眺めるのと同様な感賞に耽らうとする、其の御殿女中は柳営や諸侯の奥向に仕へる女流の概稱に相違もないが、將軍の居られる御本丸と大御所様（隱居した前將軍）又は大納言様（將軍の世子）が住まはれる西丸と、田安清水一橋を算へる御三卿の屋方とは、略々似たやうな規模であつても、只だ人數が尠いだけではない、まして大名は百萬石から一萬石までの分限を打込みにした唱へである、幕府の親類筋でも尾張紀州水戸の御三家、それから御家門といふのもある、其の餘を御譜代、外様と別けた、譜代といふのは三河以來恩顧の面々だ、外様は德川氏の家來でなく、幕府に從屬した大名なのだ、又國主、准國主、城主、城主格、無城などの格別けもあれば、上の御部屋、下の御部屋、溜の間、松の間、柳の間、帝鑑の間、雁の間、菊の間等の席別けもある、諸大名の格式は頗る煩雜であつた、品類等級の數が實に夥しい、大名の生活も其の格式と資力とに依つて千差萬別である、それに其の各自が時代柄家風を重じる、同級同格の大名でも奥向ばかりでなく、何事にも彼此融通しては考へられぬ事が多い、特に婦女の管掌する奥向は二百六十餘の大名の悉くが一軒々々に違つて居る、それは小異であつても、其の小異が餘りに多いので、全體の模様を大同に依つて統括した概論が許されぬ、さうして此の小異が御殿女中の誇りであつて、彼等の自尊

心を滿足させる消・の物なのだ。

大名の家風が區々別々であると共に、諸藩の武士は髮の結びやうから、兩刀の指へ方、其の差方が違ふ。衣服の着付までも同じでない程であるから、異性の方は殊に違ひ方が細い處に迄渉つて居る。それに諸藩の武士の階級も各府を見習つて定められたかと思ふと、必ずしも左様ばかりは往かず、家々に依てつ勝手放題なのがある。奥向も同様で御殿の大奥とは規模が違ふだけでなく、大分組織を異にして居る。些細な事が却つて偏執されるので、柳營相容れないやうになるとばかり見るのは間た、大名以外の風姿に依つて、他家から入込んだ場合に、お嫁さんの附添として來た者共が、勤め先方の家風を守らずれば格別、さもなくて甲方の時代を底に掛けて、斯うした仕來りだなどゝ頑張ると意外な紛糾を惹起す、まして將軍の娘が嫁入した場合には、附いて來た女中が大威張りで、御本丸風を盛に吹かせる。御守殿（將軍の娘が諸侯に嫁した後の尊稱、家齊將軍の頃は格式を省略して殘付けられ、御守殿様と云はずに御住居と云つた）の權勢には叶はない、お嫁さんの家の女共も隨分なぶられもする、隨分御本丸風で吹き捲つて了ふと、家ら家中の者の口だになる、さうした後日は財政困難の四苦八苦に陥り、其家の奥向きは非常に於揮された贅澤國であつただけに、其の紛事は紛紜が絶えぬか、孰れにしても好い結果を齎すものでない、それ故に意地惡く偏執するやうな様子をも、皆同な殿様も見逃し、何れにしても宜しい程な瑣末な事柄をも、委細承知して居る御家老様が頑張らせて置きもした、猜疑、嫉妬、拙折を丸めて拵へたやうにも思はれる御殿女中を、其の儘に利用して作爺偏倚の陥防にも備つたのである。

二

江戸時代の武家生活、殊に貴族の情況を知らうとするには、是非とも其の家庭に立入つて觀察したければならぬ、大名の數を盡くして一々に家々の奥向を考察すべくもない、夫りとて代表的のものも求め得られないのだ、將軍の家庭即ち千代田城の大奥の資料を以て、大名の家庭を推擬する譯に往かない、我等が推擬されぬと知つたのも、幾分か其の邊の消息を解した後の事であつた、今日も教會奥節、諸大名の一々に個別の若者をしたい希望を持つては居るが、其例は將軍から初めて、大諸侯の二三を調べれば、其の餘の小大名は推擬で十分知れるもののやうに思つて居た。

先年故人になられた大岡きせ子刀自、きせ子さんは御小納戸大岡與右衛門の女に生れ、御年寄瀧川を伯母にもち、大奥御殿

へ十三四[illegible]の間[illegible]つて最高級の奥[illegible]中山歌子に接した人である、我等に御本丸の高級を以てまつた經歴を聞くために、前後七年以の老刀自の許へ通つた、然るに聞せて貰ふ話の内には、不器用な我等には飲み込めない處があるので、調度を引き出して髪形や、衣服等の方面を實際的に試驗をさせたり、紙で姉樣を拵へさせて、結髪の標本にする抔のことを擬當させた、妙な處で山の神信者にならなければならない、イヤ御愛嬌なことである。

刀自の面前で筆記した幾冊かは、今日までも整理を畢らずに居た、それを刀自の談話と我等の解說及び挿話と紛れないやうに、稍々注意して是から書き出さうとする、我等は主として刀自の談話だけに止めて、成るべく其の他を顧みたくない、刀自に實歴のないこと又た忘れられたことは、それだけを不足にして別な方から補充せずに置かう。

現在では幕府の奥向のことを書いたものとしては、只だ明治二十五年に出版した千代田の大奥二冊があるのみに過ぎぬ、無二の典據になつて居る此の書は、故老先輩の間に頗る異論があつて、或は採用するに足らずとさへ云はれて居る、我等も御懇意な著者太田杏村氏は水戸藩士でもあり、材料蒐集には隨分奔走して、柳營の老女員を聞き廻つたものだ、それでも尙ほ失敗[illegible]武ご[illegible]な[illegible]でも大奥の事は知らないのでしたには、[illegible]時代だつて大奥女中自身の外は誰でも知らない境界である、さうして[illegible]に從つて居るのは大奥法度だけで、探さうにも[illegible]すみ、手に執りやうもありはせぬ、昔は面接することだに許されない高級な大奥女中も、幕府が潰滅した後は便宜に昔話の花を咲かせもする、昔を折つて聞き廻りさへすれば江戸の當時よりも、大奥のことは東京になつてからの方が知れ易いのである、今日では御本丸女中の生存者は一人もないが、太田氏の努力された頃には未だ〳〵大勢生きて居た、耳學問には都合の好い時期でもあつた、しかし奥向でも一人一役なのだ、當役の人でも出合せない事柄がある、太田氏は聞き集めることの多きを貪つて、只管多人數の口を頼んだ爲めに、本來諒解を持たない側間の事柄だけに、矛盾撞着を來した上に、聞き得なかつた部分を完備させたいために、水戸家其の他の奥向の話で補充したので、其の混淆の爲めに何處までが柳營の記事なのか辨別が附かず、千代田の大奥としては無實な事柄を含むやうにもなつたといふ批難に逢つた、我等は幽濕を其の儘に、專ら刀自の談話に忠實であらうとする

りのは、千代田の大奥の威儀に飾りたからである。去りとて余り物寂なものになつては、読者が迷惑だらう。

三

寺に去せり門は最高級な御年寄でもなく、長にすれば御小性どころの御中臈であつた。御宰所の御側を勤めた西脇だけに大奥諸せして誠に恰好である、お末やお端下でないにしても、低級な女中ではたゞ々様い御模様などは些少も知れぬ、それに御殿女中とか奥女中とか世間でいふのは、各職事はかりも目標に漠然と呼ぶので、奥向の仕女でさへあれば皆が皆縮緬のやうに綺麗な人間なのではない、役柄に依つて御化粧も違へば衣服も違ふ、御年寄といつても乾屋老人と極つては居ないが、若い者にも勤まらないお役もある、人柄も高く勤め向きも綺麗で、若い者の居るのは御中臈級である、従つて興味で眺めたにしても月門の文暗は不都合でもなからうと思ふ。

此の階級女中の職名を云つて置から、それは川柳が無造作に御中臈をばツイ・キに片附けて了ふ様に簡単なものではない、上臈御年寄、御年寄、御客應答、（御客會釋とも書く）、御中臈、御表使、御使、御右筆頭、御次頭、御右筆、同助、御錠口助、御次、御切手書、呉服之間頭、御広敷番頭、御三之間頭、御使番頭た、呉服之間、御広敷、御三之間、御末頭、火之番頭、使番頭、御仲居、同助、火之番、御茶之間、使番、御半下、といふ順序で、御本丸には都合凡二百五十人内外、西丸は其の半数の女中が居た、此の女中の数は時に依つて増減はあるが、先づ這ほどと概算して大過はなからう、勿論御部屋方といひ又た何といつて、女中等の部屋々々で召仕ふ人数は、上記以外の計算になつて居る。

それから大奥の間取、是等も大奥の局所は数張持つて居るが、多少の変革にあつても、略々一定の規模を保つたものだけに、著しい異同はない、大奥の間取を知つて居ないと、話の道に疲れるやうな場合もある、将軍が大奥へ来られて御泊になる御小座敷と、御宰所の御居間との距離だ、所位もあるのだから、御側を勤める御中臈が、御小座敷と御居間との間を通ふにしても、駈けには歩行かないが、別にノロ／＼せずとも、相当に暇がかゝるのである、今日の大臣官邸や華族といふ富豪とかの住宅と比較して、御本丸の様子の考へられないのも、斯うした底に茫漠へかゝるからだ、下旬に合點させるには図面で見せるより外に方法はない、扨帰つては御殿の生活から割り出して、御本丸の様子を想像するのが間違ひの根本だ、日常の市民生活から全く放れて聞かないと御本丸の話は受け容れられぬ。

[illegible]處は一切人を近づかない所、何事も其の手の者で扱ふ、將軍にして奥よりも中奥に起臥される方が多い、大奥には時々お出でで、將軍の私宅である、中奥と大奥との境界に錠口があつて、其處から出入をする、錠口の杉戸から内へは男子禁制なのだ、此の三つの區域は嚴重に、別たれて居る、御臺所は幕府の政廳を御存知がない、御一生に一度御表拜見といふ事がある、往々にして御表拜見をなさらずにおしまひなさる方もあつた、自宅の玄關や客室を見たこともない女房があるものか、昔の人間だけに馬鹿らしいなどと云ふ連中は、江戸時代の御臺所を談じる資格のない者共なのだ。

だが柳營も最初から斯うした規模のものでもなかつた、未だ戰國氣分を放れない時代には、御臺所が御表の玄關へ出ても來られたそうだ、三代將軍へ鷹司關白からお嫁さんが來て、大分物々しくなつたらしい、四代五代ともに京都から入輿があり、六代家宣も近衞關白の女を迎へて、特に儀式張つた事が好きでもあつたから、急に公卿かぶれがして大奥の模樣が激變した、其の後も御臺所は引續いて京都から御下向になり、中にも竹の園生の已なことない御方もあつて、公家武家の風儀で混成した奥向になつた、それ故に公家故實でも武家故實でも往かれない、[illegible]

大奥の[illegible]に就いては、まだ[illegible]た、七代將軍までは女性の[illegible]の間から生れたのが多い、其の後は從前に比較して御臺様の身柄が[illegible]になつた、儀式典禮を設備して將軍の尊さを自他に明白にした、其の頃は鋒先で天下を取つた武門武士も、これを何時迄も威勢にして、諸侯に臨み民衆に對するには足りなくなつたからである、家宣が忙しさうに新井白石に公卿の規模を取調べさせて、柳營の粧飾を急いだのを、必ずしも浅深倹性の發作とのみ見るのは間違ひであらう、九代十代あたりの將軍は快く公方様氣分になつて了つて、先代が何と思つて幕府内外の儀式典禮を設備したのかを考へやうともせぬ、當然に固有して居たかのやうに思つて居たらしい、無論三河の大庄屋から成り上つて、大名の大親分になつた徳川家なのを夢にも知らぬ顏付であつた。

統治上、まことに已むを得ない譯でもあらうが、將軍は非臣非俠の位置だと中井竹山も云つた、日本國王でもなく大名でもない、其の中間のものとして、公方様に成り濟して居たのである、御表では天下の諸侯を臣事させ、大奥では攝家清華の公卿

の娘を妾とした、さうした時世に、

梵字
大師陀於長座　南樂山
奉祈念恵天守護之攸
阿伽羅於尼公　平良寺

中ニ朱印アレド略ス

斯ういふ滑稽なものが戯作されて居る。揃に木版で印刷したのだ。此の押してある朱印の文字は、米加百五合貸の五字で、米が百に五合だからと読ませるのだ、偖本文の頭書に梵字めかしたのは、これの二字を合せたので、これに続けて左旁の下から逆に読めば、治良平さん、樂なところの御守殿へ年明奉公に。おらがあまちようを出したいとなる、是は天保五年に拵へたのだが。此の時のが最初のものではなく。見聞雑録には文政十一年のが写してある、これに押した朱印の怪文は。米百七合五勺も可難（米が百に七合五勺だから）とあつて。三行に書いた本文を逆に読むと。寺町平山樂南所之嬢守天恵、念祈奉光尼、於無阿伽阿家利時といふのだ。五年後に出た為めか文政のよりも。天保の方が今様の意匠も、文字の排列も何分か進歩したやうに見える、

居た。将軍家の大奥と大名の家庭とを打込みにしたに、最下級のお末も最高級の御年寄も引き括めた云ひ方ではあるが、孰れにしても御表の御奉公でなく、御殿女中に相違ないのだから、別に間違つても居らぬ、しかし御守殿と云ふ言葉をも同様に使用し、御殿風といふべき處を御守殿風といふのは間違である

前に云つた通り、将軍の娘を諸侯が迎へた時、新夫人の為めに御守殿が建てられ、表門とは別に御門を立つ、これを御守殿門といつた　大名の妻になつた将軍の娘を御守殿様と呼ぶ。江戸時代では只だ此の場合にのみ使用する例なのだ、けれども世間では何の用捨もなく此の言葉を濫ひ、御殿奉公と御守殿奉公も変つた意味がない、これは町人百姓の口から耳へ通ふだけであつた、公文書のみならず正しくは厳然たる差別が立つて居たいのである。

諸家奥女中袖鏡（安政五年刊）に五種の奉公人を挙げた、其の第一は、

親の家、貧しくして養育もなりがたく、是非なく奉公するなり、是は親のため、我が身のための奉公なれば、よく／＼物毎に堪へしのびて辛抱し、後々親を養ふに至られば、孝たるの道にあらず。親々に苦労をかけぬやう勤め申すべく候はば、後々は天道の加護あるべし。

前を[illegible]目見得[illegible]年金は町人百姓の娘には[illegible]
身分として一に引き、二に運、三に器量といふこと、貧賤で出世
の便宜にならぬ、何よりも好い縁を手蔓に[illegible]であつ
た、けれども町人百姓の娘では分限に依つて、如何に上級の人
に引き立てて貰つた處が、お火の番かお使番から先へは進め
ない、從つて頂戴物も切米五石御合力金七兩二人扶持（お火の
番）、若しくは切米四石御合力金五兩一人扶持（お使番）に過ぎ
ない、御本丸の話ではないが、我等の姻戚になる埼玉縣の庄屋
の娘が、尾州家の奥へ勤めてお使番になつた、親里から極つた
諸向への附け屆けの外に、年々百五十兩つゝ本人へ送つたと云
ふ、それは天保度の話である、決して身の爲めにも親の爲めに
もなつたものぢやない。

此の種類の御殿奉公は、貧乏な旗本御家人の娘がする、武士
の家に生れたお蔭で、高級な女中にもなれるから、本文のやう
な成績が豫期される、町人百姓から出た者は全く名聞だけであ
つて、貴人の行儀を聞き覺え、大名の作法を見習ふ、今日の卒
業證書を嫁入無二の持參にするのと同樣、幾年かの奥奉公を實
歴したことが　何程花嫁の光彩であつたか知れぬ。

判じ物のお札模造と洒落れた人は、權兵衞の事情には通じて
居らぬ、其の方の智識は殆ど無かつた、一體御守殿は數の尠い

[illegible]
つた、それにも大名[illegible]
なに豊な[illegible]ではない、[illegible]
いだけのこと、さうして御本丸でも大名でも　年季奉公など
といふのはなかつた、孰れも期限である、只だ低級な女中は暇
を願つて下ることが出來た、これでも若いものだけに自身を
病氣にして假病を申立てられもせぬ、親の病氣といふのが通り
相場であつた、其の場合に何故結婚を理由にしなかつたか、そ
れは勝手らしい申分として憚られたのである、其の他は眞の
病氣かさもなければ免職しての引退だ、高級女中になると正條
な一生奉公で、眞に病氣でも養生を命ぜられて、容易に御暇には
ならぬ　自身も引退する所存は始終ないのである、其の第二は、

家貧しからねども兄弟も多く、それ／＼の片付等も行屆き
かね、年頃迄は先づ奉公と思ふもあり、是は我身のための奉
公にして、親兄弟の厄介にならず、辛抱し正直にして勤めた
らば、後々は思はぬ立身もすべし、我が身の美名も發すれば
親の名も發すべし

是は最初から便宜退身する所存が見へて居る、そんな勝手な
奉公は御本丸や大諸侯の奥向での直勤には決して許されぬ、嚴
重な規模のない小諸侯の屋敷だと都合が好い、これに五七萬石

ほどの大名ならば、奉公する者の筋目や分限を嚴しく云はないから町人百姓の子供でも成り上つて役目が勤められる、とは云へ最高級の御年寄になれた處が、小諸侯の奥向の勤めでは、餘り名聞にもならぬ、幾分か富裕な町人百姓の娘が武家奉公をするのは、嫁入の商品準備なのであるから、名聞が何より先だ、さうすると彼等は小諸侯を擇ばない、民間一般の女奉公人から云へば、宥用な大名の家庭に低級な勤勞をするよりも、氣樂に町家の台所を働く方が喜まれる、畢竟身の拙い御家人又は浪士などの家族が、本項に該當する女中になるのだ、本項のみならず前項も小諸侯の奥向にしては御家人や浪人の娘に依つて配置される、其の第三に、

何一つ不足はなけれども、親の光ばかりに置ては、憂ひつらき事を知らず、人の難儀の思ひやりがなければ、嫁入しても誇りわるき故に、奉公に出るあり、且は少しの事にも宿元の有難を思ひ出し、奉公の誇りとなるものなり、其所よく〳〵うひつらいを辛抱して勤めたらば、嫁して後、夫へ事ふる道も正しかるべし、家の納りもよろしくなり、子孫繁昌の基ひ也

といふので、同書には人の心備なのを要録してある、本書が小諸侯を目標にして書き遺されたことは、宿元の有難を思ひ出すといふ一句で知れる、御本丸西丸でなくとも大諸侯の奥向で何か係町人百姓の富裕が思ひ出されるだらう、斯うしたことが小諸侯の生活の氣の毒なものであつたのを教へる。

五

加賀見山の中臈尾上は町人の娘、御年寄の岩藤は武家出であつた、それ故に『こな様の親御といふは、御屋敷のお金御用を勤めやるといふ、その川並顔の商人が鼻の先へぶらついて、コレ此の顔に見えるわいのふ〳〵、ヤ又上の事をいふぢやないが、金の威光はきつい物ぢや、此後とても其金儲顔やめにして下されい』と云はせてある、あの草履打ち一件は五萬四千石の石州濱田の城主、松平周防守康豊の奥向の出來事なのだ、浄瑠璃の作者は此處へ貧乏な武家出の岩藤と、富裕な町人の家に生れた尾上と對立させ、士商の階級抗争を描寫した、當時の小諸侯の家には實際斯うした情況があつた、尾上の母が今年は御暇を願つて好い聟を取らう、來年こそはと思ひながら、奥方が手放すのを惜まれる、餘りに尾上のお首尾が好いのに引かされて、二三年を過す間に不慮の椿事が起つたといふのも、町人の聟取、娘が其の經歴を飾らせる爲めの腰掛奉公であつたのを明にしたのだ。

[illegible]居候三負[illegible]の多い[illegible]
[illegible]
[illegible]、御本丸などでは[illegible]の女中にはなれるが、[illegible]
とも一役を引受け一責任を持つよりも、無責任な又た者を[illegible]んだ、それでも部屋々々の執務に堪へない子供上りが多いから、部屋子とか、お犬とかいふ、定まつた職事のない奉公をする、それ故に分限に依つて大奥女中を採用しても、御本丸の部屋々々には案外に百姓町人の娘が多かつた、親々の掛ける經費といひ、世間へ出ての待遇といひ、今日の高等女學校と女子大學との程度その儘に、大名奉公御本丸奉公が通用したのである、此の機微を穿つたから、鏡山の狂言は或る見物を存分に引附け得たのだ。

岩藤は『萬一狼狽者盗賊などが忍び入つた、その時は役柄ぢや、女ながらも御前の堅め、討ち止める器量がなければ、勤まらぬ奉公ぢや』と、尾上が武藝の素養のないのを叱つた、太平の世に壓の上の武家奉公、双刀を腰にした男さへ戰爭の夢も見ない、從つて撃劍の稽古などはせぬ、其の人を父にした女に何の嗜みがあらう、まして百姓町人の娘等は武家奉公とは思つても居ない、嫁入準備の長局暮し、無論それればかりが居るのではない、けれども奥向專門の泥坊稻葉小僧鼠小僧が、御本丸西丸

[illegible]
[illegible]
[illegible]甚、其の[illegible]
士の娘の住む長局に、幾年も[illegible]には[illegible]を、孰れの奥向でも追ひ[illegible]程のこととするならなかつたのを何と云はう、武家に生れたのを鼻に掛けて、岩藤の尚侍らしい放言も、こゝに至つて氣の毒千萬なものになる。

民間から見れば御殿女中か、孰れも嫁入り準備の娘で、奉公と修學と言葉は同じでないが、其の違ひは東京と江戸と時世が違ふほどの差はない、幾年かの長局暮しは、寄宿舍に住ふ高等女學校乃至女子大學の生徒と變らぬ氣分のものであつた、早く好いお聟さんの欲しいのは、結婚準備よりも痛切であることは、今も昔も年頃になつた女の心に異同がない、彼等が佶らん哉であるから、買はん哉で厚化粧の権幕に刮目する、御殿奉公を女子教育の高等なものと解して居た當時、民間から御本丸のみならず、大名の奥向への入學が多くなれば、なる程御殿女中が目立つて來る、御殿女中の悉くが良緣を待つ者ではない、それにも色々の志望かあり、様々な種類がある、又た身分の高下にも依るけれども、宿下り（賜暇）其の他の外出にも、目に附き易いのは民間から御奉公に出て居る佶らん哉の連中であつ

ただ其の箇條は、

嫁しては後夫の不如意にして。夫婦相談の上、双方作拘のために御奉公するあり。是は貞の道にして。着飾る抔の美麗の好なく。如何にも御主君を大事に致し。後聞きことなきやう。自分倹約を用ひ費へなく。夫へ貢ぎの心にて。かた時も忘れず相勤め候得は。貞節の道り誠に感ずべし。

といふので。是も小諸侯か。さもなくば高家方の局役（御本丸の高級女中の名頭ともいふべきもの）などにならう。其の箇條は。

年寄して子孫の厄介にならんよりはと。御奉公仕る心得にて出るあり。是は又隠居話しの事。衣裳の好みもなく。又美な事少々もなく。只御奉公大事と心がけ。自身倹約を用ひ。いかにも子孫の世話にならざるやうと。願ふ心は哀れたるものなりといへり。

以上の三項目位と見られる。其に民間からは出ない。第一の様な奉公振りが本旨にして認められるのに引へ替へて。此の箇條に正しく示されない證據である。それが町人の生活の高い階級にもきた。

今日の奥女中制度の分析を見し。奉公に三期あるのも知れた譯だ。即ち第一に若年（少女時代）、第二は中年（年増時代、女房期間）、第三は老年（後家時代）である。但其の記載事項を考へると。概して小諸侯の奥向に適當すべきもので。御本丸内丸へは勿論適當し認められさうもない。何様の事は一切屋敷にされたし。決して外間へは洩泄しない。何者も其處の消息を知らうやうもないが。若し知つたとしても分別の多寡を問はず。それを口外したら大變。或しは密告などで發表したら。如何なる刑罰を擬せられるだらうか。殆ど不測の事件といふべきである。たか此の危險を犯すべき智識を持つた者は。江戸時代になかつたと云つて差支へはなからう。

それよりも多數に入用なのは。小諸侯の奥女中に關することだ。是にしても詳細なものではない。流石に僅ほ其處する所もあれば。知り得られない事柄も多い。何と云つても奥向と云へば男子禁制の世界なのだから。遂一に口聞されぬ。しかし高等教育を御望する女子が多くないために。其の本人にもまた其の父母に。唱歌奥女中制度は教育ではない。今日なら女學校内なのである。其の新學校内は入學手續の面倒でない。資格問題の嚴しくない。比較的經費の少い。便宜に選學し得られる小諸侯の奥向が恰好であらう。左し當り以下の大名の數は多いから。收容人員も容易に得た。此の高等女學校程度の奉公人は。云ふまでもなく。女子大學に比較すべき御本丸等の奉公人よりも

[illegible]。[illegible]しい生徒心得書き[illegible]に拵へてあるのも面白い。町人百姓の[illegible]嫁入準備に[illegible]を公布するのは、資本の[illegible]になつて黄金の光に眩つた彼等の心から發生した[illegible]の贅澤に他ならぬ、經濟生活の停頓者たる大名、錢もないのに威張つて暮さうとする苦しさ、麹町には小諸侯專門の質屋があつた、江戸中には何軒あつたらう。御金御用達といふ者はあつても、顧みて呉れない場合もあつて、長持が幾棹も紺暖簾を潜り込む、大名は時代錯誤の巨魁として、戰國の殘存物である武門武士の頭目に過ぎぬ、百姓町人は自分等の條理ある現在の生活と矛盾した大名の家庭を見學させ、其の少分の模擬を喜悦しやうとするのは何事だ、敵前に馬を進めて桓武天皇何代の後胤と記憶にのみある先祖迄も持ち出して、晴れがましく名乘つた心を、戰場以外で繼承するのは、紛れもない虚榮心の行屆りだとは夢にも御存知がなく、それでも威張り足らないで京都仕入の貧乏公卿から女房を貰ひ、生蕎麥を味噌和へにしたやうな堂上家の眞似をする、其の御大名に何の見學すべき處があらう、それを高尚な事、結構な事と思ひ込だのは、時世といふことを云ひ分けにして、三年烏のセイだとしやうが、今日の若い人達なら町人百姓の無自覺を一番に叱り附けるだらう、だが[illegible]安だけに[illegible]果つ[illegible]た、歴史から[illegible]し得られる[illegible]大名の不合理無算用な生活も是非共或る期間を續けなければならかつたのだ、親の因果の報いの[illegible]い町人百姓が、[illegible]にも出されさうな畸形兒を抔と、昔苦いことを云ひたいやうでは、一東京ッ子の現在を主とした回顧に過ぎぬ、始めて江戸の[illegible]に近づかなければ、過去の實際に觸れられまい。

六

江戸時代の町人百姓の虚榮心を充たすものは、大名の生活であつた、殿樣ぐらしと云ひ、大名のやうだと云つて、羨みもすれば尊みもした、それの模擬は彼等の無上の贅澤であつて、制度法律が恐ろしいから、資本まかせに勝手に其の眞似もされない、或る機會を得て驕奢罪に問はれぬ範圍で、ホンに少々の眞似をするだけでも、彼等は畢生の大愉快と心得た、自分の一生は勿論、孫子の代になつても大名にはなれぬ、お大名樣に生れるのは宿世の果報なのだと、一方では[illegible]に絶望して居る、其の絶望は他方で人間希有な榮耀榮華を羨む心を强めて往く、さうして此の感觸は民間の財力が膨張するに從つて累加する、政

治に理解のない時代だけに。幕府にせよ、諸侯にせよ、其の政廳たる御表については一脚をも與へない。只だ民間からの羨望は貴族の家庭に於ける日常である。譯もなく殿様奥様の稱される奥向が嬉しいのである、それを民間では結構なものとして、得意満面で話たり。聞いたりするのをさへ喜んだ。御奉公がさせたい父母。御奉公のしたい娘。家の誇り身の譽れ。之を除いて他にはないと思ひ込ませもしたのである。

江戸時代の民衆生活も幾度か變化した、際立つた資本の偏斜、即ち貨幣の改鑄の度毎に、民間の財力集中が目立つと共に其の潜在勢力も顯出した、奢侈も段々増長する、殊更享保、元文、明和、文政と漸次に市井の資財ある者共の贅澤が募り、民間から御殿奉公をする若い女の數が殖へ、それ等が又た目立つても來る、江戸の黄金時代とも眺められた幕府三百年の榮華の頂點に立つたとも思はれた大御所様の十一代家齊は内寵が多く、子供が五十餘人あつたので、大奥の盛たことは前後に例のない程なのに、十二代將軍家慶も側人に富んだ公方様で、子供も二十四人を算へた、それ故に天保改革の前三四十年と云ふものは、奥向の陽氣なことは夥しい、諸大名も亦此の風儀に倣房を奉公させた、民間では益々贅澤生活が結構づくめなものに見て了ふ。

斯うした時に柳亭種彦の偐紫田舎源氏が發賣された、此の出版が當つたので、版元の鶴屋の曲り掛けた身上が直つたといふ、抑々鶴屋が源氏物語を通俗小説に書いて貰ふやうに、種彦に賴んだと傳へられて居るが、果して單純な注文であつたらう歟、話にしても憧れた御殿向、まして無類に陽氣な大御所様、公方様の近況、其處は見られぬ聞かれぬ場所だけに陰口も喋々しい、想像に耽つてまでも憧憬する、元來其處を覗つた草雙紙ではないの歟、さればこそ家齊將軍の大奥を描いたと當時にも思はれ、後々になつてもさう信ぜられて居る、我等が眺めた所では家齊のことよりも、家慶のことが描き入れてあるやうだ、更に偐田舎源氏が大奥小説として受け容られ、それに平生御殿する人間故高な生活が知れるものと見えて、類の草雙紙が競ひ讀まれた。

田舎源氏は文政十二年に初編を出した後、年々續刊して居たが、天保九年二月三日から市村座で、狂言の内御殿模様源氏紫を出した、是が田舎源氏の劇化に採用された最初である、さうして此の年には十八、十九、二十、二十一編を發行した、嘉永四年九月七日を初日に中村座で開演した源氏模様娘雛形は、田舎源氏を綯き交ぜに仕組んだのである、此の興行が稀有の大入り大當りで、湧き立つやうな人氣であつた、其の年の十一月十

七日に、[illegible]して、内緒の上手で假装田舎源氏[illegible]一騒ぎ、其衣の眞似をして遊び廻つたといふので問題になり、北町奉行井戸對馬守から處分された、池田屋には中村[illegible]の大當りを見て、芝居氣分で田舎源氏行列を企てたのかと云ふと、さうばかりでも無いのだ、田舎源氏の出版前に富澤町の能装束師柳屋長左衛門の悴鯉三郎が、文政二年二月廿二日に屋形船屋根船通ひ船茶船十七艘を隅田川に浮べ、四十餘人の太鼓持やら女藝者やらと、盃流しを遣らうとした、其の時には大名の眞似と云ひ、池田屋のは田舎源氏の趣向と云つた、しかし世間では柳屋の馬鹿遊びと同様に池田屋のも大名の眞似といふ、鯉三郎も市兵衛も全く同型の人物で、往き方も變りはない、豪遊の目的は或る時間を大名氣取で居たい、さうして見せびらかしたいのにある、只だ田舎源氏に托したのと、托さないで計畫されたゞけの違ひに過ぎぬ、是で市兵衛の心理狀態のみでなく、世間一般が田舎源氏を何と見て居たかゞ明白に知れる、それと共に田舎源氏が當時に歡迎され、芝居にしても大繁昌なのは、何が喜ばれて攫めた成績なのかも得心されやう。

田舎源氏の挿畫を引受けた國貞、後の龜井戸豐國は、盛に田舎源氏を持出し、それを應用して描いた多數な錦繪を出して居[illegible]因つて仕[illegible]ものはない、[illegible]いたものだと思つて[illegible]された[illegible]描いて居た錦繪には、明治になつて[illegible]御洋装でもあり、御馬車さへも出て來る畫面に、尚ほ[illegible]源氏繪の體裁が固執された、源氏繪は畢竟最高級生活に對する繪[illegible]の描法とされて居たから、新しい時世に至尊の御模様を寫すにも勿論適用されたのである、斯うして田舎源氏が此の方面に典據されたことは實に夥しい、だが果して公方様の生活や大奥に對して、若干の寫實をなし、何程の權威があるのだらう。

七

大評判の大奥小説は期待された何物をも持つて居ない、種彦が凝屋でもあり、意匠家でもある上に、丁寧な挿畫の圖按を國貞へ廻はした程だから、衣服調度等は御本丸特有の[illegible]故實を發揮して居るだらうと、我等なども是だけには望みを囑した、處が當つて見ると殆と典據にならぬ、挿畫よりも文章の方に當時の噂を上手に採り入れてある、其の噂の內には相應に有力なものもあれば、又た無根の虚説もあるが、孰れも耳に口を寄せてする內證の噂だけに興味を引く、それに源氏物語りの時代

ちやツト下げて、新古朦朧たる時代にして了ひ、公家とも武家とも附かぬ貴人の世界を描へ、種彦の得意な正本氣分を出して、お芝居で行かうとした、讀者に芝居で見る合卷物とも違ひ、草雙紙にしても大分勝手の違つた上品な處があると思つたらう、其の上に取込んだ暗が光る、ピカアリ〳〵、螢のやうに飛ばせた手際、飛ばせるといふ手數も今では意味深重に聞いて貰ひたい、成功などゝいふものに未だ御馳走になつた覺へはないが、大概斯うしたものらしい、首尾よく田舎源氏は大奥小説に成り済した。

種彦は高屋彦四郎といつて、幕府の小十人なのだ、其の役柄は將軍家の警手である、自身に些少でも奥向などの知識を得られる職掌でない、況に彼は何事をも知らぬ筈だ、しかし傳說されたには、彼の伯母とやらが大奥に勤めて居た、其の人から聞いて得た知識だといふ、それは噓だ、江戸時代の奥向奉公人は役柄の高下に拘らず、御杉戸より内の事は一際口外しまいと誓詞を書いた上で勤める、是は將軍から諸大名の家々迄の通例で、それが婦女だけに堅く守られ、長局の部屋〳〵の話はしても、上々樣の御邊のことは親子夫婦の間でも一言として漏さなかつた、結婚準備の見學連中にしても、御本丸では部屋方限り、小諸侯の家では直の奉公もあつた、假令五七萬石の奥向にした處が、奥女中一般の話題になつて居たから、或る程度はキヤン〳〵ながらも嚴めしく逸作した、然るに種彦の伯母さんだけが、大奥の秘密を語つたとは思はれぬ、のみならず田舎源氏を點檢するのに、部屋〳〵の模樣さへも典據のあるのはない、聞き知つたことをも用心して逃げたと云へば格別、正面から此の草雙紙の上で種彦の大奥知識を認定することは無駄である。

江戸時代に大奥の知識がなかつた、種彦は位置こそ高くないものゝ、徳川氏の家人なのだが、職掌が違ふので一向知らない、我等の久しいお馴染である山中共古先生は、御廣敷添番を世襲する家に生れ、御自身にも天璋院樣（家定將軍の御臺所）、靜寛院宮樣（家茂將軍の御臺所和宮樣）の御番を、維新の際まで勤仕されたが、職掌として女中方の警備に當つても居られたから、御使番以上の女中の顔を見たことがない、添番の詰所は御廣敷御玄關の次にある、御廣敷は奥向への出入に必ず經由する處で、女中の昇降口も其處にあるのだ、此處を守護する役目であつても、奥向の模樣は全く分らない、奥向は男子禁制で醫者を除くの外、御廣敷から先へ進入する者はない、それ程であるから身分の高下に拘らず幕臣でも、大奥の事は些少も知らぬ、將軍のお側を勤める御小姓御納戸でも、往かれない、大奥の事は大奥の者だけが知つて居るので、其の他は何物も知らな

い譯だ、[illegible]のものだからと云つて、[illegible]に依つて、奥向き[illegible]亂なことであるが、[illegible]お家が[illegible]方面の[illegible]なしに[illegible]せて造り出したものなのを信用すべくもない、最初から間違つて居るものなのだ、若し多少の聞き嚙りがあつたにしても、物騒だから忌避する、折角の知識も持ち出せぬ、耳學問があるだけ餘計に逃げ仕度をするから、尚ほ更典據になるやうな製作はない勘定だ。

八

我等は曾祖父の買つて置いた隠し題の繪皿を持つて居る、皿の底に題を書いて、表には句と畫とがある、

うしほにの鯛の賞味や名も高し　吉原
切賣のまぐろのさしみ味もよし　深川
酒呑のよく喰たがる干がれい　品川
すつぽんの値段を聞て恐れけり　芳町
白魚は子持になるといやになる　圍ひ者
あつさりと奇麗に見へし洗鯉　藝者
香ひには誰もこがるゝ鰻かな　御守殿
すましにはまた水くさしさより哉　木娘
[illegible]
[illegible]
[illegible]
つまみ喰[illegible]　下女
どこにてもなくてはならぬ[illegible]　女房

といふので遠慮なく[illegible]出した文[illegible]人の婦女品隲なのだ　何から見て何を味はうとするの歟　丸で落語に繰り返される「[illegible]むすめ夏は藝者で秋は女郎　冬はおかこ（圍ひ者外妾）で春は女房」といふのと、同じ氣持なものなのも宜しいとして、其の内にある御守殿といふのは奥女中のことで　何日にも武家武門の頭目に奉仕する女流を、吉原や深川の娼婦同様に扱つてあるのは、公方様やお大名衆に對して許し難い冒瀆でもあれば　奥女中一般についても怪しからぬ侮辱である、それの全部が異性の悉くを玩物視して掛つた不埒だが、別けて奥女中を菜糧食ひにしたい口氣を聞き棄てにされやうぞ、云ふまでもないが誰の支配する江戸だと思ふのだ、

お腹は立たれな、腹形が悪くなります、奥女中が世間に目立つて來た理由も、彼等が估らん哉の態度で居た譯も、既に前述を經て居る、奥女中の全部が目立たせたのでもなく、估らん哉でもない、其の中の或數だけが　嫁入準備の腰掛け奉公で[illegible]

たのだ、それ等は倦らるべき弱味を持つても居る。殊に宿下り其の他の外出を機會に、大に自分を見られたがりもすれば、目立たせやうともした、概して男早りのする傾向に勤めて、永年の××[illegible]に惱んで居ると邪推量をされて居る、其の椎茸髱の群の中に宵行きを急ぐ一派があつたから、忽ち其の市價を狂はせもする筈だ。

繪画に書いた隱し題の表現する心理狀態は、實に代表的のもので、極端な發露は今日も時々上演されてお馴染にもなつて居る、其の河竹默阿彌の網模樣燈籠菊桐などである、小猿七之助と奥女中瀧川　如何に強く其の匂ひに心醉したのか、それより稍々穩に往つたのが同作の白浪五人女で、女賊洲走お熊が奥女中に化けて男を釣る趣向、蒲焼の匂ひを堪へられないものと極めて居たから、因ひ打ちもするのだ、それに繹つた清元の夕立「意氣なおかたにつり合はぬ、やぼなやの字の屋敷者、十のとしからお小性を勤めふとしてお側役、はたちは越せどいろ話は、袖きびしく目まの路にも濡れし事はなく、あとはいらへも只つとの雨のかをりなまめかし」が當時に喜ばれたのみならず、今日も尚は唄はれて居る。默阿彌の此二作は前作が安政四年、後作が慶應元年に上演された。

又た結構[illegible]の腰掛け奉公を穿つたものに、[illegible]南北の當[illegible]八幡祭がある、それは文化七年に書き下された、鵜野家の奥女中關屋が御代參の歸りに、密會した現場を押へられて放逐される、其の嫁見と見せた魂胆も　實は騙つても金が出ないのに困つた餘りの窮策が成功したのだといふ、科白でも「結構な身の上を、拵へ事して暇を取るとは、男の意氣地も女の操も、そこらだ〳〵」などと云はせてある、斯うした押し附け細工を見物が受けたのも奥女中が世間で騒がれて居る時だからのこと。

爲永春水の人情本に幾多の佳人艶女を書く中に[illegible]では色男の宗次郎に、紅葉といふ去る御屋敷にお小性を勤めて居る親類の娘を掴んで、特殊な趣味を拵へ、「流行に大家の給仕、御前勤めの行雑さは、勧學院の雀ならねと、風雅の道も開き習ゆるぞ床しけれ」と褒め上げて、御殿奉公が高等教育であり奥女中が文化の女であることを尊重させた、南北、默阿彌、春水の作物、また外にも澤山あらうが、孰れも寫實から云へば随分怪しい物であるが、何にもせよ材料にして趣向を立てたのは、奥女中について人氣が凄しかつたからに他ならぬ。

其人氣は隱し題が表現した心理狀態から發生したもので、眼先に極彩色の妖艶な異性の俤を、チラ〳〵させながらの妄念妄想なのだ。それは今日の東京にあつても繼承されて居りはせぬか。其處へ是から實際の御殿女中を持出す。始めて正直にま

せる時用の[illegible]やう。[illegible]だらう。さうして[illegible]た我等の[illegible]な[illegible]したと思られはせぬか。[illegible]の大奥及大奥女中[illegible]らうとするな々には、必らずしも御迷惑ばかりでもあるまいと思ふ。それが已に[illegible]てないならお互様に[illegible]である。

九

老刀自は語る

お中臈は筆頭の人だけ部屋を頂きます、其の他のお中臈は大概役人（此役人といふことは後に説明がある）の二階に住つて居ました、お中臈にも二通りで、お清のお中臈とお手附きのお中臈とありました、お手附きを召出す時には御用掛（御年寄の中の主役）と相談して、御年寄が極めるのです、極りますと世話親を拵へます、世話親になるのは御客會釋（同役兩三人あり）か、御錠口（四人乃至六人の同役あり）です、お中臈の席次は御客會釋の下、御錠口の上なのですけれども、御錠口を上へ立てるのが例になつて居ました、お手附を召出すのに、御庭のお目見といふことがありました、當人に御庭をあるかせて、上様（將軍）が御覽なさる、お清の方は順に進んでお中臈になるのです、お中臈に限らず御奉公に上がる者は皆願ひ親といふのがあ[illegible]、[illegible]に入り、[illegible]になつて[illegible]お[illegible]につしにおつてゐた、それから[illegible]に[illegible]年に二十六歳で[illegible]したといふ

お手附きになる者は身分ですが、規則は旗本家に限つて居ました、御部屋と申すのは御寄附のあと、五ヶ月の間住ふので、お産後は元の御部屋へ戻ります、お内證様と申すのは上（公子）をお持ち申した人のことで、後には姫君様の格式を頂きます、姫君を持つた者は御婚儀があつた後に、姫君様から緋の袴を下さるのが極りでした、けれども御遠慮申上げて着用いたしません、其の人が袴をはきます時には樺色のを着けました、緋の袴は御簾中様（將軍の世子夫人）と姫君様だけでした（御臺所は勿論着用される、其の外には世子夫人と公女のみ）、

昭徳院様（家茂將軍）には天璋院様（家定將軍御臺所　寔居される時は皆院號を唱へる）御附中臈が御手附きになりましたが、宮様お出（皇妹和宮降嫁）について、御内々になりました（沙汰なしになる）、溫恭院様（家定將軍）の時に、お三の間がお手附きになりまして、おしがといつてお中臈を勤めました、（是は御内々にならなかつたのである）。

お中臈には金四十兩（是を御合力金と云つた）、六人扶持、

御扶米四十石、年の末に御與金十両づゝ下されました、お中臈は大概二人ぐらゐづゝ、錦ひ殿の二階に合宿して、五六人の女共（又た者とも部屋方とも云つた）を置つて居りました、お次ぎならば三四人、お三の間ならば二人と云つたやうに段々召仕の數が減じます。

お中臈の出番は朝四つ（午前十時）から八つ（午後二時）に引きまして、夜になつて又た出ます、交替は翌朝です、お泊（晩出、早勤）には正午又たは八つ（午後二時）から出ました、（お中臈の全體を三分し、出番お泊非番と順次繰返す、御番割りといつて、其の順番が定められて居た）御側には常に出番お中臈が二人づゝ居ります、夜の宿直も中年寄一人、中臈一人、都合二人づゝ御側へ伏せり、其の他は御下段へ寢ました。

中老とも書きますが、中臈と書くのが正しいのです。お下付お部屋頭は乃と申すのも、下ゝの者へ向はるので、御寵愛に依つて一向お取扱ひをなさるのではありません、お下附は指輪を嵌めて居たなどと、近頃何かの本に書いたのがあるさうですが、決して無い事でした、御目見以上の者は誰一人、指輪などを嵌めた者はありません。

文恭院様（家斉）の御寵愛になつたお美代の方は、專行院と申して二の丸の住ひへ、お部屋の間を拵へ、頂いた御位牌（故將軍め）の御守りをして居ました、此のお清の間は一切人を入れません、大奥にもお清の間と大清の間とありました、お清の方が佛で、大清は神道です、奥のお清大清はお側坊主の受持ちです、お清へは居附でも外間の者は入れません、お側坊主はお次の下へ附きます、四十歳から五十歳ぐらゐの年配のが四人居りました、お側坊主は席以下（奥女中の待遇は御目見以上、御目見以下とあり、御目見以下を席以上、席以下に別つ）からも出ますが、ギョケイ（將軍の御刀）を持ちまして御坐への出入を致します。

御年寄は六人でした、中年寄が四人、是は御臺所御簾中様（西丸の世子夫人）姫君様に限つて附くので、上様（將軍のこと）大納言様（世子）其の外すべて男の方には附きません、中臈頭二人、是は中年寄の助けです、中臈は二三人、別に上様附（將軍附のこと、中臈は御臺所に附屬するもの故、將軍附きを上様附といふが御臺所附きとは云はない）が七八人ありました。

御客會釋は奥と御廣敷と二人あります、姫君様附御年寄と同格ですから、中臈よりは格が上です、御留守居（表の最高の官で、宮廷の宮内大臣といつたやうな役）廻りといつて、時々御廣敷を見廻る時にも出迎ひます、姫君様方（他家へ御入輿になつた後）の御登城にも出ます、奥への御客は一切上様の御客

にし[illegible]せん。

御留守居廻りですか、一ケ月に一度づゝ、御下男がさきに立ち、『おまわり〳〵』と觸れます、使番表使が附いて部屋々々の廊下を廻るだけて、別に何んといふ事もありはしません。

それから御錠口？同じく助、表使、御右筆頭、御右筆、お次、呉服の間といつた御役順（役順については前記三を參照されたし、爰には老刀自の談話のまゝにしるし置く）です、此の御錠口といふ名稱は、上樣が奥へ出入なさる御廊下、上のお鈴廊下と申して、鈴の附いた紐を張つてあります、その紐を表から引いて鈴を鳴せば奥へお入りなさる知らせ又た奥から引いて鈴を鳴せば表へお出になる合圖なのです、下のお鈴廊下といふのもありますが、それは非常口で日常御用のない處です、夜になると上下の御廊下の紐を繋げます、繋げると長さ一町程になりませう、お鈴の紐は太い萠黄の打紐でした、上の御出入の外にお鈴の紐に觸れて鳴らしたら大變な間違になりますから、誰彼にも緊しく申渡されて居ました、奥への通路は此の上下のお鈴廊下の外にありません、御錠口の役目は奥の出入口を見張ることですから、お役の名にもなつたのです、御錠口はまた奥向の御食事御衣類などに係り合ひますが、其の品々が御錠口を通るか

[illegible]

[illegible]ります。

十

御年寄は金六十兩十人扶持、此の扶持は部屋で遣つて居ります者の數だけ下さる、御藏米御合力五十石、炭一ケ月六十俵、薪三十把づゝ、又は別段に湯の木といつて餘計に下さる、御給金御合力御扶持は五月と十月と二度に頂きます、又每年一度上からも御臺所からも黄金三枚（黄金何枚といふは大判のこと）づゝの下されがございました、御年寄勤役中は孰れも町屋敷を賜はります、瀧山（老刀自の伯母で御年寄）などは飯田町で頂きましたから、年々地代が五兩三分二朱づゝ上りました、好い場所を拜領した人は隨分地代が餘計に上ります、日本橋邊を賜はりますと八兩にも九兩にもなつたと云ひます。

爰で我等は少々說明したい、町屋敷は全く地代を收得させるための恩賜であつた、奥のみに居るので其處へ建築して住居する等はない、老後の隱宅を拵へやうにも、町に住めるのは退役してからのことだ、退役すれば拜領地は返上する定めで見れば、御年寄の拜領地の意味は知れやう、御年寄の收得は內證のものは別にして、表向き御切米、御合力、御扶持、町屋敷の地代、薪

炭油・五菜銀の六種である、此の町屋敷の地代を收得することは、御年寄の外に表使だけで、他の五種は總ての女中が共有する、最下級のお半下までが請取るのだ。

其の五種、御切米は幕府の米藏から請取るので、知行のない武士と同様であるが、只だ武士は三季御切米と云つて、春夏冬に請取るのを、女中衆は二度に請取るだけが違ふ、御合力は御合力金ともいふ、小判で頂くのだ、武士に御役金といふのがあるが、それとは意味が別だ、幕府の初めには諸大名が競つて獻上物をした、その際に奥向末々の女中まで一々に附屆した、三代將軍の時に大名から奥向女中への進物を制限したので、例の春日の局が大名から貰はぬ代りに、特別手當を恩賜されるやう願つた、それで御合力金の給與を生じたと傳へられる、御扶持は女中自身及び部屋での召仕の食料で、現米の給與である、薪炭油も部屋での需要に充てる、五菜銀は大抵假字でゴサイと書いて居る、如何なる文字を書くのが正しいか、我等が聞いて見た故老で知つて居る人はなかつた、五菜とも書いてあるが只だ音を借りた迄で、字義に關係はない、副食物の代價らしくも思はれけれども、御用紙を見た方が宜しからう。

大奥にはお女といふものはありません、御年寄が一番重い人です、御年寄の中に一人、御用掛といふのがあります、御用掛が外出する時には十萬石の格式で、御老中（幕閣の大臣）と釣り合なのでした、さうですからお中臈が御小姓、お次がお小納戸に釣り合ひませう、御用掛は常に御用御取次（將軍の側に勤める、旗本衆から昇任する）と內談します、その事柄は何ですか秘密になつて居て、誰も存じません、政事向の御用もあるらしい。

上臈は御年寄の上位といふところになつて居ましたが是は少し女臈は公卿衆の娘に限つたものです、（上臈は表の高家と同じで式部官に似たもので、位置は大奥第一なのだが、實權實力を持たせぬやうにしてあつた）、御用掛は御年寄から勤める例で、上臈が勤めることは稀な事でした、[illegible]などいふ人は拔群なお人だつたさうで、上臈で御用掛を勤めました、（是は十五代將軍の際だといふ。）

上臈年寄の誓詞は御用掛が立合つて、御老中の前で致します誓詞は御右筆が讀むのです、合ひ風俗、合ひ床 同答間爽の場制などの箇目もありまして、別に違つても居りません、誓詞は二度するものではない故、名々が昇進して御年寄になりましたのは、御年寄に上つた時に濟んで居るのですから、モウ一度誓詞をすることはありませんが、京都から來た人にはあることです、若しくは上臈年寄と申す筈ですけれども、新例上臈としか申し

ません、上﨟さんは閑散なものでした。

御年寄になる者は必ず御客會釋を勤めなければならない定めなので、瀨川などは御錠口から御年寄になります時に、三月だけ御客會釋を勤めました

御年寄には年番と月番とがありました、御年寄が廟山（芝上野）御代參（御靈所の）には表使が附いて往きます、表使の席順は中﨟とお次の間です、又た御年寄は上使に立ちます、尾州家などへ參りました時には反物ばかりも十二反ぐらゐ出ました（貰ひ物が多い）、供をするのは局（自分の部屋の使用人）一人、タモン（自分の下女、正しい文字は知れぬ、多くは假字書きで、或は多門と書いたのもある）二人が駕籠側に附く、添番（是は奧向役人で、女中の召仕ふ者ではない、百俵貰ふ幕府の御家人なのだ）、一人、駕籠の者四人、合羽籠、挾箱一人づゝ、是は三河町から人足を雇ひ上げるのでした。

御年寄が病氣で下りますと、上から毎日添番一人、お小人（將軍家の雜掌ともいふべき御家人）一人を、自宅へ詰めさせます、本人の宿が小身だと差支へるゆへ、自宅へ下らずに養生所（虎の門外にあつた）を拜借します、さうすれば添番お小人も其處へ詰める、上﨟は京都から來た人ですから、江戸に自宅はないので、養生所を拜借して下がる、其の餘は中﨟以下、孰

たち[illegible]といふことは[illegible]
きた[illegible]ありません[illegible]

御年寄の側には[illegible]、御中居[illegible]て附いて往きます、其の他を[illegible]部屋に付いて行くのです、中﨟になりますと附いて往く部屋方が一人です。

御年寄が奧へ出て居ります間は、御着から御次の上下、次手までお三の間が給仕をします、中﨟でもお三の間が御着の世話をいたしますが、多くは茶床（三人くらゐの定員）が手傳に來ます、茶床はお中居の格です

御客會釋からも御年寄になります、中年寄からも昇進します、上樣附から御役替へをする人もあり、上樣附に轉勤する人もあります、中年寄は上樣附にない役で、御女性にばかり附いて居ります。

御錠口には別に上樣附きとは云ひませんが、上樣へ附いたものです、本役が四人、助が二人、助は本役と勤向は同じでも、おの字名です、此の役は上の召物のお食事のお世話を申し上げます。

表使は六七人、宿直は一人づゝ、御女性にあつて、男の御方にはない表役です、姫君樣方には表使が四人くらゐづゝ付きます、お切手書き、奧より外へ出入する御門の切手を認めて渡す

役人、此の外に御右筆頭、御次頭が御目見以上です、略して以上以下と云ひます、以上は御目見以上、以下は御目見以下なので、以上は御台所の御目通りへ出られる身分、以下は出られない身分なのです。

御右筆とも書きますが、偏のない方が正しい、御右筆と書くのが正しいのだと云ひます、御右筆から表使になります、呉服の間は縫ひ物の役目、お使番は三十人ほどあります、下手といひまして、八丈ぐらゐの衣類、それでも白（後の衣類の話の處に評し）を着ました、故参のお末の内から引上げられるのです。

昇進の順序は呉服の間・お広座敷＝お三の間＝お次とお役替をしては進みます。けれどもお広座敷＝御右筆・表使で止つて了ふ人が多うかつたやうです、瀧山などはお錠口助・お錠口＝お客会釈・御年寄と順に段々上つたのです、お三の間からお次になり、お中臈・お手付き）になつた人もありましたが、呉服の間からお三の間へお役替をした者は稀うございました、呉服の間は大概町かすじまひで、呉服の間頭になれば行き止りです、此處では新しくお仲間（同役のこと）になつた者を針子といつて、其處の先達になつた者（故参の有力者）は新参の者を引き廻します、それで先達の者の手には針子が多く附くのです、針子を餘計に持つた者が、頭にもなれる譯でした。

呉服の間では針の先きが一分欠けになくなつても、それが出ない内は大變な騒ぎで、白洲庭の小砂利を篩いた處までも浚つて捜します程ですから、部屋の内は申す迄もありません、捜して居る間は幾日でも、針のなくなつた日に着て居た着物を着たまゝ各々の部屋へは歸へしません、てんでに自分の部屋〴〵から別な着物を取寄せて着て歸るのです、針の数は一々勘定させるのです、針親が厳重に、平日針の取締をして、針がなくなつた時は、中は一同へ御馳走を出して捜させるのです、針親の入用に大變でした、針親を怨んで針子が針を一本盗んだのが知れて、下げられた（お暇になること）ことなどもありました。

役人と申すのはおの字名を除いて、其の他の者をいふのです、御年寄は三字名（瀧山、野村、浦尾など、假字書きにしての数）、お中臈・お三の間・呉服の間・御右筆・御広敷に於ける字名で私（老刀自みづからをいふ）なども、お次ではやのと申し、お中臈になりましてからはませと申しました、御役替への度毎に名を改めます、役に附いた名があるのでした、（假字で二字の名におを附けて呼ぶのがおの字名で、三字名にはおが附けられない、おやの、おませとは呼べるか、お瀧山、お野村などゝは呼べたものでない、さう仕向けたのであつた、役人はお

[illegible]

[illegible]

はない、[illegible]

れた。[illegible]つた役向といふ意味であらう）。

[illegible]

十一

お三の間から上の召仕しには、御廣坐敷（お座敷とは違ふ、混同しては往けない）で、御年寄から御宛行書（給與月錄）を渡し、名前も下さる、役人ならば三字名、お中﨟ならばおの字名です、席以下の者（御廣坐敷、お使番、乃至お末など）は、役々の頭から御宛行書を渡します、席以下の者でも奥へ這入れば、實家で呼んだ名のまゝで居るものは一人もありません、乾度改名します、役についた名があるからです、公家衆の娘は京都から名を持つて來てありますから、それを繼いで代々名になつて居ました、（是は上﨟小上﨟のことで、上﨟には常盤井、三室、岩橋、飛鳥井、萬里小路、花園、歌橋、豐原などの通り名があり小上﨟にもおの字の通り名があつた）。

部屋子から御奉公に出るのは願ひ親から、願ひ出して何月何日御吟味といふ沙汰のあるのを待ちます、御吟味の當日になつて、夏ならば提帶、冬ならば掻取で、お廣座敷へ出て御年寄に[illegible]と書き、親の名と自分の名とを書付けて差出します、昔は制形も添へて出し、前の文言も其の場で書いたさうですが、書けないものがあつて、願ひ親が面目を失つたことがあつて、後で認めて持參するやうになつたのだと云ひます（是が御直に勤める女中で、部屋〳〵で遣はれる又者ではないのだから、何の嗜みもないのが、多かつたのを隱し切れない、今日なら無試驗入學なのだ）、又た制形も差上げないやうになりました（御直の御奉公は更に旗本御家人の娘が志願するのであるのに、技能の心得さへないのもあつたらしい、却つて部屋方に奉公する町人百姓の娘の方が、素養があるかも知れぬ）、それから宿の方へ身許調べがあり、大概三十日ぐらゐ、中には五十日も掛るのがありました、身許調べが濟むと、當人へ、何月何日引越上り可申候といふ御沙汰書が參る、名宛は其の當人で、召す方の名は無いものです、大概願親の部屋へお座敷のお末が持つて來ますが、當人の宅へ黑鍬（柳營の仕丁、小使よりは格が宜しい、江原素六氏は此の黑鍬から出身したのだ）が屆けもする、その時は皮の

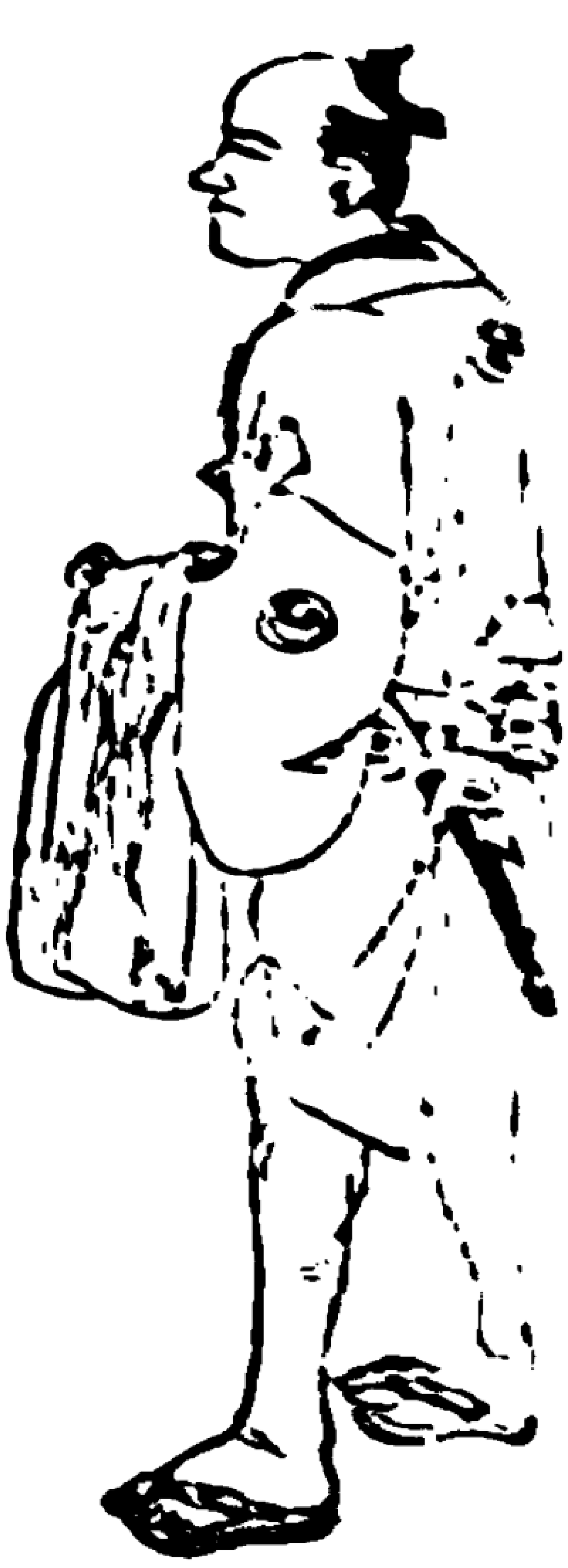
女中へ入れてあります、（當人が部屋子に出ずに、自宅に居る場合のことゝ）、其の時には召狀によつて、當日は願ひ親（是は奥に勤めて居る人に限るのだ）の部屋で時刻を持ち合せ、願ひ親附添ひで、午前八時頃にお廣座敷へ出ます、衣類は白紗小袖（縮緬縫入、部屋子には十歳未滿の者もあり、それが十二三になつて出仕するのが多い、部屋子からでなく出仕する者にも同年輩のもあるが、それよりは概して年長であつたといふ）。
此處で御年寄から御宛行書、名前、役向を頂く、それ迄は何の役に召されたのか知れません、御目見以上の者は綸子、お次（お目見以下其の他は縮緬でも綸綿でも宜しい、それを着て、其の日に御臺所へ御目見をいたします、御目見は常の御座敷で、御目見以上の者は御座の外、お次の際で拜禮をいたし、御目見以下の者はお二の間の外でお辭儀をいたします、（お次ぎ等は御目見以下でも席以上だから、遠く隔つて居ても、御臺所に對してお辭儀をする、席以下ならば此のお辭儀も出來ないのである、御目見以下に席以上以下と稱する其の席に、此のお辭儀（御目見へられて居るか否かといふ差別のやうに考へられる、或は御目見以上を高級女中とし、席以下を低級女中と書いて居る）、お三の間は席以下で、御茶子其の他の器物を清めると、席以上のお次にお三の間の扱つた器物の上拭ひをするといつた役柄なのです、お次からお中臈に進むのが順です。
前に申した御茶所といふのは御狂言師の上座の者をいふので、其の下に附いたお犬子供、略してお犬とばかり申しました、名前も奥の食事の殘りのものをたべて居るから、お犬と云ふのだと云ひます、（お犬には御宛行なし、目外になつて居る、從つて分限格式もない、川柳に『小間物を出すとお犬が寄つて來る』といふのがある、是は獸類の犬ではない、奥のお犬なのだ、部屋々々へ來る物賣婆さんが、包みを擴げて喜ばれそうな粉や紅白粉を出すと、其の周圍へお犬子供が集る、反吐のことを小間物といふ、路上で醉漢が嘔吐する、それを犬が食ひに寄つて來る、奥の奇態事を路傍の醉漢事に引掛て、巧妙に云ひ做した處に手際がある）お茶所お茶の間（柳營には御狂言師なく、お茶の間の者が勤める）、お犬が御側近い處で、四方を屏風圍にした中で、お踊り物を勤めます、毎日ではありませんが、御精進日（香典はじめ前代其の他の忌日で月々七八日は御精進日になつて居る）の外は、正午から夜の六時乃至十時まで、お踊り物がありました。

十二

部屋は一の側に御年寄、二の側に御客會釋、御錠口、三の側

円の□に表使などを仕ひます、其の外に合せさま、合ますとこいふ下女といふのもありました、これも一の側、二の側、三の側までありました（是が長局で何の側と云へば、住ふ女中の格式が直ぐに知れる、又た下手の者の住ひは何の側と呼ばずに、何の側と云ふので、是れ又た格式が知れる）、

御年寄の部屋には局一人、側六人、タモン（炊事を擔當する、下女）四人、外にゴサイ二人、是は男ですから部屋へは來られません、毎日御廣敷の裏にある勾欄まで來て居ます、お下（宿元のこと）への使ひ、其の他の外用を働くものです、勿論町の買ひものをさせる、ゴサイは旦那（自分が遣はれて居る女主人）の物を盜むのが仕事だと云はれて居りました、賄食は旦那の部屋から貰ひます、詰所は勾欄の向ふにありました、銘仙の羽識に一本差しといふ風俗、部屋の者の供もさせます、ゴサイも株になつて居て世襲だつたのです、ゴサイはお中﨟なら一人、御年寄になると三人迄つかひます、（山中共古翁のお話では、ちくさの股引、唐棧の衣類、同じ羽織、淺倉草履、尻ばしより、ゴサイは無刀といふことでした、ゴサイの風俗を描いたものは甚だ尠い、初代豐國の艶本の中にあるのが珍しく思はれたので、爰に挿入しましたが、老刀自のお話とも、共古翁のお話とも違つたものです、信用するのは考へ物だと思ふ）



ゴサイ

二人遣ふゴサイの一人は上ゴサイといつて、永年變らずに勤めますが、一人の方は下ゴサイと申して年の若い者で、是は時時變ることがありました、ゴサイの給金は一年に二兩二歩です、革の袋に這入つた御門札を腰に附けて居ました、瀧山などは御門札を三枚持つて居ました、私（老刀自）は一枚でした、御年寄は男扶持三人、女扶持七人頂いて居りますから、御門札も三枚、中﨟は男扶持一人ですから、御門札も一枚なのです、（是で高級女中の受ける男扶持は此のゴサイへの給與であるのが知れる、御門札もゴサイの爲め下附を請求するものなのである、御廣敷へ出入する御用町人も、御門札の下附を受けて居るのは勿論だが、高級女中の請求した御門札は、ゴサイに持たせる爲めのものなのだ）。

部屋に世話子（御本丸西丸の高級女中の部屋子は、大概親類縁者の娘であつて、町人百姓の子供はない、だがお小僧な□）

やうな者は居る、それ等は町人百姓の子供である、故に部屋に居る子供を部屋子、世話子と云ひ分けた）が幾人あつても、それは皆たゞゴサイの引受です（世話子の總べてといふでもないが多數はたゞゴサイの手から、部屋へ這入つて來る、從つて世話子についての萬事を、引受けるやうにもなつた、寶曆四年の前句附に、久しぶりなりノヽ、龍宵居と見りや左齊に氣被をしといふのがある、これはお供のゴサイだ、部屋の方の外出に附いて出るから、此の前句附のやうな場合も想像されるのである）、下ゴサイを傭人も遣ふ親ゴサイといふのがありました（元締とか親方とかいふべきもので、親ゴサイはめつたに出勤しません、御扶持でも引く時ばかり出て來ます。

御扶持を引く時は、お廣敷から子供がお三の間まで呼びに來ます、（お中臈やお次などの分は、出勤して居る所へ、用事があつても輕い者は往かれぬ、先づお三の間へ通知し、お三の間より本人へ知らせて貰ふ、此の通知は非番の時でなく、御番に出て居る時においてされることが多い、出勤して各自の部屋で居らぬ場合だから、斯うした手續になるのである）。

御年寄の分は[illegible]所へ持つて來ます、それで御廣敷へ參つて、長使列座で御廣敷の人から引きます、お金は現金、御扶持・油・在米等は御切手で引いて、御扶持と油は御賄所（平川口にある）へゴサイが引替へに往きます、勿論精米でした、ゴサイから御扶持を引いたと知らせが來ますと、お扶持袋といふ種類の大きな袋に入つた御扶持米を、タモンが運びに往きます。御合力米（金の方が合力金なのだ、春日局の事を書いた麟祥院殿消息に、「[illegible]は、れ小袖は其足一領程の入目なり、我等は二千石下さるれど、御臺にて三萬石程のくらしなり、諸大名參勤の祝儀は惣女中の衣服の料なるを賄せらるゝには、御合力金を下さるべし」とある、此の主張に依つて起つたものである、御藏米請取は女中の本体で助勢の意味ではない、けれども老女は御合力米とのみ云はれた）は二月五月十月の三度（三季御切米といつた、三度に請取るのは依取といはれた慣例、一般のことだが、それとは違つて女中衆の切米は二度に渡されたといふ）札差（淺草藏前三ケ町に住む、藏米請取方を引受けて居る町人）から知らせがあります、直ぐに入米の否やを返事して遣るのでありました、而も入米をせずに拂ひ米にしますので、其の代金が來ます。

十三

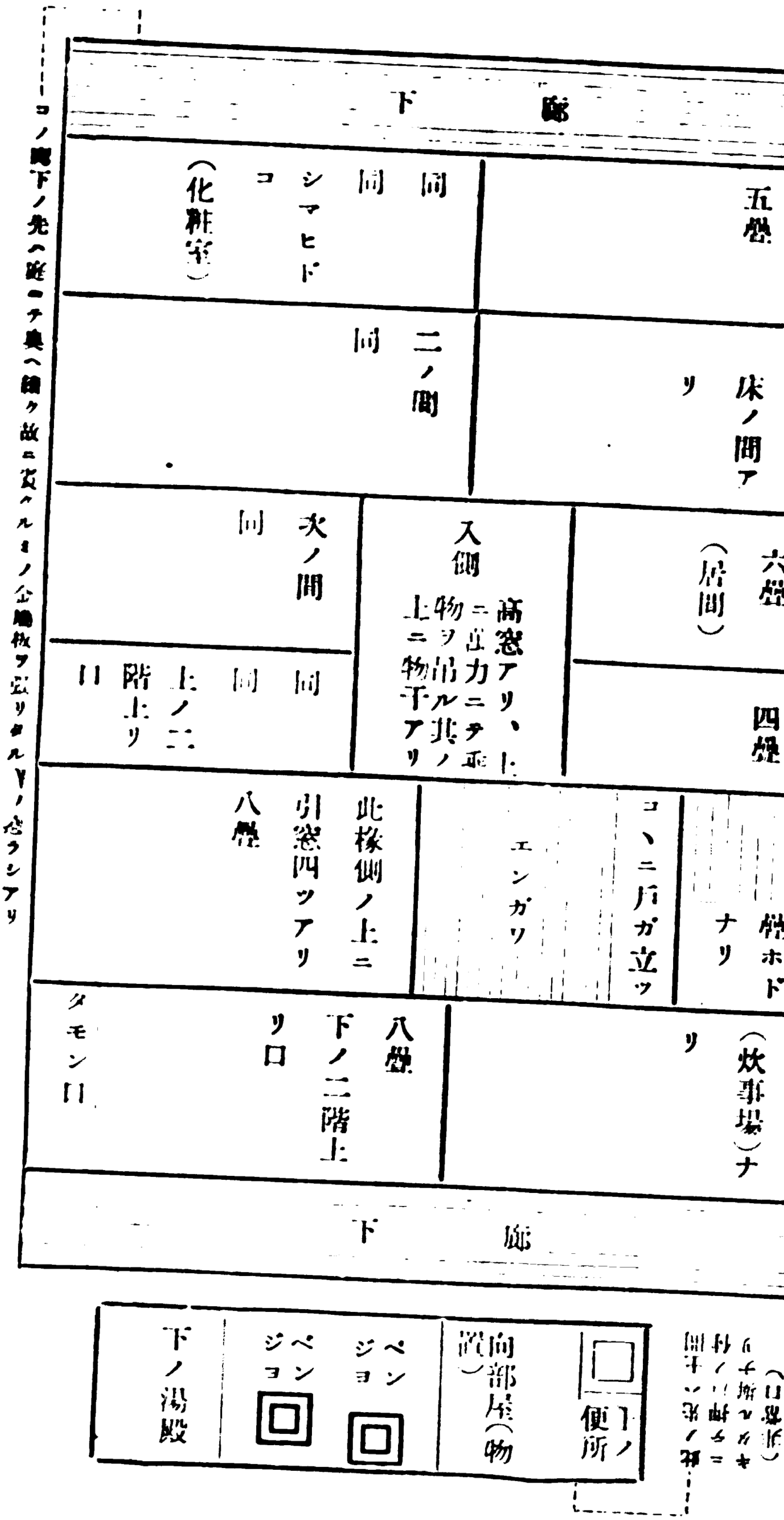
御年寄の部屋にはツボネ、萬事を引受けて居ます、町家なら世界間といふ役目、それからアヒノマ、また仲間といふ者、局の代りもします、主人の髮を結ひます、アヒノマの事をツボネワ

キといひます、[illegible]、これからタモン、タモンが代りをします、此の内に一の番と二の番とあつて、口番におつくんをし、七つ口(七つ口は七ツ打つと締るからの名で、午後四時限りに閉鎖する、此處に締戸番といふ役の者がある、此處には秤が備へてあつて、出入する長持の目方を檢査する。奥女中が長持へ這入つて忍び出したとか、俳優を長持へ入れて持ち込んだとか、色々な傳說もある、それ等の取締のために長持の目方を調べることになつて居たが、實際は調べなかつたさうだ、用達町人も七ツ口の脇のテスリへ來て居る、部屋々々の買ひ物は此處で濟む、七ツ口は御廣敷の關門なのだ)、小僧といつて側で遣ふ子供が居ます、是は尾州家や紀州家では實家からの仕送ですが、御本丸では違ひます、小僧は實家によつて縮緬を着て居るのもありました。仕着せも三年目からは模樣を、其の後は縫ひ入を濟ります。髮は稚兒に極つて居ました、ツボネは下着は縮緬で、上には銘仙か八丈の古いのでも着るといつた風、部屋方でも朝夕に着替へますが、タモンの仕着は裏地と綿を附けて木綿の反物を出します、部屋方で絹物を着ますのは御年寄の部屋に限ることで、其の他の部屋の者は總べて木綿物ばかり着ます、御年寄の部屋に居りますお中臈も自分の仕ふ人には木綿を着せました。

[illegible]部屋を[illegible]て、[illegible]一人、アヒノマ二人、小[illegible]一人、タモン二人、[illegible]人、人數です。合部屋の者は二階に居ました、二の側の[illegible]には違ひ栅はありませんが、一の側には一間に二尺の床の間が附いて居りました。大略一の側の部屋を申して見ますと、(三六頁の圖參照)總二階ですが、臺所と其の隣の八疊(タモン)とには二階がありません。

外出の時は部屋に釣つてある駕籠を卸して、下御廣敷から乗つて出掛けるのです、お廣敷の口迄はお下男が擔ぎ出します、(それからは人足が擔ぐ)、御年寄でもお中臈と同じ紅網代の乗物ですが、窓の所に紋が三つ附くだけの違ひです、お中臈は紋を一つしか附けません、乗物の大きさもお中臈のよりは大ぶりでした。乗物は拜借する者が多くて、大抵自分では持つて居りませんが、御年寄などは自分の駕籠を持つて居りました、乗物を拜借いたしてもお廣敷まで舁ぎ込ませて、お廣敷口から乗つて出ます。

駕籠と云へば御臺所の御駕籠は、御入輿の時か、火事でもあつて御立退の時でなければ御入用はないのですが、隨分重いもので、お末が十二人で擔ぐのに、なか〳〵重いと申します、お庭



廊下
椽座敷五疊
同
同
シマヒドコ
（化粧室）
上ノ間八疊
床ノ間アリ
二ノ間
同
次ノ間六疊
（居間）
入側
次ノ間
同
相ノ間四疊
同
同
上ノ二階上リ口
湯殿三疊ホドナリ
コヽニ戸ガ立ツ
エンガワ
此椽側ノ上ニ引窓四ツアリ
八疊
土間ト板敷（炊事場）ナリ
八疊
下ノ二階上リ口
タモン口
廊下
下ノ便所
向部屋（物置）
ベンジョ
ベンジョ
下ノ湯殿

質の丸比ジチヨウ（仁丁）手掛の付き二十五しよいす、要子様お次御右筆頭以下の者の乗物に次の御右筆のお召籠（一間なる四[illegible]様）でした　大髪にお金の掛つたものです、溜塗などの紐網代黒鋲紋の駕籠でさへ三十両掛りました、駕籠に格式がありまして、表使のは鋲打で後に一つ紋、お次御右筆のは青漆、下手(しもて)の者のは莚蓙包みと極つて居ました（醉堂漫抄に大奥女中の駕籠のことを書いてある、大年寄、若年寄、御中﨟、御客應答、御錠の間、表使、呉服頭、御右筆頭を、網代乗物、對先挾箱(ついさきはさみばこ)とし、御次、御右筆、呉服の間を、鋲打乗物、跡片挾箱としてある、是は詳しくないのみならず、間違がありさうに思はれる、役名などは悉に間違つて居るが、兎に角、御目見以上の女中を網代と鋲打とに別けた、それを演劇臭草紙講談では奥女中の乗物とさへ云へば、何でも彼でも、皆鋲打の乗物にして了ふ、河竹默阿彌の網模様燈籠菊桐の瀧川は、大名の奥女中にしても、輕い人ではなさゝうで中﨟どころらしい、網代へ乗せなければならない人かも知れぬ、網代よりも鋲打の方が見物に眼慣れても居る、何彼と面倒な處を逃げて鋲打に乗せ、其の代り御中﨟とも御次とも云はずに、只だ朦朧(うやむや)と奥女中にして置いた、なか／＼用心が好い、合卷の青柳栄にも雲霧お瀧が鋲打の駕籠で誰袖へ乗り込む、是も奥女中に化けたとだけで、分限を何とも云はない、利口な作ませた。

十四

江戸の話でもなく、京坂のことでもないが、[illegible]顯著な高僧であつた八幡の禾山和尚が修行中の頃、まだ二十位で居たが未だ小僧、使ひに遣られた途中、向ふから下に／＼と制し聲を掛けて女乗物が来た、禾山も路傍へ土下坐をさせられた、乗物が目の前を通る時に下げて居た照紫の窓のやうな高い頭を少々擡げて見ると、乗物の中に澄して居るのが姉であつた、禾山和尚は憤慨した、女の癖に土下坐をさせる、負けるものか、今に緋の法衣を着るやうになつて、姉を平伏させて遣るぞと、それから修行に骨を折り、遂に稀有の大善知識になつたといふ、禾山和尚の姉さんなどゝは違つて、御年寄の外出、十萬石の規模、御老中の格式といふのだから、女ながら大見識なもの、特に上野寛永寺、芝増上寺への御代參は、御臺所の御名代であるから、晴れやかに盛んなものである、前にも少々聞き書きをして置いたが、別に聞いても置いたから、玆へ附記する。

御代參は御年寄に極つて居ります、殊に御一周忌、御三年、御五年には、下げ髮に搔取(かいどり)の中着でした、さもない時は地白地黒です。

部屋方からの供に局一人、タモン二人、局は縫入掻取、髪はワゲ、駕籠に乗ります。タモンは黒木棉の模様。裏は萠黄、帯は縮緬の萠黄地に白の手綱染か、智惠の輪の模様、髪は紅葉、大きな櫛をさし、駕籠の兩側へ一人づゝ、太い捻つた二筋鼻緒の稲草履を穿きます。

御代參の時は着替へませんから、着替へを持つては往きませんけれども、御上使の時は持つて參るのです。歸りには縮緬の縫入（帛紗小袖）を着ます、着替を入れる二重箱は太い紐の附いた黒塗へ自分紋を附け、それを二幅の縫入帛紗で包みます。

徒歩の御代參のこともありまして、其の時には部屋からの供も局やタモンを連れませんで、部屋子二人が振袖で附いて往きます。

共古翁から承つたには、御年寄、表使の外出には使番（奥の使番、表の使番は旗本衆が勤める、奥のは低級女中の役）が屹度附く、御年寄と表使とが同行することは知らぬ、それに添番一人伊賀者一人が隨行する、添番は繼上下着用、履物は平常の通り雪駄である、添番は從者を連れない、從つて草履取がない、それ故に雪駄をはいて居るのだ。伊賀者は紋付の木棉羽織、色は黒も鼠も藍もある、縞は無い、孰れも無地だ。添番伊賀者の外にお小人も附いて居るが。お小人は一名を黒ツ羽織とも云ふほどだが。是は無紋であつた、偶々初代豐國の伊賀者の畫を見附けたから出して置きます、伊賀者の證據は羽織に紋のあることだ、共古翁が見て何と云はれるだらうか。

此の御代參の行裝について、先年澁澤榮一さんが米國で江戸時代の人形を見て、不審を起し、訂正報告をする約束で歸朝したとやらで、人を介して友人林若樹氏へ取調の相談があつた、林君から我等へ話があつたので、重ねて老刀自に質した、其の答を爰へ挿む。



伊賀者

御代參の節の六尺（人夫のこと）は、三河町の人足で、揃はないものを三河町の人足のやうだと云ふ程ですから、大體が知れませう、まあ立ン坊なのです。

それに着せます黒看板（法被のこと）は、着丈けよりは短

く・[illegible]よりは長いもので、[illegible]もありません、[illegible]とのです・[illegible]人[illegible]の[illegible]、お[illegible]に[illegible]の[illegible]様、[illegible]にみ[illegible]でたければならないのですが、[illegible]町の人足だけに男お[illegible]にしたのもおかしくない程でした、冬は[illegible]引・夏は[illegible]で、草鞋掛けといふものは絆かないのです、前が一人、後が二人、手替が一人で都合四人、端折は後でクツと一ツ所、其の引張り出した處が格別長く見へました（是は御駕籠のこと、挾箱持も同様の御駕籠）、管笠はかぶりますが手拭は持ちません、木刀もさゝず息杖も突きません、四人のことを四枚と云ひました。

御駕籠脇のタモン兩人、雨天には草鞋掛けです、黒木綿の腰から下に大模様のある衣類、是は菊などの模様で、裏は萌黄木綿、帯は縮緬か紗綾、手綱染か知恵の輪を染めた合せ帯、斯ういふ風俗はお年寄の供に限ります。

別な話になりますが、姫君様の御駕籠をお末が請取りますと、十人で五人づゝ前後に肩を入れ、姫君様へ尻を向けてはならないと申して、前を擔ぐお末は後向きにアトビシャリにあるきました、又た姫君様が御駕籠からお下りになる時は、擔いで來たお末ばかりでなく、其の邊に居りましたお目見以下の者は、御目に止まらないやうに逼つて其處を退きます、退いてから御駕籠の戸が開くのです、御駕籠に召す時も、御駕籠の戸を[illegible]

[illegible]ゝには[illegible]なにもいてはさかなつ[illegible]（[illegible]を見たことがないといふやうなことでも、[illegible]つまゝで[illegible]入するからである）

十五

部屋の内では主人が御年寄ならばアナタと云ひます、様は附けません、御年寄でない人ならば「御部屋」と云ひました、是も様を附けません、主人は局でも相の間でも名を呼びましたが、小僧だけは名を呼ばずに小僧と呼びました、部屋の者お互に名を呼びます、小僧だけは小僧さんと云ひました、道具などには『お・・様御部屋』と書く、部屋の者が書くのですから。

小僧は島田です、櫛はさしません、銘仙の着物に八丈の下着、襦袢の半襟は白の羽二重を附けて居ました、年に三歩（一兩の四分の三）の給金なのですから、良家の娘でなければ勤まりません、（勿論結婚準備の連中なのである）盆暮には仕着せを遣りました、初は島縮緬に紅絹裏、それから模様物、又た山繭縞縮緬、紋縮緬と段々に遣りました、相の間になる時分には衣類も相應に持つて居ました、相の間には髪もしのじでした。

部屋子は稚兒か島田で居ますから、簪を挿します、小僧は平打を挿し、花笄も挿します、花笄は上様附のお中臈は若くても挿しません、御女性にお附き申したお中臈は、朝番でない時には花笄を挿します、見掛の若い人は四十ぐらゐまで挿して居りました、中臈の朝番は宿直の翌日たのです、此の朝は出番の者の参るまで勤めて交替するのです、出番の者は朝の四つ（午前十時）に出勤しました

部屋々々の小僧は十二歳迄の者で二人づゝ居ました、それが大きくなると相の間になります、相の間は五人ぐらゐ居ました、是が主人の側を働くのです、局はおの字名でなく、瀧山の局は中野と云ひましたが、どれもそんなやうな名を附けて居ます、頭をわげに結つて、着物も女中のやうではありません、是は動かないで済みます、主人の側の用事は小僧と相の間が皆足しますから、相の間の頭はワツパをかぶつて居ます、タモンは四人ぐらゐ居ました、主人が駕籠で出る時にはタモンがお廣敷口まで擔いで往くのですが、其の時には隣近の部屋のタモンが手傳ひ合ひます、タモンは源氏名です。

部屋方は孰れも紋散しのがありました、配り物の時に遣ふのです、部屋で牡丹餅やお餅を拵へて配るよりも、到來物を分配する方がおほうございました、名々の忌日などに配り物はしません、忌日などは部屋限りでした、配り物は小僧や相の間が持參して、三方を眞中へおいて、愈々御機嫌よくから初めて、長い〳〵口上を云ひます

御年寄は廊下をあるきません、一の側からは椽側傳ひに奥へ往かれますので、廊下を通ることがないのです、只だ便所が廊下の向側にありますので、其の時だけは廊下をあるかなければなりません、御年寄が廊下をあるく時は、小僧が先に立ち、『お通り遊ばす』と聲を掛けます、其の跡から相の間が來ます、誰でも『お通り遊ばす』と云ふ聲を聞けば其處へ蹲踞つてお辭儀をしなければなりません、御年寄は決して答禮するやうなことはないのです、（長局の前後に廊下がある、椽座敷の前面の廊下は出仕廊下に續き、奥への通路であるから、男子の通行もなく、妄に往來する處でない、向部屋に控へた廊下に長局の往還なので、水汲みのタモンを始めとして誰も通行する、此の廊下は七ツ口に通つて居る、其の下に通溝があつて汚水を流す、廊下の先は土間であつて水遣ひをする、其の又た先きは壁で奥との仕切になつて居る、此の廊下に向つて、柱を中心に四枚の障子が建つ、此の柱に住んで居る女中の名（部屋の主人）を書いた紙が貼付してある、此の障子を開けば板敷で、横手に竈がある、其の次に二室あるのが部屋方一同の住所だ、以上共古翁から承つ

[illegible]

す一て、部屋方の往來を通らうといふのだ、それが中間へ行く時だけに部屋方の者は眞面目でお辭儀をして居たらうが、今日の我等には御愛嬌に感じられる、大威張の便所通ひなどは誰にだつて滑稽に見えやうぢやないか、若し御年寄が厠でも下したら、其處を往き來する者等は、何程お辭儀をさせられるのであらう、正眞正銘紛れのない奘威張といふは是だ。

椽側とタモン口との角の柱へ奉書を切つて、名（部屋の主人の）を大きく書き、相部屋の者があれば、其の名をも續いて書いて張つて置きます、部屋の内でもお中﨟は御年寄に對してアナタと申します、是は御年寄に限ることで、其の他の者には申しません、お中﨟相互にはサンづけに呼びました、お年寄が御前（御座所の）に出て居ります時に、役人などが面談に參りますと、お中﨟が取次ぐのです、（役人がお三の間へ來て、お三の間の者がお中﨟へ知らせ、お中﨟が御年寄へ取次ぐ）其の時には『誰どのが御目に掛りたいと申します』と云ふのです、是は來た役人の身分が御側（御座所の）へ出られない者だからです、お中﨟ならば其處まで這入つて來ますから、取次の入用はありません、若し御前に御年寄其の他が居りまして、アナタ

[illegible]

[illegible]も[illegible]へとあるは[illegible]くは目下の者に對する[illegible]と書くは目上の人に宛てたものである、お年寄がお中﨟を呼ぶのには、おの字を附けて呼び捨てにす、お中﨟が他のお中﨟のことを、お年寄に申すにもおの字を附けて呼び捨てにしました、

部屋方の送り迎ひは奥の口迄です、奥の口先に長廊下があつて、其處まで迎ひの者が雪洞をつけて待つて居ました、お年寄の供待ちは其の外にありました、奥の口で下草履と上草履と穿き替へます、上草履は部屋のものが提げて來るので、風呂敷其の他に包んでなど持つて來るのではありません、上草履は草履ぶねのある所まで往つて、其處で脱ぐのです、白や赤の切れへ名前を書いて、鼻緒の上へ結んで置きます。

上草履は京草履と云つて江戸で拵へたのではありません、七匁五分（此の頃は銀一匁を錢百八文に換算したから、七匁五分は八百九文に當る）も出せばよいのがありました、竹の皮三枚裏、天鵞絨ごゝくぐらゐの鼻緒、此の鼻緒の色は種々ありましたが、模様のはありません、部屋方の廊下と奥の廊下と、草履は是非二足なければならないのでした、部屋方の廊下は部屋方の者が、水汲下駄（タモンの穿く水汲下駄は、普通の下駄でなく、

踏臺下駄の低いやうなものであつたといふ）であるきますから、竹草履がなくては奥へ往かれません、上草履も竹草履も拵へは同じでした、御茶所のは我々のとは違ひます、五枚草履、周圍が萌黄天鵞絨で眞中に鼻緒が出て居ります、こんな按排に、ごく鼻緒は細いので五本、紅白の天鵞絨です、部屋方でも外出には、雪駄か京草履を穿いて居ましたが、大きな女部で水を撒ふ時などは下駄です、下足（せそく）といふ竹草履もありました、毎日下足づゝ穿き捨てにするからの名前だと云ひます、枚草履といふのは、一枚枚の上へ鼻を附けたもので、お末などが雨の日に穿いてあるきました

外間で思ふのとは違つて、部屋に居ても暇ではありません、歌ふと申した様な位の歌加留多ぐらゐのもので、別に是ぞと云ふ慰みもないのです、たゞにもお…の間にはお…面（碁盤、將棋盤、双六盤）以柄が御目子の御飾附けになつて居ります程ゆへ、御奉公人にも其の品々を持つて居る者もございましたが、それを玩んで樂しむことはなかつたのです、一の側では琴などを置くこともないのでしたが、二の側（表使以下の住む）では何から彈いて居ます、琴は袋に入れて置いてありました。

部屋に…例にありましたが、脇息はありません、脇息は老年寄へいたゞ、それも…の他には許りません、同僚との面會は居坐（ゐなり）でした、火鉢は出しません、來客は部屋の者を連れて參ります、案内は部屋のタモン口からしました

十六

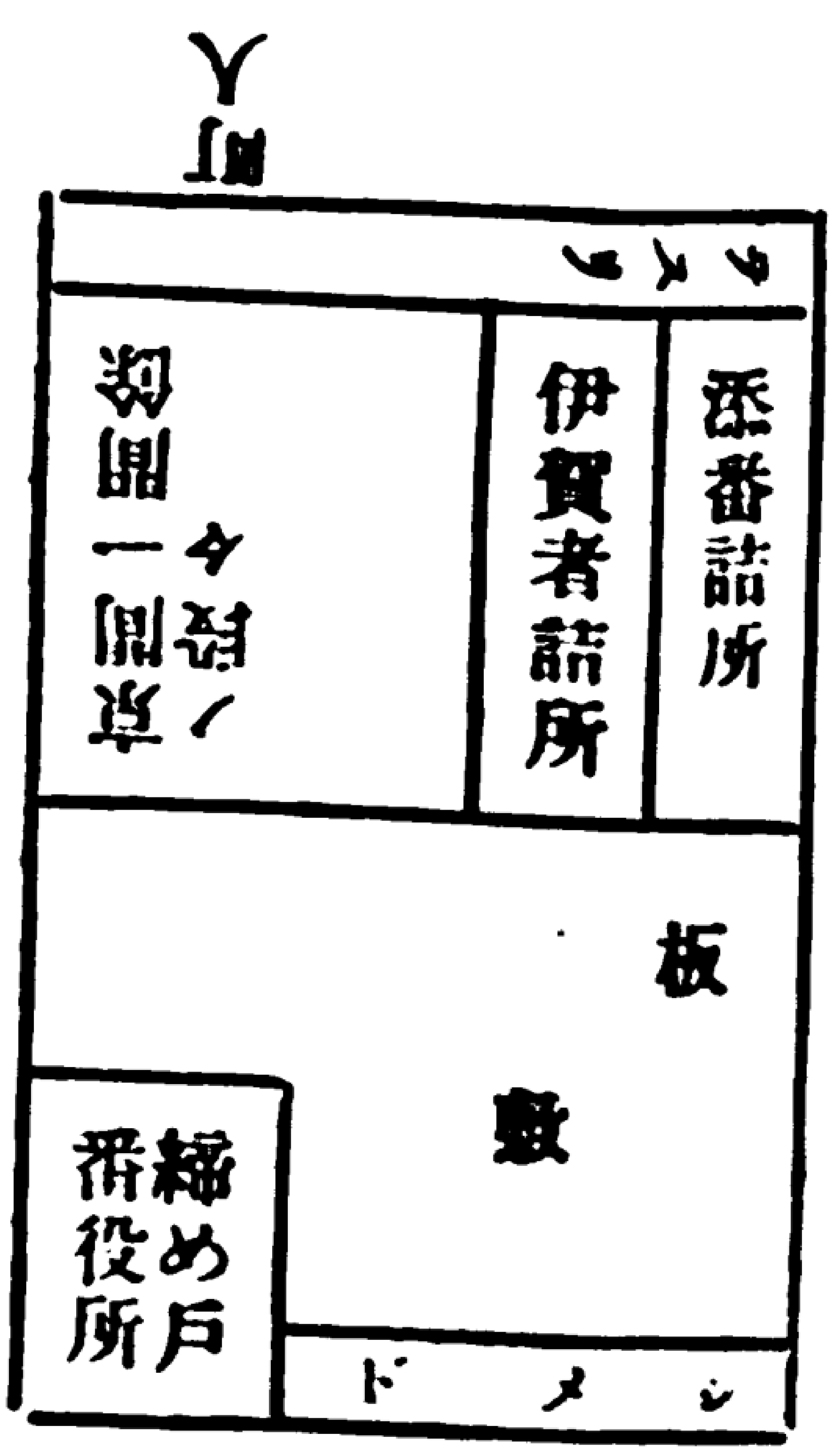
部屋々々で魚類野菜菓子などを買ふことは誠に夥うございました、色々と頂戴物がありますのに、食事も大抵は上（かみ）ですから買入が夥い譯です、又た部屋々々には佛間のない方が多く、父母其の他の爲めに殊に拵へる者も、稀れにはありました、世話親（勤め向きによつて頼み親と世話親と違ふこともないではないが、大抵は同じであつた、御奉公の頼みは一通で宜しい、頼み立てゝくれたのが頼み親、出勤後に世話をしてくれるのが世話親と別けて置かう）が死んだ時などには、食籠へ丸い餅を入れ、袋の紗で包み、上箱（うはばこ）をかけて持たせて遣ります、お目出度ときのは淺黄の帛紗です、名々にしても出頭の時などに役を遣るのに、食籠と重箱とへ入れて遣りました、食籠を今日遣ふ者はありませんが、以前はなくては濟みませんでした

帛紗は部屋に居る時、鼻紙袋、煙草盆へも掛けて置きます、御年寄が上使の時に、扇子と物紐入と莨入へます、此の莨入と化粧道具とを包む帛紗は、大幅縮緬…布の縫入りです、御代參の時には莨入や化粧道具を持つて往きませんから、此の大帛紗は上

[illegible]かつたのです。

部屋方の料理は魚屋といふのへ云ひ附けました、何でも出來ます、赤飯でも菓子でも云ひさへすれば持つて來ました、上からも部屋方へ下されの御料理は魚屋が御用になります、口の御用達（七ツ口は部屋方の買ひ物口で、丸太の勾欄が六間にある、引戸から板の間になつて少々下りる（板の坂）、それから丸太の勾欄がある、勾欄と云へば他處にはないので、七ツ口の勾欄と云はないで、只だテスリで通つて居た、勾欄の内に役所がある、締め戸番が袴を着けて据り込んで居る、此處に天秤の衡衛が備へてあつて、出入の長持を調べる、締め戸番の脇に伊賀者添番の詰所があつた、西丸には七ツ口が二つあつて、小さい方には締め戸番がない、開閉する時には大きい方の七ツ口から、締め戸番が來たといふ、駕籠に乘つた女中が出るのは、此處からではなく、下御廣敷からである、又たお錠口は御廊下があつてお杉戸が立つて居る、お廣敷と奥向との境界で、是から先きは男子禁制ゆへ、お錠口の内側への用向はお使番がする、女中のお誓詞にお杉戸から内のことは、一切他言しないといふのも、此の境界のことである、此のお錠口はお廣敷から奥向への出入口で、お役の名のお錠口は上下のお鈴廊下からの名なのだ、お鈴廊下はお表から奥向への出入口で、しかも將軍だけの

[illegible]番があつた、[illegible]あつた、添番のは其の後[illegible]にあつた、[illegible]詰所に時計がある、御本丸のテスリは七ツ、[illegible]と云つた[illegible]には



締め戸の鍵は締め戸番の預り

のだ）碇屋藤右衛門と云つて、部屋方の整へ物を辨じるものがありました、何屋の何と品に依つて買ひ先の好みがある分は、鳥目へ札を附けて出すと、朝出したのが晩には整ひます、（此等の用命は部屋方が勾欄まで出て來て、碇屋に申附ければ用辨になつた）。

市谷のあまざけ屋は御殿向のものが一切揃へてありました、あまざけやは御用達でありませんでした、御用達はゴサイの持つて居るのと、同じ御門札を持つて居ます、本石町の井筒屋、後には北島屋と云ひました、京都から出てゐる染物屋でした

が、何でも間に合はせる内でした、此處へ都度〳〵云ひ附けました

部屋方の出入は御門札でなく、一々御切手（御切手書きから出る）で通用しました、部屋々々に御切手箱といふものがあります、御切手箱に黑塗へ朱漆で

御切手箱　御本丸誰

と書いてあるのは、御中臈以下の分で、御年寄のは、上に大きく定紋を附け、下には御本丸とか西丸とかの肩書きをしずに、名ばかり書いてありました、私のは環付きで木棉の袋、眞田の紐、龍山のは萠黃の絹眞田の紐が附いて居ました、紐のないの



御切手箱ノ圖

もあります、お切手箱は二朱（金一兩の八分の一）づゝで、麴町の山口屋で拵へさせるのでした、お切手は誰部屋幾人として、當番の番頭（御裏御門御切手番之頭定員六人）へ宛てたものです、其の日に出入するのならば、上りでございますといふと、手へ判を押して呉れます、這入る時には其の判を見せて通る、若し袖口で判が薄くなつても、それが證據です、此の判は黑肉の丸い判で、左の手首へ押します、御切手御門で押して呉れるのです、泊つて來る時や臨時に這入る時は、打合せて置きまして、御切手を廻して貰ふのです、未だお切手が廻つて居ないと云つて、這入れないことなどがありました。

十七

お年寄は一の側だけ年頭に供を二人連れて、あるきます、其の他の者は一人であるきました、年玉などゝいふものはありません、只だ『お目出たう』といふだけのこと、部屋々々の前に緣御坐と云つて疊半枚のものが敷いてある、其處まで往くのです、先方は部屋の内に居て請けます、歳暮は部屋の者に持たせて遣りました。

役替への時に『賑やかし』と申して、殿中の者を皆な部屋へ呼びます、時間の都合や何かゞ有りますから、幾日もかゝりま

[illegible]
[illegible]ません。
御殿の内でも夜中あるくのに淋しうございました、處々に金網燈籠がボンヤリ明るいだけなのです、其の金網も燻黑くになりますと眞黑なので、御廊下は錣のが掛つて居ました、後補も朝顔の掛つたのです、煌々と明るい處はなく、何處も薄暗い中を通るのでした、ズリといつて平な板の端に紐が附いて居て物を載せて引くものがあります、ズリの大きさは長さが一間で、幅が六七寸のと、長さ四尺、幅一尺餘のとありました、板の厚さは凡そ一寸ありまして、枕のやうな木が打つてあります、それへ載せれば重いものでも引けます、お使に往く途中で平生お紐に氣を附ろと云はれて居りますので、お鈴の紐（上下のお鈴廊下の紐を夜中連結することは前にいつてある）の處へ往くと、ズリを持ち上げてお紐を越しました、子供の時にはお紐が恐ろしいやうな氣がしました、若しお鈴が鳴りでもしたら、お暇ぐらゐでは濟まないのです、お鈴の紐は高い處からさがつて下へ傳はつて居ました。

殿中の夜は人氣がないので殊に靜かなのですが、御本丸の御佛間の次に宇治の間といふのがあります、宇治の間は格天井で、

[illegible]らに[illegible]です、[illegible]と云ふ傳がありまして、其の[illegible]宇治の間は[illegible]なのであつたが、其の事があつて以來、[illegible]用りないものになされたと申して、平素御不用の品物などを、宇治の間へ預けて置くやうな習ひにさへなつて居りました、再三の御普請にも此の御不用な宇治の間を、從前通りにお建てになるのも誠に無用のことのやうですが、何にせよ先例格を重くいたす大奥の事だけに、幾度も昔のまゝに宇治の間をお建てになりました、此の宇治前は御奥廊下で、此の御廊下を通るのが子供の時分に氣味が惡くてなりませんでした、氣味が惡いと申すのは此の御奥廊下に怪談があるのです、けれども此の御廊下を通らなければ奥へは往かれないので、恐々通りました、上々に何か凶事のある前には、宇治の間で上様が御他界の時に御手傳ひ（夫人鷹司氏が綱吉將軍を戕害したといふ俗說）を申した御年寄が紋付時服で、此の御廊下へ出て來る、愼德院様（家慶）が此の廊下をお通りになると、お辭儀して居る黑の紋付を着た一人の老女が御目に留り、あれは誰だとお尋があつた、實に誰だか知

れなかつたのですが、其の時お三の間に下面紋（自分の家の定紋を、其間の御紋附に對して、斯くいふ）の衣類を着た者があつたので、其の者にして了つたのですけれども、お三の間の者などの往くべき場所ではないのです、上様は其の年（嘉永六年七月二十二日）に御他界になりました。

御本丸ばかりでなく奥向には怪談がありました、田安にもお化けが出ると云ひました、おりくといふお妾が御子様を置いて死にました、其の御子様の御加減のお惡い時には、其でも出て來て御蚊帳を持ちあげます、吉事があるとお化けが大きな聲で笑つたさうです、それでおりくの笑ひ聲と云つて大評判でした、やがて御庭へおりくの祠が建ちました、水戸でも模様物を着た眉のある女の二人連れの幽靈が出たといひます、地震の時（安政二年十月二日の夜）は、二人連れの幽靈が、水を持ち割つて火を消してあるいたと云ひます、（御本丸には狸が多く、狸の化けた話も段々ある、御廊下に狸が上り込んで居たことが度々あつたと、祖母が話した、祖母は我等の家へ嫁入する前に、一の側へお小僧に上つてゐたのである）、怪談の外に怖かつたのは、私が十四の時、まだお次を勤めた頃、お次の者の御掃除は八つ（午前二時）から始めるのです、當番は一人づゝで、御掃除は前後いつも余程多く勤めるのでした、御側の御掃除は後外が偏つて居りましたが、偶に何の間から始めて、何の間で了ふといふ順を違へて居ません、御殿中のことゆへ、御寝所へ遠い所から始めて、近い所は御目醒め後にするのです、御掃除は手拭ひでソツソツと物音のしないやうにするのです、御次の御掃除は御後の雑巾掛けもするのです、御掃除を始める時分は未だ暗い時なので、網明りから燈臺へ火を移して、私が御掃除を致し初めますと、大きな狸が御椽側の階段へ手を掛けて御向きになつて居りましたが、私の方へ向いて大きな目をパクリと開いて見せました、吃驚いたしましたけれども、彼々大きな音をさせたり、聲を出してはならぬと堅く云ひ聞かされて居りましたので、ちいさい聲で「畜生〳〵」と叱り、雑巾を丸めて投げ付て逃げ込み、年増の人と一處に引返して來て見ますと、其の大狸は平氣で悠々と階段を踏んで白洲へ下り、椽側の下へ這入つて往きました、誰も新參の内は度々狸に脅されます、脅すだけで別に惡い事もしません。

毎年七月の十日は、大騒ぎです、その日は四萬六千日といつて、お火の番の詰所へ観音様を飾り廊下へ商ひ店を出します、此の日ではハダカ蝋燭やカンテラを燃すのが禁ぜられて居るので、孰れも提灯を吊ら下げました、それを間違へて外燈籠のお御成があるなど、書き立てた本もあるさうですが、お目見以上

[illegible]らう者がありません、下たちだけの外なつてゐますが、[illegible]では此の四萬六千日が、一番よく民間へ知れて居ります、[illegible]柄で店を出すにも、外聞からは決して出せません、平日部屋〳〵へ出入してゐる物賣の婆さん達が店を出すのです、此の婆々が部屋部屋へ(臭版の)切れ〳〵や臭草紙錦繪などを持ち廻つて賣りました、其の頃臭草紙(合卷二冊物)が百文になつて高いといつたものです、モウ田舍源氏の時も過ぎて、西國奇談(五柳亭德升作、歌川國芳畫、西國奇談月夜桀初編は文政二年、二編も同作で畫は溪齊英泉が描き、天保二年に出版した)などが評判でした、(その頃は部屋方の者でも幾種かの臭草紙を持つて居なければならないやうで、お互に借し合つて讀む、臭草紙の貸借をしないと何か交合ひが惡いやうであつた、短いのよりも冊數のあるのが喜ばれ、諺紫田舍源氏、釋迦八相倭文庫など多年續いて出版されたのも、理由は此の邊にあらう、此の觀音樣へ部屋のものが皆參詣します、さうすると店を出して居る婆アさんが、何時も極つて、新參の者をダマスのです、今夜は五ツ頃(午後八時)に七ツ口があいて、名々に宿入りに往ける、平川口まで皆を載せるギヤマンの船が來る(此のギヤマン船の見せ物は、文政二年の秋に向兩國で、天保七年の三月に淺草奥

[illegible]中と[illegible]る、[illegible]つ折ゆへ、五ツ過ぎてもしッ口[illegible]ない、[illegible]或は打毀すこともあります、其處へ御徒目付が出て來て、一同を叱り又た論します、済んだ用怨もなく嘘だと知れて、下賤などは泣き出すのもありました、(此の事について其古狩から毎年書き送られたのがある、毎年七月、四萬六千日の夜、坂下御門の御堀まで船をつけ、此の日に限り奥女中は自由に淺草へ參詣し得らるゝ由に云ひ傳へたれど、それは嘘言にて、昔女中仲間にて船が來るなど騙し合ひたるが本となりたるにて、幕府の末まで當夜は長局中の大騷ぎなり、火の番詰所に傳來の觀音ありて、其の部屋の中を佛境の如くに飾り立て、女中一同參詣し、長局へ小間物屋の店など出でたり、此の店は曾て大奥に勤めし女にて、小間物商となりたるものが、當夜のみ出店するなり、其の様は緣日のやうにて、參詣したる大勢の女中は締め戸を叩き、口々に開けて下さい〳〵と叫び、はては玄蕃桶の棒にて、締め戸を擊つなど、いと騷し、其處へお火の番が廻り來りて制止す、大勢の女中は漸く逃げて部屋へ歸る例なりき、といふので、嘘だの騙ますのだのと詮議する迄もない、大に騒がせ噺はせて、

平生の幽欝を散せしめるのを目的にしたものである、要するに彼等の爲めのヒス除けの祈禱と見るのがよからう）、

十八

二月十五日（涅槃會）にお釋迦懸けといふことがありました、御佛前へ懸け物をします、御年寄から御使番まで思ひ〳〵に、懸け物をするので、何を懸けてもお人形さまを懸けると云ひます、お年寄は八寸位の京人形をかけます、役人は大概人形を懸けたやうでしたが、おの字名の者は縮緬の切れ一丈を封じた上へお人形と書き、下へ一々名前を書いて出します、お人形様を懸ける御佛前は、奥と大臺所様と、また外に二ヶ所ありまして、都合四ヶ所です、朝懸けて其の日の中に鬮を取ります、此の鬮は懸けた人數ほど拵へて、懸けた者が一同に引きます、三つ懸ければ三本、四つ懸ければ四本、鬮を取る、此の鬮は奉書の手札形、竪に四つ折にして、眞中で捻つてあります、それを披けば中に懸けた者の名前が書いてあるのです、誰が誰のを引くか知れません、其の外に内々懸けと云つて、自分の勤めて居る所へは、品を極めずに色々な物を懸けますので、思ひも寄らぬものが當ります、内々懸けは同勤の者限りの鬮です。

八日の日掟式は、平常着用する白（衣紋）に附ける糊の粉を挽く時に唄ふのです、一部屋の者だけでなく、方々の部屋から寄つて來て、傍に居て唄ひ戯れるのです、唄も色々ありまして、調子に乘つて都々逸を唄ひ出すこともありました、御本丸言葉でおしまい（終了）のことを見上げると申します、サア見上げませうと云ふと、一同で「見上げれば御本丸、見下ろせば蓮の池、中にチックリ辨天ナーイヨエ」と唄ひます、それで臼挽を了ふのが例でした。

七夕の竹竿は、上のは二本、五色で繋いで、奉書の短冊や色々の紙を附けます、若し御差支があれば、取除けて置いてお流しものにいたすのですが、部屋〳〵のは一本づゝで、御神様へ供へます机には、文房具一式を飾り、臺の上へ着物三つ載せて置きます、名々に願ひごとを書いて、其の短冊を鈴生りにして竿につけると、願ひ事が成就するといつて、七夕の竹竿へ果報の短冊を附けたものです。

針供養は十二月八日、お事初めの日に、呉服の間の者がするのです、供養ですから一日針を休めさうなものですが、何分か早く了ふくらゐのものでした、呉服の間だけのことで、お目見以上の者を招待するなどいふことはありません、呉服の間だけにしても餘興があつたかドウか存じません、部屋々々ではお針供養のオミヨツケと云つて、持寄りで牛蒡胡蘿蔔小豆燒豆腐を

[illegible]に

なつて居りました。

[illegible]子と申して此の時は衣服も切替らしく替へます、又た[illegible]出番と申して、正月初めての當番にも、冬衣一切を新調するのでした、此の兩度上様附でないお中老は花笄を挿します、お中老は出番の時に平素も花笄を挿しますがお中老でない御奉公人は花笄を挿すことはありません、(お中老もお袖の時は挿さゝない、部屋子や小僧は花笄を挿すが、是は御奉公人でない、又者である)、十一日を生御魂(いきみたま)と申します、片親の者は十三日に下から上まで新しいのと着替へます、兩親ある者は十四日に着替へ、此の日は酒肴の下されがあります、髪も上で(御臺所の御櫛上げの者に)結つて下さるのでした、さうして御殿々々へも上りました、誰彼も其の日を賑はして呉れます、兩親のない者は十六日になつて着替へるのです、それを閻魔帷子と云ひました、兩親のある者は何日に洗濯をしても宜しいのですが、親のない者は十三日から十六日まで洗濯をしないなどといふこともありました、盆といふのは十四、十五の兩日で、贈り物も此の兩日にいたすのでした、越後縮は上から着初めるのです、上様御臺所天璋院様が召してから、段々に下の者が着ましたが、帷子は下から着初めます、透綾(すきや)や麻の襲ねを、お三の間などは五月

[illegible]

[illegible]

下男[illegible]

闈爐裡のある者には、大[illegible]に、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]者、はし、庖刀、火箸が添へて出してありました、其處へお下男を勤める、袴羽織のお下男が先へ來て七卓を飾し、それが濟みますと、お廣敷(下お廣敷お下男詰所)から這り込みます、踊子につゞいて底抜屋臺(下た方)も來ます、眞の藝人のやうでした、お闈爐裡はお廣敷にあるのです、新御殿(本壽院、家定生母跡部氏住居)、一の御殿(天璋院殿御住居)、七寶の間(實成院、家茂生母松平氏住居)にもお闈爐裡がありますから、皆で五ヶ所あるのです、お下男の踊はお闈爐裡のある所だけで、何處までも遂込むのではありません、此の見物にお次やお三の間は皆出掛ますれども、御側の者は決して參りません、勿論上々の御覽になるものではないのです、お透見をなさるなどゝ書いたものもあるさうです、それは飛んだ話です。

御本丸ではお汁粉のことをオユルコといひました、御鏡開き(正月十一日)の時に、お側の者へ御臺所が御手づからオユルコをよそつて下さると千代田の大奥に書いてあるのは間違ひです、そんな事はありません、お鏡開きに上へ上げますのは、オ

ユルコではありません、ゼンザイでした、（餡を解いて汁にしたのが汁粉で、ゼンザイは餡餅ともいふべきものだ、ゼンザイと汁粉とは其の製法同じからず、オユルコのウキ〳〵を省し上れといふのは、オユルコの中に餡を固めて玉々を拵へたのが入れてあります、それをウキ〳〵と申すのです、オユルコはウキ〳〵ばかりではありません、お餅の這入つたのもあります、オユルコをお手づからおよそりなさるとすれば鍋を御前へ持ち出さなければなりますまい、鍋や燗徳利はイカモノ（御目見以下の者、奥では詰まらぬもの、宜しからぬものをイカモノといつた、民間で如何はしい物、胡亂な物をイカモノといふのは、御目見以下の意味ではないが、大奥言葉との交渉がありそうにも思はれる、）で、御側へは決して出しません、何んでもお鍋のあるものは附けてから持つて出ますので、御側では鍋の入用はありません、お側の者が部屋で遣ふにも内證でした、燗徳利などは部屋でも遣ひません、瀬戸物の銚子を遣ふのでした、（殿居公の御小性であつた玉蟲敦七翁は、我等に敎へられた、名々の宅でも具足開きには紅白の餅の心だけを取り、打重ねて元の三宝へ載せ、その上へ、摘み餡を乗せて飾つた、チョットと備へて直ぐに卸して了ふ、餡といつても砂糖の氣もない、只だ小豆を潰しただけのもの、殿居表には十一日五ツ時、のしめ麻上下、御具足之祝餅御祝有之、溜詰御譜代御卿之面衆之内、布衣以上以下御役人詰合之面々、餅御酒被下之と書いてある、女中の方は其處で食べて了ふ、餅の形も色々ある、此の日は吉例で御使番の御祈作あつた、具足開きは御表の年中行事の一つである、御譜代大名其他が頂いて歸る、其角の句の「お汁粉を還城樂のたもとかな」といふのも、此の具足開きをいつたのである、頂いて持ち歸る處を、還城樂が白蛇を袂に包んで持ち歸る様に見立てたのだ、玉蟲翁の話を思ひ出して、御表の模様と參照したい積りで書き附けて置く、）御三家御三卿其の他から獻上の餅は輪取と菱形とありました、菱形の方は三つ重で、中が赤いのです、輪取は二つで下が赤でした、獻上の餅は大晦日の夜に持込み、元日の御門開きにお廣座敷へ引込み、夜になつてお客座敷へ移します、お客座敷はお廣座敷に附いて居るのです、お客座敷から持ち出して御對面所へ並べるのです、田安清水から差上げた餅が惡いとか、餅は斧で割るとかいふ事は知りませんし（此の一點は老刀自が強く千代田の大奥の俗説を否定したのである）、獻上の餅は御年寄が頂くのです、又た小豆粥がひどく甘くて食べられないといふのも嘘です、そんなことはありません。

十九

お客坐敷でお年男のお當て居か、お豆にやしをいたします、お客坐敷と申すのは、御備坐敷についた處で、御入輿になつた姫君樣方が御出の節、こゝまで御駕籠でお通りになつて、先づお這入になるお坐敷なのです、又たお年寄の面會所にもします、私共が召出された時に御書付を頂戴するのも此の御坐敷です、御對面所とは別なのです、其の後でお使番が緞子のぐる〳〵の蒲團で、お年男を包んで胴上げにするのが例になつてゐました、胴上げにする時に『めでた〳〵の若松樣よ、枝も榮えて葉も茂げる』と唄ひます、それもお使番だけのことで、他の者が加はるやうなことはありません、私共は見たこともなく、話に聞くだけです、ぐる〳〵の蒲團と申すのは、裏も表もないので、蒲團には皆緣が附いて居りますが、ぐる〳〵には緣もありません。

お年男は御表では御用取次（御側衆五千石高の上席）、奥では御留守居（五千石高、與力十騎同心五十人附屬す、此の勤役は旗本衆の最上の出世としてあつた、勤功のない者は任命されないのであるから若い者はない、孰れも五十歳以上の人が就任する）が勤めます、式が濟むとぐる〳〵の蒲團を賜はり、其の蒲

[illegible]

す、豆を頂くのにお[illegible]は[illegible]

きます、これにお使番衆[illegible]で、[illegible]に近い所には御年寄が[illegible]

ます、中年寄が頂くのは縁台でございます、

部屋方長局では中居などが[illegible]を前に[illegible]くのです、銘々に豆を紙に包み、其の中へ鳥目を入れて、自分の身體を撫で、右の肩から抛げて左の肩で取る、三度、繰り返してそれをお廣敷と奥との境にある番部屋（お使番）へ持つて往き、後向きになつて抛げ込んで來ます、此の部屋にはお下男が大勢詰めて居ります、豆包みはお下男の役徳になるのです。

上々のはお年豆を奉書に包み、お目錄、五百匹位（金一兩の半分）を別に包んだのとを臺に乘せて、搔取で長かもじを端しよつた中年寄が持つて出て來ます、お次は中かもじを掛け、合ひ着を着て、襷げをして、挑灯を持ち、後向きになつて待つて居ます、お次が先へ立つて、中年寄と番部屋の入口へ來て、臺に乘せて置きます、此の往返に後を見ないのが例になつて居りました、是は天障院樣の御殿のことで、御臺所ならば中年寄でなく、お錠口が番部屋へ持つて往くのです、お次の待つて居るのは、お側の入口のお杉戸の側です。

上が御上段に居らつしやる處へ、御年頭を一升桝に入れ、お三方に載せて差上げます、御式のあとで午後の七時半、八時の頃に、お側の者が御年頭を頂きに參りますと、匙子で掬つて下さいます、將軍家も其の他の御方々も、男の方ならお手で摑んで下さいました、お上段の高さは床の間の縁より少し高いくらゐですから、我々は坐つたまゝ飛びたれます、

お年男から御祝品と唱へて、大奉書へ描きました果品の寶船を三枚獻上します、これがよく古道具屋へ恰好な植物になつて出て居るのを見掛けました、（是は維新後の話である）、是はお廣敷から廻はるので、御右筆が持參して、中年寄が御側へ持つて參るのです、お年寄へもお寶の繪（同じものだから、御座所へ獻上するのを御祝品と云ひ、お年寄へ贈る分はお寶の繪と云つた）を贈ります、其に案内を受け取りに往くのです、御祝品は年越の夜に御枕上へ置きます。

上の御枕上には衣桁の小さいやうなのがありまして、お守りや御懸の衣具したのを掛け、御懐中物を入れるお廣蓋、御鼻紙臺、御煙草盆、煙草は引出しに入れてあるのです、お側箪は銀の御紋付、翌年は紫檀へ平蒔御紋付、その傍にお枕のお夜具を積みます、緞子のお夜具一つ、模様のお夜具一つ、紅絹細かいくるみつお夜具一つを積むのです、是に赤の絹紬み、ねり裏のお夜具です。

煙草は御休息所では決して上りません、其間もお食後に二服つゝ、其の外なにか召し上り物のあとで二服上るだけのこと、常にお煙草盆はお側にありますが、極つた外に煙草を上るなどゝいふことはないのです、其間もお側にお廣蓋、お鼻紙臺、お煙草盆はありますが、御休息所用のと御座所用のとは別のお道具です。

御鼻紙はお揉み紙といつて、小杉の厚い紙を椀へ容いて、上下から強く押して揉ませ、これを延べて四ツ折にしたものです、御鼻紙臺には揉まない紙の間へ揉んだ紙を重ねて、銀の文鎭を置いてありました。

お年越しの夜に新參のお末が奥の御膳所で、新參舞といつて裸踊をするなどゝいふことを云ひ觸す者もあるさうですが、決して無いことゝです、其の夜お圍爐裡のある處で、踊り狂ふことはあつても、新參古參ともに裸で踊るなどといふことはありません、藝のある者は相應に藝をします、隨分ふざけはするらしうございました、けれども藝のない者は踊る者についてお圍爐裡のまわりを一周するだけのこと、殊に御年寄が見物する折といふのは怪しからぬ話で、御年寄どころでなく御目見以上の者は決して御膳所なぞへ見に往くものではありません、私共さへも

見たことがないのです、殊に堅くつゝみでした、さうして[illegible]
御書見をなさるなどとは、出世後にも稀にあつたものです。
お末に居るお廊下といふのを、お末とばかり云ひもするの
で、お末もお廊下も同じなのです。

二十

我等は爰で少々辨じて置きたい、櫻痴居士が九代目團十郎に書いた鏡獅子は、例の枕獅子を改造したとやら承つたが、大奥のお鏡曳きを材料にして、大分高尚がつたものである、其の御小性彌生の役は、六代目菊五郎が堀越譲りで得意らしく、今日も繰返し上演されて居るが、誠に苦々しいものである、お鏡曳きもお豆囃子も、賑かす者は皆御下男で、女性の參加はない、お年越しの節分參拜の如きもお末に限つたことである。お小性などの出場は斷じてない。

然るに從來渠の春興鏡獅子が、明治廿六年三月、九代目團十郎に依つて歌舞伎座に上演されて以來、爰に三十二年、誰からも[illegible]鐵砲を向けられずに居るのは不思議千萬である、福地さんがバッテンの國から江戸へ來て、幕府の外交方面に立身しただけで、大いに江戸通のやうに扱はれて居るのも面白い、勿論奥向きのことなどは夢にも知らう筈のない人だけに、枕獅子の遊

[illegible]
[illegible]
今は若し大奥のお小性が[illegible]たら
と、思ふ者のあることを恐れる、これ故に特に老刀自からお小性について聞いた話を左へ書いて置く。

お小性は二三人ありました。七歳位でお小性になつて、十三歳位では元服をします。これを元服お小性と云ひました、これまでは振袖です、十六七になりますとお中臈に這入ります、髪は初めがお稚兒、それから引詰めた前髪のお稚兒、根細の島田に結ふのでした、是は眉のある間のことです

元服お小性はお中臈と同じ働きをして居りますが、子供（元服以前の）はマア育てゝ頂くやうなもので、お側で手習などもさせて下さいます、寒い時分にはお炬燵の端へ入れて下さるといふ有様です、御食事の時にも、御祝の節にも又其の間にもお茶を差上げるのはお小性に限つて居ました、それから御對面所で役人達が、お手熨斗や御目録書を頂戴する時に、お小性が取次ぎます、是等が子供の役とでも云ひますか。

お小性の眉のある内（元服以前）は、振袖の搔取です、お三日の外は帶付の振袖を着ます、髷なしの根細の島田は、前髪を髷の後へ左右に下げます、髷といふのは小枕（かもじの先に附

いて居る、故に、桐なしは入れ毛のないことである）のことです、根細の島田（かもじを入れぬので根が細いからの名稱）から、桐の這入つた島田（かもじが入ると根は太くなる）になるのでして、經行してからは片外しに結ひます、片外しは前髪を双方へ出さずに、右の方へばかり出します、

根細の島田はお小性の外に、部屋子も十二三歳迄は結ふ髪です、髪挿も笄も差さずに、根に丈長を卷きます、丈長で持たせた髪で元結は一本も掛けません、提髪は後で丈長を拜ませてありました。

お小性の外着には腰揚げがあります、揚げに腰帶はありません、下前を幅廣く仕立てゝ背骨の處まで往くやうなつて居ました、七寸幅の帶を二ツ折にして締めます。

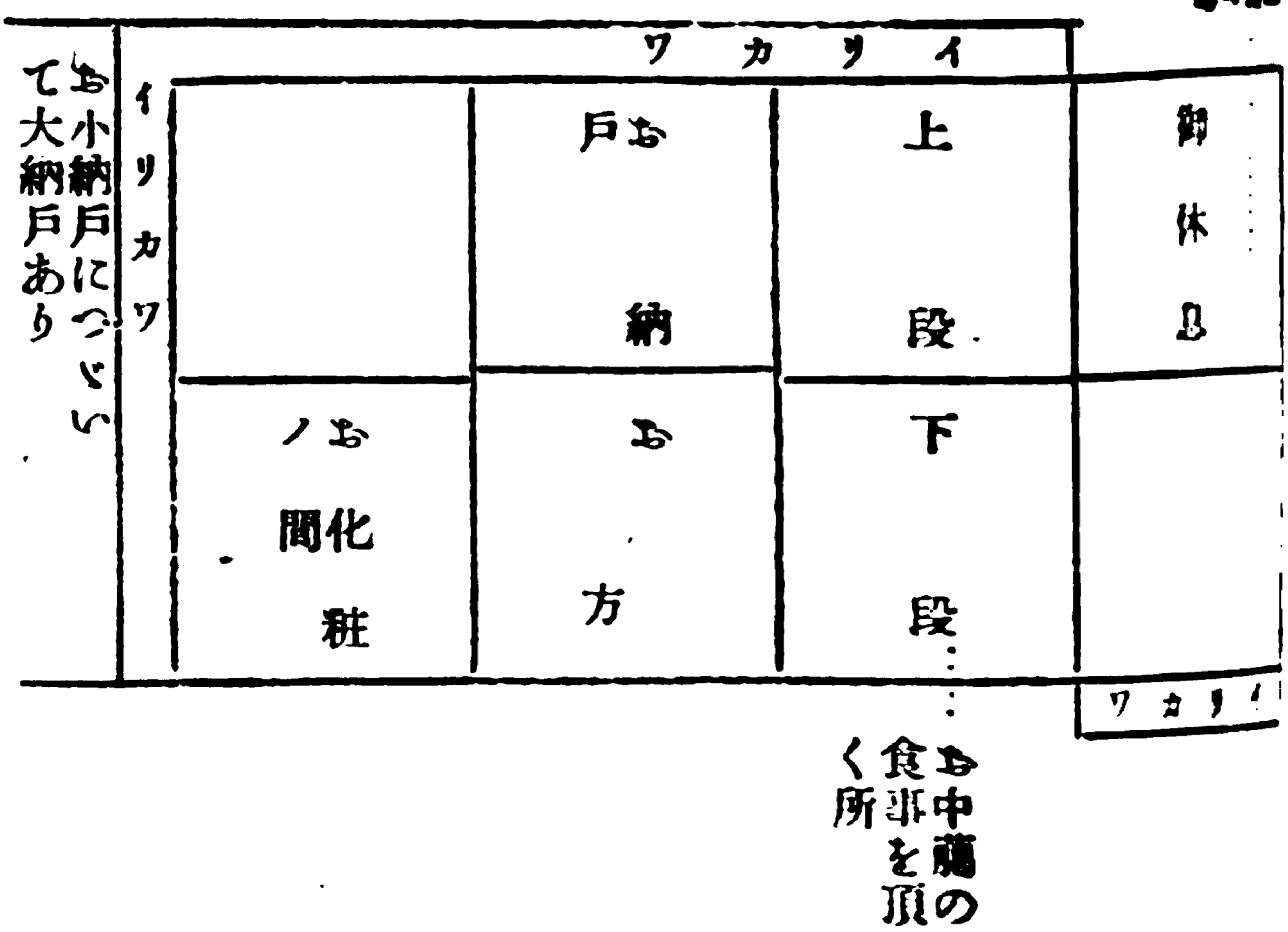
我等は附言しやう、女小性は公家にはないさうだ武家に限つたものである、御殿でも御女性のみに附いて居る、將軍や公子には女小性がない、然かし大名には男性に附いて居る。井伊家なとでは殿様附の女小性はお髪である それ等が御本丸と大名衆の風向との著しい違いであらう。御本丸の御小性は十四五を限度とする。其の多數は十二三であつた、又た役目もお茶の給仕であるが、諸大名の家にも茶小性といつて、幼年者が召仕はれて居つた、孰れにしても十二三歳では元服して、眉毛を落し鐵漿を含んで居たのである、元服すれば振袖を脱ないことは勿論だ、サア鐵漿獅子のお小性先生を何と見て好いのだらう。

二十一

徳川大奧（高瀬羽皐）に、御坐敷（孰れの室の事か不明）と云ふ女中の出入口に松飾りが、普通の如くに立つ、また七ツ口と云ふ通用口へも松を建てるだけで、外に松飾りに一切ない、注連飾りと云ふも御臺所の御坐の間の床へ、並の輪飾りが一つと、御儀式に用ゐる三寶鏡餅の台など二三品へ注連飾りをする許りで外には一切ない、たゞ御座の間の床へ、日の出に鶴を畫いた三幅對が掛る、中は日の出に波と鶴、左右に松竹梅と云つたやうな物、置物は蓬萊と極つて居る これは銅で出來て居て、金銀の象嵌があるといふのに對して、續けて御臺所の御側の模樣を話された。

女中の出入口や七つ口に松を立てるなどゝいふ事もありません、鏡餅はお上段の旁の坐敷に屏風圍ひをして置いてありました、置物が蓬萊と極まつて居はしません、想像で書くからコンナ事になります、

[illegible]



御寝所のお側には、常にお中臈七人、元服お小性一人、お小性（眉のある）一人が出て居るのですが、朝晩交替の人が一處

[illegible]はいよしの[illegible]に御用[illegible]其の他はお二の間に詰めて居るのです。

お側もお中臈も同じです、大名の奥ではお側とばかり申します、御本丸でもお側と申さないこともありませんが、正しくお中臈と申しました。

お次と申すのは御寝所の常のお住ひの事です、お次の間は二タ間あつてお次の持ちです、お茶を上げるのはお小性ですがお茶を拵へるのはお次です。

上臈は上附きも御寝所附きもありました、上附きの小上臈はおの字名で、御配膳をする位なもので、別に御用もないのですが、御寝所附きの小上臈は、萬一の場合に御身替になるとしてありました、成人しては上臈年寄になるのです。

奥の者には休日といふものがありません、八ツ出と明け番とがあるだけです、八ツ出といふのは午後の二時に出勤して、七ツ（午後四時）に引くのです。

明け番は泊りの翌日で、午前六時に歸つて、午前七時にチョツと出て、午前十時に引きます、是は御年寄と上（將軍）附のお中臈だけで、御台様附き其の他の御女性に附いたお中臈は、御用が多いので普通でなくては引けません。

御年寄の泊りは朝の十時に出て、午後の二時に一度歸つて、夜の五ツ（八時）に出るのです、お中臈の泊りは前夜の十時から、翌朝の十時までゝす、明け番は朝四ツ（午前十時）に出て、二時に歸るのです、是も時間が延びます、お中臈は平素紋縮緬、又たは大縞縮緬を着ます、お供の時は同じ物の縫入です、地色は様々で極りはありません、明け番で下がる時は腰掛げを解き褄を執つて歸ります、下丁の者は掛げのまゝで退出しました。

御臺所附きのお中臈は、出番の時は部屋（自分の）で食事をしますが、奥で食事をする方が多うございました、私共はお下段へ正座を敷き、人數だけ御膳所から持つて來るのを、黒い平たいお膳で食べるのです、上（將軍）附きのお中臈が奥で食事をするのは詰所です、詰所は、お次の間に屏風圍ひをして、上（將軍）のお出なさらない時は、其處に拵へて居ます、食事も其處でするのです、（御附きお中臈がお下段で食事を認めることは、御臺所が平常お方若くは御休息に在られることが多く、お上段に居らつしやることが甚だ尠い、殆ど空室になつて居るから、斯ういふ仕來にもなつたのであらう）。

お中臈は朝夕に御用が多いので掛げをして居りましたが、御年寄は掛げるといふことはありません、私のお仲間（同勤お中臈）は二十人ほどありました、上附きの御中臈は何時も搔取なしで、帶付きですが、上臈方は何時でも搔取でした。

腰帶の幅は三寸です、掛げとは違ひます、掛げは緋縮緬、又は白絹、お年寄は年中白絹でした、振袖の人は緋縮緬のしごきで結んで下げます、お小性は振袖です、額へ鍋つるのやうに白キワを附けます、髮は前に云ひました、元服お小性は總べてお中臈と同じで、只搔取を着ないだけの違ひです、花存に元服したお小性も、眉のあるお小性もさして居ました。

白キワといふのは際白粉のことで、子供のキワ白粉は額の形に附けますから、鍋の弦のやうになります、元服しない内は白キワばかり、額の際へ附けて、黒いものは附けません、白キワには生白粉を溶ひます、綿紅に包んでタタウへ入れて置きました、白キワは眉の上へ附けるものです、キワ黒といふのは眉のことです、白キワは子供と元服した者とは附け方が違ひます、元服しない者は長眉を掛けた、自分の眉に黒をさすこともないのです、元服した者の白キワは眉の上へすこし丸みを持たせて、二タ筋に引き、其の際へ眉を置きます、眉は上を濃く下を薄くします、（キワ白は額の形に鍋弦のやうに引くのと、眉の上へ二タ筋に引くのと兩様あるので、前者は元服以前、後者は元服以後の粧ひである、其の圖は小笠原・水島の傳書にもあり、

安政五年版刷本奥女中相競にもあるが、御本丸のとは違ふ、長(長かもじ、を略して長とのみいふ)、を掛けない時は、眉(置き眉)はありません、御目には寂すみ(下げ眉)を又眉を付ける)常眉の人があるのですが、武家にはないのです、眉(コハゼのやうな型)も一種しかありません。



鍋蔓式
(髪際の線か生白粉、)
(眉のある者の白キワ、)



二筆式
(眉の上の線が生白粉)
(元服した者の白キワ)

二十二

御座所は根太の透き目に紙が張つてあります、何紙だか分りません、御座所の床の下には炭が詰めてありました、濕氣を拂ふ爲めなのです、是は御側だけですが、御側といつても十室あるのです、お次其の他の御座敷の椽の下には炭は這入つて居りません、炭を敷くのは御座所だけです。

御寢所はオジョウダ、ミを敷き、其の上へお夜具を出します、オジョウダ、ミの中はパンヤを心にして、廻りを眞綿で包んであります、毎日運ぶのに重くはありません、七ツ午後四時出で出勤しますと、直ぐに御寢所を拵へました、お上段はお障子閉ひになつて居りますので、拵へて置いても見へはしません。オジョウダ、ミは高麗椽で、表は常の疊表です。

御夜具は上のは御納戸縮緬で、お茶羽二重の裏がついて居ます、此のお茶羽二重は拜領して洗ひますと、只だの茶色になつて了ひますが、はじめは薄鼠の萠黄がかつた色なのです、旦那樣(御附きの者より申上げる言葉、老刀自は大璋院殿を旦那

と云はれた、部屋方でも自分の主人を旦那様と呼ぶ）の方、紫縮緬二布のお湯囲、緞子か縮緬の模様のお夜具で、裏は紅絹です、八丈などを御好みでお拵へになりました、オカイグルミは搔巻きの薄いのゝことで、緋縮緬の表に紅絹の裏です。

お蚊帳は十六畳のお上段一ぱいに吊ります、萌黄紗綾子です、お蚊帳の縁は大幅の緋縮緬、上（将軍家）のは水浅黄ですが御台所のは赤です、蚊帳の釣手は唐糸の紐、総附きで三丈の余りもあります、お蚊帳を高い天井の際まで吊り上げて、あとを括めて結んで置きます、此の釣り手一本の代が三十匁（金一匁の半分）ほどだと聞きました、お蚊帳の四方へは縁を三つに畳み、お蚊帳押へを三ケ所づゝ置きます、お蚊帳押へは三寸角の長さ二尺ほどのもので、鉛を布に入れ、それを青紙で張つて拵へたのです、青紙は仕切に立てる青紙屏風の、裾の青紙なのです。

長枕は長道具で先づ飾り物なので、平素お遣ひになりますのは、黒塗のお枕なのです、枕に紋のあるのは、女郎衆みると云つて、我々でも遣ひません、さうですから蒔絵の紋の附いた枕などはありません、お枕切れは真岡（木綿の名）の薄地のものを、お枕子と一緒に紅絹の細く絎けた紐で括ります、枕子は緋縮緬か紅絹かです、上（将軍）のは何か存じません。

お寝間着は白羽二重、帯は真なしの幅の狭い緋縮緬のを召しました、御台所は御上段へ御寝なり、中年寄一人、中﨟一人が御側へ、御番の中﨟四人はお次へ宿直をいたします。

徳川の大奥に、御台所の御座の間の床へ並の輪飾りが一つと、御儀式に用ゆる三宝鏡餅の台など、一二品へ注連飾りをするばかりで、外には一切ないといふのは違ひます、御床間に松輪飾りや鏡餅を飾ることはありません、お床の間には真中に床飾り、左右に立花一対だけです、又た女中の出入口に松飾りが普通の如くに立つといふのも違ひです、女中の出入口といふのは、奥の口のことでせうが、そこ迄は又者も供をして来る処です、家の内なのですから松飾りがあらう筈がないのです、それから御台所の平日居る所は御座の間となつて居るが、其實は御休息と御小座敷などに居る方が多い……将軍が奥へ来ると、此の御座の間で逢ふのであるといふのも間違です、御座の間となつて居るのではなく、其處は御休息なので、御座の間とは云ひません、御寝所のことを御休息と申すのです、宮様（家茂夫人和宮）だけは、常に御座の間にいらつしやいました。

御休息は御上段の下が、お二の間、其の隣りにあるのです、（前の図を見よ）、御休息にはお飾附けは何一つ、お清まで出て居りますが、大抵御休息でなく、其の隣りの御小座敷か、御休息のお椽座敷においでになりました、御休息の御上段は個総の處で、

此の御上段には御几帳を掛けてあります、御寝の時には御几帳をかけるのです、将軍家が奥へならせられてお入りになるお小座敷は、上のお鈴廊下に近い處にあつて御休息の御小座敷とは別なのです、将軍家の奥での御寝所も別にあります、我々の住宅のやうに考へては大間違ひなので、案外に奥向は大きなものです、是では何だか将軍家は御臺所の御座所へ、直ぐにお入りになるやうにも讀めます、御臺所のおいでになる所と、将軍家のおいでになる所とを混じてゐるらしうございます。

此の本（徳川の大奥）も想像で書いたもので、實際の話ではありません、慎徳院様（家慶将軍）が姉小路（上臈年寄）へ、お手を附けられたといふやうなことも、あるべきことでないのです、年も若く美人でもありましたから、そんな想像もあつたか知れませんが、決して左様な事のあるべき筈はないのです、将軍家がフトお椽側へ出て居らつしやる處へ、お年寄が参ると、急いでお椽へ踞つて、据り直される位のものでした、それを奥へさへ取込めば何でも出來るやうに書いてありますが、ソンナ自由なことが出來るものではありません。

初春のお祝ひ膳は生の物であるのを知らずに、屠蘇三獻、次に白散、御雑煮が三椀など丶、ホントに召上るやうに書いたのは馬鹿々々しうございます、召上がるものは早天に上げて了ひ、其

つ後にお咄なを上げるので、お[illegible]一寸[illegible]なさ[illegible]、[illegible]ないこ
す、（老刀自は此の将軍様の御[illegible]を[illegible]す[illegible]れ
た。それを次に出して置く、是が御[illegible]に[illegible]けの[illegible]中[illegible]である）

正月元日

一御[illegible]汁上り

一御喰つみ上り

一御とそ白散上り

一御福豆上り（黒豆）

御とそ白散と引かへ

一大福御茶三度上り（俗間の福茶也、山椒昆布梅干豆茶の五種）

一御菱餅上り

一御本（膳）上り

一御二（膳）上り

一御三（膳）上り

一御そう麺上り

一御吸物上り

御そふ麺と引かへ

一御臓煮上り

御吸物と引かへ

一吸御吸物上り
　御膾煮と引かへ
一御土器上り
一御長柄上り　御首の方、右手に持、御柄の方、左手に持
一御加上り
一御松立上り（三方の）御とちめまへ
一御さたみ（酒のこと）上り　右同断
右御三方すべり候ても持出候人引不申控居事
一御綵立上り
一御引茶上り
二日
　元日と同じ御膳なれども二日には、
御とそ白散
御そうめん
吸御吸物
　右御三品は無之候事
三日
　三日にも前同断
鯛浮上り候事（鯛浮は何なりしか忘れたり、お鯛茶のこと
かとも思ふと老刀自いへり）

御盃事次第
一ひれ御吸物（鯛のひれ）
一御奈良臺（正しくは奈良臺子と云ふべし、今謂ふ結納臺の
如きものにて、中央に糸花あり、糸花の下に奈良人形の尉
と姥とを置く、是は盃臺なり）
一御長柄
一御加
一御おさえ（松の飾り物のある臺の上に昆布、昆するめ、
短い熨斗を載せあり）
　　とちめまへ
　持出候人控居事
一御したみ　二ツ
右御三方すぐにすべり引候、
御土器は御本（膳）へ付すべり申候
御流ノ次第
一御熨斗上り
一御土器上り
一御長柄上り
一御加上り
一御松立上り

一御したみ上り
一献の御土器上り　上さま向
右三ヶ日とも御膳御夕御分
御高盛り上り
三日夜御謡初ニ付
新御殿ニテ上ル
一御のし（單にのしとあるは皆長のしなり）
一御吸もの
一御かはらけ
一銀御かんなべ
一御松立
一御したみ
六日
御對面所ニテ
一御のし
一御若餅
其他前同斷
一御湯當上り不殘すべり
御緣高御引茶
別段御吸物御出候

七日
一御熨斗
一御齒固上り
御菱餅
一七種御雜粥上り（品々は民間と同じ）
十一日御鏡開ニ付
新御殿ニテ上ル
一御のし
一御汁粉
一御吸物
一御肴二種
一御盃
一銀御かんなべ
十四日御對面所ニテ
一御のし
一御本（膳）より御三（膳）迄
一御土器
一御長柄御加
一御松立
一御したみ、すべり

一御湯當
一御緣高御引菱
十五日
一御のし
一御菱餅（此臺はお三方なり、民間の雛に遣ふものは用ゐず、男の方は白二枚赤一枚、女の方は赤二枚白一枚、總計は共に三枚也）
一御はがため
三月三日上巳
御對面所ニテ正月十七日同樣
外ニ桃ノ花御土器ニテ上リ（大なる土器也、ゴトウガワラケよりは小なり、桃の花土器とて別にあるにあらず、端午にも菖蒲土器あれど同事なり、只だ土器へ桃菖蒲を添へて出すよりの名なり）
五月五日端午
御場所上り物、上巳同樣、
外に御檜高上り候事
六月朔朝御膳前に
一御氷餅上り
六月十六日御嘉祥ニ付

御對面所ニテ
一御のし
一御のしもみ　一膳（一尺計、普通ののしの幅より丈に釣り合はせて狹くす）
一より水　同（黃色に色附けたる餅を細く切りて眞中をねじりたるもの）
一大まんぢう　同
一大鶉やき　同
一大ようくはん　同
一あこや　同（生麩にて丸く出來て居る）
一金とん　同
一煮染麩
御方（常のお間）ニテ
一御冷麥
一御吸物
一御肴二種
一白木御三方ニテ御盃
一銀御かんなべ
七月七日
上巳端午と同樣上り、

以に御さふらふ上り候事

七月十五日

御對面所ニテ

一御のし

一御進ノ飯　御三方御居上り

一御刺鯖

淺御紋附御中椀ニ盛（淺とは淺黃のことなり、黑塗御紋付、此の御紋の色が淺黃なるよりいふ、並の椀なり、淺きもの、扁平にてはなし）御向刺鯖附

一御進ノ飯

八月朔日

五節句ノ通り御高盛上ル

八月十五日御月見ニ付

御表より御歸り遊して御方ニテ

一御のし

一御だんご　御里いも　御三方ニ居

一御味噌煮御だんご

淺黃御わん盛

一御吸もの

一白木御三方ニテ御土器

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

一浸御こんたへ

一花松立

一御したみ

九月九日重陽

前御節句ノ通り

外ニ菊ノ花御土器盛

九月十三日

前御月見ノ通り

外ニ

一衣かつぎ　枝まめ　御三方居

一秋茄　御吸物上り（吸物ノ中へ萩ノ若枝ト茄子ヲ入レル、召上ルニハアラス）

十二月十三日御すゝ納ニ付

御方ニテ

五節句ノ通り

十二月廿八日

一御高盛上り

但節分之せつは御對面所ニテ

一御高盛上り

[illegible]

御二度メ、御膳相濟候て

一御のし
一鬼打まめ
一御吸物
一御土器
一銀御かんなべ
一御まつ立
一御したみ

右之通り御祝儀手順

あらまし書留

御祝の御食器は一度限りで、二度とは御使ひにならず、それはお年寄が順番に拝領しますが、お三方やお土器ですから、頂いて困るものでした。

奥の者を皆御臺所についたものとばかり思つて居いたらしうございます、御客會釋五人といふのも往けません、表の御座敷に四人、是は眞の御客會釋（格式だけを賜つて職事のない御客會釋がある、お下附中臈が晩年に優渥の意味で御客會釋になるが、其の職務は行はぬ）で、宿直はありませんが、毎日缺かさず出て居ます、御錠口は本役が四人、助が二人、助はおの字名で、勤め向きは本役と同じです、其の内でお錠口へ出ますのは二人で、一人づゝ隔日に御番を勤めます、此の役は上様附きにばかりあつて、御臺所附きにはありません、中年寄は御臺所に附くので上様、將軍家附きにないのです、表使も御臺所附きにばかりあるので、五人居りまして宿直は一人づゝ、御右筆頭は大概一人です、上様附きはありません、御坊主（女の）四人は御臺所附きにない役です、お三の間は一人ではありません、八九人はあります、時に依つてお三の間頭のあることもありますが、お三の間頭はお次の格なのです、しかしお次とは全く格違ひでした、無論御目見以下なのです、御半數詰十人、聞いたこともない役です、奥の者は上様附きと御臺所附きとありますが、御客會釋（上様附）からも、中年寄（御臺所附）からも、お年寄になります。

二十三

御臺所が御目醒になりますと、中臈が御嗽ぎを上げます、御膳も上げます、御膳と一處に御配膳をいたすのです、御配膳はお年寄の役、お鉢は中年寄、其の扱ひは中臈、品々を御次までは御次が持つて來ます、（御臺所は髪を結はせたがら、食事をされるのである）御食事は中年寄の扱ひで、晝後のお間ひの物お八ツ（午後二時）又た夜の長い時分には召上がることもありました、それに御望みといふはないので、中年寄が取計らつて差上げる譯です。

お次、お三の間に至る迄に附きます。お菓子にまた時に、蜜子日有と称つて居ました。この外はお八ツ（午後二時）にお菓子を上げます。是は毎日替つたお菓子で、毎度薬物を附けました。三方へお銀皿を載せ、お銀皿の中へ寄で上がれるやうに、菓物の皮を剝き、程よく切つて入れます。お茶はお薄茶です。抹茶はお祝の時しか上げません。

御食事は懸盤を中に両方へ三寶（多くは三方と書く、又た三寶とも書く）を据ゑる、斎のあるのが懸盤で、斎のないのが猫足です。御食器は胡寶が椀、瀬戸物はお夜食だけで、お夜食茶椀と申しました。皿の類は瀬戸物で木蓋が附いて居ります。差上げる時に蓋を取除けて出します。（食器に瀬戸物を用ゐることは新しくもあり、又た奢つた方のことだつたらしい。元祿十六年の俳諧碇綱に、すつ切としてよいきみな事、斎非時に皿の匂はぬ瀬戸物やとある。江戸は陶器の産地でない。京の高原平兵衛が茶碗御用達として浅草へ屋敷地を賜つたのは、承應二年であつて、それから江戸で高原焼が出來た。奥で使用したのは無論京燒の陶器であらうが、何時から使用し初めたのか、民間に瀬戸物の行はれるやうになつたのは、寛政以降のことである。

お食事はお末頭からお次へ、お通ひはお次です。それからお側へ、それから御配膳、御配膳は上﨟か御年寄が勤めます。おハチに[illegible]す。[illegible]へ。[illegible]それ三の間御末[illegible]八。[illegible]は杓子に附いた飯をも附くために[illegible]てゐます。お杓子はおハチの中へは入れません。一々三方の上へ置きます。お汁の間は總べて蝿帳が附いて居ます。お次がお膳（中間）へ渡す時に蝿帳を取るのです。御食事の給仕は盆や三方を用ゐるのは不敬としてありました。手でします。片手です。御食器はお末頭が洗ふのです。上（将軍）は奥でお膳を上がることはメッタにありません。

御食事はオシマイドコ（化粧室）で上げるのです。御食後直ぐにお含嗽をあげます。お食後にお顔直しと云つて、お小盥で御洗面があつて、白粉をおつけになる。食物を上れば其の度毎におしまひを遊ばすのです。

御目さめになると御手洗、御手洗が済むとお鐵漿をお附けになり、それからおしまいを遊ばす。此の時は御襟だけです、それから御ぐし上げ、此の御ぐし上げの間に御食事があるのです、オシマイドコの御鏡臺は蓋が取つてあります。掛けてある帛紗を撥ねれば、直ぐにお顔が見へるやうになつて居ます。此のお鏡は毎年一度づゝ研ぎに出します、上のお鏡といつて別段に誂つては居りません。裏は梨子地で、表が御紋付の蓋が附いて、

中を唐縮緬友禪織の使い地質の紅い吊紗で包んであります、お鏡吊紗は絖と紗とに新しく取換へます。

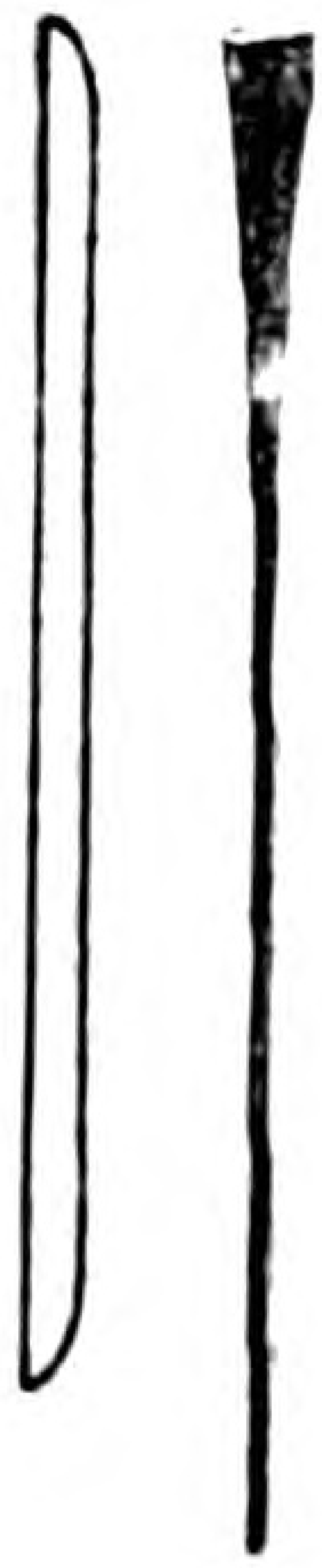
御膳所はオシマイドコで、髪を上げながら御食事をなさるのですが、髪を上げながら食事をするのは、上ばかりでなくお年寄もお中﨟も皆同様なのです。

お髪梳きと申して御髪中に、おぐしを梳きます。それが上ばかりでなく、お年寄お中﨟も皆同様です、寢て居る内に梳くので、睡いのに首を梳き了へば右に寢返へらなければなりません、モウ五月蠅ものです、梳き上げて櫛巻きにして置きます、お髪梳きのあとを引詰めて、形は普通の櫛巻です

天璋院様へ御目ざめを申上げたことはございません、大概時間を聞いて御起床になりました、御目ざめを申上げる時には「お御目ざめになつて、お宜しうございます」と申すのです、又た私共は朝「益々御機嫌よろしう」と申上げました、夜も同じことを申上げます、出仕した時は何も云はずに只だ頭を下げるだけ、引きます時もお辭儀だけをするです。

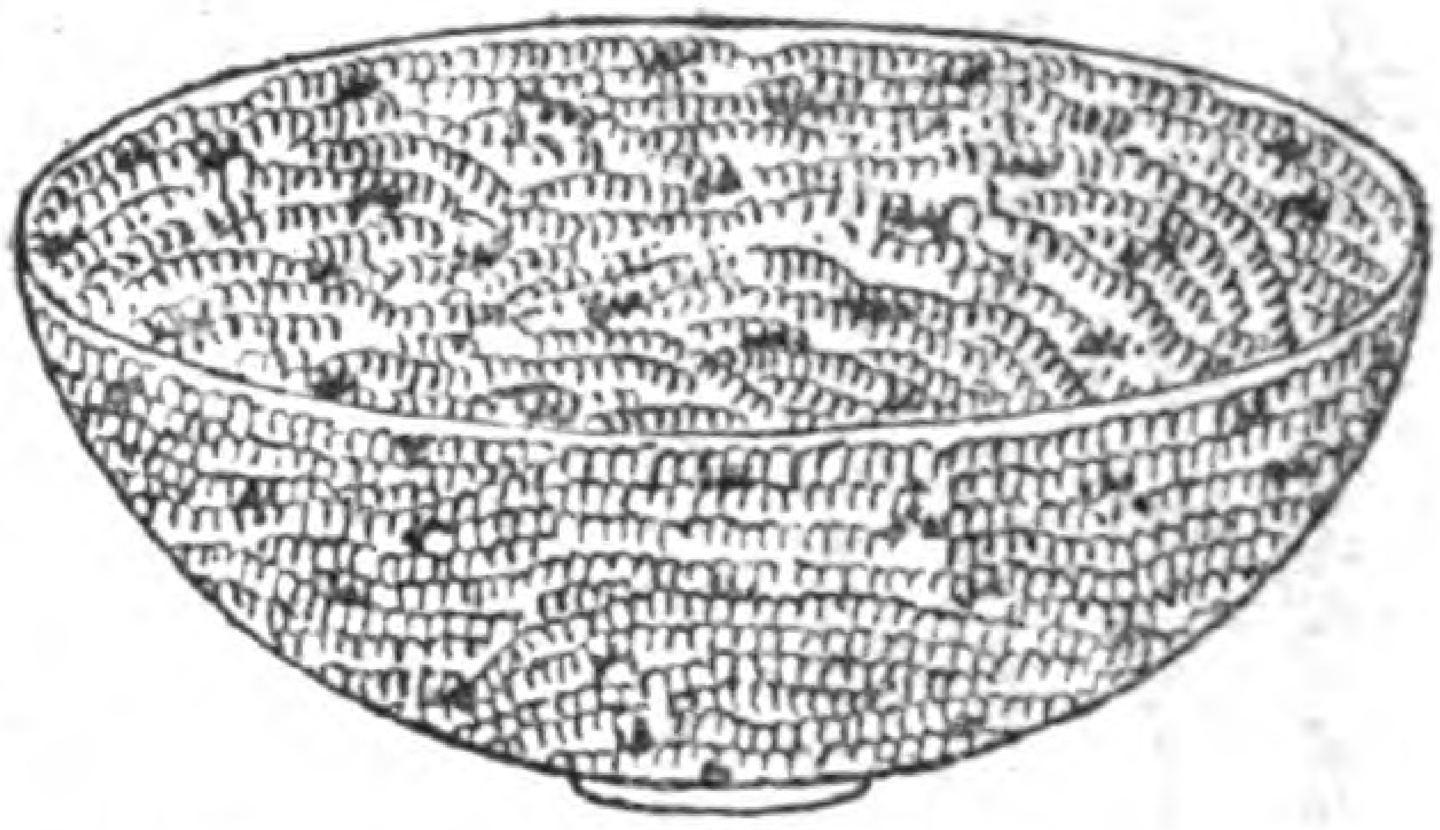
御楊枝を上げる時の御楊枝は、お上り箸といふ細い箸の先へ、麻を拵つてネリグリで並を附けたのを上げます、是はお中﨟が拵へるのですが、それは表道具で御實用になるのは、普通の打楊枝でした、お齒黒は湯センで流します、此の湯は銀です、外のお道具も皆銀です、お角盥（耳盥）はお鐵漿なのと、お含嗽のと二つあります、二つとも銀製のです、黄肌の皮を煎じて其の汁を一二滴づゝ、お含嗽の水へ入れます、お鐵漿こぼしは蓋付きの錫の深い箱です、年中それを捨てません、何時捨てるのか溢杯になつたのを見たことがありません、お鐵漿の時にお遣ひなさる紙は、お流しものゝ樽へ入れますが、實は流すのではなく、御火中と聞きました、お流し物は四斗樽の鏡に穴を明けて置いて、其處から入れます、溢杯になればメバリをして流すとしてありました、御下賜のあとでも、細に切つて此の樽の中へ入れます、オシヤウヅ（清水）といふのはお鐵漿を沸す鍋のことです。

かつら箱は蝶帳が附いて居ります、引出しに美男桂（粘り氣があるので、伽羅の油のない時代に美男桂を使用した、これが今殘されて居るのである）が入れてあります、美男桂を削つて中から出る汁で、おくれ毛を上げるのです、コネズミ入れはコネズミを入れる器です、コネズミは京都から來るのに限つたものです、袖形（象牙製）で先へ白粉（キツ白）を引いて、それからキワ墨を擱げて眉を置きます、コネズミはキワ墨に添ふのです、眉の間は指二本ほど明けて、若い者ならば一寸二三分にも置きますが、年が闌ける程、小いさくしました、輪臺は中に紅絹の吊紗を入れて、金盥や耳盥を載せるのです。



物形ノ圖

御臺所もお鐵漿、白粉は御自身でなさいます、お鐵漿のお含嗽茶椀は表道具で、日常は瀬戸物の徽塵唐草に極つて居ました、お小盥はアノ蒔繪のあるのが御常用のものです、角盥といふのは、兩方へ二本、棒の出て居るのですが、旦那様(天璋院)の御好みで、銀の耳盥が出來ました、耳盥も眞鍮などのはありません。



大奥のものではないが、徽塵唐草は、斯ういふものなのを、お目に掛ける、

鐵漿は小さい枠火鉢で湯煎にするのです、直に火に掛けることはありません、お召あぶりの火鉢も枠火鉢です、お末で遣ふ長火鉢は大きなものですが枠火鉢です、火鉢と云へば大概枠火鉢で、さもなければ懸け盤か猫足です、

お鐵漿の濟むまで、中年寄が正面にお鏡を持つて居ます、唯

だそうです、揺れますので、両手でお鏡の柄を握つて、なるべく上へ突き立てゝ居るのです、おはなさん(天璋院様御附御中臈)といふ人が、部屋の者に鏡を持たせて、顫へるといつて怒つたのを、皆が笑ひ話にしました、誰が持つても、お二方なしでは揺れずには居ません。

お鐵漿召しといふやうなものはありません、お朝召しでオシマイドコへお出になるのです、毎日五度御召し替へがあります、お朝召しは緋縮緬、又は縞縮緬などのお召し物に、被布を召し、寒い時分には二ツ白、惣觸れ召し、お晝召し、是は毎日違へます、帳面へつけて置いて、替り〲お着せ申しました、お夕方召し、お寢召し、白羽二重へ幅の狭い支那縮緬の後先に心のない絎けたのを扱きのやうに結ぶ、後家にお成になつては、お間召しは白いのですが、夕方と朝は色のを召します、(是は後年の天璋院殿について話されたのである)、お被布は花紋(伊達紋)です、五ツ紋は染めも縫ひもあります、被布に模様は決してありません、縫ひ模様、染模様孰れにしてもないものなのです、被布は廣袖になつて居て、一處を括つただけです、天璋院様は後家様ですから、お被布でのお逢ひがありましたけれども、髪を切らないお方には、被布のお逢ひはないことです、お被布には綿入も袷もありました、道行はありません。

二十四、

旦那様（天璋院）は狆がお好きであつたのですが、温恭院様（家定）がお嫌ひでしたから、猫をお飼ひになりました、初めにお飼ひになつたのはミチ姫と名をお附けになりましたが、それは死んで、御中﨟の飼猫の産んだのを一ツお飼ひになりまして、今度はサト姫といふ名をお附けになりました、御精進日には魚類がないので、其の日の飼料にする泥鰌と松魚節が、一年に廿五両入つたと云ひます、旦那様へお膳を上げる時に、猫の膳も出ます、瀬戸物で鮑魚の形に拵へたのを、黒塗の膳へ載せ、お下を頂いてたべます。

交尾期になるとお庭から外へ出ます、お表（御表ではない、お側でない奥の表方）へ頼んで捕へて貰ふのです、表の者だに を聞きますから教へて遣ると、一二人づゝで、おさとさん〳〵と呼んで捜します、何時も其の呼びやうがおかしいといつて、一同が笑ひました、それでは居たのも逃げるといつて、又笑ひました、（斯うした笑ひ方や、又た其の人々の笑ふ姿が、如何にも御殿女中らしい様子を想像させる）猫の掛りは、ませ、つゆ、はなの三人でした、（老刀自は猫掛りの一人であつたのだ。）

此の猫は十六年生きて居ました、直かに旦那様の上へは寝ません、旦那様のお裾の上へ寝たり、猫の蒲團がありまして、其の上へ寝たりしました、竹籠の中に中縮の枚縮緬の布團があつて、猫の寝どこに拵へてありました

お三の間などへ出て来ました時に、「お間遊び〳〵」というと、直にお側の方へ帰りました、我々がお下（おさがりとは云はず）を頂いてゐる處へ来ますと、紙へ包んで遣ります、それを喰はへて、自分のお膳の處まで往つて食べます、なか〳〵お行儀はいゝ。

猫は紅絹の平紐へ銀の鈴を附けて居ました、此の紐は一ケ月づゝで取換へます、上（将軍）へは猫のことは御内々でしたから、上のお入りには隠しました、毎年五六疋づゝ子を産みます、それを下さいます、私が頂いたのは御仕度が悪い、悪いと云つても、お鉢盛が一杯、蒲團の附いた竹籠、其の外に猫の玩具、さま〴〵ありました、先方によつては大変な仕度をしました。

お移りの時（本丸西丸の火災、その他天璋院殿は度々御殿を變へられた）には、猫を籠（あの鶏などを入れる、枠に割いた竹を嵌めたもの）へ入れて、お長持で運びました、お乾燥の様へ小便をした時には、内々で洗ふやら、香を留めるやら、飛んでもない大騒ぎをさせられました。

二十五

毎朝お後架の時にお顔をお拭きになるので、それから御手洗(御洗面)といふ順で、これはオシマイドコでなさるのです。キワ墨(眉を置くこと)をなさるのは、お三日(朔、十五日、廿八日)と五節句(正月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日)だけです、上の白粉は水で解くのですが、私共のは糸瓜の水、江戸の水などで解きました、上の白粉は京から納めましたが、私共は花の露(白粉の名)を上屋から買ひました、紅は京の小町紅です、紅猪口へはいて置いて附けます、附けてからハツスと云つて吊や紙で拭き取ります、上唇は奇麗に拭ひて了ひ、下唇をハツスのです、是は唇の外に附いたのを拭くです、天璋院様は一度おつけになつたのを拭いて、笹色にはなさらなかつたのです、是は後家さまでおいでなさるからでせう、其の他は上々も下々も笹色に附けます、尤も下唇だけです、爪紅といふものは上々にも私共にもないことです、私共はオシマイの時にフロヤ紙で顔を拭きました、フロヤ紙といふのは、金箔の下に敷いてある紙です、天璋院様は後家様でおいでなさいますから、白粉は薄い方でしたが、それでも下方に比べて白く見上げました、上のお眉刷毛箱には二十三枚、眉刷毛が載せてありました。

[illegible]なつて、お[illegible]へ上[illegible]研ぎに出します、何故上のでないやうにして出すのか、其の[illegible]は存じません、大分御研ぎに出て研ぐのでせう、それから月に一度ぐらゐです、お剃刀は[illegible]御納戸から[illegible]の御剃刀箱から出して、杉の白木で拵へた文箱へ木綿の切れへ包いて入れ、蓋へ封せて出すのです

御髪洗ひはオシマイドコでなさる、御手洗場と同じ様な處で、御髪粉と鹿角菜を解いてお洗ひになります、(是は民間の婦女も同じ事であつた)、孰れも朝で御昼までに、おぐし上げになる時間がありませんから、早く乾いた布で拭いて上げるだけで、別に香を焚いて御髪へ留めるやうなことはありません。

天璋院様は髪をお切りになつても、一本御指を入れて、前髪は執らずに扁平(ひらたく)抜いて、御目印といつて、髪先へ丈長を掛け、其の上を美濃紙で包んで下げるのです、今日の前髪のやうな恰好でした、髪の先は都度々々切つて揃へずに、揃ふやうに上げるのです、おぐし上げは御附中臈の役ですから、御台所附は仲間の者(お附中臈)の髪で稽古をいたし、上手になつてからお櫛上げになります、御台所の御櫛上げの稽古をする者は、盆の十六日に十六日上げと云つて、仲間の者の髪を十六人結ふのが例でした、天璋院様附きの者はお櫛上げの稽古をしやうにも、

他に髪を切つて居る人はありませんから、根だけ揃へて後を扱いて置く、それだけをお中臈仲間の髪で習ふのでした。

御入浴は毎朝極つて居ります、お暑い時分には午後の御入浴もありましたが、それは稀れなことです、お湯はお三の間が運ぶので、大きな玄蕃（桶）が幾つも来て居ます、最初お三の間が御加減をした上を、お中臈が又た見ます、お風呂の下に火はないのですから、水をさし湯をさして御加減を整へるのです、（大名でも浴槽の下を焚いて、浴湯を沸すのではない、湯と水とを槽中に移し、程の好い温度にして入浴するのだ、侍女をギヤマン風呂へ入れて、眺めながら飲むなどゝいふ、馬鹿氣た事も下を焚かないから出来る、焚くのならギヤマン風呂は直ぐ毀れて了ふ、ギヤマン風呂でなくとも、江戸時代の貴族の浴槽は湯を移すので、下から焚くのではない）、御入湯の時は上々でも全く赤裸です、桶は伶桶で、木は何だか知りませんが、毎日でした。

旧事諮問録（明治二十四年に史学会の有志が発行したもの、其の第二編に箕浦はな子、佐々鎮子の大奥談を載す）に、お湯中を流すことを問はれての答がありませんが、あれはお湯の掛りの者が勤めるので、お中臈の中で筆上でなく、筆下でない、中程の者が勤める役なのです、其の役の者はお湯の着物や帯を副

に持つて居まし……猫の遊囲がありまして、
仕度をして……に中幅の板締縮緬の布団が
御湯殿……に、『お間遊ひ〳〵』とい
（流……がお下（おさがり）とは
……包んで遣ります、それ
……べます、なか〳〵む
……此の組は一ケ月
……御内々でしたか
……子を産みま
……い、悪いと
……に猫の玩
……しまし

れ下され……
お中臈へは常の……
召し、酷寒には其の上……
召しは縫入り、暑日には綸……
お縮間着と、毎日五度召替へがあ……
あぶりで暖めて置くのです。

御納戸掛は毎か十一月二十八日と覚へます……
二品づゝ頂戴するので、夏冬の物が交つて居ます……
間は一品づゝですか、是は御反物で出ます、御納戸掛……
御寝所附のお中臈までへ下さる例です、私は旦那様（天璋院……
と御寝所の御納戸掛を頂きました、上様の分は頂きません、是

比は表の方で拝見します、表表では[illegible]しては、表から御戸を通くのです、其の中は御箱物はありでなく、言はば書などを支つて居たといひます、其の外に化粧道具（何か出るか知れぬといふ意味の名であらう）と申して雑物入りの拝領もあつたさうです、お次お三の間は御手前限りで、他の御納戸拂を頂くことはありません、御定めの外の御納戸拂は、御側の者が寄合つて願けて頂くのです、是はお足袋お褌袢お腰巻など、種々で品数を限りません。

お召替あぶりは夏も湿氣の時に入用ですから年中ありました、御納戸に桐の格子、高さ四尺位の棚を掛け、紅絹のぐるぐるの帷囲が掛つた上へ、お召替を掛けるのです。

御臺所は決して羽織を召しません、お被布の御紋は鯨尺で三寸位、紋は少し詰つて二寸五分位、の縫紋です、被布は表立つた召し物ではありません、紫の紋綸子などには金糸御紋のもありました、御臺所の御紋柄は染め紋ですが、普通のよりは大きうございました、御前は餘り御紋付を召さず、模様ものを召すことも尠く、お縫入りが多いのです。

御精進日には拝領せずとも、御年寄は自分で拵へても御紋付を着ました、大抵拝領して居りますが、若し拝領したのがなくても、是非御紋付でなければならなかつたのですから、自分で拵へました、お手付中臈でも二の丸（往つ家人）（前将軍附き）お、[illegible]へ[illegible]を着て参つたのです、又た[illegible][illegible]りになつて居た人）などに、[illegible]ました、（此の人は家慶将軍附きのお中臈なのだから、お手付中臈なのは云ふ迄もない）、拝領した御紋付を評判に着ることは、御表にもあることですが、奥でも同様でした、自分へ紋の附いたのを着ますのは、お三の間までで、それから上の者は一切着られないのでした。

御奉公人は總べて自分紋を着ないのが例です、御目見以上は御紋付を着ます、御目見以下は御紋付が着られませんので無紋です、殊に自分紋の縫入りは着られません 御目見以上のものでも、拝領しない内は御紋付を着るのもおかしいから無紋にします、縫のないものは誰も自分紋を着けました。けれども非常の時（火災等）にお三の間（御目見以下）が自分紋の紗綾を着ます、綸子は以下の者が着られません、一階以下の者は紗綾の地赤地黒地白を持つて居る筈ですが、大抵縮緬の縫入で間に合はせます、お廣座敷は派手な勤めですから、紗綾の地赤地黒地白を持つて居ます、以上のものは非常の時に御紋付ね子を着ます（お三の間の自分紋の紗綾は例外なのである）

[illegible]迄でも御家にお成りになると、臙脂をお付けになつても、これ

を切れで拭いておしまひになります。それ故一同（總ての女中）に平生紅脂は沢山附けたものです、（口紅は寡婦でない表示だ）、我我でも後家（寡婦になると、前へ差す櫛を罷め、紅脂を罷めて、羽織を着ます、又妻にならぬ内は櫛をさしません、櫛は人の妻のしるしです、今日でも御宗家（千駄ケ谷の徳川公爵家）へ出ますと 奥方（公爵夫人）は召して居らした羽織を、スルリと御肩からお落しになつて、お逢ひになります、お寒いからお召し遊ばすやうに願つても、宜しいとおつしやつて召しません、お子供衆（公女）でも御挨拶を申上げると、お羽織をお脱ぎになります、流行は面白いもので、現在の誰彼は羽織がないから外へ出られないなどと云つて居るやうです。

二十六

將軍家は四ツ（午前十時）に 御表から大奥へお出になります、平日中奥に起臥される、奥泊りの時も翌朝は先づ中奥へ戻られ、定刻に奥へお出になる）、御座所はお小座敷までお出迎になります、お年寄四人、中年寄一人、中臈頭一人、中臈六七人（御茶の介部）がお附き申して參るのです。それから御一處にお清の間御位牌所へお出、それから天璋院殿へ御對顏、御對顏の節には上様もお褥がありません、天璋院様はお褥を乗出して御挨拶があります、御挨拶は御機嫌ようとお仰られるだけです、お揃ひの處で惣御目見惣觸れがあります。

上様が奥へお出の時は、朝だけが御上下で、其の他はお着流しが多いのです。朝はギヨケイ（御刀のこと、御劍を訛りしものか）をお坊主（御伽坊主）が請取り、御座所へ置くのです、朝でなければお脇差だけです、御脇差はお附中臈が持つてお先へ立ちます、帛紗で御刀を持つことは、上様ばかりのことではありません。我々の家でも家來に持たせるのに、帛紗で持たせます。平生刀掛に掛ける時も、柄へ帛紗を掛けて置きました。帛紗がなくて持つ時には袖で持ちます、刀帛紗は紫精好の一幅で、それを四ツに折つて持ちます、上様附のお中臈は必ず御刀帛紗を名々に持つて居りました。

上様が天璋院様へ惣觸にお出に成るのは、毎朝極つて居ります、時刻も定つて居るのですから、別に御案内はありません、ギヨケイを持つたお坊主が御先立ちで、御附中臈は手ぶらでお跡から參るのです、上様はお脇差を召して居らつしやいます、朝の外は中奥から、御附中臈へ知らせて參るのを、直ぐにお出いたします、其の時は御脇差を御附中臈が持つて、お先立ちをいたすので、上様は御無腰です、上様は白を召して御袴もない方が多うございます、若しお袷ならば白でなく、御紋付のことも

[illegible]
[illegible]時に上様お上[illegible]ましたが、お[illegible]日にはお召上下で、平日はお服装（[illegible]）です、お召も御台所[illegible]です、上様のお召替へは中奥ですが、御台所のお召替はお納戸です、朝と夕とは毎日定つた召物で、惣觸には毎日違つた召物ですが、孰れも縫入です、裾は綸の召物、それも皆付になつて居まして、それを順々に召すのです、お三日は大紋綸子の縫入、又は高砂染、今の友禅のやうな賑かなのを召します、大紋綸子も高砂染も皆白地でした、其の上へ亂菊の地模様のサヤガタに、縫入りの掻取を召します、掻取もお間召も裏は紅絹です、瀧山（老刀自の伯母で、御年寄）などは倹約家でしたから、紅絹の袖口、裾廻しを付けましたが、上々には袖口だの裾廻しだのといふものはありません、又た上様の召物の裏は白です、白と云つても、お茶羽二重です、水淺黄羽二重のもありましたが、お裾ばきなんぞと云ふ事はございません。

御臺所が綸子の地赤を召した時は、縫のある白のお間着（綸子）です、此の綸子は紗綸子でなく大紋綸子です、それを拜領しても綸子襲ねは、御臺所の外に着られないものですから、頂戴した者は掻取にして着ました、掻取にしても式日に着ないのが例です、綸子の間着でも白でなければ誰も着ました、大紋綸[illegible]
[illegible]します、[illegible]
綸子ではありません（[illegible]）[illegible]
の白の間着なつたこ、紫綸子の[illegible]
御台所限りのもの故、頂戴しても表向には着用しませ[illegible]、[illegible]
進日には御姫様に赤い糸のたいのを召します。

御楽召しは惣觸れの縫入を召し替へて、お召縮緬とか透綾とか、時候に依つて品は違ひますが、孰れも縞物をお召になります、正式の召し物でないから、お楽召しと云ふのです、お楽召には必ずお被布を召します、尤も夏は召しません、四月から先になるとお被布は召さない方が多いのです、五月から先に寒いことがありますと、お單衣への下へ白を召します、何の召物も襲ねのないのはありません、單衣には晒しか縮みか（孰れも麻布）を襲ねます、襲ねは寒暑に依つたものではないのです、お寒ければお間着を召します、越後縮は上々から召初めることは申しましたが、それは將軍家の御着用をしらせて來るのです、其のしらせの手續は存じません、知らせがあつてから旦那様（天璋院）が召して、御年寄が着ても、我々（中臈）は尚ほ三四日遠慮して後に着ました。

總觸れの前にお鐵漿、おぐし、お食事を許さなければなりま

せんから、洵に随分忙しいのです、物忌れの時には必ずお足袋を召しますが、夏などは物觸が済みますと、直ぐにお脱がせなさる、お足袋は一日限りです、絹足袋といふものは、御臺所でもお用ゐになりません、濱眞岡の木綿足袋に限つて居ました、寒くなると裏附きです、文派のはありません、お足袋は私共がおはかせ申すのです

御召物は一々お中臈が畳みましてお箪笥へ入れます、お長持には御夜具と御衣具とを入れ、中お長持へ御召物を入れます、御装束は外の大きな御装束箱へ入れます、その御装束箱はお長持へ入れます、御箪笥御長持は御納戸にあるのです。

二十七

お座の間は一間で高麗縁の御疊が附いて居ます、御置物は五節句に別段のを出しました、平常も時々引替へますが、引替へる時日に極りはありません、御掛物も七日目位に取替へます、一時の物が多く、一幅ならば一間位の大幅です、花活はメッタにありません、活ける時にはお側の者が致します、却つてお年寄の部屋へは五節句に花の師匠が来て活けて行くことになつて居りました。

春は何處の御座敷にも柱々の下に、大奉書六ツ折を四角にした上に、小香爐で若草（線香の名）を焼いてありましたが、別に御休所御膳所の香といつてはありません、若草三粒で半日あります、火をよくイケて置きます、香を灰へ直かに置けば直ぐ燃つて了ひます。

青い杉の葉を箱十能に入れて、湯氣を拂ふ爲めに持ちあるくのは存じません、お三の間に火を入れた箱十能が二つあります、是はお火鉢の火を直すために置いてあるのです、杉の葉は上の御小用場に入れてあります、又た假に手を洗ふ所に敷きます、夏は蚊遣りにもします、湯氣拂ひの焚き物には、火鉢（作火鉢）で杉の葉と蒼朮とを焼きました。

御机は梨子地御紋付、お硯は京都から来るので、何といふ銘でしたか忘れました、お遣ひになることはないのです、お次の者が夜お墨を磨つて、小いさい錫の土瓶のやうなものへ入れて置きます、お筆は梨子地御紋付のがありますが、並の竹軸のをお遣ひになりました。

御座蒲團は中が緋縮子で、縁が金襴でした、綸子や緞子のもあります、夏はお敷褥と申して、桐の板が這入つた上にパンヤを入れたのでした、御蚊帳のことは前にも申しましたが、婦人博覧會へ出品になつた、紐のある蚊帳は大奥のではありますまい、一重の蚊帳などといふのもありません、奥のは紗縮子ばかりです。

[illegible]

なく、見ることも出來ません、[illegible]として

ありました。

アマガツ様、御參詣の時にもお先へ行きます、樹の枝形の箱へ這入つた、四季折々の衣裳を着せた振取姿の目も鼻もないやうな人形です、面には胡粉で松竹梅を描いてあります、何かの時に御身代りの人形だと云つて大切にして、御寢所の後に前々からある黒塗の棚へ置いてありました、是が大淸(神祇の扱ひ)で五節句やお朔日には鮮魚を備へました。

網行燈の外に御寢所の裏のお障子の際にお有明がありました、此のお有明は四角な行燈で、四角な屋根が付いて、眞中から棒が突き抜けて居て、天井にある穴へ差込むやうになつて居ました、形の違つた行燈でした、油は他の行燈と同じに菜種でした、油の違ふ行燈はお灸の時につける行燈で、是は丁子油を遣ひます、お灸の線香の火は此の行燈から移すのです、上々には御名々に御灸御召といふのがありまして、背縫ひが五色の絲で綴ぢてあります、御灸を上げる時に綴ぢてある絲を引くと綻びるやうになつて居ました、幾つ襲ねて召して居らしつても、背縫が綻びるやうになつて居るのです、(時候に依つたお灸お召も拵へてある)、御付なり、御腰なり、お灸を上げる所だけを出

[illegible]

[illegible]、それ[illegible]

つてす、お灸の日に[illegible]申[illegible]ます、お[illegible]はおふ[illegible]へになつて、中[illegible]へ出すのに、お中臈は手傳ふ事です、又はお灸[illegible]といつて、小さい[illegible]へ[illegible]炭が掛つて居て、其の上へ入れてあります、助炭の上に[illegible]いて居ました、蓋は黒塗御紋附きです。

御炬燵を開ける時には切つてある爐を拵へて、銅付の銅のトロ、民間で云ふシビツ(落し)を入れ、櫻炭をいけます、上々では炭團をお遣ひにはなりません、黒塗の爐縁の上へ桐の格子の裏へ銅板の附いて居るのを嵌めて櫓を掛けます、櫓は何の木か存じませんが白木でした、紅絹のぐるぐるの小蒲團を下へ掛け、博多の紫絣黒獨鈷に緋縮緬のお夜具を上へ掛けます、お炬燵掛けを二人で頂いて帶が二筋出來ます、お年男などへ下さる御時服の綿は袋のまゝ入れてありますが、呉服所から出て參るお炬燵掛けの綿は、袋のまゝではありません。

御醫者は月に五六度づゝ拜診します、拜診の時には御醫者が二人參り、一人が御匙(主治醫)で、一人は御立會です、何か知りませんが坊主が五六人附いて來ます、初めに左右の御脈を双方から伺ひ、それから御手を互ひ違ひにして、又た双方から

何つて、それから御箸です、平常の通りに御膳と御箸だけで、お傍らに申上げません、中年寄が附けて置きました御食用帳、お鉢はお食事の前後に目方を改めます、上がるのはお飯ばかりでなく、膳部を一々目方に掛けるさうですが、御女中方のはお鉢だけです、それとお中﨟の附けますお小用帳をお医者に見せます、御容體になると御脈を申上げるのです、医者の手が直に御肌へ触れることは決してありません、お絹布の上から拝診するのです、お糸脈などゝいふことは知りません、拝診の時に医者の立附がありますが、お年寄も立會ふのです

御脈搏御風氣などの御容體のこともありましたが、釣り夜具は見たことがありません、尤も御夜具に鈴は附いて居ました、

和宮様御附きの医者で、京都から下つた人（河原若狭守、稲井三河守、高階筑前守）は、惣髪帯刀で、芝居で見る金ピカ上下、其の位いを着て居るのが目立ちました、御医者でなくても、他に誰もソンナ上下を着た者はありません、江戸の御医者は孰れも坊主頭ですから上下を着ては居ません、（御神の侍医は任官して何の守になる、從つて帯刀は勿論のことゝ思はれる、金ピカ上下着用のことには、津村淙庵も珍しく思つたと見へて、譚海の中に書いて居る、）

嚏一つなすつても、それと云ふので大騷ぎ、手燭ほどの大きさの蓋付の香爐が、黒塗の臺に乗つて居ます、其の香爐には常に樒、小菊、鶴の粉が入れてあります、それを焚いて、臺に乗せたまゝで、御側の前後から薫灼して上げます

鼻紙（お鼻紙袋のおはさみ紙）を取らうとなされば、直ぐに取つて差上ます、何時でも御身にお取りになるやうなことはありません、お鼻をおかみになつた紙は、直ぐに持つて往つて、お流し物の桶へ入れます

便所へお用の時は、便所の前にお手洗があります、例の黒塗御紋付のお湯桶お盥です、御休所で次たハンドで御手洗をなさいます、都合二度の御手洗です、御用所は御上段の後のお入側にあります、此のお入側にお手洗があつて、次が二疊、こゝに戸棚がありまして、御下帯お足袋などを納めてあります、お草履を此處で召すのです、其の次の一疊が便所なのです、大変に深くなつて居つて、幾年にも汲み取つたことを聞きません（是は萬年といつて、御一生に一ケ所であつたといふ）、下に鐵の格子が張つてあります、お中﨟は此の内までお供をいたし、御一所に便所へ這入るのです、便所へいらつしつても、お手が汚れることはありません、常に練香が焚いてあります、朝一炷入れて置けば夕方まで絶へません、お供の時に氣を附けて絶へないやうにいたすのです。

[illegible]せんでしたが、[illegible]へ往くのださうです、（御代八人興された御守殿様は、[illegible]作で便所へ往くのだ、それお姫君様だけに、我々共には異様にも感ぜられる、賢明であつたといふ天璋院殿も、お用事でない時はお供を連れて便所へ往かれたのである、大奥の慣習ではあらうが、貴人の心理状態の異状なことは斯うした處から明白に教へられる、大奥研究に些少の想像も許されないのは、此の類の人間離れのした事が多いからでもある）本壽院様などは跡部伊賀守の娘で、温恭院様（家定）をお持ち申した人で、お中臈（家慶将軍御附）の時の名はミツと云ひました、お上並み（将軍の家族の待遇）になつても、便所の中へ人を入れなかつたと云ひます、（待遇上、御臺所や姫君と同様に、便所へお供を連れなければならぬ、習慣のない者に取つては、是等が眞の難有迷惑であらう）。

二十八

御召替への度毎に御手洗を上げます、お庭へお出になつて御手が汚れた時、木の葉などをお持ちになれば、御小盥を上げますが、さもなければ小さいおコハンド（龍頭）を上げるので

[illegible]御庭にお出になつたには、[illegible]位の太い串緒で、頭に天鵞絨の表（[illegible]の中心に[illegible]の色は市松であつた）お附いて居ました、又たお草履（五枚草履）は、繭表天鵞絨の表で、裏は竹の皮です、大奥女中は[illegible]取替へて上げます、旦那様は吹上へおひろいでお出がありました、濱御殿へはお出がありませんでした、そんな時に宮様（和宮）はサゲアゲ、其の他の方はアゲておいでになりました、お庭ならば褄取り、吹上ならばお搔取掲げです。

傘は召さない方が多うございました、吹上へお出の時は、妻折傘や裏傘をお次の者が持ちます、是には御紋もなければ、模様もなく、紺の無地です、若し雨が降れば御手傘で、お中臈が上げます、（妻折傘・裏傘はお次、御手傘はお中臈が差し掛けるのだ、差掛けると云はずに、持つと云ひ、上げると云ふ處に、玩味しなければなるまい）、御供の者は炎天にも傘なしです、穿き物は千足草履といつて、藁を心にした紙の緒二本を撚つた鼻緒のもの、道の悪い時は板付草履、孰れも穿き捨てです。

将軍家からは何御殿、御臺所からはカミとお左様におつしやるのですが、御奉公人は宮様は何時までも宮様と申上げました、

御臺所はコゼン（御前）と申しました、御守殿（將軍の娘）も御隱居なすつたお方も、其の附々の者からはコゼンと申します、同じ唱へであつても間違つたことはありません、御守殿も大奥では紀州（の御前）とか水戸（の御前）とか申しました、又た大御臺所とか、大御臺様とか云ふことは、決して無かつたのです、（一の御殿とか、松の御殿とか云ふ唱へがあるので、當代の夫人と前代の夫人とは居所が別れて居る、それで大御臺様など〻云はなくても、用は足りる、殊に御奉公人としては御臺所に對して、大御臺所と云ふのを避けた方が穩當だ）、大名には御門と云つて呼び上げることが有るさうですが、さう云ふことは御本丸にはありません、（現在でも紀州家では用ゐて居られる、無論外間へは謂はないものだが、徳川侯が電話へ出られて、御門様に御門だと云はれる、召仕の者等も殿様と云はずに御門様といふ、侯爵夫人も侯爵の子女も、お上通りといつて家族の待遇を與へられた者であれば其の人も、皆御門と稱呼するのである、）又た御臺所の御里方をも、大奥では御實家とか、京都とか云つて、御附けにはしません、旦那様のはゴゼン（御前）、自分達のはオゼンと呼び別けます、總べて御臺所とか、旦那様とか云はないでも、通ずるやうにして有りました、十分など云へば御本丸限りの言葉が澤山ありました、シン、チヤリ、タカマド、チウレンジ、サンカクチ、忘れましたが餘所で謂はない言葉です、シンといふのは眉のこと、眉造と書いてシンゾウと讀みます、チヤリは揉み上げのこと、高窓は階子段の上下に戸棚がある、其の上の戸棚の處に附いて居ました、長局の作りが他の家作と違ふので、恐ろしく變な處にある窓です、其の高窓の格子がチウレンジなのです、（サンカクチは、元祿散花見車に、足つぎの塵箱にうちこんで、塚はきの時の雅なりといふ、其の塵箱である、是は三角塵箱の略呼であらう、今日も京都へ往くと便所の隅に、木製の紙屑箱でない紙屑箱がある、東京になつても皆み安價用のがあつた、サンカクチは斯ういふ箱枝に三角に作られたのだ）、又たゼンクタリ、チヤウシノンダリ、イカナコトといふことがあります、銚子といふのは酒のことですが、普通に銚子と申すのは間違です、御酒を飲んだ上に、まだ御飯もたべるとは何たる事かと云ふことなのですか、ゼンクタリ、チヤウシノンダリ、イカナコトと、斯う云つて分けますまい。

チンコ籠はありません、チンコ箱です、御個のチンコ箱は、お末が集めて爺に渡すのです、奥のチンコ箱はお次の者が、お三の間へ出し、お三の間の者がお末へ出します、塵紙はチンコ箱へ入れるのです、桐の春慶塗（柿色）の堅長い箱で、眞中に丸い穴が

あ[illegible]ます、[illegible]
詰所共の出さき[illegible]に一つの室を[illegible]
も、日々横側へ出して置いて、お庭ちかいに掃除をする[illegible]です。此の親仁をチンコ部屋と云ひますのも、チンコの掃除をするからです、（其古翁云ふ、此の御庭ちかいといふのは、黒鍬のことです、黒鍬は多く大久保邊に住んで居た、お末の荒い仕事を助けるのが、黒鍬の職分であつた、此の爺が退出する時には、必ず炭俵を抱へて出て來る、俵の中は庭芥が這入つて居る筈だが、さうではなくて色々なものが入れてあるのだ。それを伊賀者が咎めると、鼻薬に魚などを置いて往く、此の爺が御番に出る時は木綿着物だけれども、自宅では縮布を纏つて居る、娘には縮緬の衣類を着せて置く、なか／＼餘裕のある暮し向きらしく見へた、近處の者が魚類其の他を、此の爺の所へ買ひに往くと、上げ板の下から出して賣つて居た。澤山色々な物を勤め先から持ち歸つて役徳にしたのだらう。長局の各側々の兩端にある芥溜めは黒鍬でない、別の人足が取りに來る、此の時は封印のある締りを開けて出入させる、芥溜めは蓋のない箱で、人足は大きな笊を擔ひ、丸い錢の爪の二本ついた棒を持つて來て、塵芥を搔き出して居た。）掃溜のこともチンコといつて居ました。どの側にも廊下の兩端に一所づゝあつて、御庭のちかいが浚ひます、此の爺の詰所はお

[illegible]
く[illegible]
中に、下[illegible]のことは[illegible]
い、しかし黒鍬は十俵一人扶持でも、不[illegible]人であつた）

おいしく／＼などゝいふ言葉も、洒落ていふので、正しくはお團子といひました、月見の團子は兩月見（八月十五夜、九月十三夜）とも、節の附いたのはありません、部屋々々でも月見に節の團子を拵へることはないのです。ヨゴレ月といつて、後の月見に名々の家で節の團子を拵へましたが、それは大奥の話でなく、全く下ざまばかりのことです。節の附いたのは嘉祥（六月十六日、御表でも毎年此の日に御祝ひの儀式がある、家康公が天下を平定された日だと云ふ）のお小豆餅ですがこれは餅で團子ではありません。

御普代餅は玄米で拵へたもので、權現様（家康）の軍難の日に下さる。又たヒガキといふ四角に切つた餅へ、味噌のついて居る。何で拵へますのか、眞黒な餅を役人中へ下さいます。太分お臺所で拵へるのでせう。二品とも頂きはするものゝ喰べる者はありません。御譜代餅は黒燒にして田畑へ撒くと害蟲を除けるといひました、（其古翁は餅を善く搗かずに、糠で取つたのを、茶椀ほどに丸めて、行器に盛つて、月の三日に下された。

醤油をつけて喰ひます。害蟲除けにすると云つて、農家で欲しがりましたと云はれた、我等が石塚氏の食養論に従つて、玄米餅を拵へ、それを翁に供した時に、御譜代餅のやうだと云つて喜ばれた。此の御譜代餅について、大東婦女貞烈記に、家康公の御時より、毎月曠野光切剛飯をむさるゝことゝなりて、御成なき時と雖も、常の如く蒸して、城内方々に配りわかち、多くは奥方へ遣はしけるを、局剛飯にて贈りては、當坐になくなりて、何程の足しにもなるまじ、餅に練らせて贈ることよからめと申されければ、その後は餅に改まりぬ、ある時家光公病ありて曠野などに出でらるべくもあらずとて、彼の餅を拵かさりしかば、局いかで例の餅をば剏したまはぬと問はるゝ故、伊丹播磨守答へて、此の切は御病氣にておはします故、費なりとて拵かせ申さゞりきとありければ、局聞きもあへず、彼の事は神君以來、御成ありても、なくても蒸し來れる吉例なるを止めらるゝは不吉なり、凡そ費と云ふは海川へ捨てるか、又は泰山府君の法とか云ひて、物を焼きすつるなどの類をこそ云へけれ、赤飯なり、餅なりは、皆々祝ひ納めて、喜び敬く程に、この日の根となりて、少しも費ゆることとなし、下は下々なる我等の家とは違ひて、かゝることはけちくし給はぬぞ、公方家の御台所なる、以後は必ず練らせられよと申されける、今に御譜代餅と名づけて、毎月拵かせられ、奥方へも御揚屋より贈り來れるは、此の嘉例なりとかやとある、本文に局といふのは春日の局で、伊丹播磨守は當時の勘定頭なのだ、嘉定玄猪については故實家の方に、色々書き物もあるが、御譜代餅のことは本書などが詳しいやうに思はれるから、全文を抄出した、春日の局が御譜代餅を恒例にさせた意思は、決して單純なものではなからうか、高級女中が饑臭い餅を喰はなくなつたのは、新しいことらしくない、春日の局の考按は百年も役に立つたか否か

亥の子（十月上の亥の日）には、皆様（御台所を始め、上通りの方々）から鳥の子餅を贈ります、お三方に載つて居るのをお手づから二つ宛いたゞくので、これはお手カチン（カチイヒの約つたので、やはり搗餅であらう）と申しました、胡麻（黒）背白黄カチン（鶏色）に染めた小さい鳥の子餅です、御年寄お頂きますと、後にお小性に下りまして直ぐ包紙を渡すのです、其の他の者は頂いて下つて、お三の間で包み紙を請取つて自身に包みます、頂いた時に手で受けるのは誰も同じでございます、包み紙は大奉書へ玄猪と書いてありました、それへ水引を掛けます、千代田大奥にはお手カチンの時に、お杯も下さると書いてありますが、お杯ではありません、お結みといつて同じ五色の餅を五つ包んであるのを下さるのです、是はお手づからでは

た[illegible]いと
[illegible]ました。

二十九

初午にお目見の者が御祝儀を申上げることが、千代田の大奥に書いてあるのは嘘です、誰も初午の御祝儀などを申上げる者はありません、又た紋付の裾模様に縫入り掻取を着て出るといふのは、餘り馬鹿々々しい事です、御本丸では裾模様といふものはありません、御目見以上の者は紋附を着ません、紋附といふのは手前紋のことです、御目見以上の者なら御紋付か無紋でございます、御紋付の裾模様とすれば愈々ありつこのないのです、御紋附ならば縫入りで惣模様でなければなりません、それに御年寄の御代參も無い事です、御年寄でなくとも、誰でも稲荷へ御代參に遣はれることはありません、上の稲荷御參詣も定つたことではなく、お遊びながら御參詣になることもあるのです。

初午には御廣坐敷のお末が、毎年定例で張子の馬に乘つて騎射の眞似をします、與や新御殿のお末は手古舞の姿で出掛け踊りのある者は踊ります、此のお末達がお庭の山の上にある稲荷へ參詣して、御對面所へ遊り込むのです、鳴り物なしで、口三[illegible]ござります、[illegible]のです、[illegible]おき[illegible]ます、是は踊つたおてへの[illegible]は交りません。

紅葉山（東照宮）御代拜もないことです、紅葉山は大清ですから女は一切往かれません、御簾所はじめ御女性の方は御參詣もなければ、御代拜もありません、御參詣御代拜は將軍家のことです、上様が紅葉山御參詣の前夜から、間毎〳〵に大清と書いた木の札が掛ります、月事の女はお側へ出ることが出来ません、御參詣が濟んで、御歸りになると大清の札をハヅします。

内拜はお廣敷へ飾つて、部屋方から澤山お賽錢が上ります、上ではお出になりません、顯濟の祖師（牛込喜久井町本松寺の日蓮の像）は、旦那様（天璋院）が御信仰でありましたから、御側近く持ち込みました、日蓮宗は文恭院様（家齊）が御信仰であつて、廣大院様（家齊夫人島津氏、此の夫人は薩藩十一世重豪の娘で、天璋院殿は十四世齊彬の養女である）は薩州から、お出になつた、其の筋から旦那様も御信仰になつたのです、（牛込榎町宗柏寺の釋迦も、お廣敷へ持込んで内拜したことがあるといふ、是は傳教大師の作だといひ、今日も何け參詣人が絶へない、宗柏寺は日蓮宗である、釋迦と云へば嵯峨の清涼寺の釋迦

は、大典で内拜したことがあつた、將軍が内拜されるのに御上下を召されたのは、此の嵯峨の禪迦だけであると傳へた)。

上々の御參拜は、毎朝御名替の後、物觸の前に御清(御位牌所)へお出になる、御襖の外まで御供を致しますが、御手づから御線香をお上げになるだけで、他に神々をお拜みになることはないやうです、柏手の音を聞いたことなぞはありません、御清の式に君が代を唄ふなどゝ書いたものもあるさうですが、左樣な事は決してないのです、節を附けた君が代は明治になつてから頻に用ゐられますが、昔は無かつた事です。

三十

雛の日はタモンロ(部屋の出入口)を開け放して、御年寄の部屋へ飾つた雛を見物させます、お上臈などは一際立派に飾りました、此の雛はお内裡樣はありますが、五人囃子はないのです、その代りに能人形がありました、能人形は内外二百番の中から、色々揃へるのです、丈けは尺から尺五寸位、臺の附いたのはなく背板の上へ置きます、次郎左衛門雛は頭の裝束で日數がちよい〳〵と附いて居ます、冠はなしです、オコナフシ(御小直衣雛)の御内裡樣は、布衣のやうな姿です、オコナフシ雛といふのは御裝束の名から附けたので、東帶の次の御裝束とでも云ひませうか、將軍家も召すことがあるのです、東帶は後へ裾を曳きますが、オコナフシは後へ曳くものがありません、田舍源氏(三編上の四丁)に光氏が着て居る、マアあれです、部屋方で雛を飾るのは御年寄だけでした

奥のお雛樣を部屋方の者が拜見するのは、御座から拜見するのです、御飾付は御對面所です、又た常の御間にもお二の間の下段へお飾りになりますが、是はお末までの拜見で、又た者部屋方の者(女中等の使用人)には許されません、御内證のお雛樣はお飾りになる場所の極りはなく、其の時々に替ります、御臺所の御雛飾りは、御對面所のと御二の間下段のと御内證のと、都合三所でした。

お雛樣は二十五日から飾つて、六七日に片附けます、お雛樣の長持は御多門(城門の左右の長屋)に這入つて居るのを、御下男がお三の間まで擔いで來ます。

一日から四日まで、お雛樣へ、朝と晝とお三の時附(時計盤)の御膳が上ります、其の御膳は本膳お平、つぼ、むかふ(燒き物)、味噌汁、猪口、香の物、極りの香の物で、大抵おあがりにはならぬもの、オハキアハセ、芋莖、きすの白燒、青物と云つたやうなもの、二の膳はサシミ、てり燒、吸物、三の膳は香の物、是は洒落れた香の物、酢の物など、鬼がら燒、總べて且

[illegible]おなりになると[illegible]上げます、お[illegible]道具は小さいので、御お膳も小さくします、[illegible]にしても極小さいのを撰びます、是はお末へ下されになるのです。

お雛様は中清でお姫様の格です、御食器はお末頭が洗ふのですが、將軍家、御簾中のは大清、姫君様のは中清と申して、洗ふ所も違へますし、拭巾迄も別にしたと云ひます。

御用達町人から色々な献上があります中で、何時も見事なのは糸花と卷縮緬でした、御膳所からは貝づくしの大盤臺があがります、麹町の油や玉屋からは、御醤油を瀬戸物のかぶせ蓋の附いた入れ物へ入れたのを献上致します、献上物の数は御年寄やお側の者が頂くのです。

お雛様の中は一同奇麗にして居ます、三日には御對面所へ飾つたお雛様を拜見に參りますので、御椽側へお側の者がズラリと並びます、四日にはお賑やかしがあります、お雛様の中は方々の御殿へ互に白酒を頂きに往きます、(他の御附きの者を召して、白酒の下されがある)、是は御側の者だけが召されるのです、忙しい中ですから、チョットの間に頂きに往くのです、お雛様菓子といふ小さいお菓子や、ごもく鮨、お鉢盛りには笹卷ずしや餅菓子もあります、白酒はギヤマンへ蒔繪のある徳利に入れてあるのを、お手づから御酌で、ギヤマンの盃で頂くのです、中[illegible]

[illegible]致したい[illegible]なつて居ました、一本[illegible]入ると[illegible]へ入れて、お年寄[illegible]の札を[illegible]り、[illegible]から御[illegible]に届けさせるのです、その徳利の口飾りは無かつたと思ひます、我々は芝の四方、鎌倉河岸の豊島屋へ白酒を買ひに遣つたものです、(四方のは辛く、豊島屋のは甘し、女中にも上戸があつて各々好き〳〵であつた、だが江戸の白酒と云へば、此の二軒に限つたやうだつたのは、御本丸女中のお蔭である)。

雛段は三段です、高さが京間でない一間ほどで幅は八間位ありましたらう、御對面所からお二の間へ掛けて、飾るのですから隨分大きい物です、お雛様は御對面所のが一番大きうございました、左様一尺餘りもありませう、一番小さいのは御内證のでした。

御膳は飾つてある所へ拵上げます、二段目の處へ御膳を供へるのです、二段目には樂人七八人立ちのもの三組、都合で二十人位を飾り、其の端へ御道具を飾ります、上々の雛には隨人や官女や五人囃子などはありません、其れは下方(民間)に限つた物なのです、三段目には能人形を幾組も飾るのです、上の段へはお内裡様を幾組も飾ります、お内裡様も下方(ウヘツガタの

反對、シタガタ、カを濁らないと囃子方と紛ぎれるノのやうな臺は附いて居ません、一人づゝ並べるほどの褥の中が緋縮緬で周圍が金襴の鏡蒲團の上へ乘つて居ます、次郎左衞門雛（雛には色々の製作がある、室町雛又た芋雛ともいふ、寛永頃のもので芋のやうな顏付をして居る、次郎左衞門雛は元祿頃のもので圓面だ、京都の作人の名を稱呼にしたと聞く、直衣雛は享保雛とも高倉雛とも云って、高倉家から故實を正したものだといふ、同時に芥子雛といつて、小型なのがあつた、衣裳雛古今雛は明和安永のもので、其の後のものが現在の雛である）も、オコナフシ雛も上段へ鏡蒲團を敷いて飾ります、二段の樂人、三段の能人形は蒲團もなく、臺もなく直かに飾ります、

雛段へお雪洞がつきますのは御內證だけで、其の他は御燭臺です、御燭臺へは吉野紙へ櫻の花の描いてある奇麗な朝顏の附いたのを段每に五ツ宛打違へに立てます、

お菱かちんは三枚で、上下が白、中が草入りで靑です、下方のやうに赤いのはありません、それを白木の三方へ載せます、三日の朝上げて夕方に下げます、お菱かちんは三日に上げるだけで、外の日には上げません、四日にしまふ前に蕎麥を上げるのは下方に限つたことです、奧では蕎麥を上げることなどはありません。



民間の次郎左衞門雛

お雛様のお[illegible]は黒塗の花桶で、唐草へ御紋が附いて居ます、箍の上に漆が掛つて居ます　で、箍は金だか竹だか分りません。六七寸の花桶へ一杯に花を入れて、桃も櫻も椿も山吹も交さつて居ました、お花桶は三對、段の上でなく前へ飾るのです、是は每日御佛前へ花を納める御用達が納めます、御佛前の花は御伽坊主が替へるのですが、お雛様の花は私共（お中臈）が飾ります、其の外に御用商人から作り花が澤山獻上になります、其の中には糸花も少しは有ります、幕は紅白の縮緬のを後へ張ります、幕の前へ金屛風が立ちますから、幕は


オコナワシ雛は資見でし、田舎源氏ハ雛畫を拝す

善く見へません、下方では幕を前へ張つて紋つて置きますが、ソンナことは奥にはありません、金屏風の畫は吉野、龍田、曲水、源氏などの畫です、雛段には猩々緋の氈が敷いてあります。

宮様（和宮）のお雛様は表向（御對面所の分）は江戸風にお飾りになりましたが、お内證のはお上段の下へ毛氈を敷いて、直かに內裡様を並べてありました、是はお位が有るので見下すやうに飾るのだと云ひました、私共が拝見に出まして、雛段がない物ですから、何だか御座敷へお雛様が轉がつて居るやうに思はれました。

お雛様の時にアラレはありませんが、お灸の日には御膳所で黒豆とアラレを熬つて白砂糖を附けたのを上げます、菓子種を入れません、是がお間ひの物の時に出るのですが、大槪はお

三十一

吹上には花見幕を張るやうな處がありませんが、五十三間では例の白黒の幕を張ります、此の白黒の段々幕と輪ばかりの紋とは、宮内省でお遣ひになつて居ますが、二つとも京都からお持ちになつたのではなく、舊幕府のを其の儘に御使用になつて居るのです、輪ばかりの紋ですか、宮内省の馬丁などの紺の法被の脊中に附いて居る、其れがそれです、五十三間で御紋の附いた幕を見たことがありません。

吹上へは別々にお出かけになつて、上様（家茂）は瀧のお茶屋、宮様（御臺所和宮）は諏訪のお茶屋、旦那様（天璋院）は御花壇へ御入りになつて、御一處にお花見がありません、摸擬店など〻いふことはありません、御料理は御膳所から持つて來るのです、五十三間には御茶屋がありません、一體御馬見所なのですから、御建物が幾つもあるのではないので、御同席になります、此處でも摸擬店などはありません。

將軍家の御酌といふことは、表面には殆どありませんが、吹上か五十三間へおいでになつた時には、御手づからの御酌で戴きます、お側の者はお側で戴き、お次の者はお椽の下で戴きま

あがりになりません、

す、お酒の好きな者は、モ一ツなどゝいつて戴きます、嫌な者には少しついで下さいますから、袖口から溢すなどゝいふことはありません、五十三間といふのは、御本丸の脇の御馬場のある所で、御門を二つ開けると直ぐです、五十三間では櫻と菊と年に二度お花見があります、お花見の時には極まつて、味噌の附いたお團子が出ました、お茶屋の中の御飾り附に色々なものがありまして、名々が所望して一品づゝ頂戴するのでした。

姫君様の芝居では竪やの字に結んだ女中が、兩花道へ並んで黄い聲で御姫様の今度の御病氣、並大體のことではないとのこと、鉢谷山の此の櫻、一枝折つてお慰みになどゝ讀らかす、其の他にも御姫様といふ言葉を盛に遣ふが、御本丸の女中等は決して御姫様と云はない、何時も姫君様とのみ云ふ）御年頭は何時と極まつたことはありません、三月頃までも臨々に御出になるのです、其の御取持ちに盲人が御前で合奏するなどゝ、書いたものもあるさうですが、左様な事は御本丸にはありません、吹上のお茶屋へ大納言をお呼びになつたといふ事も存じません、御狂言師は皆御抱への人で、他からお雇ひになることはないのです。それも何派といつて一ツに定まつたのではなく、水木も藤間も坂東も色々ありました、御狂言などは將軍家の御覧になるものではありません、それは例へ還御成（但御冷兩山御成等）のあつた時に御狂言があるのです、還御といふと大騷ぎで片付けて了ふのです、昭徳院様（家茂）がいたづらに、片付けて居る最中に、窓を開けて御覧になつた時に、まだ幕や何ぞか片付け切れずにありましたので、皆が其處をお開けになつては往けませんと云つて、お止め申したことがありました、斯ういふやうに御狂言を御覧に入れないばかりでなく、御狂言のあつたことも内證にするのです、

御狂言は一年に三四度ありました、一ト狂言に千兩掛つたと云ひます、還御成から還御になると、一度は奥へ御出がありますので、其の時は御狂言の最中でも片付けて上様が御表へお歸りになると直ぐに復た始めます、上の御好みがおりますから、承はつてから稽古を初めるので、民間の芝居と同様ではありますが、下品なものは除くのです。

御見物所の鴨居は小壁でなく、櫺子になつて居ました、其の櫺子を除けて吊り花を掛けお三の間の欄をあけて、檜の板を敷き詰めると舞臺になります、幕は紫と白とを竪剝ぎした縮緬のです、此の幕も昔は萌黄紐に乳の付いたのであつたさうですが、私共の時分には樋に針金が通つた上を、環の附いた幕を引くのですから、手際よく引けました、幕引きはお次の者、後見はお三の間がします。

御狂言はお茶の間お召あるのです、御台所には[illegible]一層えにあつて、お茶の間の者は特別扱ひに來られるやうになつて居ました、お茶の間といふ部屋があるのではありません、[illegible]様にしても御菓子の間はありますが、お茶の間といふのはないので、お次やお三の間は茶ドコといつて、大きな長火鉢のある茶飲み所がありました、其處に御狂言師のふるけたのが詰めて居ますので、お茶の間といふ役名が出來たのです。

御狂言を御覧になる時は、御簾屏風が立ちます、御庭に波の模様あるので御覧なさり憎いと云つて波の模様のない處へ御坐を設けます、天璋院様は御狂言の費用が、薩州から來たので、十二分の御備しもあり、御狂言も度々あつたのです、年に三四度といふのは其の後の事です。

御鳴物所では御弾初（三日）の翌日にお弾き初めがあります、唄ひ物に極りはありませんけれども目出度ものを撰んで、長唄ならば高松、老松、常盤津にしても老松　子寶といつたやうなものでした。お弾き初めの順序は長唄、常盤津、淸元、義太夫の順で、おしまいに又た御祝儀と云つて極つて長唄がありました、是もお茶の間の者が勤めるのです、お聞きになる時のおなりはお搔取でした、和宮様は元日から七日まで、御裝束でしたから、其のおなりで、お聞きになりました。お弾初めの御[illegible]

[illegible]すので[illegible]やいます、[illegible]ゝで御弾初めをお聞きになるのでした。

お祝ひ日に上様が二の丸へ御出のあることはありません。御上済の御暇乞、御帰りになつて御隠居様に御用がありました、御大院様（家齊の夫人）は一年に一度づゝ、御本丸へお出になる例でありました、是は御年始で、日永の時分四五月の頃にお出になつたのですが、天璋院様になつては一度もお出になりませんでた。

御年始状ですか、御年始状は御廣敷役人などの手を附けるものではありません、御文箱を入れたお長持さへ、男の肩へは掛けさせないものです、御文は皮文箱へ入れ、其の中に蒔繪文箱又た其の中に白木文箱、と三重の文箱で、箱毎に封印がしてあります、御文は旦那様にしても姫君様にしても、上﨟年寄の御代筆です、女の手紙には日付けのないものです、御右筆の書いた旦那様のお文にも日付はありません、皮文箱は番部屋から御右筆部屋へ來て、御右筆が三重の封印を拔き、臺へ載せて、上﨟の所へ持參し、上﨟が御披露するのです。

日本橋へ鰹が千本以上來ますと、鰹の御注進といふ事が有りまして、それから鰹のサシミ　鰹の蒲燒が上ります、サシミと云つても、身が縮れて居てアラヒのやうです、サシミは一切れづ

ヽ氷おろし（桃醋）を水にして善く洗ふのだと云ひます、鰹の蒲焼は細長く切つて串にさし、味の附いた醤油をつけて焼たのです、此の鰹も御用の分は二十本ぐらゐたのに、百本位取寄取寄せて料理方が心ザワリと云つて、頭を撥ねて見ては棄てます、それが折役徳なのです、鰹注進の時には私共も鰹の料理を頂きます、鰹の蒲焼は油気の抜けたコソ／＼するのを時々あがります、（三代将軍が目黒へ狩猟に往かれて、御野掛けの際に、或る農家で秋り魚を焼く好い匂ひがした、それから其処へ立寄られて、甘まさうな匂ひの正体を御尋になり、遂に御所望があつて、秋刀魚を召上がつて御還りになつたが、何分秋刀魚の味をお忘れにならない、其の後秋刀魚のお好みがあつたけれども、御膳所では下魚だから差上げられないと云つて、度々御沙汰があつても上げなかつた、それを強いて御申附になつて、漸く秋刀魚が上がれたが、イヤハヤ甘くないことと夥しい、是は御膳所でスツカリ油を抜いて、コソ／＼するやうにして出したからであるそれを御存知のない三代将軍は妙な御顔をなすつて、此が秋刀魚か、何処から持つて来たとお尋ねになつたので、房州沖で漁獲致しましたのでございますと言上すると、ウン左様か、目黒のでなくては往かんとお仰があつたといふ話は、全く落し話であるが、此の辺の消息を伝へたものであらう。）イアカテイ

は細く切つて切り身がよぢれたやうなのが上りました。赤貝はチガイと云つて貝の儘煮たのを上げます、栄螺は作り物で、貝の中へ色々な物の煮たのを入れて上げます、蛤蜊はおあがりになり、浅蜊蜆はお上りになりません、冬になるとお貝煮といつて、鮑の貝の穴へ昆布を詰めて、慈姑、海老、切り身、三つ葉、それに椎茸か松茸を入れて、卵を掛けたものを上げます、貝の下には曲げ物の蓋をして、蓋は貝の大きさだけの杉の柾目のが出来て居ます、是は御膳に附けるのです、オカワラケ焼といふのは、土器の中で玉子を焼いたのです、曲げ物の蓋、杉の柾目の蓋はお貝煮と同じでした、御本膳へ附くお極まりの香の物は、大根の味噌漬、澤庵、瓜の粕漬で、蓋の附いた腰高へ入れてあるのです、奈良漬などは洒落れたお香の物なのです。

三十二

柿も下等な物だといつて、上々では召上がらなかつたのを天璋院様はお上がりになりました、眞黒、鰯、秋刀魚、葱などは、以下物と云つて御側へは出しません、お上がりのサシミのやうだといふことが有りますが、お上がりのサシミには生海苔ぐらゐで、ツマといふ物はありません、

御本丸では天麩羅が御法度でした、姉小路さんの部屋子が

揚げ物をして鍋へ火が這入り、大事に到らうとしたのですから、揚げ物は一切御法度になりました、部屋方でもいたしません、御膳所でも拵へません、一膳天麩羅は下等な物ですから、お上がりにはなりません。

愛へ附育する。姉小路は橋本大納言實久の妹で、天保七年九月六日に上臈年寄になつて、大に鳴らしたものだ、老刀自の話では姉小路の部屋の揚げ物は火事にならずに了つたのだが、弘化元年五月十日午前四時に出火して、御本丸が炎上したについては、其の年の七不思議の第一に一の側の火事が算へられて居る天保十二年に家齊將軍の御臺所廣大院様が二の丸から本丸へお移りになつて、一の御殿を松の御殿と改稱してお住居になつたので、御附の上臈梅溪も姉小路と隣接して、一の側の部屋に居た、其處で姉小路と火元爭ひをした、それでも遂に姉小路が勝つて、火元は梅溪の部屋と決した。

此の朝は大雨であるのに、御本丸を全焼して、午前七時に漸く鎮火した、家慶將軍はお傘もなく、お草履も召さずに御立退になつた、姙娠中の御中臈おひろの方（杉氏）は跣足でお供をする、廣大院様はお駕籠が間に合はないので、お末の中の大女がお背負申し、精姫様（家慶養女）は御廣敷のお下男がお背負申して、何れも吹上の瀧見の御茶屋へ御入になつた、此際御小人（おこびと）が[illegible]それへ行き合つて姉小路の部屋の[illegible]負ひ、此際は途に死んだといふ、關東の規則[illegible]く知れる、殊に長局からの出火であつたから、[illegible]を失つて御年寄花町、小上臈伊與以下焼死した女中が百人もあつた。

町奉行遠山左衛門は火が御臺所前の三重御櫓へ移つて、棟へ上がらうとした時、一番組の町火消を下知して消留めさせた。遠山が手際を見せたと共に、卒先して三重のお屋根へ飛び上つて、い組の伊兵衛が必死の働きをした、伊兵衛は是で評判男になつたのである。

御外科桂川甫賢の娘は、こやといつて廣大院様御附御中臈を勤めて居た、此のこやが御立退に御附き申して出た途中で、廣大院様の御意には花町は老年の上に病氣であるから、立退きも心許ない、早々參つて助け出せとある、こやは提つて長局へ駈け戻つたが、火は早其處に廻つて居て、漸く烟の隙から部屋の内を覗ふと、花町は既に倒れて居た、迚も近寄れない、何としても助け出さうやうはない、こやは覺悟した、お仰せは重い、是から先へ往けば生きては遁れぬ、こやは逃げ出して來る女中を引留めて御意を承つてお上臈の處へ參ります、お情様を操つた屍がありましたら私と思召すやうに、方々へお傳へ下さい

云ふや否や猛火の中へ飛び込んだ、こやの最期の有様に依つて母衣を堅く握つた屍が取り収められ、父桂川甫賢へ渡された、築地の桂川の家からは、こやと其の召仕の女両人と、三ツの乗物を連ねた葬儀を出した、中にも桂川甫賢娘と筆太に書いた札を立て、薄紅の網を掛けた柩は、餘哀を江戸中へ頒けた。

此の火事については、尚ほ色々な話もあるが、何にもせよボヤではない、火事も火事、御本丸を全焼させた火事である、さうして其の火元は姉小路さんの部屋だと世間では思つた、揚げ物の騒ぎは此の火事の後か先か、姉小路さんの部屋子といふだけに、話は餘計に耳へ留つた、けれども老刀自は詳しく知らないと云はれた、さうして老刀自は火事の話へ轉じた。

最初の火事（文久三年六月三日家茂将軍の上洛中）は西丸から出ました、二度目（同年十一月十五日午後六時出火、本丸二丸炎上）は七ツ口の向ひの商人の部屋から出たと云ひ、碇屋勝左衛門の家から出たとも云ひます、最初の火事には吹上へお立退きになつて、二丸へお這入りになりました、御普請が出来て又た焼けました、（慶應三年十二月廿三日二丸炎上）火事（二度目）の初に何處からか知れませんが、お庭へ鐵砲の玉が落ちました、吹上へ御立退になつてぐるりと廻つて、お這入りになりました、（将軍と御簾所及び天璋院本壽院共に清水御屋形へ御入りになります、廿六日に将軍御簾所は田安御屋形へ御移りになつた、）

火事着板と云つて、黒縮緬へ御目見以上は御紋付、以下は手前紋、旦那様はお門内へ黒の御紋付を召して六寸幅の緞子又は縮緬の帯を前結になさいます、紋付は斯う云ふ時に着る物ですから、フダンには着ません、振袖を着たのは搔取の下へ後結にします、お供は御小性お中臈中年寄二人づゝです、お供の者は懐剣を持ちませんが、お懐剣はお駕籠の中へ入れます、御駕籠は門網代です、お立退になりますと直ぐ御小納戸の人達が来ました部屋から駈掛けた者は、火事着板を着て来ましたが、奥に居合せた者は搔取搦げで働きました、其の時私はお立退の後に残つて跡片付けをいたしました。

ノツ千代さんといふ唄の流行したのは、昭徳院様（家茂）が始めて御上洛になつた時分のことです、お立ちになつたのは二月（文久三年）で、其の年の十二月に瀧山が火を附けられたのです、其の時部屋の者を起したのが、千代田稲荷だと云ひ出したのです、此の稲荷はモト吹上にあつたので、いつ〳〵迄も御本丸を守護するのだと云ひました、此の話を瀧山の部屋と表使の勝江の部屋とに居ました女按摩のこうといふのが、お使番の先立ちの小山と云ふ人に話したので、小山が大[illegible]を入れまし

た、御殿から[illegible]しました、ここは[illegible]の者でしたから、千代田稲荷の話を御評判へしたので、少しの間でしたけれども千代田稲荷が大流行しました。

瀧山が火をつけられる前に、實成院様附の御年寄が一人と御側が一人と御暇になりました、是は御附の藤野といふ御年寄の病氣引きの間に、不取締な事があつたからです、さうすると其の部屋方の者が怨んで、瀧山の新部屋へ放火したのです、井戸は暮六ツ（午後六時）に錠が下りて了ふので、水が不自由なのに女ばかりで消すのですから大變でした、消し留めてから四時間も經つて添番お小人お下男（羽織を着て居る）などが漸く來ました

我等は老刀自の話を聞いてから友人林若樹氏の處で、手遊繪の新板はんよぶしといふのを見た。

わたしとおまへは、おくらの米えよ、ハンヨ、いつか世に出て、のふ千代さん、まゝとなる、したことた、たいしよ〳〵

おまへ一人か、連れ衆はないか、ハンヨ、つれしアあとから、のふ千代さん、駕籠で來る、したことた、ないしよ〳〵

ほおずだまして、還俗させて、ハンヨ、稲荷ずしでも、のふ千代さん、賣らせたい、したことた、ないしよ〳〵

心つくして、書いたる文を、ハンヨ、ぬしが茶にして、のふ千代さん、ま[illegible]、したことた、[illegible]

まゝよ三度笠、ますぐに[illegible]、ハンヨ、[illegible]ここのふ千代さん、橋にこたな、したことた、たいしよ〳〵

おさん何をする、行燈の影で、ハンヨ、しこもしたおる、のふ千代さん、居睡りを、したことた、ないしよ〳〵

わたしの心は、當世屋根よ、ハンヨ、かわらないのが、のふ千代さん、よいなアかよ、したことた、ないしよ〳〵

此の七つの俗謡を畫入にして、一枚繪になつて居る、林君は此の流行唄は文久四年のものだと云つて居られた、千代田稲荷は宮益坂の中途を北へ切れた横町にあつたが、一昨年道玄坂上へ轉じ、現在は百軒店を前に控へた處にある。

此の放火事件は家茂將軍の生母實成院の住はれる七寶の間の女中が、瀧山さんを怨んでのことである、此の御殿女中根性の暴露に引替へて文政十二年三月の放火事件は頗る可憐な情緒が見える、御留守居石川左近將監の上申書を見ると、

姫君様御半下廿一人にて召仕候小僧女

と　め

相州小田原藤屋惣兵衛娘にて、伯父明屋舗伊賀者飯塚彌三郎宿に致相勤候

此とめ儀、去月廿八日暮合頃、火の番に中火の元のため、[illegible]

局用相済候處、物焼候得ひ故障に付相札候處、重役局表物部屋内に付、御廣敷番之頭、添番、伊賀者、御下男組頭御下男召連罷越見届候處、焼物入候明き箱之内に火相見候間、早速消留女中向にて穿鑿を遂げ候處、前書の名前の者の仕業の旨に付表向にて厳重に御取扱有之候様被致度段、老女衆申聞けられ候段、表使申聞け候、之に依つて御届申上候

使番田每召仕女

ふく

右ふく事、とめ姉に御座候間、平生心付申付置候處、此上如何取計可申哉之段、表使申聞け候間相伺申候以上

ふくは十九、とめは十六であつたといふ、とめは去年御奉公に出たのであるが、望郷の念に絶へず、何とかして生家へ帰りたいと、稚心の無分別に斯る大罪を犯したとか、我等の祖母は埼玉縣の百姓の娘であつたが、十三の時に一の側の浦尾さんといふお年寄の家へお小僧に出た、其の當座は夕方に成ると故郷の方へ飛んで往くのを見ると、悲しくなつて涙が溢れたと、老後になつても一つ話にした、昔の人間は此の邊が大分今日とは違つて居る、我等は石川左近將監の上申書を見る度毎に、何時でも祖母の一つ話が思ひ出される、それから我等は老刀自にお火の番と、按摩の事を聞いた。

火の番は夜の十二時以に二人づゝで、拍子木を持つて長局を廻り部屋々々の火の気のありさうな所を見に來ます、次の間まで這入つて來て、些少でも怪しみのある處があれば、部屋の者を起して水を掛けさせました。

女按摩は御殿中に常に三四人居りました、重立つた者の部屋に泊つて居て呼ばれた所へ療治に行くのです、部屋方の者と一所に居て、御療治の人と云はれて、頭の上がるものではありませんけれども、先々へ往つてオベンチヤラで、貰ひ物が多うございましたので、平素絹の着物を着て樂々として居ました、食物は泊つて居る部屋の賄ひを貰ひ、總べて其の部屋で世話になりますから金は入りません、給料には呼付けの所から、少いのが二歩（一兩の半額）、大概は一分（一兩の四分の一）の心附けを貰ひますが、ソンナ物は當てにして居ません。

今宮内省では一々錢を拂ふさうですが、御本丸では療治の度に錢を遣るなどゝいふ事はありません、按摩は目が見へないと往けません、目くらの女按摩は居ませんでした、是は部屋方の按摩で、目明様のは御呼名が按摩をするのです、その時はお次合の者が一人、お側に出て居ました、後にはお次の御人と云ふので、お三の間格の女が按摩を致しました、夜は何時御用があるかも知れませんから、御番繰りには入れて有りません、按摩をな

ささいには及ぶ事で、帯の間にはさいません、それも同じなでたく御手拭です、頭を揉むといふことはありません、お肩だけおないのです、たまにはお長袴を穿いて、お下を揉むこともありました、お肩にしても紅絹の袱紗を掛けて御揉治を上げます、何處を御揉治するにも袱紗を掛けて、お召物へ直かに手を觸れさせないのです、末になつて吉田某といふ男の按摩が上つたことがありますが、例の袱紗を掛けて、お肩だけ上げました。

三十三

精靈棚の飾附は宮様にはありません、旦那様はお清の間へお飾りになりました、只だ眞菰がなかつたやうに思ひます、其の他は下方と同じです、

部屋〳〵の盆燈籠は定例といふではなく、名々思ひ〳〵でしたが、大概つけたやうでした、けれども二階住まひ（お年寄共の他の部屋に同居する者）には火がない定め故、盆燈籠もつけられません、部屋〳〵は皆一列で、目見以上以下で盆燈籠をつける、つけないなどゝいふことはないのです、佛間は部屋〳〵にない方が多く、父母共の他の爲めに稀に拵へる者もあつたのです、花屋からお廣敷へ持參するのは、お清の間の御用で、部屋〳〵の入用ではありません、

六日二十六日が[illegible]又に[illegible]ました、[illegible]のきるのを着ます、平日（六日十六日）にも[illegible]です、[illegible]合召物にお三の間が用ゐたぞといふことにはなりません、式日にもお納戸目がありますから、キツトお召物があると極つてはゐません、又た式日のお召物と云つて極つたものもありません。

式日には地黒地白地赤に極つて居ります、[illegible]の時だけは地白一色です、又た式日には縫入は着物でなければ着ません、又た透紗や縮緬を着ないのです、透紗に縫入りといふのはありません、大きな模様の間に結び花のあるのが縫入です、結び花といふのは四季折々の花束で、牡丹も何も色々様々な花の[illegible]があるのを云ふのです、大模様も下方のと比べては餘程小さいのが、御本丸風なのです、夏は地黒地白ですが縮緬なら地赤です、お三の間から下は綸子が着られません、それ故その人達は式日に容色縮緬の惣縫を着ます、縮緬の地赤はお三の間などの人が着ても宜しいことになつて居ました、新參者が單物の襲ねを遠慮するといふのも羽二重の襲ねを遠慮するので、何でも襲ねのないのはありませんが、襲ねは皆白です、それもお三の間以下のことで、お側の者は新參でも羽二重の襲ねを着て宜しいのです、さういふ時にお三の間は透綾の襲ねを着ました。

お三の間が襲ねを着るのに三ケ日だけでなく、正月の中はず

ヨロ〳〵着ます、一般立働く者は搔取を着ません、お次も着ないのですが、お三の間でも三ケ日の出番には搔取を着ます、綸子は御目見以下の者が着られませんから、紗綾の地白地黒又は縮緬の地赤を着ます、縮緬の地赤は御目以上の者も着ます、縮緬の地赤を着た時には必ず高砂染の間着に極つて居ました、若し高砂染のない人は黄色の間着に定つたものです、此の黄色の間着は縮緬の地赤を着た時と、年回法事の時ばかり着るのでした。

此のお三の間から取立てられて、上様附のお中臈になつた人に、温恭院様（家定）のシガといふのがあります、シガは後に豐倹院といひました、お下（生家）は忘れましたが、商の人（商取の職、仏像の多いことゝの子です、さほど美人といふでもなかつたのですが　一寸奇麗に見へました、温恭院様がお悪くなつて（薨去のこと）から三年精進で通し、瓦解（幕府の倒れたこと、其幕府の人は御一新ともいふが、多くは瓦解といふ）の時には四十七八でしたらう、お此の上は主取りもしたい、縁付きもしない、生家へ戻つて托鉢して世を送ると云つた位、気勝ちな人でした。

温恭院様のお手付中臈は此のシガだけでした、御心当ては二三人あつたのですが、お手が附きませんでした、それといふのもシガが強くて、御寝様へお泊りが一度あれば、自分に二度お泊りがなければ承知しないといふ風で、他の者などを御側へは出さなかつたからでもありませう、シガは常にお側を離れず、奥通りの一橋其の他とお遊びの時でも、此の人が後から夫れ是れお世話を申しました。

お捨は四五人あることもありました、並の中臈で勤めて居ます、お捨といふことは内密で御殿の中でも知れません、お手当なども別に變りはないのです、お手付のお中臈といつても、美人を撰む譯でもありません、樹德院様のおつゆさんなどは、丈の低い猫が喧をしたやうな人でしたが　初之丞様（後慶寿丸子）を持ち申したおさださん（押田丹波守勝長の女、達姫斎千代等の子女を擧げた）の母だといふので召出されたのです。

此處で少々我等から申上げる、押田家からは三代続いてお腹様が出て居る、家慶の生母お楽の方は押田藤次郎の女で、おさだの方は孫、おつゆの方は曾孫になる、其の間に三百俵の家が千石になつた　奥向は大に騒ぐものなのは云ふ迄もない、それは如何にも御殿女中らしいことである。といふ中に十一代将軍家斉が非常な騒ぎ屋であつた、それ故に十二代の時は甚しく騒いだ、将軍の名に偏の附く文字を背いた御方には子供がない、家綱綱吉家継家治熟れも相續人がなかつたといふので、家定も初めは家祥と云はれたのを改められた、山中共古翁の厳父は三九郎と云

つて、[illegible]たた
時、[illegible]られた、其の[illegible]に[illegible]
へるといふのだ、丸で落し[illegible]のやうだけれども[illegible]の話だから
呆れる、おつゆさんの召出しにしても、家慶將軍は多愛多子で
あつたが、誠に公子女が成育しない、其處で男子を産んで能に
成育した自分の生母の一類から寵妾を募集するやうになつたの
であらう、押田氏のみならず、此の將軍の時には伯叔母と姪と
を併せて閨務に從事させたのがある、畢竟御家門御繁昌の爲め
であつて、艶色の爲めではない、從つて美人でないとなると、
御思召を感服仕れさうになつても來る、爰へ御景物に甲子夜話
を書き附けませう。

文恭院様(家齊)には、俗に云ふ所のかつぎ家にましく\て四の字を嫌はせたまひ、其外種々伺候の面々、言上に禁向多くして困りたる由、或時御小納戸の内、誰やらんへ仰せられ、御花壇の内へ御植付ある所の松葉蘭は何本芽出しがあるや見て參れとの上意なり、往て見しに四本ありければ、立歸りて其趣言上しけるに、少しも御いらへなし、別に御植木掛りの春田長兵衛を召して、見て參れとの御意なり、長兵衛立越へ歸りて、二本づゝ二タ所に芽出し居り候と申上げければ、それは滿足なりとの御意ありしとなり。

[illegible]
用に[illegible]
をかへて[illegible]に[illegible]

慎徳院様(家慶)の御[illegible]に、お[illegible]申したのですが、直ぐにお懲くなりました、御[illegible]の松といつて一株植ゑたのを、お懲くなると取つて了ひます、[illegible]も伯母(未考)が慎徳院様のお中﨟を勤め、御一人お[illegible]申して早く死んだものですから、其の縁で召出されたのです、そこで(未考)といふ人は叔母(未考)と同時に、慎徳院様のお中﨟でした叔母と姪と勤めて居る内に、姪の方が早く寵を得るやうになりましたので、叔母が怒つて妊娠中の姪を椽から突き落しました、それから破胎して病氣附いて死にましたが、臨終の時に實母が枕上で忘れるなく\と口惜し泣きに泣いたさうです、其の後叔母は鏡へ姪の影が寫り、又た手洗盥の水へも、おそでの姿が寫るといつて、水を搔き廻しては遣つたといひます、寵愛を爭ふことは同胞でも叔姪でも用捨はあるまい、殊に妊娠に至つては彼等の唯一の目的なのだ、戀だの愛だのといふ外に居る彼等は、權威の凄じい御腹様になることが、何よりの願ひである故に寵愛以上の嫉妬憤怨を共處に集める譯だ、我等は先年入谷の東運寺で、本尊鉦冠藥師の厨子に、天保十二丑年六月廿八日再與

御旅（九十歳の本壽院付堀内氏）、西御丸大奥老女八重島、内大臣十二將神、御男子大願成就と書いてあるのを見た、當時の西丸には世子家定が居られ、天保十二年は恰も家定が十七歳の時である、其の時御男子大願と書いたのに興味を感じた、家定の生母本壽院は多分八重島の世話子であつたのだらう、御中臈自身が神懸けて念じ上げる御大願であるのみでなく、差當つて世話親なども必死に其の成就を祷つたに違いない、寛永寺の兩大師も御願に依つて、家綱將軍が生れられたといふので、幕末までも諸大名の奥向から、御男子の大願について盛に御祈禱を頼んで來たといふ、明治になつても眞乳山の聖天へ容易ならぬ向から御大願の御祈禱を持ち込んだと聞く、）

溫恭院様（家定）の最初の御簾中（鷹司關白政通女、有君、天親院、天保十二年十一月入輿、嘉永元年六月逝去）は美人でしたが疱瘡でお隱れになりました、琴がお上手であつて、愼德院様の御相手をなされたさうです、二度目の御簾中（一條左大臣忠香女、明君、澄心院、嘉永二年十一月入輿、翌三年六月逝去、三度目が安政三年十二月に入輿された天璋院殿である）は姉小路さんがお連れ申して上京した時は、大變お樂みの御様子であつたが、お着になつて見ると、お駕籠からお首がチョット出るほど（お駕籠の戸を撥ねて、其の中へ立たれると漸々お首が少し出る、餘程丈の低いお方であつた、襖の處へお立ちなさると、お首が引手の下にあつたといふ、丈は低いが此の澄心院殿を殺だといふのは間違いだゝなのを御覧になつて、ひどくお怒りなすつた、さうして此の御簾所を手玉にとつてお遊びなすつたといひます

和宮様は將軍家をお慕ひにならないやうに御含め申してあるとも云ひ、江戸には永くお出なさらない思召だとも云ひました、上様の方から御機嫌をお取りになつた御様子でした、初めての御上洛（文久三年二月）の時、宮様は御風氣であつたので上様が御暇乞にお出になつたのに、宮様はツンとしてお出にならなかつたと云ひます、其の翌日の御立ちにも御見送もなさらなかつたので、腹を立つた者もありました、

和宮様が御歸洛の時（明治二年正月十八日御出立）にお忘れになつてはならぬと云つて、孝明天皇様と昭德院様の御位牌をお文箱へ載せて置いたのに、孝明天皇様のだけお持ちになりました、お側の者が惡いのでもありませうか。

昭德院様（家茂）には宮様のお出の前に一人、それからお中臈で、表向でなく御隱居といふやうなのが一人、それから根岸邊の旗本の娘で、十七ぐらゐのが一人、是は公然御庭お目見へをしました、お庭御目見は島田振袖で世話親が附いて御庭をあるくのです、（正式に採用される御手付中臈は、必ず此のお庭御

目見をするのだ、さうでないのは非公式な不時の御用であると是は三度目の御上洛（慶應元年四月）の前で、二三夜お泊りがあつて、上様がお惡くおなりになつて了ひました。

上様の大奥泊りは御精進日の外は別に極つては居りません、誰へ泊るといふことは、御意があるらしうございます、お鈴廊下は御座所だけにあるので、院號を申上げる方々にはありません、渠の蓋の取れる犬道子は紙を入れるものです、上様がお出の時でなければ飾りません

三十四

煤掃の下されのあるのは、御煤掃が濟んでからです、御煤掃は十二月の月始めから十三日まで掛ります、煤掃は名々の部屋（長局）から始めて、御座所で終るのです、煤掃の日には上は別のお座敷へならつしやいます、其の御座敷は何の間と云ひましたが忘れました、お煤掃の時にお疊替と障子張りとを一緒にします、障子も疊も御廣敷の外へ持ち出して、それから新しい疊を持つて來て、敷き込んで其の後をお掃除するのです、御疊替をした古い表を拂下げる者があります、煤掃には必ず取替へるので、まだ結構な疊なのです、疊方は添番がついて、大勢で這入つて來て、疊を持出します、其の間女中一同は隠れて居るのです、疊方は[illegible]ない所へ這入つておるやうにするのです。

御疊藏といふのが梅林門を這入つてからさきの坂の途中に[illegible]あります、チヤンと出來上つたお疊が其の藏に入れてあるのです、疊替といつても御疊藏から持つて來て敷き替へるだけです何時でもお疊を汚した時には直ぐに御疊藏から持つて來て引替へるのを見ますと、煤掃の前になつて仕度するのではなくて、平素から敷き替へる疊が御疊藏にあるのです。

平素でも箒木はたき羽箒は半月宛で取替へるのですから、お煤掃だといつて別段に拵へることはありません、常に小部屋に名々の名を附けたのが掛けてあります、お煤掃にもそれを遣ふのです、笹は一向遣ひません、天井拂ひといつて、先へ鳥の羽の附いた毛鎗のやうなものがありまして、平素のお掃除にも遣つて居ります、高い欄間の御櫺子を明け立てするには、お櫺子さしといつて、樫の木の棒の先へ撞木のついたものがあるのです長い柄のついた棕櫚箒木は、天井を掃除するのに遣ふものではありません、渠れはお末が坂の間を洗ふのに遣ふものです。

疊を上げて根太の掃除するのは人足の役で、女はソンナ荒い事はしません、疊を上げた跡で、一應締め切つて掃除をします、掃除をして一同が引いた後に、疊方が又た人足を連れて來る

す、此の人足は多分小細工の人でせう、部屋々々でも小細工に頼み附けがありまして、釘を打つとか、戸障子の工合を直すとか棚を吊るとか云ふ時に來て貰ひます、此の小細工の人は御狂言の時に遣ふ道具一式を拵へます、（各部屋で小細工を頼むといふのは小細工ではなくお下男であらうと思ふ、お下男の部屋で種々の細工物をして居るのを常に見て居る、さうして其の品が大抵女中用のものであつたのをも記憶する、又た疊方と一所に來る人足は疊方の下職であつて、是も小細工ではないと共古翁から聞いた）、疊を敷き込んで人足共が往つて了つた跡を、お側はお中﨟、お次はお次と、銘々受持ちの所を掃除します、椽側まで掃き出してもお庭へ掃き落さずに、大塵取へ取つてジンコへ入れます、上のお煤拂はお中﨟が致すのですが、掲げだけで表つ張りなどを着るものではありません、お煤拂でない時もお中﨟は朝夕に御用が多ければ、掲げをします、御年寄には掲げることがないのです、掲げの時には箱せこを持ちません、畫に描いた御殿女中の花見姿に、掲げて居ながら、箱せこかんざしをピラ／＼下げたのがあるのは大笑ひです、掲げた時には決して箱せこを持ちません、それに御本丸では箱せこかんざしを用ゐないのです、其のピラ／＼させるのを、大名風だと云ひまして、却つて嫌ひました、箱せこは何町でしたか和田新六と云ふ者から納めました、代は二朱です、猩々緋や緋天鵞絨へ縫の一面にあるのは一兩ほどもします、それはお晴れの時に持つのです（御本丸女中の箱せこは、大名よりは餘程大きい、曲尺で竪が二寸五分、横が五寸三分、厚さが一寸ある、是は御年寄であつた瀧尾さんの遺物だ、淺紫の精好に少々縫ひがある、今日々箱せこは殆ど御本丸の舊物に比べては半分である、箱せこは紙を挾んだ方を内にして懐中するのです、箱せこの帶に、附いて居る紐の先の巾着は懐中から帶の間へ挾んで落さないやうにする爲めです。

お三の間が採取を着てお煤拂をするなどゝ書いたものもあるさうですが、採取を着て働けるものでないのは知れ切つた話です、又た手拭をかぶるといふも嘘です、ソンナことがあるものですか、御留守居が箭竹を持つて、お煤拂の跡を間毎々々にあるくなどゝいふのも一向存じません、又た有るべきことでもないのです、お留守居其の他の男子と、奥の者と立ち交つて、お煤拂をすることに決して有りません、平生も表使だけは御留守居の御談示といふことがあつて、出會ひますけれども、其の他の者は男役人と一切面會しません、面會さへしないのですから立ち交つて一所に働くことが有るべき筈もないのです

「煤拂初めの儀式に何かありましたらうが覺へがありません、

[illegible]表向の御座敷[illegible]所で行ふ[illegible]）ではないのです、それにその御年寄から箒木を入れ初めをした[illegible]て了ひました。

名々の部屋の掃除は一ト同一緒にします、是は自分でするのではなく、部屋の者にさせて、自分はお仲間の所へ逃げて往つて、掃除が濟んだといふと歸て來るのですが、御年寄のは一部屋づゝ別々に掃除するので、奥へ出て居る人もあります、が、明番で部屋に居る人もあります、しかし御年寄は外の者の部屋へ往くことはならぬ事になつて居りますから、明き番でも奥へ往つて了ひます。

新御殿、一の御殿と順にそれぐの御殿の御煤拂を致すのです、人足の都合がありますから一時にはしません、御年寄の部屋一つでさへ人足が二十五人ぐらゐ入ります、お煤拂が濟みますと、蕎麥を下さるので、御年寄御中﨟と役人一同が罷出ます、此の御振舞にはお三の間は出ません、蕎麥の御振舞は御殿ぐでお互にお呼びになります、新御殿（天璋院様御住居）で蕎麥を下さる時には、一の御殿のお側の者が出ます、一の御殿（和宮様御住居）でお呼びの時には新御殿の者が出るといつたやうに他の御殿ぐのお側の者をお互にお呼びになるのです、給仕は其の御殿の御中﨟が致します、蕎麥を下さるのは日暮でした。お下挽は内外黒塗で、しるしが附いて居ます、天璋院様ならば[illegible]ぐおしるしがあるのです、[illegible]つて來ます、お次の間に部屋の[illegible]へ[illegible]るのです、部屋の箱といふのは[illegible]（長方形）です。おつゆの茶碗は[illegible]で、幾つも同じお[illegible]あつて、幾度でもおかはりを入れては持つて來ます、[illegible]といふのは一切出ません。

お煤拂の夜に中年寄や御中﨟が、ウツカリあるいて居りますとお仲間から胴上げにされることがありました、（同勤の者だけで、同勤以外の者が胴上げに來ることはない）、

正月は一日から三日まで御掃除をしません、四日の朝がお掃初めです、奥の御掃初めはお小座敷（將軍が奥へお出になつた時のお座敷）から初めます、是は御表から寄せて來るのですから、先づ御表でお掃初めがあつたことを一の側へ傳へ、それから二の側、三の側と知らせて、私共が奥へ出てお掃初めをするのですが、此の日は塵がヒドイので掃かずに、拭くだけです、上の御座敷を掃除して、御掃除が濟みましたと申上げて、それから名々の部屋を掃除するのです。

我等は一年中の御掃除の濟んだ處で拍子幕も似合はしくない、チョンはチョンでも緞帳にする。

田能村竹田

―本朝畫人傳の三―

村松梢風

一

竹田は、文化十一年の夏、大阪へ行つた。大阪では、生玉の持明院に寄寓して、數箇月を送つた。持明院に宿るのは是れで二度目だつた。此の前來たのは文化四年だつたから、彼が三十一歳の年だつた。其の年の春彼は結婚して、結婚後の幾月かを郷里の家で暮したあとで、大阪へ漫遊したのだつた。

京攝の間には、彼の知己は尠くなかつた。京都には、谷道の女小石元瑞も居れば、三十歳の時入門して詩學の師と仰いだ村瀬栲亭もまだ存命してゐた。大阪には、岡田米山人が居た。矢張り其の頃から、彼は米山人の知遇を得て、膝下に侍して指教を受けた。米山人は竹田の畫を見るといつでも欣然として

「私の衣鉢を後來傳へる者は足下ばかりだ」

と言ひ〳〵した。

竹田は、それらの文人墨客と交際して悠々として日を暮らしたのだつた。

いつの間にか秋になつて、朝々は衣を拂ふ風が膚に泌みるやうになつた。其の頃になると、竹田は、寂しい旅の寝醒めの床に、故郷を思ふのであつた。浮か〳〵と暮らしてしまふ都門の生活を辭して、あの草深い豐後の片田舍の村莊に歸臥して、靜かに詩想を練り度いやうな氣持になつた。都に住む人の眼には、見るもいぶせき草の庵だけれども、彼に取つては其處が唯一の安息所だつた。

村家點々たる中に、竹林の蔭、細流に臨んでゐる我家で、妻が野菜を洗つてゐる姿が見えたり、其の傍らで嬉々として遊び戯れてゐる愛兒太一の面影が眼に映つたりした。

九月の初めに、竹田は大阪を發つて、便船に乘じて歸省の途に就いた。が、途中、備後の鞆津で下船して、三島怡齋を訪ね

て見ようと思ひ立つた。怡齋は[illegible]書家で、[illegible]があり、竹田は大阪で甞て交際した仲だつた。從つて、いつも[illegible]で素通りして浪上からばかり望んでゐた[illegible]の風[illegible]を、親しく觀賞してみたい氣持もあつた。

　竹田が怡齋の家を訪ねると、怡齋は非常に喜んで迎へた。そして一別以來の挨拶が濟むと直ぐに怡齋は言つた。

「大變好い折においで下すつた、實は、兩三日前から山陽が宅へ來て居るのです、先生は確か、まだ山陽とはお近付きでなかつたやうに聞きましたが」

「掛け違つてつい面會致しません」

「それでは早速御紹介致しませう、先づ其の積りで、今回は御緩りと御逗留を願ひ度いものです」

　それから直ぐに山陽と竹田は、主の紹介で顏を合せたのだつた。が、此の兩者は、顏を合せたのは今が初めてだが、お互に名前は前から知り合つてゐた。それは、竹田の親友であるところの小石元瑞は、山陽に取つても亦無二の知己で、且一面恩人とも言ふべき人だつたので、二人は元瑞を通して間接に相互の人と爲りを知つてゐたのだつた。

　小石元瑞は、京都の人だが、江戸へ出て大槻玄澤に學び、京都へ還つて蘭醫を開業して大いに行はれてゐた。彼は專門の蘭學[illegible]に、[illegible]た。大[illegible]文雅を好んで、[illegible]化八年の冬初めて京都へ出て來た時、[illegible]を以て、一番最初に訪問したのが小石元瑞であつた。元瑞は暫く山陽を自分の家に留めて置いて、餘暇には山陽を伴れて[illegible]などへ遊びに出掛け、それから逢ふ人毎に山陽を紹介した。さうして山陽の知人が一人二人と增して行つた頃を見計らつて、新町に借家をして山陽を其處へ移らせて、儒學教授の看板を掛けさせた。それが山陽の今日を成す第一步だつた。

　爾來僅か四年、三十五歲の今日迄に、山陽の努力は非常なものだつた。其の頃京都には、儒學を以て門戶を張る錚々たる大家が十指に餘る程あつた。其の中へ、突然田舍から飛び出して來た山陽が塾を開いて、競爭しようといふのは、寧ろ大膽に近い行爲だつた。が、彼は飽く迄も屈らず、一個に旗幟を立てゝ、それらの大家と覇權を爭つた。其の努力は酬ゐられ、僅かの間に名聲隆々として昇つた。彼の塾は一日增しに賑やかになつて來て、門前には書を求める者が踵をついで到るやうになつた。さうして志の一端を得た山陽は、今年の八月上旬京都をたつて、五年振りで故鄉廣島に歸山したのだつた。彼は久方振りで兩親の傍に侍して愉しい日を暮らした。山陽の歸省を聞いて

集まつて來る親戚門人知友の人々が門前に市をなした。彼は其の應接に遑がない程だつた。さうして青年時代の種々の關係や不行跡を一朝にして雪ぎ去つて、今や得意の絶頂に達してゐた。嚴島に二週間餘り滯在して山陽は歸東の途に就いた。途中各所で歡迎を受け、九月の中旬即ち鞆津へ來たのだつた。

山陽も、鞆津の地を踏むのは今度が初めてだつた。が、彼は久しい前から此の地に憬れてゐた。それは山陽が九歳の時だつた。彼は父に伴られて大阪へ行つたことがあつたが、其の時船が或る港へ一泊した。海上から眺めると、屋根が鱗のやうに重なつて、海邊近い處には數層の高樓が參差として立つてゐた。そして邊りを海霧が、包んだり現はしたりしてゐた。「何といふ港だらう」と思つて舟人に訊ねて見ると、

「此處が鞆津だ」と舟人は答へた。

其の、九歳の時の思ひ出が、山陽の心からは何時になつても消えなかつた。遙か後になつてから、人から保命酒を贈られたことがあつた。そして、其の酒が鞆津の名産であることを教へられた。黄色く濁つてゐる其の酒を飮むと、山陽は九歳の時の思ひ出を色濃く眼前に呼醒された。其の後は、保命酒を口につける毎に、鞆津を思ひ、なつかしく感じるのだつた。

山陽は今積年の其の望みを果して愉快に堪へられなかつた。

恰齋の別莊は對湖樓と稱し山海の觀望を恣にすることが出來た。昨夜は舟遊觀月の宴を催した。月の光を盃に受け乍ら、黄色くて甘い保命酒を飮む心持は得も云はれなかつた。

山陽は、小石元瑞から屢々竹田の噂を聞かされてゐた。小石は非常に竹田に傾倒してゐて、其の詩畫を稱するのみならず、竹田の人と作りを稱揚して「人格第一等」だと云つて口を極めて褒めるのだつた。併し山陽は未だ竹田の詩畫すらも見たことがなかつた。だから彼は幾ら小石が竹田を賞讃しても、彼自身は只默つて聽いてゐるばかりで、竹田といふ田舍畫師に就いてさう強く興味を惹かれはしなかつた。彼は非常に自信力の強い男だつた。自分自らの信じた物に對つては常に最大級の賞讃を惜まない代りに、自分の知らない物に就いては、他人がどれ程聲を大きくして稱揚して聞かせたところで、素直にそれを受け入れるといふことはなかつた。

さういふ風だから、山陽は今竹田に逢つても、一個の畫工として以上に餘り重く見てはゐなかつた。

其の夜、恰齋の宅で小集が催された。山陽、竹田、それに菅茶山の弟の菅微卿、其の他土地の文人數名が參集した。さうして置酒高興、宴酣にして、各々畫を作り詩を題することになつた。

[illegible]ロ・様になつてゐた。殊に後年は[illegible]中に酒をおぼえて遂に大酒家となつたけれども、若い時分まではむしろ下戸に近かつた。きるで飲まないわけではないが、多くは保命酒のやうな甘い酒を飲んで済んでゐた。其の大好きな保命酒の瓶が彼の前にだけ置かれてあつた。

山陽は、さうして肘枕で寢轉んだ儘、人々の揮毫する處を眺めてゐると云ふよりも寧ろ、態と見ない振りをしてゐると云ふ方が中つてゐるやうな態度だつた。さうした彼の態度は折々人に反感を起させるのだつた。「山陽は傲慢不遜の男だ」と方々で云はれてゐた。けれども山陽に云はせると、拙劣な繪だの詩だのぬたくつてゐる處を一と晩中神妙に畏まつて拜見してゐなければならんと云ふならば、それは恰も地獄の責苦に等しいものである、況んやそれに對つて一々諛辭を呈するに於ておやである。だから彼は大概御免を蒙つて縦轉んでしまふのである。

いろんな人が揮毫した後で、竹田が筆を執る番になつた。其の時になつても山陽は同じやうに寢轉んでゐた。竹田は紙を展べて山水を畫き出した。

山陽は、寢轉んだ儘、じつとそちらを見遣つてゐた。竹田の

[illegible]た。

山陽は突然[illegible]起きた。そして「唐人、唐人、貴樣は唐人だ」と叫んだ。

一座の人々は眼をそばだてゝ山陽と竹田と二人を見てゐた。竹田は平然たる態度で筆を動かしてゐた。山陽は沈默して、襟を正うして、竹田の揮毫する處を眺めてゐた。

竹田は、人々から求められると、幾枚も描いた。感激性の強い山陽は、其の後で竹田の手を執つて「今迄貴下に逢はなかつたことは、私に取つて損失だつた」と言つて今日の邂逅を喜んだ。彼は立どころに一詩を賦して、筆を馳らせた。

我曾在レ京君在レ攝。參商不二相接一。豈圖萍水會二天涯一。執レ燭連レ床酒潮レ頰。

其の翌日、二人は再會を契つて、東西に別れたのであつた。

二

田能村家の遠祖、田能村吉左衞門と云ふ人は、備前池田侯に仕へて碌千石を食む士だつた。其の一子休庵と云ふ者が醫者になつて、豐後岡藩の侍醫となつた。休庵から四世の孫を碩庵と

云つた。それ迄代々醫を以て仕へて來たのだつた。碩庵に二男あり、長を周助名は孝明と云ふ、學を好み、藩の詞業と爲つたけれども、早く歿した。次男が竹田であつた。竹田は名は孝憲、字は君彜、幼名を磯吉と云ひ、長じて行藏と改稱した。彼は醫者の子だけれども、醫を好まなかつた。幼い時から非常に詩文が好きだつた。そして、天稟の詩才を有つてゐた。で、彼は中途で醫を捨てゝ、專ら儒學に志した。經學の師は、同藩の儒者唐橋君山であつた。廿歳の年には熊本に遊んで、李紫溟に就いて學んだ。それと同時に、彼は、非常に繪が好きで、此の方にも天分が認められる處から、彼の親は、同藩の畫師淵野眞齋、渡邊蓬島の二人に就かせて繪畫を學ばせた。

二十三歳の時、行藏は藩の儒員となつた。そして、師唐橋君山、伊藤文藏等と共に豐後風土記を編纂することを藩から命ぜられた。享和元年二十五歳の時、君命に依つて君山と共に江戸へ出た。江戸では古屋昔陽に從つて、經史の學を專攻した。

其の頃江戸では、谷文晁が漸く全盛期に入り掛けてゐた。彼の名聲は隆々として江戸の畫壇を風靡して、其の勢力旭日昇天の概があつた。文晁門下にあらずんば畫師にあらざるの趣を呈してゐた。そこで、田舍出の書生であるところの竹田も、大勢に押されて、文晁に師事しようと思ひ立つた。彼は紹介を以て、束脩を入れて文晁の門人になつた。さうして、稽古日に其の家に出掛けた。すると、さしもの廣い家も門人で一杯になる程だつた。文晁は、所謂寫山樓なる畫室で、數多の門人環視の中にあつて、豪健無類の筆を揮つて見せてゐた。其の有樣を見ると誰れでも、畫師も是れ程になれば――と思はずにはゐられないのだつた。

けれども竹田は、文晁の畫風がどうも心に染まぬやうに感じられた。文晁の手腕は確かに一代に冠たるものがあつて、さうして其の地位は、男子の事業としては壯快を極めてゐるが、併し眞の畫といふものが、あゝした華やかな生活の中から生れて來るものだらうか、どうだらう？とも考へさせられた。彼自身の心持で云ふと、そも〳〵畫師なぞといふものは、もつと寂しい孤獨の生活の中に浸つて、そして自然や人間を靜かに觀照すべきものであるやうに考へられた。あれだけの筆力と、あれだけの素養を有し乍ら、文晁の畫の何處かに一點俗氣の消えずに殘つてゐるのが眼に付くのは、彼の性格に由來することだらうか？ それともあの生活が彼を毒してゐるのだらうか……と竹田は考へて見た。

そんな風だから、彼は餘り文晁の家に通はなかつた。從つて文晁の方でも、其の一門人に對して特別の注意を拂つて見る

ことになかつた。

其の年の十一月恩師唐澤君山が病歿した。竹田は、翌文政二年の四月歸國した。其の後は專ら豐後國誌編纂の事業に沒頭して、國内の諸落に亘つて旅行して調査を進めた。彼は獨力を以て先師の遺業を完成せしめやうといふ決心をしたのだつた。

其の仕事は翌享和三年に至つて完成した。竹田はそれを唐澤君山の名を以て刊行することにした。併し、由來困難なる出版事業は、一貧生に過ぎない竹田をして、千辛萬苦の勞を嘗めさせた。そうして文化元年に至つて、漸く其の著述を世に出すことが出來たのだつた。

彼の家は、元來非常に貧乏だつた。藩から受ける俸米といふのも僅かなものだつた。加ふるに藩其のものも甚だしく疲弊してゐた。豐後一國は小藩が割據して、各藩とも財政困難だつたが、わけても岡藩は、近年政道が弛緩し、上下奢侈文弱に流れ、年々租税を增徴して漸く彌縫してゐる有樣だつた。で、小祿の者では生活を維持することさへも困難だつた。

其の頃、彼の家庭に一つの悲劇が行はれた。それは彼の妻の離別問題だつた。其の妻は、菱屋某といふ町人の娘だが、非常な美人だつた。最初のうちは夫婦仲も睦じく、家庭も平和だつたが、それが永くは續かなかつた。其のわけは、彼女は比較的富裕な家に育つて來て[illegible]窮乏な貧乏な武士の家に嫁して來たのであつても、[illegible]も其の習慣は抜けなかつた。そして彼女自身としても、町人の娘から武家に縁付くといふ歓びや誇りが、貧乏な生活の爲めにぶちこわされてしまつて、現在の境遇に對して不滿であつた。それが極端に舅姑の感情を損ねるのだつた。竹田も、妻に對する愛情は有つてゐても、其の無理解に對して憤るやうな場合も屢々あつた。併し、妻に其の理解を持てと云つても、それは無理であるかも知れないとも考へた。

そんな風で、家庭に風波が立ちかけて來た。そこで彼は妻を離別する決心をした。どれほど可愛い女房でも、生みの親には替へられぬと彼は言つた。かうして自分一人が無情な人間になつてしまふ方が、結局彼女の爲めにも幸福であらう……と彼は考へたのだつた。

妻の問題の外に、彼にはもう一つ苦痛があつた。それは永年の眼疾だつた。彼は此の眼疾を癒さうとして有らゆる療養の手を盡した。が、一向驗目が見えなかつた。讀書や著述に沒頭するので、眼は益々惡くなるばかりだつた。

妻を離別した當座は、突然襲ひ來る淋しさに身の置き所も無いやうに感じることもあつたが、同時に自由な、煩ひの無い獨

身生活の有難さを泌々と考へるやうなこともあつた。とにかく彼は勉強がよく出來た

文化二年、竹田は京都へ遊學した。併し、學資が乏しいので非常に苦しかつた。其の學資は月に米一俵だつた。米一俵では暮しやうがなかつた。最初は市中に汚ない間借りをして始めたが、間もなく財布の底を叩いてしまつた。そんな風だから、立派な師匠に就いたり、文人墨客を訪問したりといふことも出來なかつた。國を出る時紹介狀を貰つてある處などへも顏を出さなかつた。顏を出し度いにも、手土産を買ふ金が無いからだつた。そのうちに或人の紹介で洛北の阿彌陀寺へ寄寓させて貰ふことになつた。此の寺は近世の[illegible]禪師の開いた所だが、當住の和尚も學問好きで、書物なども非常に一杯仕舞つてあるので、竹田は自由に其の書物を讀まして貰ふことが出來た。そこで彼は節約のために一日の食事を二度に減じて、漸く露命をつなぎ乍ら苦學を續けることが出來た。其の傍ら、方々の寺を廻つて古書畫を見せて貰ひ、それを縮寫したりして、其の研究もした。其の時分、郷里の或る人へ送つた手紙に、まだ京都へ來て誰の處へも入門しないと言つて其の後で、

「當時の先生に一拜一起仕候て神妙取り申候よりは、有り合ひの古物にて、寂寞たる佛閣に高臥して、古人と倘友仕候方、宜敷と極め申候」

などと書いて送つたりしたこともあつた。併し、それは彼の負け惜みに過ぎなかつた。矢張り師がなくては本統の學問は出來なかつた。當時、京都の學者の中で、彼が心から推服することの出來るのは村瀨栲亭一人だつた。そこで竹田は漸う金一分の束脩金を算段して栲亭の門に入つた

村瀨栲亭は京都の人で、秋田藩の儒官となつた。彼は、博學洽文、詩文を以て一世に重んじられ、又書畫を善くした。讀書の暇には必ず古法帖を臨摹して、矻矻として倦まなかつた。就中東坡の書を崇仰してゐた。彼が書を作る場合には餘程特色があつた。先づ其の前日から一切家事を顧みないで、起居を愼み、飲食を節し、室内を修頓し、筆硯を料理し、若い女子に墨を磨らせるのだつた。彼は常に人に語つて、墨を磨るには若い女子でなければ不可ないと言つてゐた。さうして置いて、翌日は早く起きて、早朝から書き始めて、終日手を休めずに書き續けて、晩方になつてまた興が醒めなければ、最後に蘭竹などを畫いて、漸く筆を收めるといふ風だつた。

栲亭は直ぐ樣竹田の非凡の才を認めて、大に優遇して呉れた。竹田は一年餘り栲亭に從學した後、郷里へ歸ることになつた。其の時栲亭は大煩ひをしたばかりで、まだ床も離れずにゐ

た。斯うやうに、竹田も其の[illegible]に[illegible]を[illegible]してゐた。[illegible]の[illegible]を深めたのだつた。[illegible]は心から竹田と別れることを惜んで、次ぎの詩を作つて餞けした。

今春病将死。入夏稍得蘇。予亦経伏枕。
奄奄及阽危。切米雖顛間。痩骨未生肌。
消如一隻鶴。相対同嗟老。吾老鬢将及。
窮志恐無期。尚子健六翮。高学翔雲遠。
只怜在羇旅。晨夕乏扶持。弊衣無人補。
宿飯饑療飢。不如帰郷里。保護得其宜。
山水皆旧識。相邀足伸眉。優遊抛世故。
可以養肺脾。風騒縦可喜。努力休苦思。
霜威日応劇。調摂須随時。草木向栄日。
薬餌必可知。再会定不遠。臨別心自悲。
力疾題数字。意多奈筆疲。

三

其の翌年、竹田は、臼杵藩の安東氏の女を娶つた。此の二度目の妻は温良貞淑の婦人だつたので、竹田は以前のやうに家庭の紛紜に煩はされることはなくなつた。妻は間もなく懐妊して、次ぎの年男子を生んだ。其の子は太一と名付けられた。

文化六年[illegible]頼山陽を訪ねて旧交を温し、[illegible]いたりした。小石元瑞と相識になつたのも此の頃の事だつた。

それから彼は更に紀州に遊んで、和歌山に野呂介石を訪問した。

其の旅から竹田が故郷へ帰ると間もなく、藩内に一大騒動が持ち上つた。それは、此の年の冬、領内の百姓が一揆を起して一時に蜂起したのだつた。其の頃岡藩の士風は悉く頽廃して、武藝學問に志す者は殆んど無く、奢侈淫佚の風が全藩に漲つてゐた。藩の財政が困難になるに従つて、新法に次ぐに新法を以てして、只々聚斂誅求を事として一時を糊塗してゐた。だから農民の疲弊は極度に達して、怨嗟の聲が道路に満ちてゐた。其の積年の禍根が遂に爆發するに至つたのだつた。

百姓一揆は一時辛くも鎮壓することが出來た。が、藩の有司は少しも弊政を改革しやうとはしなかつた。それを見て竹田は深憂措くこと能はなかつた。彼は遂に意を決して、長文の建白書を起草して藩主に上つたのだつた。藩主中川侯は、竹田の誠忠と才學とを十分に認めてゐたけれども、政治向の事に就いては、局外の彼の建言を直ちに採用することは出來ない事情もあつた。で、荏苒日を送つてゐるうち、翌文化九年の二月に至る

と又もや一揆が蜂起した。茲に於て竹田は再度の建白書を上つた。其の建白書に於て、彼は藩政の禍根を露骨に指摘し、積弊を除き勤儉力行を勵め、學問の興隆が急務である所以を力說したのだつた。

竹田の直諫は、當路の人々の肺腑を刺す底のものがあつた爲めに、彼は反つて藩の老臣連から甚だしく睨まれた。折角の其の熱誠も、分外の差出口であると云はれて、却つて物議の種となつた。竹田の師友であるところの伊藤文[illegible]は、壯年血氣の竹田が、直情徑行を以て國事に奔走するのを見て、彼の身に禍の降り來るべきことを畏れ、大いに其の非を咎めて深く訓戒するところがあつた。竹田も漸く悟つて、以後決して政治に容喙しないことを伊藤に誓つた。

文化十年三月、竹田は病の故を以て、馬廻役兼由學館頭取の職務を辭任した。彼は、後の生涯を詩畫三昧の境に送るべき決心をしたのだつた。併し藩主は竹田の志節を知つてゐたので、致仕の後も由學館詩文顧問といふ役を與へて彼を優遇することを忘れなかつた。

賴山陽と豐後で邂逅したのは、其の翌年のことだつた。

竹田が、二度目に山陽と逢つたのは、山陽が九州旅行の途次、豐後の竹田町に來て竹田邸を訪問した時だつた。それは文政元年十月末の事だつた。

山陽は、其の年の二月京都を發つて、中國を經て下の關から九州に渡つた。豐前に入り、博多に足を停むること約一月、それから佐賀を通つて、長崎に着いたのは五月の末だつた。由來長崎は、文人墨客の淵叢とされてゐる土地だつた。彼は此處で多くの人と交り、或ひは蘭館を見物し、或ひは支那人と交遊して、大に見聞を廣めた。其の土地の特殊の人情風俗は、數多くの詩稿となつて後世に殘された。長崎にあること約三ケ月、肥後に向ひ、「泊天草洋」の詩を得て、熊本に入り、鹿兒島に赴き、再び肥後に戻つて、東肥街道を經て豐後に入つた。二重嶺を越え、阿蘇山の煙を望んでは復一詩を得、進んで九重嶺を越えて、十月二十三日の夕刻に岡城下に到着したのだつた。

山陽の來遊は前以て報ぜられてゐたので、其の日竹田は、十一歳の悴太一に人を附けて途中迄出迎をさせた。山陽は、長途の旅行で日燒けこそしてゐたが、少しも憔悴の色はなく、例に依つて長刀を橫たへ、腰に酒を盛つた竹筒を提げて、颯爽として遣つて來た。

竹田邸では、主の竹田を初め藩內の二三の文人墨客の徒が、首を長くして待つてゐた。其處へ山陽は遣つて來ると直ぐ、竹田の顏を見て莞爾と笑つて、それから太一の方を顧て、頭を撫

でて居るから

「なかなか筆硯兄弟や、誠だ清らかに澄んでゐる、ま子才があるでせう。……だが、人間は寧ろ愚拙に限るた、巧なれば則ち貧く、拙なれば則ち富むからな、はッはッはッ」

太一は、竹田に取つては、天にも地にもたつた一人の子だつた。彼が太一を愛することは一と通りでなかつた。何處へ行くにも其の子を伴れて歩いた。其の命にも替へがたく思ふ太一を山陽が褒めて呉れたのだから、竹田は嬉しかつた。其の晩の宴には、山陽、竹田のほかに、岡仲達、角田九華等が加はつた。山陽は盛んに飲み且つ談じた。九州の山川風物の話、文人墨客の品評、それから旅行談に花が咲いて、山陽は長崎で馴染んだ袖笑といふ妓の事をのろけ混りに話したりした。

竹田は、山陽の酒量が上つてゐるのに一驚を喫した。先年納津で逢つた時、山陽は普通の酒は口に付けず、甘い保命酒をチビリチビリ飲んで、それでも酔つて眞紅になつてゐた、其の事を思ひ出して竹田は不思議に感じた。

「貴下は何時の間に、そんなに酒量をお上げなすつたのです、此の前お目に掛つた時は餘り召し上らぬやうだつたが」といふと、

「今度の旅行中に覺えたのです、最初下の關に逗留してゐた

詩、其の夜の[illegible]

それを飲ませられた時、[illegible]いので[illegible]逃るやうに心得[illegible]致した。それから味を覺えて、九州一國飲んで廻つたので、今では片時も酒が無うては寂しうて暮されんやうになりました。京に歸つたら定めておかゝに叱られることであらうて、はははははは」

「九州では何處の景色が一番先生のお氣に入りましたか」と角田九華が尋ねると、

「九州では、櫻島の勝絶が冠たるものですな」

と言つて山陽は、櫻島の風景の談から、鹿兒島滯在中の出來事などを話した。

山陽は七日間竹田莊に奄留した。其の間一日として詩酒の遊びをしない日はなかつた。

竹田は、何がな珍味を調理して山陽を饗應したいと思つても、山中のことで雞黍のほかに何物も無かつた。で止むを得ず自家の園圃に栽培したところの蔬菜を取つては客膳に供することが多かつた。山陽は詩を賦して曰く

岡城訪二田能村君彝一、余辭二近君彝於二鞆津一己五年矣。芒鞋半破髪鬔鬆。迂路尋レ君不レ厭レ遥。海港方レ船成二昨夢一。林惑別レ燭又今宵。園多二閑地一無二租闕一。屋倚二荒山一有二祿樵一。

霜葉雨露留ν吾醉。行藏總付ニ濁醪ニ魂。

山陽は非常な節倹家で、殊に物を粗末にすることを甚だしく嫌ふ人たつたので、其の習ひが酒の上にも現はれて、一滴の酒と雖もこぼすことを嫌つた。それを見て朋仲達は「山陽愛ν酒如ν惜ν酒如ν金」と言つたくらゐだつた。山陽が腰に附けて來た竹筒は可成り古い物で、飴色に透けていゝ艶が出てゐた。

「大變いゝ竹筒だが、何處で手に入れられたのです」と竹田が訪ねると、

「長崎の骨董屋で求めた」と山陽は答へた。

竹田は其の竹筒が欲しくなつた。

「どうです、此の竹筒を私に與れませんか。」

「いや、それは困る、此の竹筒は私の唯一の伴侶だから、是れに別れると大きに不自由をしなければならん」

竹田は一個の瓢を其處へ持つて來た。

「では、代りにこの瓢を差し上げるから、是非竹筒は私に下さい」

と言つた。其の瓢は竹田が多年秘藏してゐる物だつた。山陽は大分其の瓢が氣に入つて

「いや是れと交換なら結構、では、竹へ一寸一筆書いて見せう。」

さう言つて山陽は其の竹筒へ「竹昨環非月。又滿舊島雲。虛山能許我」と、自分で刀を執つて彫り付けた。

竹田の家の前を細い溪流が通つてゐた。其の溪流の傍らに大きな銀杏の樹があつた。夕陽が斜めに差すと、銀杏の葉が黄金のやうに彩られた。山陽はそれを見て、懐古的な眼付きをして

「銀杏は美しいなあ、――茶山先生の家にも銀杏があつた。門を出ると直ぐ眼に付く處に此の樹があつて、枝が大層繁つてゐた、毎年秋の霜に逢ふと葉の色が急に美しくなつた。で、茶山先生の家を、黄葉夕陽村舍と云ふのですよ」と言つた。

山陽は、十月二十九日の朝、日田郡へ向つて出發した。

四

文政十年の秋、竹田は藩侯の駕に從つて江戸へ行つた。江戸へ到着してからは、文晁を初め舊識の人々を訪問したり、宿に籠つてゐる間は著述に從事したりした。其の頃彼は「瓶花論」といふ物を書いてゐた。

文晁は、些かも元氣衰退の色はなく、依然として江戸畫壇の中心になつてゐた。竹田が寫山樓を訪問すると、文晁は喜んで賓客の禮を以て竹田をもてなした。そして、秘藏の金泥を割いて竹田に贈つた。貧乏な竹田は、未だ嘗て金泥を使つて繪を

聞いたことはないので、[illegible]つて聞いた。[illegible]

其の頃のことだつた。或る日のこと竹田は[illegible]入つて來いてゐた。其の時、みすぼらしい裏長屋の前を通りかゝると、一軒の家の内から何やら歎敷くやうな聲と、男女の言ひ爭ふやうな聲が漏れて來て彼の耳に這入つた。併し、単にそれだけのことだつたら竹田は素通りをしてしまふところだつたが、何氣なく聞いた其の話し聲の中に「大雅堂〳〵」と繰り返して言つてゐる言葉が聞へたので

「はてな――」と思つて竹田は足を停めた。

そして、窓の側へ歩み寄つて聞くともなしに内の話しを立ち聞きした

「全くお前の言ふ通り、わしは此の大雅堂の幅を手離すことは、自分の身を切り取られるよりも辛い氣がする、が、今はさう言つてゐる場合ではない、かうしてゐれば俺達は遠からず餓え死にでもしなければならないのだ、どんな名畫でも命には替へられないから、俺は手離す決心をしたのだ」

と男の聲で言つた。すると女の聲で

「だから、それ程大切な寶を賣り拂ふのはお止し遊ばせと妾が申すのです、さういふ物は、一度手離したら、二度と戻つてはまゐりません。併し、全く此の儘で居ては、貴郎が仰しやる通り[illegible]も[illegible]したやうに、[illegible]でも出して下さいまし、さう[illegible]、貴郎も[illegible]業をなさることが出來ませう。二人で餓え死にするのを待つてゐるよりは、其の方が善い仕方だと妾は考へます」

「お前の親切は有難く思ふが、そんな莫迦な事は出來ない、何處の國に自分の女房を賣つて繪の稽古をする奴があるものか、まあまあ後は何んとかなる。一時此の山水を賣り拂つて酒代や何かの借金拂ひをすることにしよう。心配しないで、それをこちへ寄越すがいゝ」

「否え、いけません、是れを賣つてしまつたら、貴郎は乾度後悔なさる時がまゐります」

「だが、それも仕方がないではないか、大雅堂の幅を賣る代りにお前の體を賣つてしまつたなら、俺は猶更後悔しなければならないのだ」

「貴郎はお氣が弱過ぎます、立派な畫工になる爲めには、女の一人や二人位どうなつたとて構はぬといふ、強い心をお持ちなされませ」

「それは無理だ、成る程俺に取つては、自分の命の次ぎに大切な物は幅だ。しかし、其の俺に取つては大切な幅だけれども、

それが誰れにも同じやうに大切な物だとは云へない、自分の一人の欲望の爲めに、罪も無いお前の身を犧牲にすることは俺には出來ないことだ」

「では、どうあつても此の山水をお賣りになるんですか」

「うん、差し當つて他に分別も工夫も付かぬから、惜しいけれども手離すよりほかに道はない」

「まあ——何といふ情無いことでございませう……」

さう言つて女は又もやさめ／＼と泣くのだつた。

竹田は、思はず引き入れられて聞いてゐた、彼は、直ぐ様自身の苦學した時の辛苦を思ひ返した。彼は、繪畫といふ物も、畢竟するに人間の生活の中の一つの遊技であると思つてゐる、其の遊技が世の中へ現はれて來る爲めに、一面にはかうした悲劇が行はれてゐるのだと思ふと、不思議なやうな氣もすれば、また悲壯な氣持もするのだつた。

彼はふと氣が付いて、向うの角の酒屋へ行つて、一升徳利へ酒を一杯買つて、自分でそれを提げて戻つて來た。

「御免下さい、お頼み申す」と、竹田は其の家の格子戸を明けて言つた。

女房は慌てゝ涙を拭いて顔を出した。

「入らつしやいまし、どなた様でございます？」

「いや、手前は通り掛りの者ですが、折入つて御主人に御意を得たくて上りましたのです」

「左様でございますか、では、穢くるしいところでございますが、何卒お通り下さいませ」

上へ通つて見ると、それは六疊ばかりの間で、壁は剝げ、疊は破れて、見る影もない住居である。主といふのはまだ二十五六位の若い男である。何様ひどい貧乏暮しだが、そこらに繪畫だの繪の具皿だのが散らばつてゐるので、一見畫工であることは分る。

「是れは初めて御意を得ます、手前事は、只今御内儀迄申し入れた通り、通り掛りの者でムる。姓名も名乘らずぶしつけの推參、失禮の段は幾重にも御用捨を願ひます」

「これは／＼、御念の入つた御挨拶で痛み入ります、して、御用向きは」

「偖、ほかでもありません、只今表で聞くともなしに御夫婦の内所咄しを立ち聞き致しました、實は手前は遠國の者なれど、矢張り御主人と同業の者で、吾身に引き比べて思はず貰ひ泣きを致しました。併し、よく人間は七轉び八起きと申すが、殊に足下などはお若い體、望みは是れからでムる、只今の艱難辛苦もやがて笑ひ話になる時節もありませう、決して物事を苦勞にな

されて、控えては甚だお叶いなされ。それではお酒の肴にお苦しみいけず、甚だ失禮だが、茲に手前持ち合せの金子が少々有りますから、是れで當座の凌ぎをお付けなさるが宜しい、又折よく持ち合せた酒もあります、これで憂を晴さうではありませんか、御内儀、無躾ながら燗の儀をお頼み申す」

と言つて竹田は金の包みと、一升徳利とを差し出した。

「何れのお方かは存じませんが、お恥かしい處をお目に入れて面目次第もございません、御芳志は忝う存じますが、併し申さば内輪の内所事、見ず知らずのお方に御迷惑を掛けては相済みませぬ、何卒此の儀お聞き流しに預り度う存じます」

「はてお堅い事を仰せられる、見ず知らずと申しても、足下と手前とは同じ道に遊ぶ者、相見互ひではありませんか、花の下に酌む盃は、通り掛りの者に献しても厭とは申さぬもの、何の御斟酌が要り申さう、一献やりながら御高説をも拜聽致し度い、さあ〳〵御内儀燗をお願ひ申す」

竹田の磊落な態度に引き込まれて、夫婦の者も其の上辭することが出來なくなつた。女房は酒の燗をして持ち出した。主人はなか〳〵飲める口だツた。酒が廻つて來ると、今までの濕つぽい噺は忘れてしまつて、主客は盛んに畫論を交換した。其の談話に依つて竹田は主の畫工が大雅堂に傾倒してゐて、既に相

味つけ致すに、一向面白しいことで、御礼申し、と言はれた。

「時に御主人、手前には見れば畫の意匠をこすが、何の流に志して間も無い頃、江戸へ參つて、一度は文晁の門に入りましたが、どういふものか私には文晁の畫風が心に染まなかつたので、随分繁々も參らず、間も無く無沙汰してしまひました。併し、各人の好みは別として、とにかく文晁は一代の巨匠であるには相違ない、世間では、探幽以來の名手だと申すさうだが、規模の大なる點より申さば、それもあながち過褒ではござるまい、足下も一應文晁の門に遊ばれては如何ですか、殊に江戸で畫名を成さうとする者に取つては、何彼と便宜な點もあらうといふもの、是れは私の老婆心からお勧め申すのだが」

「お心添へ有難う存じます、私はまだ田舎から出て間がなく、江戸の模様もよく存じませぬので、文晁先生の畫名はたゞから承知して居りながら、未だに門を叩かずに居りましたのです、御教示に依つて漸く針路を見出したやうに存じます、早速文晁先生をお訪ねして見ることに致しませう」

「それがようござる、——偖、突然參つて至らう長居を致した、手前はこれでお暇申す、御内儀御厄介を掛けました」

「あゝいや、一寸お待ち下され、貴所様は、雅園のお方と仰せられたが、何處の何と仰せられる御仁か、何卒お名前をお聞し

下さい、吾々夫婦の爲めには再生の恩人、此の儘お別れ申しては心殘りで御座います」

「はゝゝゝ、是れしきの事に左樣に仰しやられては痛み入ります、手前生國は九州の方ですが、名前を名乘る程の者ではござらん、御縁もあらば又何處かで、お目に掛る時節もありませう。くれ〴〵も御夫婦睦じく、やがて御高名の現はれる日をよそながらお待ち申す」

さう言つて竹田は振り切つて出てしまつた。

五

其の、無名の畫工は、高久靄厓だつた。

靄厓は下野國奈須郡杉戸村の人だつた。幼少の時から鹿沼で育つて、畫事を鈴木喜橘に受け、文畫を雪耕山人に就いて學んだ。雪耕山人は鹿沼の今宮神社の神官で、特に鮎を描くことの名人だつた。山人が沒して後靄厓は、大雅堂に私淑して、專心其の畫風を研究した。が、田舍に居ては畫名を揚げる見込みがないので、夫婦つれ立つて江戸へ出て來たのだつた。

それから間もなく靄厓は、師を求めて文晁に入門した。文晁は直ぐ此靄厓の非凡の畫才に着眼して、其の門人扱ひにはせず、客分として優遇して呉れた。其の頃文晁は人に逢ふとよく

「私は近頃掘り出し物をした」と言ひ〳〵した。

何を掘り出したのかと思つて尋ねて見ると、それは靄厓の事なのであつた。それ位文晁は靄厓を重んじてゐた。併し靄厓は、根本の畫風に於ては文晁と相容れなかつた。文晁が北宗に近い畫を描くのに對して、靄厓は何處迄も南方純正の文人畫の態度を執つて動かなかつた。文晁は包容力の偉大な畫家であつたから、自身の門人と雖も各々其の好む處に向はせ、決して門家の風を強ひるが如きことはしなかつた。

靄厓は一家を成して、盛名嘖々として遠近に聞ゆるやうになつた。彼は文晁門下の第一人者として推された。其の頃になつても、彼はその以前淺草の裏店に住まつて窮迫のどん底に沈んでゐた時、名前も名乘らずに這入つて來て自分の窮境を救つて呉れた見ず知らずの人の事をば一日も忘れるといふことはなかつた。何時か一度は其の人に廻り逢つて、あの時の禮を述べ度いものだと、常々夫婦で話し合つてゐた。

それから十五年の月日が經過した。靄厓はある年京都へ遊んだ。丁度其の時竹田も京都へ來てゐた。靄厓は或る人の紹介で竹田に逢つて見ようと思つて、其の假寓を訪問した。竹田は靄厓の顏を見るが否や

「やあ高久氏、矢つ張り足下であつたな」

と言つた。

「おゝ、貴下は――」

「やれ／＼御無事でお目出度い、あの節は大失禮した。其の後、高久靄厓といふ南宗畫家が、文晁門から出て賣り出したといふはなしを聞いて、多分足下だらうとは思つてゐた、が、縁があれば又かうして逢へるものでムるな」

靄厓は萬感交々至つて急には口が利けなかつた。

竹田と靄厓は、互ひに滯在中親しく相往來してゐた。靄厓は、畫を依頼する者があつても、容易に畫かなかつた。そして專ら古寺舊刹を廻つて、其の儲藏の古畫を借覧して臨摸するのを毎日の仕事にしてゐた。折柄備後の某富豪が靄厓の名を聞いて、多額の揮毫料を條件にして畫を依頼して來たが、彼は矢つ張り畫かなかつた。處が、其の富豪の家に、明人郭完の双幅があるといふはなしを聞くと、靄厓は其の借覧を許して貰へるなら、揮毫してそれを畫料の代りにしようと申し出た。其の人は喜んで幅を送つて來た。靄厓は直ちにそれを臨摸して、約束通り數幅の自畫を作つて其の人に酬ゐた。

さういふ風だから、京都に滯在中も靄厓は非常に貧乏してゐた。交際する人とても竹田のほかには餘り無かつた。京都の畫家達は、靄厓を畏れて、大概の者が敬遠主義を取つてゐた。

[illegible]

これから二人は夢中になつて[illegible]たつてお互ひに[illegible]を盡して來た。

「竹田先生は蕎麥にお好きですか」靄厓に聞いた

「蕎麥は大好物です」

「では私が蕎麥を注文して參りますから、少々お待ち下さい」

と言つて靄厓は出て行つたが、暫らくして戻つて來て

「實は先生、誠にお恥かしい次第ですが、只今蕎麥を注文しに參りました處が、前の借りが拂つてないので、持つて來て呉れると言ひません、さういふわけで、折角蕎麥を御馳走申さうと存じたが差し上げることが叶ひません、併し、蕎麥屋が申すには、蕎麥湯なれば只で呉れると云ひましたので、何も無いよりはと思つて蕎麥湯を貰つて參りました、せめて是れなと召し上つて一時を凌いでいたゞき度う存じます」

と靄厓は氣の毒さうに言つて、蕎麥湯を容れた器を客の前へ進めた。

「いや結構です、早速頂戴致さう」

二人は蕎麥湯を啜つて、又話し續けるのであつた。

靄厓は江戸へ歸ると、藥研堀に居を構へ、其の家を晩成山房と號して、大いに南宗を唱導した。彼は常に語つて

「大雅が南宗を草創し、雲華が是れを討論した、更に是れを潤色するに至つては、吾が不似と雖も敢て是れを他人に譲るものではない」

と言つた。彼の畫は、氣韻風格の蒼古たる點に於て古名匠に愧ぢなかつた。

併し、不幸にして、天は彼に長い命を藉さなかつた。天保十四年、靄厓は齡四十八で病を得て死んだ。其の頃でも靄厓は赤貧洗ふが如きものだつたので、彼の妻は、其の葬式すらも出すことが出來なかつた。それは、靄厓の莫逆の友で且つ第一の知己であつたところの大橋淡雅が、一人で引き受けて、立派に葬儀を營んだ。

竹田の淸貧も靄厓に似寄つたものだつた。靄厓が陋巷に埋もれたる逸士であれば、竹田は田園に隱れたる幽士であつた。金錢に淡白で貧苦の中に晏如たるものに至つては、全く同じ性格であつた。

竹田の畫名は、京攝の間では識者に推賞されてゐたけれども、彼の故郷の地方では、極く少數の人のほかには彼が其の樣に偉大な畫家であることを認めてゐる者はなかつた。

竹田は、文晁から贈られた金泥を使用して一度金碧山水を畫き度いと思つてゐたが、料紙を手に入れるすべがないので、久しく其の望みを果さずにゐた。すると、其の頃土地に或る富家があつて、竹田は屢々其の家に出入してゐた際だつたので、彼は自身の希望を話して「是非絹本を一つ畫かせて貰ひ度い」と言つて頼み込んだ。處が富豪のはふでは、竹田を大した畫かきとは思つてゐないので、絹本などは勿體ないと言つて、てんで耳を借して呉れない始末だつた。處が其の後のこと、或る日竹田は其の家に行つてゐて、午睡をした時、寢言にまで同じ事を言つたので、富豪も遂に心を動かして、彼の希望を容れて遣ることになつた。竹田は勇み立つて、金泥を用ゐて四季山水圖を製作した。

また斯んな事もあつた。

其の頃別府に煙草屋といふ富裕な商家があつた。竹田は其の家の主人と懇意で、度々行つて泊つたりしたこともあつた。主人は宗金與右と云つて、俳諧が好きで、別府では宗匠株だつた。或る時も竹田が其の家へ行くと、主人の與右が

「竹田さん、私は先達て長崎から極く上等の畫箋紙を取り寄せましたが、お目に掛けませうか」と言つた。

「是非拜見」

と竹田が答へると、主は秘藏の畫箋紙を持つて來て見せた。

それは幅一間丈三間の、舶來の頗る上質の大畫箋紙だつた。

竹田はそれを見ると、其の上等の紙へ書いて見度くなつた。

「成る程是れは珍らしい紙だ——時に、吳石さん、私に一つ此の紙へ書かして吳れませんか」

すると吳石は驚いたやうな顏をして

「それあ困りますよ。私も漸う手に入れた紙ですからね。實は、此の紙を用意して置いて、誰れか名高い先生が漫遊して來られた時書いて貰はふと思つてるんです」

「誰かに書かせるくらいなら、私に書かせて吳れたつて同じことでせう」

「はゝん、さうはいきませんや、貴下にお頼みする位なら、正直なはなしが、秋皐にでも書かせたはふが増しだからね」

と、主人は冗談半分だけれどもさう言つてゐて、どうしても竹田に書かせやうとは言はなかつた。其の頃別府に津田秋皐といふ畫家があつた。

で、竹田は、其の事は斷念して別府を發つたが、どうもあの大畫箋紙の事を思ひ出す度び毎に堪まらなかつた。あの一間に二間の大紙へ一抔の山水を畫いたらどんなに好い氣持だらうと考へた。彼は畫き度くて畫き度くて堪まらなかつた。で、馬關に滯在中のこと、吳石に手紙を出して、例の大畫箋紙のことを言つて遣つた。すると吳石も竹田の熱心に感じたと見えて、一回お出し[illegible]たならば揮毫を依頼致さう」

と云つて返事を寄越した。竹田は七年目で、それから念に其の大紙へ揮毫すべき山水の構圖を考へてゐた。日を經て彼は別府へ再遊した。處が、經師屋の主は、竹田に書かせることを承諾はしたものゝ、一度に全紙を使はせてしまふのが惜しくなつて、それを幾つかに截つて、其の一枚に書かせることにした。竹田は折角練りに練つた構圖を書くことが出來なくなつたので大いに失望したが、改めてそれへ梅溪山水の圖を畫いた。描き了つて彼は筆を投じて、

「全紙ならば奇拔な構圖があつたが、二尺內外の小幅では、どうしても平凡になつてしまふ」

と言つて嘆息した。

竹田の貧窮は常に甚だしかつた。或る時彼は急に大阪へ行かうと思つたが、旅費が無かつた。そこで彼は府內(大分町)へ出掛けて行つて、其の土地で八人衆と呼ばれてゐた某といふ豪家へ驅け込んで、事情を話し、山水花鳥を一枚二分づゝで買つて貰つて漸う旅費をこしらへた。其の後も竹田は急に金の要る事が出來ると、府內へ飛んで行つては一枚二分宛で買つて貰つた。其の時々描いた畫は、後世になると、二分竹田、又は驅け込

み竹田と稱へて、數千金の價を生じた。

六

文政三年卯月二十一日、竹田は藩侯の駕に扈從して江戸表を發して歸國の途についた。そして翌月二十二日に岡城に歸着した。竹田は、其の途中の見聞を誌して「陪鶴日誌」を書いた。

今四年の秋には、倅の太一を伴れて犬飼に遊び、更に翌年は杵築に遊んだ。其の時竹田は杵築の客舍から、海物を寫生し、詩を題して遙かに京都の賴山陽に寄せた。山陽は直ちに和韻して贈り返した。竹田は「黃築紀行」を書いた。其の年高橋草坪が來て入門した。

文政六年の春には、太一を伴れて京都へ上る目的で、先づ居の道へ行き、それから大阪へ行つた。すると偶然にも大阪で山陽に出逢つた。山陽は伊丹に遊んで歸る處だつた。兩者は互ひに久潤を敍して喜び合つた。山陽は詩を賦して曰つた。

浪華送遊龍造田君歸

一岸市樓繫二小船一。相逢道レ舊轉悵然。岡城分レ手如二前日一。倒指匆匆已六年。

竹田は數日大阪に滯在した後入洛した。

入洛した當座は小石元瑞の家に泊つてゐたが、間も無く愛宕山の雙林寺に寄寓することになつた。雙林寺の住職月峯和尚は、風流の人で、詩畫を善くし、文人墨客と交遊して、竹田とも豫てから相識の間だつたので欣んで自分の寺に迎へたのであつた。すると間も無く國元から門人の草坪と豐水の二人が後を慕つて上京して來た。竹田は、平常から太一を盲目的に愛してゐて、片時も傍らを離すといふことはなく、旅行に出る時も大概一緒に伴れ歩くといふ有樣だつたが、今度京都へ太一を伴れて來たについては、別に目的があるのだつた。それは太一に小石元瑞の薫陶を受けさせ度いと思つたからだつた。太一はもう十六歲になつてゐた。

竹田が、一番信賴してゐるのは小石元瑞だつた。元瑞の方でも竹田には心服してゐた。二人は眞の知己だつた。そこで二人は相談の上、所謂子を換へて敎へるといふので、太一を元瑞に敎育させ、元瑞の子の中道といふ者に竹田が學問を仕込むで遣ることになつた。中道をば竹田が手許に預かり、太一は毎日双林寺から堀川の小石の家へ通學させることになつた。

竹田は、折り折り山陽をも訪問して、時には其の家に泊り込むこともあつた。山陽は其の前年三本木に新居を構へて、名けて水西莊と稱してゐた。其處は、叡山を仰ぎ、鴨川に臨み、嵐光水色檻外に浮動して、心ゆくばかり閑雅な住居だつた。庭中

に一小書室を建て、是れを一山紫水明處と名づけて、[illegible]の内で悠々として著述に從事してゐた。九州路に於てまでは山陽の名前はまだ／＼小さかつたけれども、其の頃から彼の名は嶄然として天下に喧ふやうになつてゐた。

山陽は竹田が行くと非常に喜んで、他の客を謝絶して、二人きりで對座して、雜談をしたり、詩作をし合つたりして樂んだ。夜になると、祇園邊りの妓を二三人位よんで酒の興を助けさせたりした。

或る時、竹田は幾日も續けて水西莊に泊つて日を暮らしたことがあつた。すると一と朝のこと、山陽は早起きをして、書齋を掃除し、花を挿し、香を焚き、床に吳蘇坡の山水の幅を掛け、自分で鴨川の水を汲んで來てそれを古い甕に貯へ、それから硯を洗ひ、墨を摩り、紙筆を陳べ、其の他一切の道具を整頓した。彼はそれだけの事を全部自分でして、女子供などには手も付けさせなかつた。さうして、すつかり整つた處で、竹田を其の室へ招いて

「御覽下さい、今朝は此の通り用意が出來たから、そこで一つ私の爲めに畫いて頂き度いものです」と山陽は言つた。

「承知しました、畫きませう」

竹田は卽座に筆を執つて、白描の蘭竹、沒骨の牡丹、それか

[illegible]た、愛宕山から市中迄は隨分遠方だつた。[illegible]太一も、日々其の道を往復するので可成り疲れてしまつて、おつて來ても商賣どころではなかつた。「是れではいけない」と竹田は考へたが、小石の方でも其の事を心配して、近くへ越して來てはどうかと言つた。竹田は、愛宕山の風景が氣に入つてゐたので、其處を捨てゝ去るのは惜しかつたけれども、已を得ないので轉居することにした。すると、堀川の東の端れで小川の東川下るといふ處に、恰好の家が見付かつたので、悴と門人を伴れてそちらへ引き移つた。其の家は伊藤東涯の舊宅の直ぐ側だつた。そして、北隣りが物集長兵衞と云つて、京都では名高い酒家で、且つ有力な人だつた。其の人が一切世話をして與れた。長兵衞といふ人は古墨を愛して、方于魯だとか程君房だとか云ふやうな名墨を澤山蒐めて有つてゐた。其の家には書籍も澤山あつた。極く好人物で、小石とは兼々親しい仲だつた。竹田は大變便宜を得た。

七夕祭りの夜だつた。竹田が獨りで三條の橋の邊りを歩いてゐると、向ふから山陽がやつて來て、橋の上でぱつたり逢つた。

「どちらへ？」

「いや、ぶら〳〵歩いてゐるのです。貴下はどちらのお歸りで？」

「今晩は木米老人を訪問して、今迄話し込んで來たのです、どうもあの老人は何時逢つても談話が豐富で面白い」と山陽は言つた。

陶工木米は名は八十八、木屋といふ號だつた。因つて木米と稱したのであつた。鴨川の東、大和橋の北に住まつてゐた。彼は非常に多藝で、畫も善くすれば、茶道にも長けてゐた。專門の製陶の技に至つては古今無類の精妙だつた。宋明の諸窯を摸倣した物などに至つては眞物との間に少しも相違が無かつた。日本の靑磁は、彼が初めて其の法を開いたのだつた。

竹田も木米とは頗る親交があつた。竹田が初めて木米の家を訪ねたのは文化の頃だつた。其の家は非常に狹くて、鴨川の上に突き出して建てゝあつた。流水が潺湲として家の下に響いてゐた。其の時木米は自分で川の水を汲んで、茶をいれてくれた。其の時竹田が一絕を作つて主に示すと、木米は其の詩を見て「此の詩は尋常兒の能く作る處でない」と言つて大いに竹田の詩才を賞して、それから親しく交るやうになつた。

山陽も頗る木米には傾倒してゐた。彼はかう言つた。

「我天下の書讀まざるなく、天下の事記せざるなし、而して翁よく吾が未ゞ讀の書を讀み、又吾が未ゞ記の事を記す」

竹田は、自分の畫中の知己と稱する者が天下に二人ある、即ち木米と山陽とが是れであるといつた

山陽は、竹田の顏を見たいで、此の儘別れるのも曲がない。

「牽牛織女光猶闇、同踞胡床此夜情」と言つて、河原の涼み臺に上つて夜が更ける迄語り合つた

七

中秋十六夜の晩だつた。其の時も竹田はたつ一人で鴨川べりを歩いてゐた。すると、或る旅亭の二階から

「竹田はん、竹田はん」

と呼ぶ者があるので、見上げると、藝妓や仲居などが、欄干に凭れて小手招ぎをしてゐる。併し、知つた顏ではないので、自分を呼ぶのではなからうと思つて、さつさと歩き出すと、後ろから裾をからげて庭下駄の儘、藝妓の一人が追ひ掛けて來て

「竹田はん、あんなに皆が呼んでゐますがな」と言ふ。

「わしは竹田ぢやが、こんな處に知り合ひはない、人違ひだらう」

「いえ〳〵、人違ひやおへん。さあ〳〵、お待ちやよつと、早

うないこかナ一
「これ／＼、何をする」
と言つても構はず、藝妓は竹田の手首を握つて引つ張り込んでしまつた。仕方がないから隨いて行くと、川に臨んだ眺めの好い座敷で、はや杯盤狼籍とした中に、數多の藝子舞子が忽ちぐるりと彼を取り卷いた、下へも置かず歡待する。而も一座は女ばかりで、一人の客の姿も見えない。竹田は狐につまゝれたやうな顔をして
「一躰是れはどうしたといふのだ、誰れが俺を呼んだのちや」
「そないな事どうでも宜しいやおへんか、さあ一つおあがりやす」
「いや宜しくない、一面識も無い座敷で酒の馳走になる所由はない、それとも誰れか知つてゐる人でも來てゐるのか」
「ほゝゝゝ、野暮な事お言ひやすな、わて達みんなよう知つてまんが」
「いや知らぬ、逢つたこともない者が知つてゐる道理はない」
すると、老妓の一人が、聲を張り上げて
「天下誰人不レ識レ君——」と、朗々と吟じ出した。
「何と——」竹田は呆氣に取られてしまつた。
「天下誰人不レ識レ君——

大きな聲から大聲で[illegible]て出て來たのだ。山陽、春琴、月峯の三人であつた。一同大きにして、これから爰で飲み初めた
「どうおや、今夜は一つ芝居をやらうではないか」と山陽が云ひ出した。
「面白い、やらう」と春琴が直ぐに賛成した
月峯と竹田も仕方ないので役者になることになつた。藝妓共が連中見物といふことになつて、本式の衣裝小道具を借りて來て、まさに幕を明けようとした處へ、折あしく市中監察の役人がやつて來て、掟に背くとあつて差し止められた上、大いに小言を頂戴した。一同は興が醒めて、其の藝妓達を連れて三本木の清輝樓へ行つて、飲み直すことになつた。今度は藝妓に三味線も彈かせず、風流な遊びをした。
其の時藝妓達が、繪を描いて與れと言つて、扇面などを差し出した。竹田は、先刻山陽が鬘を付けて顔を拵らへた態が、狸のやうで可笑しかつたのを思ひ出して、一人の藝妓の扇面へ狸を描いた。すると、山陽は自分の事とは氣が付かず「此の狸は上出來だ」と云つて、それへ贊を書いた。一同は後ろを向いてクス／＼と笑つた。
山陽と竹田との交遊は益々濃密になつて行つた。山陽が竹田

の詩集と人格とに傾倒したやうに、竹田もまた山陽の博學と識見の卓抜なるに摺服して、彼を以て無二の知己としてゐた。竹田は日記に題する語の中に「天下除二頼子成一之外不レ容二他人者二三而已一」と云ひ、又、

「予性迂闊、僻二愛綺事一、若辛從事殆五十歳、道裡所レ得之消息、知者唯山陽一人、故平生稱爲二畫中知己第一一」

と云つたのも、決して一時の諛辭ではなかつた。竹田は決して山陽に屈しはしなかつた。

竹田は、或る時松本醉古に依賴されて、畫帖に揮毫して「赤夜一葉帖」とそれに題した。そして醉古に渡さうと思つてゐる時に山陽が來たので、出して見せると、山陽は一見して

「是れは傑作だ、是れは僕が貰はふ」と言つた。

「それは困る、醉古に賴まれて描いたのだから」

「醉古には何か描いて遣れば宜いさ。とにかく是れは僕が貰つた」

「ほんとに困る、醉古が怒るよ」

「怒つたつて構はんさ」

山陽はそれを持つて歸つてしまつて、自分で其の後へ跋を書いて「余三入二竹田一及二赤夜一葉帖一」と記して、喜んでゐた。醉古は果して大いに怒つた。

「山陽といふ男は怪しからん奴だ、私が行つて談判して、取り戻して來る」

と言ふと、竹田は笑つて

「いや、貴下にはもつと面白い物を描いて差し上げるから、打つ捨つて置きなさい」

と言つて留めて、更に「赤夜一葉帖」と題して、前よりも數倍意匠を凝らした帖を作つた。

丁度花ときで、山陽は二三の人と知恩院へ行つて花見をしてゐた。酒宴の半ばへ竹田が遣つて來た。

「宜い處へ來て呉れた」と山陽は喜んだ。

「賴君、又こんな物が出來たから、お目に掛けやうと思つて持つて來た」

と言つて、竹田は懐から畫帖を出して前に置いた。

「今度のは誰れに遣るんだね」

「松本醉古に遣る爲めに描いたのさ。此の前足下に横取りされたので、その代りに描いたのだがね」

山陽は畫帖を開いて見て

「うん、是れは名作だ」

と云つた。そして默つて見てゐるうちに山陽は「こいつも一つ横取りして遣らう」と考へた。が併し、今度は竹田も油斷が

無かつた。其の畫帖が山陽の目に觸れた時に、竹田は素早く書軸を取り上げて、後ろへ入れてしまつた。

「はゝゝゝ」と竹田は笑つた。

山陽も、仕方がないので苦笑ひをした。

竹田が餘り永く京都に居るので、郷里の親友伊藤善一郎といふ人が書面を寄越して「定めて都で美しい花でも手に入れたのだらう」と云つて冷やかして來た。それに對して竹田は、自身の品行方正であることを種々辯解して

「有二頼山陽附レ予之詩一、今揭二結二句一爲レ證曰、書册一嚢茶一瓢、東山獨不レ醉二紅裙一。一嚢貫朝夕往來、紅裙翠袖は不レ足レ動レ情候へども、扱々書物はほしくなり困り申候」

と御丁寧に頼山陽まで引き合ひに出して、身の潔白を證明した。が、それは最後迄は續かなかつた。山陽等と交遊して花街狹斜の巷に出入する機會が重なる毎に、此の田園の老畫師でも、都の婦女の濃粧盛飾に何時となく心を動かすやうになつてしまつた。

竹田は淨瑠璃が好きだつた。醉ふて陶然となると、自慢の喉を鳴らして淨瑠璃を唱つた。三味線も心得てゐた。其の頃祇園に飛珊と呼ぶ名妓があつた。一日竹田は、山陽社中の誰彼と鴨涯の一樓に會した時、初めて飛珊を聘んでその歌を聽いた。飛珊は、深川竹に會つたことはなかつたけれども、あの風流を解しす氣流る、おもきものがあつた。田舍者の竹田もが、飛珊に對しては少なからず心を動かした。其の席で竹田は、本調子の「おきこたつ」といふ歌曲を作つて飛珊に與へた。それが緣となり、竹田と飛珊との間には情縁が成り立つたのであつた。

しかし、それから間も無く竹田は歸國しなくてはならなくなつた。歸國の前に竹田はこんな手紙を飛珊に贈つたのだつた。

十三日朝かきそへ

十六日立にきわめ申候、おきこたつは本調子にて、もはや手がつき候哉。

きのふはわけてせわしきお日がらのよしに、わざとの御文、ゆふべは燈燈の影にて、くりかへし／＼よみあかし候。おさましの用介人を、かくあはれと見給ふは、うれしきやうにて、なか／＼かなしくおぼえて、すゞろになみだこぼれ候。氣のあうたどうし、ひざとひざとすりあはせたらふは、をいこだにたくひなきことにこそ侍ふを、かゝる打とけたる御ことばをうけ給はらんとは、夢にだも思はずかし。このたびきうに國に參り候も、久々のぼり申し候心ぐみゆへ、せひことし

のうちにのぼりて、花を見月をながめ、歌よみ酒のみ御あそび申さんと、今よりたのしみ申候。此ごろの文句のはしに申上候やうに、此世はあだのかりまくら、思ふまゝにならぬは常のならひに候へば、たゞ御心やすらかに御わたり候へかし、御やまひのかさなり候はんかと、それのみ御あんじ申上候、古歌にも、

命あらばあふよもあらん世の中に、などしぬばかり思ふこゝろぞ

とにかく御身を御大事になされ候やうに存入候。又々なによりの品ども御をくりくだされ候、色紙もいろ〱とうつろふいろにそめなされ、御うつりがさへ、いとゞ身にしみておぼえ候、御くわしも、須磨明石なぞいへるおもしろき浦々にてたべ可申候。御歌は、おせわしき内にも、かならずすて給はぬやうにと存候。よき便りには御見せ被下候へかし。申上度事は山々なれども、

思ふことこゝろの内にのこしおきて
又逢ふまでのなぐさめにせむ

なにもめでたく、かしこ。

むつまじき月十一日

なにぞあげ度と存じ候へども、しかるべき品もなし、朝な夕なに手なれ候て、あさましきまでによごれ候へども、御ねざめの枕の上のとぎにと、金葉集一部、雅齊梅溪へ上候。

夢に見る人はあやなし春の夜の
おぼろ月よりなほおぼろにて

今一度すいがらの火でおかほも見たし、御しらべの聲もきゝたいナア、なんとせうしたつゞみ。今までかけてあるさみせんのいとを、ちよとはづして御もらひ申上度、あたらしきはどこにもあり、手なれたがほしゝ。

八

竹田は初め畫を岡藩の渡邊蓬島と淵野眞齋に就いて學んだ。眞齋は名は世龍、字は玉鱗、桂園と號した。江戸で渡邊玄對に學び、岡藩の畫員となつた。前後の南宗畫は此の人から開まつたのだつた。竹田は、此の二人に就いて六法を學び、其の後は、江戸へ出ては文晁の門に遊び、大阪の浦上玉堂、岡田米山人、京都の竹川洪園、村瀬栲亭、紀州の野呂介石……と當時名のある文人畫の大家は餘す處なく歴訪して指教を受けた。此の外に彼は土佐、狩野の風に至るまで手に任せて模寫した。元明諸家の畫法を研究模寫したことは勿論だつた。さうして竹田

は一番最後に、元の下に在る一人十方をも見ることになつて、其處に初めて自己の安住の境地を發見するに至つたのだつた。

竹田も、他の一般の文人畫家がさうであるやうに、山水を主であつたが、時には人物花鳥も描いた。彼が三十四歳の時の作である「明皇觀女樂圖」は、竹田の特徴を發揮したものではなかつたけれども、濃彩精緻にして絶て浮游の氣がなく、世に稀なる名畫として後世に殘つた。

天保三年、竹田は藩侯の命に依つて、「灤陽歸馬」「桃林放牛」の二圖を畫いて獻じた。それは彼の畢世の傑作であつた。

竹田の畫は、南畫の神髓であるところの、氣韻生動が生命であつた。筆墨は精神の映ずる處、精神にして見るべくんば、筆墨は筌蹄のみといふのが、所謂文人畫の主張であつた。胸中萬卷の書あり、探邃の意おのづから現はれて毫楮の上に躍るやうな畫を、彼等は理想としたのだつた。竹田の畫の妙所も其處にあつた。彼は非常な讀書家で、和漢の有らゆる書を涉獵して讀破することを終生やめなかつた。

竹田の畫は、決して巧妙なものではなかつた。寧ろ彼は自分から拙を以て任じてゐたくらゐだつた。併しそれは、後世の南畫家か、徒らに墨を飛ばして拙を誇るが如きものではなかつた。拙なるが故に、竹田は容易に畫かなかつた。彼は畫を作ることには心すべきことを……いさゝか合作ともいふ……でも、それ……うになれば、一枚の畫もゐて然る後に畫くのだつた。……興が動かなければ畫は三年も、筆が十分に熟さなければ筆を下さなかつた。だから、三年も五年も十年もかかつても、一つの畫が出來ずになるやうなことがあつたり、或ひは、一つの遠山を描き入れるだけにも、意匠を求めて容易に筆を下さないやうなことが屢々あつた。所謂一夕に嘉陵江を描かずして、五日に一水を畫くの類だつた。

肥後の人緒方竹外は、竹田の門人だつた。竹外が初めて竹田の許へ教を乞ひに來た時

「試しに先づ畫いて御覽なさい、私が觀て居るから」と竹田が言つた。

「承知しました」

と竹外は答へて、紙に向つたが、彼は自身の筆力を見せようとするので、筆を把るが否や、其の疾きこと電の如く、瞬間にして描き上げた。すると竹田は

「足下は吾徒でない、形容畫史である、紙は筆を受け、筆は墨に和し、三者が相合して初めて畫が成り立つのである」と言つた。

そこで竹外は些か悟る所があつて、もう一枚畫いて見た。今

度は行節が稍稔りとなつた。

「宜ろしい、其の分なら見込みがある」

と言つて、竹田は初めて入門を許した。

或る人が竹田に畫を依賴したところが、久しい間出來なかつた。で度びく催促をすると、漸く出來上つたと言つて贈り届けて來た畫を見ると、只蕈が幾つか描いてあるばかりだつた。其の人は不平で

「是れ位な物を描いて呉れるなら、何もあんなに永く待たせるにも及ぶまいに」と言つた。

竹田はそれを聞くと、其の人を自分の家へ招んで

「私はあの畫を描く爲めに、いろくと苦心してゐるのです、どうか是れを御覽下さい」

と言つて、水に浸した椎茸を、大きな籠に溢れるほど入れたのを持ち出して來て見せたので、其の人も初めて驚嘆して、厚く禮を述べて歸つた。

さういふ風で、竹田の畫に對する熱心には時々人が驚かされた。小石元瑞の宅には、竹田は上京する每に泊るのが例だつたが、小石の宅に居ても、晝間は畫作をしたり、人に會つたりして、夜は二三の人々と詩酒歡娛して、醉後に主と床を並べて眠りにつくのだつた。すると夜半に呻くやうな聲がするので、小石は夢を破られて飛び起きて聞いてゐると、それは竹田が、半醒半睡で、晝間畫いたところの題詩を口に出してゐるのだつた。それが每度のことだので、小石は冗談に

「どうも君と一緒に寢ると、寢言の詩が喧ましいので閉口だ」

と言つた。

天保三年に藩主中川侯から、華陽觀馬、桃林放牛の二圖を命ぜられた時には、竹田は竹田町から一二里隔つた黒良の原といふ處の牧場へ每日のやうに通つて行つて、牛馬放遊の狀を寫生して來て、やがてそれを絹に描いて見たが、まだ意にみたないところがあつた。で、又もや牧場へ通つて、一層研究をして、十分悟る處があつてから、再び筆を執つて描き上げたのだつた。

竹田の畫は、纖細縹渺として、餘りに高尙に過ぎるので、俗畫を喜ぶ世人の鑑賞には適しなかつた。或る年別府に滯在してゐた時、旅用に宛てようと思つて、半切の紙本に、花卉、竹石などを十枚ばかり畫いて、人を賴んでそれを一枚壹朱づゝに賣らせようとした。處が、賴まれた人は其の絹を持ち歩いて終ひには豐前地方迄も行つたけれども、漸う二三枚賣つたばかりで殘りは持つて歸つて來てしまつた。そして言ふことには、

「何分先生の繪は汚くて、そんな物は繪ではない化物だと云つて買手がありません。併しお氣の毒ですから、殘りの分は私が

畫かきます」
　と言つて懐中から扇を出すと、竹田にそれを揮つて
「否々、これには及びません、扇りは貴下に上げるから保存して置きなさい、百年も經てば價が出るかも知れないから」
「先生、私は百年はとても生きられません」
　と言つて、大笑ひになつた。
　日川で書畫會があつた時、竹田も出席したが、竹田がかすれ筆で徐々として描いて居るのを見て、
「あの畫工は墨を澤山に使はず、少しづゝ使つて、乾いた筆でそつとなすつてゐるところを見ると、餘程の吝嗇家に相違ない」
　と言つて、依頼する人が殆んど無かつた。
　竹田は或る時自畫に題して「我畫在二自娛一、不レ在レ使二人娛一、運レ毫無二矩度一、行レ墨只模糊、秋容知二水冷一、晩影覺二雲孤一、寫終看且笑、可レ見拙而迂」と曰つた。彼の畫の眞意はまさしく其處にあるのだつた。倪雲林、一日燈下に竹樹を作り、傲然自得した。翌曉に起きて昨夜作る處の畫を展見すれば、全く竹に似てゐない。雲林笑ふて曰く、全不レ似處、不二容易到一耳と。それは同じく竹田の心境でもあつた。
　古來の南畫家を通じて、竹田のやうに、詩畫書三つともに能

くしたものは其に於てあつた。
　竹田の畫手宗は全く其畫一味の意見であつたか、其の詩は尚の畫であり、畫は直ちに詩であつた。彼は自ら其の中人經らに於て斯う言つた。
　余詩畫外、無二復嗜好一、以二詩畫一寫レ興、畫作レ詩、二者相須以寫二胸臆一自娛一、自レ幼至二今日一、日有紛紜、仍不レ知止、溺愛之於レ人、亦深矣哉。
　彼の詩は、其の畫と同じやうな軌道を通つて來た。彼の少壯時代の畫に有らゆる流派の影響が現はれてゐたやうに、詩も小年頃迄は、樂天や袁王や東坡や小杜や、それらの臭味が隨所に現はれて、覇氣横溢するものがあつた。が、文政以後、性情高逸、命意清濟の詩を得て、初めて詩畫相調和して、神韻飛動の幽趣を現はすやうになつた。
　竹田は、嘗て門人草坪に落款の法を訓へて謂つた。
「元以前は落款といふ物に重きを置かなかつたが、倪雲林、文衡山、沈石田、陳白楊等の時代から、それが畫圖のうちの重要なものになつて來た。彼等の字は餘りに適勁である爲めに、時には畫位を侵すこともあるが、それが反つて奇趣を添へてゐる、一幅の中には必ず天然に落款を容るゝべき妙所があるのだ、若し其の位置を失へば、則ち全局を傷けることになつてしまふのであるに

草坪は竹田門下で一頭地を抜いた秀才だつた。が、或る時期山陽が草坪に向つて、

「足下の筆は已に十分だけれども、但し書卷の氣に乏しいばかりである」と言つた。

草坪は大いに悟る處があつて、其の後は毎日の日課に、作詩十首、讀書若干、習字一千字、と極めて、必ずそれを了へないうちは寢ないことにして勉強した。

竹田は、青年時代には非常に字が拙だつた。彼は初めは明清諸家を學び、中頃は東坡に私淑し、後に長崎に遊んで清人江芸閣等と交るに及んで書道益々進み、細勁老蒼自ら一家を成すに至つたのであつた。竹田は常に人に語つて、

「私の手跡は元來非常拙劣である。只多年法帖に依つて、聊か書意を得たに過ぎない」と言つた。

山陽は嘗て竹田が字を書く處を見て、驚いて、「運腕の法が其の妙に達してゐる、吾輩の遠く及ぶ處でない」と言つて、其の後竹田が字を作る毎に、山陽は容を改めて見物した。

竹田は、茶道に於ても、高遊外、上田秋成の後を受けて斯道の大家と稱せられた。初め千家の門に入り、紹鷗、利休の跡を究め、後に茶經茶疏の說を取つて、泡茶新書を著はし、製茶、澱茶、擇水、辨器、湯候、沖泡、飲啜、湯瀹、禪趣等の諸法を說いて、細かに茶訣を開示した。本邦の煎茶式は、竹田に依つて啓發せられたものが多かつた。其の他茶に關して「葉うらの記」「竹田莊茶說」等の著述をした。

或る人が竹田の所持した茶入れを手に入れた。袋は粗末な白木綿で作つてあつて、其の側に竹田の自讃で

一文の錢にもならぬこの茶入れわが身のほどにくらべてぞ見る

一笑々々、この袋の木綿はわが姉の手作なり

と、認めてあつた。

九

文政九年の春、竹田は又もや京都に遊び、其の年の秋、尾の道馬關を經て長崎に行き、冬に入つてから家に歸つた。翌十年の春は、熊本を經て、長崎に再遊した。

長崎では、多くの文人墨客と交つた。或ひは蘭船唐船を見物して見聞を廣めた。彼が最も利益を得たことは、此の土地で清人江芸閣等と交つたことだつた。

竹田の長崎滯在が餘り永引くので、彼の妻は、定めて大分金に困つてゐるだらうと思つて、若干の金を工面して送り屆けて

述べた。すると其頃は至まに[illegible]なつてあつた。

一、當冬は金子調遣はし恐く存候、老りふし源文と申す者を當所當歩にて賣りにまゐり居候ゆへ、直ちに遣はされし金子へ當歩添へ調へ、元日はそれにて楽み申候、その上古きゐり色の花生けを貳歩貳朱にて調へ、それに梅の花をいけて見申候、御禮は別に詩を作り申候、則したゝめ遣し候間、啓太郎君に讀みてもらひ可申候。

行香子

暦尾年殘、燭跌宵闌、家人有ㇾ信自二郷關一、寄二金零砕一、思二我飢寒一、出、井臼餘、機杼裡、剪封間。

除夕

自咲癡呆、依然故我、任二塵途一步步蹣跚、不ㇾ上二酒閣一、不ㇾ買二歌鬟一、償、周文畫、筆頭水、墨餘山。

竹田は一日、劍雲泉の生れた村を訪ねて見た。其の村へ行つて、村人に尋ねたところが、誰れも知つてゐる者はなかつた。漸う其の屋敷の趾を尋ね當てゝ、あたりに居た農夫に對つて此の屋敷の事を訊いて見ると、矢張り知らないと言つた。竹田は撫然として、低徊して去ることが出來なかつた。

翌年の冬竹田は、長崎を去つて肥州に向つた。途中天草洋を望んで、賴山陽を憶つて一詩を賦した。

天草洋[illegible]下曲、[illegible]
[illegible]
時十月巖將ㇾ氏、[illegible]
村遠少二人住一、[illegible]才子付遣ㇾ此、手數二[illegible]一買ㇾ舟去。

肥後から薩摩に入り、鹿兒島に足を留めて、翌年の森家に居つた。

文政十二年四月、竹田は高橋草坪を從へて東遊して、大阪に秋の終り迄滯在して、年の暮れが近づいてから京都へ行つた。數年振りで山陽とも逢つた。此の前來た時には、山陽は廣島へ行つてゐて、逢ふことが出來なかつたのだつた。此の頃山陽は日本政記を起稿しつゝあつた。近來、彼は宿痾の肺患の爲めに餘程健康が衰へてゐるやうであつた。併し、元氣だけは毫も衰へなかつた。

其の年は、十二月改元されて、天保元年となつた。除夜には、竹田は山陽を訪ふて、二人して靜かに歲を守つた。

除夕君彝來同守ㇾ歲　山陽

當二我相思夕一、知二君來宿心一、孤燈歲共守、兩鬢霜同侵、鄉土枋榆遠、京城鐘漏深、較存二慈母一在、關意信二浮沈一。

春、竹田は歸國の途についた。山陽は竹田を送つて伏見に到り、共に大阪迄行つた。

送君將赴浪華　山陽

一支藤水隱谷ゝ刀、野茶香中抒短蒿、昨共石ゝ花細那處、半山斜照塔稍高。

草坪も師に從つて國へ歸つて、竹田莊に寄寓してゐた五月には、鐵翁と逸雲とが、相携へて竹田莊を訪れて來た。

清客江稼圃が長崎に渡來してから、我が邦の南宗畫に一生面を開いた。其の衣鉢を繼ぐ者に、僧鐵翁、木下逸雲、菅井梅關等があつた。其の中鐵翁が最も勝れ、山水花卉に長じ、殊に四君子に至つては、筆力の勁健、氣韻の超逸、海内其の比を見なかつた。鐵翁名は祖門、長崎春德寺に住してゐた。春德寺は臨濟宗の名刹で、幕府の御朱印地であつた。鐵翁は其の住持で、切支丹の取締役を兼てゐた。彼はもと長崎近村の桶屋の子であつたのを、前住が檀家の中から選び取つて我が子として、後を嗣がしたのだつた。鐵翁は幼い時から畫が好きで、初め石崎融思に學び、後ち稼圃に問ふたのである。江稼圃が日本へ來たのは、進士の試驗に落第したので、志を官途に絕つて、畫酒に遊蕩を恣したのだつた。其の時、唐通詞潁樹村といふ人が、稼圃の畫に巧みなことを知つて、鐵翁と逸雲を紹介して、彼について學ばしめたのであつた。鐵翁は其の時二十八歲だつたが、初めのうちは稼圃の說く所を少しも解することが能きなかつた。で、稼圃のはふで先きに倦きてしまつて「お前は宗門の住である。丹青の爲めに其の本分をおろそかにするのは惡い事である」と言つて、暗に諷して畫を廢めさせようとしたが、鐵翁は頑として肯かず、益々勉強して終に稼圃の蘊奧を得るに至つたのであつた。

鐵翁は非常に無邪氣な人だつた。其の頃長崎に八百屋總右衛門といふ者があつて、畫を好んで鐵翁とは至つて懇意だつた。總右衛門は、鐵翁が大變蕎麥が好きなことを知つてゐるので、或る日午近い時刻に蕎麥を持つて鐵翁を訪ねて、密かにそれを隣室に置いて暫らく雜談をしてゐた。蕎麥の香氣が座に入つて來た。

「蕎麥の香がする、はてな」と鐵翁は鼻をひこつかせて言つた。

「私が持つて參つたのです、和尚、召し上りますか」

「食べよう、丁度午時で、腹もへつて來た」

ここで總右は隣室から蕎麥を取り出して鐵翁に供した。鐵翁は大いに喜んで食べ終つて

「どうも有難かつた、一つお禮に畫を描いて進ぜう」と言つた。

總右は心中非常に喜んだが、何にも言はず、

「なにそれには及びません、此の方を描いて頂きませう」
「否、興行のよい時でないと、畫がうまく出來ないからな」
と言つて、鐵翁は興に乘じて幾枚も描いて與へた。其の後も逸雲は度び〳〵畫賛を持つて行つて、鐵翁の畫を手に入れたのだつた。

竹田が長崎へ行つて、初めて鐵翁を訪問すると、
「これは暫らく、いつもお變りなうて結構ぢや」と鐵翁は言つた。
「はて、何處でお目に掛りましたかな」
鐵翁は起つて輕く竹田の肩を叩き乍ら、
「先生、最早お忘れか。前世には仲善しだつたではムらぬか」
と言つた。
鐵翁と逸雲は數日竹田莊に滯在した。
木下逸雲も畸人だつた。彼は曾て支那の商人に頼んで、西湖の蓮根を手に入れた。かねての望みであつたので、彼はそれを鉢に植えて、時々肥料を與へ、非常に大切にして育てた。三年目で其の蓮が花を開いた。逸雲は喜ぶこと限りなく、一日門人知己を招いて披露の宴を催した。酒酣の時、逸雲は庭に下り、鍬を持つて來て、地を掘つて數尺の穴を作つた。人々はそれを見て怪んだ。すると逸雲は、荷花を鉢のまゝ共の穴に投げ込んだ。皆が呆れてしまつてゐる。暫くしてから言ふには、
「是れで私の望みは足りたのです。今日の此の有樣は、只々に近いと云つて嗤ふ人もあるでせうが、私は、今からでも一小亭を建てゝ、其の内で起臥したならば、此の身は荷花の精になると同じで、愉快極まりなからうと思ふのです」
逸雲は其の言葉通り其處へ畫室を建てた。そして、其の後の畫の落欵には多く「何年何月荷花深き處に寫す」云々と記したのだつた。
逸雲は、慶應元年江戸に上り、翌年五月歸國の爲めに、横濱から亞米利加の帆船黒龍丸に搭乘した。其の時は船中に、長崎奉行服部左衛門佐の一行もあつた。船客は全部で五十人ばかりあつた。處が、共の船は、横濱を離れた後杳として消息が無かつた。途中海上で颶風に逢つて船が覆つてしまつたのであるらしかつた。逸雲の生死も共の儘判明らなくなつてしまたのだつた。
運といふものは仕方がなかつた。かの八百屋總右衛門も共の時逸雲に從つて江戸へ上つて同じ船で歸國する筈だつたが、彼は共の時吉原の青樓に留連をしてゐて、たうたう船に乘りそくねてしまつたお蔭で、危く命を取り留めたのだつた。

十

天保三年の秋、竹田は中津を經て、馬關に游んだ。中津、馬關の地には文墨の士が多かつたので、竹田は日々それらの人々と會遊して日を過ごした。馬關では、廣江秋水の宅に滯在した。秋水は山陽の門人であつた。

九月二十三日であつた。中津から竹田に隨遊して來た津小石が明日は歸ることになつたので、其の晩は知友が集まつて小石の爲めに留別の宴を催した。

其處へ、京都から飛脚が到來した。秋水が出て行つたが、間もなく眞つ蒼な顏をして戻つて來て、だしぬけに、

「山陽先生がおかくれになりました」と言つた。

一座は騷然として、暫らく聲を發するものもなかつた。

留別の宴は、譬へん方なくしめやかなものになつた。竹田は、小石の爲めに詩を作つた。

留二別津小石一

故人有レ訃自二京師一、恰是君來別レ我時、雖酒盈レ觴猶不レ得レ醉、强將レ歡レ而作レ臨レ敍

しかし、山陽の死は突然ではなかつた。彼は肺患が原つて、二度までも喀血してゐた。其の餘命が幾許もあるまい事は誰れにも豫知されてゐたのだつた。山陽は日々政記の稿を急いでゐた。或る日、山陽は小石元瑞に來診を求めた上で

「僕の政記の稿も餘程進んだが、命のあるうちに是非其脫稿させ度いと思つてゐる。が、僕の命數は今日以後幾日間保たれるだらうか」

と言つて訊いた。

「左樣、今日以後三十日の壽命だらう」と、元瑞は答へた。それは八月十五日のことだつた。

「さうですか、それじやいそいでやらねばならぬ」

さう言つて山陽は日夜筆を走らせた。九月十五日になつた。政記の稿もほゞ脫稿に近付かうとした。そこへ元瑞が來た。

「君はあゝ言つたが、今日で丁度一ケ月目だが、まだ死なゝいではないか」と山陽は笑つて言つた。元瑞は首を振つて答へた。

「いや、もう四五日、とても十日とは保たないから、仕事は十分にやつて置きたまへ」

山陽は、日夜詰め切つてゐる門人達に、二名宛交替で筆記をさせて、稿を續けた。論文八十餘、全篇十六卷、殆んど完成した。

九月二十三日、未刻から山陽は危篤に陥つた。それでも彼は

[illegible]

――すー[illegible]からなし」

と言つて、筆をさしおき、眼鏡を掛けた儘、枕に頭を載せたが、其のまゝ靜かに、永遠の眠に入つてしまつたのだつた。

山陽の死は、今更のやうに竹田の胸に悲痛な感を起させた。

山陽が歿して半歳經つてから竹田は上京した。京都の土を踏むと、ひとしほ故人を懐ふ心が強くなつた。

或る年の秋、竹田は故人と共に山紫水明處に座して、夕陽影裏で杯を傾けつゝ詩作に耽つたことがあつた。其の時の山陽の詩の「疎柳斷橋山影長、漲痕猶帶藕花香、家兒戀ゝ水歸來晩、一半秋川已ゝ陽」といふのを懐ひ出して、竹田は柳陰晩歸の圖を作つて、それに題して曰つた。

癸巳春晩寫ゝ意、有ゝ所ゝ感、因書ニ小詩於旁ー。

沙間氷盡水微茫、坡上柳枝芽欲ゝ黄、憶與ニ陰朋ー倚ゝ窓坐、同喚ニ家兒ー看ニ夕陽ー。

山陽沒後八ケ月經過した或る日、竹田は其の家を訪問して、山紫水明處に一泊した。

重叩ニ柴門ー感何勝、一聲認得内人膺、亭依ゝ水處昔同座、欄凝ゝ紫時今獨憑、荒徑春殘花落ゝ地、虚堂畫暗壁挑ゝ燈、老來怕ゝ聽傷心話、使ニ我觀ゝ空欲ゝ學ゝ僧。

[illegible]

た。[illegible]りこんで、[illegible]を詠するのだつた。[illegible]として[illegible]た。竹田は悲痛の情に堪へなくて一詩を賦した。

一株[illegible]多岐、[illegible]酒[illegible]、竹與ニ故人ー錯ゝ何處、[illegible]

黄[illegible]當時ー。

竹田は一日木米を訪れた。其の時竹田は、松[illegible]寺の圖を携へて行つたが、木米に向つて

「この圖は山陽に頼まれて描いたのでしたが、山陽が沒したので贈る人が無くなりました、豫て貴下から頼まれてゐる畫も何時出來るか分らないから、是れを貴下に差し上げることにしたい」と言つた。

木米は喜んで受けた。

其の木米も、翌年五月に歿したのだつた。

竹田は、自分の師友の人々が、一人づゝ亡くなつて行くのを見ると、自身の齒が一本づゝ缺けて行くやうな氣持がした。故人を惜む心は、やがては自己を傷む心だつた。彼は、數年前から心掛けて、自分の幼時から今日に至る迄に交つた多くの師友の人々の小傳を作つてゐたが、それが、天保四年の春になつて「師友畫録」と題して二卷の書に纏め上げられた。それは一面

日名の傑作で、我邦の繪畫史上最も重要な遺跡となつた。

天保九年といふ年も、竹田に取つては非常に不幸な年だつた。其の年の春彼は大阪に行つて、更西下したが、間もなく、伊丹に住んでゐた門人高橋草坪が病篤しとの通知に接したので、取る物も取り敢えず引き返した。

草坪の病も肺患であつた。齢が若いだけに、病勢が急進して、療養の効も無く、梧桐の葉が落ちるやうに逝つてしまつた。竹田の悲嘆は譬へやうもなかつた。山陽や木米の死はまだしもであるが、若い盛りの草坪がまだ功も遂げずして、花の散るやうに散つてしまつたことは、どう思ひ返してもあはれで、傷ましくてならなかつた。

高橋草坪は、豊後の杵築の生れで、家は商家だつたが、天性畫が好きだつたので、文政五年に竹田が杵築に遊歴した時其の弟子になつた。其の時草坪は十九歳だつた。其の後彼は大概師匠の手許でばかり暮らした。竹田が旅行すれば必ず従遊して、殆んど師の側を離れたことはなかつた。彼は天禀の畫才を具へてゐて、山水花卉翎毛人物、悉く善くし、筆墨老成、既に大家を凌ぐ慨があつた。先年大阪へ行つた時、竹田は草坪を伴れて浦上春琴を訪問した。其の時竹田が草坪の描いた畫を示すと、春琴はこれを見て、

「是れは清乾隆以上の畫だが、一體何びとの筆ですか」と春琴はた。

そこで竹田が、それは今爰へ伴れ來てゐる草坪の筆だと言つたので、春琴は一驚を喫したのだつた。春琴は、草坪の將來に嘱望して、養子にして自分の後を嗣がせ度いと將へ其の事を草坪に話したのだが、草坪は人の後を襲ぐことを屑く思はなかつたので、國許に老母があるのを口實にして、その相談を謝絶した。すると其の後で、篠崎小竹が、其の姪を草坪に娶せ度いと言つて相談を掛けた。此の方は至極良縁であるので、竹田も贊成して、華燭の典を擧げた。が、草坪は、其の時分からすでに肺を犯されてゐたのだつた。

草坪はわずかに三十一歳で逝つたのだつた。

其の年、竹田の繪畫論「山中人饒舌」の刻がなつて上梓された。

十一

文政六年の春竹田は東上した。彼は、今年は久しぶりで江戸へ行く心組みだつたが、大阪へ行くと、例に依つて長くなつてしまつた。

竹田は、豫て大鹽平八郎から依頼されてゐた王陽明の肖像を

[illegible]

[illegible]

あつた。

平八郎は大いに喜んで、それを壁間に掲げ、[illegible]を焚いて禮拜した。中齋は人に向つて言つた、

「あの肖像の前へ行くと、自然に畏敬の念が起つて、頭が下つて來る。此の平八に、畏敬の餘り頭を下げさせうる者は竹田ばかりだらう、吳道元が再生しても、おそらくかうは畫けまい」

六月十三日、竹田は洗心洞を訪ねた。其の日は天滿の祭禮だつた。前日迄の風雨が今朝は名殘なく霽れたので、天滿の氏子は勇み立つて、街は何處へ行つても華やかに賑はつてゐた。

中齋は欣んで竹田を迎へて、酒を置いて歡待した。中齋は非常な元氣で、いろ／＼の談をしたが、賴山陽の事に及ぶと、暗然として眼を曇らせて、山陽が沒年の四月に、病衰の身で大阪へ來て洗心洞を訪ねた時の事などを語つた。

併し、其の夜の歡談は、竹田に取つても近來の快事だつた。談論湧くが如くで、晝の七つ頃から、夜の八つ迄遊んで、大いに醉つて駕に乘つて宿へ歸つた。翌日竹田は其の事を手紙に認めて、國許にゐる太一の處へ送つた。

大阪府外の吹田村といふ處の代官井内右門といふ人は書畫を[illegible]

[illegible]てゐたので、[illegible]

其の年の暑さは殊の外酷しかつた。竹田は、自分が[illegible]ど衰に赴くので、今年のやうに暑さを酷しく感じるのだらうと思つた。併し、吹田村に移つてからは大いに凌ぎよかつた。其の地は大阪城を去ること東へ二里ばかりの處にあつて、田園[illegible]野が東西に擴がり、江口神崎玉江長柄の名所が左右に續いてゐて、村落の風景が大いに彼の眼を喜ばせた。

併し彼は、此の春以來故郷からの音信が一回も來ないのでひどくそれを氣にしてゐた。此の前太一に送つた手紙の中にも「每月一回須ㇾ寄ㇾ書」と書いて遣つたにも關はらず、未だに便りが來ないところを見ると、太一がそれを讀み落したのだらうか、それとも若い者の常で遊びにほうけて手紙書く間も無いのだらうか……などと考へて、獨りで氣をいらつてゐた。同じ田舍と云つても、都會間近の此の吹田村と、自分の故鄕の村とでは、田野の光景でも風俗人情でも、まるで異つた趣きがあるが、しかし、夕陽西に墮ちて、鴉はねぐらに歸り、農夫は小川に鍬を洗ひ、炊煙しきりに地に這つて低迷する頃、殘光を浴びた空を眺めて佇んでゐると、しきりに家鄕が戀しく思ひ出されるのだつた。其の戀しい故鄕に落ちつくいとまもなく、老來の今日

迄東遊西流席の温まる時はなく、放浪の旅を續けてゐる自分の運命を泌々と考へて見たりした。

七月廿四日の晩に、暑氣中りの氣味で急に熱が出て、下痢もともなつて、大變苦しんだ。井内の家族が手を盡して看病して呉れた効があつて、病氣は直きに快方に向つた。彼は起きられるやうになると、其の事を手紙に書いて故郷へ送つた。

村中所見

家ことの蚊遣の烟たちつゝきにきほふ村の夕すゝみかな

といふ歌を、手紙の端へ書き添へて遣つた。

それから數日後のこと、或る日彼は茄子の燒いたのを食した。中に、少し生燒のやうなのがあつたが、好物のことなので何の氣なしに食べてしまつた。すると間もなく劇しい腹痛が起つた。今度は前の時よりも一層病氣は劇しかつた。

大阪から、篠崎小竹や浦上春琴等が見舞ひに來て、醫者も大阪から招いた。其の病氣もやがて納まつて、日増しに苦痛は薄くなつたが、いつになつても食慾が付かなかつた。體が衰弱してゐた。併し、田舍では飲食に不便を感じるので、少し加減のよい日に、竹田は駕に乘せれて、大阪の中の島の寓居へ送られた。

八月の初めになつてから、初めて家信を手にした。竹田は、太一が書いた其の手紙を病床で幾度びも出して見た。彼は寢てゐて筆を取つて、岡許への手紙を書いた。

拙事前月中旬より、中暑の處、前症將レ除時、誤喫二茄子未熟者一、絶無二食氣一候、最早生二涼氣一時節に相成候、追々快復可レ申候、只今得レ便候ゆへ、此段申遣候、尚追々可申上候

閏十四日　太一どの　老竹

しかし竹田は、どこまでも自分が死ぬだらうとは思はなかつた。病氣が全快したならば、九月頃から江戸へ發足しようと考へてゐた。

其の手紙を出すと間もなく、竹田は俄かに重態に陷つた。其の時、彼は初めて自分の不起を覺つた。又もや彼は太一に手紙を書いた。筆を執る手が顫へて、字體がしどろに亂れた。

其方上阪日々待居候、此状參次第、萬事取りすて、直ちに上り可申、小生死に目に逢可申、其申置事有之候、只々早く〳〵

太一へ　竹田

其の手紙は早飛脚で岡許へ送られた。

竹田は、太一が來る迄は決して死んではならぬと思つた。太一が來るのが、一日千秋の思ひで待たれた。死に面して、心に懸る事は、吾が兒の上ばかりだつた。

[illegible]にゐた門人達や、[illegible]の人々も、[illegible]て、代る／＼看病した。養病に[illegible]ばかりだつた。

秋日がしとしとゝ降つてゐた。竹田は疲勞の餘りから眼を閉きした。いつの間にか日が暮れて、燈火が枕べを照らしてゐた。

「太一は、まだ見えませぬか」と竹田は言つた。

「まだお見えになりませんが、もう追つ付け御到着になるでございませう」

と、一人の門人が答へた。石川といふ男で、長州萩の者だが、近年竹田に師事して畫を學んでゐるのだつた。

「石川君、筆と紙を取つて呉れ」

「お書きになるのでございますか」

「さうじや、一絶出來たから書いて置く、半紙では駄目ぢや、半切を」

「畏りました」

石川は、筆と紙を持つて來て、墨を磨つた。

「宜しうございますか」

「大丈夫ぢや、お前、紙を持つてゐて呉れ」

竹田は筆を把つて書いた。

八月初八夜、示二石川生一。

[illegible]

[illegible]

兩三日の人々、[illegible]にならなかつた。

それほどこがれてゐた太一が漸く到着した。太一は[illegible]の若者だつた。

竹田は、吾が兒の顔を見たので安心した、言ひ置く事も[illegible]澤山あると云つて置つたが、逢へば何も言ふ事は無かつた。

八月廿八日といふ日に、竹田は太一を初め多くの門人知人に護られつゝ、息を引き取つたのであつた。

遺骸は南區枡縄坂の浄春寺に葬つた。そして郷里の竹田の胡麻生峠には歯と遺髪とを埋め、兩地に同じ墓石を建てた。碑面は篠崎小竹の筆で「竹田先生墓」と記された。

大震火災一周年記念　罹災地の復興ぶり實地調査記

竹内大三位

東京市

一。銀座と丸の内と淺草

大震災前の銀座は地方人には如何にも美しい所と思はれたらしいが、實際は必ずしも左樣ではない。音樂と舞踏は殆んど禁止されたかの觀ある、在京の歐米人は銀ブラを喜び、殊に夏の月夜に於て之れをこよなきものとして居たらしい。若い文士や學生達も亦銀座が好きで有つた。けれども、銀座の何所にもそんな愛すべき所も親むべき所も無かつた。唯だ何所を見ても幼稚な假普請の並列に過ぎない東京の多くの街巷の内に、比較的見るに足るものは矢張り銀座で有つた。ともいへやう其の建築はお粗末千万なものであつた。そのショウウインドーには、稀に高價の品は有つても氣の利いた品は先づ無かつたのである。

その銀座も綺麗さつぱりと燒失して、忽然として新らしい銀座が産れ出た。

新らしい銀座といへば其れはどんなに美しく賑やかな、さうして立派な市街で有らう、と未だ見ない人達などが思ふであらう。昨年の十一月頃、之等の家が出來た時、東京の各新聞は勿論、地方新聞までが復興せる銀座として、藝術的に意匠を凝せる新裝ぶりを見よと、從來は見る事も出來なかつた珍らしい、ハイカラな建築が寫眞で掲載されたりした。寫眞で見れば成る程と合點出來る立派さである。それに説明が、現代新建築界の新進某々氏の意匠に依る未來派……セセツシヨン……などとあるから若い人達は勿論珍らし物好きな老人までが、成る程變つたものが出來たな、などと半分はどはなまおかりに感嘆する。と言つた風だつたが、銀座に復興も復活も有りはせぬ。[illegible]せいぜい五ケ年間をかりそめいバラツクが出來たのである。然しに一寸立派でも、博覧會々場よりもお粗末な[illegible]トタンの家で、

復興に向つての競爭さへ今はまだないのである。お手本の七年後には見立つべき[illegible]の[illegible]に在るに過ぎないのである。

これは五軒と七軒と並べて見た時の一寸小綺麗なだけに過ぎないバラックである。銀座の商店三百五十軒の内、奥行きの在る家は數へるほども無くたゞ店先ばかりである。中には店先きさへ甚だ狹くて、外觀の一寸小綺麗だけなものさへある。前口一間の店さへ震災前のまゝにあつたりして、立派と言つてもトタン板一枚の立派さである。美しいと云つてもペンキが剝げないまでの美しさである。五七年後には今日のやうな美術的の建築が大きくなつて堂々として立ち並ぶのではない、僅かな經費で濟む假りの建築であるから、一寸しやれて美術的にやつて見たのである、ふざけた學生が大磯小田原の短距離を、こんな時こそと一等汽車に乘つて、百人に一人位この學生の親里は百萬長者なのであらうと思つて呉やう事に興味を持つと似た事なのである。

それを昨年の十二月あたりでは美術的價値まで一一批判して美くしく復興した銀座を祝したものである。でも本建築に改むべき五六年後に於て、今日の稍や美しい家々がどんな狀態であらうか、剝落ちペンキは剝げて、賣笑婦の朝歸り同樣二た目と見られぬ姿なのではあるまいか。そんな貧弱な建築さへ一通り揃へるのに、日本の[illegible]の第一流が[illegible]る。しかも銀座で自分の資本で營業して居るものは、たつた數人しか居ないとは有名な話だが、それならば他の資金で建るのだから、もつと立派にもつと早く出來さうなわけであるが。

でも或人に言はせると銀座が比較的早く出來たのは丸の内に銀座特有の繁榮をまで奪はれさうになつたからだといふ。昨年十月十一月頃の丸の内は實に盛んなもので有つた。その混雜と不潔に困るほどだつた。飲食店や雜貨店の類が其處にも此所にも出來て、實際銀座日本橋の繁榮を奪はうとしたでもあらう。そんな手合ひは最近の不景氣に他一倍みじめな事に逢つてゐるが、而も丸ビル一帶は相變らず暴利ながら相變らずの賑やかさである。現代社會が質素や剛健を捨てて華美や輕薄に走るのがありありと目に見える、他人への贈り物は勿論、自分の家庭で使用するものでも丸ビルであり三越であつて、之れ丸ビルで買つた時良人ではうなぎ丼を二つ食つて笑ひましたわ。とか。之れ三越で買つた戻りにペーギドカナダといふアイスクリームの甘いたのを喰べて美味しかつたことよ。あら妾も欲しいわと横合から小娘が口を出すと、でも氷の天ぷらですもの上げられませんわ。などゝ兎角、そんな所へ出入する事を誇示するのが腰辨夫人から長屋のかみさんにまでも多くなつてゐた。又身に着けて

居れば、火事や地震にも助かるといふ理由で、幾つかの指輪や時計を持つ事も流行した。買ふ所も商品には實用向きでないのが多かつた、實用品も甚だ不親切に造られて行つた。賣る者も都滿買ふ者も都滿で、百年の先きまで大觀した國是の下に活動する大國民とは元より思はれぬので行つた。

こんな輕薄に基礎した繁榮が何時まで續いて丸の內や銀座や日本橋通りを培養するのか。不景氣の秋風が既に吹き荒れて、其の上內閣の方針は綱紀粛正、財政整理の上に侈奢抑制と安逸の陋習打破と來たから、輕佻なお轉婆共を始め一般世間が一寸眠りを醒めるであらう。銀座でも丸の內でも日本橋通りでも大小商店軒並みに蜘蛛の巣がかゝるやうな姿で、主人は青息吐息五色の息と成りはすまいか。いや既に其れであるとも傳へる。なに平生だつて火の車なんだよと日に二十五錢から四十五錢位までな高い利率の資金を借りて大急ぎで家を建てたが、裏通りはまだ半分位しか出來てゐない爲め、且つは東京市としての人口も稍や百萬近く激減してゐる爲め一向に客は無く、人形町通りも小川町通りも皆商人泣かせの此頃だといふ。神田驛前から萬世驛前までの通りで無事に缺損を免れて居る店は驚く勿れ唯つた五軒ですと銀座に似た様な事を言ふ。復興は家屋や道路ばかりが復興でなく、經濟の復興が最も大切であるのに、商業會議所は何をしてる。復興局は經濟に無關係でもあるまい。殊に本所を始めとして市內外の小工場主と來ては泣くにも泣けぬ苦境に落ちてゐる。

既に商工界の無政府時代と言ふ者さへある。工場が原料屋から原料を取つて來れば其の代金を支拂はない。問屋が工場から製品を取つて來れば其の代金を支拂はない。支拂はない心算でもないのだが、事實どうしても支拂ふ事が出來ないのである。殊に『取つて來れば』と書くのも、三分間の電話で、ヘイ有りがとうと持たせてよこさせるのではなく、先方へ行つて上手に話し込んで商才と詭辯で取つて來るのだからである。如才無さそうに支拂つた所で其の手形は大抵不渡り物である。不渡り手形ばかりが詐欺紛いやうに危なッかしくそこいらを泳いでゐる。不渡りでも小さい金額なら他の店との取引や銀行關係上、自分の信用を保つために泣く泣く自分で引受けるのが少くないといふ近況である。大問屋も小問屋も大製造所も小製造所も乃至は販賣店も、滔々として殆んど皆それだから驚く。既に原料よりも安價な製品が賣られてゐる。木綿にも、織物にも、木材にも。家庭用西洋家具に於つては、一時の三分の一の値である。用材の下落に、職人の方で遊んで居られぬとて注文の無いのに製作したゝめだといふ。絹が十圓に三反で賣られ、古着は五月に廿

[illegible]の上品が五圓で賣られ、一度でも手の通つたものは上等品値の[illegible]羽二重裏でも三圓半だと云へ、綾物を專門とする[illegible]銀行にも十月下旬には向ふ二十五週間休業を發表した。商人達の近江銀行は大々的の欠損を辛うじて彌縫し得たのも最近有名な話だが、丸ビルに巣くつてゐる會社でさへ傭人の月給を拂はぬので警視廳の相談所へ呼ばれたのがあり、職を與へるとて保證金を卷き上げる不徳漢も著しく增加した。又不景氣から解雇のため職工會社間に爭議を起してゐるのが、八月五日には市中に十四ケ所もあるといふ。それから質屋でも七十圓の時計に十圓しか貸さぬと言つた風で、結局鐘紡の樣に未だに新築しないものは返つて怜悧とせられてゐる。對外爲替がどうで銀行がこうでと爰に紹介する必要は無い。唯だ斯くの如き現象が一年後の東京の電車通りの家だけ揃つた市中に於ける景氣である事だけけを承知して置けば宜しい。

淺草公園では飲食店から復興して活動も劇場も半永久がすつかり出來上がり、一時非常な人氣を呼んで、國外のその筋をして垂涎せしめたのであるが、それも一時、最近では平常以下の不印で、殊に飲食店は震前の三倍に增加したのだが、何れもが可也に設面造つてゐるといふ。可也に客は出這入りするのであるが一人當りの[illegible]事で[illegible]、家から[illegible]く成つたのであつた。でも[illegible]しいけないのに比べてまだ／＼結構な方であると言へた。

觀音堂は東北に少し傾斜し、傳法院には上位を存した大黒院の他は可也な破損なので昔に此の秋から大修繕の豫定である。唯だ一つの觀音堂が殘つたばかりで淺草の復興は非常に早かつた事は丸の内が災害を免れて東京の復興に資する事多大で有つたのと甚だ似て居る。

まだ四五百世帶の集團バラツクが當時のまゝに居るので其れで無くてさへごちや／＼してゐた淺草公園は一層の混雜である。上野公園では西郷の銅像が汚い貼り紙を拭ひ取つたが此所では大行燈籠がやう／＼八月へ這入つて起こされて久しぶりで鳩に昔の足場を與へてゐる。

丸の内は被害が輕微で有つたから復舊は頗る早かつたと共に勿論復興といふものが有り得やう筈は無かつた。淺草は公園附近は東京中で一番早く家並みが揃つた。それは燒けない前から家が小さかつたためで、仲見世の如きは從來よりも寧ろ立派なほどのを建築した、從來は家といふほどの建築で無かつた[illegible]である。市中でも一番遲れて出來たのが矢張り銀座で、それ

其の建物は大きくも有り美しくも有つた。淺草では興行物が非常な景氣て、淺草の奥の吉原遊廓では、昨年の秋から今年二月までは未曾有の盛況で、六月頃まではまだ〲惡く無く其點淺草も略ぼ同様ですつかり復興氣分に浸つてゐた。丸の内では丸ビルあたりをぶらつく事が流行し、職業婦人にも丸ビル形といふ最も氣取つた姿が噂となり、附近の俸給生活者は勿論、遠きも近きも皆丸ビル邊を散歩した。それは公園を奪はれてる時節柄東京驛で新聞を見たり、又は甲と乙とが行逢ふ場所に使つたのである。又一つには東京驛から三越へ無料で往復する自働車が有つた事の便利なのにも依るので有つた。

銀座のショウヰンドーには隨分贅澤な品が並んだ。市民は震災後節約せずして贅澤に成つた。淺草に於ても勞働者階級が中々贅澤で有つた。でも本春頃から不景氣が少しづゝ目立つてゐた。それは裏面の事、表面は隨分食るカフェーなどが能くはやつたりした。

二。集團バラックと住宅問題

震災後の東京に何時までも震災氣分を湛へるものは何と言つても各公園に在る集團バラックを第一とせねばならぬ。こんなものは早く解散させたい。市當局者に於ても解散させたいは山々であらう、けれども集團バラックを場所も有らうに公園に造るほどの無策な市當局者に、早く解散する様な好方法の考へ出されやう筈はなかつた。長良川の人柱でないが雉子も鳴かずば打たれまいである。自ら造つて自ら其愚に煩悶するはもと〲自己自らを知らざるに起因すると言ひたい。お氣の毒見た樣なわけである。

滿目荒涼たる燒土と化した時、必要なるものは清淨蒼々たる綠樹綠草の公園である。水清き池である、流るゝ川である。川のほとりに咲く數草の可憐なる花である、花を訪づるゝ双蝴蝶である、其の蝶を追つて捕らんとする幼兒である。之れを見て目が如何に樂しみ、心が如何に慰むかは言ふまでも無く、正に終日の勞苦を忘れ、連日の激務を慰籍するに足るものである。父母又は愛弟又は戀人を伴ふに於て殊に然りとする。公園や劇場や圖書館や其の他高尚有益な娯樂が殆んど全く缺乏してゐる所で市民は燒土に面して勤勞の汗ばかり絞つてゐては、日が落ちて頬がこけて、喧嘩ッぽくなるが一つ神經衰弱にかゝるが一つ、此の二つを出ないのである。震火で燒失した街路樹は總計一萬四千三百四十一本であつたが、之れに代はるものはまた一本も植ゑ付けられない。豫算が無いからなのでそれで十四年度から着手して從前通りの木を十五年度一杯に植ゑ付けが終はると

い上。其の間は月番の善い所り返しこ[illegible]例せらしい。獨身者を公平りに置く様た話だ、彼には見せせれば幸ひである。之れ位の事が當局者にわからぬ筈はない。わかるから幾つかの公園も借許附も師樹其の他の娯楽場も設けして有つたのであらうに。如何に慌てればとて、三人や五人でない。何千人の條約を貰つてゐる人が何百人も居て、無條件無秩序に公園内へ住居を建てるを承認したのであるから。内務省と東京府と東京市との三ケ所で幾人の扱取貸は依り如何程ど支出するかと聞いて見たい位である。

ついお隣りの横濱市では、集團バラックを築造する前に、如何なる方法を以て解散すべきかを先づ考慮して、相當の成案を得た上始めて集團バラックを築造したので、厳格な手續の上にて夫れ〳〵收容した。けれども東京では手續きらしい手續きもせず。宵越しの錢ば使はずとした封建時代の舊江戸人位に無錢砲に築造し收容したのである。從つて今日、一時も早く解散させる爲めの苦勞ぶりは實に同情に價するものがある。裴帶するだけの收入も無い青年が小供までこしらへてしまつた姿である。寧ろ悲慘に見える。

然し集團バラックに居る者も迷惑だつた。彼等は市や區の公吏から直ちに貧民扱ひされた、時れは乞食扱ひされた。一寸乞[illegible]の如く見えた。

市では一日でも早く、一人でも多く解散して呉れる事を熱心に希望した。けれども集團バラック居住者が行くべき先きは未だ區劃整理が決定せぬため、何所に建てやうかわからない。家を建たぬ土地へ行つて何に依て商賣を營いだものか。商を風間に與らして置くのも荒唐無稽だ、おさなしだらう、と言つて今更市社佛閣の椽の下へも這入られない。市當局者の内心は、お前達の内家賃を支拂ひ得る者は行つて家賃を拂へ、と言ふのである。集團バラックの人達とて家賃を拂はないで居住し得るものとは思つて居ない。けれども、東京現下の家賃は不當に高くつて神田錦町では六疊一室で廿圓以上に敷金の幾つかを取り神保町では六、四半、三ノ三室で五十圓に敷金六百圓といふ様な風に震災前の二倍又は三倍で行つた。然るに彼等の收入は勞働者　月給取りの外は震災前よりは遙かに少かつた。押入れ一つ無い四疊半一室に一家族四五人が居て、何の仕事も出來るものでなかつた。五十圓の家賃を支拂ふ者は稍や二百五十圓の收入なければならぬ筈だが集團バラックの人達は、三四十圓から六七十圓

位が止まりで有つた。からそんな貸家へ這入られやう筈はない。且つ彼等はその家賃の不當なものである事をも知つて居たから何ほ更に行く心持は無かつた。行くゝを先きを躊躇させ不安定にして置いて、去る事を希望する當局といふ者に誰が依給を與へてゐるのか一寸可笑た事だつた

東京府市を合して公營住宅が昨年中に三千五百戸建設豫定の所西荷稿村にその一部たる五百八十戸を造り人を容れたのが六月での事だが、八月に這入つても其の家は二分の一位しかふさがらない。それも這入つてゐる人は府吏、巡査、諸官關係者、地方上京者等が多くて、直ちに這入らねばならぬ集團バラツクい人達に極る少いのだから驚かされる。九月末か十月には月島に百八十戸、府内には本所猿江、淺草玉姫、郊北三輪の三ケ所に合せて五百戸ほどが出來る豫定であるが、之れは好い加減ふさがるものと思ふ。以上の外に同潤會の八千戸が出來る譯だが地主が承諾せぬため場所が決定出來なくつて閉口してゐる。なるたけは市中に得やうとしてゐるが、結局少數のアパートメント位を造る外は大部分が郊外に建設されるものと思ふ。之れだけ出來れば東京では住宅の不足は大體無いものゝ如く思はれるが、其の出來上がりが二年の後か三年の後か四年の後か五年の後か一向に見當が付かぬ。

大震火災直後十日間にして東京の失つた人口は稍や百萬の多數で震災前二百四十二萬九千九百の人口が一時百五十二萬九千まで減少して、一週年の今日漸く百八十餘萬まで回復するを得た次第だが、彼等は殆んど悉く田舍へ行つたのであつた。

集團バラックの居住者は、あらゆる困難に堪へても東京を故郷として東京に殘りたい人達だつた。斯樣なる設備にか甘となく動かされながら、田舍落ちの人々を靜かに見送つたのである。正に『江戸ッ子』改め『東京ッ子』を以て許すべき人達である。それを郡部へ移住せしめやうとは當局者の考へ違ひで有つた。事は簡易住宅が立派に説明してゐる、それなのに當局者はまだ郡部に土地を物色してゐるのである、人心の離間、社會の心理を思はぬにも程の有つたものである。

今日何ほ日比谷も上野も芝も青山も深川も淺草公園も依然として殘つてゐる集團バラックは一棟も減少せぬが。市民はせめて日比谷だけでも早く復活して公園らしいものを得んと熱望してゐる。けれども淺草公園第五區の少數家屋立退きに、非常な長い年月を要して立退き料金まで與へ作ら、結局立退かせ得ざりし市當局では其れが何時の頃になる事やら、雲の摑を掴むやうなわからない話であつた。

今日までに大抵建ち揃つた集團以外の半永久的バラックを見

ても決定の大正十七年までに本建築に改める事に決定になつたならいと思ふ。同省は延期の說なども始めて何等なけれ[illegible]はされど、多數被災者は內務大臣に從せられる人まで亦其れを非難し戰襲するのだから、無論何年間かは延期されるものと見なければなるまい。それは市に取つて不利益た事ではあるが市民の一部がそれを余儀なくせしめるのであらう事を危ぶまねばならぬ。

鐵筋コンクリトに建築を制限された區域の人々は、現今の丸の內のやうに其の住宅を別に山の手なり近郊なりに、求めねばならなく成つた。その住宅が一般の家賃に影響して高くなり、その商店の賣品が勢ひ小賣價を高からしめる事が無い樣に、當局の盡力を今から希望して置かねばならぬ。

東京の集團バラツク約一千棟は――市營七ケ所區營六十ケ所人口は八月上旬に於て市區各三萬人內外宛、昨年末は八萬八九千人、最初は十三萬乃至十五萬人居住してゐた――冬に向つて殘暑に際し建設されたものであるけれども、防寒の設備などは思ひも寄らず、唯だ其の日其の場の雨露を凌ぐを目的として建築を急いだ。それで居住の稍や八萬人は甚だ困難な冬を苦み苦み送つた。春に成つて見ると防暑設備の無い事に何人も氣が付いた。冬には冷えて困り夏には燒けて困るトタン板の家を、當[illegible]れ[illegible]、[illegible]は[illegible]へられた。

屎溺と便所と溝渠との間たる低い地に建てられた床の低い月島のバラツクといふのは、あらゆる集團バラツクの中でも酸鼻悲慘なるもので、全く豚小屋に近い住人間の居るべき所では無かつた。けれども當局はそれをどうしやうとも對策の火事の如く眺めてゐる。しかし防寒の天井を塞されて了つた四月に造り防暑の通氣穴を立秋の八月八日になほ且つ造らない當局者の事だから、二三年後の立退き間際に月島バラツクも改善するかも知れぬ。

一年後の現狀が之れである以上、彼等居住者は其の言ひ樣なき不潔不衞生に一年間堪忍んで來たので有つた。立派な人道問題である。

大震災後一年にもなるのに、なほ無家賃の集團バラツクに居る人達は、大體、眞に事情の氣の毒な女世帶の樣な人と、勤儉節約、又は慾張りに似た人と三百代言と俗にいふごろつきの樣な人達とで有つた。中々動かないのは寧ろ當然の事だつた。公園から之等を去らしめて、市民が災前の一倍半を働くほどで無くては復舊も困難であり、五年や十年で復興など思ひも寄らな

つた。而して眞先きに彼等が愉快に活動し得る家屋を與ふる事が大切だつた。

使館以外のバラック居住者も大體それで有つた。現下の住居はほんの當分所であり、極簡略な假住宅で有つたから、矢張り本建築の住宅を近き將來に於て必要とするもので有つた。故に當局は種々の住宅を建設すると共に、大體に於て當分と電車車掌の月收たる六七十圓にて、尙ほその一割より二割又は三割の貯金をなし得る家賃でなければならぬ。即ち現時の米價及び日常食用品の價格にて多少の蓄財を爲し得べき程度の十圓以下二十圓位のものでなければならぬ。

同時に當局は日常食用品の時價低落にして或る制限を加へねばならぬ。そんなものが出來れば使館バラックは努せずして解散するのである。而して其所に整美しい市街が現出して、市民が一日の勞苦を[illegible]なく慰めてくれるのである。從つて明日の活動に必要な元氣を其處で養成する事が出來る。

衣服にもせよ復舊にもせよ、之れが最初に解決すべき重要問題であつて、此の決定を見ぬ内は市民は充分の活動が出來ないものである事を承知せねばならぬ。又一方英國大使館前の二十戸、[illegible]公園の四十戸などの小集團は當時の燒けトタンを以てせる手製の所謂[illegible]小屋にして燈火と飲用水等不便を極めつゝありて、衛生其の他何れの點より見るも近所へ交渉を有する九段とか日比谷とかに收容すべきものであれど、是又居住者の希望を容れず、引續き各外交官の出入繁き大使館の前や銀座に近い所に不體裁を暴露しつゝあり、之れに類するものが尙ほ少くないのである。

三。統計に見て

統計に就て東京市の現狀を少しく過去に比べて見たいと思ふ。

A。電車運轉哩數

昨年八月末	一八二、一七六
同　九月	五二、六九〇
本年一月	一二六、九二七
同　六月	一六六、四七九

車輛數

	單車	ボギー車
昨年八月末	七七三	一、一二二
同　九月	五〇三	六四三
本年一月	三七五	八一七
同　六月	四六五	一、一八〇

震災前に比べて單車は尙ほ三百臺以上の不足だがボギー車は稍や五十臺の增加を示してゐるから、人口稍や五十萬を減少してゐる今日市民に大した不自由は無い筈なのである上に稍や六割を燒け殘した。乘合自動車も九月七日から七十九輛が動き、また米國へ注文した圓太郎自動車が百二三十臺が補助として一

月十八日から運轉したが、それでも當座は、[illegible]子に一乘つたかと迷い所で[illegible]おけることと痛罵されたほど極度乘降に因する大々的の不足を感じた。震災後始めて動いたのは九月六日神明町上野間で、最後は[illegible]線の月島と護國寺の延長線が七月に開通したので、昨年十二月中の運轉數は四萬千五百四十九輛で、其の乘客は三千九百六十六萬六千二百五十二人であつた。電車が混雜する筈である。省線は九月十六日初めて品川澁谷間を運轉し、十九日に牛込吉祥寺間。東京横濱間は十月廿一日であつた。その頃の乘客數は運輸能力に二倍してゐた。東海道本線中の東京市及び附近八驛に於ける一昨年十一月中の一日平均乘降客は十七萬餘人。昨年同月は三十一萬餘人にて增加率〇、八七に當る。山の手線同上廿一驛にて七割強、中央線同上、十九驛にて八割。乘降が命がけの事も少くなかつた。

昨年度の應急及復舊費は約千四百萬圓で本年度電車軌道事業復興費は千九百五十八萬圓だから、市民も隨分奮發して出してゐる。

B。瓦斯

昨年九月廿三日始めて本鄕邊に供給し小石川區は廿六日と漸次擴張して十月三十日には殘燒區域全部に亘り。燒失區域は來る十月までに供給の豫定である。供給戶數を對比して見れば左のコし。

昨年八月	一九五、〇一一戶
同　九月	八二、九三八戶
本年六月	一七四、九七七戶

C。道路

昨年十一月四日には市内の大小九十七橋を開通して諸車を通行させた。鋪裝道路は六萬一千九百坪の内、一萬一千百餘坪を燒失した。それより今日まで言ふほどの道路鋪裝が出來て居ない。

街路は今日の所殆んど元の通りで復舊と言つて言へない事もないが樹木の滅亡と共に惡道路は一層の惡路と化して、殊に街路樹も燒失區域だけは全滅したゝめ毎日萬丈の紅塵を上げ、お茶の水附近では白粉坂といふ新名所も出來たといふ笑話さへある。どうしたのかと聞けば、炎天續きに砂塵が五寸位の深さとなり、一度通れば頭から肩から白妙に砂をかぶるからだといふ。

主要道路品川三輪間、九段錦糸町間以下四十四メートル乃至二十二メートル巾のもの五十一線共の補助線として二十二メートル乃至八メートル巾のもの百二十二線を設けて帝都の規模を一新し、一方運河の改修十一、新鑿一、及び各小學校に附設する小公園五十ヶ所にて四萬六十坪と、濱町一萬一千五百一坪。

隅田三萬二千七十一坪。錦糸一萬七千九百五十七坪の三大公園を國立として設置すべく、既に敷地は買收濟みである。之れで大火災が有つても大體避難の場所が十五區皆それ〴〵に出來た樣なわけである。便利にもなるが、整ふた氣持の好い新市街が出來るらしい、完成は十七年度までである。

D。電燈

	昨年八月燈數	昨年九月同	本年五月同
市電	五九八、四五五	四七五、二一三	六〇四、七九五
東電	二、一九五、七八四	六、八九八	七一九、二四九

市電の送電完成は本年四月で東電の方は昨年末であつた。最初の三日間は市內も郡部も暗黑であつた。而して本年二月末日に於て損失總燈數の三十一パーセントを復舊し、電力に於て三十三パーセントを復舊した。尚バラックの需要は多く、從來三四燈を要せし人々も非常バラックに於ては二戸一燈の姿とて、全然復舊するは燈數にありては前途なほ遼遠であらう。

E・水道

九月四日より自然流下區域を灌水給水し、十七日からは山の手より小石川本郷にも及ぼした、尚給用方面の新水は十一月末であつた。水道の需用は燈の如くに遲々たる形は無かつたが、人口に於て多大の減少ある東京は、本年三月末日に於て給水栓三十七萬二千百五で元より、震前の水量を要求する筈もなかつた、七月に這入つて旱天の續くと共に水不足の聲高く、バケツ一杯が溜るに十五分を要した所もあつた。然し東村山の貯水が出來たので其の後は大體安心してよい時期も續いて來てゐた。

F・自動車其他

	震災前數	本年三月末日數
自動車	六、〇〇〇	一〇、〇〇〇
人力車	一、六〇〇	九〇〇
自轉車	二五〇、〇九三	三〇〇、〇〇〇
荷馬車	一、一〇〇	一、六〇〇

自動車の損失數は約四百五十臺である。以下人力車も自轉車も荷車も其損失數は甚だ多かつた、けれども震後は車の必要が一層增加したため、大阪より多數を移入したるは勿論東京に於ても隨分澤山に製造されたのである。

船舶の損失は凡そ二千二百七十で汽船五、帆船十、達磨船二百五十、傳馬船七百、大荷足二百、小舟一一〇五であつたが、之等の事情を聞き傳へて千葉縣、靜岡縣、遠くは四國邊からまで船から船頭から澤山に來て、今日は震前よりも多いのである。汽船に至つては芝浦は震災の爲に斷然閑散された姿であつた。一日の入港船震前は十艘に足らなかつたものが、その後、

は三十隻から八十隻迄今では千噸級の入港六隻今日十五隻にいふ状況である。市では更に大陸運輸連絡設備を完成しやうとして、同年度内に五十八萬圓を以て、巾七間半長さ三百十間に造橋を、六十九萬圓で上屋八棟を造り、二千噸級汽船を横付けに出來るやう設備し別に一方輕便軌道を敷いて汐止驛と汽車連絡が出來る筈である。から横濱がやゝもすれば經營難を起しても無理からぬ事であつた。芝浦は帝都の新らしい玄關口として今後驚くべき活動を爲す事となり、從つて芝浦一帶の地域は必ずや著しい發展をなすものと考へられる。

リ・資金の貸付

應急資金貸付	三、七一五、三四九圓	
自宅建築資金貸付	四、四四九、七五八圓	(七二九件)
貸家新築資金貸付	五、八七二、九七〇圓	(七六四件)
自宅修繕資金貸付	五一三、四〇七圓	(一二一件)
貸家修繕資金貸付	五〇二、五五八圓	(一一三件)

以上は勸業銀行直接のものゝみである。次に興業銀行取扱の分は。

工業復興資金貸付	二七、九〇〇、〇〇〇圓	
小工業復興資金貸付	四、九七四、〇〇〇圓	(一六二件)

(一府四縣の合計なるも東京市を以て其の大部分とする)

これを六千[illegible]には十一件の二五百五萬七十二圓であつた。

ヌ・劇場と活動館

劇場は震災前三十在つたのが二十まで減少した、けれども本年の八月一日には三十一に增加した。有樂座、日本橋劇場、淺草地方劇場などが新たに出來し、一方に明治座と有樂座が無くなつて、休業中の帝國劇場が十月には大谷男の米壽祝賀會で蓋をあけるは間違ひ無く、新富座は活動館に變つた。其の他はバラックで續造した。珍らしい現象としては尤も因習の濃厚であつた劇界。それも舊劇の大御所歌右衞門を始め、左團次も勘彌も河合も猿之助もと所謂千兩役者達が續々淺草の劇場に出演した事である、

活動寫眞は百二十二館が震災で七十八館となつたが、本年八月上旬には百三十三館に復興した。演藝場が百五十九のが九十九まで減少して同じく百六十一まで復興し、觀物場の九が唯だ昆蟲館一ケ所に減少したが、現下は國技館、花やしきと昆蟲館の三ケ所である。

その他に公衆食堂は昨年十二月に一ケ所、本年一月に三ケ所二月に五ケ所六月に九段下へも新設して、從來の牛込のものと合して十一ケ所となるのである。

倉庫は、東京八倉庫で。

震災前坪數	六二、五〇九坪
震災直後坪數	七、九六八坪
昨年十二月末	三二、五六九坪
本年一月末	一〇六、三六八坪

一、飲食店など

それから飲食店は警視廳の統計に依れば府下を通じて一萬九千百廿軒、市内で九千四百廿九戸だが。前者で六百八十八、後者で三百九十五の減少を示してゐるが、事實は至る所に小料理屋が目立つてならぬほどなのも一寸不思議である。賣笑婦は市内で十二階下が全滅した爲に、曳舟が二三百人、龜戸が五六百人といふ二倍三倍の激增ぶりを示してゐる。尙ほ且つ澁谷とか池袋とか郡部の方に甚だしく增加し、中には横濱から遠征して來てゐるものも少くないといふ。

こうして各種の統計表を眺めて見ると、東京も漸々に復興はして居る。復興の計畫も立つてゐる。十何年位後の事だらうがすつかり出來上つたら東京も少しは文明的都市らしくなるのであらう。それにしても市民は多大の負擔を覺悟して、十二分の活動に加ふるに、十二分の勤儉を敢てせねばなるまい。横濱以下の各被災地に向つて此の點にも模範を示すべきである。然し

東京市民にこんな立派な心懸けがあるであらうかと危ぶまれる。

四。公園と衛生と

可愛想と言はふか氣の毒と言はふか、現時東京の各公園ほどい、い、みじめなものは澤山あるまい。散々に蹂躙されて、丁度屋形船が小便桶を積んでゐるやう。

日比谷も上野も芝も淺草も、集團バラックで汎濫したおむつや腰卷は萬國旗の如き奇觀を呈して居り、多數の便所と塵箱は異臭を漂よはせて、散步しながら新鮮な空氣を吸つた昔とは大層な相違である。それが小さな公園までがそんな風であるから、東京市なるものも震災の泥溝から未だ片足が拔けて居ない様に考へられる。

一寸手近かな所で坂本、兩國、淺草橋、數寄屋橋を見ても。坂本公園旣に樹木も無い殺風景な所へ十二月には公衆浴場が出來て、一月には公衆食堂と公衆市場が出來た上になほ職業紹介所まで造られて、一足とて散步する場所などは有るものでない。兩國公園も亦、千代田小學校簡易圖書館とか、府醫師會の診療所とか、公衆浴場に、公衆食堂と在つて矢張り拔けあと相應の乾燥無味、殺風景を極めて居る。淺草橋公園には集團バラ

ツクが二疊五十六円であり、[illegible]の今に[illegible]上公設市場がある。斯様にして目をかけてやるべき[illegible]の[illegible]を[illegible]とする市中の小公園が、斯うした有様では災後氣分を[illegible]れて[illegible]に活動するといふ事が、可也に縁遠いものとなる。況んや此等の土地は當時多數無辜の市民が焦熱地獄に悶死した跡である。優しい花でも植えて置けば秋の露も置かうものと、何縁の佛達も悲しく餘りに思ひやりのない、人情味の足らぬ處置である。萬人の目に觸れる四辻の小公園がそれだと見る者をして知らずしらずの内に冷酷な感化を與へ、荒涼の寂しさ、殺風景のあぢきなさに頗ぶる愁らせる。甚だ悪い事である。

公設市場とか市營浴場とかいふものは、そんな所に建てずとも電車通りの裏は大方は空地ではないか、いくらでも敷地がある。それを強いて公園へ邪魔するのは正にパン求める子に蛇を與へるものである。何といふ怪しからぬ仕方であらう。こうした小さなものから速やかに復舊せねばならぬ事を爰に切言して置く。車飛び人走つて、紅塵高く舞ふ炎熱の街路に、幼年も少年も老媼も休憩せよと誰れが言ひ得るものが有るのであらうか、よし言ふとも爲めに起る幾多の病人をどうするつもりなのか。斯んな風だからチブスが昨年の三倍半にも増加するのである。殆んど無數の眼病患者も發生するのである。

[illegible]當に[illegible]する[illegible]、[illegible]や[illegible]うて治し[illegible]も設[illegible]足らぬことと察しい。[illegible]するのであらうから。これ[illegible]にこ[illegible]し上[illegible]ない希望[illegible]い[illegible]べきである。而して日本をして[illegible]なる末同閃から救ふべきではあるまいか。復興といふは家屋や橋梁や經濟界位に限るのでない。之れ迄むざく殺してゐた多數の子寶を立派に育て上げてこそ、此所に復興の第一氣運を迎るものである。少くとも左の各項の如く、安價で出來る手近なものは市民に強いて、實行させるに今日ほどの好機會はないのである。

一。痰箱及び便所は五日又は一週間毎にクレシンの類を撒布する事。

二。足先にて開閉し得る唾壺を電車其の他の停車場毎に設置する事。

三。全市の道路を悉く鋪裝して毎夜之れを洗滌する事。

四。公園を多くし遊歩道の如きを設けて市内の空氣を清潔ならしめ、家屋は悉く衛生上の建設を完成せしめる事

其他育兒は國家に於て監督すとか、體育的運動を[illegible]奨勵するとか、醫藥を廉價ならしめるとか、希望は多くして盡きな

いが、せめて之れ位でも實行すれば、特に畏こき我が東宮殿下の、その非事たる人が傳染病で死ぬ様な外國にも恥かしい不始末などは無かつたで有らう。之れが東宮非事であつたから善いやうなもの丶やんごとなき方々も亦彼たわれ〳〵同様に不潔危險な東京の空氣砂塵を呼吸して居らるゝものと思ふ時、われ〳〵は知らず識らず腋の下に冷汗を流すものである。市の當局者などはそんな夢遊病の患者のやうな事を考へて見はすまい。泰平の天下である

東京市民から寄生蟲患者を十分の一位にして貰へまいか。脚氣患者を百分の一にする位はヴヰタミンの發見された今日左程困難で無さ相にも思はれるがどんなものか。東京市から蚤と蝿と蚊と蟯と南京蟲と全然排除する事は出來ないであらうか。少くとも今日の十分の一に減少するは不可能であらうか。敢てベルリンとかロンドンとかの例を引くまでがものは有るまいけれど今少し病患者や寄生蟲を減少する位は衛生當局の努力に依つて左程困難で無さ相に思ふ。人間は病魔から免れてこそ眞の男氣も出來て復興も行はれるものである。復興した立派な新らしい美しい建物も、中味の弱い半病人を入れてゐたのでは、新らしい皮袋に古い酒を盛るよりも遺憾である。

市設二十四ヶ所の診療所では毎月六七萬人の患者を診察して居て、震災前と比べれば三割から五割の增加だといふ事ではないか。實費診療所も結核療養所も簡易診療所も施療病院も之等市設の各所が揃いも揃つて悉く滿員だと傳へられるし、眼病患者も本年は激增してゐるといふではないか。市民の四十パーセント近くは結核患者だといふではないか。結核病者が街路に痰唾を吐いて、それが乾けば無數の黴菌は塵埃と共に全市に撒からうではないか。こんな不潔の街路は文明國の何所にあるか。衛生當局者は之れを爲政者に告げて、之れが防止方法を講じたる事有るか。復興の聲高き東京に、集團バラックの居住者約六七萬人は悉く是れ營養不良の半病人である。一人で三つや五つの持病が無い者とては見當らぬのである。病人が弱いのか黴菌が強いのか。抑もまた醫師が不親切なのか爲政者が不眞面目なのか、或は内閣大臣が無能なのか。餘りに病患者が多過ぎるではないか。殊に嬰兒の死が本年は倍加して居る。從來とても文明國間で第一位の多數である。

五。街を歩いて

廣い美しい鋪裝道路に面して、大きな美しい家を建て、丈夫で美事な橋を造つて、それで復興だと思はれてはほんとうに困る。復興の大切な點は物質方面よりもほかに在る。

[illegible]に
も[illegible]してゐる。牛込邊、千尺余程から、[illegible]にも[illegible]した處、
其の[illegible]の[illegible]には十ヶ所以上も石垣が今日猶は依然として[illegible]
たたまゝである。警視廳の元の家は始めから人を威嚇する様な
作[illegible]つたが今日は焼けたあゝ燥俶した煉瓦が殺風景千萬な堀
に取まれて何時までこんなにして置くものかと不思議がらせ、
帝劇は老婆が顔面に厚化粧でもする様に、焼け殘りの外側に内
外の装飾最中だが、あれで氣持ちの善い劇場になり得る事なら
家屋も亦化けものである。半潰の東京會館も繃帶で囲つて蘇生
するやうに何か工事をやつてゐるが、如何に立派に出來上つて
も此の家ばかりは這入るが厭ぢやと云ふ女子供など有りそうに
思へる。況んや暴風雨の日をやである。焼けた殘骸の三越に至
つては内部も汚い外觀も汚いから、饅や餡の居る街を歩いて來
た土足で這入るに丁度善いが、平日で三四萬、日曜六七萬の客な
ので、一時間一萬五千の下足を預り、客が三時間店に居るとす
れば四萬五千の下駄箱が入用といふ。そんな事では眞の復興は
覺束ない。道路當局も考へて見よ。丸善は内容外觀とも立派に
成つたが、手長足長を玄關に置いた前の家が極端に悲慘な潰れ
方をした事は後世へ粗製濫造の見本として傳ふるに善かつた。
その家を造つた某の博士が設計した内外ビルヂングといふのは

[illegible]
[illegible]けを貸したと[illegible]
役人であるも面白い。
内外ビルも始めの内は階下[illegible]
たが、此の頃また評判にあがりそうた[illegible]
水である。和田倉門は壊れた上ではいたく取り壊はされてしま
ひ、[illegible]橋附近の河岸には何所から持つて來たか不思議なほ
ど、焼けトタンや煉瓦塊の破片などを大きな堆にして何時通つて見
ても山と積まれてゐる。尤も和泉橋でも美倉橋でも数寄屋橋で
も何も橋の袂で焼けトタンの捨ててない所も無い。常盤橋内な
どはそれが積み上げられてある。こんな物は瓦礫なんと共に約
二十萬坪を、一日二圓、二十萬人の延人夫で九月十七日より十一
月十五日までに、それ〱近所の低地や本所[illegible]用廠へ、とくに
運搬してしまつた筈、從つて運搬費の五百萬圓は要つてしまつ
た筈なのに、何時までも何時までも何所から出る灰燼やら、關
口の大瀧ではきたなしと思はぬ水が三年前から大雨のやうに烟
橋の方へも行く事と成つてからは、お茶の水は水が一層汚くな
つて、ボートは愚か、最早用事で出る小舟でも鼻つまみであつ
たが、大震に依る崖崩れで、一旦止まつた水を又通したもの丶
美しい緑の草木も枝葉倖け、瓦礫に埋れ、塵芥を浴びて、[illegible]

と揚げに謳はれた名も仇になつた。高く釣られた橋上を佳人才子が絡繹として織るが如くに往來する時、堤の櫻花はしづ心なき風に散つて水に悠々流れ去つたものだつたが、今は櫻の花も殆んど見當らぬやうだ。

ニコライは十二階と共に東京名所だつたが頭が折れて火が入つて、修繕費の何萬圓は出道が無いので今にそのまゝである、が最近では土地の關係上他へ移轉するとやら名物が又一つ減少するわけである。一頃は飛ぶ鳥を落す勢ひだつたロシヤがあの有樣だけに一層あはれである、燒け殘りの鐵筋コンクリートに手入れして住まつてゐるものに第一相互生命保險がある、燒け方が一番輕かつた方だが、目下外部裝飾中である。燒けぬ土地震で破損した丸ビル、郵船ビルも亦復た同樣に大規模な修繕工事中である。焼落しかつた銀座の伊東子爵のビルデングは二ケ月前までの騷ぎは知らぬ顏で最近店を開けた。燒け殘りに手入れして使つてゐるものにまだ[illegible]館、大倉組、加島銀行、古川ビル、千代田館、實業ビルがあり、大同生命は燒けたゞ外裝の少しを改めて使用され。工事中の鐵骨に危險が無くて引續き工事中のものに銀座ビル、歌舞伎座、明治生命、山口銀行、三井ビルなぞあり。燒けた廢墟そのまゝで捨てられてゐるものの兩大關として南に新橋、北に萬世の兩驛がある。續いては一ツ橋の如

水館、屋製菓、村井銀行、森村銀行、西川、國分、などが見る。銀座交叉點東北隅は家が建たずに草花が賣られ一寸淋の氣分を漂いでゐる。

橋では吾妻は工兵の造つた假橋と假橋を修繕したのと電車橋との三つを有し、假と假で往く人と來る人とを左右に分けて居る、厩橋はまだ電車を通ほさず。兩國は步行人道の破損を最近その修繕が終り、永代橋も假、假、電車と三つの橋が出來てゐて、假橋は最近危險といふので人を通さない。相生橋には中の島があるため切斷した電車橋へ出來た。東京市中で燒失した橋梁は合計二百九十五橋だつたが、殆んど其の全部に假橋が工兵隊に依つて造られて有つたが、近來本建築に着手してゐる。築地橋は既に立派な工事中であるが、鍛冶橋、用[illegible]橋、今川橋、新橋、門前橋、相生橋の四所で漸次完成の工事を開始する等である。以上は總て鐵筋コンクリートか又は石造である事はいふまでも無い。それから新に二百九十五橋梁の建設は帝都復興費から三千五百萬圓と、橋梁修繕費から五千萬圓の豫算で、向ふ五ケ年間に完成すべき計劃である。來年は特に急を要するところだけ約百二十橋位が完成させる見込みだといふ。

銀座では、娘さんの討價と、道でゐる人達から目標にされ

た[illegible]されたもの[illegible]
二棟のも壓されて之れに代つて出來た[illegible]と呼ぶ[illegible]記念のが出來た。

集團バラックを退散したものに、唯一つ宮城前のテント村五百戸があつた、之れは芝離宮と深川古石場とに別れ去つたのが四月である。小石川植物園は理科大學より、芝離宮は鐵道省より、九段が陸軍省よりそれ〲立退きを請求されてゐるが、事實立退くのは早くも來年であらうか。

被服廠跡には二月十日に成つて本所の二三小學校敷地から連れて來た人達の市設集團バラックが、二百四十戸、三百五十世帶と及江東市場と呼ぶ八棟も出來、安田邸跡のバラックと相待つて賑はつてゐるなどは隨分變はつたものだ。數萬人の骨を集めてゐる納骨堂が、朝夕參拜者の絕ゆることなく、終日香煙を上げ其の頃の噂話など聞くことは申すまでもない。既に骨を堅めて造られた觀音像は七月十七日に其開眼を行つた筈だが、東京市でも此の被服廠跡の地に震災紀念公園を、新たに設置する計畫が決定して、約一百萬圓で紀念會堂を建築する、之れは特に一般市民から寄附金を募集してその費用に當てる筈である。淺草公園では觀音裏の羅漢堂、六角堂など燒けた邊りの銀杏數株は火で坊主に成つてゐたが最近綠を着けて來た。千人の

[illegible]
を出し、[illegible]
を出よ銀杏の[illegible]に[illegible]て有つた、[illegible]の一番[illegible]
も燒失されるらしい噂であつた。

精養軒[illegible]では[illegible]館[illegible]に[illegible]て記念[illegible]が陳列され多年のなじみだつた淺草公園の十二階はきれいに姿を消して、芝の愛宕の塔も倒潰したまゝである。

六。人口回復の程度

九月一日朝の、推定人口は二百四十九萬九千二百二十七人で有つたが、一旦約百萬人を失つて、一月十五日現在の人口は百五十二萬九千餘、世帶數は三十三萬八千餘に增加した。其の間の復舊ぶりを見ると、

十月三十日	八六、一三二戸	一四三、一七二人
十一月五日	九〇、四二七	一四五一、五〇二
同　十日	九四、九〇六	一四七九、四七五
同　十五日	九九、六七〇	一四九一、〇八一
同　二十日	一〇三、一七〇	一〇五三、二七三
同　廿五日	一〇八、八一七	一五二七、四〇八
同　三十日	一一一、七九一	一五三九、四五〇

逃る事が迅速で多大だつたゞけ、歸り來る事も亦斯く急激である。而して八月上旬には百八十餘萬人と稱される。横濱を見捨てゝ來る人さへあるやうだから今後の復興工事を目あてに來る人などがまだ／＼少からず有るであらう。

花柳界に	震災前	本年七月一日
貸座敷	七八四戸	七〇八戸
引手茶屋	七一戸	六〇戸
娼妓	六、一〇一人	四、六四八人

燒失したのは吉原三百四戸、洲崎三百三戸の各全部で、昨年末には吉原で百八十九戸が開業してゐた。此の四遊郭に非常な多忙で未曾有の事とされたが、これは一つには店數の少なかつた關係も有らう。今日は十二階下の驅逐を促したのが豫想と反對の惡結果を來して可成の不景氣さである。

待合は市内も郡部も合して震災前三千五十三戸有つたのだが本年三月末には千九百三戸に減少した、多くは市内で減じてゐる。藝妓は震災前郡市を合して一萬百三十一人だつたのが、三月末では九千九人と減少した。これは市内で千五百人ほど減じて郡部で五百人ほどを増してゐるいであつた。此の時節の景氣は從以來殊に宜しく無いと見える、非常に増加したけれども、思附して來たのも五月までの事、段々とわるく成つて八月に這入つてからは不景氣も極度に入り早く既に廢業者を出してゐると云ふ。

七、附記

日本は今、政友會多年の放漫なる財政策と、軍閥の久しい不謹慎發展のため、外各國からは憎まれ嫌らはれ、内は自ら不景氣に泣いてゐるわけだが、國民にはそれでもまだ目覺めないで、大震災を後に言ひ關れた「天譴」といふ言葉も、とうに忘れてゐる。米國の排日、日本の排米運動の時も「國恥」といふ言葉が行はれたが、其れももう忘れてゐる。

歐洲大戰後十年の今日、考へて見れば日本人は若干の贅澤を覺えた事と、若干の過分な自尊心とを養成した事の外は、唯だこの國恥と天譴とだけが有つた。それを殆んと忘れてゐるなどは何といふ情けない事か。

大震災一週年に際し震災の一府四縣を通觀すると、東京よりも横濱の損害は多大なだけ、横濱市民は復舊に真面目である。横濱よりも小田原や箱根の災害が猛烈であつたゞけ復舊事業に對しては彼等は一層真剣で有ることには敬服せずにはゐられな

[illegible]

災をかいている。こうした[illegible]人は[illegible]なく、お今東京は歴史に屢々有る事で、我々は極くたまに[illegible]一介少しく評論材にならねばいけない。

東京とても未曾有の大悲惨事で、隨分と手きびしい天譴でおつたが、惜しい事には全國各府縣より及び世界各國よりの同情と救濟とが多過ぎた様である。例令多過ぎても之れを受け入れる方法と配置にだに辨慮すれば差支へは無かつたでおらうけれども、政府當局はそれを正しく間違つたのである。東京市の罹災民に對する施設ぶりは。無教育なる母親が非愛兒に對する偏愛よりも尚ほ愚昧なるものが少くなかつた。忍耐とか勤儉とか克己とか活動とかを敎へて、各種の小住宅や小資本やを貸し又職業を與ふべきで有つたのに、逆まに活動を殺ぎ、高尚なる慰安を與へずして物品を給與した。十萬の集團バラック在住者をして人間社會に有るまじき非衛生に居らしめ、自然風紀の亂れる事にも氣付かず、返つて一般市民をして官公吏とは上は大臣から下は三四人しか居ない小さな事務所の屑小使まで賄賂を取るもの。賄賂を贈つても或る特殊の利益を得ればその方が利益だ大きく、其れが甚だ近路である事を、的確に承知せしめた。

[illegible]今日、市民はまた[illegible]して遊んでばかり居はせぬが。[illegible]活動が出來ない

第一住宅が假小屋で事務所らしいもの、仕事場らしいものも無い、電話も不充分道路も不充分と數へ立てゝ市民の活動を阻害するものは何十と數へ盡きぬのである。市民はこの一週年に際し靜思熟慮して、大々的活動を開始せねば、市民の日常生活は殆んど無意義のものとなり、國民としても遂には滅亡の外無きに至るのではあるまいか。（一四、八、五）

それから、此一篇におさめられた統計には縣廳府廳の市役所のもの警視廳のものなど有り、その調査の時期方法等にも相違がある。けれども大體これに相違ないと承知して貰ひたい。又爰に記述した現狀は八月五日までの視察である

房總半島

東京及び東京の附近から東京灣の水面を隔てゝ眺める所の房

總の山々、朝夕の親しみ深からぬ北總の町も村も、亦復た東京に劣らぬ程の地震であつた。からその被害は到る所の家屋にも鉄道にも、隨分甚だしいものが多かつた、けれども、其復興は案外に速かなもので行つた。それは一つには火災が極めて少なかつた爲であらねばならぬ。

千葉方面は東京よりも地震に於ては稍や輕く木更津以南に到つて激烈を加へ、安房に這入つて最も猛烈を極めて居る、それは到底東京など、と比べ物にならぬ猛烈さであつたからプレで火災を起して居たら今日よりは、もつと悲慘な狀態で、從つて復興も遅れてたであらう事は言ふまでも無い。千葉縣下で一番激烈だつた安房郡、その中でも一番激烈だつた北條館山を中心として其狀況を視察すると、安房の中心勢力地たる北條館山の停車場は過ぐる四月に於て既に業に立派に新築が落成して居る。東京の眞中に萬世橋や新宿驛が一周年を迎へた今日燒け殘りの醜さを萬人の前に曝して居るとは比べ物にならぬ心地よさである。もと〳〵房總線の各停車場は多くは震害のため顛潰して滿足なものは殆ど一つもなかつたのであるが。安房北條を筆頭にして那古船形でも保田でも佐貫でも岩井でも殆ど悉くが今年の春から初夏へかけて皆新築落成を告げて居る。之は一つには小さな停車場であるから經費の支出から建築の工事にも容易で

あつたらうけれど、兩國や横濱や小田原を始め東海道の立派であらねばならぬ各停車場の、揃ひも揃つて蟲小屋同樣な悲慘狀態を雨にも風にも曝して居るのと思ひ比べて千里の差を感知するのである。何時までも死んだ兒の年を數へてゐる老翁老媼でもあるまいし、今時分一年前の慘狀が話題にのぼる樣では其の都市其の地方では何等復興の見るべきものが無いに定まつて居る。それを無理にも過去の悲慘事を愚痴つぽく話題にせよと言はぬばかりに、燒けりの大醜態を其の玄關口たる停車場に持つ都市は醜なる哉と言はねばならぬ。彼等は正しく現代社會から呪はれてゐるのである、爲政者の心懸けがその邊にあらねばならぬ事も勿論だがそれが避暑地とか遊覽地とか言ふに在つて一層さうでなければならぬ事を思はせる、此の意味に於て風光美しき避暑地たり、沖の島、高の島を浮べて灣内水靜かなる海水浴場たる北條館山は先づ幸福であつた、更に況んや火災は兩町を合して三千三百戸の内僅かに七十三戸に過ぎなかつたといふ不幸中の幸だあつたに於てをや。

けれども足一歩、市街の中へ這入つて見れば何人もその意外なのに驚かされるのである。

燒けた鎌倉や小田原と殆んど異る所が無いのである。

言ふまでも無い事だが、どんなひどい盜賊にあつたつて、猶

[illegible]
[illegible]
低に市街の家中まだに建て替はないのである。館山の百分の七十九までが潰れ家と焼け家とであり北條に至つてそれが九十六こあつた。

そんな風であつたから家屋の破損程度が頗る甚だしい、了に採つて石上に叩き付けられた獣の様にばら／＼に家が解體した形で、再び引き起して若干の修繕で以て元の通り建て得るものなどは殆んど見當らない、火を免れた潰れ家は前記の三千三百戸に對してたつた二百戸しかなかつた。

で市街を歩いて見ると未だ家の建たないのが一等地とも云ふ様な繁華な街にもチヨイチヨイ有るのみならず、一年後の今日まで潰れたまゝにして捨てゝある家屋が北條だけでも十數戸あつた。館山もそんな風であるのみか附近の各町村へ行つて見ても農村漁村にはそんなのがいくらもあつた。之れは金錢關係の差引決算だつて年に一二度に過ぎぬほど刺戟の小さい田舎の人々の氣の長いためもあらうが兎に角その人々の特殊な都合に依るものなので、直ちに其の人は錢が無いからだらうと斷定出來ぬのである、此の點は東京のやうな生き馬の目を抜くといふ大都市に生活する者とは甚だしく事情を異にして居る、

[illegible]
[illegible]
こには殆ど[illegible]無いのである。それで[illegible]
[illegible]十戸に過ぎない　其[illegible]に皆それ／＼關係のあつた[illegible]つての同居か、然らずば當座の小屋掛しの様な假小屋住居である。唯だ館山一[illegible]共選だけは[illegible]が堅かつたため大破潰を見なかつた六十七戸が修繕をして一[illegible]る。之等とても幾年の内には折りを見て改築又は新築するのが多い事であらう、兎に角北條館山共從前の半數の家屋に出來たものと見て大差無い。

安房海岸が著しく隆起した事は一般に傳へられてゐるが、所々陥没が作つて居た事は知られて無いやうである。銚子[illegible]の館山出張所附近は、一丈餘りも地盤が陥落してゐるし北條海岸でも小松屋旅館附近が同じく一丈位陥没して居る。其他にもあるが此の二ケ所は今も昔のまゝである。から其所までは手が廻らん」と云ふ事の程度が窺はれて面白いと思ふ。其他は一帶に海水面から比べて三四尺から五六尺の隆起である。館山灣内に在る高の島は矢張り五六尺も隆起したため午後二時過ぎから三時頃までの干潮時には海底の岩の背が露はれて陸から續く事と成つた。小供も青年も面白がつて其の妙な新道路の館山か

ら四五丁がほどを徒歩或は自轉車を走らせるので其處に臨時の賑ひが出來て、島内に在る臨海實驗所は飛んだ來客に毎日悶いして居るなどは、震災の及ぼしたる影響として最も無邪氣で最も愛嬌あるものであらう、桑田變じて滄海となるの逆で、震災紀念も之位なら學術的でも有り、干潮時だけではあるが鎌倉の江の島などに思ひ比べて永久破損せざるの橋梁であらうから後世へ殘しても具合いが宜い。東京で被服廠跡の死人の骨で造つた佛像などとは自ら類を異にする所に貴さもあるのである。外房州でも稍や三四尺の隆起だが、鴨川などは爲めに海草の收獲が甚だしく減少して頗る困つて居る。

官衙や學校などは殆んと全部バラックで間に合はせて居る。高等女學校はテント張りである。郡役所もお粗末千萬なバラックである。無論トタン屋根だから七月廿八日午前十時に於て屋の西北隅に在る寒暖計が九十度を示して居る。その暑さの中で官吏は扇風機も無くて事務を執つて居るのだから同情に値するものがある。安房全郡に五十四の小學校の在つた内、三十二校まで倒潰した、その内二十六校舍は如何にも手の着けやうのないひどい潰れ方で有つた。之等の中等學校も小學校も昨年一杯位は青野天で教授した。附近の神社か寺院かの木蔭なり日當りなりへ行つて——その神社も寺も潰倒して居るから石燈籠なり何たりの倒れ散亂してる間の空地を——假りそめに神聖なる教場とした。大きな石の手洗鉢の横に倒れて奉納と彫つた字の目に曝されてゐる所は時に先生の腰かけとなり。生徒等は皆一二尺位の板片れか蓆片れを朝毎に携帶して各自の尻の下に敷いたもので有つた。土地のまだ濡れてゐる日は板で乾いてゐる日は蓆を用ひた。從つて先生が文字を教へてゐる最中に小雨が降つたりして生徒が濡れて歸つた事は度々である。その關係であらうよ思ふが頑健な田舍の學童間にも、風邪と下痢が非常に多かつたどうなる事かと、無教育な母親達まで心を痛めて居たものである、そんな事は寒の頃から櫻の頃まで續いた、夫が心ある人達の間には矢釜しい問題と成て居た。それは昨年末迄で、今日はバラックが出來たけれども、生憎と例年より暑い此の夏としてはトタン屋根がやけて暑くてたまらない。之では健康上危だいけないと、屋根へ水をかけて見たが、トタンも板になつて居る以上立て板に水の諺の通り一滴りも無く乾いて、十分間も過ぎれば元の通りなので、潤房と云ふ小學校では生徒一人につき麥藁も簾三尺巾で長さ二間のもの一枚づゝを持參せしめ、それを先生と高等一年以上の生徒と村の青年團と、總がゝりで僅に二人だけ雇ふて來た、職人の差圖を受けて屋根を蔽ふたので稍や十度近い氣温を下げる事が出來た。困難な今年の暑熱はそれでも尚

[illegible]よりは[illegible]の方が一層涼しいのである。此點に一寸注目に値する事は、[illegible]小學校も、九段の[illegible]も、何れ衛生課とか教育課とかいふ當局の人達の世話なり注意なりが與へられずして居住者なり生徒教員なりが自發的にやつて居る事なのである。

こんな風だからその敷地社寺の境域なり森林なりの關係上一つの學校で二三ケ所に別れて教授して居るのが今日尚ほ十數校有る。それから東京でバラツクと言へばトタン屋根に定まつてるが安房は藁ふきのバラツクが多い。而して共の何れもが狹少で屋根が低いため雨の日は暗くて困り晴れの日は暑くて困るのもみじめである。

之等の學校は百十三萬何千圓の經費を見積り、縣廳から共の半額の補助を得て新校舍を建築する事は既に三月に於て共筋の認可を得てゐるのだが、今日本建築の出來てゐるのは館山と北見原の唯だ二校に過ぎないのである。九月一日までには尚ほ數校が落成すると思ふ、それにしても頗る急ぐべき事が甚だ遲れてゐるではないか。小供はあらゆる國寶にも勝りて大切なる國寶である。生徒みづからが麥藁を持參し屋根へ登つて日蔽ひと

[illegible]年度中に[illegible]である。即ち、實際、だから[illegible]いふ[illegible]になる。

[illegible]は官衙はと言へば[illegible]である。[illegible]役所の如きは[illegible]の建物たる公會堂が、本年秋に出來て、その二階だけを公會堂とし下階を一時郡役所として、郡役所の本建築は大正十六年の見當だといふ。

建物でさへ之れであるから道路、橋梁などは一向に顧られない。今年は幸に出水が無いから、お粗末千萬な假橋で濟み、道ならぬ道で通行して居るけれども、雨の三日も降れば到る所に難澁厄介が惹起されるのは火を見るよりも明らかな事共である。苦しい思ひをして毎日〳〵を過して居る小學校でさへ、そんな有様だから無理もない事と言へば無理も無い事である。實は地震がひどかつたのである。道路の龜裂の如き巾三尺からなのが珍らしくなかつた。北條の市中で木村屋旅館先の原の龜裂は巾二尺以上なのが今日尚ほ其名殘を明白に止めてゐる。

鐵道が到る所に暑さ時の飴の棒の樣に上下左右に曲つて居り殊に九重と千倉間の瀬戸川の鐵橋は石の橋脚が碎けて橋の一部

が街の土ゝ河中に陥落した土地は一部大陥没で線路は飴の如くへとへ〳〵に成つた。——それほど地震が烈しかつたかと言へば北條辺で機関庫に有つた五台の機関車は、五台共倒れ〻居たが北條以南の線路も地盤も、少しも、破損して居なかつたから島それほど以上に、強烈な地震であつたと想像せねばならぬ。帝国東京市の丸の内で威張つて居る大建築とやらを房州程度の地震に逢はせて見るべきであつた、天才ライト先生の帝国ホテルだつて木ッ端微塵であつたらう。——それを木材と鉄線で如何にか繕ひ合はせて、一時凌ぎに無理に間に合はせて居るが、通行する汽車乗客は気持ちが悪くて困るのである。これに落川の鉄橋も未だ工事中だし、富浦と岩井間のトンネルも工事中である。富浦隧道の崩壊地として関東三十三観音札所の振り出しとして、有名な那古の観音の崩れ落ちた所などは、昨年一杯通行出来なかつた。今日とても其の荒廃ぶりは〻話になつたものでない。其れ此れを思へば房総の汽車旅行は延引したが宜しいといふ気もちになる。大震火災で九死の中から一生を奇蹟的に得た身体なもの少しは当時を顧みて危きに近寄らざるの君子たらねばなるまい。ことに被災地の人々へ随分に詰まつた様子を見せびらかすでも有るまいし、罹災地の人達の血色の悪い元気の無い顔を見せられて余り愉快でも無からうから。桜井澤へ、日光へ、塩原だ、五色だ、伊香保だと信越線や奥羽線の方へ足を向けるのが多いといふも無理からぬ。

それかあらぬか房州に於ける今年の避暑客はザツト例年の三分の一又は四分の一である。七月二十五日から汽見線が大網まで開通したを幸、たま〳〵内房州へ来た客も中途か一昨位で殆んど素通りの様に外房州へ行つて仕舞ふ。之れは一つには地震再来の時を恐れて居るものなのだが、実際房を落ち着けて一週間以上の永逗留は極めて稀で、宿屋と便〔?〕旅の数は大に困却れてゐるといふ。

それで之等の交通の復興は、実費で国庫補助のある著しい破損が凡そ五十余ヶ所、中には一ヶ所で延長千二百間といふ大工事もある、今日現在処在工事で自動車丈で來つてゐるけれども之れが完成には、此一ヶ所だけでも二箇年からも必要である。それに海底隆起のため沿岸の小漁港で船舶の出入不便と成り。其又同所補助に与らない補助を得て町村で為すべき復旧工事が深山に在り数へて内務省関係補助は四ヶ所、農商務省関係二十四ヶ所で、道路、橋梁、港湾等彼れ是れ合して国庫補助工事は二百数ヶ所に其他百ヶ所以上を数してゐる。内務省の〔?〕所を受ける方は既に工事に着手してゐるのが多く、総べて来年四月までには竣成の予定であるから遅れても来夏から秋までには完成

[illegible]てゐるがそれ以上は未決定だからだ[illegible]當分の後であらうと當方の當局者が語る。

それから各驛の驛長室なり事務室なりは小さつぱりと出來上がつて居るが、勝山、保田、佐貫其他何れの驛でも土工を起して居らぬのが殆んど無い位である。地盤の龜裂を塗り込めたり、レールや枕木を取り換えたり、プラツトホームを如何恁うしたり各驛競つて修繕の姿だが、之れが年内一杯位ゐはかゝる事であらう。

また白濱の野島ケ崎燈臺も布良の燈臺の倒潰したまゝ、ほんの申譯ばかりの燈火を示してゐるばかり。お先き眞闇である。之れは遞信省の方だが誠に心細い。

他の一面たる居住民の經濟事情は如何か、衛生方面はどうか、どんな具合ひに活動して居るかを尋ねて見ると、元來交通不便た半島國として、生活狀態がそんなにもせち辛くもないから、一概に天災とあきらめて、從前通り農は農を商は商を漁は漁をやつて居るやうなものゝ、近年は小商人も、小作農夫も借舟漁師も、仕事の方は日々に衰退減少する一方なのに誰が數へるか相當贅澤な眞似を覺えて、借財に次ぐに借財を以てするの形で從つて一方ならず苦んで居る。可也樂に暮して居る者は――例令

[illegible]ある。今日どう[illegible]の資金を借り出して家を建てゝゐるのは中以上のものである。

一般の景氣から見れば小商人は政府の[illegible]方針から[illegible]ドン底に苦い泥水で呻吟して居り、農家は乏しい[illegible]の米の[illegible]に近來旱天続きで畑作物は枯れ、水田はかつ／＼龜裂が出來るので、あの狹いそうして山の多い房州で水の無くなつた所は殆んど無數で、未だ植付の出來ない水田は七月末に於て二百五十町歩を算した。から泣くにも泣かれず血眼で狂奔して居り、漁師は海底隆起から海草が取れず漁獲にも[illegible]影響が有るのに、避暑客が餘り少いので青息吐息なのが多い。

官廳の彼等に與へる指導とか補助とかは極めて心細いものであつた。生活費は極度に膨脹して居るし、銀行は猛烈に引締まつて居るし、八方ふさがりで一寸手が出せないから茫然として唯だ成行きのみ眺めての其日暮らしの形である。衛生や風紀などの事は考へて居る暇も無いのである。此處で一雨有つたらとか秋の秋刀魚が此の前の樣な大漁だつたらとか、娘の婿が請負工事で大儲して與れたらとか。天災で畏縮て活動の勇氣も無く、あてにならない僥倖を希望して居るやうな有樣である。唯だ一つ何人もが豫想してゐるやうに復興工事に關する各方面各種の

支那などから若干の景氣は必ず出て來るものとするのはいくらか當てになる責めてもの事であらう。而したゞ此時をのみ待ちつゝ何等活動を爲さない樣に見えるのは、市内關係住民の因循といふのか、抑も又當局の指導宜きを得ざるに依るのか、何れにしても大震災を「天譴」とし、米國の罹災を「國恥」としたそれをもう忘れるやうではいけないから、白紙に大書して、目につく所に貼つて置くに限ると識者ぶる者も在つた。

小田原及箱根

東京を出發して西下する者は誰もが必ず横濱驛の慘憺たる有樣ぶりに一寸驚かされると共に、更に進んで九月までには復舊開通の筈の馬入川のあぶなッかしい假橋も過ぎれば、酒匂川に近く、鴨宮小田原兩驛の慘狀と、その附近の餘りに甚だしい被害程度には、眉を顰めずには居られまい。

鴨宮驛では床も築地も堤も悉く崩れて居り、柵が倒れ、地盤の石垣は五寸七寸位な大罅が這入り、柱は傾いたまゝ、壁は落ちたまゝのやバラックなど、ほんの一二週間の當座凌ぎと言つた風な二三の小建築がある――當時は驛は木ッ端微塵に破碎されて影も形も殘らなかつたといふを證據とする――一周年の今日[illegible]あつたが、如何なる事情有つての事か知らねど、さりとは餘りた遣れ方ではあるまいか。而も鴨宮は知る人の少い戶數も多くない小驛だからまだしも宜しいとして、貴族外交官の往來最も多い小田原驛が鴨宮驛以上の慘狀を內外人の目の前に暴露して居るに至つては之れはどうしたものか、驚いて物も言へない。

鴨宮と小田原の間には南京袋に土砂を詰めた土俵を御影石や鐵筋コンクリートの代はりに數十百個、高く積み上げられた所が五六ケ所も在つた。酒匂川の東岸などはそれが何十個とも數知れぬほど澤山を積み上げてある。無論其の上にスリッパが並べられ、スリッパの上にレールが置かれ、そのレールの上を汽車が走るのであるが、何と云ふ恐ろしい應急手當であらう。之等は應急手當て中での應急手當てゞあらう。言ふまでもなく汽車は此間を徐行するが、徐行すれば徐行するほど何だか動搖が甚だしい樣で不快な壓迫をするのも閉口である。それが一年後の今日まで依然無恥の姿を旅人の前に曝して居る。旅人をして危惧の念を懷かせて居る。或る鐵道土木は、自分が當選に關與したトンネルだけは汽車を下りて徒步し、その先の驛からまた汽車に乘るのだつたといふ話を聞いたが、此の南京袋の土俵も素人が想像するほど危險なもので無いとして、偖て之れが日本鐵道界[illegible]

[illegible]の用をなさぬ手と足を[illegible]ヘカキに有つたといふ。あんまり情けないものを目撃する事ほど左程に不用意不手際な日本政府は何等為す所なく、隠忍とか自重とか称して屈従を重ねる位いが落ちで有つた事は、米國の見くびりが正に先見の明ありしやの心地もする。その切手そのヘカキが世界のビツグフアイヴと誇る、日本帝都の真中で、今日尚ほ凡て賣買せられているのだから、升依が鐵筋コンクリートの代理を一ヶ年間も続けたとて大した不思議として責めるわけには行かぬかも知れぬが、さりとは責任内閣といふものが日本では何時まで無責任内閣なのであらう。上の御信任に對し奉り下萬民の信賴に向つて、責任内閣の閣員は何處までの責めを負ふといふのか。苦笑の外は無い。

酒匂川附近鐵道の損害は大したものであつた。或る部分は一丈餘の陥沒など有つて今日の鐵道は前日の鐵道と其の位置を異にしてゐる所さへ有るのである。で酒匂川は大破し墜落した鐵橋の修繕工事最中で、炎天烈日の下に鐵槌の響やら石を切る音やら人夫のかけ聲やらが鐵材やらスリツパやらの或は積み上げられ或は散亂してゐる間から賑やかに聞えて、非常な混雜であるが、小田原驛は何等工事中でないに係はらず、一層の混雜を覺える。それは驚くべき破損の中を、昔のまゝに乗降させるか[illegible]

[illegible]

小田原驛では[illegible]しく壁落ち柱傾けた。その方も床に[illegible]は折れたまゝで、タイルで装飾した美しい柱が其の根元に人手の這入る位な大きな隙が入り、しつくひの地盤にも龜裂が入り、能くもこんなで倒れて倒れなかつた事とたゞ驚かれる。地下道には五六間おきに[illegible]てあるから如何したのかと驛長に聞けば破際から水が出るので高さ一二尺の板橋をかけてある譯だといふ。その地下道も上を汽車が通る時崩れはせぬかと氣持ちが悪い位の龜裂やら破損やらである。新らしい驛は驛長室も無くて手荷物室か何かを一時借用の事務室の一隅に矢張り壁落ち窓は壊れた所を背景とし泰然自若、惨闘し執務し應接してゐる。驛長も亦君子なる哉。プラツトホームの柱に礎が無く、汚ない古板を屋根にしたのや全然屋根の無いホームもある。驛構内に破碎された家屋の柱や板など廢物の建築材料が數ヶ所に積み上げられてある。

小田原市街破損の玄關口先づ斯くの如し。之れが日本で最も美しい心地の好い模範的の停車場として、山水美と避暑所として世界に有名な箱根へ往來する貴賓や外國人にも賞められる程度に、二三年前、三十五萬圓といふ新らしい工費を投じて新

建てられた建物で有つた。日本第一として何人もが賞讃を惜まなかつた停車場であつたのである。今や建物だけの修繕費が十八萬圓見積られたが、新築するとすれば當初の倍額七十萬圓以上を要するといふ。

それでも驛前には箱根行きの電車も自動車も待つて居た。しかし自動車は昨年迄稍や七八里四方の全箱根を何れへでも縦横に走つたのを、今日は、一年を經て辛うじて入口の次の宮ノ下までしか行かないのであり、電車は入口の湯本までしか行けないのである。さうした情けない復舊ぶりである。無論復舊といふさへまだ數年を要せねばならぬ、況んや復興に於てをや。前途に中々近く無い。

小田原の市街ほど其の日の慘狀をまざくと今だに明示しているものは一府四縣の内にまたと無いであらう。小田原城が破壞されている慘憺ぶりは物が物だけに鎌倉八幡宮よりも餘程甚だしく見えるので、勿論小田原の慘狀は鎌倉の慘狀に劣らないし、八幡宮はやがて修繕されるであらうけれども、小田原城の修繕される日は有るべくも無く、城跡一帶の地が假りに公園となるにしても、震災の名殘りを止めぬまでに美しく取り片づけられ面目を一新する事は三年五年位では思ひも寄らぬ。小田原

[illegible]

しかりし最も氣の毒な土地である。停車場から間も無い大通りを貫く溝の岸壁が悉く崩れて其の石橋も崩れ、其の石材が街路に上げられて一面に散亂して居る。市街の一番繁昌な所からかけて倒潰の上を火で燒くこと大部分。其の後新築されたものゝ内、本建築らしいものはほんの指折るほども無く、多くは當座間に合はせのバラックが淺い稍や半數に過ぎない。

小田原城もぺちやんこに大破したまゝであり、御用邸及び道行く人皆が緑の中に見上げた、閑院宮別邸が亦倒潰したまゝ秋風寂寞に曝されて居る。「潮は寂寞として空城を打つて還る」といふ漢詩の趣きを其邊に想起させる。小田原城の石垣は到る所に崩れてゐる。不思議に崩れないで濠の中へ二三間乘り出した所もある。乘り出したまゝ不思議に倒れないでいる老木の櫻もある。乘り出した背後には大きな龜裂か陷沒のやうな物がある。其昔一粒一核からの自然生らしい長松大樹が石垣の崩れと共に數十本草に倒れ水に倒れてゐる樣のあはれさ。之れ等金錢にも替へ難い貴重な樹木の多數は——昔を物語る所の唯一の——遠からず伐らるゝであらう。又は枯るゝであらう。既に二三の切られているのが有つた。勿論有名な天主は坊主山と變つてゐる。

鐘樓は石垣の崩るゝと共に街路の所へ落ちて釣鐘は地上に逆

[illegible]

[illegible]い。

箱根には今度にも道路にも大きな崩壊の跡が澤山に今猶は見られる。それでも誰かゞ多少の手數をかけたものであらう。けれども、一寸見た所は月日が自然に櫛風沐雨で七八分通りを埋めた位にしか見えない。斯んな風に前後から從られた二箇の低むな水面に、七月末の蓮花がはかない色に咲いて居る。蓮時が髑髏といつている蓮の實は取る人も無くつて其の綠色を紫染ませて西日に燒けて居る。有名な二宮神社も傾斜したまゝである。その石の鳥居も倒れたまゝである。此の方は二宮尊徳翁の主義に合致してゐて、何時までも修繕の遲れる事が寧ろ穩當であるやうにも思はれた。古城既にあはれなるものなのに、地震に依つて大破された古城は修むる人も無くて一層あはれである。

此の邊の小學校も民家も多くは潰れたまゝで、附近の散亂物が少しごみ捨て場へ取片づけられてゐる位な所へ、二三の小バラツクが出來て、道傍え氷を賣つてゐる位ひ。小田原通商銀行といふ三階建で小田原第一の建築といふのも其處に出來て在つたが出來たばかりの所を粉碎された。其の粉末とも言ふべき石や瓦のかけが殘つてゐた。それらの風物は雜然として、熱風は

[illegible]十五日の決心して[illegible]見える。

小田原町は[illegible]補助を得て二宮町附近に七棟の長屋を作り外二箇所にて約百軒の半永久的な住家を建て、罹災者を入れてした。それは東京の集團バラツクから見れば比べやうも無いほど立派なものだが、這入る希望者が澤山無い今日僅かに七十七戸居住しているといふ。鉄道小屋のやうでも、自分の元の場所に建てたいといふ越鳥南枝の類の人情は田舍の人に一層濃やかであつた。

元來小田原は五千三百餘戸有つた。その殆んど全部は倒潰して仕舞つて、停車場附近に少しと其の他で千戸位しか殘らなかつた。即ち

△燒失　二千二百六十八戸
△全潰　千七百七十戸
△半潰　千三百四戸
△合計　五千三百四十二戸
△本年六月末日現在　四千六百二十二世帶

だから尚ほ七八百戸の不足である。

今日は震前の半數だけ位は半永久的の家が並んで、例年に經

い少い避暑客を迎いてゐる。停車場で聞くと所謂驛でも此小田原驛でも同じやうに前年と大差は無いのであるが町へ這入つて見て其の意外に驚かされる。小田原驛で三等客の乘降は前年と何等の差違はない。唯だ二等に於て一割五分減、收入に於て一割五分減の結果を來してゐる。

小田原には四五百の別莊が在る。けれども今年に殆ど皆が留守である。稀に不在でないのが有つても笑聲は勿論ピアノの音さへ洩れず不在同様な寂びしさである。箱根に在つては避暑客が來ねば喰つて行けない所なのだが、入口の湯本、塔の澤で昨年の半數。其の他辛うじて自動車の通ずる宮の下底倉で五分の一。それより奥は更に少い客足なので、此所二三年は仕方が無いとは客側も温泉側も等しくあきらめて居る所である。でも來年は今少し善さ相に思はれる。それに財界の景氣不景氣と、社會の風潮次第なものであるから、今日の不景氣と内閣の方針などから見れば多少危ぶまれる所も無いではないが。

小田原から箱根の湯本まで自動車で行く時アンナうるさい道は日本に又と無からうと誰しも思ふたものである。日本に無ければ世界にも無論無い、それが數へ盡きせぬ位くづれ出くづれて且つはその修繕工事のため、それでも二間から　間近くは有つたその道巾だ、今日は自動車一臺が辛うじて通るばかり、荷車一臺來ても自動車は後戻りする。人に逢へば人は蝸牛の殻の様に岩壁にぺたんこにくつ着かなければならない。湯本から先は更に頭上も足の下も斷崖千尺といふ所を羊腸として一間巾有り無しの道。それは昔は障害物競爭の様な自動車道であつたのを今日は命がけ競爭の極惡道路と化して居る。いや今日は道路でない、道路の「下地」とでもいふべきもの、いや道路の下地たるべき素質を有するものあたりを無理矢理に拔けるまでの事である。昔は關東の荒武者共が、源頼朝を始めとして一の谷の逆落としといふ蠻勇をやつた相だが、今日箱根路の自動車は大正の一の谷逆落しで無くつて何んであらう。自動車の中に居て女や小供などは今にも千仭の谷底へ落ちはせぬかとはら／＼して居る。米國活動寫眞の一番危險な場面を何の因果か雛段に成つて實行して居る様な有様である。

過半は醉人たる幾多の道路工夫が此悲慘な自動車が砂塵をあげて疾風の如く來り去るを何と見るであらう。野菜や米麥や肥料を荷車で運ぶ農夫達に、此自動車を横姿に迷惑に思ひはせぬか。田園見れ栄く機嫌の壽長である。彼等には快走の自動車に乘る美衣の人々を羨ましとも好ましとも思はぬであらうか。人は其の面の異る如く其の解釋を異にするにせよ今年の箱根各温泉は少くとも紳士淑女の行くを嫌んずる道路で有つた。箱根へ這入

の[illegible]
是た[illegible]。山[illegible]にあり[illegible]といふ[illegible]
である。病人又は半病人の[illegible]なら[illegible]事だが、今年の[illegible]は既に道路の行くを阻んする外に、行き[illegible]いて[illegible]身の山色と[illegible]長舌の深[illegible]とに叱られて[illegible]して逃げ[illegible]らればならぬ様な[illegible]合ひである。それは

明治天皇の『年毎に思ひやれども山水を汲みてあそばん夏なかりけり』といふ御製を思ひ浮べるまでも無い話なのである。

道路のみかは温泉宿も亦た十五湯共殆んどめちや〳〵であつた。山つなみと相待つて手の着けやうが無かつた。けれども喰ふといふ事の懸命から、皆それ〳〵に修繕やら假小屋やら半永久建築やらを營造した。十五湯七十有餘旅館の内今日尚ほ廢業の様な姿なのが四五軒あり。他の各建築も前日の盛況に比ぶべくも無いのである。道路と建築のみか、道路にも建築にも美觀を添えた庭園と樹木が散々に破碎されて、之れは未だ一年前のまゝ殆んど一指も染められて居ない様な姿である。一例を申せば七月下旬に筆者が一泊した底倉の蔦屋は三つ棟四つ棟の殿造りが全部破碎されて、七十萬圓以上の損害であるが復舊するには今日ならば稍や百萬圓を要するので、例令經濟は許すにしてもあの山の奥にそんな建築材料の運搬、それから室内装飾其の他

[illegible]
[illegible]
も、山[illegible]
ら[illegible]無いお話である。[illegible]として一[illegible]
永久的の建築を造つたがそれ三八本だその半で[illegible]に[illegible]迎へてゐるため元より客も少く使用人も少く、深夜入[illegible]中の客者は浴室への[illegible]路を締め切られて、半裸体のまゝ石上に野天までの座[illegible]を余儀なくされたものである。木賀の一温泉宿の如きはマツチ箱を碎いて谷底へ投げ込んだ様なひどいざまだつたが、宮城野、強羅、仙石、大涌谷、蘆の湯などは先づ大した事は無かつた、だけ修繕は比較的容易に出來たが、それは勿論應急的のもので途中の幾十百とも數へ盡せぬ山崩れはどうにも成るものでなかつた。

好個の國立公園を以て任ぜんとする箱根前途の發達は通交の便否に依つて分かれる事は勿論だが、那當局者の計畫は國道縣道共二間宛を廣げて國道十二間縣道十間の巾を持たせ、町村道は六間五間四間三間と氣持ちの善いものに擴張するため、百三十五萬圓を議決し、内百萬圓は低利資金を借りる事に内務省へ交渉中だから十三年度末までには出來るであらうし、沿道の各住宅も既に其の〳〵りで相當引込んだ位置に建てゝゐる[illegible]

る。こう成れば箱根は鐵道であるから一部分は九月中にたるにしても、今日と比べて恐ろしく立派なものに成る。いづれ道路は今秋といつてゐるが年内かかるであらうし、電車の復活は來年初夏まではかゝるものと見ねばなるまい。かくてこそ始めて復興と言へる。それは自動車の道、電車が全箱根に蜘蛛の如くかゝり、現在の車道步道の全部たる六七十哩の鐵路を見ねば復興らしい復興とは云へない。こうして中心たる宮ノ下あたりには東京の銀座で一番立派なカフエーよりも倍ほど美しくて設備の完全なカフエーなど有るべきである。又山にも河端にも植えべき木や草が澤山有らうし、蘆の湖や早川にも放流すべき幼魚が有へ一然るべき筈なり。こうして國家の自然　大公園たるにはいゝ、もう一つ、宿泊料金が今日の三分の一位で濟まねばならぬ。何れにしても箱根の有志數名が縣當局の一名を顧請がてらに連れて一度世界の斯うした山嶽地温泉地を充分視察して來ねばいけない、ニューヨークのコニーアイランドあたりですつかり膽を拔かして來る必要があらう。それから後に復興の計畫を立てると宜しい。其れで無くては役場の樣な官公吏や泥棒の樣な請負師や實業家と稱する營利專門の事業家などを頼りにして居ては此山の名は十年に一度位ひは消滅するからその時に困る。要心の肝心を以て宜しく心すべき人々の肝りにすべきである。

崩うした。根府川小田原はまだしも震災の程度がまだ〱輕いだつたといふ

あらゆる被災地に於て震災の最も強烈なりしものは、相模灘中の震源を中央にして東西に殆んど同一距離を以ての海上を北條館山に相對する根府川河御附近で有つた。鐵道としても一府四縣の、何れの線路よりも熱海線が一番ひどかつた。世界の鐵道史上にも斯の如き例はあるまい。

根府川では鐵路諸共山崩ノで山の半分が海へ落された所もあり、機關車客車貨車の一列車が停車場諸共五十尺の崖を辷つて海中に落ち、百七十餘名の乘客中生存者僅に六十餘名だつた事は有名な話だが、其時海に落ちた機關車は其の後波にさらはれて、龍宮へ行つたか、土砂に埋もれて石炭にでもなろうとしとるのか所在不明である。白糸川では孤枕高々しい鐵橋の鐵脚が姿が古菜其悉く倒潰して、今日最中堀り出して居る。村民二百名の死骸が倚ほ未だ見當らず、思ひ出した樣にぽつり〱と顏もわからぬ惨めな姿で一人二人が拾はれて來る次第。片浦村も一村六十戸全部山つなみで海へ落とされ十戸は家族全滅、殘る五十戸も寡婦(やもめ)と鰥夫(やもを)と、親無し子と、子無し親ばかりと成つた。それでは悲しい寂しいよりも不自由だからと夫れ〱接近の親族から小作をいつて來て、小谷村は生き殘つた漁民等と共

に[illegible]

つても小さな[illegible]一つ[illegible]のも[illegible]である。[illegible]

百五十戸まで焼失した[illegible]として、此の地方の人達[illegible]復

舊復興に熱心なるまじめな事は實に敬服に値するものがある。

筆者が郡役所で握手した片浦村長の如きは妻子眷屬悉くを殺して唯だ自分一人殘され、殆んど不眠不休で他の三四人前を活動し、汗と血の中に多くの人から敬愛と感謝の涙を以て圍まれてゐる。大震になつて地區を整理し傾斜を地ならしし道路を改善して居るのだが、その道路が本年度に其の他は來年度から着手するといふからやがて小さな模範村が出來るであらう。

ところで、熱海線は國府津から早川までは昨年十月十五日に開通し、更に根府川驛までは本年七月一日から開通してゐるが次の白糸川を徒歩連絡として大震前殆んど開業準備の出來て居た湯河原まで開通するのが十月頃であらう――十[illegible]ほどの大石が山つなみで一里ばかりも流れて來てトンネル口で止まつたのを今日取りこわしに困つて居る所だ――それには丁度大震前に熱海に一列車と機關車が二臺有つた。其れを利用して双方引返しにするらしい。白糸川の鐵橋は來年四ケ月までかからねば完成せぬらしく見えた。

ついでに附記して置きたいのは異彩ある篤學者辻村[illegible]

[illegible]

[illegible]成場を示し居た。[illegible]を下界に[illegible]たる

村民の[illegible]まつた。そうして其の間に[illegible]少なくなかつた筈だが、辻村夫妻と[illegible]の三人と[illegible]同居と、家屋もロックガーデンも皆一緒に大震の山崩れのために土中に滅亡した。そのはかなき跡を箱根湯本の早雲寺畔に訪へは、荒涼として屍體を掘り出したそのまゝである。誰れ弔ふものも無い様子に涙ぐまざるを得なかつた。

鎌倉と大磯

星月夜し百年の名所舊跡を夏木立の中に包める鎌倉は、七百年來曾て聞かざりし大震火災に遭ひ、[illegible]火災の惨狀殆んどそのまゝと言ふほどに三百六十五日を今日まで經て來た。鎌倉驛に下車する程の者で鶴ケ岡八幡宮に參拜せぬものは澤山はあるまい。參拜する程の者で震火災の惨狀を其處に見せつけられ今更の如く驚かぬ者は有るまい。若し夫れ富士山を右にして海の上に長さ凡そ二十餘哩の大きな扇子を北に向つて開けは、相模灣中央の震源地は要となり根府川眞鶴は左の親骨、北條[illegible]

は有い視山として、鎌倉はその中央の骨の尖端に當るのだから、鶴岡や北條と略ぼ同列の強震に逢ふを寧ろ當然とする。然し鶴岡よりは輕微で北條よりも輕微らしい震害程度に見えるが八幡宮は古いお宮だけに特に被害が甚だしく それが今日まで手を付けられないでゐるから一層ひどく感ずるのである。鎌倉としては岩盤の上に建てられてゐる市街 なれば地震は有るとも極めて輕微なるものと、過去數百年來再び傳へられて住民にもそれが深く信ぜられてゐたのである。が昨年の大震災は此の地方に於ては東京人の想像し難きまでに激烈なるもので有り、その災害する所も隨分廣汎にして亦大なるもので有つた。殊に火災を伴ふに到つて其れが一層であつた。而して其の震災火災の跡が如何ほど復舊したかと言へば殆んどお話にならぬ漸々たる狀況で、轉た同情に堪へないものが多い。復興などは思ひも寄らず復舊といふことへその中に入れてゐない姿である。が地方人は案外のんきで、それを氣にもせず少しつゝでも何か築て居るやうだから近々には復舊だけは確實に行はれるものらしい。たゞ取り返しのつかぬ惜しい物は樹木の非常に多かつた土地だけに隨分立木を燒いて居るので、今後は古い都の言ひ知れぬさびを喪つゝ、直ぐ傍に殺風景な燒跡の數徒い新築トタン屋根家屋を見る事の不調和に依つて、詩的の快感やら繪畫的美感など時々破壊される事であらう。致し方の無い事と言つて仕舞へばそれまでだが、古い都は古い都らしくして置きたい。殊に關東には近畿や中國九州の樣に、さうした古い名所舊跡は少いからでもある。東京といふ世界屈指の大都會と、横濱といふ大商業地に近く、木立の多い靜かな、雜踏無く煩擾なく飽くまで世間離れのした古い都が、くすんだ色彩の中に、一山靜かにして太古の如く、日永うして少年の如し」と言つたやうな事は、人間社會の或る配置上必要な事に相違なかつた。川や泉が無い山間に川や泉が欲しい樣に、木や草の無い川邊に木や草が欲しい樣に。然り而して鎌倉の樣な古い靜かな風景の美しい小都會は京濱の兩市民に取つて一種のオーシスである。大震火災の中からせめて彼所だけ位は逃らして貰ひたかつたのである。已んぬる哉天災。

先づ八幡宮だが國寶で有つた一の鳥居、二の鳥居も三の鳥居も皆倒潰した。倒潰のまゝで十一ヶ月を過ぎて、漸く修繕する事だけが其の筋の人々の間に議決された。元より決議に過ぎないから其の實行に着手するのは何の日かわからぬ。完備落成の日は何ほの事かわからぬ。

三の鳥居の前の石橋も破壊されたまゝ其の傍の大石燈籠が一對中間から倒れて、それらの石材は路傍に散亂してゐる。神樂

殿は[illegible]に[illegible]く大[illegible]たれ[illegible]た一[illegible]す際六いし五三爪が殘り潰らされてゐる。拜殿前に在つた燈[illegible]お大銀杏の木の下に倒れ落ちた鐵も疾ぐに片付いてゐるが、可也にいたんでゐる、階段下の左右に飾られてあつた戰勝記念の大砲まで引くり返つて落ちたまゝである。

西方蓮池の前には當時罹災民を收容した、二間巾十六間長さの長屋が二棟在つた、藤棚をひかへて日かげ涼しい所だが人が住んで居ない。四月半頃までに皆それ〲退出したのだといふ。東京の様に飽くまでも集團バラックの其所に無限賃でかぢり着いてゐやうとし尚且つ立退料まで貰はふとさへする者あるとは大層な相違である。棟の東面に『四國工兵第十一大隊第三中隊。大正十二年九月建設』と書いた文字がまだ新らしい。此の池の岸邊も散々崩れて亀裂の跡多く、澤山に捨てられた去年の蓮の實の殼が黒く腐ちかけてゐる。東の池には木材を澤山に浮べて在る。池に入れない木材も岸に少からず並べてある。倒潰した社殿を改築すべく、臺灣其他の遠方から購つて來たもので、池に在るのは水に入れて置かねば久しい間には木が乾燥して割れるからである。陸に在るのは到着したばかりでまだ池に入れるひまが無いので有つた。多くは六月から七月上旬までに來たものである。直徑六七尺もの大檜なんどい事なものが有つ[illegible]てなる。[illegible]まだ其の臺に番兵が建て[illegible]いて有つた、それもまだ新らしかつた。

本殿や社務所は流石に大破損でも無かつたものと見えて修繕が出來て居た。が賽物具の他で古い木彫など破損したものが可也に少くないらしい。

市街の一番繁昌な所を殆んど全部燒いて仕舞ひ、燒けない所も倒潰を免れたのは極めて少かつたのだが、今日では未だ震前に比べて半分の家も出來て居ない。そればかりか大震火災がほんの數日か十數日前にでも有つた様に、燃え殘りの黒燒け柱や半ば燃えた門などが災の日のまゝ依然として在り平然として殘されてある。其所は鎌倉郵便局の間近で、相當賑やかであるべき街通りなのだから一層驚く。必ずしも其所と限らず、又其の邊とばかりも限らぬが、空地や道傍には到る所二尺三尺と丈け高き雜草の間などに、燒けトタン板、燒け木材、瓦片やら、空罐やら、新たに築造中の家屋から出て來る塵屑やらを積み上げて居り、其所に貧弱な洋風家屋があり、其所に燒け枯れの松が數本有り、其處に半成の家と家との間に野天にして据風呂を沸かして青女房が洟垂らし小供を入浴させてゐる。其れに燒け

石材の小山の傍に新らしい瓦が整然と積み重ねられ、焼けトタンの屑が又其れに續き、其所に近頃判來したらしい木材の陰に乞食が今宵の宿も借り顔に物を喰つてゐる。護岸の甚だしく崩れた汚い川も其處であつた。

何といふ氣の毒な混雜であらう。最近更に又火事が有つたかの如くも思はれるのであつた。見渡した所、遅いと思ふ程度よりも更に復舊が現れて居る。

焼けない方面にしても可也に樹木の密生してゐる緑の中に殺風景千萬なトタン屋根が各所に見える。其處に俗氣橫溢の[illegible]で娼婦宿所など、大看板が出て居るものもある。潰れ家を半永久的バラックに改築したものである。鎌倉とか奈良とかいふ古い都の懐かしさを裏切る事の甚だしいもの、花見る人の長刀位た事でない。けれども當時は長谷の谷に別荘唯だ一軒の外滿足な家は求にしたくも無かつたといふから、何でも蚊でも大急ぎで間に合せただけのものを造つたであらう。此等の言ひ様のない程な殺風景や不調和が、實は言ひ様の無いほどな悲哀のシンボルであつた。昨年末の戶口は三千三百三十六世帶に對し一萬六千百四十四人と言へば隨分減つてゐる。

宿屋は下宿まで數へて四十軒しか開業して居ない、長谷の三橋旅館を始めとして大きなもの有名なものは皆まだ手を下してさへ居ない。何れ此の夏の避暑客には間に合はぬと見たであらう。それだけの餘裕があるだけまだ〱幸福であると川與の宿屋が言ふかも知れぬ

有名な圓覺寺派に國寶の佛牙舍利殿、建長寺、光明寺、二尺ばか、前へ乘り出した大佛など皆それ〴〵が大震に全潰又は半潰したまゝ殆んど手が這入つて居ない。小學校の二百坪二棟が七月十五日に竣工したのと、保育院が本建築工事中な外は町役場でも警察署でも停車場でもバラックやら繼ぎ足し半バラックやらの傷ましくもあはれな住居である。それが大正十五年位までは繼續使用されるものと見ねばなりますまいといふ。そのバラックが暑くてならぬので誰れもが一度は仕て見るやうに屋根へ水撒きもしたが矢張りだめだから、近來は筵を敷いて水を撒いてゐるのである。バラックの出來るまでは、社寺の多く木立の多い土地柄とて林間學校と云ふしやれた様な實は悲しい教授方法を執つてゐた。

鎌倉町として近來の景氣は大した悪いものでもないが、何んと云つても避暑客は甚だ少い。で町當局の方では地主と家主を招いて地代や家賃を稍や一割方安くする事に決議した。而して其れは實行してゐるが例年から見れば矢張り借り手が少ないので閉口してゐる。唯た大震直後に水のわるいため稍や續出した

[illegible]い[illegible]日[illegible]に[illegible]東[illegible]したり、[illegible]所を[illegible]したり[illegible]に苦心してゐる[illegible]だ結構である。多くの別荘も[illegible]公[illegible]などのを始めとして皆が皆言ひ合した様に殆んど全く焼失も倒潰もそのまゝに捨てられてゐる。

被害の僅少であつた大磯は李王家別邸を始め、加藤總理、鍋島侯、古川男、三井男、岩崎男と、貴族富豪の別荘は約二百五十は將棋倒しといつた風でどうにも手の付けられない全潰が五十位を算したものだつた。が唯だそれ位の事で、全潰百九十三半潰二百十三戸に對し約八割は不完全ながら家も出來て居る。

十一年末	七四九戸	八五九五人
十二年末	一六三四戸	八五六九人

一週年の九月一日までには更に多少の増加を見るであらうから、殆んど復舊に近く其點は鎌倉や小田原と同日の談でない。唯だ別莊だけは不思議に被害が多くて善い別莊ほど被害が一層多かつたのも一種の愛嬌か皮肉かである。其れが今日未だ一軒も新築も改築もされないのは世間を憚るのでもあらうか。避暑客の二三割減は北條、小田原、箱根と相似てゐるが大體に於て天下泰平の姿である。將棋の駒の逆立ちした様な足元危い海[illegible]に[illegible][illegible]小[illegible]を現在の[illegible]しい[illegible]、[illegible]で。[illegible]なバラツクに[illegible]

一

突などは以前の[illegible]に日除けの[illegible]だけ張つてベンチと[illegible]とかいふやうな物を出した簡單な當座間に合せのものである。尤も之れは十月までには新らしい建築が落成する筈である。から近く面目を一新するであらう。

横須賀及三浦半島

一時非常な惨害だつた様に傳へられた横須賀は重油タンクが爆破した爲め海上一面の火やら煙やらとなり、殆んど全滅したるものゝ如く飛行機の上から見られたのである共實焼失したのは全市一萬九千四百餘戸の稍や十分の一位ひに過ぎなかつた。けれどもそれは大瀧町を始め横須賀市として所謂目抜きの場所で有つたから財力に於ては全市の三分の一位に當るのであつた。それが今日では稍ゝ半數の家が出來た。もつと出來ても善いのであるけれども區劃整理で道巾が擴張されたりするので、舊道に沿ふて建てれば先きにいつてから損だしと言つて新道に沿ふて建てれば當分商品が賣れなかつたりするから、本建築

を見合せてゐる者も少くないのである。でも近來は九分二厘の低利資金を市として更に八分八厘位ひとして約三百萬圓を貸すので、境入町續きで埋立が出來たばかりの安浦町約四萬坪は區劃整理などの心配が無いため盛んに家が出來て、立派なバラックの新市街が現出した。之れは一つには平地狹少の横須賀では道路擴張などで一層住宅地が少くなるので否應なしに引移つた者も少くないのである。

ドックなどは始めから大した事も無かつたのだから殆んど後衛の姿だが、陸上設備が大分やられたものは手取り早く復舊せぬのもある。街路は廣めるが建築には横濱の様な制限が無いから、着手し易く十四年一杯には結構出來上がるものと信じて、當局者は目下その買收中である。いづれ九月頃から工事に取りかゝり、本年内には半分位は出來上がるであらう。

驛前國道は三ケ年間に完成の豫定だが、之れも本年度から着手するので、之れも買收のため測量中である。一方電車計劃は市營として目下その設計中である。停車場から大浦即ち浦賀の境へ一線を、三崎方面は衣笠境まで合計八哩位のものである。三年間の繼續事業として來年から着手する、市民はそれを熱望して居る。斯くて之等が完成と共に横須賀市街が面目を一新するであらう、是は勿論である。

現在は廣い道路でも八間に過ぎないのを、新設されるものは驛前から旭町まで十五間、旭町から平坂まで十二間、平坂から三浦三崎までは縣道として十間巾である。此道路は現今三間位のものであるから自動車の往き違ふには可也骨の折れる危險の伴ふものなのだが、自動車よりも農家の野菜や肥料を積んだ馬力、荷車などで實際混雜を極めて居るし、一方縣廳の方でも既に査定が出來て内務省當局とも早くすでに了解出來ているのである。

大震災後に於て戸數は百五十戸ほどの減少を見るに過ぎないから之れは言ふに足らぬが人口は千餘を減少してゐる。無論一時の立退きが有る事だから追々復歸するのも少くはあるまいと思ふが、現に戸數よりは遙かに割多い減少では軍備縮少の影響か世間不景氣の關係か現に何注目に價すると思ふ。

本年二月に於て戸數一萬六千二百十四、人口七萬八千六百四十二を算したが一週年の今日は更に若干の増加を見てゐる事も確實である。

集團バラックは安浦町二百四十戸、大瀧町凡二百戸あるのだが共衛生状態は可也に宜しく、病人は寧ろ他の方面に發生して居る、殊に水質の惡い井戸を持つ汐入町方面にはチブス續出して困つた相だが患者數は昨年に比し約二倍といふから東京より

は[illegible]る[illegible]な生活も今日の努力に依つて[illegible]たのは幾分のなぐさめである。

復舊の途上に居る横須賀の今日は幸か不幸か世間並みに不景氣である。低利資金は既に約九十萬圓位市中へ出たのであるが後引續き出るのが一日早ければ一日早く景氣を回復するであらう。その内道路工事も着手すれば勞働者階級の手にも廻はつて濕ほふ所も有らうけれども地主との買收交渉は中々むつかしいものである上に、横須賀は如何に公共事業とは云へ、災前百七十圓からの土地を、たゞの八十圓で買ふのであるから中々むつかしい筈である。東京だつたら、そんな話は無論話になるまい。然るに横須賀では小さな地主は着々承諾するけれども大地主の方が返つてわからぬといふ、その點は何所の都市も似たものである。

電燈は全部復舊したが、電話は未だ半分しか通話出來ない、來年度には全部出來るらしい。花柳界も八分方復舊した。飲食店は震災直後に於て變態的に甚だしく増加したが、今日は復舊の形である。

面白いのは埋立地先きの猿島といふ砲臺のある島から岩の根の隆起が[illegible]に來てゐるのを利用して築港の計畫の有る事であ[illegible]にな[illegible]いふ。[illegible]は日本に[illegible]

元來横須賀には[illegible]隧道に[illegible]たるの資格あるものだが、如何せん狹い[illegible]トンネルは一回の[illegible]で白服を二度と着られぬまでに汚すので誰もが閉口した、殊に海軍の士官達は夏は白服に限られてゐるので困るのである。之れには鐵道電化の必要を當局も認めて本年四月にはこれが完成する筈だつた。今日は震災のため遲れてゐるがそれでも本年十二月までには電化し得る豫定だといふ。からトンネルも苦にならぬ愉快な旅行となり。兎角して横須賀軍港は軍備縮少は縮少として別に復興の氣分の横溢してゐるものがある。

横須賀驛から四五丁、市中へ向つて行つた邊に、崖崩れで五六十人を埋め殺した有名な箇所が在る。今日は平坦な道路として知らぬものは氣付かぬで通り過ぎるであらうが、其所の崖下の巖石を穿ちて洞窟内に『震災地藏尊』といふのを祭つてある。其の邊の住民の盡力に依るものだが祠堂なほ木の香に新らしく、新しい石地藏に隣りて一週年になる[illegible]の名は[illegible]かで、誰が何時手向ける[illegible]香煙樣々として朝夕絶えない。線香

も亦近縁だから、拜弔意を表する時機にまでには居られなかつたのである。

三浦半島は地勢から言へば震源地に近いだけ其他や鎌倉よりも激震で有つて善いわけだが、地盤の關係上餘り大した事は無かつた。浦賀町も四分通りの倒潰を出したが火事はドック倉庫の焼失だけだつたから可也に早く復舊の姿である。三崎は海底が三尺以上隆起した上、市街も大損害を受けたが、今日では殆んど其形跡の無い位にまで復舊して、乗合自動車の競爭までが手傳つて盛んに避暑客を呼び、各旅館なども なかなかの好景氣を示してゐる。若し夫れ横須賀までの鐵道が電化した曉には一層の繁昌を見るであらう事は疑ひを要せぬ。

横濱市

一。悲觀させる驛と公園

横濱の災害は東京よりはずつと悲慘であつた——土地が狭いだけにまざまざと見せ付られる心地がする——だけそれだけ其の警備なり復興なりが遅れる譯だが、其れ以外に種々の事情も有つて、東京とは比較にならぬほど遅れてゐる。

第一が横濱停車場であるが、當時の慘憺たる狀況を偲ばしめるに十分なりに間合よいと思はれるほどな上破損に對する[illegible]修繕が施與されてゐる。それを世界各國の人々が集ふ横濱だけに白い人も黑い人も嘲を熟視する事だらうと冷汗である。一年後までこんな風だから餘りに過大な火災が件ふのだ。一年後までこんな風だから飛行機の墜落も號外屋に見捨てられるまで連續する筈だ。こんな風だからあんな切手やはがきも一年後まで賣られる樣子である。こんな風だから水兵が潜航艇に乗るのを厭がるのも無理は無い。こんな風だから官吏生活の某甲等に五十萬、百萬、五百萬、一千萬といふ巨額の不思議な蓄財も出來るのであらう。こんな風だから無線電話が無かつたり、道路らしい道路が無かつたりする。こんな風だから大政黨の幹部が新聞記者に待合を驅るんだなとうなづくものは日本人ばかりでもあるまい事を恐れる。横濱には外務省の恐ろしがる米國を始め約四十ケ國からの外國人が居る。彼等は腹の中で何と思つて居やう、彼等は故國へ何と言つて手紙を出すであらう。取りわけ其の國人の三分の一以上がスパイであると噂される某國などは、どんな報告を受け取つてどんな冷笑苦笑を洩らしてゐるであらうか、考へて見れば九夏三伏の炎暑にも冷汗三斗な次第である。

停車場から一見荒涼に公園へ這入つて見ると、香煙縷々として登るに於て又驚かされる。公園は勿論横濱市の中央に在る、

[illegible]

後に僅に且つ[illegible]前に[illegible]たるものがあるのだから[illegible]は無い。横濱市民は一年の久しい間大災に對して悲哀を續けて來たのであらうか。横濱市街は一年の久しきに亘つて正に喪章を着けてゐるやうなものである。東京に於ては大震災後既に一年は經過してゐるが、横濱市ではまた『三七日』位の氣分を以て敬弔の香煙濛々として絶えざる事糸の如しと、少年時代に『古文眞寶』か何んかで敎はつた文字通りな有樣である。僅か五十年前に利によつて集つた人達又はその子としては感心な事だが之れが五大强國の一たる日本の帝都に隣接する日本第一の開港場たる横濱市街の眞中に於ての事であるのをもう一偏言つて置かずばなるまい。

東京も左樣だけれども中央公園に集團バラックが有つて、罹災貧民のおしめや女褌が干してあるなどは、餘り體裁の善いもので無い、世界各國の人々が居り、又各國の人々が出入する日本國の玄關口たる横濱としては尙ほ更である。それさへ有るに、その醜團バラックに隣接して數百本の卒塔婆が林立してゐる、其所に小祠堂が有り祭壇の樣なものを前にして燒香場がある。即ち香煙濛々として立ちのぼる其の邊りには『奉修醍醐法要一莚起立妙塔一基爲大震火災殃死諸靈位彼岸爲供養』とか『今[illegible]

[illegible]て[illegible]拂に[illegible]たこあつ。[illegible]者の數も多かつた河々を河さらひして、一二月頃まではまだ死體を發見した其の後のそれ〲の或る物を深川に引き上げた河施餓鬼の船が何艘も白い旗に黑々の文字を翻して五六百人は其處に落ちて死んだと言はるゝ吉田橋を始め船頭衆の澤山死んだ萬國橋など其邊此處の河筋を往來したのも流灯會の事だつた。ラシヤメンとマドロスが威張つてゐる横濱に盆など有るかと怪むを止めよ事實此の通り。

既に集團バラックあり塔婆の林あり、殘る部分も公園として復舊してゐない事は勿論である。横濱の中央公園は東京で言へば宮城前の廣場である。之れだけは何とか早く整理して、砂漠以上荒凉悲慘の燒土と朝夕眺めツくらしながら汗を流して活動してゐる市民をして美しい草木の緑りのゆらぎと淸い水の流れと、之れの小魚と彼れの小鳥を見せたいものである。それが迅速なる復興力の源泉を養成するものと考へて貰いたい。熱風砂塵を吹き捲く間に活動する人々に、之等を見せずして卒塔婆と廢殘の棧橋停車場を以てするとは、何といふ殘酷な當局者だく

う。手が其處までは廻らんといふかも知れず、又外にもつと急ぐ事があると言ふでもあらう。でも公園の完成は急務中の急務である。梅の實が有ると話されたばかりに口へ水が廻はつて幾分の元氣を回復し戰場を助かつた軍隊も昔はあつたといふではないか。言ふまでもなく人間はパンと水だけで活きられるものでない。よし食物が充分足りても二十四時間ぶつ通しに働かれるものでない。更に食事が足り睡眠が足りても人間社會から謡と詩と繪を取り去る事は出來ない。野蠻人にも立派な繪がある、繪から謡になる、詩になる。詩は直ちに謡はれるではないか。復興に努力するだけの元氣を速やかに養成させるには、何時まで死人を悲しんで初七日二七日三七日などの法事氣分ではいけない

それだからといふのではないが横濱市中を歩いて見て、半永久的の住居にせよバラックにせよ、建築物の出來てゐるのは半分にも足らぬ心地がする。過去現在とも横濱で一番賑やかな町である伊勢佐木町通りでも、やう／＼昨年十二月からぽつ／＼家が出來て來たので、それまでは夜間は追剥ぎが出る樣な寂しさで、女子供には恐ろしくて通られなかつたのである、現今でも横濱市中の眞中通りですら家のまだ出來ない空地は澤山に在る。東京よりは遙かに多い。東京と比べて復興程度が半年遲れてゐるといふ人もあるが、或はそんなものかも知れない、

棧橋と居留外國人

殊に横濱の一特色として見られてゐた、外國人居留地の家が一向復舊せず、急には復舊し相にも見えずして、殆ど全くが燒け野原の狀態を今に繼續してゐる事は、横濱人士に取つても左樣であらうが、見る者をして横濱の前途を悲觀せしめんとするものである、實際海岸通りで出來てゐるものは、郵船とか東洋とかいふ三四の船會社のみに過ぎないと言つても過言ではあるまい。元は千戸近くも在つた所謂南京町も現在は僅かに百戸位にしか過ぎない。殊に香港上海銀行から先きの方などは行人をして轉た悲涼を感ぜしめねば止まぬものがある。

横濱で最も大切な海岸通りの居留地がそれで、最も大切な停車場も、最も大切な中央の公園も亦復た前記の通りた所へ、以上の三者よりも更に／＼大切な棧橋が不具者の姿に大破したまゝ工兵隊のお蔭樣で水中爆破を爲し其の應急的修繕をして辛うじて使用されてゐる、棧橋を中心として港灣の全部が大破してゐる事は勿論だが、斯くの如き大破損は實に世界に未曾有の事である。と同時に之れが復舊の大工事も亦復た世界に未曾有の事たるは勿論であらう。こんな風だから横濱に復舊らしいも

のに一つも[illegible]
其[illegible]の[illegible]である。生糸の[illegible]
ある。一般世間の不景氣である。商賣顔きの様な小港灣が各所に修築されるのである。人口戸數の激減である。貿易商等の郡戸移轉である。極めて短かき歴史をしか持たぬ『濱ッ子』になる者の意氣沮喪である、船の入港數の驚くばかりな激減である。

何である、數であると數へ立てれば悲觀材料は掃部山よりも尚ほ高く積み上げられ得るのである。完全に火を免れたのは一小川崎銀行より外無かつた樣に、新築らしい新築の落成したのは唯だ一つの半永久バラックたる縣廳のみと言ふも過言ではあるまい。それに自動車の通行は極めて稀となり、街路樹は殆んど悉く失はれたのにまだ一本も植付けられたのを見受けない。

神奈川縣の人口戸數を十一年末と十二年末と比較すれば、十二年度は十一年より戸數に於て四分七厘を減少し、人口に於て七分六厘二毛を減じてゐる。而して戸數の四分七厘は一萬二千三十三戸なのだが橫濱市だけでは一萬三千一戸を減少して居るから驚く。減少の第二位は鎌倉郡の千百三十二戸、第三位はもう二百餘戸といふ少さである。之は橘樹郡の千八百八十一戸以下六郡の增加に依つて、二市十一郡の神奈川縣としては幾分緩和されてゐるので、之れに見ても橫濱は如何に大打撃を受

[illegible]
[illegible]
一年末は[illegible]

餘人の減[illegible]

十一年末	九[illegible]、八[illegible]戸	四[illegible]八、五四〇人
昨年九月一日		四四六、六[illegible]人
同九月十九日	七七、[illegible]八一戸	三〇九、五六〇人
同十一月十五日		三一三、四〇二人
昨年末	八〇、八三九戸	三四七、六〇八人
本年五月末	八[illegible]、五九三戸	三七一、四八九人

人口に於て尚ほ未だ七萬五千餘の減少であるから、前途必ずしも樂觀を許さない。況んや港灣にも市街にも復舊以上の大工事が行はれる事に確定發表されてゐて、尚ほ且つ之位に過ぎない增加率なるは橫濱の爲め甚だ殘念である。それに貿易商にして從來橫濱を本店として神戸に支店を有せしものは多くは神戸を本店に改めて神戸に移住し、移住せざるまでも神戸橫濱を常に往來して何れを本支店の境界なく、業務の多く有るに多く滯在し、橫濱の前途に對して日和見の態度を以て、歸來の決心を確定せざる者もあり、或は歸來の決心有るにせよ、今現に橫濱に利益を得るの見込み少く、反對に神戸に業務の多大なるを以

て神戸に滞在するものあり、彼等貿易業者の大震に於ける損害高は、生糸、絹物、雑貨、陶器以下重なる十五種に就いて見ても、億四千萬圓以上であつた。貯蓄少く信用多からざる日本商人としては實に絶大なる損害、打擊で有つた事を思はねばならぬ。且つ震災前七千四百九十二人を算したる外國人は震後三百二十九人に激減して仕舞つた。或者は神戸に行き、或者は其の本國に歸り去り、又或者は京都大阪を始め日本の各地及び支那上海其の他の各地に四散したのだといふ。居留外國人の九分八厘は既に茲に居ない、何の日歸り來るのであらう。既に何割位に歸來したのであらうか。横濱の生命たる港灣、港灣の生命たる棧橋以下の復舊せざる限りは入港船舶數は復舊すべくも無く、船舶の出入が復舊せざる限り外國人と貿易商は留まり難いものと見ねばならぬ。即ち外人も貿易商も其の歸來する日は船舶出入數の復舊した日であらうし、船舶の復舊は棧橋以下の復舊した日であらねばならぬ。

此の海外貿易に關連したもう一つの問題は外國領事館である。總領事館十四、領事館十、副領事館二の合計二十六が全部燒失した事は何人をも今更ながら淺からぬ感慨に耽らしめるものなのだが、其れが今日まで一軒も復活しないのは勿論、かりそめの假館に事務を取つてゐるのが僅かに數軒に過ぎないといふに至つては悲慘である。此の復活は、横濱港の復活方針までが政府當局に於て決定された以上、横濱市の復活よりも或は早いで有らう。けれども大體が外國貿易の復活に伴ふべき譯けのものである。此の二十六ヶ國では横濱の復活を待つて居るものと見てよろしい、から横濱人士も一層の努力をせねばなるまい。

大震大火災が横濱に與へた今回の大打擊は實に殆んど致命傷たるかの觀が有つた。市中で最も經濟力に富む繁盛の街巷は皆大害を被つて其れが家屋の數からも面積からも全市の八割に當り、東京に在つては中心たる丸の內の一部が殘存したけれども横濱にはそれが無かつた、のみならず、東京は戸數人口共に稍や半數を有する山の手が略ぼ差支なき程度に、免れたわけだが横濱では僅かに二割が辛うじて殘存したに過ぎぬ。全市約百二十の橋梁中大なるもの七十四橋は燒失又は破損し。全市の護岸三萬間の內二萬四千間までは崩壞して仕舞つた。故に横濱では何所の河岸へ行つて見ても石垣の崩れてゐない所は殆んど見當らないといふ慘狀であつた。其橋も覺束ない假橋のまゝで、中には假橋さへ出來ないで不便な迂回を敢てしてゐるものもあるといふ。その護岸も崩れたまゝであるから辛うじて小舟が通つて事が足りてゐる形なのが殆んど悉くである。その崩れた石垣

あたりに[illegible]て
られて、この辺には[illegible]すでに[illegible]していた不
潔の甚だしいものがある。人通りの多い吉田橋や日本橋の辺りでさへ其れであつた。それが大震一ケ年後の實景であり、復興ぶりであるのだから恐れ入る。

一方商工業の方を見ると銀行、生糸、貿易、倉庫、運送、造船、藥品、保險と數へて合計三百二十六會社内殘存したのが僅かに十七會社に過ぎなかつた。今日は銀行其他數十會社は開業してゐるやうなものゝ前日の盛況は元より有り得やう筈もなく、殘存會社の内には影響を受けて休業してゐるものさへあるといふに至つては同情の外はない。

三。横濱の復興計畫

斯くの如く悲觀材料ばかりが横濱の地に横溢してゐる。横濱の前途を思へば薄暗い心地になるやうだ。けれども東京が日本國の滅びざる限り帝都の地である以上、帝都に接して其の玄關口たる貿易港横濱は、東京と兩々相待つて其の繁華を保持すべきは勿論の事である。昨年九月十二日の詔書にも『京濱其の他の市邑一夜にして焦土と化す』と有つて、東京に次いで重きを置かれてある事が明白なのである、之れが更に横濱の前途を

[illegible]
[illegible]
ねばならぬ[illegible]である。それ[illegible]
つた[illegible]

棧橋（復舊だけ）	千三百萬圓
小學校新築費	一千萬圓
下水道（五萬間）	三百二十萬圓
公園復舊費	百萬圓内外
上水道	四百萬圓
橋梁復舊	二百九十萬圓
道路（復舊だけ）	六百四十萬圓
護岸（二萬間）	八百七十萬圓
京濱運河	千五百萬圓内外

などが一通り漸次支用される事に決定した。棧橋は第三期工事の中止中だつたのだが、復舊の後にする其の擴張工事は千三百萬圓の費用を以て十年計畫と成つて居る。勿論復舊工事の後の事である。が復舊には普通ならば五六年間は要するのであらうが、此の際特に急いで十四年の七月頃までには落成させたい希望であつて、目下約四割方の復舊と言ひ得るまでに進捗してゐる。から船舶の出入には大體不便がないので、唯だ此上ホテ

ルの心配が出來れば善いものである。下水道は從來無かつたのを新たに計畫築造するので、之れが所謂復興の方に屬する。上水は■道川から來て居るのであるが之れは四百萬圓か四百八十萬圓となるかも知れないのである。公園復舊費は市會に其れだけを要求する豫定なので從つて市會で可決を見る豫定である。道路は市として約八十萬坪あつたが其の九分通りは破損したから、都市計畫委員會で決定した新設擴張の街路費を除き約五十萬坪は市に於て負擔するものである。

一方居留地の方は日本建築協會に約二千萬圓を貸與して適當の家屋を建てしめ外國人に殆んど原價的家賃を以て貸與するの計畫になつてゐる。

以上記する所及び其の他にて文明都市としての條件の悉くが完成する筈だから、其の時に横濱は港都としても貿易場としても市街としても、文明都市として立派なものと一變するのである。それが何時頃完成するか、が第二の問題となる。元より豫定よりは遅れるで有らうし、或ものは豫定を變更するも有らう。變更は有るとも遅延は有るとも、遠からず完成するの確實は勿論で、完成の確實なる限り横濱の前途は有望である、決して失望すべきものでない、唯だ過去横濱として二三十の年歴を有するに過ぎなかつたのは僅かに四五十年間の事なので、横濱の「濱つ子」なる者は東京の「江戸つ子」が三百三十四年の歴史を有するとは少からぬ相違がある

四。「濱つ子」と新來者

從つて、今日未だ歸來せざる所の八萬に近い人達が果して今後横濱に歸り來るものであるかどうかは少くとも疑問である。元より事業の起ると共に、代はつて來る新らしい人も有らう、けれども其の數は震火に依つて失はれた二萬三四千の死者と三四千の行衞不明者との數を超過するかどうかさへ疑問である。歴史が短いだけ執着の弱い筈の濱ッ子なる者が幾萬人が、歸り來て、どれだけの奮闘努力を以て、横濱の復舊なり復興なりに當るかゞ今日當面の問題である。然し復興計畫が既に決定し發表された今日にして尚ほ未だ歸來せざる八萬人は、大體に於て歸り來らざるもの、歸り來るとも案外に少數のもので有らう事を知らねばならぬ。それと共に新らしい人の代つて來る事が又意外に多いであらう。而して蘇生した横濱を眞に復興する者は、從來の濱ッ子であるか新來の新進氣鋭者であるかゞ更に興味ある一つの問題であらねばならぬ。

這回の如き大災害に逢つて尚ほ横濱を離れない者は、必ず横濱を愛し、横濱に遠からぬ執着を持つた者で有らうし、見捨て

たゞ[illegible]ッ子であらう。之れは横濱に取つて喜ぶべく祝すべき者に相違ない。と同時に在來の人士の舊習慣に囚はれないだけ、克く大觀して缺點と長所を認めるの行らう上に其新鋭の力を以て積極的に活動するものと見れば、之れは一層頼もしい人達であるかも知れない。新來の人士と、在來の居住者とどちらがどれ程の勇氣と智略を以て、大日本帝國の玄關口たる横濱市の復興に盡力するかは實に見物である。今日は横濱としての『維新』である。市會議員も恐らくは少からぬ移動を見るであらう。新らしく代はつた議員達が如何に此の際に善處するかゞ東京と相對比して興味ある問題でなければならぬ

殊に京濱運河といふ大問題があり、東京築港といふ更に大きい問題がある。生糸の前途も横濱に取つて小からぬ問題である。米國の排日は日本の排米氣運と相待つて之れも容易ならぬ問題である。更に一方には關西の神戶に商權を奪はれ、清水の如き生糸の輸出港も出來、東京も芝浦には多數の船舶が出入する樣に成つた。謂はゞ内憂外患交々到るの姿が現在の横濱であらうから、此の際横濱人士は緊褌(きんこん)の上にも緊褌して、禍を移して福たらしめる程度に需業努力せねばなるまい。若し夫れ今日に於て復興に展するのでよかつたら横濱は必らず衰退するであらう。[illegible]全なりを與へ[illegible]其れは衰退の外にはあるまいではないか。よしや[illegible]横に[illegible]も五十年前、横濱[illegible]ら。衰退するものなら衰退の外なく、國家としては他に援助せねばならぬ幾多の都市や港灣も有る事だから、横濱市の[illegible]た大々的の援助にも尚ほ衰退するのを更に投資し强ひても復興發展させねばならぬといふ理屈はないのである。横濱人士たるもの此の際熟慮緊褌を特に必要とする。

それなのに横濱市の現狀を見ると、之れが一ヶ年間を經過しての復舊ぶりであらうかとつく〲情け無きを感ずるので、内務省の原田技監なる者が横濱港を視察に來て、稍や一千萬圓位入れて復舊する事に決定し、之れを横濱市有志の一部に發表したのは昨年の十月の事である。それなのに今日なほ未だ、此の狀態であるのは、其の理由の何れにあるにもせよ甚だ心細いと言はざるを得ぬ。けれども市當局も市會議員も大部分は甚だ眞面目に熱心に、復興を希望し復興に努力してゐるらしいのは、其處に一縷の望みをかけるに足ると思ふ。横濱市民が復興に向つて眞劍であるのは其の災害程度の激烈で有つたゞけそれだけ當然な事なのであるが、政府は宜もすれば東京にのみ[illegible]

いて横濱は忘れ勝ちで有つたとの非難も有つた。或は事實かも知れない、けれども忘れ勝ちならしめるほど横濱市民の言ふ所が政府當局の耳には稀にしか這入らず、聲小さくのみ　えたのでは、それは横濱市民の復興に關する努力がまだ〳〵足らぬ事を證明するものではあるまいか。若し然らずとすれば政府は横濱の復興を多少なりとも閑却し得るだけ、横濱人士に實力が有ると見られたので、甚だ祝すべきである、けれども實地を見れば事實は前者に在るらしいから、横濱としては層一層の努力を要する。而して市は宜しく新來者を歡迎すべきである。立派な商店なり會社なりを築造するにも餘地が有るし、大工場を建造せんとするにも空地がまだ〳〵充分にある。掃部山公園にある伊井掃部頭の銅像も一時は市民の意氣沮喪して殆んど爲す無きを見て憂想を凝かし東南に向つて港内を眼前に見下して居たのが、約三十度ほど北へ、くるりと背後を向けた。それが二度目の地震に於て再び北方へ稍や半分は向き歸つて來た事をして意義有らしめて貰ひたい。市民が今一息の努力で元通りに正面を向かせる事は何んでもないと思ふのである

明治初年の大學東校

法學博士　吉野作造

澁谷正信

數年前手に入れた澁谷正信（號安齋）といふ人の日記を此頃になつて讀んで見る。明治三年七月に始り翌々五年正月に至り、二冊になつて居る。前半に精しく後半は稍々粗だ。筆者は之に「雜聞」第一第二と題して居るが、讀んで見るに正に日記に相違ない。而して三年十月から大學東校に入舍したとある。東校は即ち今の東京帝國大學醫學部の前身たることは申すまでもない。筆者時に年二十。今も生存せらるゝか否かを知らぬ。從つて筆者其人には何の興味をも感ぜないが、書いてある事の中に

一般の大學[illegible]
の二三を紹介しやうと思ふ。

普佛戰爭評

大學入舍以前の部に普佛戰爭を評した一節がある。之も面白いから一寸紹介しておく。始めは佛國に勝味が見へたが、段々普國の大勝となり、『只今ノ所ニテハ普漏生ノ兵勢ハ天下併呑ノ勢』だとある。さて夫からが面白い。『若シ佛蘭私國攻取ラレ候ハヾ英吉利國又諸々ノ國々攻取ラルベク、左スレバ我國モ安危如何ナルカ、實ニ一大事ノ變事ナリ……九月十二日記之』。當時の青年は本當にさう考へたのだらうか。果して然らば我々の先輩の頭が當時如何に深く弱肉強食的國際觀で刻まれたりしかを想像することが出來る。

大學東校

十月十五日の入舍の際の記事に斯うある。『生徒五百人餘ナリ。學規殊ニ厳ナリ。原書寮アリ譯書寮アリ。予ハ譯書寮ニ入ル。生徒九十人餘、月ニ三度ノ入門日ニハ入門人ハ各十人ヨリ十五人ニ過グ。而シテ譯書寮原書寮共七科ノ學ヲ授ケ課シテ以テ[illegible]業セシム』。別にまた頭書に細記して『原書寮ハ十二科ノ學課

[illegible]
主たる教授として[illegible]
の解剖は屢々手つだ[illegible]も生徒の興味をひいたらしい。[illegible]解
剖局ハ壹百五十モ[illegible]家ヲ建テ、此中ニ種々ノ[illegible]ヲ置キ、ボウドエンの指揮の下に生徒も時々手を下したとある。顯微鏡も亦多數生徒の興味を唆つたものゝやうだ。澁谷氏は何れも初めての經驗だと白状して居る。又ボ氏の講義を聞き記せる中に今日の檢温器のことを驗溫鍼と云て居るのも面白い。

外國教師送別紀念撮影

閏十月十日ボウドエン先生歸國に付、本校三寮の生徒丼に教官職員等四百餘人『白山御藥園』に於て送別會を開き、紀念の寫眞を撮る。之がまた大變な騒であつたやうだ。『白山ニ至ルノ途中、四百餘人同シク鳴ニ高聲ヲ發ニ吟聲ハミナ湯島天神ノ登ニ石磴ニ石磴人ミチテ石ヲ看サルニ至ル。時ニ石上ノ聲聲天ニ響キ地ヲ裂サントスルノ勢ナリ。市人之ヲ見テ大ニ怪ミ、處々ノ九逵ニミタサルナシ』は甚だ大げさだ。是れ徒らに誇大の文辭を弄したるに非ず、寫眞をとるといふ當時としては破天荒の一大珍事に若き心をおどらせた結果らしい。『時ニ諸君ノ曰ク、今日コソ吾々ノ容貌ヲ寫シ外國ニツカハスノ時ナリ。何ゾ美[illegible]ヲ持

シ在刀ノ帶シ下駄ノ衣ハヴルヤト。皆々帶刀、高シ衣服ノ着ス」當時の光景睹るが如しである。但し當谷氏は貧乏で洋服美刀を持たぬ。何件の然きを感ぜざるを得なかつたと見え、洋服帶刀なしと雖も滿劍今後の成業を以て國恩に報ずべきのみと力むで居る。やがて白山學園に着く「當是妙簡處々ニ叢ヲナス。園中一ツノ門アリ。是ヲ入レバ乃チ一川アリ。橋ニ代フルニ石ヲ以テス。石ニ沿テ中庭ニ至ル。園ニノ高樓アリ。少助教石黑先生ハ大博士少博士諸先生ト同シク樓上ニ息フ」石黑先生と生徒連とは特に親密であつたらしい。此外他の處々に散見する。「カクスル中寫眞師モ來リ……教師ボ先生亦來リテ欣喜不斜。……暫クノ間ニ寫眞移ル。四百餘人外ニボ師大博士等モ微細ニ寫ル。庭中ノ景色、特ニ寫眞ノ際樹上ニ上リシ人ナドモ、微々細々ニ寫眞ス。……寫眞工器械ヲ堂上ニ置キ、生徒外ニボ氏等同列、皆々船中又松樹上ニ升リシモアリテ、堂前ニ當ラシメ起居適宜、廉定マリ、寫眞師聲ヲ發スル一喝ニシテ卽チ止ム。寫工其ノ處ノ硝子函ヲ持シ、暗室中ニ入リ、久ク出デス。其眞形微細ニ寫レリ」と説明なかく精しい

ボウドエンのこと

ボウドエンは始め長崎病院に來り數百の子弟を薫陶し、夫よ

り大阪に至り教育と治療とに從事し、九月より東京大學に來たのである「其術ニ神妙ノ得ルトボフベキノミ」とあるので、信望の程は知られる。六百ドルの俸給は當時としては最高の待遇であらう。十五日には畏くも 陛下より拜謁仰付けられ、難有物品をさへ賜つたといふ。參内の朝もボ氏は講義を休まれなかつたが、通譯の司馬先生も直ぐ一所に參内する筈であつたらうか、烏帽子直垂で教場に出たとある。尤も烏帽子直垂は當時決して珍らしいことではなかつた。翌年正月七日の新學期開講式の際も、佐藤大博士岩佐大丞を始め大助教に至るまで皆此裝束で講堂に出たと書いてある

十八日ボ氏最後の講義を終へて惜別の辭あり。二十三日は教官生徒晩をおかして同師を品川まで送る。愈々袂を別つに際し、主客共に「泫然トシテ袖ヲ濕ス」とある。僅二ケ月の接觸だのに、師弟の情誼洵に掬すべきものがあるではないか。

此後神田錦町に於て大學南校の雇英人教師二人暴漢に襲はれ一人は脊椎を刺され、一人は右脚を斬らる。共に生命には別條なかつたといふ。物騒な話だ。序ながら記しておく。

試驗

大試驗の掲示が出つて居る。

[illegible]

十一月九日ヨリ[illegible]晦日迄ノ間各科生徒ノ者ニハ[illegible]
シ、後年[illegible]ヲ授クルノ日ニ至リ、右[illegible]ノ用[illegible]ノ多少
ニ由リ階級相定メ候條、前以研究可有之旨、生徒ニ御沙汰有
之度候也

十一月　　　　教　官

舍長御中

右之通達有之候間、日夜憤勉登科可有之者也

庚午十一月二十三日揭　　　　大舍長

生徒中

此頃の試験は口述で三四十項の設問があつたやうだ。

大學東校創立の趣意

「御創立の初め建白書の寫」といふが綴つて居る。どう云ふ性質のものか分らぬ節もあるが、當局の方針が能く讀めると思ふから玆に其全文をかゝげておく、

抑　皇國ノ醫道ハ、上古已ニ　三神（産靈神、大巳貴命、少名彦命）親敷其端緒ヲ垂玉フト雖モ、措テ世ヲ繼テ興起スルニ時ナクシテ、玆ニ漢土ノ醫法傳來候而、時人聞ク是ヲ信シ、遂ニ方技之流ト相成、後世益其途ヲ失ヒ、輓近[illegible]

[illegible]
立、[illegible]外國人ヲ引テ[illegible]
實ニ切歯[illegible]之至ニ御座候、方今大ニ[illegible]之醫法ヲ興
ヒ、至理ヲ撮拾シ、更ニ[illegible]之醫道ニ傍テ獨立シテ遂
ニ各國ニ超越スヘキノ途、稍々[illegible]候處、其目的大略左
ノ如ク體裁ヲ定メ候ハヾ、十年ノ後必彼國ノ人ニ頼ラズ亦
彼書ヲ假ラズシテ、皇國之醫道獨立スベキハ必然ト奉存候

一、學科

第一、度量學　　第二、萬有理學
第三、化學（學科・實驗・有機體・無機體）
第四、植物學　　第五、動物學
第六、礦物學　　第七、解剖學（記載學・比較科・顯微鏡科・組織科）
第八、生理學
第九、藥劑學　　第十、病體解剖學（學科・實驗）
第十一、毒物學　　第十二、病理學
第十三、治療（内科術・外科術・産科術・婦嬰術・眼科・口中科・針科・エレキ科・梅毒科・古今經驗科・健康攝生學・軍務醫事・醫事斷訟科）

右之學術順次ニ履ヒ得テ階ニ從ヒ、スヘク候、然其右之一科

ニ於テモ、其種類ヲ究候時ハ動植生之學ニ御座候間、醫學之儀大ナル一人一家ノ力ニテ學ヒ盡シ得ベキ者ニ無之候。且故ニ偏ニ一科ヲ專門トシテ終此道ヲ其要領ヲ取テ教ユル人可有之候。又各科皆ク其要領ヲ學ヒ得テ治療ニ從事スル人可有之候。然而人才差等ニ從テ之ヲ學ヒ得ルノ法ハ學校ニ在テ存スヘク候。

一、西洋教授五人　内壹人ハ藥局師）

當今之醫學獨逸國最モ盛シク、其中プロイセン國ヲ最長トス。故ニ教師ハ此國ヨリ英語ニ達シ候モノヲ御傭可相成、右ハ六年ニシテ交代セシメ、前後二期十二年ニシテ、專門科獨立之秋ニ至レハ右教師ノ雇ニ及バズ。尤最初三人ヲ雇ヒ候而、學生進ル學校造構之開成ニ從ヒ、更ニ三人ヲ雇フヘク候。

一、語學

普通ノ語學ハ英語ヲ學フヘシ。是語法簡ニシテ學ヒ易ク、其通スル所廣クシテ用多キ故ナリ。然其專門者ニオイテハ廣ク各國之語學ニ通スヘク候。

一、醫生凡三百人

右ハ先藩々ニ布告シ、定數年齡ヲ限ル左ノ如シ。

大藩ハ四人、中藩ハ三人、小藩ヨリ一人宛。十六歲ヨリ十八歲マデ藩中最怜悧ノ才ヲ撰ヒ、六ケ年間東京醫學校ニ出サシム。但シ一人ニ付毎年金貳百兩ヲ藩ヨリ可納候。右ハ衣服・飮食・住居・書籍・器械等ノ料トス。但シ一切學校之法制ニ依リ、其餘ハ隨意[illegible]財ノ可爲事、

一、三百ノ生徒學術順次ニ教ヘ、試業ヲ以テ等級ヲ進メ、得ル凡六年ニシテ可成候。右得業生ノ英材ヲ擢テ更ニ專門ノ學ヲ命シ學校ニ住シメ、自餘ハ皆得業免ノ状ヲ授ケテ藩ニ歸ラシム。

一、專門ノ人ハ一生其科ヲ業トシテ皆ク其門[illegible]ヲ闡シ、日々ニ歷試經驗シテ各科互ニ吟味シ、各學ノ興起ヲ標的トシテ其得ル所ヲ著述シ以テ天下ニ布カバ、是則皇國之醫學ナリ。抑是ノ如クシテ我日新ノ醫學各國ト互ニ頡頏シ、而シテ我カ所爲彼ヨリ長スル所アレバ、既ニ　皇國ノ醫學外ニ對タリト謂フベキニ至ラン歟。

二月（明治四年）　醫學校

之を明治二年九月、[illegible]田直助・井上[illegible]・松田本生三氏の連名で出した「醫道の事に付建白書」（中外新聞明治二年度第三十七號所載）と對照すると面白い。

學生々活

[illegible]
道ノ其段ニシテ、生徒ハ各々國ニ歸リ各々ノ民ニ醫道ヲ開クナリ。而シテ醫タル者ハ上ハ　皇帝陛下下ハ賤人ニ至ルマデ健康ヲ保タシメ、疾病ノ時ハ之ヲ療シテ平復セシムル者ナレバ、心ヲ容ウシテ偏ニ醫道ニ意ヲ注キ、第一ニ理科ニ入リテ次ニ舍密科ニ入リ、夫ヨリ生理・病理・藥劑、次ニ治療ノ科ニ至ルナリ。而シテ博士ノ職ニヲル者ハ生徒ヲシテ勉勵セシメ、生徒ハ各々刻苦シテ其職ニ附クベシ』『此日天朝よりは畏くも生徒一同へ赤飯を賜つた。此頃は朝廷と大學との關係は頗る密切であつたと見え、四年九月廿日の記事にも『天長節に付生徒一統へ御酒被下候』とある。有り難い話だ。

四年十一月十一日石黑先生に誘れて東叡山に遊び、團子坂の藪蕎麥を御馳走になり、淺酌微吟頗る快に入つたといふ記事がある。爰にも師弟の親しみが現れて居る。途中一外人教師の住宅を見、『四方玻璃ヲ以テ障子トナ』せるに一驚を喫したことが書いてある。

五月末の所には、『此頃より高輪小塚原兩處ノ娼家ニ瓦斯燈ヲ始メタル由。予未ダ之ヲ見ズ。其機關最モ妙ナリト云フ』などの文字がある。行燈がランプに代り切らぬ時代のことだ。瓦斯燈は

[illegible]

書籍料　一兩
月俸（食費含衣服？）　二兩
但洋學生ニテハ[illegible]料月ニ十五兩ヨリ二十兩ニ至ルト

出
諸入費　一兩
衣類料　一兩
茶菓子料　一分
器具料　一分

學生取締

先頃岡田文相が學校劇は爾後罷成らぬと訓示したとかで問題となつて居るやうだが、老婆心に出た取締が後から觀て滑稽極まるものゝあるの例は明治四年にもある。學生が連合して新聞を買て讀まうと云つたのを、當局は極力いけないと阻止したことである。曰く『十月初ヨリ内田氏其他二十餘名ト共ニ社ヲ結ヒ、「新聞雜誌」ヲ買ヒ共ニ之ヲ看ルコトヲ始ム。而シテ其社ヲ新聞社ト名ク。追々入社スル者多シ。僅ニ數十錢ヲ費サフシテ余輩ノ智識ヲ開クコト實ニ廣大ナリ。豈之ヲ賞セサランヤ。此時

一月ニ付キ一人二十四文當ニ當ト〃リ、十二月初　内ト氏大ニ新聞社ノ益アルコトヲ賞シ、且他ノ諸君子ヲシテ別ニ社ヲ結ビ「太政官日誌」ヲ買ヒ求メ衆ト共ニ看ンコトヲ勸メ、大紙ニ此事ノ書シテ食堂ニ掲示セリ。然ル處其翌日舍中取締之ヲ見テ、予及其他兩三名を呼ヒ曰フ、諸子文明開化ノ爲ニ新聞社ヲ開キ、設ヒ僅少ニシテ利益多キコト實ニ佳ナリ。然レトモ已ニ舍則ニモ課書ノ外雜書ヲ讀ムコトヲ禁止シアルコト諸子ノ知ル所也。且八十有餘ノ人員中諸君ノ如キ勉强家ニ於テ實ニ文明開化大益ナレトモ、其中不勉强ニシテ只新聞社ノ以ニ業トシ、緊要ナル學課ノ欠クモノナシト云ソノベカラズ。然ルトキハ却テ文明開化ヲ妨クルノ基トナルナリ。故ニ諸子内緒ノ事ナレハ之ヲ止ムルニ及ハサルモ、公然ニテハ右ノ如クナルヲ以テ、今食堂ニ掲示セル大紙ヲ取除クノ以テ、此由一應御談申ト云フ。依テ我輩大ニ論セシモ、其舍則ニ背クト云フヲ以テ如何トモ致シ難ク、又論ニ勝チタリトテ格別益ナキヲ以テ敢テ論セザリシ」。

勉强の邪魔になると云て新聞を讀ませない程の親切な當局が、學生の時に依て大與遊郭を襲ふを黙許したのはいかがなものである。

日記に曰く、「古ヨリ寄宿ニ在リ書生間ニ一ノ風アリ。忘年會ト云フモノ是ナリ。即チ一年ノ苦勞ヲ一夕ノ一興ヲ以テ忘却スルノ意ナリ、十二月廿日、當舍ニ於テ何人ナルカ一文章ヲ作リ舍中ニ觸出ス。……十二月廿日晩ニ上リ新定ヨリ一年ノ辛勞ヲ忘レテ共ニ〈愉快ヲ盡サンコトヲ勸ム云々」と。會費は二分といへば今日の五十錢だが、當時としては學資全額の十分の一に相當する大金だ。筆者は反對の意を述べてあるが、二十三日同勢二十餘名午後三時頃より威勢よく「例ノ桜原樓ニ」行つたといふ。歸りに隣興のあまり兵士屯所の厄介になつたもの六人だけは「禁足仰せ付け」られたとある。

學生自治

七月の條に「東舍生徒會集議會の件」といふのがある。議題は、一つ、曰く賄方粗末之事、曰く小使職員之事、曰く室內亂足之事。決議の結果は、之等の取締一掃の爲相當の措置を加へらる樣、局監（舍監）に願ひ出でたといふことである。

所が數日後、東舍五番局の某氏一番局の某氏の下駄を亂足した。一番の某氏此事を局監に訴ふ。局監の指圖の下に色々議論をたゝかはせ、遂に五番某氏に罰金として金一朱を出さしむ。是れ亂足罰則の嚆矢」の濫觴だといふて居る。

學則改正

「七月十九日御達シ書」の寫といふを書き留めてある。

（大學）[illegible]

（太政官）　大學被廢文部省被置候事

九月二十五日の所に學生一統退校を命ぜられたとあり、十月十五日にはあらためて東南兩校の開校を見、學生一同復歸したとある。此間の關係不明だが、日記にあるまゝをうつしておく。

復歸後の樣子に就ては斯うある。『東校學生ヲ分テ內員生外員生ノ二トナス。內員生ハ成業ノ期七ケ年ナリ。七ケ年ニ至リ生徒ヲ一統ニ試問シ、應答詳明ナルモノヲ一等二等ニ分ケ、之ヲ西洋ニ赴カシメテ猶一層深ク學バシム。外員生ハ成業期三ケ年ニシテ、原書又ハ譯書ニテ研究ス。內員生預科ハ羅甸拉ハ獨乙ノ語學及ビ數學化學ノ四科ヲ學ブナリ』。

獨逸來信

入澤達吉博士が去年の暮に作られた「東京大學醫學部沿革略史」に依ると、明治三年留學生十二人を撰み普魯西國に派遣したとある。多分其の一人であらう。在伯林長井直安といふ人より石黑少助教に宛てた手紙の寫か載つて居る。斯種の手紙が學生の研究奬勵の爲とてか廣く見せられたとすると是亦面白い話だが、夫よりも伯林に着いてからの長井氏の感想になかなか味

よ。[illegible]聞きたいのである。

渡米之節ニ同伴候得共、[illegible]。二月二日サンフランシスコ港ヲ發往、ロッキー山ヲ越へ、四日拂曉ヲクデンに達し、鹽湖シチー（ソルトレークシチー）（四時間の行程也）。此地温泉あり。五日晩再びヲクデンに歸、直に同處を發し、此日雪にて四方之望殊宜し。七日ミッショリ河を蒸氣船にて渡り、ヲモツハに達し、八日ミスシツピ河の橋上を過ぎ、午時過チカゴに達す。此町三十年前より開拓せる處なれども、鐵路四方に通じ繁華我大阪府に比すべし。九日朝、十日書籍の名處ヒラデルヒヤに達す。此府はニューヨークに次ぎ繁華にて、學校病院等も多くあり。殊に病院は米國中最大にて、名醫哲匠皆此府に集り居る由に御坐候。華盛頓府に達す。森少辨務使え行、案內を遂げ、不斗伊藤大藏少輔周旋にて、此國の大藏省議事院等を一覽す。實に壯大なり。議事院は總て各種のマーブル石を以て造れり。美麗眼を奪ふ。實に壯觀なり。此府は商家は甚だ少く、專ら政務に關する家のみにて、閑靜の地にして略我京都の趣あり。十二日夜同處を發し、翌十三日拂曉ニユーヨークに着く。此府は人家も多く、ブロードウエイ（本通

の馬車往來は東京人の車の如く、其長日を消し候事。鹿兒島藩醫生前田杏齋府に留學罷在、病院へも通勤いたし候由なり。廿日迄滯留いたし、同日夕四字にニユーヨーク港出帆、太西洋海も殊之外靜にて、四月朔日夜英國リバープール港に着、翌二日十一字同處を發し、龍動府內龍動橋頭の逆旅に着、不斗柳河藩曾侍の居、一覽に參り候。實は天之之雅觀なり

同行十二名之內、兒長澤一郎（山口）、林均作一郎（大垣藩人は米國に留り候、河野光太郎・小野利介・岡倉金吾・富田貞二郎（以上山口）、丹羽重之助（佐賀）、小野權之丞（日向ノヒ）、前々薩藩の人と申は此人の同道なり。柳川藩信藤頭郎、福岡竹內吉兵衞、明治大藏省田保之九人に別る。九日夕七字上野大藏大丞・吉見山口と同く龍動府を發し、翌十日曉ベルシュムに着し、其夜フランクフルトに着、十二日夕七時半、上野南部人に別を告げ同處を發し、其夕始めて獨行にてベーリン府へ着。直に　當樣の御宅へ行、青木周藏宿等に付、其夜御宅に一泊を願、其日佐藤を問、直に池田大深に進ひ、互に無事を喜び且始て安堵仕候。

右之通の始末に同行之者を得、フランクフルトへは上野南部人の心配にて參り、伯林迄中の心配故、大に仕合の事に御坐候。御安心可被下候。然し右都合侍合杯にて不斗日延、長々の道中には頗る俗申候。御察し可被下候。

右の通にて米國東道にて荷物の模樣彼是の處は何も心得不申、可申上樣無御座候。但し米國は道中の一番物價高貴の國にて、成丈此國にては物は買ふべからず。實に容易金錢を費すなり。書籍等に至迄一切高直にて、廉なる品は何一つなし。可恐々々。龍動は稍廉なりと雖も、此地には不如。此地書物價も廉に、人も簡易にて質朴之風あり。學生には至當の地なり。龍動之繁昌は最早極なり。佛國の敗も佛國の爲に非す。

當月二十九日（西六月十六日）佛へ出し兵も總引上に相成、既有之際々敗樣子に御坐候。今より右兵士通行前之二階ニ階之家は皆切に相成り、一層に付百兩に近き樣子に御坐候。佛蘭內にては、に協和政の黨と帝王を再立する黨と互に爭ひ、帝王立る論の方は失敗に及ひ遂、此比にては築に成り、處々火を放ち、宇內最美の都も四分の一は灰と成り、人民も其爲之火に死する者六萬に及べる由。實に可憐次第なり。佛帝ナポレヲン父子たる者共に龍動の郊外に閑居の由に承り候。日本の風と事變り、何の事やら一切わから

す。

言語不通故、道中筋々の風俗も十分ケ解ず、甚だ安全に御坐候。學生幼年の徒には必す言語の能く通じ候様御世話被下度偏に奉願候。

未た學には懸り不申候得共（尤も兩三日之内には居處も相定り且つ師匠も定り候筈なり）、是迄の様子承り候て、老人は固より大成の望み難きは勿論なれとも、小成の望みも如何と甚心配罷在候。此後成丈幼少にて英才之者御指越奉願候。實に日本にて想像いたし候と大に事違候様子にて、サスガの大澤も頗る嘆息居申候。當地のプロヘッソル杯の學力と云ふ者は、實に勢虎の如き者なり。學校病院等　模様は未た昨今之事故何も相知れ不申候得共、様子承り候に、寄寓生と申者等は一人も無御坐、日本の模様と大に異候様子にて、當時の日本學校に被行候様の規則も無之様子に御坐候。尚追々承り及候得ば可申上候。規則の模様寛にして、總て學を好者に處する法にして、日本の生徒の如き學を不好者を處するに益ある法の設け有るを不聞。實に羨むべき事に御坐候。

相良氏或日市中を歩行するに、十一二歳の小供走來り手を握り語て云ふに、汝何時來りしや、且つ何學の爲に來りしやと云に付、[illegible]けるに、其子は云ふに、我は今日[illegible]學を[illegible]と云ひけり。兩學の一二件を問に、能に答ふる由に付て、相良氏も頗る恐れ候様子に承り候。之を以て御推察被下、斯て日本より右等之様子は承り居候得共、此度來臨に當以來、十一二歳の小供に同車同船度々いたし、我も彼よりも聞し事件一々不容易。實に歎息仕候。日本にも右様相至候様御盡力御周旋偏に奉願候。渡洋以來骨髓に徹し恐れ且羨しきは、如此幼少之小供の才智と教の行届候關係なり。

當府も餘程日本人之數相增し、私共にて三十六人に相成り候。米國佛英當府合して二三百に近く御坐候。未だ宿屋住居にて何も手に付不申、今日大澤參り、終日御地の噂而已仕候。早く業に付申度待居申、一兩日間には青木氏周旋いたし與候筈に御坐候。當便は先右の噂まで、尚餘期後音候。恐惶謹言。

未四月十八日

長井直安

石黒少助教様

二陳、薄暑の候御自愛御勤學專要候。乍失敬相良先生始諸先生へ宜敷御申上奉願候。彩師も強參り候様相成

り、只今追々御繁多に被爲入候半と奉察候。私共は未だ對面不仕候ホフマンは、容貌を見至て穩の人に相見樣子承り候に頗の通り穩なる人にて、此度御地に參り候も甚心配仕罷居候樣子に承り候。此度の兩人は當區にても隨分評判宜敷樣子に御坐候。

ホフマンはミュルレルと共に當國政府の推薦に依り來朝せる屆教師、六月着任せしものである。七月十六日講堂に於て就任式を舉げたが、其際の訓示を諸谷氏は斯う書いて居る。「我等此度國王ヨリノ命ニヨリテ來ル者ナリ。國王ノ曰ク、此度日本國ヨリ醫學ヲ開拓スベキ人ヲ求ム由テ貴國ニ賴ムト申來ル。因テ今命シ汝日本國ニ遣ハス。能ク醫學ヲ開拓スベシトノ命ナリ。之ニ由テ我等妻子ノ家ヲ捨テ來レリ。醫學開拓致候上ハ、此上ニテ相果テタリトモ不苦云々」。

寄獨逸通信はもう一つ面白いのを載せて居る。之は明治三年十月四日（西暦十一月廿九日）伯林發信で、原作僊といふ人が長兄原裕民氏に宛てたものである。諸谷氏が之を書き留めたのは全く別の意味からであるが（それは必要なければ茲には述べぬ）、我々に取つて興味のある點だけを次に摘錄して見よう、

「上略」、扨八月廿八日橫濱港に於て亞米利加飛脚船に乘り、卽日解纜。太平海を過ぎ。米國サンフランシスコ港へ九月廿三日入港。日本を去ること三千里（日本里程千八百里餘）。夫より陸地、翌々廿五日火輪車に乘り（火輪車は卽蒸汽車）、サンフランシスコを發す。十月三日米國ニユーヨルク着。此間三千里餘（日本里程千八百里餘ニ當ル。僅ニ七日ニ走ル。其疾キコト如箭。一トシテ見留メ候モノコレナシ。實ニ其速カナルコト名狀スベカラズ）。海路、ニユーヨルクに於て碇泊、十月十一日英國ロンドンへ入港。此間二千五百里餘。此地ニ十三四日滯留（今般方今遊學ノ國ハ佛國ト戰爭中ニ付、其安否探索ノ爲滯留ス）。夫よりロンドンを發し、十月二十七日當普漏生都府ベルリンへ無事安着。不日にして第一等醫官及プロヘセル官シモンズと云大先生へ入門。日々研學罷在候間幸に御放慮可被成候。（中略）。船中の入費多分相掛り候者に御坐候。館衛に付、洋銀十百枚余相掛り申候（我國七百五十兩餘）。且年々の修業金も洋銀八九百枚斗り相掛り候（我國の千兩也）。中々自力の及ふ所に非す。不肖の晋藩幸に天命に應れ、其助力に依て十分の修業仕候、其恩も亦深し。……時勢一變御交通之上は、洋學に非れば不相叶。且洋學は洋行に非れは其奧妙を得ること能はすと存候。就ては舍兄にも精々御工夫被遊、十分に蓄財被成、是非令息は洋行修業被為在度、多分最早十歲に相成候と存候間、洋學は速に仰、十二三歲に相成候はゝ洋行被致度者に御座候（下略）」。

議會最後の壹週間

石川半山

七月十二日迄の帝國議會日記を書いて、それが前號の『中央公論』に掲載されると、多くの友人から、種々の手紙が來た、七月下旬愛知縣下の各地々遊說中、諸處で此の文を讀んだ人々の訪問を受けた、八月一日歸京の途次、東海道の列車の中で、大阪時事の社長　島勘次郎君に邂逅すると、彼れも議會日記を讀んで、面白く感じたさうで、『君は議會に於て雄辯を揮うよりも、あの議席に坐して、あんな風の批評文を書いた方が適任かも知れぬ』と言つた、相島君も曾て代議士で有つた男だから、外の人よりも一層興味を感じたのかも知れない、兎に角舊友新知が、そんなに讀んで呉れると知つたので、十三日以後の一週間の日記を書くことにした。

七月十三日（月曜日）

此の日、貴族院は再會して、復興債券や、關税改正や、小作調停や、二重國籍の解決等の重要法案を、ドシ／＼流し、東總男や山脇老人が、大に論じたさうだが、衆議院は休會で、一日休む。

晩には帝國ホテルで下岡忠治君の送別會が有つたから、出席して見ると、加藤首相を始め、若槻、濱口、仙石各相も列席された、下岡君は明日出發、朝鮮の新任地に赴くので有る、此の宴會の席上、本日貴族院の豫算總會の席上、阪谷芳郎男が不穏の言を放つたと云ふ話をする人が有つた、『衆議院か貴族院の改正に容喙するのは、破天荒の事で、不愉快で有る』と阪谷男が言つたとかで、怪しからぬ事を言つた者だと激昂する人が有つたら、或る人は、『マア／＼そんなに憤慨し給ふな、阪谷が不愉快なのは、岡田が文相になつて、自分が入閣が出來なかつた爲めだ、寧ろ憐れむべしだ』と言ふ人が有つた、

『それでは早く樞密院へでも入れたら宜しからう』

る先年一度、枢密顧問の交渉が有つたが、當人はモウ一度大臣になりたい望みも有り、社會的に働きたいので、拒絶したさうだ。」

内「さうだらう、枢密院は大官の食へない奴を、葬むる所だ、阪谷などは食ふに困まらぬから、イヤだらう」

七月十四日（月曜日）

本日も衆議院の本會議は休會で有つたが、請願委員會へ出席した、外にも力を入れるべき案が多少有つたが、僕が此日出席したのは臺灣議會設置の請願に聊か加勢をしてやりたいと考へたからだ、紹介議員神田正雄、清瀬一郎の兩君が、熱心に論じたにも拘らず、大分成行が悪るかつた、本案は前回に不採擇となつたことが有るので、種々の議論が現はれた、僕は若し採擇にならぬなら、せめて參考送附にでもしたいと述べたが、何しろ臺灣の當局者が、此の席に居らない、臺灣は今以て專制主義の地方と見えて、役人が我儘になり、帝國議會に於ても、自分の氣に入らぬ所へは、顔も出さない者らしい、當局者が居らないので、其の意見を聽かない内は、採否を決することが出來ぬと云ふので、延期になつた、敢て多言を費やすを要しない、こんな誠意のない役を、臺灣に置いて居ては、臺灣人が困まるのは無理はない、臺灣を專治の地方とするのは、總督府の役人の無誠意で有ると云ふ者が有るが、實際其の通りだ、臺灣議會の設置請願と云ふことは、多くの請願中、出色の者で、其の議事中に政府委員が、之に出席しなかつたと云ふことは、許す可らざるの怠慢で有る。

七月十五日（火曜日）

◯昨日頃から貴族院が壁になつて來た、少しく狼狽した男は風雲急なりなどと、逆上した聲を放つて居る、靑木信光子とか水野直子とか、研究會の有力者が、何かコソ〳〵やつて居る樣だ、僕はどうせ貴族院は、大した反對はなし得まいと、高を括つて居た、又若し貴族院が分外の妄動を行うならば、僕等は民衆を背景として、大に戰ふばかりだから、覺悟は既に定まつて居るのだ、然かし院内の空氣は、何となく落附を缺いて居る、代議士總會に出席すると、淺賀長兵衛君が大聲疾呼して、貴族院を攻撃して居る、彼れの雄辯は、度々聞いたが、此の貴族院の態度を攻撃し、幹部に警告をした雄辯は、舌端火を放つの慨が有つた、若し政府が優柔不斷にして、貴族院改革の鉾を収めるが如きこと有れば、我等に決心ありと迄の言を發したが、壯快で有つた、かゝる場合老練にして議員の間に信用あ

[illegible]

[illegible]すべきことはないと心配したので、[illegible]したる結果は、大に緩和されたが、イザとなると、政府には強い人が居る、[illegible]君も其の一人で有る。

竹内友治郎の質問演說

本會議が開かれると、演壇に一人の男が登つた、此の忙かしい世の中に、極めて悠然たる態度で、『エー其の諸君、それは何で御座います』とやつて居る、演題は『經濟革新に關する質問』と云ふのだ、誰れかと聞いて見たら、竹内友治郎君と云ふ人だ、彼れは田健治郎君が臺灣總督の時に用ひ、其の山本内閣の時に、農相となるや、彼れを次官に登用した男で有る、官吏としては、相當に事務の出來る人かも知れぬが、演說は下手な者だ、其の内容を速記錄で讀んで見ても、感服すべき所はない、無用の冗辯だ、此の短かい議會、時間の尊い議會に、かゝる愚辯を、一時間以上も許して置くのは、不經濟の甚しい者だと思ふたが、彼れは政友會所屬の代議士で、與黨三派の交情上、憲政會からは誰れも野次を飛ばさないことに、特に豫じめ院内總務から野次をやりさうな人々に注意が有つたさうだ、かゝる際には、無所屬なり本黨なりが、十分に野次を飛ばせば良いの[illegible]

[illegible]して、[illegible]にしくと、[illegible]

甲「あんた者が[illegible]政務次官では、[illegible]にはなるまい」

乙「まあ[illegible]に[illegible]の[illegible]に向て講義をする積りでやつて居るのか」

暫らく立つて、議席に歸ると、竹内君は未だ何かやつて居た、本黨の原惣兵衛君が『モウ良い加減でよせ』と大聲で、野次を投げ附けたのは、同感で有つた、惣兵衛君も決して輕蔑した者ではない、時々傍聽が共鳴する野次を飛ばすことが有る。

横山君の快辯

竹内君の陰欝なる質問演說に代て、横山勝太郎君が登壇して、其の得意の快辯を揮つたのは、溜飲散じて快味となつた樣な心地で有る、横山君の質問は、代議士の特權に關する者で、提出者は横山君外一名、贊成者の記錄に載つた所を見ると、かく申す石川外三十三名で有る、議員を選擧法違反などで、頻りに逮捕して、議會へ出席することも出來ない樣にするのは怪しからぬと云ふのだ、これは第一議會の森時之助以來、時々問題になることだ。

横山君の質問演說が終ると、横田法相が演壇に現はれた、仁

本彌正の如き、苦味の有る前附きで、討論はキビ／＼して居た、横山君との一問一答で、戦ひは物分れとなつたが、これですつかり氣分がなをつた、竹内の愚劣な演説で、議會の空氣が腐れたが、この清涼劑で、大分良くなつた。

田淵君の懲罰

そこで秘密會となつて、田淵豐吉君の懲罰事犯の討議が行はれ、彼れに謝罪文を讀ませることになつた、此の秘密會の間にも、種々書きたいことも有るが、秘密會の事だから、書かない、唯懲罰委員長横山金太郎君が、詳細に委員會の經過を報告したが、なか／＼得意に見えた、秘密會が済んで、田淵を中へ入れて、いよ／＼謝罪文を讀ませることになると、彼れは登壇した、男らしく謝罪文を讀んで仕舞へば良いのに、唯今衆議院から私にかう云ふ文句で讀めと云ふことで有ると言て、其の文を讀んだ後、尚グズ／＼言ひ出したが、終に久俤と逆上して、院議に反對すると叫けんだ、そこで議長は止むを得ず、彼れを再び懲罰に附することを宣告した、先日彼れは『田淵は首をのべて待つて居るから、早く處分をして呉れと横山君に傳へて呉れ』と僕に依頼した程で有る、横山君が彼れに謝罪文を讀ませることに決したことを彼に話した時も『それは讀むまい』と言つたら、横山君は『イヤ讀むさうです』と言つた位で有る、横山君は彼れに確かめたらしかつた、然るに讀むのは讀んだが、讀んだ後に何かグズ／＼言つて、終に反對と言つたのは、壇上で一時の發作の然らしむる所かとも思ふたが、後で聞くと、或る人が『斷じて屈す可らず』と彼れを煽動したと云ふことだ、それがために四日間出席停止と云ふ、一層重もい懲罰になつた、彼れは之に依て、賣名の目的を達し得たことを喜んで居るのかも知れぬが、こんな愚劣なことで、新聞で書かれた所が、賣名にはなるまい。

農村振興建議案

此の懲罰騒ぎが済んだ時、農村振興建議案が議題に上つた、其の同じ建議案が、政友本黨と與黨三派と、別々に提出されて居るのだ、政友本黨の方は、農村振興の事よりも、加藤首相の施政方針演説中に、『農村』と云ふ二字がないから、現内閣及與黨三派は、農村振興に冷淡な者であると云ふのだ、之を説明したる田モス事、川原茂輔君は其の趣旨を持つて、政府と與黨を攻擊し、先づ『現代の日本で、農民の味方は政友本黨の外は、御座りませぬ』と云ふ口吻を弄した、そこで其の次の同じ題目の建議案では、憲政會の高田耘平君が登壇して、正面切つて農村

[illegible]士二號も、[illegible]すべき[illegible]の有る者で有つた、[illegible]君の演説と、高田君の演説とを比較したばかりで、其れが農[illegible]問題に忠實なるべきが分かる、『田舎の百姓だつて、ハア馬鹿にしねいもんだ、議會の速記錄位は、田の草を取る間にも讀むだア、讀めばハア分るだ』と或る農民代議士が、高田君の演説を褒めながら言つた、高田君は其の態度も立派だが、其の頭腦も良い。

七月十六日（水曜日）

議會もだん／＼閉會の期日が切迫するに從て、議案の數が殖える、本日の日程に上つた者を見ると、議案の數が、九十九と來た、之を見たばかりでもウンザリする、況んや其の九十九案の項目を見ると、揃ひも揃うて、賣名案に非れば、御土產案である、彼等はそれを悉く國家の爲めに、緊急必要の案件と稱して、頻りに辯ずるけれど、其の多くは、兎ても靜聽して居られない、野次連も野次を飛ばす必要を見ない程で、案外に議場は靜肅で有る、提案者の說明も、中には脫線して、下らないことを長々と辯ずるのも有るが、多くは簡單に切り上げ、進行係佐久間耕逸君と議長とでサッサと片附けて往く。

長岡將軍の航空論

土井權太君の[illegible]有林野の[illegible]と、小[illegible]で、一[illegible]た、入れ代つて八田宗吉君が國有林野所在地へ[illegible]で、詩に[illegible]て居る内『五十年間東北の民が泣いて重税に苦しんだ』と、堅を張り上げた、此の一席が終つた時、長身で白いカイゼル髭の長岡外史將軍が現はれた、演題は『飛行事業擴張に關する建議案』と云ふので、將軍のお手の者だ、將軍が代議士となつたのは、恐らくは此の演説を衆議院の壇上でやりたい爲めで有つたらう、彼れは悠々として、日本に飛行機の發達した歴史から說き出した、明治四十二年桂内閣の陸相寺内正毅氏が、六十萬圓の豫算を取て、航空研究會を設けた時からの事だが、話は至て上手で有る、聲も能く滿院に徹し、特にジェスチュアが一種奇拔で有る、飛行機の襲來することを語る時などは、兩手を伸ばして、恰かもプロペラの如くにする、聲の抑揚から、手振り、身振り、なか／＼隅に置けない雄辯家で有る、特に外國の空中劇のことから、米國の航空路の話などは、マルで劇中の人の如くに面白く說いた、種々語つて居る内に『或は政治家諸君に於ても、初めてお聽になつたことで有るかも知れませぬ』は過言で有つた、將軍自身がこんな演説を繰り返すことは、度々で

有て、代議士中の或人は、此の同じ様な演説を、將軍から三度聽いたと云ふのも有り、大概は二度位聽かされて居る、將軍から聞かなくても、海外の飛行機の情況位は、代議士中で知らない者は少ない。僕の如きも、大正八年佛國パシユロープの陣營に於て、米國第一軍司令官リゲツト將軍の客で行つた間に、サムソン式の飛行機に乘つた經驗も有り、代議士が飛行機の事を、何も知らぬと思ふのは、將軍の誤りで『初めて聽くか』とは、隨分人を馬鹿にした言で有るが、然かし先づ老人の事だから許して聞いて居ると、隨分なが〱と封じられた後、空中輸送會社の設立を奬勵し、之に相當の補給利子を下付すると云ふ一段になつて、大將將軍の言論の權威を毀損した、或る代議士は憤然として『將軍は國家の爲めに論じて居るのか、又は營利會社の補給利子を得んが爲めに論じて居るのか』と私語して居た、航空機製造の奬勵位迄で止めて置いたら、將軍の演説は、モウ少し深く各代議士や傍聽人に印象されたらうが、會社設立利子を補給と來て、少しく變になつた。

同じ議案が二ツ

帝國議會の表面に、政爭の弊を、露骨に示して居るのは、同じ議案が、二個宛現はれて居ることだ、本日の議事九十九件の内、第六は諏信鐵道速成に關する建議案で、第七も同じく諏信鐵道の速成建議案だ、唯第六は樋口秀雄君外二名の提出、第七は倉元要一君外二名の提出で、提出者が違ふばかりで、同じ事を言ふのだ、樋口君が先づ説明して、倉元君が又同じことを繰返へした、此の鐵道は諏訪から信州飯田を經て、辰野へ通ずるので、倉元君は靜岡縣への御土産、樋口君は長野縣への御土産で、別々に出したものだ、樋口君は憲政會で、倉元君は政友本黨で有るが、こんな問題は、關係地方の代議士が協定して、一案だけにして、手數をかけない樣にしたい者だ、同日第九は用排水幹線改良事業費國庫補助に關する建議案だが、第十も同じ問題に、第九で政友會の加藤知正君が説明すると、第十は憲政會の建議、瀨吉博士が説明したが、博士は何故にこんな小案に多言を費やさず、加藤君の趣意と同じだから宜しく頼むとアツサリやつたのは、評判が良かつた、然かし政友會と憲政會で、同じ地方的問題の提案を爭ふては、感心しないことだ、地方の土産案ばかりではない、横濱の代議士で、若尾幾太郎君と平沼亮三君が、京濱運河開鑿促進の建議案を、別々に提出して、別々に説明したのには驚いた、兩君共に新進有爲の人物で、物の分かりの良い人々だが、それがブクの拔けない田舍者と同じ様に、別々に提案は恐れ入つた、抑も京濱運河の如きは、各派

各派が聯合して、一の提案に旗して往く程の結合せないことも、なか〳〵容易に實現の六ケしい案件だ、それが若尾君と平沼君と別々で往く樣では、いくら促進を叫けんでも、政府が之を馬鹿にする虞れが有る、尤も若尾君も平沼君も共に登壇せず、自席から簡單にやつた所は、流石に日本第一の貿易港の代表者で有ると感服した。

武藤君の懲罰

請願の案件を一括して、一瀉千里に片附けると、秘密會で武藤君の懲罰案が議題となつた、議會はこれ迄武藤金吉君を懲罰に附したことが有るが、金吉君は近年大紳士となり、大に自重し、將來の農務大臣を以て任じて居るので、生來の癇癪玉を抑さへて、懲罰事犯などは起さなくなつた、そこへ武藤山治君が新に議會へ這入て來て、忽ち金吉君の古るいお株を繼承して、懲罰に附されたのは、奇觀で有つた、此の大紳士、此の大實業家、而かも德の君子人として知られ、時勢に感奮して、巨萬の富を投じて、政界の大革新を企圖した人が、懲罰事犯を惹起したのは、武藤君自身は如何にも心外の事で有らう、僕は彼れの顏を見て居る內、氣の毒になつた、然かし大勢如何とも救ふに由なく、彼れは議員となつた、賣名の徒には、何でも有るまい、武藤君自身も、心中に[illegible]ないで有らうが、然かし再びすべきことではない、實業界の[illegible]云ふ者をして、天下に重きを成さしめるには、武藤君は更らに堂々たる態度を以て、天下の民心を指導する道に出づべきで有る。

七月十七日（木曜日）

此の日も本會議は有つたが、相變らず、議案が多い、質問十一件の外に、法律案一件、建議案九十一件と有る、議場の炎熱は、常人をして坐に堪えざらしむる者が有る、開會先づ加藤知正君が、阿賀野川改修の質問を始めた、此人は昨日用排水幹線改良の國庫補助で、一吹き吹いて居るから、賣名の目的も達し、選擧區への土產も出來た筈だ、然るに用排水幹線の方では、建部博士と云ふ競爭者が現はれて、加藤君の專賣にならなかつたので、更らに阿賀野川を擔ぎ出したのかも知れぬが、少し土產を欲張り過ぎた樣だ、彼れの演說中途で失敬して、喫茶室へ往て、暫らくして議席に歸つて見ると、壇上には章魚入道の如き男が立て、何か大聲を發して居る、言ふことはトンチンカンで、無學の爲めに妙なことを言つて居る內、野次が『南京蟲引込め』と言つた、南京蟲とは奇拔な異名で有る、全體本名は何と云ふ男か、

問ふと、愛知縣で馬方から出身し、前科一犯も有る男で、三輪市太郎と云ふ本名だが、三輪の市、又は南京蟲で通つて居ると教へて呉れた人が有つた、南京蟲とは如何なる意味かと問ふと常に人の膏血を吸ふと云ふ意味も有るが、彼れの容貌風采が南京蟲にソツクリだからだと云ふのだ。成程、僕は眼が悪るくて良く見えないけれど、さう言はれて見ると、彼れの顔から風采が、南京蟲に似て居る所が有る。『清浦内閣の時には、六百萬圓農村へ貰へる筈で有つたが。あれはどうなる』とか、『加藤首相は農民に冷酷だ』などと、途方もない事を言ふ者だから、議場は此の南京蟲を中心として、大騒ぎで有つた。

何でも加藤知正君の阿賀野川と、此の南京蟲の農村救濟策の質問の間に、川崎信敬、植原悦二郎、[illegible]次郎、今村勤太郎諸君がやつたさうだが、中には耳を傾くべき者も有つたけれど多くは聞かない方が幸ひで有つたさうだ。

農村振興で一ト騒ぎ

質問が終つて、いよ〱日程に入り、大正十年度決算が議題となり、委員長小橋藻三衛君、明快に報告して、直ちに決定、それから農村振興の建議案で、途方もない騒ぎを演じた。

政友本黨は此の農村振興で、一騒動を持ち上げようと企圖して居たのだ。前日議題となつて川[illegible]君が説明した時も、[illegible]振興の爲めではなくて、加藤首相の施政方針の演説中に、「農村」の二字が無いと云ふので、現内閣及び與黨三派は、農村に冷淡なる者で有ると云て、喧嘩を吹つかけて來たのだ、與黨三派で出した、建議案も、同じく農村振興に關する者だから、同じ委員に附託すると、政友本黨は何も農村問題を親切に考慮する積りはなく、唯言ひがかりを附けて、喧嘩を賣りに出でたのだから、委員會へも餘り出席せず、偶ま出席した者は、皮肉なる質問と政府攻撃ばかりで、本黨提出の建議案は、ロク〱説明する者もなかつたのだ、そこで委員長降旗元太郎君だ、其の經過を本會議で説明しかけると、本黨が騒ぎ出して、「降旗の言ふことは嘘だ』と言つた、壇上の降旗君が怒り出して「嘘とは何だ、無禮なことを言ふな』と叱咤し、更に『川原とも有る者か、其の態は何だ』と叱かり附けたので、本黨側は問題となり、終に報告を中止し、其の結果だけを言ふ様なことになつた。

本黨ではどうせ少數の事だから、何とか結束を押して、與黨三派に多少の傷を負はせさへすれば良いのだから、先づ修正案を出して見た、それが否決になると、それなら與黨三派の建議案に贊成だと云つて、最後には起立した、最後に[illegible]成する程な

ら、何らおとなしき[illegible]其の中一番劣なことだ、此の次いで、一番馬鹿を見たのは降旗君で有る、松田源治君を筆頭として、多くの人から、降旗委員長の不公平なる報告』と言はれて、如何にも彼れが横暴をした様に評判されて居るが、全體降旗君は温良恭謙の士で、寧ろ横暴力が足らない男だ、本問題の委員長としても、餘りに公平に過ぎたので、本黨の惡戯に引つかかつたのだ、世の中には最も公平な男が、公平にくと心がけて、却て不公平の譏を招くことが有る、本日の降旗君の如きは、正さに其の一例で有る。

七月十八日（金曜日）

本日はいよく最後の日である。日程は百〇六と來た、見渡した所、大事件と見るべき者はいくらもない、唯貴族院改正の問題が有るので出席者は多い。

小泉副議長

開會の際、議長席を見ると、小泉副議長が居る、全體副議長は議長の差支へた時に、之に代る者で、ホンの時々議長席に坐する者だが、小泉君が副議長に當選以來、彼れが議長席に坐して居る日は、頗る多い、僕の記憶に依ると、六月二十日は小泉君一人で守つた、七月二十一日にも[illegible]谷君に代つた、八日には小泉君が一人、十一日には[illegible]分で、途中から小泉君が代り、武藤山治君の[illegible]の時は、小泉君が議長席に居た、十五日は又小泉君一人で務めた、而して此の十八日には小泉君が最初にやつて、途中から粕谷君に代つたが、全體を通じて、餘り副議長が務め過ぎる様だ、此の特別議會の本會議が開かれたのは、合計十三回で、粕谷議長が一人で務めたのは六回、小泉君が一人で議長を務めたこと三回、而して殘る四回は、粕谷君が半分で、小泉君が半分だ、僕は明治貳拾三年以來の議會の事を知つて居るが、こんなに議長を多く務める副議長を見たことがない、これは確かにレコード破りで有る、此の次の通常議會も、若しこんな風に小泉君が度々議長を務めるとしたならば、副議長の報酬だけは、モウ少し値上げをする必要が有る、特に其の議長振りが、なかく手に入つた者で、どんなに議場が騒いでも、顔の一線をも動かさず、泰然自若としてキビくとやつて往く所は、流石は良い度胸だ。

武藤金吉君の蠶絲論

今日は最終の日だから、これ迄に餘り演壇に立たなかつた連中が、頻りに飛び出す、[illegible]

が、一寸簡單に一言でも吐きたがる、種々の人が現はれた樣たが、其の姿は目にも止まらず、其の聲は耳に徹しなかつた、議席に坐して居れば、見たい積りでも、壇上の人を見ないわけに往かないが、次室の側で、雜談でもして居ると、日程は知らぬ間に進行して往く、馬鹿に大きな聲が聞えるので、聞えた演壇の方を振り向くと、武藤金吉君が得意の蠶絲業の根本政策と云ふ所で、一席を辯じて居る、「全國の農家五百七十萬戸の中、養蠶を行ふ者、實に二百萬を越へて居る」と言て、大きく一トツ咳拂ひをした所は、將來の農務大臣を以て自任して居るだけ有る、「當蠶絲業が僅かに數千萬圓の金を積んで、十萬梱乃至八萬梱を買入れゝば、世界の相場を左右することが出來る」と話は益々大きくなり、それから進んで佛蘭西のサルドマンが人造絹絲を發明したことを說き出したので、僕は彼れの舊友として心中聊か危ぶんだ、夫れ佛蘭西は伊太利の隣國ではないか、彼れに取てゼノアは一大禁物で有る、外國の例だけは、止せば良いにと思ふたが、幸ひに英國と瑞西と獨逸と來て、一ルを伊太利に入れなかつた所は、彼れもそれだけは注意して居ると見える、米國のエヂソン博士の說を引いて、立派に結論を附けた所などは、どうして堂々たるものだ、人は進步する者で、武藤君の如きは、昔のムト金時代とは違ふ、今日は押しも押されもせぬ政治家で有る。

増田、由谷、太田諸君

武藤君の演說に對して、農商務次官三土忠造君が登壇した、其の終りの頃から失敬して、喫茶室へ往つて、歸つて來ると、其の間に、各派の人が、大分澤山飛び出したさうだ、外は兎も角、増田義一君の演說だけは聞きたかつたが、何でも簡單な者で有つた樣だ、小學校教員國庫支辨に關することで、例の能辯で、頻りに喝采を博收したさうだ。

僕が議席に復してからでも、續々と演說が有つた、鳥取縣の由谷義治君が、其の議席から簡單に千代川改修の事をやつたのと、太田信治郎君が同じく議席から東京灣速成をやつたのは、要領を得て居た。

箕浦老先生の登壇

午後三時頃になると、いよ／＼日程を變更して、貴族院改正建議案に入つた、政界の長老、箕浦勝人先生が七十歲の老軀を演壇に運んで、眼鏡を取り出して、原稿の一部を讀みながら論ぜられたが、滿場水を打つたる如くに謹聽した、此の謹厚の君子人たる箕浦先生にして、貴族院改正の必要を高唱せらるるの

丈から、[illegible]に負けて居た[illegible]、[illegible]を始め、孰れも彼れも承認した。

牧野良三氏の質問

箕浦君が降壇すると、政友本黨から一青年代議士が登壇した、政府並びに提案者に對する質問と稱して、縱横無盡に擊ち始めた、餘りに勇ましい武者振りだから、彼れは誰れかと聞いたら、中橋德五郎君が文部大臣の時に、秘書官に用ひたる牧野良三君だと云ふことだ、成程、親分は二枚舌だが、此の人は少くも五枚舌位は持つて居る樣な勢ひだ、人相もなか〳〵險はしい顏をして居り、頭腦の働らきは鋭どい樣だ、嘘をつく位は平氣でやる樣に見える、何しろ八方八ツ當り、加藤、高橋、犬養諸相は勿論憲政會や政友會を、無暗やたらに惡罵し、八方から來る冷評の野次を物ともせず、演壇をあちらこちらと飛び廻はつて怒鳴つた所は、なか〳〵元氣な者だ、單に其の勇氣と辯論の點に於ては、吉植、松田、木下諸君より優れて居ると思ふ、惜しいかな、あれだけの力を持ちながら、貴族擁護の政友本黨たることだ、あの雄辯と意氣で、貴族院攻擊をやらせたら、定めし美事なことで有らう。

林田君勅選を策に當る

賛成演説者として、菅原傳君は莊重なる態度を採うた、不偏倶樂部の代表者として、林田龜太郎君の登壇は、滿場を緊張せしめた、僕は林田君の舊友として、彼れが此の演説をなすことに依て、他日勅選となることが困難になるで有らうと危ふんだ、彼れは現代に於て、勅選議員の候補者としては、最も有力なる一人で有る、代議士に當選して居る間は、其の事も有るまいが、自ら代議士の候補に立たないか、又は不幸にして落選する時は必ず勅選になつて貴族院に納まるべき人物で有る、それが今日こんな演説をするは、彼れ自ら彼れの進路を塞ぐる樣な者だ、勿論彼れはそれを覺悟をしてやつたのだ、故に彼れの此の日の演説は、勅爵を棒に振る演説で、國家の爲めに、自分の利害を顧みざる犠牲演説で有る、外の代議士連の賣名や、土産や、乃至政略の爲めの演説とは、其の性質が違ふ、從て彼に取ては一世一代の大演説で有つたらう、帝國議會開始以來、法制上の演説として、之れだけの立派な演説は、未だ曾て有らざる所だ、敢て絶後とは言はないが、少くも空前の名演説で有つた、其の内容と云ひ、引例と云ひ、誠に堂々たる者で、貴族院改正の論旨は、之に依て盡されたが、僕は彼れの演説を聞いて居

る間に、動搖振りの醜を思ふて、誠に同情に堪へなかつた。

苦しい政友本黨

貴族院の改正は、天下の公論で、國民大多數の要求する所だ、然るに政友本黨ばかりは、貴族特權内閣の足輕を以て、自任した者だから、如何にしても貴族院に足を向けて眠ることが出來ない、さりとて天下の公論に反對し、敢て正面から、國民の公敵となる勇氣はない、そこで先づ牧野君の如き、無鐵砲な青年を、先頭に出して、無茶苦茶に與太を飛ばさせて置て、それから委員附託説を松田源治君から出した、最終の日に委員に附託して、愼重に審議すると云ふのは、それに依て、本案を葬むり、以て、貴族院に御用を達せんとするのだ、誰れがそんなことを聞くものか、而して委員附託説が破れると、其の主張が敗れたるに依て、本案に反對するものだと云ふて反對した、政友本黨に屬する代議士の多數は、貴族院に背反することの出來ない足輕共で有る、然かし其の中にも、恥を知る男が多少は有ると見えて、いよ／＼採決の時に、逃げ出した者が有つた、原田佐衞君も急いで議場外に出でようとしたが、生憎彼れの議席は入口に遠いので、閉鎖の後に入口の所に達し、頭をかきながら復席し、敵味方から笑はれた、かくて投票の結果、貴族院改正案に賛成が、二百九十六票、反對は僅かに七十七票で有つた、牧野君や松田君が演説をして騷いで居る間は、政友本黨と無所屬中の雜物を合すると、百名以上は確かに本案に反對するで有らうと思はれたが、いよ／＼採決となり、記名投票となると、急に逃げ出して、決に加はらないのが出來た爲めに、七十七票とは憐れな話だ、特に此の七十七名こそは、貴族の奴隷となり、貴族に阿媚し追從し、諂諛し、滔滔たる民論の大潮流に反抗する徒輩で有ることを、速記錄に依て天下に告白した者で有る、其の七十七名の中には、心中大に閉口して居るのも有らう、氣の毒な者だ。

七月十九日（土曜日）

議會は無事に終了して、此の日は閉會式で有る、燕尾服で登院したが、思ふた程、印象を感じなかつた、列席者は開院式の時よりも遙かに少かつた、定刻加藤首相が勅語を朗讀して、式は無事に濟んだが、それから歳費受取所と斷料の勘定場が賑やかで有つた、然かし昔の樣なことはない、昔は此の日は賑やかで有つたが、近頃は歳費は各黨の事務員が代て受取て、各本部で渡すのも有るので、そんなに混雜しない、僕は斷料の支拂は、之を十八日に濟まし、歳費は開院式の前に、餘り人の來らない

方に受取つたので、其儘の中に入らずに済んだ。

此の日正午、首相官邸で貴衆兩院議員の招待會が催され、午餐の饗應が有つた、新代議士の中には、官邸の一隅に桂公が往年お鯉を囲ふて置いた座敷が有ると云ふので、これを見るべく、炎天を冒かして、庭園に突入した人も有つた、田舎から來て、始めて首相官邸に入つた人には、こんな事も珍らしいと見えて、低聲で『何處だ〳〵』と云ふ騒ぎだ。

午餐の卓上では、加藤首相の挨拶、それに對して、徳川貴族院議長が[illegible]一[illegible]のに對[illegible]して、[illegible]議長が一人でやつて居たのだが、[illegible]衆議院を代表しないことになつたさうだ、こんな事は[illegible]大に時勢の進運に從て、自ら發露して改正された積りかも知れぬが、實は改惡である、御陪食の挨拶は、一人で澤山だ。同じことを二人迄やらせ、其の度に、乾杯で椅子を立つのは、厄介なことだ。

贅澤問答

生方敏郎

福太郎　えゝ、今日は。ごめん下さい。

富士子　おや、福さんですか。さあ〳〵、こちらへお通りなさいまし、今度は大分しばらくだつたぢや有りませんか。

福太郎　えゝ、子供たちが引きつゞき彼れ之れと病氣したものですから、殆んど外出する暇も無い位、病院がよひや何やら詰らないことで、半年餘り暮れてしまひました。そんなわけで何地らさまへもスッカリ御不沙汰してしまひました。

富士子　おや、それは、まあ、ひどい目にお會ひなさいましたね、それでお子さんたちの御病氣は如何です。もうすつかりお宜しいのですか。

福太郎　ところがまだ仲々すかりつて譯にや行かないんで、本當に困つちまいました。何しろお正月元日からですからね。病

氣にもつくこゝへ伴きしましたよ。

富士子　ほんとにねえ、芝居見物でも半年へ一ぺんしか伴きますからねえ。稲さん、お察し申しますよ。子供を育てるのは、全く容易のことぢやありませんね。併し後がお樂しみですから、ようございますわ。

稲太郎　まあ、何うですかね。こんなに苦勞して育てて、若し不良少年にでも成られた日には、親では立つ瀬が有りませんよ。

富士子　不良少年なんて、そんな者が有るものですか。屹度皆さんがお富豪にお成りなさいますよ。

稲太郎　まあさう成つてでもくれないでは、子供を持つのは不幸のてつぺんに成ります。

富士子　時に何うです。今年は格別お暑いぢや有りませんか。そこは山が近くてお暑うございますよ。それより、もつと僻地らの、ええ、その村の方が風通しが宜くてお涼しうございますよ。

稲太郎　ありがたうございます。でも、お宅なんかは涼しうございますが、下町の家と來たら、とても非常なものです。その上、今年はバラックと來てゐるんですから、トタン屋根は焼け方陽は付ける、風は無し、全くお湯へつかつてゐる様なものです。ああ、成程、ここは涼しい。

富士子　でも、そんなに固く成らずに、お行儀をお崩しなさいませ。私なんぞ外から歸つて來ると、もう窮屈しい洋服も着つてゐられないし、直ぐ着物を脱いで體をふかずにはゐられません。

稲太郎　さうです。外を歩いてる間は却つてさう暑しくもないですが、家の中へ入ると汗がだく／＼出て參ります。

富士子　ですから裸に成つて體をふきなさいよ。今、水を持つて來て上げますから。

稲太郎　いえ、では手拭のしぼつたのをお願しませう。手くびと襟が汗でねちや／＼してますから。

富士子　さうですか。裸にお成りなさればいいのに。ここの家へ來て、固くるしくしてゐたつて始まりませんよ。おぢいさんなんかはいつでも裸でゐるんですからねえ。ああ、おぢいさん。お客さんですよ。稲さんですよ。

幸兵衛　よう。やつて來たね。何うしたい、久しく見えなかつたぢやないか。

富士子。お子さん達が御病氣なすつたのですと。

幸兵衛　やれ／＼、それはお氣の毒。貴公のとこの子供はよく病氣するなあ。よつぽど粗製濫造したものと見えるの。

稲太郎　恐れ入りました。生れは幸ひ丈夫さうですが、何しろ手が足りないものですから、行屆かないことばかりです。それ

に、學校へ出るやうに成つてから、いろ〳〵の病氣を學校からしよひ込んで參まして、家中にそれが傳染するのです。この五月に次男がはしかをしよひ込んで來て代る〳〵一ト月餘りもねる。その後、こんどは長男が百日咳を輸入して來る、と云つた樣なわけで、之も亦た忽ち家中へ擴がる。さうして彼地でもコホン〳〵此地でもコホン〳〵、いやもう聞いてゐても怖ろしい位です。咳はじめると五分も六分も止らないで、顔を眞赤にし內へ息を引いては又セキ出す。しまひには食べた物まで吐かないでは治まらないのですから、ほんとうに見てゐて可愛相です。

幸兵衛　そりやあ、ほんとに飛んだものを輸入して來たのう。學校も近頃では病氣の持寄り會みたいなものに成つた。何しろ方々いろんな家庭から集つて來るのだから、學校の方でも其點はよほど注意して貰はんと困るの。

福太郎　そりやあ、學校でも十分注意して下さるでせうし、又家庭でも出來るかぎりは氣を付けてますが、何しろ今日この頃の暑さでは、病人も出來ないぢや居りますまいよ。何しろ、御隱居さん、下町のバラック住居は百度以上の暑さですからね。

幸兵衛　さうかい。今年はそんなに暑いかの。私はまた風が來ると丁度いい鹽梅に涼しい位に暑くて、氣持がいいと思つてゐたが。

[illegible]

お氣きなさいな。

幸兵衛　なあ、婆さんや、今年の夏は涼しくはないかの。

富士子　涼しくはないか、つて。おぢいさんは朝から日暮まで裸でゐるのですもの。涼しいのは當り前ですわ。おほほほほホ……

幸兵衛　裸でゐては惡いかの

富士子　惡いことはござんすまいけれど、皆さんが、さう、あなたみたいに裸で暮すわけには參りませんもの。裸でゐる人のやうに涼しくは有りませんわ

幸兵衛　何故裸で暮すわけには參らぬのだ。暑くて、それが爲めに病氣をする位なら、厄介な着物なんか脫いで裸でゐたらよささうなものぢやな。

富士子　殿方はそれも御自由ですけれど、女は罪の深いものでさうは參りませんわ。

幸兵衛　女は罪が深い？　そのため裸には成れぬといふのかい。なるほど、罪が深い。それで明石をこしらへる。絹の長襦袢をこしらへる。博多の帶を買う。紗の羽織でも其上にはをらうと云ふわけか。女は罪が深いところから、亭主を牛馬の如く稼がせて、其所得の中の大部分を以て着物購入費に當てる。

う、婆さん。さういふわけかい。

稲太郎　いや、非裸で思ひ出しました。御隠居さんも多分昨日の新聞でお読みでせうが、五歳の子供が裸でゐるのを咎めて遂にその子供の父親と喧嘩を始め、果ては抜剣して、仲裁に入つた近所の人々まで斬りつけて、そのため死の字に成つた巡査が下谷にありましたね。だから、東京では浮つかり裸にも成れませんよ。

幸兵衛　うん、さう／＼、私もその記事なら見ましたよ。恐ろしい職務に忠實な巡査もあれば有つたものだな。

稲太郎　いくら規則だからつて、バカ／＼しい。何うして、その位の事に抜刀までして騒いだものでせう。

幸兵衛　多分、裸體は風俗を壞すと考へたからだらう。

稲太郎　風俗を亂すにも、亂さないにも、まだたつた五歳の小兒ぢやありませんかね。裸體々々つて御大層なことを言ふけれども、彼の先生たちが如何な着替をもつてゐると思し召す。いつも官給の制服を着た切り雀で、錢湯へ行くにも制服のままで手拭をぶら下げた恰好たら有りやしない。

幸兵衛　まあ／＼、そんな悪口は云はないこと。何さんなんかも十軒店の人形みたいに、いつも同じ着物を着てゐるやうだぜ。

稲太郎　へえ、私ですか。私や貸け借されですから、どうせ何も持つちやゐません。命だけ漸く拾つた仲間ですから。その代り、私は他人の裸體を見咎めて抜刀する様なことはしやしませんよ。裸だと云つて一々斬り付けられた日にや、お釋迦さまは幾つ體があつても足りやしません。

幸兵衛　さうかい。お釋迦さまは裸だつたかのう。奈良の大佛は絹だか紗だか知らないが、肩から少しばかり見る様に思つたよ。

稲太郎　何か少し懸けてゐたとしても、胸をはだけて裸も同様たダラシのない着方をしてますよ。

幸兵衛　だから昔から、大佛は見るものにして拜まず、と云はれてゐるし、また五百羅漢も片はだぬぎか何かで瞞るお行儀が悪いから誰もあれを拜むものはないわさ。何うも日本人は男なら衣冠束帶にしてゐるところ女なら十二單衣といふところを尊敬する。日本は着物の國ぢや。西洋も近代迄は着服崇拜に陥つたやうだが、古い時分はさうでもなかつた。ヤソ教の宗教畫に皆裸なものがあるのは言はずもがなだ。ソクラテスも裸で洗足でゐたといふから。アリストテレスは人間は理性的動物也として着物のことは餘り問題にせず、理性の有無を以て人畜を區別した。ギリシヤ人が理屈好みであつた様に、ローマ人は食たふれだつた。世界各國から珍味佳肴を取り寄せて、朝から晩まで飲

日[illegible]うまい物の[illegible]ほかみつくにて、[illegible]ら
れなく成ると[illegible]用して一[illegible]た[illegible]き出し、[illegible]
國を存んぽにして捨て又食べた。イギリスも今では[illegible]界になこ
る強大國と成つたが、これもローマ人の頭にはわづかに牡蠣の
産地として記臆されただけだ。美味を産する土地ならされば樂
土と思はず美食する者に非ざれば幸福者とは思はなかつた。そ
こでホーレースは考へたね。動物と人間の區別は會食するとせ
ぬとの差別だ。と。これが日本人だといふと動物と人間との區
別は衣服を着ると否とで決定するところだらう。だから日本で
は呉服屋が何の地方でも尤も富んでゐる。三越なんかは其一例
だ。三越は昔越後屋と云つた。紺濃簾をカネの手に懸け廻した
角店で、ところ〲に長濃簾がある。青びようたんの店員ども
がめい〲火鉢をかかへ、一間おき位に歩哨線を張つた形で座
つてゐる。奥は深くて見通せない位、[illegible]の渾沌として通るとこ
ろ宛ら琵琶の湖水のやうだ。私の若い頃まで未だ其通りだつた
よ。

福太郎　私たちは見ない昔の話だから、何と云はれても致方な
い。

幸兵衛　まあ聞きなさい。私のいふのは法螺でも誇張でもな
い。この店へ流行風邪が一度舞ひ込むといふと、彼[illegible]にうつりさ
にうつし、[illegible]
屋へ強盗が入つたことがある[illegible]
い。

福太郎　外ふらですか。

幸兵衛　勿論強盗といふからには外から入つたものだらう。強
盗の内勤といふのは、その頃にはまだ無かつた相だ。

福太郎　しかし、御隠居、それは矢張昔のことでせうなあ。近
頃三越の強盗は内勤になつたやうですぜ。砂糖を買うと二匁[illegible]
分足らない。味噌を買うと十匁不足だ。ケチな強盗も有ればあ
るもので。何うせ盗るなら一斤位盗んだら宜さ相なもの
を。

幸兵衛　ところが私の今話さうといふのは、そんなケチなコソ
泥ではない。黒頭巾で覆面した黒装束の強盗だ。鋼鉄入り白博
多の帯をカルタに結び、長い奴を二本さしてゐる。

福太郎　さうして足には白粉を塗り七三に裾をからげた股の間
から白ちりめんの褌がチラ〲見える奴でせう。

幸兵衛　これ、これ、默つて後を聞きなさい。まづ二人の強盗
は首尾よく中へ忍び込んだ。偖て千兩箱を背負出さうとしたが
待てよ、この水爪の頭に[illegible]がれては面倒なり。こいつらを[illegible]
づ縛りあげてからゆる〲仕事をせるもいいと、[illegible]

順々にふん縛つて繋ぐつわを始めた。人縛るよく、人起きる。叉しばる叉起きて来る、片端から引つくくつてゐる間に夜が明けて馬がカアカア

福太郎　御隠居さん。そりや本當の話ですかね

幸兵衛　なあに、先張落し話さ。これほど吏員が澤山ゐては、强盗も持て餘すといふ可笑味さ。

福太郎　成るほど流石は三越だ。强盗でさへ縛り損ねた三越の吏員だもの、東京府の役人たんかの歯が立つ筈がない。これでは役人どもの方が却つて免職されたのも當然な成行でした。

幸兵衛　それで漸く着物の權威が解つたかの。着物屋と云ふものは豪い勢力のものだらう。警察なんて云つたところで、何れも此權勢の手下だから、その證據には五歳の子供の裸を咎めるばかりでない。裸の物なら人形で有れ繪であれ承知しない。もう直き吉例に依り上野で美術展覧會が開かれるだらうが、又乾版問題のことから美術家と巡査の間に喧嘩があること受合だ。

福太郎　何うもいつに成つても警察の頭腦には困りますな。そんな干渉で日本の美術家たちは何んなに迷惑することでせう。そんな事のために繪畫の進步も何れだけ妨げられますか。實に歎はしい極みです。

幸兵衛　生意氣云つてらあ。なあに、警察で問題にしてくれるばかりでロクでもないへつぽこ繪かきの繪が大評判になつて、奴等どもは却つて儲かる位なものだらう。假にまあスパランイ裸體畫が陳列されたとする。それを見に来て本當に感心して飾る觀覧人が何人あるかい、大抵のものは美々しい衣裳を着飾つてる御婦人を描いた着物畫の前に立ち、裸體畫の方にろく〳〵見てゐやしない

福太郎　裸體畫の前に立つてる事は、何うも私ら素人は氣が咎めましてね。

幸兵衛　さうよ。それだから横目でチラと見る丈けて通りすぎてしまうところなんだ。そこへお巡りが来て文句を付ける。之は甚だ風俗を害する。早速腰卷を懸けなさい、と命令する。美術家連は盛んに憤慨して不平を洩らす。そこでパッと評判になる。從て然う成ると、問題の裸體畫だ、是非見て置かないでは美術批評家の資格にかかはる。之を讃めないでは美術批評家の信務にかかる。猫も杓子も皆な見に行く。もう大ビラでいつ迄も其裸體畫の前に群集は堵の如く立つて眺めくらす。時々取外しを命ぜられる裸體畫も有るが、それは見ることの出来なかつた公衆にとつては、たまく逃した魚は大きいの譬へで、すてきに名繪のやうな氣がして、名殘惜いものさ。だから何の道、結構だ。何うだい。然う來りや、お誂へ向きだ。官費で宣傳し

てくれる様なものだ。日本の美術家はいい[illegible]を持つて幸福なものさ。

羅太郎　だが、美術家連が去年の大地震にはさんざんでしたなあ。展覧會は招待日から蹴されるし、おまけに長い髪の毛まで切らせられて、小さくなつてくらしてましたぜ。繪を描く者よりも、より以上に美術家の身上だつた長髪は朝鮮人とまちがへられる怕れがあつたからですけれど、あれを切るには嘸惜しかつたでせうなあ。美術家から長髪を切つた様子は軍人から軍刀を取つた様な恰好でしたよ。

幸兵衛　うん、ロクな繪は描けず、長髪を切ると全く美術家の資格を失つて素人に成つた連中が澤山あつた相だ、だが、あの地震騒ぎから、もう一年に成るかい。早いものだぞ。あれで酷い目に會つたのは美術家ばかりぢやない。誰も皆えらい目に會はされた。死ぬか生きるかの境ひ目に置かれた。私はもう年を取つてゐるから何うでもいいと思つたが、それでも幸ひ無事だつたよ。有がたいものさ。

羅太郎　へえ、私があのすぐ後で御見舞に上りました時に、奥さまから伺ひました話では、あの時、誰より先に跣足で逃げ出したのは御隠居さんだと云ふことでしたが。おまけに例に依り丸裸だつた相ぢやありませんか。おははハハハ……

幸兵衛　あはははハハハ……[illegible]かい。[illegible]しい事でもなかつたぜ。[illegible]むだらうと思つてゐ。まつさきに[illegible]。おははハハ……

羅太郎　時に世間では皆さんがあの地震を記念しようといふお話ですが、何んなものでせう。

幸兵衛　それも宜からう。しかし實は厭なことは成可く忘れるやうにしたがよい、と私は思ふがの。

羅太郎　左樣サ。跣足で逃げだしたことなんか何時迄も覺えてゐられて時々持ち出されるとお困りでせうからね。さうしますと健忘却ですか。

幸兵衛　さうさ。僞さんも近頃めつきり惜まれ口の手が上つたぞ。ところで地震のことばかり記念したとて、皆が地震以前と少しも違はぬ贅澤をつづけてゐるのぢや、何にもなるまい。尤もあの際には酷い目に會つた者ばかりでもあるまいよ。あのドサクサまぎれに女を授けられた男もありや、貨物を拾つた者もあり、本家が潰れて遺産を相續した者もあるだらう。さう云ふ連中は地震祝賀祭を營むがいい。

羅太郎　たしかに有りますね。私の知人で火を八代橋の下に避け、水から頭だけ出して一日ばかり火の鎭まるのを待つてゐて

先生があります。その中に小さな四角な桐の箱が滲つて來て、その先生の體にぺたりと貼り付いたものです。先生何だか分らないけれども之も身に付いた物だからと思つて拾つて置き、後日人に見て貰ふと正二位公爵山縣含雪の書でありました。

幸兵衛　なるほど、それなら餘り貴物にもならない。

福太郎　にせでしたかね。

幸兵衛　なあに　安い古筆なら贋も出來るが、山縣公の書では贋は有るまい。贋がない位の物だから大した貨ではない。

福太郎　銀座あたりをあの後で歩いてゐると時計や何かが幾らも落ちてゐた相です。私の知つてる男で時計や銀の皿なんか澤山拾つて來た者がありました。さうしてゐる中にその男は物を拾ふのに興味を持ち、毎日のやうに炎天を燒跡へ出て行つて、何かしら拾つて來て喜んでゐましたが、その中に警察の方で矢釜しく成つたので止めました。

幸兵衛　しばらく拾ひ屋に成つたわけだね。普段の時でも東京には地見屋といふ商賣がある。人形町や神樂坂や廣小路又は銀座のやうな夜分人の出さかる場所へ翌朝早く行つて地面を見つめて歩くんだ。さうすると何かしら拾ひ物が有る。さういふ商賣だ。しかしそんなのが知れれば無論お巡りに叱られる。時に拾ひ屋で思ひ出したが、私の知人にはあの地震の際に三百代言を拾つた人がある。

福太郎　へええ、三百の屍體を拾つて歸つてやつたのですか、深切な人も有るものですね之。

幸兵衛　そりや無論深切な人さ。昔恁ういふ話がある。奈良の大佛を見に行つた歸り途にはつち坊主を拾つたといふ、之は昔の小話の本に書いてあるよ。

福太郎　そのハッチ坊主とは何んなものです。

幸兵衛　鉢坊主と書き又化飯道人とも云ふ、托鉢して歩く乞食坊主のことさ。

福太郎　それを拾つたんですか。

幸兵衛　さうだ。或人が伊勢參宮に行つて、序でながら京大阪を見物して讃岐の金毘羅から宮島まで廻つた、その時奈良をも通つたんだ。七重八重七堂伽藍八重櫻と唄はれた奈良の都には、元明天皇より桓武天皇迄七代七十有餘年の帝都だつただけあつて、見る可きもの甚だ多い。東大寺興福寺二月堂春日の八幡宮若草山、さては采女が昔の御に衣裳を懸けて戀に其身を投げたと聞く猿澤の池、併し誰も見て驚くは東大寺の盧遮那佛、結跏趺座の御像五丈三尺五寸とある。關東では悧巧な男を眼から鼻へ拔けるといふが、此大佛の眼から鼻へ拔けることは何んなバカ者にも出來る藝當、鼻の孔とてもそれほど大きい。さて

こ[illegible]

まあ代だ、この[illegible]にいさい。[illegible]ない、此分は、この調子は除り小さいが、といふと幸兵衛が答へた、何あにそれは坊さんが大門を見ておいでなさつた此で御覧なさいますさかいに、小さう見えます、と云つた。成程さうかと思つて門を出ると道端に人形が落ちてゐる。江戸の娘への好い土産と思ひ、拾つてからよく／＼見ると、はつち坊主が寝てゐたのだつた。

福太郎　その坊主は其後何うなりました。

幸兵衛　それでおしまいさ。落し話といふものは、さう根掘り葉掘り聞くものではないよ。

福太郎　すると、先刻の地震の焼跡から三百代言を拾つた話もあれでおしまいですか。

幸兵衛　いや、さうでもない。その人は三百代言を拾つて來て家に置き飯を食はせてやつた。

福太郎　はあ、さうすると、まだ代言は骨に成つてはゐなかつたんですか。

幸兵衛　無論、生きた三百だ。三百代言も英雄も死んでしまへば同じやうな骨だが、生きてゐたから厄介さ。折柄その近所に事件が起つた。それを聞いてみると、こちらの理屈が十が十もこ、その[illegible]やつたばかりで。事件はだん／＼[illegible]ぶしい[illegible]たよ。と[illegible]に成つたよ。全く氣の毒な話さ。だが[illegible]は三百代言には決して近づくものでない。

福太郎　では[illegible]のこぼれは何うなりました。

幸兵衛　それは政府で拾ひ上げたよ。おかげ様で餘つぽど怪我人があつたらう。時に福さん、貴公も焼跡へ出かけたと聞いたが、何か拾ひ物が有つたかの。

福太郎　ええ、あの話ですか。あれはそんな人聞きの悪い話ではありませんよ。親類の若い者で深川の或商店へ奉公してますのが、十日もたつが生死不明なのでして、それを探しに出かけたのです。

幸兵衛　その序でに、あはよくば何か拾はうと云ふ注文だつたのだらう。

福太郎　御冗談ばつかり。とてもあの時分にや、そんな餘裕はありませんでしたよ。自分がすでに焼出されたのですから、今更ら山の手の人たちの様に焼跡見物でもありませんしね。ゆで小豆食べに出かけたわけでもない、全く生死不明の人間を探し

たいばかりに川かけたのですから。

幸兵衞　それに、もう十日もたちやあ、拾ひたいにも何も落ちてはゐなかつたらう。

稲太郎　いえ、ずゐぶん道端に落ちてましたよ。飯田町では猫の死骸がありました。半焼けに成つて轉がつてました。それから米場町から水天宮までの間は箪笥の金具が小石のやうに其處にも此處にも落ちてました。

幸兵衞　地震焼けの焦跡に箪笥の金具を撒き散らしたわけでもあるまいが、それは大方道まで持ち出して積み上げて置いた箪笥に火がついて金具だけ焼け殘つたものだらう。

稲太郎　それにしては、ずゐぶん澤山ありましたぜ。してみると、あの中に入つてゐた着物の數は何んに澤山有つたでせう。

幸兵衞　そりや大變な數だ。人の人格が着物の好不好に依つて決定するあの邊の人々の事だから、良いものばかり澤山持つてゐたらうにさ。幾ら良い着物の灰でもおちやあ拾うほどのものもあるまい。それつ切り、何も落ちてはゐなかつたかい。

稲太郎　大橋を渡つていよ／＼深川へ入りますと、硝子の破片が非常に多く落ちてゐました。硝子ラムプのカケもあれば壜のカケもありました。

幸兵衞　はてね。そりや又何の譯かいな。

稲太郎　硝子工場が多いからでせう。壜はサイダアを飲んでから捨てたものらしかつたです。よほど深川の人は咽が乾いたと見えますよ。

幸兵衞　ははあ、それで、命から二番目にサイダアの壜を持ち出した。

稲太郎　ここで大橋を引返して濱町河岸まで參りますと、驚きましたね。

幸兵衞　ダイヤモンドでも落ちてゐたか。

稲太郎　いいえ、赤黒い人間の屍體の上にトタン板を載せたまゝ、ところどころに置いてあるのです。もう十日もたつてゐたのですが、何にも澤山屍骸が浮いて折柄の上潮で波の間に／＼流れて來る、岸を見れば此光景です。私もこれには顔をそむけ手を合はせて急いで通りすぎる外はありませんでしたね。

幸兵衞　成程。

稲太郎　兩國から左へ折れて柳原の通りへ來ると、自轉車自動車電車の焼けたのが、ひどい砂ほこりを被つて倒れてゐました。

幸兵衞　うん、それでは如何にも、何一つ拾ひ物は無かつたらうのう。

稲太郎　ええ、私は他人の物は拾はなかつたですけれど、自分

[illegible]
おは　その拾ひあげた物の始しおつた事、まるで貝の[illegible]
がしましたよ。
幸兵衛　拾ひ物をする奴は盗人の始まりといふが、拾ひ物の始しいのは、福さん、之は誰しも持つてる人情だね。太古に人は拾ひ物をして生きてゐた。先づ果物を拾つて食べた。エバがアダムに拾つてやつたのは決して知慧の實ばかりぢやない。栗も拾つてやり松茸も拾つてやつたんだ。二人とも當分拾ひ食ひで活きてゐた、海岸へ行けば貝を拾つた。貝類は逃げることを知らぬから、之が一番捕へ易い。彼等が拾つた貝の肉を食べて殼を捨てた、その殼の山が今發掘される貝塚だ相だ。
福太郎　さうだと、昔は誰もみんな地見屋（ぢみや）だつたんですね。
幸兵衛　さうだ。今は地見屋は東京より他には無い商賣だが、古へは悉くこの地見屋だつたんだ。それから人智が進んで漁具を發明し魚を捕る事を覺え、又弓箭を作つて禽獸を狩ることを知つた。所謂海の幸、山の幸の時代は之だ。だが何時も柳の下に鰌はゐない。海幸山幸の有る時はいいがない時は困る。そこで高原へ向つたものは遊牧の民となり平野へ降つた人々は農民と成つた。人々は自分の眼で見付けた物を自分で拾ひ、自分で

[illegible]
福太郎　はて、それで泥棒も[illegible]
幸兵衛　なるほど、之が泥棒も政府の始まりた。
福太郎　へえ、泥力もね泥政府も有つたものですね。その時の大統領は石川五右衛門と言つたですね。
幸兵衛　まあ待ちなさい。之は我が日本國の話ではない。もつとずつと古い時代の話なんだ。他人の物を横取りする奴は、得てして腕力の强いものだ。腕力ばかりぢやない。智謀にも秀でてゐる彼等初めのほどは、或は羊馬犬豚を盗み或は大根人參ごぼうの類を掠め去るに過ぎなかつたが、後には婦女を盗み去り又は男の子供を盗んで行つて奴隸にした。
福太郎　警察は一體何をしてゐたのです。お巡りは大泥棒と見て居眠りのマネでもしてゐたのですか。
幸兵衛　これ〳〵、その時分、まだ警察なんか有りやしない。弱い方はただ强い者の爲すままに盗られてゐた。
福太郎　おや〳〵、それでは泥棒は益々增長するばかりでせう。
幸兵衛　その通り、泥棒は增長した。そして隊を爲して乗り込んで来たが、今度は物を盗んで取り去らない。そこに大作してし

まつた。

福太郎　いよ／＼居直つちまやがつたな。

幸兵衛　さうだ、居直つちまつたんだ。さうして、皆の飼育したもの、生産したものから租税を取り立てた。

福太郎　乞食の親分みたいに、頭をはねやがつたな。

幸兵衛　頭をはねるならいいけれども、国中の一番良いところをはねた。羊でも鶏でも国中の一番良いところを取り上げる。だから、人々は彼を呼んで影では盗賊と呼び罵つたが、表面には大王と敬称してゐた。さうしてゐる中に、又ぞろ他の方面から一隊の盗人が現はれた。

福太郎　さう成つちや、堪りませんね。世の中は暗だ。

幸兵衛　すると何うだい。今まで皆なの国中をはねてグウ／＼惰眠ばかりしてゐた例の大王が、むつくり起きて手下を指揮し大ひに戦つて外盗を追ひ除けた。

福太郎　へえ、大した親方ですねえ。

幸兵衛　何うだ、感心したらう。平生は酒ばかり食つて大言を吐いてゐた溝水一角が、いよ／＼義士討入の際に成ると、あの通りの活躍した。あれと同じ理屈だ。皆な之には感心してしまつた。もう誰も盗賊などと呼ぶ者はない。之を敬して覇王と呼んだ。[illegible]

ざ、他所の盗賊たちから自分の繩張りを荒されぬやうに守つた。始めに盗んだ後に守り治める様に成つた。之が政府の始まりさ。さうして置いて農業を勧め文教を興し国富み兵強くした。国富み兵強く文化が段々に進み人民も利口に成ると共に其気位も高く成つた。そして従来の如く徒に労働ばかりしてゐないで、大いにその文化生活を享楽す可く専心した。盛んに文化を享楽すれば、奢侈に流れるのは知れたことだ。そこで賢明な宰相は民に重税を課して民の富力を殺ぎ其慢心を抑へようとした。それは確に成功した。けれども一度文化の味を占めた人民は貧しい中からでも文化生活は止めない。世を挙げて益々奢侈に赴いた。それを見た宰相は甚だ心配に成つて来た。こりや此まゝに捨てては置かれぬわい。と。

福太郎　へえ、いかにも御最もさまで。景気がいいわ、金が儲かるわ、で亭主は自動車に乗り廻す細君は流行衣裳を作る、そして家中うまい物を食つて暮せば、こりや勿論貧乏します。そんな位の理くつなら誰にも分るが、その人民の貧乏を他人ごとと思はないで心配して下さるところが、流石に一国の宰相ぢやございませんか。その宰相は何といふお方です。

幸兵衛　いや、私もその人の名は忘れた。ただ、福さん、其後[illegible]

[illegible]

くなると、こいつは一番[illegible]のだ、と。そこで天下に[illegible]を布いた。之がそも／＼倹約令の濫觴だらう。それを後世の政治家が眞似て時々やるよ。

福太郎　日本でも前例がありますか。

幸兵衛　徳川時代には盛んに之を連發したものだ。百姓は自分で作つた絹織物さへ身に付けられなかつたものさ。恁うして人民を富ませて置いて、金の溜つた頃合ひを見計つて行つて、ギユウ／＼搾り取つた。

福太郎　さう聞くと倹約令も除り有りがたくないものですなあ。

幸兵衛　有りがたくはないが、貧乏人は此法令を布かれれば破産する憂ひが除かれる。之は專ら貧乏人對手の法令だが、昔はもう一つ金持對手の療治法が有つたよ。

福太郎　へえ、それは何んな法律です。

幸兵衛　金持には、此反對に奢侈令が布かれた。金持には無暗と豪奢を極めさせる。そして大富豪に成らぬ様にする。それでも倘ほ富む。その時は欠所と云つて財産を全部取り上げてしまふんだ。さうしないと金に權威が加つて、一軒の金持の家の聟が二人までも同時に大臣に成ると云ふ様な結果に成る、其儘に放

[illegible]

らうも[illegible]からちや。[illegible]

由で取潰された。倹約令と奢侈令、何うしても此二つは[illegible]保つ者になくてはならぬ。何うだ恐れ入つたか。

福太郎　ちつとも恐れ入りませんよ。御隱居さんのお話に[illegible]ちや、誰だつて煙に巻かれる事だけは承知してゐたからたいていぢやならない位のことは、私の方も先刻御承知と來てゐるからね。

時に御隱居さんの前ですが、やりましたぜ。大藏大臣が。

幸兵衛　やつたつて、何をやつたい。辭職でもしたか。

福太郎　いえ、辭職ぢや有りませんよ。その節約令をさ。

幸兵衛　さうだらう。これはゼヒやらなけりやならないところださ。今に見ろ、豪奢令の方も屹度やるから。現代のやうに無暗と貧乏人が殖えて、そうして又一方には大金持が多く成りすぎては、自然と貧富の二階級に分れるにやうら成り、果は爭鬪の基とも成らう、併し今度の節約令は私はちつとも知らずにゐたが、矢張絹物を着ては不可んとか白砂糖をなめては成らぬと云ふやうな舊式なものかの。

福太郎　いえ、何ういたしまして、そんな古めかしいものぢや有りませんや。私たちは昨夜も町内寄合六ありましたので料理

屋で御馳走をたべて酒をのむで藝者を買つて自動車にのつて歸りましたが、何のおとがめもございませんものね。

幸兵衛　それだけ贅澤が出來りや、結構だ。それ以上の大盡遊びをやると、又地震の時みたいに身代限りをするだらう。だが一たい何んな風に節約しろといふ法令なんだい。

輻太郎　この頃の人の生活ぶりが奢侈に流れてむやみと外國品を好むで困るから、或種目の舶來品には十割の税金をかけて、高價にして皆なが買ひにくい樣にしよう、といふんで、その關税を奢侈税とか云ふんだ相です。

幸兵衛　なんだ、そんな話かい。それぢや節約令でも何でもないぢやないか。それはいはゞ外國品に對する輕い意味でのボイコットだ。支那人がよく日本への面あてに日本製のビールや藥の不買同盟をやる、まあ、あれと似たり寄つたりだな。そりや大方昔の攘夷思想の復活に違ひない。帝國ホテルに闖入して舞踏をやつて外人を驚かした先生たちと同じ頭の連中が考案したことらしいぞ。

輻太郎　まさか、さうぢやないでせうよ。此の時分の新聞にチャンと奢侈税といふ事が叫つてありましたから。

幸兵衛　だと矢張本當かなあ。新聞も此節嘘の記事が多いが一面は官報の引き延ばしだから、政府側の記事だけは澤山ちがつてもゐなからう。總理大臣の名前なんか大抵本名だと見えて滅多に取消しが出ない樣だ。

輻太郎　ですが、舶來品を使ふことが何うして奢侈なんでせう。私には此理由が分りません。それを御隱居さんに伺ひたいもので。

幸兵衛　いやだよ。此人は。私がその法令を提案したわけでもないに、そんなに開き直つて詰めよせられては、困つてしまう。

輻太郎　舶來品は成程いかにも値段は高いに違ひ有りませんよ。しかし高い物必ずしも奢侈とは云はれませんよ。日本の品はそれは安い。しかし安からう惡からうで、何うしますか。石鹸にしても香水にしても何ですね。使つて顏が荒れるやうで何うします。又和製の香水みたいにアルコールくさくて何に成ります。あんなものは唯貰つてもいやでせう。

幸兵衛　輻さん。細君に言はれた口調そつくりだね。併し穴勝さうも云はれないよ。こないだも山吹町の通りを歩いてゐると夜のことだ。まあ大變な人通りだ。さうすると道の眞中に竹竿が立てて有つて其下に澤山男がゐる。見ると竿の先に「香水が降ります」と書いてある。香水屋の廣告だ、さうすると、皆帽子を脱つて其下へ顏を出して、其香水と稱するアルコールの二三

[illegible]が。

福太郎　一は無論私も持ちます。ここに私は萬年筆を持つてゐますが、これはウオータアマンですよ、私はこれを買ふ前にいろ〳〵の和製品を買つて見ました。しかし何れも直き具合が惡く成つて使へなく成ります。そして一寸直させても五十錢や一圓は直し賃を取られます。或は時々インキがポタリと落ちて折角書いたものを無駄にしてしまつたり、又は何うしてもインキが出て來ないので矢鱈に振つてると、その機みにポタリと着物の上へ落ちてしみをこさへます。

幸兵衞　さうして細君に叱られたとね。

福太郎　御隱居さん、肝じんのところで茶を入れちやいけませんよ。こりや私の實地經驗談なのですから。舶來の萬年筆にはそんなのは殆んど有りません。

幸兵衞　和製の萬年筆と出來損ないの女房ばかりは、全く修繕をしてみやうがない。いぢくればいぢくる程ダメに成る。之は御說の通りだが、問題は和製がいいか舶來がいいかと云ふ點ではなく、和製が經濟か舶來が經濟かと云ふ點だつたの。ところで其萬年筆だが、君はそのウオータアマンを持つて他の和製の萬年筆を持つた連中と一緒に旅行する。いいかの。まづ福島あた[illegible]で福さんの[illegible][illegible]だきさん僕に[illegible]らあ。そこで皆默り込んで一寸[illegible]。この時、ヤアサた和製萬年筆を持つた奴のインキがお約束通り出が惡い。福さんが見兼ねてウオータアマンを貸してやる。よしか。その先生は一寸書いてみて、成程こりや具合がいいですねと、お感心も加へて讚めらあ。さうすると又他の先生が、どれ〳〵僕に貸してみたまへとそれを使ふ。成程いい。どれ僕にも、と、まんがちに皆が奪ひ合つて使ふ。その爲め大抵インキを失くしてゐるとも知らず、其次に松島に遊んで船の中で使はうとするとインキが出て來ない。その筈だ。福島の宿で皆にすつかり使はれちまつてゐるんだ。何うだい。それでも舶來がいいかの。

福太郎　まさか、そんな事ばかりもないでせう。

幸兵衞　それなら先刻の石鹸でもいい。その時福さんが舶來石鹸を持つて飯坂に泊る。女中に伴はれてお風呂へ行く、中にはシヤボンを持たずに旅行に出かける不所存者もあらあ。オイ一寸君の石鹸を貸し玉へと來る。うん、これは福さんにも似合はない、素敵な上等シヤボンだね。何、舶來だ、道理こそ、ふん

友達の畫家がパリー土産にくれたのだつて。成程いかにも上等だ。之をだまつて福さんなんかに使はせて置くのは、勿體ない話だね。これは僕みたいな色男のお化粧料だよ。などと遠慮知らずが、オイ、君、これを使つて見玉へ、で他の仲間にすすめらあ。

福太郎　そんな餘計な事をする人間があるでせうか。

幸兵衛　有るとも。他人の物で義理をすることは、大正以來トテモステキに流行だ。成程こいつは良いや、なんて讃めるのはいいが、皆この連中に使はれて二晩も湯に入りやパリー土産は影も形も無くなるよ。そうして皆な涼しい顔をしてすましてらあ。若し和製の洗濯シャボンでも持つて行つてみろ。誰も借りる人は有りやしない。自分でさへも使ふのがいやで、持ち出した時の形で少しも減らさずに持ち歸れるから。

福太郎　こいつは困つたなあ。うん、しかし、御隱居さん、今度は酒で行きませう。東京の惡い壜詰の酒を買つて飲みます。さうすると其晩の中に小間物屋をひろげませう。そうして醫者にかかつたり翌日まで二日醉ひで悩まされます。そうして和製の洋酒は一層惡いでせう。それからみれば、舶來のウヰスキーならジョニーウオーカアとかキンクジョージ位のところでも、飲んでから醫者にかかる心配はありません。

幸兵衛　酒は福さんのお説のやうだが、煙草は舶來の方が剣呑だね。私は先だつて人から葉卷を一箱貰つたから、一本ためしに吸つて見たところが、まだ半分も吸はない中に急に目まひがして來たが、苦しさを堪えてゐると卒に嘔氣を催ほして忽ちの中に胃の腑にあつた食物まで皆な嘔いてしまつたよ。酒はいいに限るが、煙草は何うも上等は危險だよ。と云つて敷島みたいな路の葉をいぶしてみてもうまくはないがの。

福太郎　御隱居さんは、いつも舶來の兩切でしたね。

幸兵衛　さうさ。兩切なら葉卷のやうな危險性もなし、又敷島ほどきなくさくもない。ところで、一週間ばかり前のことさ。神樂坂の西洋食料品屋の店員が來て、舶來煙草のまだ手元に有るだけは値上げしませんから、如何です、と云つてM.C.C.の百本入を二箱置いて行つたよ。矢張、その奢侈税の下をくぐつて花客先きに安いのを賣る考へだつたんだな。さうすると、私の方は儲けたわけだ。あははハハハ。

福太郎　ところが御隱居、煙草の方は前と變りはないのですつて。たゞ一本十錢以上の品だけは普通の賣店になくなる相です。

幸兵衛　なんだ、それぢや、餘計な品を押し付けられただけの話か。

[illegible]
だけ[illegible]ござえした。上ると見越して買つて置いて上らないと
だと、[illegible]る消耗ですからね。

幸兵衛　うん、もう、買しめたなんかやる者もあるだらうなあ。

嗣太郎　それは、もう、有る段ぢやござんせん。品を持つてる奴は賣り惜しみをする。無い者は買しめをしようとする。どうせ相場の變動する際ですから、皆が騒いで儲けるものは儲けるし、さうして値段を高くして需用者は高い物をつかまされるだけです。

幸兵衛　うん、それで分つた。こないで娘がカルーソーのレコードが欲しいと云つて三越へ買ひに行つたが、お相憎さま、を食つて歸つて來た。さうして三越は賣惜しみするのよなんて口惜しがつてるから、私が、そんな物を無理に買はんでも和製のレコードにして置いたら何うだ、とやつた。それで娘に叱られたのさ。

嗣太郎　さうですか。さすがの御隱居さんもお孃さんにかかつちや、から意久地は有りませんね。あははハハハ

幸兵衛　そうして、カルウソーの和製なんてものが有りますか。と言ふのさ。なるほどこれは一言もない。

[illegible]
は、[illegible]
も具化にあへて[illegible]
贅澤だから、[illegible]らね。

幸兵衛　まあ、そんなところさ。ロダンの彫刻は贅澤だから今戸焼の嗣助で間に合はせろ、飛行機や大砲は贅澤だから、あれも弓矢と長刀で間に合せろ、無線電信は贅澤だから飛脚で間に合せろ、と此次には御托宣あそばすだらう。

嗣太郎　しかし、贅澤で惡けりや、男らしく切支丹バテレンの品物は絶對に輸入を禁止したら宜かりさうなものを、全く生ぬるい話ですね。あれでは税金さへ出せば、何をしてもいいことに成ります。

幸兵衛　だからさ、私が先達ても言つたぢやないか。泥棒に營業税をかけて官許にしろ、とさ。まあ〳〵野暮を言はずに十割くらゐの税金なら拂つてやりなさいよ。その代り、今まで舶來の金時計はいくらも見られたが、之からは金時計を持つてもブルらしくつていいぞ。金ブチ眼鏡にも細君の装身具にも光を増して、いかにも贅澤らしくていいさ。だから、將來は誰も彼々舶來品を買つて、大にブル振りを發揮することに成るだらう。

素より之は奢侈税でも何でもない。むしろ奢侈禁制税なのさ。

福太郎　しかし、舶來品の値段が高く成れば、それに連れて内地品の價も騰貴するでせうね。

幸兵衛　いよう。福さん、うまい事を言つたぞ。大蔵大臣のねらひ場所は全く其處さ。さうして粗悪な製品を高く賣らせ大に商工階級のブルジョア諸君に總花を振播かうといふ一件なのさ。そこを反對に奢侈税と引かけたところが、如何にも辭令に巧みな政黨内閣らしくていい。今に、なんだよ、金權擁護と新聞で書くと、讀者の方が氣を利かせて、之をケンセイヨウゴと訓み、三派合同と云ふ文字をセイジショウニンと訓むやうに成るよ。鬼に角、こりや、舶來品の需要者は、此法令のために大にブル風を吹かせられていいし、粗悪和製品の製造元は勿論のこと大儲けだし、國民は皆な大儲けの大悦びだらう。だが、福さん、十割の税金さへかければ何を輸入しても宜いつて事に成れば、本當に輸入してみたい物は、ずゐぶん有るのう。

福太郎　左樣さ、ずゐぶん有りますが、御隠居さんは一番先きに何から輸入して貰ひます。

幸兵衛　さうよなあ、まづ今の濱口大臣を覺醒させて置いて、その後釜にロイド・ジョージでも輸入するかい。あいつは向ふではもう使ひふるしの見切品だが、こつちへ持つて來れば和製の大蔵大臣よりは、まだ幾分か間に合はうぜ。

福太郎　ついでに總理大臣も代議士連もお願ひしたら何うですか。十割拂つてもまだ安い位なものでせう。あはははハハハハ

幸兵衛　冗談ぢやあない。あははハハハ

大震火災一周年に面して

大震災一周年の回顧

近松秋江

去年九月一日の大震災の丁度一周年が來た。

私どもは、不斷から生きてゐるものゝ、一つの本能として、正直なところ、いかなる天災人爲の災難に遭遇しても、それを、何とかして切り開いて向うへ出拔けようとする努力と才智とを、潜在的に具有してゐるのであるから、勿論そんな不慮の天災や人爲の奇禍を歡迎するものでは、決して、ないが、しかし、一度びそんな場合に臨んだ時に、たゞ徒らに悲觀し、失望し、落膽することは甚だ不可である。何とかして、その難境を突破するの氣力が必要である。

けれども、又、同時にその難境を正視し、災害を災害のまゝ、一文半錢の掛値なく、割引きなく、事實を事實として男らしく認めることもまた、窮境を脱するための勇氣を振起する上からいつて、最も必要なことである。

私などは、去年の九月一日の大震災に遭遇して、あまりに冷酷無情なる大自然の破壞力に瞠然として驚駭し、又遭難横死者の言語に絶した慘鼻な運命に限りなき同情を表はしたのであつた。けれども、私の驚きやうは未だ十分でなかつたやうに思ふ。又、横死者諸嬢の慘鼻なる運命と、それ等の遺族の心に對して寄する悲しい同情も未だ尚ほ十分に注ぎ足りなかつた恨みなきにあらずである。

輕薄なる、軟派の文筆生活者の中のある者には、震災直後に發表した、震災に對する態度、感想のうへで、あの人如與上[illegible]

行の悲慘事をば、殊更めかしく、強ゐて何でもない些細事であるかのやうに見て居らうとする者があつたやうであるが、私どもは、それは虚僞の見せかけであると共に、甚だ不純な、輕薄な性格の一端を惡く暴露したものであると思つて、頗る感心しなかつたのである

勿論、同情や驚きを強ゐて誇張するのも不可であるが、自分だけが幸ひにして危險を免かれ得たからといつて、斯かる慘事を殊更に冷淡視して偉がつて居らうとするのは、甚だ感心せぬ。

もし昨年の震災の間際、無難であつたといへば、恐らく東京三百萬人の中斯くいふ私自身などは最も完全に無難な人間の一人であつたことを疑はない。

東京郊外の東中野の私の家では、あの日も朝の内にもう風呂に水を一杯汲んで置いた。夏は大抵午前中に風呂水を汲んで置く。すると、あの大搖れが襲つて來た。私はあの時間に恰ど附近に外出して、幸に危險のない道を歩ゐてゐたが、急いで自宅へ歸つて見ると、家に一人ゐた妻は九ケ月の姙娠の身體をして隣家の小廣い庭の植込の中に、隣家の妻君や女中や子供達とゝもに避難してゐた。私が、その時一緒に伴れて外を歩いてゐた、二十才になる甥が[illegible]つてゐるのとゝもに戻つて來たのを生垣の中から見ると、隣家の子供達は、恰も自分達のお父さんが歸つて來たやうにいつて力づいた。彼等の父は日本橋の方へ毎日出勤してゐるのであつた。十一二才になる隣家の長男は、

「あツ近松さんのおぢさんが歸つて來たッ」と叫んだ。

彼等は、五才の女兒と、女中と、母親と私の妻と女ばかりで、その中の一人だけが十一二才の長男で、男はそれだけであつた。しかも隣家の妻君は、これも臨月の大腹を抱いてゐて、地震後丁度七日目に出産したのであつた。そこへ私が外から驅け戻つたのであるから、誰れよりも一番にその十一二才の男の兒が力づいた。

私は、外を歩いてゐて、あの大搖れの來た時、自宅は二間しかない、かなり丈夫に出來た平家の新築であるから、今歩いてゐる附近の家が瓦を瀧の如く振り落されたのみで、倒壞にしなかつたので、自分の家も倒れはしないであらうが、臺所の棚などに可なり重量のある物を載せてゐる、それが運惡く妻の頭上に落ち、殊に平常でない身體をしてゐるので、もしや氣絶などしてゐるやうなことはないだらうか。兎に角一刻も早く歸つて見ねば安心出來ぬので、歩いてゐて大搖れに遭つた地點から五六町の道を急いで歸つた。しかし、平常通行の許々してゐる自分

[illegible]

[illegible]

「たに、[illegible]ったら合つてゐては何々可けない」と思ひ返し、自分の呼吸の苦しくない程度に道を急いだ。すると、稍々狭い道の、しかもガタ普請の二階長屋が一棟建つてゐて、その一戸には荷倚屋などのある家の前まで來た時、又二度めか三度目の大揺れがやつて來て、先に落ち残つてゐた瓦が又ガラ〳〵と落ちて來た。私達は、その家の前を駈け拔けた。

そして私は、腹の中では、絶えず思ひ、口に出しても、道を歩きながら數度感慨に耐えぬものゝやうにいつた。

「この郊外ですら此の通りだから、下町の方ではさぞ大變だらうなあ。」と。

それから私は、生垣の外から、隣家の庭先の植込みの中に避のしてゐる方へ聲を掛けて呼んだ。

「どうした？みんな何事もないか？……負傷(けが)はなかつたか？」

妻は植込みの中から返事した。

「えゝ、身體は何ともありません。……家の中は大變ですよ。」

と、顔を顰めていつた。

「うむ、まあ、身體さへ皆な何事もなければ結構だ。」

十一二才の隣家の長男は、恰も自分の父に對するやうに、嬌

[illegible]

[illegible]

このり」と甘えるやうに[illegible]

「うむ、なに、もう[illegible]。[illegible]、こんな[illegible]にはもう[illegible]やしない。その植込みの中に休んでおれば大丈夫だ。」

私はつとめて[illegible]しさうなことをいつて、[illegible]を安心させやうとした。他の庭の様子を見て來たのではないが、内心に、さつきの大揺れより、まだ大きい奴は、もう來さうに思はれなかつた。

さういつてゐるところへ、またガタ〳〵ギイギイと叩たり大きなのが揺れて來た。破壊された屋根から落ちかゝつてゐた瓦が、それとゝもに又ガラ〳〵と落ちて來た。隣の庭にある、セメントで固めた、金魚などを放してある一坪ばかりの池の水がダブついて、ぱしやり〳〵と飛び上がつた。

「おぢさん、危なうございますよ。こちらへお入んなさい」隣家の妻君がいつた。

そこには二三間の高さの杉や松が立つてゐた。その下には涼しい蔭をつくつてゐて、根も張つてゐた。そこへ[illegible]けてゐたの茣蓙などを敷いてゐた。

「おい、火鉢の中に火はありはしなかつたかし

妻に訊ねた。

「無いでせうと思ふんです。」

「思ふんぢや駄目だ。ありはしないか。」

と、いつてゐたが、私は、又しては揺り返へしてくるので、すぐには自分の家の中へ入つてゆくのを控へてゐた。

「折角汲んでおいた風呂の水が揺れて、おほかた溢れてゐるか知れない。見てゐると、六尺くらゐ上に跳ね上がつた。上から落ちてくる塵や埃で、とても這入れやしない。」妻はこぼすやうにいつた。

「まあ、いゝさ。為方がなけりや水を汲みかえるのだ。」

それから、揺れ返しの間を見て、私は急いで家の中に入つていつてみた。見ると畳の上は土足で歩いてもいゝやうに壁土や塵埃で、足の踏み込むところもなく、襖は倒れ、欄間の柄がそれに刺さゝつてゐる有様など、一種の凄惨味があつて、そんな僅微な惨状を見るにつけても、私は、又しては、

「こゝで斯様なだから、下町の方は、さぞ大変だらうなあ。」と、心の中でも思ひ、口に出してもいつたりした。

棚の上の小い瓶などは、どうだかと、先刻帰つて来ると一番先きに妻に訊ねると、

「さあ、きつと落ちてゐるでせう。何だか大きな音がして、もう家が潰れてしまつたかと思つた。」

「落ちたか。……為方がない。しかし、よく頭の上に落ちなかつたものだ。」

私は、家の中へ入つて見ぬ先きは、もう、棚の上の物は恐く揺り落されてしまつてゐるものと思つてゐた。隣家の、六尺からある大きな瀬戸棚は前に倒れ伏し、その前にあつた、大きな瀬戸の火鉢は、幸に火はなかつたが、灰は畳の上に一杯溢れて、見るから惨憺たる有様を呈してゐるのである。

で、揺れ返へしを用心しい〳〵私は自分の家の中に入つてみると、これは不思議に、きつと落ちてゐると思つた台所の棚の上に載せてあつた四個の瓶は一つも落ちて居らず、右手の壁に沿ふて置いてあつた鼠入らずの台所戸棚も倒れて居らず、たゞその上に載せてあつた、目ざるに洗つて入れてあつた、日常用の瀬戸物の類が入れ物ごと落ちて皿や茶碗が少し破れてゐた。しかもその中に私自身の、不断用ゐる飯茶碗があつたが、それは、やゝ高価の品で、質が堅牢であつた為か、かすり傷一つついてゐないのも不思議であつた。八畳の座敷は、前いつたとほり狼藉たるもので、そこの縁側に沿ふて障子の隅に置いてあつた裸の書棚は、平常から重味の為に殆ど倒れさうになつてゐたが、それは真正面に東から西に向つて畳の上に倒れ伏してゐ

た。つい二十日ほどビルの下から[illegible]の間にから、[illegible]つて來
て机の上に飾つてゐた可憐な八重咲の[illegible]した[illegible]一夜た二十
に根元から折られてゐた。私の[illegible]に入つ[illegible]
歳になる娘は、私と一緒にいつて、此の丸ビルから自分で秋
海棠を持つて來たのであつたが、これを見ると、

「あら、可愛さうに秋海棠が折れてしまつて。」

と慨いた。が、そんなことくらゐ、何でもないことが、段々九月一日から三日四日と日を經るにつれて分つて來た。

八疊の座敷と四疊半の茶の室と、それから三疊の玄關であるが、三室の中で一番ひどかつたのは、此の三疊と玄關の邊であつた。玄關の壁は單に龜裂のみでなく、三尺ばかり、ばつたり剝脱してゐて、入口の戸は、數日過ぎて修繕するまで締めることが出來なかつた。そして、三疊の欄間にあつた一間に一尺の棚には古い帝國文庫とか、新演藝などゝいつたやうな古雜誌などを載せて置いたが、これ等は全部振り落されてゐた。

さういふ譯で、落ちて破損の憂ひのある臺所の瓶などは一つも落ちて居らず、落ちて差支へのない書冊などが落ちたり、倒れたりしてゐるのも不思議であつた。それで氣を留めて、よく考へてみると、この地震は、私の家の方位にすると、東西に渡した棚の物はいづれも落ちて居らず、南北になつた棚の物が

あく迄さて。[illegible]
れてゐた[illegible]
のことに氣がついて、[illegible]
てると太い[illegible]に[illegible]て、その上に[illegible]
の手洗鉢は、[illegible]やうに[illegible]
伏さつてゐた。そこへは、遠くから[illegible]やうな鉢前を
自辨で造るつもりでゐたのであつたが、一寸[illegible]したいので、却つてそのまゝ傍へすにおいた。それがゐるこの地上には石ころ一つ置いてなかつた。私は緣側に立つて、手洗鉢が逆伏つてゐるのを見るに、割れてはゐなさゝうであるが、縁などは、必ず摺れて傷づいてゐるであらうと、定めて、それを早速に取り起して、ぐるりと二三廻ふちを撫で廻はしてみたが、兎の毛ほどもさら／＼になつてゐるところもない。その青磁は勿論新出來の物であるが、直徑八九寸ばかりのもので、私の愛用してゐる物であつた。私は殆ど每日、自分でその水を取り換へ、一日、何時誰れが來て、手水を使つても、清淨な水を汲々と湛えて置かうとするのが、私の用意のあるところであつた。

その手水鉢も天佑でもあるか不思議に無事であつた。

暑い時分のことゝて火鉢には火の氣は少なかつたが、一寸隣つてみると、瀬戸の火鉢は無かつた。火箸で探してみると、火

種が幾らか殘つてゐた。それで、その火鉢を抱へながらお勝手口から急いで外の井戸端に持ち出すと丶もに父一つ可なり大きな搖れがやつて來て、ガラ〳〵と頭の上から瓦が二三枚割れ落ちた。私はいそいでそれを避けながら、板塀の木戸から隣家の廣い庭の方へ逃げ出して來た。

「危いですよ。」と、妻は植込みの蔭から呼んだ。「おぢさん危うございますよ。」と、隣家の妻君も共に聲を掛けた。

私達はさうして二三時間ほど庭の植込みの中に不安の時刻を過してゐたが、そのうち段々搖り返へしも間遠うくなつてきたので、恐る〳〵父家の中へ這入つて來た。そして、ぶつ〳〵小言をいひ〳〵足の踏み込むところもないまでに壁土や煤埃や棚から落ちたり、倒れたりした物で狼藉とした座敷を形付にかゝつた。

それは、あの恐ろしい九月一日の午後三時四時の頃からであつたが、自分達が、さうして落ち散らかつた物を、それ〳〵元の場所に直したり、捌ぢれて立て付けの、どうしても直らなくなつた襖をいろ〳〵に持て餘してゐたり、疊の上の泥を二度も三度も掃き出して、その後を濡れ雜巾を固く絞つて拭いたりしてゐる間にも、遠くの下町の方では、刻々に阿鼻叫喚の聲が劇しくなつて、焦熱地獄の出現に迫まりつゝあつたのだ。

夜の物や行李などを重ねた押入れの中には壁や天井の泥土が一杯落ちて、とても急には手が付けられなかつた。

「まあ、このまゝに、そうつとして置くよりほか仕方がありませんよ。どうせ今晩は蒲團など着ては寢てゐられないんですから。」妻はさういつてゐた。

「とても今日は風呂に入れませんなあ、折角朝から汲んでおいた水が煤で眞黑です。どうしよう。」と、思案するやうにいつた。

「どれ。」といつて、私は風呂場にいつて、水を覗いてみると、なるほど煤や泥で水の上面がきら〳〵光つてゐる。「これを落してしまつて新しく汲みかへやうぢやないか。」私は、もう大抵大搖れも來ないものと思つて、その晩も平常のとほり風呂に入つて、さつぱりした心持ちにならうと思つたのであつたが、妻は、

「今晩は火の氣に氣を付けなければ。もし又どんなことがあるかも知れんし。」

「さうか、私はもう大丈夫だらうと思ふがなあ。」

「今晩だけは休みませう。……先刻あのひどいのが搖れた時に、その水が恐ろしいやうに飛び上つて、あすこら邊まで屆いた。」といつて、妻は天井の方を見上げた。

[illegible]
きたら、[illegible]お鍋を[illegible]に載せて下[illegible]
さうして一応[illegible]いて、途中で拾いた[illegible]の上に、[illegible]一つになつて鉄火をかいてゐるところへ、時々來訪する文學青年[illegible]の外から、

「先生いかゞでした。別にお變りもありませんか。」

と、聲を掛ながら、いつものとほり玄關先きの木戸から、すぐ庭の方に廻つて縁側の方に表はれた。

「いよう！……大變だつたね。難有う。私の處は御覧のとほり、先づ壁が少し傷んだくらゐのものです。君はあの時何處にゐたのです？」「私はあの時丁度麹町の方にゐました。麹町のオー女學校の校長を雜誌の用事で訪問しまして、そこを出て丁度三階の校舍の脇を通りかゝらうとするところへ、あの地震がやつて來て、校舍の下の高い石垣が崩れ掛けて、女學生が三人ばかり生埋めになりました。私も手傳つてそれを堀り返しました。堀り出してみると三人ともう死んでゐました。一人は幽の息くらゐはあつたやうですけれど、それも多分すぐ死んでしまつたでせう。」

私はそれを聞いて額を顰めながら、

「はあ、さうかね。きつと、そんなのがまだ到る處に出來てゐ[illegible]」

「ええ、[illegible]うかと思つたのですけれど、自分の家の[illegible]心配ですから[illegible]から線路を傳うて大急ぎで歸つて來ました。家では丁度お宅と同じやうに壁が少し崩れたくらゐのもので、皆な何事もありませんでした。」

お互にそんな話をして、無事を祝し合ひ、臺所の上げ板の下に冷してをいたシトロンを拔かして渇いた咽を霑した。

「そして、君はこれから又何處かへ行くのですか。」と、私は訊ねた。

「ええ、これから又小石川の方へ行つて來るつもりです。友達がどうしてゐますか、見て來ようと思つて。」青年は昂奮してゐるやうに頬を熱していつた。

「そりあ大變だなあ。」私は太息を吐くやうにいつた。思ふに彼は單純に友達の安否を憂へてゐるばかりでなく、大半好奇的氣分で、今まさに混雜を極めてゐる東京市の諸々方々を歩き廻つてみるつもりなのであらう。私自身も、いろ／＼に東京市中の騷動してゐる有樣を想像して見ないこともなかつたが、なんといつても、それはまだ九月一日の午前十一時五十八分を過ぎるこ

と、わづかに四時間で、それから三日四日を經過して、慘害のいよ〳〵劇甚なるを知るに至るまでは、災害が甚いとは思ひながらも、それほどまでとは想像だに及ばなかつたのであつた。東京市外の郊外に住んでゐる者はそれもその筈。日本橋や京橋の中心に住んでゐる者も、夕方の五時六時頃までは、「なに大丈夫だ。」と、思つてゐた者も多くあつたのだから。

やがて、その青年が歸つて行くと、私は臺所の隣の風呂場の方にやつて來て、

「どうだ、風呂の水を仕換へて、入らうぢやないか。もう、大抵大きいのは來ないだらう。」といつた。すると妻は言下に、

「そんことをして、萬一火でも出したら、方々へ申譯けがないぢやありませんか。」

「さうか。」私は、不承無承に風呂を立てることを斷念した。その時私は風呂に入つて晝間の汗を洗ひ流して、さつぱりした氣持ちになりたいのも本當であつたが、又別の意味から、出來るだけ落着いた氣持ちで、不安な災難に處してゐなければならないと思つたから、自分から先きに立つて、女共の氣持ちを靜めようとした。

さうしてゐる間にも時々輕微な餘震が脅かして來た。

それより前、先刻外から駈けて歸つて、間もなく、家から少し出ていつた處にある高臺の坂道の方に上つてゆき、そこから遠くの向うの方を見渡すと、戸塚の原から大久保新宿あたりの上空に當つて、晝間の明りのために火の色は見えぬが、二三ケ所に黑煙が立ち上つてゐるのが見えた。焚鐘はそちこちで消魂しく鳴つてゐた。しかし、後になつて東京市の大半を燒き盡してしまふやうな大火とは思はれなかつた。

それから段々夕方になつてくるに從つて、西の方の空を見ると、まるで墨を流したやうな黑雲が低く空の一半を蔽ふて、今に雷雨でも襲ひさうなたゞならぬ樣子である。それとゝもに東の方……東京市の下谷、淺草、本所方面の上空には、例の入道雲が、もく〳〵として湧き上り、それが次第〳〵に赤色に染まりつゝ大空に擴がつてゆくのが見えた。

それでも、六時頃に、午前の中に注文をきゝに來た肉屋が、竹の皮に包んだ鷄の肉を屆けて來た。私共はそれを煮て、瓦の破片の落ちてくるのを用心しい〳〵、蠟燭の明りでトタン屋根の下で井戸端で夕飯を食べた。試みに東中野のステーションの處までいつてみると、ボギイの電車が三臺繋がつたまゝそこに停車してゐて、現業を停止した構内には夜の暗の加はるとゝもに、東京方面の空が左方の戸山の原の森の邊から右の方は中野の塔の山の森にかけて一面の火の海となつてゐた。因つてその

何ともいへない感じがした
自分の身の上に、まづそうとほり無事であつたが、私は永久に

汽車の窓から東京を眺めて

村松梢風

私が乘つて來た夜行列車は、朝の五時に東京へはいつた。列車の窓から、夜が明けたばかりの街を見をろすと、雨の後で、街は一めんに朝霧に包まれてゐた。白い霧は、地面から屋根まで位の高さをどろどろと重たさうに流れてゐた。鐵道線路の近くの街路はビツシヨリと氣持よく雨に濡れて、ところ〴〵に水溜りが輝き、電車線路が薄刄のやうに光りながら横たはつてゐた。もう電車が通ひ始めてゐた。朝早い勤め人や勞働者が、手に手に雨具を持ちながら歩いてゐた。

空にはまだ雨雲の名殘りがいつぱいに擴がつてゐたが、見てゐるうちに、段々高くへ昇つて行くやうだつた。雲の破れ目からは、海のやうな碧い色が現はれかけてゐた。

灰色の、低いトタン屋根の波が、眼の届く限り續いて見えた。眼界の一方は、芝公園から愛宕山一帶の丘陵によつて遮られた。其處には殊に濃い霧が掛つてゐて、霧の中から、山上の森が上半身だけを現はして、一列に長く長く續いてゐた。

七月初めから一と月以上照り續けた揚句に、やうやう此の雨を見たのだつた。萬人の歡びと感謝の念とを私は想像した。此のバラツクの都會に住む人々が、トタン屋根をうつ劇しい雨の音を聽きながら、ゆうべはどんなに安らかな睡りをむさぼつたことだらうかなぞと考へて見た。私自身も、今日から直ぐに東京の街を飛び廻つて探さなければならない身だ、が、此の雨ではあのひどかつた埃も當分は鎭まるだらう。泥濘だらうが何ん

だらうか、埃の立たぬ冷つこい住來を、重たい靴を履いて、ぴたりぴたりと歩ける愉快さを考へた。まことにあの何寸も積つてゐる埃の上を、ぼこり／＼と拔き足で歩く程厭な氣持は無いものである。何んといふ有難い事だらう

さう云へば、去年九月の震災以後、私は何遍此の汽車の窓から、東京の姿を迎へたり、見送つたりしたことだらう。震災後間も無い九月十月の頃は、此の邊には家らしい物はまだ立つてゐなかつた。焼こげた古トタンで圍つた哀れな鷄小屋のやうな物が轉がつてゐて、其の中に人が住んでゐた。一めんの焦土だつた。汽車の窓から展望する人々は、誰れでも云ひやうのない悲痛な眼付きをして、其の光景を見るのだつた。まつたくそれは、何遍見ても、どう思ひ返しても、傷心の限りだつた。其の時分、正午の汽車で清水を發つと、秋の日脚の短く、東京へ着くと夜になるのだつた。が、夜になつても、東京には燈火が無かつた。曾ては寶石を鏤めた王冠のやうに美しく輝いた不夜城の都には、今では一點の燈火も見られなかつた。汽車は品川を離れると間もなく、其の深い暗黒の海の中へ吸ひ込まれるのだつた。誰れでも、何んとなく、暗界へ足を踏み入れるやうな、怖ろしさ不氣味さに顫へずにはゐられなかつた。

日増しにバラック建築が建つて行つた。十月頃になると、汽車の窓から見ても、あらかたトタン屋根で地面が覆はれるやうになつた。それと同時に、夜の燈火が少しづゝ復活して來た。

「帝都は復興しつゝある」

と人は言つた。そして、其の復興の力の强さを嘆賞したり、誇つたりするのだつた。が、私は、バラック建築が建ち並ぶのを見ても、人々のやうに、東京が復興しつゝあるといふやうな氣持にはなれなかつた。幾ら出來てもバラックでは仕方がないと思つた。無論何も無い時よりはそれでも明るい氣持になつた。が、それは、復興を喜ぶまでの氣持には達してゐなくて、强いて云へば、多くの人間が死なずにゐることが、それでわずかに確められたやうな氣持がする位の程度だつた。

「バラックが建つ間は復興ではない、バラックが取り拂はれるやうになつた時からが復興にはいるのだ―

と私は言つて見たりした。或る時、矢張り今日のやうに朝早く着いたところが、大雪で、無數のバラックは、雪の中に埋まつてゐた。また或る時は、爛れるやうな熱い陽がバラックのトタン屋根の上にギラ／＼燃えてゐる時、喘ぎ／＼走る汽車に乘つてはいつて來た。さういう時は殊に、此の東京が今や復興に向つて活動しつゝあるといふやうな晴れやかな氣持にはなれなかつた。此の都會の生活の慘苦ばかりが考へられた

[illegible]

眺めて、あうしつとりと雨に濡れて見れば、[illegible]が良さゝうに見えた。[illegible]のやうな[illegible]山の[illegible]が、私の眼を愉しませた。僅か一日一夜の間に、詩人に[illegible]中から救つて呉れると同時に、人の心持をもあゝまで変化させらるゝかと思へば不思議なやうでもあるが、自然から投げられゝば、ひた殴れに畏れおのゝき、自然から恵まれゝば忽ち歓喜の聲をあげて喜び勇む、嬰児のやうな人間なのだから仕方が無い。

去年のあの大地震の日から一週間位経つた時だつた。私は或る日、上野の西郷隆盛の銅像の辺りから、東京の焼跡を展望したことがあつた。建物が無くなつたので、全市の道路が網の目のやうに見渡せた。其の道路は何處も彼處も人や車で一杯になつてゐた。名状の出来ない混乱が渦を巻いてゐた。焼け残りの西洋建築の外廓だけが、處々にぽつり／＼と立つてゐたが、其の他には家らしい形をした物も眼に入らなかつた。さうした焼跡を、黄色い埃が濠々と包んでゐた。「観音様は何處にあるんだらう」なぞと、私の近所で同じやうに見物してゐた人達が言つてゐたが、焼け残つたと云ふ浅草の観音堂も其のひどい埃に包まれて、辛うじて霞んで見えるくらゐなものだつた。さういふ光景を私は可成りの時間其處に立つて眺めてゐた。

[illegible]と。私は、[illegible]大震災だつた。[illegible]といふやうなことも[illegible]考へあたつてゐた時だ。其の時の私の考へでは、[illegible]たたないだらうと思つた。此の東京は永遠に亡びてしまふかも知れないと思つた。三百年間日本の文化の中心となつて来て、そして吾々の生活を多年支配して来たところの此の東京といふ大舞台と、それに伴つて生れて来たところのさまざまの文明とが、此の儘限りに亡びてしまつて、やがては単なる歴史上の存在と化してしまふ、さういふ時節が来るかも知れないやうな気持がした。私は、完全に東京が滅亡してしまふことを想像して見た。そして、此の大都会の斷跡はどう変化して行くだらうかと考へて見た。私は、百年の後に至つて、此の焼跡の大部分が田や畑となる光景を想像した。其の頃になつても、浅草の観音堂や、根門や、五重の塔や、それから其の周囲に新らしく出来た小さな町だけは残るであらう。上野の山の下から、浅草へ通じるあの廣い道路が五分の一位の幅に縮められて、其の代りに、兩側の田畑には、春が来れば麥が緑に伸びたり、菜種の花が黄色く咲いたりして、遠國から来る旅人の眼を樂しませるに違ひない。其の時分になれば、現在の焼け残りの山の手の市街の大部

分も亡びてしまふに相違ない。只わずかに、牛込や、小石川や、本郷や、それらの市街の一部分が立ちぐされのやうになつて殘つて、往時の面影をとゞめるであらう。さうして他の丘陵や谷の大部分は、畑や林になつてしまふに違ひない。さうした廢驛と廢驛との間を、ガタクリ馬車が、ラッパを鳴らしながら走つてゐる—そんな光景を私は眼に描いた。

私の空想は、日本といふ國家の、現在及び將來の文化の程度や、人口の消長や、其の他いろ／＼な必然的條件を無視したところの、取り留めもない空想であるには相違なかつた。それにも關はらず、其のとき私は十分の實感をもつて、自分の描いた想像の世界へはいり込むことが出來たのだつた。さうして私は、何故だか知らぬが大變いゝ氣持になつた。東京が亡びて、云はゞ古への武藏野に歸ることを想像したのだつたが、それには哀感よりも、寂びの感情の方が勝つてゐた。これは、私が眞正の東京人でなく、田舍の生れで、東京に對して郷土的觀念を有つてゐないことにも原因するが、併しそればかりではない、われわれ都會生活者が、都會の物質文明の中に埋沒して、是れ無くては一日も過すことが出來ないやうな狀態に陷つて居りながら、一方では、それと反對に自然に戻らうとする本能を有つてゐるからである。あの大災害に直面して、私と同じ樣な感想を味はつた人も澤山あるであらう。

それから少し日が經つてからのこと、或る日私はお茶の水橋を渡つて駿河臺邊を歩いてゐた。歩き乍ら、ヒヨイと眼を轉ずると、其處から餘り遠くない處に、非常に大きな坂がこちらを向いて付いてゐて、其處を人が上つたり下りたりしてゐるのが蟻のやうに小さく見えた。

「何坂だらう！」と私は驚いたやうな氣持で其の大きな坂を眺めたのだつた。さうして、それが九段坂であることを自分で確め得る迄には一寸した時間を要したのだつた

燒原になつて見ると、それ程四圍の形勢が變つて見えた。燒跡を歩いてゐると、思はぬ時に、眼の前に橋が現はれたり、丘陵が連なつてゐるのが見えたりした。友人の畫家のM君は、「ねえ君、其處ら中に矢鱈に廣重が顏を出してやがるんで厭になつちまふね」と、或る日一緒に歩いてゐながら私に向つてさう言つた。全く、あの殺風景、と云ふよりは悽慘をきわめてゐる光景の中に、到る處に廣重を發見するのは不思議と云ふばかりだつた。これに依つて考へても、近代の東京が、いかに自然から遠ざかつてゐたかといふことが分るのである。

地震も最早一年の過去の思ひ出となつた。バラック建築が建ち並んで、武藏野も廣重も再び姿を潜してしまつた。勿論私は

そ[illegible]この機械文明[illegible]してゐるのである。さうして此の大きな機械の中で生活して行くことの恐さを私は意識してゐなかつた。自然に對する反逆は現代文明の一切であつて、そして人類の有つ[illegible]である。「自然に還れ」といふ叫びほど、無力な聲は無いであらう。われ〳〵は、市街の路を離れて、燈火をさして群がり飛んで、命を一夜に縮める羽蟲のやうなものである。

私は、復興した大東京の偉觀を、列車の窓の外に描いて見た。空が紅く燒けて、地上には水晶を連ねたやうに、雲を凌ぐ建物が並んでゐる。劇場や、カフエーや、公園や、其處には花のやうな男女が、歡樂と刺戟を求めて遊び狂ふてゐる。飽き易く、そして忘れつぽい都會生活者は、大正十二年のあの怖ろしい自然の殘虐については、遠い昔の物語を聞くほどの興味と實感を持つだけになつてゐるであらう――。私はそんな事を考へて見た後で

「いつたいそれは何時の事だらう……」

と思つた。東京が完全に復興して、われわれがそんな華やかな都會生活に浸ることができる時分には、私などは既に髮が眞つ白になり、或ひは腰がまがつて、人生の希望の全部を失つて

し[illegible][illegible]ドとし[illegible]た。

此の窓のバラツク共では、ある[illegible]戸を明けてゐる[illegible]に、まだ[illegible]て寢てゐる家もあつた。れんじ窓の外へ花の鉢を置いてあるのや、小さな竹垣を結つて樹木を這はせてある家などもあつた。と、或る一軒の家では、雨戸を繰り明けて鐵道線路の方へ向いた格子窓の側で、若い女が髮を結つてゐるのが見えた。寢まきの儘の絞り染めの浴衣の袖の端を頸筋の處で結び合はせ、兩方の腕の肩のつけ根まで露はして、鏡の中を見てゐるらしい女の顏や腕の皮膚の色が、鈍い朝の光線で見るせいか、幽靈のやうに蒼ざめて見えた。

反對の側の窓の外には、新橋のステーションの、燒け崩れた建物が、去年と同じ姿で殘つてゐた。雨あがりの道路を、人や車が泥を捏ねながら通つてゐた。

寫經供養

田中貢太郎

○入閣祝賀會の日

七月二十日のことであつた。その日は同縣の先輩仙石貢君が加藤内閣の鐵道大臣となり、濱口雄幸君が同じく大藏大臣となつたので、その祝賀會が在京の高知縣人によつて催されることになり、私もその席に列なるべく四時の開會に遲れないやうにと出かけて行つた。

會場は上野の精養軒であつた。一ヶ月ばかりの間に僅に一二回小雨が降つたばかりで殆んど雨らしい雨の降らない炎天續きの街には、眼を刺すやうな陽の光が流れてゐた。私は最近護國寺前と東京驛の間を往來するやうになつた電車で池の端まで行つた。震災後の廣小路附近は、松坂屋呉服店をはじめ、洋品店、雜貨店、菓子屋、西洋料理、肉屋、鳥屋、カフエーなどが、僅にトタン屋根の假建築の軒を並べてゐて、ひどく貧弱なうへに、道路は大破損の所だけに申譯的な修繕を施してあるばかりで、燒け灰も砂塵もそのまゝにしてあるので、旋風のたびにそれが白くたつて、呼吸をすると火になつてそれに燃えつきさうに思はれた。

精養軒の入口には「仙石濱口入閣祝賀會」と黑い地に白墨で書いた木札がかかつてゐた。この數年間毎年一回催してゐる縣人會の會場が此所になつてゐるので、私達には親しみのある場所であつた。昨年の十一月にも震災後早早であつたが、知人の安否を知り、お互の無事を祝しあはふと云ふ意味から、やはり縣人會の催しがあつたが、その日には見知りごしの大石保君の芝居のやうな遭難談を聞いた。それは九月一日のこと、大石君が大火の下を潜つて避難してゐると、一人の惡漢が來て隙を見て手提鞄をさらつて行つた。鞄の中には株劵銀行の通帳をはじめ手許にあつた現金まで入れてあつた。ところで翌日になつて、被服廠跡の入口でその鞄を枕にして死んでゐる男があつた。警察の方では鞄の中の書類によつて、てつきり大石君が死んだもの

[illegible]

義は大杉[illegible]の號を取つて命名したものであつた。

不忍の池を眼下に見おろすやうになつたいつもの大廣間には、もう三百に近い人が來てゐた。大廣間の天井には此所此所に扇風器が舞ふてゐた。受附で箱の花にした造花の徽章をもらつて襟に著け、廊下の方から行つて見ると、知人の顔が彼方にも此方にも見える。俳句仲間の高畠千駄木君がゐる。高知新聞支局の栗尾蘭卅君がゐる。川田叱風君がゐる。その人達には二月に二度目の支那行きをやつて以來逢つてゐなかつたので、そんな挨拶をしながら外の方に眼をやつた。夕陽に染められた池は荷の葉に埋まつたやうになつて、その中に花らしいほの白い物が交つて見えた。

京都府あたりの警察部長になつた川淵洽馬が來て挨拶をする。今度高知市から憲政會の候補者として選出せられた中谷貞賴君がゐて、

『暫くお眼にかからないやうですが、いつでしたか、ね、え、』

と云ふ。私は昨年の縣人會に逢つたやうな氣がするのであつた。

『去年の縣人會でお眼にかゝつたやうですが、』

大廣間を横切つて向ふ側の廊下へ出ると、弘田東行君がゐる。[illegible]

[illegible]

[illegible]川君が來る。政友會の[illegible]候補者として中谷君と[illegible]

[illegible]

『[illegible]濱口さんは、來てゐるだらうか、』

と傍で云ふ者があると、

『來ちよる、來ちよる、』

とむきだしのお國詞で返事をする者がある。私達の間で中田の爺親でとほつてゐる蝋殼町の紙問屋の主人が來て、大きな地聲で、

『だれかをつたら、手を執つて書かしてもらうに、どもならん、やうよのかい書いた、』

と云つて、扇子で文字を書く眞似をしたので皆がふきだした。私達も受附で會費を納めた後で、仙石と濱口に送るから書けと云つて、二枚の紙片にそれぞれ自分の名を書かされてゐた。

やがて餘興の貞山の講釋があつて、記念の撮影になつたところで、主賓の仙石君と濱口君が姿をあらはして中央に腰をかけた。二人とも赤い花を胸に著けてゐた。仙石君は赤黒い顔のすつこけた奥行のある鋭い顔をしてをり、濱口君はでこぼこの見

やうによつてはライオンのやうにも見え、又髑髏のやうにも見える顔をしてゐた。その仙石君は和服で、濱口君は黒い上着の洋服を着てゐた

撮影が終つて食堂が開いた。右側の壁に沿うてしつらへた席が主賓席になつてゐて、その中央壁に沿うた方に末延道成君を間にして仙石君と濱口君とが坐り、その向ひちやうど末延君の前になつた所に舊藩主の山内侯爵が小じんまりと坐つてゐた。そして山内侯爵の右には濱口君と向きあつて次官の小野義一君が赤い顔を見せ、その左側即ち仙石君の前には陸軍大將の山比光衛君が坐つてゐた。土方寧博士はその席の入口に近い所に壁の方を背にして白い頭を見せながら、さかんに氣焔をあげてゐた。

私達の席はその主賓席に一方を近くつつけるやうにして十並び位並んでゐた。それには牡丹とか百合とか云ふ名がついてゐた。私は牡丹と云ふ紙札を持つてゐたが、入口のとつつきの席に飲み仲間の弘川東行などがゐるので、席次にはかまはずにそれに腰をかけた。

教育家の川田正澂君が報告をすると、末延君が起つて挨拶をした。

『我が土佐から、二人も内閣樞要の地位に大臣を送つたことは、明治三十一年の板隈内閣に、板垣伯、林有造、大石正巳の三氏を送つた以來のことで、土佐としては誠に欣快にたへぬところであります、何卒兩君とも健康に注意せられて、シッカリ、ウンとやつて戴きたいのであります、又來會の諸君も、今晩は政治談はぬきにして、土佐流にくつろいで戴きたい、』

末延君は土佐の長老であつた。彼の苦しさうな挨拶が終ると、山内侯爵が卓の端を押へて起つて、

『これから仙石鐵道大臣閣下、ならびに濱口大藏大臣閣下の健康を祝するために、』と云つて來會者一同に起立を促して乾杯をした。乾杯が終ると仙石君が起つた。

『山内侯爵閣下ならびに先輩、友人諸君、』

と土佐の老人に珍らしい活氣のある聲で謝辭を述べてから、

『大隈内閣の時も、今回の、憲政會は誠に運がわるく、いつも國家の危急の時に内閣の重任を負はなければならない、シッカりやれとのお詞であるが先づ現今の國家の病患を治してからでないとシッカリ積極的に仕事をすることにできない。たとへば…』

と云ふまではよかつたが、その引例が長く、それが岐路にそれて行つたので、私達はぢりぢりして來た。私は自分の向ふにゐる弘川君がどんな顔をしてゐるだらうと思つて、ひよいと見

……

『ウロちや、ねや、』

と云つて皮肉な浅嘲を持つて來た。すると私の右側にゐた森弥也君が風の吹くやうなあはただしい聲で何か云ひだした。

『だ、だ、だつせんぢや、あ、あれや、たたきらん、たきらんよ、』

『別府兆太郎がをころばずぢやア、』

と弘田君が又嘲る。仙石の演說はますます枝葉にわたつて行く。

『ちよつ、やめえと云はふか、』

弘田君なら云ひかねない。私は氣が弱いから、

『そんなことを云ふもんぢやないぞ、そんなことを云ふなよ、』

となだめる。と、嘲つたやうな拍手が二ケ所から起つた。一つは弘田君で一つは背後の卓からであつたが、たぶんそれは尾崎咬江君あたりであつたらう。

そのうちにやつと仙石君の演說が終つた。と、

『濱口のおんちやんに、何か一つお願します、』

『濱口大藏大臣に何か願ひます、』

と云ふ聲が起つた。すると濱口君が起つた。仙石君の演說でさはめいてゐた席が急にひつそりとなつた。

『かつか、ならびに、せんぱい、いうじん、しよくん、』

……

た。……

『私は、あつちこつちの、祝賀會に、出ましたが、今日の祝賀會くらい、私を感激せしめた會には、未だ曾て、出席したことがありません、何かお話して、祝賀の辭にかへたいと思ひますが、萬感胸にせまつて、申しあげることができません、私ももはや人生五十年の定命を過してをりますから、惜しい體ではありません、この上は浅學、短才、愚鈍に鞭打つて、諸君の期待に背かないやうに、國家のために盡したいと思ひます、』

濱口君の挨拶は短い、さうした席にふさはしいものであつた。

『さすがぢや、』

と弘田君が感心したやうに云つた。そして、仙石君の發聲で來賓の健康を祝してから食堂を閉ぢたが、私は後へ殘つてつまらない談話を交はすのが厭になつたので、すぐそこを出て歸りかけたが、池の端のバラックの夜の情景を見やうと思ひだした。

震災後東京市では、九段の靖國神社の境內、小石川の植物園、青山の、明治神宮外苑、日比谷公園、芝公園、芝離宮、宮城前の廣場及びこの池の端から上野の山內にかけて集團バラックを作つて罹災者を收容したが、そのうちで宮城前のバラックばか

りは、皇室に遠慮をしたのかとうに取り拂つて無くし、他はそのままになつてゐるのは吾れ人ともに知るところである。私は清水堂の前になつた石段(いしだん)をおりて行つた

暗いなかに白い浴衣がちらちらと往來した。石段をおりて電車の線路を橫切ともう不忍の池畔で、その路をまつすぐに行くと池の中の辨天堂に突きあたる。二棟になつた集團バラックと呼ばれてゐるトタン屋根の長屋は、その入口の左右に並んでゐた。その月の五日であつたか、大泉黑石君がフランスへ行くと云ふので、私達の間で送別會をしようとしたが、大泉君の外遊の噂は一二年前からのことで、行く行くと云ひながらちつとも行かない、今度も又宣傳であつたら、幹事になつた者が出席者にすまないことになるから、四五人で遠慮のない者だけで飯を喫はふと云ふことになり、中央公論社から瀧田樗陰君と島中雄作君を出てもらひ、仲間の方からは生方敏郎君、村松梢風君、及び私の三人が出て、それで大泉君を呼んで、池の中の「笑福」と云ふ旗亭で飯餐を共にした。

その日は四時の會合と云ふことになつてゐたが、川遊しをしてゐるうちに、もう約束の時間になりかけたので、急いで電車に乘つて、山下からおりて汗みどろになつて步いた。と、傍を驅けぬけて行く車があつて、その車の上から聲をかける者があるので、ふと、見ると的鬪柒のKさんと、云ふ姐さんが、孔雀が羽をひろげたやうにして乘つてゐた。姐さんは涼しさうな聲で、

「お先へ、」

と云つたなりに行つてしまつた。その姐さんはその日の席へ出てくれることになつてゐた。私は汗と埃とに、まみれて步いてゐる自分を顧みて苦笑した。もう四時半になつてゐた。池の中の小さな太鼓橋を渡りながら見ると、旗亭の水の上に突き出た側の座敷の欄干の所に瀧田君が立つてゐて扇をあげた。彼の車に乘つてゐた姐さんもその傍に笑つてゐた。

それは風の涼いやうに吹く日であつた。欄干の外には遊の衆が大小の絹傘を風の煽りに任かしてゐた。その風に吹かれながら後から來る者を待つてゐると、生方君が猫背に胸を屈めてステツキを突き、とことこと彼の太鼓橋を渡つて來た。島中君は白い洋服を着た體を紗のやうにくねらして來た。

そうして來る者を待ちながら池畔にぐるりと建つたトタン長屋の方に眼をやると、池に背の方の小窓を見せた長屋の軒には、ずうと一めんに襁褓を干し、それに交へて赤い褌をかけてあつたが、これが風のためにひらひらと飜つてゐた。

「襁褓が旗差物のやうに、へんぽんと翻つてますね。」

[illegible]
こんなに沢山に[illegible]のある所を見ると[illegible]と云ふ[illegible]しか
する」と云つた。生方君は長屋の中を覗いて来たと云つて、
『病人なんかが寝てゐるのは見てゐられないですね、』
と云つた。私はトタン長屋へ入りながら、その日に見た種々のことを頭に浮べてみた。

路の左側の路次に入らうとしたところで、その入口の水に寄つた方の建物の横に提燈が點いて人だかりがしてゐた。覗いて見るとそれは救世軍らしいもので、一人の女が中に立つて演説をやつてゐた。

『白粉をつけ、きれいな着物を着たところでなにになります、』

私はきつとその女辯士は、獅子つ鼻のおでこの女だらうと思ひながら路次の中へと入つた。

路次の左右は各戸の入口になつて、戸障子を開け放つた狭い家の中からは電燈が暑くるしく射してゐた。小供の泣聲もしてゐた。チヤブ臺を圍んで裸で飯を喫つてゐる所もあつた。蚊帳の中で仰向けになり、左の膝を立てゝ團扇を使つてゐる女もあつた。夫婦と二三人の小供とで寝そべつてゐる所もあつた。門口へ盥を出して湯を浴びてゐる者もあつた。もじりの襦袢を引
[illegible]
りながら自分の家と話してゐる老人も[illegible]
男が女の上を[illegible]つてゐた。[illegible]家ではお神さんが
小供を膝の上にのせて、[illegible]を使いたく[illegible]を[illegible]つてゐた。

私はそんな所を物珍しさうにじつくりと見て歩くのは悪いと思つたので、足を止めずに歩いてた。さうして歩るいてゐる私の眼に、その長屋の軒下の共同炊事所に鉢に植えた朝顔や夕顔の蔓草のあるのが見えた。それは市から慫慂してバラツクの暑さを防ぐために、軒に這はして日除をこしらへさせやうとしてゐるものであつた。市ではその當時、トタン屋根に白や緑の液を塗つて陽光を防ぐことも慫慂してゐた。しかし、朝顔の蔓や夕顔の蔓は延びないので、新聞に投書してそれを嘲つたものがあつた。私はかうしてこのあたりを三十分ばかりも歩るいて歸つた。

この不忍の池畔、觀月橋の袂になつた所に、私の知人の加藤美侖君がゐて、一昨年の博覽會以來、旅館をやり料理店になり、震災もうまく逃れて、非常に繁昌してゐたところで、五月になつて自分の家から火を失して隣家をあはせて燒いたうえに、火災保險の期限が二日前に切れてゐたので莫大な損害を蒙つた。この加藤君は賀川豊彦君や倉田百三君と比肩すべき人で、その編纂になつた『斯れだけは心得置くべし』と云ふ出版物は、所

洛陽の紙價を高めたものであるが、その火災の後で、無名の端書が數通舞ひ込んで來て、それには火の始末に注意せよ、斷れだけはきつと必得置くべしと云ふやうなことを書いてあつたが、これも池の端のバラツク史に挿入すべき挿話の一つであらう。

○眞經供養

今年の土用ほど雨のすくないことは珍らしかつた。七月は殆んど雨なしに暮れて、八月になつてやつと四日と六日にやや雨らしい雨が降つた。破損してゐる道路の沙塵に苦しめられてゐた者は、今度は泥濘に惱まねばならなかつた。

六月の夕刊の時事新報には、「悪道路名所調べ」と云ふ題で、雨の日の悪道路の見立て記事が載つてゐた。それによると銀座尾張町の電車停留場附近は大きな水溜になつてゐるので、尾張町の琵琶湖。萬世橋から上野廣小路にかけて、電車軌道の敷石花崗岩が飛びだしてゐるのに雨水が溜まつてゐるので、御成街道の耶馬溪。上野廣小路の水溜に松坂屋呉服店のウインドーのテスリが泛るやうに見えるので、上野廣小路の宮島。飯田町の電車交叉點の泥濘の中では、電車自動車自轉車と目まぐるしく行き違ふので、親は兒を顧るいとまなく、兒は親をいたはる隙がないと云つて、飯田町交叉點の親不知。市ケ谷見附下の道路は自動車の通るたびにどんどんと鳴るので、鳴戸。四谷見附から鹽町までには、砂塵の山が泥濘の中に散點してゐるので松島。御成門から愛宕町通りは、沙塵と燒土とが細長く道路と並行して積みあげたのに、松の植木や種種の盆栽が置いてあると云ふので橋立。御成門から三田へぬける芝山内の道路は、鐵管を埋めた後の赤土が地獄の血の池のやうにどろどろとなつてゐるので血の池。東京驛から數寄屋橋に至る間の道路は、馬の足跡位の凸凹がつらなつてゐるのに水が溜り、それが夜になると兩側の電燈が一つ一つ映るので不知火。私はこの見立の中にお茶の水の見立ての無いのが瑕だと思つた

七月の十八日の午后であつた。私は震災當日の被服廠跡が燒香の人で雜踏したと云ふ新聞の記事を讀んで、震災當時のことを今更のやうに思ひだして出かけて行つたが、行く路ついでにお茶の水を通つてみた。もつとも新橋大塚間を往來してゐる電車では時時通つてゐるが、徒歩で歩くのは今年になつてはじめてであつた。

水道橋の角の震災以來赤十字社の出張所になつてゐる建物を通つて、震災に破損した高い土堤に沿うてあがつて行くと、やはり時事新報であつたか「東京新名所お茶の水の砂漠」と云つてゐるとほり、泥沙が海岸の沙のやうに深く、電車のレールが

見まる程どになつてゐて、[illegible]自動車や自轉車の轍の痕は網の目のやうに縱横に[illegible]てゐるのが見られる。風が吹くと灰汁のやうな埃が濛々と立つた。

その砂漠の道路へ持つて來て兩側の邊から電車線路の修繕をしてゐるので、敷石を掘り起して積み重ねたり、セメント樽を置いたりして路を狹くしてゐるがために、自動車や荷馬車や人力車がたて込んでゐるのも不快であるが、まだ不快なのは右側の崖ぶちに震災の日の燒トタンと燒け灰を積んだままにしてあることであつた。その燒トタン燒け灰はお茶の水の橋の袂にまで續ひてゐた。

『もう一年が近くなつて、どうです、』永田は悧巧な男のやうに聞いてゐたが、たゞ如才ない丈けで、仕事は一向出來んぢやありませんか。あの胡麻鹽頭を變な恰好に刈つた鼻眼鏡の先生ならまさかこんなにほつたらかして置きませんよ』

瀧田樗陰君と電車で一度通つた時、瀧田君はこんなことを云つたが、なるほど東青嵐君よりも和製ルーズ君の方がこんな始末位はとうにしてゐるだらうと思つた。

左は順天堂病院の假入院室、假診察室。もとの病院趾も師範學校跡もそのままになつてゐるのに暑い夕陽が射してゐた。顏をあげるとお茶の水橋の向ふ岸に、上層の燒ケ落ちたニコライ[illegible]人の[illegible]駿河臺[illegible]が見えた。

私は駿河臺下へ出、そこから電車に乘つて兩國へ行き、兩國橋の手前でおりた。橋の左の袂の小屋に二三人の者が赤錆い色をしたペンキを塗つてゐるのを見たが、それは橋を塗りかへてゐる者らしかつた。

神田川の向ふの川端の土手の上にうつすらとした森のあるのが珍らしかつた。それはそこの旗亭の庭に植ゑた柳であらう、黑いどろどろした河の水と銀鼠のトタン屋根のうねりとの他に何もない所には懷かしいものであつた。

あげ潮になりかけた河には上流から風が吹いてゐた。私は橋を渡りながら昨年九月六日の日のことを思ひだした。私はその日になつて被服廠跡へと行つたが、その時その橋の袂に近い石垣の下の泥の上に、二三人の死人の火に焦げて黑ろくなつて引つかかつてゐるのを見たのであつた。

橋を渡つた所に交番があつて、そこの揭示板に翌日の兩國の川開を知らしてあつた。私は數千の人畜を吞んでまだ久しくならない水の上に、さうした執着を持つてゐる人の心を不思議に

思はずにはゐられなかつた。私は花火などをあげるより暗いたよりない水の上に點點と燈籠を流してやるべきであると思つた

私は昨年の路を迎つて河岸ぶちを行つた。右側の角から五六軒のトタン屋根があつて　その次にすこし引込んで、右の柱に『兩國憲兵分隊』、左の柱に『江東憲兵本部』の表札のかかつた所があり、その隣の燒ケ殘りのセメントの高い塀の内の足場に、赤縁の帽子に白シャツ、カーキ色のズボンを履いた男が十人ばかりゐて何かしてゐた。中には塀の上に腰をかけて此方に背を見せてゐる者もあつた。

荷馬車、自轉車、荷物自動車などが眼まぐるしく行違つた。私は氣がついて河縁の方を見ると、五六人の勞働者が低く丸太を建て板を敷いて、後高の桟敷のやうな物をこしらへてゐた。私はすぐそれは花火を見る桟敷で、一人前三四十錢を取つて坐らせる所であらうと思つた。十人のばかりの少年が來て、もうその桟敷を傳うてゐた。

所所齒の拔けたやうになつてゐるが右側にはトタン屋根が並んでゐた。左側の昨年火を免かれた建物の一紋が來た。『東京電燈株式會社配電係出張所』と云ふやうな表札が見えた。右側の空地に五六本の燒け枯れの木のある所があつた。それは昨年私が休んでサイダーの空ピンに詰めてゐた水を飲んだ所である。左側の建物の端に『東京金物競賣株式會社』とした所は、罹災者の一部が哀れな姿をして收容せられてゐた所であつた。

その並びが交番で、一緒に火を逃れた鈴懸の木が傍にあつた。そこに掘割があつて御藏橋とした短い橋がかかつてゐる。左側は兩國の汽車の線路の行詰であつた。橋の向ふの右側に廣い燒跡が來て、通路の方に鐵條網を張り、その内に一所石を築いた丘があつた。丘の上には上の赤い下の白い陸軍の小旗が動いた。その丘の後は大きな池で、中に一つ島があつて雜草が生え、その先には樹木の茂つた丘があつた。その丘の樹の中には燒けて大半枯れたのに僅に小枝が出てゐるものもあつた。池は被服廠の旋風に捲きあげられた人が落ちて救かつた者もあつたと云ふ因縁を持つた池であつた。そこは安田善三郎君の邸宅であつた。池の水はうす鼠に淀んで淋しさうに空の色を映してゐた。その池の左の縁に紫陽花の紫の花が二つ三つ見えてゐた。すぐ通路に沿うた丘の左手には棕梠が一本あつて、長い手のやうな葉をばらばらとさしてゐた。

左側の河岸縁にはトタン屋根の長屋があつて、古道具などを賣つてゐる所があつた。左側の安田邸の隣にもトタン屋根の長屋があつて、其所には朝顏の鉢を置き、黄ろた花の咲いた文殊

つはを置き、さは[illegible]を並べたには[illegible]てあるのも[illegible]。
　左側の長屋のはづれに大きな[illegible]の[illegible]を記した標木が立つて右側に折れて行く路があつた。それが被服廠跡の一方の入口で右の方に近く洋館の焼残つた骸骨のやうに見えてゐるのに、安田の本家である。被服廠跡の入口になつたその路のはづれの左側にこれも被服廠跡の火に因縁のある巡査合宿所があつて、大半焼けてゐたやうに覚えてゐたが、その時見るときれいに修繕ができてゐた。
　そのあたりから火に焼れた人達が魚かなんぞのやうに重つてゐた所であつた。入口の左側は公設市場で四棟の建物が並び右側は倉庫の棚で『逓信局本所倉庫』と云ふ表札がかゝつて、白の結襟の番人が立つてゐた。私は公設市場の横手からトタン長屋の間を潜つて行つた。
　そこは遭難者の霊堂の横であつた。堂は公設市場の建物の横を背後にして電車通りの方に向いてあつた。お縁にあげた花であらう夏菊やのぼり菖蒲の枯れかかつた花束が、その横の空地に積み重ねてあつた。そののぼり菖蒲の薄赤いインキのやうな花の色が眼に浸みるやうに思はれた。
　堂の前にはぽつぽつ焼香してゐる者が見える。線香の匂が鼻につく。私も堂の前へと廻はつて行つた。堂の中には大震火災[illegible]た大札が建ててあつて、ここには[illegible]を納めてあつた。堂の四方には低い木柵をめぐらしてあつた。そして正面に花筒を据ゑその右には四角なセメントの壇を置いてあつた。焼香者は賽銭をその箱に投げ、線香を壇に入れ、花をこの左右に置いてある木の台の上にあげるのであつた。
　茶の小さな株盤縞になつた洋服を着た男が来て、その花の壇の前にある高足の机に白い片をかけ、それの上に巻物を繰りひろげて、傍に立つてゐる女から何か聞いてゐたが、やがて帖面を取つてそれに記き入れ、その筆に女の手をかけさせて、巻物の赤い地紙の書きかけになつてゐる一つの文字を書かした。私は何か供養のために書いてゐるだらうと思つたが、どうした意味の文字であるか判らないので、傍へ行つて聞いた。
『書いてゐる字は何んですか、』
『阿彌陀經です、罹災者の遺族のかたに、一字づつ書いていいただいてをります、』
　洋服の男は僧侶であつた。彼は一方の手首に数珠をかけてゐた。
　そこへ夫婦らしい二人伴がやつて来た。左の眼の飛び出たやうになつて見える田舎者らしい女は、供養を頼んで何人かの名

を云つた。僧侶は帳面をもう持つてゐた。
『お神さんは何んと云ひます、』
『どうも旦那の名だけは知つてますが、さア、お神さんのは、』
『ぢや、そのお神さんと、まだ他に御家族がありましたか、』
『小供が三人ありましたが、それも名がどうも、』
『いや、よろしうございます、供養いたしまう、』
僧侶は又筆を女に持たして一字を書かした。僧侶の手許にはそのビラがあつた。僧侶はそれを傍に寄つて來る人に配つた。
私もそれに手を出した。

無料納經供養

思ひ出すさへ恐しい、あの大震災がありましてから、はや一年になります、私共は幸ひ御聖徳のもとで平和な月日を送らして頂いて、惨害の地も日に日に復興してまゐります。それにひきかへ思ひ浮べるのは、亡くなられた幾十萬の精靈であります、忘れんとしても忘れることができないのであります。この悲しみのうちに、せめては御佛の菩提と思ひまして、寫經供養を企てたのでありまする。先日から各方面を廻つて居りますが、誠にいたわしい御遺族の方が涙の中に拜い一字づつをお書き下さいました、どうか御供養のために一字或[illegible]をお願ひいたします、特殊の御筆で出來あがつた經卷を奉納いたしまして、永世までも菩提を弔ふ計畫でありますから、何卒御賛成下さいます樣切に御願ひいたします、御遺族の住所不明で困つて居りますからどうぞ右の方へ御知らせ下さい、願ひます、

としたもので、それには東京市本郷區千駄木町五〇納經會としてあつた。私はそれにひととほり眼をとほしてから、思ひだして僧侶の方を見た。一人の若衆が供養の文字を自分ひとりで書くところであつた。

靈堂の前は右側に『佛教各宗聯合弔祭支部』とした札の建つたトタン屋根があつて、そこは佛教の儀式で遭難者の冥福を祈るやうにしてある所であらう、佛壇を設け、花を供へ、正面の大香爐には線香がくゆつてゐた。そこは燒香者が休憩できるやうに腰掛けも並べてあつた。靈堂の前にゐた彼の寫經の僧侶はいつのまにかこの庭先へ高机を持つて來てゐた。

そこの左隣になつた所は燈籠や卒塔婆と共に花や線香を賣つてゐる家で、その前に卒塔婆が林のやうに建ててあつた。燈籠や卒塔婆を賣つてゐる家の先隣は、これ又花や線香を賣つてゐる家で、その隣が又卒塔婆の林になつてゐる。左側はトタン屋根の掛にたつてゐるが、その右側は花と線香を賣る家と卒塔婆

の森とが入れ交つて電車通まで續いてゐた。

私はうすれて熱のなくなつた夕陽の光を浴びて電車通へ出たが、電車には乘りたくないので厩橋の方へと歩いた。鰯の目刺を焦がしたやうに焦げてごちやごちやになつた人間の炭が一ぱいになつてゐた左側の溝には、平凡な汚水が流れて、この上にできたトタン屋根の長屋の何所かで、小供の『枯れすすき』を唄ふ聲が聞えてゐた。

厩橋の手前の外手町の停留場まで行つたところで、吾妻橋の方から淺草公園へ行きたいと思ひだしたので、すこし行きかけたが、黒船町にゐる友人を引張りだして久しぶりに話をしようと思ひついた。私はすぐ後もどりして厩橋を渡り、友人の家へ行つてみたが、まだ勤め先から歸つてゐないと云ふので、ひとりで淺草公園へ行つて、飯を喫ひ、電氣館へ入つて『柳屋おせん』を脚色した活動寫眞を見、ぶらりと廣小路に出てみると、本所の方の空に赤いみづみづした月が出てゐた。私はその月を厩橋で見、それから高等師範の前で見たが、その時には横町に折れる塀の角の電柱があつて、その柱に釣した三角の廣告燈の灯がその光にぼかされてゐた。その廣告燈のガラスには『カフエーリリー』と云ふ文字が見えてゐた。

○吉原の池

被服廠跡に行つた翌日、即ち七月十九日、數日前から馬道の出版書肆へ稿を出さなくてはならないことがあるので、その日行くことにしたが、前日の被服廠跡の聯想から吉原の廓内にある池の水に好奇心が動いてゐたから、そこへ廻つて行くことにして、朝早く家を出た。

田原町まで電車で行つて、そこからおりて歩いた。明治四十三年の大火後にできた建物とすこしもかはらないやうなトタン屋根の小家がもうずらりと建ち並んでゐたが、朝の遅いその町では、煙草屋か飯屋くらゐが店を張つてゐるくらゐで、そのあたりに多い小料理屋などは、早い家がやつと戸を開けたばかりのところであつた。

陽はまださすがに熱してゐなかつたが、炎天續きの町のほこりが足首にからまるやうで氣味が惡かつた。路の右側に見覺えのある寺の花崗石の門とセメント塀とがそのまゝに殘つてゐて、植木屋でも借りてゐるのか、門口一ぱいに樹や草花の鉢を並べてあるのが眼に注いた。

暫く行つたところで、路が狹くなつて、それがくるりと左に折れて來た。その折れた右側の曲りに新らしくこしらへた門が

あつて、「日野光坦壇」と記した文字が見えてゐた。私はそこから左に小さな路次をぬけて行つた。そこに大下水の汚い溝があつて、小さな橋がかゝつてゐた。

私はその橋を渡つて下水の向ふ縁から土手へと出た。土手の向ふ側の建物も明治四十三年の大火後の建物とあまり変らないやうにできてゐた。牛鍋、鳥鍋、豚鍋、櫻鍋で廓がへりの客を呼ぶ小料理屋も。

廓内の入口の左角には、新らしく植ゑた見返り柳が縁の側をしんなりとさして、昨年の悲惨事はないもののやうにしてゐるが、大門に櫻痴居士の紀念の文字のなくなつて居るのを見ると、恐ろしかつた彼の地震のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。

門を入つてすぐ右側に眼をやる。八幡屋、山口巴屋、林屋、わかのや、みたとや、たけや。次に建築中としてある板囲ひは近半であるらしい。バラツク屋根のお茶屋はさすが哀れであつた。そこの左側にはバーなどが見える。

私は池に行くのでその通りを真直に行けばいい。次の町角からは左右にお茶屋がバラツク屋根を並べてゐた。私の眼はそれから角海老に行つた。表に面した方に透し格子の木柵をめぐらして、内には木を植ゑ石を置いてちよつと趣のある庭を設けてあつた。その庭の樹木の先にスリガラスの障子の入つた客室の格子が見えてゐた。右の方に寄つて小料理屋のやうな入口も見えた。その入口の右になつた植込の中には春日燈籠を置いてあつた。右の隣には桔梗などの草花を植ゑてあつた。

廓内にゐる若い女が三人五人と伴れだつて歩いて行くのが見られた。路の左側には交番もあつた。その交番のすぐ先の左側の小さな呉服店には、七八人の若い女が入つて各自に反物を見てゐた。もうこの里の風俗も昔とはだいぶんかはつてゐるらしい。

路の行詰に『三業取締所』の建物があつた。それを左にそれて曲つて行くと広場になつてそこに池があつた。池のぐるりには櫻の稚木を植えてあつた。震災後ここへ来た時には、池を中心に焼死した数百人の男女の骨を池の縁に盛つて、祠を建て卒塔婆を建てゝ供養をしてゐたので、それはどんなになつてゐるだらうと思ひ思ひ池の縁へよつて行つた。焼け残つた池の中の橋はそのまゝになつてゐるが、他はもう何もかもきれいに片付いて、池の水はぐるりにしつらへた竹垣にまもられて静に眠つてゐるやうであつた。

そこへ水桶を天秤棒で担いだ男が来て、池の水を汲んで踊りかけた。私は傍へ行つて、

「ここにあつた、避難した人の誰がどうなつたんでせう、」
と訊いてみたが、その男に知らなかつた。
「さア、どうですか、この頃來たものですから、」
池の右の方にはすこし遠のいてトタン屋根の表口が並んでゐた。すこし樹を植ゑてテーブルを二つぐらゐ出してあるカフエーのやうな所があつた。私は腰をかけたいのでそこへと行つた。あかん坊を背負つた小柄なお神さんらしい女が出て來た。そこは廓外に表口があつてバーをやつてゐた。私はソーダ水をもらつて飲みながら、『池のふちにあつた、遭難者の骨はどうしたのでせう、』
とまたお神さんに訊いてみた。
『三輪の龍閑寺に持つてあるのですよ、近いうちに大きな石碑もできるのですよ、』
お神さんはそれから池で死んだ廓内の女は八十人位で、後は附近の人であると云ふやうなことを云つた。この神さんは橋場で震災に逢つた者であつた。
『宮様のお屋敷の傍にゐたのですよ、』
お神さんはまたこんなことも云つた。そこに二人連の鉱夫のやうな男が來て傍のテーブルに著いて、これもソーダ水を飲みはじめた。

[illegible]て、それに[illegible]人の[illegible]たが、女の中には[illegible]來てその男から火を[illegible]る者があつた。
「おいらも、あすこへ行つて煙草を飲んでゐやうか、」
と傍にゐる若い方の男が云つた。
「やつぱり人間を見て來らア、お前がいくらゐたつてだめだよ、」
と年とつた方が云つた。私はお神さんに教へられて、そこの家の横を滑つて外へ出、教へられた路を行つて菊屋橋行の電車に乗り、乗りかへて淺草橋でおりた。
馬喰町二丁目の興文社はすぐであつた。そこはトタン屋根の店頭を土間にしてあつた。小僧の知らせによつて、石川寅吉君が二階からとんとんとおりて來た。
「今回は御無理なことをお願ひしてすみませんでした。今日はちよつとお禮にあがりました、」
私は用件をはたしてちよつと石川君と話した。テーブルの上には旋風器が動いてゐたがちりちりと暑かつた。
「今晩は川開ですよ、」
と石川君が云つた。何處も彼所も低いトタン屋根であるが

ら。花火は何所からでも見えるだらうと思つた。―
私はそれから本石町の至誠堂へ行つて、そこへの編輯室の二階で附近のトタン屋根の炎のやうにたちあがるほてりを見ながら花火の話をした。
「今年の花見は。何所からでも見えるね、」
私はそれから路で晝飯を喫つて日比谷のトタン長屋へと云つた、そこにも一面に襁褓が干してあつた。
築地の本願寺あたりでやつてゐるらしい托兒所では二十人ばかりの小兒が無心に遊んでゐた。ある長屋では蓄音器が義太夫節をゆるやかな旋律で唄ふてゐた。
私はそのかへりに電車に乗つたところで、二度ほど指が扉の閉にひつかかつた。私は歸るなり生へるにまかして十年間そのままにしてあつた髯を自分で剃つてしまつた。しかしそれには理屈も何もなかつた。

震災一年後の思出

宮地嘉六

私にはあの大震災の日の思ひ出よりも、九月九日の午後から王子署の檻房で十日間暮したその思ひ出の方が深い。そのことは、然し語るを避けたい。
もうあの大震災も昨年のことになつてしまつたのかとしみじみ思ふ。あの日は、地震前に少々雨が降つた。私は年來日記を廢して來たが、昨年の九月一日から二三日續けて日記らしいものを書いた。今、それを見ると別にくはしくも書いてゐない。九月一日、強震、石燈籠倒る、裏の花畑へ遂に飛び出す。郵便局より歸りて、讀みかけのマダムボアリーを讀み始ると直ぐなり。半鐘鳴る。汽笛鳴る。街の彼方に煙の立ち上るが見ゆ――云々
全く私のゐる西ケ原郊外はさして被害はなかつた。お產をして間もない產婦と赤ん坊とが寢てゐる上に箪笥が倒れたとかさう云ふ近所の話しに心を痛ませ、病中の老父を家の中から肩にすがらせて空地の草原へつれ出してゐる、近隣の或る一家の樣子を氣の毒に眺めたくらゐだつた。夕方になるまで街の樣子は分らなかつた。唯方々に煙が立ち上つてゐるので、火事が數ケ

[illegible]ご迫つてゐるらしい[illegible]

てから字の明るさに[illegible]ないので、小さな[illegible]

円[illegible]道を通つて上野まで行つて[illegible]に行つて[illegible]驚いた。

不山避難民を以つて埋まる。[illegible]張りたる荷物を背負ひて[illegible]

ひたる男女老若の姿いたまし。綿の如く疲れて、[illegible]にころご

ろと重なり合ひ、うごめく無数の人影――云々と私はその夜の

ことを書いてゐる。その夜の歸りに谷中のとある塀に此の日の死傷者の數を報告した貼紙が新聞社の名で出されてゐるのを見て私はいよ／＼驚いた。家へ歸つたのは深夜の三時だつた。

×

不幸な罹災者の中でいちばん私の心に傷みを覺えしめたのは吉原や州崎の遊女の身の上であつた。下谷や葭町や新橋や赤坂の藝者が焼け出されたと聞いても私は別段に哀れを催さなかつたが、吉原の遊女達が澤山焼死したと聞いて、心からいた／＼しく思つた。秋雨のそぼ降る中に、頓生菩提、と書いた長い弔旗を立てた吉原の骨塚の寫眞を新聞で見た時私はしみ／＼と底深い哀愁を覺えずにはゐられなかつた。頓生菩提、頓生菩提、私は此の佛語の意味を深くは知らないでも、此の文字にだけはセンチメンタルな無限の悲哀を感ぜずにゐられなかつた。然し吉原も一年たゝぬ間に復興した。震災で死んだ人達がいつの間に

[illegible]

こ、私は第一人[illegible]

ないと[illegible]時、遊女は此の[illegible]

だ。[illegible]、私は遊女に[illegible]されたと云ふ[illegible]

のであるが――近頃は夕方からよく吉原散歩に出かける。一寸

から三の輪行の市電で、[illegible]から[illegible]を行けば新涼に

は私にはよい散歩だ。無論登樓するわけではない。あの廓の

やうな引手茶屋の兩側の夜景を見るのが好きだからである。淡紅色の手柄で、しやごまに結つた花魁の裝ひもだん／＼私はすきになつて來た――遊女は女性の中でいちばんいたはつてやらねばならぬやうな氣がする。殊に震災後、私はさう思ふのである。頓生菩提。頓生菩提――

あそこは淺草の何と云ふ町だつたか私は覺えてゐたつもりで今思ひ出せない――王子署の第一號[illegible]から、御[illegible]やつたとお禮を云はれて十日間の検束から放たれて歸宅してからだから、昨年の九月の末だつたであらう。或る日ふら／＼と私は淺草の町を歩いてゐた。さすがに淺草である。もうバラツクが七分通り立ちそろつてゐた。私は何の爲めであつたか、多分其の時、小用を催したかして、大通りの裏手へ入つたが、一歩裏手へ入るとまだ手もつけられぬ災後の惨状をそのまゝ殘してゐる

のであつた。小用をたすつもりでお寺の燒跡の墓場を通りぬけようとすると、その墓場の中に燒けトタンを立てかけた非人小舍そのまゝの小舍があつて、その中に十八九の、色の白いきれいな娘が俯向いて唯一人お縫をしてゐるのであつた。私は小用どころでなく、非常に好い繪畫をでも見た時のやうに見とれてしまつた。——私は今だに時々その娘の美しかつたことを思ひ出さずにはゐられない

　昨年の八月の末には群馬の山中の、法師温泉と云ふ温泉場で一週間ほど暮した。私には東京の大地震の記憶と此の法師温泉場で一週間ほど暮した思ひ出とはどうしても結びつくことになるのである。今年は澁川から沼田まで鐵道が開通したから昨年よりは便利がよい。それでも沼田から五六里の山路をガタ馬車か乘合自働車で行かねばならぬ。湯宿から二里半ほどはどうしても徒步でなければ行けない。沼田は若山牧水氏のお國であると聞いてゐるが、此所で私は二晩ほど旅館へ泊つて見たが、少しぼられた。旅館の隣は藝者屋で、旅館のかみさんの實家と云ふことを私は後になつて聞いたが、無論その時藝者などは呼ばなかつた。呼んだら、それこそいやと云ふほどぼられたかも知れない。流石に土地で一流どころで、きれいで、眼下遙かに利根川が見下せる眺望のよい部屋を與へてはくれたので、そのせいくする眺望がすてがたくて、とう〱二晩泊つてしまつた。夜、戸外を義太夫が流して通つたので、呼んで貰つて部屋で一二段語らせた。五十あまりの東京者らしいお婆さんだつたが、なか〱聲の好いつや語りで糸も達者であつた。私に何かやれるだらう、一つ聞かせてくれと云ふ。隣りの舞子が二三人遊びにやつて來る。宿のかみさんも聞きにやつて來た。私は思ひきつて三勝のさわりをやつた。それで、すつかり私は道樂者に見られてしまつたらしい。義太夫を呼んで三勝の一つもやれる人が隣の藝者を呼ばないのは少少義理が惡いやうな氣がしたが然し目的地の法師温泉場まで行かない間に、こんなところで、ぼられてはつまらないと、翌朝は逃げるやうにしてそこを立つたわけであつた。

　三國峠の麓なる、その法師温泉まで行きつくのはたいへんだつた。然し行つた甲斐は充分あつた。實に豐富に湧いてゐる温泉である。透明無色の温泉で宿屋唯一軒きりで家と云ふ家はその宿屋とも三軒しかないところで、他の二軒の家は信濃川水力電氣工事の鮮人の土工達の宿所にあてられてゐた。女の浴客には多少不安な思ひをさせたが、泉質のよいのと、安あがりと云ふ點ではちよつと類の少ないところで客はかなりこんでゐた。大儀の客は自炊であつたが、一日に一圓そこ〱ですむのであ

る。食べ物は不便だ。蒲團だの、蚊帳だの、せいぜい[illegible]たゞか、鉧こくらいお膳の山だつた。

私がその法師温泉場へ行つて三日ほどしてから、私の直ぐ隣室に男女二人づれの客が來た。女はどう見ても、くろうとらしいのであつた。男は三十四五のきやしな、これほど好男子ではないが女好きのする男に見えた。おかしなことには、その隣の客婦人は私と顔を合せるたびにへんな微笑を浮べるのだ。言葉の調子では東京者ではないらしい。はてな……と私は考へて見たが合點が行かぬ。どう考へても曾て見たやうな氣がしないのである。すると夕方、私が二階の欄干によりかゝつてゐると、隣室の婦人も欄干へよりかゝつて此方を見てゐるのであつた。二十四五の丸顔の女である。中形浴衣に伊達卷をしめてゐる。「お隣の旦那。」彼女は突然私にかう呼びかけた。『旦那は沼田で△△館へお泊りになつたのでせう。』

「は、さうです。然しは……」[illegible]れの男は浴場へ行つてゐなかつた。「旦那の[illegible]しましたよ。」婦人は笑つた。

これで私には[illegible]、沼田で私も泊つた宿の隣の客が誰だといふことが分つたのである。それから彼女に心易くなつて、彼女の旦那とも心易くなつて、緒に花合せをして遊んだりしたものだ。男は沼田の醫者だと云ふのだつた。[illegible]週間目には此の醫者の妻君が續いて此の温泉場へ押しかけて來て、大騷ぎが始まつたりした。私はそれから一日二日して其處を立つたが、東京へ歸ると二日目にあの大地震だつたのである。ところで一年後の今年の或る夕方私は彼女に[illegible]女を吉原の或る引手茶屋の前で見たのであつた。

ある婦人との對話

上司小劍

『もう一年になりました。』

『早いものです。』

『地球が太陽を一とまはりしたんですね。自分にもくるくるまはりながら、自分と同じやうにくるくるまはりつゝ自分の周圍

を丁度自分が太陽の周囲をまはるやうにしてまはつてゐる月をおともに連れて。……』

『何んだかやゝこしいこと。もう一遍言つてごらんなさい。一と口に早く、三遍つゞけて。……』

『からかつちやいけません。天體の巧妙な組織……地上の人類生活にたとへてみたら、丁度無政府共産主義が最も完全に行はれてゐるやうな……其の天體の運行は、全く下界の人間の言葉ではうまく言ひまはしにくいほどですね。』

『わたしも、天文學の本はずゐぶん讀みました。バリイの天界の話だの、太陽の話だの……だから、これでも恒星と惑星との區別や太陽系の八個の惑星の一つが地球だくらゐのことは知つてゐますよ。しかしあれはほんたうでせうか。いゝかげんな想像ぢやないでせうか。地球に起るすぐ足もとの地震すら豫知することが出來ないで、何萬マイル、何千萬マイルから、何百兆マイルさきの、光といふものゝほかにはまるで我々の世界と絶縁された宇宙のことが、そんなにハッキリわかるものでせうか。』

『それやわかりますね。自分のことにはわからないでも、他人のことはわりあひによくわかるやうにね。……岡目八目といふことばもあるぢやありませんか。』

『ほゝゝゝ。妙なところへ岡目八目が出ましたね。碁をおうちになる？』

『碁は大きらひです。碁ばかりぢやない。勝負事はすべてきらひです。勝つのは氣の毒だし、負けるのはいやだし。』

『ほゝゝゝ。今夜は月蝕ださうでございますね。』

『今夜ぢやありません。あしたの朝です。午前二時三十一分三秒から缺けはじめるのです。そして五時八分に缺けたまゝ西の空に沈んで行くのです。』

『そのとほりにまゐりますかね。』

『全く其のとほりに行きますよ。この前の月蝕の時は午後十一時何十何分何秒とかに缺けはじめるといふから、わたしは其の時刻にヴェランダへ出て、時計をもつてまん圓い月を見つめながら、待ちかまへてゐたんです。スルと、其の時刻に一秒もたがはず、豫定のとほり左の上の方（だツたと思ひます）から缺けはじめました。もつとも缺ける時刻が六秒ほど早やかつたやうでしたが、それはわたしの時計が、其の時それだけおくれてゐたことを、あとで發見しました。』

『それほど天のことがよくわかるのに、足もとの地震がどうしてわからないんでせう。』

『遠い／＼天體の變化は一分一秒もまちがへずに豫報することが出來るのに、現在自分の踏んでゐる地上のことゝ地中の變化

はたか〳〵わからない。一分一秒どころか、何日ごろと豫報した日が晩になつても降らなかつたり、晴れると言つたのが雨になつたり、わけても地震なんかはまるで豫報が出來ないのは面白いですな。今わたしの手もとにある天文學の本は三四年前に出たものですが、今年の八月二十三日に火星が地球に最も接近するといふことを、ちやんと書いてゐます。それだのに、地上のことゝなると、今日の新聞にも明日の天氣を正確には書き得ない。……とかう言つた話は、話としては至極面白いし、大向ふの喝采を得るのは、さういふ話に限るんで、さういふ話をのべつに喋舌る人が、世間の人氣ものになるんです。しかし少し考へると、そんな話は場あたりだけで、一向内容がないんです。かうやつてゐるうちにも、この地球が若し、一分間一千マイルからの大速力をもつて、太陽の周圍をまはつて一年といふものを作つてゐる其の所謂公轉を不意に中止して、突然太陽の中へ飛び込んでしまふといふやうなことがあるとしても、それは決して人間の智惠で豫報が出來ないでせう。しかしそんなことは決してない。天體の運行はちやんときまりきつてゐて、絶對自由の中に節制があり紀律がある無政府主義だから、先きのこともちやんとわかるが、地上のことは出たらめと氣まぐれが多いので、地震なんぞといふ大きまぐれに遇つちや、まるで駄目なんです。まかり間違つたといつたつに、實に[illegible]この間に[illegible]なる。」

『今仰ツしやつたやうに、この地球が太陽の中へ飛び込んだやうなことがあつたら大變ですね。」

『大變も何もない。さうなれば、めでたくお陀佛です。[illegible]のとまつた飛行機どころぢやない。攝氏七千度といふ高熱の太陽の表面へ地球がぶつかるのは、ストーブへ芥子粒を投げ込んだやうなもので、じゆツともしゆツとも言はずに、大きな太陽から見れば耳かきいツぱいにも足らぬ液體になつてしまふでせう。」

『被服廠跡の慘事どころぢやありませんね。」

『ところがそんなことは決してない。地球は人間のやうに氣まぐれでもなく、なまけものでもありませんからね。なやみに自轉をなまけたり、公轉を休んだりしませんよ。むちやくちやに、撒き散らしたやうに見えてゐても、天體には全部の活動と個々の活動とが、きはめて自由に、そして、氣まぐれでなく行はれてゐる。壓迫なしに紀律がある。強制されずに、連絡して、平和な自由な集團生活が行はれる。個人と社會とが最も滑かに不即不離で行く。アナーキズムの極致は、天體がちやんと見せてゐる。」

『それは人體の細胞だつてさうでせう。天體の組織の縮圖が人體の組織だとも言へるでせう。天體も人體も、それはどうまく

進行をつゞけてゐるのに、人類の地球上に於ける生活だけが、さうは行かない。……それはどういふものでせうか。』

『研究も反省も足りないからでせう。人間といふものがいけないものであるがために。』

『地震なんかの起るのも？』

『地震は仕様がない。しかし、人間がもつとまじめに、研究し反省したら、去年ぐらゐの地震なら、笑ひながら、大地の揺ぐのを眺めてゐられたでせう。こんなことを言ふと怒られるかも知れないが、半ば以上、七分以上、或は八九分以上、若しくは九分九厘以上、去年の地震は、地震の質よりも、災害を大きくしてしまひました。家を揺かしたのは自然の力だが、家を焼いたのは人間の作つた火です。冷静に言へば自ら招いた禍です。今年の一月十五日の地震は、専門學者の說を別として、去年九月一日の地震とさうたいしてちがはなかつたでせう。あれが若し九月一日に來たら、だいぶ被害があつたにちがひない。それが殆んど東京を無害で濟ませたのは、バラック建築が大部分であつたためでせう。即ち昨年九月一日以前は、バラックよりも弱い家に無理な住みかたをしてゐて、あの災害にかゝつたのでせう。』

『それはたしかにさうです。バラックか鐵筋コンクリートの堅固な建築か、この二つのいづれかで、都會を造つてゐたら、去年九月一日ぐらゐの地震なら、笑つて過すとまでには行かなくとも、殆んど無難に濟ますことが出來るのですね。』

『もう少し自然に適へるか、もう少し自然に勝つか、どつちかであればいゝんですね。』

『これから東京の復興する姿は、もちろんあとの方でございませうね。自然に打ち勝つた建築なり設備で。……』

『さうです。バラックに地震に強い、……といふよりは、地震の方で眼中においてくれないから、バタ／＼潰れもしないんですが、しかし、火事にかゝるとペラ／＼とやられてしまふ。どうしても、火に燃えないで、地震に崩れない家が必要だと言へば結論はわかりきつてゐますが、しかし自然に勝つと言つたつて、勝ちきれるものではない。今日現在の都會といふものは、古代の都市とちがつて、多くの人間の偶然な集合で、一貫した都市といふものゝ生命がない。活きた都市でなくて、家屋と道路との徒らな行列であります。こんなことでは、天災よりも、先づ人災でつぶれる。』

「おや、どうすればよろしいんでございますか。』

『もつとかう、自然と融和した、自然に抱かれたやうな都會を造るんですね。東京の地勢は殊にさうした都會の建設に向つてゐます。』

「行つたことだこごでいきたんお、江に堅いこんなりますかこのやうな都會にするのか、東京には一番いゝんじやございませんか。」

「さア、どうですかね。とにかく、ニユーヨークの安價な模造品を武藏野の一角、江戸灣の畔りに据え付けたんじや困りますね。地震と火事はそれで防げるにしても。」

「わたし、去年の九月三日に、東京の大通りをずうツと歩きました。燃え殘りの火焔に炙られながら。」

「さうでしたね、わたしも歩きましたよ。一緒に歩けば、今日の思ひ出もまた一そう深かつたでせう。」

「この夏、同じところをずうツと歩いてみて涙がこぼれました。」

「どういふ訳の涙です?」

「バラツクの中に、皆青いものを植えてゐるんですもの、猫の額のやうな庭でもあれば、その住居の跡に。それもなければ植木鉢でね。……或る貧しいバラツクでは、焼け跡から拾つて來たらしい甕のこわれたのに朝顔を植えて、可愛らしい花を咲かしてゐました。其の花を見て、わたし、涙をこぼさずにはゐられませんでした。」

「それです、それです、其の心が、自然と融和し、自然に抱かれた美しい都會を建設する心なのです。其の壊れた甕には秋になつたら、菊の花が咲いてゐるでせう。きツと。」

大震回顧

長田秀雄

「もう、あれから一年になる。」と、云ふと、少くとも、關東八州の人たちは、白痴か狂人でない限りは、みんな慘ましい顔付をして、うなづくであらう。

誰、一人、あの時、あんな大きな天變があらうと思つてゐた者はなかつた。それもその筈である。歐州大戰以來、五大國の一つに列して、物質的にも、精神的にも、すつかりいい氣持になつてゐた國民である。心に油斷があつたのは云ふまでもない事である。

午前十一時五十八分、丁度、私は上野の美術院の入口に立つてゐた。空氣は熱を病んだやうに熱く湿つぽかつた。油のやうな汗が、私の額に流れてゐた。

遠雷のやうな響が、何處からともなく響いてきた……「オヤ」、と思つて、私は、聞耳をたてた。

大地がゆらゆらとゆれた。影燈籠のやうにそこにゐた人たちが、動きまわつた。私は全身に響きわたるやうな震動を感じた。「地震だ」と思はず、私は口走つた。そして震動の大きさをはかるために、平生天井から下つた電燈を見る癖がついてゐたので、すぐ天井を眺めた。

天井には電燈はなかつた。縦横に走しる太い梁が、物凄ごくきしめき動いてゐた。

私は前後の思慮もなく、すぐ、會場から飛出した。

會場の前の平地には、もう、一パイ人が立つてゐた。大地はおやみなく動いてゐる。あたり一面に植えた櫻の若木が、一斉に戦慄してゐる。

その内に震動が一際烈しくなつてきた。私はどうしても立つてゐる事が出來なくて、そこに幾度かころがつた。朝から、雨氣を持つた低い雲でおほはれてゐた空は、何時の間にか、すつかり晴れてしまつて、強烈な太陽の光が、くわつと照してゐた。會場の陰影も、櫻の立木の陰影も、輝く大地の上で、ぶるぶると活動寫眞のやうに顫えてゐた。

誰かが「博物館、」と甲高い聲を上げた。私はふと振返つて博物館をみた。黒い古風な門の内の大玄關が、すつかり屋根から落ちた瓦や石塊に埋められて、何の事はない、古希臘の廢跡をみるやうな工合にみえた。

「これは大地震だ。」と、私はこれ迄感じた事のない大恐怖に襲はれながら考へた。私は東京がどんなに破壊されたか見たくなつた。そこで、すぐ、西郷氏の銅像の前へ行つた。

まづ、廣小路のあたりが存外、何ともなつてゐないのを見て、私は意外の感に打たれた。

見るみる内に、家からのがれた人たちが、本統に潮のやうにひたひたと上野の山へ向つて押しよせて來た。

遠く淺草の方から三筋か四筋火の手が上つた。その時、はじめて、私は十二階を見た。十二階は尖の折れた鉛筆のやうに、下の方だけ殘つてゐた。

地鳴がしたかと思ふと、また地震が始まつた。土ほこりが朦々と市街の上をおほつて、その下から、蚊のなくやうな力のない人々のわめき聲がきこえてきた。この上、どう云ふ恐ろしい事が起るかも知れないと思つて、私は、櫻の木にしつかりつかまつてゐた。全身からじつと汗が湧出して來た。

何處からともなく陰氣な大ぜいの聲で、「南無阿彌陀佛々々…………」と唱へるのが、きこえてきた。西郷氏の銅像は、地の底にめりこむやうな深刻な反響をたてゝ、前後に動いてゐた。

「あれが引くりかへつたら、さぞ人が死ぬだらう」と歯を噛み

しかたから、彼の迷ひに[illegible]
たやうにえてゐた。
太陽が、ほこりの内から、暗く赤ちやけた[illegible]

夜になつた。凄いやうに晴れた空には、青い異様な月が出てゐた。そして、夜目にもハツキリ輝くやうな真白な煙が、斜めに空を走しつてゐた。

＊　＊　＊

私たちは、家主の細川侯爵の好意で、広い芝地に大きな天幕を張つて貰つて、その内に休んでゐた。全地は死んだやうに静かであつた。雑草の陰ではキリギリスが何事もなかつたやうに鳴きしきつてゐた。

繁華な下町の方の空に、一つの異様な形の大雲が、凝乎つとかゝつてゐた。その大きな雲に灰つと火事の火が反射して、赤の上、一體が、脈に赤く明るんでゐた。

五分十分おきに大地がゆれてきた。

「あの雲はどうしたんでせう。」

「さあ、何でも伊豆の大島が破裂したと云ひますから、その噴火の烟かも知れませんね。」

あとで考へると、途方もない事だが、その時は、それが別に可笑しくもなく受取れるやうな気持になつてゐた。

やれ、丸ビルが倒壊したの、伊豆全半島が陥没したのと云ふやうな流言が、何処からともなくつたはつてきた。

その時、私たちが見た異様な雲の大塊こそ、後で考へると、

[illegible]

それから引つゞいて、[illegible]があつた不安、我々の現在の生活を信じ切つてゐただけ、市民の不安な気持は烈しかつた。黒コゲの死人や、武器を持つた殺気立つた男たちの姿が、もう珍らしい物ではなく、この東京の普通の生活の内にある平凡事のやうに、少くともあの四五日は考へられた。

我々はあの大震について、革命の恐怖と不安とを味はゝされた。あゝ云ふ大変に会ふと、存外、人間は正直になるものだ。即ち、平生、潜在的に意識の下積にして忘れてゐた韓国併合の事実が、あの大地震と一緒に、新らしく国民の心にめさめたのではないか。あの時の不安が、単に関東八州だけでなく、殆んど全国的であつたと云ふ事実が、それを証拠だてるやうに私には思はれるのである。

＊　＊　＊

いま、丁度、一年たつて、あの頃の回顧してみると、我々は、たゞ、人間の生活の根強さに驚かされるばかりである。

六七十年の週期を以て必ず、大きな地震がおそつてくると云ふ学説が、あの大震によつて確められたために、東京遷都の説さへ起つた。事実、あの惨状は、歴史あつて以来の出来事である、然るに、この一年間に、殆んど全部の焼跡が、バラックで埋

めてしまつた。いかなる天變も、人間の力には及ばないやうにさへ私には思はれるのである。

新東京の市街は、段々、歐風に化しつゝあつたとは云へ、まだまだ、到るところに大江戸の名殘の姿が隠見してゐた。

いま、大震一過、惡魔の舌のやうな火焔になめつくされた焼跡のバラックは、烈々たる九月の太陽に照らされて、この東京を、一個の幻影の都と化し去つた。トタン屋根の暑さは百度を越すとか、不衛生であるとか、その他、いろんな生活上の不便は、無論、あるに違ひないが、然し、見玉へ。奇抜な塗料と、輕快な建築とによつて、市街の面影は、全然一新したではないか。

カフヱも、商店も、劇場も學校も病院も役所も、みんな、以前、思ひも及ばなかつたやうな新しい様式のバラック建になつてしまつた。その結果として、これ迄、久しい間の因襲に縛られてゐた繁雑な市民の生活は、漸く稍、單純化されてきた。

市民生活ばかりではない。その生活を根とした政治も、教育も、藝術も――すべて、我々の周圍にあつた物は、みんな一新さるべき運命がきてゐるやうに私には思へるのである。

これから五年の間、市民はバラック生活をつゞけて、それから、はじめて本建築に移るのだ。即ち、バラックの生活は、彼等にとつて、一個の試練時代になる譯である。

東京はつねにわが國の文化の尖端だ。五年の試練時代を経て、わが東京の市民がつくりだす生活の様式は、やがて、新らしい日本の精神となるであらう。

歐羅巴は八年にわたる大戰爭で、すつかり打砕かれてしまつた。しかも、その廢墟からさへ、新らしい文化の光は輝き出さうとしてゐるのである。

わが東京の大震の損害は大なりと云へども、獨逸や、佛蘭西にくらべたらば、わづかに九牛の一毛にすぎないであらう。市民の力は、決して、あの大震くらいで打砕かれてはゐない、その證據はわづか一年にして、とも角も、以前のとほり、この廣い東京市が、バラックで埋まつたのを見ても分る筈である。

我々は、バラク五年の試練時代を無駄にすごしてはならない。形式は何と云つても内容の現はれである。バラック五年の試練をへて、新らしい心の市民が新らしい姿の大東京を造りあげる時を、今から私は指折かぞへて待つてゐる。

大震以來一年の間に、私は、人間の根強さを心に深く感じた。いま、涙ぐましい念を以つて、將來の新しい日本の文化のために合掌祈念するのである。

想華

嵯峨散策

荻原井泉水

嵐山の若葉を前にして、嵯峨は初夏の頃が好い。嵐山の中腹へ、白い紙を所まだらに貼りつけたやうな櫻の花が、二三日の雨にきれいにはがれ落ちてしまふと、紙人形のやうに、へら〳〵とした浮足で浮かれに來た人間達も、さつぱりと一掃されて、あとは日に日に若葉が鮮かになるばかり。大堰川を下す筏の流れもしづかに、水盤に玉を轉ばすやロ〳〵といふ際は河鹿である。

×

芭蕉が嵯峨に滯在してゐたのも、さうした頃であつた。彼は去來の乞ふまゝに、猿蓑集の選の相談にあづかるといふ爲めもあつたのであらう、粟津の無名庵を出て、去來の別墅である落柿舍に、半月餘りの間、錫をとゞめたのである、

元祿四辛未卯月十八日、嵯峨に遊びて、去來が落柿舍に至る。凡兆ともに來りて、暮に及て京に歸る。予は猶暫とゞむべき由にて、障子つゞくり、葎引かなぐり、舍中の片隅一間なる所、伏所とさだむ。机一ツ、硯、文

原、百氏文集、本朝百人一首、世継物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置、唐の蒔繪書たる五重の器に、さまゞの菓子を盛り、名酒一壺、盃そへたり。

夜の衾、調菜の物、京より持來て、貧しからず。我貧賤を忘れて淸閑を樂む

と、嵯峨日記」にある「我貧賤を忘れて淸閑を樂む」といふ此の言葉に、此時の芭蕉の境涯——自然の愛に全身をひたし、門人の愛を心一ぱいに受けて、自ら進んで求むる所なくして、しかも存分に與へられる所に足りてゐる心持——がよく現はれてゐる。其の落柿舍は其後廢頽して傳はらないが、小倉山の麓に近い茂みの中に、僅に其名ばかりをとゞめた「小庵」が、今日に至つて芭蕉を思慕する人の訪ねよるよすがとなつてゐる。嵐山を背にして釋迦堂へ向いての廣い道を、嵐山から飛び飛びにつゞいてゐるやうな松の並木に沿うて行くと、「北、淸瀧、愛宕道、西、小倉山、常寂光寺、落柿舍」と道標がある。西へ、即ち左へとると、竹林の裾をかためた藪垣に、里の女が十藥を莖ごと引いてゐる。何にするのかと問ふと、蔭干にして「冷えぐすり」にするのだといふ。さて、落柿舍は、十藥の花を採つた其手で教へてくれる、すぐそこである。

×

厚く高い生垣が僅に歩を入れるだけ明いて、二三步すゝむで古い門がある。扁額には「落柿舍」標札には「堀 ——」と今の庵主の名がある。柿の木のやゝ老いたのが一本、縁に近く立つて、庵の茅葺屋根から門の方にまで若葉の枝をひろげてゐる。庵は小い座敷が三間もあるかと思はれる程。玄關脇に檜木笠と並べて掛けてあるガラスの中の繪葉書を見て「繪葉書をいたゞきたい」といふと、「まあ、御掛けなさい」といふ聲は庵主らしい。そこに九尺の縁側が、沓脱石を前に、しぜんと腰をおろす所になつてゐる。

「なるほど、ここ[illegible]ますね。」
「この、ここから上の方は、もう嵐山で、この川[illegible]ますよ」
「大堰川の水音ですか、幽かにさツ／＼と聞こえるのは……」
「さうです、夜になると、もつと近くきこえます、水鶏もよう啼きます」
庭といふ程の事もない、五六坪ばかり、萩がすんなりと一株、そこいでゐるのは好いが、狭い所へ刈込んだ竹の一むれ、鉢植の鉢など置いてあるので、ごちや／＼と窮屈な感じがする。

題落柿舎　丈艸

深對峨峯伴鳥魚　就荒喜似野人居
枝頭今欠赤虬卵　青葉々頭堆學書

炎に芭蕉を訪ふた丈艸がうたつたやうに、柿の青葉は實にみづ／＼しくて、殊に日ざしを透かす明るい感じがうれしい。見るともなく、明放した座敷の内を見ると、永機あたりの短冊を貼りまぜにした腰屏風を置き、俳諧辭典と云つた風な書物が積み重ねてある。昔の落柿舎の事を想ふと、是は苦笑される。昔の落柿舎は豪富三井一族に連る三井秋風といふ人が金を吝まず造つたまゝ、間もなく廢れて立ちくされのやうにしてあつたのを、去來が安く買ひ取つたものだといふ。「嵯峨日記」にも、

落柿舎は昔の主の作れるまゝにして、處々頽破す、中々に作りみがゝれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ、彫せし梁、畫る壁も、風に破れ、雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたる、竹椽の前に柚の木一本花芳しければ

柚の花になかし忍ばん料理の間

と芭蕉は書いてゐる。頽破したものには凡て本當の美しさがある。作り磨いたものは人工の美である、須臾の、上つらだけの光である、其が風に破れ雨にぬれてさびてゆく、又は頽れてゆく、そこに大きな時の力を暗示する、或る底力が光つてくる、それは全く自然の工である。初めの落柿舎は料理の間、化粧の間などもあつたらしい。其を去來は取拂ふか、又は締切つたまゝにしておいて、ほんの一間二間だけを使ふことにしてゐたものと見える。もと／＼無いのではない、有るものを用ひずして足りる。といふ所にも芭蕉たちの心持が映じてゐると思ふ。兎も角、今の落柿舎は昔の其とは似てもつかぬ物である。庵主が取出して見せる本は、かうした所によくある芳名録である。ゴム印で繰り出しの日附を捺した下に、こゝを訪ふた人の名刺が貼りつけてある。「清浦首相・行一」ともある、是は庵主が自ら代筆して其光榮を紀念したものらしい。私は、こゝに名を列ねることはわざと遠慮したが、さても此庵の訪問者として、あつかましく、俤さうた雅名俳號を大書してゆく人が多い事ではある。

芭蕉が落柿舎に滯在してゐた時は京都から去來、凡兆がよく訪れて來た。去來は其頃、上長者町に居たとすれば、京都の中としては嵯峨に近い方であるが、それでも三里近くはあらう。去來は、師の清閑を亂さないやうにと心づけて、わざと芭蕉一人を殘して自分は京へ歸ることが多かつたが、他の同人達などと共に泊る事も少くはなかつた。

去來兄の方より菓子調菜の物など送りて、今宵は羽紅夫婦をとゞめて、蚊屋一はりに五人こぞり臥たれば、夜もいねがたくて、夜半過る頃よりも各起出て、昼の菓子盆など取出て、曉近きまではなし明す。去年の夏、凡兆が宅に臥たるに、二疊の蚊屋に四ケ國の人ふしたり、思ふ事よつつにして夢もまた四種と書捨たる事どもなど云出して笑ひ

[illegible]

[illegible]れ書いてある。日記の日付は二十日となる。[illegible]

た影をもつて差し照つてゐた事であらう。

　　子規大竹藪をもる月夜　　芭蕉

此句は斯うした晩に出來たものかと思はれる。團扇で蚊を追ひながら、庵のたゞ暗しい燈下を[illegible]

閑談してゐる芭蕉の痩せた姿が見えるやうである。京都の人々の外に江州平田から李由、膳所から千那、大津の尚白

粟津の丈草などもわざ／＼訪ねて來た。或時は江戸から曾良さへも訪ね寄つたりしたので、なか／＼賑はしくもあつた。人が來れば來るで面白い、來なければ來ないで面白い、芭蕉はかういふ心持であつたらしいが――

廿二日

朝の間雨降。今日は人もなく淋敷まゝに、むだ書して遊ぶ。其言

　喪に居る者は悲をあるじとし
　酒をのむ者は樂をあるじとす
　愁に住する者は愁をあるじとし
　徒然に住する者は徒然を主とす

淋しさなくばうからましと西上人のよみ侍るは、淋しさをあるじなるべし。又よめる

　山里にこはまた誰をよぶこ鳥

独すまんとおもひしものを

独すむ程面白きはなし、長嘯隠士の日、客は半日の閑を得れは、主は半日の閑を失ふと。素堂常に此言葉を憐む、予も又

うき我を淋しからせよかんこ鳥

とは有寺に独居て云し句也

とあるから、餘りに人の来るのは、ちと迷惑であつたかとも思はれる。淋しくてゐる者の心をまぎらさうと、あれこれと云ひよる人の親切はまことに有難いのであるが、淋しい時には、淋しいまゝにじつと静かに置いてくれるのが一番好ましい、さういふ心理を、私自身が近頃になつて、体験したのである。

落柿舎の主、去来の墓といふのは、今の落柿舎の背後、竹林を少し開いた所にある。大きな柿の木がすつくと立つた下に、僅か一尺程の自然石の表に「去来」と二字を刻んだものである。是は又何といふ小さな墓であらう、而して何と侘しい感じであらう。竹筒にさした樒だけは新しいが、竹垣は朽ちたまゝ修められてゐない。私は其の前に暫くしやがんでゐた。さら〳〵と音かして、竹の葉が降つて来る。竹林を打仰いで見ると、その青い直線の重なりが淋しくして美しい。墓は東に向いてゐるが、所謂「大竹藪を洩る月夜」の月光が此の碑面に落ちる時はどんなに一層淋しい感じだらうと思ふ。竹の枝には枯れた葉があるやうでもないが、風にふるはれる毎に絶間なく落ちる、其の枯葉が墓のあたりには隙なく散り敷いてゐるのだ。私は猶ほ腰をあげずにゐた。動くものは何もない静かさの中に蟻が、墓石の上を這ひまはつてゐる、私の襟元がむづ痒いと思つたらば、いつしか、そこにも蟻が這つてゐるのだつた。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡　芭蕉

芭蕉が嵯峨に滞在してゐたのは五月雨の頃とて、よく雨が降つたと云ふことである。竹林の中に、高い高い竹の梢から降りそゝぐ、音もなく――。而して地からは、若々しい皮を被つた竹の子がによき〳〵と生へてくる、音もなく――。雨の降らぬ日も曇つてゐた、柔い絹の青い帷を垂れたやうな若葉は、静に庵の中に垂れこめてゐるにも佳く、又、低い軒をかゝげて其奥にある古い寺を訪ふたりするにも好かつた。芭蕉は、さうした薄ぐもりの涼しい日には、落柿舎を出て、あたりを散策したのである。其跡を慕つて来た私にとつて、けふも亦、五月雨空はどんみりと曇つて、いぶし銀のやうな感じである。おゝ、此の高貴なる憂鬱。あまりにカン〳〵と照るのは卑しく、あはたゞしくすらある。うつすりと曇つた空の下にして、人はゆつくりと物を思ひ、しみ〴〵と物の哀れをも感じられる。少くとも曇り日には幻想がある、追想がある、古人を偲ふ為めには、斯うした曇り日が何よりである。私は漫ろに杖を曳かう。

×

小倉山二尊院の門はがつしりと、古く、苔むして、石で作つたかと思はれる程である。爪先上りの道が深く、まつすぐに、両側に松と楓とを植ゑて、其の濃青淡緑の照映も美しい。本堂を囲む白壁もひつそりと、勅使門をぴたりと閉ぢ、僅かの小門から出入せしめる。背後の小倉山のなだらかな曲線のリズムは和歌の音調をも思はせ、定家が此地を好んだといふこともうなづかれる。歌には「峯のもみぢば」と詠みならはしてあるが、山上は松の方が多いらしい、それもさして老いてはゐず、柔い積翠の中に其の細い幹が褐色の線を揃へてゐる感じも、やはり短歌的である。山腹に「時雨亭」といふのを建てゝ、定家が百人一首を選んだ古蹟だとする。後に程近い常寂光寺の境内にも、同じく時雨亭とい

ふのが作つてある。然し、定家が住んでゐたといふ時雨亭の跡は、今の厭離庵である。そこは「定家卿墓此奥にあり」と柴折戸に牌を掲げて、其戸は堅くさしてある。中には黄芒が二三株、涼しげにそよぎ、山吹が咲き殘つてゐるが、卿の墓らしいものは透いて見えない。庵の勝手口から案内を乞ふと、八十を越えたかと思ふ程の老尼が出て來て、表は閉ぢてあるから裏から廻れ、といふ。墓は若楓を背にして其の色のしたゝるやうな下にしづまつてゐた。

×

清涼寺とは佳い名である。俳諧の歳事記に御身拭の行事として名高い釋迦像を本尊として、「栴檀瑞像」といふ隱元禪師の大字は雄健である。荒つては居るが、夏の日中をあちこちと散策して、こゝの堂上に登ると、ほんに涼しいといふ感じがする。淸らかな涼しさ——これこそ念佛宗の實感でなければなるまい。

涼しさの野山にみつる念佛かな　去來

これは黒谷の開帳の時の句だといふ事だが、此初案は「風かをる野山にみつる念佛かな」とあつたのを、芭蕉が「涼しさの」と筆を入れて生かしたといふ話は去來自身が語つてゐる。「毎日御祈禱、天下和順、日月清明」とある額の横の下には大きな木魚を幾つか並べて、親に連れられて來た子供が其の一つをポクポクと打つて遊んでゐる。堂を下らうとして見渡すと、左右の銅瓦は若葉の緑をあふれる程に湛へて、松の葉もとゞめない風に掃き清めた地の上には、蝶がたつた一つ、低く飛ぶばかりである。

×

野の宮の跡——これほど淸らかに淋しい所はない。昔、齋宮に上る處女が潔齋してゐたといふその故事も淋しいが、さうした歴史的の連想を持たぬとしても、此の黒木の鳥居に柴垣をめぐらした中に、ポツネンと小さな祠——邸の庭に

服にでもよ[illegible]な[illegible]小兒[illegible]洲とよばる

野の宮の鳥居に立ちなからの心も

やはり此記文に書きてゐる、せめて形でも追はふとしてみたには、思ふその感さへもない、ほんとに何もない、高さへも、有るといふべく餘りに小さく、たゞ／＼黑木の鳥居――四本の立木を伐つたまゝに、二本を縱に二本を横にして作つた鳥居――が鳥居として立つて居るだけなのである。

然し、野の宮の道は更に淋しい、嵯峨はどこに行つても竹林ばかりであるが、此道は殊に其が厚く、右も左も、奥の見通せぬほどの竹林で、たゞし竹林の常として、奥の奥までも細い日の筋がさし通つてゐるやうな淋しい明るさがある。道に添うた所にはやはり小竹で垣をなし、横に太い割竹で抑へてある。道の上には竹の落葉が積り、冬のさ中のやうに、歩けばさく／＼と音を立てる。その道中から又、筍がニヨキ／＼と首を出してゐるが、拔かれもせず、又、踏まれもせぬと見える、それ程めつたに人も通らぬのである。こんな道を行く自分の足音が餘りに淋しいので、ふと立ちどまつて耳を傾けると、どこやらで鶯が、あざやかに鳴くのである。

×

嵯峨日記に

十九日、午半、臨川寺に詣。

大井川前に流て、嵐山右に高く、松の尾の里につゞけり。虚空藏に詣る人往かひ多し、松の尾林の中に小松屋敷と云有り、都て上下の嵯峨に三所あり、何れかたしかならん。彼仲國が駒とめたる所とて、駒留の橋と云。此あたりに侍れば、暫く是によるべきにや、墓は三間屋の隣藪の内に有、しるしに櫻を植たり。かしこくも錦繡綾羅の上に起

臥して、終に藪中の塵芥となれり、昭君村の柳、巫女廟の花のむかしも思ひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪の茂りや風の筋

臨川寺は「夢想国師入定の霊地」と誌した表の門を堅くさして人を入れしめない。大きな椎の雙樹が茂つてゐて「門ノ瓦ガ割レルカラ石ヲ投ゲルナ」といふボール札がヒラヒラしてゐる。正面、本堂まで二三丁も深く樹の並木と石道とが正しく遠近法的の線を描いてゐる。右手の竹林を一周して裏手の小門からはいる、あたりには人気とてない。瓦舗を踏んで、本尊彌勒佛の金の眼にほれぼれと見入つてゐると、寺の婢らしい者が藪の中から箒を手にして出て来ては、私を見て驚くのである。

芭蕉が「松の尾林の中に小督屋敷といふあり」といふものは、法輪寺（虚空蔵）の下にあつたものといふ、駒止橋といふのは今、渡月橋につゞく小橋であるが、此の渡月橋も芭蕉以後近代に架けかへたものと聞く。臨川寺の前には琴聞橋といふのもあるが、凡て、小督の故事に因んで名けたといふまでゞあらう。芭蕉時代には小督屋敷が三ケ所にあつたといふが、今日時雨亭が三ケ所に出来てゐるのと同様、日本人は昔から名所古蹟を濫造するのが好きなのである。小督の塚といふものも、東山清閑寺内にあるものが本当らしいが、芭蕉がこゝで見たものは今も「三軒家の隣」にある。但し、「しるしに桜を植えたり」とあるが今あるのは楓の大樹二本で、その根本に寄せたやうにして古い墳石がある、「うきふしや」の句の通り、昔は竹藪だつたらうが、今は篠が十本ばかりを疎に植えてかなめ垣をめぐらしてある。

×

天龍寺に臨川寺に近く名高い古道場であるが、芭蕉は一言も書いてゐない。蓋し其頃は山内が衰微してゐたものであ

[illegible]
く[illegible]よつて。[illegible]
作つた。重さ八千斤。一頭の牛が之を挽いて山に運び込んだ。[illegible]
いふ。明治時代の品とは思はれぬ。[illegible]ではないか。一二三[illegible]年前に――[illegible]
御町乃振衣起立提大聲如[illegible]風雨[illegible]中と。後に[illegible]
巨硯を門内松林の間に埋めた上に建てた碑には斯う書いてある。

私は松の尾の里へも行つて見た。大社のあるあたりは大堰川の水を引いて土垣の中にも外にも、又、田の間にもさう〳〵と美しい水を走らせてゐる。宛も田植頃とて豊かな感じが地上に充ちてゐた。そこから嵐山の方へ、やはり流に添ふて來ると「洛西札所二十八番」と書いた石がある、おう、斯んな處に札所があるかと思つて、私は何氣なくその細い坂を上つて行つた。箒を手にしてゐた若い尼さんが、頭の手拭をとつて辭儀をして、私の後へついて來る。寺ではなく庵である。普通の座敷の一間をやゝ高くしつらへた處に十一面觀音を祀つて、尼さんが一人お守してゐると見える。私はお蠟をあげて心經一卷を誦した、終つてふりかへると、其後に尼さんが影のやうに合掌してゐた。にこやかな顏をして、十八九ばかりかと思はれる。

「掃除が大へんでせうね」

若葉がこんもりと暗い程に茂つてゐる處に、崖をなして五月躑躅が燃えるやうに咲いてゐる庭を眺めながら、私は話しかけた。

「今は丁度椎樫と、竹の葉が落ちる時ですから、朝掃きましても、午にはもう掃かぬと同じ事になります」

そんな會話を三つ四つ交して私は外へ出た。尼さんはさつき、掃きかけてある所の門まで送つて來た。

「あ、今あげた御蠟を消しといた方がいゝ、あなたが外にゐるなら……」

私は小豆島の靈場を遍路してゐた時、人のない佛前の蠟燭の灯から火を誤つたといふ幾多の話をきかされてゐたのでそんな事も、ふと口に出た。

×

「嵯峨日記」に五月二日、曾良が來て、「武江舊友門人の話彼是取まぜて談ず」といふ條に

夕陽にかゝりて、大井川に舟を浮べて、嵐山にそふて戸難瀬を登る。雨降出て、暮に及て歸る。

とある。私は、舟を傭つて、大悲閣の下までしか上らなかつた。嵯峨の風景としては、云ふまでもなく嵐山であり、嵐山の風景としては、大堰川を舟で上るのに越したことはない。こゝの水は即ち碧潭で、水の深さの濃く又は淺く見えるのは、碧潭の色の濃く、又は淺いのである。その深い緑にすつぽりと棹をさし、棹の端をもつてさしきると、舟べりに片手をついた船頭の腕をもつ拳まで水にひたる。其の棹をぬく拳から青い水がたら／＼と滴るのである。折から芭蕉の見たやうな夕日がさして來る。川はうねるともなく、くねつてゐるので、夕日をまともにした時は眼もまぶしく、其陰になると、はや日暮れたかと思ふほどに、暗い茂みに掩はれる。而して再び、夕日がぱつと水の底までも明るく照つてゐる上を――つまり夕日の峯が水の底に沈んでゐる上を――舟はすべりゆくのである。芭蕉の云ふ戸難瀬とは、戸名瀬の灘であらうか、兎に碧潭の間から落ちる小さな灘で、嵐山の名所にはなつてゐるが、甚だあつけないものである。

花の山二町登れば大悲閣　　芭蕉

といふ話が[illegible]下に[illegible]
渓流の巻岩に[illegible]錦[illegible]にしたてゝゐる人々の頭の上に、[illegible]
してゐるのも、[illegible]の何處の[illegible]させるものである。[illegible]
め、近く嵐峡の陰影の変化を味ふのもよい。こゝからの奥道は秋の夕べにでも歩きたいやうな径である。

×

私は愛宕みちといふ方へも杖をひいた。往生院祇王寺は、如何にも世を遁れたさびしい人の隠れ住むのにふさはしい所である。竹林の中の暗しくないほどにたつてゆく道をゆくと、何か、自分の戀人の隠れ家でも訪ねてゆくやうな心持がして、その茅葺の門を見た時は胸のときめきをすら感ずる。柴折戸は手をふれると音もなくすらりと開いて、そこの狭い蛛か園の中で一歩すさつた。その中は一ぱいの若楓、低い枝は親しげに肩に垂れかゝり、その緑はかんがりとして、私の顔にうつるかと思はれる静かさ。楓の葉に落ちたまゝ支へられてゐる松の葉がふら〳〵と、毛のやうに吹かれてゐる静かさ。鳥さへも鳴かない。六百年前の戀を記念する祇王、祇女、佛御前の墓は山の裾に寄つて塚の如く苔むしてゐる。

×

あだし野の念佛寺は、昔、東の鳥部山と共に洛西の荼毘所であつた其跡と聞くが、是は何といふ不思議な墓の集積であらう。墓の数多くある所は他にも澤山あるが、此様に墓を一所に集めて大きな墓を作つたといふ風な所はめずらしい。真中に十三塔を据ゑ、大きな地蔵菩薩を祀つてある、其下でガチヤ〳〵と音を立てゝ、墓石の破片を敷きつめたやうな石ころを掻きのけてゐるものがある。

「此は皆無縁の墓さすかね」

「こゝは賽の河原どす」

見ると、其男は片足がなくて、いざりのやうに膝頭をついたまゝ、鎌のやうな物を持つて、所謂賽の河原といふ礎石のから／＼したものを攪きならしてゐるのである。而して

「無縁はあちらどす」

と其鎌で一寸と指さして、其方へ向いて

「おゝい、一服しようか」

とどなる其方を見ると、そこに女が一人、此片脚の男の妻であらう、こちらを向いたのを見ると、めつかちで、無縁の墓の集積のうちにうつむいて、草でも引いてゐたのと見える。曇り空は午頃から晴れかけて来た時といふので、日はまだ落ちるに間がある、何といふ日の長い事であらう、堂の前には南天の花が咲いてゐる。

×

芭蕉が難波の旅舍で病みついた時、去来を枕辺へ呼んで、先師野明の所で、大堰川に吟行した時の作

　大堰川波に塵なし夏の月

といふ句を書いておいた。之は大堰川の夏景色を詠じ得てゐるやうに自分でも思つたのだが、曾て清瀧にて

　清瀧や波に散りこむ青松葉

と作つた句がある。其柄は違つてゐるけれども趣向の立て方は似てゐるといふ批難もあらう、大堰川の句は捨てゝ、清瀧の句だけにしようと去来に云つた事があつた。所が又思ふに、園女亭で

宵月の月にさて見るへきもなし

と作つた、これも翁句の辞世吟とせるから、此自分の句だけを残して他を打捨てよと言ふたさうだ、といふのといふ話が「花屋日記」にはある。古来相を並べ、名匠のおく名を惜しみ道を重じたまふあまりなるべきさ、わづか一句にきまで千言萬言したまふ、御病牀の中の御枕折、風雅の真情ここに見けれ」といふの一である。「花屋日記」の記事は全部信じ難しとしても、「泊船集」にも

清瀧

清瀧や波にちりこむ青松葉

波に塵なしといふを斯様になしけるは翁の遺言なり、「清瀧の水くませてやところてん」とありしは野明に引きすてさせたまふ、嵯峨日記に「水くみよせて」といふは誤なるよし

とある。芭蕉が遺言として推敲までした此句の作を得た清瀧といふ所は、大堰川に落込む清瀧川の愛宕山道に當る所である。一の鳥居をくゞり、試み坂を上つて下りると、涼しい水音がきこえる。渡猿橋といふ朱欄の橋をわたして、其袂に茶屋が二軒、若葉の緑の中に赤い提灯を吊つた離れ座敷なども設けてある。松の木は今、此邊には少い。昔は桟で川水にひたした心太などを賣つてゐたのであらう、今はしんこが名物であるが、其はほんの土産用で、木の蔭で冷たいビールを傾けるといふやうな人がわざ〳〵遊びに來ると見える。

×

私は、そこから清瀧川に添うて、なほ上流に分け上つた。川はずつと谷の底になり、杉の茂みがほの暗く、野の花などが咲いてゐるさまも、山の深い感じである。十町ほども行つて、木を伐り出してゐる杣人に初めて逢つた。谷地の流

と聞くものはもう近かつた。そこは、時雨櫻で名高い月輪寺に行く路と分れて、左へ急な上りとなるが、嵐氣といふか俄にひえ〴〵とした空氣が吹きおこつて來るのを覺えて、なほ茂みの中に分け入ると、私は先づ馥郁とした香氣の迫つて來るのに驚かされ、次に若い女が三四人、裸體のまゝにして立つてゐるのに驚かされた。素絹をかけたやうな一すぢの瀧を中心にして、あたりの情景を私がはつきりと見きはめたのは、其後——それはほんの暫くの後だが——である。瀧の落ちる所は、茂みの中が自ら空洞になつて、大きな壺の內部のやうである。女は三人までが若く、瀧の飛沫の中に立つて合掌してゐる、も一人の女は老いて、其三人の女に向つて、やはり裸體で合掌しつゝ大聲で——然し瀧の音に打ち消されつゝ——陀羅尼を讀み上げてゐたが、やがて自分も亦、瀧の一番眞下の岩の上に立つて、前の女と並びつゝ祈念する樣である。瀧の前には、注連を張つた石の燈明臺に數本のお蠟がチロ〳〵とまたゝき、そこの大きな花筒には山百合の花がぎつしりと挿してある。初め私が此の茂みの中に踏込んだ時、先づ芬々とした薰香に驚かされたのは此百合の花だつたのである。私は此の異樣な景色——ルノワルの裸女に蕪村の瀧布——をスケッチしようかとも思つた、然し、此の場合の嚴粛な氣持が、私をさうさせる代りに、其の瀑布と裸女とに向つて、私をも亦合掌せしめたのである。



農村二日の出來事

正宗白鳥

人物

喜　作（二十六歲くらゐ）
小よし（二十二歲くらゐ）
仲　吉（二十四歲くらゐ）
七　造（六十餘歲）
寅太郎（四十近い歲）
おたき（六十歲くらゐ）
子　守（十三四歲）

（一）

梅雨時の霽れ間。烈しい午後の日が耀いてゐる。遠山や、麥の熟した畝を背景として、

路傍に荷車が置かれてゐる。荷車には刈られた麥が積まれてゐる。その側には、喜作と、妻の小よしとが、辨當を食し終つて休息してゐる

小よしが食器や土瓶などを、空になつた飯櫃に入れて、風呂敷で包んで荷車にしばりつけたり、脚絆のゆるんだのを締直して足袋を穿直して、亂れかけた頭髮をちよつと氣にしたりなぞしてゐる間に、喜作は默つて汚れた手でバツトを吸ひながら、空か山か向うの方を見てゐる。

喜作（ふと、小よしを顧みて）おや、おら今夜一つ走り行いて來べいか、

小よし（夫の方を見て）さう慌てなくつてもいゝぢやないか。五日や六日遅れたつて構はないだらうから、もつと暇な時にしなさい。それに手紙を見て直ぐ出掛けちや、いかにも此方がガツ／＼してゐるやうに腹を見られて却つてよくねえだよ。

喜作　そんな遠慮は餘計なこんだ。おら達の爲めを思つて云つて來たのだから、おらの方でも腹の底を打ち明けて、先方のお情を受けた方がいゝと、おら思つてゐるだよ。幸ひ今日は仕事も早く片付きさうだから、今夜一つ走り行つてくべい。

小よし（夫の側へ膝を卸して）たつて今夜行きたいのなら行つてもいゝが、當てにしない方がいゝだよ。今までも當てごとは外れてばかりゐたでねえかな。死んだ父ちやんの云つたことだつて、お前やわしのためになることは一つとしてフントになつたことはねえだから。わしはもう、いゝ知らせなぞ聞きともねえだ。

喜作　おめえは量見が狹いからいけねえ、お互ひにまだ若いぢやないか。これからいゝ運がめぐつて來るに違えねえだ。おら達なにさう思つてるだよ。而様の伯父が急に大事な話があると云つて來たのも、おら達にいゝ事のある手はじめだ

ぜ。おらは[illegible]黙つてゐたけれど[illegible]

小よし　ぶしおつけたらうて、どう殺しおつけたらうだい。話して見ねえな。

喜作　おめへおケチをつけるだからいやだ。おら一人の腹のなかにしまつておくべい（悲しさうな顔をする）

小よし（微笑して）いつものやうに一人で蟲のいゝ事を考へてゐて、あとで泣つ面をするといゝや。

喜作　ホーレ。もうおらにケチをつけてやがる。おめえの惡いくせだ。お天氣ばかり續いたつてお目出たかあない、たまにや雨が降らさいけねえと同じ道理で、人間もたまにや泣つ面をするがいゝだ。

小よし　それもたまにやいゝだか知んねえが、この頃の空のやうに、毎日々々ジメジメ降つてゐちやたまんねえ。折角よく實が入つた麥だつて腐つちまふぢやないか。種を播き散らしたゞけで抛つといた譯ぢやねえ。寢てるうちに育つた麥ぢやねえだに、肝心な時に雨に責められて腐らされてたまつたものぢやない。それに滿足に取れたにしても、この頃のやうに價が安くつちや算盤に合はねえのだから、來年から桑でも栽ゑた方がいゝだよ。

喜作　おめえがさういきり立つても駄目なこんだ。この畝に桑が育つものなら、これまで誰れが麥なんぞ播くものか。土地の柄にねえものは爲樣がねえ。お天道樣が雨ばかり降らすちうて怒つたつて効がねえと同じこんだ。

小よし　効があらうとなからうと、腹の立つた時にや怒らなけきやならねえだ。

喜作　それだからおらたつても、なさけない時にや泣つ面をするんだ。……だけど、今日のやうに久振りに日が照つて、朝つぱらからいゝ音信が來た時にや、泣つ面したくつても出來ねえだ。空か山か、向うの方を見詰めながら獨言のやうに）前髪の伯父も歳を取つて頑愁の角が折れたらしいから、今だ一人の甥の詫言をちつとは氣にして、どうかしてやりたいと思つてるのだ。親爺の臨終の時に頼まれたことを伯父も忘れてる譯ねえだから。……

小よし　お前の蟲のいゝのはあきれたものだ。伯父さんは利慾の角を捺つて棺桶の中へ入る氣でゐるんだよ。お前もいつも人のお情を手頼にしねえで、自分の腕一つで何かしでかす氣になれねえものかな。

喜作　だつておらこんなに働いてるでねえか。親爺が死んでからは、おら、二人前の仕事をしてるだよ。それで貧乏したとしたつておらの所爲ぢやあねえ（稍々興奮して云ふ）

小よし　わしはこんなに細つこい身體してるのに、年中荒働きをさせられて（不平らしく云ふ）

喜作　だから貧乏はおめえの所爲ぢやあねえや。お母あがあんなに長患ひをしたのがいけなかつたのかな。……おら、家の中に病人が出來るのは大きらいだ。親爺が病氣に取つゝかれた時から家の中にケチがつきだしたのだ。おらの家にや何處かに病氣が巣をくんでるんぢやなからうか。

小よし　わしも今年の夏は大病に取つかれそうな氣がしてたらねえ（顔を蹙めて胸を押えながら）ホレ今も胸元がチクチクと針で突かれるやうに疼んでくる。

喜作　フントか。脅かすでねえ。今朝からいゝ氣持になつてゐたのに、脅かすでねえ。おらは病氣は大きらいだ（氣を變へて）さあ、もう一つ働きすべいか。

喜作が鎌を持つて立上ると小よしも隨いてゆく。彼等が舞臺から消えると、七造とその息子の仲吉とが刈つた麥束を背負つて出て來て、喜作夫婦の休んでゐたところに腰をおろして、汗を拭く。

七造　こりや喜サ公の車だな（後を顧みて背伸びして）二人揃つて來てるわい。

仲吉　聲掛けるのは止して呉んな。（慌てゝ留めて）おら、あいつと會ふと仕事する氣になんねえから。

七造　なに云ふだ。

仲吉　何でもいゝだ。おら、こいつに[illegible]

[illegible]も此處へ掘つぼり出して家へ歸つた。

七造　あに云ふだよ、貴様可笑な奴だぞ、

仲吉　可笑しけや笑ふがいゝ。おら、あいつに合ふと仕事する氣になんねえ。

七造　貴様は此の頃何とか文句をつけちや怠けようと思つてやがる。おらの年齢は今年いくつだと思つてゐる？荒仕事は貴様にまかせて、おらは[illegible]へ煙管で鶏の世話でもしてればいゝと思つてるだに、貴様はその若さで、この年寄りのおらに二人前も働かせようと思つてゐるのか。罰が當るぜ。

仲吉　おら、罰が當つてもいゝだよ。首えでも足えでも罰の當りたいところへ當りやがれだ。（自然に云つてうしろを顧みる）

七造（考へて）さう云へば喜サ公はこの頃おらの家へ遊びに來ねえが、貴様は喜作といさかいでもしたのか。

仲吉　…………

七造　喜サ公は人といさかいするやうな男ぢやねえが、ヘテナ。…………（ニヤリと笑つて）貴様はあれの嫁が羨ましいのか。あんなお多福面があにが羨ましいだか。貴様の嫁には小よしよりも何層倍もの容色よしを連れて來てやらあ。

仲吉　（極り悪るさうに）そんな容色のいゝ女は何處にゐるだな。

七造　この村にや醜い面した女ばかりだけれどな、他所の土地には美しい女が數へ切れんくらゐゐらあ。貴様も精出して稼いだら、おれが他所の土地からいゝ嫁を連れて來てやらあ。おめへは喜サ公よりは何層倍もいゝ男だ。あんな者を羨むにや當らねえ、（ひとりで興がつて云ふ）

仲吉（眞面目に）お前の云ふことは嘘ぢやなからうな。

七造　あにが嘘なぞ吐くものかハヽヽヽさあノロノロ出掛べえ、（立上ろうとする）

仲吉　おら、もつと休んで行かう。腰つ骨がだるいだから。

七造　これつばかりの荷を脊負つて腰も足もだるいつてことがあるか。此間うちの中でなまけ癖がついたのだな。今日のやうなたまのお天氣に、若い者が愚圖々々してゐちや冥利が盡きらあ。……さあ出掛べい（仲吉の脊をつゝいて促す）

ここへ、守つ子が脊へ赤ん坊をしばりつけて出て來る。

子守　喜作さんはゐねえかの。

七造　あしこにゐらあ（後を指差して）喜作に用があるのか。

子守　お客が來たから大急ぎで歸つて來いとあしこのお婆あに言傳つたのだ。

七造　どんなお客だ。

子守　どんなお客だか、わしや知んねえだ。子守が奥へ入ると、七造父子はその後を見送る。

七造　喜サ公はおらの方を見てらあ。………あちらの路を驅けて行つた。（仲吉の方を見て）おいらも出掛べえ。

仲吉　おら、もつと休んで後から歸らう。お前一人で先きへ行つといて呉んな。直ぐにあとから追付かう。

七造　氣儘な奴だな。早く歸らねえと、お八つの團子をおら一人で喰つちまふぞ。

七造が荷束を脊負つて歸つて行く。仲吉は暫く動かないで、後を顧みたり空を見上げたりする。ふと何かを見つけて石を投げたりする。

ここへ子守が再び現はれる。

仲吉　オイ、此處で休んで行かねえか。いゝ話聞かせてやらあ。

子守　………（背の子を趣しながら仲吉の前に立つて）お爺は家へ行つたかね。

仲吉　むん。おらお前を此處で待つて居たゞ。お前と一しよに歸らうと思つて………いやかい。

子守　わしと一しよに歸つてどうするだよ。

仲吉　お前にこの妻を背負つて行つて貰はふかと思つてるだ。

子守　この子を背負つてる上に妻が背負るか背負へねえものか、考へて見るがいゝ（せゝら笑つて）一人でこんなずるいことを考へてゐたのけえ。だから人がお前の事を利口者だつて云ふんだよ。

仲吉　背負つてる子が邪魔なら、そこの溝の中へでも抛込んだらよかつぺえ。

子守　呆れたこんだ。この子はお前の子ぢやねえだよ。

仲吉　極つてらあな、おらの子ならそんな汚ねえ面して生れちや來ねえ。……お前もそんな汚ねえ面して、ギヤく泣きやがる餓鬼は小うるさくてたまんねえだらう。溝の中へでも抛げ込んでしまひねえ。子供が背中であばれてひとりでに落ちてくたばつたと云やあ言譯が出來らあ。おら手傳つてやるべいか。

子守（思はず後退して）本氣でそんなことを云ふのけえ。おつかない人だよ（子供を庇ふやうな身振をする）

仲吉　へゝゝゝゝ。おら、そんなおつかねえ人間ぢやねえだ。おら、あいつを溝の中へ叩込んでやりたいと思つても、どういふものだか叩込めねえんだ。

子守　あいつと云つて誰のことだい。

仲吉　俺のこんでもねえ。おら一人でさう思つてるだよ。……お前はしよつちう背負つてるその職業が背中から溝へでも何へでも落つこちたら、身が輕くなつていゝだらうにと、たまに思ふことたねえのか。お前のやうな細つこけた身體に、そんな肥つた職業を縛りつけてゐちや、重かんべえと思はれてなんねえな。

子守　この子は見かけよりや重いんだよ。それに一日々々重つたるくなるやうで、わしや難儀してるだよ。

仲吉　それ見ろ。その子さへなけりや、お前も子守なんぞしなくつてもいゝんだぜ。そんな身體の重石は、早くとつちまひたいと、お前も思はねえことあるまい。

子守　この子を重石だなんて云はふものなら、この子のお母さんにどやされるだよ。……お前がそんな事を云つたから、この子が急に重くなつたど。（子供が泣き出す）うるせいよ。泣くでねえつたら。泣くと溝の中へ抛込むぞ。

子守邪慳に子供をあやしながら入つて行く。

仲吉　オーイ。おらの麥背負つちや呉れねえんだな。

さう叫んでから、首垂れて物を考へてゐたが、やがて立掛けると、そこへ、小よしが刈つた麥束を背負つて入つて來て、荷車に積まうとして、ふと、氣味の悪い目で此方を見てゐる仲吉を見る。

小よし　仲さん一人けえ。……お天氣が續くといゝがの。

仲吉　お天氣になつたから忙しいだらう。お前も一人かい。

小よし　喜作は急用で家へ行つたのだ。もう歸つて來るだらう。

麥束を置いて行きかけると、仲吉が「小よしさん」と聲を掛けて呼留める。小よしは足を留める。訝しげな目付で相手を見るので、仲吉はちよつと口が利けないやうである。

小よし　何かわしに用事があるのけえ。

仲吉　用事つてねえだけんど、おらお前に約束したことを思出したよ。

小よし（欺瞞するやうに）わし、お前に何も約束された覺えはねえだよ。

仲吉　お前は忘れつぽい女だな。おらが牛の子を牽張つて荒地か原で草を喰はせるところへ、お前やお久がやつて來て、おらを揶揄つたことがあつたぢやないか。その時、おら、牛を育てゝいゝ價で賣れたら、お前やお久に何でも慾しい者を買つてやると云つたのだ。さうすると、お前達二人は、帶だか衣服だか指環だか、慾しさうな者を喋舌くつて、口先だけで喜ばせといて、その時になつて知らん顏しつちや承知しねえつて、二人で云つてたぢやないか。おら、よく覺えてるのだよ。

小よし（昔を思出して懐かしさうに）そんなこともあつたつけな。だけどそりや何年も前の古いこつちやないか。……今は牛の子も親も一匹もお前の家にやゐないぢやねえか。

仲吉　疾つくに賣飛ばして、牛の小屋は物置きになつてらあ。

小よし（戯談らしく）お前が自分で約束したこと覺えてゐるんなら、牛を賣飛ばした時分に、なぜわしやお久さんに慾しい者買つて呉れなかつたのだい。

仲吉　牛はわしが育てたんだが、賣るとなると、わしの料簡にやならねえのだ。それにな小よしさん、お前は知つてるかも知んねえが、家にや高利に借金があつて、抵當になつてる田地を取られるのがいやなら、牛でもみんな賣つちまはにや片がつかなかつたんださうだよ。おら、田地なぞどうでもいゝから、牛は殘しといて呉んなと、父ちやんにさう云つたのだが駄目だ、先祖の田地は賣れねえつて老人が云やあがるんだ。おら爲様がねえと諦めたが、その時から……

の仕事はいやでなんねえのだ。……あんだつて家に借金があるだか、借金のためにあんだつて田地を取られなきやならねえのか、おらには譯がよく呑込まれねえだよ。……おらはやつぱり智慧が足りねえんだな。

小よし　それで、牛のかはりに鷄を飼つてるのけえ。

仲吉　おら鷄の世話なぞしねえよ。

小よし　牛を飼ひたけりや、稼いでお金儲けて何匹でも買つたらいゝぢやないか。

仲吉　おらがどんな稼ぎをして金儲けするだね。年中野良で働いてゐたつて、牛の子一匹買へる錢は殘りやしねえ。お前に約束した者を買つて上げる當てもねえだよ。

小よし　お前は見掛けによらない義理堅い人だね、（笑つて）わしはそんなことを當てにしてやゐねえから安心してゐなさい。お久さんはお墓の中へ入つてるから、衣服も帶もなんにも入らないだらうし……（ふと感動したやうに）さう云へばお久さんは可哀さうなことをしたぢやないかね。子供の時分には、わし誰れよりもあの人と仲よしだつたのに。

仲吉　お久が若くつて死んだのを、お前は可哀さうに思ふんかい。おら、さう思はねえだ。自分の思ふやうにならないぐれえなら、早くくたばつた方がいゝと、おら思つてゐるだ。……おら、牛の子一匹飼ふことが出來ねえし、お前に約束した者を買つて上げることも出來ねえし、麥秋を濟ましたあとぢや、田植ゑだの田の草取りだのしなきやならねえと思ふと、お久のやうにコロリと早く死んぢやつた方がいゝと思ふだ。おら、こんな刈つた麥を脊負つて、畝から家へ行つたり來たりするために生きてゐたつて、ちつとも面白かあねえ。

小よし　それや誰れだつてみんなじこんだよ。わしだつて、細つこい身體してこんな荒仕事をしてゐちや長生したくつ

ても出來ねえだらうよ、[illegible]

じこんだけれど、お父のやうに百姓はしたかねえだよ。

仲吉　喜サ公はいゝだ。喜サ公とおらとは違ふだから（憮然とする）

小よし　仲さんは今日は心配事でもあるのけえ。

仲吉　心配事はねえけんど、おら生きてゐたつて面白くねえだ。

小よし　お前のやうに身體が頑丈で獨身なら、東京へでも何處へでも稼ぎに行けるだらうからいゝだらうにな。喜作を見なさい、病身なお母あやわしが邪魔になつて、他所へ行きたくも行けねえのだよ。

仲吉　なあに喜サ公はいゝ。いつも悦しさうな顔してらあ。

小よし　あの泣きつ面が悦しさうに見えるのけえ（輕く云つて、荷車の側へ寄つて獨言のやうに）早く來て呉れなきや困るのに。わしには車は牽いて行けないし。

仲吉　おら牽いてやるべい。

仲吉は自分の麥束を荷車に載せて、車を持ち上げる。

小よし　止して見んな。氣の毒だから。

仲吉　なに構はねえ。家へ歸る次手だから。

仲吉は欣然として荷車を動かしだしたので、小よしは後を押しながら行きかけると、そこへ、喜作が素足で入つて來て、仲吉の擧動を見て呆氣に取られる。仲吉も足を留めていやな顔をする。

小よし　仲さんも無暗ちやねえかな。人の車を牽からうて云ふんだもの（何氣なく云ふ）

喜作　おらが來たからもういゝだよ（無愛想に云ふ）

仲吉　おら、自分の分だけ持つて行くべい。

仲吉は自分の麥束を荷車からおろして背負つて、詰らなさうにして出て行く

小よし　あの人變な人。やつぱり人の云ふやうに、ちつとべい拔けてるのか知らん

喜作　あいつはお前にどんなことを云つたよ。云つて見ろよ

小よし　（氣に留めないで）それよりも、お客は誰れが來たのけえ。まさか眞壁の伯父さんぢやあるまいな。

喜作　來たのは伯父ぢやねえが、伯父が來たのも同様だ。（泣きつ面をする）

小よし　（夫の顔に注意して）わし、ケチをつけるぢやないけんど、誰れもいゝことを知らせに來たのぢやあるまい。だから朝から當てにしない方がいゝと云つたでねえか（非難するやうに云ふ）

喜作　（怒りを含んだ口調で）おめへはおらにいやな思ひをさせて、自分でいゝ氣持がするのか。今日のお客はな、伯父が是非おめへとおらと二人連れで來いと言傳をしたつて、わざ／＼知らせに寄つて呉れたのだ。その言傳てをおめへに知らせて喜ばせべいと思つて急いで來たのに。おめへは聞かねえさきから、おらにケチをつけるだな。

小よし　お前こそ何をそんなに怒つてるだ（怒りを含んだ口調）わしはな、眞壁の伯父さんに呼ばれたつても、お前に隨いて行く氣はねえだよ。

喜作　一しよに行く氣はねえだと。……伯父はな、歳を取つたので、一人の甥が可愛くなつて、どうせあの世へは持つて行かれねえ身代を、今のうちにおら達に配けて呉れようて腹なんだ。それでおらとおめへと二人を側へ呼んで、おら達が喜ぶ顔を見たがつてるんだ。それにちげへねえとおら思つてるのに、おめへは、伯父の側へ笑顔を見せに行き

たくねえと云ふんだらう。

小よし わしは棚からボタ餅の落ちるやうなことを當てにしねえだから。……こんな畑に野良に出たけで。手足は達者さうにだるいのに。山坂越へ一兩里まで。どうして行く氣になれるものか。

新作 分らねえ奴だ、勝手にしやあがれ。てめへがさういふ氣なら、今日から畑の仕事なんぞして貰はんでもいゝんだ。麥一本刈つて貰れなくつていゝんだ。……見ろかうして呉れべい。

新作は荷車の上の麥束を摑んでは投げ〳〵して、ついに荷車を溝の方へ倒す。小よしは呆氣に取られて見てゐたが。

小よし 氣が狂つたのけえ。歸つてお母あにさう云つたら。お母あが杖をついて拾ひに來るだらうよ。わしやお前の抛出したものを拾つて廻るのはいやだ。

小よしは怒りと冷笑とを含んだ目で夫を一瞥してサツサと出て行く。新作は一時の激しい興奮のための息苦しさを現はして出て行く。

仲吉は再び現はれる。ニヤリ〳〵笑ひながら二人の後を見送つてから。面白さうに荷車を元のやうに直して。麥束を元のやうに車に積む。

そこへ七造が入つて來る。

七造 馬鹿め。まだ此處にゐたのか。此處であにしてるだ

仲吉 おら、さつきそこの麥畝の中へ隱れて面白いもの見てゐたゞよ。お前にも見せたかつたぐれえだ。新サの野郎。何が氣に入らねえだか、麥の束を取つちや投げ〳〵して大あばれにあばれてゐたゞよ。新サは嚊あを好いてゐねえのか

七造　馬鹿め貴樣は自分の仕事を抛つちらかしといて、他所の夫婦喧嘩の後仕末をするのか。……さあ來い。晩までにな。や刈つちまはにやならねえ。

七造が急立てるのを、仲吉は振切つて、荷車を曳出さうと身構へをする。

仲吉　喜サ公の家へ運んで行つたら、直ぐに歸つて來るよ。

七造　何だつてそんな馬鹿な眞似するだ。

忌々しさうにさう云つたが、強いて引留めようとはしないで、そこへ蹲んで、煙管を出して煙草を吸ひながら、疲れてゐる風で呆然としてゐたが、一服吸ひ終ると、横になつて眠りに就く。　(幕)

(二)

喜作の家の庭。藁葺きの粗末な納屋の前には莚が敷かれて、麥が干されてゐる。

喜作の母親のおたきが埃だらけの顏して、ヨボ〱した足取りをして出て來る。納屋への途をつくるやうに、莚をどけゐるところへ、仲吉が荷車を率いて入つて來たので、吃驚する。

仲吉　(車をおろして)伯母さん、この頃は丈夫になつたのけえ。

おたき　丈夫でもねえけんどな(仲吉の方をじろ〱見て)仲さんその車はどうしたのだな。

仲吉　(汗を拭きながら)これはの……お前さんところの麥だから、納屋の中へしまつときなさい。車ごと途中に落ちとつたから、おらが拾つて來て上げたのだ(あたりを見て)喜サ公はまだ歸つて來ねえんだな。

おたき　喜作はさつきお客に伴つて話をして、道々に野良へ行つたのだ、おらに何つてきたかおらには……だか……

仲吉　おら別段喜ィ公に頼まれた譯ぢやねえが、お前んとこの姿だと思つたから、自分の仕事を退つちやおいて、わざ〳〵此處まで運んで來たのだ。お前とこで入らねえのなら、おらの家へでも持つて行くべさ。

おたき　仲さん何を云ふだす。お前いたづらをしたのだな。喜作が此方へ歸つてる間に、誰れにも斷はらないでこの車を牽いて來たんだな。さうとは知らないで喜作は心配して、車を捜してゐるだらう。仲さんも餘計なことをする人だ。

（忌々しさうに云ふ）

仲吉　こんな暑い日に人の車を牽いて來てやつて怒られちや割に合はねえよ。

おたき　勝手に惡ふざけをしといて、割に合ふも合はんもねえもんだ。お前、早く行つて喜作に知らせて見んなよ。心配してゐるだらうに。

仲吉　おらいやだ、腰つ骨がだるくなつて、おら一足も歩くのがいやになつた。ちつとべい此處で休まして貰はふ。（道の端へ腰をおろして）おらは何だつて、頼まれもしねえのに、こんなものを引張つて來たどか。腹が減つて腰つ骨がだるくなるばかりで、効のねえことだつた。おら、何が面白くつてこんな重い者を引張つて來たどか。

おたき　お前もいゝ歳をして、性の惡い人困らせをするもんぢやない。餘計な口叩かねえで、早く行つて知らせて見んなよ。

仲吉　だつて、おら一足も動く氣になれねえから爲様がねえや。フントにおら、あにが面白くつて、自分の姿拋つちやらかして人の姿運んで來たどか。おらにおらの量見が分んねえだ。

おたき　早く行かねえかよ（怒を現はして、仲吉の背をつゝく）わしや足が丈夫なら、自分で行つて來るんだが。

仲吉　知らせに行きたけりや、お前行つて來ねえな。おら此處で留守番してゝ上げよう。腰つ骨がだるくつても、鴉を追拂ふことくらゐ出來らあな。

おたき　おのれ、わしを揶揄ふのかよ。この老人を摑まへて嬲り物にするんだな。

仲吉　糞面白くもねえ。皺くちや婆あを摑へて嬲つたつてあにが面白かんべい。

おたき　この野郎、餘計な頰桁叩かねえで、サツサと歸つて行きやがれ。

仲吉　歸るなと云つたつて、いつまで此處にゐるものか。草臥れが癒つたら、お前に云はれなくつても、歸つて行かあ。（落着いて云ふ）

おたき（氣味の悪い目付で相手を睨んで、やゝ穩やかに）小よしが喜作の嫁になつたと云つて、逆恨みにおらの家を恨んでるんぢやあるまいな。

仲吉　恨んでるかも知んねえ。おら今日は、自分で自分の量見が分んねえだから。……自分の麥抛つちやらかして他人の麥運んで來て、あにが面白いだか。（獨言のやうに）喜サ公が腹を立てゝ麥つ束を抛つちらかしたのか、あんだつておらに面白かつただか

おたき　おのれ、逆恨みに人を恨んで、こんないたづらをするんだな。

麥振棒を振上げて伴す。仲吉は平氣な態度でその棒を奪取つて抛りだすとゝもに、ふと勢ひづいて來る。

仲吉　伯母さん、見てゐなさい。喜サ公はこんな風にあばれてゐたゞよ。面白かつぺい。

仲吉はさう云つて、麥束を取つては左右へ投げる。おたきが憤怒の相をしてゐるのにも構はないで、やがて衕車を

引き返す。

仲吉　こんなことして面白いいだ。

おたき（帳際から恐怖に顫して）仲さん、お前ぁ狂つたのけえ。

仲吉　おら、喜サ公の眞似したゞけだ。だけどこんな眞似したつて面白かあねえ。……伯母さんは氣を取つてくんろ。

人間は何したら面白いだか知つてるだらう。教へて見んなよ。

おたき　お前のやうな人を相手にしちやゐられねえだ。おつかねえ〱（足を引摺つて出て行く）

仲吉　伯母さんどこへ行くだ。（と大聲で呼掛けたあとで獨言のやうに）誰れか呼んで來ておらを追拂はうと思つてゐるだな。勝手にしろよ。――

　おたきの出て行つた方とは違つた方から小よしが姿を現はす。仲吉はそれを見つけて急にニコ〱した顔する。

仲吉　お前一人で歸つて來たのか。

小よし（沈んだ顔して）わしはさつきから、お前のすることを見とつたのだ。お前も馬鹿な眞似するでねえか。

仲吉　それで喜サ公はどうしたゞよ。

小よし　どうしたゞか、わし知んねえけんど。仲さんは早く歸つて見んなよ。お前が何時までも此處にゐちや、わしが困るだから。

仲吉　なぜ、おらがゐちやいけねえ。……おらがお前と話をしてゐたのが喜サ公の氣に入らねえのか。それなら、おらの方で云ふことがあるだ。（ふと高い聲を出す）

小よし（慌てゝ相手の聲を止めるやうな手振りをして）靜かにしてお呉れ、後生だから。これで今日は早く歸つて呉

んな。話があるなら、外の日にわしが聞いたげる。こんな所で愚図々々してるとお前のためにもならねえだ。

仲吉　おらあ、誰れをも恐れることねえけんど、おらがゐてお前が困るなら歸ることにしよう。畝へは行かないで家へ歸つて、ひとりで寢るとしべい。いくらお天氣がよくつても、おら今日は働く氣ちつともねえだ。……どりや出掛けべいか。

仲吉は大儀さうに立上り、小よしが散らかつてゐる麥束を仕末して納屋の中へ運ぼうとしてゐるのを顧み／＼行きかける。

そこへ、喜作は魚籠を提げて歸つて來る。仲吉を見ると意外にも笑顔をして

喜作　茶でも飲んで行きなよ。ちよつと話したいことがあるだ。

仲吉（不思議さうに）おらに話があるんだそ。

仲吉は足を留める。小よしも不思議さうに二人の方を顧みる。喜作は縁の端へ腰をおろす。仲吉も側へ腰をおろしながら、魚籠をのぞく

仲吉　沢蟹だな。お前が取つて來たのか。……ピチヤ／＼跳てやがらあ。

喜作　親造に貰つたんだが、おら料理するのがうるさいから、慾しけりやお前にやらう。持つて行きな。

仲吉　貰つて行つてもいゝのけえ。呉れるのならおら遠慮はしねえだ。貰つて行くべい。

喜作　持つて行きねえ。……だが仲吉。おらはお前を惡く思つたことはねえだから、お前もおらを惡く思はねえやうにして呉れろよ。

仲吉　話したいことゝいふのはそんなことか。おらもすき好んで人を惡く思ひやしねえよ。だけど喜サ公、人を惡く思

つまらんと思ふと自分で[illegible]になられえ[illegible]……
だが、おら其れに嫌はれてもいゝだ。

喜作　おらはお前を憐つこやしねえよ。

仲吉　おや、おらと仲よしにでもなりねえな。……だけど、喜十公、さつきお前が麥つ束を地べたへ叩きつけてゐたのを見て、おら小氣味のいゝ思ひしただよ。おら父ちやんに追立てられて、仕様事なしに野良へ出るには出てみたけんど、な。おら野良の仕事なんぞしたかねえだ。麥を作つていくらになるだよ。田圃つくろことおらには面白くねえだ。こんな物を作るために何時までも苦勞な思ひさせられると思ふと、おら、麥つ束を地べたへ叩きつけて踏んでく踏躙つてやりたいと思ふだよ。お前さう思はねえか。

喜作　貴様は呆れたことを云ふ。百姓が麥米を粗末にしてどうするだ。罰が當るだよ。

仲吉　だつて貴様も麥つ束を地べたへ抛り出して車をひつくら返してゐたぢやねいか。罰が當つてもいゝのか。

喜作　(極りの悪さうに)あの時や魔が差したのだ。おら悪いことしたと後悔してるだよ。今日はお天氣はいゝし、いゝ音信が聞かれたのだから、晩まで一生懸命に働いてあしこの麥だけは刈つちまほふと思つてゐたのに間が悪くつてあんな狂人見たいな眞似をしたゝめに、氣が腐つて仕事する元氣もなくなつていけねえ。おらの身に罰が當つたのだよ。

喜作はさう云つて、ふと小よしの方を顧みる。小よしは仕事の手を止めて、麥つ束の上に腰をおろして、浮かぬ顔して二人の方を見てゐる。

仲吉　いゝ音信つて何だな。金になることけえ。おらの所へは、昔からいゝ音信なんぞ來たことねえだよ。

喜作　お前は獨身だから、百姓がいやなら東京へでも何處へでも稼ぎに出掛けたらいゝぢやねえか。町へ行きやいゝ稼ぎが出來ると云ふでないか

仲吉　先つき小よしさんも、おらに東京へ行けと云つとつた。二人でそんなことを勸めるのは、おらがこの土地を出て他所で暮すのが、お前達のために都合がいゝのか（あたり前の口調で云ふ）

喜作（ドギマギして）そんなことがあるものかよ。お前のためを思つて云ふんだ。

仲吉　おら、東京へも何處へも、町へ行つたことねえから分んねえけんど他所の土地へ行くのはおつかねえだよ。

喜作（笑つて）臆病だな貴樣も。今日の世に、日本中何處へ行かうとも、おつかねえ譯ねえぢやないか。まてに稼ぎさへすりや、誰れにも意地めらりやしねえや。

仲吉（考へて）……お前に云はれたゝめぢやれねえが、おら、そのうち他所の土地へ行く氣になるかも知んねえ。……だけども喜サ公、おらこの村を出る時にや、一つ胸の晴れるやうなことをやらかして出て行きたいと思ふだよ。

喜作　どんなことをしたら貴樣の胸が晴れるんだ。人に嫌はれることをすりやしめえな。

仲吉　どんなことをしたら、おらの胸が晴れるだか、われとわが身で分らねえだ。おら、これから家へ歸つて、この泥鰌を料理して酒を飲んでよく考へて見べいよ（ふと氣がついたやうに）今から家へ歸つて酒なんぞ飲む譯にや行かねえ。おらの父ちやんは頓せいだからな、日の高いうちから、おらに氣儘をさせときやしねえだよ。……だからよ、喜サ公、お前の家で飲まして見れねえか。おらこれから料理をして自分で酒も買つて來るだ。久振りでお前と一しよに飲んでもいゝだよ。……お前んところにや親爺がゐねえからいゝ

喜作　おらは今から酒なんぞ飲んぢやゐられねえ。

すのもいふたな[illegible]

仲吉（二人の話には[illegible]ないで）お前といふたが、おら一人で戻つて一人で[illegible]だ[illegible]

仲吉は無言で去つて納屋の横から入つて行く。

小よしは稍々手足をのびく\させたやうな態度をする。

小よし　お前はあんな狂人染みた眞似したあとで何處へ行つてゐたよ。

喜作　おら、一人で眞暗の伯父んとこへ行かうと思つて、よつぽどそつちへ行きかけたのだが、幾造に逢つて話をしてるうちに、家の事が氣になつて戻つて來たんだ。

小よし　幾さんがなぜ泥鰌なんぞ與れたのだい。

喜作　おらに頼みていことがあると云ふんだ。

小よし　あの娘を預つて與れと云ふんだらう。子守にやつてもよく勤まらないさうだし、家に置いちや、繼母との折合が惡いだから、わしの家で使つてくれと云ふんだらう。それで、お前承知したのけえ。

喜作　ハツキリ承知した譯ぢやねえ。

小よし　なぜキツパリ斷らねえのだよ。そんな氣が弱いことでどうなるだ。……それに、折角貰つた泥鰌を仲さんに遣るつてことがあるものか。

喜作　おら仲吉を怒らせたくねえだから。

小よし（嘲笑ふやうに）……お前のやうな甲斐性無しつたらありやしない、お前は仲さんの前で頭の上られねえ譯があるのけえ、

喜作　そんな話はねえ。だけど、あんな男は成べく怒らせねえやうにした方がいゝんだ。おら人と喧嘩することと大きらひだから。

小よし　そんなに氣の弱いくせに、よくあんな亂暴な眞似が出來たものだ。わしおいくらゐなことで驚かさりやしねえだよ。

喜作（しをれて）おら、馬鹿な事をしたものだ。後悔してるだ。誰にも云はねえやうにして吳れろよ。

小よし　馬鹿らしくつて人に話せるものかい。………（深く感じてゐるやうな口調で）わしはな、喜サさん。仲さんがさつき云つてゐたことが本當のやうに思はれてならねえのだよ。寒さ暑さにいぢめられて田圃作つたつて、苦勞の甲斐がねえと、仲さんの云つたことは嘘でねえと、わしには思はれるのだ。………人に勸めるばかりが能ぢやねえ。お前も、こんな姿つ東は泥溝へでも叩込んで、東京へでも行かうつて氣にならねえのけえ。

喜作　おら一人で東京へ行けつて云ふのか。

小よし　女を連れてつちや手足纒ひで、存分な稼ぎが出來ないだらうから、わしや老母は抛つといてお前一人で行つたらいゝぢやねえかな。

喜作　行け〳〵とやたらに勸めても、當てのねえのに東京へ行つてどうするだ（不機嫌さうに云ふ）それよりも眞壁の伯父の家へ、二三日うちに行かなきやなんねえだよ。

小よし　伯父さんなぞ何が當てになるものか。當てのない東京へ行くのが馬鹿なら、當てにならない伯父さんの家へ行くのは、なほの事馬鹿だ。

喜作　あにが馬鹿だ。（腹立たしくなるのを堪えながら）おらを他所の土地へ稼ぎに行かせて、お前はあとで何して暮

す[illegible]のに。

小よし　二人おいてて稼いで[illegible]にならねえ、女一人でどうして稼げるもんでねえ[illegible]

もの。さへ[illegible]病がチク／＼攻めたてられるだ。

喜作　だからよ。身體の弱いお前や、歳を取つた父母をおいといて、おら一人で他所へは行かれねえぢやないか。（立上つて）こんな無駄な話してるうちに日が暮れらあ。どりや一つ働きして來べいか（つとめて元氣よく笑つて、小よしを促すやうに）おらの家は仲公の家とはちがつてるで、何も苦にすることはねえだから、餘計な事思つて迷ふには及ばねえだ。（奥へ向つて）おら達は野良へ行つて來るだよ。料理するのはいゝが、家のなかを汚さないやうにして呉れろよ。

喜作は荷車に手を掛けて出掛けようとしたが、小よしは動かない。

喜作　おい、出掛けねえのか。

小よし黙つてゐる。

喜作　お前はおら一人を働きに出しといて、仲公と酒でも飲まうと思つてるのか。（怒を溜めながらも激して云ふ）

小よし　わしがいつ酒を飲んだだ。

喜作　だからおらに随いて來いよ、荒い働きをさしやしねえだ。

小よしは不承々々に喜作に随いて行く。喜作は、荷車を挽きながら、仲吉のゐる臺所の方を振返つて出て行く。

車の音が消えると、仲吉は納屋の横手から顔を出して二人の後を見送つたが、ふと、驚いて納屋の中へ隠れる。

七造が入つて來て、あたりを見廻しながら舞臺を通つて納屋の横手から出て行く。やがて再び入つて來て、そこへ、

子供を脊負つて來合せた子守に向つて、

七造　お前は仲吉が何處にゐるか知らねえか。

子守　わし知らねえだ。仲さんがどうかしたのけえ。

七造（心配さうに）この家へ來てあばれたつて、ここの婆あがおらに怒つてゐたのだが、何處へ行きあがつたのか。

子守　仲さんはこの頃は、小松屋へよく遊びに行つてるだよ。この間わしがあしこへ寄つたらこの子に飴を買つて呉れたゞよ。

七造　ぢや、小松屋へ行つて見べい。お前も仲吉を見付けたら、おらに知らせに來て呉れろよ。

子守うなづく。七造は出て行く。子守が納屋の横手から家の方へ行かうとするところへ、仲吉は納屋から出て來る。

子守　仲さんは此處にゐたのけえ。（不思議さうに見る）

仲吉　お前はうまい事を云つて父ちやんを歸して呉れたな。これから一杯やらうて所へ親爺なんぞに來られてたまるものぢやねえ。……お前が此處へ來たのは丁度よかつた。川口屋へ行つて、おらに頼まれたと云つて酒を二合ばかり取つて來て呉れろよ。お前の使ひ賃はあとで屹度やるだから。

子守　ホントに使ひ賃呉れるのなら、酒を買つて來てあげてもいゝけんど、（奥を覗いて）喜サさんも誰れも家にゐるねえのけえ。

仲吉　誰れもゐねえだ。おらが留守番してるだ。……喜サ公に何か用事があるのけえ。

子守　直ぐに返事を聞いて來いつてわし頼まれて來たのだけど、困つたなあ。

仲吉　どんな用事だ。おらに云つとけよ。

子守　小遣に云つちや[illegible]へい

仲吉　なに悪いもんか、おら喜ィ公に聞きたいことがあるだから、おらに云ふのは喜ィ公に云ふも同じことだ。

子守　家のお旦那が、今夜喜ィさんと主婦さんに御馳走するから仕事片付いたら、晩飯は喰はねえで、二人共直ぐに來て呉れと云つてゐたよ。

仲吉（忌々しさうに）何の因縁があつて、萬屋が喜ィ公夫婦に御馳走するだ。

子守　お旦那は喜ィさんを好いてゐるだから。

仲吉　喜ィ公があしこのお氣に入つてゐたつても、晩あまで呼ばれる譯あるめえ。

子守　譯があつてもなくてもお前の構つたこつちやないよ。

仲吉　おら、萬屋に借金拂ひするために、牛の子をみんな取られたよ。あれがみんな育つてゐたら、今時分でかくなつて、おらもこの近在でいばつてゐられたのだ。西川の原はおらの牛を放飼ひにするにいゝと、おら思つてゐたになあ（子守の笑つてゐるのを見て）おらが牛の話をすると、お前も笑つてゐるな。……おらが牛の事を云ふと、みんなが馬鹿にしやあがる。

子守　牛や豚はきたねえから、わしきらひだよ。この間この子の飲んでる牛の乳の殘りを、わし飲んで見たけれど、變な味がしてへどが出さうだから、二度と飲まうとは思はねえよ。

仲吉　その餓鬼の方が牛の子よりや汚いぢやないか。……早く酒を買つて來うよ。

子守　おや、使賃を先へ呉んな。

仲吉　今は持つてゐねえや。おらは嘘は吐きやしねえ。大丈夫だ。

子守　當てにならないけど、行つて來て上げようか。

　子守が行きかけると、擦違ひに、寅太郎（仲吉よりも一層淺ましい男。垢染みた單衣を着て、風呂敷を脊負つて下駄を穿いてゐる）入つて來る。仲吉は不思議な人を見るやうな目付してその男を見る。子守もちよつと振返つて、不思議さうにその男を見てから出て行く

寅太郎（仲吉に挨拶して、少し大柄に）お前さんは喜作さんだね。

仲吉　……（こいつ變な奴だといつた風で相手をマヂ〱見ながら默つてゐる）

寅太郎　わしは眞壁の寅太郎だよ。ここの伯母さんに會へば直ぐに分るんだから、さう云つてお呉れ。今伯母さんや伯父さんはゐないのかい。

仲吉（無愛想に）ゐないよ。

寅太郎　死んだのぢやあるまいな。

仲吉　死にやしねえ。

寅太郎（莚の上へ腰を下して）わしも今日は長途を歩いて疲れた。……今日はお前の外にや誰れもゐねえのか。

仲吉……

寅太郎　わしは親爺と喧嘩をして家を飛出してから、大阪へ行つて神戸へ行つて、荷上人足にもなつたし、いろんなことをやつたよ。それから朝鮮へも渡つて二三年藥賣りをやつた。一時は小金が出來たので、自分で小さな店を出したこともあつたのだが、火事に會つて元も子もなくしちやつたのでね。また日本へ戻つて、手當り次第にいろんな事をやつたのだ。たまにや運が向きかけたこともあつたが、よくなりかけると災難に會つて、子供にや死なれる、晩には

[illegible]お前には[illegible]くの[illegible]になつ[illegible]
[illegible]た、[illegible]へ[illegible]、それまでは[illegible]歸れまいと思つてゐたのに、[illegible]お前の戸へも土産一つ持たないで來ることになつた。家を出てから、二十年にもなるんだから、[illegible]な。……村へ歸るまでに、お前に家の様子なんぞ聞いたり、顔の垢を落して小ザッパリした身なりになつて歸ることにしようかと思つたりして、此家へ寄つたのだよ。

仲吉　眞壁は今も昔と同じことだ。お前は二十年も方々で働いてゐたと云つてゐながら、懐ろへ札の束を捻込んでもゐねえで、そんなざまをして、村へ歸つて來たのか。眞壁なぞへ歸つたてちつともいゝことねえだ。そんな無駄なことするよりや、これから、も一度出直して大阪へでも朝鮮へでも行つて、もう一稼ぎして來るがいゝ。

寅太郎　お前はわしにもう二十年働いて來いと云ふのかい。わしにはそんな根氣はないよ。もう二十年經つたらわしは六十になるんだ。……わしが眞壁の家を親爺と大喧嘩をして出た時にや、お前はまだ五つか六つだつたから、わしの顔は覺えてゐないだらうが、お前の兩親はわしをよく知つてるよ。わしが會つたら喜んで呉れるにちがひない。

仲吉　根氣がねえと云つても、お前はそんな大い身體をしてるぢやないか。腕つ節も強さうだ。

寅太郎　わしは腕一つで世を渡つて來たんだからな。力業なら何でもやつて來た。親爺と喧嘩した時は口の先の言合ひばかりだつたが、他所へ行つちや口の喧嘩だけぢやすまないよ。わしの此の腕は、三人や五人の生命を取つてるんだ。わしの身體に生疵の絶えない時もあつたのだ。(自慢さうに云つて脛をまくつて見せて)この傷はな、わしが十年前に神戸で五六人のゴロツキを相手に大喧嘩をした時の傷跡だ。出刃で抉られたのさ。

仲吉　よつぽど痛かつたらうな。お前はそんなひどい目に會ふほど他所の土地で苦勞してゐたのに、金は儲らなかつ

たか。……金を儲けれえで、そんなざまをして村へ歸つたつて、誰れもお前を相手にすりやしねえよ。……おらも他所の土地へ行くことは止しにしべい。お前のやうな身體してゐても金にならねえのなら、おらも駄目だ。二十年の間も遠い所へ行つて稼いでも、お前のやうなざまをして歸つて來なきやならんのなら、おら行きたくねえだ。

寅太郎（不機嫌らしく）わしもお前の身内の一人だよ。久振りに歸つて來たものを冷かすものぢやないよ。

仲吉　お前が眞壁へ歸つたつて、みんなに馬鹿にされるばかりだ。この家へ泊つて皺くちやの婆あに會つたつて詰らねえや。おら悪いこた云はねえ。今に酒が來たら飲ませるから、一杯飲んで、どこへでも出て行きねえな。

寅太郎　さうか（憤怒と失望を現して）お前はおれの零落れたのを見て馬鹿にしてるが、わしには親爺がまだ生きてる筈だ。いくらわしが親不孝をして來たにしても、親爺だけはわしが生れ故郷へ戻つて來たことを喜んで呉れるにちがひないよ。

仲吉　うまいことを云つてるな。だけど親爺だつて當てになりやしねえ。おらの親爺はおらと喧嘩なぞしねえけんど、何云つても當てにやならねえ。散々親を蹴つて歸つて來るなんて、御前も御苦勞さまなこんだ　親だつて兄弟だつて、誰れがお前を相手にするものか。

寅太郎（絶望した態で）吉作（と呼掛けて、凄みを帶びた目付で相手を見て）……ぢやお前はわしが看守を叩斬つて監獄から逃げたことを知つてるんだな。十年の餘も北海道の懲役へやられてひどい目に會はされてたことを知つてるんだな。それでわしを寄付けまいとしてるんだな。眞壁の親爺からもわしを寄付けるなと云つて來たのか。……それならそれで、わしにも覺悟があらあ。……わしは、どうせ明日までこの娑婆にゐられる人間だかどうだか分らないんだ。……監獄にゐるうちに、親爺たの身内の者たのが懐かしくなつて、ならないものだから、どうせ監獄で歳を取つて死ぬる

のたら、思ひ切つて身體だけで逃出して、一日でもい[illegible]
生れた家の中で疊の上で死ぬ事に行ったけのや、せめて一遍は、自分の生れた家で一晩[illegible]たいと思つたんだ。
それほどに思つて來たものを、お前はわしを一足も家へ入れまいとするんだな。[illegible]を言ふといふ[illegible]なんだらう。……
……よし、それならわしにも覺悟があらあ。わしは、もう一度監獄へ追込まれてまで生きてゐやうとは思つてゐないんだ。

仲吉はいよ／＼不思議な人物を見てゐるやうに見てゐる。

寅太郎　わしは警察でも知つてゐない惡い事をいくつもやつてゐる。お前なぞ、一生地べたの何を掻ぐより外に能のない人間は、夢の中にでも見たことのないやうなことをやつて來たのだ。土ほぜりをしてケチ／＼溜めたお前たちの端た金を貰ひに來たのぢやないぜ。勘ちがひするな。……一生に一度の人情に負けて、北海道から此處まで一文錢の緡の目を辿つてやつて來たものを、みんなして、除物にしやがるのなら、わしの方でも量見があらあ。どうせ地獄に墮ちたわしの身體だ。

仲吉　（面白さうに）覺悟があるの量見があるのつて、どんなことだ。云つて見ねえな。十年も懲役に行つてた人間の覺悟を、おら聞いて見たいだよ。

寅太郎　耳で聞かなくつても目で見せてやらう。

仲吉　面白いな、見せて吳んな。

寅太郎　……

獰猛な面相をして、突如として仲吉に飛びついて、捻伏せようとして・・

寅太郎　聲を立てると生命がないぜ。

仲吉　聲は出されぬ。（跳起きながら）おらを殺すのか、お前の覺悟か。馬鹿にしてやがらあ。

寅太郎　生命は取らんから安心しろ。……監獄でわしが苦勞してゐたのを、貴樣だちはいゝ氣味だと思つてゐやがつたのだな。貴樣に最初會つたから、貴樣がわしの身内の惣代だ。わしのすることを見てあとで身内の奴にさう知らせろ。

再び仲吉を捻伏せて、手拭で猿轡（さるぐつわ）をくはせる。仲吉はさして抵抗しない。

寅太郎は仲吉を引き摺つて納屋の側へ連れて行つて、そこに落ちてゐた繩ですばやく巧みに彼れの手足を縛つて、柱にしばりつける。

寅太郎　誰れかが歸つて來て解いて與れるまで、ちつとの間そこで我慢してゐろ。わしはもう娑婆へは歸らないから、親爺なんかにさう云つとけ

仲吉うなづく。

寅太郎　わしはこれから貴樣の家のもので、わしの役に立つものがあつたら持つて行くから、あとで何か無くなつてゐたら、わしが持つて行つたのだと思つてゐろ。錢一文貴樣に貰つて行くんぢやない。わしの腕で取つて行くんだから、さう思つてゐろ。

仲吉うなづく。

寅太郎　口惜しいだらうな（惡戲的な笑ひを浮べて見る）。

仲吉首を振る。

寅太郎　わしが死刑になつたと聞いたら、みんなして喜べよ。わしの面はこれから何千年立つてもまた見られないんだから、よく見て置け。日本中を荒らした面だせ。

[illegible]

[illegible]にする。

やがて、千作お[illegible]を提げて入つて來る。何氣なく[illegible]の側まで來て吃驚[illegible]を押[illegible]して出て行く。

おたきが入つて來る。仲吉の側まで來ると吃驚して倒れかける。やうやく元氣を出して

おたき　仲さんは何をして縛られた。誰れがお前を縛つたよ。そんなことするからそんな目に會ふだ。おつかないおつかない。

繩を解いてやらうとはしないで、小氣味よげに見てゐると、仲吉は、目顏で、外へ出て行けと云ふやうな態度を知りに見せる。早く出て行かなければ怖いぞといふやうな態度を見せる。おたきは何となく恐ろしくなつて出て行く。

仲吉は家の方へ氣を留める。

やがて、喜作夫婦が子守やおたきと一しよに入つて來る。

喜作　仲吉、誰れにそんないたずらされたど。

子守　さつき、見たことのない人が訪ねて來たんだよ。

みんなが恐怖を現はしながら見てゐる。喜作は仲吉の側へ寄つて、繩を解く。仲吉は解けかゝつた繩を振落し、猿轡をも取つて、獨り面白さうに笑顏をする。

小よし（心配さうに）仲さん、氣をたしかに持ちねえな。縛られて笑ふちうことがあるかよ。

仲吉　おら、さつきから可笑しくてなんねえだ。おらを縛つた奴はな、ふとりでえらさうなこと云つてゐたが、ひだるかつたせいか、見掛けほど力のある奴ぢやなかつただ。あんな奴に勝手な眞似をさせねえでもいゝんだけど、何する

だか、あいつに、好きなやうにさせて見べいと思つて、おらわざと、力を出さねえで大人しくしてゐたのだ。……たどおらの縛られてる間に泥鰌汁を喰はりやしないかと思つて心配してゐたどよ。鍋へぶち込んどいた泥鰌が煮過ぎるぐらいよく煮えてゐたどらうから。

喜作　全體此處へ訪ねて來たつていふ奴は何處の誰れだよ。

仲吉　おら、名前は忘れたがの。お前の身内で北海道の監獄へ十年も入つてた奴だ。自分で大强盜のやうに云つてたが、大强盜だか知んねえが、力は强かあねえ。

おたきと喜作は驚いて顏を見合せる。

小よし　此處の身内で監獄へ入つてる者なんかある譯ねえだよ。贋壁の寅さんとかど何十年も行衞が分らんと聞いたことはあつたけれど。

仲吉　その寅だよ。寅太郎だよ。放火でも强盜でも人殺しでも、悪い事のありつたけをやつて、十年も北海道の監獄へ打込まれてゐたのださうだが、今度見張り人を叩切つて逃げて來たと云つてゐた。お前なんぞあいつに會はねえでよかつた。掛り合ひをつけられたらたまらねえよ。

みんな呆れた顏をする。

おたき　それで寅太郎は何をしに此處へ來たと云つてた？

仲吉　お前の家のものを持つて行くと云つてたど。……あんな奴には慾しい者はやつときねえな。

おたき　わしがゐたら、あんな奴に麥つ粉一杯取らしやしねえに。何を盜んで行つたどか。

アタフタと家の方へ行く。喜作も心配さうにして隨いて行く。子守も興味をもつて隨いて行く。小よしだけは何か

小よし（疑はしげに）仲さん、お前が云つたことは本當なのけえ。

仲吉　嘘つてらあな。おら嘘を吐いたことはねえだ。（ふと可笑さうに）おら嘘を吐きやしねえけんど、あいつはおらを喜サ公だと思つて縛りやがつたのだ。おら默つてゐて喜サ公の代りに縛られたゞよ。あの時は俺りの心で、喜サ公をふん縛つて腹癒せをしたつもりになつてゐだと思ふと可笑しくつてたんねえ。あいつ口で云ふほどなえらい野郎やあやれえにしても、いく度も人の家へ強盜に入つて人を縛つたことがあると見えて、縛り工合がうめえぜ。おらにや眞似も出來ねえ。

小よし（晴晴しい顏付して、獨言のやうに）眞壁の伯父さんといふ人は剛慾だから、一人息子がそんなになつたんだらう。何十年も行衞が知れねえなんて、家の老婆はよく譯を知つてゐたから、わしに隱してゐたんだな。……仲さん、寅さんといふ人はどんな顏してゐたけえ。

仲吉　おらのやうな顏していたゞ。（眞面目で云ふ）牢へ入つとつても喜サ公より立派な顏してらあ。

小よし（笑ひながら）お前は自分の顏がよく分つてゐるのかよ。

仲吉　そりや分らねえけんど、あいつの顏見てゐると、そんな氣がするだ。だけど、あいつおらよりは力が弱いだよ。

喜作あはたゞしく出て來て、二人の樣子に注目する。

喜作　簞笥を開けて、おらの絣の單衣一枚持つて行つただけだ。そのくらゐなことで濟みや何も氣を病むことはねえだ。おらの心祝ひに、一杯飲まうか。仲さんとも久振りだ。今日はおらの家で、機嫌よく飲んで晩餐も食つて行けよ。……寅の奴が來てこのくらゐなことで濟みや、酒の一升くらゐ奢つたつて惜かあねえ。

小よし　眞壁の伯父さんが、せつせとお前を呼付けたのも、その寅さんとかのためなんだらう。お前のやうにいい氣になつてると當てがちがふよ。わしが云はないこつちやねえ

仲吉　ちや、おら遠慮しねえで御馳走になるべいか。（二人の何方へ云ふともなく）人にふん縛られるよりや、人をふん縛つた方が面白いにちげえねえな。（麥束を見て）そんな麥つ束は泥溝んなかへでも叩込んでしまへだ。麥刈つて何が面白いだ。

そこへ、七造が入つて來る

七造（仲吉を見て）またこんな所へ來て遊んでるのか。老人に働かせて若い者がノラ／＼してるつてことがあるか。……さあ來いよ。すぐに來らといふのに（腹立たしく云ふ）

仲吉　駄目だ。おら此處で御馳走になつて行くだ。

強く云つて家の方へ向つて行く。七造當惑の様。小よしは詰らなさうな様。

喜作（七造に向つて）今日は仲さんに骨を折らせたから、おら一杯呑らうと思つてるだ。お前も遊んで行きねえな。

七造　お前がそんなに仲吉と仲よくなつたのか、不思議なこんだな。（訝しげに云ふ）　（愁）

（三）

その翌朝。ようやく薄明るくなつた時分。

喜作の家の裏口。井戸端で小よしが米を磨いでゐる。おたきは東の空へ向つて合掌して、何か口の内で云つて祈つてゐる。祈りが濟むと、

[illegible]

小よし　わしも怖い夢を見て困つたけれどお母も時々溜息吐いてんだでねえか。寅さんのことを心配してゐるだな。

おたき　寅太郎は仲吉の云ふやうな恐ろしい男ぢやねえだよ。何かの間違ひで家へ入つたとつたかも知れないけんどな。仲吉は智慧が足らないから勘ちがひしてるだ。それで餘計な嘘つぱちを世間へ言觸らされちやわしの家でも迷惑するでねえか。

小よし　それは仲さんの云つたことも當てにならないかも知れないけど、寅さんは當り前の人間ぢやあるまいよ。様子を知らないこの家へちよつと入つて來たばかりで、簞笥の奥へ仕舞つてた皮財布のお金まで取つて行つたんぢやないかいな。神業でなけや出來ねえこんだ。わしはこの家の身内にそんなおつかない人間があるとは知らなかつた（皮肉な語調で云ふ）

おたき　わしや喜作が、寅太郎の事をわざとお前に隱してゐたのぢやないから惡く思はねえようにして呉んな。（稍々聲を潜めて）わしは昨夕夜中に考へたのだがの。財布の金まで取られたのは、寅太郎のせいぢやない。仲吉が自分で家の中を捜して、大事な物を盜んで置いて、みんな寅太郎の所爲になすくりつけたのぢやないかと、わし思ふだよ。喜作は氣がいゝから、氣がつかねえで、仲吉の云ふことを一々眞に受けてるだけれど、

小よし（冷笑を洩らして）さう云へば、昨日寅さんが此處へ訪ねて來たといふのも、仲さんの拵へ事で、誰も來なかつたのかも知れねえな。

おたき（苛れて）お前は昨夕から、わしや喜作に當り散らしていけねえ。わしはお前に惡いことした覺えねえだよ。

小よし（興奮して）わしだつても惡いことした覺えねえだ。身體の加減が惡くつても精一杯働いてるだから、誰にも

文句は云はせねえよ。

おたき　（なだめるやうに）誰れもお前にいやな文句を云やあしねえ。仲吉を惡く云つたのがお前の氣に觸つたのけえ、

小よし　仲さんのことなんぞどうでもいゝだ。………だけどなお母あ。欲しい物も食べないで、着たい物も着ないであくせく働いて殘したお金を、二十年も行衞の分らなかつた身内の者に、ちよつとの間に橫取りされちや、この先働く張合ひはないぢやないかな、これからまた二十年も稼いで、僅かなお金でも溜めてゐると、また行衞の分らなかつた身内の男がやつて來て、かつぱらつて行くかも知んねえよ。

おたき　利口なお前に似合はねえこと云ふだの。………昨日取られたお金だつて　眞壁の伯父さんに譯を云やあ、そのくらゐなお金は惠んで與れるだから安心してるがいゝだ。

小よし　みんなが眞壁の伯父さんといふ人を手頼りにしてるだから可笑しい。それほど手頼りになる人なら、これまでにどうかして與れてさうなものだ。當てにならないものを當てにするのには、わしはあいたよ。

おたき　………

何か云はうとして躊躇してゐる。小よしは洗桶を持つて家の方へ行きかけると、そこへ喜作が外から入つて來る。

おたき　寅太郎は昨日どちらの方へ行つたか、見たものはねえのけえ。

喜作　昨日は誰れも氣がつかなかつたらしいよ。いゝ加減な噂してるだけど、見た者はなかんべい。おら、それで安心したゞよ。

おたき　仲吉の云ふことも眞に受けられねえでな。

喜作　どちらにしても、おらの家は災難を免れたゞ。昨日家の者がみんな家にゐないところへ、あの男が來たからよか

つたいだ。　今日おらは醫者へ行つて仕へさんに云ふ事を話して來べい。小よし、お前も一しよに行かねえか。日父さんも身内の者が戀しくなつてるにちがひないよ。

小よし　わし、身體が弱つてるだから行かれないよ。

無愛想に云つて裏口から家へ入る。おたきはそちらを氣にしながら、稍々聲を潜めて

おたき　寅は警察に摑まりやしねえのけえ。どうせ、また摑まつて牢へ入るに極つてゐるけんど、この近作で縛られさへせにやいゝと、わしは思つてるだよ。眞壁では寅のことで警察のしらべが八釜しいんで、お前に内所で相談したいと思つてゐたのかも知れねえだ。あれが盗んで行つたゞけの金は、貳俵からでも取返さにや間に合はねえぢやないか。

喜作　だけど、おら、寅に會はなかつたゝめに生命の助かつたやうな氣がするだからな。（感慨に耽つたやうに）これでおらも厄のがれして、これから先きにはいゝ運が向いて來さうに思はれるだ。

おたき　寅の事をわし等親子が隠してゐたと云つて、小よしはえらく機嫌が惡いだからお前も氣をつけなきやいけねえよ。

喜作（心配さうに）おらも、昨夕その事を氣にかけてゐたゞ。財布の金取られたことよりも、その事を心配してゐたのだ。親爺が死んでお前が長患ひして、今度は小よしの事で面白くねえことがあるやうだと、おらの家もいよいよぶつ潰れるだあよ。おら一人で野良を働くことは出來ねえだから。小よしが家にゐなくなりや、おらは東京へでも行つちまはふと思つてるだ。

おたき　お前は飛んでもねえことを云ふ。わし一人を此處へ殘しといてお前は他所へ行かうと云ふのか。

喜作　そりや今のことぢやねえわな。

母の所を避けるやうに、家の方へ入つて行く。
おたきは家へ入るのを躊躇して、物を案じてゐる顔してゐるところへ、寅太郎が入つて來る。前の森とはちがつて小ザツパリした單衣を着てゐる。「伯母さん」と聲を掛けられて、振返つて見て吃驚する。しかし、周圍を憚つて聲を潜めて。

おたき　お前さんはまだこの邊に居つたのか。（と云つて、怖々相手を見る）

寅太郎　昨夕は此處の納屋を借りて、麥藁の上で一晩寢かして貰つたのだよ。お前には會はないで、昨日直ぐにこの村を立つつもりだつたが、妙なものでね。この家へ寄つたゝめに氣がゆるんだのか、急に長い旅の疲れが出て、どうにも眠くつて溜らなくなつたから、斷りなしで一晩泊めて貰つたよ。それで、今朝は暗いうちに起きて出て行かうと思つてゐたのだが、久振りにいゝ氣持でグツスリ眠込んぢやつて、遅くなつた。……なにお前に迷惑を掛けやしない。その井戸で顔を洗はせて貰つたら直ぐに出て行かう。

事もなげにさう云つて井戸の側へ行く。おたきは怖々相手の顔や衣服に目を注ぐ。

おたき　これからお前は何處へ行くだな。眞壁へ行きやすまいな。

寅太郎　おらの事だから、何處へ足が向くだか。

おたき　眞壁へは歸らねえ方がいゝだよ。わしが頼むだから、眞壁へも寄らねえで、この近在をもウロ〳〵してゐねえで、早く遠方へ行つて呉んな（手を合せて歎願する風をして見せる）

寅太郎　だけど、伯母さん。おれも昨日のおれぢやないから、眞壁間道を暗らしてこの村の中は通れないよ。人に知られちや、お前らにも迷惑を掛けることになるんだ。だから、おれはさつき考へたのだが、麥藁か何かを俥に積んでそ

つ[illegible]

お前おいゝし、お前の家でも邪魔にならないでいゝだらう。

おたき（啜泣して）わしを脅かすやうなこと云つて呉れるな。そんなことして、世間へ知れようものなら、喜作やわしは巻添へを喰つて懲役にやられるに極つてるだ。

寅太郎（微笑して）そのくらゐなことでビク／＼して、お前は年ばかり取つても甲斐性がないね。そんなことでよく世の中が渡れたものだ。おれはな伯母さん、二十年の間隨分いろんなことやつて來たぜ。

おたき（手を振つて）その話聞かないでもいゝ。お前の顔見ただけで、わしにはお前が怖いことしてゐたことが分るだから。……（再び手を合せて）この老人が手を合せて頼むだから、早く遠方へ行つて呉んなよ。……喜作の衣服は着て行くがいゝ。金を返へせとも云はねえだよ。わし、貧乏にしてゐてもいゝだから、穏かに終らせて呉んな。

寅太郎　ぢや、何も頼まないよ。おれだつて地の底を潜ることも空を飛ぶことも出來ないのだから、仕方がない、大手を振つてこの村を出て行から。……何處で掴まるも同じことだ。

井戸の水で顔を洗つて、せい／＼した顔付して出て行く。おたきは一二歩そちらへ寄つてそつと見送つてから、東の空に向つて合掌して口の内で何か祈つてゐる。

そこへ、喜作が入つて來る。

おたき　お前が出て來ねえでよかつた。お前に會つたらどんな面倒なこと云出すか知れねえと思つて、わしは心配でならなかつたどよ。

喜作　……これから毎晩納屋の戸締りはよくしとかなきやならねえな。お前にはまだ云はなかつたが、仲吉が昨夕から

家にゐねえのだつて、七造爺さんえらく心配して方々捜廻つてるだ。おら、さつき寅太郎が出て來たのを見て、仲吉ぢやないかと、ふつとさう思つたのだよ。

おたき（何とも感じないやうに）仲吉が昨夕からゐねえのけえ。……寅が身を隱して村を出たいと云つてゐたが、仲吉なら瓢輕者だから、賴まれりや、倅を率いて何處へでも連れて出たかも知んねえ、

喜作　仲吉は他所の土地へは行きたくねえと、云つとつたが、氣が變つて出て行つたのかも知れねえな。……お母あ、彼奴なぞこの村にゐねえ方が、おらのためにもいゝんだよ。（空を仰いで）今日は麥をみんな刈つてしまはにやならねえ。精を出して、昨日怠けた分を取返さにやならねえ。

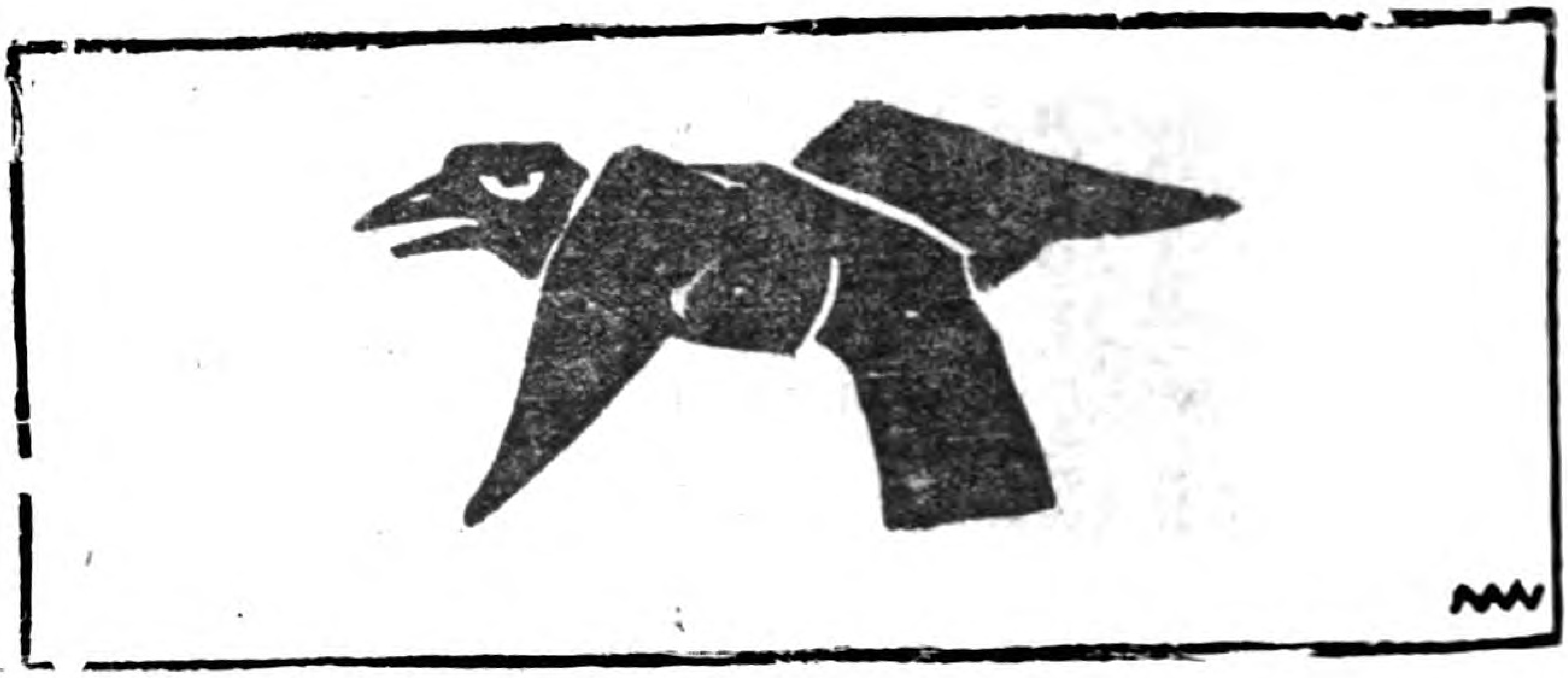
おたき　お前が身を入れて働らいて呉れさへすりや、わし何も云ふことねえだ。

二人の畑は晴々しい。

（幕）

妻を欺く

塚原健二郎



一

西陽の射込む所だけ、くつきりと黄色く染つた疊の上、磯部邦介は、先刻から凡そ二時間も、ごろつと仰向けに寢轉がつたまゝ體を動かさなかつた。恐ろしく重量のある、何かの錘のやうであつた。が眠つてゐるのではなかつた。彼の神經質らしい、頬のとがつた蒼白い顏の中で、双ツの眼だけが、ぶきみな生物のやうにくるくると動いた。

夕方であつた。が電燈に火が入るには少し間があつた。その火の入つてゐない電球と、いやに白ちやけた安ものゝ笠とに、網を張つてゐる蜘蛛の巢の小蟲の死骸のくつしやりと放げつけられたやうなのが、彼の神經を苛立たせた。彼はふと散歩の時通る植木屋の表でみた石膏で造つた人間の首を思ひ出してゐた。何んとか云ふ名高い將軍の首だつた。頭に絹糸草とよぶ、よく夜店でうつてゐる眞青な、二寸ばかりの草が、

頭髮の代りに植え付けてあつた

「何んと云ふ惡趣味だ！」邦介はそこを通る時、いつもさう心に呟やいて、顏を背けずにはゐられなかつた。彼は、人間の神經を足ほど無視したものを、シヤアシヤアと、店先に晒らしておく植木屋の主人に腹を立てた。所が、その次に、通つた時

「よくついてゐる、こんなにうまくついてゐるのは珍らしい」。さう云つて、さもさも感心したと云ふやうに、杖をつつぱつて、曲つた腰をおし立てながら、その店の表に立つて、あかず眺め入つてゐる老人をみた時、彼はとうとう自信を失つてしまつた。

「俺の頭の調子は狂つてゐるのだ。神經衰弱かも知れない。でなかつたとしたら、行人が、わざ〳〵立止つて、賞讃しながら眺めてゐるこの石膏細工を、俺一人が頭の中何を、細い針のさきかなぞでつゝつかれるやうな、ムヅムヅした不快をかんずる理由があらう。だがしかし、この黑い頭の毛の代りに、あの青い糸のやうな草が、吾々の頭からスイスイと、芽を吹き出したとしたら――」

邦介はひそかにその石膏の首を盜み出すことを想像した。又貧しい財布の底を叩いてそこに並んでゐる奴を買占めてやらうかと思つた。けれども、この殆んど感覺といふものを有たない商人は、賣れゝば賣れるほど、より精巧にこのぶきみな首の模形を造り出すに違ひないと思つた時、彼は全く絕望した。邦介は、その後どんな急ぎの場合でも、わざわざ廻り道をして、その店の表を避けることにした。

邦介は、今電燈の蜘蛛の巢にくつついてゐる小蟲の殘骸から、フトそれを連想した。彼は立ち上つた。彼は額の肉を、大きく歪ませ、散かつてゐる原稿紙の反古を拾ひとると、蜘蛛の巢を拂つて、たんねんに電球のしみを拭き初めた。そん

なかつたならば、[illegible]
れてゐる仲間の氣に[illegible]ないやうな時、[illegible]
た。

先刻から、うるさく耳に觸れてくる階下の——それは、ある髪床の二階だつた——階下だ。ボツンと音切れて、四邊が急にひつそりと静まつた。その時机の上にある彼のニツケル製地の懐中時計が四時廿分をさしてゐた。

邦介は十日程前に、家から谷地一ツ隔てた所にある、知合の髪床の二階を借りてそのガサツな六疊の部屋の窓際に机を据ゑてみた。家族の煩雑から遁れるためであつた。

「今度は、きつと仕事をするから」彼は、妻の前で、キツパリと誓ふやうにいつた。

「ほんとに、あなた遊んでばかしいらしつたら、今月もすぐにもう晦日が來ますわ、それに、」

輕い肋膜炎に冒されて蒲團の上にゐる彼の妻は、泣き出しさうな顔をして、哀願をこめた調子でいつた。

「分つてゐる」

その後が、またいつもの愚痴になりさうなのを、邦介はきつぱりと、打切るやうに云つた。

實際、彼はもう長い間頭を壊してゐた。何一ツ仕事が纏らなかつた。時が、日が、恐ろしく退屈でものぐさだつた。生活は、中心を失つた玩具の獨樂のやうであつた。讀書は十行とつゞかなかつた。妻の病氣のことが、月末の數字が、眼の前にある活字の行と、行との間をちらちらと掠めていつた。折にふれての旅行が、知らない街や、野や山や、それらの新鮮な印象が氣持の轉換の上に效果のあることを知つてゐたけれど、彼は旅鞄一つさへ求めやうとはしなかつた。彼は、貧しかつたばかりでなく、總てが臆劫にかんじられたから、彼は滅多に親しい友人すらも訪ねなかつた。彼は寄り

かけた自分の魂の中に沈潜していつた。明るい外光を眼ふみにくい陸のやうに——。彼はこんな様な状態が、廿九と云ふ彼の年齢からであるか、それとも、何か、悪い書籍の影響からであるかを知らなかつた。たゞ、異常な戀愛のつむじ風が、遠い空の彼方からか、それとも直ぐ近くの足下からか、突拍子もなく、突然、爆發力を作つて、捲き起つてきて、彼をその渦巻の眞中においてくれることを私かに待ち望んでゐるやうであつた。がそれとても意識的にではなかつた。——

邦介は、此四五日來、頭の底にへばりついてゐるさや子のことが、ムクツと鎌首を擡げかゝるのをかんじた。彼女の哀訴をこめたまなざしが、澱んだ影の立ち迷つてゐる室の隅々から、ぢつと彼の上にそゝがれてゐた。

「邦さん、滋野に會はせて下さいな、たつた一度、さうよたつたそれだけよ、あなたにだつて、私の心持が分らないことはないでしよ。」

さや子の眼が、さう云つてゐるやうに思へる。

「不可ない。今更あつたつてどうなると云ふのだ——何を求めようとするのだ、あなたは結婚して、子供まであるんじやないか。」

「いゝえ、私滋野から何も求めてやしないの、たつた一度逢ひたいだけなのよ、私、弱い弱い一人の女なのよ。」

「弱い弱い一人の女なのよ。」

このさや子の言葉が、邦介の胸元をひやりと、鋭い自責のメスでつきさした。勿論判つてゐた——充分すぎるほど判つてゐた、が、判つてゐるものは彼女の心持だけではなかつた。さや子と云ふ存在の全部、骨の髄まで、細胞の一ツ一ツまでが判つてゐた。それが、彼女の滋野に遇ふことを肯んじなかつた。

「不可ないつたら」」邦介は、其處に、自分の膝の上に、相手が烈しい情熱に震へる體を放げ出して、泣き崩れてでもる

るやうな[illegible]に、[illegible]

窓を開いた。花時によくある、霞のかゝつた空氣の白濁のやうな、いやにどろつとした空氣が、思ひ[illegible]てゐた。窓下の空地を隔てゝ横はつてゐる、屋根のひしやげた貧弱の仲間にたつた[illegible]から、[illegible]あたりが、蒸されたやうな、生温かい風と一緒に流れ込んできた。

到る處の樹木は、ふつくらとした嫩色の新芽をつけてゐた。それが、生毛に包れた赤ん坊の頬の感觸を邦介に思ひ起させた。

邦介は、地の底からであるか、大空の一角からであるか、それとも、都會の喧騒の眞中からであるか、今、何か異常なものゝ生命が動き出しつゝあるのをかんじた。それに呼應するあらゆる生物の蠢動が初つたのだと思つた。

花觀の歸りらしい、おどけた風態をした幾組かの男女の群が、窓の下を通つた。みんな醉ひしれて、赤いみだらな顔をしてゐた。

邦介は、花が散つて、もう間もなく新綠の季節が廻つてくることを思つた。彼は四季の中で、その季節が一番きらひであつた。單にきらひと云ふばかりではなく、あらゆる生物を情熱のるつぼに入れて、試みずにはおかないやうなこの氣節の前に、彼は一たまりもなく、壓倒されて了ふことを惧れた。それらの日は、如何に懶うく、悩しいことであるか……

邦介が、三四年この方義絶してゐた滋野仙三との友情の掟が、最近ほんのふとした機會から、もとへ戻つた。

三月の中旬のある夕方だつた。滅多に外出したことのない邦介は、その日、ある雜誌社から頼れた短い原稿を書き上げたので、それをもつて日本橋までいつた。その歸りに、須田町から駿河台下の停留所に向つて、かなり人通りの激し

い舗道を、彼は悠然と歩いてゐた。その時だつた。背廣をきた、背のスラッと高い青年が、油でぎら／＼する電車道を、斜めに突切つて、彼の方へ、右側の舗道へ、大股に歩いて來た。

邦介は、それを前の洋品店の飾窓に嵌つてゐる鏡面の中に認めて、はつとした。

「おやつ。」さう云つて、彼が立ち止つて、一瞥を鏡の中の青年の本體に放げかけようとした時、強いて苦笑を噛みつぶした、眼の底のいやに暗欝に光る滋野仙三の顏が、邦介の眼の前にあつた。

「やつ。」邦介は、思はず帽子に手をかけて、相手の色の淺黑い、骨の岩丈な、ませた子供のやうな顏を、穴のあくほどみつめた。

「うゝ」と、仙三は、四年前に九州のN村で一緒に暮らしてゐた頃と、少しも變らない、憤つてゐるのか、喜んでゐるのか、はつきりしない調子で答へた。

「こいツア珍らしいや、何處かでコーヒーでも飲んで話さう、ね、可いだらう。」邦介は、意外な滋野との邂逅に、上づつた昂奮にかられながら、疊みかけた。

「あゝ。」滋野が、率直に答へた。

一分の後、邦介は、四年前の友人と、狹い舗道を肩を竝べて歩いてゐた。が、矢張り不可なかつた。さや子――滋野の同棲してゐた――女を中心にした、その頃の二人の立場が、まざまざと冷靜に返へりかけた頭に映つてきた。瞬間、どつしりとした、重い障壁が、二人の間に落ちかゝつてゐた。長い間、頭の内部で挑みあつてゐた二ツの影像――親友としての滋野と、もう一ツの、彼の唯一の女の友達を、さや子を、深淵の底に蹴落した滋野と――が、突如、現實の世界に姿を現して、彼の傍につゝ立つてゐた。敵か味方か、邦介は話しかける前に、それを見究めるべきだつた。

一いう。東京へ出て來ない、」[illegible]
きら林さできいた。
「去年の春。」滋野は、一寸の間言ひ淀んだ。
「訪れようと思つてゐても、ひよつとさや子に遇ひさうな氣がするんで、つい――矢張り、君の所へくるかしら。」
「お、時々はね、あの人も他に行く所もないんだらう。」
自分では、何んの成心もなく喋つてゐるつもりだつたけれど、妙に反抗的な氣持が、會話の上に働きさうに思はれた。
邦介はそれが不快だつた。
「内地へくると、」滋野が、意識的に――と、少くとも邦介には思はれる調子で、急に話の方向を更へた。
「人間の顏が、みんなこせつ、い、て、ゐて、狐の顏みたいな氣がするよ。」
「ふゝつ。」と、邦介は、苦笑を口の裡で殺した。
「夏の晩になると、支那じや道路の眞中で莚蓙をひくんだよ、さうするとネ、みんなそのまわりに、ぐるつと土下座をして、長い煙管で煙草をふかしながらきいてゐるんだ。實に大陸的さ、それから乞食は、人の後を一里でも、二里でもくついてきて、日が暮れると、ゴロゴロと道端に打倒れて、眠るんだ――。」
が、滋野の言葉を、邦介はきいてはゐなかつた。さつきから、中心を外れかゝつた會話を、ぐつと本節へ引戻さうとして、苛立つてゐたから。
邦介は、出來るだけ素直に、滋野が惧れてゐながら、心の片隅では知りたく思つてゐる筈のさや子の、さや子との間に生れた四ツになる女子の、消息を傳へたかつた。「この男は、」と邦介は心のうちで思つた。

「今でも疑つてゐるだらうか、自分とさや子の間を、——」

「これから何うするつもり、づつと内地にゐる？それとも。」

ほんの僅かだつたけれど、出來かゝつた心の陰翳を、邦介は刎ね返へすやうに云つた

「今、土地を探してゐるんだ、百姓をしようと思つてネ、ひよつとすると、南米へ行かうかとも思つてゐる。」

おしまひの言葉が、邦介の耳に、何もとなく、うつろに響いた。琉球から、滿洲支那と云ふやうに、殆んど半生を放浪に過してきた滋野の南米行が、それほど不自然ではなかつたのだが、何となく上滑りがしてゐた。

「長く遊んでゐたからね、何かしないと、腕がムヅムヅする、さうかつて、他人に使はれるのは真平だし、百姓なら——。」

その時、電車通りを左に曲つて、狭い横町を突き當つた處にある、カッフエー六月の、ドアーが開いて、中から四五人の若い大學生が、ドカドカと亂雑に表に出かゝつた。邦介は、滋野の先きに立つて、殆んどそれと摺れ違ひに、その洋館風の建物の中へ入つていつた。

眞鍮の鎖で、眞白い天井に吊られてゐる、今火の入つたばかりの、碗形の摺硝子の電燈が、ガランとした室の中の——其處には、二組の客が、かすかな瀬戸物の縁に當る音を立てながらコーヒーを啜つてゐるのみだつた——幾つかの角卓子を、硝子の器具に盛られた果物を、菓子を、寂しく照らし出してゐた。そこいらの飾付は、まだ冬のまゝだつた。片隅に、赤々と燃えてゐる瓦斯ストーブの火氣で、部屋の空氣は、ほどよく蒸されてゐた。

女給が、型通りの、白いエプロンをつけた若い女給が、近寄つてきて、二階が空いてゐるから——と、説明するのを、軽く首だけでうなづいて、二人は白い壁際の卓子の一つに向いあつた。

「君は僕を疑つてゐるだらうな。」

[illegible]した瞬間[illegible]、[illegible]に、女給[illegible]た時だつた。[illegible]野の口下からとび出した。

「さあ、おこつてゐたつて云ひ方は、ピッタリしないが、何んて云ふかな　」邦介は、口髭を弄つて、剃つたあとから伸ばしはじめた髪の毛を、無意識に左の指先でつまみあげながら、心持伏目になつてゐる眼の上にじつと瞬きをおとした。

「何かの機會で、一寸氣持がこぢれ初めると、理性の方じや、とつくに和睦してゐながら、へんにひつかゝりが出來る。ワイフとの場合によくある奴だが、さう生魚をつかんだあと――丁度そんな調子だつたよ――あの時、」

急に、邦介は、自分の聲が、昂奮のために、かすかに顫へるのをかんじながらつゞけた

「君がでゝ來てくれたら、さや子さんをあんなに悲慘にはしなかつたと思ふ、勿論、僕にしても、もつと經濟的によかつたら、友達として取る道は澤山あつたのだが――」そこ迄喋つた時、邦介はだまつた。その時コーヒーを持つた女給の足音が右側の三和土の上に聞えなかつたら、瞼の内側に一杯に溜つてくる熱いものを、危ふく卓子の上に落す所であつた。その頃のひどく貧乏だつた生活が、彼を頼つて、遙々支那から渡つてきた姙娠六ケ月になるさや子を、追ひたてゝ、龜井戸にある或辯護士の出張所に、女中代りにやらなければならなかつたほどの生活が、まざ〳〵と思ひ浮べられたから――。

入口のドアーの開く音につゞいて、入り亂れて三和土を踏む靴の音が、今迄保れてゐた室の中の靜けさを掻き亂した。

その途端に、

「うゝ。」と聽きとれないほどのうめきが、入口の扉の方へ瞳を凝らしてゐた瀬野の咽喉底を洩れた。そして意外にも、

表情に乏しい彼の顏色が、ほんの微かにではあつたが、變つたと邦介には思はれた。

「何に？」邦介は、持ちかけたコーヒー茶碗を卓子の上において、上半身を心持後へねぢ向けた。其處に、かなり贅澤な金具をつけた、黄金色の毛をした愛犬をつれた中年の紳士がつつ立つてゐた。その後に、黑い毛製の厚いコートに體を包んだ夫人が、可愛らしい四五歳位の洋裝の女の子の手をひいてゐた。これだけのものを目に入れたあとで、邦介は、謎をとくやうな、鋭い一瞥を、滋野の顏に放げた。

「何んでもないんだ。」ケロッとした顏をあげて、滋野がてれ隱しにコーヒーを啜つた

二人共、二分間ばかり、ピタリと口を噤んでゐた。何だか分らなかつた、が確かに云ふべきことがあつて、それを云ひ出さずにゐるといふ感んじだつた。

「子供は大きくなつたかしら」

突然、滋野のつゝこぼんだ眼の底が、光つた。きらつと、電燈の光をうけて—

それだつ—と、邦介は心に叫んだ。二人の心が、さつきから觸れようとして、避け合つてゐたものは。

「この四月から、幼稚園に入れるとか云つてゐた、柄も僕の所のよりはづつと大きいし、女の子の故か、智恵のつき方も早いよ。」

邦介は、妙に感傷的になつた。それで、もう一度ぎつくりと體をひねつて、さつきの紳士の一行を見た。丁度、彼等とは反對の壁際の卓を圍んでゐた。後向になつた夫人の忙しげにホークを動かしてゐるのが見えた。その傍で、下唇の厚い、ひげの深い紳士が、皿の上の肉片を、ホークの先につつかけては、愛犬の鼻頭につきつけてゐた。下脹れのした、愛くるしい女の子は椅子の中程にたれてゐる眞赤な靴下を穿いた二本の足を搖すりながら、きやつ、きやつと、喜びの

聲をかけてゐた。

一內地へ歸つてから、僕はふしぎに道ばたで女の子をみるのが怖くなつて、仕方がない。それがただ〳〵妻と一緒のときでもこの頃じや、病的と云ふよりは、本能に近くなつてきた。さつきも、—

滋野は、一段聲を低くめて、眼で向ふの卓子を指しながら、

「あの人達が入つてきた時に、女の子のビロードの帽子がチラッと眼にふれただけでギクッとした。」

聲の調子は沈んで低かつたけれど、邦介はほんの一瞬間、初めて四年前の滋野にピッタリとふれあつたやうな氣がした。

「さや子の後から、」滋野がつゞけた。

「直ぐ發つつもりでゐたんだが、丁度會社に同盟罷工が起たりして、拔けられないでゐるうちに、あれが、芝山と結婚したつてきいたので、急に氣持がこぢれちやつて、內地の土を踏む氣がまるで失くなつてしまつた。」

「噓吐き—。」邦介は心に叫んだ。

僕は、君とさや子とに猜疑の眼をむいてゐたのだ。僕に無斷で、一人先に、內地へ歸つていつたさや子の腹の子を疑つてゐたのだ——さう云つて、手を取る滋野であつたら——

持ちかけたコーヒー茶碗を、カッチリと音を立てゝ卓子の上において、邦介は相手の表情の硬い顏をみた。

「君は、さや子さんにあつてもいゝと思ふよ。」

勿論、邦介はみさ子—女の子をも、含めて云つたつもりだつた。が、滋野は、依然として、硬い表情のまゝで、低聲で、しかしきつぱりと云つた。

「僕はあれの幸福を掻き亂したくはない。」

瞬間、邦介は、悲慘なさや子の實狀を、芝山との殘酷な破綻を、打ちまけたい衝動に驅られたが、もう一度、相手の意固地に固つた冷やかな表情を目に入れた時、堅い胸の扉にピッタリと觸れたやうな氣がして、口を噤んだ。

「僕は、みさ子はいつでも、引き取るつもりでゐる、もし、芝山が迷惑なら。」滋野が云つた。

重苦しい沈默が、二人の間に落ちた。

邦介は冷へかかつたコーヒー茶碗を、無意識に唇にくつつけて、啜つた。

「旨くいつてゐるかしら、さや子は。」突然、滋野が、瞳を傍の瓦斯ストーブの赤々と燃え立つてゐる火氣の一點に集めながら云つた。

「否、否。」邦介は、つよく首を振つた。

「恐ろしく不幸だよ、しかし、それを何人が何うすることが出來るものか、あの人は、二人の女の子の母親なのだから。それに芝山にしても、他人の子供を産み落すと同時に引取つてゐるのだから。」

邦介は云つて了つて、ほつとした。相手の深傷に不用意にもふれたと云ふ懸念から、急に白々しい心持になつた。

「う――。」滋野は、ムッツリと默りこくつたまゝ、時折邦介の顔をみた。

こゝまで來た時、二人は新しくさや子を中心にした、めいめいの立場を、露骨に思ひ浮べずにはゐられなかつた。

――敵か、味方か――。

彼等の間に、さつきよりは、一層冷めたいものが、流れこんできて、それが、邦介から滋野を、恐ろしく遠い所へ引放さうとしてゐるのを意識した時、二人は云ひ合せたやうに立ち上つた。

それに、すつかりなれてゐた。[illegible]

「もつとゆつくり話したいな。」駿河臺下の停留場まで來た時、邦介は、[illegible]

「是非近いうちにやつて來たまい、待つてゐるから。」

「あゝ」滋野は、底意ない調子で答へた。

別れる時、邦介は細々と自分の番地と、道順とを説明した。

電車の中は、會社や、役所の退け時だつたからかなり混みあつてゐた。邦介は、辛じて片隅の座席に腰を下して、窓枠に頭を凭せたまゝ、じいつと瞼をつむつた。滋野伸三との奇遇を思ふと、彼は靜止つとしてゐられないほど心の昂ぶるのをかんじた。殆ど、彈力と云ふものゝ缺如した自分の生活が、急に活々と動き出したやうに思つた。病院にある妻や、さや子に今日の出來事を語ることの興味をかんじた。が、もし、さや子、あの火藥を抱いてゐるやうなさや子の、眠つてゐる情熱に火のつくやうなことがあつたら――

顴骨の隆い、下唇のぴしやつと叩きつぶしたやうな、中凹みの顏――それが、さや子の夫芝山兼吉の印象であつた。その顏が、邦介の閉してゐる瞼の内側に一杯にひろがつてゐた。

「女の運命は、いつも子供を中心に動いて行くのですわ、いえさうよ、子供を。」

いつだつたか、ずつと前に、さや子が芝山と結婚して間のない頃、邦介に向つて云つた言葉だつた、それが、耳の底をついた。――

邦介は、この日、珍らしくも、彼自身にさへ謎のやうにかんじられるさや子との五年來の友情について思ひ浮べてみた。ある者は、純然たる戀愛關係でさや子の長女は、邦介の子供だとまで極言した。ある友人は一種の精神的戀愛だと

いつた。そして有婦有夫の間に行はれる精神的戀愛は、姦通以上の罪惡だと指摘した。遠くにゐる滋野が、自分の引とめるのも肯かずに先きに内地へ渡つて、然も邦介の家に身を寄せてゐるさや子に對するこうした第三者の中傷に充ちた手紙に觸ひされたのは、當然であつた、

大體の推知を鼻の先で笑ひ消してしまふ邦介自身でさへ、後者の場合は、それが比較的親しい友人の言葉であつただけに、彼は笑へないものにかんじた。

「否、否、戀愛ではない、戀愛の屬性とも云ふべき嫉妬を、さや子に對しては、かつて一度もかんじたことがないのだから。」邦介は心に叫んだ。

實際さや子が、滋野の後を追つて支那に渡る時も、それから、彼を頼つて上京した彼女が、芝山と結婚した時も、邦介は虚心でその問題に與つた。まるで、妹にでも對するやうに――。

「若し、よし子であつたら、妻であつたら。」

戀愛に似て非なる感情――が、極めて稀に男女の間に存在するといふことを、何かの本で讀んだことがあるやうな氣がした。邦介は、これだつと思つた。

「しかし、」と直ぐそのあとから、彼は漠然とした不安が頭を擡げかゝるのを何うすることも出來なかつた。

五年前の夏の夜　　邦介がよし子と一緒になる前夜の　　光景が彼の頭にはつきりとかへつてきた。その頃彼は九州の山深いN村で二十人餘りの同志と一緒に、ある新社會の建設を夢みてゐた。村の横手の山裾を洗つてゐるO川の河岸にしやがんで、その時邦介は水蒸氣の立ち上る河面を眺めてゐた。これも、まだ獨身だつたさや子が彼の傍にゐた。乳色した夜霧が、山ひだや、谷合から、湧き起つてゐた。夜はまだ淺かつたけれども、凄いほど靜かだつた。

「ええ、さうおしまひね、一その時まで、代目になつて[illegible]

ていつた。

「えつ。」だしぬけな、さや子の言葉に邦介はへんに狼狽した。

「あしたは、あの人がつくんでしよ。」明快な澄んだ聲だつたけれど、その容赦に邦介の心にふるへついた。彼は、さや子の顔を見た。何方かと云へば、小粒な、黒く澄んだ双つの眼の底で月の光が、きらつとした。邦介に、意外にもさや子が、涙を浮べてゐるのをみた。

「さう、今頃福岡について、旅館の二階で、僕達のことを思つてゐるかも知れない。」邦介は、何氣ない風で、云つた。が、その時、彼はフイに胸の裡を掻き搾られるやうな氣がした。暫くして、彼は云つた。

「あなたを寂しくはしないだらうか。よし子のくることが――。」

幾度か、言はうとして躊躇つた言葉だつた。ほんの一言吐き出しさへしたら、二三日來の胸さへつけられるやうな氣持から、すぽつと脱け切られると思つてゐた。が、結果は反對だつた。豫期しなかつた重いものが、落ちかゝつてきた。邦介は自分の心が、僅かにその一言によつて、さや子との間に描かれてゐた一線を、飛び越えてゐることに氣づいて、ぎよつとした。

「わたし。」さや子が口を切つた。「あなたの前に、頭を下げなくてはならない――いつだつたか、あなたはおぼえてゐる？、滋野が支那へ立つ少し前だつた、丁度今夜のやうに、此處の河岸で話したことがありましたでしよ、獨歩のことから話が初つて、結局、わたしとあなたとは、永久に砂のやうに混り合へないんだと云ふことを――、わたし、淨化された獨歩は好きだけれど、人間としての獨歩は嫌ひだつて云つて、あなたを大變惱らせた時ですわ、あの時、よし子さんの

ことで、熱病やみのやうになつてゐるあなたを、わたしどんなに輕蔑したでせう、少くとも、私と滋野とは、もつと高い處で愛し合つてゐる、どんなに離れてゐたとしても、信仰の破れるやうなことはない、と思つてゐました。そして、あなた方の一緒になる日を、どんなに素直な心持で待つてゐたでせう、あなたに對する私の心持をそのまゝ、よし子さんに移せると思つてゐました、それだのにわたし……。」急に、さや子は口を噤んだ。双つの手を、カッチリと胸の上において、闇の中で祈るやうな身振りをした。まるで、激越した感情を壓殺すかのやうに――。河面から忍びよせてくる、冷え〴〵とした夜氣の中に、二分間ほど、二人は呼吸を殺したまゝ埋れてゐた。邦介は、異常な昂奮から、時々自分のさや子に對して抱いてゐるふしぎな心持を、喋り出したい發作にかられた。が、そのたび、ぐつと心を引きしめた。

月が陰翳つてゐた。それで、女のきめの細かい横顔が、闇の中に仄白く一きは美しく浮立つて見えた。瞬間、不可解な衝動から、邦介はツイとさや子から一歩體を後にひいて、早口に、混亂した自分自身に言ひきかせるやうに云つた。

「友達です、友達です。」

「ええ、さうよ、お友達よ。」意外にも、さや子の聲は、冴えて高かつた。

「そして妙ですか、矢張り。」邦介は苦笑をかみつぶした。さや子は、ブスッとした顔を、邦介に向けたまゝ答へなかつた。が、一瞬の後、二人は聲を立てゝ笑ひ出した。うつろな笑聲が、暗闇の中を消してとんだ。

「あなたは、支那へいらつしやい、何も彼もよくなれますよ。」

雲が裂けた。その灰色にぼかされた雲の切れ目をすべり出した月の光が、對岸の樹木を、くつきりと描き出した時、邦介はすつかり平靜に返つて云つた。

五日經つて、邦介はさや子の支那への旅を送つた。

邦介が、滋野他二の二度目の訪問をうけたのは、三日前の夜明だつた。其時の団欒に、まづよしたおきゝたので、しば／＼話題に、さや子と、みさ子とのことが上つたにもかゝわらず、みんなの感情を、しつとりと落付かせた。

「チヽンカのお船て云ふと、そりやおかしいほどみさちやんが、怖がりますの、こわい小父さんが、チヽンカのお船にのつて、みさちやんをつれにくるんですつて」朝から氣分がいいといつて床の上に體を半起しにしてゐたよし子が笑ひながらいつた。

「チヽンカつて！」滋野が苦笑をかみ、ちよいと眉根を動かした。

「さあ、何から取つたんでせうね、だけどなんだか支那からでも來さうな船の名前じやありませんか、芝山さんまでがその理由を知らないものですから、一緒になつて、チヽンカ、チヽンカつて云つてゐるんですつて、さや子さんがおかしがつてゐましたわ。」

「君が見付けた長井つて所は」急に、不自然と思へるほど急に、邦介が横合から妻の話をひつたくるやうに、話頭をかへた。「三崎からは、餘程離れてゐる？」

「横須賀と三崎との中間で、何方へも三里位だらう、半島だからね、冬は暖くつて、夏は涼しいんだ、避暑地と云つても、極く規模が小さいのだ、それに土地の人が質朴で氣持がいゝし、東京からだつて、二時間と少しで行けるんだから——。」

滋野が、珍らしく、熱の籠つた調子で云つた。

「淺井さん——僕の義兄の知つてる人でK學院の教師を勤めてゐるんだ—その人が、毎年夏になると、水泳部の生徒を

つれていつて、北國の松林の中で、天幕生活をするんだ、そんなひつかゝりからなんだけれど、初めは餘り氣乘りがしなかつたのだが、昨日見てきてつから、すつかり氣に入つた——。」

「わたし、田舍にお越しになる前に、是非一度みさちやんをみせて上げたいわ、滋野さんだつて、ごらんになりたくつてゐらつしやるのよ、そして、ごらんになつたら、きつとお可愛ゆくなるに極つてるわ。」

邦介と、滋野との顏に、等分に微笑を含んだながし目を抛げかけながら、よし子は、御近話題をみさ子の上に引き戻さうとした。

「さあ、みたいつて氣が起きないことはないけれど、極く淺いもんです、女の人とは、その點は違うかも知れない、ただみちばたで、女の子を見ると妙にギクツとしますよ。」

滋野が云つた。

「さうう。」よし子が、嘆き過ぎる——と思へるほど、快活な調子で勝ち誇つたやうに云つた。

「矢張り、心の底では見たくてゐらしやるいよ。私の所などでも、子供が側にゐると五月蝿がる樣に、一寸見えないと、直ぐ信一はつて、きゝますもの、それに、みさちやんは、よく似てゐらしやるわ、目付なんか——。」

「それで何時から移るの？」邦介は、もう一度、みさ子から話頭を引放さうとして、苛立つた。

「僕は、直ぐにも引越したいんだが、その土地についてゐる家——と云つても、掘立小屋みたいなものだがね、そこが空かないと困るんだ、さうおそくも月末迄には移らうと思つてゐる、それで。」

一刹那、滋野の顏に、嚴肅な、キツとした色が閃いた。

「實は、今度みさ子を引取らうと思つてゐる、あとになつても、そんなことのために、煩はされても困るし、きつぱり

とこやさし子をかるたすにも、さうしやう[illegible]。」
「それがよろしいわ、みさちやんのためにも、わたしそのかたお幸福だと思ひますの、もう、あんたにた[illegible]
もの。」よし子が云つた。
「田舍へ越す前に、是非その方のきまりをつけて行きたいんだが、君からさや子に話して見てくれないか、丁度、姉の處に子供がないから、預つて貰ふつもりなのだ。」
「さあ、」邦介は、へんに滋野の言葉に壓迫される氣がした。
「とにかく、話してみよう、さや子さんが承知するかどうか——。」
「君の都合で、若しよかつたら、やつて來ないか、生活費なんか、幾何も要らないよ、この家の屋賃だけあつたら、たつぷりだし、それに米は僕がどつさり買ひ込んで行くしね、よし子さんの體にもいゝと思ふよ、東京へだつて割に近いんだから。」
その日、歸り際に滋野の殘していつた言葉だつた。その言葉が、つよい誘惑となつて、彼の胸にかへつて來た。其處には、高い蒼空と、渺茫とした海と、海に圍繞された綠の野と原始に近い農民の生活とがあつた。——それが、手を擧げて、彼をさし招いてゐた。瞬間、さや子の媚びるやうな、又怨ずるやうなまなざしが、じつと自分に注がれてゐるのに打ツかつて、彼ははつとした
「あの人は、滋野は、私から何も、彼も奪つてしまつた、そして今又、たつた一人の友達まで奪はうと云ふのだ——。」
音のない聲が、彼の耳の底をついた。が、滋野が彼女から奪はうとしてゐるものは、彼女の友達だけではなかつた。彼女の希望の全部を、みさ子をも奪ひ取らうとしてゐた。

「若し、さや子がそれを知つたら——。」邦介は、滋野の要求を新しく思ひ浮べた時、思はずヒヤッとした

「とにかく」彼は心に呟やいた。「さや子に切り出さう、」

と、今度は、彼の考へが、さや子と滋野と、その滋野のみつけた新しい土地との間を、ぐるりと一廻りしたあとでいつも索きよせられて行く中心の一點に、狹い家の中に臥つてゐるよし子の上にぴたりと止つた。

電燈の火が入つた、それでも尚三十分ほどの間、彼は窓によつてゐた。月はなかつたが、戸外は薄明りがしてゐた彼が机の上を片付けて、階下に降りた時、何んとなくさはついてゐる街の上に、薄霧の一刷毛がひかれてゐた、

二

三月に入つて間のない頃だつた。よし子が、四五日風邪の氣味で床についた。その後が、咳が容易に治らないで、體がかつたるいと云つて横になつたり、急に夕方から熱ぽいと云つて床を取つたりした。それで、かゝりつけの醫者を招んで、診察をうけた。

「何うも、こゝの所が少し、この前の肋膜炎のあとが、しかし、大したことはありませんが。」

診察を濟した時、飾り氣のない、如何にも田舍醫者然とした、小柄な桑島醫師は、急に痩せの目立つてきたよし子の右の肋骨の邊を輕くおさへて、云つた、よし子は、二年前に肋膜炎を患つたことがあつた。——

「肺の方は、大丈夫でせうか。」思ひ切つて邦介がきいた。

「今の所、ちよつとも、そんな兆候は見えないです、二度目でゐらつしやるから、衰弱がひどいですが、何に、少し安靜にさへしてゐらつしやれば。」

醫者は若い夫の手帳の中に、肋膜炎をしましたから、安静にさせていつた。

「水に取らなくつても宜しいんでせうか。」よし子が、ほつとした顔をあげてきいた。一度あつた喀血がまたあつたが、その時、かなり進んでゐた病勢を追ひのけてしまつた經驗がある丈け、この病名はよし子にある安心を與へたのだ。

「え…まだ水は溜つてゐないやうです、ほんの初めですから。」

その日、よし子の藥をとりにいつた邦介が、桑島醫師の玄關につつ立つた時、もう一度極めるやうに云つた。

「肺の方が惡いやうでしたら、何うぞ遠慮なく言つていたゞきます。」

「否、助膜と肺とは、ほんの膜一つ隔てゝゐる切りですから、肺を犯される憂ひはあるですが、今の處、決してそんな。」

醫者が、きつぱりと答へた。それで夫婦はすつかり安心した。

「褥を取つて、當分安靜にしてゐるんだな、お炊事の方は、僕が引きうけるから。」邦介がいつた。

早くから口をかけておいた床屋の二階が開いて、その方へ仕事場を移してからも、邦介は毎日飯時になると、家に歸つてきて、不馴れなご飯拵へをした。

一ト月經つた。よし子の容態は進みも、退きもしなかつた。夕方になると、熱の度が昇つた。咳と痰とが、ひつきりなしに出た。口の中が渇くと云つて、ネーブルや、夏蜜柑のやうな、水ぽい果物を欲しがつた。肩の邊の肉が落ちて、何んとなく體つきが、細そりとした。

三つになる女の子をいれて、毎日のやうにやつてくる、赭ら顔した隣家の大工の細君は、

「奥さんの品よくお痩せなすつたこと、何うでせう、あたしのこの太りかたは。よく、そんなことを云つて、肉の張り

切つた、二の腕の邊まで捲つてみせた。そしてゲラゲラ笑ひながら、

「うちの言草がいいぢやありませんか、あたしの方は、ちよつとも皮氣（可愛氣）がなくて、お隣りの奥さんの方は、肉氣（情氣）がないんですとさ……。」

「わたしだつて、結婚する前は、十三貫たつぷりはありましたの、その頃は、そつと家の人に隠れて、お酢を飲んだりしたことがありますの、痩せたくつて、痩せたくつて——。それが、お産をしてつから、めき／＼痩せちやつて、今ぢや、骨と、皮ばかりですの。」

よし子は、鉢の上で、靜脈の透いて見える、白いすんなりした腕をさすりながら、寂しいと云ふ表情を浮べてゐた。

四尺ほどの板塀で、表の小路との間を仕切つた、短冊形の狭い庭の方へ、よし子がかみの毛の亂れた枕を向けて寢てゐる。水藥の瓶、濁つた茶色の痰壺、果物の皮、讀みさしの婦人雜誌等が、散かつてゐる。まだ雨戸の引かれてゐない、仄暗い縁側で、男の子がぺつちやんこに座つて、積木の手遊を、積んだり、崩したりしてゐる。——それが、毎日仕事場から歸つた時、邦介の眼に映る家の中の光景だ——、裏口から、のつそりと家に入つた時、邦介は次の部屋のこれだけのものを、はつきりと感ずることが出來たやうな氣がした

「みじめな家族。」邦介はフトさう思ふと、何んとなく傷々しい氣がしてきて、妻の顔を正面に、覗き込むことが、できない心持がした。信一を抱きしめてやつても足りない氣がした。それで、邦介は、わざと病室へは行かずに、茶の間に入つていつて、鐵瓶の下をみた。火の氣のない灰の中に、立ち消えした炭が、死骸のやうにゴロ／＼してゐた。彼は勝手の板敷の所へ引返してきて、新聞紙のかためたものを焚付けにして、ぱた／＼とコンロの下を煽いだ。闇の中で、一頻り紙が燃え上つて、プンと油インキの匂ひがした。それが消えた時、黒い煙が部屋の中を充した。邦介はもう一

度、彼を見ないでマッチを擦つた。

「嫌いぢやないの、あなたは下らない——

よし子が　開けかけになつた次の部屋から涙つぽい聲をかけた。

先刻から、思ふやうに火の熾らないのに苛立つてゐた邦介は、返事の代りに　コンロの下をあおいでつよくばたばたさせた。

「もう少し早く歸つて下さらなければ——。」よし子が　つゝかゝつてきた。

「信ちやんが　お腹を空かし切つてゐますわ。」

邦介は、眉根を顰めた。部屋の方を見た。氣の故か、電氣の灯が暗くにじんでゐた。いつも、倦るいからと云つて、ふとんの上に放げ出してゐるよし子の足だけが　襖の間から覗いてゐた。

「信一は?。」邦介がきいた。

「今、あんまり、お腹が空いたつて泣くもんだから、お隣りのお上さんが、見兼ねてつれて行きましたわ　あなたのやうな人は、一日中、床屋の二階で何をしてゐるんだか、分りはしない、さつきも、お隣りでお風呂の歸りにみたら、お宅の旦那が、窓に立つて街を通る人を眺めて　ゐたつて云つてましたわ、お風呂から歸る人を、じろじろ見てゐるなんて　厭らしいてないわ　そんなだつたら、早く歸つて信ちやんでも見て下さればいゝ。」

お風呂から歸る人を見てゐる——さう云ふ所に力點をおいて、自分につゝかゝつてくる妻、其處に、邦介は達者な時の妻に見ることのできなかつた一面をはつきりと見たやうな氣がした。

「ほんとうに、あなたつて人はのんきね。」よし子がつゞけた。

「わたしたちが、渇えて渇え死したつて、あなたは自分の好きなことをしてゐらつしやれば滿足なんでしよ。」

「やり切れない。」と　邦介は　胸の中で呟いた。と、すぐその後から、彼はよし子の言葉に　何んだかほんとうのことを、圖星をさゝれたやうな氣がしてきた。毎日　自分があの二階で考へてゐることゝ、この家の中へ、一歩踏み入れた瞬間、自分が面接するものとの間に、恐ろしく遠い隔りのあることを邦介は、今更のやうにかんじた。それは、夢の世界から、一足とびに現實の世界にとび返つたほどの違ひだと思つた。あすこでは、たとへみじめな家族のことを思つたにしても、たとへば窓から見える蒼空を、嫩葉をつけた向ふの氷川神社の森を、又はさや子のことを、今讀んだ佛蘭西の小說の中の女主人公の上を、若くは、書きかけゐる作の中に出てくる少年の日の自分の姿を、思ひ描くのと　同じいほどの遊離した心持ではないか――　ほんの空地一ツへだてた家の中で、自分一人を截り切つて生きてゐる家族のことを。――

さう思ふと自分一人家族から離れて　あの二階で哀情そのものゝ日を消してゐることが　耐へられない氣がした。かと云つて　この病人と子供とで一杯になつてゐる、狹い家の中へ机を据ゑてみた所で――

「否　否、問題は二階にあるのではない。」と、邦介は叫んだ。「仕事さへ出來れば、だが　しかし、「仕事が出來ないとしたら。」そして若し、單に頭を壞してゐるから出來ないのではなく、もつと本質的な、才能の有無に問題がかゝつてゐるのであつたら　――

邦介はヒヤツとした。ファイに、思ひ切り冷めたいものを、脊筋へ浴びせかけられた氣がした。

コンロに湯沸をかけたあとで　邦介は打碎かれた氣持で病室に入つていつた。

「何う？」邦介は女の枕許に座つた。

油氣のない髪の毛が、額の上に乱れかゝつてゐた。その間から ぱつちりと見開いた眼が、じつと一點をみつめるやうに覗いてゐた。その眼が、何となく、うるんで熱ぽかつた。

「わたし、少し喋り過ぎたと思ふの——。」よし子が 急に別の人のやうな、いくらか、甘へかゝるやうな口調でいつた。

「今日、戸塚の姉さんが来たの、いよ／＼渋谷の方へ越すんですつて あと壁さへ入れば移れるんですつて あの人達それは悦んでゐましたわ、もう是以上の望みはないなんて云つてゐましたわ、わたし、どんなにお金が出来たつて 自分で家を建てようなんて思はないけれど——。だからわたし、姉さんに云つてやりましたの、磯部のやうに引越し好きなものは、とても家なんか建てられないつて さうしたら、姉さんが 却つてあゝ云ふ人は自分の家を建てた方がいいんですつて、一ツ所に永く住むやうになるから ——。」

邦介は苦笑した。

「さつき、わたしからしてゐて數へて見たら、」よし子が云つた。

「わたし達が一緒になつてから、四年の間に 十六ケ所に住んでゐますわ、津久戸からはじめて——。」

「さうかなア。」邦介は熱のない調子でいつた。

若くして父親となつた邦介が、背負ひ切れぬ重荷を荷つて 生きて行くためには、いつも新しい運命のくじを引き當てようとして、一切の持物を投げ出す賭事のやうな危險を冒しながら、轉々として居を換へていつた。都會から田舎へ田舎から海岸へ！それは 單なる引き越し好き、若くは氣紛れな心の動きからではなかつた。この心持は 誰にもよし子にさへも分らない！ 自分一人のものなのだ ——さう思つた時 邦介は恐ろしく底淋しい氣がした。

「姉さんが、この間話のあつた宇津木のお若さんの羽織を着てきましたわ、派手な柄！それはおかしいやうよ。」よし子が云つた。

邦介は負け惜みを云つてゐるな、と思つた。彼が　妻から初めてその羽織のことをきかされたのは、一月ほど前だつた。女子美術に通つてゐる若子が　月謝に窮して二三點の衣類を妻の母親に頼んで入質した。その衣類が流れる期がきても受け出し得ないから　古とは云つても性の分つてゐるものだし、これに捨値ほどの値段だからよし子に受け出しては何うか――と　母親が奨めたと云ふのだつた。

「おまへは親しい人の愛着の殘つてゐる着物を、自分が受け出して、着てゐることができるだらうか。」その話を持ちかけられた時、邦介は苦り切つていつた。彼は、妻の一枚切り殘つてゐる銘仙の羽織が　もうよれよれになつて、明るい場所を着て歩けないことをよく知つてゐたけれど！

「でも、わたしの方でなんしなければ、姉さんがぜひつて云ふんですつて―。」よし子が愛着のこもつた口調で云つた。

「あの人、簞笥の底に蒸れるほど　羽織を有つてるくせに。」

邦介は、さうしたいきさつのあつた羽織をきて、妹の見舞ひにきた女の心を淺ましいと思つた。そして又以前は何うであらうと、心のうちでは、物質的に優越した姉の生活を羨ましく、ねたましく思つてゐるであらう妻の憔れた顔　その顔をじつとみつめてゐると、眼の底が、じいと熱くなつて、前にあるものが、みんなぼうとして映つてきた。

「よし子！お前は悔ゐてゐるんじあないか、ね、今更子供まであるのにこんなことを云つても始らないが、僕は、何んだか、お前が姉さんの生活を羨やんでゐるやうな氣がして――。」

邦介は優しく――ね、よし子許してくれ　僕等の運命だつて、一生拓ける時が來ないとは極つてはゐないのだから――。」

さう云つて彼もたいへん心苦しくて目を開いたのだつたが、妻の吐き出した言葉には何も返事をしなかつた。

よし子は黙つてゐたが、暫らくすると枕下から手拭をとつて顔にあてゝしく／＼泣き出した。そして泣きながらつづけた。

「いつまで經つても、あなたには、わたしの心が分らないのね、わたし、一度だつて、そんなことを考へて見たことなんかないの。どんなに貧乏したつて、信ちやんさへ人並みに大きくできれば……わたし、さつきも、褥の上でいろいろ計畫してみたのよ。體さへ丈夫になつたら信ちやんと二人で何所かの田舍へいつてまた小學校へでも出ようと思ふの。もう、信ちやんだつて、手が放れてゐるんですもの。とても、あなたは、外の人のやうに勤めのできる方ぢやなし。そして、わたし達の心配がぬければ、あなたも思ふやうに仕事ができるしそうでもしなければ——こんな年中旅人のやうな生活をしてゐたら、——わたし達はおしまひには……。」

「もういい、分つたよ、泣くな。」邦介はさう云つて、妻の手から手拭をとると泣く子をすかしなだめるやうに、その淚の流れる、血の上つた顏を拭いてやつた。彼自身淚含みながら——

信一が、ご飯を喰べてゐるうちに、こくりこくりと初めて、睡つたからと云つて、隣家の細君が抱いてきてくれた。邦介は立つて行つて、細君の手から男の子を受取つてきて、よし子の褥の中へ寢かした。

「藥がないな…。」邦介は、枕下の藥瓶が空になつてゐるのを見て云つた。

「當分お藥をやめようと思ふのよ、だつてこんなお藥を服んでも、服まなくつても同じよ、ちよつとも熱も下らないし、咳も止まらないんですもの、それよか、わたし氣分のよい日に、温かくして慶應へでもいつてよく診て貰ひたいと思ふの。」

よし子が、云つた。

「あなた！、醫療は高いんですつてネ、」

邦介が、伏目になつたまゝ默つてゐるので、よし子は重ねて云つた。

「さあ、」邦介は、胸元をしめつけられる氣がした。

「醫者をかへて見たら。」二人の會話がいつも此處まで進む時だつた。ハタと、行詰つた思ひに打たれるのは。

「あなた、あすこへいつてゐるわたしの着物は、あれを出してきて賣つたら、いくらかお金ができないかしら、明日の倶ちやんのお小遣ひもなくなつちやつたんですのよ。」

さう云つて、よし子が一ツ大きく溜息をした。

「着物なんて賣つたつて、いくらにもなりやしないよ、それに利子を差引いたりしたら、――それよか、僕が、あれを書き上げるからネ、ねえ、よし子、書き上げさへしたら――。」

「何もかもよくなるんだ！」邦介は、さう云ふつもりだつた、が、喋つてゐる自分の言葉に、妙にうつろな響が含まれてゐる氣がして口を噤んだ。

「書き上げても、それがすぐ賣れるかしら、何んだかわたし信じられないわ、いつものやうに、二つも三つもの雜誌社を持ち廻つて、そしてその揚句に、賣れなかつたら――、そこへ行けば、お隣りの大工さんなんか感心よ、あゝして家のものを困らせないで、他人のお世話にだつてならないで――。」よし子の口調は、又いつとはなしに愚痴がかつてきた

邦介は、前の年の秋からある長篇を初めてゐた。それで彼は、郷里の遠縁に當るK氏から、半年と云ふ約束で、月々小額の補助をうけてゐた。彼の收入の途は、その外には、時々匿名で書く讀み物のちよつぴりした稿料だけであつた。

費は、K氏からの三箇月の前金の分を、[illegible]に受け取つた。それを費し尽した時、[illegible]
が使つたきりだつた。それだのに、彼の原稿は予定の半分にも書き進んではゐなかつた。[illegible]たくやうにしてK氏
の前に坐つてみても、彼は直ぐ侮蔑と、何うしようもない愛[illegible]とに挟まれた
「家のものも、困らせないで、他人の世話にもならないで。」
いつもなら、自信を傷つけるやうな、神経を無視した、没理解な不平をきく時、邦介は高びしやに、自分の生活に理解のない女は別居するより仕方がない――そんな、暴君的な調子で、妻の不平を抑へつけて了ふのだつた。が、この時邦介はふしぎにも、妻を哀れむ心持だけが、一杯に胸にひろがつてきて、一句一句彼女の言葉を心の裡で肯定していつた。
お隣の大工さんあの三つ口で、耳の遠い、いくらか足りない所のある、初終、二つ年上の女つちよの細君に、喚鳴り立てられてゐる大工さん――は、他人の必要な労力を提出して、それに相當する賃金を得てくるのだ、さうだ、他人の必要なものを賣るのだ、自分の創作したものは、果して他人の生活にとつて必要なのであらうか、他人の趣味好尚を考慮に入れることなしに、勝手なことを書きつけて、それを金に換へようとする自分――其處に無理があるのではないか――區役所に提出する一枚の寄留屆の代筆だつて、對人的に必要なものなら、正當な代を支拂はれるのだ。――生れくるものゝ價値が未知數だとしたら、それによつて家族を養つて行かうとする自分は、富籤を引くよりも、もつと際どい冒險を繰返してゐるのではないか、藝術家の妻、さう云ふ虚名によつて、自分は妻を欺いて來たのではないか、自分はいゝ、たとへ有形的に報いられることがなかつたとしても、労作の苦しみ、それ自身の中に、悦びも慰めも感んじるのだから――、併し、妻は、平凡なたゞ一個の女である妻は。――

三

磯部邦介は、夕飯のあとで、奥の三疊についてゐる押入れの前に立つた。彼はそこの文庫の中に投り込んだまゝ捨てゝある百枚ほどの長篇のことを思ひ浮べた。彼はそれを賣らうと思つた。文庫の中を掻き廻した。原稿はあつた。一緒くたに投げ込まれた書きかけの草稿の底の方に、四ツに折り疊んだまゝ埋つてゐた。彼はそれを取り出して、とびとびに頁をめくつて、讀み返してみた。讀んでゐるうちに、彼は體全體から力の拔けて行くやうな、恐ろしく心細い思ひに囚はれた。いやに生硬な、でなければ、先人の使ひ古した字句、少しも清新味のない、だらけ切つた表現だけが目についた。是を讀んだ時の雜誌編輯者の嘲笑を浮べた顏を想像すると、彼は恥しさのために堪へ切れなくなつて、「こんなものツ」と、云つて元の文庫の中へ投り込んだ。その途端に、

「あなたは、其處にごそごそと何をしてゐるの」と、よし子が襖の上から、聲をかけた。すると、彼は全く今迄とは違つた心持から、もう一度その原稿を手に取らずにはゐられなかつた。

「矢張り賣らう。」と、呟やいた。彼は今の自分にもし、賣るものがあれば、この原稿の外にはないと思つた。彼は生きるためだ――と思つた。邦介の胸にはその作をかく爲に、去年の夏山のお寺で過した貧しい生活のさまが、はつきりとかへつてきた。墓地に向いた座敷で、夜おそく迄藪蚊にさゝれながら、彼はコツコツとのみで刻むやうに書いた。彼の妻は、住職より二十代も年の若い、むらつ氣な梵妻に苦しめられながら、野芹や、三ツ葉を水田の畦から摘んできては、毎日のやうに粥を炊いて彼に喰はした。夕飯には大がい、お針のお禮に近町の農家から屆けてくる、色の黒い地粉で、太い、眞田紐のやうなめんるいを拵つて、それをみそ汁で煮て食つた。二ケ月余りもそんなにして、書き上げた原稿を

もつて、[illegible]、悄然と[illegible]の蛋を抱いて、男の子の肩あてを拵いてゐた妻をみると邦介は、急に原稿の包みを[illegible]に投げつけたまゝ、プイと本郷の裏山の櫻林の中へかけ込んで、一本一本櫻の木の根を拂つて、[illegible]歩いた。——

邦介は、そんなことを思ひながら、卓の上に腹匍ひになつて、ペンを持つて、氣に食はない所を直していつた。彼はだんだん手を入れて行くうちに原稿が眞黑に汚れて、作の統一が失なつて行くやうな氣がした。しかも、新に讀み返してみると、何うやら、手を入れた部分よりは、以前のまゝの方が、ピツタリ、其時、其場に當嵌つてゐるやうに感じられるのだつた。邦介は泣き出しさうになつて、下手な大工の作つた、ばらばらに壞れて來さうな建築物を、睨むやうな思ひで、自分の原稿を眺めた。邦介はフト二年程前に、Ｓと云ふ作家が藝術的良心によつて、自作を燒却したと云つて、文壇の一部で問題になつたことを思ひ出した。

「燒いてしまへ。」そう云つて、燒却することの出來る自分であつたら——、

苛々と思ひ惑つた末に、結局その作の焦點になつてゐる房州の漁師町の旅館の部分だけを切り取つて、三十枚ほどの一ツの短篇にすることを思ひついた。彼は、二三枚づつ、前と後とを新しく書き換へて、それを綴じた。

邦介は、原稿の包みをもつて、その時輕い寢息の音を立ててゐる妻の眠りを妨げないやうに足音を忍ばせて表に出た。

「何所へ行く」、彼は、殆んど的のない自分であることを知つた。

空氣がどんよりとして、氣の早い都會人は、もう浴衣をひつかけるかと思へるほど生温かい夜だつた。

小脇に原稿をかゝへて、何處ともなくうろついてゐる自分、その哀れな自分の姿こそ、自分の永遠の姿ではないか、

邦介はさうした自分の姿が、眼の前にちらちらと見えるやうな氣がした。ある家の生垣の前に出た時、邦介はその垣根の中から刺すやうな丁子の匂ひが、プンと鼻をついてくるのに氣がついた。邦介は、何んだか、ひどく悲れてゐる—と云ふやうな氣がしてきて、立ち止つて長い間、刺戟のつよい匂ひを嗅ぎつゞけてゐた。その途端に、植込の邊でバサツと云ふ物音がして、白い猫がのつそりと、往來へ現れた

「生きたい！。」邦介は、涙のにじむやうな氣持になつて、心に呟やいた。彼は、その屋敷町をぬけて、まだ所々に麥畑の殘つてゐる新しい住宅地の方へ降りていつた。

霧は深く野を包んでゐた。開いた切り人の通らない小徑は、雜草が繁り合つて、露が下りてゐた。地の底からでも聞えてくるかと思へるやうな、蟲の鳴く音が、かすかに流れてきた。

邦介はいつか、丘一つ隔てたFに、一年ほど前にフランスの旅から歸つた松尾と云ふ若い作家の住んでゐることを思ひ出してゐた。三四年前に、彼が文學雜誌に勤めてゐる頃、松尾はもう華々しく文壇に賣れてゐた。

「今朝の新聞でみたが、君の小說がS・K誌へ出るんだつてネ、悅んでゐたよ、一つ出したら、油ののつてゐる所でつゞけて書き給へな、文壇と云ふ所は、書かないでゐると直ぐ忘れてしまうから。」

ある朝、雜誌の用で訪ねて行くと、初めて明るみへ出た邦介の創作に就いて、松尾が親切な調子でこんな忠言を與へてくれたことを思ひ出しながら邦介は、眞直ぐに丘を橫切つた。

「併し！」と、邦介は、途々自分の行爲には、何となく責めつけられるものがあるやうな氣がされて道の眞中に立ち止つた。彼が、西の國の旅から歸つて丸一年も經つのに、眼と鼻との間に住つてゐながら、一度も訪ねたことのない男が、唐突に訪ねていつて原稿の世話を賴む、自分は餓ゑていよいよと云ふ時にはどんな恐ろしいことでも爲出かす人間

だ。さう思つた時邦介は、思はずぞつとした。

邦介は、一時の後小說家磯部禮三と向ひ合つて手の届いた應接間を離れた奧の一隅の書齋に坐つてゐた。

「いやに燻々しますネ、」骨組のいゝ、太つた禮三にさういつて窓の障子を細目にあけて、彼と向ひ合つた。

「磯部君には、いつ會つたまゝかな。さういつか矢來の通りであつた切りかな、あれは、僕があつちへ行く前でしたね。」

來客用の葉卷入の中から、禮三は、敷島を一本取つて、吸口をぽんと火鉢のふちで叩きながら云つた。自分の前に、固く座つた切り、白い灰の中の炭火の一點に瞳を凝らしたまゝおし默つてゐる邦介の氣を引き立てるやうに。

「ええ、確かさうでした。」邦介は無理にも心をかき立てなければいけない――さう思ひながらやつと口を切つた。

「ああ、さうか、ぢや、一寸三年になるか、あの時は奧さんと一緒でしたね、何うですかこの頃は、君の所も弱い方でしたね。」

「又この頃、少し惡いので弱つてゐます。」邦介は云つた。

その時、女中が茶を運んできた。

邦介は、この書齋に通されて、がつしりしたその火鉢の前に座つた瞬間から、全く思ひがけなくも、自分の胸が暗く鎖されて行くのをかんじ出した、勿論、今迄とても、新聞や雜誌の仕事に携つて來た邦介であたつから、豪奢な富豪や、名士の應接間で、肩まで埋るやうな、ふつくらした肘掛椅子に體をよせて、腹の底でふふんと、反抗的なせゝら笑ひを洩らしたことがなかつたのではなかつた。況して、それらの贅澤な應接間から見れば、瀟洒な、寧ろ質素とさへ言ひうる禮三の書齋ではあつたが、邦介はふしぎな壓迫を感じた。和洋の書籍のぎつしりと詰つた書棚、向ふで手に入れたと思へる名畫の額、磨のかゝつた黒檀の机、それらのものが、目に見えない槍の穗先のやうに、彼に迫つてきた。邦

介は、自分を脅迫するものは、單なるこの苦痛でなくて、もつと底の方にある――何かだと思つた。俺は他人の生活に觸れて羨んでゐるのだ、お嬢さんの嫁入仕度をみて、涎をたらしてゐる下女のやうに、自分は、長い失意と、貧乏とのために、こんなにも心がひがんでしまつたのだらうか。それにしても、自分は何んといふ貧しさだらう、――さう思つた瞬間、邦介は、あの狹い家の中で臥してゐる妻の姿が、ちらちらと眼の前に浮んでくるのを拂ひのけることができなかつた

「家内に病人のあるのは一ばん困る、氣持に觸してくるから、この頃何か書いてゐますか、僕も新聞の讀物を初めてるんで、初終追はれ通しですよ。」

禮三は、得意な境遇にある人に共通の、あの明快な口調で云つた。その途端に、邦介は禮三の顔にキッとした眼を向けた。

「三十枚ばかりのものを持つてきたんですが、何處かに何にできないでせうか。」彼は、はつきりした口調でそれだけのことを云つて、包みの中の原稿を禮三の前につき出した、禮三は、原稿のペエジを五六枚剝ねてみたあとで、云つた

「急ぐんですか、この頃にＫ社の人に逢ひますから話しませう、それで君は、生活の方は何うしてゐますか、何んとかなつてゐるんですか。」

こゝ迄來た時、彼は悄然た邦介の來意を、初めて知ることが出來たと云ふやうに、大きな眼球を一つぐるつと動かして、相手の瘦せた小作りな顔を哀むやうに眺めた。

「ええ、何んとか。」邦介はさう答へずにはゐられなかつた。

「私には明日の子供の小遣ひもないんです、本屋にうる一冊の本もないんです、しかも私の妻は、病氣で寢てゐるんで

す。」自分がもし、岡さまにさういつたら、相手に呆れ返つてきくだらう。

「それで君は、今日まで何をしてゐたんですか、そんなに手も、足も出なくなるまで。」と、それに答へて

「私は小説を書いてゐたのです、半年もかゝつて、ちつとも賣れる的のない。」さう云つたら、禮三はどんなに驚くだらう、彼は屹度云ふに違ひない。

「君はのんきですね。」と。

「のんきですね。」それと同じい言葉を、さつき將の上にゐる妻の口からきいたのを思ひ出して、邦介ははつとした。

「その方が、何んとかなれば、君なぞはいい方さ、その心配があつちや、なかなか落着いて筆が執れるもんじやないよ、僕の所へくるK君など實際ひどい、ふとん迄質屋へ持つていゝちやつて、夫婦で蚊帳にくるまつて寝てゐるんだから。」肩の怒つた大きな體をゆすつて、禮三は快活に笑つた。

「ふゝつ」

邦介も反射的に笑つた。と、次の瞬間に新しい憂鬱が胸に落ちかゝつてきた。邦介はそれを紛はすために、話題を罪のない文壇の噂話の方へ持つていつた。それから、禮三の外遊中のことが、二つ三つ話題に上つた。

「向ふへいつたばかしに、一番弱つたのは。」禮三が初めた。「店やにいつて買物の勘定さ、先方ぢや英語が分らないんだらう、そこへきて、こつちの佛蘭西語がまだ初めたばかりで、ブロークンときてゐるんだ、仕方がないから、いつも大きな紙幣を出す、まあ、この方法が一ばん安全さ、何故つて君、勘定を向ふでしてくれるだらう。」晴々しい、胸のすくやうな、話振りだつた。此禮三の容子に邦介は自づと引入れられて、心が綻びて行くのを感じた。「これだつ、この則かさだつ。」と、邦介は思つた。

ずつと前に、散歩の行きずりに會つた時、初めて禮三を見た彼の妻が云つた。

「何んだか松尾さんて、お逢ひしてゐるうちに、胸のひらけて行くやうな方ね、私あの方のお書きになつた漁夫の妻」と云ふ長篇を讀んで感心したことがあつてよ、だけどあんな明るい感じの方とは思はなかつた。」

それで、彼は笑ひながら妻に云つた。

「あんな人に、いきなり、ぐつと手を握られたら何うだい。」

「私、すくんでしまひますわ。」

邦介は、この不用意な妻の言葉ほど、松尾禮三のもつてゐる魅力を雄辯に語るものはないと思つた。邦介は禮三に嫉妬をかんじた。松尾が、著名な作家であると云ふことも、その嫉妬に油を注いだことも爭はれなかつた。

「お前は今、敬語を使つたね。」

「使つては惡いの。」

「よせ、みちばたで逢つた人に、一々敬語を使つてゐたら切りがないよ。」邦介は苦々しく云つた。

「みちばたで逢つた人ですつて――妬いてゐるんだわ、では、何んて云へばいいの、松尾禮三の馬鹿々々、これでいいの。」

彼女は、「馬鹿つ」といつて、苦笑した。

邦介は、禮三の話をきいてゐるうちに、自づと微笑みたい氣がした。

「彼方には、今でも貞操の帶てものが保存されてゐるよ、知つてゐるかね、ほら、昔戰爭に行く時、細君の腰を結ひて、鍵をかけていつたつて奴さ、その鍵を君、しつかり軍服のポケットに入れて戰をしてゐたんだから、ハハハハ……。」

禮三は、腹の底から可笑しいといふやうに哄笑した。

邦介も笑つた　が何んとなく、胸の躍らむのをかんじた。

階段を踏む音がして、女中が上つてきた。

「この方が、夜分で失禮でございますがつて。」云つて、禮三の前に名刺をさし出した。

「お通して、それからお茶を新しくしてね」禮三が云つた。それをしほに、邦介は立上つた。

「原稿の方が何んとか決つたら、はがきを上げませう、あアと、君の番地、P町五八五ですか、ようごさんす」さう云ふ禮三の大きな手を、握りしめたい氣持で、階段の中程で、流行の合衽をきた雑誌の人らしい青年紳士と擦れ違ひながら邦介は、表にとび出した。

空も低く押被つてゐたしまだ空氣もしつとりと肌の汗ばむほど生溫かつた、それでも外に出ると、彼は吻つとした心持になつた。ぶらぶらと歩いてゐる邦介の頭の底に、禮三の部屋でみた一つ一つのものがかへつてきた。中央に置れてあつた紫檀の大卓子、西の窓にひかれてゐた樺色の窓かけ、床を飾つてゐた髪の毛を梳つてゐる女の半裸體像、書棚、机、額、これらのものは、禮三の趣味の一端を現してゐるばかりでなく、作家としての生活には、缺くことの出來ないものだ——そんな風に思れてきた。それでこそ初めて、あの青年紳士も訪ねてくるのではないか、と云つて、試みに自分をあの部屋の主人公としてあの磨きのいゝ机の前に、若くは、來客用の大卓子の前に座ることを想像してみろ、一日だつて我慢がならないと邦介は思つた。多分、自分は一日でその笑止な自分の姿に愛相がつきて逃げ出すだらう、よし自分がその喜劇の主人公であることを忍んだとしても、自分は直ぐそれらのものに退屈し、興味を失つて三日の後には、古道具屋の主人を呼んでくるに違ひないと思つた、なんと云ふ不調和であるか、自分は矢張し、客がきても、應接する

室もない、あの暗い家の中で、病める妻と小供とに煩されて、その日その日の生活に追はれて日蔭の蟲のやうに、うち〳〵と生きて行くことが實にピタリと、置かるべき場所に置かれてゐる思つた。これほど自分は貧しさに馴れてしまつたのであるか　邦介は終ひには、この世の中のものは、それ〴〵の約束によつて自分自身の場所におかれてゐるのではないか、そんな消極的な考へにさへ陥ちていつた。所詮、自分が幸運な作家生活に巡り逢ふと云ふやうなことは、一つの迷妄に過ぎない、況してあの明色の合服をつけた青年紳士を迎へると云ふような日は――、果ては、邦介には自分の唯一の武器としてそのうちにこそ、自分の未來の日の希望の全部がかゝつてゐるやうに思つてゐる特殊な、體驗も藝術家の特質のやうに考へてゐる病的な憂欝も、極めて心もとないものゝやうに思はれてきた

糸操工場、印刷所、商店、緣日商人、そんな貧しい人達の間を自分が轉々と移つて歩いてゐる間に、羽振のいゝ實業家を父にもつて、平和な家庭に育つた松尾は學校を出ると、直ちに華々しく賣り出して、しかもあの朗かな性格の中から月々細かい神經の行き渡つた數篇の作品を發表してゐるではないか――才能なくして、藝術に携はるものゝ哀れさ、」その時邦介はフト頭の底に閃き出したこんな言葉が、ピツタリと自分に當嵌つてゐるやうな氣がして、眼の前が眞暗くなるのをかんじた

ほんの今し方一度通つたことのある藥店の表を歩いてゐるやうな氣がして、邦介ははつとして立止つた、彼は、瞳を凝らしてみると、確かに今出てきた松尾禮三の家の軒燈が三足ばかりの所に闇を照してゐるのを見た。長い間、自分を何處をうろつき廻つてゐたことであるか、邦介は自嘲したい氣持で一ぱいであつた。體だに冷めたい汗がにじむやうな氣がした。禮三の家をみた。二階の窓から燈火が闇に向つて末廣形に廣かつて明るい笑聲が流れてゐる切り、階下はひつそりとしてゐた。邦介は吻つとした。

「日中に監督どうかしてゐる――、むしろ早めなくては[illegible]」と思つて、[illegible]
の横丁の十字街にたつてゐる交番の前で、彼にアリキ製のを挟みを頂にうとしてゐた[illegible]を追ひ越した。また
で彼は秋の風に手をつゝこんだ時、金を持つてゐないことに氣がついて、慌てゝ歩きだした。それから向ふはホーとして
ゐて扉を隔てたやうで、意識に上つて來なかつた。

彼は、だんだん自信を失つていつた。頭が狂つたら――さう思ふことは、さうした藝術に對する才能を失つた時よりは、遙に堪へ難かつた。

四

それから一時して、邦介は、××終點に向けて築地に歩いてゐた。さや子に逢はう、さや子に――その考へだけで、彼の頭は占領されてあつた。

邦介はよく、何うとも動きの取れない氣持に陥込む時、さや子に逢ひにいつた。逢つて何うすると云ふのではなかつた。強ひて言へば、姉の所へでも甘へに行く、そんなヒステリックな氣持だつた。

邦介は心のうちに思つた。

「さや子はゐるだらうか、ひよつとして、芝山が歸つてはゐないだらうか。」

ある酒店の前にきた時、彼は前こゞみになつて、店の中の時計をみた。針は九時に二十分前の所をさしてゐた。

「まだいい。」邦介は呟やいた。芝山俊吉が、龜井戸の××辯護士の出張所から歸宅するのは、いつも夜の十一時過ぎであつたから――

邦介は、今日まで、さや子に逢ふ時、人妻に逢ふと云ふ感じを、極めて淡くしか持たなかつた。それは、性格的に家庭の主婦になり切れない彼女であるからによるが、一つには、さや子は子供のために一切を投げ出して生きてゐる女であり、從つて彼女の良人芝山兼吉は、彼女にとつて、たゞ偶然が彼女の上に君臨させた一個の暴君でしかなかつたから――實際さや子は絶へず逃走を企て、未だ一度も遂げたことのない女であつた。彼女が二人の女の子の――一人は、滋野仙三との間に、一人は芝山との間に、生れた所の――母であるが故に。(强ひて云へば、邦介は習慣的にさや子に、女人――滋野の妻と云ふ感じをほんの微かに持ちつづけてゐた)このさや子の境涯は、邦介の胸に田舍の六月の夜の螢狩りの想出を呼び起させた。宵闇に明滅する青白い光に憧れて小暗い田圃道を駈つていつて、足下の水田にぴしやつととび込むあれだつと、思つた。いつも高い所を、美しい夢を追つてゐるさや子が、不良少年に輪をかけたやうな芝山兼吉にかゝりあつて、身動きの出來ない運命の罠に陷込んだ姿をぢつと手を拱いて眺めてゐるより仕方のない自分を幾度、心に嘲つたことであるか!

××終點に近い、賑やかな地藏堂の裏手に横に稍道巾の廣い一道の幹線が走つてゐ、この幹線を中心に狹い幾筋かの露路が縱横に出來て、そこに同じやうな二室か三室の平屋建が竝んで、一區劃を作つてゐる――、そこの中程にあるさや子の家に近づくに隨つて、邦介は足の重くなるのをかんじた。

「俺は惡いことをしてゐるのではない」彼は自分の心に向つていつた。と、今度は闇の中から、敵意を含んだ、それは芝山のだか、よし子のだか、それとも滋野のであるか、誰のだか分らなかつた、がぢつと一つの瞳が自分の上に注がれてゐるやうな氣がした。さや子の家の表に立つた。上り口の一尺ばかり開いた障子の間から俯向加減になつて、器用に動くあみ物の手許をみつめてゐるさや子の横顏が、覗いてゐた。いた〳〵しげにやつれて、暗い影を帶びた顏だつた。

彼は格子戸をあけた。さや子が顔をあげて、はつきりした眸を、彼の上に投げた。それから立つてきて、彼の前にしやがんで、黙つたまゝ彼の下駄をとつた。

「あれから仕事は出來て?よしさんの病氣は?今頃、こんなにおそく、何所へ來たの?」さや子が、いつも彼を見た時間、最初にきくことは、彼の仕事のことであつた。そしてこの日は、彼女は早口に、いろいろのことを、一緒くたにきかうとしてまごついた。

「終點まで、一寸。」邦介には、いつも彼女にあひにきた時でも、直接彼女にとは言はずに、こんな風に口實を濁す癖があつた。

「さう、今歸りなの、行きがけだつたら、わたしも終點に買物があるんだけれど。」

それで邦介は今から行くのだと云つた。さや子は小さい女の子を背負つて、眠つてゐる長女の上に、綿の入つたものをかけて、表に出てきた。

「何うなの、よしさんは、あれから、お醫者さんをかへて—。」

角のおんくしあげの、下卑た看板の出てゐる家の所を曲らうとした時、さや子がきいた。邦介は、首を振つた。

表の通りに出ると、人足も大分まばらに散りかゝつてゐた。

「よしさんは、そんなことないとは思ふけれど」さや子がつづけた。「肋膜から肺になつた人は、隨分あるのよ、そら、家の向側にお針の看板の出てゐる家があるでしよ、あすこの人、一年ばかし肋膜だつて云つて、臥たり、起きたりしてゐて、この間、たうとう二三日前よ、亡くなつたわ、だから今しんから療治しなくつちや駄目よ、仕事の方は何う、書けて?」

邦介は、さや子の言葉がぐい〱自分の痛い所に觸れてくる氣がした。もう澤山だ、さう云つて踵を返へして駈け出したい氣がした。あの切迫した氣持の中で、空想したさや子ではなくて、別な人と步いてゐるやうに思はれた。

「あなたはほんとにぶら〱やさんね、外國の誰かの小說の中に、そんな人が出てくるわ。」

「よし子も、今夜そんなことを云つていたつけ、床やの二階で何をしてゐるか分らないなんてフフツー。」

邦介は、反抗的に云つて、力のぬけた笑ひ方をした。實際彼はさつきから、フト氣持がこぢれ初めて、こうして步いてゐることが、ひどく退屈になり出してゐた。それで彼は、步きながら、兩側の店々の飾窓の中へ瞳を放げかけたり、どろんとした星のない空を振り仰いだりした。それが何うやら、邦介には、さや子の言葉からだけではなくて、原因がもつと、別の所にありそうに思へた。それが、さや子の背中にゐる女の子の小さい眼、あの芝山猿吉に生寫しの黑い二つの眼が、それだと、邦介が氣のついたのは、餘程後になつてからであつた

「ほんとよ、何もあんな所へ逃げ上つたからつて、仕事ができるつてもんじやないわ、そんなだつたら、わたしなんか何う、二人の子供の中でだつて書けてよ、あんなものつて、あなたは笑ふけれど。」

松尾の二階で、自分一人切の小ぢんまりした仕事部屋がほしい、さうしたら、俺にもきつと仕事ができるかも知れない、こんな風に考へたことを、邦介は皮肉にも思ひ出した。

「滋野が二三日前にきたぜ、いよいよ土地をきめて、お百姓を初めるんだつて――。」

邦介が、鬱してくる氣持をかへるやうに云つた。今度は、さや子が、押し默つた

「長井村――、あの三浦半島の江の島へ向いた方の海の見下ろす丘だとかいつてゐる、僕たちにも來いたんて云つてゐたつけ、ひよつとしたら――」「僕たちも行く――」邦介は、さう云ふつもりだつた。が、この場合さや子の感情を

邦よのが曖昧な氣がして口を噤んだ
「行くといいわ、そしてまた二タ月もゐて、いやになつて歸つてくるといいわ。」
いくらか、ブツとした調子でさや子が云つた。
「誰が？」邦介がとぼけた聲を立てた。
「ええ、何處かの、引越し好きの人、それよか、あの人何んとか云つてなくつて。」
みさ子のことをこの女は知つてゐる？さう思つて、邦介はギックリとした。
「いや、何故。」
「そんならいいけれど、わたしこないだ、原宿の滋野のお姉さんのとこまでいつたのよ、教會の米田さんて、滋野の姉學校時代のお友達であるでしよ、あの人に頼んで伴れていつて貰つたの、何うせあなたのやうな、皮肉屋さんに頼んだつて無駄つてこと分つてるんですもの、――そしたら米田さんが滋野をつれに行つたのよ、わたしは門の所に待たしておいて――その間にフイに氣が變つて、電車に乘つて歸つて來ちやつたの――だから。」
「何んだ、亂暴だなア、米田さんが可愛相だよ、正直ないい人なんだつて――。」
邦介は、一本氣な牧師が、滋野に斷られて、多分滋野は、さや子に逢ひに來なかつたであらう――すつかり男を下げた氣持で表に出てきて、彼女のゐないのに氣のついた時の、呆氣に取られた顏を想像すると、失笑さずにはゐられなかつた。
「でも、わたし考へたのよ、わたしが滋野に逢つたつて、芝山と別れたつて、よし又何んな生活に入つていつたにした所で、結局わたしが女であることをやめない限り、わたしは不幸なのよ、女子は三界に家なして佛教にあるでしよ、あの言葉がほんとに分る氣がするのよ、何故つて、女には子供つてものがあるでしよ、だから一度子供を持つたらその生

活がどんなに間違つてゐたつて、その人の一生涯の根はそこに下ろされてしまうの、子供をおいて自分だけ新しい生活に入つたにしても、遂にその人の心は子供から放れることは出來ないの、アンナは何故死んだと思つて、ウロンスキーとの戀だつて、子供のことがなかつたらあんな風な破滅には陷らなかつたと思ふのよ、わたし、あの門の外に立つてゐるうちに、急にこんなことを考へて、何もかも無駄のやうな氣がして來たの。」

その時、さや子は急に立ち止つて、右側にづらりと並んでゐる植木店の方へ近寄つていつた。そしてそこに電氣の火に水々しく照らし出されてゐる、開きかけのジキタリスの鉢を取つた。

「これよし子さんに持つて行つて下さらない。」さや子が云つた。

「いらないや。」邦介はぶつ切ら棒に云つた。何んだか、そんなこと所ではないと云ふやうに。彼は苛々してゐた。植木屋の老爺は驚いて、キヨトンとした眼をして、

「旦那、お安く願つときますア。」と云つた。

旦那と云はれたのが、さや子と並んでゐる時だつたので、邦介は擽たい氣がした。苦笑しながら、歩き出した。

電車は其處まで來てゐた。新しい箱が動いてきては、いろんな種類の乘客を吐き出した。そして、ドカドカと驅け上る新しい人を明るい市内の方へ運んでいつた。時々、中空で、線香花火のやうな青い火花を散らした。

「澄野が、みさ子さんを、これもまあ、芝山氏に迷惑をかけたくないからだらうがね。」邦介が、さや子の氣を兼ねるやうに、こんな風に廻りくどく初めた。「今度川合に行くについて、引取つてもいいやうなことを云つてゐた——手放せる？。」

さう云つたあとで、邦介はさや子のどんな細かい表情の變化をも見逃すまいとした。一瞬間、さや子の顏を、非常に皮肉なヒステリカルな苦笑が掠めた。そして、そのあとで、彼女の薄い上唇の右の犬齒の上が、かすかに痙攣して、ぺそ

をかく前の子供のやうな表情が浮んだ。

「みさ子は、わたしの宿命なのよ、その位のことあなたにだつて分らないことないでしよ、あの子がなかつたら、わたしの生活は、ねこそぎ芝山に奪れてしまうのよ、今のわたしの生活の中で一つ切り芝山が奪ふことのできないものは、あの子に對するわたしの愛情だけなの、さうよ芝山とでない、別な人との間に出來た子供を愛することは、わたしのほんとうに小さな芝山に對する反逆じやなくつて、あの子がなかつたらわたしの生活は、もつと恐ろしいことになつて行きさうなの、だからあなたから、滋野によく云つて下さらないー。」

「僕もう歸る！遅いや。」こゝまできた時、邦介は、急に體操の時の後向前へのやうに、グイと體の向をかへて、今來た道をスタ〳〵と歩き出した。

「僕アね、電車通りを歩くのは嫌いだ、夏の晩に窓の外から、家の中を覗かれるやうな氣がして、だつて、こつちが氣付かないのに先方だけ、電車の中からちろちろちろ眺めてゐるーと思ふとぞつとするよ。」

「へんに、あなたには臆病な所があるのね。」

クスクス笑ひながらついてきたさや子が、ツイに

「それよか、用は？」と、きいた。

「僕はない、さやさんの買物は。」

「わたしも、何方でもいいのよ。」さや子は、平然と答へた。

「何んだツ。」邦介は、吐き出すやうに云つたが、さや子の藏してゐる底の知れない恐ろしいものをみたやうな氣がして、ぎよつとした。

「燐寸一本だつ。」そんな考へが、邦介の頭の片隅で閃いた。

「ほんとに、お醫者さんを更へなくつちやいけないわね。」

さつきの植木やの表まできた時だつた、急にさや子が　しみじみとした調子でいつた。

「今夜、古い原稿を松尾氏、ほら、去年佛蘭西から歸つた、あの人に賴んだのだけれど、あの方が決ればね」

邦介が云つた。

「何の位ゐるの、少しなら出來るのよ、お金はないけれど、これで十圓位拵さいて上げられるわ。」さう云つてさや子は、左の藥指に嵌つてゐた彫のある指輪を樂々と引きぬいた。

妙に哀れぽい感情が邦介の胸に迫つた。こんなやうな經驗は、邦介にとつて初めてゞはなかつたから、現に彼が着てゐる銘仙の羽織を、去年山のお寺でもう秋の風が立ち初めようとする頃、一枚切りの白地で震へてゐる彼の所へ、東京の質屋から持つてきて、小包にして送つてくれたのもさや子であつた。

「この前のもあるし、何んだか餘り自分が哀れでならア。」

邦介は彼女の急に光るものゝ失なつた手から、顔を背けたい氣持でいつた。

「そんなこと云つたつて、何うにもならないでしよ、矢張しないものは、ないんだから、私の方のことなら、氣にしなくつてもいいのよ、それにあの人、又この間から、あれを初めてゐるのよ、お花！ほらわたし小さな、可愛いらしい時計をもつてゐたでしよ、お母さんの生がたみなの、こないだ、あれまで取られちやつたの、だから、これだつて、いつ持つて行かれるか、分らないのよ。」

さや子はさう云つて、地藏堂の前に出た時、その横手の板塀の間に下つてゐる、行きつけらしい質店の、黑い長のれ

んで、少しいたわられるたく、ついた。母を傍にやつにして、泣いていた。

五

方八分ばかりの、赤い紙を貼つた桐の箱をあけると、中に黒い丸薬が入つてゐて、その中から六粒の丸薬が一度に出した。邦介は、それを賣りに來た、支那商人の時代放れのした間拔けた服装と對照して、如何にも、靈藥めいた感じを深白かつたので、半信半疑で買つたのだつた。

縁側で、それを買ふ時傍に立つてゐた隣家の大工の上さんは、

「六神丸には、人間のきもが入つてゐるつて、よく言ひますよ、いやだはネ、きもなんて薄氣味が惡い」つて云へらくしながら不遠慮な調子で云つた。

「わたし、治るものなら、きもだらうと、何んだらうと、かまいませんわ、この頃は、わたし不動さんを信心して居りますよ」よし子が蒲團の中から出て來た、赤い漢字の効能書を見ながら、×の上でいつた。

その藥が奇蹟的に、利いたのだつた。たつた一度そのヒリヽとする、けし粒程の藥を四五粒服んだ丈だつた。

「この分なら、わたし自分のお藥搦へ位できさうよ」よし子は、さういつて褥を放れやうとした。

びつくりして、邦介がそれを引止めた。

「そんな輕はずみなことを——馬鹿だなア、餘り効能(きゝめ)が早すぎるよ」—

その朝、雪國の人が一日毎に春に近づいて行く——あれに似た、個々個々から膨んで來る喜びた、久振りで夫婦の胸を躍かした。

邦介は、四月一杯で床屋の二階を切上げて、その頃病人の口に向く、お菜を作つたり、雞の骨を買ひ集めて來て、ソツプを取つたりするのに追はれ通してゐた

「今日は氣持がいいから、お掃除をしよう。」邦介は珍らしく、下に降りて箒を持つた。

それは、實際五月になつて、稀にしか見ることのできなかつた上天氣だつた。四月中旬の花曇のあの濁つた空が、五月に入つても容易に拭へとられないで、その上時々雨さへ持つて來たので、人々の心は腐々し切つてゐた。別けても、病人を抱いてゐる邦介は、毎日緣側に立つて、雨空を眺めては歎息した。

「日の光りさへ射したら。」邦介は、其處から、此家の凡ての陰氣なものを一掃してくれるものが、とび込んでくるやうに思つた。病人のふとんも天日に曝らさう、それから、さうだ、この緣側の下の汚ない塵芥も掃き出さう、彼は、それらのもの丶中に、よし子を苛む病氣の原始が潜んででもゐるかのやうに顏をしかめていつた。――

向うの空地へ二三日前から地形にきてゐる女達の野卑な掛聲も、長い雨空への勝鬨のやうに響いて來た。空は青々と晴れ渡つて、明るい日の光りは新綠の上に輝いた。

下に降りて、邦介は子供のやうにとび廻つた。玄關先から、表の小路を掃き清め、それから、敷かへた緣の方へよし子を追ひやつた。

「病人は今日は不必要だよ。」邦介は笑ひながら云つた。

「ひどいわ。不必要だなんて、虐待して。」よし子は、枕下の檢溫器や、タオルをとつて、よろ／＼と細い腰を新しい褥の方へ運んでいきながら笑つた。

邦介は、熱で臭くなつたふとんを表の板塀に一ぱいにひろげた。

その時だつた。隣りの大工さんの家と、邦介の家との板塀の境界の古い柱に、一條の細線をなして、間をうけて、きらきらときらめきながら上つて行く羽蟻の行列を認めたのは、――

「羽蟻だ。」邦介がさう云つて、立ち止つた瞬間、先頭をなしてゐた一匹の羽蟻は、まだ水蒸気の立ち上つてゐる柱の頂上に達して、そこから、悠々と、爽やかな五月の空へ、最初の飛翔をつゞけていつた。そしてその次のも、次のも、何んのためらひもなく、軽快に舞ひ立つて行つた。そして、邦介を驚かしたことには、みるみる――全く文字通りみるみるうちに、柱の裂目から湧き出して来る羽蟻の数は、倍加していつて、その薄い羽根の光線で、きらきらと輝く、馬鹿げて立派な柱が、この貧しい一軒の家の中央を飾つたことだつた。それで彼は、この時ならぬ附物を見せるために、わざわざ妻を縁側まで呼び出した。

彼女は、陽の當る縁側にしやがんだ。そして板塀の柱のてつぺんに、むく／＼ともり上つては、光りを孕んだ大氣の中へとび散つて行く羽蟻の光景を眺めて云つた。

「まあ、ほんとうに綺麗ね。」

けれども、彼女の瞳が向うの蒼空を限つてゐる氷川神社の鮮やかな新緑に燃き出した森に落ちかゝつた時、

「今年は、とうとう櫻を見なかつた、来年こそわたし、あなたが去年行つた千葉の三里塚――ほら、櫻のとんねるのあるつて云ふ――彼處へ連れて行つて貰ふわ。」と、力のない溜息を吐いた。そして二分の後、

「あゝ疲れた――。」さういつて、縁側の上に、がつくりと前のめりに倒れるやうに臥た。

邦介は、爽やかな朝の庭で、この異様な生物の誕生のさまを見て、昂奮してゐる最中だつたから、すつかり狼狽した。

「妻は疲れてゐるのだ、こゝまで體を運んできた、たゞそれだけのことが、ひどく疲らせたのだ。」邦介は、あの支那商人のおいていつた靈藥で精力がついたと云ふやうなことは、ほんの一時的の現象に過ぎないのだ――、そして毎日、濁つた空と白眼めつこして、「日の光りさへ射したら、――」さう云つて、待ち望んでゐた日の光りも、自分達の生活とは何の繋りもないのだと云ふことをはつきりと知つた。

「まだ、體を動かしちやいけないね」邦介は、眉根を曇らせていつた。縁側に上つていつて、手をとつて彼女を褥の上に返へした。

縁側の下が、表の小路から吹きつけた紙くづや、細切や、朽葉の類が堆積して、じめじめしてゐるのが、長い間邦介の神經を痛めてゐた。彼は、もう一度下駄をつつかけて、竹箒をとつた。その時もう、羽蟻の群は大方舞ひ立つて、落伍者らしい奴が、ムツ〱と泣喚ひしたやうに柱の面を上つたり、下つたりしてゐた。

長い間、手を入れたことのない、縁下から、濕つた黴の匂ひと共に、土に塗れた木片や、紙屑が短冊形の庭に堆く掃き出された。

「臭ひつ、うぢが、涌きさうだよ。」邦介は、仰山に鼻を摑みながら、澄み切つた空氣の中へ擴つて行く舞ひほこりの行方を追ふやうな眼をした。

その家は、隣りの大工さんの住んでゐる古い家に繼增した新しい家だつたから、まだ普請の時の木片や、かんな屑や、瓦の碎片が、そのまゝ殘つてゐた。邦介の病的な潔癖は、とうとうそんなもの迄掃き出した。

「やあ、へんなものがある」。

その時、邦介は新しく掃き出した木片の間から、チカツと鈍く光るものが轉り出したのを認めて聲を立てた。

「財布だつ。」

實際、その時もう、彼の眼の前の黒土の上に、大形の黒い皮製のがまぐちが轉つてゐた。

「天授、天授」邦介は、笑ひながら、そんなことを云つて、濕氣のあるがまぐちを拾ひ取つて、妻に示した。

「わたし、何んだか、氣味が惡いわ、さつきはあんな、變挺なものを見たし、餘り怖いものを掘り出さないで下さいよ。」よし子が、輕く眼を瞬つて笑つた。

中には、いくらも入つてはしなかつた。内側にぴつたりとくつついてゐる白銅が二つと、青く錆の出た銅貨が三つ四つと、外に電車の片道券が二枚切りだつた。

「仕事にきた大工か、左官だらう、きつと。」邦介はさう云つて中味を、縁側に打ちまけて、金入はごみの中へ放つた。

けれども、もう一度邦介が竹箒をとつて、縁下の奥深い場所を一掃きした時、二ツに折り疊んだ、もう一個の皮財布の轉り出したのをみて、彼はぎよつとした。

「魔物―。」何處からともなく、ふとそんな言葉が頭を掠めた。自分の凶い運命を握つてゐるのは此奴だ―彼は、そんな氣がした。邦介は、わざと妻には知らさずに、そのまゝ塵埃と一緒に、向うの空地の隅へ捨てた。

彼は、すつかり掃除の終つた時、胸のすくやうな心地で、もうかなり高く上つてゐる陽へ向つて、兩手を上げて一つ深い呼吸をした。

いつもの郵便夫が、彼の立つてゐるのをみて、莞爾として、近づいてきて、三通の手紙を渡していつた。若い温順しさうな郵便夫は、終日手紙の來ない時、邦介が凡ての人間に見放されたかのやうに、悄氣込むのを、知つてでもゐるかのやうに―。

邦介が受取つた手紙は三つとも氣持のいいものだつた。一つは、新らしい土地へ移つていつた滋野からの二度目の通信で、質朴だと思つた農夫も、却々ずるい所があるなど書いて、、苦笑したいやうな二つの例が上げてあつた。彼の一町歩六十圓で契約した小作地はこの頃になつて、三十圓内外が一般の相場だといふことを、知つたとか、前の小作人から植付のまゝ五十圓で買つた麥は、餘程上作としても收穫高四十圓そこ〳〵のものであつたとか—その麥の後へは甘諸を植え付ける豫定だし、西瓜も三四種は試作したからこの秋の收穫期は賑やかだから、是非出て來い—そんな風なことが書いてあつた。一つは松尾勝三からで、例の原稿はR社の方へ篤と依頼したから多分好結果のことと信ずる、仕事の方は焦らないで、ご病人をみて上げてほしい、何か不自由なものがあつたら—、簡單で、控へ目ではあつたが、充分に誠意の現はれるものだつた。他の一つは、よし子の學友からの出産の通知だつた。

邦介は、

「よし子!。」と、表から呼びかけたい氣持で歩き出した。

少し前に、邦介はよし子と、ふとした機會から喧嘩をした。最近、邦介の周圍に、婦人に關した二つの類似した事件が起つた。彼の極親しい友人が、どちらも二人宛の子供のある細君と離婚して、若い婦人と同棲したのだつた。

邦介は、夫婦の愛情を三つの段階を通つて、初めて動搖のない、不易の域に達するものだと云ふ信條を、いつの頃からか、抱いてゐた、第一階の盲目的な歡喜から、所謂結婚の危機とも稱すべき、幻滅期を越えて、初めて犯し難い夫婦愛の境地に達するもので、その境地は、愛と云ふには、餘りに色彩に乏しい、地味な世界ではあるが、そこでは、神の愛のやうな廣い、お互に赦し切つた愛の生活が營まれてゐる。少しの浮氣は、彼等の單調になり勝ちな長い結婚生活を

引留めるに役立つても、些かの害にはならない―。邦介は、さうした妻を心から愛したいねがひだつた。さうして、彼自身の結婚生活も、それに一歩づゝ近づきつゝあるやうに思つてゐた。けれども、邦介はこの一つの事件の起きた時、何故かしら狼狽した。よし子は、この狼狽を見遁さなかつた。一日に幾度となく、この話を持ち出して邦介の胸による ものを、つゝき出して正體を確めやうとした。

その時、邦介はよし子の傍で、仰向けに寝轉がつて、外國の小説を拾ひ讀みしてゐた。よし子のこの一人の友人に向ける批難が、だんだん高つて行き、聴き苦しい口調になつた時、

「勿論、僕だつていゝとは言はない。」と邦介は云つた。

「しかしだね、五年前に愛し合つたから、今も尚愛し合はなくてはならない―夫婦の間に、そんな義務みたいなものが少しでも入つてきたら、愛はもう失くなつてゐるわけだからね、妻だから愛するのではなくて、愛するから妻なのだからね。」と、彼は苦笑したい氣持で續けた。

よし子はキッとなつた。うるんだ眼をすゑて、邦介の顔を睥んだ。

「あなたも、その仲間だわ、厭らしい、きつと相手を探してゐるんでしよ、だけど男つて随分勝手のつよいものね、女が子供を生んで、だんだんみつともなくなると捨てゝ、別な女の人と一緒になつていゝなんて―、何うせわたしなんか覺悟はしてゐるけれど―。」

よし子はさういつたかと思ふと、急に掻卷をつまみあげて顔を蔽つて、聲を立てゝ泣き初めた。

邦介はうろたいた。病氣のために、弱つて露はになつてゐるよし子の神經を傷つけたのだと思つた。それで彼は、彼女の心を靜めるために、冗談交りにさま〴〵な過去のことを持ち出した。

彼女は泣き止んでも、つんと顔を背けて、頑くなに押默つてゐた。その頑くな心に、邦介は幾度となく網を投げた。

「お前は覺えてゐる？、ほら僕が九州の村へ立つ前に、一ばんお終ひに信州から逢ひに來た時のことを——。」

「ええ。」よし子が答へた。追想がよし子の心を明るくしたのだ。

「確か、四月の半ばだつたね、上野の山の櫻が散りかゝつてゐたから。——お前は、僕の姉の家へ、きつと敏ちやんか、英ちやんか、何方か一人弟の子を伴れて來たらう、僕はあれがひどく不滿だつた。まだ、僕に對する信頼が全部的ではない、そんな氣がして。」邦介はいつた。

「わたしあの頃、家を抜け出すのに、そりあ氣を遣つたの、お母さんが、儼しかつたの、女親だから間違があつちやいけないつて。それだのに、あなたは、逢ひに行かないつて、叱言ばつかり云ふでしよ、だから弟をつれていつたのよ——」

よし子は、微笑した

「發つ晩に、誰もつれづに、一人で電車道を突切つてやつてくるお前の姿をみた時、僕は妙にドキツとした。八時の汽車で發つていつて、姉の所を出てきて、そして松坂屋の飾窓の所で三十分も待たされて、漸つときたと思ふと、直ぐ喧嘩を初めてさ——」邦介は、いつの間にか、自分もその追想の中へ引入れたやうに晴やかに笑つた。

「あれから、墓地を歩いて、あの停車場の方へ下る坂の途中で、僕が何をしたか、覺えてゐる？。」

瞬間、邦介の心にスーと笑ひないものが入つてきた。彼はふとんの上に組合せるやうにして、放げだしてゐるよし子の青い筋の透いてみえる二つの手を眼に入れたから。——

あの手だ、あの二錢銅貨大の凍傷の痕のある雪國の女に特有の手だ、最初のあらい抱擁の中で、しつかりと握りしめ

たのは。邦介は、心に呟いた。

「何といふ苦しい夜せようであるか。」

併し病人が彼の胸の思ひを遮ぎつた。

「わたし、あの頃あなたのことを思ふと今のあなたと同じ人とは信じられない。さやさんも言つてゐるわ。邦さんは嘘よりも猛つたつて、ほんとうにあなたには、熱つてものがちつともないんですもの。」

「それりやお前、初めてあの人が僕を見た頃は、九州で毎日お前の許へ手紙ばかり書いてゐたんだから。浅野が僕に郵便屋さんて、あだ名をつけた位ゐだよ。所が、お終ひに、實際僕は村の郵便屋さんになつたんだよ、と云つても、日に一度向うの峠を下つてくる郵便夫の所へ渡しをわたつて、取りにいつて、みんなの所へ來た奴を一纏めにしてきて、名を讀み上げる役なんだがね――あの山の中で三日郵便夫が來なかつたら、きつと速成のヒステリーが出來上るよ。七月の初めにうんと水が出て舟が流れちやつて、向岸との交通が止つた時なんか、僕は思ひ切つて、濁流の中を泳いで取りにいつたさ、みんな手を叩いて、はやし立てたつけ、勿論他人の郵便なんか持つてきはしないよ、濡れてしまうだもの、僕は自分の所へ來た奴を郵便やのゐる前でいそいで封を切つたさ。さうしたら、お前僕の所へ、何を送つてよこしたか覺えてゐる？不忍の池の辨天さまのおみくじさ、僕は驚いたよ、だつて、その前の手紙でお前は駿河臺の教會で洗禮をうけたつて云つてよこしたばかりだもの、何にしろあの村へおみくじが舞ひ込んだのは、後にも、先きにも初めてだらうよ。」邦介は、笑つた。

瞬間、彼は新社會を標榜するN村と、おみくじ—笑止なこの對立の中にこそ、自分の結婚生活の奥深い暗示が潜んでゐるやうな氣した。

彼は、ごろつと横になつて、讀みかけの書籍を手にとつた。
「俺達は、何故こんな過去のことなんか、持ち出したらう？さうだ、よし子のヒステリーを靜めるためだつた。だが、待てよ、この小說の中に何か、是に似たことが書いてあつたぞ、あいびきの最中に過去の追憶を持ち出すのは、既に消えかゝつてゐる情火に油を注がうとするのだ——何と云ふ厭やな文句だ—。」

次の朝がきた時、よし子は矢張り心持が晴々しいといつて、明るい緣側まで體を運んで、口を嗽いだり顏を洗つたりした。「あの藥が利いたんだネ、矢張し」邦介は妻のために、お湯や、洗面器を持ち運んでやりながら云つた。
「今日はね、あなたに注文しておくわ、表へ行つたら、忘れずに餡のひらかないのを買つてきて、それに卵を落して頂だい、もし、なんなら煮るのは自分でしてもいいわ。」
いつも、良人が折角作つて運んでくる膳の上のものを、ほんの箸をつけたばかりで、押しやつて了ふたびに、眉を曇らせるのを知つてゐる妻は、褥の上で一人で燥ぎ立てた。
二日經つて、よし子は良人に手傳はせて、髮を梳いた。
「ほんとに、この藥の中には、人間の膽が入つてゐるかも知れない」邦介は、たび〳〵その黑い木筒の中の小粒の丸藥を掌で轉してみながら、今は冗談でなくこんなことを云つた。

六

ある晚、邦介が醫者の歸りに廻り道をして、尖立つたさや子の家の表で、

――ムム唸つたとも、きこえぬくらゐに[illegible]しい気がした、[illegible]てこその[illegible]へ[illegible]
云つて、酒氣を帯びて、眼をすゑ、荒々しく云ひながら、と[illegible]、[illegible]に[illegible]はせる
光景を。板戸を隔てゝ、はつきりとかんずることができた時。お介は自分の胸の[illegible]を、泥のついた[illegible]で、泥
に撫でられたやうな、激しい憎悪に咽つとなつた。がらつと戸を開けて、割つて了ふにしては、間内は狭い所にあり
すぎ、又かうした場合、自分の現れることは、彼等の睨み合ひに、火炎をふりかける程の愚しさであることを。お介に
知つてゐる邦介であつたから、闇の中で音のない地駄太を踏み、中の物音にぢつと神経を集めるより仕方がなかつた。

「危いつたら、みさ子。端へよつてるんですよ。よし畜生ツ。撲つならお撲ち。子供に罪はないじやないか。さア、この無頼漢(ごろつき)!」

隣りの大工の上さんが、亭主を毒付く時。よく使ふあの下等な口調で、男に挑みかゝつて行くさや子の聲に、彼は思はず耳を蔽はずにはゐられなかつた。彼はこの世の中の美しいものが、みんな粉碎されたやうな氣がした。彼はさや子が織井戸へ行く前、ほんの僅かの間護國寺前のボール箱工場へいつてゐた頃。訪れていつて、三間々口のガラス戸から覗いた時。廣い板敷の仕事場の兩側にづらつと並んだ七八人の、糊で光る仕事着をつけた女工に交つて、薄い着の襟で自分の前の色紙に糊をひいてゐる姿を見出した刹那でも、この下司張つた赤口を聞いた時ほど、悲惨な氣がしたかつた。彼の體を、怒りと、憎悪と、羞恥との交り合つた感情が走つた。彼は闇の中で身慄ひした。

「みさ子か、ムム、こんな大きな瘤を背負つてきやがつて、外へ出るヶ逃かすもんか、今夜こそ、思ふぞんぶん蹴らしてやらうと思つて、ちやんと板戸をひいて、はまつたんだぞッ!、いいか、碌なものも着けねいで、女丈夫面をしやがつて、何所の家へいつたつて、主人の歸る時分にゃ、細君でもゐあな、髪でも掻き上げて、湯でも沸かしておくな

ア當り前だ、昨日なんさ、あんな時分まで勝手な所を歩いてきて、火鉢に火の子一ッ拵いてねい、家にゐる時にア、子供をぎあ／＼言はせて、机に向つて、寢言みたいなことを書きアがつて、おい昨日は何所へいつてきた、聞かせて貰はう、俺は立派に法律の認める所のきさまの良人なんだからな、泣くのか、何が口惜しくつて泣くのだ、おい何所へいつてきた、みさ子にまで、口止めしちまいやがつて！。」

先刻よりは、急調ではなかつたが、いやに落着拂つた、粘りづよい鉄吉の聲に交つて、固く押し默つた口を、時々突破つてくるかと思はれるさや子のしやくり上げる聲が、邦介の胸にふるひついた

「わたしはネ、そんなに迄、自分のしたことを輕蔑したくないからネ、かうしてぢつと眼をつむつてゐるんじやないか、でなかつたら、わたしは、とつくに生きちやゐないんだよ、わたしの一生にあんたのやうなものとネ、ちよつとでも交渉を持つたといふだけでも、恥かしくつて生きちやゐられないんだよ、だけど、それじやネ、餘り二人の子供が可愛相だからネ、わたしの中には、あんたと一緒になる要素なんか、これつぽつちもないんだよ、いけない、いけないつたら、エイツ。」

「みせろ！　みせないか、一言でも俺の悪口なんか書いたら、みんな破いちまつてやるから」。

もういちど、二人の烈しく挑み合ふ音がきこえた。男の腕にでも縋りついて、蹴倒されたらしい女の悲鳴をきいた時、邦介ははつとした。

「原稿だな。」

ドシンと、何かの打倒れる音と、瀬戸物の壞れる音と、ワツと、魂切るやうな、子供の喚き聲と、つゞいて、ドカドカと障子を開けて、戸外の店へ轉り出す音か、ごつちやになつて聞えてきた。

その途端に、邦介は非常な素早さで、[illegible]
て、息を切らしながら、闇を透した

彼は、あの瞭然たる物音をきいた時、殆んどそれと同時に彼女の家の軒続りの、滑りの悪い格子戸が、中側からあくのを見た、邦介はそれが、かうした場末町の夫婦喧嘩の幕切れには、必らず出てくるおせつかい好きな近所のお婆さんの出現であることを、直感したから、―實際又、彼の想像はあやまたなかつた。さや子の家の格戸があいて、中から流れてくる光の帯の中に、髷に結つた若い女の姿が浮き立つてゐた。

邦介は吻とした。しかし、彼は心の何處かで、何んと云ふ平凡な幕切れだ―と、呟やいてゐるやうな氣がした。

「實際、幕は終つたのであらうか、」邦介は、歩きながら思つた。さや子の性根を入れかへる―あの男は、心からそれの可能を信じてゐるのか、―と、その時、邦介の頭に、今歸つちやいけないさや子は、すぐやつてくるのだから、そんな豫感といふには、餘りに出鱈目な考へが閃いた。そして彼は、それがたん〳〵信じられるやうな氣がしてくるのだつた。今、逢はずに歸つたら、彼女の一生にとつて、取返しのつかないことが起きる、邦介はそんなことを考へながら、表へ出るまでの狭い小路を、長い板塀に添つて二回ほど行つたり、來たりした。近くの二階で、下手なヴイオリンをギイギイ言はせるのが、無闇に彼の神經を苛立たせた。邦介は、とう〳〵我慢しきれなくなつて、表の通りへ向つて歩き出した。が、その小路の終らうとする所で、邦介は未練がましく、もう一度逆に歩いて、おんくしたげの所まで來て、さや子の家を透しこみると、ひつそりと靜り返つてゐた。彼は勇を鼓して、近づいていつて表に立つた。明るい光りを、一杯に孕んだ障子の中は、何事も起らなかつたもののやうであつた。彼は自嘲したい氣持で、表の通りに出て早足に歩き出した。そしてこの邊に書店のないのを見込んで、新らたに出來た新古取り交ぜの雜誌店の前にきた時、

邦介は意外にもさや子が、小さい女の子を、しつかりと背中に結びつけて、その店の表に立つて、新刊の雑誌を拾ひ讀みしてゐるのを見た。この落着拂つたさや子の容子が、彼をわけもなく腹立しくした。

「俺は、何んといふおせつかいだ！」彼は、心に呟やいた。三足ばかり、すた／＼と行き過ぎて、振り向いてみた時、彼は自分の上に注がれてゐる、さや子の瞳をはつきりとかんじた。そして次の瞬間、手にしてゐた雑誌を、台の上にかなぐり捨てゝ、急ぎ足で近づいてくるさや子を見た、

「この表にゐたら、誰かに逢ひさうな氣がして、さつきから、立つてゐたのよ、これ買つて下さらない？、原稿なの、危なくつて、初終(しよつちう)持つて歩いてゐるの。」

彼の前に立つた時、さや子は、眞先きに提げてゐた風呂敷包みを、示しながらいつた。

「今ね、みさ子をつれて、この邊に飲みに出てゐるの、あの子さへつれて行けば、わたしから人質をとつたつもりでゐるのよ、家が面白くないと、何軒でも飲み廻つて、きれいに使つてくるわ、だから××橋から向うへ行きませう、わたし今夜聽いて貰ひたいことがあるのよ、あなた皮肉らないで、聽いて下さる？」

さや子の言葉に、邦介はのつぴきならない、ぎり／＼と迫つてくるものゝあるのをかんじて、默つてゐた。けれども、その時もう、二人は丁度一間ほどの距離を保ち合ひながら、目的の方角へ向つて歩いてゐた。

「わたしね、二三日前に、手廻りのものを、すつかり片付けてしまつたのよ。」

大通りを二度折れ曲つて、遊園地のSへ通じてゐる私設電車の踏切を横切つて、暗い小路へ入つた時、さや子がいつた。邦介は、さすがにギクッとして相手の顔を見た。彼の中で、勇敢に、勇敢に――さういつて煽り立てたいものと、危ない一本橋だ、――さういつて、引止めたいものとがこんがらがつた。

一部分に大事をとらないと、互ひがいつかこそらしい芝山を作ることになるだらう。僕はさうつき、あなたの気ヽたらこと芝山氏の（彼は、僕と氏と云ふ言葉を使つた）言ふことをきいて、あの人の気持にも同感できるやうな気がしてきたのだ。芝山氏は、あなたに一個の女であることを求めてゐるのだ、問題は、何といふ深い所にあるのだらう、あなたは一個の女なのか、それとも、もつと別なものなのか、問題の要點はこれにあるのだ、家庭は、女子の個性がうんと薄弱であるか、それとも、間抜けて強大であつて、全然生活の中心になり切れるか、何方かであることが、必要なのだ、あなたのやうな中途半端な場合は、一ばん困るだらう、男は、只男だと云ふだけで、優越をかんじるだらうし、その癖いろんな、教養とか、趣味とか、讀書とか、交友とか云ふ點では、絶へずあなたに壓倒される、だから、あなたの家はいつも、二人で中心を奪ひ合つてゐるのだ。そこに衝突があり、嘆きがあるのだ。その上尚いけないことには、芝山氏があなたに惚れぬいてゐ、二人の子供があり、あなたが又、並外れた人情家であることだ。——」

邦介は、さや子が餘り固く押し默つてゐるので、言葉を絶つて顔を覗くやうにした。大きな屋敷の生垣に添つて歩いてゐるので、彼女のぼやけた顔の輪廓だけしか眺められなかつたが、泣いてはゐないやうであつた。

「あなたが家庭の人になり切るか、つまり二人の子供の母になり切るか、それとも、自分を活かす道を外に求めるか、何方か一ツを撰ぶより仕方がないのだ。そして、家庭の人になり切るためには僕との交際を絶つことが必要なのだ、ええ絶對に必要なのだ。」

これは、邦介が長い間胸のうちで考へたことで、彼女が家庭の主婦に、——芝山の生活に同化し切るためには、避けがたき條件なのであつた。

邦介はその時、さや子がふいに、右側の屋敷の板塀に凭れかゝつて、袂で顔を蔽つて——その時、さや子はセル地の

白ぽい單衣をきてゐた――しやくり上げるのをみた。邦介は、狼狽した心持で、立ち止つて眺めながら考へた。

「俺は、この女の神經を傷つけるやうなことを云つたのだらうか？」

「厭だな、泣いたりなんかしちや。」さういひながら、彼は自分も涙を誘はれるのをかんじて、彼女の袂を引張つて歩き出した。それが、何となく、中學生の戀のしぐさのやうな氣がして、苦笑された

「あなたわ、怖ろしい人だわ、いつもそんなやうな言ひ方をして、わたしを脅やかすのよ、交際を絶つことが必要なのだ、――何と云ふ巧みな脅迫でせう。あなたの言葉が、私にどんな暗示を與へるか、わたしは、三日經つたら、多分あの家にゐなくなるわ、きつと、わたしは、支那へ行く時も、あつちからくる時もさうだつた。芝山と一緒になる時も、いつもあなたの暗示なしには動かなかつたのよ、わたしは、昨日三浦へいつてきたの、滋野に逢ひにいつてきたのよ――この間の晩、あなたに逢つた時から、滋野が急にあなた達を棄つて行きさうな氣がしたの、みさ子はわたしさへついてゐれば大丈夫だわ、――さう思ふとじつとしてゐられなくつて、芝山が朝出かけると直ぐに山の手線で品川までいつて、横須賀についたのは十一時半だつたのよ、あすこから自働車でいつたの、自働車の立て場から、滋野の家の近くにある小野といふ人の別莊へ行く廣い道ができてゐるの、麥畑の中の一軒家で、溫室なんか出來かゝつてゐたわ、――そこで、わたしが何を見たと思つて？滋野はあすこで結婚したのよ、初め若い女の人が出て來たから一寸面食つたけれど、すぐあの人がでてきて、畑の中へつれていつたわ、そして何か云ふことがあつたら、言つてくれつていふでしよ、わたし、滋野の顏をみたら、何んにも云ふことがなくなつちやつたの、さうしたら、磯部君の所へ行くかつて向うできいたから、ええ、初終行き來すけれど、わたしがあそこへ行くのがご迷惑ですかつていつてやつたの、――まだ何か云へたい容子だつたけれど、わたし急に歸りたくなつて、あの子の手を引いて濱道の方へ出たの、坂の所で振返つてみたら、あ

の人間の中に立つて見てゐたわ。」

邦介は、その時凡ての謎が解けたやうな氣がした。成程、さや子は、現在の生活を破ることによつて、芝野へ一歩近づく手段だと考へたのであつた。そして、芝野の結婚によつて、彼女の希望が全然破れた時、もう一度、彼女の[illegible]昧に家なきの悲しい諦めによつて、現狀に忍從しようと云ふ考へに落ちかけたのだつた——そこへ自分が現れたのだ、[illegible]はと今夜、彼女の考への分水嶺に於て自分は逢つたのであつた。と、思ふ瞬間、邦介の頭に、さつき闇の中できいたあの叫喚、さや子が泣きじやくりながら、芝山の前で訴へた一言一句がはつきりとかへつてきた。

あの法律書生の對照になるには、この女は餘りに價が高過ぎる。豚の前に眞珠だ！と、彼は思つた。自分は明夜にこの女の悲慘な結婚生活を破壞する補助者の役を勤めるべきではないか、切ば詰つた運命の底に陷込んだ時、この女の中から、案外閃き出すものがあるかも知れない、ほんとうの藝術は、さうした環境の中から生れ出づるものだから、芝野は結婚したのだ、今こそ、友人の妻ではない不幸な女であるさや子——、

金、妻、二人の女の子——この三つが、邦介の前で、ぐるぐると旋回した。

「あなたは、金はあるだらうか」彼はその時、さや子がたび／＼自分のために用立てゝくれた金のことが、意識につき纏ふのをかんじて云つた。

「それがね、今惡い時なの、もう少し、早くだとよかつたけれど、でもね、いよ／＼つて時には、二十圓位できると思ふの、部屋さへ一つ借りれば、あとは田舍のお母さんから、少し助けて貰へば、子供のもの■措いても、やつて行けると思ふの。」さや子が答へた。

二人の子供を養ひながら、名のない女の原稿生活　、邦介はつよく首を振つた。

狹い通りがつきて、暗い辻の眞中に若葉の枝を擴げた櫟の並木が立つてゐ、その間に、新しく建つた家が二三軒づつ飛び々々に置れてゐる、この邊では珍らしく都びた感じのする所へ出た。ここを一寸右へ入ると、帶の邊りまである麥畑が、小徑の兩側につゞいてゐた

二人は、そこの畦草の上に腰を下ろした。向側の麥畑が、丘の緩い斜面に從つて、だん／＼高く這ひ上つて夜の空を限つてゐた

その時、この闇の中に走つて麥の穗先の、規則正しい、無限のひろがりが、フト何處かの海邊で、戀人とでも肩を並べて、海面を眺めてゐるやうな、馬鹿げ切つた夢想を、邦介の頭に呼び起した。そして、彼はそこにさや子が、少し俯向加減に蹲つてゐるのに氣がついてはつとした。と、ふしぎなことには、あの五年前の夏の夜、九州の海岸で彼を襲つたやうな混亂が、再び落ちかゝつてくるのをかんじた。

自分の傍にゐるのは女だ、しかも二十六と云ふ熟し切つた、並外れて豐滿な肉體をもつた女だ、柔かい肌と、灼きつくやうな唇と、黑くすんだ眼とをもつた、あらゆる戀の秘術を知り切つてゐる女だ、しかも、自分を誰よりも深く愛し切つてゐる女だ、この女に嫉妬を感んじないのは、この女の愛情が何人との抱擁の場合でも、自分の上にあることを固く信じ切つてゐるからではないか、妻に嫉妬をかんじるのは、寧ろその反對の原因からではないか、それだのに五年の間、いかにおづ／＼と、敵の要求を探るはたおり蟲の觸角を動す時のやうに、遠くから探り合つてきたことか、心臟を掴むとか、胸の鍵を開くとか、そんな戀愛修道者のやうな、面倒臭いことは要らないのだ、たゞ一度自分の口が、この女のそれに近づきさへしたら、そこから、凡てのものに對する情熱が奔り出るのではないか、全世界が明るく輝き出すのではないか、自分がこの日頃無意識のうちに、探り求めてゐるものは、直ぐ眼の前に投げ出されてゐるのではない

た、しかも、こゝでは、今は完全に友人の妻ではないのだ　（彼は、その晩、殊にこのことにこだはつた）二人の間には、際涯のない闇のひろがりがあるだけだ。——この女は、果して一部の人のやうに、自然主義の悪魔だ　さう云つて、詛咒すべき女性であらうか、たゞ一般の女達よりは、少しばかり正直な所があると云ふに過ぎないのではないか、よし、全然排斥すべき女性であつたとしても、この女の象徴するものは、過渡時代の日本の一面ではないだらうか、——併も、この女は、いつも自分の暗示なしには、動かなかつたと云つてゐるではないか。（いくらかは、女性特有の誇張があるとしても）

邦介は、所在なさに引きちぎつた麥の薄甘い莖で、子供の時よく弄んだ笛を拵いながら、殆んど獨言のやうに云つた。

「異性の間に、友情といふものが、有りうるだらうか。」

時々向うの人家のある所で　子供が玩具の投げ花火を、星のない中空へ向けて放つてゐた。蛙の鳴き音が遠くの方で聞えた。風は全く死んで　麥の穗先一つ動かなかつた。

「たとへば、かうしてゐる時　二人のかんじ合つてゐるものは、友情と云へ切れるかしら。」邦介は重ねて云つた。

「わたしは、さうね芝山と一緒になつた前後よ　あなたを殺さうと思つて、一ト月ばかりの間　それぱつかり、考へつゞけてゐたことがあるの。」

落着切つた、併も底の知れないもののひそんでゐるやうなキツとしたさや子の聲だつた。この言葉が　邦介を思はずヒヤツとさせた。

「ム、」彼は、口の中で云つて、ちつと相手の顏を見た。その瞬間、彼女の背中で　黒い二つの小さな瞳が、まるで鋭

く評價でもするやうに、自分をみつめてゐるのを、はつきりと、闇の中にかんじた。あの眼だ、あの晩自分の氣持を堪へ難くしたのは、—さう思つた時、彼の感情は非常に冷やかに落着いていつた

「これはほんの假定だけれど」さや子はつよく念を押すやうにいつた。「五年前に、わたしがあなたと一緒になつてゐたとしたら、あなたはきつと今夜、誰かと—さう多分よしさんかも知れないわ、こゝにかうしてゐるんじやなくつて—わたし、一般の結婚生活つて、みんなそんな風に思ひて來たの、何處を見ても、退屈を嚙み殺し合つてゐる—。」

邦介は、容を振り仰いで、一寸の間不快な表情をした

「わたしは、自分の中にあるさう云ふものを、余りよく知りすぎてゐるの、だから、この頃じや、だんだん氣持が變つて、わたしは、あなたとの間に、一つの此世には又とない立派なお宮を作りかけてきたの、—あなたは、又夢だつて笑ふけれど—その中には、同性の間には、見ることの出來ない、香りの高い、芳醇なものが、どつさり詰つてゐるのよ。」若しあなたが、このお宮を汚したら、わたし恨んでよ、きつと！あなたが、よしさんをどんなに愛してゐるかつてことは、あなたより、わたしの方が、よく知つてゐる位ゐよ、だから、わたしこの頃では、あの人を自分の妹より可愛いと思ふことがあるの、あなたは嘘だと思つて？、この氣持に搖ぎがあつたら、わたしのお宮は本物ぢやないわ。」

この氣持は、邦介には、分るようでもあるし、又分らないやうでもあつた。しかし、彼女がよし子を愛してゐるといふことは、肯定できる氣がした。で、彼は云つた。

「嘘だとは思はない。」と、そして、彼は心に思つた。この女の夢は、どれほどの悲慘な境遇にあつても、又逢曳と隣り合つたほどの、こそろ歩きの場合でも、みじんも崩れないのだ、この夢の中には、一日に夢として、笑ひ消して了ふことの出來ないものがあるのではないか—。

「歩かう！」彼は、その時自分の中にある醜いものを、すつかり見透されでもしたやうにたじろいで、ふいに立止つた。子供等の投げ花火―と云ふのよりは、もう少し仕掛のある流星とでも云ふのに近い は、だん／＼近く弧を描きつゝ空を這いて、彼等の方へとんで來た。

「こんな所で、怪我でもしたらやり切れないや。」邦介は笑つた。彼は、さうした場合、世間の人の投げかける非難を想像して、擽つたい氣がした。

彼は五六歩歩いた時、全くあらしの過ぎ去つてゐることをかんじた。友情！自分の何所かに、さう云ひ切ることのできないものを感んじてはゐたけれど、あれだけの場合に、ほんの薄い、紙一枚隔てゝ潜んでゐる不可抗力を引き出すことのできなかつた各自の中に、單に怯懦と云ふやうな言葉で片付けて了ふことのできないものがあるのだと思つた。五年の間、お互に相手の正體を探り合つてゐるうちに、自分達は余りに深く理解しすぎ、今では、あの純一な戀愛に伴ふ冒險的興味が全く失はれて了つたのだと、彼は心に呟いた。俺は、この女の夢のお宮を今こそ、傷つけずに濟みさうな氣がする―

彼等が、直き近くの省線の踏切を横切つた時、がたんと音がして、要心棒がその背後に下りた

「一寸ね、見て行きませう、電車の通るの、」

踏切から、二三歩行き過ぎたさや子が云つた。邦介は、苦笑しながら、引返して行く女の後姿を眺めた。

殆んどがら空の箱を、三つ連らねた電車の窓々の火は、沿道の闇をほんの一瞬時、明るく照し出しながら、爽やかに走つていつた。そして、闇の中へ遠のくほど美しく、華麗な百足の動いて行くやうな電車が、全く視界から去つた時さや子は彼に近づいてきた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「眼の前をスーと通つたあと、ほんとに胸がすつきりするわ。」さういつて、さや子は、實際その言葉通り、すがすがしいといふ表情をした。

「僕はね、田舎へいつてくるよ。」明るい大通りへでゝ、別れようとする時、邦介は云つた。

「何所とはつきり決めたわけではないがね、そして例の仕事を片付けて、とにかく金を作る、今の場合それより仕方がないから、幸ひよし子も、この四五日非常にいいしね、時々氣晴らしにお菓子なんか自分で拵つてゐるよ、それに信一は、當分神田の義母の方へ預つて貰ふことにして、この間つれていつたから、それで僕が歸つてくるまで、さや子さんがきて病人を見てゐてくれないか、さうして、その間にお金を作つておいて間借り生活を初めたら、一松尾氏に頼んだ原稿もそのうちには決ると思ふよ、たゞ僕の旅費と、さや子さんが、病人の神經を傷つけないやうに出來るか何うか、問題は、二つだが、旅費は何んとかなるよ。」

「さうして下されば、うれしいわ、わたしあの人を怒らせなんかしないわ、荷物は車屋さんに頼めばいいし、子供の玩具に、下駄と―みさ子の幼稚園の方は當分休ませて、また何所かいい所へ下げるわ」さや子は、まるで引越しの中が長に待つてでもゐるやうに、算へ上げながら喜んだ。

「立つ前の日に、と云つても旅費の出來次第だけれど―」邦介は、考へ深さうに云つた「僕が一寸知らせるから、それまでもつと落着いてゐるんだな、そして、僕はよし子に默つて行くからね、だしぬけに出けてきたつて云ふ方がいいよ、女は、女同志の方がいいよ、僕はまるつきり知らないことにしておくから、」

「何んだか、よしさんに悪いやうな氣がするわ、欺くやうで。」さや子が云つた。

かうした場合、最善の目的のためには、感情に支配されてはいけない、それは相手を欺くのではなくて、ほんとうに

深く愛するものだけが、なしうる一つの行ひなのだから――そして、さう云つてさや子をせきたてた。

さや子は、明日の仕事のことを、呉々も頼んで、[illegible]に隠れていつた。

急に、邦介は仕事に向つて心が動き出したやうに思つた。想像は多分、[illegible]であらう、海岸、山のお寺、遊野の川谷、邦介は一つ一つ頭に描きながら歩いた。彼はふいに、[illegible]家のことを思ひ浮べた。久しく帰つたことのない、生家とは云つても、今は他人の住んでゐる故家につゞいた、町へ嫁いでゐる姉達が墓参の途次憩み場に使ふ外、開いたことのない六畳の離室のことを思つた。夕日の明るい、静かな村の、誰とも交渉のない、あの埃で埋つた部屋は、疲れ切つてゐる自分が、頭を静めるにふさはしい場所だ！

三叉路の所に、二三日前に通つた時、見えなかつた金魚店ができ、その表に二三人呑気さうに立つて、金魚の品さだめをしてゐた。もう、金魚がでてゐる――さう思ふと、邦介はいらいらしてきた。彼は、さや子が今夜白ぼい、セルの單衣をきてゐたことを思ひ出した。この間から、よし子に縁の上から、お隣りのおせいちやんでさへ――さういつて、責め立てられてゐる唯一のネルの單衣のことが頭に浮んだ。彼は、ふしぎに道を歩いてゐる人の着物が眼についた。みんないつの間にか、肌触りのいゝセル地に更衣して、彼のやうに念入りにも袷に、給羽織をきてゐるものは、見出せなかつた。彼は急に、體が重くなつたやうな氣がした。しかし、彼はこれらのことを直き忘れて了ふほど愉快であつた。

多分、よし子は、この四五日のやうな容態で、順調に進んでいつたら、自分があの長い仕事を終つて帰つてくるまでには、よくなつてゐるだらう。さや子は、留守中病人を親切にみてくれるだらう、今度のことは、さや子の度々都合してくれた金に對しても、多少責任が脱れるわけだ。それから、さや子のあとを追つて逆川がやつて來た場合に、――彼は、最初に自分の家にやつてくるに違ひない――自分のゐないことは、非常に得策ではないか――

彼は家の表通りにある、この頃出來たばかりの青物店の前に來た時、品物を並べる戸板を片付けたあとの石油の空箱の間に、紙屑や籾がらと一緒にかなり大きな夏蜜柑が一つ轉がつてゐるのをみた。店を仕舞つたばかりと見えて、ガラス戸の内側にひいた白い幕の間から電氣の光がさしてゐたし、話聲さへ洩れてゐたけれど、邦介はそつと拾ひとつた。彼はそれが全くきづのない新鮮な品であることを知つた時、くすつと笑つた。青物店の若い夫婦が、恐らく戸板を荷ひ込まうとする刹那、轉り落ちたのに氣がつかなかつたのであらう、――最善の目的のためには、――さつきさや子に向つていつた、こんな言葉を思ひ出して苦笑した。

邦介はさもそれが買つて來たものでもあるかのやうに、掌の上でお手玉のやうに輕くポンポンとつきながら家の中へ入つた。

七

礒部邦介は、五日經つて目的の旅行に出た。その頃熱の度も下り、食慾も進み、室内の歩行位には疲勞をかんじないほど、病勢の怠つてゐた彼の妻は、この旅行を悦んで贊成したのであつた。昨日松尾權三から借りてきた金を、仕度の整つた彼が折半して、自分のポケットへ收めた時、妻は眼の前の三枚の五圓紙幣の一枚をとつていつた。

「旅に出ると、お金は要るものよ、わたしの方は何んとかなるわ。」

「今度は、外の所へ行くのと違つて、安心だよ、いよ〳〵つて時には、姉達もゐるし、それにあんな山の中で何が要るものか、往復の旅費と、米と、炭と、――深山だよ、若しR社の方が決つて、お金がきたら、送つておくれよ。」邦介はいつた。

「今日は注射をして一時に坐つてゐたら困るわ。でも、半分だけに、[illegible]、[illegible]、お[illegible]、お医者さんがしてくれるでしようね。」

「僕はかうしてすつかり、仕度ができてたら、急に行くのがいやアな氣がしてきたよ。久しく出つけないからね、それとも病人を置いて行くからかしら、お前、正直にお言ひよ、淋しくないの、お前が淋しいなら中止めてもいいんだぜ。」

耶介は急ひこんなことを云ひ出した。

「寂しくないことはないけれど、そんなことを云つてゐる場合じやないわ、お金まで借りて來て！　それに敏ちやんが一日隔きにきて、お醫者さんにいつてくれるし、お隣りの方だつて表の買物だけはしてくれるつて云つてゐるんですもの、大丈夫よ、よく〳〵困れば母さんがきてくれるわ、それより、向へいつてブラ〳〵してゐたらきかないわ。」

妻の言葉が、彼をいくらか勇氣づけた。彼が小さな包みを提げて、表に出た時、妻は久振りで板塀の所まで出て來て、

「お腹を氣をつけなくうちや駄目よ、この前のやなことがあるから。」

さう云つて、眼をしば叩いて、朝の光の中に立つてゐた。

そのよし子の、しよんぼりとした姿が、長い間彼の眼から離れなかつた。

それでも、列車が、輕井澤を過ぎる頃には、彼は今朝停車場へ急ぐ途々のやうに、此旅行を悔いてはゐなかつた。寧ろ、その反對でさへあつた。親しみ深い高原の蒼空が、新鮮な落葉松の緑が、滑かな嬰子の背のやうな、山脈の起伏が、汚れた眼を洗ひ去つてくれたやうな氣がした。

三つ間を隔いた斜かいの腰掛で、上野からづつと眠りつづけてゐた商人體の四十男が、車がある停車場に止つた時、

周章てゝ車中をがたつかせて下りていつたあとに、代つて掛けた土地の婦人らしい、若い母親に伴れた女の子の帽子が、ふと邦介にカツフェー六月での滋野仙三を想ひ起させた。と、今度は、邦介の眼の前に樹木の多い庭園に子供用の木馬や、ブランコや、滑走機の設けられた、アメリカ風の建物が浮んできた。可愛らしい、明るい色の洋服を着た男女の幼兒が入り亂れて、遊んでゐる、やがてベルが鳴り渡る、幼兒等は建物の中へ集つて行く、オルガンの音が、開かれた窓々から流れてくる、健康に輝やく若い保母の、覺束ない子供等の聲との、合唱が朗かに聞える、そして終りのベルが鳴つた時、建物の正門から、幾組かの母と子は溢れるやうに、吐き出されるのだ。昨日邦介は、瀧の川にある××幼稚園の正門の前に立つて、この多くの母と子の群に打交つたさや子を見た時、初めてそこに母としての彼女を見たやうに思つた。貧しい生活の中から納める月謝でさへも容易ではないのに、道程にしてたつぷり半里もあるこの幼稚園まで、送つたり、迎へたりするといふことは、父のない子に對する母親の深い心が動いてゐるやうに思つた。

「明日郷里へ立つよ、みさちやん、今日は、何を教つた？」邦介は、さや子の前に立つた時、自分の話しかけてゐるのは母としてのさや子だ——さう心に呟やきながら、女の子の淡紅色の草履袋を提げてゐるふつくらした小さい手をとつて云つた。

「さう、旅費は出來て？よかつたわね」さや子はさう云つて、女の子の帽子に一寸眼を落したが、急に聲をうるませていつた。

「わたしが少し、調子を合せてゐると、何も知らないで悦んでゐるわ、この頃あの人の顔をみるのが可愛想な氣がするの、わたし弱いのかしら。」

「それもほんとうだ！。」邦介は言ひ放つた。

一あなたとさだ民との間に、二つの其れを手本にして立派なお宮が作れるなら、そのお宮に、あなたは、[illegible]かけてゐるお宮よりは、ずつと立派だ。しかし、あなたには、作れないだらう。」

彼は、鮮やかな窓外の景色に見惚れながら、その時、さや子の前で、自分が心の中で呟やいた言葉を思ひ浮べて、苦笑した。……バサツと、膝の上の雜誌が、床の上に滑り落ちた。

Y驛で支線に乘りかへた邦介は、日の暮方まだ開通して間のない郷里の町の、桑畑の中に建てられた、みすぼらしい停車場に着いた。

邦介は古い家の離室の、長年閉て切つてあつた雨戸を開け放つて、西に向いた窓際に子供の時から据ゑられてゐる桐の机の面に、厚く溜つた埃を拂つて、原稿紙と、インクと、ペンとをおいた。

自然は、晩春から夏の初めに移りかけてゐた。

彼は、飯時になると、母家を便つてゐるお民婆さんが、高い脚のついた食膳にのせて――この膳が彼を苦笑させた――運んで來てくれる麥飯に、鹽引の鮭をつつついた。

瓦屋根の雀の子は、巣立ちするに少し間があつた。裏庭に枝を伸してゐる梅は、青い實を持つてゐた。石の多い田舍道を、野菜や焚木を町へ運んで行く車の音が、時々彼の部屋へ響いて來た。

邦介は、時々東京のことを思つた。さうすると、凡てが、夢のやうな氣がされるのであつた。彼所には、自分の妻や、子供がゐる、それから親しい友達がゐる、そして、自分はこの靜かな田舍で日を送つてゐる、今の自分の生活が夢であるか、それとも、かつてあつた都會の生活が夢であるか、何方か夢であるに違いないと、思はれるほど、それに慣

け放れた世界であつた。

　しかし、邦介はさや子のことを思ふと、火をつけておいた火藥の爆發を怖れるやうな氣がされるのだつた。かと思ふと、

「わたし弱いのかしら、」さういつて俯向き加減になつたさや子の姿が、ふいに眼の前に浮んでくる、と彼は又危ない口火が途中でもみ消されて了つたやうな安易な心持になつた。

　邦介は珍らしく根氣よく机に向つた。夜は疲れて早く眠りについた。が眠りの中で、よく家族にあつた。妻を苛めたり、嫉妬したりする場面をよくみた。彼は高い聲をたてゝ褥の上にとび起きたりした。着いて三日目に、初めて帶封をよし子の書いた新聞を受取つた。彼は何となく吻つとした。中一日隔へて、よし子の手紙と一緒に番茶と焙じ器の小包が受取つた。彼女は綠茶を服まない良人のために、この二品を選んだのであつた。彼はその手紙で初めてさや子の家出を知つた。二日前の夕方です——と、よし子はかいてゐた。表に俥が二臺も止つたので、驚いてわざ／＼褥を放れて玄關に出てみると、さや子さんが二人の子供をつれて立つてゐました。そして、私を見るとふいにしく／＼と泣き初めました。あの人は家出をして來たのですつて、二人は抱きあつて泣きましたの。一臺の方は、荷物でした。それで當分おいて上げることにしましたの、あの人は、お父さんのゐないのを知つて力を落したやうです。狹い家の中は、子供と荷物で一ぱいです、でも少しの間なら、私は堪らへるつもりですの。その晩芝山が表から、お酒の匂をプン／＼させて、呶鳴り込んできました。丁度さや子さんの出た留守で、私一人を掴いて、喚き散らしてゐました。お父さんが四五日前から田舍へいつてゐるつて云つたら、呆れた顏をして、さや子さんの歸るのを待つてゐましたけれど、とう／＼歸つて來ないので情氣て歸つて行きました。さや子さんは一度家の表まできて、又驛の待合室へ逃げていつてゐたんですつ

こと、一ト［illegible］、ささやかに、あの晩になつて［illegible］——
それからには［illegible］がいいと云ふこと、積つてゐるのたあたて／＼一家で一緒にしておとなしく暮していくたと云ふことなど、書きつけてあつた。

邦介は、さや子が実際にとつた判斷を聞いたと云ふのを讀んだ時、おそ／＼居のしぐさをなにかのやうにたれたして、胸なしかめた。彼自身、善良な、少しも疑ひを有たない妻の手紙を、讀みつゞけることは耐へられない心持がした。しかし、彼はあの晩さや子から受けた感銘をはつきりと、胸に喚び起した時、このさや子の感動を一蹴し去るのは、殘酷すぎる氣がした。芝山が跡を追つてくるといふことを除いては、この手紙は予期したほど、彼の心を掻き亂しはしなかつた。それでも、「さや子はとう／＼決行したのだ——。」さうした感動のために彼は靜止としてゐることは能きなかつた。机の前を放れ、下駄をつゝかけて庭へ下りた。

可愛らしい、薄緑色の花をつけた葡萄の蔓は、古い家の周圍の樹木の高い梢のてつぺんまでも伸びてゐた。初夏の陽光は、微風にゆれるその大形の葉の面を滑べつてしか地上に屆かなかつたら、所々涼しい日影を作つてゐた。離室の裏手の、一段小高い桑畑の前に立つた時、邦介は遠い子供の日の一つの追憶が自分の胸を掠めるのをみた。

一つの藏があつた。岩丈な三重の戸が、不開の室でゞもあるかのやうに、閉てられてあつた。實際邦介にとつて、この藏は彼が厳しい父からうける譴責の時と、町の高等小學校へ通つてゐる兒が青寫眞?、を作る時の外、用のないものゝやうに思れた。その日の光りの洩れない、暗い藏の隅々には、彼が物語の中でしか、會つたことのない妖怪共が巣食つてゐるやうに思れた。けれども、遂にこの藏の戸を永遠に閉て切ることのできない時がきたのであつた。ある日、多勢の人足がきて——彼等は、中庭で落葉を掻き集めて焚火をしてゐたから、秋の末でもあらうか——大屋根に梯子をかけて、

瓦を一枚づゝ、剝ぎ取つたのであつた。彼の家の者は、砂塵を避けるために裏に向いた戸障子を引き、茶の間に集つて、時々聞えてくる槌の音や、瓦を運ぶ掛け聲に耳を傾けてゐた。彼の兄姉は、代る代る立つていつて、細目に雨戸をひき、その隙間から覗いてみるのであつた。一瞬時、その邊りを包んでは薄れて行く砂煙の間から、この不開の室は、刻々醜い正體を曝らしいつた。二日經つて、彼の母が北に向いた戸障子を悉く開け放つた時、この古い家の裝飾の一つが全く失はれてゐた。

その光景が、邦介の胸を掠めた。彼は、その時も、今も石塊一つの位置をも變へずに立つてゐる日山を仰いだ。石器時代の原始人の生活、蒙昧なる土人であつた吾々の祖先の生活、祖父、父—この長い流轉の相を、默つて眺めてきた山河—邦介は、こんな分り切つたことのなかに、人の世の深い啓示があるやうに思つた。

「若い者が達者でゐれば、老寄のこんなことをせんでも、なア邦介さん——。」

畑で、桑の葉を摘んでゐた、お民婆さんが話しかけた。彼女の係累は、二眠起であつた。長男の清太は、一昨年の冬稼ぎに武州の機場町へ働きにいつてゐて、破裂した蒸汽釜の湯を浴びて死んだのであつた。諏訪の製糸場にいつてゐた十七になる女の子は、これも同じ年の夏、肋膜が悪いと云つて歸つてきてゐたが、翌年の春の彼岸の中日に死んだと云ふのであつた。この話を邦介は、此處に來てから、飯時の三度に一度は、婆さんの薄いしなびた口から、必らずきかされるのであつた。婆さんは、かうした不幸の一切を前の世の約束事で、殊に女の子が彼岸の中日に突然死んだのは、よくよくのことだと、涙を零しながら云ふのであつた。

「あの子は、誰か知らせたか、製糸場にゐる時に、月々保險をかけておきやしてな、それが死ぬと間もなく、郵便局から下がつたでネ、はい」

[illegible]

「婆さんはお父さんは、どんた風だつたね、そんな惟い日なら、神様は生だつたらう」

彼は苦笑しながら、こんな冗談口を叩いた。

「それがあんた！婆さんお降りへ招ばれて茶一ぱい呑んでゐる間でしたわい、裏口で爺さんが、ぐえつと云つたらば、ネ、あの子は流し下へ生血を一升も吐いて、顔は紫色に變つてゐやしたぞ、おいら前は門前へ出て、鮮魚をつんでゐたつか、はい」

婆さんは、前に下げてゐる、メリケン粉の空袋の中に、いそいで摑んでゐた茶の葉を押しこんで、固い手で瞼を拭き鼻水を啜るのだつた。

この話は、邦介をムツ〳〵する感傷的な不快に誘つた。彼はこの家のあらゆるものゝ上に、結核患者の血痰や、咯血のあとを連想した。彼は時々、食事の膳や、茶碗や、箸にまでそれをみたやうな氣がした。

邦介は庭の方へ歩いていつた。池のまわりは新緑に包まれて所々、白藤や、あやめが咲いてゐた。青松は淡い浮いた、よどんだ水の面に影を落してゐた。おぶや、蜂の仲間は、かすかな唸りを立て、沈んだ空氣を顫はせてゐた。築山の向うの石燈籠の根下に、霧島つゝじの一株が眞赤な花をつけてゐた。

その目覺むるやうな花を眼に入れた時、邦介はいそいで母家へ引返していつて鋏をとつてきて、親指ほどの太さの二本のつゝじを根本から切つた。彼はこの一株のつゝじが、忽ち髮飾りをとつた女のやうに、風情を失つてゐるのを見た。彼は、お民婆さんのつれあひの庄爺から、炭で埋つた離室の床を飾るために、晩年の父が丹精して育てたつゝじの半ばを切り取つたのだと、手厳しい抗議を申込まれた――、

「このつゝじが、この位になるのは、二十年は經つてゐる、瓶にさしたら、四日の生命ぢや。」

爺さんは、拔けかゝつてブラついてゐる黄ばんだ前齒を邪魔氣に、舌の尖でなめずりながら、彼をやりこめた。

實際床の花瓶にさしたつゝじは、四五日したら、花びらを萎ませて、だらりと垂れ、中には蕾のまゝ固く開かないのもあつた。彼は水をかへたり、切口を炭火で焦がしたりしたが、無駄であつた。彼はこの古い庭にとつて心なき闖入者であつた。

晴れた朝、雨戸を開いて窓に立つ邦介の眼を最初に射るものは、藍色に煙る西の山脈と、蒼空との間に淡く鋸齒形に溶けかゝつてゐる一つの線であつた。地上から蒼穹へ掛け渡した氷の段階であつた。そしてこのジヤパンアルプスの連峯は、この朝の一時を除いては、大方雲の層に隔てられて、彼の視野から遮ぎられてあつた。

邦介は、仕事に疲れた體を、近くの古墳や、桑畑の中へ運んでいつた。太古の民が使つた矢の根石や、尊貴な人のために、風車の下に錐（石器）をつけて穴を穿つたといふ曲玉や、くだ石を探して歩いた。俺は今、青い夢の中に住んでゐる―彼はそんなことを考へながら―

けれども夕方になるとやつてくる彼の鄕愁は、日毎に募つていつた。板塀の前に立つて見送つてゐた妻の姿を、彼はまざまざと思ひ浮べながら、心に呟やくのであつた。

「妻を不幸にしては不可ない、―」

そして彼は、「この長篇が書き上つて、首尾よく金が手に入つたら、同棲以來の彼女の宿望である博多の丸帶を、それも飛切上等の奴を、それから流行の洋傘と、浴衣と、信一のものと―」かうして、果しない空想を辿るのであつた。殺いて彼は、狹い家の中の光景を、東京の町々を、さや子のことを―。そんな時、彼はよく手紙の紙をひろげた。―生活

[illegible]

になつて上げるやうにし、と。

けれども彼は、その前日受取つたよし子の手紙で、二人の女達の間に常にかゝつてゐる反目を、愛らしげに感じて、心を暗くしてゐたのであつた。よし子は、「さや子さんは毎日家を見つけに歩いてゐます」とかき、「私も働かしつかりしたら、お父さんの田舎へ行きます」とつゞけてゐた。邦介はその時初めて、家出後のさや子の手紙を一度も受取らないことに氣がついてはつとしたのであつた。彼はそこに、何物かを見たと思はないわけには行かなかつた。さや子は、妻の氣を缺ねるといふ種類の婦人ではなかつたから――。

「あのことさへ、妻の前で口外しなかつたら、東京を發つ前に彼女の家出に就いて、自分が助言したと云ふことを――。」

邦介は、遠い東の空に向つて、さう心に念じて、亂れ勝ちな自分を無理にも机に向けた。

仕事の徘は、絶へず行き詰つた。何れ程早く片付いたとしても、向うたつぷり一ト月は要かると思ひた。その上彼の癖として、もう一度相當の時日を隔いて、磨きをかけなければならなかつた。――

いつの間にか月が經つてゐた。彼は日毎に少しづゝ増して行く机の上の仕事の紙を、懷しむやうに時々目を移つてみたが、彼はすぐ歎息した。松尾の方へいつてゐる原稿はまだ確定しなかつた。彼は留守宅の妻の手許には、もういくらの金も殘つてゐまいと思つた。彼は、泣き出しさうな顏をして、机の前で紙と睥めつこをして、苛立つて目を泊した。おまけに、日が暮れると、彼の仕事場は、完全にお化の巣窟に變つて了ふのであつた。火を慕つて、四方から集つてくる飛蟲類は、古くなつて建付の悪い板戸や、障子の破月から忍びこんで、部屋の中央に吊るした、ランプの火を中心に薄氣味の悪い、時として可憐な舞踊をつゞけた。饒舌家の雨蛙が戸外の闇の中で、これが奏樂をするのだつた。げじげ

じや、百足が招待員のやうに豪然と部屋の中を横行した。彼は時々この奇怪な舞踊の中へ、はたゝきを振つて侵入した。
そして、彼は覺束なくなると、プツとランプを吹き消し、母家の方へ退屈な庄爺さんの述懐をきゝに出かけた。
いつも、十二になる孫を相手に、とろんとした眼をして、爺さんは暗い電氣の下で話してゐた。
梅の實は、日毎に目に見えて太つていつた。彼は、頭の上の枝についてゐる一つを捥いで、そのほろ苦い味を楽みしめた。それから、前の小川へ顔を洗ひにいつた。小學生のやうな小さな郵便夫が、草笛を鳴らしながら、白く乾いた道をやつてきた。
彼は、この朝さや子の手紙を受取つた。彼はいそいで封を切つた。憬れと、懐しさとのために、彼の指の先はかすかに痙攣した。手紙は簡單であつた、が彼の胸を深くゑぐつた。―
「すぐお歸りになつて、あの人の心を靜めて下さい。私は一人の女が生きるために、何の位ゐ澤山の人を傷つけたり、不幸にしたりしなければならないかと思ふと怖ろしいのです、私はあなたの夫人から、女子として、最高度の侮辱をうけました、でも、平和なあなたの家庭を亂したことを思ふと、もつともつと、ひどい侮辱でも忍べますの、二三日前にF町に狹い部屋を見付けて移りました、もし、私がゐなくなつて四十度からの夫人の發熱が下るやうでしたら幸ひです、でなかつたら、お歸りになつて、積極的な療法を取つて上げて下さい、お歸りになつても決して、お訪ね下さいますな、たゞ、私がお金のことがあつたので、あなたのお家へ上つたのではなかつたと云ふことを、特にあなたから、夫人にお傳へ下さい。」手紙は、それで結んであつた。
邦介は、念を押すやうに、封筒を裏返してみたけれど、新しいF町の住所は、何處にも書きつけてなかつた。彼は顔をしかめて、亂れた彼女の心を、殊に映してみせるやうな、手紙をずたずたに引き裂き、流れの中へ一片づゝ、考へを

[illegible]

彼は、餘りにも平凡な女の媚態を[illegible]ない話をした。[illegible]られ、[illegible]さや子を前において、ツケツケと話つてゐる場面と、二人の女のことを[illegible]て、とぼ／＼と知らない町の中への暗い路へ[illegible]つていつたさや子のことを、いたましい氣持で思ひ浮べた。

「體から下りた時の二人の感動は、脆くも失れて了つたのか？さや子は、自分との間に造りかけてゐた世界に又とない立派なお宮は！」

瞬間彼は、さや子が恐ろしく遠くへ、自分の手の届かないほどの距離へ、引放されて了つたやうな氣がした。

「あなたが、私のために、力になつて下さらうと云ふのが抑もの間違ひです。あなたのやうな、無能な方は、お家のことでも滿足に出來もしない癖に。」

さや子がさう云つて、彼の家から、そして彼自身から、永久に去つていつたやうに思つた。

彼は、裏の葡萄棚の下まで引返してきた時、ふいに足下の青い草の根に、きらつと青光りして動いて行く、蜥蜴を見つけた。それはこの邊に多くゐる縞蜥蜴と云ふ背から、尾にかけて、青い四條の立縞が、暗緑色の皮膚の上に走つてゐる奴だつた。彼はぞつとして立止つた。蜥蜴は、近くへ敵の襲來を感じ、ぢつと、動くのを止め、針の尖のやうに光る尾の尖端をくるつと卷いて、氣の故か冷めたい小粒な眼を彼の顏に注いでゐるやうな氣がした。

彼は、素早くとびかゝつて、下駄の齒で、ギラ／＼する滑かな背の邊りを踏み躙つた。二ツに千切れた尾の方は、ピクピクしてゐた。上の方は切斷面にどす黒い血をにじませ、裂けた口から、草花の發芽のやうな、褐色の舌がはみ出てゐた。

彼はその時、この殘虐な行爲を、ちつとも悔いてはゐなかつた。恐らくは、其處に、もつと優しい、お月樣の世界へ

歸り忘れた白痴の兒が遊んでゐたとしても、地面に叩きつけて痛快がつたかも知れない――

机の前に座つた。彼はだんだん仕事の中へ雜音が忍び込んでくるのをかんじた。彼は焦つて幾枚も書損なつた。

妻の發熱がほんとうだつたら――さう思ふと、彼は机の前にゐたゝまれない氣がした。彼は、一日のうちに、三度歸京の決心をし、いつも机の前に返つて、ピツタリと座つた。まだ半ばに達しない原稿の頁を、怨めしげに繰つた。彼は着いた日、旅費の殘りをすつかり、婆さんの前に投げ出して了つたのだつた。――

彼は、青い夢の中に住んでゐると思つてゐるうちに、この故郷の山の中へ封じこめられて、身を動かすこともできなくなつてゐる自分のカリケチュアを、其處にみた。

「妻がもし、さや子の同居を立換へた金があるから――と、邪推したら、そして、さや子が、なまじい金に對して清廉を誇らうとする淺薄な女心から、一言あのことを口に出したら――」彼は、そこから、板を刎ねた水門のやうに、凡てが押し流されて了ふやうな氣がした。欺かれたと思つた瞬間、ものの奥底を見透すことのできない女の常として、嫉妬と、疑心との妖術にかけられて了ふのは、明瞭すぎることだ――と、思つた。

邦介は、ほんの一縷の望みを、さや子の聰明さと、自制力とにおいた。

彼は戸外を見た。樹々の葉は、風に搖れ動き、そしてもとの位置に納り返つてゐた。山は搖ぎなく悠然としてゐた。一ぱいに、光りを孕んだ空は、青々と晴れ渡つてゐた。

その夜だつた、邦介が義母の打つた電報を受け取つたのは――。彼は、この決定的な悲劇の報告書の鐵筆の文字を、三度まで讀み返したあとで、暗い田舍道を停車場へ急いだ。道端の草の中で、螢が青白い光をともしてゐた。彼は闇の中に、板塀を背にした妻の立姿をはつきりとみた。

八

浴衣をきた妻の母親は、勝手で氷を砕いてゐた。

「熱が下らないものだからね、案じたけれど、今朝は餘程氣分がいゝやうだよ、」

表から入つて來た邦介の急き込んだ調子を鎭めるやうに、さういつて、彼の後から病室へ入つて來た。明るい光の中を歩いて來た邦介の眼に、見馴れた壁にはつた複製ものゝ版畫、火鉢、浴衣の模様緣側の方を枕にした病人の枕、瓢然とした枕下、それらのものが、ぼやけて映つたほど、部屋の中は薄暗かつた。妻は仰向けに寢て、熱ぽい、うるんだ眼をしてゐた。氷嚢のあとのみだれ髮の毛が、血の氣の薄い額にへばりついてゐて、彼の眼にその顏が、別な人のやうに映つた。頰には幾らか血が上つてゐたけれども、思つたほど窶れが眼立たなかつた時、彼は吻とした。

「早かつたのね、」

額の上に、母親の吊るしてくれた氷嚢をあてがいながら、妻は眼だけ、枕下へ座つた良人の方へ動かしていつた。

「電報のつき方が遲かつたものだから、終列車に忙しい位ゐだつたよ。」

彼はさう云つて、この狹い部屋の中へも夏がきたと云ふように、赤い風鈴が椽端で涼しげに微風に鳴つてゐるのに眼を止めた。

「もう此方は、すつかり夏だな、」と、彼は一人で感歎したやうに云つた。

「氷を頂戴、口の中がこんなよ、」妻は熱で唾液が粘つて糸を引く口の中を彼に示めすやうにした。

「いつから、こんなでしたか、ちつとも、知らせないもんだから」
邦介は、枕下の茶碗の中の水の碎片をとつて、妻の口に運んでやりながら、母親に向つていつた、
「私も、一昨日の夕方、俄夫が歸つてきて、姉さんが悪いからつて云ふもんだからね、來てみたんだよ、咳がひどくつて、びつくりしたのさ、それでも、昨夜はいくらか眠れたようだよ、電報もね、この子が仕事をしてゐるんだからつて、止めたけれどね、そんなことを云つてゐて、手遅れになつても思つて、俄夫の歸る時に打たせたのさ、」
母親は病人の枕下に散かつた紙や、まだ朝のまゝになつてゐる食事の膳など片付けながら云つた。
「馬鹿なつ、」邦介は妻に向つていつた。「仕事なんて大した事じやないよ、病氣の場合にア。」
邦介は、さうは云つても、妻の氣性が、暴風雨前の濱に立つた漁夫の上さん達が、一刻も早い良人の歸へりを待ちながらも、びくの獲物の輕いのを案じるほど切實な内容をもつてゐることを、よく知つてゐた。
「何う？あの方は」
邦介は、母親の後姿が勝手へ消えた時、低聲できいた。
「よかつたのよ」妻は輕く咳き込んだあとで、につこりして腕を伸して、ふとんの端をつまみながら云つた。「昨日の夕方女中さんが訪ねて來て下すつたの―。」
邦介は、ふとんの下に散薬の包み紙や、彼が郷里から送つた手紙と一緒くたになつてゐる途中な松尾禮三の封書をみつけ出して、いそいで中を檢べた。彼は自分の眼の前に、一枚の小切手を見出した時心からいつた。
「助かつたよ、ほんとうに。」
その額は、禮三からの立替金を差引いても、かなりの金が彼の手許に殘るほどであつた。

[illegible]

「まあお一[illegible]」

母親が妻を指した。

「お醫者さんを何處か近くに換へてみたらと思ふよ、招びにいつても、直ぐ間に合はないやうじやね。」

傍を厭がる病人から、少し離れた所で、母親は一服すゐつけながらいつた。

「あれから二度來てくれた切なのよ、遠いからつて！」妻が云つた。

「えゝ、しかりした醫者に、診て貰ひませう、誰か」

邦介は一寸考へる風をした。

「何うして急に悪くなつたらう、僕が發つ時は表まで送つて出たのにね」

「何アに神經をやんでゐるんだよ、この子は氣が弱いから、それこの間まで子供をつれてきてゐた、何んとかいつたいな、そうさや子さんか、あの娘と言ひ合をしたつてネ、あの娘はまたあんな風だから、よしなんさ、なめてかゝつてゐるんだよ」

とりようによつては、何もかも知り切つてゐて、當てこすりでもするといふように、又全(まるき)り何も知らずに喋つてゐるとも思へる母親の言葉を、邦介は顔の皮を一枚剝がれる思ひできいた。

「あの人は、病人の枕下へ子供をすつぽかして、平氣で一日中玄關で何か書いてゐるんですもの、お隣りのおかみさんも、さすがに呆れてゐてよ、おまけに芝山が敗鳴りこんできて！あれだけでも、病氣になつちやうわ。」

妻の顔は、當時の激情が新らしく胸にかへつてきたかのやうに、いくらか赤味を增した。烈しい咳が起つた。咳が納

つた時、云つた
「わたし一度なんかみんな荷物を庭へ放り出してやつたの、そうしたら言草がいゝわ、ほんとうにこんな荷物厄介だから屑屋でも招んでやつて了はうだつて、まるでわたしが荷物をでも怒つてゐるやうなことを云つてゐるのよ、づうづうしい」邦介は苦笑した。
「さや子さんは、お花を賣つて歩いてゐるんですつて、あの人自業自得だわ滋野さんの方へ、みさちやんを、どんなに云つても、やろつて言はないんですもの。」
「ほう、お花を！賣れるか知ら。」
病人のふとんの襟や、枕下の品物の上に集つてくる、しつこい蠅の群をさつきから追拂つてゐた邦介は、びつくりしたやうに云つた。彼は玄關の二疊でさや子が懸命に書いてゐたものは、例の子供のものであつたに違ひないと思つた。そして、それを金に替へることが覺束なくなつた時、この新らしい商賣を初めたのだ、、そしてやがてそれが、うまく賣れなくなつた時は！
「さや子さんのお花は、」邦介の鬱してくる胸に、油を注ぐやうに、母親が傍から口を挾んだ。「擔いてくる人のよりは高いさうだよ、この間も落合の君江の所へ賣りにいつたさうだが、ダリヤ一本で三錢違ふつて云つてゐたよ、何うして、商賣人は仕入れから異ふから――。」
邦介は氣を換へるやうに立上つて、縁側の安物の風鈴を下から覗きながらきいた
「おい、これは何うしたの？」
「夜店からさや子さんが買つて來たのよ、よしさんは寢てゐて夏を知らないから、縁側に夏を吊るしといてやるんだ

――」

「ふふつ」と邦介は笑つた。彼はそこにきた娘つてゐることが[illegible]のない空間をみたやうに思つた。同じこの都會の空の下で、さや子はいく本かのタオルを風呂敷に包んで、貴女の何包を賣つて街の歩いてゐるのだ、さう思ひながら、彼は眼球の痛くなるほど、底深く澄み輝いてゐる空の彼方に向つて、一せめて、彼女の空だけはたくあれ――、」さう云つて心から祈つた。

向うの空地の、伸び切つた雜草は、風にそよいでゐた。毎年夏になると、その空地の一端に出來る、入口に簾子の賑など下げて、一方に青いものを植え込んだ、小じんまりとした氷店は、涼しげに客をよんでゐた。それがこの新開街を飾る唯一の夏の情趣であつた。氷川神社の森は、重苦しい濃緑色の油繪具で、一刷毛に塗り固めたやうに見えた。この間まで地固めにきた家の直ぐ前の空地に、もう上塗だけに仕上つた安家作のトタン屋根が午前の陽をチカチカと、反射鏡のやうに照り返してゐた。時々板塀の向うを、派手な浴衣をきた裏の長屋の女達が、土埃を蹴上げながら通つた。

「外は暑いだらうな。」邦介はさう云つて、緣側に下つてゐたタオルをとり、ネトネトする腋の下の汗を拭きながら、緣を離れた。母親は、表へ買物に出ていつた。

「わたし、ほら下子さんのやうな、黑無地に一寸透しの入つた、洋傘がほしかつたんだけれど、この夏越す時がくるかしら、――」

妻は、そこへ引返してきた良人に、甘へるやうにいつた。

「まだ六月の半ばだぜ、今月一ぱい寢てゐたつて、七八九と三月もあるよ。」邦介は、笑つていつた。

「さうね、」妻は、自信のない聲を洩らせた。

　ただ衰弱してゐると云ふだけで、何所に支障があるとも分らない、氣が向けば人一倍お喋りもする妻の體から、何うしてこれほどの咳と、痰と、そして高い熱が出るのか――、これが、肺結核の症狀ではないだらうか？

　暫くして、妻の小用を足しに立つたあとで、素早く枕下の痰壺のふたを取つて、もう殆んど消えかゝつてゐる唾のやうな粘液をみた時、吻つとした。幼い時から眼の邊りさうした患者に接したことない彼は、喀血と、血痰とが、唯一の結核と症狀だと信じてゐたから。――

「あなた、此所へいらつしやい一寸きくことがあるから――」褥の上に蹲つた病人は、少し離れた所にゐる良人を、自分の枕下へ引きよせるやうに云つて輕く睨んだ。

「いつだつたか、さや子さんが芝山と喧嘩をして家へ逃げてくる途中で逢つたといつたでせう、あの人が淺野さんの所へいつて來たつて時よ、あの晩あなたはさや子さんに家へ來てゐろつていつたつて云ふじやないの、」

「ああ、」邦介はいつた。

「なぜあなたはわたしに隱してゐたの、曖昧相位でごまかさうと思つたつて――、あれだつて、さや子さんがよこしたんで、嘘を吐いて、あの人知らないと云つたわ、ほんとに影で何をしてゐるか、分りはしない、わたし、顏をみるまで、氣が氣じやなかつたわ。」

　妻は睨みかけて、迫つては來たが、その口調には、少しも險を含んではゐなかつた

「自分にも分らない。」邦介はきつぱりと云つた、「只け云ひ切れることは、僕はお前を愛してゐる、誰よりも深くだ、お前が信一の母だと云ふだけでも、僕はお前を愛するのだ、僕が田舍で考へたことは、それだけだよ。」

　彼は、珍らしくも熱の籠つた口調で云つた

「[illegible]のに[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]たしおぼんやりだといふやうに云ふのよ。今隣りの人まで、会[illegible]の日[illegible]はなか[illegible]だなんて云ふよい。だからわたし、うちは氣が向けば、道端で、乞食にでもなんでもおしかけるつていつて、昨日も[illegible]こんにちはであなたが、ほら、琉球か何所かの乞食を一晩泊めて、あの邊の話をきいたでせう、あの時のことを話したら、[illegible]云ふ人は變人て云ふだつて笑つてゐたわ、」彼女はもうすつかり安心したと云ふように、邦介に枕下の氷をねだりながら云つた。

邦介は苦笑を嚙みながら氷をとつてやり　うちわで襟の上へ風を送つてやつた。それから彼は、サックの中から體溫器をぬきとり、輕く振つて妻に渡した。彼女はそれを腋の下に當てながら云つた。

「でも　あの人惡いとは思つてゐたんでしよ、わたしが何を云つても默つてゐたから。」

額に汗をにじませた母親が表から入つて來た。包みの中から、お勝手の買物に交つて、病人の注文した果物が轉り出した。

熱の度は、三十九度三分あつた。彼は顔を曇らせた。彼女はこれが、お喋りが過ぎた故だと云つた。

「昨夜は、三十八度だつたの―。」妻が云つた。

「今日は信一は來ないかな、田舍で信一の夢をよく見たよ、」邦介は云つた。「若し、僕の留守に來たら　泊めてお置きよ、」

それから彼は、果物をむきながら　女達を相手に田舍のことを話した。景色の美しいこと、涼しいこと　裏庭の梅の實が太つたこと、母家の老婆のこと、新しく開通した汽車のこと――あの青い夢をそつくり、袋の中につめて運んで來たと云ふやうな調子で。

やがて　彼は立ち上つた。

「歸つてきたら家の中を夏らしくしやう、奥の窓のガラス戸なんか、取り拂つて、簾でもかけて—。」

彼は小切手の入つた鶴三の封筒を、しつかり懐中に收めた

「なるべく早く歸つておくれ、私も今日は歸つてみなければ—、」さう云ふ母親の言葉を、「ええ」と答へて、元氣よく表へ出た。

九

邦介はOの終點まで出て、そこから市電に乘つた。電車の中は、すつかり夏になつてゐた。腰を下ろしてゐる人々は若いものも、年を取つたものも、めいめい、その年齡の享樂し得る限りの夏を、體一ぱい浴びやうとして、骨折つてゐるやうに見えた。邦介は、入口の片隅に立つて、下の着物の透いて見えるやうな、夏の羽織や、派手な洋傘や、ハンカンチや、扇子や、アルパカや、綺麗なネクタイや、白く光る麥藁帽子や、それらの主人である眼の動く人形のやうな、澄した人々を眺めた時に、その入口から、障子大のうちわで、煽ぎ立ててそれらのものをふわ〱と空中に、舞ひ上らせたら—など、出鱈目な空想を呼び起して自づと微笑まれる氣がした。特別にもカンカンした夏帽子が、女のやうに油で櫛を入れた紳士達の頭から、一齊に舞ひ上る光景が彼をおかしがらせた

電車は、彼の出鱈目な空想をのせて、明るい眞ひるの町々を走つていつた。

邦介は呉服橋で電車を捨て、賑やかな日本橋の通りにある石造の建物の中に入つていつて、金を受取り、それから東京驛に出てFまでの切符を買つた。

Fで省線電車を降りて、氷店とか、カッフエーとか、さうした飲食店が俄かに眼立つて來た停車場前の通りから、人

足の向いた方角へ出て彼は禮三の家へ急いだ。彼は丁字路の交叉點に出た時何だか禮三の家は右の方、このさの去て路を取り違ひたことを思ひ浮べた、あの時の一寸した心の動き方一つで、路傍の人で終つたかも知れない禮三の好意で、あの文庫の中に捨てゝあつた原稿が、今自分の懐に金に代つて入つてゐる――しかも、自分の力では二つも三つもの雑誌社を持ち廻つても、何うすることもできなかつた原稿が　、彼は自分の眼の前に、手の屆かないほど高い、一つの世界のあることをはつきりとかんじた。彼はそれを日向にたとへた。そして、自分達の住んでゐる場所は、その反對の暗い濕地で、そこでは年中啀み合ひと、喚きと、殺し合ひが行はれてゐるのだと思つた。そして、その仲間の中で（實際、彼はその濕地で開かずに萎んで了ふ澤山の藝術の花を想像することが出來た）彼のやうに僥倖にも自分の原稿を金にかへることの出來たものは、正月の床の鏡餅をちよろまかす、屋根裏の鼠のやうなものだと思つた。

松尾禮三は、梯子の中程で、邦介を迎へた。彼は珍しく、爽やかな夏服をきてゐた。

「今から一寸出かけるんだが、じや、磯部君失禮だけれど十分だけ、」いかにも、時間に規律のいい外國にゐた人のやうに、禮三はさう云つて、彼を二階に案内した。

「昨日は、ありがたう、今銀行の歸りです、ほんとに助りましたよ、」邦介は座についた時云つた。

書齋はいつの間にか、火鉢が片付けられて、新しいテーブルクロスの中央には、花瓶が据えられてあり、一方の端に赤や、黄の地に、著名な畫家の名の入つた一筆書きの、形のいいうちわが置いてあつた。

「僕も心配してゐたのさ、返事が遲れたから、主筆が一寸旅行してゐたんだつて――、」卓の上に散かつた寄贈雜誌を取り片づけながら、禮三は云つた。それからマッチを擦つて、卷煙草に火をつけながら、

「まだ六月の半ばだのに、東京はすつかり夏の陽氣だよ、君はいつ田舍から歸つたの、昨日女中が上つた時には見えな

かつたやうだが。」といつた

「今朝、」邦介は答へた。「義母から電報が來ましてね、又少し悪いやうです、」

「女中が、年取つた女の人が見えたなんて云つて居つたが、お母さんなの、さう何んな？。」禮三は明るい顏の眉根を心持動かして、邦介の顏を正面から覗き込んだ、

「痰と、咳とが多くつて、見てゐる方が苦しい位ゐです、——」

「熱は？、」禮三が訊いた。

「今朝は九度の少し上でしたが、夕方は少ないさうですよ。」

「そりア抑つて、逆熱と云つて、危ない奴だよ、醫者は何んといつてゐます？、」

邦介は、急に顏を曇らせた禮三の眞劍な容子に、ただたぢと後退りする思ひで、まだ醫者には逢はないが、最初からの診斷は肋膜炎の再發だと答へた

「もつと、しつかりした醫者に、診せやうと思つてゐるんです、有名でばかしあつても仕方がないし、親切な、誰か？」

邦介は、當惑したと云ふように云つた。

「では、かうしたまへな、僕があつちへ行つてゐた時分親しくしてゐた、小村て醫學士が、この冬獨逸から歸つて富士見町の××てほら、大きな病院があるだらう、あそこに勤めてゐるから、賴んでみて上げやう、醫者の癖に、佛蘭西の美術史を研究してゐるんだから一寸と風變つてゐるよ、」禮三が笑ひながら云つた。

「さう願へれば、」彼は、ふいに眼の前が明るくなつたやうにかんじて云つた。「ほんとうに結構です、あゝそいつはありがたい。」

[illegible]に、相手に[illegible]話を聴いて、[illegible]だとか　そんな話をした。

「何か君、さういふやうな、つまり呼吸器病に就いて、参考書を讀んでみるといいな、病人もだが、それより以上になる人が的確な、智識を備へてゐることが必要だよ。」禮三はもう一度話題を病人の上に一轉させて、邦介の不用意をたしなめるやうに云つた。

「さうしませう。」

禮三の前に出ると、相手の智識とか、教養とか、さう云ふものばかりではなく、何所か、自分より完備した思慮のある存在の前に、――たとへば親身の兄の前にでも、座つた時のやうに――、かと云つて相手を小さくちやちこ張せるにしては、禮三は餘りに明快で、寛容であり過ぎはしたが、――何んとなく、頭の上らない氣がしてゐた矢先きであつたから、妻の病氣を、すつかり結核と斷定したやうな相手の言葉に、邦介ははつとしていつた。

「今から一寸帝劇に行くから、ほら今來てゐる提琴家のH氏の演奏が二時からあるんだよ、K新聞から是非つて頼まれたもんだからね、僕の音樂批評なんて勿論なつてゐないに決つてゐるよ、併し斷るわけには行かなくかつちやつて、――それで、その歸りに小村君の病院の方へ廻つて頼みますよ。」

時間の立つのが、氣になると云つたやうに、禮三は開け放つた窓の向うに輝やいてゐる碧い空を、落着のない眼でちらちらと眺めながら云つた。

邦介は、そんな所に、禮三の作家としての一面を見たと思つた。それで笑ひながら、

「もう十分經つたでせうか、二時じや、急がしいでせう。」さう云つて、懐から金を出した。

「立換へていたゞいたのを、お返しておきます。」と、彼は輕く頭を下げた。
「まあいい」禮三は快活に云つて「外の時と異ふから、金は持つてゐたまへ、そして奥さんに何か營養をつけて、君も葡萄酒でも少しづつやつて、體を壞さないやうにするんだな」
「ええ、ありがたう。」
邦介は、眼の中のうるむのをかんじて、紙幣を懷に收めて、立ち上りながら云つた。
「ほんとうに君、惡かつたね、お茶も上げないで、今度ゆつくり話しませう、ではそこ迄僕も一緒に――」
禮三は、氣の毒さうに云つて、座を放れ、彼のあとから階下に降りた。
表に立つて、前の家の陽の明るい庭に咲いてゐる眞赤なカンナをみつめてゐる彼の前に、すつかり仕度の整つた禮三が握り太のステツキを持つて現れた。
二人は、停車場の方へ向けて、白い道を歩いた。
「君が、僕の所へ初めて來た時から、もう二月經つね、早いもんだ、田舍で仕事は捗つたの、涼しいだらうね、高原だから。」
禮三は、默つてゐる邦介の心をかき立てるやうに云つた。
「矢張し、向うにゐても、いろんなことで氣持を亂されるもんですから。」邦介は答へた。
「この間も、もしR社の方の結果が惡いようだつたら、僕の方から、月々いくらか何んしようなんて、ワイフと話し合つてゐたんだ、今仕事をそんなに焦らないで、君が仕事をするのは、五年の後でも遲かないんだから――、奥さんや、子供さんを見て上げ給へな、ほんとうに君は暗い人だな。」

禮三は、頭の底から同情するやうに云つた。

「僕などだつて、少し位の名前など全く當になりはしない」自分のあるスナツキに陥り碎けるさまを面白さうに眺めながら、禮三はつづけた「今はいい意味にも、悪い意味にも、ジャアナリズムの時代だから、こつちに少しでも弱みができたら、おしまへだよ、本氣になつて、書いてさへゐたら、どこかに味方が潜んでゐる、冷めたいやうで、案外正直なのは世の中だと思ふよ、この頃は、親爺の家の二階で、初めて仕事をした時のやうな、あんな氣持がしみじみほしいね。」

邦介は、急に禮三の眼のうちが、すがすがしく輝やくのをみた。

暫らく會話が途切れた。

「君などいいさ、書きたいものをかいてゐればいいんだから、羨ましい位ゐだ。——」禮三が云つた。「僕をみたまへ、殆んど一日他人のために動いてゐる——そんな氣がすることがあるよ、この間はお嫁さんの世話をさせられて、フフツ。」

「ほう、そいつア面白い」邦介は笑つて、相手の顔を見た。

「それが君、上野の卯月で蜘料理をおいしく食べさせる家があるよ、あすこで見合まで済まして、疲れちやつたんだから仕末が悪い。」

二人は、思はず聲を高くして、笑つた。

小學校の建物の前で、禮三に別れて一人になつた時、邦介はひどく感動してゐた。自分は他人から、それほどの同情をうける資格がないといふ氣と、また、自分は運命から見放されてゐないと云ふやうな氣がつよくした。さや子がこの附近に住んでゐることを思ひ、若し自分が、彼女に逢ふことが、正しいなら、かうして歩いてゐる道端で行逢ひゐるに違ひない——彼は、そんなロマンチツクな考へに囚はれた。「金を渡すだけのためにでも、彼女に逢はう——」彼は、さう思ひた

がら、庭先や狭い露路のやうな所に遊んでゐる子供にまで注意して歩いた。―

十

よし子が、小村醫學士の診察をうけたのは、一週間ほど過ぎてからであつた。

「松尾さんから、お話のあつた少し前から、耳を惡くしてゐまして、遲くなつて、お氣の毒でした。お惡かつたのは、何時頃からですか―。」

醫學士は、學者らしい、重い口を開いて、ポケットから金側の時計を出し、病人の脈をみながら、邦介に容態をきいた。

三月の初め風邪をひいたあとからだといふことや、輕い咳や發熱のこと、醫者が肋膜炎だと云つたこと、一時治りかけたのが、急に惡變したことなど、邦介の說明を輕くうなづきながら聞き、病人の寢卷を除らせて、痩せて、無氣味なほど骨の出た、背や、胸部を注意深く診たあとで、

「ご病人のお振りになるものや、その外細かいことについては、特と御相談いたしませう、今晚六時頃、病院の方でお待ちして居ります、では」

醫學士は、みじんもお世辭のない、何所か眞率な、力强いもののある調子で云つて、立ちがけに病人に向つて、「お大事に」と柔しく言葉を殘し、待たせてあつた俥で歸つていつた。

この醫者の容子が、邦介に眉をひそめさせた。

「わたし、歸の方が、惡いんじやないかしら、あの方汲んだお茶も飮まないで行つたわ、あなた聽いてきても隱さない

ご自由に」
夕方、邦介が醫學士を訪問するために、家を出ようとする時、よし子が甘えるやうに云つた。
九段上で電車を下りて、招魂社の境内を斜に突切つて、一丁ほどいつた所にある××病院の醫員室で邦介が顔を合せた時の小村醫學士は、さつきとは異つた人のやうに、打寛いで、然し、しんみりした調子で話した。
「何うも困りましたね、よほど進んでおゐでですよ。」
白い上張りをきた醫學士は、自分の机の傍へ椅子を直し、それを邦介に奬めたあとで口を切つた。
「と、しますと」邦介は、醫學士の顏をみ、震へる聲を、抑へつけるやうにしていつた「矢張り肺の方が悪いでせうか？。」
「左の方がよほど、右へもいくらか、かゝつてゐます。」
醫學士は顏を曇らせ、徐ろにさう云つて、向うの机にゐた給仕にお茶を云へつけた。
「何期位ゐでせうか、何うぞ御遠慮なく。」邦介は云つた。
「素人の方は、一期とか、二期とかよく言はれますが、この病氣は決して、そんな區別のつくものではありません、まあ強ひて言へば二期とでも云ふでせうか。」
「二期！」、邦介は、びつくりして云つた。彼は自分の聲が高過ぎたので、廣い部屋の中へ入つたり、出たりしてゐる、看護婦や、机の前の他の醫者達の瞳が、一時に自分の上に放射してくるやうな氣がした。
「望みはありますでせうか？」邦介は、つゞけた。
「さあ、」醫學士は落着いた調子で、給仕の運んできたお茶を啜りながら、「充分に覺悟は必要ですが、望みの有無といふやうなことは、斷言できもしないし、又云ふ必要もないことでせう、吾々科學者は、余りによく知つたと思ふこと

が、却つて何も知らないことであるかも知れません、併しご病人には、お秘しになれるだけ、お秘しなすつた方が、お宜しいでせう、この病氣は。

「はあ、」邦介はいつた。「この醫者の云ふことは正しい、」と、彼は心に呟やいた。――

「あなたは、創作をしておいでださうですね、なかなかお大抵ではないでせう、」醫學士は、しんみりとした調子で、何も彼も察してゐるといふやうに云つて、聲を落した。「失禮ですが、御生活の方は？。」

「うまく行つてゐないのです、何にしろ、途中で書き損つてばかしゐて、一年ほど何も稼らなかつたものですから。」

邦介は顏を赤くして答へた。

「山や、海へ轉地と云つても、あの御容態では一寸至難しいかと思ひますし、さうかといつて、お家ではなか〳〵長い間つゞくものではないです、それに設備が悪いと、非常に傳染し易い病氣でして、特にお子さんがお有りださうですから――、御存知ですか、あの府下のN村――中野の在です、彼所に市の療養所ができて居ります、勿論多小の欠點はありますが、まあ位置から云つても、設備の點から云つても、私設のものよりはいい方です、獨逸にも、二百以上のサナトリームがありますが、みな多少の欠點はもつてゐます、東京のは、武藏野の眞中の全然浮世離れのした丘の上にあるんです、期間は三月づつですが、長い患者は、二三年も入つてゐるやうです、少しいい患者は、庭へ出て日光浴をしたり、花を作つたりしてゐますよ、費用は勿論要らないです、若し、そんなふうにでもなさるやうでしたら、此所の院長は、彼處の所長とは極く親しいですから私から頼んであげませう、」

醫學士は、考へ深い口調で静かにつゞけた。

「いろいろありがたう、」邦介は感謝をこめていつた。

それから一時して、めまぐるしく狂ひ廻つて行く自分の運命の底を見究めやうとするやうに云つた。

「とにかく、少し考へてみます。」

醫學士は病人の處方を書いてくれ、尚、營養品や、消毒に關する注意を與へたあとで、つけたした。

「一度みにいつていらつしつて、その上で、お決めになつたらいいでせう。」

いつの間にか電氣の點いた醫員室を出ると、邦介はその足で、雉子橋裏にある妻の實家の方へ歩いてゐた。彼の熱した頭を、爽やかな夕暮の風が心地よくなでて通つた。彼は、體がかつたるく、恐ろしく口の中の乾くのをかんじた。ひどく悪酔ひした人のやうに、フラフラと底力のぬけた、こんな時もし、親しい友達の顔でも見たらとつさに聲を上げて泣き出すかもしれないと思へるやうな心持がした。

もう涼みにでも出たらしい、多勢の人が彼のまはりを動いてゐたにも拘らず、彼は森閑とした、人のゐない場所を歩いてゐるやうな氣がした。あの九段の坂の上から望む、此都會の有つ、勝れた夜の光景も、自分とは何の交渉もない、別な世界のやうに思へた。

「妻は助かるだらうか?」彼は醫學士の言葉を一つどつ心のうちに繰りほどいてみた。彼は、それらの言葉の裏に最大なる悲劇の豫言が含れてゐるのを、はつきりとみたように思つた。これが何んな形でか、當然現れずにはゐまいと思はれた。自分の夢の多い結婚生活の結末であらうか!何より先きに――と、彼は思つた。病人のために最善の療法をとるためには、金をつくらなくてはならない。そのためには、たとへ二ケ月の間でも、彼女を病院に送り、その間に仕事を片付けることが唯一の途ではないか?

彼は、雉橋を渡つて、道を右に取り、掘割に添つて歩いてゐることに氣がついた。黒くどろつとした水面に對岸の燈

火が揺れ、砕けてゐた。時々微風に送られてくる下水の臭氣が、彼の鼻をついた。

彼は、左に折れて、狹い露路を入り、その奥にある澁の貸家の玄關に立つた。彼は、母親に合せる顔がないやうに思つた。

「お父ちやんだ、ほーら、」

疊を五枚、横に並べて敷いた、變挺な形の茶の間へ入つてた時、さう云つてとびかゝつてくる男の子を、邦介はつゝ立つたまゝ膝頭で受けた。

「信ちやん、おとなにしてゐた？」邦介は、さう云つて小さい體を、高く空間にさし上げて、柔かい子供の頬に自分の頬をピツタリとくつつけた。

「よしは少しはいいかい」

夕飯のあとの、散かつた食卓を片付けてゐた母親は、チラと邦介の顔へ瞳を移した。

「ええ、咳は余程。」邦介は、男の子を抱いてそこへ坐りながら、云つた。「今日、この間お話した醫者がきてくれて、今處方を貰いにいつた歸りです。」彼は口籠つた。

母親は食卓の脚をたゝみ、戸棚の前に立てかけたあとで、彼の前に座り長い煙管の先きで刻み入れを引きよせながら云つた。

「今度のお醫者さんは、どんな診立だつたい。」

「それがね、矢張し前の方が、かなり進んでるつて云ふんですよ、前の醫者が、ちつとも、そんなことを云はないもんですから。」邦介は、弱つたといふ顔をしていつた。

「さうぢやよ、私もよしの容子をこの間一ト目見た時にそんな氣がしたい。田舍にゐた時、近所にお產で亡つた人があつて、半年ばかり病んで死んでいつたが、何うも、よしの顏や、体の具合が似てゐたいさ、」

母親は聲音を曇らせていつた。

「その娘の惡い時も、よしはあんな性質だから、遊びにいつちや、炊事したり、看病したりしたつけが。あの時病氣を背負つたかも知れない。それにお產のあと病んだのが！。お醫者さんは何期位だつて仰言つたかい」。

「まあ二期て、所ださうです、」

「それぢや、あの子もむづかしいかな。あの病人は早くて半年遅くて一年て云へばね。それで間つて了へばいいさうだが、よしは丁度年齡廻りが惡いで。」

「そんなことはないでせう。」いくらか、愚痴の交つた露骨すぎる母親の言葉に、邦介は憤つとなつていつた。

「醫者は病院へ入れては何うかつて云ふんです。市でやつてゐる。設備も整つてゐるし。中野の田舍にあるんですから。空氣はいいでせうよ。たゞよし子が承知するか何うか？。」

それから邦介は、醫學士からきいた病院の容子を、母親の前でざつと説明したあとで云つた。

「三月も入つてゐて貰へば、その間に仕事を片付けて、何所かの海岸へでもつれて行かうと思つてゐるんです。」

「食べものなど、何うかねえ。この節のことで、只でやつて貰ふんだから。そんな我儘も云へないが、」母親は決心しかねるといつたやうに、「茅ケ崎の病院などへいつても、却つて惡くなる人もあるさうだよ。」

邦介は默つた。

浪花節の安レコードが鳴つたり。氷水のおかもちを運ぶ小女の「毎度ありがたう」が聞えたり。表の印刷屋の若い者

が凉み臺でうつ狐拳の揚氣な掛聲が聞えたりする、いかにも、都會の裏町の宵の口らしい。雜音に耳を傾けてゐると、急に、病人のことが思ひ出されてきた。

「この間、僕の留守に買物を立てかへて戴いたのがあつたさうでしたね、」

邦介はふと家を出る時、妻から言ひ付かつた金のことを思ひ浮べて、懷中から五圓の紙幣を出して、母親の前においた。

「こんなぢや、少し貰ひ過ぎるやうだよ。」さう云つて、母親は邦介の手から、紙幣を受取つた。

その時、久し振りでみた父親の膝の上で、おとなしく、圓らな眼をくる／＼させてゐた男の子が、ふいにべそをかいて、しく／＼泣き出した。

「まあ、厭やな子だ信一は―、この子の前じや、うつかり話も出來ないよ。」母親は輕く笑つて、ぢろつと邦介の顏をみ、いそいで紙幣を帶の間につつこんだ。

邦介は全三ツになつたばかりの男の子の、このふしぎな發作を見た時、敏感とか、怜悧とかいふ言葉で片付けて了ふことのできない、もつと底深いものに觸れたやうな氣がした。

「信一は、何を泣くの―、へんな奴だな。」

彼はさう云つて、力強く子供の體を抱きしめた。

「ああ、いいお馬があるね、誰に買つて戴いたの、信一一寸持つて來ておみせ。」邦介は曇つた眼を紛はすやうに、向うの椽側にあつた玩具の木馬へ注いで、男の子を膝の上に立たせながら云つた。

「さうさうこの間、あの娘が家へ來たよ、さや子さんが、よしはどんなか、なんて云つて、そしてお金もないのに、信

ーを買へつておこしやつて、一圓五十錢もだしてあれを買つてくださつたよー」

「お花は賣れるさうですか、こしやうさんだー。」

邦介は、男の子が疊の上をがら／＼と引いてきた、黄色い繪具で塗つた木馬を眺めながら云つた。

「別にお花とも言はなかつたから、もう止めたづらよ。田舍からお金が來たけれど、もう無いなんて云つてゐたよ。何んだか、今度の家にも長くゐられさうもないよ。大家さんが綺麗好きで、子供のある人は嫌やだつていふつてー。それに玄關の三疊じやね。」

「これ三越お家で買つたんだよ。お父ちやんー。」

男の子が、再び父親の膝に返つて、甘つたれ口調で云つた。

「信一、三越お家じやないよ。電車通りのフレーベル館だらう。」その時、二階から降りてきた小學生の敏夫が云つた。

男の子は、きよとんとした。困つた表情をして、父親と敏夫の顔とを交る々々眺めた。

「さや子さんが三越だとでも、云つて聞かせたづらよ。なア信一。」母親が云つた。

「松坂やお家の、三越お家だつてー。」

この男の子の澄した容子が、みんなを失笑させた。

「やアあんなことをいつていやがらア。じや信一は何所の學校へ行くんだい。幼稚園だらう。」小學生がからかつた。

「幼稚園はへつぽこが行くんだいー。」

「じや何所だい？。」

「信ちやんは高等學校へいつて、それから郵便屋さんになるのさ。」男の子は、父親の膝を放れ、小學生の帽子を被つ

て、郵便屋の眞似をしてみんなを可笑しがらせた。

「よし、そんなら、信一にお父さんが今度三越お家へいつて、自轉車を買て上げようね。」邦介はさう云つて、

「さや子さんはFの何の邊です、教へて行きましたか」と、母親にきいた。

「何所かに、所書をおいて、いつたけよ、子供が五月蠅いから當分みんなの方へは、行かないなんて―。」

母親が狀差の中から、見付け出したさや子の所書を邦介は心にとめ、それから信一を後を追はないように、小學生につれさせて、表に出したあとで、立上つた。

「まあ爲方がなければ、また伴れ出す迄も入院させてみるつてもんだよ」邦介を、玄關に送り出しながら、母親がいつた。「信一は、此方へ來てゐるし、とにかく一度行つて見て來てからがいゝわな。」

表に出た時、小學生が、なかなか騙しが利かないといつて、信一の手をひいて立つてゐた。邦介は賑やかな、活動寫眞館の表まで行つて、小學生に繪本を買ふ金を渡し、人混みの中へ、急ぎ足で紛れ込んだ。

家へ歸つた時、邦介は途中の藥屋で藥を調劑して貰ふ序に、買ひ求めてきた二三點の滋養物を、妻の前に並べながら、診斷の結果を背ひ出す前に、わざと信一のことを持ち出した。

「ほら、お前から言へつかつたお金をお母さんに渡したんだよ、さうしたら、信一がべそべそ泣き出したのさ、ヒヤツトしたよ。」

「だからわたし、どんなに貧乏をしても、子供だけは人並みに育てようと思つてるのよ、あの子は妙に氣がつくから、わたし達が、面白くない時なんかあの子は、直ぐ知つてゐるの、それにあの子には、へんに寂しい所がるのね、わたし時々思ふのよ、夭死するとか親に早く別れるとかつて子は、信一のやうな子ぢやないかなんて!、そんなことを考へて、

獨りで悲しくなつて、ぽろぽろ泣いてゐることがあるの、今日はあとを追はなかつたの。」
「そつと、活動の前ではぐらかしてきたよ。」
「まあ、惡い人だわ、だけど兄妹のない子は寂しさうね、うちでももう一人女の子が慾しいわ。」
「さうだね」
「あなたお醫者さんは何んて云つたの」妻は、急に病氣のことを言へ出した。
「右の方も、いくらか惡いさうだよ、」邦介は、あやふやなことをいつた。
「さうお、肺の方は大丈夫？。」
「肺?その方のことは、餘りよく訊かなかつた。」
彼は、空呆けた。
「まあそれが大切じやないの、厭やだわ、呑氣だから。」
「だつてお前、惡いなら向うで何んとかいふよ、第一喀血するさ。」彼れはきつぱりと云つた。
「そりや、さうね」
「所がね、中野の田舍に病院があるんだつて、」邦介は輕く、他人のことのやうな、調子で初めた。「市で診つてゐる、肋膜、肺腺、まア大體呼吸器の病氣だね、いくらか肺の惡い人もゐるだらう、その病院の院長と、小村さんとこの院長と心安いんだつて、だから賴んで上げるから、奥さんが二三ケ月行つて遊ん來られたらなんて云つてゐたぜ、面白い醫者だよ。」
邦介は、さう云つて、凝乎つと相手の顏色をそれとなく覗つた。

「厭やだわ、わたし病院なんて。」妻は頭から刎ねつけた。邦介は、科學上の智識を、頭の中で都合のいゝやうに組立てて順々に說得した。

「つまり、あゝいふ病院へは肋膜とか、肺膜とかのうちに入れば癒るんだよ、病院としても、さういふ患者を歡迎するさ、何故つて、その方が成績が上るもの。」

「あなたは。」妻がキツトなつた。「ぜひわたしをそこへ入れようて云ふの。」

「そんなことはないよ、馬鹿なつ。」邦介は狼狽した。

「お醫者さんが、肺が惡いつて云つたんでしよ、きつと、さうだわ。」妻は、だんだん心が昂ぶつてくるといふやうに云つた。そして、次の瞬間にもう劇しく泣きじやくりながらつゞけた。「わたしだつて、まだ死にたかないのよ、口惜しいなア、こんな病氣に何うしてなつたんだらう、あなた正直に云つて頂戴、わたし覺悟をするわ、信一を招んできて、よく云つとくことがあるの。」

邦介はこの妻の發作を靜めるために、言葉をつくして、さまざまになだめすかし、今度は正面から說いた。

「一月でなくても、僕の仕事の片付くまで、お前が病院で辛棒してゐたら、一緒に海岸へ行くよ。それに、僕一人なら、こんな家は畳んで何所か病院の近くに安い室をみつけて越していつて、一日に一度は必らず見舞ふからね、さうなれば、只病室を離しておくと同じことだよ、經費もはぶけるし。」

この邦介の進言をきいた時、妻は初めて首肯いた。

「さうね、さうすればいいわね、でもあなたが來てくれるかしら。」

「そりや翌る日からでも越して行くよ、それに僕はこの家がつくづく厭になつたよ。」

「さうでせう、わたしも、こゝに餘り長く寝てゐたくないの。耳の間から、チロチロ兵隊の人達が見るんですもの」と
も、寂しい笑顔にかへつて云つた。

十一

翌日、邦介はN村の療養所を見に出けた。行きがけに、彼が禮三を訪ねて、診斷の結果に就いて話り、尙入院のことを相談した時、

「君や、子供さんのためにも、それに上越したことはないさ共倒れになつた例は澤山あるし、それに、何うしても不愉快の場合には、退院すればいいんだから――。」

禮三も思慮深い調子で云つて、邦介の企てに双手を擧げんばかりにした。

いくつもの丘陵が、緩く波打つてゐる單調な野原が、その遠景に見える、竹林を背負つた草葺屋根の配置や、丘と、丘とのつながりの加減で、邦介の前に、時として非常に勝れた景趣を展開した。

砂埃を浴びて、暑い陽の中を歩いてきた邦介は、額の汗を拭きながら、さうした丘の青葉に包れた、斜面に建つてゐる療養所の門を入つていつた。

右手の松林では、蜩が啼いてゐた。所々痰壺のおいてある長い石敷の上を歩いて行くと 草花の咲いた庭の木の枝や、臺の上に白い洗濯物が、陽に晒らしてあつた。

廣い應接所の板敷には、三つの丸テーブルが、据ゑられて、今庭から鋏み切つたばかりと思ひる大輪の百合や、西洋花が無雜作に花瓶に投げ込まれ、窓の向うには、廣い庭を挾んで幾棟から病舎が重りあつてゐた。窓際には桃色した

消毒薬の入つた手洗ひが清潔を思はせるやうに置かれてあり、青葉を渡つてくる涼しい風は、つきぬけに吹き通してゐた。この中に六百人近い不幸な患者が、刻々迫つてくる死の壁を見つめて、病苦に呻吟してゐるのだらうか、—實際邦介にさう思はせたほど、浮世離れといふ言葉の持つ、あの靜閑さが、この一區劃を領してゐた。邦介は、そこに、あの暗い座敷とは比較にならぬほど、完備した妻の病室を見たやうに思つた。彼が會見した年取つた事務員の、比較的丁寧な應待まで、施療院のそれではないように思つた。特別にも、彼が惹きつけられたのは、一人の退院患者を見たことであつた。多勢の看護婦に別れを告げて、良人と共に俥で門の外に運ばれて行く母らしい婦人の、再生の悦びに輝やく顔をみた時、彼は羨しい氣さへした。

邦介は、かうした種類の病院が、病人にとつての、尤も大切なものを、欠いてゐることを、充分過ぎるほど知つてはゐたのだが、眼の當り見た設備と、靜かな、外界との交渉を絶つた境地と、世川のことゝが、彼を一筋にひきつけた。ただ、時々門衛から札を貰つて來ては、受付の看護婦に、丁寧に頭を下げて、下足を預けて遠い廊下の方へ姿を消して了う、みすぼらしい服裝をした患者兩付人達の、憂ひ深く沈み切つた顔や、絶へず怯えるやうな容子が、彼の胸に暗い翳影（かげ）を投げかけはしたけれども—。

三日經つて、邦介は病人と、義母を說き、小村醫學士の手を煩はし、入院に關する手續きを終つた。たゞ入院日の通知のくるのを待つばかりになつた。

連日、氣温は九十度近く上り、雨は一滴も落ちてくる氣配はなかつた。板塀の外は、絶へず打水をしても、直ぐあとから、ぱつと白い砂埃を舞はせた。夕方になると、長屋の上さん達は、遠くでみると白い布を卷きつけたかと思ひるほど、首だけ眞白に塗りたくつて、表の氷屋の涼み臺に集つてきて、濁つた眼でちろちろ通る人を眺めてゐた。—

同じ長屋に住んでも、ふしぎに他の上さん達と、氣の合はない、一風變つた氣のある隣りの上さんは、時々子供をつれてきては、緣側に腰を下ろして、病人と話してゐた。

「あたしは、白粉をつけた女をみると、嫌になつて、ご飯が食べられないんですの、あたし國にゐる時分、町の宿屋へ奉公したことがあつたけれど、お白粉をつけたお客さんの座敷へお膳を運んで行くのが嫌で、とうとう暇をとつて了へましたわ。」

この上州女は、まるで、何か憤つてでもゐるやうな調子で云ふのだつた。

「まア、そんな方て、少ないですわネ、あの匂ひがお嫌いなんでしよ。」縁の上から妻が云ふと、

「匂ひばかしじやないの、遠くでみても、ムカツとしますもの、お宅へこの間中見えてゐた、子持の方も白粉氣のない方ですわね。」

「ええ、あの人はちつとも。」妻が答へた。

「奥さんがお留守になつちや、寂しくなりますわ、病院は何所にあるんです？あたしもお見舞ひに行きますわ。」

「さア、何處でせう？、中野とか云つてましたけれど、遠いから大變ですわ。」

邦介は、成可く、自分の入院する病院のことを、他人に知られまいとして骨折つてゐる妻が、この間から度々不遠慮な上さんの質問に閉口して、へこ垂れてゐるのを知つてゐた。

「でも、先達つてあの方のゐた時からみれば、大變よくおなりですわ、矢張し奥さんは、しつかり旦那に附いてゐて戴く方が早く癒りますわ」上さんは笑ひながら云つた。

實際病人の容態は、あの朝邦介が病室へ踏み込んだ時から見れば、ずつとよかつた。咳の數が減じ、熱の度が下つて

ゐた。それでも、病人は終日褥の上で表から照ね返つてくる暑さのために、すつかり弱つてゐた。夜など一つ蚊帳の中で、もう眠りかゝつてゐる邦介の枕下で、絶へず氷をがりがりと、噛み砕く音がきこえた。

先月の末、裏の長屋にゐた琵琶の師匠が越していつて、やつと助かつたと思ふと、直ぐそのあとへ同じ琵琶師仲間が入つて、夜になると、自分の若い細君にでも習はせてゐるのか、異常な熱心さで聲を張り上げて、面白味のない彈奏を初めるのだつた。それが一層この長屋の夏を暑苦しいものにした。

「わたし、あの下手な琵琶を廢めて貰はうかしら、病氣だからつて、毎晩ちつとも眠れやしない。」病人はかんしやくを起し、泣き聲を震はせた。

邦介は、そんな時、決つて病院の涼しいことを持ち出した。

「病院へ持つて行くものを、一寸書いてみて頂戴、はみがきに、タオルに、それから、小さな手のついた鏡と。」

病人も又、愈よ行くことに決めてみると、急にその方へ心が向ひ出したといふように、まだ通知も來ないうちから、邦介に紙を展げさせて、一つ一つ算へたてた。

「着換への浴衣と、空氣草履を買つて貰ふわ、それから、洋傘（かさ）がほしいんだけれど、だめ?。―」

「洋傘なんて、出て來てからにおしよ、それに車で行くんだから古い下駄で充分だよ、あの病院に餘り立派な風をして行くと、斷られちやふぜ―、今夜買物の序に、浴衣は見てきよう。」

「さうお、心細い入院ね、」妻は笑つて、「じや出てくる時には忘れないで―今から約束しておくわ。」

それから、一時して、妻はいつた。

「でもふしぎね、あなたに側についてゐて貰ふと、めきめき快くなるつてことは、此間から見れば、よほど違ふんです

もう、熱だつてづつと八度台でしよ。」

「僕の變つた故もあるよ、桑島さんとは違ふさ、あの頃のやうにや、病院へも行けないよ。」

「こんなにいいんだから、向うへいつて惡くなるやうなことはないでせうね、わたしの留守に、あたたは、さや子さんをよせては脈やよ、ちやんとお隣りのお上さんに見張りをして貰ふから。」妻は、淋しく云つて、邦介にそれを誓はせた。

「そんなに、お前は僕のことが氣になるかね。」さういつた瞬間、邦介は、胸のふさがるやうな氣がした。二三日前に、彼は病人の敷ふとんを陽に干した。その時、彼はふとんの下から出てきた、澤山の川さわにしまつた手紙の屑を、何氣なくひろげてみた時、彼は初めて彼女が、何の位さや子のことで、心を亂したかと云ふことを知つた。

「わたしが、弱いから、あなたに苦勞ばかりかけて、惡いと思つてゐるのよ。」

彼女が、しんみりと云つた。

「僕はね、この頃よく死んだお母さんのことを考へるよ。」

邦介は、力強くいつた。「母は僕を誰よりも一ばん可愛がつてくれたからね、もし靈と云ふものがあるなら、お前の病氣をよくしてくれることを信じてゐるよ。」

「わたしもさうよ、いつも褥の上で、お父さんとあなたのお母さんにお願ひ申してゐるわ。」妻がいつた。

彼女は、病氣に馴れない邦介が、自分の咳き込む時、そつと顔を背けたり、食器に熱湯を注いだりするのを、よく見とがめた。

「あなたは急に神經質になつたのね。」[illegible]

そんなことをいつでも、一と頃のやうに、それ以上深くつつこんでは來なかつた。それほど、彼女は良人の心を信じきつてゐた。全快の日のくることを固く信じてゐた。—

十二

七月に入つて、病院からの通知は、寄留地の關係から、市内にある母親の方へ屆いた。

夕方母親は、之れを懷にして、一度病院に行く前に逢つて行きたいと云ふ妻のために、信一をつれてやつてきた。

「七日中としてあるわね、愈よ明日行くのかな、あなたが歸つたあと、一人切りで病室に殘るのが、何んだか怖いようよ。」妻は、朱肉の鮮やかな、四角な印をベタリと捺した、帶の間で二ツに折目のついたはがきを、母親の手から受取つて眺めながら云つた。

「早くてよかつた、受付の話だと順番を待てば、早くても一月位はかゝるつて云ふんだから、小村さんがよく賴でくれたんだらう。」邦介は、傍から煽り立てるやうに云つた。

「順番て、矢張、病室の空く都合でせうね、みんな癒つて出るのかしら—。」

「いろいろ、あるづらよ病院だもの、—」母親が云つた。

「でも死ぬ順番なんかになりたかないわね。」妻は輕く笑つた。

「お前あれを縫つてきたよ、」母親は、包みの中から、邦介の見立てゝきた、桔梗にすゝきを散らした柄の浴衣地の仕立上げたのを、とり出した。

「まあ、よくなつたわね、一寸着てみるわ。」妻は、それを手にとつてみながら、さういつて蒲團の上に立ち上つた。彼女

は、痩せ細つた腕にそれをつけて、くるくると伊達姿をしていつた。

「何う、似合つて？」

邦介はすんなりした妻の立姿と、自分に笑ひかけた顔を含んだ微笑とを眼に入れた時、これほど病み衰いながらでも、執拗に燃え殘つてゐる愛慾の火をまざまざとみせつけられたやうな氣がして、寂しく笑つた。

「母ちやん似合ふ」邦介の膝の上で、繪本をひろげてゐた男の子が、突然ませた口を利いた。

「厭やな子、信一は。」妻が笑つた。

晩飯をすますと間もなく、男の子の眠らないうちにと云つて、義母が歸る用意をしながら云つた。

「さア信一歸るよ、お兄ちやんが待つてゐるから。」

「信ちやん、お家にゐる！」急に男の子が頑張つた。

「信ちやんはね、もうちつとお兄さんのとこへいつていらつしやい、直きお母さんのキーキー（棄菓）がよくなりますからね、今度はお母さんの方から、お迎へに行きますよ、さア」妻が云つた。

「お兄さんが何所へつれて行くつて云つたけなア、そら！月島へ泳ぎに、行くつて約束だつたよ、さア行かう。」義母が困つた顏をして云つた。

「信ちやん厭や。」男の子は拗ねた。

「弱つたなア、信一は」邦介は歎息した。

「じや、かうしませう、お父さんとお母さんが直ぐあとから信ちやんの所へ行くつてことにしませう、そんならいいだらう、ね信ちやん！」妻が、男の子の體を抱くやうにして、眼頭に光るものを溜めて、肯へ含めるやうに云つた。

「信ちやん行く。」ふいに男の子は云つて、小さい洋服の體を、母親の手から擺ぐようにして、玄關の方へ歩いて行く。

三人は、思はず眼で笑つた。

「よし、そんなら御褒美に、お父さんが終點までおんぶしていつて上げよう。」邦介が、さう云つて立ち上つた。

「お母ちやんが、直ぐあとから行きますよ。」病人は褥の上から、玄關の方へ聲をかけた。

終點で、背中の子供を下ろし、電車の近づいてきた時邦介がいつた。

「あとから、お母さんと一緒に行きますから、おばあさんを困らせちやだめだよ。」

「お母ちやんは來ないだらう、あした病院へ行くから。——」

男の子は、さう云つて祖母に手をひかれて、父親の顏を見向きもしないで、とつとゝ箱の方へ小さい足を運んでいつた。——

邦介は、すつかり救いた氣で此處までやつて來た自分が苦笑された。彼はそこに、ぐんぐんとつき上げてくる生命の力をみたやうな氣がした。

邦介は、その足でうろ覺えのさや子の所番地を頼りに、Fの家を探した。暑苦しい、家の中にじつとしてゐられないやうな夜だつたから、ひよつとしたら、出てゐるかと思ひながら、交番の前の生垣に添つた狹い小路の奥の湯川といふ表札の出た門構の家の表に立つた。これまでも、松尾を探ねての歸りに、それとなく注意してはゐたのだが、わざわざ探し出すと云ふ氣持になれないのであつた。一つには田舍で受取つたさや子の手紙にもよるが、それよりも彼は病人に對する自分の心持の純一さを失ないたくないからであつた。病人がそれを氣付かなかつたとしても、あの弱り切つた妻に

對して、自分が秘密を持つといふことに、心苦しい氣がした。

玄關といつても、奥と左右との三つの室の眞中に挾れた二疊であつたから、そしてこの三つの部屋には、別々な人が住んでゐたから、この蒸し暑い夏の宵にも拘らず、三方の襖はギツシリと、閉て切られてあつた。靴箱の上に、土釜や、七輪や、醤油の壜が、ゴチヤツと竝んで、土間の隅には、炭俵がおかれてあつた。

さや子は二人の女の子の眠つてゐる傍で、暗い電氣を下げて、茶餉臺に向つて、何か書きものをしてゐた。

邦介は、意外にも、彼女が顏にうすく白いものを塗つてゐるのをみた。彼は、のつそりと土間に立つて、軽く眼だけで挨拶した。彼女はペンをおいて、机を放れ、彼に近づいてきた。

邦介は、初めて彼を見、ペンをおいた瞬間、彼女がムツとして憤つてゐるのかと思つた。彼が、それが非常につよく感動した時みせるさや子の癖だと氣のついた時、もう彼女は邦介の前に立膝になつて、眼をうるませてゐた。

「よし子は、ひどく、惡るいんだ！」

邦介は、恐ろしくぶつきら棒な口調で云つた。

「ええ、わたしきいたのよ、二三日前にいやな夢を見てね、それからあの邊まで出かけていつてみたの、だけどとう〳〵寄らずに來たの、それで今日神田までいつた序にお母さんの家へよつてみたの、さうしたら敏ちやんが一人でゐて、すつかり話してくれたの、あなたは、よしさんを何うしても病院へやるつもり？。」

「何うして？」邦介はびつくりしてきゝ返した。

「あゝ、あなたは施療病院てものを、ちつとも知らないのよ、わたしは、みさ子のお産の時に、和泉橋の××の施療病院に入つたでしよ、まだお産だから我慢できたけれど、あゝ云ふ所で病氣が癒ると思つたら間違ひだわ、せめて病室で

も別ならいいのよ、それがお隣りのベッドで喀血でもしたり、死にでもされたら何う？あなたのやうな人が自分の大切な細君をそんな所へ入れるなんて、病室は檢べて來て？。」

「さあ」邦介はその時、初めて自分が病室のことに氣がつかなかつたのを知つた。

「これからあすこなんか逢ふでせうけれど、時々病院に關係のあるお金持の細君達が見にくるのよ、その時の患者の容子といつたら、—みんな手を合せて拜んでゐるんですの、あれだけでも、厭になる位よ。」さや子が云つた。

「肺結核の病院には、來ないよ。」邦介は笑つた

「この間、滋野のお姉さんが、わざわざ訪ねてきたの、米田さんの教會へ遊びにいつてみさ子のことを頼んだのよ、さうしたらあの人が、原宿へつて話してくれたの、だけど、いよいよお姉さんがきた時には、わたし矢張し斷つたの、みさ子一人をやつても、まだもう一人あると思つたら、急に手放すのが厭やになつちやつた。」

さや子は、口端を歪めて、捨鉢な口調で放げかけるやうに云つた。

「生活の方は、何してゐる？」邦介は控目にきいた。

「田舍から、少し送つて貰つたのよ、でも何日もありはしないの。」

邦介は、その時さや子が急に顏を嶮くして、ひどく狼狽するのを見逃さなかつた。

「この間の晩、芝山がきて、少しおいて云つたわ、そしてこんなにして家を分けておいても、不經濟だから、一緒にならうなんて云ふのよ。」さや子が云つた。「さうして、お金がちつとも失なつちやつたから、ふとんを賣るつて云つたら、そんなぼろぶとんを賣つたつて、いくらにもならないだらう、もつと、値のするふとんを賣れつていふのよ、わたし口惜しかつたけれど、たとへ僅かでもあの人の外に、わたしにお金を吳れる人はなかつたの、——二人の子供を餓ゑ

させないで生きて行くつてことは、わたしは何か書いたり、思つたりすることよりは、もつときたないことだと、しみじみ思つたわ。」

邦介は、この言葉をきいても、少しの幻滅も、あの晩のやうに、煽り立てたい心持も起らなかつた。今は何も、彼もが邦介には、當然すぎる氣がした。

その時、大きい方の女の子が、眼からさめて、傍に母親のゐないのを見ると、泣き出した。

「お母ちやんゐない、お母ちやんよう。」さう云つて女の子は寝呆けて、よろよろと、聲のする方へ歩いてくる途端に、疊の上で渦を巻いて、ともりかけてゐた蚊やり用の線香に躓いた。

「お母ちやんは、此處にゐますよ、みさ子！。」

さや子は、さう云つて、女の子の背を一つうんと叩いた。女の子は、怯えて、母親の膝にしがみつき、「何所かへいつちやいや、いや、いや。」と、だんだん劇しく泣き喚いた。母親は、薄い洋服の裾を捲くりぼつちやりした尻の邊りを、つゞけざまに五つ六つうつた。白い肌に赤く血のにじんだのをみた時、「お止しよ」邦介は、心から腹立しげに云つて、上にとび上つて、母親の手から、女の子を奪ひとつた。

「男の人には、母親が子供をうつ心持が分らないでせう、母親はかうして自分を打つてゐるのよ。」さや子は、さう云つて二つの袖で顔を隠し、聲をかんで泣き出した。

すつかり正氣に返つた女の子を膝の上にのせ、「小父さんが明日お人形さんを買つてきて上げようか、おへその處のピウピウと鳴る奴を、ね、いい子だね、」邦介はこんなことを云つて、すかしなだめながら、白い前かけの裾で、頬べたに傳る涙を拭いてやつてゐると、毛の生へ際や、薄い唇から、愛くるしい二重顎の邊りまで、母親にそつくりなやうに思

ひた。彼はそこに、新しいさや子を見たやうな氣がした。――

邦介はやがて、受取らないといふさや子に、幾何かの金を渡して表に出た。二人共、言ひ合せたやうに、さや子が邦介の家で過ごした日のことを口にしなかつた。

彼は暗い道を曲つて、そこの交番の前に出ようとする所で、アルパカに、新調らしい帽子を被つた芝山鉄吉に、バツタリと、鼻と鼻とをつき合はせるやうに出會つた。彼はその出會し方が可笑かつたのでクスツと笑つた。向うでも笑つた。

「奥さんは、如何ですか。」芝山はいやにへり下つた調子できいた。

邦介は咎への代りに自分でも滑稽な氣のするほど、ガツクリと頭を一つ下げて、彼の前を離れた。芝山の滿足しきつた容子に、彼は嫉妬に似た、不快な氣持を感じた。

「さや子は、あの××の家へ歸へつて行くだらう――」

さう思つた時、彼は初めてみさ子を手放さなかつた氣持が分つたやうに思つた。彼は、何んとなく重いものを肩から下ろしたやうな氣がした。彼は、明日の妻の入院のことを思つた。彼は道の眞中に立止つて、頭が帶の結び目に屆くほど體を外らし、空を仰いだ。月のない、晴れた空だつた。

「何んといふ美しい星の光りだ!。」

十三

朝、妻が俥に乘つた時、大工の上さんは、邦介の家の表迄出てきて云つた。

一兒さんお好きだつて仰言るから。うちの仕事の終りに名物の鳩せんべいを買はせて、わたしより買ひに行きますわ
旦那からよく所をきいて。」

「ええ、ありがたう、ほんとに。」

行く先きを秘くして出る妻は、お喋舌の嫌いなこの上さんの眞實の籠つた別れの言葉まで、心苦しいと云ふやうに、輕く受け流した。

病人をつれた邦介が、武藏野を斜めに走つてゐる私設電車を、Eといふ野の中の停留所で捨てた頃は、廣い野は一面に草いきれが燃え、向うの街道はチリチリと焦け上つて、人や荷馬車の通るたびに白い砂埃を上げてゐた。

停車場の庭にくつついてゐる稻荷様の庭をぬけて街道へ出、そこで病人のために俥を雇ひ、邦介はこのあとについて野道を病院の方へ歩いた。

道の右側に新しく出來た學校の庭では、白い運動服をきた青年が、庭球をしてゐた。道端に立つてゐる櫟の並木には、大きな甲蟲が角を押し立てゝゐ、蝶や蜂が幹のまわりをとび廻つてゐた。畑では芋づるが伸び、きくわや、西瓜が土の上に太つてゴロゴロと轉つてゐた。赤い山百合の花をすぼめたやうな野草の花が、かぼそい、青い莖のてつぺんで開いてゐた。

かうした野道を運ばれて行きながら、青い稻田をめぐつた丘の上に建つてゐる病院の陽をうけて光る瓦屋根を幌の中から見た時、妻は輕い悦びの聲を洩らした。

「まあ、涼しさうな所ね」と、

道は大きく迂廻して、平坦な大通りに合し、やがて病院前の坂を上り切つて、穏やかな門を入つていつた。

玄關で車夫を歸したあとで、邦介は涼しい應接所の椅子の一ツに妻をかけさせ、自分は傍に立つた。

「疲れた?」

「いいえ、そんなでもないの、」病人は青白い艶のない顔ににじんでゐる細かい汗を拭きながら、云つた。

邦介は立つて受付へいつて通知書を示した。

「少しお待ち下さい、予診をいたしますから。」受付の看護婦が云つた。

「予診をするんだつて——」邦介はテーブルの傍へかへつてきて云つた。

妻は、それには答へないで、庭の方へ眼を放げてゐた。遠くの方で蟬が啼いてゐた。時々スリツパの音と、ドアーを閉切る音が響いてくる切りひつそりとしてゐた。

「靜かだらう」

「ええ」、

予診室へ病人が看護婦に案内されて行つてゐる間に、邦介は先達つての事務員と話してゐた。

「お引受人の御住所は、お變りになりましたら、直ぐ知らせていたゞくことになつて居ります、御病人に萬一のことが、ありました節は、これがはつきりしてゐませんと、困るので、尤も直ぐと研究室の方へお廻しになる方もあります。」

「と云ふと何んですか、解剖するんですか、」邦介は嚇つとなつていつた。

「左様です、さういふ方には定つた解剖料をさし上げることになつて居りますので。」

「患者の何割位は全快しますか。」邦介は卒直にたゝみかけた。

「數字の示す所では、」人の好ささうな事務員は、ひどくどぎまぎして云つた。「極く少くないですが、是は捻ぎ込んで

た[illegible]から。」

妻が診察室から出て來た時、邦介は事務員に頭を下げて、彼女の方へ近よつて云つた。向うの方から看護婦が出てきた、マスクをつけた診察所の醫者が彼等の傍を通つていつた。

「何う？」邦介はきいた。

「さう、よく聞かなかつたけれど、一期位でせう。」妻が寂しい眼をして云つた。邦介はギクッとした。

「あなたは、わたしが氣付かないと思つてゐるの、この病院の樣子を一眼みれば、その位のこと分るじやないの、でもこゝまで來れば覺悟はしてよ。」

邦介は默つて、涙の溜つてゐる妻の顔から眼を外らした。

若い、キビキビした看護婦が近づいてきて、

「ご入所の方はこちらへ」さう云つて、廊下の奥の方へ二人を案内した。

爽やかな、音を立てゝ、蒸氣の通つてゐる廣い廊下の中程で右に折れると、左右に炊事場と、看護婦の控室とがあり、廊下は自づと廣い病院の中へ導かれてゐた。―その入口の敷居を一足踏み入れようとした時、邦介はさすがにはつとした。彼は、病人のためには、隣り合つたベットにほんの二三尺の間隔をおいた一個のベットが與へられてゐるに過ぎないのを見た。その途端に、兩側の庭に向いて、窓の近くづらつと並んだ五六十台の白いベットの上から、新しい仲間の上に放げかける、病苦にやつれ切つた女達の、眼だけぎら／＼する視線に打つかつた時、彼は居堪らない氣がした。それはあの裏長屋の、見栄坊で、せんさく好きな上さん達の眼を、此一つの室へ集めたやうなものであつた。自分と對照しての相手の生活向き、入院の時の服裝、顔のよしあし、特に彼女達にとつて、重大なことは、新しい仲間の症

狀の如何であつた。自分と、何方が早く火葬場の釜の中へ入るか？、けれども、看護婦は、容捨なく彼等を導き、づつと入つた所の右側に用意してあつたベットの前に來た時、それを指示した。

「これへ何うぞ、」

妻は、兩隣りの患者に輕く會釋して、自分のために待つてゐたベットの横に立ち、着換へをするために、良人の提げてきたバスケットの蓋を開けた。

邦介はまるで斷頭台に上る親しいものを眺めるやうに心持で傍に立ち、「何うして、妻を一人この女達の中に、殘しておくことができよう—、」さう思ひながら、改めて廣い部屋の中を、仔細に觀察した。

そこは、病室としては、極めて清潔に、秩序よく整頓されてゐた。兩側の長いベットの列は、規則正しく配列されてあり、褐色の革張りの床は、油雑巾で拭き磨かれ、紙の屑一つ落ち散つてはゐなかつた。窓々からは、風が自由に吹き通してゐた。四方の真白い壁には、所々安物の色刷の風景畫がピンで止めてあり、中央の二本の角柱の花瓶には、草花が無雑作に投げ込まれてあつた。患者達は、退屈さうに半身を起し、菓子袋を前において、口を動してゐるもの、疲れてうとうとと眠つてゐるもの—、だるげに、痩せて小さくなつた、青白い足を、ふとんの上に投げ出してゐるもの——これらの患者達の咳の音が、時々聞えるだけで、其處には、かうした重症の患者を收容する病室だけにゐる、底深い靜謐があつた。

妻は、ベットの上に座り、頭の方に置いてある方一尺ばかりの、台についた抽出しの中へ手廻りのものをつめた。

その時、邦介は隣りのベットの上で、一寸みると十六七の少女かと思ひるほど、顔のこけた、貧相な三十位の患者が、

へし折れさうな細い指を器用に動して、小形のトランクの蓋の中をいぢつてゐるのを見た。邦介は、指の先の所だけに、一寸意外な氣がした。それとなく女の容子に眼をとめた。いくらも残つてゐない髪の毛を梳いて、首から少し上つた所で、ピンで止めてゐた。何方かと云へば、美人型のいやに鼻筋の通つた、高慢な顔をしてゐた。邦介は長年小學教師をした女の顔だと思つた。

女は、ベットの上の札を、素早くかき集めながら、獨り言つた。

「今日は、誰も來ないわ、札がちつとも出やしない。」

邦介はその時、この女の視線が、ちろちろと自分の顔に注がれてゐるのに氣がついた。女のベットが、この女と盡んでゐるのではやり切れないと思つた。

「お荷物は向うの洗面所の横におく所がございますの、御案内いたしませう。」

女は、邦介が病人の當座の入用のものだけ出したあとの、バスケットの所置に窮してゐるのをみると、さういつて滑るやうに床の上に下り、先きに立つて歩き出した。女は、邦介を病舍の中程から横に延びて出來てゐる、洗面所の横の荷置場の前につれて行き、自分で板戸をひいて、澤山の荷物の中へ仕舞はせたあとで、話しかけた。

「ご病人は、まだお輕症のやうでございますわネ、わたしは、此處へ參りまして三年になりますの、皆様よくお代りになりますけれど、感心に殘つて居りますわ、昨晩も腸結核の方がお亡なりでしたの、只今も向うの衝立の陰に重症の方が四人居られますが一日二日でございませうね、一人は天理教信者ですの、中野からその方の坊さんが見えさして、さつき歸られたばかりですわ、もう脳へ來たもんですから、面白いことを云つて騒いで居りますの、——」

女は、邦介の聞きもしないことをベラベラと、薄い唇を動かして喋り立てた。

「初終喀血などありますか――」邦介は、顏を歪めてきいた。

「ええ、ございますとも、ついこの間も、川村さんて若いお子抜の方が、大喀血で一二分間で死なれましたの、でも、普通の喀血はちつとも怖かありませんわ、――、こゝは御承知の通り、そんなことを申しちや失禮ですけれど、みんなお家のよくない方ばかりですの、わたしなども、愛人が勉強中だつたものですから、長いとこんな處へ押し込められて、――お蔭さまで、漸うこの春看護士の試驗がうかりましたから、今度は連れにくるだらうと思ひますのホホ……。」

邦介は、このシヤシヤした三十女の愛人といふ言葉が、可笑しかつたので危なく失笑す所であつた。が、彼はその反對に、一層むづかしく顏を顰めて、病室の方へ歩き出した。彼はその衝立の蔭の天理教信者の垂死の床を、それとなく眺めた。そこは部屋の奥深い壁際で、遠方からは、衝立の向うにベツトの裾が見えるだけであつた。

邦介が、妻のベツトの傍へ歸つた時、妻はもう左側の患者と話してゐた。

「あなた、いいお友達ができたのよ、此方。」妻は晴やかな笑顏を向けて云つた。

彼はさつき、何かの用できた看護婦が、溝口さんと呼びかけたのを思ひ出しながら、初めてその患者に輕く頭を下げた。ほんのまだ子供のやうに思はれた。桃色のすらりとした、元祿袖の着物をきて、結核患者とは思ひないほど、肉付のいい、ばら色の透き徹るやうな肌をした、澄み切つた、眼の大きい少女であつた。少女は、髮を後の所で二ツに分けて、下げてゐた。彼は、少女を見た時、清らかなものに觸れたやうな氣がした。その胸の上に吊してゐる小さな銀色した十字架章まで、決して不自然ではなかつた。

少女は、默つて辭儀をした。

「わたし九月になつたら、溝口さんと一緒に海へ行くことをお約束して了つたの。」妻が云つた。

[illegible]

とを心に誓つた。

邦介はこの時、右側の患者が、ベットの上から上草履をまるで叩きつけるやうに、床の上においたのをみた。そして彼女はベットから下りて、何か憤つてでもゐるやうに、ベットの枕を振つた。そのしぐさは、高慢な女が自信を傷つけられた時に示すそれであつた。妻もそれに氣がついたとみえて、眉根を動かして、邦介の顔をみた。

それでも、間もなく檢温の時間がきた時、彼女は台の抽出しから、流行遅れの大型の銀側時計を出し、他の患者達に向つて、

「みなさま、檢温でございます。」と聲をかけ、そして妻に、ツンと取澄した顔を向けて云つた。

「檢温の時には、わたしから申し上げることになつて居ります。」

それが、この病舍の中で、自分が最も學問があつて、古參なのだといふことを、此新人の患者に無理にも思ひ込ませようとするように聞えた。

三十を越した、體格のいい、きかない性質を眉の間に閃めかした看護婦長が、若い助手をつれて、妻の前にやつてきた。型の如く、經過や、容態をきゝ、脈搏を檢べ、體温を表の中へ記入し、助手に小量の血液を壜の中へ取らせたあとで、細々とした注意を與へた。

子供のことで神經を使はないこと、當分は安靜にして部屋の中を歩かないこと、買食らへをしないこと、食事の外に、一日に鷄卵なら一個、牛乳なら一合づゝ出るから、何方でも隨意に選ぶこと、——等、

晝飯は、決して吾儘な、病人の口に合ふやうなものではなかつた。看護婦の運んで來た盆の上の、丼にもつた飯と、

煮魚にカレー粉を打かけたお茶皿を眼に入れた時、妻は箸を取らずに、そのまゝ押しやつて了つた。

邦介は、心を暗くした。彼はその時、隣りの少女が餘程熱心なクリスチャンと見えて、箸をとる前に、祈祷をするのを見た。

「あなた、コップをお持ちですの、此所ではご飯の時お湯をいたゞいておきませんければ、あとは戴けませんの。」

右隣りの患者が、すつかり機嫌を直した顏で云つた。

それで、邦介は幾つもの病舍へ通じてゐる長い廊下を歩いて、突當つた所にある賣店から、大形のコップと、水密桃とカステラーを妻のために求めて來た。

晝飯の後、邦介はコスモスの延びてゐる庭を一廻りして、病舍の中へ歸つて來た時、妻が云つた。

「溝口さんはこの春まで谷中のお寺に借りていらつしやつたんですつて、畫をおかきになるお兄さんと二人切りで、御兩親はあるんだけれど、お母さんが違ふから別になつていらしやるんですつて——、お兄さんは、此處へ一日に一度は、きつと見にいらつしやるつていふのよ、感心ですわ、ほんとに。」

邦介は、今は少女に話しかける立場におかれてゐることを感じて云つた。

「もう、長く御病氣ですか?。」

「ええ、丁度この夏で六年になります、小學校の卒へる年からですから。」少女は、長い咳のために、いくらか嗄れた聲で、明るい暢りした調子で答へた。

「ほう、六年!」邦介は呆れて云つた。「お兄さんは、洋畫をおかきになる人ですか?、」

「ええ、でも時々內職に日本畫や漫畫もかきますけれど、此頃は止めました。漫畫をかくと、物の觀方が違つて來るな

んです。」

「おいくつですか？」

「二十歳です、来年は検査ですけれど、兄が戻られたらと思つて、今から心配して居ります。」

邦介は、この台詞によつて、少女が彼が想像したよりも、もつと年取つてゐるのを感じた。彼女の五月の朝のやうに爽やかな感じは、決して富めるもの丶間に育くまれたそれではなく、それは、藝術的な教養のある門弟の兄が、自分の制作を愛するやうな心持で、柔かい病める少女の心を傷つけまいとして、大切に育んだ質の高い徳行であつた。

「あなた、溝口さんの詩を拝見してごらんなさい、澤山ノートに、とつておきですわ。」妻がしばしばにいつた。

少女は、瞬間頬を紅めていつた。

「まだ、ほんの初めたばかりでございます。」

併し、少女は少しのためらひもなく、一冊のノートを彼の前においた。

邦介は、所々ひろげて見た。鉛筆でかゝれてあつた。殆んど幼時の追憶の詩で、病院生活を歌つた詩はほんの二つ三つしかなかつた。幼稚で、冗慢で、詩形も古く、何方かと云へば、まだ詩としての形を備へてはゐなかつたが、これは嬰兒の産聲のやうな、生れたまゝの詩であつた。

「ブレークの詩を、お好きのやうですね。」邦介は云つた。

「ええ、兄から奬められましたので、」

邦介が、ノートを返し、少女との會話を打切つた時、妻が洗面所へでも行つたものと見える、右隣りの室のベットをさして云つた。

「この方へんよ、わたしが溝口さんと話してゐると、直ぐプリプリ慍つてゐるの、深川の女教員なんですつて、あんな年をしてゐる癖に、頬紅をつけてゐるの。」

「まさか」邦介は云つた。

「まあ、男て呑氣ね、チャントつけてゐるわよ。あの台の下の書物(ほん)がいいじやないの。」

「何に？」邦介はベツトの頭の處にある含嗽の瓶や、コツプや、細かいものに交つて、小さい一輪ざしさへ小じんまりと置れてゐる台の下に、ゲエテの「ウエルテルの悲しみ」を一冊見出した時、思はず苦笑した。

「成程ね。」

暫らくして、、邦介は歸る仕度をした。

「明日は、干物をしたり、家の中の掃除したりして、明後日はきつとくるから、我慢しておいでよ。」

妻は、もう餘程落着いてゐた。

「さうしたらね、今度くる時、ほら去年のお誕生の時に、私が抱いて撮つた信一の寫眞があるでしよ、あれを持つて來て頂戴、、それから、何かあなたの小説の載つてゐる雜誌と。」

「ああ、」と邦介は答へた「お前この窓のガラスを看護婦にいつて取りかへてお貰ひよ、危ぶないから。」

彼は、さつきから氣になつてゐた、彼女の頭の上の窓ガラスの下の方が、鋸齒形にかけて、落下してきさうなのを指していつた。

彼は右側の患者に、頭をさげ、さつきの少女に、心から「お大切に」と云つた。

「明後日は早く來て頂戴」彼はさういふ妻の言葉を、輕くうなづいて、思ひ切つてベツトを離れた。

患者の多くは二階建の病舎のために、ぐつたりと疲れて床に頭をつけて、うつむつて身動きもしてゐた。擦り硝子の向うでは、マスクをした二人の看護婦が、立働いてゐるのが見えた。

彼は、應接所まで來た時、そこの壁にいろは分けになつて掛つてゐる患者の名札の中に、妻の名のついてゐるのを淋しい眼で眺めた。

病院を出ると、彼は來た時とは反對の道をとつて、カット照りつける陽を額にうけながら、Sの停車場へ急いだ。

彼は、不遇な青年畫家の夢の中に咲いたやうな少女――そして又、彼女自身の祈り、詩凡ては夢に過ぎないかも知れない――に、あの病舎の中で出會はさなかつたら、今日の入院はどんなに耐へ難いものであつたか、――多分あのベットの上に妻を一人殘してくることは、できなかつたかも知れないと思つた。彼は初めて、その世界が陰慘であればあるだけ、夢は必要なのだといふことを知つた。彼は、さや子の上に祈つた。

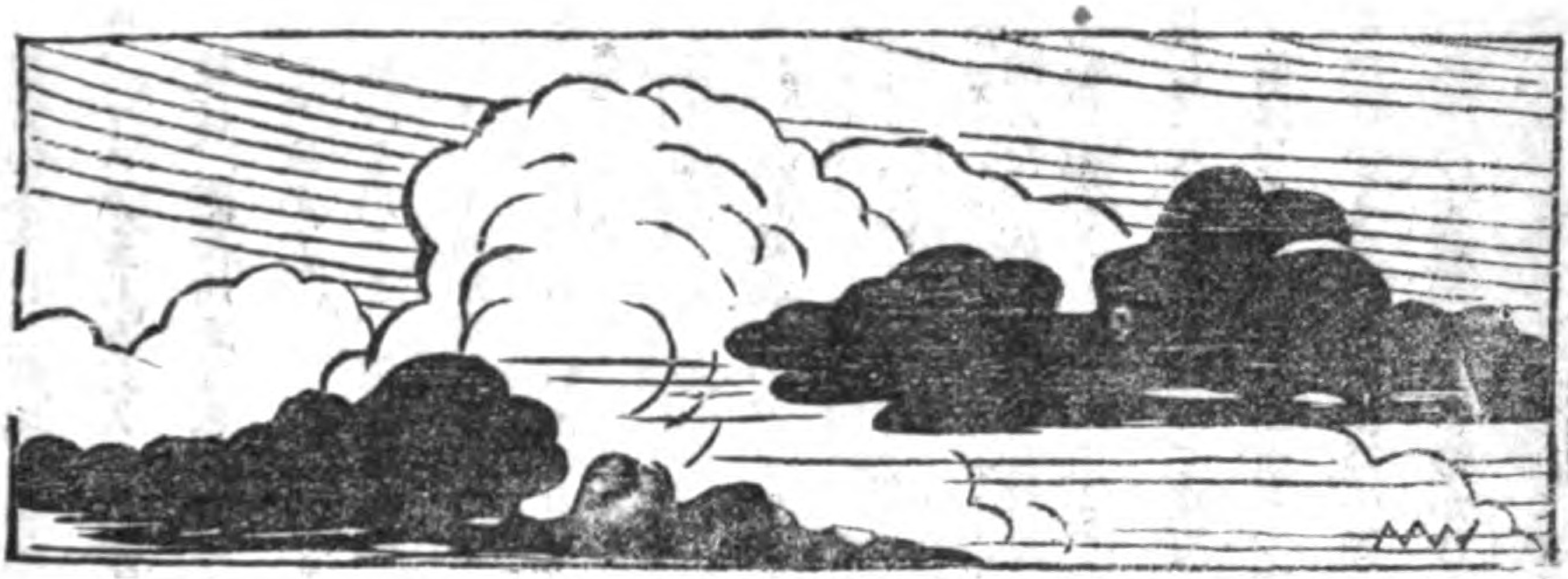
「夢を奪はれた女の胸に、せめて新しい夢のめぐむ餘裕の出來る日の早くくるやうに――。」

邦介は、川川の所まで來た時、湛へられてゐる水で手拭を絞り、汗のだくつく顔を拭き、もうかなり離れた向うの丘を眺めた。病舎を厚い額緣型に包んでゐる雜木林は、葉裏を風に翻ひして、鈍い銀色の波を打つてゐた。

「妻は癒るであらうか――。」彼は心に呟やいた。「たとひ過ぎ去つた五年の月日のやうな、みじめな生活の繰返しでもいい、若し三人の親子が揃つて晩飯の食卓に向ひ合ふ日が來るなら――。」

彼は、その時丘の斜面と、隣りの丘のうねりとの地平線の上に、上屑は陽光を孕んで白く輝きながら、むつくりと頭を擡げかゝつた黑い雲の一團をみとめた。一瞬時、彼の眼の前に、ギザギザした硝子の破片が浮んで來た。それが、妻のベットの上の窓ガラスのかけらだと氣のついた時、彼はそこから、恐ろしく不吉なものがとび込んで來て、忽ちのうちに、彼女を奪ひ去つて行くやうな氣がした。(完)

――一九二四、七――脫稿



玄朴と長英

眞山青果

醫者伊東玄朴の書齋。平舞臺。十疊と八疊の二室、その外部は全部疊廊下。家屋の構造は鴨居下に壁なく、四方を障子にて仕切り、それを取拂へばそのまゝ大講堂に利用せらるゝ如き建築構造。

正面に下總守間部詮勝の書ける象先堂の二大額を掲げ、和漢の書物箱、唐木机、黒棚その他を置き、文房具もそれぐ\宜しきにかなふ。和蘭の書籍は他の書棚に積み上げ、翻譯原稿辭書雜然と坐邊に散亂して、解剖圖標本圖などを楣間に掲げたり。

中央に緋の毛氈を敷く。

和蘭わたりの大なる置時計。脇息。

場所。下谷和泉橋通御徒町、伊東玄朴の新築家屋。

時。弘化二年三月二十九日、午前。

聞ゆ。やゝ長く靜寂を保つ。破らんとするの時計の音のどかに、時計の振子しづかに動くのみ。障子に當る月の光斜めに射す。

突如として、壁に衝突する物音二度ほど聞え、廊下に組み合ふ人の足音。試驗管硝子器の碎くる物音など。忽に寂寞をやぶりて聞ゆ。外に爭ふは伊東玄朴と高野長英の二人なり。最初はその姿を見ず、聲のみ聞くなり。

長英　何んだ………何をしやがる。

玄朴　靜にしてくれ。

長英　放せ。痛い………痛い。

玄朴　病家も來てるんだ。高野。どうか靜かにしてくれ。

長英　これ馬鹿な眞似するな、袖がきれる。これ。馬鹿。

玄朴　靜かに。何うか高野…………。(と賴むやうに云ふ)

長英　何んの態だ。放せつたら………

玄朴　高野………

玄朴片手に障子をあけて、荒れ立つ高野長英を無理に室へ押込む。玄朴は總髮にて四十二歲、長英三十八歲。

玄朴は顏面根黑にして背低く。貧相なる男なれど、眼光銳く、服裝も綸子の白無垢に胴服をつけて大名家の典醫たる品格を保ち、態度もやゝ洗練せられたり。長英は瘦軀にて長身、顏色やゝ蒼白にて、新に剃りたる月代の青

生際立ちて見ゆ。眼瞼より高頬にかけて顔の半部を硝酸銀にて燒き爛らし、燃術のあと氣味惡しく見ゆ。新し袷に帶刀。四年間の獄中生活に人生端的の生存慾と直面して、根强きしぶとさと下賤さをその態度に顯はせり。

長英　（袖付のほころびを見つゝ）卑怯者、馬鹿。おれの姿がそんなに恐いのか。誰でもないぞ、長英だ。——一緒に鳴瀧のシイボルト塾にゐた高野長英だ

玄朴は不安と恐怖とに呼吸をはずませ、蒼白になり怒りを抑へつゝ、長英を睨み付くる。

長英　何んだその態は、何が恐はい。勿體ぶりやがつて、何んだ。

玄朴　（呼吸を喘んで）兎に角も、まあ……坐つてくれよ

長英　（齒齦に流るゝ血を掌にこすりつゝ）見ろ。血だ。贅力を出しやがつて……馬喰め。

玄朴　……

長英　鍋島様の御匙醫に出世すると、昔友達が來ても會へないのか。おい、玄朴、お前の恥にでもなるのか。長崎の猪俣家に下男奉公して、きらず飯をくらつてゐた頃のことを忘れたか。

玄朴　坐つてから話をしよう

長英　御典醫か玄朴先生かは知らないが、おれア矢張りあの頃の馬鹿勘だと思つてゐる。塾生のなかに小さくなつて、酒買ひに歩いてゐた馬喰の勘造だと思つてゐるんだ。（と憎々しく笑ふ）

玄朴　（コクリと唾を飲みて）それで、何の用事があつて來たのだ。

長英　お前に救つて貰ひに來た。

玄朴　然うだらう、そんな無法を云はなきア俺の前に來られない筈だ。

長英　（[illegible]）

玄朴　貴公が玄關に立つて怒鳴つた時、おれはお前を一目見て、はゝあ玄朴めに違ひないと思つたのだ。どう[illegible]に來
て尋常に歸る貴樣ぢやないことは承知してゐるよ。

長英　金を貸してくれないか。（と脇息に腰掛けて煙草入を出す）

玄朴　おれに金を貸せと云ふのか。

長英　當り前よ。あるところから借りないで何うする。

玄朴　おれが素直に金を出すと思つて來たのか。

長英　まあ、そこは分らねえ。何事も御相談だからなあ。はゝはゝ。

長英空うそぶいて煙草を吹ふ。

玄朴　（吐息して）高野、そこはお前の氣性でもあらうが、然し病だぞ。

長英　金は何うだらう。

玄朴　お前はどうして、傳馬町から出て來られたのだ。

長英　一昨日の明方。七ツ半時だつた、柳原の土手續きから出た大火で、田所町堀留まで一面火になつたゝめ、牢屋敷は切ッ拂ひになつたのだ。知つてやがる癖に……。

玄朴　それは知つてゐる。が、おれの云ふのはお前の姿だ。

長英　この面か。これは硝酸銀で燒いたのよ。まだ娑婆に未練があるからなあ。（とふてぶてしく嘲笑つてゐる）

玄朴　牢を出て、一昨日の晩は、何處へ泊つたのだ。

長英　内藤新宿で女郎買ひよ。
玄朴　昨日は――昨夜は。
長英　聞く奴があるかい。あはゝはゝゝ。やはり飯盛女郎に抱かれて寝てござつた。
玄朴　然し誰か友人を尋ねたらう。竹内玄洞か、大槻俊齋か。
長英　俊齋を尋ねたのは今朝だ。今その歸り路にお前えの家へ寄つたのだ。
玄朴　俊齋はお前に酒を出したのか。
長英　なあに昨夜ツ氣で下地のあるところへ持つて來て、一片口ひツかけたから、それが急に發して出たんだ。
玄朴　然うだらう。見覺えのある大小だと思つた。
長英　可笑しかつたぜ。俊齋のやつおれの姿を見て――尤も俺は、牢番のおやぢに貰つた仲間半被に細帶と云ふ姿なんだから、自分でこの袷を出してくれた。それから自分でわざ〳〵月代をしてくれたよ、納戸からこの大小を出して來たツけが……はゝはゝゝ。おれが旅費を貸せと云ひ出したら急に氣がついて、ハツとして真蒼になりやがつた。大小を股の下に敷いて、何うしても離さないんだ。そして一度着せたこの袷を返してくれと賴みやがるんだ。はゝはゝゝ。それまで奴も餘り突然なのに面喰つてゐて、おれが牢拂ひのお尋ね者なのを忘れてゐやがつたもんと見えるんだ。はゝはゝゝ。
玄朴　然し今日は火事から三日目だ。今日中に牢屋敷へ歸れば、お仕置の罪は一等輕くなるのが御定例と聞えてゐるが、やつぱり然うなのだらう。
長英　大槻も同じ事を云つてゐたよ。おれにそんな神妙な料簡があるくらゐなら、初つから斯うして方々金を借りて歩

[illegible]

玄朴　これぢやお前、このまゝ駄目へは出らない身になつたな。

長英　野暮を云ふな。物相飯も四年食へば大抵年明けになつても罰はあたるめえ。娑婆の命の有難いことは、おれ達の身にならなきあ分らないことだ。まだ長年念願のまぐろの刺身も喰はねえし、アクの強い中年増にも出合はねえんだ。はゝはゝゝ、誰か呼んでるぜ。

玄朴　え。（と廊下に耳を立てる）

長英　奥方の聲だな。おてるさんだ。酒でも出さうと云ふのだらう。

玄朴障子際に立寄り、何事か囁く。夫人の姿は見えず。

玄朴　用事があつたら此方から呼びます。好し〱……よろしい。

長英　（玄朴の後姿を見て笑ふ）馬喰にも衣裳だ。何うやら人參吞者らしくなつて來た。ふゝゝ

玄朴　（夫人に）それから、駕籠は常の通り。今日はたしか津輕樣のお屋敷に伺ふ御約束かと思ひます。（と云つて座に戻りて來て）時に高野、折角だが………

長英　はゝはゝゝ。全く不思議だよ。

玄朴　（不快さを抑へつゝ）高野、折角の頼みだがねえ、どうもこの金は、お斷はりといふ事にして置きたい。

長英　何んだ。

玄朴　お頼みの金だがね。

長英　おや何か、玄朴。牢屋敷に自首して出て、減刑の恩典をまつ方がお前のためだ。金を與へてお前の不爲を計つて

に、多年の友情に背く、君のために考へて……と、斯う云ふのだらう。それなら散々、傍から聞かされて來たよ。

玄朴　然うぢやない。おれは自惚れでなく、大概などよりは深く、君と云ふ人を見てゐる積りだ。君は金の有る無しの兩狀に拘らず、素直に再び獄屋へ歸れる男ではないだらうと思つてゐる。だから、その意見はしないよ。

長英　ほう、翻譯か。(と、初めて机上の原稿に心付き、取る、見る)

玄朴　君はおれに金と云ふけれど、むしろ心の底では、おれがその金を貸さないことを望んでゐるだらう。

長英　(目をあげて見しが、又原稿を讀む)

玄朴　素直におれが金を出したのでは、餘り葛藤がなさ過ぎて、事が平凡過ぎて、お前には滿足が出來ない筈だ。

長英　……(讀み耽ける)

玄朴　全體、お前の瞳孔の底には昔ツから惡い者が棲んでゐる。惡戯好きの火が、蠟燭のやうにとぼつてゐる。始終チラ／＼動いてゐる。これほどの大變事故——然うさ、何十年に一度あるか無しの牢屋敷の切拂ひに遇ひながら、それを思ひ切つた大芝居に仕組まないではゐられない男だ。このまゝ神妙に獄屋へ歸つて恩典をうけては、爲ることが餘りに世間並で、惡戯氣がなさ過ぎて、俗で、凡で、とてもお前の氣性としては怺えられたものぢやない。

　長英翻譯を讀む。時々鋭く玄朴を見る。

玄朴　それも惡いとは決して云はない。一種の氣性だ。お前にはその天稟の惡戯氣があるから、時に尋常人以上の飛躍をするのだ。焰のやうにも燃え上るのだ。おれは昔からお前のその氣性を、憎みもしたが恐れもした。同時にまた、心から尊敬せずにはゐられなかつた。

長英　分つたよ、分つた。(笑ひつゝ原稿を讀む)

玄朴　おれはお前に百姓馬鹿にされる通り、佐賀の馬喰の倅だ。口減らしに田舎医者の小伜にやられて、冷飯を食つて育つて来た身だ。骨の髓まで貧乏にせたげられてしまつて、唯の一日も、人を押し退けよう、押したらうと云ふ氣持になつたことがない。默つて一生……地べたを見つめて歩いてゐるのが、おれの一生にそなはる運命だと……（と次第に感傷的になりしに自分も心付き、苦笑して）まあ、考へる日には然う考へて暮して来たのだ。

長英　（……默然と讀む）

玄朴　お前だつて奥州水澤の貧乏醫者の次男坊だ。誰に蔑れるほどの生れ素性ではないんだ。それにも拘らず、お前はお前の氣性に殉じて、滅茶に、無法に、强情に、粗暴に、自分が思つた通り、我儘一杯の生活を、誰の前でも無遠慮に振舞ひ通して来た。おれは實に、それが、憎いほど羨しくつて、同時にな、始終自分の貧乏性が可哀さうで、恰らじくつてならなかつた。長崎時代から、僕は始終小兒が指を咥へる時のやうな心持で、君を見て来たのだ。

長英　（玄朴の方を見て）まだ遣つてるな。はゝはゝ。そして、こりや何んだ。何の翻譯を初めてゐるんだ。

玄朴　（話の腰を折られて）それか。それはヘルランドの原著で、牛痘種法篇といふのだ。薩摩侯の好意でやつと手に入つたから池田洞雲と二人で、ボツ〳〵譯して見てゐるのだ。

長英　入れ疱瘡の種を牛の體からとるやうに書いてあるが、ほんたうにそんな事が出來るものだらうか。

玄朴　貴公は牢屋にゐて知るまいが、西洋醫學の發明は全く驚嘆する外はないよ。近年支那から醫宗金鑑と云ふ書が渡つて、それによつて初めて西洋には牛痘と云つて、牛の體に疱痘して、その發泡の液汁をとつて人體に種ゑる術があることが知れたんだ。暗埸利亞のジエンナーと云ふ碩學が初めて發見した秘法だよ。

長英　やはり疱瘡の膿汁を鼻穴から吹き込むのか。

玄朴　違ふよ。膿種えと云つて、腕に小さな創をつけて牛痘をそれに擦り込むだけなのだ。至つて手輕なものだ。

長英　豫後は何うだい。發疹の經過はどんな風に顯はれる。

玄朴　今までの鼻孔から吹込むのと違つて、先づ怪我は千人に一人もないと云つて好いな。現に一昨年長崎で蘭醫リシユールが數十人にも試みたさうだが、何しろ發疹は腕につけた創口だけに限つて、從來のやうに呼吸器を犯されたり、內臟諸機關にまで、燃衝をおこすなんて心配は絶無と云つていゝ結果なのだ。

長英（進み出るやうに）お前何か、現に手にかけて見たのか。

玄朴　長崎通詞の西吉兵衛に賴んで、去年の秋船でやつと牛痘の種を舶來したが、誰も恐がつて江戸ぢや霜ゑる者がない。種は腐れるものだし困つてゐると、君も知つてる伊東の盤溪だ、大槪盤溪だ。おれが長男を拖術でとられて、その悲痛の餘り牛痘保存のためには殘る子供を犧牲にしてもかまはないと云つて、自分から進んで種のうゑ繼をしてくれた。その結果が非常に良いものだから、今ぢや評判を聞いて、ボツ〳〵賴みに來る者があるやうになつた。流石に盤溪は豪邁な男だと思つたよ。

長英　うゝむ、そりや豪勢だ。しつかり遣れ、今に大金儲けだ。

玄朴（やゝ不快さうに）おれは金を云ふのぢやないよ。

長英　人助けにもなるぢやないか。全く、偉いことを考へやがつたな。恐れ入つた。そんな話を聞くと、婆婆のやつ等も喜殺ばかりしてゐる譯ぢやないんだな。學問の進步は……全く凄いなあ。なあ玄朴、一日も本を讀まずにはゐられなくなるなあ。（と感慨ふかく云ふ）

玄朴　兎に角、この牛痘法が日本全國に行はれると、どれだけ人間の生命を救ふか知れないことだ。おれは全力をあげ

て大成して見るつもりだ。

長英　遣れ。遣れ／＼。何しろそりや大事業だぞ。

玄朴　高野。それにつゞいて云ふやうだが、おれは然う思ふよ。何も大聲疾呼しなくとも、默つて市井の間に隠れてゐても人間のため世間のためにつくす手段は幾干でもあると思ふよ。

長英　然うだ／＼。(無反省に同意して) 全くだ……。(と寢ころびて、原稿を貪り讀む)

玄朴　(やゝ親しげな口調にて) 高野。貴公に云はせると、この世界は蛆蟲の世界のやうで、今に新しい別の世界が忽然とわれ等の前にひらけるものゝやうに云ふ。また貴公はその路びらきのために、選ばれて陣頭に立つて、警醒の太鼓をたゝいてゐるやうにも云ふ。然し和蘭の諺に、眞に新しきものはその靴の爪先に來らず、常にその踵の底に隠れて來ると云ふ言葉がある。

長英　(獨語のやうに) 然うだ、思出した。この牛痘の話はかねてシイボルト先生に聞いたことがあつたよ。(と原稿を投出し、撫然として) 然し、われ／＼もこんなことぢや駄目だなあ……

玄朴　われ／＼蘭學者は直ぐ、今の將軍政治を壓制の、曖昧の、野蠻のつて、一概に批評してしまふが、然し考へて見るとこれにも歴史と云ふものがある。在るものは總て在るべくして在るなり、とは云へるだらうと思ふ。

長英　(手を机の下に伸して) 何んだ、ちんだ酒があるな。

玄朴　夜學に疲れた時に、嘗めるやうにしてゐるのだ。

長英　こりや何よりだ。第一、久しぶりだ。はゝはゝゝ。(と其邊を探して大なるギヤマンのコップに注ぐ)

玄朴　(靜かに) 貴公を初め蠻社の連中は直ぐ革命を叫ぶが、革命はそんなに容易に來るものだらうか。いや、然う云つ

ては不可ない。おれは革命とか新しい世界など云ふ者は、來る時に來るもので、呼び叫んで待つものではないと思ふ。その代りにもう來てしまつたとなると、動かすことも抑へることも出來ないもの……穩和しく逆はずに受入れなければならないものぢやないかと思ふ。

長英（酒を呷り、手足を疊に投出し）あゝあ、斯うしてゐて思ふと、實に……牢屋は厭だつた。

玄朴　貴公たちだつて、眞に本心を云つたら、貴公たちの手によつて、眞に新しい世界が呼び取られると確信してゐる譯ぢやあるまい。たゞ、何かしら、叫ばずにゐられないものがあつて叫ぶのだらう。叫ばずにゐると呼吸が窒つて苦しくなるんぢやないか。誰のためでもない、自分のために子守唄を歌つてゐるのだらう。

長英起きて酒を注ぎつゝ、鋭く玄朴を睨む。

玄朴（長英の視線に少しく狼狽しつゝ）責めるんぢやないよ、話だ。寢てゐて聞いてくれ。おれは君等の唄ふ子守唄が惡いとは云やしないよ。唄はずにゐられないその人の悲痛な心持は、おれだつて好く察してゐるよ。昔からの例で云へば、山崎垂加だつて、熊澤蕃山だつて、林子平だつて、由井正雪だつて、皆自分のために聲を張りあげて、みな子守唄を歌つて來た人なんだ。その心持はよう分つてゐるのだよ。

コップをぐツと乾して、ゴロリと長英は寢倒れる。天井を睨む。

玄朴　現に、五六年前の大鹽が好い手本だ。彼は陽明學者の大家でもあり、人間も立派に出來てゐる。然し不幸なことに、彼は自分の唄つてる守唄を、自分のために唄つてゐたことを忘れてしまつて他人のために唄つてゐるのだと思つてしまつた。惜しむべし、彼がただ一箇の謀叛人として中道に倒れたのはそのためなのだ。

長英　謀叛人、結構ぢやないか。

玄朴　中道に倒れたから謀叛人になつたのだ。高野、倒れずに成功すれば、人民の恩人と崇めらるべき人物なのだ。

長英　同じ事ぢやないか。何を云つてやがるんだ。

玄朴　おれの言葉が至らないのかも知れないが、それを同じことゝ聞くのは大變な間違ひだ。詰りおれの云ふのは、中道に倒れたから謀叛人になつたのだ。大體にしても自分のために唄つてゐる歌と心がつけば、決して謀叛人には……

長英　煩さい。おりやお前の説法を聞きに來たんぢやない。

玄朴　君は頭から僕を馬鹿にするが、おれは今の世の中を決して滿足には思つてはゐない。新しい世界に渇仰してゐることは、恐らく君等より強いかに考へてゐる。いや、強いのだ。子守唄を歌はないだけに、僕の渇仰は強烈なのだ。身分、生れ素性の高下のために今日まで忍んで來た侮辱と憤りは、とても君等など較べにはならない。お前は西洋諸國の制度に比較して、封建の世襲や門閥の制度を咀つてゐるやうだが、正直を云ふと、高野、その專制のはげしいこと貴公の如きものはないぞ。君はその點では暴虐者だ。長崎以來君はおれを何んと呼んでゐると思ふ。馬喰、馬鹿拗、法印かへり……。貴公は鳴瀧の塾にゐる時分から、どれだけ僕を恥しめ通したと思ふ。おれと同じ食卓に食事するのさへ、穢ないものゝやうに罵つて來たではないか。身分へだての心は、君ほど強い人はないと思ふ。その點に於て、君はいつも暴君だ、虐王だ。

長英　何を云やがる。（と、コップに酒を注いでゐる）

玄朴　君は人間々々と云ふが、それは五大洲の何處に住む人間を指してゐるのか、おれには分らない。君が人間のためとか、人間を愛すとか云ふなら、それは目にも見えない、輿地誌略にもない、われ／＼とは無關係の、遠くの人を愛してゐるので、直ぐ目の前にぢつと唇を嚙んで、寂しい涙をこらへてゐる、不幸な友人のゐることなんかには氣

がつかない人なんだ。

長英 ………

玄朴 愚痴を云ふとか、今更怨を云ふとか思はれては困るよ。おれは寧ろ君のその我儘、自分勝手、自利心の強盛なのを寧ろ尊敬してゐるんだ。(酒をコップに注いでやりつゝ)誰にでも聞いて見たまへ、高野だからあれが出來るんだ、高野だから……おれは始終然う友人間にも云つてゐるんだ。恐らく怒罵嘲弄の限りをつくされながら、おれほど君の價値を買つてゐる者はないだらうと思ふよ。高野、君は餘り自分を粗末にするよ。勿體ないぞ。もう少し自分をも自分の學問をも尊重しなければならない。われ〳〵と違つて君には、天品の尊い賦性をもつてゐるんだ。人中の寶玉とも云ふべきは君だ。

長英 (寢ながら指示して)何んだい、あそこに、大事さうな風呂敷に包んであるものは、書物らしいな。

玄朴 うむ、あれか。君ならば見せても好いが――然し讀むと人間が氣違になる本だ。一生風呂敷に封印して、藏つて置くのだ。

長英 馬鹿にはするが、昔樣にも取柄はあるよ。斯うして金錢を惜しまずに紊西の本を買ひ集めて、默つて一人で讀んでゐる點は感心する。獄中生活で一番僕につらかつたことは、新しく舶來の本の頁をめくつて、新しい紙の匂を嗅ぐことの出來なかつた寂しさだつた。新しき智識に觸れると云ふことは、うぬが靈魂を洗ふといふことだ。これだけは全く、こたへたよ。どれ。

玄朴風呂敷づゝみをひらきて二冊の厚き本を渡す。

長英 うん、この匂ひよ、これだ。(と本を嗅ぎて、寢ながら見て)フオルク・レヒト。人民法――民法とでも翻譯す

るのかな、法律の本らしいが何を書いたのだ。

玄朴　高野、全く西洋と云ふ國は、われ／＼と別な世界だなあ。士農工商の四民を始めとして、高下もなく、[illegible]なく、上は帝王から下は賤民卑族に至るまで、みな一個同樣の民として規律されてゐるのだよ。そりや人民としての義務もある、然し萬民に與へられた權利には何んの差別もないのだ。今の治世に住んでゐるわれ／＼から考へると、まるで嘘のやうな話で、全く想像の外の世界だ。こんな自由な國が地球上の一方にはあるのにと思ふと、今のこの日本を考へて、おれでさへ氣が變になりさうだから、貴公などが讀んだら、何を仕出來すかわからないよ。西洋の文物制度の開明してゐることは、なか／＼相互が知つてゐる位のものぢやなさゝうだ。その研究だけでも、おれには一生かかるよ。

長英　何時渡つた本だ。

玄朴　去年わざ／＼上海から取寄せたんだ。序文だけでも讀んで見ろ。全く瞠目して驚嘆するの外はないから。實に何うも……恐しくなるのみだ。

長英　然う云ふ本があつて、お前けそれを風呂敷につゝんで、封印までして置くのだな。（意味ありげに低く云ふ）

玄朴　この本の內容（なかみ）など、假りにも役人方の耳に入つて見ろ。何しろ今の西丸下は、大將の水野を初め、和蘭ぎらひで手がそろつてゐるのだ。それこそ蘭學の命脈が絶えてしまふだらう。

長英　（書を障子に投げつけて）馬鹿、勝手にしやがれ。

玄朴　何、何、何をするんだよ。（と驚きて本を拾ふ）

長英　旅費を貸してくれ……旅費を。（と手を出す）

玄朴　旅費と云つたつて……

長英　貸せないことはないだらう。俺が借りるんだ。

玄朴　然しそれは……

長英　手前の話を聞いてゐると、おりやむか〱して來る。馬喰！とも云ひたくなるよ。婆娑ふたぎめ。

玄朴　何うしたんだ。何を腹立てるんだ。（書籍の角など攻めつゝ風呂敷に包み、封印する）

長英　お前は自分の尻に火がついてるのに氣がつかないか。火輪船でやつて來りや、上海から江戸まで、たつた四日で來られるんだぞ。一生懸命になつて内から雨戸をしめてゐても、外の夜明を防ぐことが出來ると思ふか。うぬが國だのひとの國だのと、くだらないことを云つてゐられる時代なのか。西丸下が何うしたんだ、お役人が何うしたと云ふんだよ。

玄朴　高野、少し酒が發したやうだ。放言はよせ。

長英　お天道様は日本だけを照らす氣でゐられるやつは幸福だ。人民の耳目を掩ふて暗黒のなかに眠らせやうとしても、目が覺める時は來てゐるんだ。外はもう朝だよ。陽明の詩を知つてるだらう。四十餘年睡夢中、而今醒眼始朦朧——あれだ。おれなんか或は、日已に亭午を過ぎたるを知らずに、起て高樓に向つて曉鐘を撞く者かも知れない。然しそれでも、全く眠つてゐる者には勝れりと思ふのだ。御典醫づらをして、先を拂はせて得意がつてゐる時代と思ふのか。馬喰め！馬鹿坳とも云ひたくなるよ。

玄朴　おれのことは何うでも好い。僕は君の心配をしてゐるんだ。君と僕とは二十年の友人だ——

長英（微吟）起向高樓撞曉鐘尚多昏睡正懵々……

玄朴　高野、おれは病人の診察をして來る。（むつとして立つ）

長英　待て〳〵。（半ば起上りつゝ）人の云ふ事を何と聞いてゐる、五人十人の病人くらゐに、死んだつて問題ぢやない。日本といふ國の大きな問題がある。

玄朴　おれは醫者として世に立つ以上は、一人の病人でも投げすてゝ置けないのだ。

長英　玄朴。

玄朴　（むツとして）何んだ。

長英　貴樣はシイボルト先生を見殺にした卑怯者だぞ。

玄朴　何。

長英　坐れ。はゝはゝ。

玄朴　長英、外のことゝ違つて……聞棄てにならないぞ。

長英　それでも少しは擶にこたえたか。はゝはゝ。シイボルト先生が罪に問はれる材料となつた國禁の日本地圖を天文方の高橋作左衛門に頼まれて、長崎まで送り屆ける密使をつとめたのは誰だ。玄朴、顔色が變つたぞ。はゝはゝ。流石に可哀さうだから、おれも今日まで、この惡口だけは云へなかつたんだ。

玄朴　高野、僕のためには生死よりも大事な問題だぞ。恩師シイボルト先生を見殺しにした、賣つたと云はれては、玄朴はこの世に生きてゐられない。醉餘の放言としても、これぱかりは聞きのがしにはならないぞ。（顫へながら膝を詰め寄る）

長英　まあよ。その當時かゝりあつた人間が十何人あつて皆それぞれ獄門斬罪になつたなかに、お前一人助つてゐるのが證據にはならないのか。……

玄朴　おれはあの時高橋氏に封書のまゝ頼まれて、中に何が入つてゐるか、素より知らずに長崎までとゞけたのだ。あとであの中に御法度の地圖があつたと聞いて、おれは實に高橋氏の無情を怨んだくらゐなのだ。

長英　お前はマジ〱と、それが言へるから偉いよ。

玄朴　何んだつて。

長英　お前の細君の兄さんだな、猪俣源三郎は何んのために自殺したんだい。高橋作左衛門とシイボルト先生の間に、ふだん手紙の取次をした、それだけの罪でさへ、猪俣は責を感じて切腹してゐるぢやないか。子供の使ぢやあるまいし、封書のなかを知らなかつた、はゝはゝゝ、誰がそれを聞いて信用する者があるんだ。

玄朴　(俯向いて涙含める顔を、やがて上げて) 然し、高野。俺はあの一件の當時、品物を長崎へとゞけるとその儘、細川藩の林藤次から豫々頼まれた翻譯ものがあつて、長崎から直ぐに熊本に發足して、二三ケ月ほどその仕事に熱心してゐたゝめに、シイボルト先生にそんな大問題があるとは全く知らなかつたのだ。

長英　逃げ足は早いところはお前だよ。はゝはゝゝ。

玄朴　おれは自首して出た。みんなの處刑後ではあつたが、立派に自首して出た。封書はとゞけたが内容(なかみ)は知らなかつたと、有の儘に白狀して筒井肥前守様のお役宅に名乘つて出て、正當に御取調をうけたのだ。そして無罪と事が落着したのだ。馬……馬鹿なことを云ふたな。

長英　(嘲笑的に) 然うかよ。はゝはゝゝ。ぢやまあ、お前一人だけ好く助つたものだとして置かう、なあ玄朴。ただな、然し斯う云ふことだけは聞いて置けよ。おれがあの場合にお前だつたら、例へ封書のなかみを知らずにとゞけたとしても、高橋作左衛門初め十何人がお仕置をうけ、義兄の源三郎が切腹までするなかに、おめ〱生きてゐる

やうた臆どい學者は俺には出來ないんだ。

玄朴　天地に俯仰して、おれは耻ぢるところを知らない。

長英　おれならだよ、おれなら體裁が惡いと云ふんだ。一人残つて生きてゐることがお恥しいんだ。いや、自分一人だけ咎がなかつたと云ふことが苦しいんだ。例へ内容は知らなくとも、おれなら日本總繪圖と承知の上で長崎に屆けましたと、嘘をこしらへても、一緒にお仕置をうけずにゐられないんだ。それがお前の云ふ暢氣、蠟燭の火なのか知らないけれど、顏がほてつて、のめ〳〵生きてゐられない處さね。

玄朴　そりや、そりや……氣質の相違だらう。おれは死なゝい。

長英　氣質の相違？なる程好く云つた。それで思出したが、佐藤一齋のことだ。今度の無人島一件で、われ〳〵と共に渡邊崋山が揚屋へ入つた當坐の話よ。老人の松崎慊堂が病體を押して、椿山や杵と一緒になつて、崋山の減刑運動で大騷ぎしてゐるなかに、日常崋山とは親友とも親子とも云はれるほどの深いなかにある佐藤一齋が、知らん顏して崋山を見殺しにしやうとしたさうだ。それで友人等がその冷淡を一齋になじつたところ、拾藏は平氣で云つたさうだ。渡邊氏の奇禍はまことに氣の毒だ、が然し、彼と私とは氣質に同じられない點がある。彼のために奔走することは出來ないと云つて斷然撥ねつけ、正直な慊堂老人を怒らしてしまつたさうだ。

玄朴　愛日樓先生の心事は僕にも意見がある。それよりもだ、高野、お前は崋山の切腹を何う見る。

長英　崋山はまあ……おれは一齋を云つてるんだ。一齋は昌平黌の總裁で、林家隨一の名望家だ。あの老爺が片肌ぬいで崋山を助ける氣になれば、惡辣な鳥井耀藏も崋山を罪することは出來ない筈だ。自分の官職や地位に恋戀して、友人の急に赴くことの出來ない一齋と云ふ奴の卑劣さは何うだ。實に、實に、何んと云ふ淺間しい奴僧だ。ふだん

學問道德を主張して、一世の指導者を以て任じてゐる面目がどこにあるんだ。

玄朴　高野、それは違ふよ。

長英　お前なんぞに……。（と又酒を引寄せ、全部をコップに注ぎ）何んだ、あいつは、一齋とは何者だ。体裁が惜しさに、正義に勇むことの出來ない卑怯漢とも、俗物とも、犬とも、畜生とも、譬へやうのない奴だ。天下の大才、幽閉の人傑、崋山を殺したのは那奴だ、一齋は畜生だ。

玄朴　（腕組しつゝ）然うかな。一齋先生が崋山を殺したと云ふのかなあ。おれはまた、崋山を殺したのは君ぢやないかと思つてゐた。

長英　（コップに唇をつけしが）玄朴、何。

玄朴　君は勝手に自分の言葉に感激するのだから、他人の云ふことなど、靜に考へて見ることは出來ない人だよ。燃えきつてしまつて、炭にはなれない男だ。（と立ち上る）

長英　待て〳〵。崋山は俺が殺したと云ふ譯を聞かう。（玄朴答へず、間）、おれにも聞棄てにならない言葉だ。何う云ふ譯だ。何故默つてゐる。大聲をあげて、怒鳴るぞ。

玄朴靜かに長英の傍に戻り來て、靜にコップをその手より奪ふ。そして傍に置く。

玄朴　高野、お前ひとの話を聞くことが出來るか。

長英　聞く、聞く。

玄朴　然うか。ぢや話すが、もう四年になる。崋山の切腹したのは丑年の十月十一日だ。君は牢屋に居ても、その噂を聞かない事はあるまい。

長英　これが何うしたんだ。

玄朴　崋山はなるほど口供書で見ると無人島一件で處刑されてゐるやうだが、これとても根本の問題は、たい[illegible]が頑迷なる有司の忌憚に觸れたのだらう。無人島一條は表面の口實に過ぎないと思ふ。儒者氣質で固めた水野侯や鳥井の頭腦には、日頃傍若無人に政治を誹謗し民衆を煽動しやうとする蘭學社中の無責任な行動が憎くてならなかつたのだ。（長英何か云はんとす、抑へて）待てよ。つまり當路者の目から見る蘭學者とは、世上僞者の浮浪の徒で、當代の施政の防害をなすものと見てゐたに相違ないのだ。罰するものにも別に惡意はない。ただ見解の相違であるのみなのだ。まあ、聞く約束だ。

長英イラ〳〵して仕方なしに酒を呷る。

玄朴　處で、君は崋山の死を初めて聞いた時、何うしてゐた。

長英　何。

玄朴　同じ罪に問はれて、君は傳馬町の百姓牢につながれ、崋山は田原の僑居に蟄居を命じられたんだ。君にしても崋山の訃音を聞いたら、多少の感慨はあつたらうと思ふ。それを聞きたいのだ。

長英　……（凝然として目前數尺の空を見詰むる）

玄朴　何うした、高野。崋山の死を聞いて君はどう思つた。君はその頃もう牢の中で、牢名主とか云ふ役目について、素晴しい勢力をふるつて、毎日鰻飯を取寄せて食ひながら、盛んに牢附の役人を罵つて居たさうだ。君は何處へ行つても、持前のその強膽と粗暴と圖々しさとで、自分の生きる道を拓く男だが、どう云ふ風にして君は崋山の死を初めて知つた。

長英（コップを持つたまゝ、重苦しく溜息して、半ば獨語のやうな）……うむ、ビショ〳〵と時雨の降る晩だつた
牢屋の中の雨と來ると……五月六月は怺へられるが、十月の雨は全く耐らねえ。大屋根に銅の樋が通つてゐて、
カラン、カラ〳〵〳〵と雨の走る音が實に厭だ。

玄朴　うん〳〵そして。

長英（玄朴の視線に心付き、つッ離すやうに聲を尖らして）聞いたのだ。新入の小盜人が、どう云ふ譯で知つて居たか、崋山が田原の砂糖小屋の中で自殺した話を聞いたのだ。

玄朴　お前それを聞くと同時に、咄嗟の間どう考へた。

長英　どう思ふもんか。崋山は死んだと思つただけよ。（凝つと一箇所を凝視して、耻しき感傷心を抑へてゐる）

玄朴　然うぢやあるまい。君は非常に感動した筈だ。

長英　眠られなかつたよ。

玄朴　いや〳〵眠られなかたのは後のことだ。

長英　何。

玄朴　君の性質で崋山の死を聞いて、激昂せずに居られる筈はない。君は斯う思はなかつたか。畜生、到頭政府は崋山を殺したな。誰に聞いてもあの溫厚な紳士、親孝行で、物思ひの深い、總ての物を愛さうとしてゐる崋山を好くも殺したな。俺ア怒るぞ、怒つても誰も無理とは云ふまい。——斯う云つた心持で君はその時周圍を睨んでゐたかも知れない。

長英　ふゝゝ、お前手の筋まで見るのか。（と苦笑）

宗七　君はきつと心が猛り上つたに相違ない。それまでに君は必死に[illegible]
反省するの心があつたらう。それが崋山の死を聞いて、初めて救はれるやうな氣がした。他人の犠牲は崋山[illegible]
した。天下の悪政は崋山を殺した。見ろ、こゝに崋山の血痕がある、血痕がある――君は自分の手のひらに、現に
血痕でもあるやうに叫んで君は苦しい悔恨から救はれた筈だ。寧ろ君は、信じられない程の喜びをもつて、崋山の
死を聞いた。見よこゝに殉死者の血は流された。おれは忠士だ、先覺者だ、と君はさう思つた。

長英　それを云へばお前は何になるんだ。（と、然し苦しげに目を外らす）

玄朴　お前は崋山が、――君の煽動に動かされて、次第に新規ずきの蘭學癖に陥つて行くのを見て、蔭ながらも恐れてゐた筈だ。崋山ほどの豪傑が、おれのこの無責任な放言に雷同して、おれの吹く笛に次第に踊つて來るのは何うしたものだらう。今は踊つてゐる、然し、今にきつと醒める、今にきつと俺の無責任に心づいて、向をむいて行つてしまふに相違ない。きつと今にその時が來る、その時はどんなに寂しからう……君は始終それをオドオドしながら、崋山の顔色をうかゞつて笛を吹いて來たのだ。その崋山が、お前の笛の調がやまぬ間に死んだのだ。お前の一番の恐怖がお前の心から去つた譯だ。

長英イラ／＼して酒をコップに注ぎ終る。容器を障子に投げつける。玄朴、苦しげに額の汗をふきゐる。

玄朴　然し、お前の笛は恐しい笛だ。何人でも踊り出さずにゐられなくなる笛だ。お前はその笛で薩摩侯をも心酔させた、宇和島侯も動した。小關、渡邊、その外幕府當路の青年者流を大部分踊り立てさせた。お前自身は自分の笛に確信がないだらう。然し他人が踊り上るのを見て、初めて強い自信が生れて來るのだ。氣の毒にも崋山は、お前の自信を強めるために踊つた。おれが、――君を、自分のために唄ふ守唄だと云つたのも此所なのだ。君がおれを悪口云

ひながらも愛してゐるのは、俺は何うしても君の笛に踊らないからだ。君は人を踊らせながらも人に踊られるのは提いのだ。君の憎みも愛もそこにある。

　長英、酒を呷る

玄朴　然う云つても、その熱性は君の身上だ。僕のやうな、飽まで君の性質を知り抜いてゐる者でも、君の吹く笛には踊り出したくつて踊らなくなる時がある。けれども僕は飽まで自分と闘つて、君のその笛には踊るまいと努力してゐるんだ。然し、君の顔を見て聲を聞くと、つひ踊らずにゐられなくなる。僕はいつもそれを抑へるために、グツショリ汗になるんだ。

長英　はゝはゝゝ。

玄朴　踊るものか、踊らないぞ。おれはお前と一緒にゐる時には、絶えず口の中で然う呟いてゐるやうなものだ。今日に初つたことではない、鳴瀧以來、始終然うしてゐるんだ。お前が以來よくおれの玄關に飜譯ものを持込んで、譯料が少ないと云つては、近所に聞えるやうな大聲を張り上げて好くおれを罵倒したものだ。然し僕は罵られてゐる時には、決して君を恐れてゐない。寧ろおれは人知れず勝利を感じてゐるのだ。貴様が高い聲を出せば出すほど、おれは貴様に勝つてゐると思ふ。おれはお前に學問では勝てないだらう。然し人間として勝つてゐるやうな氣がするのは、お前が俺の前で狂者じみた大聲を上げる時なのだ、その時だけなのだ。おれは固く自分を守つて、無理に侵入して來るお前を防いでゐるのだ。或はそのために依怙地に見えるやうな時があるかも知れないが、自分を守るためにはそれより外に策がないのだ。お前は何か事をした後で、あれも悪戯さ、これも悪戯だと、よく笑つてゐるけれど、俺にはその悪戯が一番恐しいのだ。君の悪口や讒謗は飽まで忍ぶが君のその悪戯を探して、ちよつとも落着か

ない日の[illegible]に、僕はたまらなかつた。[illegible]のやうに[illegible]、[illegible]

長英（突然）誰か來る。

玄朴　う？（と耳を立つ）

　障子の日ざしは既に動いて、鶯の聲聞ゆる。

　やゝ長き沈默。

長英（獨語のやうに呟く）然し……崋山は馬鹿者だ。あれほどの小膽者とも思はなかつた。

玄朴（長英の顔を見ずに）崋山は臆病で死んだのぢやない。然う見るのは君の間違ひだ。

長英　……

玄朴　僕はね、小關三英の宅で二三度面會したばかりで、ハッキリは云はれないが、崋山は君と違つて身體全體をもつて生きやうとした人間なのだ。君などはどんな場合に置かれても、必ず自分の生き方を、發見する人だ。右の手を切られゝば左の手をもつて生きやうとする。兩足を斷てば胴のみでも生きて見せやうと云ふ男だ。切つて投げ出されゝば、投げ出された部分だけの根を土に下して、結構生きて行ける人なのだ。然し……

長英　まるで仙人掌（しやぼてん）だな。はゝはゝ。

玄朴　え。（と見る）

長英　なアに、何んでもないよ。

　長英は自ら笑ひたることが、ふつと心に寂しくなる。

　鶯啼く。間。

玄朴　（また瞑目して、靜かに思案を繰り出しつゝ）渡邊と云ふ人の眞の性命は、彼の藝術繪畫ではない、詩文でもない、蘭學でもない、又、家臣としての田原藩の民政でもなければ……親孝行でもない。それ等のものゝ總てを合せた、然うさ、何んと云ふか……斯う、總體の調和とか、釣合――或ひは平均とでも云ふか、然う云ふ全體のものを自分のうちに統一して、靜かに、依然として生きて行く人のやうに思ふ。世間はあの人の切腹を見て、その源因をいろ／＼に揣摩臆測してゐるが、僕はどの說にもうなづくことが出來ない。門弟どもが書畫會の催しが何うだとか、或は又、君侯に係累を及ぼすを恐れたのだとも云ふが、一つとして信じられる說はない。蟄居を命じられて恐れ入るほどの崋山ならば、初めから政事問題などに口を出さないが好いのだ。崋山はそんな卑怯者、臆病者ではない筈だ。

長英（伏せたる顔を屹つと上げ）玄朴、金を貸してくれないか。

玄朴　これは僕の考へだ。崋山は蟄居の生活に入つて、初めて靜かに、自分を靜觀することが出來たのだ。そして同時に、一旦の熱情に驅られて、自分といふもの全部の調子を狂はしてゐたことに氣がついたのだ。丁度あの長崎の塾にあつた洋琴な――それ、シイボルト先生がよく春の夕暮などに、窓に向いてさびしさうに奏でゝゐた――箱のやうな樂器、あれだと思ふよ。あの中に引いてある銀の針金が一本狂つても、洋琴全體の調子が狂つて、どの音階を出してもみな不快な響より外に出なくなる――と同じやうに、崋山は、小さな一部分のために、樂器全體の調子を狂はせてゐたことに、初めて氣がついたのぢやなからうか。なあ高野、樂器のうちの或る針線一本を限つて、その針金のみの音を高潮すると云ふことは、樂器全體を破ることになりはしないか。彼の蘭學癖は恥づべきものではない、モリソン事件に關する義憤は正しいものだ。やむにやまれぬ正義の觀念から、愼機論や鴃舌小記を草するにいたつた動機も、みな彼の至誠の發露に外ならない。けれども……やはり冷靜に考へれば、それは彼の一部分に過

ぎなかつた。江戸の蘭學の一派だつたのだ。その一派に屬する者のみを相手にして[illegible]、[illegible]
を失つて、破れた樂器として投出された自分を　田舎に閑居して見て自由は氣がついたのだ。自由[illegible]には、そ
の時から限りなく縮んだのだ。

長英　もう分つた――

玄朴　丁度まん〳〵たる十五夜の明月が、雲なき大空を悠揚として渡りゆくやうに、崋山と云ふ人は、總ゆる部分の調和とか釣合とか云ふものを圓滿に具足して、靜かに、急がず、障礙なく、ゆつたりと大空を渡る人なのだ。それがたゞ針金一筋のために全體の權衡を失つて、出すほどの音が總て耳に觸る不快な響を立てるのを聞いた時、どんなに驚き、どんなに狼狽したか知れない、と俺は見てゐる。彼は蟄居後繪筆をとつても、何うしても今までのやうに全性命を繪畫に投入することが出來なくなつた。破れた樂器なのだ。君に仕へても、老母に對して孝行しても、自分全體のなかに何かしら……斯う不調和な、そぐはない、不快な一部分が混じてゐて、全體をもつて動くことが出來なくなつたやうな氣がする――破れた樂器なのだ。

長英　そりや何處の崋山だ。何處の國の渡邊を論じてゐるのだ。（間）おい、金を貸してくれないか、百兩だけ都合してもらひいたのだ。

玄朴　金を百兩。（話の腰を折られて、對者を見る）

長英　おりや何だか……急に國へ歸りたくなつた。故郷を出てから十八九年だ、おふくろの顏が何んだか切に……戀しくなつて來た。

玄朴　その通り無法を云ふ男だ。關東八州のお役方はもう手を廻して取締がついてゐる。何うして奥州の水澤まで無事

に歸れるものだ。

長英　なあに日光から今市に山越えして、米澤領にさへ出ればもう此方のものだ。たゞ心配なのは關宿の御番所だがそれも今晩中に越してしまへば面倒はあるまい。（立つて帶など締め直し）又、役人どもが手配りをしてゐると聞けば、それを是非とも突破して見たいやうにも思ふ。俺あ、歸る。役人どもに一泡吹かせるのも面白からう。

玄朴　長英――

長英　もう理窟は分つた。それより金を貸してくれよ。日のあるうちに關宿を越えてしまはないと、あとに足がつきさうでならない。おい。（と、キチンと座り手を出す）

玄朴　（苦がり切つて）高野、それがお前の病ひだぞ。

長英　蠟燭の火か。はゝゝ、然うかも知れないなあ。然し言出したら矢も楯もたまらなくなつた。おふくろも最う七十に手がとゞくのだ。考へると、おれも不孝者だよ。（と俯向いて何か考へる）

　玄朴その態度を見て、むら〳〵と憤の情に燃ゆるものゝ如かりしが、強いて自ら抑へる。手の先など少し顫ふ。

長英　おれのやうな奴でも、おふくろだけには濟まないと思ふ。三年の約束で江戸修業に出て、それから長崎、廣嶋、宇和嶋諸方を遍歴してゐる間、一度も今まで故郷などへ歸る氣にはならなかつたんだ　おれは不孝者だ。――おふくろは今頃さぞ白髮になつて、年を寄らせたことだらう。それも自分の家屋敷にでも住んでゐるんなら好いんだが……實は今日まで隱してゐたが、おふくろは親類の家を廻つて、下女奉公同樣の居候をしながら、おれの成功するのを待つてゐるんだ。それを思ふと苦しくなるよ。おらあ牢に入つてから後、始終それが心を責めてな、新入りの罪人のお土産金をとつては、三歩だ一兩だと、時々獄中から人に賴んで、故郷のおふくろへ小使錢を送つてゐたのだ。

玄朴　高野、それは会したら何うだ。聞くのは不快だ。

長英　まあ聞け。詰らない愚痴のやうだが、おれは随分獄中で考へたのだ。

玄朴　（強いて不快さを抑へて）今の崋山の話だが、人間にはいろ／＼持前があるものだ。君が時事政治問題や世間のことで慷慨悲憤する時、僕は閉居獨慎して決して君等の渦中に入るまいと、意識して努めて來た。これは丁度、一個の琥珀から兩性の電氣を分解して、互にそれが反撥する如くに、君が人事に熱すれば熱するほど、僕は僕の學齋に専心して來たのかも知れない。寧ろ僕は、君に負けまい後がれまいとして、ます／＼固く貝殻のなかに手足をちゞめて來たのかも知れない。僕の性質のこの偏屈は、君に導かれたと云ひたい時もある。

長英　もう好いぢやないか。おれは今氣が急いてゐる。

玄朴　何うでも言出した無理を通すのか、高野。

長英　（酒の醉と共に快き感傷に沈みつゝ）故郷水澤は雪國だ。奥州の雪の夕暮の寂しさは、君等には到底想像が出來まい。夕方小児がションボリ窓に凭りかゝつて、暮れ行く空を塒へ歸る一羽烏を見て、それを歌つて見送れなくなるのが雪國の夕暮なのだ。からす／＼烏はやく行け、權現堂の門がしまる……と斯う歌つてな、青褪めた聲で烏の羽ばたきを見送る時の心持は、そりや君等の知らないものがある。おれは獄中にゐても、おふくろを思出す度に、何日もその小児の心にかへるのだつたよ。おふくろはもう七十なのだからなあ。（と聲が涙含む）

玄朴　（引込まれじと努めて）君等が國事のために、人間のために働くのを見て、おれは病人の隠者だ、君等は國家の賢者だ、人はその分を守るなどゝ云つて、君等の運動に冷淡であつたのは皆おれの卑怯な口實だつたらう。思出す度に、今でも恥ぢてゐる。と云つても、君等がまた飽迄も僕に影響して來て、同じ渦中に僕までも引込まふとする

なら、僕は敢然としてその無法を禦がずにゐられない。係累が惜しいのでも、世間の榮譽に眷戀たるものでもない。おれはおれのために生きる、と云ふ信條を枉げたくないのだ。人間には皆それぐ\、自分自身の全體をもつて回轉すべき、大きな軌道があるやうにおれは思ふ。國事問題も人事問題も、それは要するに人間の部分の問題で、それ等の百事を突ツくるめた上に立つて、大きく回轉しなければならぬ軌道があると思ふ。然しそれは何を目的に、何を標準にと聞かれては困る。何んだか知らないが俺はこの頃、全體の釣合を失はないやうに自分をいたはりいたはり靜かに進むうちに、そこに自分の本當の生長が見られるやうな氣がしてならないのだ。一時の情熱のために、この全體を失ふといふことは、おれには耐らなく辛いことなのだ。だからおれは、靜かに、靜かに生きたいと思つてゐる。

長英　伊東、命を頼む。おりや考へ出したら、居ても立つてもゐられなくなつた。おふくろが今現に、戸口に立つておれを待つてゐるやうに思ふ。せめて一時でも、おふくろに俺の無事な顔を見せてやりたい。おふくろも長い生命ぢやない、おれの口からひとこと慰藉の言葉を聞かせて、そして、そして死なせたい。頼むよ、伊東。（膝を進めて來る）

玄朴　（冷かにヂロリと見て）高野、些とそれはしつこくはないか。

長英　然し、俺は耐らなくなるんだ。五十兩でも好い。

玄朴　（凝つと睨めて）おれはお前のそれが嫌いだ。

長英　何。

玄朴　（少し顫えつゝ）お前の泣上戸は昔からの癖だ。酔はらつて來ると、思ひ出しもしない母親まで引張り出して、

泣きたくなるのはお前の勝手だ。手数をかけた一人の母親を、酒の肴にするのは嫌だな。余せる

長英　何んだ。

玄朴　おれはお前の貪慾にして飽くことを知らない悪戯ごゝろが賤しめられてならない。罪悪だぞ。

長英．（ムッとして）ぢや何か、おれは金を借りるために、おふくろをダシにすると云ふのか。國に歸るのは嘘だと云ふのか。

玄朴　君は本當に水澤へ歸る男だ。それだからおれは厭なんだ、それが嫌ひなんだ。

長英　……（下唇を嚙んで玄朴を見詰める）

玄朴　落着けないものかな、高野。君は然うまで自分の感情を他人に強いることは出來ないのだ。他人は他人で生きてゐる。他人が一生懸命に守つてゐる靜けさを攪亂するといふは惡るいことだ。この頃一齋先生の言志錄を讀んで、僕は非常に發明するところがあつたのだ。流石に大家だ、高いところから物を見てゐるよ。

長英　一齋は何んと云つた。何う云つた。あれは畜生だ。

玄朴　（強いて冷然と）若し一齋先生が華山を見殺しにしたと云ふなら、それは先生獨自の見識だ。寧ろ傾倒しなくてはならないのだ。

長英　それを云へ、聞く。（と詰め寄る）

玄朴　おれは他人の世話にはなるまいとして苦しみ苦しんで來た。お前もおれの世話になつてくれるな——と云ふ言葉は、實に厭な言葉のやうに響く。お前なら直ぐ小人呼はりする言葉だ。然し、この言葉に意味がないと云はれるか。一齋先生はそれを靜寧とも靜處とも云つてゐる。靜かに自分を守つて、自分のために活きやうとする者に向つ

い、藩籬を越えて闖入して來る者あらば、それは心の賊だと云つてゐる。

長英　おれも言志錄は讀んだ。そんな事はなかつた。

玄朴　有るから云ふのだ。一齋先生は林家の儒者で、苟も官府の恩顧に浴する人だ。例へ師弟にもせよ、親子にもせよ、自分から出した火をその人に持込んで、これを救へ、その地位を危くせよと迫る權利が、崋山にあると思ふのか。一齋は一齋だ、崋山は崋山だ。

長英　言志錄の何處にある。無い／＼、そんな事はない。

玄朴　有る、慥かに見た。

長英　有るなら本を出せ。何處にある。

玄朴　有る――有る。一齋先生は斯う云ふだらう。俺は俺が生きる爲めの苦勞と辛痛とで、精一杯なのだ。とても人を見る力がない、また有るべきものでもない。俺を殺さないでくれ、斯う云つたら何うする。

長英　みな貴樣の出鱈目だ。嘘だ。本を持つて來い。

玄朴　友情は然う強ゆべきものではない。相互の評判を尊重する時、そこに友情があるのだ。

長英　畜生……本を出せ、本を。

玄朴仕方なく言志錄三冊を持ち來る。顫えつゝ、そこゝゝを開く。

長英　有るなら本文を出せ。本文を見せろ、何處にある。

玄朴　有るから有ると云ふんだ。（と狼狽しつゝ、本を探す）

長英　出せ、出せ。

玄朴　……。

長英　嘔を吐きやがつて……何處にある。出せ。

玄朴　待て……おれは慥に飲んだのだ。(と唾を飲む)

　長英の聲にそゝり立てられ、玄朴も自然に興奮して來るを、苦しみ苦しんで引込まれじと努むる。

長英　出せ、早く出せ。何處にある。畜生……馬喰！貴様は自分の罪を咎めるので、一時の聲色をつかつて、空々しい言譯をしやがるんだ。有るなら、出せ、出せ、出せ。

玄朴　有る——慥かにある。(と、顫へつゝ探す。見當らず) おや或は、愛日樓文集だつたかも知れない。待て、見せてやらう。(と立上がる)

長英　(歯噛みして跳りかゝり) 畜生！(と胸を掴む)

玄朴　こ——

長英　賴まねえ。みな手前の口實なんだ。嘔吐きめ！

玄朴　何をする。

長英　金を出せ。旅費を借りて行く。

玄朴　(顔面蒼白になり、憤怒) 厭だ。

長英　何、厭だ。

玄朴　厭だ、厭だ。死んだつて俺れは貴様に負けない。

長英　出さねえな。貴様——出さねえな。(と力任せにこづき廻はす)

玄朴　貴樣に………負けて、耐………耐るものか。出さない………死んだつて、俺は………出さない。

長英　うむ………。

長英　玄朴を捩ぢ伏せ、顏を疊にグイ／＼とこすり付く。玄朴、齒を嚙んで怺える。

長英　さ、何うだ。馬喰。掛[illegible]、これでも出せねえか。

玄朴　出さない……出さない……おれは貴樣に、死んでも……死んでも、負けたくない。

長英　亡者め。そんなに金が惜しいのか。

玄朴　金……金ぢやない。貴……貴樣が憎いんだ。おれの中へ入つて來る……土足のまゝで侵入して來る、貴……貴樣が憎くてならないんだ。

この時廊下にドヤ／＼と門弟等の馳け來る足音。

玄朴（足音に屹として）誰だ、誰だ、この坐敷へ入つたら、承知しないぞ。（と叫ぶ）

廊下の物音、靜かになる。

長英　玄朴。面を見せろ。

長英玄朴を引摺り起して、互の目に睨み合ふ。

鶯の聲。

怪しき涙、二人の目より流がる。

長英（荒々しく玄朴を突倒して）好し、出すな。お前も男だ、その意地を通せ。もう借りない。その代りには俺も……俺も忍ばれて、江戸市中引廻しになつて、獄門か磔柱に乘つてな、仕置柱の上から若い友達の笑顏を見せてやる。好

いか。好いか。長崎以來の友達だ。この顏、忘れずに、見て置け。

玄朴　負けるものか……死んでもおれは負けるものか。

長英　勝手にしやがれ。

長英、玄朴を突き飛ばして立つ。廊下の足音バラ〳〵と逃げ去る。四邊は寂然として蟲の聲。

長英　玄朴。おれも忘れないぞ……貴樣も忘れるな。

玄朴は胸を掻きひろげて、苦しげに机にへたばりてゐる。

長英、悲しげにせゝら笑つて。足音高く去る。

玄朴、遠く去る足音を聞きつゝ衣服を掻き合はせて起上がる。ほツとして、悲しげに俯向く時、上手の障子少しづゝ〳〵開く。

玄朴（障子に氣がつき、屹として）誰だ。誰も來てはならない。

障子閉まる。

やゝ長き間。蟲の聲。

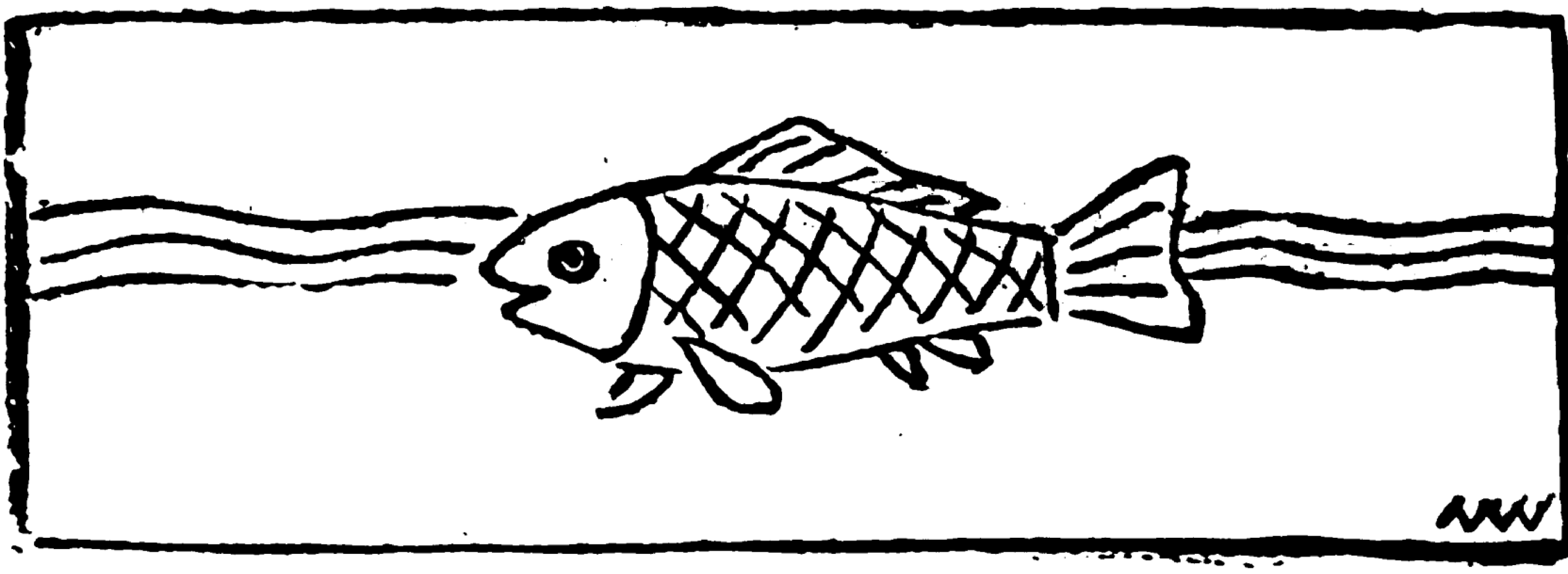
玄朴　おゝ、奥だつたのか。然し、明けてくれるな。暫く斯うして置いてくれ。（と寂しげに。間）長英はもう歸つたか……歸つたか。あゝ、俺はあいつが好きなのだ。同時に俺は……あいつが怖くてならない。いつもあいつは……おれの心の底の底まで入つて來て、身も世もないと思ふほど……俺の心を攪亂するが、同時に又、何だか忘れない寂しい、悲しいやうな一粒の種を……おれの心にこぼしてゆくやつなのだ。あいつは……疊の上で死ねない奴だが……然し、おれには舊い。最も懷しい友人の一人なのだ……

（靜かに　幕）

附記。

この脚本は上演を豫期せずして書けり。一幕ものとしても二人の對話錄としても、丁數長きに過ぐ。もし假りにこの脚本を上演する人ありとせば、時間にて三十分程度のものに省略する必要を認む。

作者從來の經驗に徴するに、かゝる種類の脚本は作意を十分に演者の肚腹に入れたる上に、十分に刈込むを便宜とするものゝ如し。



道連

豊島與志雄

君は夜道をしたことがあるかね。……なに、都會の夜道なら少しくらゐつて、馬鹿なことを云つちやいけない。街燈が至る所に明るくともつてゐて、寢靜まつてゐるとは云へ人間の息吹きが空氣に籠つてゐて、醉つ拂ひや泥坊や警官や犬や猫などがうろついてる、都會の街路を夜更けに歩いたからつて、それで夜道をしたと云へるものかね、僕の云ふのはそんななまやさしいんぢやない。見渡す限り山や野や森や畠ばかりで、何里といふ間人家もなく、猫の子一匹ゐないといふ、しいんとした淋しい片田舍の夜道を、たつた一人でとぼとぼ歩くことなんだ 都會にばかりゐる君なんかには分るまいが、田舍の夜ほどしいんとしたものはない。全く物音一つしないんだ。その上、闇の夜ときたら、それこそ鼻をつままれても分らないくらゐ眞暗だし、月の夜ときたら、眼の屆く限り煌々と見渡せるし、また星の夜には、空の星々が無氣味にぎらぎら輝いてるんだ。そして何より恐ろしいのは、形あるもの、見馴れたもの、凡て人間に親しみを持つてるものが、すつかり影をひそめてしまつて、形のない見馴れない奇

怪なものが、しいんとした中にそこらにうろつき廻つてるといふ、ぞつとするやうな感じなんだ。……がまあそんな說明はどうでもいゝ。僕が實際に經驗したことを少しばかり話してきかせよう。面白かつたら聞くがいゝし、面白くなかつたら居眠りでもし給へな。どうせ君なんかには本當のところは分るまいから。……がまづ、煙草でも一服吸つてからだ。

一

僕が高等小學校の一年の時だつた。その頃は今のやうに、尋常小學が六年でその上に二ケ年の高等科がついてるといふ、そんな制度ではなくて、尋常小學は四ケ年だけで、その尋常小學を幾つか總括した上に、やはり四ケ年の高等小學があつた。で田舍では、尋常小學校は各村にあつたが、高等小學校はごく少く、例へば一町六ケ村に一つといふ風に、中心地の町にあるのだつた。だから僕は、尋常小學を終へて高等小學にはいると、自分の家から一里の道をその町まで通はねばならなかつた。その第一年目の秋のことだ。

學校で遠足があつた。町から二里ばかり離れた山に……山と云つても七八百尺の山だが、それに登山をして、屋根傳ひにも一つの山まで行つて、それで歸つてくるのだつたが、朝のうち深い霧で晴雨のほどが分らなかつたものだから、出發が二時間も遅れたし、山の上でぐづついてたりしたので、學校に歸つて來た時はもう日が暮れてゐた。勿論初めから早く歸れるつもりではなかつたらしい。歸りは遅くなるかも知れないから、近くの人はよろしいが、遠くの人は參加しなくともよい、しひて參加したいといふ者は、若し遅くなつた場合には、町の親戚に泊つてゆくか、または學校に泊つてゆくか、それだけのことを兩親と相談しておいでなさい、いふやうなことを前から云ひ渡されてゐた。隨分亂暴な話で

はあるが、昔の學校はさういふ風なやり方だつたのだ。それで僕は、村の同窓生が休みだつたのに、一人目覺つて出ていつて、歸りが後れたら町の親戚に泊つてゆくつもりで、實際前の晩もその親戚に泊つて朝早く出かけたのだつた。

所で、果して遠足の歸りには日が暮れてしまつた。教師は生徒を學校の運動場に整列さして、その疲れきつた顔に一々提灯の火をさしつけながら、家の遠い者があると、學校に泊るかそれとも町のどこに泊るかと、裁判官のやうな調子で尋ねていつた。それが僕の番になつた時、どこそこの何といふ親戚に泊つてゆくといふことを、僕は元氣よく答へてやつた。

それから解散になつて、僕は眞直に親戚の家へ行きかけたが、どういふものか、急に家へ歸りたくなつて來た。前晩そこの家で餘り好遇されたので多少極りが惡くなつた、といふやうな氣持もあつたらしいし、一人でよその家に泊つたために父母から遠く離れて心細くなつた、といふやうな氣持もあつたらしいし……其他、僕は今はつきりとは覺えてゐないが、兎に角無性に父母の所へ歸りたくなつて、とうとうその決心をし實行をしてしまつたのだ。親戚へは無斷のまゝで、町の出外れで提灯を一つ買つて、一里の田圃道を一人で歸つていつた。

親戚の人達は、いくら待つても僕が歸つて來ないものだから、大變心配しだして、わざわざ學校へ聞きに行き、それからその晩のうちに、僕の家まで使の人を寄來した。そして僕は後で、父と學校の教師とからひどく叱られたものだ。がそんなことはどうでもいゝ。僕はたつた一人で、提灯をつけて、一里の道を歸つていつた。もう日はとつぷりと暮れて、月の光が冴えきつてゐた。月夜に提灯をつけるといふのは、一寸聞いたら可笑しいか知らないが、田舍の人は夜道をする時には、どんな明るい月夜にも必ず提灯をつけるものだ。森の中にはいつたり月が曇つたりする時の用心のた

めもあらうが、それよりも、そのぽつりとした蠟燭の光が、足許二三尺だけを照らす弱々しい蠟燭の光が、何だかかう自分を導いてくれる光明のやうに思へるからだ。それほど、田舍の廣々とした平野は淋しい不氣味なものなんだ。たとひ月の光が千里を照らすといふほど煌々と輝いてゐても、その光は物影とくつきり際立つて見られる都會のと違つて、眼の屆く限り一面に降り濺いでゐるせいか、空の明るいわりに地面は妙にぼーとして、物に漉されたやうな賴りないものになつてしまつて、足許が變に心もとなく感ぜられる。例へばぢかにさす瓦斯燈の光は、どこかはつきりと力强いが、あれに紗の布でも被せてみ給へ、どんな高燭の光でも、室の中が明るいわりに私の目はぼんやりしてくる。云はゞ[illegible]いた光なんだ。廣々とした田舍の月の光がやはりさうだ。明るいわりに足許が變に覺束ない。

で僕は提灯の火を賴りに、疲れた足を一生懸命に早めて歩いた。町から半里ばかりの間は、可なりの街道で、ぽつりぽつり人家も見えてゐたが、それから先は別れ道になつて、大きな森をぬけ廣い畑地を横ぎつて村に着くまで、晝間でさへも人通りの稀な、人里離れた淋しい狹い道だつた。

森にさしかゝる頃から、僕はもう一心に提灯の光を見つめたまゝ、ぞーつと背後から寄つてくる恐ろしさに身を悚めて、息をこらして突き進んでいつた。深い木立の影があたりを包んで、梢から洩れ落ちてゐるらしい點々とした月の光が、いくら眼を足許にばかり据ゑてゐても、眞黒なものや仄白いものをちらちらと、眼瞼の縁の方へ押し込んで來た。そちらを見ればなほ恐いし、見まいとすればなほ不氣味になつて、音を立てずに出來るだけ早めてゐるつもりの足が、がくりがくりと宙を踏むやうな思ひだつた。

それでも漸く森を通りぬけ、ぱつと開けた畑地に明るい月の光を見て、ほつとして駈けるやうな心地で足を早めてゐる時、僕は提灯の火がちらちら……と燃えつきかけてゐるのに氣付いた。町を出る時新らしい一本の蠟燭をつけてゐて、そ

れで大丈夫に隠れると思つてたのに、そして又隠れる筈だつたのに、どうしたわけか。もうだいぶ暗くなりかけてた。其處からは明るい田圃道ではあるけれど、前にも云つた通り、やはり提灯の火がないと心細いのだ。僕は泣きたいやうな氣持になつて、遙か十町ばかり向ふにこんもり茂つてる村の木立を、ちらりと上目がちに見やつておいて、出來るだけ足を早めて歩き出した。

すると、森の大きな眞黒い影が……といふほどはつきりしたものではなく、何かかう形態の知れない不氣味な影が、同じ早さですぐ背後にくついてくる。風のやうに音もなく、背中にぴつたりくつついてくる。ゆつくり歩けばそいつもゆつくりとなるし、早く歩けばそいつも早くなる。恐くて恐くて、とても後ろを振返る元氣などは出ない。命とたのむ提灯の火は、ぢぢぢ……と燃えつきやうとしてゐる。

僕はその時くらゐ恐ろしい思ひをしたことはない。どうにか歩き續けられたのは、父がその道を夜遅く歩き馴れてゐるといふ考へからだつた。僕の父は始終出歩いてゐて、自然と町で酒を飲むことなんかも多かつたが、いくら夜が更けても、もう明け方近くなつても、またいくら醉つ拂つてゐても、大抵は一人でその一里の道を歩いて歸つて來た。而も田舍の人に似合はず、闇の夜でも提灯もつけずに、白鞘の短刀を懐にして、平氣で歩いて來たのである。それを母が心配して、二人でいさこさ云つてるのを、僕は幾度か耳にしてゐた。

で僕は、父が何度も通つた道だ、始終夜更けに通り馴れてる道だ、とさう心の中で繰返しながら、その一事に縋りついて歩み續けた。それでも用捨なく、恐ろしい影は背後にぴつたりくつついてくる。

さういふことがだいぶ續いた後、もう村まで半分餘りも行つた頃、背中の影が拭ふやうにふーつと消えた。おやと思つたとたんに、向ふの芋畑の畔の青草の上に、眞白な狐が飛んで出た。そしてきよとんとした様子で、僕の方をちらりと

見やつてから、前足を上げて額のあたりにかざしながら、おいでおいでと招くやうな手附を――足附を二三度して、またぴよんと芋畑の中に飛び込んでしまつた。全身眞白な艶々した毛並で、芋の葉からはらりとこぼれた露の玉よりも、もつと美しい銀色だつた。

それからしいんとなつた。僕は喫驚してあたりを見廻した。月の光が一面に降り灑ぐやうな晴々とした夜だつた。急に四方が明くなつて、胸の中までも明くなつた。僕はもう恐ろしくも何ともなかつた。白狐はお稻荷樣の使だ、僕の屋敷の中に祭つてあるお稻荷樣が、僕を迎ひに白狐を將來されたんだ、さう思つてみると何だか急に嬉くなつたやうな氣がして、もう蠟燭の燃えつきかけてるのも氣にならなくなつた。

後でそのことを話すと、母はそれを白兎だらうと云つた。然し僕は白狐だつたと云ひ張つた。實際今でも白狐だつたと思つてゐる。

それだけの話なんだが……。なに、そんなお判斷なんか面白くもないつて、そりやさうかも知れないが、然し僕、人生は先づお判斷から初まるんだ。そこで、此度はも少し面白いのを聞かせよう。が一寸、煙草を一服吸つてからだ。

二

前の話から一年か二年後のことだつた。僕の父が肺病にかゝつて寢ついてる時のことなんだ。

僕の父は痩せてこそゐたが、平素は至極頑健なたちで、随分不攝生な生活をしても身體に障らなかつた。それが不意に肺結核にとつつかれて寢ついた。何でも友人に結核の人がゐて、その死際から葬式まで一切世話をしてやつたので、その時に感染したのだとの話もあるが、そんなことはどうだか分つたものぢやないし、またこの話とも關係のないことだ。

さ。父が病氣で寢ついたので、その治療にはありつたけの手段を盡したり、なけなしの貯金を費へたり、或は醫者にあらゆる藥を取寄せてみたり。出入の人に頼んで、お加持や呪やお祈りやさまざまなことをやつたり。山羊を飼つてその乳を搾つたりして、出來るだけの藥や滋養分を與へたが、父の病氣は少しもよくなる風はなかつた。そのうち、村から三十里ばかり離れた所に、肺病に對する秘傳の妙藥があるといふことを聞き込んで、それを買ひに自身で出かけたのである。

其處へ行く故も近道は、まだ交通の開けない昔のことなので、四里の山合道を歩いていつて、それから汽車に乗つて、その先がまだだいぶあるとのことだつた。何しろ、その妙藥をのんで病氣がなほつたといふ村の或古老が、抽出の中から探し出してきてくれた古い紙袋の裏の、怪しい書替の文字を頼りに、漠然と見當をつけて出かけてゆくのだから、まるで夢をでも掴むやうな話なんだ。そしてその妙藥なるものが、實に奇抜なものだつた。それを服用すると、二十四時間のうちに、體内のあらゆる黴菌が死んでしまつて、その毒氣や汚物が、一度に下痢と共に排出され、残つたのは臓物となつて吹き出されるといふのだ。今考へると、それは或は人間の腦味噌かなんかで、火葬場の隠坊達からひそかに手に入れて調製されてたものかも知れない。

母はその藥のことを聞いて、溺れる者が藁屑にでも取付くやうな風に、一圖に信用しきつたものらしい。そして、父へは勿論誰にも内密にして、自分で藥を買ひに出かけて行つた。が僕にだけはひそかに打明けてくれた。其後父がそれをのませられて、夥しく下痢したものを、或る暗い晩に、母は僕に紙燈提灯を持たして、屋敷の隅の竹藪の影に埋めてしまつた。そして恐い眼付で睨めながら、誰にも云ふんぢやありませんよと念を押した。それで僕は今日まで默つてゐたが、つい口が滑つてしまつたのだ。が話といふのはその藥のことぢやない。

母はその藥を買ひに一人で行つたのだが、父が病氣で寢てるし、誰にも内密なものだから、どうしても日歸りに歸つ

て來なければならなかつたらしい。それで何かの口實を設けて、夜中の二時か三時と云へば、丁度丑時參りの時刻ぢやないか。實際その時母は、丑時參りでもするやうな甲斐甲斐しい氣持だつたに違ひない。

村から鐵道の驛まで行く四里の川合道は、どんな處を通つてゐたのか僕は今覺えてゐない。がただ、村から半里ばかり行つた所に、長い長い堤防があつて、兩方から一丈餘の蘆が生ひ茂つてる中を、どうしても通りぬけなければならなかつたことだけを、僕ははつきり覺えてゐる。なぜかつて、僕はその先まで母について行つたのだから。

母がどうして其處まで僕を連れていつてくれたかは、今はつきりしてゐないが、兎に角僕は馳けるやうにして、母の側にくつついて歩いていつた。夏のことで、もう東が白むの間もあるまいといふので、提灯もつけずにゐた。空が綺麗に晴れて、星が一杯散らばつてゐて、暗い中にぼーつとした星明りだつた。母は着物の裾を端折つて、脚半に草履ばきのいでたちで、默つてすたすたと歩いてゆく。そして一度も僕の手を引いてくれない。それでも僕は不平でなかつた。父の藥を買ひに、母と一緒にこうして夜道をする、といふそのことだけで胸が一杯だつた

「お母さん、もつと早く行からよ、もつと早く……。」

「さう急がないでもえゝ。夜中から出て來たから……。」

僕達は長い堤防にさしかゝつてゐた。兩方に高く生ひ茂つてる蘆の葉が、道の上に垂れかゝつて、丁度隧道のやうになつてゐた。所々に蜘蛛の糸が引張られてゐて、それが顏にかゝつて氣味惡かつた。葉末の露が着物の袖を濡らした。それでも不思議なことには、蘆の葉を押し分けて通つてるのに、かさともさらりとも葉擦れの音がしなかつた。しいんとしたそして爽かな夜で、蘆の葉の隧道の眞中の少し開いてる所から、きらきら輝いてる星が見えてゐた

「随分長い堤ですねえ。」

「あゝ長いよ。」

それつきり母はまた默つて步いてゆく。僕も後れまいと足を早めた。が、いくら行つても同じ堤防で、なかなか向ふまで出られさうになかつた。こんな所にぐずぐずしてゐるうちに、夜が明けてしまやすまいかと、僕は氣が氣でなくなつてきた。昔は追剝が出たと聞いたことのあるやうなその堤防に、いつまでも引つかゝつてたらどうなるだらう。

「夜が明けやしないかしら。」

「まだなかなかだよ。」

それでも僕には、もう東の空がほんのりと白んできたやうに思へた。そして實際、不意に森の茂みが無くなつて、その高い堤防の上から、向ふにぽつりぽつりと眞白な花の咲いてゐる蓮田が見渡された時、振返つてみると、東の空の裾がぽーつと薄赤く染つてゐた。

「ほら、」

僕が立止つて眺めたので、母も立止つて眺めた。そして、こゝらで一休みしようといふので、僕と母とは露の冷たい草の上に坐つた。東の空が色づいてきたといふだけで、まだあたりはぼーつとした星月夜だつた。

僕は何にも云ふことがなくて、母の側に默つて屈んでゐた。そして、森の葉の長い隧道をくゞつてきた間、母が一度も僕の手を引いてくれなかつたことを、ぼんやり思ひ出してゐた。

それから僕はどうして母に別れて一人で家に歸つたか、さつぱり覺えてゐない。或は其處まで母について行つたのも、夢だつたかも知れないやうな氣さへする。それでも、夢にしては餘りにはつきりしすぎてゐる。[illegible]

點まで浮彫のやうに頭の中に浮んでくる。

果してそれが本當だつたか夢だつたか、僕は母に尋ねてみようと思つてるが、遠くにゐる母にわざわざ手紙で問ひ合はるほどのことでもないので、今以つてそのまゝになつてゐる。然し僕の感じから云へば、確かに本當のことだつたのだ。なに、全く夢のやうな話だつて、まあ待ち給へ、だんだん面白い話になるから。だがまあ一寸、煙草を一服してからにしよう。」

三

中學の三年級の時だつた。僕は或る春の闇夜に、山裾の道を二里ほど歩いたことがある。

その頃僕等の學校では、昔の蠻風が殘つてゐて、裏面はともかくも表面だけでは、女のことを口にするのを卑劣だとして、その結果多少男子同士の風儀が亂れてゐた。と云つてもそれは單に口先だけのことで、實際はさほどでもなく、實行の方面はやはり女性に向つてゐた。たゞ女性の方は誰も皆秘密にしてゐて、仲間での噂話は、誰彼は誰彼に目をつけてると、さういつたことが重だつた。

かう云へば君は笑ひ出すかも知れないが、僕だつて上級の或る男から目をつけられたことがある、この類でね……。だがその頃は僕ももつと見榮えがしてたものだよ。その代り僕の方でも、同級の或る男に目をつけてゐた……と云つちや語弊があるが、まあその男に好感を持つてたものだ。向ふでも僕に好感を持つてることがよく分つてゐた。そして向ふに云はせると、却つて僕の方に目をつけてたと云ふかも知れない。二人はよく運動場の隅で話し合つたり、互に往復したりしたものだ。二人共どちらかといふと温和な方で、文學が好きで、感傷的だつたのだ。

た、實行にだつて、經驗たことを言ふつもりはいけない。アクチヴにもパッシヴにも、[illegible]いふ類の同性愛といふものは、實に他愛ない馬鹿げたもので、苦惱懸の必然とした[illegible]の或状の上にあつた心理で出來上つてるので、實行なんかへまで進むだけの力もたないし、それ自身實行を目指してるものでもない。云はゞ相手を空想の路傍にするだけのことだ。空想の對照は、ずつと遙かな曖昧模糊とした所にあるのだ。

所で僕には、互に好感を持ち合つてる男が同級のうちに一人ゐた。そして春の休暇に、一緒に四五日の旅行をする約束をした。僕からその男の郷里の家へ誘ひに行つて、そして一緒に登山をするつもりだつた。

するとその日、天氣は幸によかつたが、田舍の不完全な石油發動汽車が延着したために、それと連絡してる本當の汽車に乘り後れた。そこの汽車がまた數少くて、二時間近くも停車場で待たせられた。その上、向ふの驛で下りると雲雨なんだ。もう日は暮れかゝつてくる。僕は不案内な土地に一人ぽつねんとして、全く途方にくれてしまつた。

幸にも、客があつて一台の馬車が出るといふので、僕はそののろいがた馬車に五里ばかり揺られていつた。がそれから先は馬車が行かない。友の家まではまだ二里餘りあるといふ。もう日が暮れて二時間の餘になる。星の光も見えない笠り空の闇夜なんだ。小さな宿場の見すぼらしい宿屋の燈火が、ちらちら瞬いて招いてるやうに思はれる。僕はよつぽどその中へはいつてゆかうかと思つた。然し今か今かと待つてゐてくれる友のことを想像したり、その晴やかな而も要はしい笑顔を思ひ浮べたりすると、たとひ遲くなつてもその日のうちに行きたかつた。早く行つて一晩語り明したかつた。で遂に宿屋の方を思ひ切つて、小さな提灯をぶら下げて二里の道を進みだした。

提灯を賣つてる店で詳しく道筋を聞いてはきたが、初めての土地のことだし、闇夜ではあるし、道が次第に山裾の方へ高まつて、路傍の草が繁くなるにつれて、僕は堪らなく心細い氣持に沈んでいつた。高い山か低い丘かそれの見當さ

へもつかず、雜木林のうち續いてる坂道を、眞暗な闇に包まれて提灯の火だけを頼りに、前も教はつた道を迷はないやうに用心しいしい、とぼとぼと辿つてゆく心地つたらなかつた。その心細い氣持のなかで、僕は友の姿を戀人かなんぞのやうに胸中に描いて、自ら元氣をつけつけ歩いていつた。それでも二里の道が馬鹿に遠い。初めての田舍道の遠いことは、君なんかには想像もつくまい。

そのうちに道がこんどは下り坂になつて、だいぶ行くと平らになつた。でも青草が半ばまで生へ込んでゐて、車の轍の淺いところを見ると、人通りも少い道らしかつた。いつのまにか山裾を離れて、ゆるやかな河流に沿つて、細々と遠くどこまでも續いてゐる。

ふと氣がついてみると、前方に何やら妙な音がしてゐた。不思議に思ひながらそれでも力を得て、足を早めて追つかけてゆくと、空の手車を一人の男が引いてゆくのだつた。眞黒な着物に草鞋ばきの農夫體の男で、帽子も被らずたゞ手拭で鉢卷をして、燈火一つつけないで、眞暗な中をがらがら空車を引張つてゐる。全くの空車で、繩一筋のつかつてはゐない。

僕は變な氣がして、少し間を置いてついてゆくと、男は僕の提灯の火に氣付いてか、ひよいと後ろを振向いた。その顏立は分らなかつたが、ぎくりとしたらしいのが様子に見えた。僕も何だかぎくりとして、咄嗟の間に尋ねかけた。

「あの、一寸お尋ねしますが……。」そして友人の村を名指した。「そこ迄ゆくのには、この道を行つたらいゝんでせうか。」

「さうだよ。」

「まだ遠いんでせうか。」

「もうぢきだ。」

素氣ない返辭ではあつたが、まさしく人間の聲音だつたので、僕は安心すると共にと氣がついて すたすたと追越した。その僕をやり過しながら、ぢろりと見向いた彼の眼が、闇の中に異様に光つたやうだつた。が僕は氣にも留めないで、とつとつと歩いてゆくと、後ろから空の車が、小石まぢりの道にがらがらがらついてくる。早く歩けば歩くほど、同じ早さでがらがらついてくる。それがやがて氣になりだして、せめて話でもしようと思つて、僕は足を少しゆるめながら、それでも何だか後を振向けないで、眞直を向いたまゝ、友人の姓を名指して知つてるかと尋ねてみた。

「知らねえよ。」

ぶつきら棒に云ひすてゝ、後はたゞ空車の音だけが、闇夜のしいんとした中に響いてくる。僕はまた云つてみた。

「よく闇の夜に燈火もつけないで車が引けますね。」

「馴れてるから引けるだよ。」

それきりもう話もなくて、二人は長い間默つて歩いていつた。空車の音だけが、がらがらがらがら呆けた音を立てゝゐる。聞き馴るれば馴るゝほど氣にかゝつてくる音だつた。この男は一體何だらう、とそんなことを僕は考へ初めた。

そのうちに遠くから、ごーつと堰の水音が聞えてきた。初めは何の音だか分らなかつたが、近づくにつれて徐々それだとはつきりすると、變に僕はぞーつと寒氣を感じた。獨りでに足が重くなつて早く歩けなかつた。がらがらがらがら、すぐ後ろに空車の音がやつてくる。

堰の近くになつた時、其處は田圃より少し小高い道になつてゐたが、ふいに空車の音が止んだ。はてな、と思つて振向くと、男は片手で車の柄を支へ、片手で着物の前をめくつて、提灯のかすかな光にも白くはつきりと分るほどに、勢よくしやあーと飛してゐた。僕は一寸呆氣にとられたが、自分でも何だか用を足したくなつて、道端から側の低い田圃

の方へ、同じく勢よくやつつけてやつた。

　用を足してしまつて、不思議にもその男へ一寸親しみを持ちかけて、心待ちに足を止めてると、男は頬骨の張つた赤黒い顔に——僕はその時初めて彼の顔を見たのであるが——人なつゝこい和らぎを浮べて、がらがらと足早に追つついてきた。

「見馴れねえ人だと思つて用心してゐたゞが、わしの考え違えだつた。」

　いきなりさう云ひかけて、わけを話してくれた。——その坂で、身を投げるか落ちこむかして死んだ若い旅人がゐつた。そして時々、その亡靈だかその臓腑を食つた河童だかゞ、夜更けに通りかゝる者をなやますのださうだつた。車を引いて通つてゐると、車が次第に重くなつてくることがある。そいつが車に乗つかるからださうだつた。でその夜彼は僕と連れになつて、或はそいつの化けたのぢやないかと疑つて、初めは用心して口も快に利かなかつたが、愈々坂の近くへ來たので、一つためしてやれといふ氣で小便をしてみた。化物ならば一緒に小便をすることはないが、人間ならば大抵一緒に小便をするといふのだ。

「お前さんが小便をしてくれたで、わしも安心しただよ。」

　そして彼は僕にいろいろ話しかけて、何處から來てどうして遅くなつたかなどゝ聞いて、僕が尋ねようとしてる友人の家を實はよく知つてるので、その家の前まで送つていつてやらうと云ひ出した。どうせ化物に乗つかられる覺悟だつたからと云つて、その空車に乗つてゆけとも勸めてくれた。

　僕は何だか狐にでもつまゝれたやうな心地がしたが、それでも氣持は落付いてきて、杉の古木が七八本立並んでる物凄い塚のわきをも、大して恐ろしい思ひをせずに通り過ぎた。

それにこちら、さきを歩いてゐると、[illegible]するといふのは、一寸面白いちやないか。君にもこのいいかげん[illegible]なに、分らないが面白いつて、初めて僕の話に興味を持ち出したね。おやおこんどにそんな下品なんぢやなくて、もつと上品なのを話してきかせよう。が先づ、煙草を一服させてくれ給へ。

四

これは前の話からずつと後で、僕が大學卒業に近い時のことだつた。

その頃僕は各方面に生長し續けてゐて、云はゞ生活機能が最も盛んに活動してゐた。夜遅くまで酒を飲み回つたり、旨い物を探し歩いたり、時には女を買ふこともあるし、また眞劍に戀文を書きもするし、一方では眞面目に勉强もして、あらゆることに好奇心が持てた。身體も至極丈夫だつた。

その年の夏の休暇に、卒業論文を書きに、僕は或る山奥の淋しい温泉へ行つた。所が卒業論文なんてなかなか厄介なもので、初めはなに譯はないと高をくゝつてゐたのが、いざとなると非常に手間取れて、九月なつてもまだ半分も書けてゐなかつた。で僕は八月一杯で歸る豫定だつたのを延して、九月末まで滯在することにした。どうせ東京に歸つてもまだ暑いし、學校の講義は十月にはいつてから氣が乘り出すのだし、九月一杯はその山奥に落付いてる方が得策だつた。さうきめてしまうとまた呑氣になつて、少しづゝ論文を書き續けながら、ゆつくり構へ込んでゐた。

所が二十日頃、僕は電報で東京へ呼び戻された。——サカモトシススグカヘレ、といふのだ。

坂元といふのは僕の親友で且つ畏友だつた。非常に頭の冴えた男で、その年大學の哲學科を卒業したのだつたが、文

論なんかに對しても、專門の僕以上に深い見解を持つてゐた。平素病身ではあつたが、肋膜炎をやつたといふだけで、どことといつて特別の病氣はなささうだつた。それが死んだといふので、僕は少なからず驚かされた。後で分つたことだが、八月の末から腸チブスにかゝつて、ぽつくり逝つてしまつたのだつた。

僕は坂元のことをいろいろ考へながら、すぐに歸京の仕度にかゝつた。電報は午後の四時頃ついたのだから、それから仕度をして出發すれば、夜の最終列車に乘れる筈だつた。所が間の惡いもので、前日の豪雨のために山道が破損して、漸く通つてゐた車までが不通だといふ。それぢや歩いてやれといふ氣になつて草鞋ばきで提灯の用意をして出かけた。

荷物は後で宿屋から送つて貰ふことにした。

溫泉から停車場までは五里の下り道で、六時少し過ぎに出かけたのだが、十時近くの列車までには向ふへ着ける自信があつた。溪流に沿つた物凄い山道ではあつたが、僕はかうして君に夜道の話をしてきかしてるくらゐだから、そんなことには馴れてゐて平氣だつたし、それに月もやがて出る筈だつた。

僕はすたすたと、前日の豪雨に洗はれた山道を下つていつた。途中で眞暗になつて一寸提灯をつけたが、やがて東の山の端に大きな月が出て來た。溪流の音が深い谷間に響き渡つてゐる。暗い木影から出る毎に、蒼白い月の光の流れてる谷合の景色が、眼の下にすぐ見渡される。そのあたりから冷々とした夜氣が匂ひ上つてくる。九月の末といへば山奥ではもう秋なんだ。秋の月夜の景色は實に凄いやうな美しさだつた

然し僕はその景色をゆくり眺める隙はなかつた。十時の列車に乘り後るれば、一晩後れることになるのだつた。爪先下りの曲りくねつた道を、出來るだけ足を早めて下りていつた。所々に崖崩れがしてゐた。

そして凡そ半分くらゐ、温泉から二里半ばかり行つた所に一軒の掛茶屋があつた。八時少し廻つたばかりだが、山中の八時と云へばもう真夜中も同然で、茶屋の婆さんは里へ下りたと見えてしんとしてゐて、閉めきつた戸口に腰掛が一つ片寄せてあつた。僕は一寸一休みするつもりで、その腰掛を拝借して煙草を喫つた。掛茶屋があるくらゐだから見晴らしのいゝ場所で、横向きに首を差出して眺めると、向の山から下手の谷川まで、月の光で一目に見渡された。対岸の崖には夜目に仄白い瀧が掛つてゐる。

僕はその景色に暫く見とれてゐた。すると、僕の横をすたすた通り過ぎた者がある。はつとして振向くと、若い女が一人で見向きもせずに通つて行つたのだつた。白足袋に草履を結びつけたその足先に、提灯の火がちらちらとさして、それが間もなく向ふの曲り角に見えなくなつてしまつた。後はひつそりとした静かな夜で、月が照つてをり渓流の音が響いてるばかりだつた。

僕は夢でもみたやうにぼんやりしてゐたが、だいぶたつてから變にぶるぶるつと身震ひがした。恐ろしさとも苛立ちとも分らない氣持だつた。……後で氣付いたことなんだが、温泉から僕は一人の人にも出逢はなかつたし、追ひ越した者も追ひ越された者もなかつたのだ。それから推して考へると、彼女は僕より後に温泉を發つて僕を追ひ越してしまつたのか、またはどこか遠くの側道からやつて來たかに違ひない。が、何れにしても變である。

然しその時僕はそんなことは考へもしなかつた。秋の夜の山道で若い女から追ひ越された、その一寸名状し難い感情で一杯になつてゐた。何だかやけくそのやうな氣持で立上つて、足早に歩き出した。

五六町も行つたかと思ふ頃、その女が道端の岩角に腰掛けてゐた。ぼーつとした提灯の火を側にして、月の光を斜め半身に受けて、顔を外向けてゐるその様子が、もうずつと前から其處に坐り通してるやうな風だつた。僕は何だか私が

つけず石のやうに固くなつて、ちらと見やつたまゝ通り過ぎた。彼女は見向もしなかつたらしい。

それから暫く行くうちに、全く意外な氣持が僕に湧いて來た。こんどは僕の方で一休みして彼女を待つてゐてやらなければならない……なぜさうだかは分らないが、兎に角待つてゐてやるのが當然だ、といふ氣持だつた。まあ彼女に強く心が惹かれたのだ。が誤解しちやいけない。彼女にどうのかうのつて、そんな普通の意味でぢやなくつて、全く字義通りの意味で心惹かれたのだ。第一僕は彼女の顏だつて一度も見なかつたし、その樣子で若い女だと感じただけのことぢやないか。

で、その氣持が次第に強くなつてきて、やがて僕は月の光のさしてる岩角に腰掛けて待ち受けた。すると、喫驚するくらゐ早く彼女はやつて來た。それから足をゆるめて、膝の上にもたせた片手に下げてる提灯の方を見い見い、僕の顏は見ないで、少し震へを帶びた聲で云ひ出した。

「あの……濟ませんが、提灯の火を借して下さいませんか。躓いたはづみに消してしまひましたので。」

そんなことだらうと前から思つてゐた、といふ氣が僕はその時した。當り前のことのやうにマッチを取出して火をつけてやつた。そのぱつとした光で僕は初めて彼女の顏を見た。普通の……美しくも醜くもない顏立だつたが、大きな束髮の下に浮出したその艶のない眞白さが、何だか異樣に感ぜられた。

それから僕達は、二人共めいめい提灯を下げて連れ立つて歩き出した。

「何處まで行かれるんですか。」

「麓の町まで參ります。」

それだけで二人共默り込んでしまつて、提灯の火に足許を用心しながら、すたすた歩き續けた。道は[illegible]影には

いつた。[illegible]

そして一町ばかり行つた頃、彼女は急に躓いた足が痛むと云ひ出した。で僕は彼女の手を引いてやらなければならなかつた。しまひには彼女の腕を取つて、抱へるやうにして歩いた。

「私何だか昔、こんな風にして誰かに連れられて、夜道をしたことがあるやうな氣が致しますの。」

しみじみした調子で彼女は云つた。さう云はれると僕も何だか、昔さういふ風にして夜道をしたことがあるやうな氣がしてきた。然し腕を抱へられてるのは僕の方で、相手はその女ぢやないし、道もそのあたりではなかつた。誰だつたらう、何處だつたらう、そんなことがしきりに考へられた。

そのうちに、初め溫く柔かだつた彼の女の腕が、だんだん硬ばつて冷くなつてきた。

「どうかしたんですか。」

彼女はただ頭を振つただけで何んとも云はない。いろいろ尋ねてみたが、どうしたことか彼女は一言も口を利かないで、頭を打振るばかりである。僕は變に不氣味になり出して、それかつて彼女を放り出すわけにもゆかないで、とつとつと足を早めると、彼女は足が痛いと云つてるくせに、後れがちにもならないでついてくる。僕もしまいには默り込んでしまつて、木か石をでも引張つて歩いてるような氣持になつた。

そのうちに、道が次第に平になつて、彼方のなだらかな山裾に、停車場やその辺りの小さな町の燈火が、月光に煙つてぼーつと見え出してきた。もう安心だと思うと、急に氣がゆるんだせいか、足が重くて仕方がなくなつた。

ふと氣がついて、彼女の方はと思ふて振向くと、不思議なことには、現在自分が腕を抱えて連れて歩るいてた筈の彼女が、影も形も見えなかつた。おや、と思つたとたんに、ぞーと髮の毛が逆立つた。そうして僕はもう夢中になつて駈

け出した。

何が仕合せになるか分らないものだ。夢中に駆けたために僕は、危く乗り後れる所だつた列車に間に合つた。それにしても、あの女のことはいくら考へても今以て分らない。まさか狐につままれた譯でもないだらうし……。なに、全く狐につままれたような話だつて、それはそうには違ひないが、僕に殘つてる印象はそんな他愛もないものではないんだ。がまあそんなことはいいや、こんどはもつと素敵なのを聞かしてあげよう。一寸煙草を一服吸つてから……。

五

これはつい二三年前のことなんだ。僕は變に生活に退屈を覺えだして、毎日こつこつとつまらない仕事をしてるのが、味氣ない生き甲斐のないことのやうに思へて、何かかうぱつとした明るい異常なものがほしくなつてゐた。

僕の二階の窓から、青桐の茂み越しに、すぐ隣家の座敷が見下せた。縁側に萎れかけた軒忍の玉を一つ吊して、狭苦しい薄暗い室の中で、四十歳ばかりなのと十四五歳ばかりなのとが、多分母と娘とであらうが、夏の暑い中を毎日せつせと縫物をしてゐた。夜になると、口髭を生やした男がそれに加はつて、誰の子か四五歳の男の子供まで出て來て、皆んなで物を食つたり話をしたりしてゐた。その光景が電燈の光にぱつと照らし出されるので猶更ちつぽけな惨めなものに見えた。

所が、さういふ隣家の生活を二階の窓から見てゐる感じが、自分自身の生活にもふと映つてきた。妻や子供と一緒に食膳に向つてゐる時、机によりかゝつて仕事をしてゐる時、縁側に寝轉んで新聞を讀んでる時、女中迄で皆で集つて子供

に花火をあげてやつてる時、其他いろんな時に、ふとした心のはずみで、今に宇宙の何處かに穴があいて、……こちら誰かに覗き込まれるとしたら、自分のかうした生活がどんなにちつぼけな憐れなものに見えるだらう、……と同時にふと自分がその誰かになつて、自分で自分の生活を高い所から覗いてるやうな氣持になり、何んだか惨めで見すぼらしくて嫌になつてしまうのだつた。

そこで僕は考へたのだ。高い所から人の住居を覗き込むと、どんな立派な生活でも惨めに見えてくる。所が一歩戸外に踏み出すと、街路にうろついてる乞食までが、どこかから晴れやかなのびやかな影を帶びてゐる。いくら高い所から覗いたつて同じことだ。これは一體何故だらう。

さういふ風に考へてくると、狭い庭の片隅の桃の木の根本から、すいすいと伸び出してる若芽の生長が、非常に美しくまた驚異に感ぜられた。若芽の伸びてる方向を辿つて仰ぎ見ると、頭上は無窮の蒼空が澄みきつてるし、夜には無數の星が閃めいてゐた。

空澄む、星光る、……さうだ、さういふ感じこそ常に胸の底に抱いてゐたいものだ。所で自分の生活は……。いや外的生活はともかくとして、せめて内的生活だけでも光あるものにしたい。考へて見ると、たとひ高い所から覗かれてもびくともしないくらひに、常に晴れ晴れと落ついた心境でゐたことが、今迄にいつかあつたかしら、今後いつかあるだらうかしら、一體どうしたらいゝのだらう。空澄む、星光る、さういつた感じにしつかり根を下した世界が、どうしたら開拓出來るものかしら。とそんな風に僕は思ひなやんで、毎日毎夜空を仰いでは、はてしない空想に耽つたものだつた。

そしてふと思ひついたのが、何處か高い山に登つてみやうといふことだつた。雑駁とした人事に濁り汚れた胸を、高山の靈氣で洗ひ濟めて見たら、或は自然と新たな新境が開けるかも知れない、とさう思つて、二三の友人を誘つてみた

が、誰も同行しさうにないので、それでは一人でせめて高山の麓へまでなりと行からと決心して、たゞ一人でぶらりと出かけた。

僕は先づ北アルプスの或る山の麓まで行つてみた。そして、頂に雪が白く光つてる雄大な連峯を見上げただけで、もう晴れやかな緊張した氣分になつた。然し勇ましいいでたちをした登山者達の姿を見ると、何の用意もしてゐなかつた僕は氣後れがして、案内者と二人きつりで登山するのが心細くなつた。で登山の方は思ひ切つて、そこの宿に二三日滯在して戻つてきた。

その滯在中のことなんだ。ぢつと山ばかり見てるのにも倦きてきて、僕は毎日その附近を歩き廻つた。何しろ人里遠く離れた山奥の、登山客だけを相手のぽつりとした宿屋なものだから、少し歩いてもすぐに深山幽谷の中に出てしまふのだ。

所がある晩、月の光に浮かされて、だいぶ遠くまで溪流傳ひに出て行つて、歸りは道を少し山手の小道に取つたのが失策で、どこをどう間違つたものか、小高い草原に出てその先が分らなくなつてしまつた。そればかりならまだいゝが、急に霧がかけてきて、方向さへも分らなくなつた。

山道に迷つた者は、よく一つ所ばかり、ぐるぐる廻りするといふことを、僕は前に聞いたことがある。それで僕は先づ其處に屈み込んで、よく氣を落付けてから、大體の見當を定めた。

薄い霧だつたので、月の光が多少洩れ溢してるせいか、遠くは見えないが、近い所はぼーつとした明るみだつた。遠くに溪流の音が聞えてゐた。それが右にも左にも聞えてゐるので、どちらへ出てよいかゞ疑問だつた。それからまた、宿屋のある邊を通り越して下手に出てるのか、まだ上手にうろついてるのかも、さつぱり分らなかつた。

[illegible]。三尺は[illegible]
やら分らない霧だつたし、それに僕は薄衣の上に雨外套を引つかけてるばかりなので、それも霧でぐしよ濡れにしみつくほどに寒い。それでも遠くへ迷ひ込むよりはましだと思つて、おつと我慢してゐた。

その間の僕の気持つたらなかつた。聞えるものは左右の渓流の音ばかりで、それが時折高低をなして、僕の様々な瞑想を掠つてくる。僕はこれに身体を任して、途切れ途切れの而も曾て考へたこともないやうな深い思ひに沈み込んでゐた。

然しその時のことは、とても言葉ではつくされない。自分の全存在をぶち込んだ瞑想と、まあそんな風に思つてくれ給へ。

そして長い時間がたつた。霧はいつまでも晴れさうにない。細かな灰白いやつが一面に流れ動いてゆく。僕はもうたまらなくなつて、立上つて歩き出した。どちらへ行つてみようとか、どの方角がどうだとか、そんな考へがあつてぢやない。丁度夢遊病者のやうに、ただ本能的にふら／＼と歩き出したのだ。五六寸の雑草が所々に背の高い茂みを交へて一面に生ひ茂げつてるのが足先にそれと感じられるだけで、足許の地面さへはつきりとは見えず、四方の模様は更に分らなかつた。ただ時々眼のま前に、ぼーとした物の形が浮出して、近寄つてみると、ひよろ／＼と伸びてる樹や落葉松などだつた。

そのうちいつのまにか、僕の横手にぼんやり人間らしい影がつゝ立つてゐた。振向いてなほよく見るとたしかに人間で、縞目の分らない黒つぽい着物を一枚着流して、帽子も被らず髪の毛をもぢや／＼に長く、伸ばしてゐる。それが腰からだけぬつと出て、足は霧の中に見えなかつた。

不思議なことには、僕は別に驚きもしないで、四五歩その方へ近づいていつた。すると向ふも四五歩遠ざかつてゆく。おや、此奴俺を恐がつてるんだな、と思つてぢつと見てゐると、向ふでもぢつと僕の方を見てゐる。その顏が何だか見覺のあるやうだつた。いつ何處で見たのか思ひ出せないが、ごく淡い而もごく新らしい記憶があつた。云はゞ、生れない前から知つてゐて始終見馴れてはゐるが一度もはつきり見たことがないといふやうな、よく知つてはゐるがさてどんなかとはつきりは云へないやうな、餘りに身近かな餘りに朧ろな記憶だつた。

僕はまた四五歩近づいていつた。すると向ふでも同じやうに四五歩退つてしまう。僕が立止ると向ふも立止るし、寄つてゆけば退いてゆく。僕は少し苛立たしくなつて尋ねてみた。

「誰だい、君は」

すると同じやうに尋ねかけてくる。

「誰だい、君は。」

そこで僕は自分の名前を云つて、散歩に出て道に迷つて困つてるのだが、宿へ歸るにはどう行つたらよいかと尋ねてみた。が、それには何とも返辭をしないで悲しさうな顏付で默つて立つてゐる。

僕は何だか變な氣持になつて、一人で歩きだした。いくら行つても同じやうな草原なのだ。初めは漸く踏み分けただけの小徑があつたが、それもいつしか消えてしまつて、それから先は、膝ほどの灌木が所々にこんもりと茂つてる荒地だつた。それを突きぬけて少し行くと高い崖の上に出てしまつた。木の枝につかまつて覗いてみると、遙か下の方に水音がしてゐて、冷たい霧が吹き上げてくる。底の知れない深さなんだ、山崩れでもした跡らしくさらさらの砂が殆んど垂直の斜面をなして、下るには飛び込むの外はなかつた。

僕はどうしようかと暫らく佇んでゐた。ふと氣が付いてみると行手の方に闇に包まれて、もう一人の男がぼんやりつゝ立つてゐた。僕がその方へ向き返ると、男も僕の方へ向き返つた。そして僕達は長い間見合つてゐた。

その時僕ははつきりと知つた。僕が崖から飛び下りれば、その男も飛び下りてしまふに違ひないし、僕が其處に佇み込むか後に引返すかすれば、その男も同じやうにするに違ひない

「飛び込んでしまはうか。」と僕は云つた。

「あゝ飛び込まう」と向ふで答へた。

で僕は崖から飛び込んでしまうつもりで、その縁まで手探りに歩み出た。と僕は非常に淋しくなつて、彼の方を振向いた。

「飛び込むなら一緒に飛び込まうよ、手をつないで。」

そして僕は二三歩後退りをして、彼の方へ歩き出してゆくと、彼は僕が進むのと同じだけ退つてゆく。これを僕は是非ともつかまへてやりたくなつて、どこまでも追つかけていつた。

「なぜ逃げるんだい。一緒に手をつないで崖から飛び込まうよ。もしかうなつたら仕方ないから。」

後から呼びかけても、返辭もしないで逃げてゆく。その後を追つて、僕は崖の上をだいぶ長い間歩いた。すると、彼はふいに立止つて僕の方を恐ろしい顔で睨みつけた。僕も喫驚して立止つた。

「何だつて追つかけてくるんだ。」

「だつて、一緒に手をつないで崖から飛び込むつもりぢやないか。」

「馬鹿だな、君は。」

「なぜ。」

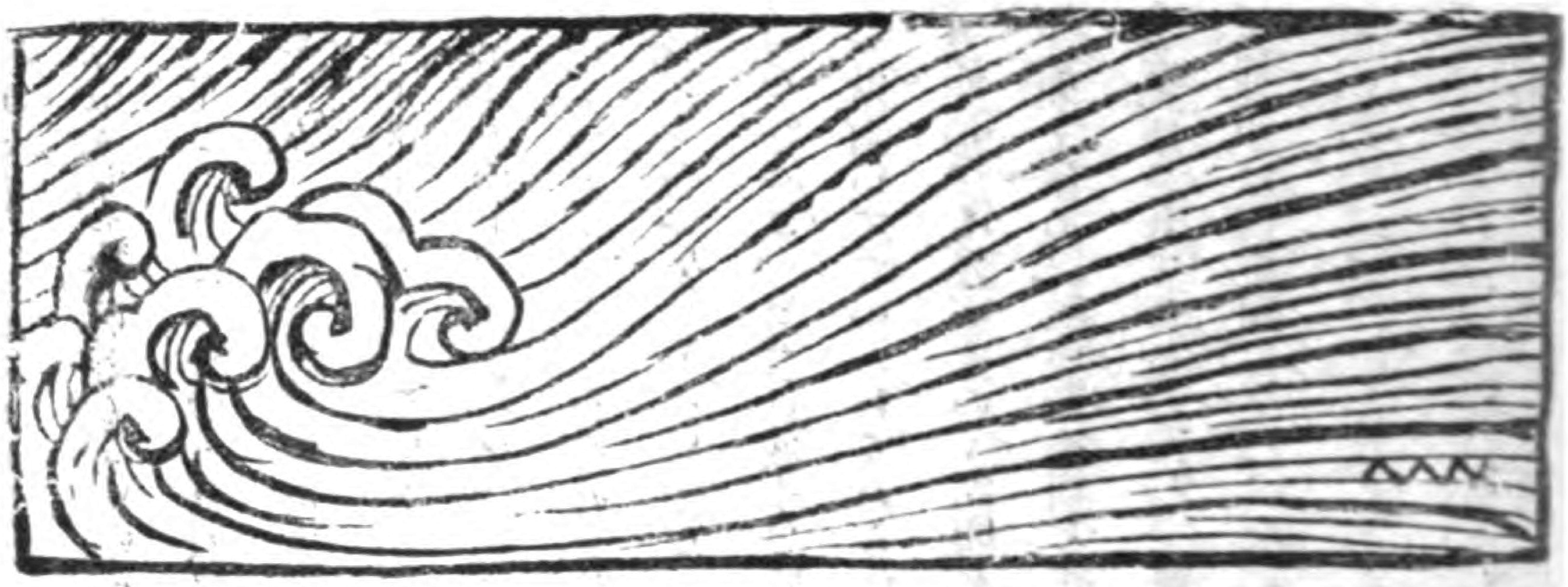
「一人ぢや飛び込めないのか。一人で飛び込めないほどなら、僕を誘はない方がいゝ。」一

僕が文句につまつてぼんやりしてると、彼はどう思つたのか、いきなり崖から飛び下りやうとした。それを見て僕は氣がふらふらとして、無我夢中で崖から飛び下りた。さらさらした砂の急斜面で、止度なく滑り落ちたやうだつたが、不思議に怪我もしないで、ひよつこりと芝草の上に落ちついた。が僕はもう立上る氣力もなくて、ぼんやり其處に屈み込んでゐた。男はどこへ行つたのか影も形も見えなかつた。

だいぶたつてから氣がついてみると、僕は宿屋へ行く本道の側の草原に出てるのだつた。霧が晴れて月が明るく輝つてゐた。顧みてみると、飛び下りたのはほんの二間ばかりの砂の斜面だつた。

それにしても不思議なのはあの男だ。はつきり口を利いた所を見ると、霧に映つた自分の影でもなささうだつたし、また山男といふ種類のものでもなささうだつた。

なに、譯の分らない話だつて、さうだらうとも、僕自身にだつて譯が分らないから、實際田舍の夜道をしてると、譯の分らないことに澤山出逢ふものだよ。まだいろいろあるが、君も聞き疲れたらうし、僕も話し疲れたから、もうこれくらゐにしておかう。ゆつくり煙草でも吹かさうぢやないか。



さ迷へる蠟燭

宇野浩二

今から十年餘り前のことであるが、自分は大阪の中之島の圖書館で、“London Life,”といつたか、“London Stories”といつたか、本の名前を忘れたが、何でもさう云つた表題の本を讀んだことがある。どうしてそんな本を讀んだかといふと、自分は當時二十歳で、確にいふと二十二歳だつた、何故といつて、その時自分は東京の或私立大學の文科の二年生で、その年頃の、殊に文學志望の學生がさうであるやうに、前途の方針に迷ひ又迷ひした末、どうかして、學校なぞ今のうちに思切つて、いつそのこと洋行してやらうと考へたのだつた。“London Life”だとか、“Paris Life”だとかいふ本を手當り任せに讀んだのはそのためだつた。では、何故大阪にゐたかといふと、多分それは夏休時分のことで、大阪は自分の第二の故郷であり、といつて、自分には第一の故郷といふはつきりしたものもないのであるが、兎に角そこに自分が中學校時代ずつと世話になつた伯父の家があつて、夏休といつても、實はそこより外に自分の歸省する家がなかつた譯だ、それが退屈なんだ、伯父の家が狹くて、完全に居候の自分

が手足を延ばすやうな部屋のないのも仕様がないだらう、大學の學資はその伯父からでなく、又別の親戚から僅づゝもらつたのだから、小遣錢の乏しいのも仕様がないだらう、だが、そんなことはどうでもいゝのだ、何しろ退屈なんだ、先にもいつたやうに、そこは自分が中學生として送つた土地のことであるから、友達にも決してそんな不自由はしない筈だつたが、見るのに、どの友達も自分よりは何か彼かして暇をつぶしてゐるやうに見えた、家の者と海水浴に行くとか、朝の内は本でも讀むとか、午後は晝寢をするとか、さて夕方には散歩に行くとか、十二時になると寢るとか――それは彼等は自分と違つて、親や兄弟やのゐる溫い家庭に住んでゐたといふことや、自分よりは幾らか小遣錢が豐富だつたといふことやが、自分の背めてゐたやうな、絶望的な退屈狀態から救ふ助けになつたのかも知れないが、だが、自分の考へではそんなものぢやないんだ、自分にして見ると、家の者と一緒に海水浴に行くことも、本を讀むことも、晝寢をすることも、さては夜十二時になつて寢ることさへも、何者のためとも知れず、堪えず追ひ立てられるやうな氣がして、落着いておつとしてゐられない氣がするのであつた。だから、自分も彼等に愛想を盡かしたが、彼等も亦自分のやうな突拍子もないものゝ訪問を忌避するやうになつた。もつとも、考へて見ると、工業學校の學生は、落着いて夏の休には頭を休め、秋の新學期と共に勉强し、さて、何年かの後その學校を卒業したなら、それで一人前の世間人になることを約束されてゐるのだし、醫學生もその通りだし、商業學校も同じくだし、又中學卒業後は金持の家の後を續いだやうな連中は尙更同じだし、おゝ、呪はれてゐるのは、文學などを志望した自分だけの身の上かな、と自分は思ふ外はなかつた、否、そんなことさへ思ふ暇はなかつた。文學などはとても自分のやうな貧乏な者の望むべきものではない、いや、そんなことをいつても、とてもとても文學と一生別れて暮せるものでもないだらうが、何よりもその日その日の生活を立てる方法を講じてをかなければならない、豚でも飼はうかな、いや、さうだ、洋行だ、洋行に限る　向う

[illegible]だらうし、生活の方の何かの便宜にもなるかも知れない、なぞと[illegible]たものである。

だか、それも亦上の空のやうに選びなかつた。その證據に、自分はもに中々面白い箇所に通つて、[illegible]の中なつために、"London Life" とか、"Paris Life" とかいつたやうな本を讀みあさつたと思いたか、"Paris Life" の方は大体を見て借り出したゞけで、結局中味は一頁も讀まなかつたかと思ふ。それどころか、何に挙げた "London Life" の方だつて、みんな讀んだといふ譯ではないのだが、唯、どうしてその本の名前を特にこゝに持ち出したかといふと、その本の内容の一部をなしてゐる "Wandering (a dle)"「さ迷へる蠟燭」といふ文章の記憶を、甚だあやふやだが、思ひ出したからである。それも、もつとも、その本に出てゐる内容、或はそれの單なる自分の記憶だけでは、大して面白いといふ程でもないのであるが、といふのは、ロンドンの何とか通から何とか橋を通つて、何とか町に出て、何とか廣場の角を右とか左とかに曲つて、何々公園のどちら側とかを通つて、それから何とか辻へといつた風な道順で、毎日午後一時から三時までの間に、降つても照つても必ず通る一人の男がある。それが蠟燭のやうに背のひよろ高い男で、その恰好だけでも目につく上に、何とか帽とかいふ古風な帽子を被つて、何色だかの胸衣に、どうとかした洋袴を穿いて、實に悠然とした歩き方をして通るといふのである。無論どこへ勤めに行くとか、何か用事があるとか、買物のためとかいふ風では決してない、いふ迄もなく散歩の外のものではない、が、散歩として見ると、代表的の散歩、つまり散歩の典型といつたやうな散歩振である。一體これはどういふ身分の人が、どういふつもりでの散歩であらうと調べて見たところが、それは退職陸軍少將か何かで、運動のためかと聞くと、さうでもない、退屈のためかといふと、さうでもない、何のためかと聞くと、その退職軍人は大變に不機嫌になつて、訪門者に戸口を指さして「歸れ!」と叫んだといふのである

そして、この不思議な人物の不思議な散歩が、相變らず一定の時間に、一定の所を、一日も缺かさずに行はれることはつゞいた、いつとなく、町の人々が彼を見ると、“Wandering Candle”「さ迷へる蠟燭」が又通るよ、といひ習はしたといふのである、いふ迄もなく、蠟燭は彼の恰好を形容した言葉であらう。が、これを讀んだ自分は、表題の『さ迷へる蠟燭』といふ言葉も氣に入つたし、その蠟燭が毎日々々散歩するといふことが無性に嬉しかつたのである。

ところで、自分が洋行をしようと空想して、それの準備に得たところの智識は、多分その『さ迷へる蠟燭』一篇だけであつた。何故といつて、實はあんな風にいつたものゝ、その時の自分の圖書館通ひは僅二日切りだつたからである。そしてその二日の間に、主に讀んだものはといふと、豫備に借り出しておいた誰だつたかの日本の小説と、ハイネの詩集とであつた。自分は又その前の前の日のやうに、毎日毎日、あちらこちらのカフヱーを歩いて廻つた。そして圖書館のことも、ハイネのことも、『さ迷へる蠟燭』のことも、いつとなく忘れてしまつた。

が、その頃、自分は妙な青年と知り合ひになつた。彼は自分と同い年か、或は一二歳年下に見えた。が、どこで自分は彼と知り合ひになつたか覺えてゐない、が、彼の存在に自分が初めて氣がついた時のことははつきり覺えてゐる。それは或日の午後五時頃、或は六時頃だつたかも知れない、夏の日が稍々赤味を帶びて傾いてゐた時分だつたと思ふから……何でも三四人だつたかの連があつて、自分は行きつけの浪花橋の傍にあつたカフヱーを出て、夕日を浴びて道頓堀を東に向つて歩いてゐた時のことだつた、三四人といふ中に、誰々がゐたか覺えてゐない、唯微かに覺えてゐるのは、中に自分の中學以來の親友で、當時東京美術學校の學生だつた河路嘉十がゐたやうな氣がする、といふのはその時分、河路は元來大阪に親の家があつて、矢張り夏休で歸つてゐたので、自分は時々彼と往來してゐたし、さうして道頓堀を東に向つてその連中が歩いてゐたのは、多分天王寺にあつた彼の家へ遊びに行かうといふ相談の後だつたやうに思へるか

ら。が、正直のところは、さう思へるだけで、今考へて見て、その連中の中に河於がどんな風をしてまじつてゐたか、そして又話上手な彼がどんな話をしてゐたかも覚えてゐない。そして、不思議にも、自分がその時の連中で唯一人、今だに目の前に見るやうにその恰好を覚えてゐる男がある。それが自分がこれからいはうとする二木川於夫なのであつた。

自分たちは道を歩きながら、何か頻りに二十歳の青年らしい高聲と熱心とで、賑かに喋つてゐた。だから、沂蝋燭の雑踏の中ではあるが、自分たちは自分たちの外にどんな人たちが通つてゐたか、どんな事が起つてゐたかさへ知らない位であつた。中で、最も饒舌家であつた自分などは、殊にさうであつた。が、さういふ中で、何しろ四五人連であつたから、全體が一列になつて歩く譯には行かないので、絶えず誰か一人や二人は列の後にならなければならなかつた。それでゐて、話題は、いつも一つに集まるやうな種類のものだつたから、列の後になる者は始終列の中に割込むやうにしなければならない、そしてその時その列から除外され勝になるので、始終連の者の後を追ふやうにして、或時はどうかして中の列に割り込まうとしたり、或時はあきらめて一歩ほど後からついて歩いたりしてゐる、一見見別れない、しかし、どうかするともう大分前から時々大勢集まつた時に見たこともあるやうな氣もするところの、一人の男があつた。洋服を着てゐて、背は五尺八寸近くもあつたらうか、そのために腰から上を二つ位に屈めし、とぼり／＼と歩いて來る恰好が、悪くいふと西洋人の乞食のやうでもあるが、兎に角日本人離れがしてゐた。身體が大きいやうに、手足の大きいのが目に立つ男だつた。さういふと、顔の形も、いふと大陸的だつた。眉が太く突き出てゐて、變にいびつな恰好の目はくつと奥の方にあつた。その外大きい形の獅子鼻といひ、厚い口唇を持つた口といひ、金輪際女に好かれる型のものではなかつたが、立派に彫刻的であるといへた。そしてこの男は無口であつた。彼は彼のさういふ異様な風采に最も似合ふに

違ひないと思はれるやうな、袋のやうな感じのする洋服のポッケットに兩手を突つ込んで、自分たちの連の一人として、自分たちと一緒に歩いてゐたのである。どこから自分たちと一緒になつたのか、その時の連の中の誰かと一緒に來たのか、それともカフエーででも落合つたのか、――誰も知らない。

自分は道を歩きながら、折を見ては左右の友達に彼が誰であるかを尋ねて見たが、辛うじて三木田幹夫といふ名前が分つただけで、誰もそれ以上深く知つてゐるものがなかつた。が、先にいつたやうな自分自身の毎日の生活振りであつたから、午前のうちは大抵一人で町を歩いてゐるとか、がらんとしたカフエーの隅で一杯の珈琲を三時間も四時間もかゝつて飲むとかして、一人で暮す外はなかつたのであるが、午後から夜にかけては、誰か彼か相手を見つけることが出來た。夜になると、大阪の盛り場所は殆ど道頓堀一箇所に限られてゐたから、一人の友達に會ひ、又別の一人が加はり、で、まるで雪だるまを轉がして歩くやうに、必ず何人かの大勢に膨張して行つた、それは無論毎日同じ顔觸れである筈はなかつたが、その中でだん〳〵と數多くこの三木田幹夫の顔を見かけるやうになつた。多分、例の河路嘉十だつたかと思ふが、或時彼のことを說明して、「僕んとこへ二三度やつて來て、畫を見せてくれといふんだよ。」「君はどうしてあの男と知つてゐるんだい、」と自分が聞くと、「さあ、いつからだか、まるで知らないよ、何だか突然のやうな氣がするんだが。」「ではやつぱり畫をやる人なのかい?」と聞くと、「これからやらうといふらしいんだ、」「これからか、」「それがね、どうもをかしいんだ、」と彼がいふには、「初め、僕のとこへ僕のかいた畫を見せてくれといつて來て、見せてやつたんだが、その時油畫を始めるにはどうしたらいゝかとか、何と何との道具が入るかとか聞いて行つたと思ふと、それから三日目だつたかに、未だ油の乾かない描きたての畫を持つて來て、今日一枚かいて來たから見てくれといふんだ、見ると驚いたね、……」「まづいのか?」「いや、うまいんだ。うまいんだが、どこを寫生して來たのか、この前に初

めに來た時に見せた僕の畫の中の一枚と二つ〳〵りの構圖で、色[illegible]ると僕のよりうまい位なんだ。」「どういふんだ、本當に油畫を初めてやつた人なのかい？」「それがねえ、初めてはどうも初めてらしいんだが、器用といふのかね、才人といふのか、人を馬鹿にしてゐるといふのか……」「變な奴だね、」

「變な男だよ、」といふやうな話が出たことがあつた。

が、この男が間もなく、河路よりも自分の方に親しく接近して來るやうになつた。理由は多分所謂であつた。といふのは、河路は先にもいつたやうに、自分なぞと違つて、この町にちやんとした親の家がある上に、規丁面な、年の割合に老成した、自分で自分を制御出來る男だつた、とても自分の生活と他人のとを一緒にするやうなことは出來ない性質で、人にも迷惑をかけない代りに、人から自分に少しでも迷惑をかけられることをひどく恐れる方であつた、だから、突然ひよつこりやつて來ては、畫を見せてくれといつたり、此方の畫を持つて行つては批評してくれといつたり、餘り得にもならない理屈張つた藝術談を、尻長く坐つて話し込んだり、無暗に散步に誘ひ出したりしさうな三木田の來訪を、彼は餘り喜ばなかつたに違ひなかつた、すると、彼の性質として、露骨に歡迎しないことを表白し兼ねなかつたので、三木田はその大きな、それ全體がいびつのやうな恰好の身體に拘らず、妙に敏感なところがあつたから、自然彼の方からも河路を尋ねることは、初の三四度でふつゝり止めてしまつたのであらう。それから思ふと、自分のやうな生活をしてゐる者は、彼にとつて便利だつたに違ひない、そして、自分も亦三木田の存在を重寳に思ふやうになつた。夕方にならなければ散步に出なかつたり、一日おきでなければ表に出なかつたり、一般にどこか規丁面なところのあるこの町の青年の中では、三木田だけが稍々調子外れで、自分が未だ床子の下に昨夜の蚊が燒つてゐるやうな朝の八時頃に、無論自分の外に一人も客のゐないカフエーの卓子に頰杖を突いてゐると、思ひがけなくキイと入口の硝子扉を開け

て、三田木がその腰から上を二重に屈めた身體を、のそ〳〵と運ばせて來ることなどが屢々あるやうになつた。夜、彼と別れる時など、「どうです、明日も亦朝からこゝへやつて來ませんか、」といふと、彼も亦自分のさういふ退屈な狀態を察しるものと見えて、笑ふとその大きな亂杭齒の見える口を開いて、ゴホホヽヽと咳をするやうな聲で笑ひながら、「えゝ、來ませう、」と應じた。それはいふ迄もなく、自分が毎日の時間を潰すのを困つてゐることを、彼も亦察しることが出來るだけ、彼自身も毎日の時間を潰すのに苦心してゐる男の一人と見て差支へなかつた。ゴホホヽヽと咽喉の奥からの聲で笑ふ時、彼はその亂杭齒を恥ぢてか、心持俯向き加減になつて、その口元に大きな熊のやうな手を不恰好に當てがふ仕草は、熊の處女のやうな愛嬌と優しさとがあつて、自分には何ともいへ好感が持たれるやうになつた。

さうだ、自分は次第に彼に興味をひかれて行つた。かういふことが二三度あつた。――それは自分が朝からカフェーに腰かけてゐるのにも飽きて、久しぶりでふらりと中之島の圖書館に出かけて行つたことがあつた。もうその時分は『London Life』や『Paris Life』など見向きもしなかつた、その時だつたかどうだか知らないが、トルストイの『コサック』と、バイロンの詩集とを借りて、どちらも十頁位づゝ讀んで、飽きて又圖書館を出たことがあるが、自分の居候してゐた伯父の家といふのは道頓堀の近くにあつたから、中之島までは隨分の道のりである、そして當時はまだ大阪に電車が引けたばかしで、今の幹線の一部分位しか通つてゐなかつた、だから、伯父の家から圖書館まで、電車に乘ると可成りの廻り道になるし、電車賃でさへ、自分は珈琲一杯の用意に貯へておきたかつたので、いつの時でも大抵歩いた。圖書館の入口を出て、少し公園の中を散歩してやらうと思つて、豐太閤の銅像の方へ歩いて來ると、その銅像の傍のベンチに三木田幹夫が例の洋服姿で腰かけて、前の廣場でどこかの小僧が二人で頻りに自轉車の競走をしてゐるのを眺めてゐる。自分は彼の傍に進んで行つて、

「妙なところで會ひますね、」と聲をかけると、彼は極りの悪さうな顏をして、

「いや――」といひながら、例のすぼゝゝといふ笑ひ方で笑つた。「どこへ行つたんですか」

「ちよつとその圖書館まで、」と自分は内心いつもカフェーでばかりごろ〳〵してゐるのではないぞ、といふ得意のつもりでいつた。

「あなたも圖書館へ來られるんですか、僕も始終行くんですが、會はないもんですね、」と彼にいつた。

「今日はどちらへ?」と聞くと、

「今日もその圖書館へ行くつもりで來たんですがこゝ迄來ると、急に氣が進まなくなつたものですから、これからどうしようかと思案してゐたところなんです。」

その時、大阪城の方から、眞正面に聞える音で、ドンが鳴つた。それから二人は、いつも別れる時刻である夜の十二時頃まで行動を共にした。又、それから二三日後の或日、自分は朝の八時頃天王寺の南の郊外にある友人を訪問したが、留守だつたので、これからどこへ廻らうか知らと、四天王寺の境内を歩いてゐると、龜の池の傍のところで、後から呼びかけられる聲に振返つた、呼びかけたのは三木田幹夫であつた。

「やあ、又會ひましたね、今日はどちらへ?」と自分は聞いた。

「え、その……」と彼は自分の問に狼狽した樣子で、「ちよつと用事があつて、この近くの從兄弟のところまで、」といつた。

がそれから二人で四天王寺の境内をあちこちと一時間近く歩いた末に、難波新地に新しく出來たカフェーの店に出て、そこへ行つて見ようといふことで出かけて行つた。途で、ふと思ひ出して、「從兄弟さんの家つてのはどこなんで

す?」と自分が聞くと、三木田はちよつとあわてた様子で、「いえ、すぐあの四天王寺の傍なんですが、い、んです、いつでもい、用事なんです、」といつた。その後、自分たちの隨分長い交際の間に、彼の從兄弟の話といふのはその時切りしか出なかつたし、いろ〳〵考へて見ると、從兄弟とか、用事とかいふのは、どうもその時の彼の出鱈目らしかつた。さういふと、この前の、圖書館へ行くといつたのも出鱈目だつたかも知れない。

それから又半月ほど後のことであつた。その間には始終彼とはカフエーなどで會つてゐたが、或日自分は用事があつて、神戸の親類へ行つたことがあつたが、その歸りに三の宮から大阪行の電車に乘ると、同じ電車の中で彼を見出した。「君は隨分いろんな所へ出かけると見えますね、」といふと、彼は唯「え、」と答へただけだつた。夕方だつたので、例に依つてそれからずつと夜の十二時頃まで彼と一緒だつたが、その時は彼の神戸行について彼から何にも聞かなかつたが、その後河路君に會つた時、何かの次手に神戸で三木田に會つたといふ話をすると、河路は「ほお、神戸で三木田に會つたかね、おやあ、十日ほど前だらう、氣の早い男だな、」といつて、彼の說明するところに依ると、多分その前の日あたりであらう、久しぶりで彼を尋ねて三木田がやつて來た、いろ〳〵話の末、此頃河路が神戸に時々出かけて行く、いふには、神戸の町は何となく洋風味が漲つてゐてよい、面白い畫になる所も多い、といつた風な話をしたので、それで三木田は神戸を見に行つたのに違ひない。彼は未だ神戸には一度も行つたことがないといつてゐたから、とのことであつた。「その話を聞いて合點が行つたことがあるよ、」と自分はいつた、「僕はうつかり君に、三木田と神戸で會つた話を洩らしてしまつたが、その時、どういふ譯でか、三木田はこ、で私に會つたことは、どうか河路君には話さないでおいてほしい、ちよつと譯があるから……いや、誰にも內所にしといてくれ、といふやうなことをいつてゐたよ。」

おやお、畫でもかきに行つたのかなア?」といふと、「いや、あの男は、僕も確めたことはないが、誰かの話に、寫生と

いふことはちよともしないさうだよ。つまり、あれで神經な神の變りのところがあるからね。[illegible]生しないといふことは、よい男の畫を見ても分るよ。もつとも、この頃は畫をやめたといつてたがね。何でも文學をやりたいんださうだよ。」「變な男だね。」とそこで自分がいつた。「僕にはそんなことはおくびにも出さないよ。それところか、君は文學をやると吃度面白いものが出來さうだが、と僕が此間もいふと、例の笑ひ方で笑つて、いや、いや、駄目ですよといつてたが、成る程、さういふと、僕がさういつたのが、口では否定しながら嬉しさうに見えた。然し、兎に角、僕には矢張り畫をつゞけるやうなことをいつてたが。」――

さういふと、彼ほど、當時の自分たちの交際仲間の中で、その以前の生活なり、現在の境遇なりを知られてゐないものはなかつた。例へば自分にとつて、先にいつた河路高十などは、中學以來の友達ではあり、彼の家へも屢々遊びに行つたことがあるから、大體の彼の境遇は分つてゐたのはいふ迄もないが、彼ばかりでなく、その時分カフエーなどで紹介されたり、友人の家で紹介されたりして知り合つた、ほんの新しい知り合でも、三木田の外の人たちは、それが誰の友人であるか、どこの學校に在學してゐるものであるか、どこの國のどういふ兩親の子であるかは、誰から聞くともなく知ることが出來た。が、三木田だけはその例外なのだ。何故かといつて、自分たちの交際仲間の中で、一人として、彼を以前から知つてゐるといふ者がなかつたから。彼の家といふのはまとひ（纏）屋であつた。事實、自分もその後一二度そのまとひ屋に彼を尋ねたことがある。が、自分は一度もその家の中へ通されたことはなかつた。何でも豐太閤時代からの古い家柄のまとひ屋で、太閤の千成瓢簞の旗印などもこしらへた家だといふことで、太閤から貰つた茶器などが、今だに寶物として傳はつてゐるといふ話である。今は千成瓢簞を注文するものも、本陣の旗印を注文するものもない譯だから、多分消防組だけがその家の得意先であるのだらう。「よくそれで商賣が成立つて行きますね、」と或時に自分

が三木田に聞くと、「それや昔ほど盛大にといふ譯には行かないが、よくしたもので段々と表具師だとか、提灯屋などに商賣換をしてしまふので、まとひ屋の數が少なくなつて行くから、大阪市内はいふ迄もなく、隨分遠國からも注文がある、だから、商賣としてそんなに思はれる程閑散でもない、が、唯困るのは、あのまとひの飾とか、その下に垂れるばれん（馬簾）などの職人が少なくなつて困ることと、さういふ職人は變に名人氣質で、外に融通がきかないから、仕事のない時にも相當の手當をしてやらなければならないといふやうな不經濟があつてね、……」「だけど、中々藝術的な商賣ぢやありませんか。」と自分がいふと、彼は嬉しかつたのか、「ゴホ、、、」といふ例の一流の笑ひ方をして、「私が志改めて、一肌脫いだら、まだ中々發展する餘地があるんですがね。」といつた。「まとひの商賣がまだそんなに發展する餘地があるんですかねえ。」と自分がいふと、彼は急に又しよげて、突然不機嫌になつた。

かういふ言葉を聞くと、如何にも彼がそのまとひ屋の後繼に違ひないやうに思へるし、又自分が「千成屋」と染め出した、見るからに太閤以來のものゝやうな古びた暖簾の下つてゐる彼の家を訪問した時、店の間の次の部屋の衝立の蔭から印絆纏を着た彼の姿がちらと覗いて、自分の姿を見るとあわてゝ引込んでから、暫くたつと洋服に着更へた彼が出て來て、それともいはないで、さういふ約束でもしてあつたかのやうに、自分を促すやうにして、さつさと散步に出かけたことがある、その待たされてゐる間に、彼の家の入口の表札を見ると、間違ひなく「三木田吉次」（吉次といふのは、彼の父か兄かの名であるのだらう。）と書かれてあつたことを考へても、彼の家は確にそこなのであらうと思へるのだが、それからずつと後に、人があつて、あれは彼の家ではなくて、姓が偶然同じであるだけで、他人の家だなどといふのを聞いたことがある。が、又別の人があつて、いや、その吉次といふのが本名であつて、彼の父は彼の幼い頃に死んだし、彼はその家の長男であるのだ、鮮太は彼の假名であるなどいふのである。何にしても、彼のやうなハイカラな恰

好の男に似合はしくない、それは古風な商賣でもあり、舊式な體への家でもあつた。

自分はといふと、その頃の文學青年間に流行してゐたところの、頽廢派の詩人を氣取つてゐた、従つてすべての都會なるものを輕蔑することを得意にしてゐた。彼は朝八時に起きて顏を洗つて朝飯を食ふぞ、といつて輕蔑した、彼は普通に人が眠る時間に寢るぞ、といつて輕蔑した。病氣にならないぞ、といつて輕蔑した、そして、どんなに無茶なことでも、どんなに愚かなことでも、それ等がどこか常規を外れてゐるものであれば歡迎した。ところで河路がいつだつたか、三木田は畫を止めて文學をやりたいといつてゐた時分から、果して彼は自分に接近して來ると共に、自分の幼稚な文學思想にかぶれ出したやうに見える。だが、どこか内氣な性質なので、自分は長い間彼が自分にかぶれてゐることを知らずに過ぎたが、だん〳〵と人傳てに彼のいふことや、することが自分と似てゐるといふことを聞くやうになつた。彼が此間かうかういふことをいつてゐたといふことを聞くと、それはその前に自分が彼にいつたことゝ同じことであつて、それが驚くべきことには、自分がいつたことの二倍にも三倍にも敷衍されてゐて、而も自分のよりもずつと完全に表現されてゐることであつた、これは、考へて見ると、彼が初めて河路の畫を見て、次に來た時に河路のそれとそつくりの、或はそれよりうまく見える畫を描いて來たといふのと似てゐる。が、彼のそんなにも不恰好な身體附のどこに、さういふ器用な模倣の才があるのだらうと疑はれた。それはまつたく模倣以上のものだといふことが出來た。だが、自分へはまだ、彼が河路にしたやうに、原稿を書いて見せたことはなかつた。それを見せるやうになつたのは、ずつと四五年も經つてからのことである。

さういふ譯で自分がその夏休の大坂に滯在してゐた二三ヶ月の間に三木田幹夫と親しくなつて行つた度合は急激だつたが、その親しくなり方が變にいびつなものだつたことは事實である。先にもいたつやうに、自分は二三度彼の家の人

口まで行つたことがあるが、家の内に通されたことは一度もなかつたし、自分も亦、當時自分が居候してゐたところの、完全に自分の手足を延ばす部屋さへないやうな、狹苦しい住居へ友達に來られることは迷惑だつたので、――さうだ、それを恐れて、あの頃自分は誰にもはつきりした自分の住所を教へなかつた位だから、彼が自分を訪問して來たことはなかつた。だから、彼と自分とが會ふのは、行きつけのカフェーか、でなければ往來であつた、往來で會ふなどといふと變に聞えるかも知れないが、彼とはまつたく往來でよく會つたものである。カフェーや、往來や、公園やで、三日に上げず彼と會ふにつけて、自分は自分自身も同じ片身であることを忘れて、よくもこんなに外を歩いてゐる男があるものだと、つく〲彼の身の上をあきれたことが屢々ある。一度などは、こんなことがある。自分はそんな風にして、長い夏の日の毎日を暮すのに、さすがに閉口し出したので、考へ又考へた末に、これは自分に戀愛がないからだと思つた、さうだ、戀愛をしたなら、こんな呪はれた生活から救はれるだらうと思つた。が、さう思つて、カフェーの卓子を叩いて、勢よく立上つたところが、そんなに早速戀愛が得られる譯のものではない、二三日煩悶した末に、その前の年に自分がし殘した戀愛があつたことを思ひ出した。前の年の、それも夏休の間のことであつたが、河内の國に自分が中學を出た年に三ケ月ばかりそこの小學校の教師をしたことのある村があつた、その時の同僚であつた友人を古馴染の小學校に尋ねた時に一人の女教員に紹介された、その女教員が文學好きで、當事自分が東京の大學の文科にゐると聞いたので、早速彼女は自分に興味を持つたのである、そして自分もそれに應じたのである、だから、自分と彼女とが會つたのは、その河内の國の小學校の教員室で、せい〲三時間以上ではなかつたが、忽ち共鳴してしまつて、それから三四回手紙を往復した後に、學校が休になると共に、彼女は大坂にゐた自分を訪問して來た、彼女は同じ町にある伯母の家とかに、一週間程滯在の豫定で田舍から來たといふのである、その一週間ほどの間に、二度ばかり二人で郊外散歩を

したことがある。そして、それ切りで別れてしまつた。何故さうなつたかといふと、自分は直に彼女が厭になつたのである、河内の田舍で見た彼女と、大坂の繁華な町の中や、その郊外の派手な海水浴場の人込の中で一緒に歩く彼女とでは、夜見ると晝見るとほどの違ひなのだ、河内の國で興味を持つて、うか／＼と手紙の往復などをしてゐるうちに、彼女に訪問されて、改めて大坂で彼女を見直すと、自分はがつかりしてしまつた、自分は彼女が一週間大坂に滯在してゐるうちに、二度會つて、三度目に彼女に訪問された時裏口から逃げ出してしまつた、が、彼女はその後河内へ歸つてからもしばしば手紙を寄越した、やがて自分の方の夏休の期間も終つて、自分が東京の下宿に歸つてからも、彼女は相變らず手紙を書いたり、手製の織物とか、袋物とかの贈物をして來たりした、自分も手紙の返事は三度に二度は書いた、が、それも半年程後には、どちらからのが最後ともなしに、交通が絶えてしまつた、――自分はその女のことを思ひ出したのである。

　河内の國のその小學校のある村と云ふのは、汽車で行くと可成廻り道になつて、而も汽車を下りたところから又一里餘り歩かなければならぬやうな位置にあつて、大阪から歩いて行くと二里半の道のりだつた。どんなに頽廢派であつても、病的なことを讃美する主義であつても、何と二十歳の元氣さよ！　或る八月の朝、自分はその前の晩馴染のカフエーの卓子の上で肘枕をして、居眠りをすることに依つて夜を明かした後、珈琲一杯とパンの朝飯を濟まして、午前七時といふ時刻に徒歩で行くことに決めて道頓堀から出發した。前の年の自分の戀は多分餘り幼稚で潔癖過ぎたんだ、と自分は考へた、多くのその年頃の青年が考へてゐたやうに、自分も亦彼女との間に、肉體的な交際といふものを少しも考へなかつたが、彼女と別れてから彼女との二三度の會合の場合を回想すると、彼女はどの時でもそれを要求してゐたことに氣がついた、自分が彼女から逃げ出した十分の二や三の理由もそこにないことはない、よし、今度は自分の方から彼女の

肉體を要求しよう、その外は彼女に望むものは何にもないのだから、と歩きながら考へた。即ち自分はやつぱり彼女に戀愛的な思は少しも持つてゐなかつたのだ。それを、突然思ひ立つて河内の國まで出かけようと考へたのは、その二三ケ月前、自分が未だ東京の下宿屋にゐた時に、中學時代の友達で、自分とその女との關係を知つてゐる者があつて、その男からの手紙に、彼女は去年の秋あたりから急に身を持ちくづして、彼女に近づいて來る男といふ男と片つ端から惡い噂を立てられてゐる、今に學校を出されるかも知れない、それは多分君に失戀した爲の自暴からだらう、と書いて來たのを思ひ出したからである。では、自分も改めて、この退屈な、どうにもしようのない毎日の暇潰しに、彼女に近づく男の一人になつてやらうか、と自分は思ひついた譯だつた。

人も知る如く、大阪につづいてゐる河内の國は有名な日照りの地方で、林もなければ、山もなければ、恐らく水田さへも僅しかない、眞白な道の兩側に、それ等の砂をかぶつた眞白な野菜の畑が畑につづいてゐる、昔はそれ等の畑は大抵綿畑だつたさうだ。自分が三ケ月勤めてゐた小學校の同僚に、五十歲になる善良な代用教員がゐたが、「これから暑くなりますと、煙草などはあまり乾き過ぎて粉になつてしまひますから」といつては、教員室の前のポプラの葉をむしりとつて來て、「煙草入の中へこれを混ぜて置きなさい、さうです、青い葉なら何でもよいのです、」などと云つたことを自分は覺えてゐる。まつたく、だから、いくら二十歲の元氣とはいへ、大阪の町をはづれて河内の野にかゝつてからは、幾度こんな馬鹿々々しい計畫は止めて、引返さうと思つたか知れない。それに、考へて見ると、うか／＼かうして粗卒に出てたものゝ、今は小學校も休の期間であるから、彼女を尋ねるとすると、彼女の家を訪問するより外に方法がない、突然そんな風にして彼女を訪問してもかまはないだらうか、それとも自分の以前の同僚であつた友達を尋ねて、それとなしに彼女の動靜を探つてからの方がよくはないだらうか、それにしても、この夏休に、彼等がどこへも行か

十町[illegible]になつて行くうちに、[illegible]ことを思ひ出すやうに、[illegible]、自分は[illegible]來たので[illegible]ここで丁度一つの村を通りかゝつたので、とある氷屋に入つて一服した

自分が氷水を飲みながら、丁度その店が村の一番端になつてゐたので、すつと向うに大阪の町々の屋根の見える、西の方の暑さうな草いきれのしてゐる野の方を見るともなしに見てゐると、自分が今歩いて來た街道筋ではない、それとその村の近傍で十字に交つてゐる別の道の、自分の見てゐる所ろとは半町と離れない邊を、何と三木田節夫が例の大きな足に穿いた大きな靴をどたり／＼と運ばせながら歩いてゐるではないか。自分は彼を見たと同じ瞬間に、何といふことなく嬉しくなつて、「おーい三木田君！」と呼んだ。彼は呼ばれた聲の方角にちよ、と目を据えたが、容易にこれが誰であるかを發見しなかつた。自分は氷水のコップを片手に持つたまゝで道の上に飛出して、片手で彼に向つて手を上げた。彼は漸く自分を認めた。彼はその時自分が初めて見たことには、肩からスケッチ箱を紐に依つて下げてゐた。彼の言葉を聞くまでもなく、彼はその邊に寫生に來たものに違ひなかつた。（もつとも、かういふと、いつか河路嘉十が彼の畫に就いて話した時に、彼は決して寫生といふものをしたことがないといつたことを傳へたが、それも嘘ではないのである、といふのは、後で知つたのであるが、三木田がこんな風に寫生箱を肩から下げて歩くのは彼の氣取で、彼の實際に寫生するといふことは矢張りないのださうである。無論、その事は三木田自身が自狀したのではない。）

が、そんな事は自分にはその時どうでもいゝことであつた。自分は彼と氷屋の腰掛に並んで腰掛けて、自分がどうしてこんな所に來てゐるかといふ事情を彼に話したところが、彼は自分以上に興奮して、さういふ事件を持つてゐながら、むざ／＼捨てゝしまふ法はない、と彼はいつた、さうして彼は彼に出來ることなら何でも引受けるから、早速これから彼女の村に向つて出發しようといひ出した。自分は彼に[illegible]れた[illegible]が、しばらく歩いて行くうちに、[illegible]それから[illegible]

間音信不通にしてゐた昔の同僚を尋ねるのはいいが、どんなにさりげなくとはいひながら、彼女の動靜を聞くために行くのは何となく後目たい氣がして、その村に近づく程躊躇されて來た。で、自分は途に、やつぱりかういふ事は馬鹿げてゐるから止めるといふと、彼は折角こゝ迄來たのだから、せめてその女の人に會ふだけでも會つたらいゝぢやないか、そして自分にも紹介してくれといつて、自分を勵ました。彼女に會ふのはいゝが實は自分がその同僚の家へ彼女のことを聞きに行くのが臆劫になつたからだといふと、彼は、「ぢやあ、私はその人を知らないんだから、あなたの名前を出さないで、私がその女の人を公然と尋ねて來ませう、……あの村ですね、ぢやあ、あなたはこゝで待つてゝ下さい、あの村の何とかいひましたね、そのお寺の隣ですね、ぢやあ、行つて來ませう、」といつて、彼は自分を殘して、さつさと一人で出かけて行つた。自分は實のところ、自分がその同僚の家に顏を出さずに彼女の動靜を知ることが出來るのだつたらそれに越したことはないので、一二度形式的に彼をとめはしたが、結局滿足して、彼の歸つて來るのを、畑中の炎天の下で待つてゐた。

この戀愛冒險旅行は失敗であつた。が、どんな風に旅行して、どんな風に失敗したかは、この物語の正當の筋道に關係しないから省くとして、この時がその初で、自分は三木田幹夫の人一倍女好きな半面を知るやうになつた、といふのは、どういふ行違ひであつたか、その時自分たちは、例の自分の同僚の家（それは三木田が一人で行つてくれたのであるが、）の外に、彼女の後を追つて、次から次と四軒もの家を廻つた、それは彼女の下宿してゐる先とか、多分そこへ出かけて行つたらうと教へられた彼女の友達の家とか、彼女の兩親の家とか、さては從姉妹の家とかいふ風に……そして、最後に彼女の從姉妹の家を尋ねた時には、確にそこに彼女はゐたやうであつた、といふのは、偶然自分たちがその家の玄關に立つた時、その衝立の陰を、彼女に違ひない人間がちらと通りかゝつた、自分の目と彼女の目とが一瞬出見

合つたのであるが、屢々非常に主婦から番をかけて彼女の為になることと、さういふ時はおしまひになつて……るのだつた、だが、見す見すその家の中にゐることを發見しながら、さういはれて見れば、たゞ一こといふ言葉にならなかつたので、自分は前の年彼女から自分が逃げ出した代りに、今度は自分が彼女に負かされたやうな氣がしたが、仕様がないので、不機嫌な氣持で、默り勝に歸途についた。が、今の家に確に彼女がゐたといふことを、遂に三木田に話すと、彼は忽ち道のまん中に立止まつて、「では、あの家の前で待つてゐようぢやアないですか。」といつた。「あれは從姉妹の家なんでせう、そしたら乾度夕方にでもなつたら、自分の家へ歸つて行くでせう、それをつかまへようぢやアないですか。」「だけど、もう止しませう。」と自分は言ひ張つた、が、彼も幾度か自分の說を主張した、しかし、自分は彼の先に立つて、足を早めて野道を歩き出した。長い夏の日はもう自分たちの行手の西の方へ傾いてゐた、だから、西日に向つて、自分たちは帽子の庇を深く下ろして、二人とも無言の不機嫌で、早足に歩いた。……そのことがあつてから、ずつと後、三年も四年も後のことであつたが、或日東京の自分の家に、(自分はその時一人で小さな家を借りて住んでゐた、)どこで自分の所を聞いたのか、その時の女から手紙が來たことがある。彼女はもう河内ではなく、たしか山城の不便な田舍の女學校にゐるとしてあつた、いつの間にか女學校の教師になつたのだと見える、その手紙に、三年だか、四年だかの久濶を述べて、さて自分が彼女と別れた翌年、例の自分が三木田と一緒に彼女を訪問した時、彼女が會ふ機會がなかつたといふ詫を書いた後に、彼女は三木田幹夫の名を擧げて、あの方にはその後いろ〳〵困りましたと、いふのは、その時自分はもう今の夫のところへ嫁づいてゐたので、それにも拘らず三木田さんが二日にあげず手紙を寄越すばかりでなく、一週間に一度位の割合で尋ねて來られた、が、到頭自分は三木田といふ人に會つたことはなかつたが、あなたのあの方は本當にお友達なんですか、……といつたやうなことが述べられてあるのだ。自分はそれを讀んで彼女と三木田とに

對して厭な感じがしたり、[illegible]

三木田が女性に對して、一寸でも彼にひつかゝりのある女性に對して、內氣なやうに見えて執固く、熱心に働きかけた例は、自分に關係してゐる事だけ舉げても、この河內の女の外に、一度や二度のことではないが、その話は別の機會に讓つて、先にいつた彼の模倣の才に就いてもう少しいふと、彼は彼が見聞したり、接觸したりして、感心したところの話とか、文章とかばかりでなく、その人その人の態度と、歩き方とか、物の言ひ方まで直に自分のものに取入れる才能を持つてゐる事である。それは模倣性といふよりは病的に鋭敏な感受性といふ方が當つてゐるかも知れない。私はあなたとそつくりの物の言ひ方をする人を知つてゐるとか、私はあなたに實によく似た表情をする人を知つてゐるとかいふことを、思はぬ人にいはれたのは、自分や河路ばかりではないだらうと思ふ、恐らく三木田幹夫が接近してゐた人は、一度や二度さういふことを人からいはれて、誰です、その人は？　と聞き返すと、三木田といふ人です、と云ふ答を得なかつたものはないだらう。驚くべきことは、彼は教養の上でもさうであつた。人の話に依ると、彼は甲種商業學校に一年餘り籍を置いたことがあるだけで、それ以上の教育を受けてゐない、といふことである。別の人のいふところでは、小學校を十年餘りかゝつてやつと卒業しただけだ、その外はまとひ職人の中にまじつて、家の仕事をしてゐた、などといふのである。實際、自分などでも、彼との交際の初を思ひ出すと、さうかも知れないと思はれるやうな點が幾つも思ひ合はされた。が、それを彼は所謂耳學問と特別の感受性とで、人前をつくろつて行くことが出來たばかりでなく、三四年後には、會ふ每に彼がいろ／＼違つた英語の書物を洋服の小脇にかゝへて歩いてゐるのが見られるやうになつた。現に彼が東京で下宿住居をするやうになつた頃には、彼の部屋の本棚にも、幾冊かの洋書が並べられてあつた。而もこれは彼が以前だてに持ちかけてゐたスケツチ箱の類ではなく、それの飜譯をさへするやうになつて、その原稿を自分も見せら

れたことがある。が、悲しいことに、その翻譯の文章は變な風に名文の體裁を具へてゐるだけで、殆ど意味が通じたことがなかつた。原著は大抵美術書であつたから、「印象派の勃興」とか、「セザンヌの畫」とかいつた風な文章であるのだが、譯するところ、出鱈目に辭書を引いて、分つた字と字との間を想像でつなぐものらしかつた。「こゝのところの意味はどういふのです、ちよつと原著があつたら見せてくれませんか、」といふと、一度に二度は、今原書が手元にないとか、昨日古本屋に賣つたとか云つて見せなかつたが、稀にそれを出されることもあつたので、對照してみると、原語の意味を傳へてゐるところは一箇所もないといつてもいゝものであつた。人がどんなに間違へて翻譯しようとしても、これ程迄に間違へてすることは出來ないと思はれるやうなものであつた、それでゐて、その翻譯の文章だけ讀んで見ると、昔の小唄のやうに、一貫した意味は少しも通じなくて、而も何ともいへぬ名文なのである、自分はいつの時でも、何と批評すべき言葉を知らなかつた。

大體、三木田幹夫はさういふ人物であつた。彼は自分が彼を知つた年の翌年の春、ふらりと東京の自分の下宿に尋ねて來た。彼はその前、大阪で會つてゐた時分から、自分も東京に行くつもりだといつてゐたが、彼のやうな人物のことであるから、自分は信じなかつた、といふよりも忘れてゐたのだ。「いつ來たんです？」と聞くと、「今朝着いたんです、」と答へた。「下宿は？」と聞くと、「これから探さうと思つてゐます、」といふので、「それぢやあ、こゝでもよければ部屋が空いてるか聞いて上げませう、」といふことになつて、自分と同じ下宿に下宿することになつた。「今朝着いて、今までどこにゐたんです？」と聞くと、「あちこち歩いてゐました、」と彼は答へた。「で、こちらで、これからどういふことをするつもりです？」と聞くと、「語學でも勉強しようかと思つてゐます、」と彼は答へた。「それは結構です、」と自分は答へた。寫實派をもつて任じてゐた當時の自分としては、變な挨拶をしたものである。もつとも、自分はその時分は毎日下宿の

部屋に萬年床を敷き放して、その上で寢て暮してゐた。前の年の夏、あまり不養生したのに祟られたのかも知れない、自分のその頃といふと、散歩に出るのも、珈琲を飲みに行くのも、何かなしに身體を動かすことが大儀だつた。が、三木川は自分の下宿へ來た晩から、殆ど一日何處となしに出歩いてゐた。が、朝と、晝と、夕方との三度の食事の頃には、間違なく下宿へ歸つて來た。そして飯を濟ますと、直に出かけて行つた。「相變らず君はよく出歩きますね、」と自分がいふと、彼は例のゴホ、、、といふ極りの惡さうな笑ひ方で笑つた。「語學の勉强の方はどうしました？」と聞くと、「何日から始まりますから。そしたら行かうと思つてゐます、」と答へた。が、その何日も出鱈目らしく、或日から自分に餘り聞かれるので、苦しまぎれに、「もう毎日行つてるんですよ、神田の××學校に、」と答へた。が、それだけでは氣が濟まなかつたと見えて、「あそこに御存じですか、××といふ敎師があります。以前小説を書いたことがある人ださうですね。實に敎へ方が下手で、その上聲が小さいものだから、閉口します。」「何をやつてるんです？」と聞くと、彼は困つたやうに、「いろ〳〵なものです、」「いろ〳〵なものつて……」「いろ〳〵な、その詩人の詩です、」「英吉利の詩人ですか、」「各國の詩人です、」「各國つて、それぢやあ、みんな英吉利語に飜譯したものをやつてるんですか、」「飜譯ぢやアありません、」「だつて、英語なんでせう、」「さうです、」——ざつとさういふ風であつた。

無論彼はどこの學校へも行つてはゐないらしかつた。が、どういふつもりであるか、大學生の制服に、角帽をいつの間にかこしらへて、毎日それを着て出かけて行つた。大學生の服裝が好きになつたのであらう。かういふ風な流儀であつたから、彼は彼に接近するあらゆる人々から、多少とも輕蔑の目で見られ勝であつた。が、彼ほど人から輕蔑される癖に、彼ほどそれに鈍感なものはなかつた。だから、彼は人から少しでも輕蔑の口吻や態度を見せられると、やり返す代り、彼はその人から去るのが常であつた。自然、彼は殆ど定つた友達といふものを持たなかつた。彼の定つた友人と

いへば、まつたく自分の外にはなかつたらう。自分は彼のいろいろな缺點を、彼を軽蔑してゐる者よりもよく、否、知つてゐるつもりだが、嘗て一度も彼を軽蔑する念が起つたことはない。彼を見ると、自分は何といふ訳なしに、「惱んでゐる人」といふ印象を得るのが常であつた。彼がその人並外れた大きな身體を、眼から上を閉め加減にして、俯向き加減に、始終ポケットに兩手を突つ込んで歩いてゐる姿を見てもさうであつた。態度もいふ通り、彼の足は身體相應に大くて、その上どういふ好みからであらう、いつの時でもその足に餘ると思はれやうな大型の赤靴を穿いてゐた。だから、そんなに歩く人でありながら、彼の散歩姿は決して輕快な感じを持つてゐなかつた。何か忘れものがあるか、落したものがあるか、心配なことがあるかして、歩き廻つてゐる人のやうに見えた。

彼のいふところに依ると、彼の家は、商賣が古風なばかりでなく、家風も思ひ切つて舊式で、彼が十二三歳の時分まででゝそこらの町角の煙草屋でさへ電燈がついてゐるのに、彼の家だけは行燈を使つてゐたといふことである。彼の父は彼が幼い時分になくなつたが、祖父も祖母もまだ生存してゐて、彼等は昔の日本人の習慣通り一切の獸肉を排斥したばかりでなく、魚肉でさへも食はない、その孫であるところの幹夫もさういふ子供の時分の習慣が癖になつたのか、彼も亦生れつきのやうに一切の肉類を好かなかつた。だから、彼が東京の下宿屋に來て、困つたのは毎日の食事であつた、彼は海苔とか、わさびとか、生姜とかを用意しておいて、それで三度三度の食事を濟ましてゐた。自分などゝカッフェーにゐて、食事時分になると、彼はいつも麵麭を二人前位命じた。それを、どういふのか、どの指も鳥の足のやうに曲つてゐるところの、大きな手で、不器用な恰好にむしりながら食つてゐる樣子を見てゐると、矢張り何か「惱んでゐる人」といふ感じで自分を打つた。

多少譯の分る男たちにでさへそんな風であつたから、ましてどんな境遇の、どんな階級の女でも、女で彼のやうな人

間を理解したり、好いたりするものは絶對にないといつてよかつた。だが、反對に、女はこの世の中でも彼の最も好物であるといふことが出來た。よく彼は自分と淺草の公園を散歩してゐる時、相手に心の中を見透かされることを躊躇するやうに、「あの、あなたは興味はありませんかね、」といつた風な、遠廻しな言ひ方で始めた。自分は元より氣まぐれで、彼の言葉の下から、「北に向ひますかね、」と調子を合はすこともあるし、又他の時は彼のいふ意味が通じないやうな顔をして、「何の興味です?」などとわざと聞き返すこともあつた。すると、彼はあわてゝ、前の言葉を全然打消したり、又さうでない時は思ひ切つた調子で、「十二階の下をついでに歩いて見る氣はありませんか、」といつたり、要するに、彼が東京に來た初のうちは連があつてもなくても、晝間はどんな違つた方面を歩いてゐても、夜になると必ずその十二階の下を歩いてゐるといふ噂は本當らしかつた。彼の女好きは、彼の菜食にも拘らず、その日本人離れのした體格から來るものに相違なかつた。

自分は先にもいつたやうに、その前の年の夏大阪で暮した時と違つて、東京に歸つて來ると、寧ろ出無性になつて、毎日下宿屋の疊の上で虫のやうに寢ころんでゐたが、三木田幹夫は自分が彼を大阪で見た時と同じ狀態であつた。彼は少しも落着いてゐなかつた。下宿屋でさへも、初にゐた自分と同じ家には半月とゐなかつた。それからどこへ引越しても一ケ月以上同じ家にゐなかつた。それは彼の飽きつぽい、浮氣な性分にも依るだらうが、今一つの理由は下宿の女中でさへも彼を輕蔑したものに違ひなかつた。すると、輕蔑されることに敏感な彼のことであるから、前の日もしかすると口説いたかも知れない女中の輕蔑にも恐れをなして、早速宿を變る氣になるのであらう。どうかすると、東京が彼を輕蔑するやうに思はれることもあるらしかつた。彼は例の優れた模倣の才を以て、忽ち東京の言葉を上手に使つたが、使ひながら、それに自信が持てない爲か、妙に恐れをなしてゐた、それは丁彼度が疊をかくことも、文章を作ることも

人並以上に器用にこなしながら、これに恐怖をもつてゐるのと似てゐた。彼がいつもの通り、何の働きもなしにふら／＼と東京の裏町を歩いてゐるとする、その時そこらで石投げでもしてゐる子供の一團があつて、彼等の誰かがした惡戲を歩いてゐる彼があやまつてあらぬ方角に觸つたとする、子供のことだから、こん畜生、氣をつけやがれ……位いふことがあるかも知れない。が、そこで彼ははつとするのださうである、そして言ふには、「東京ではこんな小つぽけな子供までが東京語を使やがるからな。」「當り前ぢやあないですか、」と自分がわざと平凡な答辯をすると、「當り前ですがね、」といつて、彼は一流のゴホ、、、と聞える聲で笑ふのだつた。

だから、彼は月に一度か、どんなに少なくても、三ケ月に一度位の割合で、ひよつこり東京から姿を消すことがあつた。それは東京が恐くなつて、同時に大阪が懷しくなつて、さう思ふと、彼の氣質として矢も楯もたまらなくなり、本でも着物でも質に置くなり賣るなりして、大阪へ歸るのである。だが、大阪だつて、そんなにいつ迄も彼の氣に入つてる譯がない。大阪は彼の生れた土地で、子供も皆、彼の馴染のある大阪言葉で物言ふとはいへ、又別の方から彼を悩ますものがあるに違ひない、早い話が彼の家に三日もゐたなら、彼の母親なり彼の祖父母なりが、東京で一體何をしてゐるんだい、碌でもないことをして、錢を使つてゐるんだらう、もう東京などへ行かないで、ちつと家業に身を入れたらどうだといふだらう、彼は間もなく、又東京が懷しくなつて、母親に小遣錢をねだつて、ひよつこりと新橋の停車場を下りて來るのに違ひないのだ。

彼が初めて東京に來た年から三四年も後のことである、その三四年の間には、彼は半年近くも大阪に歸つてゐたこともあるし、又珍しく半年以上東京につゞけてゐたこともあるが、大體外の東京に遊學してゐる彼の年頃の學生たちと違ふことは、彼はどこの學校にも行つてゐなかつた、別に何の研究をしてゐるといふ定つた仕事を持たなかつたので、例の

束縛も受けない。極めて自由な自分であつたことだつた。もうその時は、身分の境遇にしても初めて三木田に會つた時分とは違つてゐた、自分は頽廢派の文學にかぶれて、下宿屋の疊の上に寢轉んでばかりゐたお陰で、いつとなく大學の籍も拔けてしまつて、嘗て同級であつた者たちがそれぞれ卒業して、それぞれ世の中へ出て職業についてゐるにも拘らず、自分は相變らず昔のまゝの下宿屋に寢轉んでゐた。考へて見ると、自分と三木田幹夫との間に何の相違もなかつたかも知れなかつた。自分は彼よりも幾分か學校教育の階段を數多く踏んだとはいへるだらう、だが、その時になつて見ると、これからこの世に生きて行く上に何をしていゝか見當の附かない點では彼も自分も同じことであつた。ただしも、彼は色んな噂があるにも拘らず、まとひ屋の千成屋の息子であることは素晴らしかつたから、この世が住みにくくなつたら、まとひの並んでゐるあの陰氣な店に我慢して歸りさへすれば、身の安全だけは保てる彼と比べて、さういふ逃場所を持たない自分の方が、層境遇に於いて心細かつた。文學で世に立つことの難しいことは、二十三歳の夏大阪で暮した時、——三木田と知り合ひになつた時分から知つてゐて、その爲に洋行をしようとか、養豚業を心ざさうとかさへ思つた位なのだ、か、何といつてもその頃は乏しいながらにでも、親類から月々の仕送りを受けてゐた身分であつたから、物事の考へ方が呑氣であつた。が、今は自分もまつたく三木田と同じことであつた。この上は繪畫であらうか、文學であらうか、或は演劇であらうか、行き當りばつたりに、やれさうなものをやつて見ようと思つてゐた。だが、三木田がまとひ屋の店に歸らないのも、自分が小學校の教員に逆戻りしないのも、根を掘つて見ると、藝術とは何であるか？とても、生かゝつても、誰にもその正體の分らないものに引かれてゐたことに違ひなかつた。

その惱みは自分たちのやうな無鐵砲な性質のものだけに限らなかつた。その證據に、自分の古い友人で、着實な性質の、河路喜十でさへ同じ煩悶に陷つてゐた。彼はその二三年前に美術學校を無事に卒業したが、學校を卒業したと

ところが、[illegible]
ゐるだけに、田舍に育つた中學の教師になればよいのであるが、[illegible]なかなかむづかし
かつた。或日河路が、「僕はかういふことを考へてゐるんだがね、」といふには、「近頃世間でも大分藝術的といふものに興味を持つて來たらう。そこで、例へばかういふ土瓶敷一つにしても、卷煙草入一つにしても、或は喇叭にしても、机掛にしても、今迄のやうなのでない、もつと藝術的なものを工夫するんだ。それはさはないよ、僕の學校の方の友達を二三人呼んで來たら譯なく出來るんだが、その賣捌の方法に少し工夫が入るんだ、それに就いて僕は名案があるんだが、——といふのは、あの銀座の夜店だ、外の町の夜店と違つて、あそこは東京の夜店の内でも一番ハイカラな人間が大勢通るところだから、あそこへその美術品の夜店を、ハイカラな屋臺車か何かこしらへて出したらいゝと思ふんだ。」

自分は無論何にもする事がなくて、退屈で困つてゐた時だつたから、そんな事が始まつたところが、文學書生である自分には何の役割もないことなど考へる暇もなく、それは面白い、早速やらうぢやないかと賛成した。自分はそれを三木田幹夫にも勸めた。三木田も無論賛成した。が、自分はその美術品露店の準備中に、自分のする役がないのと、河路と一寸したいさかひをしたのとで止めてしまつたが、三木田は筆立に燒繪をすることとか、窓掛に花模樣の縫取をすることとか、いろいろとその仕事の手傳をしてゐた。そして、間もなく銀座で露店を開くことになつたが、初のうちは河路初め彼の學校友達の連中も面白半分で店番をしてゐたが、さてやつて見ると思つた程賣れもせず、丁度始めた時が十二月だつたものだから、夜の六時頃から十一時頃まで銀座の舖石道で腰かけてゐることの寒さに堪へられなくなつて來た。そこで、恰好な河路嘉十がどんな風に三木田を納得さしたのか、どんな約束を彼と交したのか、自分は知らないが、或晩からその露店の番を三木田が一人ですることになつた。彼はもうその頃はさすがに大學の制服に止めて、どこでさうい

ふ型を見て來るのだか、自分が初めて彼を道頓堀で見た時の恰好とは又別の、彼の大きな、幾分いびつに見える恰好の身體に如何にも適當して見える型の、黒地の背廣服を着て、或晩自分が通りかゝると、それは殊に寒さの嚴しい晩だつたから、おち〱腰掛にも坐つてゐられないと見えて、つまらなさうに店の傍に、例の腰から上を曲げて、兩手をポケツトに突込んだ恰好で立つてゐた。そんなに遲い時間でもなかつたが、寒さがひどかつた爲か、銀座通はいつもの三分の一も人が出てゐなかつた、まして彼の美術品の店など、振返つて行くものさへなかつた。

自分はそれ迄にも二三度この店の前を通りかゝる機會があつたが、河路と一寸した感情の行違ひがあつたこともあるし、又そこに河路がゐなくて、三木田だけがゐたとしても、彼につかまつて、三十分も一時間もそんな路傍に引止められることを恐れたので、成るべく近づかないやうにしてゐたのであるが、その晩は、自分の方からつか〱とその店の方に近寄つて行つた。が、何か外に考へ事でもしてゐたのか、寒さを防ぐために、兩手をポケツトに突込んだまゝで、身體を上下に搖すりながら、地面の方を見て立つてゐた彼は、「三木田君、」といつて、自分が彼の肩を叩く迄氣がつかずにゐた。「やあ、」といつて、彼は自分を見ると嬉しさうな顏をした。「隨分寒いぢやないですか、」と自分はいつた。「こんな晩は駄目でせう、もうしまつたらいゝぢやないですか？ そして、どうです、久しぶりでその邊で珈琲でも飲まうぢやありませんか？」「行きたいんですがね、」と彼は子供がするやうな殘念さうな顏をして、「ですけど、河路君がこれをしまひに來るまで待つてなけやならないんです。」「一人でしまつたらいゝぢやないですか？」「えゝ、ですけど……」と彼は何故か河路に遠慮してゐる風であつた。自分は先にいつたやうに、河路に多少反感を抱いてゐた時だつたので、三木田を煽動するつもりで、「君はどういふつもりで、こんな店番などをしてゐるんです、つまらないぢやないですか、君ばかりそんな惡い役ばかり引受けて……」といふと、「えゝ、僕も此頃ちよつと變だと思ひ出して

ゐるんですけれど……」「何ですよ、前にお君なんか……」と自分がいつてゐる[illegible]、「[illegible]ですよ、
と答へ不[illegible]なので、蝋燭屋の自分の方で吃驚した様、彼は突然自分を後にしてさつさと歩き出した。そこで[illegible]
をなして、「おやあ、三木田君、これならこれで、この男をしまつて行かないと……」と自分はそばにゐた[illegible]に向つて[illegible]
出した三木田の後から呼んだ。が、三木田は答へなかつた。自分はあわてゝ、「おやあ、三木田君、折角[illegible]まちなさ
りませんか、此方へ行きませう、此方へ、」と自分は彼を追駆けながらいつた。と、彼は立止まつて、「僕、失礼しま
す、」といふので、「どうして？」と聞くと、「僕、これから大阪へ帰ります、歩いて……」といつた。後で聞く
と、彼はその時汽車賃がなかつたので、歩いて大阪まで帰るつもりになつたのださうだが、然し品川近くまで来た時、
大阪までの距離を考へて、がつかりして引返したといふのである。が、それから三日程後、彼は本当に東京を引上げ
て、大阪へ帰つてしまつた。そして、その翌年、彼は大阪で結婚した。

それから、自分は彼と、たつた一度の外、二三年会はなかつた。噂に依ると、彼は結婚してすつかり落着いたといふし、又反対に落着いてゐるといふのは表向で、心持は昔のまゝだとも聞いた、その證據に、彼の祖父が彼にまとひ屋を継がすことに絶望して、太閤以来の由緒のある暖簾の商賣を止めたといふのである、その時は本當だつたと見えて、自分が先にいつた、彼に會はなかつた二三年間の、唯一度例外の時、――自分は大阪へ行つたついでに河路嘉十に會つた時、彼と二人で三木田を尋ねたことがあつた、河路もその時分は東京を引上げて、大阪の母親の家に歸つてゐたのである、その時見たのであるが、家のかまへは昔のまゝであつたが千成屋の暖簾は外されてゐて、入つたところの土間に、看板か何かの千成瓢簞の旗印が以前見た時の通りに立つてゐる切りで、外にまとひの類は見られなかつた。「商賣を止めたんですか？」と彼に聞くと、「えゝ、祖父さんが死にましたので、もう誰がやつて行くものかありませんから、」と

彼は答へた。彼は以前から、餘程氣が向いた時でもないと、彼の家の商賣や、まとひに就いて話すことを厭がつた。

その頃、彼はまとひの代りに、レオナルド・ダ・ギンチを研究してゐるとのことであつた。これは甚だ突飛た事のやうに聞えるかも知れないが、理由があつた。といふのは、一二年前、或はもつと前から、彼は研究好きになつてゐた。それには、自分の口からいふのも何だか、たしかに自分から傳染したのではないかと思へるやうなふしがあつた。それは四五年も前に、彼が初めて東京に現れた時分、自分も學校を卒業するつもりか何かで、「ヴェルレエヌと佛蘭西象徴派」といつたやうな題目の論文を書いてゐた、後で考へて見ると、齒の浮くやうな美文調のものであつたが、その時はひどく得意で、毎日一枚とか二枚とかを書いては、同宿の三木田に讀んで聞かした。それを又三木田がひどく感心して聞くものだから、自分も益々得意になつて、終にはそれを學校に出すことなどこの次にして、三木田を感心させるだけのために執筆した。彼を感心させるには、たとへばヴェルレエンの傳記を物語る一節にしても、本當の事を書く必要がなかつた、なるべく面白さうな逸話を、ボオドレエルの傳記の一部でも、ハイロンのでも、或はゲエテのでもかまはない、いろんなものをまぜて、出來るだけ豐富に、出來るだけセンチメンタルな文章で綴ればよいのだ。或は外國のでも、日本のでも、面白さうな文章でうまく當て嵌まりさへすれば、そつくりそのまゝその文章の中に採用して綴り込めばいゝのだ、多分そんなことをしてゐるうちに、眞面目な部分は初の二三十枚で、後は出鱈目なものなのだが、一二百枚にもなつたかと思ふ。然し、三木田はまつたくそれに魅せられたらしかつた。彼が西洋の畫家の評傳を、辭書で主な單語を引くことに依つて、それ等を想像で結びつけたやうな文章で、翻譯だと稱してやり始めたのはそれから間もなくのことである。もつとも、彼にして見ると、畫も少しやつて見たが、いゝのか悪いのか自分では分らないし、文學の方は、これも亦手をつけては見たが、一層自信がないし、遠方に離れてゐた時でもあつたので、同じ文學でも創作でなしに、さうい

ふ副業的な仕事が自分の仕事として適當してゐるかも知れない、と思つたのも無理はない。彼はこれまで、[illegible]ふことや、怠けることや、歩くことやで日を消して、學問といふものに親しんだことがなかつた、自分がともすると人に[illegible]されるのも、學問をしなかつたからだ、といふ風に考へたのかも知れない。そこへもつて來て彼の、持前の、滑稽にさへ見える程の虚榮心が手傳つて 彼はさういふ氣持になつたのであらう、つまり、スケッチ箱を肩から下げたり、大學生の制服を着たりする氣持の延長に過ぎないのである。

だが 彼がダ・ギンチの研究を始めたと聞いても、誰も彼を見直して尊敬する氣持になつたものはなかつた。自分のやうな、彼を嘗て一度も輕蔑したことのないものでも、ダ・ギンチだけにはどうしても賛成出來なかつた。自分は河路と三木田の家へ行く途々、「ダ・ギンチは困つたもんだね、」といつた。「困つたもんだよ。」「彼の、しかし、ダ・ギンチの噂はもう餘程前から聞いてゐるが、彼のことだから、人が一週間で讀むやうなものを半年も一年もかゝつてゐるんだらうね、」「いや その反對かも知れないよ、」と河路はいつた。「彼はあんなしみつたれた生活をしてゐるが、あれで家は中々舊家だから、相當な財産家らしいんだよ。だから、その方の本は隨分集めてゐるらしい、彼のことだから、それをどうせみんなは讀まないよ、本一冊に就いて三十字か五十字讀んで、彼流の理解の仕方で理解してゐるかも知れない……、」「だが どちらにしても物にならないことは同じだらう、」「それやさうだがね。」

この時も、三木田は自分たちを玄關に迎へると、上れといふ代りに奥の方へ引込んで、しばらくすると、裏口の方からでも廻つて來たものと見えて、例の洋服に赤靴を穿いて、入口から入つて來た。「やあ、」と自分たちが案外な方角から現れた彼を見て、驚いて叫ぶと、「お待遠さまでした、」といつて、彼は表の方へ歩いて行つた。仕様がないので、自分たちも表に出た。それから、ぶら〳〵歩きながら、道頓堀へ出て、行きつけのカフエーに入つた。

何でもその晩は、自分は河路のところで泊めてもらふことになつてゐた。どういふ用事で大阪へ行つた時だつたか忘れたが、二三日滯在してすぐ東京へ歸つて來たやうな旅であつたと思ふが、久しぶりに會つたのだから、どうです、三木田君、僕は河路君の家で泊るんですが、君も一緒に泊りませんか、と自分は三木田にも勸めた。河路も傍からすゝめた。三木田は初めのうちは彼らしく遠慮して辭退するやうな言葉を洩らしてゐたが、結局河路の家に泊ることになつた。十一時頃、三人はカフエーを出て、天王寺にある河路の家まで、可成りの道のりであつたが、歩いて行くことになつた。「三木田君、相變らずダ・ギンチをやつてますか?」と自分だつたか、河路だつたかゞ聞いた。その言葉のうちには、微かながら、非難と輕蔑の調子を含んでゐた。といふのは、河路にしても自分にしても、三木田幹夫の存在には、外の人たちのやうに頭から輕蔑することなく、少なからず興味を持つてゐたのだが、といつて、何年か經つたなら、彼が彼の人間そのものゝやうな特異な畫をかくだらうとか、小説を著すだらうとかいふ期待は、時としては持てるやうにも思はれるが、大體に於て持てないのだが、しかし、何よりもダ・ギンチの研究は彼が生れ變らない限り、滑稽の外のものではないのだつた、そんなら、彼はどんな道を進んだら最もいゝか、と聞かれると、自分も、無論河路だつても答に窮するのである。だが、幾ら答に窮しても、彼のダ・ギンチの研究だけは、否といふ外ないやうなものであつた。

「ダ・ギンチなんか面倒くさくないですか?」とつゞいて、矢張り自分たちのどちらかが聞いた。

「えゝ、」と暫くしてから、三木田は答へた。敏感な彼は、これだけの言葉で、自分たちが彼のダ・ギンチ研究に對する輕蔑のこもつた感じを感じてゐたに違ひなかつた。だから、彼は少し不機嫌になつた。彼として見たら、二三年前は兎に角、もう今の彼に對して、――かうして何年か研究してゐる彼の勉強に對して、自分たちからもう少し敬意を表されべき筈だと思つてゐたに違ひないのだ。そこで、彼は少し反抗的になつて、「僕はしかしこれだけは一所懸命に

つゞけるつもりです。」

「それはね、」と自分たちもそこで自分たちの品評を露骨に出して、「それは君が、研究室にやつて居られることで、自分たちが橋合からいふのは何だが、君にはもつと君に適當した仕事があると思ふんだがなア。第一、君はそんな學者の眞似事をするやうな人ではないと自分たちは不斷からいつてるんですよ。研究なんて仕事はつまらない仕事ぢやありませんかね。そして其んな事に三年も五年もかゝつてやるといふのは、それはさういふ人もあるにはあるだらうけれど、少くとも君の仕事ぢやないと思ふがなア。君はもつと何か面白いことが出來る人だと自分たちは思ふんですよ。外に、ダ・ギンチの研究なんて、かういつちや悪いが、日本人がやるとすれば、外國人の研究者か、寫眞かに依つてやるより外に仕様がないぢやありませんか。そんな事に大事な何年もを使ふのはつまらないと思ふがなア。」

「しかし、」と彼はいつた。そして、彼はいろ〳〵筋の通らない理窟で辯解した。が、無論、彼の方が旗色が悪かつた。彼は彼がやり込められてゐることを感じると、益々不機嫌になつて來た。そのうちに河路の家に着いた。もう十一時前であつた。自分たちはそれを機會にして、もうダ・ギンチの話に觸れないようにした。それに時間も遲かつたので、直に八疊の間に三人の寢床を並べてもらつて、寢ながら話をすることにした。三木田も幾分機嫌もなほつたやうに見えた。そのうち自分はうと〳〵と眠りに就いた。

それからどの位經つたか分らないが、自分は半分眠りから醒めてゐる意識で、一燭光の薄暗い電燈のともつてゐる座敷の隅に、誰かがごそ〳〵と動いてゐるのを感じたと思ふ間もなく、「どうしたんです、今頃？」と自分の傍に寢てゐた河路の聲が聞えた、そして河路も寢床から起き上つた様子だつた。自分はしかしよく〳〵眠かつたと見えて、何か部屋の中へ事が起つてゐるらしいと察しながら、はつきり目を醒ます氣になれなかつた。「もう二時半ぢやありませんか。何

にしても、朝になつて、夜が明けてからにしたらどうです?」と河路のいふ聲がつゞいた。三木田が今頃になつて歸るといつてゐるらしいな、と自分もぼんやり氣がついた。が、河路も結局根が盡きたと見えて、止める言葉をいはなくなつた、やがてのそく\とした足取で三木田らしい、大きな、いびつな身體の影が部屋を出て行つたのも、自分は微かに覺えてゐる。翌朝、起きて見ると、果して、三木田の寢床は空になつてゐた。丁度、隣に寢てゐた河路がこちらを向いて口を開いたので、「何だか、昨夜夜中に三木田君が歸つたやうな氣がしたが、さうだつたのか?」と自分は聞いた。「さうむ、」と河路は答へた。自分はこの時初めて氣がついて、「あゝ、ダ・ギンチのことで機嫌を惡くしたんだな」、といふと、「さうらしいんだ、」と河路は答へた。「君はすぐに寢てしまつたらしいが、三木田は到頭寢なかつたらしいよ。僕の隣に寢てたんだからね、始終もそく\動いたり、溜息をしたりするもんだから、僕まで寢られなくなつてね。しかし、あゝいふ男だから、あの僕たちのダ・ギンチ攻撃が氣になつて、氣になると、じつとしてはゐられなくなるんだね、惡いことをしたよ。」「それや惡かつたね、」と自分もいつた。「だけど、どう考へたつて、あの男とダ・ギンチ研究はをかしいよ。」「それやをかしい。」

　それにしても、かういふ自分たちの彼のダ・ギンチ研究に對する反對は、彼にとつての一所懸命の仕事であつたゞけに、ひどく彼の機嫌を損なつたらしかつた。他人から見たところは兎に角、彼にして見ると、それは彼がこれ迄の生涯のうちで、小學校に通つた年限よりも、或は家の商賣であるまとひの手傳をした期間よりも、何よりも最も長くつゞけた仕事といふことが出來た。殊に、小學校やまとひ職やは、彼の意志に反して、他から強ひられたものであるのに比へて、これは繪畫とか創作とかと同じく、彼が希望してかゝつたものである。それに、これ迄の彼がして來たことに、彼自身に反省して見ても、餘り浮氣で、自信がなさ過ぎたために、なる程こんな事では人が輕蔑するのも無理がないと思

はれないこともなかつた、それ位に見へて少し大袈裟にいふと、彼はダ・ヰンチの研究[illegible]に依つて初めて自己を見いだしたとさへ思へたかもしれなかつた。だが、又彼に自分の部屋で一人机に向つてゐる時とか、彼が更けて一人目を醒ました時とか、町を一人で的なく歩いてゐる時とか、さては、友達から彼の仕事を非難された時とかには、屢々その仕事にさへ自信を失ふことはあつたに違ひない。彼は幾度か止めようと思ふのである。だが、彼が熱中する友達の思惑に對してでも、それは止められなかつたし、又それを止めたら、外に何をすることが彼に殘されてゐるだらう?

彼は機嫌を惡くすると、三月も半年も、時とすると一年以上も、その相手の友達のところに近寄らないのが例であつた。いつかの自分や河路が、彼の生命であるダ・ヰンチの研究を非難した時の彼の不機嫌の時間は可成り長かつたやうに思ふ。その後初めて東京へ來て、自分の所へ來たのは、それから二年以上も後のことだつた。彼は機嫌がよかつた。自分も久しぶりで彼と會つたので嬉しかつた。彼を歡迎することは、彼と一緒に散歩することであつたので、自分は三日つゞけて、銀座とか、淺草とかを彼と一緒に歩いた。彼との話では、自分は遠慮して、なるべくダ・ヰンチの話を出さないやうにしてゐたが、いつとなく、彼の方からその方面の話をしかけるやうになつた。珍しく彼は自分に、今度大阪へ來たら是非一度寄つてくれなどといつた、その譯は、一年ほど前に祖父の死んだ後のやつと財産整理を濟まして、彼の手に多少金が入つたので、少しばかり珍しい本とか、版畫とかを集めたから、見せようといふのである。もつとも、これを聞きながら、こんなことをいつてゐるものゝ、いさ本當に彼の家に自分が現れたら、内に通す代りに、例に依つて默つて奥へ引込んで、やがて散歩にと洋服を着て出て來るだらうと自分は思つた。

「私はこの頃、珍しい人と交際してゐますよ、」とその時彼がいふには、或時西門の丸善で一人の西洋人と知り合ひにな

つた、名刺を交換すると、何とかゴッホといふ名刺なので、聞いて見るとヰンセント・ヴン・ゴッホの甥だといふのである。彼は神戸の或貿易商に雇はれてゐる者で、その日から三木田は次第に彼と親しくなつて、時々の日曜日などに奈良や京都に案内してやつた。商人ではあるが、流石に伯父の血を受けてゐると見えて、美術の鑑賞眼など相當に優れてゐるさうである。三木田は數度彼を訪問したさうだが、彼は伯父のゴッホの小品畫を二三點持つて來てゐる、少ないものだが中々いゝ畫で、中にも靜物を描いたものは素晴らしい出來だ、東京から旅費をつかつて、あれを見に來るだけでも決して失望しないだらう。更に三木田は附加へて、彼は旅先のことだから、それだけしか持て來なかつたが、國には相當に伯父の作を持つてゐるとのことである。彼も伯父の名聲が東洋のかういふ異國に持てはやされてゐるとは思ひも及ばなかつた、かうと知つてゐたなら、せめてもう十點位持つて來るのであつたが、と殘念がつてゐる。自分がそこでゴッホに就いて書かれてある日本の本を二三冊與へると、彼は非常に喜んで、もし自分が世話してくれるなら、日本伯父ゴッホの作品の展覽會をする爲に、國元から取寄せてもいゝといつてゐるといふのである。「どこかゴッホに似て、朴突な感じの、氣持のいゝ男ですよ、」と三木田はいつた。

自分はそれは是非見せてほしい、今すぐには何だが、來月か再來月あたり關西の方へ行く用事があるから、その時は屹度案内してほしいといふと、彼は喜んで連れて行かうといつた。自分は又ゴッホなどの展覽會がそんなに手輕に出來るのなら、是非盡力してやつたらどうかと勸めると、何とかして見ようと思つてゐると彼は答へた。自分は面白い話なので、知つてゐる人毎にこの話をふれて廻つた。丁度その前後に上京してゐた河路嘉十にもそのことを話すと、彼は既に誰か外の人から聞いてゐたらしかつたが、「どうもその話も怪しくてね、」といつた。「だつて、僕もさう思はないではなかつたが、今度の話は如何にも確らしくいふし、それに僕にも行つたら紹介するといつてる位だから、まさかと思ふ

んだかね」といふと、「うむ、しかしね、」と河路は[illegible]入れたかつた。ただ、[illegible]の
て、その男は現に三木田からそのゴッホの甥といふ人に紹介されたといふ話であつた。[illegible]、その[illegible]、自分もその男に
會つた時、その事をいふと、「僕はたしかに紹介されました、三木田君の話だから、一寸信じられないのは[illegible]たい
が、それだけは本當です、」とのことであつた。自分はしかし、その時三木田に約束したやうに、その來月にも、再來月
にも關西へ行く機會がなかつたのであるが、彼からの話を聞いてから三月ほど後に、大阪の彼から手紙があつて、いつ
か話したゴッホ氏は最近國元に不幸があつて、去る何月何日神戸出帆の何々丸で、急に歸國された、未知の皆さんに宜
しくとのことである、然し、來年の春には再び日本に來るとのことで、その時は伯父ゴッホの作品を出來るだけ集めて
持つて來ると約束して行つた、といふやうな通知があつた。そして、その終の方に、自分はしかし來年の春あたり、西
洋に漫遊したいつもりでゐると書いてあつた。

ゴッホの話は傍に置いて、三木田幹夫が洋行するなどと云ふことは、自分初め彼を知つてゐるものには、到底信じ
られなかつた。少し不機嫌になると、東京にゐても直に大阪に歸つてしまつたり、かと思ふと一日おいて突然又東京に
出て來たり、そんなに氣の變る男が、二ケ月も三ケ月も船に乘つてゐることはおろか、三日間も辛抱が出來ないだらう
と思はれた。河路嘉十などは、もし三木田が洋行するとして、神戸まで彼を送つて行つて、仮に彼の乘つた船が出帆す
るところを見屆けても、自分は彼が洋行するかどうか信じられない、何故といつて、その次に船が寄つた港から引返し
て來るかも知れないからといふのである。實際自分もさう思つた。河路が更にいふには、「矢張りゴッホは嘘なんだよ、
ゴッホの甥が來年の春に歸つて來るといふんだから、それを今から逃げるつもりかも知れないよ、それにしたつて、洋行
は屹度に止めになるね、」といつた「だけど又からも考へられるよ、」と自分はいつた「彼も例のダ・ヰンチでは苦勞し

ゐるからね、それをいつか見たいに非難されるものだから、變に[illegible]な男だから、愈々本物のグ。ポンチを見にゆくつもりになつたのかも知れないよ。彼は研究よりも何よりも、輕蔑されたくないといふ意識と、それからあれで名譽心といつたやうなものの可成り强い男らしいからね。だけど、洋行は嘘だよ。洋行は成立たないよ、」と河路はいつた。

だが、何事でも、先の見通しをつけて、その豫言の大抵はづれるとのない河路の言葉も、この時だけは全然間違つた。といふのは、翌年の春、三木田幹夫は歐洲行きの三等船客として乘り出したのである。愈々洋行するといふ一ケ月程前に東京へ來た時、自分は彼に會つた。「僕も十二三年前には洋行を企てたことがあつたんだがなア、」と自分は心から嘆息していつた。「金のある人は羨ましいな。神戸からマルセエイユまで、船賃だけでも千圓かゝるといふぢやないですか？」

「それや一等のことですよ。」と三木田がいつた。「私は三等でゆくつもりです。」自分は驚いて、「君はしかし船の旅行は初めてでせう。三等は辛いでせう。日本の汽車の三等なんかと違つて。君はお金持ちなんださうだから、一等に乘つたらいゝぢやないですか？」といふと、彼はゴホゝゝ、といふ例の笑ひ方で笑つて、「えゝ、しかし成るべく儉約して行つて來ようと思ひまして……」「儉約も儉約ですが、船ばかりは三等どころか、二等でも不便だといふぢやありませんか？」「さういふ話ですね。誰に聞いてもさういひますよ。」と三木田は同感してゐた。それにも拘らず彼は矢張り三等船客として出發したのださうである。彼はいろ〳〵人と違つた性質を持つてゐたが、けちと云ふ點でも、人並外れたところがあつた。それは大閤以來の千成屋の家風であるらしかつた。それにしても、彼は河路の恐れたやうに、上海からも、香港からも後戻りしないで、佛蘭西、伊太利、英吉利と一年半ばかり遍歷した末に、再びマルセエイユから三等船客として歸つて來た。自分に絹の半巾を一枚土産にくれた。

彼は元より美術の研究家であつたから、佛蘭西や、伊太利にも相當に足をとゞめてはゐたが、どういふ譯だつたか滯

在中の半分以上に英吉利にゐた、そして英吉利を足場にして、佛蘭西へも、獨乙へも、伊太利へも出かけて行つた。さういふ風であつたから、彼は一番英吉利人を　誰でもいふやうに彼等の紳士的なこと、親切なこと、常識的なこと、禮儀正しいこと、等を賞讃してゐた。だが、をかしいことには、彼の賞めるところの、英吉利人の美點といふものには、悉く彼自身の持つてゐない、或は彼自身がその反對のものを持つてゐると思はれるやうなそれであつた。次に彼は和蘭陀の風景を賞めた。そこでは彼の洋行の目的の一部分であつたところの、ゴッホの甥の家を訪問したといつた。彼が行つた時、彼の神戸の友達であつた甥は生憎留守だつたが、その人の叔母に當る人、そしてヰンセント・ヴン・ゴッホの妹に當る人に會つて來た。實に優しい、そして感じのいゝ素朴さを持つたおばあさんで、彼の來意を知ると大變喜んで、早速その家にあるゴッホの作品を見せてくれた、そしてゴッホの思出をいろ／＼話してくれたといふのである。和蘭陀は全くいゝ國だ、繪のやうな國だ、唯困つたのは、歐羅巴の外の國と違つて、あそこでは日本人が珍しいと見えて、町を歩いてゐると子供がついて來て惱まされた、中には「萬歳、萬歳、」といつてからかふものがあつた。萬歳といふ言葉はその外の國でも聞いたか、隨分有名になつた日本語だ、などと彼はいつた。

それが早いもので、彼が歸つて來てから最早足掛二年になるのである。彼とは、彼が洋行から歸つて來て一ケ月ほど後、一週間ばかり東京へ遊びに來た時、彼の訪問を受けて、その時自分は據んどころない用事があつたので、彼と一時間餘り會つて別れた切りだつた。自分の家に來てから、彼はまだ四五日東京にゐた筈で、自分も彼に日を改めてゆつくり來てくれ、洋行中の話も聞かしてほしいといつておいたし、彼も、ではもう一度お尋ねするといつて歸つたのだが、例の彼の氣まぐれからか、それとも久々で、而も折角洋行から歸つて來て尋ねてくれた彼を、用事のためにとはいひながら、多少粗末にしたやうに見えたのを、彼一流の敏感で氣を惡くした爲か、それ切り彼と會はなかつたのである。そ

れ以來、彼と自分とは始終斷け違つて、會ふ機會を持たなかつた、といふのは少しばかり自分の恥をいはなければ分らないのであるが、實をいふと、自分はこんな風に呑氣に人の話ばかりして來たが、身の定まらないことは自分も三木田と同じことであつた、否、三木田は兎に角、第三者がそんな風にいふだけで、彼自身には決して自分のやうに迷つてはゐなかつたかも知れない、それどころか、彼は彼自身の仕事のために洋行までして來たのである、それから思ふと、自分は洋行どころか、今から十四五年前に三木田を知つた頃の自分と、今日の自分とに、殆ど何の差をも認められないやうな境遇であつたのだ。自分はいつとなく文科大學を止めたことは先にいつたことであるが、大學を止めてからも、大學の規定の年限だけは、相變らずつゞけてゐるやうな顏をして、親類の保護者から月々の仕送りを受けてゐたが、やがてその期限も過ぎてしまつたので、すると、自分で自分の生活費だけは何かして得なければならなかつたので、お伽話を書いて、雜誌社に賣り込みに行つたり、或時は石版屋の仕事の手傳をしたり、新劇團の俳優の仲間に入つたり、その時その時の行き當りばつたりな仕事をしては暮してゐた。無論、さういふ風であつたから、或時は郊外にちよつとした家を借りて、婆やを置いて暮してゐたこともあるし、或時は下宿屋住居を半年もつゞけたこともあるし、もつと惡い時は友人の家を居候して廻つたこともあるし、いはゞ體のいゝ浮浪人のやうな生活をして來た、自分でいふのも何だが、自分にはお伽話を書いても、石版屋の仕事をしても、さては俳優の眞似をしても、悉く或程度まで器用にやつてのけることが出來た、しかし、これは自分の長所ではなくて、短所であつた、自分の致命的な傷であつた。どんな天才にだつて、根氣といふものが必ずなければならない、まして天才といふ程の才分がなくて、同時に根氣といふものがなければ藝術を作ることは出來ない、自分はしば〱あんな凡庸な才分の藝術家が、どうして世に現れてゐるのだらうと疑ふことがある、確に彼よりも自分の方が天分を與へられてゐると信ずるやうな場合にしば〱出遇ふ、その自分の考が過つてゐ

ないとしても、こんなに河路は既に一家をなしてゐるのに、自分は今だに一家をなすことが出來ないといふことは明瞭である、即ち自分は根氣といふものを持たないからである。で、自分はこの二十年來に翻譯をして、さうして生計を立てゝゐるのである、それ等の翻譯にしても、自分は可成り上等のものだと信じてゐる、今日町に目まぐるしい程、有名の人の名に依つて出版されてゐる翻譯書のどれにも、自分の翻譯書は劣つてゐないことだけは信じられる、だが、自分は今だに自分の名を現した翻譯を著したことがない、自分には自分の名で出版してくれる翻譯の仕事を探すことさへ億劫でならぬのである、それよりも、手取り早い、即座に金になる、有名な文士（それは自分の友人であるか）の名で出す翻譯をしてゐる方が氣樂だからである。

だが、自分のやうなものでも、時として何か仕事らしい仕事をしようと、青年のやうに立上ることがないではない。自分だつてまだ四十歳になるには後五年ある。もつともそんなことはこれ迄にも一年に一度や二度はあつた。例へば文藝の同人雜誌を出すとか、新劇團を起すとか、美術新聞を創刊するとかいふ仕事を誰かと共に思ひついて、一週間とか、半月とか、熱心に駈け廻ることがあるのだが、結局中途で厭になつて投げ出してしまふのが常だつた。が、或時、或仕事のために、久しぶりで大阪に出かけて行つたのである。どんな仕事であるか、それは例に依つて立ち消えになつてしまつたものだから、こゝで白狀することは許してもらいたい。その時、自分は一ケ月ばかり大阪に滯在してゐた。自分が大阪に着いた前の日だつたかに、三木田が東京へ出かけて行つたといふことを、その後河路に會つた時聞いた。河路はこの二三年前からやうやく芽が吹き出して、めき〳〵畫家として賣り出してゐた。大事取の彼はそれでも出來るだけ自重してゐて、輕はづみに東京に出て來なかつた。が、もう大丈夫と思つたのであらう、この秋時分には愈々一家を擧げて東京に來るといふことであつた。久しぶりで河路と三木田の話が出た時、「君は三木田と東京でちつとも會は

ないかね、」と河路がいつた「三木田は此頃又例の病氣がひどくなつてゐるらしいんだよ、先月なんかも東京へ三度も行つたさうだ、東京へ行つて、何をしてゐるかといふと、片つ端から原稿を持ち廻つてゐるさうだ、先月の××雑誌に出たのなどその一つなんだ、その一つなんていつても、あの雑誌に出たのが初めてなんだが、君、讀まなかつたかい?」「知らなかつたね、面白いかい?」と自分は多少興味を動かされて聞いた。「面白いには面白いんだが、その面白いのがいけないんだよ、」と河路がいふには、「例のゴッホの甥を訪問するといふ話なんだ、甥ぢやなかつた、ゴッホの妹を尋ねるんだ。」「その話なら、僕、彼から彼が洋行から歸つて來て間もなく會つた時、聞いたことがあるよ、」と自分がいふと、「あれは君、どうも嘘らしいね、」「さうかね、どうして?」「その××雑誌の文章などを讀んで見ると、和蘭陀の風景のいゝことばかりが例の美文で長々と書いてあつて、肝腎のゴッホの妹に會ふところは五行か六行位しかないんだ、その癖、和蘭陀あたりでは日本人がまだ珍しいと見えて、子供が後からついて來て困つたとか、中で「萬歳」といつた子供があつたなんて、さういふ事は詳しく書いてあるんだよ。が、どうもゴッホの妹を訪問したことは嘘らしいんだ。」「しかし、和蘭に行つたのは本當らしいね、」「それは本當らしいんだ。それどころか、僕の考ぢやあ、そのゴッホの妹の住んでゐる家の前まで行つたかも知れないんだよ、あの男は、あれで變に恥かしがりで、極り惡がる性質だからね、訪問しようかどうしようかと思つて、その家の前を二度も三度もうろ〳〵してゐて、結局訪問しないで歸つて來たのかも知れないんだ、」「それなら、その事をそのまゝ書いた方が面白いぢやないか、」と自分がいふと、「さうだよ、」と河路は言葉に力をこめていつた。だが、それが書ける位なら、今のあの男の面白さはなくなつてゐるかも知れないよ。」

その時の、自分の大阪滯在中のことなのであるが、自分は先にいつた自分がその爲に出かけて行つた新しい仕事の計畫がうまくはかどらなくて、この時は自分の根氣のせゐではなく、その仕事の爲に金を出してくれる筈だつた者に故障が

思つたのだ。自分は今までこそ自分のやうな[illegible]い仕事に逢へると思つて、いつになく[illegible]に、自分では[illegible]望は出だしかつた。それと共に、その仕事が進行してゐたなら、そんな事に関心を持てなかつた今迄の生活でも何時か必ず[illegible]い状態になつて來た。といつて、さて東京へ歸つたところが、相變らず又あの退屈な[illegible]でもする外はないと思ふと、東京へ歸る氣にもならなかつた。すると、或晩、中學時代の友達で、藥種屋をしてゐる男と途で遇つて、その男に連れられてお茶屋に行つたことがある。藥などといふものは、多分外國から輸入する藥のことであらうが、相場のやうなものと見えて、時々ひどく値段に變動があるものらしいのである。彼はその時其藥で大分儲けたらしいのだ。彼はその嬉しさの餘りか、自分をつかまへて離さなかつた。その晩は二時頃まで酒を飲んで、翌日起きたのは正午前だつた。彼は自分に、どうせ旅の空だから、一日や二日附き合つてくれてもいゝだらうといつて、四五人の藝者と一緒に文樂座へ自分を連れて行つて、それから、寶塚へ行かうといひ出した。自分はどうせ用事のない身體だつたから、彼のいふまゝになつてゐた。彼は仕事が成功して躍つてゐるんだし、自分は仕事が不成功したので矢張り躍つてゐるやうなものであつた。寶塚で二晩ばかり泊つて、やつと大阪に歸つて來て、元のお茶屋でもう一晩泊つて、或朝起きると、彼の家から朝早く電話が掛つて來たとかで、彼はゐなかつた。だから自分はまるで狐にでも憑かれたやうな状態で、寢床の上に暫く坐つてゐた。自分の傍にお文といふ女中が坐つてゐて、「何をぼんやりして入らしやるの？」と大阪言葉でいつて、自分の肩を叩いた。

ところが自分は中學時代の友達と三四日ばかりさういふ出鱈目な遊びをしてゐるうちに　このお文といふ女中がひどく好きになつてしまつたのだ。一緒に遊んだ中には、三四人の藝者がゐた譯であるか、自分はそれ等のどの藝者にも無關心であつた。そして彼女等の世話方になつて、始終行動を共にしてゐた女中にひき附けられたのであつた。お文は二十八で

で、まづ美人といはれる方だつた。だが、自分がお文に引かれたのは、何だらう、彼女が男のやうに陽氣に酒を飲むためか、それとも彼女が自分に、わたしは商人も勤人も、そんな人は皆嫌ひ、あなたのやうな商賣の方の氣質が好きだなどといつた爲か、それとも自分がそんな旅の身で、而も仕事の的が外れてぼんやりしてゐた時、向うでも自分を蟲が好くとでもいふのか、その三四日の間、特別に自分に深切にしてくれたのが嬉しかつたのか、自分は知らない、兎に角すつかり彼女にまゐつてしまつたのだ。だから、或朝、突然友達に歸られたので、ぼんやりして寢床の上に坐つてゐたとはいふものゝ、それは彼に取殘されたことを悲んだ譯ではないのである、自分は自分の傍に坐つてゐるお文のことを考へて、これからどうしたらいゝだらう、と思案に暮れたためであつた。が、その時は兎に角一先づ宿に歸つた。

が、若しかすると、自分のやうな性分であるから、それ切り機會がなかつたら、それ切りになつたかも知れない、ところが、その日の午後、お文から電話が掛つて來て、間もなく自分の宿に尋ねて來た。彼女は自分が友達の藥種屋などと違つて、不如意な境遇にあることも知つてゐた、それは却つて自分の氣持を樂にした、それに彼女の二十八歳の分別も自分にとつて都合がよかつた、彼女は出來るだけ暇をこしらへて遊びに來るといつた、又自分の方から彼女に會ひに行く手段についてもいろ／＼敎へて來れた、自分もこれ迄自分の戀愛の相手として、何人かの女性を知つてゐるが、境遇といひ、年配といひ、才覺といひ、彼女のやうな女性は初めてであつた。で、自分は益々彼女が好きになる一方だつた、東京に歸ることも、宿屋の勘定が溜まることも、何も彼も忘れ、又忘れようとした。

だが、そんな生活を二週間とつゞけることは難かしかつた、けれども、自分は二週間も三週間も、或は四週間もそれをつゞけた。大阪にゐる友達といふ友達を片端から尋ねて、金を借りたり、でなければ誘ひ出したりして、お文に會ふことばかりに心をくだいた。會へない時は電話をかけた、それでも、どうしても會ひたい時は、彼女のお茶屋の近くに

あるカフエーに出かけて行つて、そこへ彼女を呼んで出した。だから、仮令最初の自分一人は出かけなかつたとしても、いつかは[illegible]を知る位になつた。彼女には妙な魅力があつた、その時既に、自分の友達で、彼女を見たものは誰にでも、彼女が好きになつた、自分のやうに彼女に戀しない迄も、少なくとも彼女に興味を持つた。それがどういふ魅力であつたか、自分にはいへないが、その一つとして、彼女は自分たちのやうな、謂はゞ藝術家氣質といふものを理解し、それに興味を持つてゐる點を擧げることが出來るだらう、殊に大阪といつた風な土地柄のことであるから、商賣になると、すぐに金の話をしたり、酒が始まると判で捺したやうな駄洒落をいつたりする人たちを見馴れてゐる目には、自分たちのやうな者が珍しく映つたに違ひない、自分たちの中での最も常識家である河路君にしても、世間一般の人と比べると矢張り變つてゐた、彼女にして見るとさういふ變り種に興味を持つたのだらうし、自分たちにしても亦、さういふ標準で見る女としては、彼女の變り方に氣を引かれたに違ひないのだ。だが、それはずつと後の話であるが、自分が彼女に對する感想が湧きたのは、彼女自身そんなに變り種の人間を好き、彼女自身幾分か變つてゐることが現れながら、何は彼女ほど常識の發達した女は珍しいといへる點だつた、一口にいふと、餘程彼女は頭のいゝ女には違ひなかつたのである。現に彼女は男嫌ひを看板にしてゐたし、彼女の周圍の人達もさう思つてゐたが、或時自分は彼女と明け方まで酒を飲んだことがあつた、そして互に醉つたかのやうに裝つて、普通の男女の中になつてしまつた。だが、當時は自分はそれでも益々彼女が好きになつた。翌日になると、けろりとして、まるで昨夜のことは夢の中での出來事であつたといふやうな顔をして、昨日と、一昨日と同じやうに、自分にも亦他人にも振舞つて見せてゐる彼女を、自分は益々憎いやうに好きになつた。

そのうちに、東京の方の友達や先輩などからも、一日毎に喧しく手紙をよこして、仕事がうまく行かなかつたらしいが、それは仕様がないとして、思ひ切つて早く歸つて來たらどうかとか、——一緒に仕事中に、傍の人に迷惑をかけない

で、一日も早く引上げて來たらどうかとか、そんな事をしてゐるうちに歸りそこなつたら、乞食になる外はないとか、いろいろと注告して來た。一方又、大阪にゐる河路嘉十なども心配して、それと共に、自分が一日でも長くゐたら、それだけ彼等に迷惑をかけるだらうことをも氣づかつて、到頭數人の友達が集まつて、自分の溜まつてゐる宿賃と、東京へ歸る汽車賃とをこしらへてくれることになつた ――さつとさういふ恥かしい境遇に自分は陥ちてゐたのであつた。

「ぢやあね、これでさようならとしよう、」と幾度自分はお文にいつたか知れなかつた。お文もいつた、「ぢやあね、今度は一度お歸りなさい。そのうちに誰か藝者衆で東京へ行く人があるに違ひない、その時はこの土地の規則として女中が一人ついて行くことになつてゐますから、わたしがついて行きます。そしてお目にかゝりませう、ね ね。」

そして、愈々明日の晩東京に立つと定めた日の夕方のことであつた、自分はお文と別れて二十歳の青年のやうな悲みを抱きながら、道頓堀を歩いてゐた。二十歳の頃、自分はそんな風にして、この同じ町を歩いたことを思ひ出した、しかし、あの時は同じ悲みの中にも何を考へても漠然とした希望があつた、が、今はすべてのものに絶望があるだけだつた。丁度通りかゝつたカフェーの中に入つた。それは十何年前からの古馴染の家だつた、古馴染といつても、それは多分建物だけで、主人も 勘定係も女給たちも、悉く知らぬ顔ばかりだつた、そこへは、今度大阪に來て初めて入る譯ではなかつたが、その時は何故か昔のことが思ひ出されて、卓子に坐つてからでも、ぢろぢろと周圍を見廻したいやうな氣持だつた。さうして自分は一杯の珈琲を命じて、長い間ぼんやりと卓子に片肘を突いてゐた。同じ道頓堀の中でも、この家だけは昔と餘り變つてゐないなと思つた、丁度さういふ時間であつたからでもあらうが、客の數が割合に少たかつた、が、客の種は昔と違つて、隨分通俗になつたものだと思はれた、無理もないので、十何年前にこのカフェーが初めて出來た時分には、一般の人たちにはどういふ商賣の家だか見當がつかなかつたらしく、辛うじて學生とか、畫

家とさ、自分たちのやうなものたちにお客であつた、多分その頃の常連であつた者たちは、今にそれほど遠慮なくもう一になつて、この家の前を素通りするだらう。――が、自分はそんな感想には、實はそんなに耽つてゐた譯ではなかつた。自分は別れて來たお文のことばかり考へてゐたのだ。愈々明日この町を立つとしても、もう餘り度々さよならをすることをかこつけに會ひに行つたから、何としてもお文の顔を見る譯には行かないだらう、自分の停車場を出發する時間には、お文は商賣の方の都合で送りには行かれないだらうといつてゐたことを思ひ出した。そこで、自分は青年のやうに胸が迫つて來て、泣けさうにさへなつて來た。

その時、ふと傍を見ると、電話室があつたので、夢中でその中に入つて、彼女に電話をかけて見た。彼女が電話口に出て來る前に、さて、彼女に何をいふつもりだらうと思ひ出すと、自分は何もいふことがないのでひどく狼狽を感じて、このまゝ電話を切つてしまはうかと思つてゐると、「もし〳〵」と聞き馴れた、今一時間前にも聞いた聲が聞えた。「……まあ、又あなた、どうしたんですの?」と彼女は叫んだ。「ね、一度お歸りなさい。それはあなたの氣持もよく分ります、分りますけれど、わたしの心持も察して下さい。ね、皆さんも大變心配して入らしやるんですから……しかし、後のことは心配しないで、わたしがなんとかしますから、兎に角、ね、一度東京へお歸りなさい、ね?」「あゝゝ、」「明日、わたし何とか都合して停車場まで行きますから――しかし、矢張り行かない方がいゝか知ら?」「いや、行きます、行きます、だからね、ね。」「……」「いや、わたしだつて泣きたくなるわ、ね、だから、さよなら、ね、さよなら。」――そして、自分は受話器を耳から外したまゝ、長い間薄暗い電話室の中でぼんやりと突立つてゐた。さうだ、隨分長い間突立つてゐた。

が、やがて思切つて電話室を出て、元の卓子に歸つて來ると、その隣の卓子に三木田幹夫が一人で淋しさうに掛け

すゝつてゐるのに遭つた。「やあ！」といひながら、自分は突然時が十何年前に後戻りしたのかと疑つた。三木田が「やあ、」と元氣のいゝ聲で應じた。が、自分の元氣のよかつたのは初めのうちだけのことで、次第に屈托さうな樣子が見えて來たのか、「どうしたんです、ひどく元氣がないぢやありませんか？」と三木田が聞いた。「いや、」と自分は、何氣なささうに答へた。が、しばらくして、今度は自分の方から「しかし、君も何だか元氣がなさうではありませんか？」と聞くと、「えゝ僕、昨日東京から歸つて來たんです、」と彼は答へた。「さう／＼、東京に行つたんださうですね、君とはずつと驅け違つてゐて隨分會ひませんでしたね、東京はどうです、面白いことがありましたか？」と聞くと、彼はしばらく無言でゐたが、ほつと溜息をして、「僕は東京で戀をしました」といつた。「ほお、戀を？」と自分は叫んだ、心の中で、こゝにも戀をしてゐるぞ、といふたのもしさを覺えたからだ。「どういふ人です、その相手の人は？」と尋ねると、「その、それは丸ビルの中にゐる女なんですが……」と彼は持前の重苦しい調子で始めた。「私の知つてゐるもので、あそこに建築の事務所を持つてゐる人があるのです。そこの、つまり、いはゞ、事務員なんですがね、素的な美人なんです。……」それで、彼は東京にゐる間中、毎日友人を訪問したといふのである。だが、一間のうちにその友人の椅子もあり、友人に雇はれてゐる二三人の人の椅子もあり、その女の椅子もあるといつた譯で、どうしても二人切りで話をする機會がない、しかし、相手は確に彼に好意を持つてゐるらしいといふのである。「それで……？」と自分が聞くと、「いや、その、そのうちに一寸こちらに用事が出來たので歸つて來たんですが……」「ぢや、それ切りなんですか？」「……えゝ、その……さうなんです、」と三木田は眞面目な顔で答へた。

「僕も今戀して居るのです、」と自分はそこで急に元氣づいて、「僕のは直そこにゐる人です、お茶屋の女中なんですがね、しかし、藝者にだつて一寸あの位の女はゐないといふ位の評判の女なんです、」と自分は始めた。三木田の戀愛の

きえた、自分のほかに又ないものではないぞといふ氣持と、一つ彼女をこのはんぎ[illegible]、[illegible]きた
この男をだしにして、もう一度彼女に會へるぞと思つて、自分は急に元氣づいたのだつた。そこで、自分は調子に乘つて、お文とどうして知つたかといふことから、彼女がどういふ女であるかといふことなぞ、早く自分と彼女とのこの日迄の交渉を彼に話した。すると、彼は案の上乘氣になつて、「おやあ、その人はゐるんですね、いつでも會へるんですね、僕に紹介して下さい、僕にも會して下さい、」と三木田は叫んだ

無論、自分は即座に承諾した。彼女に三木田を紹介することよりも、何かの口實で、彼女に會へるといふことが自分には何よりの好都合だつた。自分は三木田と一緒に、彼女の家の二三軒隣にある、これ迄にも二三度行つたことのあるカフエーに出かけて行つた。自分も三木田もひどく上機嫌になつた。電話でお文を呼び出すと、「まあ、仕様がない人ね、ほんたうに。……ええぢやあ、行きますわ、」といつて、間もなく彼女は姿を現した。彼女を見ると、三木田は自分が豫想してゐたよりももつと喜んだ、無論、彼女も三木田をそらさずに應待した。それに、彼は間違ひなく彼女の好みの變り種に違ひなかつたから、彼女の興味をも引いたらしかつた。女で、彼のやうな男に興味を見出すところが、彼女が變り者の證據でもあり、又自分の氣を引かれる所以でもあるのだ。三木田にしても曾て女性からそんな風に[illegible]れた經驗は初めてのことに違ひないので、彼の上機嫌は益々頂點に達した。「噂で始終うかゞつてきましたけど、本當に、……いふと惡いけど、どこか汚ならしいやうでゐて、よく見るとハイカラだわね、」などと彼女は三木田にいつた。「さう、いゝわね、あなたの道樂は歩くこと、散歩すること、……あ、さう、散歩でなくて漫歩……それで、この間うちは歐羅巴を漫歩してらしつたといふ譯？」などと彼女はいつた。彼女のやうな職業の者としては稀に、どういふ出の女であるのか、彼女は可成の教育を受けて居るものらしかつた。三木田は次第に調子に乘つて、「日本にはさういふ者は

珍しいが、外國にはあるんですよ、現に倫敦では、私は妙な人に會つたことがありますよ、」などと彼は始めた。「倫敦にリゼント公園といふ有名な公園がありますかね、殊にそこにある動物園が素的なものなんです、私はその動物園が氣に入つてね、三日ほどつゞけて毎日出かけて行つたことがあります。もつともそのリゼント公園の近くは公園ばかりでね、セント・ゼームス公園とか、それから倫敦一の公園だといふハイド・パークとか、ケンシントン・ガーデンとか、みんなその近くにあるんです。ナショナル・ギヤラリイといふ美術館もその近くなんです、ダ・ギンチとか、ラフアエルとかいつたクラシツクスは大抵こゝにあるもんですからね、そこへも一週間位通ひましたよ。ところが、或日、そのリゼント公園の動物園を出て來ると、變な、眞赤な帽子を被つて、妙な形の洋服を着た、瘠せた、ひよろひよろした背の高い男が、ちつとも脇見をしないで、といつて別に急いだ恰好でもなく、歩いて行くんです。見ると、それは先にいつたナショナル・ギヤラリイへ私が通つてゐた時分にも、二三度そこの表で會つた人なんですが、その時も矢張り同じそんな變な裝をしてゐましたから、直に思ひ出したんです。隨分變な人があるもんだなと思ひましたがね、その日はそのきゝで見送つたんですが、その翌日矢張り同じ時刻に、私が動物園のところを歩いてゐると、昨日と同じ恰好をした、同じ人が通るぢやありませんか……」

「その人なアに？　矢張りあなた見たいな散歩者なの？」とお文はもう先程から飲んでゐるウホスキイが廻つて來たらしく、殊に三木田の話振は妙にゆつくりした、廻りくどい言ひ方なので、多少じれつたさうに口を挾んだ。

「ゴホ、、、、」とそこで三木田は持前の笑ひ方で笑つて、「さうなんですよ。後で分つたんですがね、その人は何でもさうして十五年とか二十年とかの間、一日も缺かさず同じ時間に、トラフアアガル・スクエヤといつて、ネルソンの銅像の立つてゐるところですがね、そこへ現れて、そこからナショナル・ギヤラリイの前に出て、又一度後戻りして、セント

ゼームス公園を通り抜けて、ハイド・パークの方に、公園の裏の道を通つて、[illegible]ト公園の中を通つて、ピカデリイ・サーカスといふ、つまり道の辻のやうなところですよ、そこの入口のところで消え[illegible]すんださうです。それが毎日定つてゐるんですよ、どういふ身分の人かといふと、退職の海軍大佐だとかいふんですがね。背が高くて、痩せてるもんだから、町の人はいつの間にかその人にWandering Candle（さ迷へる蠟燭）といふ綽名をつけたんださうです。外國人はハイカラですね、つまり『さ迷へる』といふのは散歩の一種なんでせう、殊に蠟燭がいゝぢやありませんか、蠟燭が……！」

それを聞いてゐるうちに、自分は「おや？」と思つた。しかし中々思ひ出せなかつたが、到頭思ひ出したのは、十何年か前に自分が中之島の圖書館で讀んだ、例の"London Life"の中の文章のことである「おや、それにしても、三木田も外國に行つただけあつて、あの位の英語の文章ぐらゐは讀めるやうになつたのかな？」と思つた。しかし、あれを讀んでこんな話をしてゐるのか、それとも本當にその『さ迷へる蠟燭』を倫敦で見たのか……もしかすると、倫敦へ行つたといふのも嘘ではないかな、といふやうな氣もして來た、さうなると、洋行したといふことも、（矢張り河路嘉十の言葉が當つて、）嘘ではないかとさへ思はれて來た。

「まあ、面白いわね、」といふお文の聲で、自分はふと顏を上げた。いつの間にか外は日が暮れてゐた。彼女もそれに氣がついたらしく、「あゝ日が暮れた、これはいけない、家から呼びに來たらうるさいから、ね、三木田さんを送つて行つて上げませう、」と自分に云つて、自動車を命じた。

自分の宿へ行く中途で、一町ばかり寄り道すると、三木田を送ることが出來るのであつた。で、三人は、三人とも可成酩酊した氣分で、自動車に乘り込んだ。自動車は動き出した。「實に愉快だつた、今夜は實に愉快だつた、」と三木田は

いひつゞけた。「あなたはお文さんと始終接吻するといふ話をしましたね、どういふ風にして接吻しますかね。接吻はいいだらうな、私も接吻したいな」と三木田は自動車に搖られて次第に醉ひが發したものか、だん〳〵雄辯になつていつた。「お文さん、あなたはあんまり接吻されたので、その跡がみんな銅貨ほどのあざになつて、二日も三日も消えなかつたさうですね、聞きましたよ、聞きましたよ。……い丶な、い丶な。僕は今夜ずつとこの自動車に乘つて夜明しをしたいな。」

そのうちに、自動車は彼が下りるところに來てしまつた。「さあ　三木田さん、漫步者さん、では、さよなら　又ね、」とお文がいつた。すると、三木田は「いや、僕はもう少し乘つてゐます　僕が送りませう、」「そんな意地をいはないで、ね、三木田さん、」とお文はいつた。「あなたとは又いつでも會へるでせう　しかしわたしたちは」と彼女は自分の身體を三木田の前で半分抱くやうにして見せて、「わたしたちは今日切りで當分別れるんでせう、ね、だから、氣をきかして下さいね、」「いや、……困つたなア、僕は別れたくないな、」と三木田はいひつゞけた。「運轉手さん、止めて下さい　止めて下さい、」とそこでお文は叫んだ。三木田はだん〳〵悄然とした顏附になつて、いふ言葉も不明瞭になつて來たが、しかし口の中ではやつぱり不服をとなへてゐるらしかつた。自分は初から何となく彼が可哀さうになつて　幾度彼を止めてやらうかと思つたか知れなかつたが、さうすると、お文と二人で話をすることが出來ないと氣がついて　我慢して默つてゐた。が、到頭自分は考へて

「ちやあ、三木田君、失敬しよう、」といひながら、いきなり自分はお文の首を正面から兩手で抱へて　顏にされては困ると思つたのだ、彼女の首筋のところを三木田の前に突き出しながら、「さあ　三木田君、接吻してやつてくれ給へ！」と叫んだ。

「あゝ、」と叫んで、三木田はいきなりお文の首筋にしがみつくやうに接吻した。そして頭を上げて、よろ／＼と自動車から下りた。そこで、自分の腕から解放されたお文は、彼の下りた後の扉をぴしやりと閉めた。「行つて下さい、」と彼女は運轉手に向つて叫んだ。

「さよなら、」と自分は車の中から三木田に向つて帽子を振つた。

「さよなら、漫歩者さん、」と彼女も車の窓に手をかけていつた。

自動車が動き出したので、彼の方で答へたか、答へなかつたか、聞えなかつた。車の後の窓から、自分はお文と二人で振返つて見ると　よろ／＼した足取で、三木田幹夫は町の薄暗い街燈の下を　背中を見せて蹌踉として歩いて行くところだつた。

「あの人が　あの人こそさ迷へる蝋燭ね、」とその時お文がいつた。

だが讀者諸君よ、三木田幹夫とは、實はこの話をしてゐる自分の名だといつたらどうであらう？



二重生活者の手帳

廣津和郞

『もしもし、また明日銀行の交換があるのですがね、二百七十八圓なのです』

『二百七十八圓……』

電話口に立つた小說家の小島は、機械的に、鸚鵡返しに、相手の言葉を繰返した。相手といふのは、小島が代表社員になつてゐるA出版合名會社の會計のNである。

『それで非常に困つてしまつてゐるのです。どうしても遣繰りがつかないものですから、仕方がなしにお耳に入れるのですが。――振替の方でどうかなると思つてゐたのですが、今日は豫想の三分の一も拂込がないのです。……ですから約二百圓ほど御都合願ひたいのですが』

『二百圓……』

小島は再び鸚鵡返しに相手の言葉を繰返した。明日までに二百圓、そいつは弱つた

な、と彼は頭の中で考へた。この四五ケ月と云ふものは、三日置きに一度、四日置きに一度といふ風に、殆んど隔日に追はれてゐる。それで小島は盡せるだけの手段をもう盡し切つてしまつてゐた。その揚句、彼は今度は自分の書く小説の原稿料で、その不足を補つて行くより仕方がなくなつて、一體寡作の彼が、無暗矢鱈に書き出したが、併し何しろ小説といふものは、四百字詰の原稿用紙に、一字一字文字を書いて行つて、そしてだんだんに成立つて行くものだから——それも飜譯と違つて、空な事を書いてゐるんではなく、腦をしぼり、心を痛め、骨を減らしつつ書いて行くものなんだから、實際考へて見ると、やり切れないものだつた。ところが、小説の原稿料などといふものは、獨身者が氣樂に暮すには丁度好い加減だが、小さな出版社でも、一つの商賣となると、その商賣の手違から生じた穴を埋めるには、ほんたうに原稿料なんて驚くばかりに尠い貧弱なものだつた。それでも小島は一生懸命に書いては銀行の交換を間に合はし、又一生懸命に書いては、その次の交換を間に合はして、兎に角今日までやつて來た。

そして一昨日もやつぱり交換を間に合はせるのに、その前の晩から徹夜して、一篇の小説を書き上げたばかりだつた。それが間一日を置いて、明日又二百圓の交換……實際、こいつはやり切れないと彼は考へた。交換は間を二日置いたが、併し小説を書く彼の手の方は、昨日一日休んだだけの話だ。明日の交換となると、今から又直ぐに書き始めて、明日の朝まで徹夜しなければならない……

彼は一寸考へ込んだ。

「如何でせう？」とNは電線の向方側で、彼の沈黙に不安になつたらしく、と同時に、彼に對して腹の底から氣の毒にもなつたらしく、遠慮勝に、彼の答を促した。「今月だけです。何しろ二ケ月の間本が出なかつたのですから、それでこんな風に詰つてゐるんですが、來月は少し樂になる豫定なんです。——それに銀行も今まで不渡りを出さずに凌ぎ

て來たもんですから、どうかして今度も間に合はさなければならないと思ひまして……』

『よし、間に合はせよう』

小島はきつぱり云ひ切つた。たに、一生懸命になつて小說を書かう。さうするより外に方法がない。――そんなことを腹の中で思ひながら。

そして勢込んで、受話器をかけると、彼は自分の部屋に戾つて來て、机の前にどつかと腰を据ゑたが、扨て何を書いたらいいだらう、と思ふと、何も頭の中になかつた。前にも云つた通り、一體寡作家である彼は、小說家となつて、文壇に乘り出してから、もう彼是八年ほどになるが、その間に彼の書いたものは、紙數にすればいくらでもなかつた。一年に三百枚も書けば、彼としては非常に多い方だつた。年によると百枚一寸ぐらゐしか書いてゐないかも知れない。――それが此四五ケ月と云ふもの、彼は一ケ月に平均百何十枚も書いてゐるのである。いや、此月などは彼は既に三つも小說を書きたげてゐる。そして未だ月は二十日にもなつてゐないのだつた。それだから、彼が頭の中に生れて來るものを片つ端から書いてしまつて、そしてもうすつかり何も材料がなくなつてしまつたやうな氣がしてゐるのは、無理がないと云へないこともなかつた。

『それにしても、一體俺がかうして一生懸命に働いてゐるのも、もとはと云へば、一人の男の放蕩費の穴埋めに過ぎないのだ！』と彼はいつも考へる事を又考へた。

併し一人の小說家が、こんな風にして、馴れない出版に手を出して、小說の原稿料で、商賣の方の穴を埋めてゐるといふことも、書き方によつては、小說にならない事もないな、それを一つ書いてやらうかな、そんな風な考がチラと浮んで來たので、彼は今までかうなつて來たその商賣の方のいきさつを、心の中で按排よく並べて見ようと試みた。

ここに一人の小説家があつて、その友人に一人の出版業者があつた。この出版業者はもともと出版業者ではなくて、大體は文學が志望なんだが、その方が思はしく行かないので、出版をやり始めたわけなんだが、さうしてゐる中に失敗して、非常に窮境に陷つてゐた。その出版業者の店に、その出版業者を助けてゐる一人の男があつた。——かう考へて行くとなかなかややこしいが。——その男が如何にも甲斐々々しく働いてゐるので、友人の出版業者をよく訪ねて行つた小説家が、その男に大變同情を寄せた。同情を寄せたらその男が、今度はその小説家のところにぐんぐんと喰ひ込んで來た。そしてたうとう小説家をいろいろ丸め込んで、別な一つの出版社を建てて貰つたわけなのである。そして自分が支配人見たやうな位置になつて、その出版社の全權を握ることに成功したのである。

大體實社會のことに暢氣な小説家は、すつかりその男にまかせきりで、自身は氣の向いた時だけ、その店に出て行くといふ風にしてゐた。——さうして或豫約出版をやつたが、三ケ月ばかりする中に、その委せきりの男のために、店の金をすつかり使ひ込まれてしまつた。……その男はなかなか色男で、放蕩兒で、世の中によくある奴だが、最初は少しばかりの金をちよろまかしたのが始まりで、その埋合せが出來なくなつたものだから、やけになると同時に、増長もして來て、たうとう全部の金を費ひ果してしまつたのである。そこにその男に取つて都合よくも、去年の例の九月一日の大地震がやつて來た。そのどさくさ紛れに、毒を喰へば皿までと云ふ氣になつたものか、店をまで人手に渡してしまつて、たうとう何處ともなく姿を消してしまつた。

そこで小説家は、何しろ豫約出版なので、著者や世の中に對して責任があるものだから、一文なしにされてしまつた店を、丸の内の或ビルデイングに移して、今度は自分でその店を經營して、小説を書いては金の不足を補ひ、小説を書いては金の不足を補ひながら、その豫約出版を續けてゐる。………まあ一口に云へば、こんな筋である。だが、こんな

ことが果して小説になるだらうか？

若し小説になつたとしたところで、自然主義的の事實羅列の單なる記錄になるだけの話だといふ氣がする。

『どうもそんなことを書いたつて、仕方がないからな』と小島は考へた。一體小島と云ふ人間は――つまりその小說家と云ふのは小島のことなのだが――、思想的にはかなり厭世的な事などを云ひ、ほんたうに厭世的な事を考へてもゐるらしいが、實生活的には、隨分飛び離れた樂天的な考へ方をしてゐる人間らしく思はれる。その證據には、店をまかせて置いた男に使ひ込まれた金と、直接地震で受けた損害とを合はせると、二萬五千圓以上の損失を受けてゐる事になるのだが、どうもそれが一向彼の身に染みて考へられては來ない

『何しろ、やつて行くより仕方がない。どんなことをしてでもやつて行くより仕方がない』と唯こんなことをのみ考へて、一文なしから、どしどし仕事を復活させて、そして今まで筆不精だつた小說を、無暗矢鱈に書き始めたわけなんだが、彼は弱つたやうな顏を滅多に人に見せた事がない。負惜みが強いのか、大體恐れと云ふものを知らないのか、それは小島自身が考へて見てもよくは解らなかつた。『兎に角、俺は腹の底からの暢氣ものなんだな』と小島は自分で自分のさういふ氣質を、頰笑んでゐた。

『今此處に四五千圓の金があればなあ。それを四五萬圓に使つて見せるがなあ』と小島はよく人にそんな事を云ふ。彼は馴れぬ商賣に手を出して、人に金を使ひ込まれて、借金まで背負ひ込みながら、その商賣に少しも懲りた樣子はなく、却つて、非常に興味が湧いたやうな顏をしてゐるのである。彼の頭には商賣上の空想が後から後からと浮んで來る。四五千圓の金があれば、五ケ月の間に店の損害をすつかり取返して、一年後には、有力な株式社にして見せるんだが…………

小島は机の前に坐つて、小説の材料を考へるつもりで、いつの間にか、又明日からの生活に氣をとられてゐたが、扨て、明日の銀行の支拂を考へると、心配してゐる父の顔が目の前にちらついて來て、少し心がせき立てられるやうな氣がして來た。

『兎に角、二百圓と云ふと、三十枚近い小説を書かなければならないな。若し出來たら、三十五枚ぐらゐにすれば、先日から少しも小遣のない自分のふところの中にも、いくらか金が殘るわけだ』と彼は敷島の煙を吐きながら、又こんな事を考へた。だが、やつぱり材料が浮んで來ない。『材料さへあれば、近頃の自分には、どんどん書けるんだがな』

小島は小説家でありながら、長い間、小説を書くのは堪らなく厭だといふ事を始終云つてゐた。それが、止むを得ず書かなければならなくなつて、後から後からと近頃のやうに書いてゐると、次第に物を書くのがそれ程厭でもなくなつて來たのである。そればかりではない、彼は小説といふものに、今まで感じなかつた興味をさへ持ち始めたのである。

『これも貧乏のたまものかな』と彼は微笑しながら考へた。——大體寡作家の小島は、今までも小説家の中では貧乏な方だつた。けれども自分ひとりの貧乏は、なるたけ動かずに、金のかからないやうにして生きてゐれば、別段大して苦痛なわけではなく、從つて貧乏ゆゑに强ひていきり立つて多作をする氣にもなれなかつたが、今度の貧乏には少々責任がある。そこで勢ひ多作をしなければならない。そして多作をしなければならなくなつて、彼は却つて、創作の興味が湧いて來たわけなのである。

『だから、小説家などといふものは、結局どつちに轉がつても、損をしない人間に出來上つてゐるんだな』と彼はそれをこんな風に解釋もして、自分で自分を慰めてゐた。——少々金で損をしたつて、それは要するに、この世の中で不便なただけの話で、それ以上に、精神的の打撃にはならないからな。——そのために臆劫がりやの性不精の癖が直つて、小説を

書く興味が新たに出て來たとすれば、それこそ自分に取つて精神的の非常な利益だからな……』

　彼は机に向つてゐたのが、いつの間にか仰向けに寢ころんで、彼のよくする癖で、兩手を後腦にかつて、さうしてぼんやり天井を見つめてゐた。

『だが、精神的の利益……こいつも少々誇張かな。——何しろ、いづれにしても、何か書かなければならないぢやないか。何か……いやでもおうでも明日の朝までに、三十枚前後も書かなければならないぢやないか。銀行の交換は午前十一時だから、それまでに書き上げて、金に換へて、そして銀行に入れなければならないんだから、恐ろしく、とてつもなく、急がしいわけではないか。——これが精神的の利益とは！』

　そんな考が、彼の頭を行つたり來たりしてゐて、いくら材料を考へても、浮んで來なかつた。

『これは一つスケッチに出かけてやらうかな？』たうとう仕方がなくなつて、彼がこんなことを考へ出すまでには、一時間以上もかかつた。『畫家がやるように、手帳を持つてゐつて、スケッチをするかな。人間のいろいろなスケッチ！さうしてゐる間には何かうまい材料にぶつからないとも限らない。畫家がやるのに、小説家がそれをやつて悪いといふ法はあるまい』

　それは實際に悪い法はないに違ひない。モオパッサンだつてスケッチをやつてゐる。チェエホフのノートにだつて、さう云つたやうなスケッチが一杯に書かれてゐる。——尤も今小島が企てようとするやうに、彼等は材料に窮してからスケッチに出かけたわけではあるまいが、併しよく考へて見れば、材料に窮してスケッチに出かけたとしたところで、これも亦、一向差支へないではないか。

二

一時間後に、小島は省線の電車の中で、二人が男で一人が女の三人づれの若い人達を、ぢつと觀察してゐた。彼のふところの中には、ノオトブツクと鉛筆とが入つてゐた。學生時分に持つたことがあるきり、もう十何年間か手にした事がない、あの合判の、線の入つた洋紙のノオトブツク！彼はそれを今神樂坂通で買つて來たばかりなのである。そして浴衣がけの彼のふところは、その手帳のために、外側から見ても、むつくり膨れ上つてゐた。

七月の夕方のことで、西側の窓には赫々と夕陽がいつぱいに當つてゐた。それだから乘客はみんな東側の腰掛に腰をかけてゐたが、併し觀察者たる彼は、たつた一人だけ、西側の腰掛に腰をかけなければならなかつた。背中が燒かれるやうに暑いので、鎧戸を下ろしたが、さうすると日光は遮れても、風が少しも通らないので、今度はむんむんと蒸されるやうな暑さを感じた。彼はハンケチを出して、ところ嫌はず湧き出して來る汗を拭きながら、彼と眞向ひに座つてゐる三人の男女を觀察してゐた。

女が眞ん中に座つて、男達がその兩側に腰をかけてゐた。その女は二十二三の平凡な女で、何處と云つて、取柄もなかつた。顏は細面で、輪廓は正しいが、一番重要な目が、どろんとして鈍いので、際立つて人の胸に印象するやうなところがちつともなかつた。白つぽい銘仙の單衣を着てゐるが、それを無造作に着てゐないで、いかにも外行きらしく着てゐるところを見ても、豐な家の娘でないことが直ぐ解る。彼の女の左隣に腰かけてゐる男は、八の字髭を、近頃流行らない、あの尾を長くぴんと尖らした形に生やして、そしてやつぱり浴衣がけだが、顏の眞ん中頃を中心として、それから上が日に燒け、それから下が格段に白いところで、直ぐ軍人といふ事が知れる。――だが、その軍人も曹長の古手か、

せいぜい特務曹長で、少壯な學校出の士官と云つたやうな、ハイカラさや新鮮さは少しもない。曹長とか特務曹長とか云ふものは——兵隊に行つてゐたことがある小島はかう考へた。——軍隊にゐると、兵隊をいぢめて、なかなか嚴かでえらさうに見えるものだが和服を著て電車の中などに乘つてゐると、恐ろしく人が好く、間が拔けて、普通の人間よりも一つ程ぼんやり者に見えるものだ。その男はさうしたぼんやりさを持つてゐた。それからもう一人の男、女の右側に腰かけてゐる男は、男と云つても未だほんの少年で、十七八にもなるだらうか、學生帽を頭にかぶつてゐた。恐らくこれはその女の弟であるに違ひない。

三人とも特色らしいものは少しもなかつた。だから、いかに材料に餓ゑて鵜の目鷹の目で人生を見まはさうとしてゐる小島の眼にも 彼等が最初何の注意も呼び起さなかつたといふのは無理もなかつた。

その三人よりも、小島は三人の右手の方にゐる二十四五の七三に髮を分けた女に、初め眼をつけた。淋しい顏立が、一寸彼の注意を引いたのである。けれども、その女もざらにある近頃の女事務員タイプで、いかに想像を走らせて見たところで、その女が井の頭あたりで男と逢つた歸りがけとでも思つて見る以上に、興味ある題材は、彼の頭に浮んで來なかつた。そんな事はこの世の中にざらにある。何もめづらしい話ではない。そこで彼は失望して、眼を轉じようとした瞬間、偶然にも、今まで氣がつかなかつた三人づれの眞ん中の、あの平凡な女の顏を一寸見たのである。

『おや』と彼は思つた。

平凡な女の顏が、極度に緊張してゐたのである。細面の輪廓の正しい顏が、兩頰に少しの餘裕もなくなるやうに、更に細く延びて、口がおちよぼ口に引締つて、ぼんやりした鈍い眼が、一層ぼんやりと瞬き（またゝき）を忘れでもしたやうにうつろに見開かれて、そして一體何處を見てゐるのだらう、一（ひと）ところにぢつとして動かないのである。

小島は更に眼を轉じて、彼女の連れの男、美人型の男の顏を見た。すると、この男の顏も緊張してゐた。といふよりも頰に餘裕がなくなつて、口をきつと引締めて、眼は何處を見つめてゐるのか、女と同じやうに、一ところを凝つと見詰めて動かない。──そしてこの二人の男女はこの寒さに身體を寄添ふやうにしてゐるのみならず、二人の膝の中間にくしやくしやと丸めて置いてある女のヴェイルの下で、どうやら手を握り合つてゐるらしかつた。　銘仙の黑衣にヴエイルをかけようといふ心掛から云つても、この女の趣味の程度が知れるが。

『おやおや、この二人は戀仲なんだな』と小島は何となく頰笑みたくなつて來た。而も二人の表情から見ると、これは前からの戀仲ではない。どうやら昨日からの戀仲でもなささうだ。若しかすると、今日、今から少し前、二人の戀が初めて成立つたのではあるまいか。前から思ひ合つてゐたことは思ひ合つてゐたが、兩方がお互の心にしかと觸れ合つたのは、今から一時間か二時間も前、と云つたやうな間柄ではあるまいか。──何故かと云ふと、二人のあの表情、あの恍惚たる表情がそれを語つてゐるではないか。

『恍惚たる表情』と云ふ考が、又も小島に微笑させた。さうだ、たしかに彼の前に坐つてゐるこの男女の表情こそ、人間の恍惚たる表情に違ひがない。

小島は何んだか見てゐられない氣がして來た。それで眼をそらして、彼女の弟らしい學生の方を見ると、これは顏にニキビなどは浮き出してゐるが、併し無邪氣な顏をして、後の窓の外に見えるバラック町の方を一心に見つめてゐて、姉達の樣子には氣がついてゐないやうだつた。

『これは一體どういふ人達かな？』と小島は空想し始めた。曹長とか特務曹長とかいふものは、その聯隊の近くに、度部屋を借りてゐるものだ。だからこれはさうした下級軍人の若手と、彼の部屋を借りてゐる素人下宿の娘とその弟よ

に違ひない。豐な家ではないが、兎に角男の子には中學だけは出させたいと云つたやうな希望で、一家がゆうが生きてゐて、それに全力をそゝぐために、部屋なども斯うして貸して、そこばくの室代を取つてゐるに違ひない。……娘はもう十分嫁に行く年頃だが、併しそんなに豐な仕度など出來る筈がない。先づ弟が中學でも出て、何とか身の振方がついたら、さうしたら、今度は娘の嫁入仕度の方へ、今まで弟に注いでゐた金をまはすことが出來る。そんな風な事に、娘の親達は定めてゐるのかも知れない。そこに下宿した特務曹長……よくある奴だ。その新しい下宿人が、今日は何かで休日を貰つたので、娘ばかりを誘ひ出すわけに行かないので、その弟をも一緒に、涼みの散歩か何かに誘ひ出したんだな　世田ケ谷から銀座、いや、淺草かな、活動寫眞かな？　そして散歩に誘つたことで、そしてそれをいそいそと承知したことで、女には男の、男には女の心が、互にすつかり讀み合へたのだな。一緒に散歩に行けると云つて喜んで噪ぎまはつてゐる弟の眼をぬすんで、二人はちらりちらりと顏を見合はせて、意味ありげに頰笑み合つたのだな。『そしてその結果が、今からして二人が顏を長細く緊張させて、眼をうつろに瞠つて、ヴェイルの下で手を握り合ふ――智惠のない話だ――といふ事にまでなつたのだな』

小島は再び頰笑んだ。

『だが、待てよ、これだけの事が小說の材料になるだらうか？　これから三十枚の小說を明日の朝までに生み出せる材料になるだらうか？』

下級軍人の古手と素人下宿の娘の戀！　それをどうこねくつたところで、結局それだけの話ではないか。小島は再び二人の顏をちらりと見た。二人は尙も細長く緊張した顏で、うつろな眼を瞠つてゐた。

『だが、待てよ、これが恍惚の顏だとすると』と小島は再び微笑しながら考へた。『今實際、正直に云つて、俺にはこ

の二人の自己陶酔な、とぼけたものに見えるかな。併し二人は實は人間最高の喜びにひたつてゐるのかも知れないぞ。　この二人は大して知識はなささうだ。だから、いろいろ虚飾をつけて、その二人が味はつてゐる感情を、高尚なものに表現して見せる言葉は知らないだらうが、併し無智は無智でも、感情そのものに變りは無い。』純粹な喜びを――つまり近頃の戀愛至上主義者の云ふやうな人類最高の喜びを感じてゐるに違ひない。だが、これがたとひ無智な男女でなかつたとしても、戀愛の恍惚境にひたつてゐる人間は、他から見れば、いつでもこんな風に滑稽なものなのかも知れない……』

小島は『何とかしたら、これは書けるかも知れないぞ』といふ氣が少しして來た。無論この男女を眞正面から書いたんでは物にならないが、併しこの男女を傍から見てゐる男の氣持を書いたら、何んとか物にならないことはなささうだ。――小島は眼をねむつて、空想を走せ始めた。

……先づここに一人の男があると假定するんだな。都會人で、知識階級で、かなり洗練された趣味を持つてゐる。その男が都合で戀愛をする。相手は近代的な、やつぱり知識階級の女だ。そして二人の心に起つた戀愛感情を、最も巧みな修辭で、美しく、力深く、眞實に表現する才能と智力とを持つてゐる。一遍に仍、二人は戀愛する。熱烈に。誰だつて戀愛をしてゐる場合はそうだが、自分等のやうな純粹な熱情でもつて、自分等のやうな幸福に醉つてゐるものは、人類の始り以來ないやうな氣さへする。その實大昔から同じ事を人間といふものは繰返してゐるんだが、併しそこが知識階級で、そうした感情を巧みに表現する才能を互に持つてゐるものだから、自分等のこそが眞の戀愛で、それに較べると、世の中の人間の戀愛はみんな醜いやうな氣がして來る。

……ところが、男は遂にその戀愛に飽きて來たのだ。男の心の底までも占領しようとする女の熱情にやりきれなく

なつて來る。自分の心の自由が取返したくなる。そして腹が立つて來る。

……疲れ果てた男は、戀愛からも女からも、都會からも、文明からも逃げ出したくなる。そして汽車に乘つて田舎に行くのだ。さあ、田舎は何處がいいかなあ。――やつぱり都會人である彼は、湘南地方を撰ぶこととしよう。さうして汽車に乘つて、都會から離れて行く中に、その汽車の中で、ここにゐるやうな男女達に會ふのだ。ここ、直ぐ眼の前にゐるやうな男女に。湘南地方なら、特務曹長の代りに、兵曹長の方が適當だらう。何故かと云ふと、横須賀や田浦では、兵曹や兵曹長が、聯隊附近の曹長や特務曹長と同じやうに、素人屋の部屋を借りてゐるからだ。――だから、今省線の電車の中で、身體を寄り添うてゐる男女は、その小説の中では、汽車に乘つてゐる海軍の兵曹と、それが下宿してゐる素人屋の娘とになるわけだ。――それを都會からのがれ、戀愛からのがれて來た青年が見る。その兵曹と娘とが、間の延びた顏をして、口も利き合へない程に、緊張し、うつとりしてゐる顏を見る。

……それを見ながら青年は考へる。戀愛してゐるんだな。恍惚としてゐるんだな。――併しかうした人間の戀愛だつて、我々の戀愛だツて、結局同じことなんだな。ああ、何といふ醜さだらう。……我々がよく口にしてゐたあの人類最高の感情、それをこの連中も感じてゐるんだな。人類最高の感情……――

……青年は腹の底からの苦笑に掻きむしられるやうな氣がして來る。みんな同じ事ぢやないか。俺の彼女がこの眼の前の素人屋の娘よりも、たとひずつと美人であつたところで、俺がこの水兵よりも、たとひどんなに教養があつたところで、結局同じことぢやないか。――戀愛なんて、一體何だ？ 春の彼岸に池の中でいがみ合つてゐる蛙の戀愛合戰だつて、雄蜘蛛と雌蜘蛛のあのデリケエトなフラアテエシヨンだつて……――

……つまり青年は自分の過去の戀愛至上主義の哲學、美辭と修辭との美しい思想に、反逆を感じて來るのだ。そして

青年は、未だ自分の行きつく目的の停車場にも来ないのに、眼の前の医者と娘との姿に圧迫されてしまつたやうに、直ぐ、その次の停車場で、逃げるやうに汽車を降りてしまふ……

「まあ、こんな風に空想するんだな」と小島は頭の中に浮んで来る筋を跡づけて行つた。「併し、少し俗に過ぎる嫌ひがないでもない。――だが、何より少し陰気だな。かういふ思想は、やつぱり世紀末思想だな。俺は近頃はこんな風ではないものの考へ方を求めてゐたんだが、やつぱりこんな風にしか物事が考へられないのかな。だが、孰れにしよ、これ程上乗の材料ではないが、満更捨てたものでもないな。まづ第二候補、第三候補にはなりさうだ」

小島は腕時計を見た。午後六時半頃だつた。明日の朝までに、一時間に五枚づつ書いて行けば、十枚になるんだから、時間はまだ十分ある。もう少し他の材料を捜す暇もありさうだ。

兎に角、一寸ノォトに取つて置かう』彼はかう思つて、ふところから合判の帳面を出して、覚え書を書き出した。

『青年。なるたけ近代的の神経質。

女。同じく。

青年恋愛に飽き、田舎にのがる。

汽車の中。平凡な男女の恋。青年の恋愛嫌悪の情つのる。……』

三

小島は市内の方々を材料を捜して歩いた。平生は賑かで、眼のまはるやうに活動してゐるやうに思はれる、東京駅附近でも、日比谷公園附近でも、数寄屋橋附近でも、小説の種を捜して歩いてゐる小説家の眼には、急に平凡で、何の興味

で、一體何のために人間が動きまはつてゐるか譯のわからない、全然無意味なものになつてしまつた。――交番の前には巡査が、この暑さにへこたれたやうに、ぽかんと立つてゐる。自働車はただぶうぶうつと埃を揚げて走つてゐる。電車はけたたましくベルを鳴らして、運轉手は、突貫する時に日本兵の眼が外國人に恐ろしく見えるさうだが、そんな時を思ひ出させるやうな恐ろしい眼をして、電車線路を横切らうとする通行人を怒鳴りつけながら、一生懸命に運轉してゐる。

それが何のためやら、一向解らない。

小島は歩きまはつてゐる中に、かなり疲れて來た。それで休むために銀座通りの或喫茶店に這入つた。

一杯の冷たい紅茶を飲みながら、彼は手帳を出して、ぽつぽつと書き込んだものを讀返して見た。碌な材料がないとは思ひながら、併し手帳を持つて來た手前、彼はそれでも二つ三つの覺え書を――例の省線電車の中の特務曹長と素人下宿の娘との外にも――いつの間にか書き込んでゐた。

丸ビルのエレベエタァで見かけた女。二十歳前後。未だ田舍氣の拔け切らぬ醇朴さと、都會の女になり切つた感じとを半々に持つ。

初々しさと共に顔の皮膚の濁りを持つ。皮膚の濁りは男性の、それも數人の男性の血液が、彼女の中に混合せるために生じたるものと覺ゆ。

を分へん洋品店の女事務員ならん。

性質温良、神經はやや遲鈍。

彼女の一ヶ月の俸給を全部投げ出しても、買へないやうな贅沢品を、何の苦もなく購ひ行く貴婦人令嬢の後姿を、彼女は常に羨望をもつて見送る。

それのみならず、自分と同じ階級の女事務員までが、身に宝石をつけ、贅沢品をつけ、一回の結髪料三円の美容院に三日に一度づつ通ひ居るを羨異をもつて眺む。如何にして彼等はさうした浪費をなし得る身分となりしか、いくら考へて見ても彼女には神秘なり。

彼女は店番をしながら、その神秘を考へる。深く深く考へる。毎日毎日考へる。さうする中、或日、その神秘の意味が、天啓の如く彼女の脳髄に閃く。

「まあ……」彼女はその考へに赤い顔をし、空恐ろしさに身顫ひをなす。

然れども、一週間後に、彼女は終に意を決して、或薄暗い露次の奥の一軒の家の前に立つ。そこは若き女を好みに誘き寄せる事によつてなりはひを立て居る一人の老婆の住居なり。

それからである、彼女の醇朴な皮膚に、多くの男性の血液の混濁が表れ始めたのは、そして彼女の指に都会の女らしい指輪の輝き始めたのは……」

「市電の中。

四十五六の商人風の男、生眞面目、といふよりも、寧ろ渋面つくりながら腰かけ居る。そこに一人の客来りて「お膝送りを」と云ふ。商人風の男、云はるゝままに無意識に、少し右手に腰を滑らして、席を開けんとせしが、急に險しき顔をして、「向うの方が明いてるぢやねえか、向うの方が」と腹立たしげに叫びて、四五間彼方に眼を居な

場席を指さす。客驚きて商人の顏を見しが、そのまま四五間彼方の空席の方へ行く。

……この商人の心理、席を明けかけて、それから急に腹立たしくなつて來て、人に怒鳴る心理……

彼の家庭が不幸なのか。彼の娘が男をこしらへて出奔したのか。妻がヒステリイで彼を惱ましつつあるのか。それとも誰か近親の者が死んだのか。或はその日何か商賣上の手違でも生じたのか。……

興味深きは、席をゆづりかけて、途中で急にそれを中止して、むらむらと腹の立つて來る四十男の心理なり』

小島はそんなものを、紅茶を啜りながら讀返して見たが、自分ながら甚だしく無興味だつた。丸ビルの一人の女事務員が、どんな心理狀態から、金のために貞操を賣り始めようが、そんな事は自分には何の關係もないではないか。それから四十男の小商人が、何事かによつて苛立つてゐて、急に何の關係もないアカの他人に向つて癇癪を起さうが、そんな事は何も自分に取つて大した重要事ではないではないか。

それでやつぱり省線の電車の中で特務曹長と素人屋の娘とを見ながら考へついたあの材料が、未だしも物になりさうではあるが、それだとて、その中に空想で書かなければならない、近代人らしい青年男女の戀愛至上主義の破產を書くのがなかなか大變である。青年の氣持は直ぐ書けさうだが、相手の女が、一寸頭の中に具體的に浮んで來ない。一體誰をモデルにしたらいいだらう。――小島は彼の知つてゐるいろいろな女を思ひ出した。だがどうも適當な女はなかつた。と云つて、空想でさういふ女を作り上げようとして、作り上げられないことはないだらうが、それには時間が迫り過ぎてゐる。何しろ明日の朝まで書き上げてゐなければならない小說なんだから。

彼は時計を見た。八時半だつた。

「もう八時半！……これから直ぐ家に歸つても九時半近くなる。これから落付いて物を書ける氣持になるには、少くとも間ぎ二時間はかかるだらう。さうすれば十一時半だ。それから徹夜するとしても、例の八時頃までにはどうしても書き上げてゐなければならない。さうでないと、それを雜誌社で金に引換へて、十一時の銀行の交換までに間に合はせるわけには行かない。――八時間半に三十枚、八時間半に三十枚！」

もう少し前、六時半頃には、彼は心持に未だ餘裕があつたので、一時間に五枚づつ書いて行けば、三十枚の原稿たんか六時間で書き上がると極め込んでゐた。だが、それから二時間經つた今は、へんに押迫つたやうな氣持がして來て、一時間平均五枚づつの原稿を書くなんて、とても不可能なことに思はれて來た。

「困つたな、困つたな！」と彼はせかせかしながら呟いた。「おまけに、未だ材料が極つてゐないんだからな。大體小說の材料なんて、探して歩いたつて、おいそれと落つこつてゐるわけのものではないんだ。それを手帳を持つて探して歩くなんて、それが抑々大間違ひなんだ。新聞の社會種ぢやあるまいし。……だが、間違ひと云へば、小說で商賣の手違ひの穴を埋めようなんていふ心掛が、どだい無鐵砲で大間違ひなんだ。明日に迫つた銀行の交換を、これから往來に材料を探しに出て、それから書いて、金に換へて、間に合せようなんて、とても話にならない大たわけだ。――だが、併し仕方がないぢやないか。今更それより何とも仕方がないぢやないか。大たわけだと云つて、ぽかんと手を拱いてゐるわけには行かないぢやないか。――」彼は腹立紛れに一方の自分を詰ると、又他方の自分がそれを詰り返すやうな、いらいらした、向つ腹の立つた自問自答を、こんな風にやり始めた。「大體小說家の癖に、出版なんていふ商賣をやるのが大間違ひぢやないか。いくら他人のために作つてやる氣になつたとしたところで、その男に委せきりで、金を注ぎ込まれて逃げ出されるなんて、それがたわけでなくて何だ？ あの目先のきかない色男が、放蕩に注ぎ込んだ金を、一年も經

つた今になつて、尻拭ひしてゐるなんて、それがたわけでなくて何だ！――そんな事を今更持出したつて仕方がないぢやないか。俺は負惜しみぢやないんだが、今度自分でやりかけて見ると、出版といふ商賣は案外自分には向きさうにさへ思つてゐるんだ。どんな事をやるにしたつて、ちつとやそつとの手違ひに、悄氣込んで挫るもんか。今に見てゐろ……』

小島はもう一杯冷たい紅茶を命じた。時計はだんだん動いて行きつつあつた。彼は自分のこの物好きな二重生活を呪ふ氣持と擁護する氣持との戰で、すつかり憂欝になつてしまつた。――何はともあれ、歸つて、何でもいいから書き始めなければならないのが急務だとは思ひながらも、立上る氣になれなかつた。立上つて歸つて、机に向ふ……それを思ふと、とてもやり切れない程厭だつた。

『やあ、暫く、小島さん』

振向いて、考へ込んで、腰をかけてゐる小島の頭の上から、かう聲を浴びせかけた男があつた。顏を上げて見るとそこには若い洋服姿の男が立つてゐた。一寸誰だか最初は解らなかつたが、それは二三年前、このカツフエーでよく出會つたことのある、××大學の學生だつた。今はもう學校を卒業したと見えて、制服が背廣に變つてゐるが、併し未だ學生と紳士との中間にゐるやうな、若々しい、快活な感じがした。――小島はその男の名は知らなかつたが、その男が始終彼に挨拶するので、その顏はよく知つてゐた。小說家などと云ふものは、こつちが相手が何ものであるかも知らないのに、向うではこつちをよく知つてゐるものだ。

『やあ、しばらく。……まあ、お掛けなさい』と小島は云つた。氣がむしやくしやしてゐたので、それからのがれるために、彼は丁度、相手が欲しかつたところだつた。

青年は少しも臆しないで、小島と向き合つて腰を下ろした。

『あなたは近頃よくお書きですね。毎月毎月何處かの雜誌に出ておいでぢやありませんか……』

『ええ』小島は自分の作物のことを他人に何とか云はれる時にする、苦笑とも羞恥ともつかない表情をした。

『今まで餘りお書きにならなかつたものですから、近頃のやうにお書きになると、一寸眼につきますね』

『ええ』と答へながら、何だか探つたいやうな氣がして、『少し必要があるもんですからね、金錢上の……』

『さうですか、併しお書けになるのはよござんすな』青年は相手の眼をぢつと見つめる、臆さない、大膽な眼の持主だつた。その眼で小島の眼をぢつと見ながら、口を利いた。『僕も小說を書いて見たいんですがね、なかなか六ケ敷いんでね。……それでよく今の大家達のものを讀んで見るんですが、併しから云つちや何ですが、あんまり僕等の心に來ないんですがね』

『なるほど……』

『どうも今の文學なんて、何だかくよくよしてゐて面白くありませんな』

『さうですかな……』

『僕等はもつと生々した、快活な、胸の空くやうなものが欲しいんですがた、明るい、眼の醒めるやうな……』青年はさう云つて　急に言葉を切つて、くるりと背筋を向うに向けて、『おい、お仙ちやん、僕にも紅茶をおくれよ』

片隅に四五人かたまつて、あまりに店が閑なので、雜誌を讀んでゐた女給の中から、お[illegible]と呼ばれた十八九の女が立上つて　にこにこしながら、紅茶をはこんで來て　青年の前に置いた。

『いやにニタニタ笑つてるやがるな、え、俺が來たから嬉しいのか、嬉しいなら嬉しいと、平氣で[illegible]

しろよ」と青年は女給の方へ向いて云つた。「ははは、赤い顔して喜んでゐやがらあ！」

「あら、隨分よ。――しよつてるのね、この人は！」女は青年の背中をぽんと輕く叩いて、だが、やつぱりにこにこしながら、今立つて來た片隅の方へ引つ返して行つてしまつた。

小島は少々壓せられ氣味だつた。――この青年は未だ二十三四だらうが、人を喰つてゐることにかけては、十歳年上の小島など、遠く及ばなかつた。近頃の二十二三の青年を見て小島はよく思ふが、彼のその年頃とは比較にならない程ませてゐる氣がする。――そして又二十二三から三十位までの間に、近頃はだんだん年齢の差がなくなつて來たやうな氣がする。早く青年になつて、その青年期が長くつづく、さう云つたやうな氣がする。

だが、小島はこの青年を見てゐると、その少しもこだわりのない、何の臆するところもない自由さ――或は多少放恣かも知れないが、兎に角何のわだかまりも心になささうなその樣子に、或快感を感じて來た。お世辭らしい事は一言も云はないで、自分勝手な調子で、小說家である小島に向つて、今の小說は面白くないと云ふ……その無遠慮が愉快に感ぜられて來た。彼は彼をよく訪ねて來る多くの文學志望者を知つてゐた。原稿を以つて來て、それを讀んで見れと云つた末には、「先生、些つとは物になりませうか？」と臆病な眼をして、小島の一言が、一生の運命を定めでもするやうな緊張した表情で訊く。――さういふ青年に會つた時ほど、心持の暗くなることはなかつた。哀れな、いぢらしい氣持がすると同時に、さういふ氣持を若い人間が人に起させるといふその事に對して、腹が立つて來るのであつた。

それに較べると、今彼の眼の前にゐる青年は、少々人を喰つた顏をして、生意氣ではあるが、併しどんなに明るくて、生々してゐて、快いかわからない。それに青年の生意氣といふ事は、實際は貶るべきものではない。寧ろ賞むべきものなのだ。青年が先輩の仕事に感心しない！……それは當然なことだ。

『僕はね、丁度君ぐらゐの年齢の人に訊いて見たいと思つてゐるんだが』と小島は何となく間の惡い氣持で云ひ出した。『君達は一體何を考へて、毎日暮らしてゐるんですか』

『何を考へるつて、何をですか？』

『いや、つまりそれが僕の訊きたいところなんですよ。毎日何を考へてゐるんですね？』

『何も考へやしませんよ』

『ほう、何も考へない？……』と小島は相手の、スマアトな、生々した、利口さうな眼を見つめながら、『僕等の時分には、いろいろ思想界の影響があつてね、つまり始終煩悶してゐたものですよ、十八九から二十四五……丁度君ぐらゐの年頃には。つまり一口に云ふと、「人生とは何ぞや？」といふことですね。それが近頃の若い人……二十四の僕が老人ぶつた口を利くのはをかしいが、丁度君ぐらゐの人を見てゐると、どうもさういふ煩悶がなくなつたやうでね、それで僕はそれをよく君ぐらゐの人に訊いて見たいと思つてゐたんですよ』

『「人生とは何ぞや？」』青年は小島の言葉を舌の先で味ふやうな顔をして、一寸默つて考へてゐたが、『まあ、あんまり考へませんな、さういふことは……』

『つまり僕等の時分にはね』と小島は自分の十八九から二十四五にかけての時分を追想して、一寸センチメンタルになりながら云つた。『藤村操などといふ男がゐましてね、人生の不可解をとなへて、華厳の瀧に飛び込んだのが始まりで、青年の思想自殺が非常に多かつたものですよ』

『藤村操……藤村操……』と青年は口の中で繰返してゐたが、一寸その名が何を意味するか思ひ出せない樣な顔をした。

『君は藤村操を知りませんかな？』と小島は驚いて訊いた。

「さう云はれれば、そんな話を聞いたやうな氣がしますが、藤村操でしたかね、華嚴の瀧の自殺の開祖は？」

「さうですよ、藤村操ですよ。……なるほど、時代も移り變つたものですな。——僕が小學校の頃でしたよ、藤村操の死んだのは。だから、考へて見ると、君などは生れて間もなくの時ですね。それぢや、知らないのも無理はないなあ」と小島は感心したやうにほつと一つ溜息をした。「僕などは物心がついた頃から、つまりさういふ思想の悪影響を受けてね、未だにその煩悶病のカラが背中にくつついてゐて弱るんだが、併しさういふものが少しも影響してゐないとは、君なんかはほんたうに素晴しいものだな」

「……」

「實際、こんな事は何もならないんですからな、人生の不可解なぞは。……何と云つたらいいのかな、僕は始終考へることなんだが」と小島はこんな風なアイドル・シンキングに耽る事に馴れた人間の、自分の考にだんだん感激して行く、あの昂奮した調子で、言葉を續けた。「つまり物の考へ方にさういふ癖がついてしまつたといふ事が、僕等の不幸なんですよ。人生とは何ぞや、と云つたやうな事を考へてゐたら、人生はなくなつてしまふんですからな——僕等は花を見る。花が赤い、青い、黄ろい、さうすると、直ぐその意味を考へる。花が赤い、青い、黄ろい、かういふ單色を、自然が他の一切のものが灰色の中に、花にだけ與へたことは愉快なことだ。——つまりそんな風に考へる癖がついてゐる。そこまで考へて、そんな持つてまはつたところに初めて愉快を感ずる。ところが、實際は、ああ赤い花だ、これは綺麗だな、さう考へるだけでいいわけなんですからな。そしてその方が、花を見る見方として自然なんですからな。それから例へば音樂、これも同じことで、音階が自然界にあるとは愉快なことだと考へなくつたて、音樂を聞いて、唯何となく愉快になればそれでいいのに……」

「お仙ちやん、君にもう一杯紅茶をくれよ」と青年に云つた。それから小島の方へ向き直つて云つた。少しおどけさうに、併し微笑を浮べながら、聞いてゐるといふよりも見てゐたが、お仙が紅茶を持つて来ると、そつちを向いて、「まい、どうだい、白状する決心がついたかい？」

「何の？」

「俺が来て嬉しいといふ事の？」

「あら、この人は、未だそんな事を云つてるのよ。――ほんとうに何処までしよつてゐるのか解らないのね」

「はゝはゝ、それが口惜しかつたら、自分もしよやあいいぢやないか」さう云つて、青年はぐつと一息に一杯の紅茶を飲み干して、それから時計を出して見て、「それぢや、小島さん、僕お先に失敬します」

「やあ」と小島は云つた。小島は青年が自分の言葉に何の興味をも感じてゐたかつたことを初めて知つた。だが、興味を感じないのが自然な筈だ、と直ぐ続いて考へた「やあ、失敬。僕も今帰らうと思つてゐたところだが……」

青年は帽子を一寸脱つて、軽快に挨拶して、そして軽快な足どりで出て行つた。

小島は時計を出して見るともう九時だつた。

「九時だな。もうどうしても帰らなければならないな。――だが」と彼は今まで青年を前に置いて喋つてゐたあの考の続きを捨ててしまふのが、妙に名残惜しかつた。

「僕も勘定だ！」から云つて、女給を呼びながらも、彼は「これは書けさうだぞ。新時代――新時代――「人生とは何ぞや」と考へない新時代――」そんな事を腹の中で呟いてゐた。

四

その考へを腹の中に持ちながら、小島は喫茶店を出、銀座通のペエヴメントの上を、ふらりふらりと歩いて行つた。

九時頃の銀座通は賑かな最中だつた。ぞろぞろと散歩客が暢氣な顔をして歩いてゐた。

『ああした青年と新しい耳隱しの女との戀愛なんていふものは、俺達のとは大分違ふんだな』と彼はふとそんな事を考へた。一體どんな風に始まり、どんな風な經過を取るんだらうな。

彼の頭には空想が始まつた

新時代の若い青年と、若い女とが會ひ、戀愛を感ずる。そして互に打明けて直ぐに成立つ『それでは餘りに色も香もなさすぎるぢやないか』とそれを小島のやうな人間が側から云ふと、青年男女は、輕蔑した眼付をしながら答へる。――『さうですよ、僕等は君等と違つて、解り切つたことを持つてまはつたり、手數をかけたりはしませんからね。まはり道なんていふものは、近頃ははやらないんです』――

『待てよ、こんなことは誰だかが書いてゐたぞ』と小島は考へた。さうだ、アナトオル・フランスだ。アナトオル・フランスの小説だ。……ははは、佛蘭西だつて同じことなんだらうな。アナトオル・フランスなんていふ人間も、茫漠とした新時代を豫想すると、そんなことが浮んで來たわけなんだな……』

彼はそんな考に、ひとりで可笑しくなつて、面白くなつて、人足繁いペエヴメントの眞ん中で、くすりくすりと笑ひ出した。往來をたつた一人で笑ひながら歩いてゐるといふのは異なものだ。それだから彼は一生懸命笑の顔に浮ぶのを我慢してゐたが、それでも我慢し切れないで、くすりくすりと笑を洩らしてゐた。

その笑の未だ終らない中に、彼は丁度町角の自働電話の小舎の蔭に、今しがた電車を降りて来たその青年が立つて、車道を越えた向う側の人道の方を、一心に見つめてゐるのを見た。

『はてな』と小島は腹の中で呟いた。『この男はこんなところに立つて、何をしてゐるのかな？　まるで活動写真の探偵のやうな顔をしてゐるが、何か待つてゐるのかな？　よし、どうせ小説の材料の探し序でだ。この青年の行動を一つ監視してやらう！　何か面白い材料が見つかるかも知れないぞ！』

そこで小島は青年に氣のつかれないやうに、そつと青年の背後を通つて、その町角から左に薄暗い横丁へ曲つて、そして少し行つたとある一本の電信柱の蔭に身をひそめて、青年の方をぢつと見守つた。

青年の身體は暫くの間ぢつとして動かなかつた。小島はかなり長い間、さうして待つてゐた。すると、青年が急に身體をはすかひにして、電話小舎の蔭から首を延ばして、何か見つめてゐるやうだつたが、いきなり敏捷に電話小舎の蔭から飛び出して、つかつかと歩き出した。『始まつたぞ』から思ひながら、小島も電柱の蔭から飛び出して、青年の後から歩き出した。

新橋から尾張町の方へ向つて左側のペエヴメントの上を、尾張町の方へ向つて、青年は歩いて行つた。かなりの早足だつた。一體身長の高くない青年の上半身が、少し前のめりになつて、尻が後に突き出されて、兩手を腰のところでひらりひらりと振つて、人ごみの中を突きのけ突きのけ歩いて行つた。もつとも、この側は銀座通の中では、割合に人足のまばらな側だが、それでも青年は多くの人に突き當りさうになりながら、巧みに體をかはして、さつささつさと歩いて行つた。

小島もそれに遅れないやうに、一生懸命になつて、大股に歩いて行つた。

歩きながら青年の顔が、始終車道を越えた向側――つまり尾張町の方へ向つて左側――のペエヴメントの方へ向くのに小島は氣がついた。そこで小島も青年の向く方へ向いて見た。すると、そこには一人の身長の高い少女が、非常な早足で、丁度佛蘭西女のやうな小刻みな、けれども早い足取りでちよこちよこと殆んど小走りに歩いてゐるのが眼に入つた。

「何だ！あの少女が目當なのか！」と小島は考へた。

が、次の瞬間に、小島はその少女が、先刻小島が腰を下ろした喫茶店の筋向うの喫茶店――それは震災後になつて、銀座通に無茶苦茶に澤山出來た新しい喫茶店の一つだが――の看板娘であることに氣がついた。小島は散歩の折に、その喫茶店にも時々寄つてゐたので、その小娘を知つてゐた。身長のひよろりと高い割合に、未だ横幅がちつとも出來ない、十六七の少女なのである。女學校にもゐたらしく、その附近の他の店の女給達と違つて、多少教養もありさうだし、品もありさうだつたが、併し未だほんの子供なので、小島の眼などには、女としての印象を少しも殘してゐなかつた。

「やつぱり年齢の差かな。――あの小娘がこの青年には、やつぱり女と見えるんだな、一人前の」と小島は考へた。だが、これは一體どういふわけなのだらう。つまりこの青年があの小娘の跡をつけてゐるといふわけなのか知ら？それでは、先刻この青年が自分が腰かけてゐた喫茶店に這入つて來たのは、この小娘が小娘の店から出て來るのを待つ間の暇つぶしだつたのだな。――だが、かうして小娘が向う側を、青年がこつち側を、こんなに小走りに歩いてゐて、その結果が一體どうなるのだらう？」

そんな事を思ひながら、小島もやつぱり一生懸命に、走るやうに大股に歩いてゐた。一體心臟が弱い上に、おまけに七月だ。ぢつとしてゐたつて、背中が汗ばむやうな時候だ。それを小走りに歩いてゐるのだから、彼の身體には汗が流れ

るやうに出て來た。

『併も物好きだな。こんな青年とこんな小娘とがどうならうと、俺の知つたことぢやないぢやないか』さう自分で自分を笑ふやうな氣持と、『いや、併し此處までついて來たのだから、ついて行け。どんな新しい材料が見つからないとも限らない』といふ材料に窮した小說家のさもしい根性とが、彼の腹の中で戰つてゐた。――それに、彼の心の中で先刻から誇張されてゐる『新時代』といふ奴が、へんに彼を刺戟してゐた。

これで、やつぱり汗みどろになつて、彼は大股に步いて行つた。彼の前には、上半身を前にのめらした青年が、泳ぐやうな恰好で、人道を越えた向う側のペエヴメントの上には、輻の未だ出來てゐない、ひよろりとした、肩揚をした少女が、佛蘭西女のやうに小刻みな足取でちよこちよこと……かうして、この不思議な三人が、銀座通中の人間が、みんな悠々とした散步情調で、のらりくらりと步いてゐる間を、さつさ、さつさと途方もない早さで、步いてゐたわけなのである。

このへんてこな早足は暫くの間つづいた。が、尾張町の角近くまで來ると、丁度角のライオンから一二間手前に、やはり小さな喫茶店があるが、その中に少女はぴよいと飛び込んでしまつた。

そこで、青年はぴたりと立止つた。從つて五間ほど後からついて行つた小島もぴたりと立止つた。

青年は並木の柵のところに身體をもたせて、のび上るやうにして、今少女が飛び込んで行つた小さな喫茶店の中を、覗いてゐた。小暫くすると、腹を抱へるやうにして笑ひ出した。

小島はハンケチで、汗を拭き拭き青年の側に近づいて行つた。そして青年の肩をぽんと輕く後から叩いた。

『君、何を笑つてゐるんです、そんなところで？』彼は青年の後からついて來た事などは、けぶりにも見せずに云つた。

『やあ』青年は彼の顏を見上げて、一寸バツの惡さうな顏をしたが、直ぐ持前の元氣な調子になつて、『いや、實に滑稽な奴なんですよ。實に……』さう云つて再び笑ひ出した。

『誰が滑稽なんです？』

『ほれ、あすこに、あすこに……』さうやつぱり笑ひながら、青年は向う側の小喫茶店の中を指さした。『ほれ、あの中に小娘がゐるでせう、帳場の側で、帳場の女に手振り足振り話してゐるぢやありませんか。あの小娘が活動狂なのですよ』

『ほう、活動狂……』と小島は器械的に相手の云つた言葉を繰返しながら、器械的に相手の指さした小喫茶店の中を覗いて見た。なるほど、今飛び込んで行つた小娘は、帳場の前で、大袈裟に手を振り、足を踏み鳴らしながら、何かしきりに喋つてゐた。それを聞きながら、帳場の女は、時々面白さうに笑つてゐた。

『あれは今、活動寫眞の話をしてゐるんですよ。はは實に滑稽な奴でね』と青年は尚も笑ひ聲で、『僕は今夜あの女と一緒に歸る約束をしたんですよ。僕のうちの近くなんで、よく一緒に送つて行つてやるんですがね。……ところが、あの女はその事を、急に忘れてしまつたんですよ、と云ふのが、あの女は活動寫眞が大好きでせう、それで昨日活動寫眞を見に行つて、すつかり感心しちやつて、さつき僕が彼女の店――ほら、あのM喫茶店ですよ――に寄つた時、僕を取つ摑まへて、昨日見た活動の話を手振り足振りで、夢中になつてしてゐましたがね。――それで尚もその活動に夢中なので、僕と一緒に歸ると約束したことなんか忘れちまつたんですよ。……今、ほれ、ああやつて喋つてますね、あれを聞いてゐる帳場の女が、あの娘の從姉なんでね。――それでつまり、從姉に向つて、今度はその活動の話がしたくつて堪らなくなつて來たんですね。それだものだから、僕と一緒に歸る約束なんか無論頭になく、早く從姉に活動の話

おしたい、と思つたんでせう、まるで飛ぶやうに』と云ひかけて、靑年は再び新たに可笑しさが込み上げて來たやうに笑ひ出した。『どんどん歩くんでせう、それで、僕はそれを追つかけるんで、すつかり汗をかいてしまひましたよ。』

さう云つて、靑年は思ひ出したやうにハンケチを出して、襟の汗を拭いた。

小島は自分が先にハンケチを出して、汗を拭いてゐたことが急に恥しくなつて來た。

『何だ、そんなことか！』と彼は忌々しげに腹の中で呟いた。自分が忌々しいのだか、彼の前に立つてゐる靑年が忌々しいのだか、彼にはよく解らなかつた。――小娘の活動狂のお陰で、俺までが夢中で一生懸命に、急いで歩いて汗をかいてゐたわけなのか！』

彼はもう少し前、素晴らしい新時代！　なんていふ事について考へてゐたのが腹立たしくなつて來た。こんな他愛もない事にも、何とか意味を見つけやうとしてゐる自分の頭が癪にさわつて來た。そして不機嫌な顏をして、

『さよなら』と靑年に云つた。

『さよなら』と靑年は答へた。

*　　*　　*　　*

暫くして彼はタクシイに乘つて歸路についてゐた。震災後餘計にひどくなつた道路の上で、あの使ひ古されたノオドが、ガタガタと烈しく震動する中で、彼は泣き出しさうな苛立たしさで、かう呟いてゐた。

『明日の朝までに三十枚。明日の朝までに三十枚。――午前十一時。銀行の交換。――ああ、俺は何を書かう、俺は何を書かう！』

併し何を書かうとする材料の見つからない前に、彼の頭はもうすつかり疲れ切つてゐた。

（十三年八月）



寂しければ

久保田万太郎

二十一日の日は死んだ家内の命日にあたります。――幸ひ日曜でもあり、天氣も好かつたので、清一をつれて谷中まで寺まゐりに出かけました。

かへりに、ぶら／＼芋坂を下りて、馴染のある道を根岸のはうへきれました。

「清ちやん、お前、「笹の雪」を知つておいでだつたか？」

「いゝえ。」

「まだ知らなかつた？」

「えゝ。」

「ぢやア、今日は、「笹の雪」へつれて行かう。」

音無川についてあるきながら清一にわたしはいひました。――たまにわたしと一しよに出て、どこへでもよつて、外でなにか喰べてかへるのを、どんなことででもある

ろに清一は眠つてきました。——そこであらためて、わたしも、つとめてさういふ理窟をこしらへるやうにしました。——その日もうちを出るとから、今日は、かへりは、今川で夜飯にしようか、それとも前川へ行つてうなぎを喰べさせようか、——と道中いろ／＼思案をしました。

そこまで来て、ふつと「笹の雪」を思ひつきました。——子供にはいつそ珍しいかも知れない。——さう思つてわたしは、出来ごころでそこに決めました。

入ると、時間はづれのせいか座敷はガランとしてゐました。一組も外にお客はありませんでした。——わたしと清一は女中が蒲團を敷いてくれた障子の際にすわりました。

『御飯でございますか、御酒でございますか？』

『さうだね。——一本つけておくれ。』

『……………』

『それから湯豆腐を持つて来ておくれ。』

『……………』

女中は默つて立つて行きました。——わたしは、障子の硝子越に、しら／＼と乾いた庭のうへに眼をやりました。

『御覧、鶏頭がもうあんなになつてしまつた。』

わたしは清一に指さしてみせました。——枯れて、くろく、みるかげもなくなつた鶏頭、霜げてさびしいと[illegible]。——うしろの建仁寺を斜にくぎつた日の色の落ちついた光景をみても冬になつたことは分ります。

間もなく五徳を入れた火鉢が來ました。あとから膳も來ました。——わたしは入谷に朝顔のあつた時分のこのうちも

ことゝ――庭に張出(はりだし)をしても間に合はないほど忙しかつたことだの、その時分には餡かけと海苔の外(ほか)なんにも出來なかつたことだの、朝のうちわずかしか稼業(しやうばい)をしなかつたことだのを淸一に話して聞かせながら、ともぐ、箸をとり上げました。

が、水うつてあかつき起の椽へかな、――さういふさまは夢にもみられなくなりました。――このうちもかはりました。だが、根岸といふところも、少しみない間にすつかり變りました。……

しばらくして、あとからきたお客の入つて來たけはいがしました。

「御飯。――それと海苔を……」

もの馴れたとりなしでさういふのが背後(うしろ)に聞えました。

「この餡かけのお豆腐、よかつたら幾らでもお上りよ。」

手酌(てじやく)でさかづきを重ねながら、わたしは、淸一にいひました。

「えゝ。」

「嫌ひぢやアなかつたね、お豆腐？」

「えゝ。」

「湯豆腐のはうも……お上りよ。」

「えゝ。」

「ねえさん。」わたしは帳場のはうをみて「お替りと、それと、此方(こつち)へも海苔を……」

と、

『失禮ですが、相模さんではゐらつしやいませんか？』

不意に、わたしは、しばらく呼ばれなかつた名を、よばれました。

はて、誰にめつかつたらう？――さう思つてそのお客のはうを向きました。

『あゝ、寺西さん……』

思はずわたしはいひました。――以前、小梅の宗匠のところで、始終一しよになつた五秋さんぢやアありませんか。

『どうもよく似ておいでの方だと思ひましたが……』

愛想よく五秋さんはわらひました。

『子供と、うつかり、話をしてをりましたもんで。――失禮いたしました。』

わたしはそつちへ體の向きをかへました。

『いゝえ、手前こそ。』五秋さんは出しかけた煙草入を下に置いて『ですが、隨分しばらくでございましたね。』

『すつかり御無沙汰になつてしまひまして。――でも、小梅でもみなさん、お變りはございませんか？』

『有難う存じます。――お蔭さまで……』

『宗匠もこのごろは？』

『倅と、まア、このごろは、以前のことにいたして丈夫になりましたが。――これから、また、お寒さにむかひますと、いつものその喘息といふ奴にたゝられます。』

『あゝ……』

『あの疾病ばかりは側にゐるもの折檻でございましてね。』

『お察し申します。――わたくしも死んだ親どもで覺えがございます。』

『しかし、まア、何といたしても師匠も年でございます、……』

五秋さんは顏を上げて

『このごろ目にみえて强情がなくなりました。――どうして師匠がこんなことをと思はれるやうなことを折々申すやうになりました。』

『たしか六十……？』

『八になります。』

『八に？』

『へえ。』

『尤もこれが生れましたとき。『わたしは淸一のはうをみて『そのころをりました深川の宅へわざ／＼おみえ下すつて、自分も來年は本卦がへりだから、そろ／＼露心堂をだれかに讓つて引つこみたい。――そのとき宗匠のさう被仰つたのを覺えてをります。――それを思へば、これがもう學校で三年になりますですから……』

『お早いものでございます。』

『全く……』

『が、師匠にいたしたら心細くもなりませう。』五秋さんはいひました。『いま、お話の、露心堂の名跡のことでも、その時分から申してゐることがいまだに運ばないのでございますから……』

『お決りになつたやうにうかゞひましたが……？』

わたしは、もう、後々にすたることゝばかり思つてゐましたら、それも、心だけは、このころつたことがやアございません。』

『……………』

『御承知のとほりの肚中。──捻くりは大ぜいをりますが小太郎はをりません。』万秋さんはわらつて『そいくせ、深くり、當人たちにすると、いつぱし當秀才のお身柄のつとまるつもりでゐるだけ始末にまゐりません。』

『しかし、わたくしに、以前。──その十年まへにお話のあつたときでも、内々これといふおみとめはついておいでのやうなことを被仰つておいででしたが……』

『さうでございます。』万秋さんはうなづいて『師匠の肚は、はじめから、決つてをりました。』

『……………』

『畢竟、また、さういふみとめがついてゐたればこそ、その時分から、引つ込みたい、隠居したいといふことをいひ出したのだと思ひます─師匠の、まア、心もちといたして……』

『大きに。』

『が、それは……』

『……………?』

『師匠はその方に捨てられました。』

『捨てられた?』

『申さば……』

『…………………？』

答へないで、わたしは、五秋さんの顔をみました。

『拈華さんでございますよ。』

五秋さんは、はつきりさういつて、寂しくわらひました。

『ですが……？』

そのとき、わたしのはうへ替りの来たのと一しよに、五秋さんのはうへもお膳が運ばれました。

『相済みませんが、あの、御飯はもう少々でなれますから……』

『ゆつくりで結構……』

五秋さんは、女中にいつてから、わたしのはうを向きました。

『何かそれには……？』

もう一度、わたしは、五秋さんの顔をみました。

『御存じでございませう、しかし……？』

『いゝえ。』

『拈華さんのお身についてお聞及びぢやアございませんか？』

『一向に。』わたしは遮つて『小梅のお宅へさへ出ないくらゐでございます。―こゝ三四年といふもの、全く、わたくしは、世間と仲違ひになつてをります。―どなたにもお目にかゝらなければ、従つて何ごとも存じません。』

『ぢやア申しますが……』

『……』

『あの方、師匠をお捨てになつたばかりでなく、御自分までお捨てになりました。』

『御自分まで……？』

『お宅を出ておしまひになりました。』

『といふのは、あの、吉原の……？』

『さうでございます。』

五秋さんは歎息するやうにいひました。

吉原の富貴樓。―それほど大きい店でもありませんが、古いのと、客あつかひのいゝのとで聞えてゐました。―枯華さんはそこの一人息子。―體の弱いため三田の學校へ行つてゐたのと途中でやめ、鎌倉へしばらく用養生をしてゐる間に所在ないまぎれに覺えた句をつくることがこの上ないなぐさめになり、東京へかへると、すぐ、傳手をもとめて小梅の宗匠のところへ弟子入をしました。―瓦町の住居のはうから、渡しをわたつては、毎日のやうに水戸さまの裏までかよひました。―十四五年もまへのことになりましたが……

露心堂でやる月々の運座。―そのときにわたしは顔を合せるだけでしたが、めき〳〵、目にみえて枯華さんは上手になりました。―それには若いに似ず、無口で、控へ目で、氣ぶつせいなほどしづかな性來でした。―金のある、ことにはさうした稼業のなかに育つたにしては、また、めづらしいとわたしは思ひました。

そのうち、だん〳〵、心安くなり、とも〳〵外へでて、何か喰べたり、一と晩泊りぐらゐの遊山をしたりするやうになりました。勿論、さういふとき宗匠なり五秋さんなりがいつも一しよでしたが、それにしても枯華さんは、運座でみ

るときと少しもかはらず、默つて、たゞ、周囲の話を聞いてゐるばかりでした。——みかけによらず左のきくのに驚きましたが、でも、のめば飲むほど輪をかけて陰氣になりました。——わたしの一まはり下の丑で、そのころ、まだ、二十二三でした。

その後、また、拈華さんは、躰を惡くして鎌倉へ引つ込みました。たまにしか東京へ出て來ないので、自然、わたしとは一しよになる機會がなくなりました。——だん／＼話を聞くと、躰を惡くしたといふのはいひたてゞ、ありやうは、親御さんとのあひだに何か折合のつかないことがあつて、それで東京を離れてゐるのだといふことでした。——さうしたこともあるかも知れないと、聞いたとき、わたしは思ひました。

それから八九年。——わたしのはうにもその後いろ／＼出入があり、まへのやうに月々小梅へ行くこともなく／＼なつて、宗匠とも、五秋さんとも、だん／＼交渉がなくなりました。したがつて、拈華さんとも、春、年始狀のとりやりをするだけのことになりました。——それも、こゝ、三四年は、いまゝでの自分とすつぱり緣を切るつもりで義理は缺き放題、附合は捨て放題。——生れかはつた料簡で通拒することにきめたまゝ、拈華さんのはうから忘れずにその音沙汰をして來ても、わたしのはうからは、わざと、何ごともしずにしまひました

で、五秋さんのいふところを聞くと、拈華さんの、その、うちを出たといふことは、やつぱり親御さんとの間がつまりはうまく行かないからでした。——十年まへのもつれがつまりはさういふ大詰をみせることになつたのでした。——どうにもならないことは、拈華さんと親御さんたちと、ものゝわきまへの大根でちがふこと。——まるでその住む國をお互に違へてゐることでした。……

で、まア、お父さんといふ方は、始終、温泉まはりをして、三百六十五日のうちもの〻十日とお宅においでのことはござ

いませう。」五秋さんは、暫くして、盃を下へ置きながらいひました。『おい、さう、おきまりになつて……』

『……』

『で、お宅のことはすべて、おつ母さんが采配をおふりになります。・奉公人の始末からお客のさばき、うち外の附合。――何からなにまで一人で切つておまはしになります。』

『よほどしつかりした方とおみえになりますね。』

『よくは存じませんが、吉原で、富貴楼のお内儀さんといへば評判の方ださうでございます。』

『……』

『そのなかへ拈華さんの。――でなくつても、もと／＼あの稼業を嫌つておいでの拈華さんの納りやうがございません。――止す、――あの稼業だけは必と止す。――あの何にもいはない方が、それだけは、はつきり、わたくしに以前にさうおいひになりました。』

『が、それは？』わたしは五秋さんにいひました。『さういふ約束がいつおありになつたので……？』

『一昨年でございます。』

『一昨年？』

『うち明けたお話が、實は……』五秋さんはかぶせて『一昨年が師匠の先代の三十三年になります。師匠のつもりでは、拈華さんにみとめをつけた以上、それこそ十年もまへからの發願で、一日も早く、話だけでも決めて置きたかつたのでございます。――が、うつかりしたことをいたした日には取返しのつかないことが出來ります。――誂くり手合がどんな謀反をいたすか分りません。』

「…………」

「師匠の氣性にいたせば、新參だの故參だのをいふことぢやアない。自分でみていゝといへばそれでいゝ。――どこからも故障の出るわけはない。――それにはまア違ひなくつても、露心堂の跡目として、何といたしても、まだ、拈華さんではお年のところに不足があります。――無理にさう急ぐこともなければ、三年でも五年でも待つて、これはといふ時機をみて、そのときにお決めになつても遅くはないと思ひます。――と、師匠にさうわたくしの申したものは、つまりはその時代の二十三年。――わたくしはそれをみ越して、そのときになれば拈華さんも幾つになる。――さうすれば開闢のふせぎもつく……」

「なるほど。」

「それが、あなた……」五秋さんは急いでそれをうち消すやうに「反つてそれが仇になりました。」

「…………」

「いよ／＼その話を持つて行かうとなつたとき、――持つて行かうにも、もう、拈華さんは、そのとき東京にも鎌倉にもおいでがありませんでした。」

「それは？」

「どこぞへ姿をおかくしになつたものです。――お宅をお出になると一しよに……」

「…………」

「で、まア、さうかうするうちに大阪においでのことが分りました。――とにかく東京へ歸るやうにといふ師匠の申しつけを持つて、わたくし、大阪へ出向きました。――當分そこに落ちつくおつもりで住吉といふところに、一けん、

[illegible]

「伴吉といふと、あの、堺の……？」

「有名だといふ燈籠のあるところでございます。」

「燈籠の？——あゝ……」

「で、お逢ひして、師匠の存じよりをくわしくお話しすると、師匠の被仰りつけならば、では東京へかへることにいたします。——が、名跡のことだけは平にお許し下さい。……」

「……」

「押返していへば、これまで御厄介になつた栝葉は、もう、死んだものと思召して下さい。……」

「……」

「止むを得ません。——もどつて、師匠に、そのまゝを申しました。——師匠は、たゞ、仕方がない。——それだけでございました。」

「……」

「で、話はそれつきりになりました。」

「……」

「つまりは、わたくしの、大切をとりましたのがいけなかつたのでございます。——五秋さんは、いまさらのやうに、身にしめていひました。——早くにことを運べば、師匠の念もとどきましたでせうし、栝葉さんも、また、露心堂の名まへの手前、ことによつたら、さうしたこともなさらなくはなかつたか。——これは、まア、愚痴でございますが……」

『しかし、それは……』

いひかけたもの丶、さて、何とつゞけたものかとわたしは迷ひました、

『勝手なことばかり申しまして……』急に五秋さんはわらつて『折角、坊ちやんと、水入らずでおいでのところを……』

『とんだこと。』ともぐ\わたしも笑つて『が、何でございますか？――立入つたことを失禮ですが、拈華さんのその大阪へおいでのとき、拈華さんお一人でございましたか？』

『それは、まア……』五秋さんはわざと外らして『よろしきやうにそこは……』

『以前仲の町にゐた方ぢやアございませんか？』

『どうして御存じでございます？』

『いゝえ、それは……』

『やはり蛇のみちは……？』

『御戲談を。』わたしは、わざとまた、わらつて『このごろは、もう、お目にかけたいほどの辛抱人でございます。』

『何んでございますか、當節は？』それにのつて、五秋さんは、話をそのはうにふり向けて『始終、お宅に……？』

『このごろは、御存じの、伯父の店に厄介になつてをります。』

『と、あの、茅場町さんの……？』

『さうでございます。』

『それは、まア、結構でございます。』

『藝が、身を、助けるほどの不仕合。――まさかに、わたくしも、道具屋をわが稼業にいたさうとは思ひませんでごし

たら。

「から申しては失礼ですが。石秋さんはまだお若いし、あなたほどのお下地がおありになれば、もう……」

「いまとなりますと、以前の、親代々の職甲斐がいつそ懐しくなります。」

さういひかけて、ふと、石秋さんのことに気がつきました。――石秋さんも、以前は、小川の和田町で伊勢利といつてはかなり聞えた質屋さんでした。

「お宅さまでは、皆さん、どなたかお参りには入らつしやいませんか？」

石秋さんは話の切れたところでいひました。

「有難うございます。――実は、昨年、これのおふくろが亡りまして……」

「あの、御新さんがでございますか？」

「へえ。」

「それは〳〵、――少しも存じませんで……」

「……」

「お寂しくつて入らつしやいませう、それは……」

「漸く、まア、すこしは馴れましてですが……」

「昨年の、しかし、いつごろ……？」

「暮れでございます。――十二月もう押しつまつたところで……」

「……」

『申すと、今日も、日曜といふところで、子供とその寺詣りにまゐつた、いま、かへりでございます。』

『さうで入らしやいますか。』

五秋さんの、さう、沁々うなづくやうにいつたとき、『お待ち遠さま。』とばかり、お茶の土瓶と一しよにお鉢がまへに運ばれました。

『では、失禮ですが……』

『どうぞ……』

五秋さんが伏せてある茶碗のいとぞこへ手をかけるのをみて、わたしも、わづかまだ殘つてゐた銚子を何といふこともなく取上げました。

建仁寺にさしてゐた日かげもいつか消えて、庭のうへは、鷄頭も、とび石も、燈籠も、何のことはない、枯々としたうすら寒いなかに、あきらめてもう首をさしのべてゐるかたち。――座敷のなかに目を返すと、つきあたりの鴨居の、硝子を着せた七福神豆撒きの圖の古い額のうへが、冷めたく、夢のやうに光つてゐます。……――火鉢のうへに湯豆腐はさびしく、こと〱音を立てゝ煮くたれてゐました。

『どちらへか、是から、おでかけでございますか？』

わたしは五秋さんにいひました。

『いゝえ、わたくしも、たゞいま金杉までまゐりましたかへりでございます。』五秋さんは答をやすめて『もしや石翁さんを覺えておいでゞはございませんか？』

『石翁さん？――えゝ、存じてをります。――宗匠とはたしか古い御馴染の……？』

『さうでございます。――あの方が、七日、急にお亡りになりまして……、
『…………………』
『明日がその初七日になります。――それで一寸、師匠の名代に……』
『さうでございますか。』
『俳諧にのこる律義の寒さかな。――いかゞでございます。』
『さア、それはもう……』
『今日、その、とゞけました短冊の句でございます。』
『あゝ宗匠の……?』
『へえ。』五秋さんはこたへて『師匠もだん〳〵さう仲間は減つてまゐります。――一つにはそれも心細いだらうと存じます。』
『で、これから、小梅へまたおかへりでございますか?』
強ひて、わたしは、話をわきへさそひました。
『すぐにもどります。』
『では、恐入りますが、おかへりになりましたら、どうぞ、宗匠へよろしく被仰つて下さいまし。』
『承知いたしました。――あなたにお目にかゝつたと申したら、師匠は、まア、どんなによろこぶでございませう。』
『…………』
『枯華さんのことは、師匠、わざと何にも申しません。――が、雨紅さんはどうなすつたらう、どうして、ふッつり、

顔をみせたくなつておしまひなのだらう。——いまだに、折々、思ひ出したやうにあなたのお噂をいたしてをります。」

「申譯がございません。」

「おついでもございますまいが、もしあの邊にお越しでございましたら、一度、どうぞ、お立寄下さいまし。」

「有難うございます。——もう少し、まア、身のまはりが片附きましたら、必ず、そのうちおうかゞひをいたします。」

「お待ち申してをりますから、是非……」

「が、何といたしましても子もちで……」わたしは笑つて「店からかへりますと、もう、子供の相手でございまして……」

「あゝ、なるほど……」

「運上し切つてをります。」

「ですが、坊ちやんは……」五秋さんはつく／＼「音無しくつて入らつしやいますね。」

「はにかみやで困ります。」

とも／＼、わたしも、清一のはうに目を向けました。——清一は、默つて、庭のはうに顔をそむけました。

間もなく、五秋さんは、わたしたちよりさきへかへりました。——お茶漬をたべて、わたしたちも、それから二十分ほどしてそこを出ました。

空は、濃く、一ぱいに、先刻と同じに晴れ切つてゐました。が、往來にはもう日のかげはなく、どこの軒さきも、日のすでに翳つて來たのを知らせ顔に暗くなつてゐました。——思ひもよらず逢つた昔なじみに呼びさまされた不思議な心もちをみまもりながら、わたしは、ぼんやり坂本のはうへあるきました。——露心堂の宗匠でも、拈華さんでも、五秋

きつとも　いまにわたしとおなじくおたまへつたい人たちの言葉みたいな、おたまへのない故にさびしいやうに、ほた
たく、しらない…と胸にうかびました。

「うちへかへつて、今夜は、寄席へでも行きませう。」

わたしは清一にいひました。

『えゝ。』

清一は素直にこたへました。……（十三年八月）

「寂しければ」といふみだしの下に、わたしは、この雨紅といふ主人公を中心にした五六人の人たちの話を作からと思つてゐる。これはその一つである。続いて書くわたしの第二の話第三の話を讀者が続いて讀んで下されば

これに越すわたしのよろこびはない。（作者）



職工と微笑

——詳くは微笑を恐怖するセルロイド職工——

松永延造

序言

私は當時、單なる失職者に過ぎなかつた。とは云へ、私自身とは全體何んな特質を持つた個體であつたのか？ 物の順序として、先づ其れから語り出されねばならない。

別段大きな特質を持たぬといふ點が私の特質であつた故に、私は私自身に就いて、其れ程長い説明を此處で試みやうとは思はない。正直と簡單とを尊重して、私は次の事丈を讀者に告げ得れば、もうそれで滿足である。

私は一時、小學校の教員であつた。そして直きに免職となつて了ふ事が出來た。何故免職となり得たか？ 日本語の發音及び文典の改良策に就いてと、それから小兒遊

校庭の真中に立つて校長と[illegible]した時は、私は自分[illegible]、[illegible]てしまつた。[illegible]りこもつたからである。彼に其の思想がいけなかつた。もくもない私の世界[illegible]。話ないはなかつたのであ[illegible]そ[illegible]歸つて置くが、私は何んな場合でも過激を逆慮する内気た人間の部類に属し、歸つて年老いた校長よりも進取的な気質に満ちて、堕落しても好いから、新しいもの！——と云ふ希求を胸間に立てゝゐたの一人であつた。従つて、此の場合一は、世間に好くある新旧思想の衝突と云つたやうなものが極度の状態で醸成されたのである。

少し冗長になるが、これを我慢して話すならば、校長は恐ろしいエスペランチストで、幼稚園の生徒へ向つて迄、此の世界語の注入に熱心したのである。光を受け入れる若芽のやうな学童たちは珍らしいものに対して覚えが早かつた。彼等は花や樹の実の事、又「嬉しい嬉しい。」なぜと云ふ事を皆エスペラントで話し初めた。そして私が「ボーイ、ボーイ」と叫んだ。

此の「ボーイ」が校長に取つては悪かつた。彼も私が危険になつてから直き矢張り同じ運命になつてしまつたのである。

こんな事は何方でも構ひはしない。話したいのは、もつと別の点である。私は一体それから何うしたのか？勿論喰ふに困りはしなかつた。否、寧ろ充分な閑暇を利用して、少しばかり学問を初めさへしたのである。そうして、一年計りの内には、三流文士として、四流の雑誌へ、小さな創作を掲げて貰へる程に出世をした。

私の創作が勝れたものか、それとも、極く平凡なものか、は私自身も未だ判定する事が出来なかつた。そして勿論多くの一流批評家は私の作に目を通しては呉れなかつたのである。彼等は悪いものには注意しなかつた。そして恐らく良いものも同じ運命にあつた。

私は試みに、私の作風の一例を此処に引き出して見やう。

其の人が通過した跡

其の人は自分の母親を連れて歩いてゐた。彼の足は眞直ぐで、母の背は曲りかけてゐた。彼は少しもクタビレないけれど、然も母親のクタビレたのを察する事が出來た。

『心が行き達き、他の心を察する事』之がその人の特性だつたのである。

『お母さん。私は一度丈貴方を自動車に乘せて上げたいと思ひます。』と子は云つた。

『お前は私がクタビレたと思つて、そんな風に云つて呉れるが、私は未だ歩けますよ。それにお前の足は大變活潑で、もつと地面を踏みたがつてゐますよ。本當に若い中は高い山なぞを見ると、直ぐそれへ登つた所を想像する程だもの、然し年をとると、そこを越さずに、向うへ行ける道はないかと探すやうになるのだね。』と母が微笑んで答へた。

けれども其の人は自動車を呼んで、それから運轉手に訊いた。

『B迄行くのですが、車の何方側へ多く日が當りますか。』

『右側ですよ。』と運轉手が答へた。

『では、お母さん。私が右側へ座ります。お母さんは日影にお出でなさい。』

之は暑い日の出來事であつた。眠相であつた運轉手は不圖目を上げて、幾らか恨めし相に青年とその母を見やつた。彼は吐息を一つすると、直ぐ車を動かし初めた。走つて居る間中、運轉手は故郷へ置いて來た自分の母親の事

たゞあれからこれと伸び続けるのであつた。十月程前、手紙で催促を出し、小間の金を送らせて、やつと若者達の色いおめに費して了つた事か、彼自身にも目出しくて、皮に無ふこて大きく破滅をさせて、それから、へとへと……へて、怨りの道をし、車上の老いた人へ目光を突いてやらうかと考へたか、不意に眼へ一杯い涙をためて了つたのであつた。

親と子は車を降りたつた。残つた運転手は郵便局へ入つて、母へ宛てた為替を組んだ。それに添へて、「お母さん、丈夫かね。日中だけは畑へ出ず、體を大切にして下さい。」と下手な文字を書きつられた。

田舎で、息子の手紙と、いくらかの金を受けとつた母親の喜びは何んな風であつたか？まして、それが一度も子供から親切にされた覚えのない母親であつて見れば、尚更の事である。

母親はよろけ乍ら、隣家の方へ駈けて行つた。然し、此の喜びを、さうたやすく他人に打ち明けてはなるまい、と思つたか、再び我が家へ走つて来て、襟を上げて、息子の簡単な手紙を読んだ。序の終りの方は小鳥のそれのやうに顫へた。人が文字以外の文字を讀むのは實にそんな時である。簡單は立派な複雑になり、ほんの西瓜の見張り小屋のやうな文章が、何だか有難く荘厳なお寺様のやうになつて了ふのである。

母親は誰かしらに此の喜びを分け與へねば、自分の體がたまらないやうな気がして来た。それで家を出て見る。と、彼の女が貸した金を仲々返して呉れない男の何人目かの子が、直ぐその弟を背負ふた儘、転んで了つて、重い負擔のために、起き上る事も出来ず、藻掻いてゐるのに、行き會つた。母親は急いで、子供を抱き起し、「可哀相に・・」と繰返した。

「之は利息だよ。」と子供は帯の間から十銭の紙幣を二枚出した。

老いた女は少し顔を赤くして考へた。お金が哀れな人の所へ行つて、利子と云ふものを盗むで歸つて來ると……

『そのお金は少いけれど、お前のお父さんと、お母さんが、暑い日中、畑へ出て、働いて出來たのだね。それは暑さの施つたお金だね。あゝ暑い日中丈は畑へ出ぬやうに……』と老いた人は獨語とも祈りとも判明しない言葉を、天に向き、又地に向いて呟いた。

それから彼女は二十錢を可愛い子供に與へ、子供はその半分で果物を買ひ、半分で鉛筆のやうな品を求めた。

さつき迄意地惡くしてゐた子供は大變に嬉し相に飛び立つた。さうして、自分の家の鳩へ、他所の犬をけしかけるのをやめた。

子供は何かしら三つ許りの歌を一緒に混ぜて歌ひ乍ら、庭に落ちてゐる鳩の拔け羽を拾つて遊むだ。

『斯んなにして、毎日羽をためたら、今に姉の枕が出來やうか？』と子供は母と覺しき女性に尋ねた。

『丹精にしてゐれば、出來相もないと思はれた色々の事さへ、思ひがけぬ程早く出來るものだ。』と母らしい人は答へた。

此の有樣を巢の入口で眺めて居たのは年をとつた一羽の鳩であつた。

鳩……この小さい腦髓は何を考へて居たであらう。鳩は何度か首を傾け、あたりに犬の居ないのを確めた後、恐らく次のやうに鳴いた。

『自分が惜しく思はれる品を、思ひ切つて人に與へても、その品を人が、自分と同じやうに大切にしてゐるのを知るのは、何とも云へない喜びである。』

我々は思ひ出す。自動車へ乘つた、さきの母子は、唯街路の一角を通つたに過ぎなかつた。けれども、その影は進

[illegible]手の手紙と共に、田舎へ走り、老いた母親のもとに歸り、[illegible]思ひやりも、それか[illegible]て居る故に、火りに、思ひ深くもたどらなかつたのである。平静あたり前の深切、[illegible]の輪のやうに、動いて他の方へ行くのは面白い事である。

…………………………………………

讀者は倦怠したであらうか？振り返つて云ふが、私の小品と云ふのは以上の如きもので代表されるのであつた。それは簡單で、從つて未熟であらうか？私が教員時代に學童へ向つて熱心に話した訓話の痕跡が取り切れて居ないと、讀者は叱責するであらうか。

それは何うでも好い。話は實に之からなのである。

機縁とは何であるか？何處が初まりで、何處が終りなのであらうか。私には何も分らないが、或る雨の日に、ある濡れた青年が、私を訪ねて來たのは確かな事實である。

彼は幾分か私を尊敬する風であつたが、さうかと云つて彼自身の傲慢を強ひて隠す程でもなかつた。彼は概して陰欝であり、時に不思議な嘲りに似た笑ひを洩らした。彼は一個の勞働者であると告白したが、そんな低い階級に似ず、恐らく私も及ばぬ知見を持つてゐた。低いものが高いものを持つ……之は一種の害に似たものではあるまいか？

彼は自身が經驗した或る事件に就て、一つの傳記風な小説を書きかけてゐる事、それを順々に見て貰ひ、批評して貰ひたい事を私に告げた。

『私が何んな奴だか、今に背別つて來ます。すつかり分つて了ひます。』と少し氣味惡い動作の青年は悲し相に吝をふるはした。

軈て私は何を見、さうして驚いたか？

私の前で知らない不思議な世界が此處から開け初めた。青年の文章は暗い光とでも云ふものを以て私の胸を照らした。此處には『神聖なものへの反抗』があり、私の心の中には見出せない複雑な考へがあつた。

『惡』それが主位を占め、そして君臨する所の精神を、私は單なる心理學的興味からでなしに、もつと異様な驚きと嘆きとで見入つた。私はそれに引つけられ、又蹴はなされた。それにも拘らず、私は彼の青年へ何處迄も接觸して行かうとする勇氣の爲めに立ち上つた。あゝ此の青年が何んなに私の平安な生活を破壊して現れたか？それは後に明白となるであらう。

彼の青年は確かに私達とは別な性質を到る所で發露した。たとへば、彼は面識なき牛肉の配達夫へ、いきなり聲を掛ける事が出來た。

『お前は、自分の配達してるものが喰ひたくはないかい？』と彼は對手の肩をたゝいた。

配達夫も亦、この行爲をいぶか　なかつた。尤もそれが彼等の慣例なのである。

『喰ひたくもなるさ。けれど、私の厭に思ふのは、自分の飢ゑてゐる事ぢやないよ。自分が何かを人に與へ得ない事だ。』と配達夫は答へると、黒い表紙の書物で、青年の肩を打ち返した。その書物は聖書だつたのである。

『ウム、そんな事もあるな。たしかにある。私の知つてる貧乏な婦人は、ある大器の家の子に、一錢を握らせて、大きな聲で嬉しがり乍ら飛んで歸つて來た事がある。奴は善い行ひをしたのか……それとも復讐をしたのか……自分でも判らないのだ。唯、俺は與へたぞ、與へたぞと叫び乍ら、地面へ、へたばつて了やがつた』と青年は厭な表情をして答へるのであつた。

と思ふと、青年は全く未知な他の労働者に行きかけたる事がある。

『ヤイ、何をボンヤリしてるんだ。貴様、自分で立つてるのか？それともそこに落つこちてやがるのか？』と未知の男は叫むだ。それが矢張り暗にかなつてゐるやうでもあつた。

『落ちてゐるんだとも。だが、そりや、上つちまふより安全なんだぜ。』と我が青年は答へた。

『洒落やがんない。俺が分らないのか。今俺の友達の奴はな。蒸し釜の蓋のネジがゆるんだんで、それを締め直しに、大きな釜の蓋の上へ登つたんだ。それから、ネジを締めたんだ。すると、ネジの奴、金が古くなつてゐるんで、ボキンと頭がモゲやがつたんだ。おい。こつちをちやんと向かねいかい。それで、釜と蓋との間から、蒸気が噴き出して來てな。その力で他のネジも皆一偏に頭がモゲて、パーンと云ふと思ふと、もう工場中は湯気で真白に蔽つちやつたんだ。すると、上の方でボーンと云ふんだ。ハツと思つて見ると、屋根が吹き飛んで、大きな穴から青空が見えるぢやないか。そして、あゝ、眼をつぶつて呉れ！俺の友達の奴……まるで吹き矢の矢のやうに、その穴から、空へと吹きつ飛ばされやがつた。急いで外へ出て見ると、俺のすぐ前へ、ドサンと肉體が落ちて、弾みもしないで、タ、キへのさばりやがつた。グサツと音がしたんだ。おい。こつちを向けい！友達はそれでも死ねないで唸りやがつた『苦しい、苦しい、』と叫びやがつた。當り前よ苦しくない譯が何處にあるんだい。』酔ひ痴れた未知の人は、さうして自分の道を歩いて行つて了つた。

青年は暗い顔になつて呟いた。

『人がそんな風に鞠のやうになつて好いのか？人が？』

けれども讀者よ。人は色々な他のものになる虞れがある。現に此青年も何かしら他の奇怪な存在になりかけてゐる。

であつた。それを證明するため、私は彼の自傳をこゝに掲げたく思ふ。

次の章に於て、今後「私」と云ふのは、實に「彼」の事なのである。もしくは「何時か善良に歸る惡しき靈」の事なつたのである。

………………………………

玩弄さるゝ美

一番初めに云つて置きたいのは、私が物質上の貧困者であるに拘らず、贅澤過ぎる心を持つてゐるといふ惡い慘めな點である。斯んな外部條件中に投げ出された斯んな靈と云ふものが、何んな變化を取つて行くか單に空虚な妄想を追ふ事の他に、私はもつと現實に接近した慰安を求め得なかつたであらうか。人々は次の言葉を何と思ふか

妄想と現實との中間に座つて蠢めく私は、確かに又、假定と實際とを折衷しつゝ何かしら、諦め深い、そして優雅を通り越して、兒戯に近附く類の慰安で自分を飾り得たと思つてゐた。例へば、何んな紙——物理的に汚れて鼠色になつたのでも、化學的變化の爲めに黄褐色になつたのでも構ひはしない。でも自分の手に入つて來ると、私は其れからエジプトのスフインクスを切り拔き出したものである。成程、自分の前には平面なスフインクスが幾匹か現れて來る、之は物質に形を借りてゐる。唯平面である點に、多量な妄想と空想が盛られてゐるのである。私は何うかせめてバスレリーフとしてスフインクスをセルロイドからでも刻み出したい。それは此の慘めで汚い貧困に聊かでも敵對する心の贅澤である。

した人間だ[illegible]。

る。肉を咬にして燃したがら、空想の焔の料にする者、静かに座つてゐるつまらない前の人間であるか、[illegible]に闘はれ貧困こそは理性のものに相違ない。賭博者、ピストルを商賣道具にする男、単純な無頼漢、彼等に紛はる貧困のながが、まだまだ私の額よりは光明を持つてゐる様である。

宜敷い。私は獨りで居やう。昔式の羅馬兵が持つ鉄瑕の灯の廻りを黒い程赤いガラスが覆る様に、私の周圍は他人から隔てられてゐる。私は此處で昔の朝鮮人でもした様な習慣的な空想を現實と妄想との中間的態度を持つものとして味はう。

例へば、此の室の床が斜めに傾いてゐるとすれば、それは悪い建築法の爲めではなく、此處の地盤が、雪の爲めに清透となつたアペニン山脈中のある山腹に位すると考へて置かう。此の壁が破れてゐる事には唯古典的な風雅丈を見出さう。人々はセーゼの書いた文書が破れてゐなければ、立派ではないと云ふであらう。時と云ふ風雪は唯一の装飾法を知つてゐる。それは物を少し許り破る事で、全體をメッキするのである。此の方法は私に依つて『支那式美術』と呼ばれてゐた。何となれば、支那はその建國が古過ぎて、物を凝集する惰點を通過して了つたと云ふ様な點からでになく、あの國のものは凡て不足と欠亡で飾られてゐるからである。彼の國で多過ぎるのは唯料理の數丈ではないだらうか。『之は厭な云ひ廻しだ』と聽き手は私の鬱陶しい衒氣を瓦斯の様に嫌ふに極まつてゐる。其れに何の無理があらう。私も自分自身が随分厭なのだ。

それにも拘らず、いや、寧ろ、一層悶々しく、私はウツラ〳〵と考へ續ける。何を？凡て外國の骨董品の事をである。メソポタミヤ人は三千年前に何んな頬髭の生やし方をしてゐたか？斯んな考古學は厭世の一種であつて、自分の汚さに

困じ果てた人の息抜きに過ぎないのではあるが……

『私はもつと隅の多い室に住みたい。暗さは之で恰度好いから……』そして空想の中に於てゞはあるが、華麗な伊太利風な模様のある厚い布で白い光を屈折させ、銅の武具とか、古い爲めに暗くなつてゐる酒の罎とか、アラビヤ人のかつぎとかで、色んな色の影を造つて見るのである。私は菱形の盆を大きくしたやうな寢臺に平臥して、金絲の附いた天鵞絨の布團を鼻の下迄引張るのである。斯うするとまるで孔子の髯の様に長く、黑い布が私の足に達するであらう。

いや構はない。もつと妄想――即ち思想の腺を分泌せよ！

支那風な瑪瑙の象眼に、西歐風な金銀の浮彫りを施した一つ小箱には、自分の眼底迄が黑い瞳の闇を透して寫り相な磨きが掛けてある。その中には暗所に生活した爲めに、肉體力の弱り切つた子供の様に見える所の、或る秘密なミニチユアを二枚合せにして藏してゐる。それは海の中にある極樂の様に冷や冷やとした畫であるが、見てゐると記憶が亂れ切つて了ふ様に、四ツの焦點が注意を掻きむしる。自分が橋を渡つてゐるのだと思はせて置き乍ら、實は泳がせてゐると云つた様な譯の分らぬ畫、私の言葉が人々に分らぬ程、比喩に滿ちた畫だ。之より分らぬものが又とあらうか。恐らく此の畫には本質的な價値はないのである。唯何も分らぬ點が人々をして價値あるものゝ如くに眩視せしめるのである。斯んな例は世の中に澤山ある。

偖て、聽き手よ。貴方方が若しも犯罪心理學者であり、美と罪惡との不可思議微妙な關係に就て研究しつゝあるならば、私が上來書き來つた所の文體を檢査した時、必ずやその筆者が幾分か惡人であらねばならぬと云ふ推定を下す事が出來る筈である。

何故と云ふに、骨董屋の店頭を見る時のやうな、まがひものらしい美（それは本統の美ではあるまい。）の併列と云

へ、そ[illegible]の[illegible]な[illegible]

既の文字に表れた所は何等自然的な皮膚を患まれてゐない[illegible]或人間へ大切な[illegible]

あゝさう云ふ類の化粧を以つてのみ悪心を抱くものに生活する、その化粧は[illegible]文字の上へ[illegible]何ん
な種類の殺人が、一番藝術的であるか？」と云ふやうな云ひ廻しに於て、彼は最もいゝものを世間に見せやうとする。

或ひは又、諧怪と虚言との中に、彼の理想、即ち人を殺す事、をうまく嵌め込んで

「おい、君はB市の市長が床の上で死んだと思つてゐるから、お芽出度いね。ふゝ、秘密を知つてゐるのは私丈だよ。
實はね。實は、R公園でグザツとやられたのさ。お供のやつが大急ぎでその死骸を家へ運んで了つたんだ。それで……
つまり……床の上……と云ふ事になるんだ。いや、調べてみると病氣で死んだ積りになつてゐる有名な人々が、殆ど非業な最後をやつてゐるのさ。」

斯んな虚言程無氣味なものがあらうか。斯んな虚言を吐く男の眼は何んなに上釣り且つ濁りつゝ光つてゐることであらうか。

眞に私自身も亦此の男の如くであらうか。おゝ、私は常に殺人の秘密な意圖で心を波打たせてゐる。私が殺してやらうと思つてゐる或る人間の眼が、泥の中や水の上へ浮んで腐つたやうに赤くなつてゐるのを見る。しかし、あゝけれど私は臆病な空想勝なにぶり返つた一人のセルロイド職工に過ぎない。

支那人　鮑吉

強いものは稀である、と哲學者は云つてゐる。成程、共れに間違ひはない樣だ。あつたとしても取り立てゝ騒ぐ必要

もありはしまい。如何にも、偉いものは稀である。だが、稀なものが必ずしも偉くはない。

その證據として、私は今でも明瞭に思ひ出し得る一友人の日常に就て語らう。私は實を云ふと、自分自身を語る目算なのだが、その目的の爲めに、却つて斯んな廻り道を取らねばならないのを悲しく思ふ。彼の事を話して置かぬと、私の話が出て來ない。だから、彼と云ふのは煙火の口火に過ぎないのだが、實はもつと濡れて濕氣の多い所のある男である。

『彼とは何んな男だ?』

世界には塵芥と同じ數丈の謎がある。一日中、人と會話しないでゐてさへ『何?』が私の心の中で醱酵してゐる。

『彼?何?』それを簡單に之から話さう。

私は一時自分が犬殺しをしてゐた事を全然忘却してゐた。其れを悲しく想起せしめたのは支那人の鮑吉である。そして、彼は私が犬殺し屋であつたのを知ると、大變に悲嘆して私から段々遠退いた。其れは極めて自然の成り行きである。何故なら、彼は恐ろしい人間嫌ひで、その代りに、動物植物の異常な偏愛者であつたのである。然し、鑛物は彼の注意を少しも惹くことが出來なかつた。奇妙である。

彼は竹が一番好きである『竹と竹、コチコチ當る音、宜敷い。』と彼は好く云ふのである『竹の挨拶』と彼は其れを呼ぶ。

『世界で一番美しいものは何か。』と私が尋ねた時にも、彼は躊躇なしに答へた。

『雲雀!雲雀、天の息を飲む。』

彼は自ら飼つてゐる雲雀を朝早く空へ放ち、其れが歸つて來て、彼の手の甲へ乘る時、嘴の先に附いてゐる『天の氣』

――それは何かしら分子の様なもの　を自分の鼻孔へ吸ひ込むのである。何たる愚かな形式であらう。然も此の形式を彼は他人風に尊重し、何か魂の薬になる事だとさへ信じてゐるのであつた。

彼は又、日本人趣味を多分に持つてゐて色の殆どない様な朝顔、夕顔、竹葉、實につまらない断腸花、合歓、日々草、なぞを、崇め奉つて、その花や葉の葉を貯めて濃い顔をしたりする。彼は花を見ては好く感傷するが、然も實を云ふと彼の靈は蓮根から出る糸の様に、冷たい、柔かい、青い、植物臭いもの、又ある種の蟲の間臭も混入し、眠つた昆蟲類の様にソツケなく、もし、何か光が出るとすれば、それは夜光蟲のと同じで、水の中にある様なものでなくてはならない。それ程彼は沈み勝ちで、何だか、夜陰の川をゆつくりと流れる浮燈籠の様でもあつた。

要するに、彼は一番眞面目に生きてゐると信じ乍ら、然もやつてゐる事が皆遊戯たのを知らぬ人間である。例へば、彼は蟻を夢中で見詰める。その夢中な有様は少し狂氣を交へてゐる。何も知らない蟻の方では、力一杯に腐つた蛙の子を運むでゐる。

『お、、何て一生懸命、可愛がつてやらねば……』彼は涙ぐむで、蛙の腐肉を蟻の穴へと手傳つて運むでやる。けれど、若し、街頭で子を背負ひ乍ら車の後押しをしてゐる人間の女を見るならば、彼は眉をひそめて、態と眼を閉じて了ふ。『耐らない、汚い。』のである。彼は病氣で歩けない雨蛙は好きであるが、本當の病人――私――なぞをあまり好かない。『此の蛙、風邪引いてゐる。お湯飲まして、寢かしてやる。』之が彼の持ち前である。

或る男が、生きた竹を切つてゐるのを見掛けた時、彼は額の上の方迄、眉毛を持つて行つて了つた。實際、彼の眉毛は好く動く。そして、普段でも、眼から二寸は離れてゐるが、驚いたり、怒つたりする時は三寸五分位に隔たる。もつと驚いたら、後頭部の方へと廻つて行つて了ひ相な氣さへする。西洋人は怒る時眼を瞠つて、隱れてゐた白眼迄を現

すのであるが、支那人は巳に、顔面へ既に現れてゐるものを、頭巾を冠つた頭部の方へ隠すのである。改めて云ふが、彼は正直に怒つて了つたのである。『それ、いけない。』

それにも拘らず、竹屋の前を通る時、死んで竿になつて了つてゐる竹が、亡霊の様に立つてゐるのを見掛けたとて、彼は何とも思ひはしないのである。『貴方、西瓜の果、食べる？』と掌へ乗せた黒い粒を私にすゝめる丈である。

私は考へた。何故彼は人間の私よりも病氣の蛙を愛し、人間の奴隷よりも動く蟻に熱中するのか。又切り掛けの竹を憐れがるのに、切られて了つた竹を恐れぬのか。

最初の方の疑問は直きと解決される機會に到着した。彼が二寸方形位の寫眞のファインダーを、自分で造つて持つてゐる事から、私は氣附いたのであるが、彼は自然大の自然物よりも、此のファインダーの擦り硝子へ映る小さい影像の方に何れ程愛着してゐるか分らない。

『あゝ、煙突からパーと煙出る。煙草よりもつと、もつと小さい。それ可愛い。』

此處に於て、私は判定する。小さくなくては彼の愛を買ふ事が出來ない。蛙は人間を縮小したものとして彼の眼に映するらしい。

之は勿論全體を蔽ふ解決ではない。然し、重要な部分の様ではあるまいか。

次が、竹の生死問題である。彼れは切られる竹を惜しむのに、死んで行く人を祝福する思想家である。此の矛盾の爲めに、私は彼の魂を攫る事が出來ない。其處で直接彼に質問して見た。

『何故、生きてゐる竹を切る時は、眉毛動かすか。そして何故死んだ竹が並んでゐても眉毛、其儘か？』

『何も不思議ない。死んだ竹、もう竹でない。竹と同じ物質よ。』

此の答へを聞いて、私は呆然として了つたのである。

彼が小さい物を愛する所から、私は彼を『玩具人』と呼ばうと思つてゐる。そして、凡て死殻を蔑視する點に於ては、彼を『蒙古の阿々教徒』若しくは『神代に於ける日本の神々』と呼むで居るのである。

考へ直して見れば、彼も大變可哀想な人間である。私は彼の造つた汚いツアインダーを借りて、彼の衣を覗いた事がある。彼の丈は高いが、弱い樹の様である。それより露西亞のボルツオイとか云ふ犬が一層彼に似てゐる様に思はれる。その犬の敏捷な點がではない……眠相にしてゐる姿勢丈がである。

彼は外れた方向へ走る歪むだ球である。少し藪睨みで、この上愛の筒口が逆ふ方を向いてゐる。彼は人間を忌避し恐怖する。彼はあらゆる人間が意地惡く、斧で彼の腹を覘つてゐると想像する。彼はブツ〳〵と呟き乍ら、花と蟲とへ行く。そして春になつても尚、蓮根の様に冷たい穴だらけの魂を抱いてゐるらしい。彼の魂は彼の肉體よりも先へ年とつてゐる。千年も生きて了つて、もう仕方なくなつてゐる山椒魚が黒く濕氣た落ち葉の堆積の下に、うづくまつて、五分若しくは十分間に一度づゝ呼吸してゐる有様に似てゐるのである。

犬殺しの考へ

一寸した遠慮から、私は變態的な心理を持つ飽吉を自分の友であると云つたが、實は、彼こそ私の友であると同時に、私の本統の父であつたのを告白せねばならぬ。恥かしいけれども私はある靴直しの娘と此の變妙な支那人との間に出來た混血兒なのである。だが私の心が曲つて了つた一番初めの原因は父の血のみに歸さる可きでない。私が道を歩く度に、近所の子供から侮辱され、石を投げられ、時にはつめられたりした事が皆重要な元素であつた。彼等は何時でも私を

憐み乍ら注視してゐた。そして私の汚い日本服の下に支那風な胴着をでも見やうものなら、彼等は犬のやうに吠えたてゝ、私の恥を路の眞中へと曝け出した。

「お父さん、私ばかりを皆がいじめる。私許りを見詰めてゐる。露路から抜けやうとすると待ち伏せをしてゐるし、大通りを歩くと皆が二階の窓から眺めて、唾で丸めた紙を投げるのです。」私は斯んなふうに子供らしい嘆きを洩した。けれども私を愛さぬ父は彼自身の少年時代が矢張り之と同じだつたと答へた。そんな嘆きは段々と凝集して大きい塊りになつて行き、あゝ遂に全然別のものへと變態して了つたのであつた。

誰に向けられるのでもない漠然とした怨恨の情と、椽の下の蔭のやうにいじけた僻みの根性とが、私の心を兩方から閉さす二つの扉となつたのは極めて自然である。斯んな說明は誰も陳腐であるとして排斥する程、私の心の變化は普通の成り行である。

だが、私が十九才程に生長した時、一つの出來事が起つて、其れが他の出來事をさそつた。私の父は重い病氣の後に死んだ。母は既に約束してあつた男と早速何處かへ逃げ行つて了つた。遠く出稼ぎに出て居た私が駈け附けた時には、薄馬鹿の妹が小さく暗い家に足を投げ出して、何か考へ事をしてゐるのを見た丈であつた。考へ事と云つても別段分別の籠つたものではない。唯ウツラ／＼として時間のたつのを待つてゐた迄なのである。私も妹と一緒にウツラ／＼となつて行つた。何故か此の時私は自分が一年間でも故意に、犬殺しを家業にして來た事を深く後悔する事が出來た。私は泣いて妹に抱きついたが、妹は默つて足を投げ出してゐた。

「お前は奉公に行けるかい？私も之から何かの職人になるから……」と私は兄らしい情をこめて囁いた。

「犬ころしは止すの？」と無邪氣な妹が尋ねた。此の女は丁度その時十七才であつたが、知慧は大變に遅れてゐて讀書

もう何も出來ない仲間なのであつた。それにも拘らず、彼の女の魂はもはや大人並の生活狀態を有つてゐたのである。スペインの闘牛士のやうに美しい私は答へた。

「犬ころしもねム、それはあるだらう。お父さんもいやがつてゐたからね。けれどだね。私は時々思ふのだ、世間は寧ろムシヤクシヤ腹を立てさせて、一人の人間をもうすつかり自暴自棄にさせ、終ひには殘忍にさせる。そして、その吐口を何かしら世間の爲めに有效に使はうとする。世間は殘忍をも遊ばしては置かない。斯うして意故地な犬殺しが出來上る。氣狂ひ犬の數が減つて、嚙まれる人々が少くなる。うまいやり方ではないか。」

妹はノロく笑つた。二人は父の死亡と母の逃走を一通り悲しんだと、もう直ぐそれを忘れる事が出來た。いや結局此の方が好いやうにさへ思はれたのは何う云ふ譯だつたであらう、離散して了ふ事、かたがついて了ふ事、私はそれを望むだ。が、勿論惡魔の心を以つてゞはない。あの恐ろしい諦めを持つた印度の王子は彼の家系が散り失せるのを何んなに望むだかを考へて貰ひ度い。彼は妃を尼にさせた。息子を出身の沙門にさせた。さうして汚辱が清め洗はれたのである。此の虛無的な精神は惡のみの加擔者ではない。私が一家の離散を快く思つたのも、寧ろ半分は善良な心からであり、汚穢を除る必要からであつた。私はその頃、決して子を造るまいと心を決めてゐた程であつた。私は生前の父が母を始終流產させてゐるのを見た。五人の子が流れ去つたのを、私は大河を見る時のやうにサツパリとした心で眺めやつたものである。

「流れて行け、流れて行け。その方が何んなに仕合せだらう。」

その頃から私は水と生命との密接な關係を科學的にではなく、例の藝術的幻影として屢ば直覺した。泡を吹くクリク、沼の泥に赤く腐つた生物の影を見出したのは一度や二度ではない。空が晴れかけてゐる河の水面に、眞青な怨めしさう

な眼を見附けるのも造作ない事であつた。私はスペインの鬪牛士のやうに道樂半分の殘忍性を以つて云つた。『おゝおれは人間の眼だ。今に私の手で殺される人間の眼だ。』

此の豫感は寂滅的思想で沈められた私の心へ、よく浮び上る所の恐怖であつた。私は既に犬を殺しつけて居た。さうして、彼等の怨念は決して死後迄存續するものでないのを好く確かめてゐた。けれどむしろ彼等の死前に於て、怨念の豫覺が私の心へ喰ひ入つて來る事は度々あつた。例へば私が仕事に出やうとして長靴を穿きかけてゐると、足が急にしびれて、靴へ密着して了ふ事なぞがその證據である。私は霧の多い朝なぞ、隨分と犬が死の豫覺のために苦しがつて鳴くのを聽いた。次手に云つて置くが、犬は豚よりも死を厭ふし、殺される時の苦痛が大きいやうである。ある士人が犬を殺しては喰ふのを見かねて、彼へ豚を代りに喰ふやうにと命令を下した西洋人は好い分別を持つてゐる。豚を殺すのも犬を殺すのも同じ殺生だと考へてはならない。世の中には決して同じものはないのである。

犬を殺すのも、人を殺すのも同じ殺生だ。私は時々斯う叫んでは、それが誤つた意見なのを悲しむだ。さうして水の上の眼、泥の中の眼を掻き消す事に努力したのであつた。

けれども私は何うしてもあの疑ひを捨て去る事が不可能であつた。あの疑ひ？さうである。父は本統に床の上で自然に死んで呉れたのであらうか？おゝ私は此の上もなく慘めな人間ではないか。實際は床の上で胃痛の爲めに死んだH市長の事を、公園で刺客にやられたのだと吹聽したのは確かに此の私であつた。その時は自分が嘘を吐いてゐるたと云ふ一種の悲しく又喜ばしい意識を失つては居なかつた。おゝあのイラ〳〵とした口惜しいやうな齒痒いやうな然も體をじつとしてはゐられないやうな嘘言の快樂、私は確かにそれを享樂してゐたのである。所が今度何うであつたらう。母とその情夫とに向けられた疑惑の根は決して嘘構の快樂から生え上つては居なかつた。困つた、と私は自分の狙ひを打つ

これは何故かたじろいだかであらう。之には殺人すら[illegible]にまで[illegible]。[illegible]と云ふ決斷を私は何んなに要求したか！然ら要求したことによつて[illegible]、[illegible]に[illegible]を孕み、[illegible]のを求めなかつた。

この時、私は又奇怪な話しに遭遇した。

『お前は知つてゐるかね？スピノザは肺病で死んだことになつてゐるが、彼はアムステルダムの一路傍に殺されたんだよ、デクインシーと云ふ人が其れを述べて、自分の著書へ公然と發表してゐるんだから、間違ひはないのさ。それからカント……あの大カントも例の散歩の道で殺されかけたのだぜ。刺客はジットと哲人の痩せた背中をうかがつたのだ。けれどその時ふと刺客は思ひついたんだ。之はいけない。あの老人は、澤山の罪を背負つてゐる、若し自分が殺すと、直逆樣に地獄へ陷ちて行つて了ふ。之はいけない。それで刺客はドン／＼駈け出して了つたのだ。そして老哲人の身代りに、可愛い幼子をふんづらまへたのだ……』

『うむそれで何うした？』と私は暗い好奇心を以つて前へ乘り出し、話し手の手首をシビレよとばかりに握りしめた。

話し手は一寸たぢろいた。

『それで……之から育つ果實のやうに生き生きとしてゐた可愛い幼な子の肉をぶちやぶり、小さい墓穴へ落ちたんだ。刺客はもう感激して聲を立てゝ泣いたんだ。之であの哲は天國へ行けると云つてね』

『その刺客の心理が不明瞭だ』と私は云つた。

『不明瞭にきまつてゐる。是非不明瞭でなくてはならないんだ』話し手はそれで立ち去つて行つた。

私の疑念は増悪して病氣になつて行きさうであつた。私は話し手のあとを秘かに追つて行つた。彼は夜の細い道を右

へ左へ折れた。

『おゝ、お前未だ私を追跡するか？執拗い男だな。』話し手は無氣味に云ひ放つて、うしろから歩みよる私を忌み嫌つた。

『話して呉れ！何う云ふ譯なんだか。』と私は急に弱り切つて、萎れながら口を開いた。

『何を？』

『何うして老人の身代りに幼兒がなつたのか。又何故その方が好いのか、と云ふ事だ。』

『もう好い加減に許して呉れよ。お前。その代り、此の本をやるから……』彼はデキンシーの本と云ふものを私の手の上へ乘せた。

話し手と別れて歸つて來た時、私はその本を讀む勇氣も出ない程勞れ果てゝ居た。（次手に云ふが、私は珍しく病的に利巧で、英語は、シェークスピヤを巫術的に理解する程、直覺を以つて會得してゐたのである。それから私は父の住む土地では犬殺しを働く事が出來ぬ程、教養のある友を持つてゐたのである。）

私はどうしてもデクインシーの著書を讀む事が出來なかつた。そして何故だか別らないが、本の表紙にあの話し手の體臭がこびりついてゐるやうに思へて、態々近くの河へ、橋の上から本を投げ捨てゝ了つたのである。

私は時々發作的に悶えた。妹は足を投げ出して上眼でそれを見てゐた。

『兄さん。私がゐていけないなら、奉公に出るよ。奉公によ。』妹は眼に涙をためて足をいじつてゐた。

あゝ鬪牛士の様に道樂の混つた犬殺し、不當な社會へ對する『復讐の代價』として、あの可愛らしいテリヤとセッターの混血兒を殺す青年、之は確かに悪い、そして非常に悪いものに相違なかつた。

手妻の卵

犬殺しを廢してから、私の收入は全く絶えて了つた。私は時とすると、もう一度帽子を眼深く冠る此の商賣へ入らうかと思つた。けれど結局他の考へが優越した。私は妹を奉公に出した。彼の女の行つた先は郊外にあるやれ果てた病院であつた。恐らく彼の女は、その病院の洗濯婦と、院長の宅の飯炊とを兼ねねばならなかつたのである。此の成務に堪へる事の出來る女は白痴か、さもなくば異常に體力の大きいものではなくてはならなかつたので、院長は妹の白痴である事を少しも氣に掛けぬ所か、むしろ其れを幸ひにしてゐるらしかつた。私は妹の給料に就て、何の要求もしなかつたが、それにも拘らず、院長は六ケ月分の給料を前拂ひにしてやつても好いと申し出して呉れた。私は七圓の六倍即ち四十二圓を痩せこけた院長の手から受け取ると、妹の爲めに幾枚かの着物を買ひとゝのへ、新らしい行李をも擔ぎ込むだ。

『では、働いてお呉れ。』私は涙をこぼして低能な妹を見やつた。妹はもう子供のやうに泣いた。

本統に斯んな哀れな娘は生きてゐない方がよい。何うかして早く死んで了ふ方法はないであらうか、と私は可愛さ餘つて呟いた。妹は續けざまに泣いた。私が病院の裏口を出ると、追ひかけてかじりついた。私は妹を抱き上げて門の中へ入れねばならなかつた。けれど私が逃げ出すや否や、異常に太つてゐる妹の腕はもう私の首へからんでゐた。私はぞつとなつた。その腕をもぎ離すと、今度は地面へ座つて、私の足へからみついた。私が構はずに歩き出すと、彼の女は平氣で引き擦られて來た。私は又妹を抱いて病院の門へ入れた。

『許して呉れ。』と私は泣いた。

『アヽ兄さん。』と妹は口を開いたまゝ涙を落した

私は妹の執愛の深さを無氣味に思つて、『死んで呉れると好い。』と呟き乍ら大急ぎで妹から別れ去つた。

四十二錢の金は二十一間丈私の手に殘つてゐたが、私はそれを少しづゝ喰ひ減らして行つた。最後の一錢丈が輕い財布の底に見出された時、私は思ひ切つて一つの商賣を初めねばならなくなつた。その商賣は犬殺しよりも少し勝つてゐるやうに考へられはしたものゝ、決して正當なものと云ふ丈の價値はなかつた

『大きい惡事よりも、小さい惡事を……』と私は云ひつゝ、知り合ひの卵屋へ走り込んだ。私は其處で非常にまけて貰つて七十錢丈青島卵を買ひ入れた。古くなつてゐる爲めに表面が象牙のやうに光澤を持つて了つた三十五の鷄卵を私は惡い巧みを抱きつゝ見入つた。何故私はそんなにイジけた質なのだらう。

『この光澤がいけないんだ……』

殘りの三十錢は一體何の爲めに費されたであらう。私は藥種屋へ行つて三種の藥品を買ひ入れた。それらを上手に調合し澁い溶液にしたものへ、光澤のある鷄卵を浸すと、一時間程でツヤ消しが完了した。

『ハヽヽ、之で宜敷い。』と私は大哲カントのやうに獨語した。おゝ何と云ふ好い綺麗の卵達であらう。プラチノマットの印畫紙のやうな肌は、もう近在から出る地卵とそつくりであつた。

軈て私は若い農夫のやうな出で立ちをした。そして父の土地から遠くさすらつて、他の都市へと行つた。

郊外には主人が留守で、美しく若い夫人丈が淋しく子供に添乳なぞをしてゐる家が多い。私はそんな家の扉口へ立つと、大きな笊の上を蔽つた手拭ひを取り去り、丸顏の少女のやうな鷄卵を主婦達に見せびらかした。

『おかみさん!。地卵を買つてくんなんねえか。新らしいだよ。皆生まれた日が鉛筆で印してあるだが、』と私は實他

に云つた。

『いやだ。いらないよ。』と若い女は答へるのが普通であつた。

『でも此の上皮の工合を見て呉んろ。新らしいだよ。俺の爺さんが道樂に鷄を飼つてるだからだ。値代七になりや好いだよ。安くしとくだ。店で買へば七錢から八錢迄するだ。俺あ五錢で置いてくだ。』

夫人は何氣なく起き上つた。そして卵の肌へ手を觸れて見た。彼の女は自分の可愛い子がもう卵を食べてもよい程に育つたのをつくづくと感ずるらしく、思ひやりの深い眼で眠つてゐる幼子の方を見やつたりした。

斯うして卵は直きにかたがついて了ふのであつた。私は時々自分の身をツメつて叫むだ。

『あゝ罪だ。罪だ。あの卵の中、三分の一はもう腐敗してゐるだらうに……』

けれど私は何うしてもやめられなかつた。それで、一日に五十個以上は賣らないと云ふ戒律を立てゝ、此の商賣を續けて行くのであつた。そして悲しい事に、新らしい惡事が何でもない習慣に變じて行つた。

初めが終

あゝ此の商賣を何處迄も續けて行けたたら、私は何んなに都合よく暮せたらう。けれども例の通り遂に一つの支障が起つた。私は一人の美しい娘に見惚れて了つた。それ丈の事である。だが何と云ふ美しい娘であつたらう。それを何う說明してよいかゞ分らないので私は苦しい。あの洗はれたやうな娘はいつも苦しさうに肩で息をする癖があるが、決して姙娠をしてゐるのではなかつた。いや彼の女程に純眞な處女が又とあつて好いものだらうか。序でに云ひたすことだが私自身が大變に毛の薄い男であつた爲か、私は毛の多い女を此の上もなく好むだ。そして丁度その娘ときては髮の毛

が深山で長かつた。その癖、うす鬚なぞは一寸も生えてゐなかつた。」實を云ふと鬚が生えて居ても毛の多い女の方が私は好きである。」つまらなくとも聞いて下さい

私は此の娘を毎日見てゐないと悩ましい氣持になつた。私は娘の居る都市から他の都市へと移る勇氣がなくなつて了つた。私は到々一つの場所へ居据るやうにさせられた

何うしたらあの娘と關係をつけることが出來るだらう。それを思ひ廻らしては一日一日が早くのろく過ぎた。郊外の大部分はもう卵を賣り歩いて了つた。あんな卵を二度繰返して買つて呉れる主婦は決してないであらう

私は考へ勞れてはあの娘を見に行つた。私はその時出來る丈上品な身なりをして、汚い卵屋とは似ても似つかぬしとやかな大學生風な青年になりすました。そんな事は私の得手なのである。

娘は私が毎日彼の女の家の廻りをまはるので、もう好く私を記憶し、注意してゐた。彼の女は私を悪い人間だとは疑つてゐないらしかつた。何故ならば、彼の女は私の事を母親へ告げないでゐるのが明かだつた。「娘と云ふものは自分の好かない氣味悪い男の事は直ぐ母親に告げて助けを乞ふのが常である」娘は段々と私がしたひ寄つて行くのを待つてゐるやうになつた。私が出掛けて行く時間を遅らすと、彼の女は心配して外の生け垣へもたれて立つてゐたりした。けれど私が近づくと彼の女は未だ恐れてゐるやうに庭の中へ逃げ込んで、樹の葉の間から私を覗つた。娘の息がはずんでゐる事は、彼の女の眼が落ち着いてゐない事で直ぐ推察されるのであつた。

「まゝあの娘は私を思つてゐて呉れるのだ。何て世間は上手に出來てゐるのだらう。私達はもう思ひ合つてゐるのだ。」

斯う云ふ野合の樂しみときては人生の中で最も大きいものに相違ない。自分の友人の妹とか、主人の娘とか、召使ひとか云つたふうな女たちとの縁は未だ中々本統の戀と名附ける事は出來ない。そんなのはむしろいたづらな機會が生む

だ無意志的な其場しのぎに過ぎない。

娘の方でも私に惚れてゐる。二人が投合して、眼を見交してゐる。之は言に訴へつたる神秘しい事件ではないか。何うしたらあの娘と関係出来るか？その謀みで私は夢中になり初めてゐた。大胆にやり過ぎれば娘を怖やかして了ふ。小胆にしてゐれば、何時迄もあの娘を手に入れる道がない。だのに娘はもう待ちぬいてゐる。手に入れて呉れと呼喊してゐる。そして運命もそれを要求してゐる。神も微笑み乍ら見て見ぬふりをしてゐる。私は何うしても思ひ切つてやり遂げねばならないのだ。さう思ふのは何と嬉しい事ではないか。やり遂げれば成功するにきまつてゐるのだ。

『畜生め！』と私はこみ上げるむづ痒さを抑してこらへた〳〵もう嬉しくつてたまらなかつた それが悪いと誰が云はう。

『よし今日こそは思ひ切つてやり遂げよう。』私は誰もがするやうに、手紙をかいた。それを一寸嘗めて、大きな秘密のやうに恭々しく胸へ抱き込むと、私は又娘の家へ近寄つた。娘はオド〳〵と慌てゝ、おくれ毛をかき上げたり、帯の形をなほすやうに、うしろへ手を廻したりするのが見えた。あゝ若しも私を嫌つてゐるなら何うしてあんな風にする事が出来やう。娘は私を盗み見ては、少しばかり恐ろしさうに天をふり仰いだり、地面の草を摘む真似をしたりした。然も草の方へは気が行つて居ないので、その茎を指でつまむでも、摘み上げる迄には行かなかつた。もう娘は慌て返つてゐた。草を手ばなすと、今度は庭の樹の幹へ顔を押しつけて、じつと私を見た。私は此処で微笑むで見せやうかと思つたが、用心深くそれを控える必要を感ずると、態々悲しさうにうなだれて、生け垣の前を通り過ぎた。それから又、もう本統に戀の悩みで面やつれてゐるやうに弱々しく歩み返し、吐息をついて生垣の前へ戻ると、そこに轉がつてゐた五寸位直径のある石の下へ手紙をはさむで、一寸娘へ哀願するやうな一瞥を投げ、思ひ切つたやうに立ち上つて、早足に其処を遠ざかつた。私はそつと振り向いて見た。娘はじつと私を見送つて、小さい門の所に立つて居た。けれども未だ手

紙を石の下から出す勇氣は起つてゐぬらしかつた。何でも彼の女は胸をワク〳〵とさせて思案してゐるらしかつた。

『さうだ。私の姿が見える間、娘は決して手紙を取り上げはしまい。明日が樂しみだ。明日だ。明日行つて見ると、もう石の下には何もない。唯娘の眼がニツタリと頷づいてゐるのだ。おゝ之はもうたまらぬ事だ。』

私はクス〳〵と笑つたり、又深い理由のない憂ひに沈んだりして一夜を明かした。それから何時もの時刻に娘の家へ近附いた。娘はいくら見ても居なかつた。悲しい落膽の豫感が私の心臟を痛くしめくゝつた。何うしたのだらう。私は夢中になつて生け垣の中をのぞいた。それから石を上げて見た。

『アツ!』と私は早くも本式に落膽した。石の下には未だその儘で手紙が殘つてゐた。悲哀と私一流の怨恨とが一時に私の意識を占領した。

私は手紙をやぶり捨てるために、それを指の先でつまみ上げた。あゝその時、實にその時である。私は烈しい心の動亂を覺えて、手紙をグツト胸の上へ抱きしめた。鼓動は騷いだ。吐息が洩れた。あゝ實に之は何たる不可思議であらう。私は手紙の表面へ『悲しいお孃さん』と書いたのを記憶してゐる。だのに、今私が抱いてゐる手紙の表面にはそれらの字が消えて眞白くなつてゐるのだ。硫酸が何時作用したと人は思ふか。

『何て、うまい事だ。』と私は擽たさうに微笑した。その手紙は確かに娘からの返事であつた。何と書いてあつたか?私はもう忘れて了つた。けれど何でも、もう嬉しくて寒氣がするやうな、有難い言葉が三つも四つも續け樣に繫がつてゐたに相違ない、私は見えない娘へ何同もお禮を云つて、生け垣を去つた。半町も歩いて振り返つて見ると、今迄姿を見せなかつた娘が門の前へ淋しい水の精かなぞのやうに立つてゐるのが分つた。私は夢中になつて、そのやさしい姿の方へ舞ひ戻らうとした。娘は近寄る私を恐怖するやうに家の中へ逃げ込むだ。

「この位で丁度よいのだ。之が一番楽しい所なのだ。」と私は微笑むで呟くと、思ひ返して、この時、當にしてゐたある西洋人の家のキッチエンの屋根裏へと戻つて行つた。今日の楽しみが斯うして終りかけると、私はもう明日の楽しみを夢みる事に精を出し初めた。その時である。私が私服巡査につらまつて了つたのは、……

けれど、くりかへして云ふ。私は斯うしてつらまつて了つたのである。何んな手掛りで捕へられたかは私自身にも分らなかつたが……

新聞は私を嘲罵した。それで妹が世話になつてゐる病院の院長に迄も知れ渡つたのである。其れが又私の仕合せの端緒となつたのは何よりも不思議ではないか。刑を濟ました私は院長に引き取られた。とは云へ何も病院内の雜務に服さねばならぬ義務も課せられなかつた。遊むでゐる苦しさから逃れるために、私はギプス繃帶掛かりの役を與へて貰ふやうに懇請した。それから平和な月日が無爲と無事とをもたらしたのである。

あの娘は何うなつたと誰か尋ねて呉れないだらうか。あゝ時間程いけないものが又とあらうか。私は口惜しさと悲しさに身を嘲された。私が刑を濟まして後、あの生け垣を再び訪れた時娘はもう生きてゐては呉れなかつたのである。聽けば肺病が重くなつて急に死へ急いだと云ふ事であつた。さう云へば、私が通ひつめた頃も透きとほるやうに白い肌がいくらか不健全に見えてゐたのであつた。

あの娘を殺したのは此の私ではなからうか。又しても暗怪な疑念が私の心に蔽ひかぶさつた。肺病には興奮や心配や落膽や悲哀が一番悪く影響するのを私は知つてゐた。私は彼の女を徒らに興奮させた。手紙を呉れた日から不意にたづねて行かなくなつた爲め、娘は何んなに氣をもんだであらう。泣く爲めに熱が出る。熱のために咳が出る。咳くたびに命が縮むで行つたのだ。私は何と云ふ悪いいたづらをして了つた事であらう。あんな楽しみさへ殺人の一種であつたの

か？そして、それは何と云ふ殺人であつたらう」（おゝ餘りな事だ。）

私は愛らしい娘を殺した。愛らしいので殺して了つた。此の考へが私の戀愛をさらに燃え上らせた。私は陰慘に笑つた「愛が死と結ぶびついた所に、何だか至上の强さがあるやうではないか。それは强い。そして堅密である。」

紫の室

何故院長は罪深い私を養つて吳れるのであらう。思つて見るにそれは彼が犯罪心理學や法醫學の研究家であつたからであらう。彼は私を利用して博士論文でも書かうと云ふのではないだらうか。事實、彼はたえず私の擧動を看視し、又私を心理檢査にかけ、あるひは感想を述ねた。第三の場合に於ては、利巧な私は充分に自分の罪惡を犯す心理狀態や制しきれない獸的な惡意、本能としての殘忍性の發作なぞを說明してやつた。

院長は感極まつてそれを聞いてゐた。彼の顏は段々低くなつて、しまひには机へ顎がついて了ふ程になつた。彼は私を實際よりも以上な大惡人と推斷して了つて、私を尊敬した。彼はまるで遠ざかるやうな態度で徐す私に近づいた。彼の眼は何時も「お前は偉い男だ。」と云ふやうな讃歎の色で光つてゐた。ある時はまるで私を崇拜さへしてゐたやうであつた。勿論皆馬鹿な事である。

「お前は何うしてそんな綺麗な顏をしてゐるんだ。惡い奴と云ものは大概頭蓋が曲つてゐたり、顏が横の方へひねくれて、齒が大きくて長く、眼球が上釣つて、ドロンと濁つてゐながら、然も何となくギロ／＼してゐるものなんだがなあ……」と彼は或る夕方嘆息して云つた。

「先生は色慾に就て何うお考へですか？」と私は初めた。「氣性の惡い奴でも何處へ行つても女に好かれて了ふやう

な男がありますが、それは何故でせう。」

「女にはそれ自身で惡を好む性向があるからだらう。」

「それに違ひありませんが……然しその思想に依りますと女があまり可哀想ですね。何にせよ、惡が美と結合してゐる事は一つの微妙な不可思議です。そして惡心と美貌とを持つたもの丶化合せつたら… それは比べるものがありませんね。女達は丁度それを愛慕します。女を得るには釣り道具も何も要らないんですからなあ。」

「成程……」と院長は氣味惡相に顔を机へ押しつけて了つた。

「私の考へに依るとですね。強大な惡はそれ自身で病的なものです。しかし、或る程度の惡になりますと、それは生存上必須の要件なのですね。それで自然は斯う云ふ健康な正規的な惡を保存し絶滅させないために、隨分と骨折つてゐると云ふ事が分ります。優秀な理性が一番遺傳しにくいものだと云ふ事實を先生は何う思ひますか。」

私達は斯んな風に話したものである。私は先生の好い伴侶であり、思想上の相談役であつた。院長は私に感化されないやうにと思つて、隨分努力もし、體や頭を洗たりしてゐた。けれども私の説明をその儘論文の中へ書き込むのは僞りのない所であつた。

私はそれでも好い周圍を惠まれてから、段々と怨恨や不滿を抑制するやうに努力し初めて居た。惡い心が起ると、靜かに書見などをして氣を散らす方法を覺えるに至つた。私は自然に自分の幸福を感ずるやうになり、古い惡事を想起する事で心を痛めるやうにもなつた。自分が精神上の片輪であると云ふ意識が眼覺めてからは、何うかしてその片輪を治さうとする欲求で心を一杯にしてゐた。だが一體何が結果であつたらう。

此處に又いけない支障が起つて來た。私はあるアバずれな婦人病患者に思ひを掛けられ初めた。女の愛欲が私の心に

響くとその反應が淺間しく私を燒いた。私は戀を感じ始めた。それに附隨して殘忍な氣持がたえず行き來するのは一體何う云ふ譯であつたらう。私はその年上の女が憎いやうに思はれ、それをいじめてやらうとする欲望で一杯になつて居た。私は興奮すると直ぐ殘忍になつた。その年上の女ばかりではない、院長の令孃も私を大分好いてゐるのが私の心へ響いてゐた。彼の女が色眼を呉れる事、肱を觸れる事等が私に可笑しく思はれた。けれど彼の女は未だ耐へる力をつてはゐなかつたらしく、又私が罪人である事や妹が白痴であることから私を恐れ嫌つてゐる風でもあつた。

『低能は筋を引くものだ。』彼の女が斯んな風に考へてゐるのは私にも充分分つてゐた。彼の女は風のない靜かな夕暮なぞには妄想の深みへ入つて、自身の胎内に低能な兒が哺くまれてゐる有樣なぞを見て驚いたりするらしかつた。彼の女は或る時私と一緒に病院の標本室へ入つて見た事がある。アルコール漬になつた長い男性の腦なぞが白くフヤけて、壜の底へ足の毛が拔けてたまつてゐるのが私を大變不愉快にした。それから或る無頭兒の壜詰めの前迄行くと、令孃の顏が不意に歪むのを私は早くも發見した。

『畜生！この女は低能兒をはらむ恐ろしさを又しても妄想して惱むでゐる。』と私は腹の中で叱言を洩らさねばならなかつた。

二人の女性が私を注視してゐるために、私は何時も氣が落ち着かなくなり、勢い擧動も荒く見えるやうになつた。勿論注意深い院長は私が心を勞らせてゐる事を見て取らずには置かなかつた。

『私は外傷が心へ及ぼす効果と云ふものに就て、大きな興味を持つてゐるのだ。何うだね。お前はあの紫の室で少し暮して見ないか。きつとお前の心がよくなるから。』善良な院長は浮かぬ顏をして斯んな風にすゝめた。紫の室と云ふのはヒステリー患者を治すために院長が態々造つたものであつて、その中央に小さな噴水の出來てゐる靜かな落ち着のある

室であつた。四方の壁も窓の硝子も全部紫色を以つて塗られてあつた。

私は元來紫色が大嫌ひであつたから、此のすゝめを何うかして逃れやうと思案した。

『先生は紫色が人間の悪心を矯正するとお考へなのですか？』

『さあ……少くとも桃色よりはね……』

『子供の中に黒い部屋で育ちますと、その黒がしん迄浸み込みます。けれど大人になつて紫の部屋に入つても、黒の上へ紫はそまらないでせう。』と私は沈むで答へた。

『しかし、まあ、入つて見なさい。何か効果があるかも知れないから……』

以上の會話はまるで虚言のやうに態とらしく見えるかも知れない。けれど全部事實であり、院長の冷氣に近い優雅を證據立てる好い材料の一つであらう。人々は如何に思ふか。世間の學者達は熱心に悪人を矯正しやうとして考へ、骨を折つてゐる。然も紫色の室以上のものを設計し得ないのは大きな悲しみではなからうか。

私は何時も思つてゐる。『幼いものをつまづかすのは、老人の足を切り取るよりも、もつと悪い事だ。』と、紫色の室が役に立つのは、其處へ入るものゝ頭蓋骨が未だ小さく柔軟な場合である。

私は紫色の室内に眠つて深い悲しみに閉された。私はもう駄目である。此の靜寂が身に浸みて痛い。私はしまひに耐へ切れなくなつて深い理由もなく増大する涙の粒を落した。

夜の戯れ

多くの病氣に向つて、紫色が好い影響を働く事を、英國のスノーデン博士が考へてゐた。そして主唱者の陥りやすい

通弊として、彼もその影響の効果を過大視してゐたやうである。我が院長に至つてはまるで畜犬が狂的に邁進むで、彼を嫌いな色でせめさいなんだ。彼は私の悪心を紫色で包み隠さうとしたのである。けれど彼は本統にそんな馬鹿氣た望みを二分でも持ち續け得たであらうか？私には何うしても院長の心持を洞察する事が不可能であつた。

私は不眠症に苦しめられ乍ら、毎夜を紫色の室で大人しくしてゐた。同じ色の絹で蔽はれた燈光か、同じ色に見える音のない小噴水の水やしぶきを柔らかく照した。何一つ落ちてゐない床の上の廣い淋しさが、眞夜中になると一層廣がつた。私は何うかして眠らうと願つてあの觀無量壽經の中にある一つの靜觀法、即ち落ちる日輪から水晶の幻影を生み出す事を考へ耽るのであつた。だが、話したいのは更に別の事である。

その時であつた。實に、實に物靜かな空氣が鼓膜に感じない先に、皮膚へ感じる程度の振動を起したので、私は忽ち我に歸つて耳を立てた。

足音である。人の來るけはひである。室外の廊下に思ひ餘つて、誰かゞ立ちすくむ様子らしい。だが、事件はもつと別の事である。

誰であらう。女であらうか？女ならば誰であらうか？之が私の無言の質問であつた。

『あれかも知れない……』と私が推定した當の人物は矢張り女性であつた。彼の女は何時も私の眼に何物かを讀まうとして焦燥してゐるのが分つてゐた。私が一寸戯れにやさしい顔をすると、向うは却つて眞面目に怯えたりした事もある。

その女と云ふのは獨身の看護婦長であり、女の癖に極く慎ましい方であつた。從つて幾らか物識りのやうに見えた。彼の女は何うかして私の口に『戀愛』と云ふ言葉を上させやうとして骨を折り、色々の導火線へ火をつけて見てゐたのである。彼の女は胸の中で『私達はもう戀を仄かに感じ合つてゐるのだ。唯お互ひに内氣だから打ち明けずにゐるのだ

わ。』と云ふ一人定めの思想を抱いてゐるのが確かであつた。女は早く私から『甘い苦しみ』と云ふ奴を打ち明けさせやうとしてもう夢中になつてゐた。始終自分の服裝を替へたり、歩きつきを誇張したり、つまらない事に驚きの叫を發して見たり、フンフンと鼻を鳴らしたり、一人で海岸へ行くと云つたり、森へ行くと云つて出掛けなかつたり、態々犬を私のそばへ連れて來たり、猥褻にものを云はせて見たり、風呂に入つて香水をつけて來たり、腕をまくつて生毛を口先で吹いたり、子供の時に出來たと云ふ小さく愛らしい腫物の痕を見せたり、生ぶ毛の話をしたり、或はもつと精神的な方へ材料を代へて、ラッファエルの運命の三女神中何れが魅惑的かと訊ね、ゲーテの艶福を評したり、態と椅子をガタくさせ乍らベートーヴェンが悲劇的な男である理由を聞いたり、（その解答へなぞは聞いてはゐない。）その他あらゆる誘惑の機會を造り出さうとしてゐたのであつた。さうだ。下らない事の極みである。

『さうだ。あの女に相違ない……』此の考へは私に取つて甚だしく不愉快ではなかつた。唯もう少しあの女が美しければ好いのだが、と云ふ嘆きがなかつたならば……

扉の外には頻りに空氣が動き、又留つた。若しあの女ならば出來る丈からかつてやらうと云ふ惡心から。私は寢たふりをして聲なぞは決してかけてやらなかつた。けれど年がさの女は大膽である。苦しい胸を打ち明けるために、此の離れて靜かな室が最適なのを知るのであらう。そつと扉を動かして、中の樣子を窺ふのが私の背中へ感ぜられた。私は寢返りを打つ事も出來ず、息苦しい氣分になつて、顏を蹙めた。私はもう戰ひに敗けたやうであつた。

足音は靜かに室内へと移つた。そして私の寢臺へ向つてゆつくりと進んで來た。私は心を締められるやうに緊張した。そして名狀しがたい恐怖の念でガバと起き上つた。振り返つて、足音の主を見詰めた時、私は頭々『アッ！』と云ふ聲を絞り出した。足音の主は四圍を見廻し、私の叫びが決して遠い室々へ迄は達かないのを推察した。

そして

『靜かに……』と手で制した。『驚くことはない、驚く事は……』けれどその聲は少し慌た氣味であり、自ら怯えてゐるやうであつた。一體何事であつたのか？

其處に立つてゐるのは確かに院長であつた。然も平常の院長ではない。それが私を怯やかした大きな原因であつた。彼は異人風の寢卷を長々と着、房を垂らし、それから哲學者が冠り相な夜帽を戴いてゐた。私は斯んな院長の姿を見るのは實に初めてゞあつた。それ許りなら未だ何でもない。彼は片手に大きな壺を抱いて何時もは青い顏を眞紅にし、私を睨つと見下してゐたのである。この妙な行動の半分が狂氣から出來てゐないと誰が云ひ得やう。

『何うなさつたのです先生……』と私は呆氣に取られつゝ小聲で云つた。小聲にである。

『いや……』と院長は口を尖らして呟くと、抱へてゐた壺をゆつくりと床へ下し、再び私を柔和に打ち眺めたのである。

『その壺は……』と私は段々聲を細めた。

『何でもない……』と院長は自分の身體で壺を隠すやうにした。

『院長さん。貴方は私を何うかなさらうと云ふんですね……』私は怖え乍ら辛うじて之丈を早口に云ひ終つた。けれど未だ何も云はない樣な氣がしたので、もう一度少し聲を力づけて、『院長さん！貴方は私を殺す氣ぢやないんですか？』と本統の所を口走つた。私は本統に死の豫覺に打たれたのである。

『お前の言葉は何時も誇張的で困るよ。私は本統に誤解されるのが苦しいのだ。』院長は之丈云ふと歩き勞れた旅人のやうに寢台へと崩れかゝつて來た。私は一層心を緊縮させて、院長がブカ〳〵に緩い寢卷の下から毒薬でも出しはしないかと眼を張つた。あゝ、此の紫色の室は他の人の居る室から遙かに隔つてゐる。私はそれを何より恐れた。そし院て

また私を思ひ出へ、終へやうにさせたのに大凡の未知の目的の爲めであつたかも知れなかつた。ただ問題はさうした點にはないのである。

「しまつた！」と私は胸を喰ひしばつた。私は一つの兇器をも此處へ運むではゐなかつたのである。いや、慌てた私は咄嗟に何も考へたのではなかつた。

「それは確かに……」と院長は案外打ち委れて何事かを語り出した。確かにだね。二人の人間がずつと他の目から隔離された所で一緒に居るとだね。相手に何か害を加へてやらうなんて心を起し易いものなんだ。他の多くの眼からの隔離、それは實に驚く可き恐る可き惡化を齎らし易いものだ。」

「それで……」と私は力を入れた。

「いや、お前はいけない。殺すとか、殺されるとか、そんな動詞を容易く使ふのは好い事ではない。」

「さうです。そして云ふのではなく、その行爲を實行するのは更に惡い事です。」と私は少し巫山戯て云つた。何故なら私は院長の擧動に何の惡意も見えないのが分つて來たからである。とは云へ私に何が分つたのであらう。

沈默が續いた。院長は壁へかた相に、頭を拳で叩きつゝ室内を立つて歩いた。私も靜かに口を閉して、院長が何んな風な事をするかを注目した。勿論、息のつまる注目である。

「……私は……」と彼は總て思ひ餘るものゝ如くに口走つた。「私は此の頃、惡い悲痛に取りつかれてゐる。お前にそれを察して貰ひたいのだ。」

私は不思議に感じた。斯んな老人と云ふものは、決して若い者へ自分の弱身は表はさないのが普通であるのに、何うして彼は斯んなに老人的高慢心をなくして了つたのであらう。

『ね、お前、私は妙な癖に落ちてゐる。一つの悔恨を想起すると、直ぐそれに關聯して他の悔恨が、又それに引つかゝつて、更に古い悔恨が出て來る。斯うして自分の間に一生の悔恨が塊りになつて私の心を押したふし、何が何だか分らない總括的なつまり象徴的な悲痛であたりが眞つ暗になつて了ふのだ。』

私は以上の言葉に正直な注意を向けた。そして院長が少しも僞りを云つてゐるのではないと云ふ直覺で院長へ同情した。然し不思議ではないか。何故院長は不信用な私へ向つて斯かる懺悔を敢てするのか？

私は一つの推定法を知つてゐる。若し女が自分の悲しみや苦しみを一人の男へ訴へる場合がありとすれば、その悲苦が何んな種類のものであらうと、結局彼の女自身の戀愛を打ち明けてゐるのだ。

若しも院長が女性であつたなら、彼は明かに私へ戀を打ち明けてゐる事になる。彼は靜かに足を忍ばせて私一人の居る室へ來た。そして、誰も聞かぬ所で、私に彼自身の悲しみを話してゐるではないか？

私には分らなかつた。分る譯がない。

『先生は私にその悲しみを打ち明ける爲めに、私を此の室へ眠らせたのですね。それが本統の目的で、私の頭を平靜にさせるのなんか、二の次若しくは三の次なんですね。』私は快活に笑つた。

『いや、さう思はれては困る……』と痩せた老人は皺だらけな笑ひ方をした。そして泣き相に興奮して私を見詰めた。

それらは皆決して尋常ではなかつた。何かしら秘密が影を造つて、我々の間を暗くしてゐた。

『それは……お前は可愛らしい。それに相違ない……』と聽て彼は獨語する如くに云ひ捨てた。『けれど、お前が可愛らしいから、私が悲しみを訴へると思ひ取つては困る。私は色々のものを恐れるが、その中でも一番誤解を恐れるのだ。』

此の言葉は私を一驚させた。他の目がない所で、一人の相手に悲しみを打ち明けるのは、戀を打ち明けるのと同じだと

云ふ推定法を此の老人も心得てゐたのである。

『奇態ですな……』と私は一人で云つた。

『全く、奇態と云つても……まあ好いだらう……それに近い。』と院長は番茶番茶に答へた。然は又停て出してゐたのである。

『例へば此の壺だが……』と老人は稍悲壯な表情になつた。私も凝つと壺を眺めた。私の興味は俄かに動いた。何故なら私は骨董品が大好きであり、その爲めに段々と奥深く入つて、斯う云ふ趣味が矢張り悪と同じであり、又此の趣味が私の悪心から出てゐることを悟るやうにさへなつたのである。之は一般の骨董品愛好家には當て嵌まらぬ說であるが、私に丈は適切なものであり、又私自身が經驗から割り出した思想なのであるから、私丈には間違ひでない。モルヒネ中毒者や變態性欲家、精神病者、悪人それらの人は主に小さく細かい部分的な人工美を愛する傾向があり、愛情の廣い人、ゆつくりと落ち着いた博識の哲學者、農夫、健康の人等は遠く廣く、やゝ粗雜な廣角的な自然美を愛する性情を持つと云ふ點は私が態々主張する迄もなく一般の事實である。たとへ時々例外はあつても、その爲めに如上の通則が全然破れる事は出來ないであらう。もう一度云ふ。悪人は近視眼であるが、その眼球はアナスチグマツトレンズのやうにシヤープである。善人は遠視眼である。それで、遠くの地平とか天空とか云ふ大まかなものをデテール抜きにしてぼんやりと鈍感に眺めやるのである。そして之等の規則は半分許り眞實である。』

『此の壺を何う思ふ……』と老人は首を下へ向け、背を縮めて私に尋ねた。

『奇態な壺ですな。』と私は改めて檢べた。高さ二尺程の素燒である。其の他の何物でもない。

『此の唐草文をお前は何う思ふ。』

『それは飛鳥朝の時代のものですか？』私は此の方面には少し暗かつた。

『之はアラビヤ文様だ……』

『先生はそんな事迄知つて居るのですか。』

『検べれば分る。分らないものだつて、分つて來るさ。覺えて置きなさい。今に色々の事が分つて來るから。』

『ですが、之には支那文様の趣きがないとは云へませんね。』

『それは寧ろ支那がアラビヤの感化を受けたのだらう。』

院長は壺に就ての説教でもう夢中になつて來た。私は此の老人の心持が殆ど解せなくなつた。何うして彼はそんなに夢中にならねばいけないのであらうか。彼は何でも、自分の家の庭で之を掘り出したと云つてゐる。そして、彼が之を默つて自分の手に入れて了つた事を誰一人知つてゐないと云つてゐる。然も此の一尺程の器の中には人骨が入つてゐる。彼は臆病な手つきで、それを拾ひ出して私に見せたのである。

最後に彼は思ひ出して云つた。

『もう時間が過ぎた。』さうして壺を抱へると、悲痛な足どりをして紫色の室を去つて行つて了つたのである。

私は獨になつてから、稍興奮した。眠れぬ眼を大きく開くと、沈思しつゝ室を歩いた。

『さうだ、あの壺には何の譯もないのだ。院長は戀を打ち明けそこなつたら、あの壺でも見せて、それを室へ忍び寄つた理由にしやうと用心して來たのだ。』此の考察は正しい如くに見えた。何故なら、彼は歸りしなに斯う云つたからである

『……此の壺は秘密にして藏つてあるんだ。それでないと警察へ取り上げられて了ふんだ。人の骨が入つてゐるんだか

らね。それで誰にも見せないんだが、まあ、お前に丈はな……』

私はそんな痣を見せて貰へる程に、院長から好意を持たれてゐるのが、矢張り厭であつた。世の中の人皆が見た事、院長が室へ浸入した事、之等の不快な事實が私を粗暴へと導かずには置かなかつた。

『畜生！私は……あの婦人病患者と關係してやらう。』腹立ちまぎれに、そう決心したのは其の夜の明け方であつた。私は割合臆病な人間であつたので、私が一つの惡事を働く前には、必ずそれを起させる誘導的な因事が先驅せねばならなかつたのである。院長に心を亂された事が私を再び惡い人間へと追ひやつて行つたのである。考へれば、皆痣の骨に根本の罪が秘むのであつた。

木偶と流動

私は其の後も出來る丈心を平靜にして、むしろ陰鬱な日を過した。其の間に起つた不慮な事件は幾つかを數へ出す事が出來る。けれど一番大きな二つを選ぶならば院長の急死と、院長の子息の怪我であつた。斯う並べると人間は全くヒ弱い構造を持つたものだと云ふ考へで悲しまされやう。だが其れに間違ひがあらうか。大體を話せば子息の方は今迄何處かの水産講習所や臨海實驗場へ行つて居たのであるが、最近に海岸の漁師達と知り合ひになつて、彼等が漁に出る時、その舟へ同作させて貰つたのが惡かつたのである。此の漁師達が或る魚の大きい群を見出した時、他の側に居た漁船も其れを見附けたので、兩方の漁師は頭々舟を接して毆り合ひを初めるに至つたのである。院長の子息は一緒になつて、毆つたり毆られたりしたが、終ひに肋骨を打たれて氣絶したのだと云はれてゐる。斯う書いて來ると人間が全く木偶のやうに思へてならぬではないか。實際人間は振り子の調子につれて、カタ〳〵と動きバタリと倒れる木偶のやうで

はないか。私は自分が以前あの例の娘を見初めて通ひつくした頃もそんな考へに苦しめられたものである。私が歩いて行くと、娘の方も表れる。私が近附くと向うが隠れ、私が遠のくと向うがバタ／＼とついて來たのではないか。

「畜生。」此の頃でも私は自分を木偶以上に進歩させたとは思へない。現にあの婦人病患者がバタ／＼バタとやつて來る。私はそれが心に響く。ガタ／＼と動く漁師の喧嘩場が眼の前に浮き上がる。愛するために近づき合ひ、争ふために吸引し合ふ其れ等の事象は意識もなにも作つては居ない自然現象のやうではないか。

若い人達が内省的な心理學をきらつて、唯表面の變化丈を觀察し、檢定する事で、外面的心理學を樹立させやうといきまくのはきつと彼等も私と同じやうな『木偶感』に縛されてゐるからであらう。一切の形容詞を抜き去り、出來る丈動詞を多く使つて日記を書き、或ひは小説のやうなものを書かうとする人があれば、彼も又『木偶感』に憑かれてゐる事が直ぐ分る筈である。

院長は、バタ／＼と死んでしまつた。その場景は唯スクリーンの上の映畫に過ぎない。うしろへ廻つても戀なぞを踏みつぶすやうな危險もなにもありはしない。之は何だか厭な事實ではないか。ふり返つて見ると、殘つたのは莫大な借財丈であつた。肋骨の折れた子息は將來の上で落ち着いては居られなかつた。彼は振り子のやうに寢返りを打つた。令嬢は兄を氣づかつたり、私を憤つたりして唯廊下を足音で響かせてゐた。

『何がバタ／＼だ。畜生共！』と私は時々獨語せねばならなかつた。

病院は愈よ維持の困難を感じてゐた。院長はあんなに大きな借財をして居乍ら、何うしてあんなに呑氣にしてゐたか？此の點は私の大きな疑問となつて殘つた。ことによつたら彼は自殺して了つたのではなからうか？此の疑念は死を殘忍視する私にとつて當然のものであらねばならぬ。

私は病院に飼はれてゐた間中遊び通した譯ではなかつた。へり下つた心で或は時々掃除もし、薬局へ入つては膏薬をねつたり、消毒ガーゼを造つたりして働いてゐたのである。けれど院長が死んで、子息が暗い顔をしてゐるのを見ると、もはや私が此處に留まる事はよくないやうに思はれた。氣の利いた私は半分無斷で病院を去つた。そして子息は大變にこの事を喜んでゐたと推察した。

三ケ月後、私は遂々あの婦人病患者――もう治つてゐるが――と關係して了つた。けれど、それと同時に、女の妹とも關係する事が出來るやうになつたのは何と云ふ厭な廻り合せだらう。

其の初め終りを話すのは私に取つて愉快であるが、此の事件を引き起す爲めに、用ひられた所の計略は何も私の獨創ではない。私は少し許り知り合になつた或る男から教示された通りを應用した迄なのである。

私は妹の方を一目見ると、それが姉の方より、遙かに私の慾を吸引するのを知つた。それで姉なぞの事は忘れて、妹の方へ夢中になつて了つた。私は例によつてパタ〱と行つたり來たりした。生け垣も垣の傍の石も前の女の場合と同じやうな狀態であつた。

『生け垣が似てゐるのは好いとして、おゝ何故石迄がそこに轉がつてゐるのだ!』私は恐怖もし憤怒もした。自然が餘り趣向をかへて呉れない事が私の怨恨をかり立てた。

『畜生め!お能の舞臺みたいに、何時でも何時でも松の樹がありやがる!』

私は石と生け垣の爲めに今度の戀愛を尠からず破壞された。以前にはこの上もなく懷かしかつた其れ等のものが、今ではもううるさいやうな氣がしてならなかつたのである。けれど斯んな小さい事を氣にするのは私の方が惡いのである。

何故ならば、郊外なぞに立つてゐる家々は初めから皆双子同志のやうに似てゐるのだ!!

或る暗い夜、悪い運命の橋が筋交ひに十字を切る所の私の窓から、私と云ふ一つの蠟燭が消えたとする。だが、私は死んだものであらうか。思つて見て貰ひ度い。私は橋を何の方角に向つて走つたか？運河の真中を、時計臺の鐘が十二時を打つ時、その音の餘波で動いて行く一つの舟で、灯が消えたなら、何が起つたのであるかを考へよ。死ではない。唯、死に似た樣な强さの情事が想起されぬであらうか？

暗い水面へと續く、黑い大きな石段の樣で、私の罪惡は何時初まつたかが分明してゐない。下の半分は寧ろ影に過ぎない。そして水の樣に冷かなのである。殘りの半分は、前の半分の影で出來、過去に依つて漸く色附けられる無色の現在、それが私の持つ現在であつた。昔の劇場が今朱狀に再現されたとすれば、それが私の心なのである。

いや、私はもつと燐火の屆く所迄這ひ出して、聽き手に顏を覗せやう。私は斯んな醜い人間である。だが、彼の女等は恐ろしく美しかつた。實際、彼の女等の爲めに、大理石さへが愛嬌を見せて凹な程であつた。誇張ではない。私は石の笑靨を經驗した。私は元石の樣な冷たい人間だつたのである。私の心はもうアカンザスの樣にフワ／＼と浮いて來た。私の周圍はナポリの暖風が漲つて來た。スリッパから飛び出した足の樣に、私の氣持はスガスガした。だが、それもほんの一時である。

考へ度くない幾つかの事を、私は話さねばならない。

彼の女等の顏は何んなであつたか？それは美しかつた。だが別れて來ると何うも思ひ出せない樣な顏であつた。彼の女等は何んの特長も消し去つた美しさで輝やく。彼の女等は鏡の樣に光つて然も『無』なるものであつた、私が彼の女等に近附いたとせよ。私は唯私を見るのに過ぎなかつたかも知れなかつた。然も此處に二つの戀愛が成り立つたのを思へば、鏡は何かしら性を持つてゐたのである。

あゝ彼の女等の顔には變化がない。除の定まつてゐる笑ひの爲めに、忘れられ易いのだ。正確な線に似てゐる。それには涅槃の心境が清透である事からも證明されやう。露が餘り過ぎたとせよ。もはや寫眞機を持つて出掛ける必要はなくなる。後ろも前も一色の平坦！何方へでも、坐つて居る所から、レンズを勝手に向けるが好い。—と云ふ字が撮影されやう。それだ！彼の女等はその一なのである。後ろ姿も横姿も見て廻る必要はない。山や森はポンペイの市街の様に下層に埋されて了つたのである。

だから本統の彼の女等を知らうと云ふには、何でも骨を折つて、廻旋階段を降りて行かねばならない。地中に初めて廃墟の様な彼の女等の冷たい心が見出されるのである。彼の女等は精緻の限りに粗野を持つ埃及彫刻と丁度反對のものであつた。仕掛けの細かい贋造紙幣印刷機と同じで、結果を見ない間は精巧な一つの價値で働くのが彼の女等であつた。愚昧の過剰から、私は彼の女等の頬へ、非現實的、常識的な磨きを掛けて、自分丈の留場にしやうと試みたが、催眠には罅が入つて了つたのである。もう之等二人は私につまらないものであつた。私にはそれが口惜しくてならなかつたが、人の力で何うとも治す術は見つからなかつたではないか。

『女は矢張り詰らないものだ！』

私は段々女等から遠ざかつた。それもこれも私が『木偶』だからなのか？私は振子の樂に合してカタ〳〵と場所を變へて行くパンチと云ふ人形に過ぎぬのか。

私はぼんやり街を歩いた。そして少しばかり知り合ひの人に會つた。

『君！』と彼は私を怖やかした。

『君は未だ健康なの？』と私は不健全な問を發した。

『私はある理學者の弟子になつたがね。お陰で隨分達者過ぎるよ。ウムそれに、近頃面白い事があつたのだ。私の體はその儘で磁石の働きをするんだ。面白いぢやないか。私の腕に依つて磁針の方角を變化させることが出來るのだ。何でも兩腕が恰度兩極になつてゐるんだ。いや足の方にも同じ性能があるんだ。試驗をした理學者も驚いてゐたよ。私位ゐ強い磁力を持つた男は少い相だ。ね君。人間は一樣でない、と云ふのが私の持論なんだ。』

知り合ひの男は何でも斯んな風に話した。私はもつと細かい點をもう記憶してゐない。私が知つてゐるのは唯自分の淋しさ丈であつた。私は海岸を歩き乍ら涙をこぼした。それから暗憺たる夜空を眺めた。遠くに火事が起つてゐるらしく、空の一點丈が赤く色づいてゐた。

『別々のものが一つに見える。姉と妹とは段々似て來る。此の頃では嫉妬の喧嘩もしない。却つて彼の女等は二人で慰め合ひ、二人で心を合せて私を恨むでゐるのだ。別々のものが一つになつたのだ。』

私は向う見ずに歩いた。と云ふよりは足に體が引きずられ、體が足に引きずられて行つたのである。

暗の中には一人の知り合ひが立つて考へてゐた。そして何時もの通り、私をさぐるやうな目つきで近づいて來ると

『君のバタ／＼は何うなつてゐる？』と問ひつめた。知り合ひの眼には悲痛な色があつた。

『依然としてバタ／＼だ。』と私はうなだれて答へた。

『あゝ悲しい事ではないか。それは現象自身がバタ／＼なのではない。君の心！それが大變傷ついてゐるから起るのだ。同情。……君分るかね、同情だよ、同情を以つて朝顏の莖を見てやり給へ。莖の先にはカタツムリのと同じ眼があるのさへ分るだらう。バタ／＼は同情の欠けた所に直ぐ起つて來る一つの破壞的な渦流なのさ。それは恐ろしい。人間が、ベルトやシヤフトや電球のフイラメントやセルロイドの切り屑に見えてよいものだらうか。』

『私を此の上苦しめるのか？』私は夢中になつて二つ瞬替た句り合ひに向つた。如今此所を早急にすると、二つの何り合ひはダイモンのやうなものに思ひ取られ勝ちであるが、實は私の周圍には私を威めるある種類の實在したのである。それは事實に於てはもつと自然的に私の前へ表れて來るのであるが。私は彼を恐怖する餘り、闇の中で彼の聲を不意に聞くやうな錯覺的な記憶丈より他に何ももたないのであつた。

『君は冷靜なのでない、苛酷なのだ。君は自然主義の小說家のやうに唯一面的に苛酷なのだ。老子のやうに柔しく廣く無關心なのではない。獄吏のやうに首切り臺の背丈を音樂だと主張してゐるのだ。悲しいではないか。バタ〱は狂氣の一步前なのだよ。おゝ、そしてあの火事を見たまへ。病院の方ではないか。』

『さうだ。』私は勞れて答へた。何をさうだと答へたのか？勿論兩方の話し、即ち私が何うしても苛酷な事と、火事の方角が病院の近くである事の二つに對してである。

罪は常に他の罪から起る

急に新らしい事件である。

火事！そして燃え上つてゐる。病院が燒けて倒れる。それが何よりも明るい事實であつた。

それは未だ良い。惡いのはもう一つの事であつた。火元が嚴密に檢べられた時、私の妹丈が怖えて答へを曇らした。

あゝ、そして、何たる運命の狂ひであるか。妹の行李が荷造り迄されて、病院から遠い物置に隱してあつた事實が發見されると、眼の早い警官達は、妹に放火の疑ひをかけた。

『妹！お前がやつたのか？そして、闇の中に自分の行李を燒けない所へ持つて行つて置いたのか？おゝ、それが假態

の證據なのだ！何よりの印なのだ。』

私は悲愁と絶望と低能な妹の代りに受けねばならぬ責任感とで體を折られるやうなつらい思ひを味はつた

『兄さん。仕事がつらくてね。病院を燒いたら家へ歸れるかと思つて……』

これが低能な女の考へなのだ、世間に好くある例の一つなのだ。全く讀者よ。低能な女は他の低能な女の精神をまるで模倣でもしてゐるやうではないか？一ケ月新聞を讀み續けた人は必ず如上の實例を二つ三つは見掛けるに相違ない。然も何うであらう。妹は全く獨創的に此の犯罪を犯したのである。之が白痴に取つて最大の發明なのか？そして、馬鈴薯からは馬鈴薯が出來ると云ふ悲しい事實を語つてゐるのであるか？

妹の裁判は大變に嚴しかつた。そして精神鑑定係りと呼ばるゝ白痴に近い醫師は彼の女が白痴と見做さる可きでない事を主張した。（之は東京から遠い地方の事である。東京の裁判所では多くの醫學博士が何かしらをしてゐて、犯人が白痴であるか何うかを、色々と相談する。そして、彼等は博士なのである。）

妹は九年の懲役と極つた

私は何んなに陰欝な日を送つたらう。そして何んなに妹のための罪亡ぼしとして、善良な仕事と行爲とを望んだであらう。此の悲しい動機に依つて、私は徐々に正しい道を踏む事が出來さうになつて來た。

そして私は正直な人間に改まつたか？

否又しても大きな障碍は持ち來された。

火事の際に燒け死んだ看護婦長の黒焦になつた屍體を何時迄も記憶から除く事の出來ない私に取つて、婦長の實弟で

ある若い薬剤師と時々顔を合せるのは隨分とつらい刑罰であつた。私は彼を見ると釘付けにされたやうに身を顫はし、冷たい沼の底へ落ちて行くやうな慚愧の念でなやまされた。ある時の如きは、狂氣になつたやうに、その弟へ縋り附いて、私は地面に座つた儘、許しを乞うた事もあつたのである。

『あの娘の責任は全部私にあるのです。あれを怨まずに、私を罰して下さい。私を……』

『いや、人を怨む必要はないのです。犯罪は常に一種の過失ですもの。』諦め深い若い薬剤師は人なつこく私を慰撫した。

『けれど、貴方は内心で思つてゐらつしやる、他の事を！他の事を！』

『いゝえ、之丈です。貴方の妹は寧ろ罪がなさ過ぎた。それが今度の過失の原因なのです。』

『貴方は何かしら私と別の考へ方をしてゐますね？』

『さうです。探索してゐる内に、段々と眞相が別つて來たのです。』

『眞相？』私は直立して斯う叫んだ。

『さうです。もつと検べたら、一層眞實となる所の眞相です。………妹さんは單に仕事がつらい丈で火を附けたのでせうか。え？之は可笑しいです。いや、此處に何か秘密が隱れて居さうではないでせうか。妹さんは力の澤山ある、そして勞働をいとはない質の女であつたのを私はよく知つてゐます。それが急にナゲヤリな氣を出し、仕事をなまけ出したので、私も實は不思議に思つてゐたのですが、すると間もなく、あんな大事をやつてしまつたんです。』と薬剤師は聲をひそめた。

『何故妹は放火の以前、ナマケだしたのでせう。病氣か、過勞かに依るのでせうか？』

『其處です。勿論勞れてゐるやうではあつたが、病氣とは見えませんでした。此の機會に貴方へ話して置きますが、妹さんは戀――たしかに戀のやうなものをしてゐたと推定せねばなりませんよ。』

『それは過ちでせう。第一相手になる男がないでせう。』

『いや、男は意地の汚いものです。そして恐らく女だつてね……』

『では妹は戀の懊惱のために、仕事をナマけてゐたのですね。』

『恐らくさうです。』

『相手は……妹の相手は一體誰なんですか。』

『私は斷言しますが……それは院長と、それから次には院長の子息ですよ。』

『え？　院長の子息！　そして院長も？』

『私は此の眼で見たんですからね。』

『何を……いまはしい事をですか？』

『妹さんは紫色の室で寢た事があるんですよ。』

『え。あの小さい噴水のある室？』

『ハヽヽ、院長の大好きな室なんだ。あの室へ入つて助かつた女はないんだからな。』

『そして、院長の死んだ後には、その子息があの室を使つたのですか？』

『それは見遂げてないのですが。他の場所で、二人の立つて居る所を私は一寸見掛けたのです。そして私は二人の間に何かしら戀愛の火花が行交うてゐるのを感じたんです。勿論その時は感じた丈なんですが……』

『では……あとで、もつと委しく判斷したと仰ゃるんですね。』

『不幸な事に、その通りなんです。』

『何を見たんです。云つて下さい。何うか遠慮なしに……』

『貴方！薬色の室の直ぐ隣りは未だ人の入つた事もない不用の室ですが、知つて居ますか。あの室は全く何の目的もなしに空いてゐるんです。貴方の妹さんはあの室を一週間に一度丈掃除するのですが、それに掛る時間は何時も二十分なんです。薬局の前を通つて行つて、又歸つて來ると二十分丈何時も過ぎるんです。それが或時、三十分たつても歸つて來ないんです。（私はその時或る薬を煮てゐて、時計に注意してゐたんですがね。）可笑しいな、と私は考へました。一寸した戯れの心から、私はあの不用の室へ様子を見に行つたんです。すると何うでせう。扉がしまつてゐて、私が押しても引いても動かないんですね。はゝあ之は中から鍵がかけてある、そして、鍵がその儘、鍵穴へ嵌つてゐる、と私は感づきました。そして室を掃除するのに、鍵を掛けると云ふのは何より理に合はない話しではありませんか？』

『妹は……中に居つたのですか？泣いてゞもゐたんですか？』兄である私は當然他人よりも熱心になつて訊ねた。

『私は悪い所へ來て了つたと思ひました。唯それ丈です。勿論、ハタキの音も何も聞えませんでした。それから、ずつと後になつて私は妹さんに鍵を持つてゐるのかと尋ねて見たんです。答へは私の豫想通り、若い主人が持つてゐるのだと云ふことでした。私は單なる興味丈で、さう云ふ事を探るのは罪だと思ましてね、その先を突き詰めて聞くのを態と避けたのですが、今になつて見ると、もつと深く知つて置けばよかつたと悔ゐてゐるのです。と云ふのは……』と薬劑師は悲しげに、私の方へ顔を寄せた。

『先へ伺つて置きたいのですが、あの放火と、戀愛とには、何か關係があるのでせうか？』私は斯う念を入れた。

『あるからこそ、お話ししてるんです。』

『では、何故、判決以前に知らして呉れないんです。』

『その頃はね、何しろ、姉の非業な最後のために、私も反省や洞察の力を全然失つて了つてゐたし、未だ、本統の念所は氣附かずにゐたものですからね。』

『さうです。貴方の姉さんの死の事を考へると、私はもう肋骨を引きはがされるやうなんです。』と私は下を向いて呟いた。

『油で黒くなつて、眼球から湯氣の立つてゐた有樣を私は何うしても忘れ去れないんです。』藥劑師は涙をためて私を怨めし相に睨め、それから又思ひ出して續けた。

『もう云ひますまいね。貴方も私も不快になる丈ですから。……いや、それより、あの院長の子息が大變好色な事は死んだ姉からもよく聞きました。姉へも妙な話を持ち掛けたんだ相ですからね。それから、貴方も姉に云ひ寄つた事があるさうですね。姉は貴方を讃めてゐましたよ。』

『それは何かの間違ひでせう。貴方の姉さんは私にそれとなく何かを仰言つたり、手紙を呉れたりしましたがね。未だ何でもなかつたんです。私から云ひ寄るなんて、そんな事はありませんでした。……』私は黒焦げの女を思ひ出しつゝ氣味惡く否定した。

會話は長く續けられた。そして何でも一番の罪は院長の息子にあるらしいと云ふ判定に到着した。一部の噂に依ると、息子は父の殘した大きな借財の始末に窮し果てゝゐたのである。そして院長の死後急に寂れ出した大きな病院の維持も覺つかなくなつてゐたらしい。『燒けて了つた方が結局利益になる。保險金が入れば、それで他の小さい事業に移

れる譯だ。』と云ふ考へは當然息子の頭の中を往來したのであらう。けれども自分で我慢すればたゞ誰にも迷惑をして了ふに相違ない。色仕掛けで心を捕へて、白痴の娘を利用しやうと云ふ悪辣な考案が何うして續いて起らずにゐるだらうか。

『それなんです。』と藥劑師は恐ろしい形相をして云ひよどんだ。

『確かですか？』

『恐らく之より確なことはない筈だ。貴方が女から生れたと云ふ事より、もつと確かだ。分りますか？然も貴方が女から生れかかつてゐる所を誰も見たのではないんです。』

『それで息子の罪については、何の證據もないと云ふのですか？』

『少しはあるんです。妹さんは時々獨り言を云ふ癖があるでせう。或る時、洗濯物を抱へた儘で「貴方、貴方、貴方！」と口走つてゐたんです。誰だつて、自分の事を貴方なんて云ひはしませんからね。』

『それは證據とは云へませんね。』と私は藥劑師を少し疑つた。けれども、私は妹が院長の息子のために貞操を傷けられ、その上、詐欺的犯罪の犠牲となつて獄舎へ迄も引かれたのだと云ふ漠然とした觀念を植ゑつけられずにはゐなかつた。

怨恨と憤怒とは再び私の心を領した。藥劑師と心を組むで、色々の時や、息子の様子を探れば探る程、疑ひは確實と代つて行つた。

殘忍な内謀は日に日に私の心の中で育つて行つた。讀者は忘れたであらうか？私は一時自暴自棄と意故地とから殺しにさへ進むでなつた、暗怪な青年である。　大

私は殺人を夢み、又妄想し、遂に實行し、企畫し初めたのである。兇物は用意され、逃げる道が地圖の上に探された。

ある人は私の愚を詰つて云ふであらう。何故お前は眞の犯人たる院長の息子を其の筋へ訴へないのか？と。けれど、それは私にとつては無駄事としか思はれない。起訴した處で　我々が敗けるのは初めから判明してゐるのではないか。

息子は妹を強いて姦したと云ふのではない。又放火を教唆したとしても　その證據は上つてゐない。それに裁判官達にも名譽と云ふものが必要である。そして之は眞理を誹ることに慣れた一地方に起つた事である。間違つた判決をその儘で通すのが　彼等に取つて最も利益であるのは判り過ぎてゐるではないか。それが彼等の妻子を安全に暮させる最上の方法である。それが彼等の鬚に滋養をつけ、一層上方へ伸び上げるやうにする最適の方法なのである。裁判長の鬚は後ろからでも見える――之が此の地方での最も誇る可き名物だつたのである。裁判長は神經衰弱に落ちて、カルシユームを含むカルピスと精力素と云ふ藥と、ヘモグロビンとヴイタモーゲンとを服用し、その上にビフステキを食べるのだが、其れが皆鬚になつて了ふのである。

朝鮮人を憐む支那人

何うして忘れ得やう。そして何を忘れよと云ふのであるか。いや、反對に、私は記憶のあらゆる粒を一時に思ひ浮べるのだ。

私は齒がみをし、骨が響きを發する程に腕を振り、又、眼前の物體は何に限らず蹴返した。あの沈着で陰鬱で痩薄な院長、彼が恐らく病的に迄も進むでゐる色魔であつたことを、私は今漸くにハツキリと思ひ當る。私が黎色の室に休む

でゐた時も、忍耐力の強い院長は淫な女性を閉じ込めてあるやうに蠶化して、私のもとへ忍むで來たのかも知れなかつた。あの赤くなつた顔、私に媚びを作る猫のやうに光つた眼などが、一時に私の頭の中を廻ひ廻つた。おゝ、そして院長の子息も斯んな卑しい氣質を幾らか遺傳してゐたのである。妹は何と云ふ哀れな娘であつたらう。彼の女は二人の乞食の恥を、一人で受けたやうなものではないか。

それだのに、私の復讐心は何故もつと強烈に燃え上らないのか？私は實に自分が中氣病みでゞもあるかの如く、町や室山をよろめき歩いた。けれど、何時迄待つても妄想が實行に變化する機會を捕へ得なかつたのは一體何故なのであらうか。私は自分に聞いて見てゐる。勇氣！それから異心！この二つが欠けた所に、興味中心の殘忍性丈が狂ひ廻つてゐるのではないのか？そして私は遂に心の弱い青年——悩む事を知つて、切り抜ける事を悟れぬ愚かな男に過ぎなかつたのであらうか。

興味から來る殘忍！それは多くの殺人者に取つて必須の要件である。けれど、私の場合では、その興味を求める願望が本能的と云へる程には狂熱でなかつたに相違ない。

「駄目なのか？本統に實行出來ないのか？」私は自分の腕を拳で打つては斯ふ問ひ續けたのである。

私は實に、斯んな工合であつた。自分を嘲ける惡魔の聲が、自分の心の中で聞え初めた時、私は何んなに絶望して床の砂を攫めたであらう。惡人ぶると云ふことを誇る程、私はただ幼稚で善良であつたのか？殺人の妄想は單に脆弱な心の強がりであつたのか？曲つた心の敗け惜しみに過ぎなかつたのか？之が問題なのであつた。と云つても、私は何一つ辯解しやうとは思はない。自分はやはり、結局、こんな工合で中氣病みを續けた丈なのである。

その中！私は自ら進むで、ある偵探になつた小學教員と知り合ひになつた。事の起りは、私が彼の落した財布を拾

り屆けてやつたと云ふ些末な點に過ぎない。けれども、私達は直ぐ親しく語り、連れ合つて散歩する迄に友誼を進める事が出來たのであつた。

或る日――二人は約束に依つて、裁判所の前で出會ひ、此の町で起つた一つの大きな事件――朝鮮人の十三人斬り――に關する裁判を傍聽した。その小學教員は『社會から不當な取り扱ひを受けた哀れな男が、如何に彼自身も亦社會を不當に取り扱ふか。』と云ふ事の實例を求めるため、私は又私の流儀で、十三人の人を斬るには何んな決意と勇氣とを要するかを知るために、耳を澄ましたのである。

約めて云つて了へば斯うである。哀れな被告、高と云ふ名の朝鮮人は、裁判長のやさしい質問に對し、陰氣に答へるのであつた。

「私は馬鹿者です。何故この日本へやつて來たのか？それが分らないのです。いや分つてゐる。故鄉で義理の兄にえらく侮辱され、虐待されたんです。その有樣を、私の戀してゐる女が見て笑つたのです。それで日本が大變戀しくなつて、そこへ行つたら、お金にもなり、やさしい人が待つてゐて呉れるやうに思へて、それで跣足になる程貧乏しながら、このお國へ渡つて來たのです。それから六神丸と云ふ藥と翡翠とを行商して日を暮し、もつと惡い事もしながら、內地で法律書通譯を半分やりました。電車の車掌になつてからは、日本人の女工を妻に貰ひましたが、その女は私の子を産んで呉れないのです。「何うか一人丈でも好いから生むで呉れ。」と頼つても、女は唯笑つてゐて、やはり生むでは呉れないのです。私はそれが不思議で困りました。きつと私を愛してゐないのだと氣づくと淋しくて、又歸鄉したくなりました。斯んなつらい思ひをしながら、私は妻の兄夫婦と一軒の家を借り、半分づゝ使つて、半分づゝ家賃を拂つてゐました。所が義理の兄は子供が二人もあると云ふ口實で、段々室を大きく使ひ、臺所も自分等丈で使ふやうにシキ

りをして了ふし、私が寝てゐると、態とまたいで便所へ行きますし、こつち、枕の方へ一人の小さい子を置いておかせ、私は戸棚を開けて、それへ二本の足を突込むで寝たければならない程。場所をふさげられました。そんな事をいへば忍ぶ程、兄夫婦やその子は私を馬鹿扱ひにし、嘲けり笑ひ、私が卸した許りの手拭ひで泥の手をふいたり、私の茶碗へつぶした南京蟲を一杯入れたり、六神丸を無断で賣つて、その金を使つて了つたり、私が買つた炭を平氣で盗み、その度に私へ悪口をつくのです。犯行の前の日、兄の妻が私の金だらひへ穴を明けて、知らぬふりでゐるから我慢出來ないで、二言三言云ひ争ひをしたが、その事を兄へ云ひつけたと見えて、兄は醤油の壜で私の頭をなぐつたのです。血と醤油とに染つて私は眼を開く事も出來ずに、唯暴れてゐると、兄の妻は口惜しまぎれに、私の急所をつかんだので、私は氣絶して了つたんです。あゝその時です。私に水を與れたのは私の妻だつたんです。お前はお前丈は私の味方なのかと云つて私は妻に泣き縋りました。妻は姉の毛を引張つて、後ろ倒しにしてやつた事を涙乍らに語りました。私はその涙を見たばかりで一切の立腹をこらへやうと決心しました。皆から憎まれてゐる時、たつた一人の者に愛された氣持を誰か知つてゐる人はありませんか。おゝ……」と彼は手ばなしで泣いた。その時、傍聽席の一角からも細い女の歔欷が聞えて來たので、その方を見ると、高の妻らしい貧乏な女が眼も腫れ上つて泣いてゐたのを私達は知つた。

『それからY署へ連れて行かれたが、巡査たちが皆兄の方を信用し、私を危險人物のやうに睨め廻すんです。疑ひ深い深山の眼に取りかこまれて、私は又頼り所のない淋しさと憤怒とを感ぜずにはゐられませんでした。兄は「あの金ダラヒは元私のもので。高は勝手に彼の名をペンキで書いて、自分のものだと云ひ張るんです。」と誠らしく訴へました。警部は直ぐその言葉を信用して了つて、はては多くの巡査や、集つて來た群衆達が、さんざん私を嘲笑したんです。いくら私が異國のものだと云つて、之はあんまりひどい。ひどすぎます。私は眼がつぶれたやうに悲しくなり、そこいらが

眞暗になつて了ふ程、恥辱を感じました。なんぼ朝鮮人だつて、心と云ふものを持つてゐます。何方を見ても眞暗で自分の本統の心持や、正直な考へを聽いて吳れる人がないのを知る時、人は無人島へ行つたよりつらくなつて了ひます。無人島に着いた男は王者のやうに自由です。けれど此處では……闇にとりまかれた盲目で跛の奴隷が見出される丈です。信頼してゐた警官たちまで、こんなに私を憎み、私を疑ひ、卑怯な片手落ちをして少しも自ら耻ぢないんです。此の上は自分の憤りの治る迄人を殺し、自分も地獄へ落ちて、新らしい世界に住まうと云ふ心が起きずはゐられないではありませんか。お丶それが何故無理なんです。い丶え、私はもう決心しました。私は刀を磨ぎ初めました。すると、隣りの親切な老人が、「高さんは遠い所から來てゐて淋しいんだもの何事も公平にし、喧嘩の元を引き起さないやうに……」と兄の妻へ話してゐるのが聞えました。あ丶その時、私は何んなに刀を磨ぐのを控へ、感謝の心を以つて怒りを飲み込み、こらへ、しのんだでせう。私の妻も聲を立て丶泣いて居りました」

高は途切れ途切れに以上のやうな告白を語り明したのである。傍聽席の妻女は到々狂的に泣き出して、誰かの注意で外へ押し出された。

小學教員は沈んだ顔になつて私とは別の事を考へ續けてゐた。

『あ丶』と私は體をふるはし、自分のと他人のとを一緒に混ぜた涙をためて獨語した。それから後になつて考へて見ると）私は夢中で駈け出したに相違ない。朝鮮人の妻に追ひついた私は、彼の女の恐れるのをも構はず、彼の女の肩を、撫で、袂についてゐた藁屑をつまみ取つてやつた。

『何すんの？』女性は私を怪しみ訝つた。

『無理はない。貴方も私も疑ひ深くなつてゐる。お互ひに殼を背負つてゐる。私が恐く見えても、あ丶、それは構はな

いゝ我々はセンチメンタルな事はきらひなのだ。だのに私は此の通りなんだ。—さう云ふと私は真赤な眼から大粒の涙をふり落し、黙て、男らしくない擧動を恥ちるやうに、女性の前から姿を消し、溝の中へ持ち合した四十銭を捨てゝ了つた。

朝鮮人、支那人、それから彼等に似た日本人、可哀想な彼等の中に、此の私も一員として加つてゐる。それが事實でないと誰が云はう。私は自ら痛みつゝ又彼等を痛み憐れむだ。あの一人の朝鮮人に、私の運命の半分がつながつてゐる。私を見やうと思へば、彼を見るが好い。若し私が彼であつたら、私は彼のなした通りをせねばならなかつたであらう。いや、聖者と呼ばるゝ特別の人を除いたあらゆる普通の人なら、彼の如き境遇の中で、その徳と智慧とを安全に保つ事は六ヶ敷いであらう。

彼は惡い男である。それに何の間違ひがあらう。けれど私は餘りに好く知つてゐる。他の事を、他の事を、斯んな種類の惡は自身で自然に湧き起る力のないことを—之は尋を隔たる一歩のものであることを—

復讐の代償

未だ何かゞ續いてゐる。

私の所へ不愉快な手紙が達いてゐる。それは例の哀れな姉妹からであつた。彼等は初めの中こそアバヅレであつたか、今ではまるで繼子のやうに言葉も少くなつて了つてゐたのである。男を知つてから縮み上つて大人しくなる女は決して少くない。私のある知り合ひは電車の中である女と近づきになつた。二人は馴々しく郊外の畑道を歩いた。男は好い氣になつて女と關係し、それから小使ひを與れとせがむだ。女は一圓丈與れて、あとはお前と一緒に連れ添ふてから

やろと云つた。男は承知しないでもつと出せとせがんだ。すると女は怒つて男の襟をつかみ、ふり廻し、『私を唯の女と思つてるのか？』とおどした。男も默つてゐなかつた。『この畜生！』と怒鳴ると女の首を絞めた。女は手を合せて拜み、それからは大變に大人しく何でも男の云ふ事に從つた。何か新らしい事を敎へると女は男を尊敬するやうになるのである。

それだから、あのアバズレ共が今になつて何れ程私から新らしい世界を見せられ、そこへ導かれたかは云ふ迄もないであらう。

來た手紙には斯う書いてあつた。

『……本統に私達は生きてゐたくありません。生きてゐたつて、生きてゐる氣持がしてゐませんわ。』私は口惜しさうにそれを破きすてた。

又その次に姉丈が一人で手紙を寄越した。

『……貴方は何んと云ふ方でせう。愛する印だと云つて私の腕へSと云ふ形の傷をおつけになりましたね。そして、ああ何と云ふ事でせう。妹の腕を見たら……そこにも矢張り、Nと云ふ傷がありましたわ。私は貴方の心持が分らないで泣いて居ります。』之が新らしい敎への一つである。

又その次に妹の方がサツサとよこした。

『……私丈を連れて逃げて下さい。私は怨むでゐますよ。』

それから別々に澤山來た。又一緒に書いてても來た。もう無茶苦茶に書いてあつたり、丁寧に考へて書いてあつたりした。大概は馬鹿な事か云はれ、時には利巧な事も云はれてあつた。無傷に然も急速に時がたつて、又手紙が來た。

『……貴方は何故何うにかして下さらないのです。私達は之から何うなりますのでせう。あゝ、困ります。

今日或る人が話した事を聴いて、私達はふるへました。それは斯うで御座います。

去る十二日、身元不明の姙娠女の溺死體が石油庫の前の川へ流れて參りますと、續いて又異つた姙娠女の死體が出て參りました。一方は初めから浮いてゐました。もう一つの方は呼ばれたやうに底から出て來て、浮いてゐる方のそばへ行きました。すると兩方の鼻から血が出たと云ふ事でした。あとで檢べたら、二人は同じ模樣の長襦袢を着てゐました。二人は姉と妹であつたのです。姉は姙娠四ヶ月妹は五ヶ月であつた相です。妹の方が一ヶ月先へ姙娠してゐたのです。あゝ、貴方は何う云ふお積りなのですか。分りません。私達は泣いて居ります。斯の人々のやうになつたら何うしませう。そして、斯の人々のやうになるのは隨分たやすい事ですわ。二人で心を痛めて居りますわ。あゝお怨み申します。―』

まづい文章ではあるが思つてゐる事の十分の一位は表現出來てゐる。二人はそんな話をきいて悲しみのあまり手紙を書いたのであらう。そして可哀相に文章にはその悲しみさへよくは表れてゐないのである。

その又次には妹がよこした。

『……姉はあんな病氣をしたのですもの。そんな心配はありません。きつとまだ出來ては居りませんでせう。又そんな事未だきいても見ません。けれど私は丁度年も宜敷く、丈夫な身ですもの、今度こそは姙娠だと思ひます。あゝ、あなたは何うして下さいますか。此の前のやうに間違ひであつたら好いと思つてゐますが。今度は何うしても間違ひではありません。何うしてもさうのやうです。怨みます。もう死んで了ひます。早く來て下さい。私丈と逃げて下さい。』

姉の方は姉の方でやつてゐた。

『……貴方はあんまりです。私は川へ入つて死んで了ひます。妹と一緒に死にます。あの此の間あつた話のやうに……

妹は毎日吐いてゐます。あれは姙娠したのです。けれど貴方の子ではありません。あれはまだ他に古い馴染を持つてゐます。貴方はそれを信じないのですか。」

未だ未だ手紙は來ては破かれ、捨てられた。

「畜生！」と私は獨りで怒鳴つた。手前達二人に情死なぞ出來るものか！お互ひに殺しつこをしても自分丈に救はれやうとしてゐる癖に、二人で川へなぞ入れるものかい、馬鹿！手前等は引き潮の時に潮干狩りでもしやがれ。二人で引かき合へ。喰ひつき合へ。だが何うして一緒に姉妹心中なんかゞ出來るもんかい。」あゝ之は何と云ふ無慈悲であつたらう。

妹の姦罪で憤怒し狂亂してゐる私の心は全く悪辣になつた。私は自分でそれを悲しみ、泣き、悔ゐ、又怒つた。そして結局は何も悲しまず、悔ゐないのと同じであつた。

そして時には、自分と自分の周圍とを忘却するために、憎むでゐる女等のもとに走つては、獸の如きことを繰返した。女等はその度に思ひ出して私を怨み、時には柔かな手で私の頰を打つた。何故か私は「打て、もつと打て！」と叫びつゝ、少しも抵抗しなかつた。それは相手を憐愍するから起る忍耐ではなく、あゝ實に、聽く人があらば聽いて貰ひたい、實に、それは、自分から自分を侮辱し輕蔑する自棄と放縦とから生じた忍耐であつた。

では之が一切であつたか。之が起つた事の凡てゞあつたか。いや、之からが本統の話しになるのである。

云ひ遅れて了つたが、私は病院に寄食してゐた頃、カリエス患者のコルセットを造るため、セルロイドを取り扱ふ事に習熟したので、その後も、あるセルロイド工場へ入つて生活費を得てゐたのである

そして、他を制してやるためには、自分を出來る丈正しく保たねばならないと云ふ考へで、自分を鞭つた。けれども

たゞ私に取つて、苦痛なる痛みに過ぎなかつたのに、何と云ふ悲しさであつたらう。

正直に云つて了ふ。一つの憤激を抱いた人間は、却つてその憤激のために墮落しやすいものである。あゝ、私は何に程心の平靜を望んだ事であらう。此の憤怒！この怨恨がいけないんだ、と叫んでは、自分の爪で自分の胸を掻きむしつた。之は何と云ふ矛盾した心理であらうか。憤激があればこそ罰を課すのであり、罰を課すから、正しい心を欲するであるのに、正しい心を持つには、憤激それ自身がいけないのである。

『えい！何たる苦しみの鼬ごつこだ！』何度繰返しても、それは實に同じであつた。

然し私は心を取り直した。（少くともさう思はれる。）同じ工場に通ふ老ひた職工が火傷のために休職し、喰ふにも困つてゐるのを聞くと、私は深甚な同情のやうなものに刺戟され、そして、露店を出してセルロイドの櫛やシャボン入れや、その他の小さい道具を小賣りし、儲けた利益丈をその老人と家族へ惠むでやらうと云ふ企畫で私を喜ばした。實際、私はその企畫を實行する勇氣を持つ事が出來た。ほんの宵の中丈露店を開くのではあるが、賣物なぞを安く割引して賣るために、客の數は思つたよりも多かつた。そこ迄は實によく行つたのである。だが、その先は何と云ふ悲慘であらう。

私は薄暗い燈火を前にして、地面の上に座つてゐ乍ら、眼前に躊躇なで、櫛を漁つてゐる美しい若い女性を横目で見た。彼の女は強ひて落ち着を見せやうとするために、却つて慌てゝゐるやうな風があつた。そして、私の眼から隠れて、一本の櫛を盗み取り相にする所を私は直覺した。勿論その時に、私が眼を正面へ向けたならば、女性は罪を犯し得なかつたに相違ない。けれど意地の惡くなつてゐる私は、自然にさうする事を耐へて了つた。

『待てよ。あの女は盗まうとしてゐる。だが私の注意を恐れて、躊躇してゐる。惡い女め！私が何も知らないと思つて

ゐるのか？私がお前を罪に落してやらうとして、態と見ぬふりをしてゐるのが分らないのか？

之は何よりも悪い思想である。盗む機會を態と與へてやる人は、恐らくその機會に引き入れられて、盗みを行ふ人よりも有罪であるに違ひない

私の不注意と無關心とを嗤つてゐた娘は、不意に一本の櫛を抜き取つて、袖の下へ隠した、立ち上ると、今度は袂の中へ押し込むで、急いで闇の濃い方へ消え去らうとした

痛々しい生活に疲れて、何の悩みもない私は、此の時久しぶりに淋しい微笑を洩らしたのである。それは何とも云へぬ意地悪い、悪魔的な笑ひであつた。私は網を掛けて太つた鴨を捕へた百姓と同じ心持になつて立ち上つた。

私は或る露路で女性の後ろ姿に追ひついた。

「へゝゝゝへゝゝゝ」と私は唯笑つて跡に従つたけれど、「貴方は盗むだね。」と難詰する事を何故か控えて了つた。此の忍耐が何よりも悪かつたのである。私は何も辯解しまい。私には實を云ふと私の心理がよく分らない。痛み――何か漠然とした痛みがあつた丈なのである。

娘は一寸振り返つた。彼の女は確かに驚いた如く見えた。見えたと云つても、其處は全く闇の中だつたので、或るは彼の女は私を見なかつたかも知れない。又私を見たとしても、之がセルロイドやエボナイトの商人だとは感附かなかつたかも知れないのである。

私は忍耐した。それは實に悪性の忍耐であつた。露店の方を捨てゝ置く譯に行かないのを感附いた私は、盗人の娘から分れると直ぐ道を取つて返した。ところが、半ば迄歸つて來ると一つの悪心が明瞭にカマ首を持ち上げて來たのを、私は闇の中に見届けた。

『家に何うでもたれ！私に面白い家の方へ行くんだ！』

私は再び娘を追つた。そして何処迄も聲を掛けずに跡をつけた。娘は一つの家の前に止まり、中へ入らうとして、一寸注意深さうに後ろを見た。その時である！

『お嬢さん。へゝゝゝ』と私は闇から首を伸ばした。娘は血が凍つたやうに直立した。そして、何処からか漂ふて来る極く僅かな燈火で私の顔を見入つた。彼の女は初めソク／＼と唇を動かして何か云ひ出さうとするやうであつたが、不圖思ひ返したやうに恐る恐る袂から例の櫛をそつと出して、今度は力強く私へ突きつけた。

『そんなもの、地面へお捨てなさい。へゝゝそんなもの入りません。へゝゝ』と私は低い劬るやうな聲で呟いた。それが却つて娘を恐怖させ戦慄させたらしかつた。彼の女は啞のやうに唯オヽ、、とロ走つた。事に依つたら本統の啞かも知れなかつたのである。

『お嬢さんの名は？』と私は試しに尋ねた。

『ミサ……』と女性は服従的に答へた。

おゝ此の女性は本當の悪人ではない。彼の女はすつかり恐怖してゐる。そして私を巡査と同じやうに尊敬してゐる、人が悪事を後悔した瞬間程屈従的な心に變ずるものはない。そんな時には弱い子供に打たれても、打ち返す力さへ出ないのである。

『之、貴方の家？』私は少し威嚇的に訊ねた。

『ええ……』

『あしたの晩、こゝへ忍むで来るから會つて下さいね。私は貴方を美しいと思つてるんです。』私はやさしく、大人し

く頼んだ。
女性の顔は再び蹙つた。彼の女はヨロけながら後じさりをした。困惑と絶望とが體中に見えた。
『あゝ……それは……』
『いけないと云ふんですか？』
『でも……』
『あの事……あの事が世間へ知れたら困りますよ。分つてますね。』
『分つてます。さ。之お返ししますわ。許して下さいましね。』娘は初めて涙を落した。
『それは入ません。そのハンケチを下さい。』私は斯う云つて、女性の手にあるハンケチを取り上げた。『では、きつと私に會つて下さいね。私はもう、貴方に戀して了つてゐるんです。』
女性は私を眤と見詰た。そして恐怖しながらも、私の顔が嫌ひでないのを感じた如くに見受けられた。彼の女は少しの間、目を閉じて考へ續け、軈て、默つて家へ入らうとした。
『あしたの晩の八時！間違ひなくね。それでないと世間へ知れますからね。』
『えゝ！考へときますわ。』
『今、承知して下さい！』
『では、八時！』
娘は家へ逃げて行つた。私は疲れて淋し相に店の方へ歸つた。
あゝ何と云ふ悲しい陰慘な計略！

私は闇を歩き乍ら、自分を忘却して、女のやうに泣いた。不意に千住へ赴いて逢いたいのであつた。

不幸な女は何であるか？私は何を悩み、何を為しつゝあつたか？

私には全く反省力が欠けてゐるのか？

否、私は自分の心の闇を見詰めるのが恐ろしいのであつた。然もそれは結局暴かれずに済まされないではないか？

私は静かに注意力を集め、見る可きものを指摘せねばならない。分つてゐる。私が本来望んでゐるのは女性を虐待する事ではなかつたではないか。妹のための復讐！それが初めでもあり、終りでもある唯一のそして重要な目的ではなかつたか？

皆分つて了つてゐる。今更弁解は一切不要であらう。分つてゐる。實に、人々より蓄積せる復讐心、満たさるゝ事なき一つの願望、それが目的の道を閉ざされた時には、必ず曲つた方向へ外れて行かねばならない。

精神分析家はそんな傾向から來る悪い行爲を『復讐の代償』と呼ぶが好い。私は實に新しい女の相手へ向つて無意識的に『代償』を實行したに相違ないではないか。自分の苦惱を軽減するために、他人の苦惱するさまを見て楽しむとは……あゝ、それは虎にも獅子にも具はつてゐない特異なる残忍性の發露である。私が男らしくなく泣き崩れ、何時にも救ひを見出せない闇の中を這ひ廻つたのは、以上の事に氣附いたからであつた。

蛇と鰐と狐とを混ぜ合して煮ても、私の心よりひどい濁りは浮いて來まい。

今、今ならば何うにか直せさうである。早く、早く、私はあの娘にもう一度會つて、私の悪い謀みを詫びやう。あゝ彼の女は何んなに眠れぬ時間を持ち扱ひ、悔恨と困惑とで懊惱してゐる事であらう。彼の女は民へ落ちた頃よりも、もつと憐れ深く悶えてゐるに相違ないのであつた。

『復讐の代償』……そんな卑怯な陰惨なものがあつて好いだらうか？實にもう何の辯解も入りにしない。唯一ツ云つて置かう。弱い心とは卑怯と同じものを意味すのである。

惡心の中に包まれ育つ善心

闇は限りなく濃くなつて、氣體でなく、固體――油じみた古い布團のやうに私を壓した。眠らうとしても心の靜かにならない哀れさ。髮の毛の生え目は一つ一つに痛み、眼や鼻は硫黄の煙りで害されたやうに赤く充血した

道を曲げてはいけない！一つの目的を明確に意識せねばならない！復讐の相手の顏から眼を外らしてはいけない！

正直な心、曲らぬ心、何故それをはつきりと保ち得ないのか？

けれど軈て私は熱つぽい眠りに陷ちて行つた。夢は再び私を悲しく覺醒させた。何でも太つて醜い顏の男が私に斯う話したのである

「兄弟を殺しても、御免なさいと云やあ、それで濟むだ時代があつたさ。時代、時代がね。」

それから想起し得ない混亂の後に、私の亡父が表れ、愉快な声を以つて呟いた。

『帽子を盜むでも、首を切つても、同じ位の罪しか感ぜぬ人間もあつた。それから、それで好い時代もあつた。時代も。』

私は恐怖する。之等の夢の示現は何を意味してゐるのか？私は心の奥底から後悔してゐない爲めに、斯んな荒れた考を夢みるであらうか？

私には分らない。あまり信用のおけぬ潜在意識下に何か私の顯在意識と異つた思想が埋沒されてゐて、それが淺間しくも夢の姿で現れて來るのか？私は根からの惡人なのか？それとも、之は何か心の狂ひに過ぎぬのか？

『樂しい場合にも、苦しい場合にも、お前達は互ひに人と人との間の深い絆を思ひなさいよ。樂しい場合には、それに依つて樂しみが倍になるし、苦しい場合には、その苦しみが和らげられるのではないか。』

私は此の頃強く痛く如上の言葉の正しさを感じてゐるのだ。それは簡單な教へである。

『愛してやれよ。』と云ふ聲が上から聞え、

『愛して下さい。』と云ふ聲が下に聞えてゐるではないか。

私が火傷した老職工の家族を助けてやらうと考へ、又それを實行して來たのは一體何故であり、何の目的であつたか？之をも『復讐の代償』と呼び捨てる無慈悲な人が何處にゐるだらう。あゝ之が自暴自棄から起つた業とらしい忍苦だと誰が判斷するか？

おゝ、眼にはつきりと見えて來る。老人は爛れた神經の尖に熱した針の苦痛を味つて、床の上を轉がり廻つてゐる。幼い子供は恐ろしがつて南京鼠のやうに怯え、慌て、這ひ廻つてゐる。一番小さい子丈が平氣で、お椀へ一杯砂を盛り上げて、何の眞似か知らぬが、小さい手を合せて拜むでゐる。

之は何でもない事だと、耳で聽いた人は云ふであらう。だが眼で見たものが、此の哀れな生きものたちへ『復讐の代償』を試みる勇氣があらうか？『愛してやつて呉れよ。』その言葉は誰の口から出やうとも、此の場合に當て嵌つた眞實ではないか？

一日二圓を儲けた人が、一圓を割りさいて與へやうと思ふのは此のやうな時である。

『その品はあの人にやつて下さい。』

『その本をあの子に教へてやつて下さい。』

『その楽しい歌をあの子に唱はして下さい。』

昔は斯う願はねばならない。あゝ、それは本能によつても、思想によつても、當然なことではないか。もう分り過ぎた事である。

私は本當に心が片輪なのではなかつた。唯時々片輪になるに過ぎない。私には正しい事物が好く分るのだ。だのにあの少女を、あの正直さうな初心な盗人の處女を何うして良へ引き入れ得るか？

私には時々悪魔が取りつくのか？幼い時に正しい愛で養育されなかつた事、思春期に於ける修養を欠いた事、この二つは悪魔の大好物である。私は不當な變態心理の父母を持たねばならなかつた。私は悪い友の中でばかり遊んだ。善良なものを見殺すために、不良を當り前と思ひ込むだ。それが今頃になつて漸く分つて來たのである。

誰か私を縛る縄を解いて呉れ、耳へ詰つてゐる砂を掘り出して呉れ、魚の鱗のやうな曇りを私の白内障のやうな眼から取り去つて呉れ。

おゝ、それまではない。早く、早く、今の内、あしたではもう遅い。今直ぐ、何處かに縊つるされて慄つてゐる繼子を下へ下してやつて呉れ、焼火箸を繼母の手から取り去つて呉れ。

きびし過ぎる親と、無關心過ぎる親とを集め、私を實例にして何か恐ろしい事を講話してやつて呉れ。虐待される幼兒達を悪い親の手から離して、情深い師匠の下に置いて呉れ。

それが濟むだら、子供達の偏屈と意地悪とを矯正してやつて呉れ、幼年の中は楔でさへ好くしなふ。それが肝心な所である。

柔和な話を聞かせ、さらに、柔和な行爲を現實で見せてやり、何を模倣す可きか、よりも、之を模倣せよ、之を習慣

にせよ、と云へこやつ一寸呉れ。此の燒散、この習慣からこ三晩來、何をなす可きか、を細心に考へた當面には生れ出づるのである。事を正しく運らすために、軌道を與へる事、之が何よりも初めの仕事である。

いや、然し、再び、私は私の事を考へる可きであつた。夜中でも構はない。私はあの係職教員へ恐くあつた後、之から起りさうな事を話し、然へ、懺悔しやう。神を知らぬ私は、唯、あの教員に「許して下さい。」と謝つて伏し倒れやう。そして、一切の始末をつけて貰はねばいけないのだ。私は氣の替り易い惡人である。今正直にしてゐても、あしたは盜みを平氣でしてゐるかも知れない様な、そんな頼りにならぬ罪人である。

『善い事をしやうとして、惡へ事へ導かれる男』それが私と云ふ人間である。ことによつたら、例の「夜襲」をも、「卑怯からでなく、勇氣と仁愛とから斷念せねばなるまい。あゝ、そして、それも善い事なのだと大勢の人が話してゐる。

斯くて私は夜中に雨をついて係職教員を訪ね、謝罪す可き點を謝罪し、頼む可き事をすつかり頼むだ。

翌日の夜になると、教員は私の代理として、あの盜みをした處女の家の近くへ出掛けて行つた。處女は約束を守つて、八時になると家から出て來、待つてゐる教員を私と間違へて怯えた。柔和な教員は一切の事情を上手に分り好く話してやり、彼の女の心を眞黑にしてゐる色々の心配と當惑を拭ひ去つてやつた。さうすると女は一層自分の心をハツキり見る事が出來、更に強い悔恨を發見し、自責に氣附いて、新らしい涙を降らせた。

親切な教員は私の元へ戻つて來て、起つた事の凡てを話し、その上それらを記錄に書きとゞめて、私に與へた。

『聞き流すと云ふのは好い事でない。貴方は此の記錄を時々讀み返して、自分を善くするやうに努めなくては……』

教員はその後、五回ばかり、例の處女と面會した。**そして記錄はその度に增補されたのである。**

盗みをした處女に就ての記錄

此處では教員が幾らか觀念化して書きとゞめた所の、哀れな處女の經歷を掲げさせて貰ひたい。

……………………………………

「……私（處女自身）は考へて辯解致すのではありませんが、それでも之丈は申し上げたいのです。私は初めから惡い人間では御座いませんでした。誰だつて、さうで御座いませう。惡につけ、善につけ、それを段々と強くして行くためには相當の時間が必要なのは何より明らかで御座います。惡行さへ、幾らか習熟を要すると云ふ事は、少くとも私の場合では眞實で御座いました。或る人は申します、惡行をなすには放任で足り、善行をなすには教育が必要だと云ふ風にね。けれど、惡行をすゝめる養成所と云つたやうなものが、此の世には澤山あるので御座います。押包まず、お話し致しませう。實は斯う云ふ譯なのです。

私の眞の母親が私を姙娠して居りました頃、私の父と云ふのは何か商賣の上で大きな損を招いて、母を置き去つたまゝ、何處かへ出奔して了つたのです。殘された母は姙娠預り所へ泣き入つて、絕望と悲愁の中に、私を生み落したので御座いました。それから私は炭屋へ貰はれて行き、其處から又或る煙草屋へ遣られた相でした。所が物心のつく頃になると、私は場末の或る小さい小鳥屋の子になつて居りました。私は殆ど本能的に哀れな生物を愛する事が好きで御座いました。細かい粟粒を赤い嘴で啣むで、皮丈を吐きすてる紅雀や、大豆程の卵を生むでは一生懸命に孵すカナリヤの母親なぞを可愛がつて眺めますのは、私の一番大きい樂しみでもあり、淋しい時の慰めでもありました。

それから鳥達の個々に就て、その性質を看察し、それをよく飲み込むでやるのは、私に取つて何んなに大きな仕事で

御座いましたらう。小鳥の心配、不満、恐怖、安心、満足、そんな氣持を察してやり、これ〳〵適當な取り扱ひをしてやるには本統に熟練と愛情とが必要なのでした。

或る鳥は羽が絹のやうに美しいのに、唯もう粟と水と丈で満足して居りました。「まあ何うして、味のない水と穀類と丈が、あんなに美しい生命に變るのだらう。」と私は好く思ひ、嘆息しました。又或る鳥は意地の悪い顔をしてゐるのに、牛乳をかけた御飯でないと食べず、他のは棒の形に固めたスリ餌でないと不満な様子を致しました。「何て贅澤な鳥達だらう。山に居た頃は何うして暮してゐたの。」と私はフザけて笑つた事も御座います。

斯んなにして十八になる迄、淋しく暮して来た私は、偶然な機會から、本統の父親に見出され、その方へ引き取られる手筈になりました。私は何んなに喜んだでせう。之から今迄知らなかつた愛情の國に住めるのだと思ふと心も落ち着きませんでした。移つて行つた父の家には、もう一羽の紅雀も居ては呉れませんでしたが、その代りに私の實母ではない若い母親が待つて居りました。そして小鳥たちを見失つて、唯の雀をでも見るのをせめてもの樂しみにして、天を見送つてゐる私へ向つては、「お前のやうに小さい生きものを可愛がつたり、戀しがつたりする娘にないよ。きつとお前は石女だらう。」と申しました。それはもう詰らない云ひ傳へに過ぎませんね。いゝえ、お話はもつと別の事で御座いましたつけ。（けれど私は石女かも知れませんわ。）

一緒に住むで見ると、私の父と申すのは、本統に悪い人でした。あゝ、もし、父さへ善良な氣質を見せて呉れたなら、私は何もあの復讐の心を抱くやうにはならなかつた筈ですのに……。いゝえ、復讐と申すのは、あの事なのです。姙婦、申の母を捨てゝ、音信もしなかつた不親切、私はその事から、父を怨み初めるやうになつたのでした。父さへ母を捨てなかつたなら、母だつて私を姙婦預り所へ置き去りにして、行衛不明にはならなかつたで御座いませう。母は唯、父の誤

似をしたのだ、それで私は孤兒になつたのだ、と斯んな風に感じたのでした。考へれば、私が小鳥屋へ貰はれて行つたのは、斯んな父の手で育てられるより、幸福でした。一羽の無心な小鳥が惡いそして凡庸な教育者よりも善い事を敎へて吳れると云ふのは、もう本統のお話しですもの。だのに、私は矢張り、變化を望み、新らしい世界にあくがれました。孤兒である事を悲しむ餘り、幸福な身無し兒であるよりも、不幸でも親のある兒を、一層幸福なものと考へました。之は一寸妙な考へ方で御座いますが、貴方が若し孤兒であるなら、直ぐと同感して下されるやうな分りきつた心持なのです。

父は中途から彼の家庭へ入り込んで來た私を愛しては吳れませんでした。少し位かばつて吳れても、憎まれてゐると思ひ取るのが、不遇な娘の持ち前なのですもの。私は始終父に憎まれてゐるのだと判斷しましたが、思へば、それが過ちの初めでした。

私は父へ向つて輕い憤りを感じました。何故小鳥屋に滿足して暮してゐた娘を、こんな所へ引張つて來たのか？貴方の仕打と貴方の心持とが一寸も私には理解出來ない。

理解が出來ない。――そしてお互ひが段々高慢に自分の立場丈を守るやうになつて參りました。然も之は愛着で離れ難い肉親の間に起た事なのです。あゝ、もつと急いで話しませう。

一番惡い悲しい事實は父が大勢の氣味惡い男達を集めて、私の家で開く賭博で御座いました。之が初まると私は直ぐ小鳥たちの事を思ひ出して泣きました。直ぐにも喧嘩し相な人が、その心をじつとこらへ、話し一つせずに、眼を赤くして時間を過してゐるその有樣、私は自分迄息がつまつて、身動きも出來ぬやうでした。之は何と云ふ物凄い殺氣だつた靜粛でせう。やがてシク／＼と泣く細い聲などが聞える頃、靜かに一人づゝ、二十分丈時間を置いては歸つて行つて了ふ

のです。一人殘つた父へ私は縋りつきました。「何うか、それ丈はやめて下さい。」私は涙を飲むで訴へました。博奕が悪いものだと云ふハッキリした思想からではなく、あの二十分間ごとに一人づゝ賭つて行く人たちの淋しく絶望した、殺氣だつた顔が恐くて仕方がなかつたからです。何か復讐のやうなものが起りはしないか？私はこれを何より心配致しました。父は此の道の名人で、一回損をすると、四回は得をじました。そして、一回丈すると損も、何だか態々やる計略らしかつたのです。

父は何故かその時大變に不快な顔をして居りましたが、いきなり、私を蹴倒して、肩へ瘤をこさへる程強く、室の隅へ打ちつけました。

私は處女の身體と云ふものを大變大切にする質だつたので、恐ろしい悲愁の中にも、實に明かな激怒を感じたので御座います。

「覺えてお出でなさい！」と私は倒れた儘で申しました。

三日目の晩、父の元へは又しても暗怪な男たちが猫脊をして集つて來ました。彼等は燈火の光を眼相に眉へ皺を寄せて見やり、又獨り言を呟いて、靜かに！と注意されたりしました。皆が皆背光性の蟲か長い魚の様でした。

「覺えてお出でなさい！」私はその言葉を考へ續けて居りました。私は思ひ切つて外へ飛び出し、夜更の町を通つて、警察へ此の事を訴へました。大勢の人は巧みに逃れましたが、父丈は醉つてゐた爲めに捕へられて了ひました。

斯んな忌はしい事件が起つて後、若い母親の氣嫌は大變險しくなりました。「お前は父親を罪人にした不孝者だ。何して此の仕損じを償ふか。」と私は責められました。そして私の良心も堪へられぬやうな手痛い傷を受けて悩み初めてゐたのです。私は眞にあの罪の憎む可き事を考へて警察へ訴へたのか？それとも父へ向つて母と自分との受けた侮辱を復

するためであつたか？それが混亂した頭には分りませんでした。

その中に父が監獄から歸つて來て、大きい荒立つた聲で申しました。

「娘！貴樣に今日からバクチのやり方を教へてやるぞ！馬鹿！お父さんに勝てる迄修業するんだ。さあ、やれ、斯うするんだ！」

私は泣いて謝罪しましたが、氣の荒立つた父は何うしても肯きませんでした。監獄へ行く前よりも一層多くの惡辣と薄情とが父の心を横行して居りました。

父を懲役人にした事の悔恨は絶す私の胸に響きました。そして何が善で何が惡かも分らなくなつて、唯濟まないと云ふ心持で一杯になりました。私が父の命に服從し、父の荒立つた心を少しでも慰め、又愼めやうとしたのは實にその爲めだつたのです。

私はおハナを習ひました。眉を打たれ乍ら色々の秘術を教授されました。あゝ細い事は申せません。私は唯上手になつて了つたんです。男の中へ入つて一度敗れば二度勝つやうになつて了つたのです。

あゝ父は私にいやらしい事を云ひつけたのです「帳場へ坐つたら、若い女はなる可く膝を崩せ！」と云ふのがそれなんで御座います。さうすると若い男たちの注意力が二つに割れて分れて了ふ、勝負に必要な思はくや相手の持つてゐる札の種類を皆忘れて了ふ、と云ふのが父の考へなので御座いました。

私は悲しくて泣いてゐると、何時も後ろから蹴られました。そして、或る夕方、私の家へ隣りから飛んで來たハンケチを、私が拾つて返さうとしました時、繼母が「一寸お待ち」と云つてそれを取り上げると、又父が私を蹴りました。

「私は猫ぢやないんだよ！」と私は惡い女のやうに憤りました。

「人間だつたら、人間なみになれ。あすこにもう一つ干してあるハンケチを取つて來て見ろ！」

私はこの時、自然自棄な氣持になつて、隣家の様子を伺ひました。そして、あゝ何を致したでせう。ハンケチを盜み取つて來ると、それを旗のやうに振つて父親に見せびらかし、それから母親の頭へフワリと冠せると、狂的な笑ひ方をして、その場へ倒れ、足で壁をたゝいたので御座いました。

父は腹の底から出て來るやうな深い笑ひ方を致しました。カツギを冠つた母は何だか踊りの手拍子のやうな事をして見せました。

それは滑稽で御座いました。けれど之が滑稽であつて宜いのでせうか。

「悲しいな、悲しいな、小鳥は何處へ行つた。」私は斯う思つて外の空を眺め、もう自分が大變に惡い女になつてゐるのを感傷し、せめてもの罪滅ぼしに遊むでゐる小雀へ米を投げてやりました。

けれど、もう駄目だつたのです。鏡を見ても、恥かしい氣も起らなくなりました。「なあに、仕たい事は何んでもするが好い、それから仕たくない事もどん〱とするが好い。」私はそんな風に叫むだので御座います。

私は二度上手に物を盜みました。そして三度目に、未だ手馴れぬため、あのセルロイドの櫛を取り損つて了つたのです。お許し下さい。お許し下さい。私には皆分るのです。柔しく色々と教へて頂いて、又希望の光が私には見えそめて來ました。私は惡い女で御座います。私の悔ゐは本統に強く湧き起つて居ります。あゝ、嵐の中の若木のやうに、私の心で、そして體で、こんなに悶えてゐるので御座います。あの若い商人の方が許して下さると仰言るので、私は餘計につらく〱身がいたくてなりません。」

哀れにも虐待された處女は斯う物語つて涙を拭いた。

小鳥を愛撫することで、薄倖の中にも、或る靜かな慰安を感じ、それによつて、強い悩みから逃れて來た美しが、急に陰慘で極惡な境へ迷ひ込み、四圍に漂ふ闇黒のために戀の表面を汚染されると云ふのは何と痛む可き事實でせう。然し、幸ひな事に、汚染されたのはホンの表面丈に過ぎないと云ふ新らしい發見が私（教員）を何よりも強く勇氣づけた。私はよく考へたのちに、處女へ向つて慰安になるやうな次の言葉を與へたのである。

「餘り心配なさいますな。心は勞れ過ぎると又分別を取逃すおそれがありますからね。今は寧ろ安心するやうに努め、之から來る幸福をお考へなさい。それが直ぐ來ないでも遠くに見えると云ふ事は、すでに幸福の一種ではありませんか。きつと、貴方は善くなれます。そんなに貴方の心は美しいですもの

盗みと一口に云へば、人々は何んな盗みをも一樣に思ひ取り、其れは惡い事だと、顔を反けますが、人の心が複雜であればある程、盗みの種類も多く、又差等がなければなりません。

私は斯う云ふ話を聞きました。一人の有名な畫工が、一人の熱心な弟子を持つてゐましてね。或る時、二人して同一の林檎を寫生したのです。すると、師匠の方のは發色が鮮かで、本統の果實のやうに出來たのに、弟子の方のは色を塗り重ねたので濁つて汚くなつたのです。それで師匠は一寸した輕蔑を以つて、弟子の畫を批評したんですね。弟子は傲慢な質と見えて、カツと顔を赤くしたんです。師匠は生意氣な弟子を睨めると「君の繪より、その顔面の朱の方が發色が好いぢやないか」と申しました。それは本統に同情の欠けた言葉に違ひありません。弟子は立ち上つて申しました。

「先生は何か秘密な高價な繪の具を使ふのです。それを私に教へないんです。」

「馬鹿な！もつと技巧を練りなさい。すると繪の具が云ふ事を聞いて呉れるやうになるんだ。ブラッシュへ入れる指先の力の工合で發色が異つて來るのだ。」師匠は斯う云つて、手を洗ふために畫室を去りました。獨りになつた弟子は、い

きなり師匠の繪の具箱の所へ飛んで行つて、林檎の赤い色を表すために使つたギャランスドオンセと云ふ赤い具のチューブを握り締めてね、中の繪の具を二寸も押し出して、やり場に困つたものだから、自分の口の中へとナスリつけて了つたんです。

貴方、分りますか？之だつて立派に盗みの一種です。けれども、此の盗みの原因を考へて同情のある許しを與へると云ふ事は我々に何れ程必要だかを知つてゐねばなりません。

此の弟子の心には先づ第一に嫉妬、それから疑念、それから憎悪、怨恨等が渦を卷いてゐたのです。そして重に嫉妬が原因となつて盗みをして了つたのです。當の繪の具が欲しいのではない、先生と同じ技能が欲しいのに、やはり行爲の上に表れて來た事を見ると、繪の具を盗むでゐるんです。人間と云ふものは無形な事を有形にして表す傾向を持つてゐます。彼等は具體的に事を爲す性質に災ひされてゐるのですね。

分つてゐます。貴方が盗みをするやうになつたのも生來の本能からではないのです。何か無形な怨恨が形の上に表れて來たのに過ぎないと私は解釋してゐますさあ！未來を餘り心配しないでね。臆病にたらずに、正しい方へと歩き返して下さい。

自分の罪や過失を思ひ出す程つらい事はないけれど。又、之からが正しくならうとする勇氣を見出す程晴々したものはありません。

貴方は悪いお父さんに對抗し、悪くなつて行く所を見せつけて、競爭し、復讐しやうと云ふやうな心持を抱いたんでせう。いゝえ、さうハツキリと意識せぬ迄も、矢張り、そんな傾向を取つてゐたらしいではありませんか。

卑屈と戰ふに卑屈を以つてするならば、善良なもの丶方が敗北するのは當然です　貴方は敗けました　それにこれこ

二貴方の心の奥にある善良を證して餘りあるものと云へませう。』

『何んなに仰言つて下さつても。私は盗人より以上のものでも、以下のものでもありません。もう普通の、何の理屈も辯解も入用でない盗人です私はあの櫛が唯欲しう御座いました。そして取つて了つたのですもの。あゝ、けれど……』

女性は此處迄語ると、急に驚いたやうに調子を變へ、そして口早に叫んだ

『あゝ、あの子が惡いんです。あの子が私に取りついてゐるんです。』

『誰、誰の事を云つてるのですか？』

『隣りの子！あの可哀想な子は走る事の出來ないナマコのやうな畸型兒で兩手の指が三本宛しきやないんですもの涎や目脂をたらし、アア、アアと丈は云へますけれど、その他の事は何も分らないんです。何時も臥るか柱によりかゝるかしてゐて、私を見ると、息を切らせ乍ら、這ひ寄つて來るんです。そして三本丈の指で私をツメるんですわ。』

『其れは夢で見た事のやうですね。』

『いゝえ、本統なのです。あの骨なしみたいな、癩病みたいな顔の子が、私は初め恐くていやでね、それから、今度は好く見るともう可哀さうに思へましてね。夜いつ迄も眠れないと、その子の事が幻に浮むで私ハツキリとは分らないけれどその爲めに、初めての盗みを思い立ちましたやうですわ。小さい泥の人形を私は夜店から取つて來て、そして、恐ろしいものを捨てるやうに、隣りの子へ投げつけたんです。けれど、今の私は自分の爲めに櫛を盗まねばならぬやうな心掛けになつて了つてゐるのでした。いえあの三本指の子に罪を押しつけやうとするのではありませんけれどね、あゝ私は自分で自分の考へが分らないのです。唯、あの子のむくんだ醜い姿、それから、その子と遊ぶ腫物で毛の抜けた盲ら犬の姿、そんなものが、毒のやうに私の體に泌み込むで離れないんですわ。私は傳染して了つたのです。其れ等

のものへ同情してゐるんでなくて、もう一緒に捲き込まれて了つてゐるんですわ。これにねえ、說明しにくい事ですけれど、あの畸型兒の父に當る人が、……』此處で女性は又言葉を切り、體をよろめかして、私の目に熱を當てた。

私はその話の先を避けるやうにとは促さなかつた――何故なら、彼の女は恐らくもう處女ではないと云ふ直感が悲しくも私の腦裡を掠めたからである。私は心を變へて斷ろ動つた。

『私は貴方をもう一度丈小島の間に住まはせて上げたく思ひます。貴方さへよかつたら、お父さんと相談して上げてもかまひません。』

『……畸型の子の父親は……小刀を持つてます。そして、あの若い商人の方は……私の落ち度を暗く探つてゐらつしやるんですわ。』女性は私の言葉とは掛け離れたある恐ろしい妄想に耽けつてゐるらしく、眼を上釣らせて、黑い天空の一點を見つめた。

他人の樂しみ

幾月かゞ風や雨と一緒に過ぎた。そして風や雨は、私の心の中にある惡辣な部分丈を洗ひ去り、從つて善良な部分を明瞭に表面へ洗ひ出して吳れたやうに思へるのであつた。

私は刄を以つてする復讐を斷念する爲めに、何度か、あの免職教員の親切な助言を煩はした。そして、兎も角も、口頭で怨みを返し、反省を促すために、院長の子息に面會する機會を探した。

子息は彼自身が私の妹を愛してゐた事、愛してゐた許りでなく、もつと深い關係に迄も入つて行つた事、それは重に彼の女の正直と低能へ向けられた同情に起因する事、院長の方は決して妹を自由にした證據及び噂さのない事等を、『

ましげに頭をおさへて物語り、それから、もう一つ思ひ掛けぬ驚きを次のやうな言葉で私に與へた。

『父は貴方に骨の壺を見せたと云ひますが、それは眞實ですか？さうです。父は貴方へ向つて何か秘密なそして重要な事を打ち明けたかつたんです。けれど、その目的を思ひ切つて決行する勇氣がなかつたらしいんです。死に際に、その秘密のホンの端緒丈を私に洩らしかけたが、直き息が苦しく詰まつてね。話が途切れ途切れになつたものだから、私にも好く判斷がつかないんですけれど、何でも、貴方は私共の身内なんだらうと私は思ひますね。えゝ、それ丈はもう確かなのです。父はそれを貴方に打ち明けたくて、あの骨の壺迄も貴方に示したに相違ありません。』

『では、あの骨は誰れのだと仰言るんですか？』私は疑念で顏を曇らした。

『勿論、あの頭蓋は女性のものですよ。今度の火事で、なくなつて了つたが、實に惜しい事をしました。あれは何でも異常に美麗だつた女性の骨です。私は三度も取り出して見たけれど、何時も、あの端麗な骨相によつて、それが生きてゐた日の好く均齊のとれた美貌をも思ひやる事が出來ました。』

『では、その女性の顏と私の顏とが似てゐるとでも仰言つたんですか――院長さんが――』

『まづ、そんな譯になるでせう。いや、さうだ。さうだ。それに違ひない。あの女性こそ貴方の母親だつたんではないでせうか。勿論、よくは私にも分らないが……』

『造り事はおよしなさい。それは空想の過剩から來たものに過ぎない。私に云はせれば、斯うです。院長はあの骨が生きてゐた頃、それを愛してゐたに相違ない。所が、その女の顏が私と似てゐたのに氣附いて、妙な追想に耽り、私をも愛着するやうになつたんです。唯それ丈です。私が架の室に臥てゐた時、そこへきた院長の擧動や眼附でもつて、以上の推察を下し得るんです。』

『いや、事件はもつと複雑に違ひない。あの昔の女性は父とその兄との共有物、もしくは互ひに爭奪しあつた貨物だつたんです。此の事は父が前にも三度程打ち明けたのだから、疑ひない話です。それで父の兄に私く秘密に女を託したんですね。それも父の話の様子で大概推察されるんですが。貴方分りますか？』

『私は何も信じません。好い加減な芝居をかく事はお止しなさい。私は唯、貴方の反省を促すんです。』斯んな風に話は再び當の問題へ戻つて行つて了つたのである。

それから間もなく私を何より不快にしたのは、院長の子息が可成りな金子を持つて上海へ渡つて了つた事件であつた。

けれど、私は最早、その跡を追ふまいと諦めた。又追ふにしても、それ丈の金が懐ろにはなかつたのである。私は再び憤怒に似たあるものを感じ、自分の不甲斐なさを悔み初めた。ハムレット風な憂悶は絶えず私の前額を蔽ひ、眼の光りを曇らせた。

『妹よ。許して呉れ！あゝ私が悪い。そして周圍が悪いのだ。空間も時間も皆間違つてゐるのだ。』

私は斯う呟きながら、不圖ある一點を注視した。あゝ、そして私は自分の悪い疑念を鞭打つた。

私は何を見たのか？昔の壺に刻まれたアラビヤ文様の幻影であるか？或ひはある美女の幽靈であるか？それである。一人の美しく若い處女——それがあの発驗教員と睦まじく肩を並べ、向うの方へと曲つて行くのである。

あれは盗みをした可愛い娘ではないか？何故今頃、教員に用があつて、面會するのか？何故二人はあんなに樂しさうなのか？

あゝ、そして私は何んなに惨めに沈みかへり、妹を手元から失ひ、敵をこの街から逃して了つたか？私の財布は一體

何處にあるのか？前に關係した二人の姉妹が結婚を申し出し、そして、行衞をくらまして了つてゐる。あゝせめて、あの姉娘の方丈でも、私の傍らに居たら……

だのに、彼處を見よ。若い教員、そして新鮮な美女！二人は一緒に巣を造る二羽の小鳥のやうに見えてゐる。おゝ、あれは教誨する師と、懺悔する教へ子の姿ではない。たしかに無い

嫉妬？それに似たものが暗い雲のやうに私の心を埋めた。私は勢ひづいて二人の影を追ひ駈け、そして二人の間へと、無遠慮に割り込んで行つた。

處女はいじけた小鳥のやうに顫へた。そして教員は？彼は沈欝な表情で私を見上げた。私は男の方へは注意せず、女の方を眞正面から眼と見てやつた。彼の女は消え易い雲の樣に素直で臆病であつた。何うして斯んな大人し氣な女が盜みを働いたか？それは一つの大きな疑問である。

『ミサ子さん！』と私は馴れ馴れしく云つてやつた。『ミサ子さんとは、何て好い名だらう。あの晩に教はつた名ですね。』

教員は險惡な風向きを見て取ると、私を慰撫するやうに口を入れた。

『あゝ、心は微妙な丈に、又毀れ易いものです。さあ、此の娘さんの心を掻き亂さないやうに、二人で愛して上げねばいけない。』

『二人で愛する？』と私は眼を赤く怒らして、教員の前に立ち塞がつた。けれど、不意に自ら耻ぢると、主人に會つた犬のやうに、私は大人しい表情に戻り、それから靜かに處女の方を振り返つた。

あゝ、その時である。その處女が私を強い執着の眼で見つめて居たやうに思ひ取れたのは……けれど私はそれを氣

にしたのつた。いや、自分の見ちがひ、もしくは思ひちがひであると信じて了つた。

私は落ちついて、別れの言葉を告げ、二人をうしろにして、他の路を取つた。淋しい心から、頼り所のない哀が湧き上つて、斯う私に問ふやうであつた。

『何うしたのだ。あれは、あの女性は誰れが初めに見つけたのだ。え？返辭をして呉れよ。誰れでも好いから、私に話して呉れよ。私はあんまり強い淋しさに打たれてゐるのだ。』

崖上の愛

私の怨敵は何處へ隠れたか？

斯う叫む❘闇の中を見詰める時、何かに悶えて泣き悲しむ院長の息子の幻を透かして、もう一つ他の形が見えて來るのは何故か？

私は恐れる——強烈な淋しさが凝集して、私の心の中で一つの形を取ると、それがミサ子の羞かみ怯える姿になつてゐるのである。

私は苦しがつて長い釘を柱へ打ち込み乍ら、困つた、困つたと云ふ咳唉を繰り返した。けれども、結果は何うなつて行つたか？もう急いで早く語つて了ひたい。

先づ私は我慢が出來なかつた。その爲めに心が紛亂し、得體のしれぬ憎惡、嫉妬、侮蔑のやうな感情が荒立つ位に長されたた。そして頭々私はミサ子の家の近くへ迄、惡い魂に誘引されて、足を運むだのである。

二三夜は無駄に過ぎたが、四日目の闇夜、私は外出する彼の女を堅く捕へた。

尋常でない畏怖の表情を以つて女性は眤と私を見つめ、そして私の眼の中に朦朧錯綜のやうなものを感じて昏倒しかけた。

『いけません！それは、あゝ私には堅い約束があるんです。どうぞ、許して下さい。私は貴方のお情けに縋つてお賴み申すのです。あの約束が……』女性は顫へた聲で囁いた。

早く話して了ふ。私は女性の倒れかゝる體を腕でさゝへ、彼の女の顏の上へ、自分の顏を持つて行つた。羞恥と恐怖のために燃える女性の頰から、カツ氣が湯氣のやうに上り、私の頸の兩脇へと分れて行つた。

何故、女性が私の戀愛を拒まなかつたかと云ふに、之には二つの理由があるらしい。一つは私が無條件で彼の女の氣に入つた事である。もう一つは、私が彼の女の罪を許し、又私の惡い謀み——即ち、彼の女の罪を云ひ掛かりに戀愛を遂げやうとした事——を後悔して、改心してゐると云ふ話を教員から聞いてゐたからである。『改心さへすれば、その人は洗はれたやうに奇麗になる。』と云ふ思想を彼の女は、自分自身から推し量つて、私の上に迄及ぼしたらしく思はれる。

斯樣にして、私は惡い謀みに依つたならば恐らく却つて失敗したかも知れぬ情事に、造作なく成功して了つたのである。之は何事であらう。然も私には純眞な戀慕の情と云ふものが全く欠けてゐるではないか！嫉妬のやうなもの、怨嗟のやうなものの漢、漠然とした復讐のやうなもの、それからあの柔和な教員の早手廻しに對する見せしめのやうなもの、之等が私の戀愛を形成する主要な元素であるとすれば、私はあの改心した美しい處女を、再び闇の底へ引き戻し、『惡の教育』を施してゐる事になるのである。

何うするのが最良の方法なのか？私にはもうそれが分らない。唯斯んな恐ろしさが悉く事實であるのを認め得る丈で

あらう。

二度目に女性と密會した時、彼の女は最早何も恐怖しない程に進んで了つて居た。其れに何の無理があらう。彼の女は盗みを爲し得る程の女性なのだ。それに私を心から戀つてゐるのではないか。

『貴方は、あの初めての晩、私を厭がつて、何だか他に約束があるつて云ひましたね。約束とは何ですか？云つて下さい。貴方はあの教員と何か云ひ交したんですか？』私は斷崖の上に立つ所の亡びかけた森の中へ入ると、彼の女を詰問した。

『許して下さい！』

矢張りさうであつた。彼の女は近い内に、再び小鳥屋へ引き取られ、それから教員と結婚する約束になつてゐたのである。

『けれどねえ。あの方は私を不純に愛してゐるんぢやないんですよ。唯私を哀れに思つて下さるんです。皆、義侠心から出た事なんですわ。それから、貴方は貴方で……私を矢張り愛して下さらないんですもの。私分つて居ります。貴方は唯邪魔がなさりたいんですわ。』

『おゝ……』と私は自分とそして彼の女に驚きの目を向けた。

『邪魔？』と私は繰返した。

『さうですわ。だから、貴方は私と斯んな關係になつて居ても、結婚はして下さらないんですよ。いゝえ、却つて、あの先生の方へ思ひ返してお嫁に行けと仰言るんですわ。あゝ、私は何て氣の弱い女でせう。落ち度……あの落ち度のために、あの落ち度以來私氣がひるんでゐるんですわ。私は何うしても貴方に抗ふ事が出來ませんでした。そして、今では

……一生でも貴方と一緒に居たいと云ふ儚い願ひで一杯なので御座います。」彼の女は涙を袖に受けて泣き續けた。

『では私が勝つたのですね。』私は自分で斯う云つて、その殘忍な言葉に自分から恐怖した。

『勝つた？何に？誰れに？私に？あの方に？』と逆上した彼の女は早口に叫むだ。

『けれど、あの教員には私も大變恩になつてゐる。私は貴方をあの人から盜み取るやうな不義理は出來ないんです。』

『不義理？出來ない？それでは、何故、何故、斯んな事をなすつたんですか？』

『許して下さい。私は何うしても我慢が出來なかつたんです。許して下さい。そして、あの人の所へ行つて下さい。何も彼も秘密にして……』

『私は、斯うなるのを豫期して、もう早くから諦めてゐました。貴方はもう私を嫌つてお出なんです。皆察しがつきますわ。貴方は二度目に會つた時、もう私に厭きてゐるんですね。何て悲しい、けれども吹き出したいやうな可笑しさでせう。斯んな事がさう方々にあるとは思へませんわ。』

『貴方はもつと素直な花嫁になつて下さい。私が邪魔をしやうが、すまいが、何うせ貴方は初めから處女と云ふ譯では し……』

『何です？聞えませんでした。も一度、も一度、云つて下さい。』彼の女は私の胸に喰ひついて來た。そして、私の顏を睨と覗つた。闇が濃く流れて、何も見えはしなかつた。

私は厭きて了つたのである。

彼の女は諦めてゐて、それを恨まずに唯泣いたのである。お丶何たる奇怪な夜であつたらう。

恐るべき微笑

狂暴な悔恨が再び私の胸を喰ひ破り、肋骨を痛めつけずにはゐなかつた。何う云ふ風に彼の女へ謝罪す可きか？何んな風に教員へ辯解す可きか？それとも、一層何も云はず、一切を秘密に付し、私丈他の都市へ去るのが、皆の幸福となりはしないか？

私は出來る丈善い行ひをしやうとして、然も斯んな恐ろしい罠へ落ち込むで了つてゐる。腦髓は腐敗して了つたやうに、もう役に立たず、思考力を集注しやうとすると、輕い眩暈が起つて來る丈であつた。

けれど、そのやうな煩惱は一ケ月位で消散し初めた。そして、私の眼前には時間につれて色々の事件が生起した。ミサ子は約束通り教員と結婚し、惡い父親とは金錢を與へて緣を切つた。若い二人は大變睦まじく日を過してゐるやうであつたが、何故か急に轉居して、居所が不明になつた。私はその頃遠慮して教員を訪ねた事もなかつたのである。

轉居と同時に、ミサ子の行衛が不明になつた事、誰かゞ、何處かの停車場で、彼の女を見掛けた事、彼の女は汽車の中に眠つてゐて、下車す可き驛を乘り越してゐた事、なぞが噂された。私は淋しい悔恨の生活を續けつゝ、それらの話に可成りな注意を拂ひ、興味以外の同情を以つて物を見るやうに心を落ちつけてゐたのである。

俄然、もつと大きな破壞が起つて來た。

私は考へる事が出來ない。けれど、起つた事は凡て悲しい事實なのである。

ミサ子は森のある斷崖から、何丈か下の砂路へ飛び降りて、自殺を計つたのであつた。

彼の女は死に切れないで、病院へ連れて來られた。けれど大きい怪我 ―― 肋骨が破れたらしい ―― は、もはや彼の女

を三日と此の世に置く事を許さなかつた。

教員は何時もの柔和な言葉つきで、彼の女の死ぬ前に一度丈會つてやつて呉れと私に哀願した。

『何故です？』と私は恐怖してたじろいだ。

『今度の事件は少しばかり貴方にも關係があるやうに思へますし、屹度ミサ子は貴方に會ひたがつてゐるに相違ないのです。』之等の言葉の中には一つの怨恨も憤怒も含まれてゐなかつた。それどころか、教員の眼の中には、澄んだ涙が湧き起つて來て、私に憐れみを乞ふてゐる如くにさへ見えた。私は顫へて彼の肩に縋れ、進まぬ足で病院に向つた。それから？

『さ、貴方の待つてゐる人が來たよ。ミサ子！』と教員は悵然の眼りを濕して云つた。けれども人事不省に落ちてゐるらしい女性は眼を開く事が出來なかつた。之は何たる急激な變化であらう。

教員は深い嘆息と共に、私の方を顧み、そして世にも哀れな顔付で、語り繼ぐのであつた。

『聞いて下さい。おゝ見て下さい。この凄じい瘦せ方を！家を出る時、たつた一圓八十錢しか持つて居なかつたミサ子は、それを全部出して、汽車の切符を買つて了つたのです。何故汽車へ乘つたか？何處かへ逃げる積りだつたのか？さうではない。唯進退谷つて、もう行き場がなくなつたのです。世界は斯んなに廣いのに……罪と痛みに追はれる者は、その中に安心して住む所を見出し得ないのです。可哀相なミサ子！お前は何處か遠い停車場迄用もないのに乘り越しをして了つた。それから、きつと歩いて息を切つて、再び此の街へ歸つて來たのだ。お前はそんなに無駄な骨折をしながら、迷つて泣き暮したのだ。きつと野原や知らぬ家の物置やに眠らねばならなかつたらう。あゝ誰れが云ふか——野原に寢る少女は不良だと！いや、その少女を野へ眠らせるやうにする私達の方が……私の方が……何んなに不良だらうか

！せてやつて下さい。せて……。凹んだ目の中に、ミサ子は何んなに沈み切つて、年を取つて了つた。悩みで痩せ、それから斷食で細つたのだ。何處かの泉で飲むだ水は、皆涙になつて了つたんだ。斯んなに眉毛が取れて了つて、そして、恐しい事に、髪の毛があんなに抜けて落ちる。

斷食……ミサ子は菜と食べずに居たに相違ない。死なうと思つて斷食し、死なうと思つて歩き廻つたのです。そんな悲慘な事があつて好いものだらうか？然も、此處にある。此處に嚴として存在することは何ですか？

私は何うすれば好い？ミサ子は私の家へ來るより、残酷な父の元にあつた方が幸ひだつた。父の家にゐるよりも、あの小鳥屋の店にゐた方が仕合せだつた。取り返しのつかない事ですが、私は贖ひの紅雀を斯うして病室へ運ひで來ました。來るには來た！だがもう見て呉れる眼が閉されて了つてゐる。」

氣が附かずに居たが、實際には小鳥の籠がかけてあつたやうである。ハツキリは分らぬが、何でも、あの小鳥の鳴き聲――節の終りの所で、物問ふ様に、調子を上げるその聲が、恰度、悲愁を持つた懺悔の叫びの如く、私の耳へ幽かに入つて來るやうであつた。

だが、その事ではない。鳥の聲なぞは何でもない。私は、もう言葉が出ない。何んな風に云ひ表はさう。戦慄なぞと云ふ文字さへ、一つの弱々しい遊戯としか感ぜられぬではないか。恐怖、驚愕、そんな文字が何か？私の心持の何十分の一が、それに依つて傳へられやう。

駄目である！私は歯痒くてならない。

聽き手よ、貴下は龍卷を見た覺えがあるか？黒い煤のやうな塊が、地面の直ぐ上に迄降りて來て、砂が、木の葉のやに上へ吸ひ上げられ、其處に遊つてゐた幼兒が帶を持ち上げられたやうに、空中へ飛ぶ様を見なかつたか？或ひは大き

な塔が割れて、その裂け目から、青と赤との焔が出る所を見なかつたか？或ひは、さうだ！重い馬力車に老いた女が轢き殺されて、貴方の眼前で血を鼻と眼とから流し乍ら。見る間に生から死へと急轉する顏面の凄じい色を目擊した覺えはないか？

そんな時の恐怖や驚愕や戰慄に數倍した渦亂のやうな激動を、私は身體の凡てゞ感じたのであつた。何と云ふ凄慘な有樣。そして、之が私と密接な關係を結むでゐる。それが恐ろしくなくて好いであらうか！床の上へ落ちてゐる毛の一本さへが、私の爛れた心を針のやうに刺す。そして、何萬本と云ふ髮の毛が――全く光澤を失つて、ミイラのそれのやうに、ベッドから垂れ下つてゐる。私は血が凍り、唇や鼻や眼の球が冷たくなつて行くのを感じた。

『ミサ子さん！』私は思ひ切つて絞り出すやうな聲をして彼の女を呼むだ。あゝ實にその時、その瞬間、ミサ子の眼は靜かに開かれ、そして私の方へと柔和な視線が流れた。それは見る間に、物凄い絕望の色を示したと思ふと、又靜かな物柔かさに戻つて行つた。此の微細な進行！

おゝ、彼の女はその時、笑つた、笑つたのである。微笑むだのである。奇蹟のやうに、神秘に、不思議に、意味深く、淋しく、柔しく、純眞に、後悔してゐるやうに、（そして何よりも明かな證明だ。）深く深く私を愛してゐるやうに……

『ミサ子さん！』私はよろめいて彼の女の方へ進むで行つたが、又嚴肅な心に釘付けされて、その儘眞直ぐに立ちすくむだ。

軈て靜かな微笑は消えて行く焔のやうに、彼の女の痛ましい顏面の上を去つた。再び眼は閉じられ、苦し相に顎を動

かしてする呼吸のみが聞き取れた、淋しく、哀れ深く……

『可愛想に、貴方の聲を好く覺えて居て、あんなに柔しく微笑むだのです。』牧目は手を顔に當てゝ我慢しきれない泣き聲を堪へた。『之で、もう直き死が來るでせう　安心して死ねるでせう。』

『許して下さい。』と私は顫へて彼の女に縋らうとし、又牧目に寄り附からうとした。けれど私の足は堅く釘附けにされ、私の腕は縛られてゐるやうに動かなくなつた。

それから何うして、其處を逃れ出したのか、私はもう語る事が出來ない。唯明白なのは私が駈けて、そしてたゞ蹣跚の近くへ迄行きついた事實丈である。私は風で揺れ廻る長い草の中に身をひれ伏し、雲が低く動く空へ聲を放つて泣いた。心は狂ひ、苦しみ、鞭打たれた。眼は何か黒い流れや斑紋を幻覺し、あらゆる血管に後悔の蛆が游ぐのを知覺した。

微笑！それが恐ろしいのである。何んな怒りの形相が私をそんなに遍身顫ひさせ得るだらうか？蔑視な微笑！私の胸は痛み、私の身は皮を剝がれた蛇のやうに悶搔いてゐる。その微笑！一番純眞なものが、私の汚れた行爲に對して報ゐられてゐる。あゝ、その一瞬の微笑に一生の生命が賭けられてゐる。そんなにも價値の重い深刻な[illegible]が他に又とあらうか？

『私は後悔してゐます。けれど心の底から貴方を愛してゐます。』と語りさうな微笑！私は今如何うしてそれに報ゐる事が出來るであらう。いや、何も考へられない。そしてもう何も出來ない。彼の女は最早死んでゐるではないか？私は何かしやうとして動いてゐる。けれど、一切はもう遲れてゐる。蹣跚きる、それ丈が分るやうになつた。

私は風に揺れる草の中に摑むで何者かに許しを乞ふた。皮を剝がれた罪深い蛇のやうに、自分の[illegible]

は、天に向つて悲愁と痛恨の叫びを投げた。あゝ眼球を繰り抜いて投げだしても間に合はないではないか。微笑！許して呉れ。ミサ子の笑よ。ミサ子の口元よ。許して呉れ。まざまざと眼に見えて來る。私の腦髓に燒附けられたその微笑！一番優しいもの、恐ろしさ！……

けれども姿は甲斐なく消え、風は凪ぎ、そして、あの闇、始終その中で私が惡事を働いたあの闇が、私の火傷したやうに爛れた肉體と精神の上へ蔽ひかぶさるのであつた。それは實に並ならぬ、世の常ならぬ陰慘さであつた。

（退職教員の附記）

哀れなセルロイド職工の手記は此處で終つて了つてゐる。

けれど私は何う説明したら好いのであらう！　事件は複雜で、その上に私の心は鎭まつて呉れない。自分丈にはスッカリと分つてゐる事が、いざ説明し、辯明し、闡明しやうとすると、皆漠然として了ひ、私はもう物語りの端緒が見附からなくなる。私は長い時間かゝらねば話し盡せない事件を、まるで繪圖のやうに一度に展開したいので、却つて混亂へと落ちるのである。

何故、ミサ子は死なねばならなかつたのか？之が一番初めの、そして一番六ケ敷い問題である。人が他人の心を悉く知る事の出來ない限り、此の問題に正確な解釋を下さうとするのが既に誤謬の初めではなからうか！けれど、默つてはゐられないのだ。もうミサ子は死んでゐる。彼の女の口の代りに、誰かゞ正當な辯明をしてやらねばならない。それは何より明かな事である。

彼の女の死に場所は我々が王冠の森と呼ぶ木立のある斷崖であつた事を人々は記憶してゐるであらう。其處で今度は何故彼の女があんな不都合な場所を選むだかと問ふて見ねばならない。實を云ふと、私は未だ新しい悲愁に眼を蔽はれ

てゐて、考へる力、理性を適當に働かす力を恢復してはゐないのだが、それでも、夢の中であつた事を思ひ出すやうに仄かな幽かな――云はばまるで暗示のやうな解答を捕へる事が出來る。彼の女に取つて、あの斷崖は懐かしい思ひ出の場所であり、恐ろしい罪を想起させる刑場であつたらしい。そして、私は確かに二度迄も彼の女の口から洩れかゝる懺悔の言葉によつて、それを直覺してゐたのであつた。それ丈は今斯うしてゐて、思ひ出し得る間違ひのない記憶である。いや何たる忌はしい記憶であらう。

それから何うしたか？語る可きもつと重要な事はないのか？あり過ぎる。それで困つてゐるのである。私はもつと前の、もつと古い記憶から辿り直さねばいけないのだ。いや、説明の出來ない澤山の事が、語るのがつらい色々の事が何うして、そんなに私の心の中に蠢動するのであらう。

事の初めは何であつたか？私の母とミサ子との氣持ちが合はなかつたのを先づ思ひ出せ。それである。原因と名附けられるのは確かにそれであらうか？いや、之は大きい原因ではない。けれど斯んな工合であつた――即ち、ミサ子と私の母とは大きい喧嘩をしたのだ。いや、さうではない。その事にも既に原因があつた。私よ、驚くな、皆云つてしまふ私はミサ子と結婚する以前に、彼の女を妻のやうにもてなした覺えは確かにない。確言する。それから、彼の女が術を盗むだ時、彼の女は我々の知らない特別の週間の中に居たのである。だのに、何うしたのか。それを云ふのがつらいのである。彼の女は私と四ケ月同棲した時、妊娠六ケ月位になつてゐたではないか！之が複雑な背景な、そして士族の娘であつた私の母を此の上もなく不快にし、喧嘩の素を造つたのである。元より、私は之を許した次手に、何つても在つでもミサ子の過失を許さうと心掛けてゐたのであるが、母はもう到々我慢が仕切れなくなり、自分から自分に眠けて

怒りを發して了つたのである。

「お前……」と母は私を隣へ呼むで訊ねた。「お前、結婚前にも、その覺えがあるのですか？」辛い質問！そして痛い

思ひ出が此處から初まる！

あゝ、私は何と云ふ機智と奇才のない鈍物であつたらう。『いゝえ。』と云ふ正直相な答へより他には、一寸好い思ひ附きもなかつたのである。私が惡い、もうそれに相違ない。ミサ子を許さうと心掛けてゐるなら、何故、あらゆる點に心を細かく働かして、許すための計らひをするやうに努力出來ないのか？私は自分を叱り、自分を嚙み破つてゐるのだ。

俄然、ミサ子は家出して了つた。それも夜中にである。勿論彼の女は私の室に臥なかつた。私は十二時頃一度目覺めて、泣いてゐる彼の女を臺所迄呼びに行つた。すると驚いた事に、彼の女はそこの板の間に自分丈の布團を布いて臥てゐたのである。顏は蒼白になり、息づかひが荒く、何か強い苦痛を耐へてゐるやうに、額へ水を浴びたと思はれる程汗をかいてゐるのであつた。おゝ私はもう此の先を話せない。

『座の方へお行き、私は何とも思つてはゐないよ。母の事は許して呉れてね、さあ、冷えない方へ……』やつと私は囁いたのである。

『私を女中以上に取扱つてはいけません……あゝ身分が違ふ……私は惡い所から出て來た女です……』彼の女は悲しさで顏を喰ひしばり、漸くに之丈を口走つて眼を閉じて了つた。

『その儘で澤山だ！構はないが好い！』他の室で、未だ覺めてゐたらしい母が口を入れた。私は母親に大變孝行な質――自分で云ふのは可笑しいが、何んな曲つた事でも母の命令なら從ふやうに生れついた男――であつた。これも、此の場合では大きな過誤の一つとなつたのである。そして私は私の心を嚙むでゐるのだ。

私は疲れ切つて、惡い夢の中に一夜を明した。次の朝、母より先へ眼を覺ますと、私はミサ子の代りに戶を明けてやつた。明るく流れ込んだ光線は一切を明白に指し示した。あゝミサ子はもう私の家の、私の妻ではなかつたのである。母は幾らか後悔しつゝ、尙怒りを止めなかつた。『何處迄人に世話をかけるのだ。もう捨てゝ置くが好い！あれはお

前、不良な上に不良な少女だよ。改心と懺悔を賣物にし、家出をおどかしに使ふ、そんな少女なんだよ。』

それから、母は大變不安な焦燥を示しつゝ、殆ど狂的――そんな例を私は未だ私の母に於て見た覺えがない――と思はれる迄、身を取り亂して、大きい小さい荷物を片附け出したのである。それは何のためか私の解釋に苦しむ所であつた。母は斯んな忌はしい方角の家は捨てゝ新らしい幸福な所へ住み替へ、悪い思ひ出を一切打ち消したいと云ふのであつた。私は何も分らずに、其の命令を受け入れねばならなかつた。庭に植ゑてある色々の草花を鉢へ移したり、ミサ子の下駄を取り上げて見たりして、私はいくらでも盡きずに出て來る悲しみを泣く事が出來た。

警察の方へは早速ミサ子の捜索願ひを出した。

移轉をしてから十五日――あゝ何と云ふ空漠とした、然も紛亂した心持の十五日であつたらう――が過ぎた時である。

警察官が突然私を訪ねて來た。

『おゝミサ子は何處に居りましたか？』私は戀しい女性の居所を知る事さへ、いやその歩いた道を知る事さへ、胸の裂けさうな喜びであつた。

『いや、その事ではないのです。實は伺ひたい點があるのです。そのミサ子と云ふ方――即ち貴方の妻――は姙娠して居つたでせうな。』

『はい、現在姙娠してゐるのです。』

『實は申し上げにくいが、以前貴方の住むで居た家の緣の下にですね、女の――若い女の衣服で包まれた、胎兒の屍體が隱してあつて、それが匂ひ出した爲め、近所の大騒ぎになつてゐるんです。』

おゝ、之が本統の事であらうか？ミサ子は家出したのである……家出……家出と犯罪……そして轉居……轉居と犯罪……警察官の嫌疑は當然であつた。

ミサ子はその行衞を見附けられなかつた。そして、彼の女が居たと叫ばれた時には、もう元通りの彼の女ではなかつたであらう。何んなに私の記憶が亂れやうと、それだけは確かな點である。

彼の女は横つて居た。彼の女は肋骨を碎いてゐた。そして、そして、そして何か？そして、もう姙娠もしてゐなかつたのである。この事が死の重大な原因であつたのか？何？いや原因ではない。寧ろ結果と云ふ可きであらう。實に、實に悲しむ可く痛ましい結果。結果として表れた事實たのではないか。困惑すべき結果、そして陰慘すぎる事實！

『お母さん。貴方は知つてゐたんですか。』私は斯う訊ねて眼を閉じ、何事かを祈つた。

『知らない。知らない。この事はすべて祕密だらけです……第一、全體、それは誰の子なのです？』

私は息が詰まつた。誰の子？神よ、貴方は私に子を授けて下さつた。それだのに、私はそれを受け取れなかつた。何故か？一寸した行き掛かり――一寸した不注意――一寸した愛の不足！あゝそれは原因でもあり、結果でもあるのだ。

下さるものを拒むだのが間違ひの原因であつた。いや原因はもつと前にある。之は寧ろもう結果に近い一つの過失ではなかつたか？

私は明晰には考へられない。何故なら……いや何故ならではない。之は何かしらあのセルロイド職工に、又あの斷崖に關係してゐたに相違ない。私が悲しい足取りで、あの職工を呼びに行き、彼にミサ子の死に際を見せてやり、又ミサ子の靈へ一つの重要なそして最後の思ひ出を土産として持たせてやつたのも、實に、私が、こんな漠然とした關係を直覺したからであつた。

私は何うしやう。又分らなくなつてゐる。ミサ子は私を恨めし相に眺めた。そしてセルロイド職工を微笑みを以つて眺めた。そして誰れが彼の女を殺したのであらう。

一體之は何であり、何の結果であるか？

私は義侠心から彼の女を愛したと思はれてゐる。そしてあの職工は唯淋しさから、或ひは戯れに類する衝動から彼の女を愛したと思はれてゐる。そしてその内何方が正しいか？いや、正しくなくとも、何方が正しさに近いか？分りはしない。唯ミサ子の心は何かしら獨自のそして特殊の判斷を下してゐた。いや判斷ではない。思慮ではない。生れつきの本能……生れる前からの縁……それに依つて彼の女はセルロイド職工を選むだ。縁は合つてゐたのか？子が神から授けられた。彼の女はあの青年を心の底から愛してゐた。それにも拘らず彼の女は私の妻であり、姑女の怒りを我慢する嫁であつた。子供は育つて行つた。遠慮なく育つて行つた。縁、あの青年とあの少女には縁が……深い縁が定められてゐたやうではないか？あゝ皆之が死の原因である。いや、むしろ、結果、色々の事の結果、そして、死の前提であつた。

私は一時に思ひ出す。そして一度に悲しみがこみ上げる。私の親切の不足——一寸した心の忘れ。——實に一夜の間丈に過ぎぬ愛情のゆるみ——その痛い思ひ出が私を責めさいなむで、夜も私を眠らせて呉れない。そして、ミサ子の幻は何度も現れて、あの職工を許してやれ、彼の女が許してゐる如く一緒に許してやつて呉れ、彼の女を愛する代りに、彼を愛してやつて呉れ、と訴たへるのである。それはもう不統である。

私の生活が斯んなに破壞されても、それを怨むのは喜ばしい事ではないのであらう。ミサ子の幻は私に正當な處世法を教へてゐるのが確實である。幻の教訓……それは既に紛亂の元である。私の友達は鞭を持つて來て、あの職工を打たうとしてゐる。けれど、鞭の音はそもそも何を意味するか？

懲罰？……懲罰ならば痛みを以つてしてはいけない。

訓戒？……訓戒ならば恐を造る必要はない。

復讐？……復讐ならば——いや復讐でも、やはりもつと柔しくしてやらねばいけない。復讐を復讐でないものに變化させ、羽化させねばならない。毛蟲は美しい蝶とならねばならない。之が昔からの言葉である。

あゝ私は之から何うして生きて行く積りであらう。それは分らないが、鞭丈は何處かへ捨て了ふ可きである。手ブラで歩いて行け。鎧を着てはいけないのだ。それ丈が兎に角分つて來てゐる。そうだ忍耐である。

それから未だ考へる可き重要な點が殘つてゐる。何んなにしても、あの悪い職工を、もつと善良な方へ歩かしてやりたい事、その爲には何んなに困難な施設をも怠つてはならぬと云ふ事である。

早く絶望し易い人はもう斷言し宣傳してゐる。あんな根からの悪人の改良を無駄に續けるよりも、新マルサス主義にでも改宗して了へ！と。

それも一理であらう、けれど我々の勇氣と智見をためす爲めに、もう一つの積極的な道が開けてゐるのを何故見ないか？

我々は立つて、そして叫ぶ。

何を絶望するのか、諸君。我々の仕事は無駄ではない。唯眼に見えて効果が顯れない丈で、少しづつ潜在的な力が出來て來てゐるのである。諸君は雨だれを倫理學的に觀察した事があるか。私は知つてゐる。あの雨だれを見て貰ひたい。それは立派な透明な球の粒である。全くそれに相違ない。そして地へ向つて走る前に、生命あるものゝ如く顫へ出す。其れが走る力の養成される有様である。それは走る運動そのものではないが、然もそれに持續した力である。進行の前の足踏である。顯著な運動ではないが、非常に重要な力の養成である。

諸君は如何に思ふか。我々の運動が顯著でない時が、即ち我々の力を養成する好機である。効果が目に見えないでも、之は重要な一つの過程である。當にせねばならぬ行爲である。

强盗が六人の人を殺し、悪い親が幼兒を鐵槌でなぐり殺しても、悪い女が繼子を天井から縛つて吊し、その下で、もう一人の貰ひ子へ燒火箸を當てゝ、肉の焦を立たせても、サディズムの男が女の指を切つて食べ、學生が親友をバツトで

打ちこんし、兄妹が通じて時刻見た門ゝしたと云ふやうな事件の際にあつても、我々は一生懸命に我々の[illegible]仕事に努力しやう。眞心と知慧とを一に合せ、何よりも僞の事を恐れつゝ進んで行かう。

おゝ私はもう一つの考へ——考へと云ふよりは妄想を抱いて悩んでゐる。あの職工は今こそ頭に後悔してゐるであらう。ミサ子の與へた命賭けの微笑が、針のやうに強く彼の肉と心臓とを刺してゐる。けれど一年二年とたつ内に、こんな強い刺戟に對する良心の反應さへ徐々に消え去つて行くであらう。その時更に彼を善導する爲めの新らしい、そして強い——強過ぎる程でなくてはいけない——刺戟を持續的に與へるのが何よりも必要である。あの命賭けの微笑とりに於て均しい程の誠實で眞劍で絶對的な、そんな立派な刺戟が發明され得ないだらうか？何か好い工夫はないか。莊厳な詩何、悲壯な曲、犧性的な聖者の行爲、雷鳴、風、高山の空氣、恐ろしい程深い淵、茂つて暗い大きい森、それらのものに依つて、もしくはそれらのものゝ微妙な綜合に依つて何か善をすゝめる強い刺戟を創出する可能がないであらうか？

強い悪人に對しては、唯強い善導が必要である。

おゝ之は餘り妄想が過ぎたかも知れない。けれど此の妄想を實際に使用し得る迄に工夫し、發明するのが何うして我我の役目以外の事であると云はれやう。

だが此處には何がある？今の私は餘りに強い紛亂の中に落ちてゐて何も分らない。唯豫想する。さうだ未來に於て、再び道は開けるであらう。忍耐せよ。何故にとは問ふな。唯眞直ぐに信じ、熱心に忍耐を實行して行くのである。そして此の事が私を勇氣づける唯一の力となるに相違ない。斯んなにまで忍耐するからには、何か人間の本性の中に、きつと善いものが秘むでゐるのだ。あゝそれを堅く豫期せよ。外部に疑ひが起つたら、眼を閉じて内部を見よ。

一通り悲しみが過ぎたら、必ず又直ぐに私自身を創造する、そして善の名譽のために働くりが湧きたるであらう。斯くて今迄よりも一層多く哀れな人を劬り、又出來る丈は慰藉を與へたいと云ふ嬉しい希望で心が一杯になるであらう。

私は私の心を見詰め、そして命ずる――一般の人を高い程度に導けよ。そして悪人達をも除外するな。否一層彼等の為めに力をつくせ。それが私の肉と霊の課業である。

考へて見ると、私は善い事をしたいと願ひつゝ、未だ未だ悪い事をし続けてゐたではないか。色々の小さい善ばしい願ひは破れ毀れた。そして一つ丈大きい苦しい願ひが残つたのである。「もつと善くなりたい。そして善くしてやりたい。」

願はくば此の大きい社会をして、自由な朋友の美しい会館たらしめよ。それ自身に於て会議場であらしめよ。何の宗旨にも頼らぬ神殿であり、寺院であらしめよ。さらにそれ自身に於て有益な学校であらしめよ。

私は私自身の大きい困惑と惱乱――然し他から見ればホンの些末な私人的な困惑と惱乱――を片手で推へ、そして残りの片手を上げつゝ叫ぶ。

……悪はより悪い悪を誘出する、だが絶望するな。善はより善い善を創出する。そして、せねばならないのだ……と。

と云ふ宜敷い！凡ては語られたのである。だが其れは無秩序な言、戸惑ふた記憶力、紛乱せる思考力を以つてゞある。

あゝ何が語られたと云ふのか？私は未だ何も語らない気がするではないか！唯錯倒と紛雑とが叫ばれたに過ぎない――

そして此の錯倒と紛雑の中心をなすものは「私が彼の女を殺した。斯くも陰惨な外的の中で、殊に美しく愛らしかつた私の妻を殺した……」と云ふ浅間しい観念である。私は何うしよう。之から何うして暮して行かう。凡ての騒がしい事件は過ぎた。時間が私の熱い血を冷しつゝある。今にもつと本統の事が分つて来る。そして本統に静かな悲しみが目醒めて来るのもその時であらう。

大賣捌所

[illegible]
同 [illegible]
大阪市北區梅田町 [illegible]
同 北區東梅田町 [illegible]
京都市七條停車場前 [illegible]
同 新町通り七條南入 [illegible]
名古屋市富澤町 [illegible]
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

●定價金八拾錢郵稅金貳錢五厘 海外郵稅貳拾八錢
但支那を除く

冊數 ＼ 地方	内國	國外
六冊	金四圓八拾錢	金六圓拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓貳拾六錢
以上郵稅共		

▲前金切れの節は [illegible]

廣告取次所

博報堂 萬年社 告天社
正路喜社 [illegible] 日本廣告社
信輔社 金蘭社 一星社

大正十一年八月廿八日印刷納本
大正十一年九月一日發行

發行所 中央公論社

印刷所

本號特價金壹圓八拾錢

郵稅金五錢

…三十年一月廿九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◉本號特價金壹圓八拾錢

郵稅金五錢

東京小石川研精社印刷